

マーレひとりでできる
かな

桃色は赤と白で出来ている

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オーバーロード世界でたったひとり旅立った『歩く天災の一人』マーレが現地人を巻き込みながらナザリックを探し、合流後もモモンガ様のために色々頑張る話です。

勘違い成分多めですが、非人道的描写が含まれる一方、因果応報や勧善懲悪は無いようです。

マーレは少し腹黒で、もちろん時には残酷で、ナザリックに迷惑をかけないようエンリら現地人を盾にして目立たないように行動します。

エンリ・エモットは血塗れエンリだったり、風評被害が最大です。後世の人から見れば霸王かもしれません。

クレマンティーヌとイビルアイも波瀾万丈です。苦痛溢れる人生のどん底から幸せを勝ち取る(?)まで色々あつて忙しいかもしれません。

原作で放置されていた死の宝珠が活躍します

※マーレについて、第一話で「支配者の証を手にした」モモンガと会った回想があるため、外見上明らかでない部分の設定は不確定とします。なお、モモンガの性格は原作に近く、仲間の子供たちの幸せを願う範囲でしか行動しないものと考えられます。

※えっと、その、書き始めた頃は初投稿でした。

目次

第一章 マーレと血塗れの魔女

- 一 不幸な出会いと奴隷の少女

1

- 二 はじめてのおそうじ

19

- 三 相手に合わせてあげること

32

- 四 血塗れの魔女

45

第二章 マーレとニグンとスレイン法国

- 五 贄の戦士と神の誕生

59

- 六 スレイン法国へようこそ

78

- 七 神とニグンと大聖典

92

第三章 魔女の旅立ち

八 嗜虐の王子と血塗れの玩具

105

九 王国戦士長を殴るといふ行為に怯

- えは無い

129

- 一〇 遠い空と優しい剣士

148

- 一一 怒れるニニヤと詰め所の騒動

176

第四章 エ・ランテルの冒険者エンリ

- 一二 前門の虎、後門の大尻

201

- 一三 エンリとマーレと『漆黒の剣』

229

- 一四 リイジーとマーレのポジション

- 入門

250

一五 あなたのその気持ち、知ってる
よ ————— 271

第五章 マーレとクレマンティーンヌ

一六 クレマンティーンヌ、動く

294

一七 マーレの罠とクレマンティーンヌ

316

一八 幼き破壊の天使〔拷問回・読飛ば

し可〕

341

一九 クレマンティーンヌの最初のお仕

事

356

二〇 世界中探せば、きっともう一人

くらいいる

379

二一 死を撒き散らすために — 400

二二 クレマンティーンヌ、ブレインと

戦う

423

第六章 マーレとザイトルクワエ

二三 薬草採取という平和な仕事

447

二四 大森林の支配者たち — 476

二五 世界を滅ぼすという魔樹の復活

506

二六 魔樹を滅ぼすもの — 529

二七 御遣い様はお見通し（蜥蜴人編）

550

第七章 漆黒と蒼の薔薇

		二八	その闇妖精は私の見立てでは二流だ	574
		二九	殺人者の鎧と巨大な貴婦人	
604		三〇	漆黒と蒼の薔薇	632
		三一	マーレと国墮とし	657
		三二	蒼の薔薇討伐依頼	686
		三三	身代わりを立てる	713
		三四	漆黒、蒼の薔薇と戦う	739
		第七・五章	イビルアイを連れ歩くといふこと	
758		三五	イビルアイを連れ歩く方法	
		三六	首輪の少女【加虐回・飛ばし可】	
		第八章	バハルス帝国へ	779
		三七	鮮血帝の目は誤魔化せない	
		三八	義の人で行こう	826
		三九	イミーナの怒りとロクシーの心	
		四〇	義の人、謁見する	874
		四一	エルヤー・ウズルスの告白	849
	898	四二	いったい何を見ていたんだか	
924				

第九章 オーバーロードと新世界（四五

〜マールレ再登場）

幕間一 オーバーロードと新世界

948

幕間二 オーバーロードと亜人の国々

973

幕間三 モモン・ザ・ダークウォリアー

994

四三 あくまでプラトニックに

1017

四四 我こそは女王の護り手 / ゲ

ヘナ | 1041

四五 マールレとドラウデIRON

1065

四六 大渓谷の戦い、そして――

1089

第十章 墳墓に至った冒険者たち

四七 ルプスレギナに話してみるつす

1110

四八 モモンガと、エンリの涙

1135

四九 がんばれ、ももんさま | 1158

五〇 墳墓に薔薇がやってきた

1186

五一 ユリの鉄拳と世界の脅威

1212

第十一章 超位と始原

五二 楽しみだ。ああ、楽しみだ

1240

五三 始原の魔法

1264

エイプリルフールIF『マーレひとり

でやれるかな』プロローグ

1287

第十二章 霸王の凱旋

五四 法国と薔薇と、再び旅立つ『漆

黒』

1296

五五 寵姫クレマンティーヌ

1322

五六 絵になる女

1353

五七 恫喝外交とジルクニフの秘策

1377

第十三章 舞踏会と二人の不死者

五八 黒鉄の悪夢と、式典の正体

1400

五九 アルシエと不死の恋人たち（舞

踏会／前編）

1429

六〇 帝都を救った大賢者（舞踏会／

後編）

1454

六一 少女たちの終着点／ラナーと

ジルクニフ

1480

第十四章

六二 宣戦と、カルネ村出兵

1503

六三 カルネ村の戦いと、宝珠が望ん

だアレ

1526

六四 マーレの暗躍／夜になったら本
気出そ

1546

六五 破軍の大魔法と死の挟撃

1572

第一章 マーレと血塗れの魔女

一 不幸な出会いと奴隷の少女

「おい、ガキが一人で、こんな所で何をしてるんだ」

村の野伏^{レシヤ}ラッチモンが見咎めたのは、上等な服を着て似合わぬ長い杖を持った金髪の少女だった。

野伏として今起こっている事を見定めなければならぬ大事な時に、不自然ながら警戒の対象には感じられない小さなよそ者に気を取られた苛立ちからだろう、普段温厚な彼には珍しく粗雑に声を荒げた。

ここは魔物の巣くう暗い森に程近い、時に子鬼や狼が闊歩する危険な草原だ。

ここでは午後の陽を受け黄金の輝きをふんわり纏うよく手入れされた滑らかな金髪も、華美ではないが貴族の子弟のような仕立ての良い繊細な作りの服装も、それらに反して只の王国貴族の子弟ではありえない長く伸びた耳も、王国の周辺ではそれと相容れないはずの肌の色も、全てが容易にその存在を納得できるものではない。

しかし、いくら不自然であろうと、それは彼が調べなければならぬ脅威とは無関係のものだ。

無論、彼は目の前の美しくも不可思議な存在の正体を知らない。この付近に存在するあらゆる脅威を無造作に掴んで地獄へと引き摺っていくことができるような存在であるなどとは、想像することさえできない。

旅人と考えるには無理がある、保護が必要なよそ者の子供。

手の届かない高価そうな服装の、面倒事の種でしかない珍しい異種族。

このようなものに対し、かける言葉は粗雑でも、保護を考えて接触するのは善人の行動だ。

金髪の少女——マールはまだ混乱していたが、目の前のつまらないものから何か情報が得られるかもしれないと考える程度の判断力は持っている。

しかし、それは仲間でもなければ侵入者でもない。こんなものにどう接すれば良いかもわからない。

「ぼ、ぼくは……その……」

少女の不安げな態度は、唯一この状況において自然なものだ。

ラッチモンはそれまでの戸惑いを溜息とともに外へ出し、少女の方へ近づいていく。

「親はどうした、はぐれたのか。探してやろうか」

「い、いません。ぼくはアインズ・ウール・ゴウンの皆様を探して……その……」

アインズ——皆様——それは冒険者か何かだろうか。

ラッチモンは暗い森に程近い開拓村に移ってから数年、冒険者というものをあまり好まなくなっていた。

彼らは、確かに魔物を倒してはくれるが、森へ踏み込んで魔物を釣り出してしまうことがある。無責任な連中のせいで、改めて安全な薬草の採取場所を探さねばならないかもしれない。

そうだ、今日薬草を取りに出してしまったのはエモットの所の……あれは勘のいい子だが急いで連れ戻そう。

無責任といえば、そいつらはこんな若い少女を置いてどこへ消えたというんだ。

おどおどしている目の前の少女にあわせていられない。いったん村へ連れていくため、細い腕へ粗雑に手を伸ばす。

「ガキをこんな所に一人にするなんて、そのろくでもない連中はここへ何をしに……」

ごうつ——と、少女の前で風を感じるとともに手元で何かが弾けた。熱い。

しばし遅れての、激痛。

灼けるような痛みと、感じたことのない喪失感。感覚の爆発と喪失。

視線を落とし腕のほうを確認し、そして痛みを正体を知った。

その一瞬で視線をさらに落とし、自らに起こった異常の全容を知ったが、これは知らない方が良かった。

「な……ぎやああああああ、う、うで、うで、うでええええええ！」

右腕の肘から先が消え、真っ赤な肉と骨が見える。

その先にあつたはずのモノは肉や腱でかろうじて繋がりに、下へ垂れ下がって揺れていた。

深みのある赤い流れが垂れ下がっているものを打ちつけ、鈍い水音をさせて四散し続ける。

「……脆い……うるさい」

それは誰にも聞こえない程に抑えられた微かな呟きで、煩わしそうな先程より低い声だった。

こんな事は初めてで、マールは自分自身の声や態度に戸惑う。

御方々を冒瀆するような存在はかつて戦いの相手の中には存在したが、それは常に殺

し合いの中の事で、苛立つ暇など無かった。

初めての状況。そして不快の感情にまかせて少し強く手を振り払っただけでこの事態。

戦うまでも無い目の前の脆弱な存在——至高の御方々を冒瀆するそれを不快に思うのは当然の事だが、それと同時に感じたのは、自身の態度、そして口にした言葉への違和感だ。

至高の御方々が側に居ないとはいえ、ぼくはこうあるべきではない。理由はわからな
いが、こうあつてはいけないから、いつもどおりにするべきだと、そう思えた。

……ふう、と溜息一つ。

そして、一時全く消えていた表情を普段通りに戻し、不安そうに目の前で錯乱しかける男に問いかける。

「み、皆様を知っているんですか？」

僅かな逡巡ののち一步踏み出せば、恐慌状態の男は笑う膝を押さえつけて逃げようとして
している。

「ば、ばけもの……くるなああつ！」

トワイニングプラットフォーム
《植物の絡みつき》

マーレの魔法が発動し、男は群生する蛇のように変化した草原の植物に絡めとられた。

次の詠唱で、男の発する叫びもにわかに強まる風音に包み隠される。

結局、話を聞こうと捕まえてもほとんど叫び声しか聞くことができず、試しに何度か体の一部を杖の先ですり潰し、砕きながら聞いてもそれは変わらなかつた。役に立たないので捨てようと思つた頃には、頭を潰す前に動かなくなつていた。

それは残念な結果だつた。ある理由で共感を覚えていた黒光りする仲間や、ぬらぬらした触手を持つ仲間がいればこういう時に頼れたのだろうと思いつき、そういう方向で自分なりに頑張つてみたのだが、自身の拙さに少し落ち込まざるをえない。

失敗そのものより、尊重するべき仲間の役割であるものをただの簡単な作業であるかのように思い違いをしてかかつた自分を恥じるマーレだが、居ないものは仕方が無い。うまくいかないのだから、次からはもう少し考えるしかないだろう。

とりあえず、あれがアインズ・ウール・ゴウンを知らないという事は間違いなさそうだ。そして、自分が本当に動揺しているということも。

動揺は隠しようがない。御方々や仲間たちと離れ連絡もとれない状況にあるとはい

え、あるべき自分を見失いかけたことが、マーレには何より恐ろしかった。

勿論、御方々を冒瀆するようなモノへの不快は当然だ。それでも、あれは自分とは少し違う。帰属すべきナザリックを見失っている自分が、創造された自身のありかたさえ見失ってしまったら、本当に自分の全てが終わってしまうような気さえしてくる。そこへ本当の不安と震えがやってくるのは無理も無いことだった。

暗い森は拍子抜けするほど平穏だった。もちろん、森を支配する危険な魔獣の縄張りの外側、人間の領域として許される範囲での事だが、そこにも村の貴重な現金収入となる薬草が自生している。

エンリ・エモットは籠一杯になった薬草を見て満足げに頷く。病気などには対応できない、傷の治りを助ける程度の安価なものだが、一人で来られる範囲では最高の収穫だ。昨夜からの異変には気づいていた。いるはずの季節にあの黒い鳥たちが全く居なくなるというのは、どこかで餌となる死者や大きな死骸が盛大に鳥たちを集めているということ。それは毎年決まった季節に起こる戦争の時を除けば、いはいは森の中で、そうなる村の野伏が安全を確認するまで薬草の採取をあきらめなければならぬ。

しかし、エンリは昨夜のうちから準備を整え、今朝になって野伏が村長と話し合っ

いるうちに急いで村を出てきた。そうするべきだと思つたからだ。

金銭に困っているわけではない。充分な麦畑に加え薬草の採取を手がけながらも質素な暮らしをするエモット家は村でも蓄えが多い方だ。そして森に向かうことに不安を感じなかつたわけでもない。

しかし、今回の異変に違和感を覚えていたエンリにとつて、現金化したばかりで薬草の備蓄が少ない状況の方が不安に感じられた。鳥の動きについても、エンリはいつものように鳥たちが森に向かう姿を見ていないのだ。戦争がこの時期に行われなことは大人たちから聞いていることだが、だから危険なのは森だと即断する気にはなれなかつた。

木々の切れ目はもう赤みが差している。違和感を振り払うように薬草を集めていたら時間を忘れてしまったようだ。既に迎えが来ていてもおかしくないが、あの人もこの違和感を覚えているなら色々調べる事もあつたのかもしれない。

……迷惑をかける前にいつもの目印を元通りにして村へ戻ろう。目印は森を出た事を示すもので、これを忘れると野伏のラッチモンに大変な迷惑がかかることになる。

目印とは森の外れで目立つ大樹の陰につけられた亀裂だ。そこへ森へ入る時に抜き取つた木片を差し込む。森の動物や嫌う臭いを染みこませたもので、村人以外が外すことはまず無い。よそ者が興味を持つような場所でもないので昔から機能してきたやり

方だ。

——子供？

大樹の前には、見慣れない小さな先客が佇んでいた。よそ者、の一言では収まらない違和感、その不思議な姿にエンリは我が目を疑った。

それは、幼い頃に聞かされた森の妖精の物語、その中から現れたような姿。幼い妹なら喜んで駆け寄ったかもしれない。そうであれば、妖精の瞳の中にある闇を知ることでもなかったのだろう。

森は管理されていなかった。それを教えてくれたのは、外からの侵入者の足がかりであらう不自然な傷跡と臭気。もしマーレの姉が関わっていれば、このようなものが残されるようなことはない。この森を誰がどうしようとそれはどうでもいいことだが、慣れ親しんだ住処の森とは違う未踏の地に來てしまったという事を改めて思い知り、マーレは深く溜息をついた。

人間は下等な生き物だ。それは先ほどのゴミの処分を思いおこさずとも、このようなものを残さねば森で行動することもできない程に感覚の希薄さや個の脆弱さを自覚していることからわかる。それはすなわち、自らより強大な存在に敏感であるということだ。

強者にとっては歯向かう者など壊してしまえばいい。森の獣のように俊敏なものたちは危険を察知し逃げるだけだ。しかし人間は力も弱ければ逃げ足も遅い。強大な者が集う場——ナザリツクのような場を見つけた場合、それを仲間に広く伝えようとするかもしれない。

マーレは軽く頭を振る。下等生物のありかたに何を期待しているのだろうか……。

確かにナザリツクにおいては、マーレはあらゆるものに対し、そうあれと作られた以上存在意義があると考えていた。考えたかった。御方々の多くが目を背けていた黒光りする仲間やぬらぬらした触手を持つ仲間はもちろん、使う者が殆ど無い通路や階段にまで共感を覚え慈しむ気持ちになったことさえある。

何しろマーレの創造主は常々「姉に素直に従う可愛い妹が欲しかった」と言っていて、その上で創られたのは姉とマーレなのだ。それでも「姉に素直に従う」間だけは僅かな安らぎが得られ、姉とともにあれと創られた事だけが救いだった。それが今は一人なのだから、正気でいられる方がおかしい。むしろ何故終わってしまったのか——。

ナザリツク最後の記憶は、最後の至高。感極まつて最後まで聞き取れなかったが優しい御言葉を賜り、傳えているだけで体がぼかぼかと暖まり、それまでの胸のつかえが嘘のように消え去っていたあの時間だった。

その時、初めて支配者の証を手にしたその御姿は創造主たちの支配者であるばかりか、自らの新たな創造主であるかのようにさえ感じられたのだ。抗うこともできず、いや、抗う必要さえ無く、ただ自身のありかたを委ねられる存在。自身をいつでも創り変えられる存在が、そこにはあった。

あのひとときがあればこそ、自分が自分でありつづけられるのかもしれない。戻れるならあの瞬間にこそ戻りたい……たとえあれが別れの言葉であったとしても。

温かいものが頬を撫でて零れ落ちる。

もはや手の届く所に至高は居ない。しかし、自ら探すことはできる。

重い足取りでその場を去ろうとした時、マーレは先ほどから知覚していた取るに足らない下等生物の気配が自分に向かっていている事に気づいた。いまにも闇に侵されそうな瞳をそちらへ向ける。その下等生物——人間の娘が近づいてくる。

「あなたは、この森に住んでいる妖精さんかな？」

エンリは、特徴的な耳をもつ妖精の少女が遠い妖精たちの集落からはぐれたのだろうと考え、怯えたようなその雰囲気を感じて優しく声をかけ歩み寄る。現実に見たことはないが、口伝えの物語の世界ではこの森には妖精族が居たということになっている。

しかし妖精の少女は俯いたまま黙って首を振る。涙の跡。顔にはその動きに揺らされ、陽の当たった上等な服の滑らかな生地がきらきらと輝きを変化させる。

綺麗な髪や妖精の耳に気をとられていたが、これは森で暮らす者の服装ではない。こんな服を用意できるのは貴族や王族などの特権階級だ。

特権階級——それは、欲望の赴くままに時には幼い村娘でも妖精族でも所有し蹂躪するという、仄暗い雲の上の存在だ。

エンリをろくでもない想像に引き寄せたのは、妖精の幼い頬に残る涙の跡だった。思わず、少し低い声が出てしまう。

「誰かに、お仕えしているの？」

妖精の少女は俯いたまま、問いに問いを返す。

「あ、あのつ……アインズ・ウール・ゴウンの……モモンガ様を知りませんか？」

地名と人の名のような……やはり貴族なのだろう。それは、この服装なら自然なこと

だ。そして、哀れな妖精の少女の運命を歪め、その幼い体を甦るような爛れた嗜好を持つであろう者の住む地とその名は王国にありそうなものでもなく、聞いた事がないものだった。

開拓村に住む村娘でしかないエンリの記憶に残る地名など、地理的な繋がりのあるごく僅かなものだが、それに含まれないということには大きな意味がある。

周辺に他に気配は無い。はぐれたのであれば相手に土地鑑は無く、それは目の前の妖精の少女を爛れた運命から救うことができるかもしれないということを意味する。

「その名前は知らないけど……ちよつといいかな。できればあなたの力になってあげたい」

エンリは膝を折って身をかがめ、目線を妖精の少女の高さに合わせる。大切な話をする時は高さを合わせて、相手の顔をしっかりと見なければいけない。両親も自分たちのためにそうしてきたし、自分も妹のネムに対してそうしているから。特に妖精の少女の境遇を考えれば、怯えさせるようなことがあってはいけない。

「な、何ですか」

おどおどした雰囲気だが、先ほどより僅かに低い声が発せられる。逆にエンリは言葉の続きを飲み込んでしまっていた。妖精の少女の瞳の奥に、闇を見たような気がしたのだ。

高貴な者たちの限らない欲望に晒される別世界の少女の事だ、自分如きでは押し量りきれない事情はあるのだろう。この少女が絶望の淵にあると考えるのが自然か……：少なくとも、何か瀬戸際、崖つぶちなのは間違いない。不用意な言葉で傷つけてしまえば、取り返しがつかない事になるんかもしれない――。

言葉が出ない事で自然と視線が下がる。そこにあるのは、陽を反射して複雑に輝く繊細で上等な服、当然にこれは蹂躪され棄てられたものの服装ではありえない。そしておどどしてはいるが、そもそも蹂躪されたような悲壮感も全く覚えさせない少女の無垢な美しさ、それは今でも嗜好の合う多くの貴人を虜にするだろうし、これから花開けば絶世の美貌となるのは明らかだ。

つまり、爛れた運命を前にしてはいても、穢れの無い存在。主人の行方をわざわざ尋ねるといふのも、そういう事なのだろう。逆に主人とはぐれてただ不安なのかもしれない。もちろん運命の日が近い事を感じて追い詰められているのかもしれないが、いずれ

にせよ早合点して幼い妖精の心を抉るような真似をしてはいけない。

その境遇の爛れた忌まわしい部分に触れなくても、そこから目を背けさせたままでも、助けることはできる。うまくやることはできる。

エンリは再び少女の目をまっすぐ見て口を開く。

「私にはわかる。あなたは、とても大事にされているのね。ご主人様はきつとあなたの事を探してる」

下等で脆弱なはずのものから出たのは、穏やかだが、確信の籠った声。声質などは全く違うが、迷いが感じられず安心できる所、思わず言う事を聞いてしまいそうな所が、自分が従ってきた存在に微妙に似ていた。何の力も感じられず、服装も粗末で、何かの群れを統率できるような存在にはとても見えないというのに。

そう感じられたのは、感じたくなくなったのは、マーレの切なる願いを肯定し後押しする言葉だったからかもしれない。そうであっても、先程の不快感はまるで違う生物だという認識は変わらない。マーレは切りそろえられた滑らかな金の前髪から、上目遣

いにちらちらと様子を窺う。

これは人間だ。不自然な臭気をもつ大樹の方へ来たということは、この森をその行動範囲に含めている、このあたりの地理に明るい群れのものなのだろう。あちらから協力するというのは、それも悪くはない。御方々に再びお仕えできるためなら、利用できるものは何でも利用しなければならぬ。

妖精の少女は、ぼつりぼつりとエンリの問いに答えていく。

名前はマーレ。ここがどこかかも知らず、ただあてもなく敬愛する主人を探していたという。こんなにも主人を慕う、無垢で美しい奴隷がいるだろうか。

「あなたは、そのお方の奴隷なの？」

「あああなのつ、奴隷って、何ですか？」

——教えなくていい言葉だ。

無垢な花園に土足で踏み込んだような後ろめたさを感じ、エンリは言葉を選びなす。

「ごめんなさい、それなら、あなたはそのお方の言うことを、命令を聞かなければいけな

「立場なの？」

「そ、それは当たり前ですっ」

マーレは上目遣いをやめ、エンリの目を見て少し強く答える。主への忠誠を口に出せることは相手がどうあれ誇らしいものだった。

「どんなことでも？ 恥ずかしいことや辛いこと、苦しいことを命じられても？」

そんなことはないです、とでも言つてほしかったのかもしれない。想像はできても信じたくない世界というものもある。

「と、当然ですっ」

真つ直ぐな瞳を向けられ言い切られると、もはや言葉も出ない。

妖精の少女からはモモンガ様と呼ぶ主人に対しては心からの敬意が感じられたが、エンリの心の中ではその名は幼い少女を喰らうつもりで透明な檻に囲う禍々しくも狡猾な獣の名として刻まれた。吐き気すら感じる。

しかし、この感情は今では仕舞つておこう。食肉用の家畜がその柔らかな肉を食る為に大事に育てられていたのと同じであっても、今はそんなことを理解させる必要は無い。幸せだったならその思い出を汚す必要などないのだ。

そして、そういった同情心や庇護欲だけでなく、妖精の少女の瞳の奥にくすぶる微か

な闇にエンリは身震いするようなおそろしきをも感じていた。それは決して眞実に到達しての感覚ではなかったのだが――。

この異性と付き合つた事もない田舎の少女は、目の前の無垢で美しくも幼い妖精の少女から、自ら危惧したようなおぞましい爛れた行為について、現実に起こつたこと、まして望んで受け入れていたこととして聞いてしまうことがおそろしかつた。受け止める覚悟が無かつたのだ。

エンリはマーレを伴つて森を出る。身分の高い主人なら地図くらいは持つてゐるはずで、闇雲に動き回るより村で待つた方が良い。人を使つて探すにしても、はぐれた場所が近ければいずれカルネ村まで探しに来ることもあるだろう。そういう事を説明しながら、村へ向かう。マーレはおどおどした態度ではあるが理解は早く、見かけの幼さの割には賢いのかもしれない。

二一 はじめてのおそうじ

マーレは、ネムという小動物が苦手だった。エンリをナザリック搜索のために一応有用な存在と認めた以上、その身内もナザリック外の下等生物とは違う見方になってくる。その上、幼いながらも創造主が与えたマーレの容姿や服装の美しさに素直に感動し、服を与えた御方を讃え、御方に仕える立場を羨むといった姿勢も外の存在としてはなかなかにもとだ。そうなると、この小動物は落ち着きの無い只の小さな生き物ではなく、元氣一杯にふるまうエンリの可愛い妹ということになる。

このことは、マーレにとつてはまぶしささえ感じる、若干居心地の悪さを感じるものだった。相手に非が無いだけに、ただ困惑するしかない。迷惑そうに寄りかかれるのを受け止め、目を合わせないように小さな背中を支えていた。

エンリから言われたのは、村人は異種族を見慣れないから余計なトラブルを防ぐためになるべく家の中にいてもらう。やむなく外へ出る時は、フード付きの古い旅装のローブを羽織って耳を隠し、上等な服を汚さないようにすること。汚してしまつてはあなたのご主人様に申し訳ないのだと言われれば、マーレは納得するしかない。その姿を隠し匿いたいというエンリの考えはエンリの両親のような第三者にとつては説明される前

から理解できたが、探知系の魔法やスキルが当たり前に使われるナザリツクの常識に染まったマーレはそれに気づいていない。

ここはカルネ村という場所らしい。当然だが記憶に全く無い地名だ。

村の状況が落ち着いたら、村長という少し知識のある人間や、野伏レンジャーのラツチモンという地理に詳しい人間を紹介してくれることになっている。今は、そのラツチモンというのが戻らなかったことで、村の大人たちが慌てて話し合ったり、有事に備えて交代で見回りをしたり、水や食料を余分に家の中へ運び込んだりとせわしなかったのだ。

マーレはそこで人間を一つ壊して放置してきたことを思い出すが、問題になったらその時は群れごと土に返して別の場所で情報を集めればいいだけだ。次は後片付けの仕事を少し考えよう。そんなことより、探知の手段すら持たずあれの残骸を確認もしていない人間の群れが、いち早く組織的に次のことを考えて動いている事に興味が移る。エンリなど個体単位だけでなく、人間は群れの単位ではそれなりに役に立つこともあるかもしれない。

人間の村の朝は早い。見回りに出ている父親を除きエモツト家の家族はそれぞれに家の中で役割があるようだが、マーレは薄い布団の中だ。三日ほど主人を探して彷徨っていた事を話したら随分と驚かれ、それからエンリは何かとマーレに絡みたがるネムを

遠ざけてくれている。

マールは布団が好きだ。睡眠や休息は元々所持する指輪の力で必要なく今は休んでいるつもりもないのだが、布団の中は落ち着いて考え事もできる上、一人になれて簡単な魔法を使うにも良いので休んでいることにしている。

毎日試している《伝言》や《鷹の目》など簡単なものなら布団の中でも充分だ。《物体^{ロケット}発見》《次元の目》あたりでも使うだけなら横になっても不可能ではないが、目標となるナザリック大墳墓には攻性防壁という魔法的な防護がある。そんなものをここで作動させてしまえば、軽いものでも鬱陶しい下位の悪魔が恋しい布団を剥がし飛ばして家じゅうみつしり大量に湧き散らかすことになり、運悪く対象が宝物殿や八層以下となれば布団どころか家や村まで消し飛ばすことにもなりかねない。

村の周辺には特に変わったことは無く、せいぜい見回りの村人たちの他に鎧を来た集団が近づいていた事くらいだ。もちろん、その集団は村人と区別がつかない程の脆弱な気配の者たちでナザリックとの関係などは期待しようもないが、たかが一つの犠牲で距離の離れた他の群れから武装した新手が来るといふ組織力は彼らの乏しい感知能力や移動速度にしてはなかなかのものと言える。

マールは人間の群れに感心し、そしてすぐに失望した。

同時に《伝言》を試みていたので声はよく聞いていながったが、下等生物にしては上

出来な組織力を發揮したばかりの人間たちが出会うなり騒ぎ出し、突然同士討ちを始めてしまったのだ。

マールは小さく溜息をつくとき、茶番に成り下がった《鷹の目》ホーク・アイの視界を閉じる。もはや見届ける価値も無いが、マールにとつては既に直接気配を感じられる距離でのことだ。いくらか気配が減ると大人しくなり、和解でもしたのか連れ立って村へ向かっているが、確実にその数は減っているのがわかる。

それにしても、いくら仲間がやられて神経が逆立っているとはいえ、オーガやゴブリンでもここまで酷くはない。この地の人間に過剰な期待をしてはいけないのだろうか。この残念な状況に少しでも意識を向けしておくのも馬鹿らしく、マールは布団の中で軽く伸びをした。

集団が村へ少し近づくと、ある者が声を張り上げて皆逃げろと叫び、そして断末魔の悲鳴。なんと、まだ終わっていないのか。群れから仲裁に出る者はいないのだろうか。せっかくな人間からの情報収集を試そうと思ったのに、面倒なことだ。

さらに、そのつまらない騒ぎを気にしたのか、エモット家の中まで慌しくなってきた。村がなくなるような事になれば面倒だが、この家に何か起こらないうちは大丈夫だろう。騒ぎが終わるまで他の場所を捜索しようかと考え、布団に頭まで埋もれようとしたところで、腕を掴まれた。

「大丈夫、私が守るから、一緒に来て」

周囲の男たちは誰も知らない事だが、ベリユースは本来の戦場では有能な男だった。裕福な家に生まれ、資産を増やしながら家名を高め貴族社会へ食い込んでいくというのが彼のあるべき戦場であり、この任務に参加したのもそのためだ。

自らの欲望に直結する部分では優れた洞察力を持つ彼が選んだのは、危険が少なく武力に優れない身でも最大の功績を得られ、国の重鎮とコネクションも得られる完璧なものだった。他の隊員が任務の内容に戸惑っていたことも、そのことで隊長という地位を得られたことも含めて、良い選択だったと思っている。どうせ誰かが殺す命なら自分の出世の糧にした方が良く、その過程で楽しめるなら楽しんだ方が良いのだ。

彼は目下の隊員の気持ちなど知ったことではないが、貴族の館を見ればふさわしい贈り物を判断できる男だ。この任務の間、その洞察力を持って余していたわけではなかった。

これまでと異なり、何故か警戒態勢をとっていた村人たちには戸惑ったが、声を出されてしまえばやることは変わらない。一斉に行動を開始した隊員たちが村へ襲いかかるのを尻目に家々を注意深く確認しながら馬を走らせると、一つの家の前で止まる。彼の目的はただ楽しめる家だ。幾度か繰り返すうちに、漏れ出る声や窺える様子ばかりで

なく外にある薪の束や干してある布類に水甕など細部まで観察し、その候補を絞りつつ効率的に探せるようになっていた。

「お母さん!!」

エンリがネムとマーレを伴って外へ出た時、全身鎧を着た騎士が母に抜き身の刃物を突き立てていた。村じゅうからエンリの耳に打ち付けられる悲鳴、遠目にも武器をふるう騎士の姿、火の手があがった家もある。

何かが起こっているのはわかっていた。警戒もしていた。しかし、これはにわかには入れられる光景ではない。その場に固まり、視線だけで薪割りの手斧を探すが、それは母の足元にあつて滴る赤に濡れていた。

「あたあありいいい」

騎士の面頬クロイズドヘルム付き兜がこちらへ向けられると、その隙間から絡みつくような視線を感じる。

「エン、リ！ ネム！ 逃げなさい！」

「離せ、離しええ！」

崩れ落ちながらも騎士の足にしがみつく母の苦悶に満ちた叫び。それに打たれたようにエンリは駆け出そうとする。しかし、家を出るまでは腕を引かれるにまかせていたマーレが、全く動かなかつた。

振り返ると、滅多刺しにされた母が崩れ落ちる姿が視野に飛び込んできた。そして動かないマールレは何の表情も浮かべていない。エンリは何故か森でマールレに会った時の感覚を思い出し、出かかった言葉を呑み込む。

エンリの手が離れると、マールレはゆっくりと返り血にまみれた騎士に向かって歩き出す。

「あ、あのつ、いま村がなくなると困るんです」

場違いな言葉だ。しかし、そんなことよりフードの中の幼くも美しい容貌の方がベリユースには重要だった。

——まさに、極上。

ちらりと不自然な耳が見えたが、それは祖国では奴隷とすることが認められている種族の特徴。むしろ所有欲を満たす上では都合がいいものだ。

「妖精族……フヒツ、安心しろお、この私が飼ってやるぞ」

そうだ、その場で楽しむだけでは飽き足らぬ。任務の上では好ましくは無いが、どうやってこれを持ち帰ろうか——。

ベリユースが思案して小柄な体を眺めていると、フードの少女が何やら呟く。

《マス・ダーゲティン集団標的》《アリス・バインド大地の束縛》

村の大地のあちらこちらから勢い良く噴き出した土の蛇が、マールレの視野に入る騎士の格好をした者たち全てに絡みつき一気に縛りあげる。

「糞、動きを封じられた！ 魔法詠唱者だ！ 隊長の近くにいますぞ！」

「俺もだ！ ガキだが冒険者かもしれない！ 周囲に気をつけろ！」

「駄目だ、八人もやられた！ フードのガキだ！ どうにかしてくれ！」

「おまえら、俺の女たちを捕まえろ！ 無傷なら金をやる！ 小さいガキは妖精族の上玉だ！」

少し離れた所からそれらの声を聞き、ロンデスは顔をしかめた。妖精族で魔法詠唱者の村人などいるわけがない……冒険者なら油断は禁物だ。下衆な欲を出して厄介なものを引き当ててくれたものだ。

ロンデスはわざわざ隊長を助けたいとは思えなかったが、任務に失敗するわけにはいかない。人数で圧倒しているとはいえ、一度に八人が拘束されるような相手は尋常ではない。魔法詠唱者の仲間も当然に隠れているものとして考える。

「全員騎乗！ 村人は後回しだ！ 合図とともに隊長の近くの魔法詠唱者へ各個突撃！ フードを被った妖精族のガキだ！ 横槍があつてもできるだけ無視して駆け抜ける！ 行動開始！」

騎馬が一斉に疾走し、村じゆうに土埃が舞い上がる。狭い村の中での事、騎士たちの起点の違いが迎撃不能の波状攻撃を生む。

そうだ、あれが馬に蹴られても知ったことか。相手が冒険者なら、強力な魔法詠唱者マジック・キャスターに相応の者たちなら、部隊全員の命が危険に晒される。たとえ伏兵の手に幾人かがかかろうとも、まず一人を確実に仕留めるつもりだ。

騎士たちは速度を上げ、一気に距離を詰めていく――。

「……もう、同じのはいらなかな」

《集団標的》マス・ターゲティング
《破裂》エクスプロード

騎乗の騎士たちの全てが、鎧を残し赤と白の欠片となって飛散する。弾ける血肉に内側から叩かれ不気味な音を響かせる鎧が、疾走する馬から鈍い音をさせて転げ落ち、鮮やかな色の中身を盛大に撒き散らしていった。

エンリはネムを抱きしめているつもりだったが、主を失った馬が近くを駆けていく頃にはその小さな頭を抱えて震えていた。小さな妹が息苦しさに抗議して胸元でイヤイヤをした事で我に返り、凄惨な光景を見せずに済んだ事に安堵した。

「あ、あのつ、村はもう落ち着きましたか？」

「はひっ!!」

声が裏返る。助けたかった透明な檻の中の少女はもう居ない。声をかけてきたのは可憐で、残酷で、不気味で、何を考えているかわからない村の恩人でしかない。

引きつった顔のまま恐る恐るマーレを見返すと、一方的で凄惨な戦いの当事者とは思えないほど平然としていた。

「そ、村長という人の所へ案内してもらえますか」

エンリは凄惨な光景から遠ざけるように村長の家にネムを預け、マーレのもとへ村長を連れて戻ってきていた。雑な説明はしたが、マーレが騎士たちを倒した経緯を理解してもらえとは思えないし、危険が去ったことを理解してもらわないと恩人のために話をしてもらうこともできない。

ろくな心の準備なしに凄惨な光景と引き合わされた村長は、顔を歪め、震え、引きつりながらも言葉を絞り出す。

「……………これは……………あなた様の魔法でされた事でしょうか」

「き、汚かったですか。ちよつと待っててください。安全なやり方できれいにしますから」

集落を不衛生な状態にしたままでは都合が悪いのは理解できるが、村の中で炎を使うわけにもいかない。魔法で土を動かすこともできるが、路地の機能を失わせないような微調整は難しいだろう。

マーレは目の前の騎士を避け、手近な礫の騎士のひとつを選んで近づいていく。といつても鎧の質などで隊長を見分けたわけではない。最初の騎士は気を失っているばかりか何かを漏らして汚らしく、掃除には向かなかったただけだ。

選ばれた騎士は既に拘束を振り解く事も諦め、ただ震えてガチガチと歯を鳴らしていた。マーレが長い杖を持ち上げると、その怯えの色はさらに濃厚になる。多くの仲間たちを一瞬で肉塊に変えた魔法詠唱者マジック・キャスターの杖だ。あとは詠唱の言葉一つで、むごたらしい死を迎えるだろう。

「ひいっ!! ゆ、ゆるして——」

「あのつ、ごめんなさい」

詠唱はなかった。杖をそのまま騎士の面頬クローズドヘルム付き兜の上へ軽く振り下ろすと、鈍い金属音とともに兜が横長にひしゃげ、隙間や兜の下から血肉が飛び散る。マーレが一息つくのと、騎士だったものを縛り付けていた土の蛇は砂となって流れ落ち、その体は赤黒い液体を噴き出しながらゆらりと崩れ落ちる。

「い、これからきれいにしますから」

《アニメイト・デッド
《死体操作》》

詠唱に応え、頭の潰れた骸がゆらりと起き上がる。

「飛び散っているものを片付けてください」

骸はぎこちない動きで四つ這いになると、散らかった肉片や血に濡れた泥を喰らい始めた。安全なやり方ではあったが、思ったより捗らない。

「い、急ぐならもうひとつ……」

村長とエンリは引きつった顔で固まっていたが、マーレの申し出に全力で首を振る。そして死体が動き出したという事のおぞましさ、あまりの事態に思考を停止しかけていた村長に今するべき事を思い起こさせた。

逆に、ネムを預けてきたエンリは自身の判断の正しさを嘯み締め、いくらか心の平静を取り戻しつつある。騎士たちや転がった鎧の数を数え、父親の安否を聞くことをやめた。

村長はエンリとともに恩人を連れて家へ向かう道すがら、他の村人たちに危機が去ったことを地を這う掃除人にも言及しつつ説明し、埋葬と葬儀の準備を指示する。見回り

に出ていた父親も含めてエンリは両親を亡くしているが、この小さな恐るべき恩人の関係者だというなら、どうあっても一緒に来てもらわなければならない。

念のため魔法で拘束されていた騎士たちに縄をかけていた男たちの一人が問う。

「騎士たちはどうしましょうか？ 後で役人に……」

「ああ、汚くしていい場所があったら、そこをお願いします。後で話を聞きたいので」

「……モルガーの農具小屋に移しておいてくれ。あれの所は皆やられてしまったし、いだらう」

村長はマーレの言葉を受けすぐに村はずれの主を失った小屋を指示する。汚くするという意味をわかっているのは村長とエンリだけだ。これ以上、村の通りや広場であるという事をしてもらうのは困る。

事情のわからない男は不思議そうに首をひねったが、憔悴しきった様子村長を見て引き下がることにした。

三 相手に合わせてあげることに

「あのつ、どうしてしゃがんで話をするんですか？」

「自分より小さい子とお話をする時は、相手に合わせて話をするものなの。相手と同じ目線で、相手に合わせるようにしないと、お互いに気持ち伝わらないからきちんと話を聞くのが難しくなる。自分より小さくて弱い相手には特に気をつけてあげないといけないの。…マールのお母さんもそうしてくれなかった？」

しゃがむというのはどういう動きだろう。無論、人の話ではない。マールの創造主も体を折り曲げてみせる事はあったが、創造主自身は平気そうなのに他の至高の方々の多くが「痛っ!」「折れてる折れてる!」など抗議めいた反応をしていたのは覚えている。意味はよくわからないが、種族が違えば事情も違うのだろう。

とりあえず体を折り曲げるといふ事を忘れて、相手に合わせるといふ部分で考えてみると、懐かしい記憶の中にそれに似たものがあつた。

「ぼ、ぼくは膝の上に乗せてもらつて、お話をしてもらつていました」

「いいお母さんね……マールも、自分より小さい子とお話することがあつたら、相手に合わせて優しく、ね」

「は、はいっ」

弱い存在にも、合わせてあげないといけない。マーレはナザリツクに戻ったら他の誰かを通してでもそれとなく姉に伝えたいと考え、エンリの言葉を心に刻んでいた。

エンリは、森で可愛い妖精の少女を拾った。物語の世界から来たような美しい妖精の少女が、現実の世界ではそのような無垢な存在であり続けることが許されないということとをエンリは知っていた。知っていたが、それを受け入れられず、物語の中へしまいでおきたいような気持ちになって、先の事なんて何も考えずに連れてきたのだ。

たいした事ができるわけじゃない。いずれは行き詰まり、現実と向き合わねばならぬ。できることは知れている。それくらいのことにはわかっていた。

しかし、エンリの小さな物語はそのような切なくもほろ苦い終わり方を約束されたものですらなかった。そこには少女達の小さな冒険も妖精族と人の世界の間での葛藤もなく、夢溢れる頁たちを包み込む可愛らしくも繊細な装丁は一夜の夢のように姿を消し、その残滓は村を襲った騎士たちの血でべったりと覆われてしまった。そこへどうにか上書きすることができた小さな救世主の伝説も、その騎士の屍が動き出してぐちゃぐちゃと汚い音を立てながら喰らってしまった。

あとに残っているのは、村の一員としての責任感。憔悴しきつた村長ひとりにマールを任せることはできず、促されるままについて来てしまった。ネムが起きていればその相手をしていれば良かったが、残念ながら夫人がすっかりと寝かしつけていた。

エンリは優しい夫人に労わられながらも進んで竈の世話を手伝ったが、白湯をテーブルに運ぶと結局は着席を促されてしまった。あれらを見てしまった村長の方には夫人ほどの余裕は無いのだろう。

村長の方は、エンリを逃すまいという思いを強めていた。

エンリが村へ連れてきた正体不明の小さな魔法詠唱者——マジック・キヤスター マール様との会話は、とにかく噛み合わない。感謝の言葉やら謝礼の話題やらが完全に空回りしていた上に、あれほどの力を持つのに冒険者でもなければ周辺国家との繋がりも無く、さらに冒険者とは何かも知らなければ周辺国家の名前すら知らなかったのだ。そのあたりの説明を聞く気はあつたようなのが救いだ、知識のみならず人間の社会で生きていく上での常識すら欠落していた。

そして、村長の神経を磨耗させたのは、頼まれて確保しておいた襲撃者の処遇だ。知りたい事があるから話を聞きたいというのはいい。問題はその後で、用が済んだら全て掃除してしまうか村の掃除に使うかという血生臭い二択を平然と提示し、生き残りは役

人に突き出すと言えば本当に不思議そうにしていた。それは村人の復讐心などを慮ったものではなく、まるで抜いた雑草の捨て方を聞くような調子で、生かしておくことが理解できない様子だった。

この悪路ばかりを進むあてなき旅のような会談にあたって、村長には同じ場を体験してきた戦友が必要だった。

マールは、エンリの姿を認めると少し安心して話を切り替える。もう充分に合わせたことで、このわけのわからない世界の事が少しだけ把握できている。

「ぼ、ぼくはただ、アインズ・ウール・ゴウンのモモンガ様を探しているんです。ナザリツクという場所を知りませんか？」

「モモンガ、様？」

「あのつ、エンリが、村長さんなら知恵を借りられるって言うから……でも、村が落ち着いてからじゃないとって言うから待ってたんですが、暴れてるのを潰したらお話しできるかなって思ったんです……駄目でしたか？」

「潰……うあ、ああ……ありがとうございます。あなた様が居て下さらなければ、村人は皆殺されていたでしょう」

村長は自らの動揺を抑えつけるように頭を下げる。目の前の小さな魔法詠唱者は、掌マシツク、キヤスターの上の玩具のように死を弄ぶ存在。話が噛み合わなかったのも、村人の命とか助けると

かそういうことに興味すらなかったためなのだろう。

それから挙げられた名前だが——モモンガ様、アインズ・ウール・ゴウン、ナザリツク地下大墳墓、グレンベラ沼地、ブクブ・クチャガマ様——どれも聞いたことがない。

感謝の言葉も意に介さず、救った命に興味も示さず謝礼も求めず、人の死を何とも思わない小さな魔法詠唱者……もしカルネ村が彼にとつて何の役に立たないものであつたら、どうなつてしまふのだろうか。期待されているのは、知恵だ。

村長は、無知を晒さないように慎重に、少しでも手がかりを探ろうと聞き進めていく。人物は国籍が不明。おーばーろーど、しよごすというのも不明なので聞き流す。強者たちの組織や地名といったあたりは、このあたりで知られているものでは決して無い。どのようにここへ来たのか聞けば、魔法的なものかもしれないという。魔法での長距離の移動など常識で考えれば荒唐無稽に過ぎることだが、先ほどまで見てきたことのどこに常識の範囲内の事があつたのだろうか。

「私どもは魔法のことをよく知りませんが、この辺りではエ・ランテルという町に行けば魔術師組合という組織があり、魔法に詳しい方がおられるはずですよ。大きな街なので、広い範囲の地図も手に入るでしょう」

「いい、行ってみます」

「エ・ランテル行きですが、ソフィーレアが来た時に頼んでみましょうか」

エンリが口を挟む。ちらちらと村長から送られる視線が痛かったので、話に入れる所
で入っておいた程度のことだったが、村長は目を見開いて驚いていた。

「……頼めるならお願いしたいが、君はその薬師の少年と……いや、彼にマーレ様を引き
合わせても、いいのかね？」

村長はゆつくりと、含めるように確認する。

ンファイレアというのは、元々付近の村々で薬草を買い付けていた高名な薬師リイ
ジー・バレアレの孫で、エンリを慕うようになってからカルネ村でばかり薬草を仕入れ
てくれている少年だ。村では少年の態度に気づかぬ者が無い程で、エンリも村の若い男
の誘いを断っている以上、そのつもりだと考えていた。貧しい開拓村から見れば、幸せ
への片道切符そのものであるはずだ。そのンファイレアを、こともあろうにマーレ様に
引き合わせるという。

「ンファイレアは物知りでたまたに難しい話をしてよくわからないし、不思議なものや珍しい
ものを求めているところがあるので、この際ちようどいいかなって思ったんです」

哀れ、少年。村公認の関係とまで思わせた少年の熱意は、その対象には全く届いてい
なかつたらしい。

村長は他人の不幸を喜ぶような人間ではなかつたが、少年の不幸はその憔悴しきつた

心をいくら潤せるほどには微笑ましいものに感じられた。いやいや勝負はこれからだ、頑張れ少年。疲弊した心が健気な少年を応援できる程度の暖かさを取り戻したところで、木戸を叩く音が響いた。

葬儀の準備ができたのだろう。しかし、村人の命にも興味が無く、先ほどの所業からすれば死者の尊厳などという発想すら持たないであろう小さな魔法詠唱者に対し、どう言つたものかと逡巡していると、扉の向こうから声をかけられる。

「お話し中すみませんが、葬儀の準備ができていますので……」

村長が生返事をしながら視線で意向を窺うと、マールは席を立った。

「よ、用事が終わったら呼びに来てください。さつき残しておいたあれらに話を聞きます。……頑張つてみます」

最後の言葉とその時の微笑みを向けられたエンリは、その意味を理解できなかつた。

マールはそのまま小走りで扉を出て、騎士たちを捕らえてある小屋の方へつてつて、と可愛らしい走り方で向かう。扉の外で、呼びに来た男が腰を抜かしているのとは好対照だ。村長でなくあの掃除人の主が出てきた事でひどく驚いたのだろう。

葬儀は平穩に行われた。平穩だということにした。皆が極力見ないように努めていた掃除人はその主が「汚く」した辺りから離れることはなく、例の小屋からたまに聞こ

える叫び声は聞こえないことにすればよかった。色々と静かに悲しむところではない状況だが、掃除人の事を見聞いた村人たちは埋葬を急ぐ気持ちでまとまっていた。

元々、死者は早めに埋葬しなければ災いや呪いをもたらすものであり、それはアンデッドの発生のみならず病気などの衛生面なども含めた人類の大切な経験則から来る考え方ではあったが、普通は静かに葬儀を行えないような状況でまでそれを強行することは無い。

しかし、その災いや呪いの象徴が人為的に生み出されて道端で何かを喰らっているという状況になれば、死者を速やかに埋葬して安らかに眠らせることが生者と死者の双方にとつて具体的にして共通の利益となる。身内を送り出す者たちにとつてはせわしく、また残念な状況ではあったが、あれを生み出した小さな魔法詠唱者が居なければ遺体の数はその日のうちにしっかりとした形で埋葬できる数に収まったか、あるいは埋葬する側の村人が残っていたかもわからない。文句や恨み言が出ようはずもなかった。

その中で、エンリはいくらかの視線を感じていた。あれだけの事をした者を招き入れたのだから当たり前だ。

狭いカルネ村では、エモット家が何やら小さな客を招いていたことはだいたい伝わっていた。警戒に出ていた父たちが襲われたとわかった時は、自分が原因だったらもう村

に居られなくなるかもしれないとも考えた。しかし、襲撃は隣国の軍隊による無差別なもので、考えていたよりずっと酷いもの。酷いのに、自分のせいでない事にどこか安心してしまっていた。

この村で、妹のネムを守って二人で生きていかなければならない。それを考えなければならぬにせよ、両親の葬儀で、他にも人がたくさん亡くなった時に、自分たちの立場ばかりを考えてしまう自身の冷たさはどこかおかしいんじゃないかとも思う。しかし、目の前で多くの騎士たちが千切れ飛んで撒き散らされ、頭を潰された者が仲間の残骸を喰らうというあの現実離れた光景が脳裏に焼きついた状態では、まともな感覚を持つてないのも無理もないのかもしれない。

それでも、もし助けてくれたのが安心できる大きな存在だったら、程なく現実を引き戻され、ただ両親の死を悲しむことができたろう。しかし、マールは一度はエンリの側から救おうと思った程に不思議な危うさを感じる存在だ。それが恐ろしい力を以て死を弄ぶのだから抜き身の刃物のようなもので、寄りかかって心を落ち着けることができるような存在ではありえない。

最後の祈りと別れを済ませ葬儀が終盤にかかろうという頃、エンリを呼ぶ者があった。

「すまないがエンリ、これを例の小屋まで持っていつてくれ」

重みのある小さな皮袋を幾つか渡される。まだらについた赤黒い汚れが生々しい。

「これは……?」

「騎士たちの持つていた金だ。あの魔法詠唱者様マジック・キャスターに渡すべきだろう」

騎士たちを率先して縛りあげていた力自慢の中年男だが、今はエンリと目を合わせようともしない。

確かに、時折叫び声が聞こえるあの小屋に行きたくないのはわかる。わかるが、それを自分の半分も生きていないただの村娘に押し付けるのはどうなのだろうか。もしかしたら、エンリだけはマーレの事を色々とわかっていて連れてきたのだと思われるかもしれない。村長と同行したのも、他の村人からすればそういう誤解を強めるものだろう。

そもそも、誤解を生みたくなかったなら、動き出した屍の前で悲鳴をあげて、座り込んでいればよかったのだ。エンリがその前に動く屍より凄惨な光景を目にしていなければ、恐ろしさを知らなければそういう反応もできたかもしれない。

エンリは、状況が落ち着いてから誰にどう弁解しようか、下を向いてまとまらない考えの中に迷い込みながら小屋の方へやってきた。粗末な両開きの木戸の前には左開きの側に返り血で汚れた人間を引き摺って運び込んだ跡があったが、自宅の癖で右開きの戸に手をかけていたのでそのまま引いた。あまり使われていない扉のようで多少の抵

抗を感じながらもそのまま中へ入ると、下向きの視線の先に白目をむいた男の顔が現れた。

「ひっつー！」

裏返った声は呼気とともに喉奥へ滑り込む。そのまま、エンリは決して踏みたくないものを避けようとして足の置き場を失い、柔らかいものの上へ倒れこむ。そこはむせ返るような血の匂いに包まれていた。

狭い農具小屋の中は散らかっていた。人間のような大きなものを仕舞うのであれば、必然的に入口近くの土間部分ということになる。村人たちは普段使われている側の扉を開き、使われていない側の土間へ騎士たちを放り込んでいた。拘束されて転がされていた血まみれの騎士の上に、拘束を解かれたものが覆いかぶさっていて、そこへエンリが倒れ込んでしまった。

血まみれの騎士は気を失っていたが、拘束を解かれたものは自分の仕事を再開するため、すぐに体勢を立て直そうと動き、そして起きようとともかくエンリと顔を合わせる。

「ひいひいひいっ!!」

拘束を解かれ動いていたのは、先程とは違う屍だ。色々と潰れてはいけな所が潰れており、生者ではありえないのは一目瞭然。

エンリは触りたくないものを色々と押しつけながら、四つ這いの状態でわたわたと距離をとった。ぬるりとした手触りに顔を歪める。

「き、汚くしてごめんなさい。あとできちんときれいにしますから」

小屋の隅にちよこんと座っていたマールレが申し訳なきそうに言う。自分の手や衣服が騎士たちの血に染まっていることに気づいたエンリだが、すぐに動く屍がその口で自分の服をきれいにしてくれる姿を想像して震え上がった。

「やめて!! 私はいいいから、このままでいいから、ねっ」

「わかりました。……それじゃ、次、しゃべっていいですよ」

マールレの言葉にあわせて、動く屍が白目をむいて気を失っている騎士を端に寄せ、次の騎士へと向かう。動く屍の口元には赤いものがべつとりと付いていて、端に寄せられた騎士の腕や脚にはいくつもの人間の噛み跡があり、指も何本か失われ床に転がっている。

どうして自分はこんな場所にいるのだろうか。エンリは手に持っているものを握り締め、顔を背けた。

「無事に帰してくれたらかね、かねをあげましゅ。五〇〇金貨、いや八〇〇! ……そ、そこの一番大きいのが俺のだから、帰れたらいっぱいありましゅ……」

次と呼ばれた者は、怯えながらも目ざとくエンリの持つ皮袋を見つけ、命乞いをする。

「そんなことは聞いてませんから！ ……それをそこに寝かせてください」

屍の手が肩に回ると、怯えきつたベリユースの口から次々と固有名詞が流れ出した。その声を聞き、次によく動く口を見ていると、エンリはそれが仇だということを思い出した。

今日は、あまりに間近に死を多く目にしすぎた。小屋の中に充満し、自らの服からも漂う血の匂いにあてられたのかもしれない。

辺りを見回すと、手ごろなサイズのものでは草を刈る鎌や薪を割るための手斧が目に入った。狭い小屋だけあって、これらにも真新しい返り血がべつとりとついている。持っていた幾つかの皮袋をどさりと落とすと、口が緩んで金貨が幾らか土間へこぼれ、転がった。

少なくとも、ここには敵がいる。何かあったら自分で自分の身くらい守らなければならない。そう自分に言い聞かせたのか、あるいは自分に言い訳をしたのか、自分でもわからない。それはどちらでもいいことだ。

エンリは汚れた手斧を手に取り、何をするでもなくベリユースと屍の方を見続けた。

四 血塗れの魔女

これから赴くのは、死地なのかもしれない。

これまでは、ただ殺戮の跡を呆然と眺めるしかできなかつた。今度こそ、今度こそ間に合つてくれと願いながらも、無辜の民を救うことはかなわなかつた。ようやく破壊を免れ多くの民の残る村を発見したが、そこには濃厚な致死の罨の気配が漂う。

王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは、斥候が得た情報より罨の存在を示唆する。

「村人の多くは外へ出されている。路地には動死体^{ゾンビ}が一体確認されたが、村人たちにそれを恐れ混乱する様子は無い。何者かに制圧^{マジック・キヤスター}されて餌として外に出されているのだろう。敵の影は確認されていないが、強力な魔法詠唱者に警戒せねばならない。勿論、これまでこの村を襲撃した者たちも隠れていよう。第一に群集の中、第二に家々の中からの奇襲に備えつつ、速やかに村人の安全を確保せねばならない。罨とわかつていてもなお、行かねばならぬのだ」

ガゼフは奮い立つ部下たちの声を受けながら、民のためとはいえ、部下とともに罨に踏み込むことに苦渋の表情を浮かべる。

「戦士長！罨なんて食い破つてやりましょう！」

「俺たちは国と民を守るために訓練をしてきたんです!」

ガゼフは黙って頷くと、馬を走らせる。罾を張った者たちの対応が少しでも遅れるよう、できる限り速く、そして注意深く群集や家の中に隠れた敵を探しながら村への距離を一気に詰める。家並みの中から現れる者は無い。

村の通りの一つに動死体^{ゾンビ}の姿を認めると、ガゼフは弓を取り出し、疾走しながら矢を放つ。

矢は吸い込まれるように、正確に四つ這いの動死体^{ゾンビ}の潰れかけた頭部を射抜き、それがあるべき姿へ戻す。

それでも伏兵は現れないが、油断はできない。村人たちの反応が遅く不自然なのだ。辺境の開拓村であれば野伏の一人くらいはいるものだから、それが警戒しないということとは罾で確定と考えて良い。武器を構えた屈強な戦士の集団は、村人たちが気づいた頃には既に包囲を完了していた。

あらゆる警戒は意味をなさなかった。覚悟していた伏兵は現れず、決死の覚悟で安全を確保したはずの村人は怯えきって縮こまっていた。ならば敵は大戦力で周辺に……。

「い、命ばかりはお助けを……」「俺たちが来たからには、もう大丈夫だ！」

「……は？」「……ええっ？」

命乞いを始めた村人と、怯える村人を氣遣う部下が同時に声を発し、そしてその場で固まった。

怯えられていたのは、他でもない、群集に向かつて武器を構えて疾走してきた自分たちだったのだ。じわじわと心を蝕む疲労感をガゼフは頭を振って追い出し、咳払いを一つ。

「ゴホン……私は、リ・エステイーズ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフだ。王の御命令で、王国に侵入した帝国の騎士どもを討伐するために村々を回っていたのだが……」

「王国戦士長……」

ぼそりとつぶやいた村人の一人が、鎧を凝視し歩み寄る。王国の紋章を確認しているのだろう。別の村人がその袖を引く。

「村長、氣をつけてください。王国戦士長が、王国の民にいきなり武器を向けてくるはずがない」

ガゼフは困惑する。確かに無辜の民を怯えさせた非は明らかで、伏兵の氣配も感じない。しかし部下たちはおさまらない。

「動死体ソンビと共存するような民がいるものか！ 見て見ぬふりをしていただろう！」

「あれを操る者はどこだ！ 俺たちを罠にかけようとしているのではないか！」

村長と呼ばれた男は、その劍幕を黙って受け流す。ガゼフの鎧から視線を外すと視線を上げ、静かに言った。

「見て戴きたいものがございます」

殺気立つ歴戦の戦士たちに怯みもせず落ち着いたその姿に感心しかけるが、観察するとそこにあるのは胆力などの類ではなく、憔悴しきって反応の薄くなった者のそれであつた。

「これは……帝国のー！」

村長に連れられた先には、中身の無い帝国騎士の鎧が乱雑に並べられていた。その数は十五は下らず、その過半は赤黒い汚れがこびり付いていた。その形状は……先ほどの動死体ソンビが着ていたものと同じものにも見える。

「最初から順に、お話しましょう」

扉の外では押し問答——王国の兵士が来たようだ。村長がその場に留めているが、時間の問題だろう。動死体ソシビがどうこうと言っているので、決して好意的な反応は期待できない。

慌ててマーレに頼むと動く屍は只の屍に戻ったが、悲鳴をあげる騎士の上からどかさねばならない。この状況がどれだけ不味いものであるか、このマーレにわかるはずがない。エンリは心の中の大切なものを色々と捨て去っておぞましい感触に耐え、目の前の屍に挑む。

焦るあまり得物を持ったままの腕で無理矢理に押しつけようとすると、ぬるぬると滑ってうまくいかず、諦めて足で転がしかかる。どうにか半回転させたところで、小屋の中に陽の光が注ぎこむ。扉が開かれたのだ。

村人が見せたがらなかった扉の向こうには、手斧を持った血塗れの娘ちまみがいた。酷く損壊した屍に足をかけている。

一人を除いて、戦士たちは次々に武器を構える。

「お前が動死体ソシビの主か!」「エ……エンリ!？」

死を弄ぶ魔女に挑む覚悟で叩きつけるような殺気を向ける戦士たちと、腕や衣服を血に染めて血塗られた手斧を持つ見知った娘の姿に愕然とする村人たち。さらにその足

元には、血で汚れた多くの金貨袋が集められていた。

エンリは頭が真つ白になった。村長を見つけて救いを求めるように視線を送るが、村長も自分の方を見て顔をひきつらせていた。慌てて屍から足をどける。足元を見た時、自身の服が血に塗れていることに気づく。手斧からも手を離す。半歩足を引くと金貨袋を足で蹴る形になり、その音がさらに耳目を集めた。

「ち…………ちがつ…………」

緊迫した空気を見殺して、ガゼフが一步前に出る。

「村長、奥にいるのが、話にあったマーレ殿か」

「はい」

「…………マーレ殿と、この娘に話が聞きたい。村長もこの場に残ってくれ。お前たちは外で待っていてほしい」

ガゼフは、目の前の血塗れの娘より小屋の奥に座る子供にただならぬ気配を感じていた。部下たちはいまだエンリの方に鋭い殺気を向け続けながらも素直に従う。この距離で王国戦士長を脅かすことができる魔法詠唱者などこの世界にいるはずがないからだ。

踏み込みかけた部下たちが下がりがきる前に、奥から声がかけられる。

「あのつ、ガゼフというのはその中にいますか？」

「ガゼフは私だ。名は名乗っていないが……魔法の力か？」

話に応じた事で、ガゼフは部下を制し下からせる。扉を押さえていた者が下がると、建物の傾きのためにゆっくりと扉が閉じる。

「い、いえ、それに話を聞いていたら、出てきたんです」

それが指しているのは、足元に転がっている男だ。大きな怪我は無いようだが血に塗れて怯えきっている。村長の説明にあつた通り、村を襲った者たちなのだろう。

男はあつさりとして話を話した。これまで見てきた多くの無辜の民の犠牲は、ガゼフを致死の罠へと誘い込むための贄でしかなかった。帝国騎士の鎧は偽装で、相手はスレイン法国の者。ガゼフを辺境まで釣り出し、法国の切り札の一つである陽光聖典が抹殺するという手筈だった。

ガゼフは強い焦りを感じていた。罠の一端は宮廷にまで達しており、ガゼフは王国の宝でもある強力な武装を剥ぎ取られていた。その上、噂に聞く六色聖典……。周辺における最強の国家が、満を持して作り上げた完璧な致死の檻の中にあるという事実には愕然とする。

今は少しでも味方が必要だ。それでも、そんな状況に流されることはできない。むしろ

ろ、それに真つ向から反する事を考えている自分の愚劣さに呆れるような思いもある。しかし、狡猾な計算より愚劣な正義を選ぶのがガゼフという男の本質であり、この場での選択であつた。

ガゼフは、マールに鋭い視線を向けたまま、まずはゆつくりと頭を下げる。

「この村を救つていただいた事には、感謝の言葉も無い。この者たちへの尋問の方も……」

損傷の激しい屍の方を一瞥し、表情を歪める。

「……速やかに情報を引き出すことが出来、状況を把握することができた。それも、ありがたい。しかし……」

そこで一瞬の躊躇を経て、続ける。

「何故、動死ゾンビ体を使うような、屍を食わせるようなおぞましいことをしたのだ！ 返答によつては……」

「そ、それは、エンリが教えてくれたんです！」

極めて場違いな、親しみの籠った明るい声。その場の全員が、血塗れの娘ちまみの方を向いて固まる。

あの娘はせいぜい尋常ならざる気配の者に使われて血なまぐさい作業をしていたに過ぎないと考えていたガゼフも、急に目の前の魔物が二人になったような衝撃を受けて

いた。

淀みない明るい声で発せられた突然の強烈な言いがかりに耳を疑ったエンリは、先程よりさらに酷い視線の暴力に晒される。

「えっ、なっ、わ、わたっ？ つえー！？」

エンリの悲鳴にも似た戸惑いと驚愕の声が、小屋の外まで響きわたった。

その直後、エンリはマーレの両肩を掴んでいた。絶対的な力への畏怖もそれを前にした緊張感も吹き飛んでいた。恐るべき相手に対するその気安さがますます状況を悪化させる事に気付く余裕などあるわけがない。

「ちよっ、わ、わたしがっ、何をしたって、いうのっー！」

エンリは涙目になって、マーレをかつくんと揺らす。マーレは目でわかり合共感するような柔らかな微笑みをエンリに向けていたが、必死の形相のエンリに揺らされているうちに少し申し訳なさそうな、おどおどした雰囲気になってきた。

恐ろしい。このおどおどしたような完璧な演技が恐ろしい。無垢な天使のようなあの微笑みが恐ろしい。村中の人間をまとめて殺せるような恐るべき魔法の力より、何よりその性根が恐ろしい。

そうだ、これは魔物だ。悪魔だ。世間を知らない子供のように見えても、幼いうちか

ら権謀術数渦巻く貴族の世界で主の意を酌んで生きてきた魔性の少女なのだ。その主、幼い少女を貪る爛れた嗜好を持つに違いないモモンガという名の貴族も、館や城塞ではなく大墳墓などと呼ばれる場所に住むという。恐るべき魔法の力を持ち、人としての良心が欠落している少女が、そのような者に奴隷同然の立場で忠誠を尽くしているとはどういうことか。

つまり、少女もまた蹂躪する側ということだ。領民の中から美しい娘をさらって館の奥深くに囲うような貴族は珍しくはないが、モモンガとその忠実な配下マーレは人知れず仄暗い墳墓に幼い少女を集めて嗜虐の宴を楽しんでいるのだろう。墳墓とそういう行為は本来似つかわしくはないが、モモンガが好むような幼い少女はそういう行為に耐えられる年齢では無い場合が多いのだとすれば、そういった少女たちが「壊れて」しまった時、墳墓にふさわしい、おぞましい「片付け」を行うのがマーレの役割ということか。モモンガを敬愛するマーレは、モモンガのそのような所業をも愛し、ともに楽しんでゐるのかもしれない。

伝説なんて都合のいい嘘だ。物語なんて気休めだ。本当の強者というものは、王国の貴族たちと同じように常に蹂躪する側にしか居ないのだ。物語の中に入り込んだような浮ついた気持ちで、不遜にもそちら側の存在に対等な口をきいた自分の運命など、最初から決まっていた。

「それは、どういふことなのかな?」

言葉を発したのは、王国戦士長だ。静かだが威厳のある声に、エンリはぶるりと震えてマーレの肩を手放す。

無理だ。この朴訥そうな男に魔性の少女の本質が見抜けようはずもない。火炙りか、縛り首か、吊るされ槍で突かれるのか、絶望の中でろくでもない想像を巡らす。

罪人として王国で処断されるのは恐ろしいが、まだ想像できる範囲で済むだろう。だが、残されたネムはどうなる。村人たちにも身寄りの無い者を世話するくらい的情があれば、特に疑いも無く送り出されるだろう。その後、ネムを襲うであろう絶望と苦痛は、ただ人間として一般に知られる方法で命を奪われるに過ぎない。エンリとは比べようもないものになるに違いない。

「エンリが言ったんです。相手に合わせてあげないと、きちんとお話を聞くのが難しくなるって」

エンリは絶望の中にいた。どういう理屈かはわからないが、どうせここから魔性の少女は自分をいかようにも料理するだろう。そしてガゼフには何の話をしているのかわからない。

「合わせるというのは、どういふことだ」

「え、えっと、人間っていうのは脆いですよ。うまく加減できないでちよつと壊しちゃうと、叫ぶばかりで全然話をしてくれないんです」

エンリは耳を疑った。何を言っているのかわからない。そして、マールにただならぬものを感じていたガゼフの表情が歪む。

「加減と動死体ゾンビが関係があるのか？」

「きちんと脆い人間に合わせて、壊しちゃった人間を使えばちよつとよく痛めつけていけるみたいで、うまく話が聞けたんです」

控えめな微笑みを浮かべ、静かだが喜色の混じる声で言うマール。話の内容から目を背ければ、新しいお手伝いのやり方を覚えて自慢する子供のようにすら見える。エンリはマールの意図が完全にわからなくなった。

ガゼフは鋭い眼光をマールに叩きつけ、やや声を荒げる。ただならぬものを感じるとはいえ、小さな魔法詠唱者マジック・キャスターの言葉としては異様だ。あえて動死体ゾンビを使うおぞましい嗜虐趣味にしか思えない。

「百歩譲つて尋問のことはいい。だが、村人の前で動死体ゾンビに人間の死体を喰わせたのはどういうことだ！」

ガゼフの熱気に応えるものをマールは持たない。どうでもいい事を強い調子で聞かれても困るのだ。

「ま、魔法でばらばらになった人間で汚くしちゃったのを見て村長さんがびっくりしていたので、きれいにしようとしたんです。ひとつ潰して動死体を作って、ばらまいちやったのを食べさせれば迷惑がかららないと思ったので」

「きれいに、だと……」

「時間がかかっていたので、急ごうと思つてふたつみつつ潰して増やそうと思つたんですが、エンリと村長さんが増やさないでほしいみたいだったのでやめたんです」

自分の名を話の中での安全な位置に確認したエンリは、奇跡的な速さで混乱から回復した。自分の立場が、おぞましい血塗れの魔女の如き虚像から脱しかけた事に気付き、うつすらと見えてきた見えてきた安全な立ち位置に全力でしがみ付くため速やかに話に加わる。

「この子は、魔法で間違つて飛んできたとかで、村を助けてくれた恩人なんです、このあたりの常識が無いみたいなんです」

このあたりでなければ、どのあたりの常識なら動死体ゾンビが死体をガツガツ喰らう姿を人々に見せ付ける事が許されるのだ——という思いをガゼフはいったん呑みこむ。

少なくとも、ガゼフが数日間望み続けた結果を勝ち得た、無辜の民を救ってくれた人物には違いない。ガゼフの逡巡を見てとり、村長も口を挟む。

「決して、決して私どもからお願ひしたわけでは無いのですが、帝国の騎士を倒してくだ

さったマーレ様が戦いの跡を気にされて、あのようなものを……」

慎重に言葉を選ぶ。小さな子供の姿をした恐るべき魔法詠唱者マジック・キャスターの機嫌を損ねるような恐ろしい事ができるはずもないが、王国戦士長の前であのようなおぞましい所業を肯定するわけにもいかない。双方を立てつつ、安全な位置取りを考えての発言だった。

もはやガゼフから殺気は消えていた。村を救えなかったガゼフが、村を救い感謝されている者をその村人たちの前で処断するということは考えられない。そもそも処断などできる相手かもわからない不気味さもある。

対応を考え直そうとしたところで、騎馬を駆って部下の一人が小屋の付近へ駆け込んできた。息を弾ませながらも大声で告げるのは、既にガゼフも認識していた致死の罠の最後の一欠片、法国の誇る陽光聖典との遭遇であろう。

「戦士長！ 村を囲むような人影が現れ、こちらに接近しつつあります！」

第二章 マーレとニグンとスレイン法国

五 贄の戦士と神の誕生

「……開始」

静かな命令を受けて、その者たちは村を包囲する形に散開していく。彼らこそ、スレイン法国の誇る特殊部隊群『六色聖典』の一つ、陽光聖典だ。魔法詠唱者マジック・キャスターのみで構成する部隊でありながら殲滅戦を得意とし、天使召喚の魔法によつて肉體能力や敏捷性に優れる亜人の集団を相手としても戦線を維持できる万能の部隊だった。

陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインは、不慣れな任務の成功を確信して安堵していた。

囿部隊が村を思うように破壊していないのは怠慢かもしれないが、それによつて慎重だったガゼフの行軍は性急なものとなり、その身を檻の中に収める事となった。ガゼフの愚かさを把握して幾度も檻を構築し直したつもりでいて、把握しきれいでいなかったということだ。

「露骨に過ぎる罠でも、眼前に命を吊るしておく方が良いということか……」

「指揮官でありながら、大局が見えないにも程がありますね。対亜人の最前線にも立つ

私たちではあり得ない判断です」

応えるのは、ニグンの護衛も兼ねて側に残る部下の一人だ。陽光聖典において、命の優先順位を誤るような者はこの者に限らず一人も居ない。

「その通りだ。しかし、良い勉強にもなった。一軍を指揮する程の者でも、冒険者どものように視野の狭い者がいるということだ」

ニグンは自らの頬に残る傷跡を撫で払う。

「冒険者……蒼薔薇め」

蒼薔薇とは、陽光聖典の主たる作戦行動の一つである亜人種の集落への攻撃の際に現れ、人の身でありながら亜人の側に立つて戦った愚か者たちの名だ。それを率いていたのが人類を守るべき神官であったというものも、ニグンには腹立たしい。

「隊長!!」

「ふむ、獣が姿を見せたか。少し早いが迎えてやろう」

ニグンとその護衛が、そしてそれを確認した陽光聖典の全てが天使召喚魔法を発動させる。

「なるほど………法国の特殊部隊か、早かったな」

ガゼフは小屋の陰から、村に近づく複数の人影を観察する。接近よりも包围を優先する動きは統制の取れたもので、それぞれが従える光り輝く翼の生えた魔物——天使は、それらの全てが実力を備えた魔法詠唱者^{マジック・キャスター}である証だ。

ガゼフは指揮官としての立場で彼我の戦力差を感じ取り、落しどころを見失いつつあつた信念の問題を脇へ追いやる。

「マーレ殿、こんな事を頼める関係ではないが、雇われてはもらえないか？ 報酬は望まれる額を用意したい」

「ご、ごめんささい。人間同士の争いはどうでもいいので……」

ガゼフは軽く落胆するが、この程度の答えは想定内の範囲内だ。人間の常識が通用する相手ではないが、それでも人を助けた経緯がある以上、何か道があるかもしれない。

「しかし、村を救って戴いたと聞いている。いまいちど、その力を貸していただけないだろうか」

「ぼ、ぼくはアインズ・ウール・ゴウンを、モモンガ様を探さなければいけないんです。その村長さんに話を聞こうと思っていた時に、邪魔な騒ぎが起こったからちよつと潰したり、捕まえて話を聞いてみたりしてただけです」

「こういう者だとわかつてはいた。目的があるのなら、その目的に沿うのみ。何も無いよりずっとましだ。」

「……それらの名は記憶に無いが、生きて王都に戻れば文官に問い合わせることくらいはできる。しかし、助力が得られなければそれも難しいだろう」

正直者のガゼフには大きなことは言えないが、それでもマールレに通用する数少ない言葉だった。

「あのつ、調べてもらえるなら、転移の魔法とかで逃がしてあげることできますから！」

「我らが戦わねば、無辜の民が犠牲になる。他人を転移させるというのは聞いたことがないが、転移に関わる魔法が使えるほどの使い手なら、王国の法を用いて、強制徴集という形をとってでも協力してもらわねばならない」

村を見捨てるような選択肢を提示され、ガゼフは思わず強硬な手段を口にした。しかし、マールレはそれにも全く応えた様子はない。

「へ？　そういう魔法を使えるようには見えないし……強そうな人も居ないし、強制つてどうやるんですか？」

その態度には挑発の気配すらない。不思議な事を言う人間たちへの、純粹な疑問といった様相だ。色めき立つ部下たちを制し、ガゼフは肉食獣じみた笑みをマールレに向けてる。

「は、はは、そう見えるか。全く虚勢に聞こえないのが恐ろしいな。……不本意だが、今

はその認識を改めさせる時間も人数の余裕も無いようだ」

周辺に展開する包囲網への対処を考えれば潮時だった。目の前の魔法詠唱者、多くの騎士たちを一瞬で葬る恐るべき存在だ。それをわざわざ敵に回し、犠牲を出してから村の外の包囲網に挑むなど愚かな選択だ。

「我々は奴らに突撃をかけ、村から引き離してから撤退する。戦いを終えて生きて戻ることがあれば、マール殿の調査にも協力できよう。後方からの支援でも構わないので、無理の無い範囲で——」

《飛行》
フライ

話の途中で、詠唱とともにふわりと浮き上がるマール。

「め、面倒だけど、ぼくもついて行きます。情報をもらった方がいいし、あっちからも何か聞けるかもしれないので……」

マールはガゼフの頭より少し高い所まで上がって周囲を見回し、ある一方方向を指差す。

「こっち側の包囲が薄いです。できれば逃げて欲しいんですが……」

ガゼフは歯を見せて笑みを浮かべ、馬上の人となる。上空からの視野には劣るが、馬上から見える範囲でもその方向を選ぶのは理に適う選択の一つだった。

「有り難い！ 我らはそちらから包囲を食い破り、敵を村から引き剥がす！ しかる後

に撤退だ！ 退き際を見誤るなよ！」

マールレの示した方向へ、ガゼフは馬を駆る。威勢の良い声をあげ、部下たちもそれに続いていった。

マールレは《パーフェクト・アンノウアブル／完全不可知化》を発動し、少し遅れ気味にその後をついていく。面倒だが、あれが逃げられればいいだけだ。低位の天使を呼べる……すなわち第三位階を使える者で構成された群れの方にも興味を持ったので、当初考えた支援魔法も控え、ガゼフの撤退のみを考えた最小限の支援に切り替える。

クイック・マーチ
《速歩》

ヘイスト
《加速》

魔法を受けたガゼフの馬だけが、部隊の中から目に見えて突出していった。

本来、部隊全体では全力に近いほどの騎馬突撃の中で、秩序ある隊列を保っていられるのは単に経験の賜物に過ぎない。それは、自らの軍馬の速度と部隊の速度を把握した上での、加減と修正の積み重ね、それが部隊の錬度というものでもある。それが、突如自らの馬だけが不自然にその脚力を増したらどうなるか。

「愚か……愚かな獣に鞭を入れよ！ 檻は、その後だ」

陽光聖典隊長であるニグン・グリッド・ルーインは、薄い笑みを浮かべて自ら構築した致死の檻に修正を加える。

陽光聖典の前に突き出されたのは、まさに人馬一体の贄。ガゼフが気付いて速度を緩め隊列に戻るまでの僅かな間に、天使が、魔法が、届く限りの位置から哀れな贄のもとへ集結し、降り注ぐ。

「かはおっつ！ なめるなああっ!!」

数十の天使が行く手を塞ぎ、あるいは進路へ武器を出し、さらにそれらの召喚者から数十の魔法攻撃が突出したガゼフに集中する。

ガゼフは武技を駆使し、数十の剣戟を掻い潜りながら数体の天使を切り飛ばすが、その身に受けざるを得ない回避不能の幾つかの魔法の打撃に加え、馬上からの〈六光連斬〉〈即応反射〉〈流水加速〉の繰り返しはその体力を大きく削っていった。

激戦の中、どうにか速度を落とし再び部隊の流れに吞まれようとしたその時に、魔法攻撃の目標となった軍馬が暴れ出す。対精神の魔法であれば、魔獣でもない訓練を積んだだけの軍馬に抵抗する術は無かった。次々と襲い来る天使の攻勢に対抗するため体勢を立て直すこともできず、馬を捨てる。

ガゼフが部下たちの後方で完全に孤立した時、対峙する天使の数は瞬く間に増え、三〇を超えていた。

ガゼフの奮闘を、マールは首をかしげて不思議そうに観察していた。生きて逃げてもらおうと思ってわざわざ速度を上げてやったのだから、後ろの囹か捨て石にししか使えな

さそうなものたちを残して防御に専念して駆け抜ければよかっただけに、なぜ速度を落として戦うのかが理解できなかった。それでも判断しづらい人間の微妙な戦力差をいちいち見比べた上で、それなりに適切な手段を選んだつもりだというのに。

自分で助かるうとしない生き物を助けるとするのは、とても面倒なことだ。マールはそういう事に関心の強い変わり者の竜人を知っているが、たとえあの人でも自ら助かるうとしない愚か者は放っておくだろう。

「俺は、王国戦士長！ この国を、守護する者だ！ 貴様らの、天使なぞ、ものの数でも……無いっ!!」

息を切らしながらも、ガゼフは吼える。天使の攻撃を掻い潜り、終わりの見えない武技の連続使用に体じゆうが悲鳴をあげている。

絶望的な戦いが続く中、視界の隅に反転し突撃する部下たちの姿を確認すると、寂しさと誇らしさの入り混じった笑みを見せ、捨て身の攻勢に出た。

遅すぎた好機だが、賭けるしかなかった。といつても、先程から全てを出し尽くしているガゼフに新たな手があるわけではない。〈六光連斬〉は全て前方の敵に向けられ、〈即応反射〉は回避より前進のために発動し、〈流水加速〉で斬撃を厭わず前へ出る、ただそれだけだ。

「獣が囲いに身を押し込みながらもがいているぞ。休ませることなく、絶望を教えてや

れ」

天使を失った者はすぐに再召喚し、天使を残している者は間断なくガゼフに魔法を放っていた。その一部が反転突撃をかける騎兵たちに向けられるが、ガゼフの前方にはなお厚い天使たちの壁が連なり、斬撃と魔法がその身を苛み続ける。

戻った騎兵たちが天使の一群の前に全て地に伏す頃には、ガゼフも膝を屈し、突き立てた剣のみで大地に抗していた。

「無駄なあがきを止め、そこで大人しく横になれ。せめてもの情けに……なああああつ！！」

ガゼフの前に出来たのは巨大な炎の壁——そう見える程に幾重にも重なり密集した、天まで届かんばかりの数十もの炎柱だった。その全てが天使たちを包み込み、その姿を光の粒子へと返していく。

吹き上がる炎の群れが消えた時、ニグンは部下たちを制して守りの構えをとっていた。再召喚された天使たちを防壁として、距離を取って事態を見守る。

炎のあつた空間の向こうに現れ、ガゼフの前にふわりと降り立ったのは、幼くも美しい一人の少女だった。

「あのつ、これには頼んでいる事があるので、このあたりにしておいてもらえませんか？」

風上から、頼りなさげな声がニグンの耳にも届く。先程のものが魔法であれば、ファイヤーボール《火球》よりも遥かに上位のものだが、それは幼い少女とは容易に結びつくものではない。懐にある切り札に触れ、その冷たさに心を落ち着けながら、ニグンはただその姿を観察していた。

「……闇妖精……か」

「で、できれば、皆さんにも協力してもらいたい事があるんですけど……」

おどおどした口調からは強者の雰囲気は感じられない。ガゼフに味方しているようだが、そもそもこれが強者であれば戦いの趨勢に大きな影響を与えたに違いない。ニグンは頭の中で先程の結果とダークエルフ闇妖精の少女の本質を結びつける事に失敗した。

「人類の守り手である我らが汚らわしいダークエルフ闇妖精に協力などするわけがなからう。……それより、どんなトリックだ!! あれだけの天使が……貴様、一体何を使ったっ!!」

ニグンには強大な力を持つ切り札を残しているが、目の前の相手は既にそれを行使してしまつたに違いない。ガゼフ健在の間にこの力を使われていれば危うかったが、これほどの力を持つということは法国すら把握していなかった、王国の隠された至宝なのだろう。時期を逸しての使用ではあるが、同じ至宝を預かる者として、できれば温存した

いい気持ちはニグンにはよく理解できた。そして、全体として魔法に疎いはずの王国にこのような隠し玉があったのなら、それを報告せねばならない。

「ま、魔法を使っただけです」

「そんなわけが、あるかあああつ!! 隠し事をする、ためにならんぞ!!」

マーレは溜息を一つついて魔法を詠唱する。使えそうなものを巻き込まないように、慎重に。

《万雷の撃滅》
コール・グレートサンダー

「ひいっ!」

夕暮れの晴れ渡った空から、多くの雷を幾重にも縊り集めたような巨大な豪雷が突如ニグンの横に聳えるものを貫いた。空気を震わせる瞬間の圧迫感にニグンはすくみあがる。豪雷を受けた監視の権天使が輝きの欠片となって飛散したのはその直後の事だった。

「い、一撃……だと……」

「ば……化け、物……」

「なんという……ことだ……」

「恐ろしい……」

「あのような、雷は……」

もはやニグンは懐のものから手が離せなくなった。あれは闇妖精ダークエルフの形をした悪夢だ。部下たちから漏れる声も、うめき声に近いもの。

「あのつ、魔法は自分でも使えますけど、これだけの人数で手伝ってもらえると助かるんです」

マールレは控えめな態度を崩さず、ゆつくりと指揮官の方へ向かう。これだけの人数が第三位階を使えるのだから、《鷹の目》ホーク・アイでも相当な広範囲を搜索可能になり、ナザリック搜索も捗るだろう。そういう魅力さえ無ければつまらない人間の同士討ちに長々と付き合うことも無かつたらうし、その後のガゼフの絶望も無かつたかもしれない。

「最高位天使をつ！ 召喚するつ!!」

歩み寄る悪夢の前に、ニグンは部隊を、そして自らを奮い立たせるように高らかに宣言した。そして指揮官として命令する。

「二気にやるな！ 天使たちを三方から間断なく突撃させ続け、手の空いた者は魔法を浴びせよ！ 時間を稼げ！」

ニグンは切り札に貼り付いた手をそのまま懐から取り出した。法国の至宝であるクリスタルの輝きが、すくみあがつたその心を落ち着けてくれる。クリスタルに封じられているのは、魔神をも滅ぼすという最強の天使を召喚する魔法。これを行使できるという自らの絶対的優位を認識し、確信し、信仰し、そして指揮官としての冷静な判断力を

取り戻す。

そうだ、恐怖に駆られて、とてつもない費用と労力を込められたそれを使用してしまいう前に、戦況を見なければならぬ。高位とはいえ魔法詠唱者を相手に、数十の天使と数十の魔法攻撃が間断なく襲いかかるのだ。視野を塞ぎ、祈るように掲げたクリスタルの脇からちらと前を確認し、そしてそのことを後悔した。

「何故効かないっ!」「神よ!!」「化け物め!」「ひいひいっ!」

攻勢一辺倒にあるはずの部下たちは悲鳴に近い声をあげ、幼い闇妖精ダークエルフの姿をした悪夢はただだゆつくりと近づいてきていた。——炎、氷、石、酸、毒、束縛、呪い、衝撃波、聖属性、精神攻撃——あらゆる種類の魔法が降り注ぐ中を平然と。そして天使の剣を白手袋で煩わしそうに捌き、時折その身に受けながらも何の痛痒を感じる様子も無く。

悪夢の前を三体の天使が塞ぐ。すぐに何かが振るわれると、その天使たちはありえない形にひしゃげ、弾け飛びつつ消え去った。次に飛び掛った天使たちは二体まとめてそれに貫かれ飛散する。天使たちを軽々と屠ったのは、どこかの至宝でも高位の魔法でもなく、悪夢の持っていた黒く長い杖だった。

「なああああつ! あああありえんつ! 無理だ出鱈目だ! かか神の盾でいくぞ発動まで抑えつけろ! 進ませるな!!」

ニグンは魔法詠唱者が杖で天使をまとめて撲殺する非常識な光景に取り乱すが、至宝

の使用を逡巡した自分自身を呪いつつクリスタルの封印解除の手順を急ぐ。

指示を受けた部下たちは、一度たりとも実行された事の無い天使を捨て石とする戦術を自然と受け入れ、既に絶望に揺らいでいた神官の矜持を手放すことを受け入れた。神の盾とは、かつて漆黒聖典不在時の真なる神器の護衛任務を想定し、座学のみで検討された戦術だ。

天使たちが間合いを一気に詰める。剣を交える間合いも、拳を合わせる間合いも越えて、天使たちは剣を突き立てながら取り付き、後方からマーレの小さな体を抱え込み、上空からのしかかった。

数十を数える天使たちが集結すると、それらは白く輝く無数の手足や羽を生やした蟲のようでもあったが、すぐに蛹さなぎのようにぱっくりと割れていった。小さな白手袋の手が天使の体を引き裂き、押さえ込もうとする白い腕をもぎ取り、視界を遮る羽を筆り捨てる。

次々と光へ還る天使たちの欠片を輝く鱗粉のようにその身に纏いながら現れた闇妖精ダークエルフの少女の姿は、一つの神の誕生にも見紛うほどの神々しさを備えていた。敬虔な者たちは震え、畏れ、魂を揺さぶられた。

陽光聖典の者たちの信仰心は神官の中でも間違ひなく上位に位置し、さらに天使の力を借りる事で日々補強されていた。しかし、彼らの信仰を作り上げたスレイン法国は神

の死を隠蔽し神の出自を曖昧にせざるを得ない事情もあつて、その宗教観は極めて素直なものにならざるをえず、目にする宗教画は神話的モチーフの範囲内で無難な構図のものに限られていた。

その彼らの目には、目の前の光景は刺激が強すぎたのだ。

このことで彼らの信仰心を疑うことはできない。彼らにとつて神官とは元来、神を渴望するものであり、輝かしい勝利を重ねることこそを神とそれに連なる者たちの本質と信ずるものである。六大神の至宝など具体的な神の力の残る法国にあつて、天使を召喚してその力を信じ戦う者たちが、神を既知の内面的な信仰対象のみに卑小化するが如き傲慢さを持ち合わせていようはずもない。この世界の人類はそこまで世界をわかつたつもりではないのだ。たとえ人類最高の大賢者でも大神や欲王の魔道に触れば簡単に理性を捨て去るであろうし、彼らの信仰もまた、あと一押しで裏返る所まで追い詰められていた。

「さ、最高位天使よ！ 我らをつ、導き賜ええ!!」

破壊されたクリスタルの亀裂から白い光が溢れ、にわかに輝く世界に伝説の存在が降臨した。それはニグンの信仰心を僅かに繋ぎとめていた力の象徴であり、輝かしい聖なる翼の集合体。神殿の絵画で見ていたそれより遥かに神々しい至高善の姿に圧倒される。

だが、それまでだ。先程から続く震えも、畏れも、胸の奥を掻き毟りたくなるような感覚も消えてはくれない。魔神をも屠る最高位天使である威光ドミニオン・オーソリテの主天使の姿を目にしても治まらぬものとは何か。ニグンはその先を考えることを拒絶した。

「ほ、《善なる極撃》ホーリー・スマイトを放てええ！」

ニグンは仮初の召喚主として第七位階魔法の使用を命じる。最高位天使が行使する力は、人間では決して到達しえない領域。

威光ドミニオン・オーソリテの主天使は追い詰められた召喚主の思いに応えるように持っていた笏を光に還し、最大の攻撃を発動する。

《善なる極》ホーリー・スマイト

その瞬間、ごじゅつ、という鈍い音とともに威光の主天使の詠唱が止まる。闇妖精ダークエルフの少女の姿は忽然と消えていた。

「最高位天使が!!」

一つの叫びとともに、皆が知る。突如として空中に現れた少女がその杖で最高位天使の頭を、そして胸部までをも潰し、抉っていたことを。

言葉にならないうめき声はその場を満たす。最高位天使を杖で、一撃で叩き潰す

マジック・キヤスター
魔法詠唱者——そんなものは、神話の中にも存在しない。輝く白い蛹を引き裂いて現れ

たのは、新たな神だったのだろうか。

ダークエルフ
ドミニオン・オーソリテイ

闇妖精の少女は光に還る威光の主天使の欠片を纏いながら、ゆっくりと降り立った。

その横でニグンは力なく崩れ落ち、地面に尻をつけたまま後ずさりを試みる。

「ななな何をし、いや、あなた様は一体何をされたのですか?」

「あのつ、今の魔法は受けると少し痛いから、ちよつと時間を止めて横に回って、タイム
ングをはかつて潰しただけです」

「ちよ……時間を止め……止めたあああ!?!」

「た、ただの第十位階の魔法です」

常識に真っ向から反している。しかし、ニグンは不思議とそれを否定したい気持ちにはならなかった。

人は自らの足跡を否定して生きていくのは難しい。これまでの信仰も、預かった力も、最高位天使も、その偉大さを否定できる勇氣などあろうはずもない。魂を揺さぶられたあの神々しい光景を思い起こし、それに吞まれてしまうことこそが、ニグン・グリッド・ルーインの生きてきた世界を護るための唯一の冴えたやり方だった。

最高位天使を容易に屠る存在が神そのものであれば、どれほど救われよう。目の前の存在が神の領域たる第十位階の使い手であるという事を受け入れることで、ニグンは安

堵すら覺えた。

「…………あなた様が、神、か…………」

ニグンの眩きは、マーレには届かなかった。この瞬間、空間に大きく亀裂が入っていた。それを感知したマーレの表情が一瞬だけ子供らしい明るいものとなり、そしてすぐ
に落胆し、やがて思案するような表情になる。

残念ながら、待ち望んでいた仲間たちからの魔法的接触では無かったということだ。
当然ながら、準備していたのは魔法詠唱者の基本とされる攻性防壁でなく、情報系魔法
の探知捕捉手段に過ぎない。捕捉した接触者に心当たりが無いので、その結果を映し出
すべく空を見上げて魔法を詠唱する。

《水晶の画面》
クリスタル・モニター

そこに映し出されたのは一人の少女だった。布を巻いて目を隠され、額には繊細な寶石を散りばめたサークレットを身につけている。身に纏うのは、少し前の開いた薄絹の衣のみ。そのまだ起伏の少ない肢体が、白銀の敷砂の上にゆっくりと崩れ落ちた。

「これが魔法でこちらを監視しようとしたんですが、心当たりありませんか？」

「こ、これは土の……!? 儀式も無く第八位階の《次元の目》を……。やはり……神……」
 本国が監視していた事など知らなかったが、そんなことはどうでもよかった。秘中の秘であり男子禁制の土の神殿について確認までは無かったが、土の巫女姫とその額を飾る法国の秘宝を見紛うはずもない。

しかし、法国においても大規模な儀式によってようやく行使できる力をあつさりと思せ付けられたことに衝撃を受け、ニグンは問いかけへの答えを怠った。その後、ニグンは神の問いに速やかに応じなかつた事を深く後悔することになる。

「わからないなら、とりあえず行ってみます。何もせずに待っていてくださいね！」

《転移門》

闇妖精の少女は、詠唱とともに現れた闇の塊の中へ消え、同時に水晶の画面の中へその姿を現す。

ニグンの部下のうち最も悲観的な男が一人、その場で卒倒した。

六 スレイン法国へようこそ

聖域に突如現れた闇の塊は、地に伏した巫女姫の側へ闇妖精ダイクエルフの少女を吐き出した。

装飾の豊かな鎧を着た衛兵たちが、この任に就いて初めて武器を小さな侵入者に突きつける。神殿に詰めていたのは女だけで構成された儀仗兵的な部隊だが、法国の聖域を護る者としての誇りを持って日々訓練に励んでいた者たちだ。

「あのつ、いま《次元フレイナーアイの目》を使ってきたのはこれですか？」

十以上の武器を突きつけられても、闇妖精ダイクエルフは動じない。その言葉を聞いて衛兵に護られていた老婆が顔を歪め、衛兵の一人に耳打ちする。

「神官長に、いま神都に存在する最高の聖典を呼ぶよう伝えよ。第八位階を防いだ者が神殿に転移してきたと言えば良い。言葉の意味を考えるな。すぐに行け」

老婆は土の神殿を管理する土神官副長の立場にあつた。第八位階の儀式にも関わる以上、それを防いだ上に探知してこちらへ現れた目の前の侵入者が、どれだけとてつもない存在かはある程度は理解していた。だからこそ、軽々しく衛兵を動かす事もできなかった。

闇妖精ダイクエルフは幸い走り去る衛兵に興味を持たなかったが、より状況は悪化する。身を屈め

ると、倒れていた巫女姫を担ぎ上げたのだ。

「……………んっ」

粗雑に抱えられ薄布が捲くれ上がった巫女姫の肢体を、冷たく滑らかな竜鱗の帷子が軽く擦る。意識はあるが、儀式やその失敗に伴う魔力の過剰な消耗のため朦朧としたままで、反応はその一声に留まった。闇妖精ダイクエルフの少女は幼さの残る巫女姫よりさらに小さい体、細い腕だが、まるで重さを感じないように肩と片腕で支えている。

「少し借りていいですか？」

あまりの大胆な行動に、時機を逸した衛兵たちが闇妖精ダイクエルフと神官副長の間で視線を泳がせる。話の通じる相手なら最低限、時間を稼がなくてはならない。相手が何者であれ、神官副長として巫女姫を護らなくてはならないのだ。老婆は開き直って口を開く。

「巫女姫一人連れていったところで、第八位階が使えるわけがなからう。儀式を行ってようやく到達しうる、本来人の手の届かない領域の魔法じゃ。……そんなものを用いて、そなたは何を探し求めるか」

「アインズ・ウール・ゴウン……ぼくの主と、たくさんの仲間たちが居る場所です」

老婆は目を見開く。第八位階を防ぎ、逆に法国の神都最大聖域の一つであるこの場に難なく転移するほどの者が、主と多くの仲間を探すと、いう。

闇妖精ダイクエルフは法国では蔑まれてはいるが、この世界では弱者である広義の人間種に含まれ

る。人類の守り手として存在しているスレイン法国にとって、この者の主や仲間たちは竜王にすら対抗しうる戦力となるかもしれない。

——この者には法国をあげて協力せねばならないのではないか。そんな都合の良い事が、本当にあるのならば。

「そこに居るのは……人間か？」

「は、はい、人間も闇妖精ダークエルフも居ますが、ほとんどは異形種と呼ばれる存在です。主は死の支配者で、仲間も真祖トゥルーザンバイアや蟲王ヴァーミンロード、最上位悪魔アーチデヴィルなどさまざまです」

都合の良い事など、なかった。老婆は甘い考えを打ち砕かれそうになる。しかし、六大神にも異形の者は存在したという事実が支えとなる。

「……そ、その者たちは、人類の守り手たる法国の力になってくれるのであろうか」

搾り出すような声。都合の良い感情を捨て切れない、捨てたくないのだ。しかし、目の前の闇妖精ダークエルフの少女は、そこにある感情を慮るような存在ではなかった。

「人類なんて、守る必要があるんですか？」

それは強者ゆえの皮肉でも露悪的な反語でも無く、ただ純粹な疑問の衣を纏った言葉。老婆は、ぎりつ、と歯を噛み締める。法国の神官にとっては看過しがたい態度であった。

「この神殿に土足に踏み込んだ者が、人類の敵であるなら……」

「——下がちなさい」

静かだが威厳のある声が、老婆の怒気をはらんだ声を後ろから抑え込む。この場にはありえないはずの声にその場の全ての者たちが振り向くが、そこに敵意や警戒は無い。現れたのは、聖域内に存在する事が認められていない者。しかし、何者も彼を制止することはなかった。

「し、神官長!」

「独断で禁を破つてすまないが、今、我々は人類の岐路に立っている。……さて」

神官長と呼ばれた男は闇妖精ダークエルフの少女に向き直って畏まり、恭しく一礼する。それは、国の重鎮や他国の勅使に向けられてもおかしくないものであつて、巫女姫に狼藉を働く侵入者に向けられるべき態度とは考えられないものだ。聖域に静かなざわめきが広がった。

「スレイン法国へ、ようこそ。……あなたは、ふれいやーではありませんか」

「……ふれいやー……何のことかよくわかりません」

男は慎重に観察し、聞いたことが無いわけではないと判断する。

「ふむ……それでは、ぎると、という言葉は知っていますか?」

「あのつ、ぼくが探しているアインズ・ウール・ゴウンは、至高の御方々からぎるとだと聞いたことがあります。何か、知っているんですか!」

その時、男は強く震えた。流れる涙を見た者もいた。それらが再び呼び込んだざわめきは、男がその場に膝をついて敬意を表した時に最大のものとなった。

神を求めて神官の道に入り、その渴望を力として地位を高めた。法国の重鎮となり神の死を知らされた時には確かに大きな衝撃を受けた。しかし、神が意思を持ち行動する主体としてはもはや現存しない事自体は、法国がそれに代わって人類の守り手となっていることで薄々理解はしていたのだ。

それだけに、神話の中の存在が目の前に現れた衝撃は大きい。それが大きな危険をはらむ存在であつても、神に直接仕えた、神に比肩しうる力を持つ者を、即座に人類の敵と考え行動できようはずもない。神官とは神を信じ渴望する者であつて、神とその力に悲観的な者ならば、そもそも神官として大成しようはずもないのだ。その本質的な部分は、知識の多寡によって簡単に左右されるようなものではない。

「あなた様がふれいやーでなく、命令を受けたわけでもなく只ぎるどからはぐれた存在だということならば、既にぎるど自体か、少なくともあなた様の主が存在しない可能性が高いでしょう」

「えっ……」

男は、自らの知識の上に理想や願望という調味料をまぶし、無意識のうちになすべき事を歪めていった。

神に仕えたという強大な力を持つ者と、神の意思に従い人類の守り手たらんとする法国。この両者の間に意思疎通が成り立っている以上、手を取り合えるはずなのだ。それは弱者たる人間に神が与えた好機であり、逃すなど考えられない。

勿論、魔神なるものを知らないわけではないが、それは人類に敵対する存在であり、会話が可能な目の前の存在はそうではないはずだ。何より、日々祈りを捧げてきた神殿の聖域に現れたものが、そのようなものであつてよいはずがない。

「諦めてください。このままでは、あなた様は人間の世界に甚大な害を及ぼす魔神となつてしまいかも知れません。そうなる前に我々はあなた様を救い、ともに歩みたい」
「に、人間なんかのために、アインズ・ウール・ゴウンを、モモンガ様を探すことを諦めることはできません」

おどおどした表面上の態度にそぐわない、その瞳の奥に揺らめく闇……それに気付く余裕など、目の前の男にあるわけがない。

「この世界の人間だけのためではないのです。我がスレイン法国は、そのアインズ・ウール・ゴウンとは関わりは無くとも、他のぎるどのふれいやーの意思とその遺産を受け継ぎ、人類の守り手として存在しております」

男は自分の言葉に酔っていた。それは願いであり、信仰であつた。

そもそも、具体的な魔法の力をもたらず場合を除けば、神は人の信仰に応えない。そ

の是非を断じることもない。いつしか、人は神に都合の良い願いを託し、虚像を押し付けていくものだ。

「……他の、ぎぐるどー」

「力無き人類を救うため、法国の基礎を築き上げたぶれいやーの方々のぎるどです。その遺産を我々とともに守るのです。この世界に関心が無くとも、悪い話ではないでしょう。……可能ならば、亜人や異形種を狩る側の戦力となつてもらえれば、これ以上心強いことはありません」

聞き覚えがあつた。それは、至高の方々が嫌悪したもののたちの行為にして、栄光ある
 アインズ・ウール・ゴウンに度々土足で踏み荒らした侵入者たちの旗印。

——この人間の群れは、敵だ。それも、時に至高の御方々すら苦しめる、絶対に油断
 してはいけない相手。

マールは、走り去つた衛兵を見逃した事を悔やむ。目の前のものは取るに足らない
 が、ここはナザリックを踏み荒らした大侵攻に参加した汚らしい者と同種の、あるい
 はそれに連なる者たちの地。何かに使えないかと兎穴でも調べていたところ、いつの間
 にか獅子の縄張りに踏み込んでしまつていたのだ。

《魔法無詠唱化》

《時間延長化》

《鷹の目》

《敵感知》

増援が来なければ、少しでも情報を得ておきたかつた。しかし、近づいてきていた集
 団の中には、この世界でいまだ出会つたことのない領域の者がひとつ、いや、ひとり混
 じつている。どちらかといえば獅子の側だろう。勝てない相手では無いだろうが、本格
 的な増援が来る前に屠れるとも限らない。何より、後手に回る事でアインズ・ウール・ゴ
 ウンの敵に情報を与えるわけにはいかない。

目の前のものの言葉は既に聞こえていない。虚空を向いているその瞳は魔法的な視
 界を見つめたままに、マールは足元の白砂に杖を突き立てた。

その日、神都で起こった局地的な大地震の被害は法国始まって以来の壮絶なものとなった。死者・不明者は三千とも五千とも言われ、被害の中心にあった土の神殿は跡形もなく崩壊した。人々を飲み込んだ広大な地割れは速やかに塞がって犠牲者たちを喰らい尽くし、残されたのは地割れの痕跡を所々盛り上げ不気味な形に歪んだ大地と僅かな瓦礫のみ。

神殿周辺はすぐに嚴重に封鎖されたが、広大な被害地は衆目に晒され、神都では無責任な噂が跋扈することになった。壊滅的な被害地域と揺れすら感じなかったその外側との極端すぎる違いも、それに拍車をかける。

人々を貪り喰らうように塞がった地割れは怒れる土の神の御業だと言う者もあれば、土煙の向こうに巨大な魔獣の影を見たと言う者もあった。不気味な風体の老婆を連れた奇妙な集団が土の神殿の方へ向かっていたという話がその不気味さの仔細とともに広まれば、それこそが災厄と魔獣を呼び込んだ邪教の集団だとか、急病の巫女姫の代わりに老婆を捧げたから土の神が怒り狂ったとか、無秩序で無責任な多種多様の噂話へと

繋がっていった。

こうした冒険的な噂の陰に隠れて、神都では復旧・土木作業に携わる多くの人夫が行方不明になっていた。その殆どが、何を復旧するわけでもなく昼夜通して土木作業が行われていた封鎖地域の中でのこと。その不自然さから、大地に大穴を穿ち土の神への生贄を埋めているという噂すら立ったが、それも更に刺激的な多種多様の噂に覆い隠されて消えていった。

「か、神の命だ。天使を再召喚し、ガゼフたちをその場に釘付けにせよ。こちらからの手出しはならん」

命じはしたが、陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインは既にガゼフへの関心を失いつつあった。既に止めを刺そうと思えばいつでもできる段階だ。

音は無いが、映像だけである程度はわかる。まずは愚劣な神官副長への嘲りが、次に賢しい神官長への嫉妬が止まらなくなる。部下たちは跪く神官長の姿にどよめいたが、

それこそ凡愚……何もわかっていない。我々は神官の本分を横から掠め盗られようとしているというのに。

そして、画像が大きく揺れ、引き裂かれた。

裂け目に空は無い。画像の中の人々が、そして建物の瓦礫がその裂け目に吞まれていく。聖域に瓦礫が降り注ぎ、巨大な神殿が崩壊する。土煙が四角い視界を半ば塞ぐ中、大地の亀裂が唐突にその口を閉じた。

土煙がいくらか晴れると、その場は西日が照らす外の世界となっていた。但し、既にそこはニグンたちの知る都市の一角ではない。ただ全てを喰らって荒々しく隆起した土肌と、喰らい残しの瓦礫が散在するのみ。

敬虔な者たちで溢れていた聖なる広場も、巡礼者たちの憩いの場も、それらを目当てに増殖した無秩序な市や商人たちの雑踏も、その片隅で神官の出入りの是非が度々議論されてきた色街も、全てが土へ還されてしまったのだろうか。

——この力は、魔法だ。あまりに大規模な殲滅をもたらす、まさに神の領域の魔法。

ニグンは深く後悔した。土の神官長が何を言ったのかはわからないが、神の怒りに触

れたことは疑いようが無い。こうなる前に——神が法国へ降臨する前に、何か口添えをしていればこのような惨事には至らなかつたのではないだろうか。あの問いに答えてさえいれば……。

同時に、ニグンは少し安堵した。神官の本分を掠め盗ろうとしたあの盗人の末路には、一切の同情も痛痒も無い。跪いたということは、侵入者でなく神への応対だ。それでなお怒りを買うなど高位の神官として言語道断だろう。

そもそも、かの神に対し再三の攻撃を加えた愚かなニグンと陽光聖典はその存在を赦されている。それに対し跪いて言葉を交わすのみでこれほどの災厄を呼び込むに至るというのは、どれほどの無礼を働いたのか想像もつかない。神官長ほどの者が、あの状況から……。

最後にそこに映つたのは、巨大な存在の一部——魔法陣のような光の文様の上に現れたそれは、巨大な獣だろうか。数秒の静止の後、何か命令を受けたように走り出す。その全容が映し出される前に水晶の画面はきらきらとした光の粒子に還ってしまった。

闇の塊が再び現れたのは、それより少し早かつた。再び現れた神は、肩に担いでいた肌も露わな少女を無造作にニグンの方へ押し付けた。

一つの国家が最大級の警護を行っていた対象がいとも簡単に、そして一瞬で遙か遠方の他国へ連れてこられたという事の重大さは充分に理解している。それでも、ニグンは

この期に及んでなお驚き、畏れ、狼狽する凡愚どもに同調する気にはなれなかった。神が神の御業を成して何がおかしいというのだろうか。

「こちらは、スレイン王国の土の巫女姫でございます、神……」

「ぼくはマーレといいます。そのスレイン王国はぼくの敵だったので、とりあえず周りを皆殺しにして連れてきました」

ニグンは目眩を覚えた。神を跪いて迎えておいて敵に回す愚劣な神官長への呪詛を心に溜めながら、自らの生き残りの可能性を模索する。

「か、神マアールよ！ 我々は、あなた様に従うものでございますー！」

部下たちのどよめきが大きくなる。ニグンは「神殿を破壊した者を」「神官長様が」と口々に騒ぎ立てる凡愚どもを一喝する。

「神殿や神官が神そのものに代えられるか！ 神あらば神殿などいくらでも再建できよう！ 神なき神殿に何の価値があるのか!!」

もとより、ニグンともども先の戦いで心を折られている事には変わりない。呆然とする者、うなだれる者、跪く者と反応は様々だが、反発などは起こりようもなかった。ニグンは部下たちの様子に満足しながら、憔悴した巫女姫をその場に座らせる。

「ぼくのために働いてくれるなら、殺しません。……それを使って探したいものがあるのですが、儀式はできませんか」

「それつ、それは我々では出来ませんが、我がスレイン法国には他にも神殿があり、その中にも高位の搜索魔法を行使することが可能な……」

言いながら、ニグンは神の言葉を思い出し、青ざめる。

「……ほ、法国であなた様に逆らったのは、あのお愚か者の独断でございましょう!! 私ニグンはスレイン法国の誇る陽光聖典の隊長であり、最高神官長とも話をできる立場にございます! お望みとあらば、か必ずや法国を動かしてみせましょう!!」

マールは、スレイン法国という人間の大きな群れを動かすと豪語する男に興味を持ちつつあった。取るに足らない存在ではあったが、神官長と呼ばれた男と特に差も無いので、確かにどちらが上とも判断がつかない。周囲のしもべの質まで考えれば、こちらの方がマシかもしれない。慎重に対応し、使えるものなら使えばいいだけだ。それに、たとえ儀式ができなくとも、これだけ人数がいれば《鷹の目》ホークアイなど低位の探索魔法であってもかなりの広範囲を搜索可能になる。

——戦いが終わったら、召喚したものも引っ込めようか。

それと魔法的に共有していた視界を、意識の外へいったん追いやる。最後に見たのは、みすばらしい槍を構える髪の長い男だった。

七 神とニグンと大聖典

「……さらに、我らには優秀な諜報部隊もございます。私どもも共同で作戦を行ったことが——」

マーレは片手を少し上げ、必死に自らと自らの国を売り込み続けていた男を黙らせる。

この男はニグン・グリッド・ルーイン。率いているのは陽光聖典というスレイン王国の特殊部隊だという。それは、至高の御方々の明らかな敵を含む国ではあったが、それだけではないのかもしれない。いずれにせよ、この男には大した力も無いので裏切った時の処理も容易く、味方になるというのなら試してみてもいいかもしれない。

そして、人間たちの諍いには興味は無いが、片方が役に立ちそうなら優先順位を決めておくべきだろう。

「ガゼフさん、あなたは群れ——いや、自分の国を動かせますか？」

ガゼフは黙って下を向く。代わりに、口の端を吊り上げたニグンが得意げにまくし立てる。

「政治力とは無縁のこの男には、到底無う理でしょうな。それに、そのガあゼフの仕える

王国は、魔法においては他に大きく後れをとっておりません。さあらに、優れた諜報の部隊も無く、神マールレのお役に立てるものではありません」

「ふーん……それじゃ、もういいので、ニグンさんたちに働いてもらうことにします」

マールレは表情を動かさずガゼフから視線を外す。

「なっ……マールレ殿、それは、村を襲い無^む辜^この民を殺した非道な法国に味方するということか！」

「人間の間の同士討ちでどこの人間がどれだけ死んだかなんて、目的の前ではどうでもいいことです」

人の側の事情を完全に無視した冷やややかな言葉は、意図せざるところでニグンを含め陽光聖典の者たちの心を、魂を救った。

人類が一つになるためとはいえ、多くの村人の犠牲の上に成り立つ作戦に彼らは納得はしながらも、完全には消えてくれない良心の呵責を使命感と信仰心で押し潰してきたのだ。そこへ与えられた、強大な神による赦しの言葉。そこには僅かな逡^{しゆんじん}巡も無ければ、犠牲者への憐^{れん}憫も無い。すなわち、彼らの行為は完全に赦されたのだ。ここに彼らの新たな信仰は完成する。

「おおお……」「ああ、神よ!!」「我らは、赦された……」「神マールレに祝福を！」

「我々が国は必ずや神マアールレのためお役に立ちましょう！　いかなるものをお探してしようか」

ニグンは大仰に腕を畳み、その場に跪く。

「儀式でも、諜報部隊でもなんでもいいです。その国の力で、アインズ・ウール・ゴウンのモモン——」「マールレ殿つつ!!」

それは、空間をビリビリと震わせる声。それでも、話を中断させることすらできない。「——探すことはできませんか?」

マールレの言葉を遮って響いたガゼフの叫びは、マールレにとってはもはや何の意味も無いものだった。それは、むしろ敵対者であるニグンへの影響の方がまだ大きい程のもの。マールレにしてみれば、同じ下等生物なら役に立つ方を役立てるだけで、下等生物の間にある葛藤や事情など知った事ではない。

マールレは感情の籠らない冷たい目でガゼフを一瞥してから、ニグンに向き直って僅かに微笑む。

「もほちろんでございます、我が神マアールレよ」

目の前の美しい女神の微笑みによって畏れが高揚感へ昇りつめ、思わず声がうわずつたニグン。己の勝利の味を噛み締める。絶対的強者を敵に回し、人間ではないというだけで罵り、しまいには総攻撃をかけた身でありながら、最後に^{すが}縋ることで転がり込んで

きた勝利は神のもたらした奇跡ともいえるものだ。

神——それはニグンが信仰してきたものだけではない。高位の神官より、神とは突如世界に現れ人類に味方した絶対的強者であったと聞いたことがある。

目の前の美しい闇妖精ダークエルフの少女が新たな神であることは疑いようが無い。神なればその姿は様々で、人の形に限られるものではないことは、少なくともスレイン法国の神官にとつては常識だ。

この新たな神を法国に迎え、このニグンが新たな聖典の創始者となる。それこそがニグンに与えられた奇跡にして神の恩寵。神人ありとはいえ神なき漆黒に遅れを取ることもない、法国最高の新たな聖典の指揮官として唯一なる現存神マーレとともに人類を導くのだ。

ニグンは偉大にして崇高にして甘美な使命に体を震わせ、不遜にも法服の下にあるものを屹立させる。現存神マーレを擁する部隊は法国にあつて最も偉大な、聖典の中の聖典となるだろう。その名は『深緑聖典』……いや、『深緑大聖典』しんりよくだいせいてんが妥当だろうか。

『深緑大聖典』の進撃、それは暗澹たる人類の歴史に暁あかつきを告げる鶏声けいせいとなるだろう。ニグンはその創始者にして神の御遣いみつかとして、幾多の亜人の国を制圧する——とうとう人類が攻勢に出る日が来るのだ。

西のアベリオン丘陵の討伐に出ればひと月もせず乾いた荒野はオークやオーガド

もの血を吸つて赤く染まり、東の忌々しいビーストマンの軍勢を迎撃すれば牙を剥いた大地が口を開け獣どもを丸ごと喰らいつくすだろう。たとえ人類最大の仮想敵たるアーグランド評議国と事を構えようと、悠然と空を飛ぶ竜の群れさえ天よりの豪雷に射抜かれて地上へ墮ち、神マーレの手で容易に引き裂かれるに違いない。

ニグンは人類の攻勢に、その栄光の日々の先頭に立つ輝かしい未来を想像し、絶頂に達しかける。この際、神を連れ帰つただけの小者で終わるわけにはいかない。それならば、神に貢献せねばならない。そもそも今のニグンに、神マーレを奉ずる大聖典を率いる資格があるだろうか。

この出会い、この僥倖は、自ら勝ち得たものではない。ただ転がりこんできた——神意ひとつによつてもたらされたもの。

そう、まずは神意だ。我が神マーレは愚かな我が身が働いた不敬を不問にしてまで、アインズ・ウール・ゴウンのモモン某という者を探している。あちらでの会話の長さを考えれば、神官長はその求めに応じなかつたのかも知れない。神意について詮索し、あるいは法国教団組織の論理で躊躇する所もあつたことは理解できなくもない。しかし、相手は教団組織どころか法国そのものに比しても上位の存在。生き残るためには、神殿が、神官が本来何のために存在するかを忘れた愚か者の末路にも学ばねばならない。

「このガあゼフどもを早々に滅ぼし、速やかに神マアーレをお連れすることで、必ずや法

国は神の下で一丸となって働きましょう」

ガゼフと部下たちは絶望の中にあつた。それをもたらしたのは悪徳でも裏切りでもなく、無関心だ。救われて見捨てられる。それも弄ばれたのですらなく、ただ何かに使うため拾い上げられ、役に立たない方が捨てられたに過ぎない。その扱いは路傍ろぼうのゴミにも等しい。それがわかつてしまったから、そこには怒りでも悲しみでもなく絶望しかなかった。

体が動かないわけではない。もはや活路は無く、できることはただ一つ。最も隙ができるであろう、マーレの恐るべき力が自分たちに向けられるその瞬間に、ただ一人だけ天使を従えずマーレに跪く敵の隊長を狙うことだけだ。僅かでも捕虜を残すつもりがあれば、あるいは魔法の効果に少しでも制約があれば、生き残った者の刃が届くこともあるかもしれない。

「別に、それでもいいですけど——」

マーレは、あちら側での異変に気付き、注意を魔法的な繋がりへと分散する。

「もほほちろん、アインズ・ウール・ゴウンなる地は、風花聖典をはじめ人類最高の諜報

網を誇る法国の全力で見つけ出しませう」

ニグンは、自らの仕える国の力とその全てを人類の新たな庇護者たる神マーレに捧げること何のためらいも無かった。人の身で人類の栄光の歴史の先頭に立ち、神とともに歩むことができるのだ。その高揚感の前には、法国の機密のベールつすまひなど娼婦の薄衣うすぎぬにすら及ばない。

かつて実在した神の意思とその遺産を受け継ぎ、人ならぬ姿の神にさえ信仰を捧げてきたからこそ法国はこれまで人類の守護者たりえたのだ。新たな神が在るなら尽くさねばならない。ただ救いを待つ愚鈍な信仰では神の不興を買うやもしれぬ。

その時、ニグンの目の前に再び水晶の画面が形作られた。そこには、歪んだ大地にただ立ちつくす髪の毛の長い一人の男。先のものとは異なつてその四角い世界に動きは無く、映像もどこかぼやけたものだった。

「このひとは何者ですか？」

「……我々と同じ法国の特殊部隊、漆黒聖典の隊長と思われませう。この者が何か？」

それは、本来この場でガゼフを始末するはずだった、法国最強の聖典の隊長。本来は決して同格では無い存在だが、今のニグンにとつてはそうではなかった。彼らが別の任務につき、ニグンが代わりを務めたことで、これからその立場は逆転するのだ。

「先ほどまで一人だけ、ぼくの召喚したものとどうにか戦っていたんですが、たいして強

くないのに不自然に戦いが終わったというか、召喚したものが突然倒されてしまったのかもかもしれません」

ニグンは自らの奉ずる神の厳しい表情に焦りを隠せない。どいつもこいつも、何ということをしてくれるのだ。これ以上神の怒りを買うことがあれば法国の存立すら危ういというのに、愚か者どもが人類の屋台骨たる法国の命運を好き勝手に揺さぶっている。今まさに人類の未来はニグンの双肩にかかっている。

彼の率いる漆黒聖典は、破滅の竜王の復活の予言をうけて真なる神器「ケイ・セケ・コウク」の警護を行っていたはずだ。それが今回のガゼフ抹殺任務が陽光聖典に回ってきた理由でもある。その隊長が交戦したということは、当然ながら神器もそこにある。

——何が破滅の竜王だ。これでは人類の破滅をもたらす予言ではないか。

予言というものの性質は、ニグンも要職にある神官としてうつつすらとわかつてはいらぬ。何らかの手段で、巨大な災厄を招きかねない強者の出現がある程度は察知できているのかもしれないが、それを既存の伝承や知識にあてはめる等の解釈が行われているのは間違いない。

すなわち、解釈という名の人間側の独善によって、六大神のように突如世界に現れた善なる存在を敵に回してしまうことも起こりうるということだ。

ニグンは、法国のこの失態を補う方法を必死に考えながら問う。

「他に加勢していた者はおりましたでしょうか？」

「さあ……視界を共有していたものが倒されて、今の状況を見ることはできないので、最後までこのひとが戦っていたのかもわからないです」

「では、神器によるものでしょう。漆黒聖典は真なる神器を扱える術者を護衛しておりました」

「真なる神器？」

「ケイ・セケ・コウクという、白銀の一枚布で体を覆う珍しい形の衣に龍をあしらったもので、相手を意のままに操る力を持つものでございます」

「それならいたような……でも、ありえないです。あの中に、ぼくの召喚したものの支配を奪えるような力のある者がいたとは思えません」

神の苛立ちが疑念に変われば命が危ない。自らの存在こそが人類最後の牙城だと信ずるに至ったニグンには、ここで情報を出し惜しむような余裕は残っていない。

「ケイ・セケ・コウクは術者の力量の枠に留まらず、相対すればたとえ竜王や魔神でも、不遜ながら神であつても支配しうる力を持つとか」

マーレは首を傾げる。そもそも先に放った範囲攻撃はあれらを狙つてのものだ。あ

の人間にはそれでも不十分だろうから確実に片付けるため強化した召喚獣を放ったが、最初の攻撃を生き残れる者があの人間の周囲に他に居たとも思えない。ただ、あのくらの者が仕える国なら高位な蘇生魔法での即時の戦線復帰などもありうるし、目を離していた間の事を深く考えても仕方が無いだろう。

繋がりへの消失に関しては、倒された感覚に近いような気もしたが、その過程で手痛い打撃を受けたような感覚があったわけでもない。繋がりが消えたのか倒されて存在が消えたのかどちらとも判断できなかった。

それより、問題はケイ・セケ・コウクだ。召喚主の支配を奪うという行為の難しさは、召喚主の魔法抵抗を突破することとそう変わるものではない。つまり、その力を受ければマーレ自身が支配されてもおかしくないということになる。

「そんな危険なものを、人間なんかが持つていたんですか」

声に明らかに危険なものが含まれている。この時、ニグンの焦りはあまりに大きかった。

「ろろ六大神の遺産でありこれは神の意思によりスレイン法国が預かっているに過ぎないもので、今後は我が神マーレの御心みこころのみに従いその力を行使するように致します！」

もともと、神器の警護と行使の判断は最強の聖典に委ねられてきたもの。かつて座学で検討した私製の作戦案とともに警護役を申し出た時は全く相手にされなかったが、今となってはその役目も力もニグンのもとへ転がり込んでくるのは時間の問題でしかないのだ。神器による神への非礼は、神器の働きで詫げるしかない。

「……ぼくのために？」

「もほちろんでございませぬ。いずれはお探しの者も、神器の力で神マアーレの御前にお連れいたしましょう」

「と、とんでもない。見つけてさえもらえれば、後はぼくの方から出向きます」

「お力を振るわれるまあでもございませぬ。ケイ・セケ・コウクあらば、そのモオモンがいかなる存在でも我らにひれ伏しましょう」

ニグンは、神への非礼をそのまま神への法国の売り込みにすり替えることに成功し、安堵した。それと同時に、ケイ・セケ・コウクの使用者による着用姿を思い出し、慌てて着用者の姿を記憶の片隅へ押し込もうとする。

どうか白銀の衣からはみ出たおぞましいゴボウを排除することに成功すると、記憶の浄化のために目の前の神による着用姿を想像した。神器というだけあって、それはまさに神のためにあつらえたように神々しく見事なものとなる。想像の中で幼くも美しいその尊い姿を幾度も重ねていけば、法服の下で再び小さなニグンが頭をもたげてく

る。

「モ、モモンガさまが、ひれ伏す?」

「……さま?」

——神が使う呼称とは思えない……聞き間違いだろうか。

跪いたまま、マーレの幼い肢体を、起伏の少ない上体の曲線を、柔らかそうな太股を、下から舐めるように凝視していたニグン。違和感に気が付いた頃には、これまでに無い程の、背筋が寒くなるような冷たい視線で見下ろされていた。

ニグンは解釈を誤った。その時、想像の世界を補うため目の前の女神に不躰な視線を向けていた自覚があった。それに伴う感情には罪悪感すら伴った。それはニグンごとき許される事であろうはずがない。

すなわち、蔑みの視線を戴くのは当然であり、甘んじて受けるべきものだった。瞳の奥に闇をたたえた女神の視線の苛烈なまでの冷たさは、かえって小さなニグンを奮い立たせることとなった。それは信仰とは別の、新たな一歩だったのかもしれない。

目覚めたニグンは、すぐに永遠の眠りについた。マーレが振り上げた杖に気付く事も無く、ただ幼い女神の冷たい視線に魅入られ愉悦ゆえつの表情を浮かべたまま、振り下ろされ

た杖に後頭部から腰椎^{ようつゐ}までを抉り潰された。動かぬ肉塊となり果てもなお、その死に顔には彼がその手に掴みかけた栄光の日々にさえ遜色のない輝きを残したままで。

第三章 魔女の旅立ち

八 嗜虐の王子と血塗れの玩具

夕陽で赤く染まる草原では、その全てが戦意を失い、あるいは戦う能力を失っていないが、いまだ多くの男たちが対峙していた。

男たちが立つ大地が激しい揺れとともに広い範囲で複雑な亀裂を生じたのは、ニグン・グリッド・ルーインがその栄光の未来を手放してすぐのことだった。

肉塊と化した隊長の姿を見て、自分たちに断罪の裁定を下した神の姿を見て、陽光聖典は恐慌状態に陥った。ある者は天使を突撃させ、ある者は天使を盾に座り込んで泣き叫び、ある者は天使の存在も忘れ脱兎の如く逃げ出した。マーレが大地に杖を突き立てると、それらの全てが大きく揺さぶられて口を開いた大地に丸呑みにされ、草原にはすぐに元の静寂が帰ってきた。

間違いなく、マーレの魔法の力だった。マーレの周辺だけでなく、ガゼフたちのいる場所にも揺れすら起こらなかった事から、それが自然ならざるものであることは明らかだ。そして、その力は水晶の画面の中で起こったものと同じもの。

それは、法国で起こった災厄が間違いなく現実のものであり、マーレがその気になれ

ば僅かな時間で街どころか国まで滅ぼしかねない存在であるということを、ガゼフたちに深く理解させるものだった。リ・エステーゼ王国では魔法詠唱者は一段下に見られており、王宮でも法国の中枢である神殿を超えるほどの魔法への備えがあるとも思えない。

召喚者を失った数十の天使たちは、その全てが次の詠唱一つで爆散した。あつさりとも光へ還ったのは、全てガゼフの精鋭たちに勝る存在だ。

マーレは一息つくと、潰れた肉塊からするりと黒衣を引き抜く。上へ放り投げると、黒衣は何かに吸い込まれるように虚空へ消えた。どこへやったのかはわからないが、魔法というのは何でもありなのだろう。神とまで呼ばれた存在が冒険者のように敵の装備品を回収する姿は、いくらかガゼフたちを安心させた。

ガゼフは部下の一人に肩を借り、マーレの方へ近づいていく。

王の剣としての仕事はもはや不可能だ。そのことに、あちこちで悲鳴をあげている体の状態は関係ない。たとえ傷一つ無い万全な状態で、王国の至宝全てを装備していてもそれは同じことだろう。それでも王の盾として、できることをしなければならぬ。

首筋を流れ落ちる冷や汗をそのままにして、エンリは衣装箱とは名ばかりの粗末な木箱の中身を二度見した。

——服が無い。

ゆつくりと記憶を辿る。

既に、自分の服が無いことはわかっている。森へ出て葉草の臭いが染みこんだ服は昨日のうちに洗濯し、干している所へ村の襲撃者の血肉を浴びせられて血塗れちまみ。今着ているものは、動死体ゾンビの蠢く農具小屋の中で転んでまたも血塗れ。先月までもう一着あったのだが、きつかったので軽く直してネムにあげてしまったし、困ったことに今日ネムが着ているのがそれだ。もちろん、ネムの他の服はもつと小さい。

期待していたのは、両親の服だ。しかし、いずれも葬儀の時、血糊も損傷も無い綺麗な服で送り出そうとする他の犠牲者の家族にあわせて一緒に着替えを頼み、使える服も含めて既に墓の下にある。あまりものを考える余裕も無かったし、村の片隅で動死体が何かを喰らっているような落ち着かない環境で葬儀を行うのだから、せめて服装くらいは、という思いは村民共通のものだった。

このような開拓村では、墓というものはそれほど厳粛な不可侵性をもたない。葬儀を

行ったのも神官ではなく村長で、全てが手作りの儀式だ。間違つて何かを埋めたというなら、掘り返して埋め戻す程度、普通なら見咎められるようなことではない。

普通なら。

エンリは触れたくない記憶の欠片を——村長の引きつった顔を、目を合わせたがらない村人たちを、屈強な戦士たちの敵意に満ちた顔を思い起こし、深く溜息をついた。今の自分がそれをするのは、無理だ。

確かに、致命的な誤解は解けているのかもしれない。罪人となつて処刑台に送られる未来は無いだろう。マーレにそうさせる意思が本当にあつたなら、王国戦士長の前で死を弄ぶ魔女として全ての罪を背負わされたに違いないが、実際はそうではなかった。マーレにエンリを陥れる意図は無く、あの場には嗜虐を好む魔性の少女など居なかったのだ。

しばらく血の臭いをする小屋の中で虚脱して座り込んでいたエンリにとって、このことを心の中で割り切るまでの道のりは決して短いものではなかった。エンリの慎ましい人生経験において少しでも助けになるものがなかったら、いつまでも座り込んでいたかもしれない。

エンリは人生において身に覚えの無い濡れ衣を着せられた経験が全く無かったわけではない。といつても、武器を持った男達に迫られたり、処刑台を身近に感じたりするような物騒なものではなかった。

あれは森でワイルドベリーが沢山とれた年のことだ。両親とエンリの目を盗んで枕に大好物のジャムをべつとりと塗りつけていた幼いネムが、惨劇に気付いて悲鳴をあげた母親に対して「お姉ちゃん塗りが塗りなさいって言うんだもん！」とやり返したのだ。突然の言いがかりに驚くばかりで、うまく言い返すこともできない。確信に満ちたネムと戸惑うエンリの勝負は明らかで、わけがわからないままエンリの方がこつびどく叱られたのだった。

今回ほどではないが、あの時のネムも得体の知れない恐ろしいものに見えたのは言うまでもない。

枕ジャム事件の伏線は、その日の朝、ジャムをそのまま食べたがるネムをエンリが注意した事だった。ジャムは直接食べては駄目で、食べたい時は何かに塗りなさいということと言ったのだが、その時はネムにわからせるためというより、エンリが母親の真似をした年頃で、自分が昔言われたようなことを小さな妹に言ってみたかたにすぎない。もちろん、食べ物に塗れとまで言った覚えはなかった。

しばらくネムと喧嘩が続いたため真相を知るまで時間がかかり、それまで食卓にべ

リーのジャムが出るたびに母親の視線が痛かったのは忘れられない思い出だ。

今回は、あの時に比べれば早く対応できた。あの時よりは大人になったから、突然の過酷な試練にわけがわからなくなりながらも、一応は誤解を解く方向で頑張った自覚もある。

しかし、大人になったせいなのか、襲ってきた試練の質は果てしなく凶悪だ。対応に失敗した時の運命も、叱られてせいぜい尻を叩かれるところから一気に火炙りや縛り首までその成長ぶりは著しい。

——大人ってつらい。大人になんてなりたくなかった。子供でありたい。

大人の世界は厳しい。最初からマールレに注意を向けていた王国戦士長からの疑いは晴れていそうだが、その部下たちから見ればエンリは動く屍の主かその共犯者か、いずれにせよ、ろくでもない目で見られているだろう。血塗れの服装もその時のままで、何よりこれがよくない。小屋まで来ていない他の村人においても、屍を動かして村を「掃除」させたマールレを村に連れてきたのはエンリだと知れ渡っている。

この状況で、血塗れの服装のままの自分が墓を掘り返していたら、村人たちにどう思われるだろうか。戦士たちが戻ってきたらどうなってしまうだろうか。

エンリは着替えを諦め、その場で全身の力を抜いて堅い木の床に転がった。

——全部終わったら洗濯して、念のため服を一着作ろう。

床に転がったまま材料を探すように部屋を見回すと、出口の近くに父の外套が掛けられていた。早朝でも気候が暖かかったせいか、見回りに出る父が着ないで置いていったのだろう。季節外れだが、あれが最後の頼みの綱だ。外套は本来もう一着あるが、エンリもよく借りていた母のものは今はマールに貸している。返してもらったらそちらを使つて、父親のものは新しい服の材料にしてもいいかもしれない。

そろそろマールが戻ってくるかもしれない。ともに戦いに赴く王国戦士長の深刻な表情も見ていたエンリだが、何故かあのマールが戦いに敗れるとか大きな怪我をすとか、そういうことは全く想像できなかつた。

おそらく、二度も血塗れになつた自分と違つて、マールは涼しい顔をして綺麗な格好で戻ってくるのだろう。納得がいけない部分もあるが、戻ってきてくれないと困る。渡ししそびれた金貨袋も、安全な村の中とはいえ、あまり長いこと持ち歩きたくはない。

エンリは窓から差す西日が薄くなっていることを確認し、あと少し薄暗くなつてから死の匂いのする小屋の辺りへ戻ることにした。少しだけ、何も考えずに転がっていた。

ガゼフたちは勝利とは無縁のまま、殺戮の場に満身創痍で取り残されていた。その殺戮者の姿は既に転移の魔法によつて消えたところだ。馬を失つたり乗馬に耐えない状態の者も多い彼らは、いったん徒歩でカルネ村まで戻ることになる。

「戦士長！ 我々を切り捨てようとした者に、なぜ報酬を約束などしたのですか」

「青いことを言うな。生きて王都で報告するのも任務のうちだろう」

この反発も諦めも、どちらの声も先程までの人の世界を逸脱した光景を目にした部下たちの正直な気持ちだった。部下たちの中にざわめきが拡がっていく。

「あの者の前で、今さら報酬などで我々の生死が変わるものか」

ガゼフは自嘲の笑みを隠さず続ける。

「……映像の中の神官より遥かに傲慢な、宮廷にいる貴族の息の掛かった役人があの者と対面する状況を想像してみる。王都がどうなると思う？ 貴族などどうでもいいが、国王陛下と王国の民は守らねばならない」

いくら底が知れない強大な力の持ち主でも、理性的な相手ならば後から非礼を詫びることもできる。しかし、スレイン法国の神殿と思われる場所は、ただ一度の接触で、そこに居た多くの人間ごと跡形もなく破壊されていた。瓦礫となつた宮廷で後からでき

ることなど、兵士として殺されに行くことくらいしかない。

ガゼフが報酬の約束をした事の——それを理由にして自身の家に招いた事の意味を理解すると、部下たちのざわめきは収まっていった。

「それに、理由はどうあれ村を救った者と戦うのは今回の任務ではないし、あの者の望みにもかなうのだからよしとするさ」

望みというのは、マールレの存在を国には秘密にしてほしいという事。人間の国というものに對するマールレの警戒心の表れだった。

突然土足で宮廷の奥に現れ全てを破壊してもおかしくないような扱いに困る存在の意外な願いは、ガゼフにとっては願ってもないものだった。おかげで報酬——ガゼフを介して渡せる程度の金貨と、文官に依頼して調査を行う程度の事だが——を渡すためだとして、王都に来る際の訪問先をまずガゼフの自宅とすることも問題なく受け入れられた。当面、王国の危機は遠のいたと言えるかもしれない。

——王国戦士長としての働きを、超えているかもしれないな。

王国戦士長とは王の剣であり盾であるに過ぎず、国としての意思決定に関わるものではない。意思決定に関わる大貴族の中に国に害をなすものがあると確信していても、それへの対応を自ら判断して行う事は当然ながら不可能だ。今回のマールレの行動と力、そのいづれか片方でも常識の範囲内に収まるものであったなら、ガゼフはただ宮廷へ戻つ

て起こった事を報告し、然るべき者たちに意思決定や対応を任せただろう。

しかし、王の身に明らかな危険が迫っていれば話は違う。たとえ相手が大貴族や王子であつても、剣を抜いて王に迫るならガゼフは王の盾となつて応戦しつつ王の命令を待つか、少しでも王の身に危険があれば躊躇せず斬り捨てるだろう。今回の事態はそれにはなれなかつた。かといって、自身の功にしてしまうなど恥ずべき事も考えられない。また、マールレについて何の対処もせずに去ることに大きな不安があつた。その辺りでは思考の袋小路に陥っていたのだが――。

「あの力が王国に向けられたらどうなるんですかね……」

「そうならない事を神にでも祈るしかない」

「でも、神に縋つた結果があれだぞ」

不満が収まれば、次は不安が襲つてくる。あの陽光聖典の、また遠く離れた法国神都の過酷な運命は、ガゼフにとつても部下たちにとつても他人事で済ませられるものではない。

「そうだな、神なんて危なっかしいものよりは……魔女にでも縋つてみるか」

ガゼフにしては珍しく軽口を叩きたい気分だつた。魔女というのは小屋から出た時に部下たちが口にしていた言葉だが、マールレでなく小屋の中の血塗れの娘のことを指し

ていた。そして口に出してみると、それはなかなか悪くない考えだと気付いた。

「あの血塗れの魔女ですか」

「血塗れの魔女か……あの者を森から連れてきたというし、信頼されているようだから何が起ころかわからんぞ」

ガゼフは、その後の部下の沈黙に軽口を流されたものと思つたが、ここで振り返つていたら違和感に気付いたかもしれない。傷だらけの部下たちは一様に、新たな戦いに赴くような引き締まった表情に変わっていた。

エンリが小屋の風上にしゃがんで赤く染まった夕陽を眺めていると、視野の端にそれは突然現れた。見覚えのある幼い少女が、何か肌色のものを肩に担いでいた。

マーレが無事なのは当たり前にも思えたが、大金を預かったままで、またどこかであらぬ嫌疑をかけられたらたまらない。そう思うと軽く安堵の溜息が出た。突然現れたのは非常識だが、村を出て行くときも飛んだ上に消えたのだから、マーレなら普通のこ

とだ。

その場でマールレの肩から降ろされたのは、その小さな肢体さえ覆いきれない薄絹一つを纏っただけの、裸同然の格好をした幼い少女だった。肌色に見えたのは、担がれた状態ではその下半身を覆うものが何もなかったからで、ネムとあまり変わらない年頃の少女にさせていい格好とは思えない。

「エ、エンリ……ごめんさい、借りていた服……」

よく見ると、マールレの高級そうな服のところどころに焼け焦げ、引き裂かれたような布の切れ端がくっついている。

その色には覚えがあった。まるで彼我の運命を象徴するかのように、エンリが貸していたフード付きの外套だけが無残な姿となり、その下のマールレの服には痛み一つ無かった。服の質が違うだけでこうも違うのか、あるいは魔法の力なのかもしれない。

これで周囲の視線からエンリの心を守るのは父親の外套一つになってしまったが、村を襲った敵の新手と戦つてのことなら、諦めるしかない。それよりも、服についてはもつと大きな問題がその横にある。

「村のために戦つてくれたんだから、マールレが大丈夫ならいいよ。……それより、その子は……」

「もう危険はありません。これはついでに持ってきただけです」

ついでと言われても困る。マーレと話すより、直接話した方がいいだろう。人の形さえしていれば、たいいていの相手はこのマーレより話が通じるはずだ。

「あなたは？ こんな格好で、どうしたの？」

……返事は無い。それどころか、話しかけられた事への反応自体が無かった。呼吸はしているし、自分自身の足で立ってはいいるのだが。

「それは魔法で自我を奪ってあるただの玩具だから、命令は聞くけど話しかけても無駄です」

今やマーレにとって道具とすら呼べないのは、わざわざ法国から連れてきた巫女姫が、儀式をしなければ《次元の目》プレイナーアイどころか《物体発見》ロケート・オブジェクトすら使えない上、残念ながら単独で使用できる第五位階以下の探索系魔法を殆どを習得していなかったからだ。もちろん、《鷹の目》ホーク・アイなどは冒険や野外探索と縁遠い巫女姫が習得しないのは不自然な事ではないが、そんなことはマーレの知った事ではない。

特定の格好をさせておかないと単独でも魔法が使えないというのは別に問題ではない。そうあれと作られたのならどんなものだってそうあり続けるべきなのだから。

問題なのは、探索系魔法が目的で持ってきたものなのに、それをするにはたかが第八

位階程度のためにわざわざ頭数を揃えて大仰な儀式を行うという兎戯じぎにも等しい方法でしか使えないことだった。この冗談のように不便な道具を玩具と呼ぶのは、少なくともナザリック地下大墳墓の守護者としては自然な感覚だった。

——あの人間たち、全員まとめてつれてくればよかった。

他方、そのような事情を知らないエンリが認識できるのは、ただ目の前の玩具と呼ばれた幼い少女の姿だけだ。

少女は目のあたりに布を巻かれて視界を奪われていた。身体に纏うのは服と呼ぶのもためらわれるような前の開いた頼りない薄絹うすぎぬ一つ。その肢体の幼い曲線は無防備に晒され、草原を行き交う風の気分次第で全てが見えてしまいそうな状態だった。さらに、魔法で自我を奪われ、命令を聞くしかできないという。

エンリは再三、モモンガなる鬼畜の支配するナザリック地下大墳墓という幼い少女たちの地獄を想像してきた。しかし、実物を見たわけでもなく、話に聞く貴族の暴虐や蹂躪の世界に触れたこともない田舎の村娘の想像にすぎないそれは、恐怖が生み出す悪夢の世界のように漠然とした、どこか他人事のようなものだった。

しかし、目の前の幼い少女の姿によって悪夢は現実となった。手を伸ばせば触れられ

る、息遣いも感じられる。年の頃はネムと変わらないくらいの幼い少女が、視界を、そして人格を奪われ、服と呼べないような薄絹一枚の姿で肌を晒しているのだ。それがどういふ種類の玩具であるかは、異性経験の無いエンリでも容易に理解できた。ただ心がその理解を呑み込むことを拒んでいた。

エンリの衝撃は大きい、人の情として自然と体が動いた。自身の外套を幼い少女に羽織らせ、少しでも否定してほしい気持ちを含めて問う。

「あなたの主人様……モモンガ様のために連れてきたの？」
「当然です。こんな玩具だと、数を揃えないと意味ないですけど」

当然だった。やはり、仄暗い墳墓では嗜虐の宴が繰り広げられていた。

幼い少女を貪る爛れた嗜好を持つ墳墓の主モモンガに喜んで仕えるマールは、ただ奴隷のように服従するだけでなく、自らの判断で少女を攫さらって玩具に変える嗜虐の魔女だった。これまでエンリに害を及ぼさなかったのは、ただ主モモンガの性の捌け口として十六歳のエンリでは歳がいきすぎて対象外だったためではないのだろうか。

つまらなそうに、そして当たり前前のごとくのように、玩具となる少女を増やしていくというマール。恐ろしい魔法の力をふるうその魔の手から哀れな少女を救い出すことは、ただの村娘であるエンリには到底不可能なことだ。

それでも、目の前の幼い少女の姿を放っておくことはできない。せめてモモンガの生

贅となるその日までは人間らしくあつてほしい。少女の幼い曲線を人目に触れさせないよう、エンリは羽織らせた外套の前をあわせようと手をかけた。

「前はとめないでください。玩具でもすぐ使えなければ意味がないので」

エンリの背中に、ぞくりと悪寒が走る。

——使う。

モモンガなる鬼畜はこの場には居ない。いかに爛ただれた嗜好を持つ鬼畜とはいえ、居ないものが少女を食うことはないはずだ。

そうなると、玩具を使う側、幼い少女を蹂躪する側の者とは誰か。

エンリは体を強張らせたまま、ぎこちない動きでゆつくりとマールの方を見る。一瞬目が合つて、びくりと全身を震わせた。そのまますぐにマールの視線は下がっていき、エンリの身体へと落とされる。

哀れむようでもあり、何か残念なものを見るようでもあるマールの視線には特別な感情が籠こもっているように見えるが、エンリにはそれは幼い少女のものというより、少年の、男のものであるかのようにも感じられた。闇妖精の浅黒い肌も、精悍さを感じさせるものに見えてくる。それは、マールという存在が爛れた嗜好を持つ主モモンガになぶられる側の少女であるにとどまらず、主とともに少女を眺る側の何かでもあると知ってしまったことによる変化だろうか。身体を撫でる視線を、エンリ自身のそういう

価値を値踏みするものであるようにも感じてしまう。

そして、エンリの視線は再び幼い少女の薄絹に貼り付く。それは、既に玩具となった少女に目を向ける事で、自らの身に感じる漠然とした危機感から目をそらそうとする逃避だったのかもしれない。

自我を奪われたという幼い少女が露わな肌を隠そうともせずただ佇む姿は痛々しくも感じるが、纏う薄絹の素材は上質なもので、まるで神への生贄であるかのようにも見える。目は覆われているが、その整った顔立ちからは上品さが、綺麗な手足からは育ちの良さが感じられた。

それから、自分の血塗れの服へと視線を落とすと、自然と溜息が出た。

「エンリ、服の汚れが気になるようなら、この服を着てもいいですよ」

エンリは決して羨んだわけではないが、見透かされたような言葉に全身を硬直させる。こんな服は、無理だ。勧めてくることさえ信じられない。そもそも、この服を着た幼い少女を玩具として使おうというのは、他でもないマールその人なのだ。それをエンリに着るよう促すということは、つまり――。

もうマールを正視できない。エンリの視線はこの言葉の爆弾を投げられた時からまた、少女の薄絹に貼り付いたままだ。

エンリは目の前の薄絹に着替えた自分の姿を想像し、顔が熱くなっていくのを感じ

た。これは緊張だ。もとは恐ろしい捕食者から守ってあげたいとさえ思った幼いマーレが、同じ捕食者の側の存在としての片鱗を見せたがための、耐え難い緊張のせいに違いない……蛇に睨まれた蛙みたいなものか。胸の中で変な鼓動を感じる。適切な言葉が出てこない。

「す、寸法が合わないから……それにこんな……」

「魔法のかかった服だから、着ればちようど良くなります」

エンリにさせようとしている事と不釣合いなマーレの幼い穏やかな声。この落差がよくないのだろうか。エンリは今まで味わったことのない、顔から火が出るような切羽詰った不思議な緊張感に心を締め上げられる。その胸の鼓動も目立ってきた。

もちろん、寸法がちようど良くなったところで状況が改善するとも思えない。幼い少女ならまだ神に捧げられたような無垢な感じもしないでもないが、十六歳のエンリでは見たこともない大都市の妖しげな夜の店にしか居場所は無さそうだ。

「こっ、この服じゃ寒いし……」

「これからの季節、暑いくらいですよ。エンリにはちよつと落ち着きすぎているかもしれません」

その声がエンリの不思議な緊張を高め、その鼓動を早める。

「落ち着つ……マーレにとってはこうというのが普通なの？」

落ち着いているとか——大人っぽいというならともかく——絶対に違う。

それに、裸同然の服装でも暑い季節なんてこのあたりには無い。確かにさつきから変な汗が止まらなくなっている。しかし、これを暑いというのは間違っている。

「モモンガ様にお仕えするならこれくらい普通ですよ」

「……っ！」

背筋に氷柱を突つ込まれたように、声にならない悲鳴が上がり背筋が伸びる。これまで熱せられ続けた所へ突然氷水を浴びせられたような驚きだった。エンリは気付かぬ間に、爛れた嗜好を持つ墳墓の主モモンガへの生贄の列に加わっていたらしい。

それは、モモンガの獣欲をみたしうる範囲は、そう狭いものではなかったということだ。今まで言い寄ってきた異性が居ないわけでも無く、エンリは自分がそれなりに大人になっていたと思っていたが、村の婦人たちほどには成長しきっていない自覚はあった。つまり、エンリはまだまだ子供であり、子供だからこそ、モモンガの性の捌け口として蹂躪されなければならないということなのだろう。

——子供ってつらい。子供でなんていたくはなかった。大人になりたい。

エンリはこれまで幾度も想像してきた爛れた世界の虚像に自らを重ね、震え上がる。あの時、マーレを助けたいと思ったにせよ、他人事だからこそ際限なく拡がっていった想像の世界だ。そこに自らが放り込まれることを知って、平常心を保っていられるはず

がない。歯がカチカチと不規則な音を立てる。

——しつかりしろエンリ・エモット、今するべき事は何だ！

エンリは自らを叱咤し、どうにか壊れかけの思考力を取り戻す。自分一人であれば自暴自棄となつて従つたかもしれないが、残された妹の存在がエンリの心を支えていた。

たとえ我が身が贖となるにしても、カルネ村でネムが後ろ指をさされるような姿を見せるわけにはいかない。

「お、お仕えする時はともかく……私なんかに勿体無いし、普段はこれはないって思わない？」

「ぼくも好きですよ。エンリに似合うと思います」

そうだ、モモンガとその墳墓はまだ見つかつていない。これはマールレが玩具として「使う」ための少女に着せていた服だ。今それを勧めるというのは、モモンガとの嗜虐の宴の中で培つたものにせよ、今のマールレ自身の嗜好であり性癖によるものなのだろう。それが似合うということとは――。

エンリの頬が熱さを取り戻していく……不思議な緊張が戻ってきたのだろう。胸の鼓動も激しい。

仄暗い墳墓の主にして嗜虐の怪物モモンガの魔の手に絡め取られる前にエンリを見初めたのは、幼くも美しい嗜虐の王子様——いや、嗜虐と倒錯のお姫様とするべきとこ

ろか。いずれにせよ、濃厚な死の臭いを漂わせる墳墓の主モモンガに蹂躪され「壊れて」「片付け」の対象となるよりは、同じ嗜虐嗜好を持つとはいってもまだ幼いマーレが「使う」玩具の一つであった方が、心の面でも身体の面でも遥かにマシだろう。

エンリはその身を蝕む不思議な緊張に耐え切れず、そんな言い訳めいた思考に身を委ねた。

「……………ん。後で、必要になった時に着るから、ね」

最後まで目を合わせず、モジモジしながら小声で答える。その顔は耳まで真っ赤になっていた。

エンリはずっと目を逸らしていた。まだ人間というものがよくわからないマーレでも、全く気持ちが伝わらないわけではない。

——格好いいと思ったんだけど。

マーレの美的感覚は、自らの創造主だけでなく、長い間ギルドを守ってくれた最後の至高モモンガの影響を強く受けている。勿論、モモンガが自らの手で作り上げた守護者を見てその嗜好を学んだわけではないが、ナザリック地下大墳墓で時を過ごしていれば何も伝わってこないわけではない。

幾度と無く至高の御方々の口端にのぼった、ちゆうにといい言葉の意味はよくわからない。しかし、その言葉が使われた様々な状況から察して、それほどわかりにくいものではないのだろう。全十階層から成るアインズ・ウール・ゴウンの本拠地の様々な風景に違和感無く合うものこそ、格好いいものなのだ。何より、あの優しくて格好いいモモング様の嗜好を言い表すものでもある。

マールは、手に持っていたニグンの服を虚空のアイテムボックスへ一旦戻した。ナザリックの基準では取るに足らないものだが、魔法的な効果で全身鎧以上の防御力があり、人間にしてはマシンなものには違いない。きちんときれいにしておいたし、少なくとも血塗れの服に比べれば……。

エンリが血塗れの服で過ごしているのはマールにも原因がある。勿論マールはそれを申し訳なく思い、服をきれいにすることを申し出ていたのだが、その時も強い調子で断られていた。今も服を気にするような雰囲気だったので手に入った服を取り出したのだが、エンリは見向きもしなかった。

——血とか、好きなのかな。

マールは大墳墓の一层から三層までを守る最強の階層守護者を思い出す。彼女のことを考えれば、世の中にはいろいろな性癖があるし、エンリが血塗れの服を好むくらい別に驚くような事でもなかった。ナザリックの仲間にもいろいろいるように、人間もい

ろいろなのだろう。

少なくとも、あのエンリには必要になったら装備を整えるくらいに分別はある。それだけで充分だった。恥ずかしがっていたのは、血を浴びたままにいたがるような性癖が人間社会では馴染まないからだろうか。

エンリの性癖に近い嗜好を持つ守護者は、それを恥じることなど無かった。しかし、マールレの創造主や親しいお茶会仲間の御方々は、その守護者の性格などの細部について——難しい言葉が多く内容はよくわからなかったが——えろげーみたいだということ、若干恥ずかしいものとして話をしていたことを記憶している。えろげーという言葉の意味はわからないが、その守護者自身の創造主もえろげーなるものにおける血の重要性などを熱く語っていたことがあるので、その嗜好・性癖にも大きく関わるものなのだろう。エンリは女性でもあるし、性癖はそれであつても感覚はマールレの創造主やお茶会仲間の御方々に近く、自分の性癖を恥ずかしく他言しにくいものと思つているのかもしれない。

マールレは少し反省した。できるだけ血を浴びたまままで過ごしたいエンリは、そのことを恥ずかしくて言い出せなかったのだ。今回のことは、マールレの創造主やお茶会仲間の御方々の言葉を借りれば、でりかしーがないというのだろう。えろげーといえば、マールレの創造主も関わっていたという崇高なものだ。たかが人間の性癖といえども、崇高な

ものに関わるのならある程度は大切にすべきだろう。マールレは今後エンリの性癖を尊重し、そつと見守ることを心に決めた。

九 王国戦士長を殴るといふ行為に怯えは無い

その夜、村長の家で王国戦士長と何やら話をしたらしいマーレが、一人でエンリの家に戻ってきた。村長夫人の作った食事を持たされていたのは、マーレへのお礼の一部なのだろう。ネムを残してきたのは、エンリが予め村長夫人に頼んでおいたからだ。あんなことがあった後だからネムは知っている大人がいる家で泊まらせたいという話を快諾した上、ネムの世話だけでなくエンリとマーレの食事まで用意してくれた村長夫人には頭が上まらない。既に気力も尽きかけ、エンリは食事を抜くつもりで空腹に耐えていたところだった。

エンリの家でマーレを迎えたのはエンリだけではない。家の中には、マーレの最初の玩具である幼い少女が所在無く座り込んでいた。ネムも滞在している村長の家に、こんなものを連れて行かせるわけにはいかなかったのだ。同時にそれはネムを家に戻せない理由でもあった。

エンリは知っていた。おそらく今夜、マーレは手に入れたばかりの玩具を弄び、嗜虐の世界を見せ付けるだろう。

エンリは覚悟していた。もしかしたら今夜、エンリはずっと守ってきたものを散らさ

れ、新たな世界へ連れ去られるかもしれない。

それでも食事は美味しかった。昨夜に比べて外見上は何も変わらないはずのマーレだが、エンリにとってその存在は果てしなく大きく、人が減った食卓でも喪失感を味わうどころではなかった。エンリはちらちらとマーレの様子を窺い、思い詰め、顔を紅潮させ、食事を掻き込む。ひたすらその繰り返しだった。想像の中の爛れた世界に心をもつていかれないよう、なるべく食事に集中し、その味を堪能した。

もう一人の少女は自ら食事をとらなかった。手に持って食べられるものを渡されて、食べるように命じられれば食べるだけ。飲み物も同じだった。口の端からこぼれたものをマーレが拭いてやっているのを見た時は、エンリは理由のわからない苛立ちを覚えた。わからないことに戸惑い、やがてどうにか答えをひねり出した。同じ玩具の身でありながら、何も感じず何も考えずにただそこに在るだけの少女の、その気楽さに嫉妬したのだということにした。何かと心せわしい状態だったから、それがテーブルを拭くための雑巾だということを言いそびれた。わざわざ言わないでおいたのかもしれない。

食事の片付けを済ませた頃、マーレが布団に入るといので、とりあえずエンリは身体を拭くことにした。

不思議と、すぐに呼ばれなかったことに安堵などは感じなかった。マーレの最初の玩具は、マーレ自身には到底及ばないが、エンリの目から見ても十分に美しい。痛みひと

つない艶やかな金髪も、品の良い顔立ちも、透き通るような肌の白さも、外仕事などしたことがないような繊細な手足も、全てがエンリと違う世界の存在だと感じさせる。開拓村で日々農作業に従事してきたエンリの持たないものばかりを持っている。二番目のエンリが二番目でいるのは自然な事だった。再び感じるよくわからない苛立ちは、やはりあの少女の気楽さに対するものだろう。こんな時、緊張も不安も感じないというのは本当にいい身分だ。きつと、それだけだ。

今日はろくに炊事を行わなかったため、水は沢山残っている。普段の倍の時間をかけて、普段おざなりになるような部分までしっかりと拭いていく。ひやりとした感触に慣れない部分も念入りに仕上げると、これまで感じたことのないような新しい感覚に気付くこともあった。そのことには、不思議と恥じらいは感じない。そもそも、自分の身体をここまでしっかりと見たのは初めてのことだ。日焼けの無い部分が思ったより綺麗で、肌もなめらかだったのが嬉しかった。これからは自分の身体ともっと丁寧に付き合っていこうとさえ思った。

普段よりもずっと多く、残った水を全て使ってしまったことに他意は無いつもりだ。完璧に身体を清め、覚悟を決めて布団に向かうと、既にマールが可愛い寝息をたてていた。少し離れて、外套を羽織ったまま座って丸くなっている少女は目を閉じ、眠っているのかよくわからない。

顔を紅潮させた妙齡の少女は、しばらくその場に立ちすくんでいた。月明かりに照らされた年相応の起伏のでてきた肢体を、いくらか冷えた初夏の夜の隙間風が優しく這いのぼつていく。

「くしゅん」

エンリは、血塗れの服を漬け置きする水が一滴も残っていないことに気がついた。

翌朝早く、エンリは一人で村長の家に来ていた。マーレはまだ布団の中だった。

エンリに話があるというのが村長ではなく王国戦士長だと知ったのは、テーブルについてからのことだった。

王国戦士長の要職にあるガゼフという男は、その朴訥そうな武人らしい雰囲気に関して、卑劣な男だった。彼がマーレとともに戦いに出た時に村長から聞いたところによると、戦士長というのは国王の前の御前試合で実力を示した王国一番の戦士だということだが、それなら騎士と呼ばれる高い身分についていないのはどこかおかしい。どう考え

でもその品性に問題があり、騎士らしい行いができない男だからに違いない。

少なくとも、エンリはそう信じている。

あの時、ガゼフの態度に傲慢さがあつたわけではない。それは王国戦士長という立場にあるガゼフから一介の村娘に向けられたものとは到底思えないほど物腰の低い丁寧なものであつて——その部下たちから時折漏れる魔女という言葉には多大な問題を感じたが——、表面上は過分なほどに礼儀を尽くした交渉だつた。

問題はその内容と、取り巻きたちだ。とにかく、これが酷い。まず取り巻き連中は血塗れとか魔女とか話の要所要所でいちいち囁かないで欲しい。

マーレが主人を探すため旅立つのはわかっている。危機が去つた今、村の誰もが喜んで送り出さだろう。いくらお礼をしても足りない恩人ではあるし、足りなければ路銀を持たせたつていい。色々あつたが、その出立こそカルネ村における真の平和の訪れであり、旅の無事を皆が祈るだろう。もちろんエンリも、村でマーレの旅の無事を祈る側でなければならぬ。

あのあとマーレが倒した敵の部隊が強かつたとか、そんなことは知つたことじやない。元々マーレが居なければカルネ村は地上から消え失せていたのだから、その意味では最初の帝国の騎士——法国だつたか——との違いなんてどうでもいいことだ。

その後隣りの国で起こったという事も知ったことじゃない。確かに現実味の無い話で少し驚きもしたけれど、マールレが消えたり突然現れたり、走ってる騎士が破裂したのも死体が「片付け」をしたのも現実味が無いのは同じだから問題無い。そこはもう感覚が麻痺しているのかもしれない。むしろマールレが罪の無い女の子を攫さらってきたのではないとわかり、安心して口元が緩んだくらいだ。村を襲った連中の関係者ならどうなっただって構わない。村を守れず、相手にやり返すこともできず役に立たなかった王国戦士長よりずっといい。役立たずの取り巻きは、いたいけな村娘の無垢な笑顔を見て後ずさったり魔女だ何だと囁く。本当に気分が悪い人たちだ。

マールレが自分の名前を出すことを望んでいない？ だったら名前を出さなければいい。偽りの功績がどうか、知った事じゃない。強い敵を倒したことにするのが嫌だったら、全員ふらっと出てきた森の賢王にでも頭からボリボリと食べられましたで充分だ。どうしてカルネ村の協力者とかそういう話になるんだろう。「そこで血塗れの魔女ですか」とか取り巻きたちが勝手に納得するのもありえない。好きで血塗れの服を着ているわけではないし、魔女なんてどこにいるのか見当もつかない。

それでマールレを野放しにするわけにいかないと言われても、そういうのも王国の兵士の仕事じゃないだろうか。村を守れなかったのだから、せめてそこで必死に働けばいい。戦いになればガゼフ自身でも相手にならないとか知ったことではない。カルネ村

だって頑張ったんだから、王国だって頑張ればいいんだ。昨日の戦いでマールレが居なかったら死んでいたというなら、一度死んだつもりで頑張ろうとか思えないんだろうか。これだけ多くの戦士を率いているくせに、本当に情けない男。

そしてマールレと上手く話ができる人間なんてどこにいるんだろう。私の知る範囲ではそんな人間はいない。取り巻きたちも勝手なもので、マールレを森から呼び寄せた魔女とは一体どこの誰のことを言っているのか。

王都の自分の家に来てくれたらさらに礼をするというなら、今すぐ連れて帰ったらどうだろう。

何より最後が酷い。強力な敵の部隊を撃退した民間の協力者は戦争の際に真っ先に戦力として計算されてしまふとか、どの口が言うのだろう。深く頭を下げれば何をしてもいいと思っているのだろうか。その後の、旅に出ていたり冒険者になつていれば徴兵されないと云った時の、いくらか申し訳無さそうではあるが苦笑の混じったあの横つ面といったら……あそこに拳を、全身全霊を込めての一撃を叩き込んでおけばよかった。王国戦士長を殴るという行為に怯えは無い。実行できなかつたのは、ただただあまりに酷い話の展開に頭がついていかなかつたせいではなかつた。

「この件についてマールレ殿とは話はない」

去り際、付け加えるようにそう言われた時、怒りは頂点に達していた。既に拳に届く

範囲にあの忌々しい強面こわもての顔が無かったのが、本当に悔しい。

その後で、元冒険者だという部下の一人から説明を受けた。全身に満ちていた怒りの行き場を失ったエンリの態度は最悪だ。低い声で気の無い返事をしながら目の前の戦士を観察していると、丁寧さの中に怯えが混じっているのがわかった。何に怯えているのかわからないが、そんなことでよく冒険者が——いや、務まらなかつたからあんな卑劣な男の下で働いているのだらう。

街道で出る魔物とか、耳を切れば金になるとか、一応聞かなければならないと思っ
いてもイライラしてしまふ。

そうだ、せめて余計な部分は端折ってもらいたい。ただそれを言うだけでも、どうしても不機嫌な声になる。

「魔物の強さの説明とか、さっきのガゼフさんより確実に強いだけでいいですから」
そうでなければ、聞く意味なんて無い。マールがガゼフよりずっと強いということしかわからないし、逆にマールの力が無ければどんな魔物が相手でも対処のしようがないのだから、魔物の強さについてはそれだけで充分だ。本当に、か弱い村娘を何だと思っ
ているのか。

その後、なぜかやたらと怯えの色を強めながらも、その男は説明を手短かに切り上げる。

だいたい無駄な部分が省略できたのかもしれない。男から受け取ったのは小ぶりの短剣と、一枚のガゼフからの紹介状。街に入る時も冒険者組合や魔術師組合などでも同じものを見せれば良いというのは、どうということなんだろう。文字というのは便利なんだなあと読み書きのできないエンリは感心する。そして最後に戦士長からの気持ちだと言つて少くない金貨の入った袋を差し出すと、逃げるように出ていった。

何か間違つたことでも言つただろうか。いや、今さら何を間違うこともない。今日という日の運命とこの血塗れの服に比べれば、何か間違いがあつたとしても些細なものに違いないはずだ。

残された短剣はエンリでも扱える程度のものであった。戦う力なんて無いから、最初は武器なんて必要無いと断っていたのだが、倒した魔物をお金に替えるために必要だというので仕方なく受け取つた。耳を切り取るとか気持ちが悪いが、お金になるなら仕方ないし、戦う力のあるマーレと一緒に居れば確かにそういうことも必要かもしれない。断つていたときの反応が少し変だったが、いちいち気にしていたらあの人たちと話なんてできなくなる。

紹介状は文字の読めないエンリには何が書いてあるかさっぱりわからないが、ガゼフからとなると、わからない方が幸せかもしれないとさえ思えてくる。それでも、王国の

住民として一応登録のあるエンリはともかく、それがあるとは思えないマーレなどを連れて街に入るなら必須なのだろう。後で読める人に読んでもらえばいいだけだ。

あとは金貨——昨日預かっていた大金はマーレに返したが、これも少くない額になる。まず、村長にネムの生活費を含めて多めに預かってもらうのがいいだろう。

エンリは村長にその旨を話し、金を受け取ってもらえず、そして人間不信に陥った。

村長もぐるだった。

エンリがマーレとともに旅出つ前提で、村長は既にガゼフから保護者不在となるネムの養育費用を受け取っていたのだ。二重にお金を受け取れないという正直な村長のためらいが綻びとなり、エンリのこれまで見せたことが無いような激しい剣幕に圧されて村長は全てを話した。

王国戦士長の苦悩、そんなものはどうでもいい。村人の不安、多少わからないでもない。それにしても、責任ある立場の大人たちがこそそと肩を寄せ合って話し合い、そのしわ寄せの全てをただの村娘に過ぎないエンリ一人に背負わせるというのはどういうことだろうか。

大人は汚い。村の中も外も関係なく、大人は汚い。恐ろしい墳墓の主モモンガの爛れた嗜好も、元を辿ればこういう所から来ているのだろうか。そうであってくれたら、その冷酷な心を溶かす方法もあるかもしれない。そう思えるくらい、ガゼフと村長は汚かった。

この時、エンリの拳は握り締められたまま、どうにかテーブルの下に留まることができた。ネムを預かってもらうのでなければ、間違いなく一発お見舞いしていたところだ。字が読める村長に紹介状の内容を教えてもらうつもりだったが、怒りにとらわれたエンリはそれどころではなかった。魔法詠唱者のマールマジック・キヤスターもいるので、それほど差し迫った事でもない。

エンリは家に戻ると、カルネ村での最後の朝の支度を精力的にこなした。水を運び、家の前を軽く掃き、朝食を用意する。することは増えてしまったが、それでもこんな暮らしがずっと続けばいいと思う。しかし、それも今日で終わり。代わり映えないが安心できる規則正しい生活が終わり、魔物が出るような外の世界を旅して、時には恐るべき魔法詠唱者の玩具としてその身を使われる爛れた日々がやってくるのだ。

爽やかな朝の空気をいっぱい吸い込みながら、食卓の椅子を綺麗に並べ、部屋の中

を整頓する。エンリの爛れた未来の象徴である半裸の姿を晒す幼い少女が目に入ったので、外套の前を全部とめてやった。戦いの疲れがあるのはわかるが、する気が無くてもすぐに脱がせるようにしておくのはマールレがものぐさだからだろうか。

エンリがこの少女に対し貴重なエモット家最後の外套を羽織らせたのは、元々は少女の姿を気の毒に思つての気遣いだった。それが、今はどうもおかしいことになっている。少女のためとか関係なく、外套で覆つて隠しておきたいのだ。できれば自分とマールレの前から遠ざけてしまいたい。それはエンリ自身も理解できない、不思議な感情によるものなのかもしれない。

マールレが寝返りをうつて向きを変えると、目が合った。起きていたらしい。

「この子の服、夜とかはいいから、せめて日のあるうちは前をとめておいてあげたいんだけど」

「昼とか夜とか、関係ないと思うんですけど」

無垢な瞳をまつすぐ向けて、とんでもないことを言うマールレ。

——駄目だこいつ……早くなんとかしないと……。

「せめて村から出るまでは、お願い」

強い調子で言うのと、マールレは不思議そうな顔で軽く頷き、もぞもぞと布団に潜つた。

爛れた性欲に従つて昼夜構わず幼い少女を玩具として弄びたいマールレの業の深さは

よくわかつているつもりだが、今だけは譲れない。村を出る時にはネムも見送りに来るかもしれない。どういふ話になっているかわからないが、少なくともマーレの爛れた世界に足を踏み入れているのはカルネ村ではエンリだけのはずだ。

エンリは、そのような格好を強いているマーレではなく、そのような格好を全く恥じることの無い少女のことが気に入らなかつた。自我が無いとかそういうことはあまり関係なかつた。おおらかな辺境の開拓村ではあるが、慎重というのは大切だと思う。それに、同じ女として——理由はわからないが——羞恥心をもたないというのは、何かずるいような気がしたので。

たとえ今夜からそれを捨てなければならぬとしても、今だけは人並みの羞恥心を備えた、慎重深い村娘エンリでありたかつた。

ただし、その決意はすぐに台無しになつた。食事の後、マーレから旅支度によかつたらと遠慮がちに差し出された黒い服を受け取つたエンリは、これまでの血の臭いのしない服への飢餓感のあまり、家の風通しをしたままで着替えを敢行してしまつたのだ。

いつもと違う、無遠慮に素肌を撫でつけていく爽やかな朝の風。迂闊なエンリも異常に気付くのは早かつた。すぐに窓からの視線を気にしつつ、視線の入らない場所を探しつつ、速やかに扉を閉めに行こうと考える。そして玄関に現れた小さな人影が混乱に拍車をかけ、足をとられ、世界が回る。体の前面ほぼ全てに痛みを感じると、目の前の全

てがかたい木の板に入れ替わっていた。

「ぼうけんしゃになると、開放的になるの？」

足元に服を絡ませ、ほぼ裸で床に転がったエンリに声をかけたのは、ネムだった。エンリは羞恥に顔を真っ赤にして、慌てて服を手繰り寄せ二つの服で前を隠すが、ネムはその様子を訝しげに見ているだけだった。

エンリは、嗜虐の王子様が、嗜虐と倒錯のお姫様でもあることを思い出した。爛れた欲求に染まりきった内面はともかく、マーレは外見上は可愛い少女でしかなく、昨日の朝の着替えの際にはエンリもネムもその視線を気にする事など無かったのだ。他に家の中にはネムと玩具の少女だけで、扉はネムが閉めていて、エンリが床に叩きつけられた場所は窓からの視線も通らない。

「ちよ、ちよっと転んで頭を打って寒気がしただけで、あと私ただのマーレの付き添いだし！……今着替えるからちよっと待っててね」

——ぼうけんしゃやなんかじゃない。そこは譲れない。

気恥ずかしさと焦りでぎこちない動作だったが、魔法のかかった服は着替えの際はゆつたりとして、身につけると体に程よく合ってくる。そういう仕組みを知らないエンリは、まるで自分のためだけに存在する服であるかのような着替えの感触に感動した。魔法の装備を得た冒険者なら誰でも一度は経験する感動ではあるが、それは魔法の装備

を知らないエンリが初めて着るにはあまりに上等な品だった。

「この服すごい！ 最高！ 着やすくて、ぴったりで、私のためにあるみたい！」

そう言うてはしやぐエンリが着ているのは、村人らしい姿からかけ離れ、戦争の時も見かけないような黒ずくめの物々しい服だ。

陽光聖典隊長であったニグン・グリッド・ルーインの法服は、その中身が変わってもなお非日常的で危険な気配と、将としての風格のようなものを漂わせていた。

「うわあ……」

村のために頑張る姉のことを応援したいネムだったが、姉のあまりの変わりように、漏れ出る声を止めることはできなかった。村に立ち寄ったことのある役人も兵士も冒険者も全く比較にならない。ネムはこの圧倒的な黒衣の威容を形容しうる言葉を持たなかった。顔が引きつり、顎を引いて一步退く。その変化に、浮かれていたエンリの表情が凍りついた。

「かつ、格好いいですよ！ とても似合ってます」

服を用意したマーレは心から称賛する。しかし、昨日のこともあるから、エンリはマーレの感覚を信用できない。

「お、おかしいかな？」

「……………」

「ネム？」

「…………私も、格好いいと思うよ。お姉ちゃんがとつても遠くへ行つてしまつたような気がするけど、うん、行くのはこれからだもんね」

ネムの表情が、少し大人になつたように思えた。引つかかる言い方とか含みとかいろいろあるような気もしたが、とにかく着心地が最高だから気にしないことにした。何より血塗れの姿に戻るのが嫌だったので、エンリはそのまま旅支度を進めることにした。

ネムは旅に必要な保存食などを届けるおつかいついでに、村長の家に移るために荷物をまとめて来たという。ガゼフや村長とはしばらく顔を合わせたくなかつたエンリにはありがたかつたし、確かにそういうこともエンリがいるうちに済ませておいた方がいい。二人で荷物を整理していると思つたより時間がかかり、外からは馬のいななきや男たちの話し声が聞こえてきた。ガゼフたちが出発するのだろう。

「見送りにいかないの？」

行くわけがない。村を救つたわけでもなく、むしろ戦いに巻き込んだくせに、何もかも一人の村娘に押し付けていく卑怯者の集団だ。それを笑顔で見送れるほど、エンリは度量の広い人間ではなかつた。殴りに行くという選択肢はあつたが、馬の上にいる相手

では手が届かない。

しばらく後、エンリはこのことを後悔することになる。見送らなかつたことではない。石を投げるといふ手段を思いつかず、みすみす大切なものを持つて行つたガゼフたちを逃してしまつたことだ。

「馬を……全部あげちゃつたんですか！」

農耕用の馬の話ではない。マーレが倒した騎士たちの軍馬だ。それはエ・ランテルまで安全に移動し、よくわからない紹介状をのし代わりにして然るべき所へマーレを押し付け——紹介するには必須のものだつた。

黒ずくめの物々しい姿で現れたエンリに気圧されつつも、村長はその場で努めて無難な説明を作り上げた。マーレが捕虜の扱いをガゼフに委ねたことからそれを輸送すること、村の復興資金のために騎士たちの所有物などを買い取つてもらふこと。そのため馬を貸したのだということ。働き手が減つたため、後で軍馬の価値に相当する農耕用の牛馬を届けてもらふこと。王国戦士長との間の話はそこまで具体的ではなかつたが、あの誠実な戦士長なら聞いてくれるであろう内容だ。

それでもいきり立つエンリを宥めながら、普通は農夫の娘は軍馬になど乗れないから、戦士長は馬を残しても仕方が無いと思つたのだらうと付け加えた。

実際は、街へ出られるような馬を残さないこと自体が目的だった。紹介状一つでは不安に思つた戦士長が、先回りしてエ・ランテルで苦手な根回しをするという。街一つ、下手をすると国全体の危機ともいえる状況に、戦士長は完全に専門外の仕事を覚悟した。馬を全て回収したのは、そのための時間稼ぎだ。

エンリは子供の頃、戦争帰りの村人から教わつたことで乗馬の経験があつた。近い世代の子供たち皆で楽しんで教わつていたのを覚えている。その村人が敵の伏兵を発見したとかで様々な褒美を受け取り、その中に馬がいたのだ。

——ラッチモンさん、大丈夫かな。

エンリは、襲撃の前日から行方が知れず、いまだ死体も見つかつていない村の野伏レンジャーを心配する。こういう時、危険を察知する能力が高い野伏が居たら途中までも同行してくれたかもしれない。

ラッチモンの話を出すと、エ・ランテルで移住者を募集しようということになった。村が危険に晒された経験も踏まえ、野伏ができる者や冒険者の経験がある者には良い条件を提示する事になる。村長はその場で羊皮紙を拡げ、内容を説明しながら文字を沢山

書いてエンリに手渡した。

エンリは、カルネ村が存続していくための仕事には協力を惜しまないつもりだ。今回の旅がこれ一枚をエ・ランテルに届けてくるだけのものなら、どれほど良かっただろう。手紙を渡す時、冒険者に用事を頼むのだから、などと言って金貨を押し付けてきたことで不機嫌になり、エンリは扉の音を立てて村長の家を出た。再び紹介状を読んでもらうのを忘れたことに気付いた時には、既に村を出発し、見送るネムの姿が小さくなっていた。

一〇 遠い空と優しい剣士

草原を優しい風が撫でていく。エンリは構造を把握したばかりの法服の前を緩めて少しだけ風を取り込みながら、季節外れの外套を着せた幼い少女を連れているを思いつ出した。

——少しなら緩めてあげても。

振り向くと、風がふわふわと少女の薄絹をめぐりあげていた。既に外套の前は全開で、その幼い曲線を初夏の日差しが照らしていた。

エンリはもの言いたげな半目でマーレの方を見つめるが、まるで無垢な天使のようなきらきらとした瞳で正面から見返されると、すぐに視線を外して深く溜息をついた。

「ど、どうしたんですか？」

「……いま、エ・ランテルに向かうルートが決まったところ」

エンリの不機嫌な声に、マーレは不思議そうに首を傾げた。

カルネ村より南西に位置するエ・ランテルに向かうルートは、エンリの聞いている範囲では二つある。

一つ目はまず南へ進み、それから街道筋を西へ行くルート。これは帝国との戦争が近

い時などは好まれないが、比較的安全だ。

二つ目は森の周辺に沿って西へ進み、途中から南下するルート。これはモンスターとの遭遇率が高く、村人には好まれなかった。

エンリが今選んだのは二つ目のルートだった。

確かにモンスターとの遭遇は避けたいが、マーレがいれば危険は少ない。それより避けたいのは旅人との遭遇だった。無遠慮に肌色を晒し続ける幼い少女と、この辺りでは珍しい幼い闇妖精。旅人と遭遇した時に変な目で見られるのは間違いない。エンリの方だからだ。安全とはいえ、街道筋など通れるわけではない。

旅人との遭遇。

考えただけで恐ろしい。生まれ育った村を出たエンリには、怪しまれた時に助けられる者は誰もいない。マーレは口を開いても状況が悪化するだけ。玩具の少女は口の前に外套の前を開いて色々丸見えの時点でもうにもならない。

やはり、マーレの爛れた嗜好を隠したのがいけなかったのだろうか。隠さず玩具の少女を連れ回させていたらどうなっただろうか。それは今さら考えても仕方の無い事で、小屋の中でのあれが心に刺さっていたエンリには、放置することができないのも無理は無かったのだ。

——エンリが教えてくれたんです！

それが悪意の無いものとわかった後も、心に刻み付けられたものは簡単には消えない。その上、エンリの運命に刻み付けられた何かも消えてはいないのだろう。

そういえば、ガゼフの話では、マールはいたいけな村娘を玩具にする嗜虐の王子様どころではなく、王国の危機、あるいは人類の危機と言つてもいいような存在らしい。エンリだけの危機ではないというなら平等で結構なことだと思つて軽く流してしまつたが、他の旅人などと問題を起こされたり、犯罪者として追われる立場になるのは困る。交渉を試みていた様子に見えたという法国の人間末路を聞く限り、交渉ごとなどはエンリが担当しなければならぬのだろう。

「これから色々あると思うけど……本当に危なくなつたら仕方ないけど、なるべく戦いとか殺し合いとか、嫌だからね」

「は、はいっ。ガゼフさんからも頼まれてるし……」

ガゼフという言葉に眉をひそめるが、ここでは問題にすることもないだろう。その名はエンリに不幸をもたらした災厄の象徴とも言えるものだったが、あの卑劣漢とも人間として最低限意見を共有できる部分はあるようだ。

「わかつてるなら、その通りにお願ひね」

エンリは少し身をかがめて、マールに目線を合わせて言い含めておいた。

その筋肉でできた小山のような巨大な生き物は、子供くらいの身長醜い生き物の群れとともに、三人を囲むように現れた。エンリは冷や汗が背中を伝うのを感じながらもマーレに目配せし、平然としたマーレが領くのを見て落ち着きを取り戻す。あとは魔法で縛るのか爆発させるのか、村を襲った騎士たちの運命を考えればそこに不安は全く無かった。

そしてマーレは何やら詠唱し、その身がふわりと浮き上がる。安全な空から攻撃するということだろうか。後ろを歩いていた玩具の少女も浮き上がる。複数人で空を飛べる魔法なのだろう。それに合わせてエンリも息を大きく吸い込み、重心を高くして浮遊感に身を任せようとする。

——空を飛べるなんて、ちよつと凄いかも。

少し体を反って精一杯背伸びをしたエンリが一人、その場に残された。巨大な筋肉の塊は、大きな顎を前に突き出した知性を感じさせない姿でゆつくりと歩み寄り、潰れた

顔の醜い小鬼たちの緩やかな包围はじりじりと隙間を減らしていく。エンリの背中を冷たい汗が滑り落ちる。

何が起こったかわからないエンリのもとへ上空で何やらマーレの声が聞こえ、そこで体が一気に軽くなる。全身の感覚が鋭くなり、力がみなぎってきた。これなら空だつて飛べそうだ。エンリは魔法というものの力の大きさを実感し、自分の順番が来たことに安堵した。

——これが空を飛べる身体……凄い。私じゃなくなつたみたい。

エンリは背伸びをするつま先に必死に力を入れてみた。いつまでも足は地面についたままだ。

次に鳥を思い浮かべて両腕を広げてばたつかせるが、やはり地面から離れることはできなかつた。

……そもそもマーレたちはそんな動きをしていない。

エンリは完全に孤立した。餌である人間の不思議な動きに警戒して亜人の集団の足が鈍るが、それも危機を数秒繰り延べるものに過ぎない。

——まさか、重量オーバーとか？

不穏な想像に強い衝撃を受け、エンリは蒼ざめる。しかし、子供用の魔法でもない限りそんなことは無いはずだ。確かに開拓村の農作業は厳しいもので、若干は普通の村娘

より筋肉がついているかもしれないが、余分な肉を付けているつもりはない。……それは、昨夜きちんと隅々まで確認したばかりだ。

余計な事を思い出して少し頬を染めながらも、その抗議の声は切実だ。

「ちよっ！ マーレ!? わたしっ、私だけ飛んでないよ!!」

「ガゼフさんが言ってたんです！ エンリに任せた方がいいって」

どこか既視感のある展開に災厄の象徴ガゼフの名が加われば、エンリの運命が風前の灯となるのも当然の事であると、感覚的には理解できた。理屈抜きに、するりと頭に入ってくる納得感がそこにはあった。

しかし、あまりに理屈が無さすぎる。ガゼフは卑劣漢だが魔法使いではなく、何でもありだというわけではない。そもそも血塗れだ魔女だとうるさかったあの失礼な取り巻き連中ならともかく、ガゼフはエンリがただの村娘でしかないことをわかっていたはずだ。

これは何かの謀略だろうか。村娘エンリはり・エステイーゼ王国の敵で、王国戦士長に謀殺されなければならないほど罪深い存在なのだろうか。

「まま任せるって何!?! わわたし戦いとか無理だよ!」

「はいっ。戦いにならないように、交渉をお願いします」

「ちよっっ！ 待っ——」

言いたいことを言うと、空中のマーレは玩具の少女とともにその高度を上げる。同じ身分でありながら安全な場所にいる幼い少女が恨めしく、無意味に晒される全開の肌色がいちいち疎ましい。今はそんなものを気にしている場合では無いのに。

エンリ自身と同じくらいの長さの棍棒を持った巨大な生き物は、こちらを見て涎を垂らしている。あれは人を喰らう生き物——オーガだ。醜い小鬼——ゴブリンたちの方も、それぞれに歪んだ曲刀や手斧、弓などを構えてエンリの方を窺っている。こんな状態で何を交渉しようというんだらう。こうなったのはガゼフのせいらしい。そもそも、今エンリがここに居るのも、全てガゼフのせいだ。少しずつ怯えが怒りに変わっていく。

エンリは拳を握り締める。王国戦士長をこの拳で殴ってやりたいと思った、その時の気持ち思い出して。

——なめるな。あいつはたぶんガゼフより弱い。あの卑怯者より弱いんだ！

人間の中にも、単身でオーガに勝てるような者が居ないわけではない。王国一番の戦士だというガゼフもその一人だろう。つまり、オーガというのはその程度の生き物なのだ。

息を思い切り吸い込む。空を飛ばうと夢見たあの時よりずっと強く。そしてエンリは腹の底から声を張り上げた。

「止まりなさい!! 言葉はわかりますか!?!」

オーガの視線が目の前のご馳走——エンリの体から、顔へと移る。エンリはオーガの視線に正面から挑み、見返した。目を逸らしたら、終わりだ。

「コトバ、ワカル。オマエ、ニンゲン、ウマソウ」

「それ以上近づいたら、仲間があなたたちを倒します!」

「オマエノナカマ、ニゲタ。……オレサマ、オマエ、マルカジリ」

オーガは破顔した。

外の世界における、エンリの初めての「交渉」は失敗に終わった。話はまとまらなかったが、エンリはオーガの笑顔というものを認識できるようになった。

巨木を思わせる筋肉の塊が斜め上から迫る。その先にはごっこごっことした岩のような指が開かれ、エンリというご馳走をその手に収めようとしていた。ゴブリンたちもあるものは距離を詰め、あるものは矢を放ってくる。

「ひいひいっ!」

エンリは自分でも信じられないような身軽さでその岩石のような手から逃れる。そこは斜め後ろから放たれた矢の射線上だ。体勢を崩していた状態では避けようがなかった。

矢に貫かれる自らの末路を想像して体を強張らせ、足がもつれて倒れこむ。しかし、それは矢が外れるほどの動きではない。すぐに背中に感じたのは、棒で突かれたような鈍い痛み。

エンリの着る法服は、ゴブリンの矢で貫けるようなものではなかった。

——私、生きてる!?

一瞬、背中から落ちた矢に意識をとられ、上から迫る気配に気付くのが遅れた。オーガの持つ人の身体ほどの太さの棍棒が、風を切りながらエンリの上に振り下ろされる。エンリはその場で身をすくめるしかなかった。

マールは、一応ガゼフと約束はしたが、別にガゼフの願いを聞き届けようと思つて受け入れたわけではなかった。ただ人間との付き合い方を振り返つて、そうするのが良さそうだと判断したに過ぎない。

エンリを通して話をした時は村長などからきちんとして情報や協力が得られ、自分で話をした時はろくに情報が得られないばかりか、危うく敵に、侵入者たちに連なる勢力にアインズ・ウール・ゴウンの情報を渡しそうになった。ニグンという人間は協力的かと思つたが、これも実際には敵の側だった。こうした経験がマールに人間たちとの接し方

を再考させ、ガゼフの言葉に耳を傾けさせたのだった。

それでも、なるべく戦いを避けるというのは面倒な言い分だった。かつて耳にした言葉に、「言う事を聞かせるためには一発殴るのは悪くない」というものがあり、マールはそれに少し共感していた。それが話題の端にのぼったとき、お茶会の御方々は「誰でも楽々交渉術」と呼んで茶化してもいたが、マールはそこで敵意を挫いたり、必要なら移動力を奪ってしまえば理想的だと真面目に考えていた。

ただ、実際に役に立っているエンリが言うなら、エンリの交渉を待つてから一発殴るのも悪くない。

——本当に危なくなったら仕方ないけど、なるべく戦いとか殺し合いとか、嫌だからね——

マールはエンリの意思を尊重して交渉を任せ、本当に危なくなるまではそつと見守ることにした。オーガやゴブリンは知能が低いが、言葉を解さないわけではない。亜人を含む異形の者が多数を占めるアインズ・ウール・ゴウンでは、それらと同程度の片言しか話せないしもべも多く存在したが、その知能の範囲で命令を理解するし間違いを直すこともできた。あれらでも、脆くてうるさくて扱いにくい人間より交渉相手としてよほどマシだろう。エンリならうまくやれるだろうし、駄目でも今の装備と予めかけておいた上位の強化魔法を考えれば問題は無さそうだ。

そして、残念ながら交渉は失敗した。エンリはオーガやゴブリンと相性が悪いのかもしれない。戦闘態勢になったが、十分な支援魔法はかけてあるので焦ることもないだろう。もしかしたら、途中でエンリが一発殴って交渉を再開するかもしれない。

マールは本当にギリギリまで待ってから、無詠唱化した魔法で助けに入ることにした。時間を止めて自分で下に降りていって対応することも考えたが、それも面倒だ。魔法の服なら水で流せばきれいになるし、多少汚してしまっても問題ないだろう。エンリの隠れた性癖を考えれば、内心では喜んでもらえるかもしれない。

そして、オーガは爆散した。取り落とされた巨大な棍棒が落ちてきて、二つの腕だけで身を庇う。エンリは命の危険を感じたが、魔法の服の効果なのか道端で人にでもぶつかられた程度の感触だった。そして肉食亜人種特有の粘ついた血肉が降り注ぐ。

べちやり。

何が起こったのかと斜め上を見上げたエンリの顔に赤いものが降り注ぎ、開いた法服の襟元に小ぶりの赤黒い塊が落ちてきた。

「つきやあああああつ!!」

エンリは体勢を戻す間も無く、首筋に乗った何かを掴みあげ放り投げようとする。

ぐじゅつ。

強化されていることで加減を誤ったその手の中から溢れるように、潰れ出た臓物の欠片が顔の上にびたびたと落ちてきた。

「ひゃぶっ！　ぶはっ！」

口の中に入りかけたものが何だったか確認する勇氣なんてあるわけがない。エンリは血と汗と涙に塗れた酷い顔を、その黒い袖で必死に拭っていく。ごつごつした小手が当たって痛かった。

—— 楽しいのかな。

まるで吸血鬼が血を浴びているかのように、嬌声をあげて血肉を堪能するエンリ。その姿はそういう性癖をもたないマールから見ても充分に微笑ましかった。はしやぎすぎないよう、声をかける。

「相手はまだいますよ！　あとは一発殴って言うことを聞かせるだけです」

色々言い返したい事はあるが、今はそれどころではない。エンリは短剣を手に周囲を

窺う。オーガの末路に驚き戸惑っていたゴブリンの集団との距離は近いままだ。エンリがふらふらする剣先を向けると、恐慌状態に陥った一匹が古びた曲刀を構えて突撃してきた。

「スツトイツテドス！」

ゴブリンは聞いたことのない言語で叫びながらエンリの戸惑う剣先をすり抜け、腹部に曲刀を突き立てながら体当たりをしてきた。しかし、腹部を硬いもので突かれたような鈍痛がやってきただけで、それも痣も残らない程度のもの。

——あれっ？ 刃物で刺されたのに何ともない？

恐れからくる興奮が急激に冷め、命を賭けているという感覚がすうっと消えていった。それまでの混乱が嘘のように収まっていく。恐怖で狭まっていた視野が戻り、目の前の集団が取るに足らないものに思えてきた。命を狙って襲い掛かってきた生き物が、作物につく害虫とまではいかないまでも、人間に危険を及ぼすほどではない小型の害獣程度に見えてくる。

エンリはいったん短剣を両手で持ち、抱え込むような形になったゴブリンの肩口に突き立てる。

「ギヤアアア!!」

刃はするりと肉の中に沈み込み、容易に致死の深みに達した。その肉は家畜の解体を

手伝った時より柔らかく感じた。

その後は簡単だった。落ちていて対処すればゴブリンの動きは遅く、その脆弱な攻撃を受けることもなくなった。短剣がその肉を、軟骨を切り裂く。軟骨は硬めの野菜の芯くらいの感触だろうか。三体が倒れたところで、ゴブリンたちは逃げ出した。あちらは

——東だ。

「マール、お願い！」

カルネ村の方へ走っていくのを放置するわけにはいかない。村長だけなら活きのいいゴブリンを数匹投げつけてやりたいくらいだが、ネムや他の村人もいるのだ。

思わずマールに声をかけると、今度は見捨てずに対処してくれた。何の魔法か、走り出したゴブリンたちは突然背中から血を噴き出し、全てその場へ倒れ伏した。

——そうだ、これ、お金になるんだ。

エンリは短剣を包丁のように持ち替え、ゴブリンの死体と格闘する。

多少気味が悪くはあるが、得られる金額を考えたら尊い労働だ。薬草をとっていても気持ち悪い虫は出るし、美味しい肉入りの食事のためには誰かが動物を解体しなければならぬ。

数が多いので、マールにも用意した袋を渡して指定された耳を切り取るよう頼んでおく。

薬草取りの心得があるエンリは、指定された部分だけをきつちりと採取する事にこだわっていた。薬草の採取では根を取ると次に生えてこなくなってしまうし、ギリギリまで取らないと薬効が減ってしまうものもあつた。モンスターの耳にそんな事情は無いのだが、エンリはきつちりと耳だけを切り取ることに時間をかけてしまう。慣れない手つきで二匹目の耳を切り取る頃には結構な時間が経っていた。

「終わりました」

マーレが血の滲んだ袋を持つてくる。やはり力が違うと仕事も速い。元は薬草を摘む時に使っていた袋だが、もはやこれ専用にするしかないだろう。エンリは袋を受け取り、自分が採取した耳も無造作に突っ込んでおいた。

その後、少々疲れる話し合いを済ませ、せめて亜人や魔物が出現した時は一緒に行動することを約束してもらつた。予想通りマーレには全く罪悪感が無く、亜人を脅威の対象とすら考えていないようで、その認識を改めることすらできたとは思えない。

ガゼフの言い分についても確認しようと思つていたが、その名を思い出すだけで気分が悪くなるしお腹の辺りがムカムカしてくるから放つておいた。たぶん、みんなガゼフが悪い。

日が沈みかけてから、野営の準備は慌しく始まった。

マーレは別に寝なくても構わなかったのだが、エンリは夜の魔物の奇襲を恐れていた。そういう事を考える時、想像の中で犠牲になっっているのが常に自分一人だけであることに余計な苛立ちを感じながら野営を強行に主張し、受け入れられたのだった。

そんな想像の中では何故か助かる側として勝手に嫉妬の対象になっていた巫女姫は、ただ歩き、ただ座り込んでいた。

エンリは野営の方法は聞かされてはいたが、マーレが周囲を警戒できる場合は、簡易なものをも勧められている。

旅立つて最初の夜ということもあり、今夜は警戒をマーレに任せることにした。何日も旅が続くようなことがあれば、習った通りに糸を張って警戒網を作ってエンリが周囲に注意を払わねばならない時も来るだろう。

マーレは焚き火を準備している。エンリがテントと格闘していると、声をかけるものがあつた。

「こんばんは、お嬢さん。手伝いしましょうか？」

涼やかな声にエンリが顔を上げると、その声に相応しい男の切れ長の目が優しい光を湛えていた。戦士というより剣士といった雰囲気を持つその男は、エンリの知る粗野な戦士たちと比べれば立ち居振る舞いが洗練されているようにも思えた。

「あ、助かります。あなたは？」

テントを畳んでいた金具を外しながら、男は丁寧はその名を名乗った。

それは若干芝居がかった口調だったが、それもガゼフやその部下たちとの違いをより大きく感じさせることもあって、今のエンリには好印象だ。

「それにしても、このような簡単な野営で大丈夫なのですか？」

「はい、魔法を使える子がいるので」

エンリの視線を追って、男がマールレの方を見る。

「ああ、なるほど」

男は少し含みのある声で納得する。

——少しマールレの方を見る目が変わったような……しまった!!

エンリは、マールレの向こうにいる少女のことを思い出した。わたわたと手足をちぐはぐに動かしながら駆け寄り、その外套の前をとめる。

「あのっ、違うんです！ これは、その……」

みるみる顔が赤くなっていく。エンリは、旅人を見かけたら真つ先にやらねばならぬ事を忘れていた自分の愚かさを悔いる。

そこへ、思いもよらない優しい声がかげられた。

「私は何も見ていません。落ち着いて、私はあなたの味方です」

エンリは顔を上げる。

男の口調はその芝居がかった部分が薄まり、とても落ち着いたものだった。そこには今までエンリが浴びせられてきたような警戒と好奇の混じったような嫌な感情は全く感じられない。

エンリの目をまっすぐに見ながら、男は問う。

「こちらの闇妖精ダークエルフは、冒険者の仲間ですか？」

「そうといえそうですが、冒険者とか仲間っていうのは、ちよつと……」

エンリが口ごもると、男はその口の前で指を立て、微笑みを浮かべて優しい声で諭す。「言いにくい事は結構。とりあえず、あなたがあちらの少女ダークエルフとの身を預かっているだけ、という感じでしょうか」

「そ、そんな感じですか」

——何か、察してくれてるのかな。

触れたくない問題に蓋をしてくれた目の前の男に、エンリは素直に感謝した。

「旅人には色々な事情があり、冒険者やワーカーの間では互いに詮索するのはご法度と言われるくらいです。堂々とした方がいいですよ」

エンリは初めて冒険者というものに良い印象を持った。——互いに詮索するのはご法度——その言葉を、深く心に刻んだ。

「——というのも、私にも連れがいるから、あなたの苦労もわかるんですよ」

いつの間にか、マールが焚き火に火を灯していた。その照らす先、少し離れたところに人影が三つ並んでいた。

——森妖精？

途中で切れているような不自然な形の耳は、それでも人間よりずっと大きい。肌は白く、背はエンリよりいくらか高い。全て森妖精で、妙齢の女性のように見える。顔立ちは整っているが、その沈んだ雰囲気には仄暗い闇を感じる部分もあり、少し怖い感じがした。

マールを見て驚いているのは、闇妖精ダークエルフが珍しいのだろうか。

「荷物、持ってもらってるんですね」

見咎めたというわけでもないが、エンリには森妖精エルフが体格に見合わない大きな荷物を持っていたのが少し気になった。

「森妖精エルフというのは案外力が強いものなんですよ。旅路は長いことから、あなたも持た

せればいい」

「その通りですけど、マーレはまだ子供なので世間体が気になります」

エンリは、マーレの「片付け」の時の杖での一撃を思い返した。確かに、ああいう恐ろしい力を持つ者たちにとっては荷物など何でもないだろう。

しかし、力はともかく姿は子供であるマーレだけに多くの荷物を持たせるのは、どうにも見た目が悪いのだ。

「こういうのを連れてくる時点で、世間体まで考えても仕方ありませんよ」

男は笑う。それにつられて、エンリも笑みがこぼれた。

マーレとともに行動したことでエンリの世間体がどういうことになったか、それを考えれば、男の言う事の方が正しい。

エンリは笑う。今は蘇ってくる忌々しい記憶を笑い飛ばすべき時だ。焚き火の前で二人は心から笑いあった。

——きつと、この人も苦労してるんだ。

「それにしても。三人も連れて、大変じゃないですか?」

「はは、この通り体力だけありますから、なんとか楽しくやっていますよ」

男はニヤリと笑う。それは決して高潔な剣士のものとは言いがたい、どこか品の無い笑みだった。それさえも、今のエンリには男が自分と同じ所まで降りてきてくれたよう

な、親しみを感じさせるものに思えた。

何より、相手は三人だ。この男も表面上は余裕があるように見えても、泥の中を這いずり回るような苦勞をしているに違いなかった。振り返つて上品に笑えるような、まともな日々であるはずがない。

エンリは、三人のマーレを連れまわす日々を想像し、戦慄した。

「度量があるんですね。人間が大きいというか、立派だと思えます」

心から思う。エンリはこの出会いに感謝していた。

——初めて出会った旅人が、こんなに立派な人で本当によかった。

ふと視線を感じ、ちらりと森妖精の方をうかがう。三人の森妖精^{エルフ}たちは、一様にその濁った目に背筋が寒くなるほどの明確な嫌悪を浮かべてエンリの方を見ていた。エンリの中で、この気難しそうな三人を連れてくる男への敬意がますます大きくなった。

男が言葉を返してくる。

「あなたこそ凄いい。その若さでなかなかの器だと思えますよ」

涼やかな声に芯が入って、それは男の心からの賛辞に思えた。エンリは過ぎた言葉にくすぐったさを感じましたが、苦勞を分かり合える存在と出会えたことの嬉しさがそれを塗りつぶす。男ががちりとした固い手を差し出し、それをエンリが握り締める。二人の男女は偶然の出会いに感謝し、間違いなく相手に敬意と親しみを覚えていた。

「エンリ・エモットです。エンリと呼んでください」

それから、エンリは自らを天才剣士と称するその男に一つ相談に乗ってもらった。

まず目先の問題としては、冒険者組合へ行かねばならない。気になっていたのは、一人で行っても良いのかということだ。マーレが関わるとうるくなことになるし、玩具の少女は論外なので、いつそ二人とも連れて行かないのが良いのではないかと考えていた。

男はそれを、むしろ当たり前のように後押しした。エンリの当然の権利だという男の言い方には少し戸惑ったが、男もよほど森妖精^{エルフ}たちに苦労しているということなのだろ

う。

一人であることに疑問を持たれたら、男とそのチームの名を明かし、男に勧められたので同じようにやるといふことを伝えれば理解が得られるはずだという。

あらゆる面で道なき道を切り拓く覚悟をしていたエンリは、先に道を切り拓いていた先達の存在とその奇跡に心から感謝した。多大な苦勞をしたであろうこの男の貴重な経験のおかげで、エンリは安心して、少しでも拓けた場所を進むことができる。まず冒険者は集団であるという固定観念からきていた悩みも、驚くほど簡単に解決した。

さらに男は、一人だけの冒険者でもチーム名はあった方が良いという。

名声や評判という部分についてはどうでもよかったが、問題が起こった時に自分の名前だけでそれを背負うのは重過ぎるといふのは納得できなくもない。

そして男は無邪気に笑った。自分の名前の他にチーム名があると、悪口が半分になるような気がするという。

エンリも一緒に笑いあつた。

既に決めているのでなければ、と前置きした男は、エンリの黒衣を指して『漆黑』という名を提案した。そして、悪口を言われる時も短い方がいい、そう言つて笑つた。

エンリは男と同じワーカーという身分にも興味を示したが、ワーカーが仕事を得るにはある程度の名声が必要であり、冒険者組合に愛想が尽きてからで充分だと諭される。

そのことで、エンリは熟練のワーカーである男と、まだ駆け出しの冒険者ですらない自分自身との差を理解した。それがなければ、苦勞を分かり合える立派な剣士との同行を望んだかもしれない。

男は急ぎの依頼のため、野營をせず北東へ進まねばならなかつた。ワーカーとしての本拠地は帝国の帝都アーウィンターであり、もし訪れることがあれば喜んで帝都を案内するという。

二人は再び固い握手を交わし、互いの冒険の無事を祈り、別れた。

エンリはその男——エルヤー・ウズルスの名を心に刻んだ。男のチーム名『天武』とともに。

エルヤーは確かにこの出会いに感謝していた。たかが十五、六の小娘に対して心から賛辞を送るなど、これまでの自分にはありえないことだが、そのことにも驚きは無かった。

最初は、幼いながらも確かな輝きを放つ闇妖精ダークエルフの少女の容姿に魅かれて近づいた。

しかし、話をするうち、エルヤーの関心はその主たる黒衣の少女へと移っていった。強者の雰囲気や滲ませる物々しい黒衣を纏ったその少女は、闇妖精ダークエルフの少女を愉しむ所有者だった。

そのことは、もう一人の幼い人間の少女にさせていた格好を見れば自明だろう。

幼い少女を愉しむ少女というのは新鮮だ。自分の前でだけは爛れた嗜好を隠さず、伸び伸びと生きて欲しいと思うほどに。

自らの爛れた嗜好を知られ慌てる少女は微笑ましかった。同じ世界を知る立場として優しく歩み寄り、共感を分かち合いたいほどに。

世間体を気にする少女は初々しかった。黒衣の少女のその爛れた嗜好との落差がたまらなくエルヤーを興奮させた。

エルヤーの生き方を真つ向から肯定する少女の存在は大きかった。言葉では言い表せないほどに、エルヤーの全てを包み込むほどに。

少女はまだ十五、六歳だ。エルヤーのしていることを知れば、潔癖さが残りがちなその年頃の少女なら悪感情を向けてくるのが普通だろう。世間を知っている女でも、顔を背けるくらいの反応は当たり前だ。女が男の性欲を理解できないのは仕方の無いことで、それはエルヤーもわかっていることだった。

しかし、あの少女は違った。三人の森妖精を愉しむエルヤーの日常を丸ごと肯定し、それをあたかも男として優れている事の証であるかのように受け取って、素直な敬意を向けてくれた。

そんな少女が、夜になると幼くも美しい闇妖精の少女や、視界を奪った幼い人間の少女を蹂躪しているのだ。清楚ささえ残るあの若さで、いったいどんな経験を積んできたからそういう領域に到達するのだろうか。

これから冒険者になるというが、年齢にそぐわぬ爛れた嗜好とあの黒衣を見ればそれ

まで陽の当たる世界にいたとも思えない。

エルヤーにとって、女とは欲望をぶつけるだけの、支配の対象でしかなかった。それは肥大化した自尊心の裏返しでもあり、それが森妖精エルフの奴隷を買って夜の相手をさせつつチームメンバーとして使うという、ワーカーとして特異とも言える生き方に繋がっていた。

その方法は人間以外を下に見るエルヤーの中では非常に合理的なものであり、人間社会に迷惑をかけずに自身の欲望を満たすとても冴えたやり方だった。

しかし、その生活は単調なもので、奴隷の女には飽きることが少なくなかった。飽きた女を取り替えても、それはエルヤーの自尊心のための閉じた世界のピースに些細な変化が生じたに過ぎず、同じ事の繰り返しだった。それでも、それ以上のやり方は無いと思ひ、満足はしていた。

そんなエルヤーの前に現れたのが、エンリだった。

それは、エルヤーの閉じた世界を肯定し、包み込み、そして新たな世界へ誘うことができる唯一の存在だ。エルヤーの持つ究極の愛が自己愛であるなら、エンリを愛することはその延長上のさらに先にあるものだ。

そこには、男女関係における対立的な部分は存在しない。妥協も必要ない。

あるのは、それぞれの欲望を満たす世界を持つ者同士の共感と友情、そしてその世界を絡めあう愉しみと、自己愛の世界を絡めあう関係から生じる無謬の愛の姿だ。

エルヤーはエンリとその奴隷たちとの甘美な愛の世界を想像し、そこに無限の高まりを見た。

二人の主が互いに全てを肯定しあう幸せな世界の中で、ただ蹂躪するだけでなく、蹂躪するさまを見て愉しむことができる。愉しみを交換することも、一緒に愉しむこともできる。

そして、男である自分とは全く違う少女の感性で少女が貪られていくさまを見れば、エルヤー自身の愉しみ方も大きく広がっていくだろう。

それはエルヤーにとって、生涯に一度会えるかどうかの理想の伴侶の姿だった。

いや、理想などという陳腐な言葉で言い表して良いものではないのかもしれない。エルヤーの自尊心を妥協させず、肥大化させたままの世界を丸ごと包み込んでくれる女性など、想像の範疇に収まる存在ではなかった。思い描けないものは理想などという概念に留まるものではないのだ。

しかし、エルヤーは焦らない。

エンリの連れていた闇妖精ダークエルラの少女は、飛びぬけて美しい。薄絹の少女も十分に美しい

上、人間の少女にあのような扱いをするという背徳感も大きいだろう。となれば、エンリはその爛れた欲望を十分に満たしているのは間違いない。

そうやって十分に満たされた者に対し、焦って迫ってもろくなことにならないことをエルヤーは知っていた。

戯れに立ち寄る娼館やそういう酒場で、羽振りの良い自分に迫ってきたつまらない私たちの姿を思い出す。自分がああいうふうになつてはいけない。焦らずゆつくりと親交を深めていけばいい。

エルヤーは、『天武』のリーダー、エルヤー・ウズルスの顔に戻っていた。今は、精力的に仕事をこなさなければならぬ。エンリとの再会の時までには、より強く、より大きな存在となるために。

一一 怒れるニニヤと詰め所の騒動

マーレとエンリと、その他一名の旅は続いていた。好天に恵まれた草原は歩きやすく、それでいてエンリの着る魔法の服は初夏の暑さを感じさせない快適性を維持していた。マーレの装備には遠く及ばないものの、陽光聖典隊長のニグンが作戦行動時に着用していただけあって、その防御効果も快適性も一級品だ。

しかし、それでも旅慣れないエンリやもう一人の少女では冒険者のようにはいかない。さらに戦いの緊張と疲れで眠りが長くなれば、街への道のりはさらに遠くなり、それが次の遭遇を呼び込んでしまう。

新たに現れたゴブリンと狼の群れを撃退したのは、二度目の野営の明け方のことだった。

前日の話し合いが効いたのか、何故か狼使いのゴブリンが最初から敵意を剥き出しにしてくれていたおかげかはわからないが、今度はエンリ一人での戦いとはならなかった。

それでも狼の習性なのか、何か臭いでもついていたのか、殆どの攻撃は隙を感じさせ

るエンリに集中した。その牙で魔法のかかったエンリの服を貫くことができないまま、あるものは小手で殴られて転がりながら、あるものは服を噛み締めて裏返ったところで、マーレの魔法で爆散した。

狼使いのゴブリンは、魔法で植物に締め上げられているところをエンリが短剣で止めを刺しておいた。髪型や雰囲気の前に突撃してきたゴブリンに似ていた気もしたが、攻撃方法も装備も違うので特に関係はなさそうだ。

——噛まれる前に魔法使ってくれればいいのに。

水を含ませた襪ほろ布で血を拭き取りながら、感じた不満をしまい込む。

思っても言い出しにくいのは、ガゼフから聞いていた話のせいだ。先手を取るように頼んだ場合、間違つて人間相手にトラブルがあつた時に取り返しのつかないことになりかねない。話し合いの時に本当に危ない時は先手をとると言っていたので、不本意ながら今回も危なくなつたということなのだろう。

また、実際のところエンリはあまり危険を感じなくなっていた。

恐ろしかったオーガも冷静に振り返れば動きは遅く、その棍棒も思つたよりずっと軽かつた。ゴブリンの武器や狼の牙に至っては、仕立ての良い丈夫なものとはいえエンリの服さえ貫くことができなかった。その速度もたいしたものとも思えなかつたので、落ち着いて対処すれば次は服で受けることもないだろう。

戦いになると不思議と身が軽くなり力が湧いてくるのは、生まれて初めての戦いがそうであったから、きつと戦いとはそういうものだと理解していた。

子供の頃であれば、農具や刃物を使う際も間違いが起らないよう大げさに注意をされていた。今のエンリにとつては、魔物の恐ろしさについて大人たちから聞かされていたことさえも、それと同じようなことのように思っていた。

カルネ村付近には魔物が現れず、怪我をする大人も殆ど居なかったこともその思いを裏付けてしまう。巨大なオーガはともかく、ゴブリンや狼であれば気性の荒い家畜程度にしかならず、その解体にも躊躇が無くなっていった。

草原の魔物についてはその戦い方などは聞いていないが、採取する場所だけは全て覚えていた。これは薬草や換金作物の収穫方法のようなもので、少し聞いただけでもしっかりと記憶には残っていた。

それでも、経験の無さは如何ともしがたいものだ。狼から切り取る部位は鼻だと聞いてはいたが、顔の突き出た部分のどこまでが鼻かわからない。

少し考えてから、牙があればわかりやすそうなので上あごを丸ごと切断することにした。薬草であれば深く採りすぎると次が生えてこないが、狼は植えても生えてこないので多めに取っておくことに問題はない。

そして短剣で挑んでみたが、これが骨があつてなかなか難しかった。力がみなぎって

いた戦いの間であればどうにか出来たような気がするが、安全になって気が抜けたのかもしれない。

結局、言う通りに他の狼の上あご全てを処理してくれていたマーレに任せ、エンリが削いだのはゴブリンの耳だけだった。マーレの仕事があまりに早かったので良いナイフでも持っているのか聞いてみたら、刃物は使っていないらしい。本当に魔法というのは何でもありだ。

何でもありついでに、エンリはガゼフの紹介状のことを思い出した。

ガゼフのような信用ならない人間の書状を、内容を確認せずに他人に見せることなどできるはずがない。エンリは書状を取り出すと、血の染みなどが無いことを確認してからマーレに渡した。

「これ、読んでもらえる?」

「……読めませんが」

「へ? よ、読めないいいいい!」

「はい、全然わかりません」

——ガゼフでも書けるのに。

エンリは読み書きの全くできない自分のことを棚にあげて驚いた。マーレとの出会

いでだいぶ薄れてしまったが、魔法詠唱者マジック・キャスターといえば、教養があつて賢いが気難しい、そういうイメージを持つていた。

そして、強力な魔法詠唱者マジック・キャスターであるマーレが、戦士のガゼフでさえ可能とする知的作業をできないということは、容易に受け入れられることではなかった。

「魔法詠唱者だから、魔法を勉強する時に文字とか使つたんじやないの?」

「勉強? 魔法つて、この世に生み出された時から使えるものじやないんですか?」

「ええっ!」

紹介状どころではなく、とんでもないことを聞いてしまった。冗談だと思いたいが、その目を見れば、嘘をついているようには思えなかった。少し首をかしげ、何を当たり前の事に驚いているのか、といった表情だ。

エンリは闇妖精ダークエルフの生態を想像し、頭が痛くなる。生まれた時から魔法が使えるという種族の暮らしは、いったいどんなものになつてしまふのだろうか。

子供の喧嘩で死人が出ないよう躰けはされるだろうが、その悪戯までは止めきれぬものではない。

もし魔法で炎が出れば、子供の悪戯で簡単に家くらい燃えてしまうだろう。水を出せる者もいれば大丈夫なのだろうか。村の子供が虫や蛙で遊ぶように、親の目を盗んで蛙や小動物を爆破するくらいはやるだろう。

物語では、妖精族が侵入者を攻撃するからといって森の危険さを説明するものがあるが、きつとあれは間違いだ。妖精族の側は攻撃などしているつもりはなく、迷い込んだ人間は蛙や小動物のように子供の玩具として殺されているだけなのかもしれない。

つまり、強大な力を持つて生まれる妖精族という種が人間から見ても非常識な性格になるのは、至極当たり前のことなのだ。特に目の前の闇妖精から見れば、人間など玩具でしかない。飽きられたら、蛙のように爆破されてもおかしくないということかもしれない。

——あの人たちも、怖くて当たり前か。

エンリは理由もなく嫌悪の視線を向けてきた恐ろしげな森妖精たちと、そんなのを三人も連れて頑張っている天才剣士のことを思い出す。

マーレと森妖精の力関係はわからないし、着ていたものなどを比べればマーレの方が単体では危険なのかもしれない。しかし、終始友好的に接していたはずのエンリに向けていたのは、森妖精たちからの背筋も凍るような嫌悪の視線だった。

あれらはまともではない。やはり、妖精族の類は人が関わってはいけないものなのだろう。エルヤーはそれを三人も連れ回して楽しくやっていると強がるのだから、本当に凄いな。

——かなわないなあ。

並び立てる日が来ることなど想像もできない。しかし、いずれは互いに手を伸ばせば触れられるくらいなの、こちらからも何らかの手助けや協力ができるような関係になれたらと思う。大きな差があるとわかっていても、ただ甘えたままの関係で終わりたくはないかった。

唯一の心の拠り所である優しい剣士を想うことで前向きな気持ちになれたエンリだったが、マーレの小さな手で誰も読めない紹介状を返されたことで目の前の現実を引き戻された。

手の内にあるのは、災厄の象徴ガゼフの手による、中身のわからない書状だ。こんなもの、とても気楽に使えるわけがない。どう考えても嫌な予感しかしなかった。

エンリはできるだけ無難に街へ入る方法を考えながら、旅路を急いだ。

日が暮れる頃、ようやくうつすらと巨大な城壁が見えてきて、決断の時が訪れた。エンリは熟慮の結果をマーレに伝え、マーレはそれを受け入れた。冒険者の登録についても人間の街で名前を出したくないマーレと意見が一致し、それらの費用や都市に入る際の税金も考慮してエンリがマーレの持つ金貨袋の半分を預かることになった。

その後の話もしようとしたが、魔法があるので臨機応変に対応できるということだっ

た。

「街ではなるべく人と関わらず、あまり目立たないようにね。あと、この子の格好は人に見せないようにして」

エンリは、マールレの玩具ということになっている幼い少女の外套を掴み、やや大仰な動作で前をとめていった。

リ・エステイーズ王国の国境近くの街であるエ・ランテルは、壮大な城壁と強固な城門の威容を誇る城塞都市だった。平時においても、門の脇の検問所に立ち寄りなければ何者も都市に立ち入ることはできない。

その検問所の脇に、兵士たちの詰め所があった。

検問に携わる兵士の休憩所を兼ねるこの建物には、疑わしい旅人を取り調べる際に使われる部屋があったが、たいていは通行料の説明とか書類の不備とか、そういう込み入った話をする程度のものだ。

しかしこの日、その部屋は控える兵士たちの緊張感で満ちていた。兵士たちの他には、ものものしい雰囲気黒衣を纏う少女がひとりだけだった。

「カルネ村に登録はあるのに、通行許可書を持たず通行料を払うということで良いのだね」

エンリは頷いた。訝る兵士の気持ちはよくわかる。現金収入の限られる開拓村出身のエンリの価値観において、ここで支払う銀貨は大金だった。

そんなものを払っては街との取引も難しくなるから通行許可書があるのだが、それは村に一枚か、せいぜい二、三枚あるかどうかだろう。いつ戻れるかわからないエンリが持つていつて良いものではなかった。

もちろん、ここで紹介状を出せば支払わなくて済むかもしれない。

しかし、信用ならないあのガゼフの書いた中身不明の書状を出すくらいなら、涙を飲んで銀貨を数枚支払う方がエンリにとってはマシな選択だった。それは普通に考えれば愚かな選択なので、怪しまれるのも当たり前だ。

それでも、相手は亜人や獣ではなく、話せばわかる普通の人間だ。そしてここではエンリ・エモットという人間の登録があり、何も悪い事をしていないのだから、問題が起これとも思えなかった。

「これから冒険者になるので、許可書を持ち出すわけにはいきませんから」

兵士は少し顎を引き、目つきをさらに峻しくする。

「こ、これから……そうか。腕のある冒険者が街に増えるのは喜ばしい事だが——」

ジロリとエンリの姿を、持ち物を見渡す。その視線が時折——駆け出しの冒険者に買えるはずのない上質な服や、血の染みが目立つ金貨袋のあたりで——止まっていることに、エンリは気付かない。

「一応規則なので、身体検査を受けてもらうことになる。よろしいかな？」

「……わかりました」

受け入れるエンリに、兵士は安堵の表情を隠さない。

相手は少女だとはいえ、その格好は誰もが危険な魔法詠唱者として警戒するに違いないものだ。そんな少女が、これから冒険者になるなどと適当なことを、怪しまれていることをわかりきったような余裕の態度で言い放っているのだ。

経験上、どう考えても問題が起こらないはずがない状況だが、この危険人物を怒らせて自分が真つ先に犠牲になることだけは避けたいところだ。

エンリの方は、この時点では詰め所に満ちている緊張感をほとんど問題にしていなかった。周囲を観察していないわけではないが、そこから得られるのはむしろ緊張ではなく安らぎだった。

——規則とか、わたし、まともな対応をされてる。兵士のひとたちも目を逸らさず陰口も言わずにこつち見てるし、ああ、落ち着く。

エンリは王国という組織の評価を一段上げるとともに、比較対象となる戦士団を率いていたガゼフの評価をさらに一段下げた。

あれは人として問題があるからロクな部下が集まらない、エンリの中ではそういうことになった。

その時別の兵士が連れてきたのは、魔術師組合から来ているという、見るからに魔法詠唱者マジック・キャスターという姿の男だった。指示を受ける前に連れてきたのは、少しでもこの部屋の戦力の足しにしたいという気持ちもあったのかもしれない。

見るからに、という点では黒衣のエンリも同様だが、その質は全く違う。季節外れの黒いローブを纏う男は汗にまみれ、それ以上に重厚感のある服装に見えるエンリは涼しい顔をしていた。その服に魔法がかかっているのは調べる前から明らかだったが――。

《魔法探知》

《道具鑑定》

魔法を詠唱する声は随分としわがれていた。それはエンリの考える魔法詠唱者マジック・キャスターらしきにも合致するもので、マーレという存在の不条理さを見てきた身には、むしろ安心感

さえ感じるものだった。

汗だくで鋭い視線を送る魔法詠唱者マジック・キャスターと、それに優しい微笑を返すエンリ。兵士たちは二人の格の違いを見せ付けられたような気がしていた。次いで出る魔法詠唱者マジック・キャスターの言葉にも、もはや驚きは無い。

「魔法の服とは思っていたが、これは並々ならぬ品だ……防御性能も、鋼の全身鎧どころではないぞ」

先に対応していた兵士が何やら耳打ちすると、魔法詠唱者マジック・キャスターの視線がさらに鋭くなった。

「こんな装備を持っていながらこれから冒険者になるなどと、白々しい。お前はいったい、何を企んでいる！」

詰め所の兵士たちがエンリの周囲に回り込む。

「いえ、冒険者になるのは仕方なくて、元々ただの村人だったんです。この服も、旅支度として貰ったもので……」

マーレたちにくっそり街へ入ってもらった後ろめたさで、その名を出すこともはばかられた。仕方なく、を強調したのは正直な気持ちの表れでしかなかったが、そうは伝わらなかった。

「この街最高位のミスリル級冒険者をも上回るような強力な装備が、食い詰めて仕方な

く冒険者になる村娘の旅支度か！ 何故、そのような見え見えの嘘を吐く！」

「い、いや、嘘じゃ……」

エンリは困惑した。相手はまともな兵士で、王国の都市を護る者として当然の対応をしている。それがわかつているからこそ、ガゼフの書状を出すのが怖かった。それが再びエンリをまともでない世界へ連れ去ってしまうかもしれないとさえ思えてくるのだ。

「ちよつと、その腰につけた金貨袋を全て見せてもらえるかな」

その時、不意に横からかけられた穏やかな声は、先に対応していた兵士のものだ。

疑いをかけられても、あくまでまともに扱われている。エンリはそのことに安心し、確認することなく腰のものを机の上に置いた。

血染みの目立つ複数の金貨袋が、机との間で重みを感じさせる音を立てる。兵士たちはそれと、平然とそれを見せ付けたエンリの穏やかな顔を見比べ、戦慄した。

そして――。

「幾つあるんだ……盗賊か!?!」「集まれ！ 集合だ!」「魔法もあるぞ！ 散開しろ!」「北の盗賊団の幹部か?」

結局、最初からまともでない世界へ連れ去られたままだったことを思い知った。

エンリは呆れとも諦めともつかない表情を浮かべ、観念して書状を出そうとカバンに手をつ込む。

その瞬間、一斉に武器が抜かれるが、もはやその表情が揺らぐこともない。出てくるのはただ深い溜息だけだった。

黒衣の少女が一通の書状を机の上へ放り出し、魔法詠唱者と兵士の一人がそれを見る。二人の顔色はみるみる蒼褪めていくのだが、窓の外からそれを窺い知ることにはできない。書状を持った兵士が慌しく外へ走り、魔法詠唱者はコソコソと部屋の隅へ集められた兵士たちは武器を収め、元の持ち場へ戻っていった。

「あれー、終わっちゃったか。つまらない」

女は短い金髪をかき上げて黒衣の女を一瞥すると、残念そうに呟く。黒衣の少女の不思議な余裕も気になったが、騒ぎが起こらないのなら見ていても仕方がない。フードを目深に被り直すと、部屋の中の誰からも気付かれぬまま、滑るように詰め所から離れていった。

——どっかで見たとあるんだよねー、あの娘じゃなくて、服の方だったかな。

慌しく身構えた者たちは、慌しく対応を改めた。

そして、エンリは詰め所の奥にある簡単な応接間に通される。

調度品などが揃っているわけではないが、一応仕立ての良いソファセットが用意されており、ここはそれなりの立場の相手を待たせるための場所らしい。

「大変、申し訳ございませんでした！」「申し訳ございませんでした！」「し、失礼致した……」

エンリは、床に額を擦り付けて謝る人間というものを初めて見た。正確には、蒼い顔で部屋に飛び込んだできた兵長と呼ばれる男が、先ほどまで対応していた兵士と魔法詠唱者の頭を床に押し付けていたのだが。

——みつともない人たち。

エンリは幻滅していた。脳裏に浮かんだのは、ガゼフの取り巻きたちの姿だ。たかが村娘一人に対し、武器を持った大の男が群れをなして血塗れだ魔女だと驚き、戸惑い、うろたえる、あのみつともない連中。

さっきの部屋で目を合わせないようにコソコソと出ていった兵士たちも、目の前で床に張り付いて震える三人も、まさにあれと同類だった。

——今ここで文句を言えば、面倒臭い人たちの相手をしないで街に入れるかも。

エンリは軽く頭を振って、安易な考えを振り払う。

これほど大きな街で、最初からならず者のようなことをして、変な目で見られるわけにはいかない。

目の前の者たちを観察する。最初はまともな対応をしていた兵士たちも、一皮向けばガゼフの取り巻きたちと変わらないことになってしまった。

問題は、どうしてこうなったのか、だ。

頭ではしっかり話を聞いておかねばならないと思いつつも、心がそれを拒む。

なかなかやる気が出ない。関わりたくないのだ。

顔見知りばかりの開拓村で村娘として生きてきたエンリに、このような種類の我慢の経験など無かった。

自然と、呆れたような表情は蔑みを含む冷たいものになり、滲み出る疲れが虚脱した全身を椅子の背もたれに放り出した。

「で、これはどういうことですか」

突然の豹変がガゼフの書状によるものなのは、字が読めないエンリでもわかる。何が

書いてあったか説明させることができるような雰囲気ではないが、どういう理由でここまで豹変するのかくらいは聞いておかなければならない。

苛立つ気持ちを、関わりたくない気持ちを抑えつけて、どうにか言葉を搾り出した。目の前の兵士たちは既に、エンリリにとってまともでない世界の住人になってしまった。本来なら視界に入れたくもないが、話をする以上そうはいかない。

虚脱感に負けたエンリリは背もたれに身体を預けたまま、目だけで兵士たちを見下ろしていた。

「はっ、エンリ・エモット様に対し、この者がとんでもないご無礼を——」

「そんなこと聞いてません」

「では、この魔法詠唱者が、マジック・キャスターくだらぬ詮索——」

「それが仕事じゃないんですか？」

「も、申し訳ございませんっ！」

話が全く噛み合わず、エンリリは大きな溜息をつく。

それに合わせて兵長の身体がびくりと震え、再び兵士と魔法詠唱者の頭が床に押し付けられた。

——もう帰りたい。

豹変の理由を聞こうとするほど、まともでない世界のぬかるみに足を取られてしま

う。

エンリは出された果実水を口にしつつ、ここから脱出する機会を探ることにした。

印象は最悪なのだろうが、せめて飲み物くらいは残さずに。

そう考えてゆつくりと飲み進むと、その度に注ぎ足された。濃さがあつて美味しい果実水で、もつたいたなく思えた。

少し苛立つて、これはもう要らないと断ると、琥珀色の飲み物が綺麗なグラスで運ばれてきた。

グラスも中身もいかにも高そうで、残すのはもつたいたないので一気に飲み干し、おかわりを断った。

それから、頭がクラクラしてきた。

溜息が大きくなり、もやがかかったように、話が聞き取りづらくなった。なんだか身体が熱くなってきた。

窓の外は夕闇が広がり、風に当たったら気持ち良さそうだ。

そうだ、冒険者組合が閉まる前に行かなければならない。

ちようど、ここから出たいと思つていたところだ。

向かい合わせのソファセットには他に誰も座つていない。

一人で何をしていたんだらう。

部屋を出る時、床にうずくまっていた男がいた。

必死な様子で足に縋り付いてくる。

気持ち悪い。

振りほどく。

足を必死に動かす。

振りほどく。

顔を蹴りつけてしまう。

あんな所で床と仲良くしているなんて、きつと酔つ払いか何かだろう。

謝ろうかと振り返つたが、何か騒いでるので足早に去ることにした。

酔つ払いに絡まれると面倒だ。

——大きな街つて、怖い。

「おれ、おれのあし、生えて……うわあああつ!!」

叫びながら、男は千切れたはずの足で地面を蹴って、狭い裏路地の壁に何度もぶつかりながら必死に逃げていった。

マールは不思議な反応に首をかしげる。あちらの方から用事があるのではなかったのか。結局、用事は何だったのか。

人間というのは支離滅裂だ。

エンリも人と関わらないように言っていたし、こちらからは特に用事はなかった。

よくわからない呼びかけに構わず通り過ぎようとしたら、足を掛けようとしてきたから、避けた。

蹴りつけるように追ってきたから、邪魔なのでつい踏み抜いてしまった。

もちろん、人間が脆いことは知っていたが、今は玩具を使えば回復してやることのできるから安心だ。

元通り足も使えて痛みも無くなっただろうに、あの男は何を興奮していたのだろう。他に急用でも思い出したのだろうか。

しばらくマールが思案していると、不意に後ろから声をかけられた。

「その子は……その格好は何なんですか？」

中性的なその声は、決して友好的なものではない。

振り返ると、一人の少年がマールの方へ厳しい視線を向けていた。短く切られた濃い茶色の髪の下で、広く空いた額には眉間の皺が深く刻まれていた。

声の調子も質問というより詰問だった。

皮の服という軽装に杖を持つ少年の姿は、一般的な魔法詠唱者のものだ。男の叫び声に引き寄せられてきたのは間違いないが、既に問題はそこではないようだ。

少年の青い瞳から向けられる鋭い視線は、マールとその玩具の間でちらちらと揺れ動いていた。

マールはエンリリから言われていたことを思い出したが、今回は使う必要があったのだから仕方がなかった。脱ぎ捨てさせた外套を拾って玩具を覆い、前をとめてやる。

「答えてください！ 目を塞がれ、裸同然の格好をさせられていた、その子は一体何ですか？」

杖を構え、少年が語気を強める。そこには、正義感や義憤といった感情とは別の種類の、ドロドロと纏わりつくような敵対的な感情が含まれていた。

「この格好は、この玩具がそうやって使うものだからです」

マーレは玩具と呼んでいる巫女姫の額冠に触れながらその性質の一端を簡単に説明するが、少年が納得する気配は無い。話をきちんと聞いているかも怪しい。

それどころか、少年は憎しみに顔を歪め、身体を震わせていた。さらに、先ほどから物陰に潜んでその少年の方をうかがっていた男まですると近づいてくる。仲間だろうか。

「い、今はそういう商売は許されることはありません。兵士の詰め所まで一緒に来てください。さもなければ——」

マーレを睨みつける少年は剣呑な空気を纏っていた。たとえ街の中でも、攻撃魔法の使用に躊躇が無いほどに。

「ごめんなさい、なるべく人と関わらないように言われてるので」

そう言つて、マーレは無詠唱で集団転移を発動する。転移先は別の路地裏だ。

街へ潜入した時、最初に確認したのがこういう人のあまり通らない場所だった。

——そういう商売つて、何だろう。

人間の街では、わからないことだらけだ。人間など取るに足らない存在だと思つても、よくわからないことで面倒事になってしまう。

マーレはこれ以上の面倒を避けるため、守護者としての仕事の時に使うことにしていた魔法による超知覚を発動しておくことにした。

「あのガキはヤバいぜ。関わらない方がいい」

「ルクルット!」

目の前の二人が消え、行き場を失った怒りで杖を固く握り締めていた少年——ニニヤの前に現れたのは、見知った仲間の姿。少し軽薄そうな雰囲気を漂わせる金髪の男、ルクルットだった。

ニニヤはつけられていたことにも不満はあったが、今はそれどころではない。相手が危険な存在であることも、今回に限っては優秀な野伏であるルクルットよりよく理解しているつもりだった。

今の現象が魔法による転移であれ不可視であれ最低でも第三位階以上のものであり、ニニヤより格上の相手であることは確実だ。

「でも、許せない。それに、助けられるかもしれない」

その感情は、ニニヤが冒険者になった理由に直結するもの。たびたび時間を作つてこゝうして色街やその付近の裏路地を歩き回る理由でもあった。

ニニヤの怒りを理解できるだけのものを見ていたルクルットも、それを無下にはできないことはわかつていた。それでも、仲間を危険に晒すわけにはいかない。

ルクルットは、興奮のあまりニニヤが気付いていなかった地面の不自然な血の跡も把握しながら、その意味をはかりかねていた。

「お前はやらなくちゃいけないことがある。この前の、安宿に泊まつたような相手ならともかく……」

思いついたのは、冒険者としての依頼に関わるものではあったが、以前に仲間たちと関わった人助けの事だ。

その時に懲らしめた流れ者のゴロツキは、街中を探し回った挙句、冒険者御用達の安宿で見つかったのだ。互いに顔を知らない駆け出しが泊まるような宿は、よそ者も多い。背後の組織もないようなワケありの者が潜伏するのにも向いているのだろう。

「そうですね。例の宿でちよつと張ってみませんか？」

ニニヤは真つ直ぐルクルットを見つめる。チームの目であり耳であるこの男はこういう場面では頼りになる。

手に負える相手なら手伝ってほしい、そういう思いを込めての視線だったが、正面から受け止めてはもらえなかった。ルクルットは頭をかきながら目を逸らす。

「あー、今、二人きりでか？」

「……あつ。いや、その……」

ニニヤは少し頬を染め、言葉に詰まる。そしてすぐに、躊躇する理由が無いことに気

付いた。

改めて二人で行くのかと言われてしまうと戸惑いがあるが、彼らのチームは漆黒の剣は男だけで構成されていることになっている。何の問題も無いはずなのだ。

まとまらない思考を畳み込み、ニニヤがよくわからない覚悟に至りかけたところで、助け舟が入った。

「ま、まあ荒事にするつもりはないが、何かあった時、皆が揃ってた方が安全だよな」
ルクルットが弱気になるのも仕方ない。相手は格上なのだから、皆で行くべきということに異論は無かった。

ニニヤはそれ以外の込み入った余計な思考をどこかへ追いやる。

「それぞれですね。今は組合でしたか。急ぎましょう」

二人は表通りへ出て、冒険者組合へ向かった。

第四章 エ・ランテルの冒険者エンリ

一二 前門の虎、後門の大尻

「待て!! 私は反対だ、反対だぞ!」

唐突な発言が呼び込んだ静寂が会議を止めた。

細身で神経質そうな外見に似合わない強い声を発したのは、テオ・ラケシル。エ・ランテル魔術師組合長を務める男だ。

「……突然、どういうことだ? あまり気が進まないが、理由を聞かせてもらおうか」

これにどうにか反応できたのは、ラケシルの友人でその性格をよく知るプルトン・アインザックだ。こちらはエ・ランテル冒険者組合長を務めている。元々は戦士で、往時の勇壮な雰囲気を残しているが、魔法などには詳しくない。今回の会議では場所の提供と、繋ぎ役に近い立ち位置にあった。

「だって勿体無いし……いいから静かにしてくれ!! 理由は今考えているところなんだ!」

途中で起こる疑問の声を、やみくもな大声で制するラケシル。

アインザックはたまらず顔を手で覆った。思ったとおりの理由だったが、その対応は

想定の一割増で酷かった。

「ラケシルの意見は無視ということ、他に何も無ければ——」

「ま、待ってくれ！　そうだ、戦争だ。次の戦争で帝国側の戦力としてそのマーレ殿が出てくることを想像してみてくれ」

苦し紛れに投げ込まれた爆弾は、その場の誰もが無視できない巨大なものだった。呆れ果て、この恥ずかしい友人が次に発言したら部屋からつまみ出そうと心に決めていたアインザックさえも、暴落していたラケシルへの評価を保留して引き締まった表情に戻っていた。

この会議に同席していながら猛者たちの間に存在感を沈めていたパナソレイ・グルゼ・デイ・レットテンマイアも、たまらず肉付きの豊かな顔を嚙猛な猪のごとく引き締め、その身を乗り出した。強さだ魔法だという分野なら他の者たちの方が詳しいので聞き役に徹するが、戦争となれば常に最前線の拠点となるエ・ランテルの都市長としては無視できない話題だ。

「戦士長、その場合の被害はどれくらいになるのですか？　都市を攻撃された場合は城壁はどうなるか、そして糧食を守ることは——」

「被害は一度の魔法で数百から千以上に及ぶこともあるでしょう。有効な反撃を加える手段が無い以上、最終的には数万ともそれ以上とも。都市の城壁がもつかは今後入って

くる法国の被害の詳細次第としても、転移などの手段から街を守る手段は無く、食料庫も同じでしょう」

淡々と語られる荒唐無稽にも思えるその判断に言葉を挟む者は居なかつた。ここにいる者たちは、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの口からカルネ村近郊での戦いと法国の件が語られた際にそういつた反応を出しきっており、その法国の件もパナソレイだけが握っていた法国神都の外交拠点からの一報で裏付けられていたからだ。

もはや共有していない情報は、マーレが法国の側につきかけたことや、動死体やエンリについての部分くらいだった。

その場の殆どの者がただ戦慄する中、ラケシルにとつてはガゼフが可能性自体の否定もせず被害想定を語ったことこそ重要だった。ここぞとばかりに畳み掛ける。

「ガゼフ殿、念のため聞きますが、あなたはマーレ殿や同行している……エンリとかいう娘と完全な友好関係を築いているということでしょうか？」

ガゼフの背中を冷や汗が伝う。その微妙な表情の変化をラケシルは見逃さなかつた。そもそも、ガゼフがどうにかできる相手なら自ら同行を求めればよく、このように先行して根回しを行う必要など無いはずなのだ。

「あなたはその者たちが帝国に味方することが絶対にありえないと、国王陛下に誓うことができませんか？」

「……そのようなことが無いよう、この場においても協力をお願いしたく……」

ラケシルは口の端に勝者の笑みを浮かべる。

「ならば、マールレ殿を国外へ誘導するという方針は撤回ということで、宜しいですな」

異論は出ない。魔法一筋で政治力とは無縁なラケシルのまさかの逆転劇に、その人となりをよく知るアインザックは本当にそれで良いのかと頭を痛めた。結論は納得せざるを得ないものであっても、ラケシルが実際に理由をその場で考えてひねり出していたのは間違い無いのだから。

冒険者時代からの友人の働きによって、エ・ランテルの冒険者組合は恐ろしい怪物をその中に抱え込むことになった。それはアインザックの双肩にも重過ぎる事態だ。

もちろん、王都で貴族たちと接触させるのが王国の危機に直結することはガゼフの説明でよく理解できていた。帝国に味方されても王国の危機となるのは明らかだ。だとしても、それを自らが背負わされて良いということにはならない。

アインザックは空になったデカンタを持って部屋を出る。

完全に人払いをした状態では場所を提供した自身が行うしかないのだが、飲み物にはさほどの意味は無い。防音措置がなされているにもかかわらず、外に漏れれば大変な事になる会議の立ち聞きを防ぎたい気持ちも時折廊下と部屋を往復させていたのだ。

満たされたデカンタを持って戻っても、まだ戦争の話題が続いていた。気持ちはわか

るが、話題としては冒険者組合として関わりたくないものではなかった。

もつと関わりたくないものからは逃れられないのだから、これは八つ当たりと言うべきものかもしれない。

「あまり国と国との話になるなら、私はそろそろ——」

「この街が滅ぶかどうかの話に関心は無いか……そのあたりは戦士長に後ほど聞かせてもらおうことにしましょう」

パナソレイは話の腰を折られたことで軽く毒づくが、冒険者組合長の立場を理解して話を中断した。

「では、国を滅ぼしかねないほどの者が新たに冒険者となった場合、その扱いはどのようなものになりますか」

「ガゼフも流れを完全に断ち切らないまま話題を動かすことで双方に気を使ったつもりだったが、元々言葉の足りない不器用な男だった。そもそも、そのような危険な者が冒険者になるよう誘導したのはガゼフ自身であり、アインザックに面倒を押し付けた形となっているのにこういう言葉が出てしまうのがこの朴訥な戦士の限界だった。」

貴族であるパナソレイは戦士長が宮廷の貴族社会に馴染めず王派閥からさえ疎まれていたことを思い出し色々と納得するが、アインザックにはそこまでの余裕は無い。

「よしなに扱い安全を確保せよというぐに依頼ならば、アダマンタイト級に相当しますな。」

エ・ランテルにはミスリル級までしかおりませんので、すぐに王都で依頼されるとよろしい。依頼料の概算見積くらいならこちらでも算出できますぞ」

アインザックは昨日の会議を思い出し、大きな溜息をついた。

あのような場で王国戦士長をやり込めたところで状況がよくなるわけではないのだが、何度思い返しても自分は悪くないと思えるのだ。

そして、来るべきものは来た。

たった今、受付嬢の震える手から受け取ったのは、その戦士長の名が書かれた書状だ。但し、状況は想定とは少し違うものだった。

——彼から話を聞いておいてよかったな。

神殿で療養中の戦士団には、かつてエ・ランテルで冒険者をしていた男がいた。戦士長のことを疑うわけではないが、冒険者としての視点を持つ者に「国を滅ぼしかねないほどの者」について聞くことで情報を補強しておくのは当然の事だ。

マールという闇妖精ダークエルフについては、視点を変えても評価にさほどの違いは無かった。

細かい質問を繰り返した結果、戦士団を圧倒していた敵部隊との比較でいえば予想される難度は最低でも百三十以上、魔法のモニターの中の出来事が真実という前提では百

五十を超えていてもおかしくなかった。

それだけでも有意義な話だったが、帰り際には戦士長が伏せていた情報が得られた。マーレという非常識な存在を戦士長から託されるだけあって、同行者のエンリという娘も常人ではなかった。

血塗れの服を着て村を徘徊し、敵兵の指を切り落としたり、見せしめに敵兵を動死体にして仲間の死体を喰らわせるなど厳しい尋問を行っていた恐るべき魔女、それがエンリという娘の正体だった。旅立つ際に冒険者として様々な助言をした際も、魔物については王国戦士長より強いものでなければ説明は不要だと言い放った猛者だという。

嘘をついているようには見えなかったし、都市長の前であれば伏せておいたことも納得できる内容ではあったが、その時は話半分に聞いていた。王国一番の戦士を軽く見るような存在が、そう簡単に何人も現れてたまるものかという思いがあった。

しかし、今はそれをすんなりと受け入れている。むしろ同行者についての情報がなければ、状況を説明した目の前の受付嬢が過労でおかしくなったと考えざるをえないほど、状況がそれを後押ししていた。アインザックは部下の前で威厳を失わないようこつそりと深呼吸を繰り返しつつ、ゆっくりと階段を下りていった。

夕闇の中、外の風は心地よいものに変わっていた。澄み切った空気がエンリの五感を覆っていたもやのようなものを少しづつ剥ぎ取っていく。

日が暮れつつある街には所々に灯りが出て、表通りであればさほど危険も感じない。

エンリは聞いてあつた道順を辿り、看板に必ず備えられている絵柄を見ながら、どうにか目的の冒険者組合を発見した。街の中で行き方を聞いていたのはここだけで、宿の一つもわからない。全て組合で紹介してくれると聞いていたので、間に合わなかったらこの大きな街で野宿ということになりかねなかった。

説明不十分なガゼフの部下に心の中で毒づきながら、建物の中へ入る。

内部のつくりは、初めての来客にも親切なものだった。少し広い空間の端には幾つかの扉や談笑スペース、沢山の紙を貼った掲示板など雑多なものがあるが、とりあえずは素直にカウンターへ行けば良さそうな形になっている。

しかし、安易に前へ進むことはできない。

エンリはこれまでの経験で他人の視線には敏感になっており、入口をくぐった時から気付いていたことがある。建物に入った時から、カウンターで唯一手の空いていた受付嬢がエンリの方をギラギラした目で値踏みするように見つめていたのだ。

他の受付嬢とは一線を画するただならぬ雰囲気は人間が苦手になりつつあったエンリにとって脅威であり、草原の狼どころではなく、言い伝えでしか知らないトブの大森林の虎にも匹敵するのではないかと思われた。孤高の獣を思い浮かべたのは、たった一人であのガゼフの取り巻きを超える何かを感じさせたからであり、エンリの中の何かが警鐘を乱打していた。

——あれは虎だ。近づいちゃだめだ。

初めて入った冒険者組合のホール。行き交う様々な格好の冒険者たちの姿は開拓村から出てきたばかりのエンリにとって物珍しく、それに目を奪われて歩みを止めるのは当たり前のことであって、決して不自然ではないはずだ。

エンリはその歩みを露骨に遅らせ、冒険者たちの世界を観察した。

それでもカウンターの虎からの鋭い視線は外れない。

あちらから声をかけてくるという手段もあることに思い至り、エンリは取るべき態度を修正して周囲を観察する視線を鋭いものにする。あの猛獣に隙をみせるわけにはいかない。田舎者と思われれば、あちらから動く口実を与えてしまうかもしれないからだ。

こうなったら、たとえ荒くれ者たちと目が合っても、目を逸らして弱気を見せるわけにはいかない。これは戦いだ。

エンリは自分を鼓舞した。

大げさに騒ぎたてたり変な目で見たりしてこないような、ただ強いだけの人間ならどうということはない。たった一人でオーガに正面から向き合ったあの時に比べれば、どんな荒くれ者でもどうにかなるような気がする。突然マルカジリとか言い出すこともないだろうし。

まだ少し暇が重かったが、そのことで最初から目つきが悪くなっていたことには気づかなかった。

雑踏の中、覚えのある草の匂いが迷い込んできた。決して良い匂いではないが、見知らぬ場所で見えのあるものに接すると若干の親しみを感じずにはいられない。それを辿ってみると、がっしりとした体格の野蛮な雰囲気を持つ男に行き着いた。腰に下げた袋には薬草が入っているのだろう。一緒にいるのは金髪碧眼の、特徴の少ない戦士風の男だ。

その二人組の冒険者は、別の受付嬢から幾らかの銀貨を受け取っていたところだった。あれは魔物を倒したことへの報奨金なのだろう。カウンターに置かれた袋からはその証でもある血で汚れた耳がはみ出ていて、それを前にした受付嬢の柔らかい笑顔との対照が今いる世界がどういう場であるかを如実にあらわしていた。

あの虎はまだエンリから視線を外さない。いくらそうい世界だといっても、最初か

ら獲物を狙う猛獣が身構えているような場所へ飛び込んでいけるほどエンリは勇敢ではなかった。

エンリは柔らかな笑顔が印象的な接客中の受付嬢に狙いを定め、冒険者組合の中を見て回るふうを装いながらも、その前の二人組の動向をちらちらと気にしていた。あくまで目的はまともそうな受付嬢であつて、その二人が若干の居心地の悪さを感じていたことまでは気がつかなかつた。

「い、いらつしやいませ」

「あのつ、そういうの、ここで大丈夫なんですか？」

エンリの作戦はその問いから始まつた。危険な受付嬢に絡まれないよう、わざわざ空いている所を避けたのではなく、それが気になつたからここへ来たんですよ、というメッセージを含めたつもりだ。

受付嬢は先客が席を立ててすぐにカウンター前に滑り込んできた黒衣の少女に若干戸惑つていたが、その視線の先にあるものに気付いて言葉と行動の意味を理解した。

「精算の終わった袋を後ろの台に移しつつ、すぐに適切な回答に辿り付く。」

「モンスター討伐の報奨金でしたら、冒険者としての登録のある方にお持ちいただけ

ば、こちらで可能です」

受付嬢はエンリの装備を見て、土地勘の無いワーカーか、旅の途中でモンスターを狩った法国の人間あたりだろうと予想する。プレートの有無は目の前に座った時から確認済だ。

「私、冒険者として登録したいんですが」

「……はあ。」

受付嬢ウイナ・ハルシアは、目の前の珍客の扱いに困っていた。

登録を願い出た久々の新参者は、高価そうな魔法の服に身を包んでいながら魔法詠唱者では無いという。それどころか野伏や盗賊の技術も持たず、武器も剣も数度しか振るったことがないという話だ。

ふわりと酒の臭いが漂う。しかし、冷やかに来た酔っ払いと考えるには服装と持ち物がおかしい。髪や手先を見れば金持ちの道楽とも思えず、ワーカーや法国の実力者がそういうことをするとも考えにくい。

これはいったい何者なのだろうか。

こんな時頼りになるのが、いつの間にか空席の隣のカウンターへ移動してきていた同

僚のイシユペン・ロンブルだ。たまに何を考えているのかわからないところがあるが、この件に興味馞々なのはその態度から明らかだった。彼女なら喜々として珍客の相手をするに違いない。

タイミング良く向こうから来てくれた願ってもない助けに感謝し、ウイナはイシユペンに満面の笑みを向ける。

仕事を押し付ける形になるので笑顔のまま助けを求める言葉を選んでいると、何が入らなかつたのか、不満げな表情と舌打ちが返ってきた。確かに変わった所があるのはわかつていたが、このように急に感じが悪くなるような人間ではなかつたはずだ。

手をぱたぱたと振って何か言いたげなので耳を寄せてみるが――。

「勝ち誇るな、泥棒猫」

顔を歪めてそう呟くと、イシユペンは素早く手元の書類をまとめて席を立つてしまった。足音が無駄に大きい。書類を残さないということは、今日の仕事は終わりだということだ。

もはや同僚の行動や意味を考えても疲れが増すだけだ。完全に孤立したウイナは覚悟を決めて、黒衣の珍客に向き直った。

「さすがに戦えなければ冒険者は難しいと思います……」

「弱いモンスターばかりですが、一応戦ったのでこれだけでも換金したいんです」

エンリは討伐の証の入った袋をカウンターの上に置いた。その量に受付嬢は目を丸くする。袋の口が少し開いて中身が見えると、先客には涼しい顔で対応していたはずの受付嬢が少し眉をひそめた。

「こつ、これだけの量を、おひとりで？」

「いえ、一緒に魔法詠唱者マジック・キャスターが一人います。わけあつて登録するのは私だけです」

「……わかりました、手早く鑑定をさせていただきます。これだけあれば登録料を差し引いてお渡しできますので、しばらくお待ちください」

受付嬢は袋の中を覗きこみながら奥へ向かう。

エンリは周辺に這い寄る虎——いつの間にか隣のカウンターまで迫っていた危険な方の受付嬢が居ないことを確認し、安堵の笑みを浮かべて受付嬢の大きめのお尻を見送った。

ただの村娘でしかなかったエンリが冒険者になるといえば、心配されるのは当たり前のことだ。そういう当たり前の対応をしてくれることが嬉しく思えた。

——ふつうの人にして、よかった。

「あの、確認ですが、あなたと魔法詠唱者マジック・キャスターの二人で取ってきたということでしょうか」

「はい」

カウンターに戻った受付嬢は、引きつったような笑顔を浮かべて確認する。

エンリは嫌な予感に囚われかけるが、手探りでカバンの中の書状と金貨袋を確認して気を落ち着ける。不味いものは出していない。今の段階で、おかしなことになる要素など一つもないはずだ。

何より、目の前の受付嬢は、今のところ普通に対応してくれている。逆にこちらに何か不備があったら詫びなければならぬ。

「……あなたがモンスターと戦えるということは充分にわかりました。しかし、次からはオーガの耳は引つ張らず刃物で切り取っていただけると助かります」

「あつ、ハイ。慣れないもので、不器用ですみません」

幾らかの怒りを含んだ声をうけて、エンリは素直に謝った。

かつて薬草採りを習った時も、最初は色々言われながら学んだものだ。自分の分は丁寧にやったつもりだったが、オーガはマーレがやってくれたものなので、後で伝えておけばいい。

受付嬢が苦い顔で頬を震わせていたが、エンリは気付かなかった。

「狼については、頭蓋骨を含まない鼻先の部分だけで結構です。上あごの骨ごと持ってきた人なんて初めてです」

「ごめんなさい。初めてでよくわからなくて」

少し大きい震えの混じる声で言われ、しつかりと頭を下げて謝る。

今度はエンリの責任だ。自身の判断を思い返せば、声を震わせるほど不機嫌な声で文句を言われるのも仕方ないかもしれない。

鑑定をするということは、相手は専門家を抱えている。素人判断でわかりやすくしようとして牙まで付けておいたのはやりすぎで不愉快だったのかもしれないし、取り扱う人が怪我をするおそれがあるとか言われれば本当に平謝りしかない。

しかし、エンリの真摯な反省の気持ちは、受付嬢には全く届いていなかった。

「よくわからないと、あなたは素手でオーガの耳を引きちぎったり、狼の上あごを掴んで骨ごとむしり取ってくるんですか!!」

苛立ちと恐れ狭間から搾り出された声は、最後は悲鳴のようでもあった。受付嬢の今にもすり切れそうだった笑顔は、いつの間にか半泣きに変わっていた。

周囲の冒険者たちに助けを求めたいような気持ちでぶちまけられたその声は、冒険者組合の猛者たちの喧騒を一気に鎮めてしまった。

エンリは釣りあげられた魚のように、口をばくばくとさせるしかなかった。

急に情緒不安定になった受付嬢が何を言っているのか理解する前に、まず不意の静寂と集まる視線に混乱した。間違いを次々と指摘され平身低頭のエンリだったが、今は詰問されている内容の方向性に強い違和感を覚えた。

「確かに武器に慣れてないというのはその通りでしょうよ。オーガの硬い皮膚や狼の頭蓋骨を素手で引きちぎれる人に武器なんていらないですよね」

「な、何を言ってる……」

必死に受付嬢の言葉を追いかけてながら、エンリはマーレが刃物を持っていなかったことを思い出した。

仕事が早いので勝手に魔法でやっていたと思っていたが、その作業を確認したわけではなかった。狼の上あごは自分ではとても無理だったが、ほとんど言う通りにマーレがやってくれたのでそのまま任せていただけだ。ということ……。

凶々しく居座る静寂が息苦しい。

無遠慮に刺さる視線が気持ち悪い。

何が悪かったというわけではない。

何も悪くないか、全てが悪かった。とても思考が追いつかない——。

「とぼけても全部わかってるんですよ。オーガの耳は相当伸びてたし、狼の上あごは三

本の指で骨ごとえぐつた跡がありました」

「いや、それは私じゃなくて——」

「一緒にいたのは魔法詠唱者マジック・キャスターだけですよね。別にごまかさなくていいですから」

何か開き直つたような、有無を言わさぬ態度の受付嬢に退路を塞がれ、ようやくエンリは理解した。目の前の女が立ちふさがっている限り、まともでない世界から出ることはかなわないということ。

何より、これ以上状況が悪くなることなどありえないという確信もあつた。

詰め所での扱いもまともでなかったが、少なくとも人間扱いはされていた。最後の方はよく覚えていないが、その場を出ることができたからこそ今があるのだらう。それに比べて、指で骨をえぐるなどというのは明らかに人間の所業ではない。

この女を相手にしていても出口も見えない。周囲の冒険者たちの視線は詰め所の兵士たちのそれよりずっと鋭くて痛い。もはやエンリには他にとりうる手段は残されていなかった。

「もういいです。これを偉い人をお願いします」

一刻も早くこの女をどかさなければならぬ。

エンリは状況の好転とは言わぬまでも、せめて仕切りなおしを期待して、ガゼフからの紹介状を受付嬢に手渡した。

書状を手にして、涙目になって震える受付嬢の蒼ざめた顔は、すぐに視界から外した。もう目の前の女が黙ってくれればそれだけでよかった。

「エンリ・エモット様、大変失礼致しました！　すぐに組合長を呼んでまいりますので少々お待ち下さいませ！」

——ここでフルネーム……！

去り際の重い一撃が鳩尾のあたりをキリキリと締め上げる。

エンリはカウンターの端にお尻をぶつけて全力で走っていく受付嬢を見送りながら、その大きめのお尻を忘れまいと心に誓った。顔の方は、最近ああいう表情をされるとすぐに記憶から消してしまいたくなるので、今回も覚えられそうになかった。

「組合長、こちらです」

エンリが一番嫌いな表情で固まった受付嬢は、それだけ言うとは組合長と呼ばれた男の後ろに隠れてしまった。

「私が組合長のプルトン・アインザックだ。エンリ・エモット君だったかな、戦士長から話は聞いている」

組合長と呼ばれた男は、エンリの近辺を見渡して一瞬怪訝な顔をするが、すぐに歴戦

の強者にふさわしい余裕のある表情に戻った。

エンリは書状を出す前から急変していた受付嬢の対応と周辺の冒険者たちの視線やざわめきに辟易していたが、ようやくまともな大人に出会えたことに心から安堵していた。

災厄の象徴であるガゼフの書状を見ても、さらに直接話を聞いていても堂々とした態度でいてくれるアインザックは、それだけでエンリにとって信用するに足る人物となった。

——さすが冒険者の親玉、まともな人でよかった。

組合長の方からわざわざ会いに来た上、戦士長という言葉が出たことで周囲の注目の質がさらに変わっていくのだが、エンリは既にそのあたりの感覚が麻痺しかけていてよくわからない。

「はい。冒険者になりました」

「仲間は、どうしたのかね？」

会つてみたいような、みたくないような、そんな心境を抑えての問いだ。

アインザックは今は立場に相応しい余裕のある態度を装っているが、相手がエンリだけでも階段を下りる間に深呼吸を七回繰り返していた。もちろん、組合長が直々に出てきたことによる周囲の雰囲気の変化やその反応などを気にする余裕など残っていないよう

はずもない。

「それなんですけど、旅の途中でエルヤーさんというワーカーに出会いまして……ご存知でしょうか」

「……あの男か。あれはかなり特殊だから、話くらいは聞いたことがある」

「私も、ああいう形なら冒険者でもやっていけると思ったので、同じやり方で自分だけ登録しようと思うんです」

エンリは自嘲するような、開き直ったような態度で申し出た。受付嬢と話をするまでは、それだけで全てうまくいくと思っていたのだ。

その申し出は、一人の人間としても、個より群の力を重んじる冒険者組合の長としても忌むべきものだった。

アインザツクは露骨に顔をしかめるが、目の前の少女を敵に回すわけにはいかない。表情を戻しながら、態度に出ないよう不快感を抑えつけながら、接し方を考え直すためにガゼフらから聞いていたことを思い出していった。

——戦士長はマーレという闇妖精ダークエルフの名前と存在を伏せるといふ……つまり、そういうことか！

この女は戦士長の求めに応えてか、本当の脅威であるマーレを隠蔽するつもりなのだろう。他者にそれを刺激させないための身代わりとして、自ら泥を被ろうとしている。

それがアインザックのたどり着いた答えだった。

「……規則の上では問題は無い。世間体はよくないが、それでもいいのかな」

「わかってます。今さらどう思われても仕方ないですから」

「では、少し話したいこともあるから、今日は私が手続きをしよう。上へ来てくれ」

ギルドの上階での話は、殆どがマールレの使う魔法やその力に関する問答や確認だった。

戦士団とともに戦ったところを見ていないという答えにアインザックは落胆したが、騎士が爆発したという辺りでは詳細に、何度も聞き返していた。見たことも聞いたこともない魔法については、明日朝にでも友人に確認せねばならない。

時間が遅いので簡単に、と言われながら全く簡単にはすまなかったが、エンリは目の前の貴重な理解者のために時間を使うことに悪い気はしなかった。威厳はあったが、普通の冒険者であれば立場の割にやたらと紳士的で丁寧だったことを気に掛けたかもしれない。

しかし、冒険者組合長という地位の重さをよく知らないエンリは違和感を覚えなかった。村を出る頃からの短くも濃厚な経験のために、苦勞を察してくれる人間には強い親近感を覚えるようになっていた。

冒険者としての登録自体は、非常に手早く済まされた。それだけ話を聞くことが大切だったのだろう。

規則で最低ランクの銅級からとせざるをえないことを説明され、平常通りの取扱いをされたことにエンリは安堵した。

エンリの機嫌を損ねずに済んだことで、アインザックも安堵した。

互いに相手がそうする理由も分からないまま、疲れた微笑みを向けあうことでその場の空気が和んだものになった。

「周囲から色々言われることもあるだろうが、私は常にエンリ君の味方だと覚えておいてくれ」

あくまで和やかに、穏便に進んだ話の最後は、冒険者御用達の安宿の紹介だった。

駆け出し冒険者にとって宿の役割は泊まるだけではないため、相応の場所に行かないと変な目で見られるという。紹介されたのは粗末な宿ではあるが、銅級冒険者には銅級冒険者なりの分というものがあって、それをわきまえておいた方が問題が起らないということだ。

最も安い宿かと聞かれれば、アインザックは申し訳無さそうに頷く。それは村娘だったエンリの金銭感覚において、むしろありがたいことだった。

そこでは、他の銅級冒険者たちとは釣り合わないということで、相部屋で仲間を見つめることは考えず個室にするよう釘をさされる。

確かに村娘と荒くれ者たちでは釣り合わないのは当然で、元よりそれらと相部屋など怖くて考えもしないが、これも人を見る目のある組合長なりの配慮なのだろう。

ガゼフは会議の後、何度かアインザックの言葉を反芻していた。

別に恨みに思ったわけではない。王都に帰ったらアダマンタイト級冒険者チームに依頼することは、最初から考えていた選択肢の一つだった。

これが王国戦士長になったばかりの頃のガゼフだったら、素直にそのまま概算見積を頼んでしまったことだろう。そして、次に会った時には何故か距離を置かれているのだ。

カルネ村を去る前にマーレを村娘でしかなかったエンリに任せたのは、一時的な逃避と言われても仕方の無い行動ではあったが、ただ背を向けて遁走したわけではない。自

らが同行して王都にでも連れ帰ろうものなら、貴族たちのちよつかいで一気に王国の危機となる可能性さえあった。

この状況では、苦手な根回しを行って、エ・ランテルと王国の安全を確保しつつ次の手を打つしかなかったのだ。

アダマンタイト級冒険者チームは王国に二つ存在し、ガゼフが依頼を考えていたのはそのうちの青い方と言われる『蒼の薔薇』だった。より歳が若く考え方が柔軟であろうことと、かつて所属していた古い知り合いの存在がそちらを選ばせた理由だ。

古い知り合いの名は、リグリット・ベルスー・カウラウ。200年前に幾多の魔神の脅威から世界を救った十三英雄の一人で、おそらく人間であるため存命なこと自体が非常識に思える老婆だ。

伝説に謳われるほどの存在とはいっても、それでもあのマールレに対抗できるほどの力があるわけではない。ここで重要なのは、彼女が「死者使い」と呼ばれていたことだ。

不死者の扱いに長けたリグリットがいたことのあるチームであれば、動死体を作って死者を喰らわせることで戦いの跡を「きれいに」するような感性の持ち主とも問題を起さずうまくやれるかもしれない。

ガゼフはリグリットから貰った不思議な指輪のことを思い出す。

今の自分は、その力を次の世代に託そうという英雄の思いに応えるだけの存在といえ

るだろうか。

今、世界の危機と正面から対峙しているのは、ガゼフではなくエンリだ。そして、依頼を受けてもらえるなら『蒼の薔薇』がその役目にあたることになるだろう。今は、しからみの無い若者たちに未来を託すしかない。

「銀級が今さら俺の店に来るとは珍しいな。新入りへの挨拶なら、脅かすだけにしておけよ」

主人の野太い濁声だみごえは、彼らがここを常宿にしていた頃と変わらないものだった。

久々にこの店に現れたのは『漆黒の剣』といって、ニヤとルクルツト、そして冒険者組合で合流したペテルとダインからなる四人の銀級冒険者チームだ。

ここは主に銅から鉄のプレートを持つ冒険者や顔を知られたくないような流れ者が利用する安宿であり、『漆黒の剣』のような銀級以上の冒険者の利用は少ない。

「ちよつと尋ね人があってね、そっちが目的じゃありませんよ」

「新入りといえは、今日はとんでもないのが組合に来てたぞ——」

ペテルが口を開く。ニニヤとルクルツトが持つてきた話がなければ、今日はこの話を近いランクの冒険者たちと語り合っていたはずだった。

一緒に居たダインが説明を補い、ルクルツトが大げさに驚き、隣で飲んだくれていた鉄級チームも話に加わる。話題の新入りの非常識な膂力りよりよくに話が及ぶと亜人だの怪物だの王都のアレとどつちがヤバいかだのと盛り上がり、途中出てきたエルヤーという名前にはニニヤが露骨に嫌悪感を表していた。

「恐ろしい女がいるもんですね。ムシヤクシヤしてたんで、話聞いてなかったら危うく絡むところでしたよ」

「そこは敢えて挑めや。相手はド外道なんだし遠慮なくガツンと行つとけ」

「報奨金も出ないのにそんな怪物女に挑む馬鹿はいねえですよ」

助かった、という表情の鉄級チームの一人にルクルツトがハツパをかけるが、あつさり流される。

「その人、本当に外道なんでしょうか」

「ん？ エルヤーつてのはそういう奴なんだろう？」

「いえ、女性が同じことをするとは考えにくいし、あれを真似て一人で登録したというだけかもしれない。それに、駆け出し冒険者の収入では森妖精エルフなどの奴隷が買えるとも思えません。下劣な金持ちならそれこそ奴隷を買って引籠つて、貴族様みたいに自分

の屋敷で好き放題に欲望をぶつけているんじゃないでしょうか」

最後に滲み出てきたのは、あどけなさも残るニニヤには似合わない嘲るような薄い笑みだ。そこにはドロドロと纏わりつくような憎しみが込められていた。

そこにただならぬものを感じた鉄級冒険者の一人は、奴隷の値段なんてどうして知っているのか、という疑問を呑み込んでおいた。

「ふーん、言われてみればわかる気もするな。それにしても、お前さんの貴族嫌いは相変わらずだねー」

「実害を目にすれば誰でもそうなります。……まあ、その人も傲慢だとは思いますがよ。一人で登録するのは、ただ自分の強さに自信があつて、仲間なんてどうでもいいってだけかもしれないってことです」

ニニヤは基本的には冒険者という種類の人間が好きになっていた。貴族に奪われるだけの村人として何もできずにいた昔の自分や隣人たちと違って、冒険者とは仲間たちと一緒に悩み、協力しあつて自ら目の前の問題を解決することができる存在だ。

エルヤーのような途中で道を踏み外したドロップアウト組はともかく、これから冒険者の世界に踏み込んで来る者が、醜い貴族の豚どものような奪う側の存在と同じであるかもしれないなどは想像することもできなかった。

黒衣の少女が二人の幼い少女を伴って店に入ってくる、その瞬間までは。

一三 エンリとマーレと『漆黒の剣』

——とうとう、最後まで言えなかった。

冒険者組合についての説明は、当然、依頼を貼り出された掲示板にも及んでいた。しかし、エンリはいかなる文字であろうと、一つたりとも理解することはできないのだ。あの場の荒くれ者たちの誰もがそれを読めるのだと思うと、エンリは田舎者の自分を恥じずにはいられなかった。

「あの掲示板ですが、その……私には……」

「ああ、気を遣わなくて結構。銅級冒険者向けに貼り出されているものでは実力的に困るといっようなのはわかっている」

「あつ、ハイ」

アインザックの指摘は、文字が読めないエンリが忘れていたもう一つの問題に先回りして配慮してくれたものだった。冒険者になるにしても、ただの村娘に普通の冒険者が受けるような仕事ができるはずがない。マーレが居るとはいえ、エンリは危険に晒されないとは限らない。むしろエ・ランテルへの道中では率先して危険に晒されたような気さえする。マーレを基準にしてはならないのは明らかだ。

「規則といつても不本意な仕事を強いるつもりはないんだ。エンリ君さえよければ、信頼できる人から指名の依頼という形で何か見繕ってもらふことにするが、どうかな」
「指名……ですか？」

特別扱いという嫌な予感もするが、普通に冒険者として危険な依頼をこなすよりは、何らかの配慮をしてもらつた方が良いのは間違い無い。目の前にいるのは、エンリにとつて信用できる人物なのだから。

「君にちようどいいものを用意するにはそれが一番だと思つている。もちろん、私の目算が外れて簡単すぎるものになってしまうかもしれないが、それでも構わないかな？」
「はい、お願いします」

簡単すぎるものなら歓迎だ。冒険者としての実績ができれば、ガゼフが口にした徴兵みたいなふざけた話も縁遠くなるはずだ。

エンリは全てを察した上でのインザックの暖かい配慮が嬉しかった。そのまま話の腰を折る気にもなれず、最後まで文字が読めないことを言いだせなかった。
「では、決まつたら後で紹介する宿へ人をやろう。その宿に泊まらない場合は、朝のうちに組合へ顔を出してもらえると助かる」

エンリはインザックの配慮を思い出し、少し足取りが軽くなった。わざわざ簡単な

依頼を用意してくれるのだから、文字が読めないことは機会があったら相談すればいい。今日はまだもう宿で休むだけだ。

城塞都市エ・ランテルには、巨大な墓地が存在した。毎年のように続く戦争の際の拠点となるこの都市には王国で最大の食料庫だけでなく、戦死者のために最大の墓地が必要とされていた。

その一角、由縁も忘れられた古い霊廟の地下に存在する隠し部屋では日々血なまぐさい儀式が行われていたが、この日はその雰囲気にもぐわぬ不安な女の声が響いていた。

「はあ？ 風の神殿一帯が壊滅？ いやだなーカジっちゃん、もうボケちゃったの？ あのあたりは風花の本拠地で、魔法的な防護も凄いなだよ」

「……全て、ズーラーノーンを通して確かな情報だ。難航しているようなら法国で事做起こしたらどうかと他の高弟を通して連絡があった。準備に時間がかかると言うてお

ろうに……。というか、お前の持つてきたそれはその時の混乱に乗じて奪ったものではないのか？」

「知らないよそんなの。ここ、よく見てよ。この黒い水晶は闇の巫女姫のものだつて証。この叡者の額冠は、闇の神殿から自分だけの力で取つてきたものなんだよ。カジっちゃんか冷たいと思つたら、タナボタみたいに思われてたんだ。悲しー」

女は頬を膨らませながら、額冠の中で最も大きな宝石がはまった部分を見せつける。

「ふん、そんなものがあつても使える者がおらんわ。それであれば、持ち出されてから行方不明になつたという神器でも——」

「神器が行方不明つて、本格的にボケたの？ あれは持ち出す時は漆黒聖典が守つてるんだよ」

「その漆黒聖典も出撃した者の行方が知れないとか言われておる。大災害のあと、巨大な魔獣が現れたという話もあるぞ」

「ううわー、破滅の竜王とか、神都に出ちゃつたつてこと？ ……ちよおつとありえないし、あつたとしてもそんな話漏れるわけないじゃん」

「やられたのは風の神殿だと言つたろうが。風花聖典がズタズタなら、法国といえども諜報も防諜も知れているということだ」

「ふーん。風花の影を感じなくなつたような気がするのも、そういうことなのかな。い

ちお、まだ油断はしないけどねー。……で、話を戻すけどカジット・デイル・バダンデー
ル。同じブローラー・ノーン十二幹部として協力しない？」

不意に女の口調が変わった。

女の提案は、叡者の額冠を使ってカジットの行っている儀式を前倒しで行うというも
のだった。女はその混乱に紛れて、綻びの出してきた追跡の手を一気に振り切るつもりで
いた。その計画の鍵となるのが、エ・ランテルに住む有名な生まれながらの異能持ちで、
あらゆるマジックアイテムを使用可能なンファイアという男だ。

数年を費やした計画を大きく後押しされる形のカジットは全面的な協力を約束しつ
つ、監視の緩みを知って浮ついていっているようにも見えた女に釘を刺しておく。

「クレマンティーヌよ、その男の祖母は第三位階までの魔法を使い、名声もある。厄介な
事にならぬよう、決行までは関わらず、慎重にな」

「んふふ、わかってるって。……さーて、ちよつと安全になったみたいだし、明日明後日
くらいにはやっちゃおっかなー」

その三人が店へ現れた瞬間、銀級冒険者チーム『漆黒の剣』は凍りついた。そこには、許せないものと、恐ろしいもの、今日の話題の全てが存在したからだ。

ニヤとルクルットの話を聞いていない隣のテーブルの鉄級チームは、先頭の黒衣の少女の姿をじつくりと観察しつつ、通路側のメンバーは座ったまま背中を丸め、じりじりと椅子ごと前に動いて予め通路を広く空けていた。『漆黒の剣』の反応から、それが話題になっていた新入りであることは明らかだった。

余計な情報の無い分だけ観察は捗り、鉄級の四人は目で合図しあうとテーブルの上で顔を寄せ合って小声で印象を語り合う。

「奴隷商人だな」「八本指」関係者」「イジャ……ニんヤ?」「ズーラーなんとか」

あとの二人は、言いたかったものを取られたとばかりにどこかで聞きかじった名前も覚えていないものを挙げていた。

「二人部屋もあると組合長さんから聞いてます」

エンリはアインザックの助言を忘れていなかった。相部屋を前提に話を進めようとした宿の主人に流されず、きつぱりと個室を要求する。相部屋を勧めてチームを組ませるのもこの宿の役割であり、冒険者相手なら個室は自ら望まない限り提示されないのだ。

「ほう……銅のプレートが組合長ときたか、駆け出しが会える相手じゃないんだがな」
「紹介状を出したら向こうから来ただけです。釣り合わないので、仲間は作らない方が
良いから個室にするよう言われました」

他の冒険者と馴れ合えるとは思っていない。同じ境遇のエルヤーも言っていたように、危険で気難しく人間社会の常識を知らない妖精族など連れていては当然世間体も悪く、結局は孤立するに決まっているのだ。

そして、この店に入った時も、荒くれ者たちの視線が集中した。エンリはこれまでの経験からさすがに気圧されることはなくなつたが、幾人かは強い敵意があるのではないかと思えるほどの鋭い視線を向けてきていたので、関わりたくないのが本音だった。妖精族の性質や所業を考えれば、種族自体を嫌悪したり恨みを持つ者がいても仕方ないことなのだろう。

主人はテーブルの方を一瞥すると、この少女の言葉に対してそちらから当然起こつてくるべき短絡的な怒りの反応がみられないことで、目の前の少女が話題になっていた新入りであることを理解した。

「ふん……お前しかプレートがないのもあれの考えか？」

「それはエルヤーという人の勧めですけど、組合長にも理解はしてもらえました」

主人は一行の装備を観察する。稀に金持ちの子息や受け継いだ遺品など一人だけ良

い装備を持って死に行くような世間知らずも見てきたが、目の前の者たちはそれらとも明らかに違っていた。黒衣の少女と幼い闇妖精ダークエルフの装備はいずれもその価値が容易にわからないほど上等なもので、外套で装備を窺い知れない少女の方も目を塞いだ上にはたならぬ雰囲気雰囲気の額冠額冠を付けている。

これだけの装備が揃うなら、力量もそれなりと考えるしかない。魔法詠唱者のような軽装ばかりで極めてバランスは悪いが、組合長が対応するほどなら仲間などもそちらで相応の相手を考えてもらった方が良いだろう。

「ちっ、あれが認めてんなら好きにすればいい。体格的に二人部屋でもいいのだろうが、飯はオートミールと野菜程度だが三つ出すから一日八銅貨、飯に肉が欲しければ一銅貨追加だ。当然、前払いでな」

主人の手に銅貨が収まると、エンリは後ろにマーレたちを引き連れて階段へ向けて歩き出し——遮るように足元へ斜めに長い棒が差し出された。

「うしろの子は、何ですか」

差し出されたのは、杖だった。マーレのものとは違ってスッキリと長いだけの単純なものだが、持ち手が輪になった意匠でそれとわかる品だ。杖に手をかけるその持ち主はまだ少年のようだが、エンリを見る目には憎しみが宿り、明確な敵意をあらわにしてい

た。

エンリはマーレの後ろの幼い少女がきちんと外套でその身を覆われていることを視野の端で確認し、少年の意図を図りかねる。

「何って、私の旅の連れだけど……」

「どういう種類の、連れですか」

少年はちらちらとマーレたちの方を見ていた。店に入った時からもうそうであつたことから、エンリは少年が妖精族を嫌悪しているのだと理解した。何をどう説明しようにも時間がかかりそうで、それが意味をなすかどうかともわからない。一刻も早く寢床に横たわりたかつたエンリは説明を放棄する。絡んできたのが自分より身体の小さい少年だけだというのも、安易な選択を選ばせた理由だつた。

「冒険者の中では、そういう詮索は、法度だつて聞いたことがあるんだけど」
「待てや、うしろの小さいのは冒険者じゃねえだろ？」

今度は金髪の痩せた男が割り込んできた。軽薄さを装つたような声だが、滲む敵意は隠しようがない。

「私が責任を持つて預かつてる子たちだから安心して……なんて言つても無理か」

その言葉の途中からさらに敵意が強まったような気がして、エンリは深く溜息をついた。

「二つだけ答えてください。あなたはエルヤーという人のことをご存知のようですが、うしろの子との関係もその人と同じようなものなのですか」

怒りすら湛える少年の問いは、エンリには逆にこの面倒な状況を解決する糸口となるものであるように感じられた。エンリには、先に道を切り拓いてきた先達の存在があった。今こそその存在に頼るべき時だろう。

ルクルットはニニヤの方を呆れたような顔で見る。そんなことを聞いて素直に答える者がいるわけがない。黒衣の少女が連れている一番後ろの幼い少女は人間だ。王国では人間の奴隷は禁止されており、これは犯罪の自白を迫っているに等しい。とはいえ、実際に衝突してニニヤを危険に晒したいとも思わないので、その後の対応にあわせてこの場では矛を収める方向に持つていくつもりだった。

『漆黒の剣』の残る二人——ペテルとダインも、ここではルクルットと同じ思いだ。白々しい答えでもいったん受け入れ、とりあえずニニヤを押し留める。あとで可能な範囲で対処法を話し合い、込み入った問題は組合や衛兵に任せる。それで済むものだと思っていた。

しかし、目の前の黒衣の女はそんなまともな存在ではなかった。

「同じようなものかな。三人も相手をしてるエルヤーさんと比べれば、私なんてたいしたことはないけど」

エンリは三人も連れて涼しい顔でいられる剣士と一人を相手にするだけで様々な困難に躓き続ける自分の差を思い返し、自嘲気味に薄く笑った。疲れた顔に浮かべたその笑みは、敵意を持って睨む者からすればひどく酷薄なものに見えたかもしれない。

ともあれ、これで誤解は解けるはずだった。相手がエルヤーの名を知っているなら話が早い。危険な妖精族を三人も引き受けている、ある意味で英雄級かもしれない剣士と自分を並べて語るのは気が引けるが、危険な妖精族を連れて何か悪い事をしようというのではなく、皆を守るためにそうしているのだとわかつてもらうにはそれが一番だった。相手がまともな冒険者であれば、この険悪な空気もすぐに晴れるはず——少なくとも、エンリはそう確信していた。

この言葉の衝撃をうけて、ルクルトもニヤもすぐには反応できない。そして、そのやりとりを注視していた全ての者たちが、目を丸くしたままその時を止めていたかのようだった。単に女同士というだけでなく、エンリのような年頃の少女が幼い少女を買うなどということになれば、それはいくら見聞の広い冒険者といえどもなかなか想像し難い世界だ。しかし、言葉を発した少女の含みのありそうな薄ら笑いを見れば、嫌で

もそれを事実として受け入れざるをえない。その言葉の意味を咀嚼したくもなかった。ニニヤが真つ先に口を開く。

「ふざけないでください！ 人数の問題じゃないでしょう。自分が何をしているか、わかっているんですか!？」

険悪な空気は全く変わらないどころか、さらに悪化したようにも思えた。目の前の少年は子供だから世間を知らないのかもしれない。しかし、エルヤーの名を知っていないが、この態度というのは不可解だった。ここまでしつこいと後ろの仲間たちに絡む役をさせられているという線もありうる。軽薄そうな金髪もまだ睨んでくるのでそういう役回りなのだろう。

「もういいや、エルヤーさんも世間体は諦めろって言ってたし、好きに思ってもらって構いません」

エンリは思い知った。結局、こういう連中の行動基準は、言いがかりをつける理由があるかどうか、それだけなのだ。

「開き直りですか。人間の屑ですね」

「ちつ、ほんとにド外道じゃねーか。見た目はちよつと好みだったのに」

「最低だ。同じ冒険者と思いたくはないな」

「世間体の問題ではないのである。」

少年は絡み役で間違いないようだ。続いて軽薄そうな金髪も毒づき、テーブルに就いていた仲間の二人も席を立って難癖をつけてくる。大柄で野蛮な感じの男と、短い金髪の戦士風の男だ。

エンリは、それが冒険者組合で報奨金を受け取っていた者たちであることに気がついた。依頼を受けて人を助けるものと思っていた冒険者の中にも、モンスターを倒す力があればどんな者でも金を稼げる仕事である以上、一皮剥けばごろつきやならず者ではない者が含まれているのだ。話の筋道を整えることさえ放棄して言いがかりをつけてくる姿は、やはり、そういう種類の連中だったということだ。

改めて観察すれば、最も危険な雰囲気を纏っていたのは最初に絡んできた少年だった。眼光是鋭く、そこに含まれるドロドロとした纏わりつくような暗い敵意は、他の仲間たちとも明らかに違っていた。それは危険な妖精族を退けようとする正義感や偏見などで理解できるようなものではなく、専ら人間相手の荒事で稼いできたような者の目としか思えなかった。見た目は少年でも、そこに生まれる油断を利用して様々な荒事をうまく立ち回っているのだろう。詰め所で行っていた北の盗賊団とやらの関係者が街に潜入しているとしたら、こんな感じなのかもしれない。

一瞬、マーレに何とかしてもらおうかという危険な考えが脳裏をよぎる。しかし、そ

の結果が全て自分のせいになる未来を想像してしまうのは何故なのだろう。そもそも、ここに来たのはこの街における貴重な理解者からの紹介であり、相手が冒険者という体裁でその場に居る以上は、その顔を潰すわけにもいかない。

——常に味方だと言ってくれたし。

「組合長さんは認めてくれたから、あなたたちが何を言っても関係ありません。それに、少なくともお金を払ってるのに邪魔されたくはないです」

お金とは登録にかかる銀貨のことだ。一時的に大金を手にはしているが、エンリはそれに甘えて価値観を変えてしまうようなだらしのない人間ではなかった。つい最近までただの村娘だったエンリの金銭感覚においては、ただ冒険者組合長プルトン・アインザックに認められたということより、認められた上で銀貨五枚分もの登録料を差し引き精算の形とはいえ支払っていたことの方が重要だった。

登録料は冒険者全員が支払うものだ。いくら素行の悪い者でも、金銭の価値はわかっているはずだった。そういうエンリの考えは、目の前の男たちには通用しなかった。男たちの間で意味不明の怒りが余計に燃え広がっていく。

「組合長が……そんな……」

「おいおい、冒険者つてのは金で買える道楽じゃねえだろ！」

「まさか、()までとは……」

「……エ・ランテルの冒険者組合は腐っていたのであるか」

「わかったら、どいてください。疲れてるんです」

エンリは呆然とする少年の横をすり抜ける。何かしてくるかと思つたが、少年は巨軀の男に肩を押さえられ、軽薄そうな金髪は戦士風の男に腕を掴まれていた。本気で事を構えるつもりはなかつたのだろう。

既に鉄級の四人は部屋へ上がり、他の客も残つてはいない。気を利かせた主人が薄明かりを残した酒場には、『漆黒の剣』だけが残つていた。

「あの女が不利になるようなことまで喋つていたのは、こちらが挑んでも確実に返り討ちにできる自信があるからだろう。冒険者組合も向こうの味方である以上、現状を変えるのは簡単にはいかないな」

「だったら、詰め所に駆け込めば！」

ニニヤの思ひは強いが、声はかなり抑えていた。冷静に状況を分析したペテルもその思ひは同じで、苦渋の表情を浮かべていた。

「そういうのは間違いなく、組合に問い合わせが行くぜ。冒険者の疑惑なら、裏をとるのは冒険者の仕事つてことだ」

「確実に握りつぶされるのであるな」

不機嫌な顔で淡々と語るルクルツトも、表情には出ず声だけが低くなるダインも、その思いは一つだった。

「そんな！ あんなものを見せられて、何もできないってことなんですか!?!」

食つてかかるニニヤを制し、ルクルツトは悪戯っぽく口の端を吊り上げた。

「なあニニヤ、俺は、裏をとるのは冒険者の仕事だつて言ったんだぜ」

「……冒険者は、ここにも居るのである!」

「しばらくこつちに泊まれば、数日仕事に出ないでいくくらいの余裕はあるかな」

ダインとペテルからも笑みがこぼれた。

「みんな……ありがとう」

「おいおい、あの女を許せないのが自分だけだとか思つてんじゃねーぞ」

薄明かりの中、『漆黒の剣』の四人はいつもの顔に戻つて笑いあつた。

「エンリ、起きてますか」

自身が緊張と呼ぶ心の作用に囚われ、ぎこちない動きになりながらもどうか身体を拭き終えたエンリは、マーレのベッドに入り込んで自身の腕や腰に僅かに触れる幼い体温に全神経を集中させていた。落ち着かず身じろぎを繰り返すが、触れている部分が増えれば緊張が増して顔や身体が温かくなり、減つてしまえばよくわからない喪失感を覚えて再び身体を動かした。

マーレに名を呼ばれた時は、とうとう来るべきものが来たかと、身体をこわばらせながらマーレの方へ向き直った。耳まで真っ赤になっていたエンリに対し、マーレの方は普段通りの優しい表情だった。

「さっきのは殺した方が良かったんじゃないですか」

一瞬何を言っているのかわからなかった。何を言われても受け入れるつもりではないが、これは何か違う。エンリは二人の大切な瞬間と思っていた場面に割って入ってきたごろつき冒険者たちへの嫌悪感から一瞬その言葉を肯定しそうになり、そんな自分の心の動きに驚いた。

確かに、妖精族とそれを連れてくる者への偏見だけで人間の屑とか外道呼ばわりとか、人の苦勞を道楽呼ばわりとか、酷い悪口雑言を撒き散らして絡んできたごろつき連中の印象は最悪だ。ああいう連中がでつちあげる悪評は一度生み出されると何処まで

も付いてまわり、その傷を扶る者たちがいくらでも現れてしまうかもしれない。

しかし、所詮は言葉の暴力でしかなく、それだけで死んでいいとまで思うはずがない。緊張というのは人間をおかしくさせるのかもしれない。

エンリは気を取り直していったんマーレの言葉を否定し、今後のためにそう考える理由を聞いてみることにした。

マーレの話を聞くと、疲れたエンリの全身に新たな疲労が押し寄せてきた。ここがベッドでなければ床に崩れ落ちていたかもしれない。

強烈な偏見には理由があった。マーレはあのごろつき——ではなく冒険者のうち二人に一度会っていた。それがしつこく人数を増やして現れたから、もう殺した方が良いのではと考えたらしい。その経緯を聞けば、路地裏で別の男に絡まれ、その足を踏み抜いた時の男の悲鳴を聞きつけての遭遇だという。

「でも、その男は魔法で完全に治療して足も生えてきた後で騒いで逃げてしまったし、あの二人も何を怒っていたのかよくわからないんです。まるで人を回復させてはいけないみたい……」

断片的な説明ではあったが、エンリにはその状況が見てきたように想像できた。わからないのはマーレだけだ。

いくら魔法が何でもありだとはいっても、そんな目にあつて「生えてきて良かったね」で済ませて笑顔で歩いて帰れるならその男は足だけでなく心のどこかがもげている。悲鳴を聞いて駆けつけた二人も同様だろう。回復したこと自体を語る人間などいるわけがなく、回復すればいいというその態度が問題だったのだ。

それにしても、マーレの常識を踏み抜いてしまった大人の責任はやはり重い。マーレの主だというモモンガ様とやらは自分が幼い性を愉しめれば子供の教育とかどうでもいいのだろうか。百歩譲って自分の墳墓の中で一緒に好き放題爛れた生活をしているだけなら仕方ないとしても、こうやって野放しにするなら少しは配慮してほしかった。

ともかく、事情はわかった。無茶苦茶に詰なられたことダイクエルフで気分は悪かったが、先ほどの冒険者たちとの件については恐ろしい闇妖精を街中で野放しにしたエンリにも相当な非があるということになる。

今さら何を言っても駄目かもしれない。あそこまで言われた相手に笑顔で接するのも難しい。しかし、エンリはどこかで少しでも誤解を解ける機会があれば話が出たいと考えていた。自分はエルヤーほどではないが、頑張つてどうにかマーレとうまくやつている。それだけはわかつてほしかったのだ。

マーレには、いきなり足を潰すとか殺すとかではなく、なるべく相手の話や態度を見て、相手にあわせて行動してほしいと言ひ含めておいた。精神力の削られる話し合いが

必要かと思つたが、マーレはまるで以前から言われていたことであるかのようになり、それを受け入れてくれた。

話が終わると、狭いからといってマーレはもう一人の少女を寝かせているベッドへ移つてしまった。寂しさと不思議な苛立ちを感じたが、さすがに心と身体の疲労が勝つてエンリの意識も眠りへと沈んでいった。

そこは、薬師の工房が立ち並ぶ路地の一角。住人たちが見慣れない一人の女が、人目もはばからずにある男を捜していた。

朝の心地よい風が金髪を揺らす。そこから覗く目は、常に何かを探すように視線を滑らせていた。通行人も居ないわけではないが、その全てが女の風体から異質な空気を感じ取り、視線を合わせないようにしていた。それは戦いを生業とする者でも変わらな

い。
今朝は街全体で兵士や傭兵風の者たちの往来が多かつたが、女は周囲を気にすること

もなく、露骨なほどに薬師の店や工房を覗き込みながら進んでいく。その視線は全く商品の上に留まることは無く、何か別の狙いがあるかのように店内や工房内の人物だけを行き来し、すぐに去っていった。店主たちはその異質さに気付いてはいたが、その場で違和感を口に出せる者など居なかった。

注意深く見れば、同行者がいることもわかっただろう。しかし、店や工房を覗き込むのはその女だけで、同行者の方は路地に留まり、その格好も雰囲気も女とは統一感が無い。その姿は人を探しているとしても、あまりに効率が悪いなものだった。

やがて、女はこの路地でもひととき大きな複数の工房が繋がった建物の前で足を止める。入口の扉は空気の入替えのためか開け放たれ、濃縮された植物の様々な匂いが外へと漏れ出ていた。

女の視線の先には、黙々と開店の準備をするボロボロの作業着を着た若い男がいた。女はそれが何者であるかを知ると少女の笑顔に戻り、親しみのこもった声で呼びかける。

「ンファイレーア！」

「……エンリ!?!」

一四 リイジーとマーレのポーション入門

「おい、さっきの黒服、見覚えなかったか？」

「服より女だ。血塗れの……」

「血塗れの女なんて居なかったぞ」

「そうじゃない、黒い服を着ていた女がそれだ」

「女だったのか。俺はてっきり法国のあいつが動き出して逃げたのかと思ったぞ」

「死体が動いて逃げるかよ」

「……あの魔女ならやりかねない」

「いやいや、服は闇妖精ダークエルフが回収してたら」

搜索から戻ってきた戦士たちは、侵入者の足取りを掴むことができなかつた。

侵入者というのは、詰め所の兵士を足蹴にして街へ入っていった傍若無人などこの少女のことではない。その日の夜、衛兵詰め所の死体安置所を何者にも気付かれずに侵入した者のことだ。ガゼフ・ストロノーフとその戦士団を追い詰めた陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインの無残な死体は、昨夜から衛兵詰め所の安置所に移されていたが、夜明け前の空が白んでくる頃には既に行方不明になってしまった。

それまではガゼフとその戦士団が保管していたのだが、それらとの戦いに協力したことになって『カルネ村の協力者』の現状が冒険者組合長から伝わったことで、事情を知らない衛兵たちに不自然に抉^{えぐ}り潰された死体の状況を見られても問題無いと判断したのが裏目に出た形となった。

結果、戦士団のうち回復の状態がよい者と、衛兵たちが共同で都市内の搜索を続けている。ただ、明け方からの初動でも全く手がかりは得られず、探し出せる可能性は少なかった。

「あれは買い物じゃ……ないよな」

「他の店でも、品物なんか見ちゃいなかったぜ」

追いついてきたペテルの言葉に、先行してターゲットを監視していたルクルツトが答える。

雑踏の中ならともかく、人通りの限られるこういう場所で尾行ができるのは『漆黒の

剣』では野伏の心得があるルクルットだけだった。他のメンバーはさらに後から遅れてついてくる形をとらざるをえない。

「品物を見ないで、来たのがこの店って……狙いは……」

「……バレアレ氏であるか」

ニニヤの危惧にダインが答える。様子を窺っていた工房は高名な薬師リイジー・バレアレのものだが、ここでいうバレアレ氏とはそのリイジーの孫で、この街では有名な異能持ちのインフィーレア・バレアレのことだ。

インフィーレアのあらゆるマジックアイテムを使用可能という異能はその希少性と価値の高さで知名度が高い。当然、悪用されれば恐ろしい結果になりかねない異能であり、怪しげな黒衣を纏って幼い少女を奴隷にする危険な少女エンリとの接触となれば、そこに生まれる危惧はその場の皆が共有するものとなる。

騒ぎが起これば、すぐに武器を持って突入するつもりだった。しかし、路地裏に隠れて臨戦態勢をとっていた四人が見たものは、エンリを連れて上機嫌で出てきた若い男だった。状況からも、ほっとしたような目的を達したようなエンリの安らかな表情からも、それがインフィーレアであることは間違いない。冒険者たちは歯を噛み締め、何もできずにただその二人の様子を窺っていた。

ンファイレア・バレアレには、一年以上前から暖め続けてきた計画があつた。それは、ある前提においてのみ機能しうる計画であつたが、その前提を満たす手段の一切は白紙であつた。それでも、彼にはその計画を打ち明ける相手もおらず、問題を指摘してくれる者も居なかつたため、大真面目に修正に修正を加えて今日に至つた重要な計画であるには違いなかつた。

そして、今日、前提条件は満たされた。相手を計画に巻き込む大義名分もあつて、自然と前へ進むことができた。

何故そうなつたかは問題ではなかつた。前提があり、大義名分があり、そして今がある。それだけで充分だつた。

この日、ンファイレアは長年想いを寄せていた少女エンリ・エモットと再会した。服装や雰囲気は大きく変わっていたが、話を聞いてみればそれも当然のことだ。非道な襲撃者により両親を亡くし、それらを倒し村を救つた恩人のために一時的に冒険者となつ

て同行しているという。

あまりに小さく、あまりに幼い恩人マールレの姿には驚いたが、この辺りでは珍しい闇妖精であるマールレも含め、妖精族というのは幼く見えても百年近く生きていることがある。その年月で魔法の研鑽を積んだとすれば、多くの襲撃者を撃退することができて不思議ではない。

そのマールレの連れだという目のあたりを布で覆った幼い少女については、エンリがマールレと目配せをしながら言いにくそうにしていたから、何か訳ありなのだろう。

エンリの悲しみを慰めようかと逡巡するうち、その機会を失った。今は悲しんでばかりではいられないというエンリの強さを前に、慰めの機会を逃したことを残念がる自分がひどく情けなく感じた。

エンリは細かい事情を言いよんどんでいた。村の恩人マールレを魔術師組合へ紹介することを頼まれた際には、組合と繋がりのある祖母リイジーがやや厳しく口を挟む場面もあった。そこでは、エンリを助きたいという気持ちのままに動くことができた。

職人の世界では口先よりも実力だ。マールレにポーション作成に関わる魔法について幾つか使用の可否を聞き、それで祖母を黙らせた。実際に実力があって手伝わってもらえるならその手並みを見るのが先であって、細かな事情などは後回しになるのが職人の中の人である祖母の考え方だからだ。充分に手伝えるほどの魔法の使い手なら紹介で

きるはずだというと、祖母も異存は無く、エンリが凄^{マジック・キャスター}い魔法詠唱者だというマーレも謙虚な態度でそれを受け入れてくれた。

そして、エンリの望み通りに詳しい話は後に回すことができた。大変な思いをしてきたエンリに気晴らしの機会を作りたいたいからということ、エンリも喜んでくれた。

ともかく、この街で、目の前にエンリがいるということ。これが前提であり、連れ出す理由こそが大義名分だった。それらは、ンファイレアが長らく棚上げにしてきて、それらが揃わなければ計画を暖める意味すら無いということに全く気付かずにいたものだ。自ら揃えたものでなくても、ここで前へ進まなければ一生立ち止まったままかもしれない、そこに躊躇は無かった。

そういうわけで、ンファイレアはエンリを連れて二人きりでエ・ランテルの街を歩いていた。二人きりで出ようという話になった時、エンリが幾らか慌てていたように見えたが、きっと恩人への気遣いなのだろう。意識してくれている、照れてくれているなどと考えたくもなかったが、舞い上がって頭の中の計画が真っ白になりそうだったのでやめておいた。

街では食事と買い物を想定していた。買い物は最大の山場となる食事時間を挟んで、

ただ友人として同行するべきものと、その先に回すべきものに分ける計画だ。そうなれば、前者はエンリ以外の同行者たちのための買い物で、後者はエンリ自身の買い物ということになる。

ンフィーレアはただただ幸せだった。慣れ親しんだ地元を散策するだけのひとときであつても、隣にエンリがいるだけでその時間と空間は全てが華やかなものとなり、道行く人々の視線の多くが自身を羨むか、逆に嫉妬するものであるかのようにさえ思えてくる。

数軒先の店を眺めていた金髪碧眼の戦士風の男も、天気を気にしながら散歩していた大柄で髭面の皮鎧を着た男も、物陰から鋭い視線を送ってきていた髪の短い魔法詠唱者マジック・キャスターふうの少年も……他にも兵士や傭兵風の者たちなど幾つも見線を集めていたような気がする。ただこちらを気にしていたというだけでそのように思ってしまうのは、よほど舞い上がっているということなのだろう。

特に最後の少年など、まだ幼さの残る容貌に似合わず目つきが悪いだけであろうに、本気で嫉妬に狂って強い憎しみの眼差しを向けてきているようにさえ感じてしまった。恋も心の病であると何処かの本で読んだ時は軽く馬鹿にしていたが、実際に病に落ちてみればその言葉にも納得せざるを得なかった。

予備だと言って幼い少女二人のサイズの外套を余分に用意することに固執したエン

りを不思議に思いながらも、午前中の買い物は無難に終わった。このあとは最も重要な食事時間だ。食べ物の露店が多い通りを抜けて、選びに選び抜いた人気の飲食店へと向かう。

「串焼きは匂いに魅かれるけど、この辺りでは均等に切つて串を打ちやすい固めの肉が多いんだ」

露店に引き寄せられるエンリの視線を牽制する言葉も、予め考えておいたものだ。露店というものは機動的に街の動線にあわせて程良い場所に設置されるものだが、これに囚われてしまつては二人きりの時間を作ることができない。何かの本で見ただけの知識だが、まだ微妙な関係の男女二人で出かける際には、露店対策は必須なのだ。

ただ、エンリは想像以上に肉に魅かれていた。村の暮らしでは肉を食べる機会は少ないと聞いていたが、それはそういう環境で暮らしていたということであつて嗜好がそんなのではないようだ。

「私、こういう所でも充分だよ?」

「僕がエンリを連れていきたいんだ。今日は柔らかい骨付きの美味しいところが食べられる店に行くつもりだから」

計画に問題は無い。勧めたいものとは違うが、選んでおいた店では別に肉料理の看板メニューも存在したはずだ。

工房の作業部屋では、二人の少女の方をちらちらと気にしながらも、リイジーが老婆とは思えない機敏な動作で素材の準備を済ませていた。魔力が尽きれば終わりの作業ではあるが、その魔力を使う者が増えたとなれば、作業時間は可能な限り長く確保しなければならぬ。

「薬師でないのはわかってるよ。素材には手を出さなくて良いから、まずは第一位階の治癒魔法でも使ってもらおうとするかね」

「はい、魔法を使うだけならいいですよ」

マールは部屋の端でしゃがんでいた巫女姫を呼び寄せると、その外套の前を開き、そのままはらりと落とした。これで治癒魔法を使うことができる。

ここでも、自らが治癒魔法を使うという発想は無い。というのも、マールが治癒魔法を使う対象は、自らと行動をとにもするしもべなど以外では、守護者や一部の魔獣を含

むずめ決められた存在に限られていたからだ。

これは、本来守護すべきナザリック地下大墳墓第六階層における防衛体制の事情で、そうあれと作られたことに由来する思考であり、無意識にそのように行動してしまうものだった。

マーレとともに第六階層を守っていたのは姉のアウラだ。ピーストテイマーであるアウラが率いる総数百にも及ぶ魔獣の軍団は個ではなく群としての強さを追求しており、個体の蓄積ダメージや瀕死、死亡などによって特殊な攻撃を行うようなものも少なくなかった。普通ならそういったものを治癒魔法の対象外と定めるべきだが、それらの種類や数は私たちの思いつきで幾度も変更されてきたことから、アウラの軍団と共闘するマーレについては治癒魔法の使用が許される対象を個別に定めるといふ形をとらざるをえなかったのだ。

「……何をしてるんだい？」

「魔法の準備です。これは、こうしないと使えないものですから」

リイジーは訝しげにその姿を見るが、今は仕事が最優先だ。その場に使える魔力があるのなら、それを効率良くポーションに変えるのが第一であって、それ以外の全ては後回しにするべきことだ。

「よくわからないけど、使ってくれるなら問題は無い。うちの素材は質がいいから、第二位階でも構わないよ」

「質？……とりあえず、せつかく作るなら上の位階にしますね」

マールは首をかしげながらも指示を与え、それをうけて巫女姫が単独で使用可能な最高の治癒魔法を発動させた。

魔法を受けて液体が青く輝く。そこまでは良かったが、輝きが落ち着いてくると表面が次第に泡立ち、白くなって瓶の内側を這いのぼる。

しゅわしゅわという音が止む頃には、液体の大部分が白い泡となって瓶の外に散ってしまっていた。辺りに染みこんだ薬草のものとも違う、鼻の奥に刺さるような刺激臭が辺りにたちこめていく。

——色もおかしいし、素材が悪いのかな。

マールは生産系の職を修めていないので詳しくはわからないが、それが失敗であることだけは理解できた。相手は必要な人間を紹介してくれる協力者でもあるし、広い心で付き合うことにした。人間の技術ならそれほど完璧であるはずもないし、調達できる素材がよくないのかもしれない。

「小娘！　今、そやつに何を使わせた！」

「だ、第五位階の治癒魔法ですけど」

「第五位階じゃと!? そんな小娘が……いや、あの反応ならそれ以外に説明がつかん。素材は嘘をつかんから……」

泡を噴いた瓶を目を剥いて凝視しながら、リイジーはなにやらぶつぶつと言っている。ポーション作成失敗の原因には思い当たる節があるようだ。

「かなり素材が悪いみたいですが、このあたりではいいものが手に入らないんですか?」
リイジーは風通しをしようとして手をかけていた窓を、音を立てて乱暴に開け放った。そのざらりとした鋭い視線がマーレに向けられる。

「ふん、このバレアレの店で用いる素材が悪いというなら、王国にまともな素材など無いわ! そもそも第一位階を想定した素材に第五位階を使えば、ああなるに決まってるんだよ」

「あ、あのっ……治療のポーションって魔法の位階は違っても、それ以外の成分は同じだったと思うんですけど」

「それは机上の空論じゃな。実際に高い魔力を込める場合、素材に求められる純度は高くなり、普通に精製した溶液では耐えられなくなる。となると、それを純化させるための別の素材が必要となるのさ。うちの素材の質なら一位階上の魔法くらいなら全く問題はないとしても、第五位階ともなれば問題が出てくるんだよ。……ふむ、ちと難しいか? そうじゃな、闇妖精なら、薬草などのことだったら少しはわかるかい?」

「はい、一応」

全ての扉と窓を開け放ちながら、リイジーは徒弟を前にした親方の顔になっていた。マールは度々不思議そうな顔をしながらも、幾らかの興味を持って話を聞いていた。

「薬草でも、単独で薬効をもち、他のものの薬効を促進するだけのものがあるだろ。普通の薬師ならばそういう種類のものだと片付けて終わりだが、単独で薬効が無いという所に注目せねばならない。これは不純物を抑えこみ、薬効を発揮する上で求められる純度を実質的に高めているからこそ、単独では何の効果も無いってことになるのさ」

「はあ……確かに、飲み物の見た目と味をスッキリさせたり、浴場の薬湯の濁りを減らすやつなんてそうかもしれないね」

——至高の御方々の一部から、風情が無くなると不評だったものだ。

薬草とポーションとの関連性が全く思いつかないが、言われるような薬草についてはマールが知っている用途のものから連想することで、話としては理解できた。

「高価なポーションの素材を、そんな用途で使うものか！」

「はい、めんなさい」

薬草でポーションを作るなど聞いた事がないマールは、この場ではそのことを心の中にしまつておくことにした。手元に素材があるわけでもないのに、今は人間のやり方で手伝えばいいだけだ。

「しかし、理解はしてもらえたようだね。そこらの薬師の発想ではそこまですら行き着かんさ。……さて、無駄話より仕事だね。貴重な第五階の術者がいるのだから、とっておきを持ってくるとしようか」

見た目に似合わぬ敏捷性で倉庫へ走ると、息を切らせながら中身の入った上等な薬瓶を幾つか持つて戻ってきた。

「これは、王都に、いる、第五階を使う、冒険者が、次に街を訪れた時に依頼しようと、少しづつ用意しておいたものじゃ。ふう……ふう……。もちろん、成功すれば正当な報酬は支払う。ぜひともお願いしたい」

——喋るか息を整えるのかどちらかにすればいいのに。

「魔術師組合とか知識のある人を紹介してくれば、それでいいですよ」

「それは当然として、治癒魔法にはそれ相応の謝礼というものがあるんだよ。……では、やっつくれ」

テーブルの上には、第五位階のポジションが七本、それと低位階のポジションが無数に並べられていた。

最高の品を準備していた素材の分だけ揃えることが出来、レイジーは口の端の綻びを隠し切れないほど上機嫌だ。

「しかし……答えたくなければ構わんが、この若きでどうやって第五位階まで……」
「これに話しかけても無駄ですよ」

マーレが口を挟み、巫女姫の額冠に手をかける。

「単独では第五位階程度しか使えない玩具ですが、これの力ですから」

第五位階程度、という言葉に顔を引きつらせながらも、レイジーはマーレの許可を得て《アプリーザル・マジックアイテム道 具 鑑 定》《ディテクト・エンチャント付与魔法探知》によつて額冠の鑑定を行うと、その大きな力と業の深さに震え上がった。高位階の品を得たことで先ほどまで隠しようがなかった笑みも、どこかへ吹き飛んでしまっていた。

「な、何じゃこれは！ このような恐ろしいものを、どこで……」

「これがスレイン法国という場所から魔法で監視してきたので、ちよつと行つて捕まえてきました」

「ちよつと行つ……何を言っているんだい……」

唐突な言葉に混乱しながらも、レイジーは高位ポジション作成に優れるスレイン法国の生産能力について情報を集めた時のことを思い出した。生産力の鍵とみられた巫女姫なる高位の術者についての情報の、多様な角度から得られたほんの僅かな断片の一つ

一つが、全て目の前の薄絹の少女に符合していたことには戦慄せざるをえなかった。

——あの娘が帰ってきたら、問いたださねばならぬ。

目の前の闇妖精の少女には、これ以上踏み込まない方が良いでしょうに思えた。それは、かつて法国の生産能力の調査を中止した時と同じで、理由のない直感のようなものだった。

「あの一、こちらでポーションは……」

そんな時、開け放って筒抜けの入口側の部屋から呼びかけてきた客は、赤毛の女戦士だった。今日は閉店のつもりだったが、出かけたンファイレアが珍しく戸締りを忘れたらしい。

リイジーは舌打ちを一つすると女戦士とその鉄のプレートを一瞥し、今日作ったもののどれとも風合いの違う二種類の瓶を手にとって粗雑に接客をし、その片方を売りつけてすぐに追返してしまった。

女戦士の視線は奥の部屋にあられもない格好でいた巫女姫に釘付けになっていたが、接客なのか脅しに来たのかわからないリイジーの迫力の前に詮索をするどころではなかった。目的のポーションが普段買っている店より少し高価な理由を聞くことさえできず、金貨一枚と銀貨二十枚を支払うと「宿代どうしよう」などと呟きながらしよんぼ

りと肩を落として帰っていった。

「ところで、そろそろ仕上げに入りたいんだが、保存の魔法を知っているなら手伝ってもらえるかい」

「保存？」

「何じや、そんなことも知らんのか。ポーションは劣化する。これは当たり前のことじゃろうに」

「そ、そうなんですか？」

「魔法をかける前の溶液は鉱物から錬金術で精製するものゆえ、時間の経過とともに劣化するの当然の理！ だからこそ……」

マールは首をかしげながらアイテムボックスから一つの薬瓶を取り出し、鑑定を行っていた。その結果はマールの知識どおりのもので驚くべきことなど何もなかったのだが、その様子を見た目の前の老婆はその場で固まり、獲物を前にした肉食獣のような鋭い目をこれ以上無いほど大きく広げて赤い液体の入った薬瓶を凝視していた。

——怒らせてしまったのかな。

「あ、あのつ、一応これには《保プリザベーション存》の魔法はかかってないみたいですけど、それがこのやり方ならきちんと手伝いますから」

「それを……ちよつと見せてはもらえないか」

「見るだけなら、どうぞ」

リイジーは差し出したマーレの手から薬瓶をひったくると、矢継ぎ早に鑑定の魔法を発動させた。そこらの凡人が持ち込んだものならともかく、第五位階を難なく行使しスレイン法国にも絡む底知れない者たちの持ち物だ。元より期待が疑念を圧倒していた。

そこから先は、狂人の時間だった。

曰く、伝説によれば真なる癒しのポジションは神の血を示す。

老婆の姿は、神の实在を前に感涙する敬虔な神官か、神を解体してでもその理を学ばんとする不遜な背教者か。

熱望、詰問、懇願、渴望……そのあらゆる思いと欲求の爆発に対し、マーレは応える手段を持たなかった。自分で作る事ができるわけでもなく、素材を持つていているわけでもない。そして、使うために持たされているものを勝手に売ることなどもありえない。

「そういう目的で持たされていませんから、少なくとも今は売れません。しかし……」

「しかし？ ……どうすれば売ってもらえるんじやー！」

「ぼくの主の許可さえあれば、消耗品なので適正な値段で売ることにはできるかもしれないま

せん」

「それは、孫が連れていった小娘か？」

「いえ、エンリには主を探すのを協力してもらってるだけです」

「ぜひ、ぜひとも私も協力させてくれ！　できるだけ早く……明日にでも魔術師組合に紹介しよう。とりあえず、保存作業が終わったら、その主についても可能な範囲で話を聞かせてもらいたい」

「はいっ」

リイジーはどうか正気に戻り、貴重な第五位階のポジションを含む多くの品の仕上げを行うことができた。一本が金貨数百枚にもなる高位のポジションが含まれていなければ、この場のポジションは全て劣化するままに放置されたかもしれない。

マーレも新たな協力者が得られたため、気分良く保存作業を手伝った。こちらは自分の魔法を自然に使うことができた。冒険に出ることが想定されていなかった階層守護者のマーレだが、第六階層はお茶会などで人が集まる場でもあった。戦士系のプレイヤーが持ち込んだものを他のプレイヤーに見せるため保管しておくなどの理由で保存の魔法を一応習得させられていたのだ。鑑定のような地味な魔法を使ったのも、そういう機会のためだった。

本来の製法ならば必要ないはずの余分な作業ではあったが、マーレはそれをくだらな

いとは思わなかった。第六階層の自然を好んでいた至高の御方の一人の言葉を思い出していたからだ。

「多く消費され種類もあるポーションこそ、作り方も多様であつてほしかったね」

それは、せつかく様々な薬草や鉱物などが存在するのに、一つの溶液で様々な治癒魔法に対応するのでは味気ないという話だった。付加的に強化に用いる素材はあつたが、基本の素材が共通である事に彼は納得がいかなかったらしい。そう考える理由まではよく理解できなかったが、至高の御方の言葉なのだから、作り方が多様であつてよいのは間違いないことなのだろう。

赤毛の女戦士——ブリタは普段と違う選択をしたことを後悔しながら、しょんぼりと宿に戻ってきた。今日は昼も食べておらず、夜も抜く予定だ。次に仕事に出る日までは一日一食としても、仲間から少しお金を借りなければならぬかもしれない。

あの時、開いていた窓から見えた珍しい闇妖精ダークエルフの姿が気になつて、どうせ薬師なら変わらないだろうと知らない店に入ったのが運の尽きだった。

ポーションが高価なのはわかつていた、必死に金を溜めて、今日ようやく買うところだった。そうやって背伸びした買い物が予定より二割以上も高くついてしまえば、待つ

ているのはさらなる耐乏生活ということになる。

「バレアレの店なら効きがいいから、損はしてないだろうよ。ブリタは信用してるから、宿代前借りのカタとして預かってやってもいいぞ」

相談に乗ってくれた宿の主人が価値を認めていたのは救いだったが、前借りのためにポーションを持たず仕事に出るのでは本末転倒だ。それに前借りを許すのは信用の問題などではなく、冒険から帰ってこなかったら主人の丸儲けだから当たり前のことだ。ブリタは食事を断って階段を上がると、粗末な寝台で鳴り響く腹を抱えながら丸くなつた。

一五 あなたのその気持ち、知ってるよ

ンファイレアは着慣れない一張羅の襟を直しながら、会話の糸口を探る。今日するべきことは決まっているが、そこへ自然に到達しなければならぬ。その道のりは良く言えれば臨機応変、悪く言えば白紙である。

「昨日お客さんから聞いたんだけど、冒険者組合に凄い新人が入ったらしいね」

げえほっ、けほっ！

不意にエンリが咳き込んだ。

「……………どこまで聞いているの？」

震える手で、果実水のコップを口元へ運ぶ。

「又聞きで名前はわからないけど、素手でモンスターを引き裂いたり、頭の骨を片手で握りつぶしたりできるらしいよ」

「へ、へえ……………そんなことができる人、いるわけないよ」

「うん、よくあることだけど、噂に尾ひれがついてるんだらうね。そういえば、新人は一度は宿で先輩の冒険者に絡まれるっていうけど、大丈夫だった？」

「う……………うん、大丈夫」

——マーレと、それを止められなかった私が悪いんだしね。あとで謝ればいいだけだし、大丈夫。

エンリは不安を振り払うように、それまでちびちび飲んでいた果実水を一気に飲み干した。

「それは良かった。もしかしたら、その凄い新人さんが先にやつつけてくれたのかもね」
「我慢したと思うよ！」

テーブルに両手をつき突然身を乗り出したエンリに、ンファイレアは目を丸くする。

「へ？ その人を知ってるの？ どんな人だったか——」

「知らない知らない！ そ、そうじゃなくて、強い人ほど自制心があるものだし、その人も悪い噂になったら困るんじゃないかな」

「うん、そういうものかもしれないね。冒険者つてのも、一度悪評が立ってしまおうと取り返しがつかない狭い世界だから」

「……………」

エンリは静かに座りなおすと、顔を伏せて黙り込んだ。料理に向けられるその目からは生氣のようなものが感じられない。

「何か嫌いなものでも入ってた？」

「ううん、とつても美味しい」

エンリの前にある料理は、ンフイーレアが熱烈に勧めた可愛らしいふわふわ卵のオムライスのハーフサイズと、雄雄しく濃厚な照りが映える骨付きラム肉を積み重ねて申し訳程度の温野菜を添えたものの二皿だ。ちなみに、ンフイーレアの前にあるのも同じものだが、逆に肉料理の方がハーフサイズとなつて、エンリのものには無い浅緑色の爽やかなソースがかかつていた。

オムライスは半球状の卵の被膜で覆われ、中央に旗状の飾りがついた細い串が刺さつていた。その串穴の脇から半熟の潤いが僅かに染み出し、トマトソースと米に細かく混ぜ込んだ鶏肉、そして被膜の内側でとろける卵の香りが漏れ出て食欲を誘う。エ・ランテルの婦人たちに絶大な人気を誇る一品だ。

他方、肉料理の方は冒険者などに人気の一品だ。慣れない露店の匂いですっかり肉の欲に囚われていたエンリだが、染み出す肉汁と脂で艶めいたラム肉の群れが運ばれてきた瞬間はその威容に圧倒されていた。それ自体はこの店ではよくある一見客の反応だが、エンリがソースの提供を断つたことでいくらかの注目を集めることになった。

開拓村では肉は貴重品で、その風味を味わうことを大切にしている。当然のことながら、そこではこの料理のようにソースで肉の濃厚さを抑えて食べやすくするような発想は無かつた。ソースを肉に使うとすれば、元々味の薄い淡白な部位や出汁をとつたあとのものをより濃厚に味わうためにのみ用いられるのが通常だった。

そして、目の前にサーブされたラム肉は何か濃厚な調味液に漬け込まれてから石釜に入つたような仕上がりで、これ以上ないほど重々しい赤銅色の照りを見せていた。そのため、これ以上の味を重ねるなど考えられず、呪文の詠唱のような調味料の説明を遮つてソースを断つてしまったのだ。説明の際にはカード型の説明付きメニューも示されていたが、文字が読めないエンリには関係なかった。

まずは、とろとろとした卵を纏う鶏とトマトの御飯をスプーンで口へ運んでいく。卵の甘味と鶏脂の香りをトマトの微かな酸味が軽く締め、エンリはずつと食べ続けていたような、ずっと食べ続けていられそうなふわふわとした食の快楽に包まれる。

しかし、エンリは決して忘れない。あくまで、この場の主役は肉なのだ。ずっと食べ続けていられるということは、決定的な満足感を得られないということでもある。

年頃の少女が肉肉肉と一見偏った想いを募らせることには確りとした理由があった。それは露店の匂いによるものばかりでなく、街での外食など経験の無いただの村娘であつたエンリの堅実な金銭感覚にも由来していた。卵とトマトと米を使った料理と、純粹な肉による肉のための肉料理、それが農村の原始的な交換経済においてそれぞれの食材が麦何束分と交換されるものであるかを考えれば、さして金額に差が無い以上は肉料理を選ばざるを得ないのは当然のことだつた。最終的にはハーフサイズを付けることで妥協したが、オムライスを強く勧めたンフィーレアを一瞬間わしく思うほどその価値

観は確固たるものだ。

しかし、肉に手を付けるには様々な手段がある。手で骨を掴むこと、テーブルの上の籠の中からフォークを出してそれで刺すこと、オムライスの上にあるような串を活用することなどだ。ナイフは骨から剥がす時に使う感じだろうか。それとなく周囲を見回すが、意外なことに昼食で骨付き肉を食う者は一人もない。農村なら午後の作業に向けて力のつくものを食べたい時間帯だが、街ではそうではないのだろうか。

もはや手本となるのは目の前の友人だけとわかると、エンリはオムライスを味わう速度を徐々に落としながら、ンファイレアの肉の皿をちらちらと窺うことになる。

——エンリ、たくましくなった感じがする。

ンファイレアは改めてエンリを観察する。その顔色ばかり窺っていたが、服装や雰囲気の変化は著しい。過酷な経験を経てきたとはいえ、冒険者となることで人はこんなにも変わるものなのだろうか。愛しいエンリが少し遠くへ行つてしまったようにも感じるが、現実の距離は果てしなく近付いていることを思いなおし、自分を叱咤する。

——今だ！ 今言わなくてどうするんだンファイレア！

エンリはまだ肉に手をつけず、ハーフのオムライスを食べている。肉が嫌いなわけで

はないのは、ソース無しの皿を見れば一目瞭然で、おそらく肉はとっておきなのだろう。ビネガーベースやヨーグルトベースのものが揃う摩り下ろし野菜とハーブの爽やかなソースを断れば、皿の上に残るのは濃厚で果てしない、肉汁と脂の滴る赤銅色の山脈だけだ。この清涼感を一切排除した嶮しい山脈自体も店では裏の看板メニューとして知られていたが、その登頂者はラムの脂と肉汁と独特の臭みを愉しみたい筋骨隆々の兵士や前衛職の冒険者などに限られていた。それでも大抵は野菜や御飯もので休みを入れながら食べるのが一般的で、最後にとつておいて一気に食べようなどという猛者は限られた登頂者の中でもごく一部だけだった。

ンフィーレアもオムライスから食べている。元々、肉を食べるつもりがなかったのもあるが、嫌いというわけではない。後回しにする理由はただ一つ、エンリの視線だった。肉好きの中の肉好きと同じ食べ方を選んだエンリがハーブサイズのラム肉のプレートをちらちらと窺っているのを見れば、これを丸ごと後にとつておかざるを得ない。

恋する少年としては、お腹一杯になったとか何とか言つて、あわよくば片思いの少女に対してフォークで口に直接運んで食べさせるような機会を逸するわけにはいかないのだ。それをするには、その場で切り分けるのが自然であり、多めに残っているのが望ましい。そして至福の時間は長ければ長いほどよく、そうなるは今はまだ肉料理に手をつけるわけにはいかないのも自明のこととなる。

それぞれに違った事情でどちらともなく食事のペースが落ちると、自然と話をしやす
い空気ができてくる。それをいち早く察知したのは、元々それを熱望していたンフィー
レアだったが、頭の中で十数回ほど目の前の少女に想いを伝えるうち、顔が熱を持って
真っ赤になってしまった。この状況下において、まだ計画では十数通りの選択肢がある
が、もはやそれらを思い浮かべるのも難しくなってきた。

ンフィーレアの計画は多数の告白パターンを用意し、高度の柔軟性を維持しつつ臨機
応変に対処するという物量重視のものであったが、そこからその場で選ぶというのは無
理があつたようだ。

「ンフィー、大丈夫？ 顔が赤くなってるけど」

調子が悪かったら残りを食べようか、などとは言わない。食べたいが、先に手本も欲
しいのが複雑な乙女心というやつだ。

「エンリ！ ぼ、僕は君が……君のことを考えると、こうなってしまうんだ。顔が熱く
なって、胸がドキドキして……」

ンフィーレアは内面からあふれ出す気持ちに押し流されるように、言葉を選ぶのを止
めた。

計画では、格好いいと思う言葉を沢山用意していた。しかし、自身の心や経験と繋がりを持たない言葉など、いくら大量に集めたところで何の役にも立たなかった。単体では人の心に響きそうな言葉でも、そうした繋がりがなければ使いどころがわからず、無理に押し込むことを想定しても会話を維持することはできないのだ。それは、兵站の切れた大軍のようなとてもむなしなものだ。毎年の戦争で王国の兵站の総力が試されているここエ・ランテルの地で、最後の決戦を物量だけに頼った少年の敗北は必至の状況であつた。

しかし、そこで奇跡は起こつた。何気ない少女の言葉とその状況が、少年の真つ直ぐな気持ちを言葉として引き出したのだ。

そのまま言葉を選んでいけば、おそらく長い長い時を一緒に過ごしてもしなければ、そして誰かの後押しを得なければ、到底先へ進むことはできなかつただろう。それを、ただ思うまま感じるままを言葉にしてぶちまけることで、少年はどうか前に進むことができた。

エンリは変わった。冒険者になつて目の前に現れた時、その変化は著しいものだった。ただ服装や職業が変わつたというだけではない。女らしさ、艶かしさのようなものさえ感じられたのは、再会までの年月のせいか、エンリに生じた何らかの変化のせいか……。ただ、大きく雰囲気が変わつた今のエンリが、これまでのようにずっと手の届く

場所にいてくれると思えないのだけは確かだった。このままどこかへ行つてほしくない、縋りついてでも自分のもとに留まつてほしいという気持ちもそれを助けたのかも知れない。

「ンファイ……。ンファイは、私に……そうなんだね」

エンリが浮かべたのは、優しいが少し寂しげな微笑みだった。そして、とろとろの卵ばかりになったオムライスの最後の一口を舌に纏わせながらゆつくりと味わう。オムライスの物量で決定的に劣るエンリにとって、この絶望的な持久戦での敗北は元より不可避の事態であった。唾液と絡んだ最後の卵はゆつくりと喉の方へ流れ、消えていった。

「私は、あなたのその気持ち、知ってるよ」

心の中の動揺を感じさせないよう、そしてンファイレアの気持ちに反応して生まれる感情の起伏をも覆い隠すように、あえて軽快に言葉を紡いだ。

オムライスの皿はもはや空で、卵の端切れすら残っていない。もはや先延ばしはできない、決断の時は今だ。

エンリは旗状の飾りを汚さないよう脇へ避けてあつた華奢な串を利き手に取ると、ラム肉のプレートを正面に持つてくる。そして、自身の決断を胸に赤銅の山脈へと挑みか

かりつつ、努めて明るい声を出す――。

ンファイレアは、エンリとその一つ一つの挙動に魂を囚われていた。気持ちを上手に伝えることができたとは思わない。しかし、計画を放り出してまでぶちまけた不器用な言葉を正面から受け止めてもらってから、さらに気持ちを知っていると返されたあとの僅かな時間は、無限に続くかと思えるほどに長く感じられた。エンリの僅かな表情の変化に縋りながら、不安と希望の支配を交互に受け入れ、翻弄され続けた。

そして、エンリの答えは意外な形で返ってきた。少し作つたような、明るい声で。

「そういうの、緊張つていうんだよ！」

「ええっ？」

ンファイレアは耳を疑つた。勇気を出し、なりふり構わず突き進もうと思つていた目の前の道が突然塞がれ、真つ暗になった。

へきっ。

そんな、何かが折れた音がしたような気さえた。実際に聞こえるはずの無いその不思議な音は、たった今折れたと思ったものの大きさの割に、妙に儚い、白々しい音だった。

エンリは得意げに言葉を繋げる。自分の心に刺さる何かを覆い隠すように、努めて明るい声で。

「ンファイは初めて？ 私も最近そうなったことがあるからわかるんだ！」

思考がついていかない。顔など合わせられるはずもない。エンリの方を見ようとしても、手元から視線が上がっていかない。

エンリの手元には、無理矢理に肉に刺そうとして骨に当たり無残に折れたオムライスの旗があった。十三英雄の誰かが望んで始まったという老舗らしい伝統の飾りも、こうなってしまうえば哀れなものだ。次第に冷えてくる頭の端で、聞こえるはずがなかった音の正体を理解する。

ンファイレアは散らかった思考を拾い集めて整理する。自分が緊張していたのは当たり前前のことで、エンリが自分をそう見たことには……思う所がありすぎるほどだが

……大きな問題は無い。一世一代の何かは完膚なきまでに折られてしまったが、何か大切なものを失ったわけではない。

問題は、エンリがこういう種類の緊張を感じたことがあるということだ。

それも、最近。

鼓動が早まる。背中を嫌な汗が伝っていく。

今のエンリはただの村娘ではなく、冒険者だ。冒険者の世界において、強さという最大の価値を備えた魅力的な男は多く、金銭的にも充実している者も少なくないだろう。狭い村に訪れて、エンリとの距離を縮めることもできないまま、それとなく周辺の話や聞きながら利己的な消去法で一喜一憂してきた頃とは全てが違うのだ。

何かが折れてしまった状態で、更に勇気を振り絞るのは難しい。しかし、やらねばならない時もあるのだ。エンリに何が起こったのか、詳しく聞かずにいたことを悔やむ部分もあるが、それがエンリのためなのだから考えても仕方の無いことだ。それより、今は再び勇気を出して、この場でそれを聞き出さなければならぬ。まずは、僅かな希望に賭けて――。

エンリの方も、しばらくはンファイレアの挙動に注目していた。骨付き肉で串を折つ

てしまった時は驚かれただけでなくこの世の終わりのような顔をされてしまい、街育ちで作法を知っているにしても厳しすぎるその反応が深く心に刺さった。慌ててフオークに持ち替えて食べようとしてちらりと様子を窺うと、こんどは目に涙を溜めていた。そこでようやくフオーレアの言葉を思い返し、緊張のせいで情緒が不安定なのだろうと考え、反応を窺うのをやめた。

結局、選んだのはフオークと骨の手掴みを併用した子供のような食べ方だった。限界を迎えていた肉への渴望も、持久戦の間に客が減った周囲の環境もそれを後押ししており躊躇はなかった。

少し冷めてはいるが、内部には肉汁がしっかりとたたえられ、ラムの臭みをも取り込んで内側から肉らしさを過剰なまでに主張していく濃厚な味わいは健在だった。計算された漬け込みと焼き加減によって、ありのままの獣の血肉を体内に取りこむ原始的な悦びのようなものが、しっかりと火の通った肉の中に再現されていた。

緊張に苛まれるフオーレアを心配しながらも、どうしても肉の悦びを詰め込んだエンリの頬は緩んでしまう。

——何か悪いことをしたのかなあ。

緊張——フオーレアの症状は、それで間違いないだろう。エンリがマーレに対してそれを感じた時のことを考えれば、フオーレアがエンリに緊張するということは、エ

ンリが多大な迷惑をかけているということになる。

確かに、自分の家に恐ろしい妖精族を連れてこられるというのは重大な事態には違いない。本格的に迷惑をかけ——世話になるのはこれからだというのに、最初からこれでは先が悪いやられた。

——とにかく、今のンフィーには優しくしてあげないと。

頼るために媚びるというのではない。エンリの経験上、緊張している人間というのは、追い詰められているものだ。そんな時に一番必要なものは、味方をしてくれる存在なのだ。ンフィーレアがなぜそのような状態にあるかはわからないにしても、大切な友人が困っている時、できることはしてあげたかった。

そんなエンリに、ンフィーレアから縋るような言葉がかけられた。

「ぼ、僕って、エンリにとって何なのかな?」

「ンフィーは私の、大切な友達だよ」

「う、うん……ありがとう」

唐突な問いにも、エンリはするべきことを忘れない。努めて優しく、笑顔を作って問いに答えた。エンリは今のンフィーレアの味方になってあげたいと、心から思っていた。気持ちは伝わったはずだが、ンフィーレアの表情がますます暗くなっているのはどういふことなのだろう。

嫉妬心。それが純粋な恋心よりも人を動かす力を持っているということを本などで読むことがあっても、ンフィーレアはそれを認めたいとは思わなかった。しかし、実際にそういう感情を抱くに至れば、すぐにそれを認めざるをえなくなった。まだ見ぬライバルの粗を探すため、自分でも驚くほど迅速に行動に移ることができていた。

緊張。

この際は、そう呼んでおいた方がマシだ。エンリは最近そうなった。最近ならまだ何とかなるかもしれない。ンフィーレアの方は初めてかと言えば初めてだが、その初めてが何年も続いて今があるのだ。最近そうなった相手なんかには負けるはずがない。負けていいはずがない。

エンリが好意を抱くとすれば、村の恩人やその同行者、あとは他の冒険者しか居ない。村人の中にそれなりの相手がいたなら、エンリ一人を旅立たせるようなことはなかっただろう。そして、恩人とその同行者は少女だった。となれば――。

「エンリは冒険者になってから、さっきの二人以外に新しい知り合いとかできたの？」

好きになった相手が誰かなんて聞けるはずがない。エンリが自分以外の誰かを好きだと口にするなど、考えたくもない。想像するだけで吐き気がする。ここでは、昔から

続けてきた回りくどい消去法でいくしかなかつた。

「うーん、あまり話題にしたくない人が多いかな」

エンリは疲れたような表情を見せる。冒険者の中にただの村娘だったエンリが混ざれば、嫌なこともあるだろう。

「嫌な人とかじゃなくて、仲良くなれた人とか……」

仲良く、という程度の表現でもンフィーレアの心には大きな負荷がかかる。それ以上はとても無理だった。心が耐えられない。

「冒険者組合の組合長さんは親切だったよ。あとは、ワーカーのエルヤーさんかな」

中年で妻帯者の組合長はすぐに候補から外し、エルヤーという名を心に刻む。どこかで冒険者たちの噂話で聞いたかもしれないと思い記憶を辿るが、買い物の時に出てくる雑談の記憶の中では、何も残ってはいなかった。

そのエルヤーというワーカーとは、旅の途中で野営を手伝ってもらい、冒険者になるにあたっての様々なアドバイスを貰ったらしい。向こうは急ぎの仕事で野営をせずつて去っていったと聞き、胸をなでおろす。冒険者の野営とは、なんと危険な環境であろうか。

「わかりあえる部分があつたから友達みたいに接してくれたけど、難しい事情をすぐに察してくれて、私の進むべき道も教えてくれた。対等な友達なんかじゃなくて、とても

「凄い人だったんだよ」

男のことを語りながら、瞳の中にキラキラと輝きを宿したようになるエンリの顔を、
ンフィーレアは正視できなくなっていた。

曰く、度量があつて人としての器が大きい。

曰く、察しがよくて優しい。

曰く、力だけではない本物の強い男。

目的は粗探しだったが、その結果は惨憺さんたんたるものだ。エンリの口から出てくる掛け値なしの高評価の一撃一撃がンフィーレアを容赦なく打ちすえ、叩きのめし、磨り潰していった。

——僕は、小さい人間だ。

粗探しを試みて失敗した自分の惨めな姿と、嬉しそうに語られた巨大なライバルの姿を比べ、ンフィーレアはがっくりと肩を落とした。

細かなことを聞き出すことはできなかった。既に、ンフィーレアにはそれだけの力は残されていなかった。かろうじて記憶を手放さず、諦めずに後日きちんと調べようと切り替えて食事に専念することができただけでも、彼にとっては上出来だった。

——でも、時間はある。

エルヤーは隣の帝国を本拠にしており、再会はまだまだ先になりそうだという。であ

れば、それまでに積み重ねた時間の重みで勝つしかない。敬意や憧れは恋愛感情とは違うものだと自身に言い聞かせながら、ンファイレアはまだ見ぬライバルに心の中で宣言を布告した。

それは、ニニヤと向かい合って座っていたペテルが予め会計を済まそうと一旦席を立った時のこと。客も減り、視線が通りやすくなった店内で、偶然二つの視線が交差した。

一方の視線は、ただ店内をふわふわと動き回り、自分の食べ方が変な注目を浴びていないか確かめていたもの。他方の視線は、壁役がいなくなるので顔を伏せねばならないと思いつつも、ドロドロとした憎しみをぶつけてしまっていたもの。

ただ笑われていなければよかった。普通の視線なら意にも介さなかっただろう。たとえ知人でも気付かなかったかもしれない。しかし、その視線はエンリの心にずっと引つかかっていた、謝らなければならない、誤解を解かねばならない相手からのものだった。

エンリは真つ直ぐニニヤの方を向いたまま卓上のクロスの端で手を拭くと、ンファイレアに一声かけて席を立った。いち早く異変に気付いたルクルットがジエスチャーで

ペテルを遠ざけ、ニニヤにその場に留まるよう指示した。既に会計を済ませたダインはルクルットを視線から守る壁役のまま不動でいなければならぬが、緊張の面持ちで腰のアイテム袋に手先を入れて中身を確認する。

「場所が場所だし、シラ切れば大丈夫だろ」

小声で諫めるルクルットに、ダインは手先を腰の袋から出してコップを掴み、果実水をぐいとあおった。

エンリはニニヤの前まで真っ直ぐ歩み寄った。久しぶりの肉、それも村では食べられないような濃厚な味付けのものを大量に食べた満足感から、その顔は緩み、眠気すら感じ始めていた。昨夜のような刺々しい気持ちは既にどこかへ消え去り、今はそんな相手にも優しい気持ちになれるような気がしていた。

昨夜は散々な言われようだったが、非はこちらにあり、目の前の少年は誤解を解くべき相手には違いない。エンリは安らかな笑顔を作って少年に声をかけた。心の余裕もあって、相手が格上であるシルバーのプレート持ちだということにも配慮して丁寧な言葉を選んだ。

「こんにちは、昨夜の方ですよ。あの時は失礼な対応をすみませんでした。またお会いできてよかったです」

「……………」

ニニヤは言葉が出なかった。相手がこちらを格下と見て侮っていたのはわかりきっていたことだが、上機嫌に正面から言葉をかけてくるというのはさすがに想像の範囲外のことだった。ニニヤは目の前の少女が浮かべる余裕たつぷりの作り笑顔の裏にあるドス黒いものの正体に想像を巡らした。下卑た挑発行動か、あるいは警告かもしれない。

「昨夜は私の連れのことを心配してくれたみたいですが、今後は街なかでは目を離さないように気をつけるので安心してください」

「……………あの子には、行動の自由は無いつてことなんですネ」

ニニヤの目が濁る。姉が連れていかれた時よりさらに幼い女の子が、目の前の化け物のような少女に奴隸として扱われている。かつて無力で最低な村人ではなかった自分分は、冒険者になっても無力なままだ。今はただその事が口惜しかった。

「もちろんです。けっこう素直に言うことを聞いてくれるし、仲良くやつてるから大丈夫ですよ」

エンリは努めて笑顔を維持した。

まるで肉親でも被害にあつたかのように、少年の妖精族への差別意識は相当なもので

あり、エンリはそれに合わせて答えを選ばざるをえなかった。マールがその気になればエンリなどひとたまりもないのだが、エンリだつて人間社会でマールによる被害が出ないように頑張っているつもりだ。とにかく心配させないようにした方がいいだろう。危険な妖精族を連れてくる以上、きちんとそれを制御できていると思つてもらつた方が世間体の面でもマシになるには違いない。

それでも、最後の方は少し疲れたような笑みになつてしまふ。仲良くやつているつもりでも、苦労だけは一人で背負つているのだ。

「仲良く、ですか……」

「はい。……それでは、友人と一緒になので失礼しますね」

少年の表情は晴れないが、言うべきことは言えた。これで今後絡まれたり、悪い噂が広がるようなことも避けられたかもしれない。

一礼して席へ引き返すエンリの足取りは軽かった。肩の荷が一つおりたような気がしていた。ンフィーレアの心配そうな視線に曇りの無い晴れやかな笑顔を返し、エンリはとつておきの最後の肉にかぶりついた。

計画を修正し一人、二人、一人とバラバラに店を出た『漆黒の剣』は、店先すぐの出

てくる客の視線が通らない辺りで合流していた。静かだが深い怒りに包まれていた二ニヤを宥めつつ、皆が最後の直接対決の部分にあえて触れないように話題を選ぶ。

「混乱しながらも、最後まであの女への好意は消えてなかったな」

「けぶっ………よりもよつてあの男の話なんて酷いというか………精神操作系魔法の効果でも確認していたんでしろうか」

「ふー、食った食った。バレアレ君は女の趣味は最悪だけど、なかなかいい店知ってるねー」

「真面目にやるのである」

四人の男たちは完食したオムライスの香りを漂わせ、それなりの満足感を覚えつつも、最低限の緊張感は維持していた。

「ところで二ニヤよ、さっきの、色恋に持ち込まなかったのは何でなんだ？ 惚れさしといた方が利用しやすいだろうに」

「憶測ですが、友人でなく恋人となると思いが強すぎて魔法の効果が切れた時の疑念や反動が大きいのもかもしれません」

「恋愛より友情の方が細くても長く続くってことか」

「友と葡萄酒は古いほど良いと言うのであるな」

「恋愛の方は、やっぱり目新しいのがいいからなあー」

昼食時の若者客は殆どが恋人たちで占められるこの食事処の店先で友情の優位性を語っていた『漆黒の剣』の四人は、これから午後のお茶を楽しみに来ていた商家の婦人たちの妄想の具材としていいように調理されることを知らないまま、店を出たターゲットを追って人混みに紛れながらそそくさと店を離れていった。

第五章 マーレとクレマンティーヌ

一六 クレマンティーヌ、動く

「げえつ、血塗れの魔女!!」

「血塗れのエンリか!」

その野太く大きな声、そして周囲に拡がるざわめきにたまらず振り向けば、屈強な戦士が二人、道端にへたりこんで後ずさりをしていた。装備は不揃いながら、鎧にある控えめな印は王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに仕える戦士のものだ。早朝から街を捜索していた者は数多いが、奇しくもその二人は揃ってこの街に冒険者の知人を持つており、情報交換のついでに様々な話を聞かされていた。

「きつ、着替えたのに……最低」

もはや血塗れ呼ばわりされる理由など無いはずだった。懐かしいカルネ村に置いてきたはずの、忘れたい思い出を刺激されたエンリは顔をしかめ、目の端に少しだけ涙を溜め、一刻も早くこの場を逃れるべく戸惑うンファイレアの腕を抱えるように強く引いて早足で歩き出した。行き先など考えない。人の居ない方へ、居ない方へと路地裏を進んだ。

ンファイレーアはエンリに腕を強く引かれると、すぐに目の前の騒動について考えるのをやめ、小走りについていった。

血塗れとか魔女とかよくわからないが、安全な街の中で差し迫った危険などはない。であれば、エンリの方から腕を組んで貰えて、あわよくば柔らかい所が二の腕に当たるとかもしれない絶好の機会を逃すことなど、絶対に考えられない。たとえそこに差し迫った危険があつたとしても、それに注意を向けることさえできなかったかもしれない。

ンファイレーアは早足のエンリに迫いつき、全神経を片腕に、そして二の腕に集中した。もう少し背が伸びるのが早かつたら、能動的に動かすことができる肘にそれを集中することになって、得られる接触が故意であれ偶然であれ、期待と欲望と罪悪感で身動きがとれなくなっていたかもしれない。そういう意味では、ンファイレーアの体と心の成長は現段階のエンリとの関係において理想的なバランスを保っていたと言えるだろう。

エンリはンファイレーアの配慮に深く感謝していた。その引き締まった表情は、エンリが受けたいわれなき暴言を完全に跳ね除け、好奇心すら持たないようにしてくれているように見えた。あの忌々しい戦士たちから逃れたいのはエンリだけであるのに、気がつけば歩く速度も歩幅すらも寸分違わず揃えてくれて、ただ早く歩くことに専念してくれていた。その姿は全てを察してくれているかのようで、とても安心できた。

そして、エンリは自分を恥じた。エンリ状況を察してくれているンファイレーアに対

して事情を打ち明けることもせず、中途半端な状態で接していた自分を情けなく思った。

——今夜、きちんと話をしよう。

何も聞かず、ただ横にぴつたりと付いてきてくれるンフィーレアの表情は普段の少年のものではなく、頼りになる立派な男のものであるようにさえ思えた。

「バレアレ氏、やはり精神操作を受けているような不自然な表情だったのである」

「そうかあ？ 俺はてつきり、腕を組んだ時に胸が当たるのを期待してそれしか考えられなくなつてるとしか……」

「こんな時でもお前はそれなのか」

「ルクルット、最低」

小声で会話できるのもここまでだ。人の少ない路地に入れば、満足に尾行ができるのはルクルットだけであり、ペテルとダインは少し距離をとりつつ後を追うことになる。店の中で顔を見られたニニヤはさらにその二人の後に遅れて続く形だったが——。

「ま、待つてくれ！ 実は今朝、その服の持ち主が……」

「ちよおつと待ちなよー。女の子が嫌がつてるんだから、顔洗つて出直したら？」

エンリたちを追おうと路地裏に入り込んだ戦士たちの襟首を後ろから掴んだのは、女の細い手だった。彼らが冷静さを保つていれば、その程度で走つていた男二人が押し留められたことに大きな違和感を覚えただろう。

「さっきのあれは、女の子なんてかわいいものじゃな……ぐあつ……」「があつ……おま……え……」

二人の戦士の鎧の隙間に、短い金髪の間が突き立てられた。戦士たちは不意に襲われた激しい痛みの中で思考にもやががかり、助けを呼ぼうという考えが別の何かに覆い潰されていった。

それでも心の端に残された正体のわからない不安は、後ろからかけられた親しい友人の声によつてかき消された。

「君たちー、怪我の方は大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」「こう見えて結構鍛えてるからな」

男たちは振り返り、友人に強がつてみせた。

その友人——短い金髪の女は、顔に亀裂のような笑みを浮かべて、馴れ馴れしく話を続ける。

「だよねー。とりあえず歩きながら話そつか。……でさ、頑丈な君たちが恐れるあの怪しい女、いったい何者なの？」

女は男たちを路地の奥へと誘導していく。

「戦士長からあまり口外しないよう止められてるんだが、まあ、お前なら大丈夫か。ここだけの話だが、あれはな……」

親しい友人に秘密を打ち明けるように、二人の男たちはひそひそと女に何かを耳打ちしていた。

ニニヤは先行するペテルとダインを追うのも忘れ、路地の物陰から物陰へ移動しながらその様子をじっと見ていた。ひそひそとやっている話の内容までは聞き取れなかったが、王国戦士長があれのことを把握していて、その部下たちがあれを恐れているということまでは理解した。そして、そのことの意味を考えれば、暗澹たる思いを抱かざるを得なかった。

清廉な人物とされる戦士長があれのしていることを知った上で黙認しているとなれば、冒険者組合どころではなく王国そのものが腐っているということになり、『漆黒の剣』程度が何をしても無駄だということになる。そうでなくとも、王国最強の戦士であり冒険者でいえば最高位のアダマンタイト級に相当する猛者である戦士長が部下たちと同様あれを恐れているとなれば、やはり銀級冒険者の『漆黒の剣』では話にならない

だけでなく、何か裏を取って告発したとしてもあれを裁ける者自体が存在しないというおそれさえあるのだ。

この世界において、裁きを受けない者というのは確実に存在する。ニニヤの姉を奪った憎い貴族たちもそうであったように、圧倒的な力や権力を持つ者は常に裁きを行う秩序の側を凌駕しているのだ。

ニニヤは二人の戦士たちを支配する女を凝視した。女は王国の精鋭である戦士たちに害をなしておきながら、その深い笑みには絶対の自信が窺えた。これもまた裁きを受けない者なのだと、ニニヤは直感的に理解した。

裁きを受けない者は、裁きを受けない者によつて斃されるべきだ。それが、断片的に聞こえる女の声だけで内容の掴めない会話に必死に耳を傾け続けながら、ニニヤが至った結論だった。

「居場所まではわつかんないかい、じゃ、君たちともそろそろお別れかな？」

女と旧知の仲であるようにふるまっていた戦士たちの命は、もはや風前の灯だった。それは殺気やら気配やらといった、近接戦闘の感覚に疎い魔法詠唱者の少年にも容易に理解できたことだ。もちろん、そのこと以上に明白な、この場に留まっていることの危

険性もわかっていた。

しかし、ニニヤには力が必要だった。許しがたいものを打ち破れるだけの、力。それこそが、ターゲットを尾行する仲間の後を追っていたはずのニニヤをこの場に釘付けにしたものだ。

ただ、最後の決断は憎しみだけではなく、半分は人らしい情から出たものではあつた。ニニヤにとって、この正体不明の恐ろしげな女の手にかかるべきは、戦士たちではなくあの少女だった。少年の浅はかな背中を最後に押したのは、罪の無い戦士たちが犠牲になつてあの少女が逃げおおせるのは正義に反するという思いだった。

「あいつの居場所、知りたいですか？」

震える声で告げると、ニニヤの期待に真つ向から反して、戦士たちがその場に崩れ落ちた。地面に赤いものがゆっくりと拡がり、ニニヤは自身の甘さを思い知った。

「……ふうん、二人死んでも動かないってことは、君、よっぽどあいつ嫌いなんだね」「私も、殺すんですか？」

「元々いつでも殺せそうだから放つておいたんだし、情報貰つたら許してあげてもいいかなー」

ニニヤの顎が、女の持つ血で濡れたステイレットで持ち上げられる。その刺突に特化された鋭い短剣には刃がついておらず、ただ金属の冷たい感触だけが伝わってくる。

「でも、くだらねーガセだったらさつき走ってったお仲間、とりあえず全員君の前でじっくりと拷問して、それからのことはその顔見てから決めてあげる」

女は、目の前の少年の憎しみで濁ったような目を少しだけ気に入っていた。

「居場所は……後をつけて話を聞いていた限りでは、今夜は一緒に居た薬師の家です。名前は——」

戦士たちの亡骸から目を離すことなく、二ニヤは全てを話した。

万一薬師バレアレの家に居なければ、冒険者の安宿であろうこと。

薬師バレアレの家と、安宿の場所。

少女が恐ろしい力を持ち、人間の奴隷と闇妖精を連れていること。

闇妖精は詰問された時、転移か不可視の魔法で逃げた手錬れであること。

開き直った少女に対し、自分たちでは何もできなかったこと。

冒険者組合さえ腐り果てていて、少女の味方であろうこと。

話を終えれば、自分もそこに冷たくなって転がるのだろう。だからといって、話を長引かせ命を永らえようというのではない。避けようの無い運命を少し先延ばししたところでも意味は無いのだから。

ただ自らの死のあとで、目の前の女の矛先が『漆黒の剣』の仲間たちに向かうことがないよう、そのためだけに女の言葉に従い、ニニヤは自分の知っていることの全てを話した。

新入りの方を見て、カジツトは苦々しい顔で口を開く。

「仕掛けるのかと思えば、手間をかけさせおつて……これは問題になるぞ」

その鎧にあつたのは、王国戦士長の率いる戦士団の印だ。動死体とされた今は、念のためカジツトの部下によって削り取られている。

「必要な犠牲だよ。魔法で精神操作しても、記憶が残っちゃうのが不便だしね」

「……クレマンティーヌよ。数年来わしが密やかに行つてきた準備は、この街を確実に死の街へと変えるためのもの。それを台無しにするような真似をするなら……殺すぞ？」

「はいはい。だから、今夜やればいいんだよ。どちらにせよ急がないと駄目だからね」

「なぜ、そこまで急がねばならん」

「例の異能持ちが狙われてるんだよ。法国風の法服を着た怪しい女と一緒にだったから、連れていかれちゃったら困るなーと思って情報を集めたわけ。で、さっきのアレともう一つの情報源から、異能狙いなのは間違いないさそう。そこそこやるみたいだけど、法国絡みじゃなかったのが救いかな」

「もう一つの情報源……そちらは大丈夫なのか？」

「戦士二人の死体だけでも面倒だったのに勘弁してよ。向こうから情報くれた感じだし、それ隠すのも手伝わせた上にすっかり脅してきたから、事が終わるまではもつんじゃないかな」

実際には戦士たちをその場で殺す必要も無かったのだが、口うるさいカジットにそれを言う必要は感じない。ただ一緒に血を見て気分良く脅した方が話がしやすかったのだ。

「……で、異能狙いの女は、お前で何とかなる相手なんだな？」

「風花の調べた強者には含まれてないし、話聞いた限りでもこげおどしかなー。器用貧乏か半端な力馬鹿？ あれは強くないよ」

それから、クレマンティーヌは倒すべき相手について得ておいた情報をカジットと共

有した。身の運びなどを見た時はそれほど思えなかったが、一応ターゲットが連れていた女についてはそれなりに、その同行者については適当に情報を集めてあった。

血塗れの魔女エンリ、それがクレマンティーヌたちと同じように異能持ちの少年を狙っていた女の正体だ。王国戦士長ガゼフ・ストロノーフとその戦士団がスレイン法国の特殊部隊を倒した時の協力者ということになっているそうだが、実際はエンリが連れてきた闇妖精しか戦いには参加していないらしい。

クレマンティーヌには倒されたのが陽光聖典だとわかったが、計算外の魔法詠唱者が王国最強の戦士に加勢すれば作戦の失敗も仕方無いように思えた。その戦いと闇妖精について細かく聞かなかったのは、魔法詠唱者なんて自分にかかれば「スツと行ってドス」で終わりの相手だからだ。

血塗れの魔女の方は、蒼の薔薇のガガーランをも上回るような非常識なまでの膂力を持ち、人の生き血と拷問を好んで動死体を操るといふ。若干の親近感を覚えつつ、それなりの存在であることも理解できたが、それでもクレマンティーヌが警戒するほどと思えなかった。

クレマンティーヌは一流の戦士であり、本当の戦いというものを知っている。血塗れの魔女が何らかの異能かマジックアイテムの力で非常識な膂力を誇っていたとしても、自分の武器を持っておらず戦士の一人からどうでもいい武器を貰ったと聞いただけで、

その実力は問題にならないものとして片付けることができた。

血塗れの魔女が武器に習熟していないのであれば、いくら力があつたところでオーガやトロールなどと大差は無い。かつて王国の情報を集めた風花聖典が蒼の薔薇のガールランをクレマンティーヌとまともに戦える相手の一人に挙げていたが、それとて風貌や膂力のためではなく、あくまでそこに一流の戦士としての技術が伴うからこそ脅威となるのだ。

そうなると、注意するべきは第三位階の《アニメイト・デッド／死体操作》を使える魔法詠唱者でもあるということだが、その程度の位階ならば脅威ではない。クレマンティーヌはどつちつかずで力馬鹿のようにも思われるエンリより、魔法に特化しているであろう闇妖精の方を警戒していた。恐らくは支援役であつたらうがそれでも陽光聖典相手に戦況を左右し、さらに転移か不可視の魔法も使えるとされる以上、エンリより高い位階の魔法を使える可能性が高い。この点は魔法詠唱者であるカジツトも同意見だった。

つまり、初手で闇妖精を葬れば襲撃の成功は約束されたようなものだ。逃亡阻止の役割を担うカジツトから予め防御魔法を貰っておけることもあり、武技〈不落要塞〉まで使えるクレマンティーヌにとっては、エンリの初撃がどのようなものであつても問題になるとは思えなかつた。

応接テーブルの上には、普段は見かけない立派な装飾を施された薬瓶が中身を満たした状態で、七本並べられていた。

「おばあちゃん、これって……」

「第五階だよ。次はこの娘たちにも旨いものを食わせてやるんだね」

客人の食事はリイジーが買ってきたもので済んでいた。それでも、普段は近場で済ませるリイジーにしては珍しく、目の見えない巫女姫の食べやすさに配慮までして少し遠くの店からロールサンドを買ってきていた。

普段ならこの祖母がそこまで他人を気遣うなど珍しすぎて体調不良でも疑ってしまうランフィーレアだが、この日はそれも当然のこととして理解できた。

「第五階?!……そんな、英雄級じゃないか!」

「ワケありのようだがね。使ってくれたのはこちらの……：……：そういえば、名前は聞いていなかったね」

「持つてくる前はミコヒメって呼ばれてたみたいです」

マールレの言葉に、レイジーは少し顔をしかめる。

「そう、法国絡みだ。お前にも、あれの裏には関わるなど言ったことがあったか。私も昔は若気の至りであちらの秘薬に興味を持つて、怖い思いをしたものだよ。危険すぎるし、一介の薬師ごときが関わるべきではない」

ンファイレーアは少し俯き、レイジーと目を合わせない。言う事を聞かない時の孫の姿を認めたレイジーは、少し安心したような顔になって続ける。

「話がそれだけなら、治療魔法の報酬を渡して出ていってもらうところだ。しかし、そうも言っていられなくなった。……この子にも先ほどの赤いポーションを見せてやってくれないかい？」

「赤？」

「見るだけですよ」

マールレはどこからか赤いポーションを取り出し、ンファイレーアに手渡した。レイジーが魔法による鑑定結果とその意味を熱く語ると、静かに聞いていたンファイレーアもその表情に興奮の色を強めていった。マールレが手を出すと、ンファイレーアは今日二番目に寂しそうな表情になってそのポーションを返した。

「私はこの誘惑には勝てない。この子の目的に協力することに決めたよ。もちろん、危

険なのは承知の上だ。若いお前に同じ道を強いるつもりはないし、お前のために新たな工房を確保するくらいの蓄えは充分にある」

「ぼ、僕だって——」

「何も無い村でよかつたら、エモットの家も空いてるよ」

ンフィーレアは静かに情熱を燃やす性格であつて、薬師としての情熱では祖母にさえ大きく劣ることはない。赤いポーシヨンの鑑定結果を聞いた上で、危険だから関わらずに田舎に引つ込むなどということができるはずは無かつたのだが——。

「……………いい、いいの？　ほんとに？」

その顔は真つ赤になつていた。これまでそこに至る方法も考えず、ただエンリを呼んだらどうするかだけを必死に考え計画を立ててきたンフィーレアにとって、自分がエンリの家に招かれ一つ屋根の下で暮らすという提案は全てを吹き飛ばすだけの威力を持つていた。

「そんな、たいした家じゃないよ。ネムも村長にお世話になつてるし、誰も住んでないと家つて傷むから、代わりに住んでくれるとむしろ助かるくらいだし」

「代わり……………に？」

「うん、私も冒険者やつてなきやいけないし、ちょうど住む人がいなかったからね」

「あ……………うん、そういうつもりじゃ……………僕は君が……………」

翻弄される哀れな孫の姿を見て、リイジーは大きな溜息をついた。

「いい加減にせんか。そういうのを済ませるために二人きりで出かけてきたんだろうに、まだゴチャゴチャやってるのかい！」

「お婆ちゃん！」

ンフィーレアが赤い顔で抗議の声をあげる。

エンリは昼食の会計の時のことを思い出し、勝手に納得した。甘えるような関係では無いから結局は自分で支払ったが、その時は決して安くはない食事を奢られそうになった理由に心当たりが無かったのだ。

「ご飯なんて奢ってくれようとしなくても、空き家なんだしいつでも——」

「お前ももう黙っておれ！」

「あつハイ」

エンリはリイジーに気圧されて口をつぐんだ。呆れたような目で見られる心当たりなどは無かったが、何故か今は少し黙っていた方がいいような気がした。

「で、どうするんだね」

「僕も、一緒に協力するよ！ ……エンリの恩人だし、それだけのものを見せられて関わらないなんてできるわけがない」

その方がエンリと一緒に居られるから、という部分は心の中でだけ呟いた。それでも照れがあつてエンリの顔を見ることはできず、それを隠すためにマーレの方へと向き直った。

少し顔を紅潮させたンファイレアは、マーレの両手をとつて、身を低くして視線をあわせた。

「エンリたちを助けてくれて、本当にありがとう。僕も微力ながら君に協力させてほしい」

こっほんっ！

何故か苛立ちのようなものを感じたエンリは、わざとらしい咳払いをしてしまう。大切な友達が自分と一緒に協力してくれるのは嬉しいことであるはずなのに、そういう感情を持つてしまった不思議な自分に混乱し、すぐに二人から視線を逸らした。

ンファイレアはすぐに手を離した。そしてエンリの行動の意味を考え、ますます顔を紅潮させた。

今日という日は、人生で最も自分自身の小ささを思い知る一日だった。しかし、そんなちっほけな自分に対して、エンリがそういう反応をしてくれた。勝手にライバルと決めたエンリの憧れの人エルヤーの背中は遥か彼方だが、現状、少なくとも希望はあるということだ。

それから、エンリは改めて冒険者となった経緯を話した。王国戦士長から聞いた部分も、マーレの少し変わった部分も。

二人は疑ったり否定したりすることもなく聞いていた。第五位階の治癒魔法と赤いポーションを見た上でそれは当たり前のことだったが、エンリにはそこまでのことはわからない。

冒険者組合で受けた誤解について話しているとンファイレアの顔が引きつってきたが、それは話の中でゴ布林や狼について「気性の荒い家畜程度」と言い放った、変わり果てたエンリに対しての反応だった。エンリの方はそれが当たり前と思っているの
で、狼の頭蓋骨を握りつぶすようなマーレの非常識な力に対する反応だと考えた。

そして、エンリはここまでの自分自身でも信じられないような話の裏付けとして、ガゼフからの紹介状を見せることにした。もう二度と用いることのない書状だが、これを出した時の異様な反応も気になっていたのだ。

書状の内容は以下の通りだった。

王国戦士長ガゼフ・ストロノーフが、この書状を携える少女とその一行の身分を保証

する

この書状を持つのは、先日、私ストロノーフと王国戦士団を死地から救った者たちである

敵に回せば王国戦士団の総力を挙げても、この書状を読み終えるほどの時を稼ぐこともできないだろう

危険な者たちだが、敵となれば王国存亡の危機となるため、くれぐれも失礼なきように

話をする場合はエンリ・エモットという少女と行い、他の者については詮索や接触を控えられたし

「……エンリ！ エンリ！ 大丈夫!？」

ンフィーレアがエンリを揺さぶる。

エンリは意識を失っていたわけではなかった。ただ少しの間だけ自分の内側に閉じ

こもり、詰め所で、冒険者組合で、この書状を出した時の状況を思い出して。そして、そこで起こったことを理解しようとしながら、心がそれを拒絶するという葛藤を繰り返していただけだった。

一人で街へ入る必要など無かった。

一人で冒険者組合へ行く必要など無かった。

それらを一人でやろうとしたことこそが、最大の間違いだった。

兵士たちの土下座も、恐怖に震える受付嬢も、エンリの中で全てが一本の線で繋がって……しまいそうだ。

戦士長は、余計な詮索や行き違いから間違いが起こることを最大限警戒していたのだろう。マーレが王国にとつての災厄とならないよう、彼なりに配慮した文面であることは間違いない。王国には戦士長の地位を侮るような者はいても、戦士長の武力を侮る者はいないということを最大限利用した内容だった。

エンリの隣にマーレさえ居れば、上等すぎる服を着た、王国では見慣れない闇妖精の姿さえあれば、怪しげな者だが危険だから詮索を控えろという意図もそれなりに伝わったことだろう。もちろんその横にマーレの玩具とされた少女——ミコヒメが居ても問題はなかったのだ。

それが、実際はどうであったか。王国存亡の危機に繋がるほどの危険人物と見られたのは、その場に居なかつたマーレではなく、いったい誰だつたというのか。

エンリは、一人の状態でこの書状を用いたことの意味が、閉じた心の防壁の隙間から少しずつ自分の中へ入ってくるのを感じていた。それは、少しずつでなければ、とても心がもたないものだから――。

「顔色が悪いよ。今、気分が落ち着く薬を――」

「ソフィーレア、やめて」

明確な拒絶。何をするつもりかわからないが、無理矢理回復されて健康になつた心にそれが一気に流れ込んできたら、自分が完全に駄目になつてしまうような気がした。少しずつでもギリギリだというものに……。この街へ来てから時折痛むようになった鳩尾のあたりが本当につらかつた。

しばらく応接セットのソファを借りて横たわり、差し出された果実水を何度か口にして、エンリはようやく生還した。この街で自分がいったいどういふ目で見られてきたか、時に拙い言葉でぼつぼつと語り、時に質問に答える形で、粗雑ながらもどうにか説明することができた。

我が身に溜め込んだ毒をようやく吐き出すことができたかのように、エンリは晴れや

かな気持ちになっていた。ンファイレーアも、リイジーさえも親身に話を聞いてくれて、安心できる家族に囲まれているように感じられた。

そんな時、冒険者となったエンリが初めて出会う本物の脅威ともいえる存在が、既に工房のすぐ外まで来ていた。

一七 マーレの罨とクレマンティーヌ

水場の薄明かりの下で、ぴちやぴちやと水音だけが響き続ける。

ニニヤは手を洗う。

掌の僅かな陰影の全てが、罪深く赤黒いあの汚れのように感じられる。

ニニヤは手を洗う。

爪の間の暗がりに、まだべつとりと詰まっではいないだろうか。

ニニヤは手を洗う。

指の間の影を振り払おうと、千切れんばかりに指を開き光にかざす。

ニニヤは手を洗う。

……………。

人間だったものを袋に入れ、貧民街の奥へ運んだ。死体は冷たくなるというが、生温かかった。力強い戦士の死体でも、思ったより柔らかかった。最後は目隠しをされて手伝ったが、最初からしておいてほしかった。

気をつけるように言われたが、やはり色々な所が血で汚れていた。女に洗える場所は無いかと聞けば、顔を何度も殴られた。鼻血が噴き出すと、これで問題ないねと女は

笑った。

自分があんなことをさせられたのは、仲間の命まで人質にして脅されたのは、全てあいつのせいだ。だから、あの女にはあいつを斃してもらわなければならない。

もう後戻りはできない。死体を片付ける時はその行為に完全に加担するのが嫌で、証拠として戦士の持つていた古びたペンダントを確保した。しかし、それを持っていることが仲間を危険に晒すような気がして、解放されたあとで貧民街のゴミの山に棄ててしまった。

仲間たちには心配をかけたが、喧嘩だと言い張ってわかってもらった。今の自分に残されているのは、せいぜい罪の証である血の汚れとその匂いくらいなものだ。あとは、この手を洗い終われば、いつもの日常が戻ってくるに違いない。

ニニヤは手を洗う。

それを見守る仲間の影に気付くこともなく。

ニニヤは手を洗う。

………。

小さな解錠音に気付いたのはリイジーと奥の部屋に引つ込んでいたマーレだけだった。すぐに扉が勢い良く開き、短い金髪の女が無遠慮に家の中へ踏み込んでくる。

「こんばんはー。血塗れの魔女エンリちゃんいるー？ 陽光聖典と戦った子もいるのかな？」

初撃を食らわせたのはクレマンティーヌだった。その呼びかけは、エンリの心に、鳩尾の奥の臓腑に響く一撃だ。

「……あ、あの、こんな時間に、どなたなんですしょうか？」

ンファイレアが招かれざる客に声をかける。

「はい、スレイン法国の方からきましたー。元漆黒聖典のクレマンティーヌだよ。君のことをその魔女に渡すわけにはいかなくてね、どこかに連れてかれる前に攫いに来たんだー。ちよつと使つてほしいアイテムがあつてね」

人攫いの先客のように言われたエンリは、シクシクと続く痛みに耐えながら立ち上ががり短剣を抜く。目の前の女は明らかに危険な雰囲気を漂わせているが、どうせ「交渉」は自分の役回りなのだ。

「人聞きが悪いことを言わないでください。別にンファイはどこにも連れていきませ

ん」

「じゃ、お姉さんが貰っていったいいかなあ。アンデッドの大軍を召喚する第七位階の魔法を使うっていう、とつても貴重な体験をさせてあげるよー」

「それくらい、自分で使ったらいいんじゃないですか？」

開け放つてあつた隣の部屋の入口からマーレが顔を出す。少し離れた隣には、薄絹一枚の姿となつた巫女姫が控えている。魔法による超知覚で招かれざる客を侵入前に感知し、使えるようにしておいたものだ。

「ほー、言ってくれるね闇妖精。それと——巫女姫だと!!」

クレマンティーヌは最初に斃すべき目標を見つけ次第仕留めにかかるつもりだったが、この場にありえないものを見て思わず声を荒げる。

風の巫女姫。

それは、壊滅したという風花聖典の本拠地、風の神殿の最奥で秘匿され護られていた存在。世界の果てまでを見通す風花聖典の目であつたそれは、漆黒聖典の個々の隊員にも引けをとらないスレイン法国の要人であつた。

「この玩——ニコヒメを、知っているんですか？」

マーレは漆黒聖典という存在を知っている。それは、マーレがスレイン法国で召喚し

た魔獣の支配を奪うほどの、すなわちマーレ自身をも支配しかねないほどの、極めて危険な神器を守っていたとされる存在だ。そしてスレイン法国自体、ナザリック地下大墳墓を土足で踏み荒らした者どもに連なる勢力であり、すなわちアインズ・ウール・ゴウンの明らかな敵である。

前に会ったニグンという男は至高の御方への許しがたい無礼があつたため殺してしまつたが、復活魔法の使い手を得た今となつては、死体を置いてきたのは失敗だつたと考えていた。今度は落ち着いて、うまくやらなければならぬ。

「聞きたいのはこっちだよ。どうして壊滅した風花んとこの巫女がここにいるのか……まあ、残つたのに拷問して聞けばいいか。それじゃ、入口はカジつちゃんお願い」

——拷問すればいいのかな。

〈能力向上〉〈能力超向上〉〈疾風走破〉——

そして——クレマンティーヌは一直線に駆ける。目標のマーレとの直線上にあるのは、エンリの短剣だ。敏捷性の差は大きくとも、武器の方へ向かつていけばその攻撃は無視できない。

エンリは短剣を振り下ろす。いつものように力がみなぎつてこないのは、相手が人間だからだろうか。女の顔に張りついた亀裂のような笑みが深くなつたような気がした。

——間に合わない！

信じがたい速さで距離を詰めるクレマンティーヌは、不思議なことに自身より遙かに鈍重なエンリの振り下ろす短剣の軌道に吸い寄せられるように接近し——。

〈——不落要塞〉〈流水加速〉

そのステイレットがエンリの短剣を受け、そのままクレマンティーヌは爆発的に加速してエンリのすぐ横をすり抜けていく。短剣の動きは遅く、想定よりかなり高い位置で受けたことで体勢が崩れず、その速度も想定よりさらに速くなる。

この動きは、元々横を抜けていくことを目的としたものだ。後衛の魔法詠唱者を狩る時、転移などの逃げの手を防ぐことも考えれば、回り込むより前衛に当たると見せかけて抜けるのが最も成功率が高くなる。クレマンティーヌの圧倒的なスピードとこの二つの武技をもってすれば逃れられる魔法詠唱者など居ないはずであり、たとえ前衛の攻撃を低い位置で受けても低姿勢からの加速はクレマンティーヌの得意とするところだ。そして、このように体勢を崩さず高い位置で受ければその後の速度は人間が対応する限界を超えたものになる。全ては完璧なはずだったが——。

——軽すぎる……罨!?

クレマンティーヌは戦慄した。エンリが武器に習熟していないことも、攻撃速度で劣っているのも想定内のだが、これは少々御粗末に過ぎる。さらに、〈不落要塞〉で

受けた一撃は、化け物のような膂力で繰り出されたものとしてはあまりに軽すぎる。それは攻撃を受けた際の衝撃を殺しその影響を完全に排する武技ではあるが、攻撃の気配や武器を合わせた音まで感じなくなるわけではない。

素人同然——そう考えるのは甘すぎる。相手は冒険者組合を、そして王国屈指の武力集団を震撼させる存在なのだ。

しかし、毘だとしても相手は魔法詠唱者だ。何を準備されていようと、その小さな体にステイレットを突き立てれば終わる。それだけのことだ。

——毘でも、食い破れる！

「死——ね！」

強力な魔法詠唱者かもしれない相手に反撃を許してはならない。一切の遊びの無い、確実に心臓を狙った最速の一撃を繰り出す。そして——焼けるような激しい痛みがクレマンティーンの手首を包み、不意に突進が止まった。

「話を、聞かせてもらえますか？」

クレマンティーンは、自分の手首を掴み上げた——半ば砕きながら掴み潰して肉にめり込んだマールレの小さな手を呆けたような顔で一瞥し、すぐにその顔は苦痛と憎悪に大きく歪む。

「アイテムだったか、糞がああああ！」

クレマンティーヌは非常識な膂力を得る手段がアイテムである可能性も考慮していたが、それが他方の手に渡っている可能性については失念していた。ただ魔法による反撃を受ける機会を最小限とするため、無詠唱の魔法をも上回るよう速度に特化した攻撃を選んだのはそのためだ。

ただし、魔法詠唱者が攻撃の軌道を見極め、半身になって切っ先をかわし攻撃を受け止めることの異常さにまでは考えが至っていない。狩る側としてこの場に現れたクレマンティーヌにとつて、戦闘中の一瞬の判断においては、この時点で相手が絶対的強者であることを受け入れるのは難しかった。

それでも、激痛の中でなおクレマンティーヌは一流の戦士であり続けた。手痛い判断ミスを悔やんで吼えながらも、とつさの判断で潰された腕にも役割を与える。砕かれた手首の先のかろうじて動く部分を緩め、その自重によつてステイレットをゆっくり滑らせていく。先端以外に殺傷力の無いステイレットはせいぜい相手に軽く触れて落ちるだけのもので、相手は気にも留めないだろう。

そして、クレマンティーヌにはもう一本の腕が残っている。瞬時に別のステイレットを抜き放つと、本来の刺突ではなく薙ぎ払うように扱い、今度は狙い通りにステイレットの刃の無い刀身を掴ませる。

壊れた方の手を滑るステイレットと、掴ませたステイレット。双方がマーレの手に触

れた瞬間を狙って、クレマンティーヌの意志に従って次々と込められていた魔法の力が解き放たれる。武器に付与されていた魔法蓄積の器に込められていたのは、《ライトニング／電撃》と《ファイヤーボール／火球》だ。

マールの手先からその全身に向けて雷撃が伝わり、逆の手で掴んだステイレットから指向性をもった爆発が起こる。クレマンティーヌは闇妖精の小さな身体を蹂躪する二つの魔法を満足げに眺めると、雷撃でその皮が爆ぜ、爆炎で肉が焦げる姿を思い浮かべて溜飲を下げる。

あとは、ひるんで手が離れたところで脚でも潰しにいくか、戦闘不能ならアイテムを手放しているはずの後方のエンリを軽く仕留めるか――。

――離れない。

「無傷?!」 嘘!!」

ステイレットに込めてあった魔法は、漆黒聖典の同僚であった高位の魔法詠唱者が魔力を強化する装備をつけて行使したものだ。その威力は通常の第三位階より強力なもので、英雄どころか逸脱者の領域にあっても完全に防ぐことなどできないはずだった。

ほぼ同時に、入口を固めるだけだったはずのカジットからも攻撃魔法が飛ぶ。数年も儀式を続ける気の長い男だが、その状況判断は早い。

《アシッド・ジャベリン／酸の投げ槍》

狙いはクレマンティーヌの手首を潰しつつあるマーレの左腕であり、槍状の酸の塊が正確にその左肩を直撃する。

しかし、水でもかかったかのように僅かな不快感をその顔に浮かべただけで、マーレには何らの痛痒も与えることはできない。クレマンティーヌの右手首は、ごきり、みしり、と嫌な音を立て続けている。

——破滅の竜王。

クレマンティーヌはその脳裏に浮かぶ不吉な言葉に、目の前の小さな闇妖精の姿を重ねて振り払う。

「——なわけない、ありえない！」

掴まれ動かないステイレットから手を離し、次のステイレットに手を伸ばす。「すまぬ」——入口の方からそんな声が聞こえたような気がしたが、あれは慎重な男であり、戦況を考えれば仕方無いことだ。

「ここで待っていてください」

三本目のステイレットはただ空を薙いだ。クレマンティーヌは左膝に激痛を感じながらその場に引き倒され、掴まれていた右手首もそのまま握り潰されてもぎ取られた。

「ぎいああああつ!!」

その卓越した動体視力で微かに捉えた残像から、クレマンティーヌは自らの膝を逆向

きに叩き折ったのが闇妖精の単なる足蹴りであることを知ってしまった。それさえ見なければ、英雄の領域に踏み込んだ戦士として心折れることなく、地に這つてでも相手の隙を突くことを考え続けただろう。

戦闘の継続を諦めた時、血を噴き出す右手首から、飛び出した骨が見える左膝から、改めておびただしい痛みが身体中を駆け回った。

エンリが振り向いた時、既にクレマンティーヌは片手片脚を奪われて噴き出る血を抑えながら悶絶し、マールが改めて杖を手にとったところだった。戦いにそぐわないとわかつてはいても、出てくる言葉は一つだった。

「マール、あまり汚くしないで！」

《エクस्पロー——

「——だめですか？」

「お願い」

エンリの横槍によって、逃走したカジットは魔法の効果範囲外へ去った。マールは静かにその場から滑るように走り出し、次の瞬間には家の外へ消える。そしてすぐに逃走者の姿を捉えて、汚くならない魔法を選び——。

《グレーターリーサル／大致死》「あれっ……」

「いれほど……とは……」

思わず間の抜けた声が出るほどのマーレの違和感に反し、逃亡を試みていたカジットは素直にその場に崩れ落ちた。

この魔法は、本来は創造主がお気入りのギルドマスターを回復させる手段を持たせたいということで、不死者に対する回復用に覚えさせられたものだ。ただし分類は攻撃魔法であり、その用途での使用を躊躇することもない。

そして、この時は周囲を汚さない数少ない攻撃魔法として用いたにも拘らず、不死の者にかけて回復させてしまったような、魔法によって生み出された膨大な負の力が何かに注ぎこまれるような違和感を覚えた。仕留めた男は人間にもかかわらず不死者の如き容貌を備えていたが、この違和感はそのような視覚的なものとは関係がなさそうだ。地に伏したカジットの懐から、異様な光を放つ黒い石が現れる。それは自らの意思を持つかのように、マーレの足元へ転がってきた。

なんとなく拾い上げると、違和感の正体がマーレの脳内に激しく呼びかけてくる。死の宝珠と名乗るそれは、カジットを殺した魔法の膨大な負のエネルギーを受けて何やら活性化していたようだ。マーレを操ることができないと知った後もひたすら死を撒き散らしたのだとか、多くの殺戮を行った気配がどうか、先の魔法で人間を殺しつくして欲しいだとか無駄に注文ばかり多い。

「……………うるさい」

壊してしまおうかとも思ったが、知能があるアイテムは珍しく、何か知っているかもしれないのでアイテムボックスに放り込んでおいた。今はよくわからない石ころと話をすることより、スレイン法国——敵の情報を知っているクレマンティーヌという人間の方が重要だった。

「あのつ、この家で、汚くしていい場所はありますか？」

「……………こうなった以上、この部屋で構わんよ」

既に床はクレマンティーヌの血で派手に汚れていた。穏便に協力を得ることはできなかったが、情報源としてクレマンティーヌを拷問してでも活用したいマーレの意思は固く、高位階のポジションを大事そうに抱えたりイジーもそれを認めることにした。法国を敵に回している者に協力するというこの意味を考えれば、こういうことも受け入れざるを得なかった。

エンリも説得には及び腰だった。まず酷いことになっているクレマンティーヌを視野に入れたくなかった。それでも、嫌な予感を感じたのでマーレに顔を近づけて拷問を行う理由をひそやかに聞けば、予感通りに「エンリが言ったから」となる。

この相手に合わせれば、協力を得るには拷問が必要だということらしい。エンリはそうなることに身に覚えが無いつもりだったが、とりあえず鳩尾のあたりをさすりながら、それを大きな声で言われなかったことに安堵した。クレマンティーヌには聞こえたかもしれないが苦痛でそれどころではなさそうだし、バレアレ家の人々に聞かれなかっただけでもよしとしよう。

ともかく、大切なのはどうしてそうなったかではなく、これからどうするかだ。非常識な事態や前提においてもひるまず迅速に次の判断をして行動に移れるのはエンリの手持っている隠れた才能の一つかもしれない。

この場でこれ以上話をしたくないので、クレマンティーヌから顔を背けたままマーレの耳元についてくるよう囁き、部屋の外へ向かった。

「わかりました——」

マーレの返事に続いて、強い怨嗟と呪詛の籠ったクレマンティーヌの悲鳴が、間を空けずに二度響いた。

エンリは知らなかったが、マールはクレマンティーヌを拘束してはならず、その場から離れるにはその自由を奪う必要があった。そこで黒い杖を一振りして残る脚を腿の所で叩き折り、のたうち回るクレマンティーヌの無事な方の腕の肩口のあたりを踏み砕くことで完全にその自由を奪って、それからエンリの後を追った。

エンリは後ろで起こっていることを考えないようにしながら、今するべきことを思い返した。すぐにマールが追いついてくると、言うべきことをしっかりと語り言っておく。拷問をせざるをえないというのなら、家の外で堂々とやらないこと、外に音が聞こえないようにすること、家の中は終わったらきちんと綺麗にすること、掃除には死体を使わないことなどを約束してもらった。

「ラクしないで、自分の汚したところは自分で綺麗にするようにね。お願い」

エンリはマールに視線を合わせ、その両手を自分の手で包み込むように握って言い含めておいた。襲撃がある前にインフイーレアが握った部分より少し広く、それを上書きするかのよう。少し濡れたものに触れたような気がしたが、あまり気にならなかった。

——弱い存在にも、合わせてあげないといけない。

人間との接し方について、エンリが教えてくれたことを思い出す。クレマンティーヌ

という人間に合わせれば、これは必要なことなのだろう。一度は自分には難しいと思つた拷問だが、マーレが久々にその手段を選んだのは、手にしている玩具がそれに使えることを知っていたからだ。

この玩具——巫女姫は神官らしい回復魔法のほか、相手の能力や状態を調べる魔法に長けていた。そのため、相手の体力の残りを見ることが出来、その状態に合わせて回復魔法を使うように命じておくことができる。その道の専門家であるかつての仲間が持つていた沢山の道具には及ばないまでも、この用途においてはなかなか便利な道具なのかもしれない。

クレマンティーヌという人間は、深手を負わせれば早く殺せと喚き、回復してやれば攻撃をしてくるか、必死にもがいて逃げようとする。説得して素直に協力者となるようなタイプではないようだが、貴重な情報源として確保しなければならぬ。既に力の差は理解しているようだが、やはりスレイン法国にもこの人間が恐れるような強者がいるらしく、完全にしもべとするにはまだ心を折っていく必要があるだろう。

マーレは、すぐに法国と事を構えるつもりはない。しかし、法国とはナザリックを踏み荒らした大侵攻に参加した恐るべき者たちに連なると思われる危険な存在であり、たとえ自らの手に余るとしてもアインズ・ウール・ゴウンへの帰還を果たした後の戦いに備えて慎重に情報を集めておく必要を感じていた。至高の御方の命令も受けられず防

衛の任も果たせないとすれば、せめて敵について調査し、可能なら潰しておくくらいの務めは果たさねばならない。

「加工してない虫草とかはありますか？」

「そんなもの何に……いや、聞くまい。そうそう使うもんでもなし、今はないよ」

とりあえず、この部屋でできることをしてから考えることにした。できることといつても、ここではせいぜい腕や脚を折ったり潰したり、身体を裂いて中身をぶちまける程度の単調なことしかない。それでうまくいかなければ、色々な道具がある所へ場所を移すだけのことだ。

「こんなことになって、ごめんなさい！」

エンリはバレアレ家の二人に謝る。入口側の部屋は襲撃者の血に塗れ、ソファセットはどうにか難を逃れたが敷物はもう駄目だろう。さらに、血塗れの原因となる所業はまだ終わっていないのだ。

「こんな状況では寝られませんし、今夜は私がお二人の宿代を持ちますから」

「私はポーシヨン研究の凄いヒントを貰ったばかりなんだ。今夜は元より寝るつもりなんて無いから構わないよ」

リイジーの頭の中は、試さなくてはいけないことで一杯になっていた。赤いポーシヨンの現物が得られなくとも、それが劣化しないという情報が得られただけでも大きな前進だった。本来なら孫もそうであるはずだが、今の孫にはポーシヨン研究より優先すべきことがあり、それはリイジーもわかっている。

「ンファイレーア、お前はきちんとして寝てくるんだ。寝不足で私が倒れた時に世話を
する人間が必要だからね」

「う、うん。着替えてくるからちよつと待ってて！」

祖母に背中を押され、ンファイレーアはエンリと宿に泊まるという人生の一大事に挑むことになった。もとよりそれを回避することなど考えられないのだが、かといつてどう返事をして良いかわからず赤面するばかりだった少年にとって、祖母の言葉は本当にありがたいものだった。

結局、返事もしないまま結果だけを享受したンファイレーアは、返り血に汚れた一張羅を別のものに替えるため足早にその場を去った。エンリも服の返り血に気付くが、こちらは魔法の装備であるため濡らした布で拭き取るだけで綺麗になった。

着替えといつても、どんな用事でも作業着で外出していたンファイレーアにとって、エンリとの未来を作るような重要な状況に見合う一張羅は今着ているもの一つしかなかった。ンファイレーアは自分を知っており、告白と一緒にの外泊が同じ日に訪れようなど

と夢にも思わないため、これ以上の準備など無かった。普段の葉草の匂いが染みこんだぼろぼろの服でエンリと外泊など考えられず、かといって、真新しい返り血が点々とついた一張羅で出かけて、兵士や役人にどこかへ連れていかれては全てが台無しになってしまう。

衣装箱を色々と探っていくと、体格の合わない父親のものだけでなく、ちようどいい祖父のものまで良い状態が出てきた。

「お爺ちゃんの若い頃の一張羅、借りてもいい？」

「そんな古いもの、まだあったのかい。こっちは忙しいんだ、服くらい好きに選びな」

この世界ではありえないほどの物持ちの良さにも当人たちには自覚はなかった。普通、この世界では庶民の家なら十年もすれば仕舞いこんだままの服など穴だらけになってしまう。これはポーシヨンの混入物対策や作業場所の衛生上の問題で、常に虫避けのハーブが使用されてきたバレアレ家ならではのことだ。

祖父の服は仕立ての良い上質なものだだったが、今どきの若者が着るものとは意匠が大きく異なっていた。襟付きのシャツは折り襟が一般的なのに対し、詰め襟というのは今ではかなり珍しく、縫い目の向きなどにも時代を感じさせる違いがある。

数十年前はまだ戦争が少なく、厭戦気分が蔓延していなかった。その頃の一張羅のシャツは貴族の多くが今でも着ているダブルレットと同様、勇壮な騎士たちが着用する金

属鎧の形状に影響を受けて詰襟にしたものが多かった。それは庶民の社会にあつては、時代の流れで廃れていった意匠だった。

ンファイレーアはそういう歴史を全く知らない世代だが、初めて着る詰襟のシャツは襟をきつちりと紐で締めると気分が引き締まるような気がして嫌いではなかった。若干きつちりしすぎている気もしたが、これを着て挑むのは人生の一大事であり、締める所は締めるべきだと考えた。

古い服の虫食いを警戒して何度も鏡を見返すうち、昼間は急いでいて忘れていたことを思い出して櫛を手取る。髪に油をつけるなど初めてのことだが、幾度か読んだ身だしなみに関する本に倣つて手早く作業を済ませる。普通の若者はそのような本を読まないのだが、ンファイレーアにそういう知識は無かった。

「古い服だけどおかしくないかな？」
「よくわからないけど、私は格好いいと思うよ」

ンファイレーアの前髪を上げて別人のようになった顔がだらしく緩む。エンリが格好いいと言ってくれるなら、他の誰が何と言おうと問題はない。油を入れて後ろへ撫でつけた髪型はシャツと同様かなり古風なものだったが、それを指摘するような者はこの場には居ない。たとえエンリに街の若者の持つ常識が備わっていないということに氣付いていたとしても、この言葉一つでンファイレーアの行動は決まってしまうのだ。

気持ちよく眠れる所を教えてほしいというエンリに対し、ンフィーレアが案内したのは冒険者や旅人でも泊まれる中では最高の宿だった。一見客でも問題無い場所となると、やはり冒険者の宿とならざるを得ない。金額は自分で出すつもりなので考える必要は無い。二人の一生の思い出になるのだから、その中で最も良い場所にしたかった。

それでも、宿の入口で立ちすくむンフィーレア。その手をエンリがぐいぐいと引つ張っていく。そこで何か濡れた感じがして、エンリの手血の汚れがついていたことに気付いたが、そのままできるだけ長く手を握っていてほしかったので何も言わなかった。冒険者の宿であれば、その程度のこと騒がれることもないだろう。

エンリは一刻も早く拷問の場から離れたかった。過去に似たような状況で呆然とその場に留まり、その結果エンリの運命がどのようなものになったかを思い出せば、それは当然の行動だった。初日にトラブルとなった冒険者の宿というものは苦手だったが、ンフィーレアに迷惑をかけず快適に眠ってもらうために割り切ることにした。自分もあの光景を忘れて早く眠ってしまいたかった。

男女二人でというのは気にならないではないが、冒険者の宿であれば仲間と泊まるの

は当たり前前のことで、問題もないように思えた。

一階には以前に訪れた安宿と同じように酒場があつて冒険者たちが酒を飲んでいたが、店の中は綺麗で客も全体に品が良いように感じられた。

それでも、絡まれた嫌な思い出は消えない。頭で自分が悪かつたとわかつてはいても、心の中では割り切ることができないのだ。エンリは冒険者たちと目を合わせないよう、もたつくンファイレアの手を引いて素早くカウンターへ向かう。その冒険者たちのプレートがミスリルや白金であつたことにも、気付くことはなかった。

「……空いてるのは二人部屋が一つだけだが」
「今すぐ寝られれば何でもいいです」

エンリは遠慮深いンファイレアが金貨袋を出す前に速やかに言われた値段を支払うと、そのままその腕を掴んで階段を登つていった。ンファイレアは二の腕に全ての感覚を集中して歩調を合わせる以外、何もできなくなった。

珍客が上階へ消えると、冒険者たちの話題はそこへ集中する。

「おいおい、ありや何だ？ カップルにしても服装とか色々おかしいだろ」

「銅級の方は知ってるぜ。戦士団にいる古い知り合いが『血塗れの魔女エンリ』って呼んでた、ワケありの女だ」

「ふん、何が『血塗れ』だ。銅級がこんな所に泊まるなんて、気にいらねえ」

「だったら絡んでくればよかつたんじやないか？ イグヴァアルジ」

「ミスリルの男が銅級の女に絡むなんて格好悪い事できるかよ」

「俺は組合で受付嬢が怯えてるところへ居合わせたんだが、あれは素手で狼の頭を潰す化け物女だ。実力を見るならお前くらいがちょうどいいかもな」

イグヴァアルジと呼ばれた男は黙り込んで酒を呷る。駆け出しが自分たちと同じ宿に来たことは大いに不満だが、そんな化け物じみた評判の相手でも所詮は銅級でしかない。名声を得られる要素も無く、リスクばかり目立つような相手に喧嘩を売るような馬鹿な真似ができるわけがない。

「銅級とかより、プレートの無い男の服がおかしい。古着を着た田舎者ってほど服も痛んでないしモノが良すぎる」

「あれは、特殊な男娼だ。今ときああいう服を用意してるのは、熟年向けの男娼しかないからな」

話が男の服装に移ると、訳知り顔の盗賊に視線が集まる。

「熟年向けってお前、連れ込んだ女の方は服装はあれでも顔は少女って言った方がいいくらいだったぞ」

「別に老婆限定ってわけじゃない。誰もやりたがらないような相手にも尽くす、つまり男の方は組織に心を折られてて何でもありってことだ。普通の男娼相手じゃできない

ような無茶なプレイもできるつてのが、あのテの連中の売りなんだよ」

「おいおい、それじゃまるで八本指の……」

「堂々と店は構えてないようだが、金持つてて特殊な性欲を滾らせてる奴はどこにでも居るからな。奴らの商売のネタは尽きないつてことさ」

「でも、組合長もたまにああいうシャツ着てることあつたような」

「古い世代はそうだが、さすがに組合長でも紐を緩めにして襟は開けてるだろ。それに若者はあんなもの着ないし、今どき売つてる店も無い。シャツの詰襟を紐できつちり閉めるのは、この街では昔を懐かしむババアどもに夢と色々なもんを売りつけてるあいつらだけだろうな」

「うへえ……でもあのガキ、今夜は相手が同世代でほつとしてるんじゃないか?」

「そんなババア相手の男娼を好んで選ぶ女がいるかよ。それも『血塗れ』とか呼ばれてる女が普通にやるだけで満足するわけがねえだろ」

「だろ。あのテの所だったら金額が高い代わりに、たとえ五体満足で返さなくても規定の金を払うだけでお終いだ」

「そういや、男を引つ張つてた手に血がべつとりついてたぞ」

冒険者たちは『血塗れの魔女エンリ』の嗜好や嗜虐性について幾らかの伝聞と勝手な想像をもとに大いに語り合い、次に何故か男娼事情に詳しい盗賊の嗜好や性癖を疑い、

最後にそのいくらか重い過去を聞いて口をつぐんだ。

物珍しい話題に飛びつき無責任に盛り上がる周囲と違って、イグヴァルジは終始不機嫌だった。

確かに自分も娼館などを利用しないわけではない。下位の等級だった頃には自分たちより上位の冒険者が使うような店で祝杯をあげたり自棄酒をあおることもあったので、時には羽目を外したい気持ちだっただけで、わからなくはない。

しかし、この街の最上位の冒険者が多く利用する宿で、駆け出しのうちから堂々と男娼を連れ込むというのは、あまりにも常識から外れている。

さらに、その者が化け物のような力を持ち、組合でも特別扱いされているとなれば、そこに生じる不快感は特大のものとなる。

——もし上がってくるようなら、チャンスがあれば蹴落としてやる。

いつもより酒量を増やしたイグヴァルジには、それがそう遠くない日のことのように思えていた。

一八 幼き破壊の天使【拷問回・読飛ばし可】

クレマンティーヌは走る。

マールという闇妖精が手の届きようがない絶対的強者だということは、二本目のステイレットを匣にした時点で悟ってはいた。しかし、実際にエンリの挙動を見て侮ってかかっていたせいだろう。クレマンティーヌは心のどこかでそれを否定したい気持ちを残したことで、判断を誤ることとなった。

ただ、自身の武器に同格の魔法詠唱者が込めた魔法の攻撃さえ無傷に終わったことでそれは揺らぎ、さらにその後の拷問と回復の繰り返しを受けるに至って、その自信は完全に打ち砕かれた。

クレマンティーヌは闇に包まれた森の中を一直線に走る。ただ彼我の距離を離すためだけに。

あの時、クレマンティーヌに絶望的な力の差を思い知らせたのは、一度きりの敗北で

はなかった。

マールはクレマンティーヌをろくに束縛もせず武器も奪わないまま、気まぐれにその四肢を折り、潰し、腹を裂いた。意識が飛びそうになるたび巫女姫の魔法で回復した。クレマンティーヌはその度に幾度も幾度も攻撃か逃亡を試みたが、その全てがマールの圧倒的な膂力と敏捷性によって防がれ、叩き潰され、蹂躪され続けた。

マールの表情には憎しみも哀れみも、嗜虐の悦びも無かった。その瞳の中の深い闇にあるものを、クレマンティーヌは伺い知ることはできなかった。マールはただ目の前の生き物を観察し、苦痛や恐怖、拒絶などの反応が強くなる行為がどういふものかをただ探り続けているかのようだった。

クレマンティーヌは藪の中を走る。居る場所なんかわからない。毒草にかぶれた肌に、荊の鋭い棘が幾度も細かい裂け目を作る。

マールが三度目にクレマンティーヌの腹を裂いた時、一緒に裂けた臓物が幾らかこぼれた。それを惜しそうに目で追っていたので、床にばら撒いて踏みにじつてみることにした。それを回復した時、潰れて酷く破損していた一部が残り、破損し汚れながらも原型を留めていたものなどが消えた。回復によって汚れたものを体内に取り込んだ形に

なったクレマンティーヌの表情はこれまでに無い変化を見せ、これに関心を持ったマーレはある「実験」を始めて回復の機会を大きく増やした。それは単にクレマンティーヌにとつて最も悲痛な状況を探るためのものであったが、その実態は状態の悪い肉片などが、どこまで回復魔法で身体に取りこまれるかの境界線を探るようなものとなった。

クレマンティーヌはその機会の全てを逃亡のために費やしたが、床に自らの臓物の残骸を大量に散らかしただけで終わった。臓物は踏み潰されるなどある程度以上破壊されたものは回復されても消えないように、肉片なども同じだった。逆に状態の悪い断片であっても、抉り取つてすぐの回復であれば消えてしまうこともあった。こうした「実験」が一段落すると、体力を全快させられてなお、おびただしい量のクレマンティーヌの残骸が部屋の床を満たしていた。

クレマンティーヌは違和感を振り払うように、走り続ける。この森はおかしい。たかが荊や毒草が、鍛え上げた自分をここまで傷つけるようなものであるはずがない。

森へ転移させられた時、クレマンティーヌの体力は全快した状態だった。

「使えるものを探してくるので、ここで待っていてください」

使えるものとは何だろうか。薬師に要求していたチュウソウとやらがどうい

であるかクレマンティーヌは知らなかったが、ろくでもないものを探しているに違いなかった。

魔法か何かわからないが、マールは蛙を集めてその一匹を拾い上げ、少し観察してその場へ捨てた。

クレマンティーヌには、マールがそこで何をしていたかなどは関係なかった。

その時、マールの視線が大きく外れ、そのままクレマンティーヌに背を向ける形になった。そこは狭い工房ではなく、広い森の中だ。クレマンティーヌは一気に駆け出した。

〈能力向上〉〈能力超向上〉〈疾風走破〉〈流水加速〉〈超回避〉

それは、全てを賭けた最後の逃走だった。

クレマンティーヌは走る。藪は既に身長を超え、幾度も切られた顔が鉄臭い。破損した小手やステイレットで庇ってはいるが、それでも棘のある部分がするすると入り込んでは肌を裂いていく。

藪の向こうに見える月明かりが次第に濃くなって、クレマンティーヌはとうとう荆棘の監獄を抜け出した。藪の切れ目は月明かりが降り注ぐ、森の切れ目となっていた。

そこには森から孤立した大樹が一つ、周囲には月明かりをうけて鈍く光る白い花々が

群生していた。

それは、転移魔法で連れてこられたクレマンティーヌが、この森で最初に見た景色だった。

「んふふつ、あはははつ、全部幻術なら良かったのに、傷も痛みも本物かよ」

もともと、逃げられるような気はしなかった。ただ新たな苦痛からできるだけ遠ざかるように走っていただけだ。それでも、この結末には笑うしかなかった。

走るのをやめたクレマンティーヌは、濃厚な血の臭いと全身が心臓になったような不気味な脈動を感じた。

全力疾走の緊張から解放されて緩んだ身体は、ただ全身に刻まれた亀裂から新鮮な血を吐き出すことに専念していた。

クレマンティーヌはその場に倒れ込み、白い花が赤くまだらに汚れているのを濁った瞳で見つめながら、自分の身体を抱えるように小さくなった。

「寒い……このまま死ねればいいのに」

どうせ回復されて、すぐラクになる。

そう思っただけで耐えていたクレマンティーヌにとって、長く続いた逃走中の極度の緊張状態とその後緩慢な死への時間はなかなかこたえた。そこまでの緊張状態を生んだのが、あの部屋の床をクレマンティーヌの残骸で満たしたマールレの行為だったのは間違

いない。その状況を経た後でマールレから離れることで、そのまま逃れ続けたいという思いがひたすら強くなっていった結果だった。

死か従属か。

クレマンティーヌは、ここに来る前にそれを理解はしていた。それでも、マールレの要求に従う決心はつかなかった。

従属せずに死体となって街で放り出されれば、法国なりズーラーノーンなりの手で回収され、法国であつてもかなりの懲罰は受けるにせよ、いずれはそれなりの立場になるか、脱走し自由に生きていける道がないわけではない。

それでは従属した場合はどうなるか。マールレは法国を敵だと言っている。いくら非常識な膂力とスピードを持っていても、マールレは魔法詠唱者だ。戦士であるクレマンティーヌは確実に前衛の捨て石として使われるだろう。

法国との戦いで死ぬか捕まるかすればそれで終わりだ。単独で裏切つて逃げた場合とは違い、マールレは法国にとつて国家レベルの脅威となるものであり、それに味方したクレマンティーヌは慈悲を与えられることも、戦力としての価値を省みられることも一切無くなるに違いない。そこには即座に消されるか、情報源として拷問されて使い潰されるかの未来しかない。それも、拷問を行うのはマールレのような素人ではなく、数百年蓄積されたノウハウを受け継いだ専門の人間となる。

クレマンティーヌは法国を裏切った。ただし、それは法国と戦うことを望んだという意味ではない。敵の敵は味方ではないのだ。法国の人外を相手に捨て石になって、ましてこの世で最も嫌いな兄の見ている前でゴミのように無様な死を迎えるくらいなら、このまま拷問の素人であるマールに黜られて殺された方がマシだとさえ思っていた。

——本当に殺してもらえるのなら、良かったんだけど。

拷問の分野でも人類で最も優秀であるはずのスレイン法国であつても、第五位階の回復魔法を用いる巫女姫を拷問に用いるような例は無い。

マールのやり方は最初の印象では拷問としてやりすぎで、これは死ぬると幾度も思い、苦痛の時はいずれ終わると甘く見ていた。しかし、そういう瞬間に必ず巫女姫からの回復が入ってきた。これも、巫女姫が相手の体力や能力を調べる魔法を使えることと関係があるに違いない。

クレマンティーヌには、どちらの選択がマシであるか、次第にわからなくなつてきていた。ここで再び腹を裂かれていれば、考えも変わったかもしれない。しかし――

「お待たせしました。とりあえず一番大きいのを持ってきました」

クレマンティーヌは、再び現れたマーレの持つ白く長いモノに目を奪われた。回復魔法をかけられたが、もはや逃走を試みようとは思わなかった。どうせ逃げられるはずがない。幾度も繰り返したように逃走を試みて手足を潰されるより、この場に留まる方が苦痛の総量が少ないと判断した。

それは、これまで行われてきた拷問とは全く違う行為を彷彿とさせた。確かに、それは拷問の道具としても考えられるのだが、法国で使われるものの足元にも及ばないありふれたものだ。しかし、それは目の前の無垢な雰囲気をもつ幼い闇妖精には、あまりにも似つかわしくないものでもあった。

森の中にも隠していたのだろうか。それは少し土がついてはいるが、月明かりにうつすら輝くような白さを持つ、白磁のような質感の張形のようなだ。幼い闇妖精の小さな手と、その腕ほどもある白く長い異物の取り合わせは、あまりに異様だった。

よく見ると、張形の棒状の部分はささくれたような質感があり、確かに拷問道具であることを理解させるものだった。反面、上の卵型に膨らんだ部分はマーレの拳程度とやや大きいものの、痛そうな感じはしない。ただ、その部分だけが何か使い込んだような、褪せたクリーム色に変色していた。

——エロガキが、先っぽだけ使い込みやがって。

あまりに陳腐だ。苛烈な拷問を望むわけではないが、元漆黒聖典第九席次ともあろう

者がこんなものに屈したらお笑い種というものだろう。クレマンティーヌが知る範囲でも、この種の道具の中で最も苛烈な苦痛を与える鉄製の洋梨の類に比べれば、それは見たままの玩具のようなものだ。その表情にも幾らかの余裕が戻っていた。

「うっわー、ガキのうちからそんなもの使つてると、だらしなく拵がつちやつて将来貰い手なくなるかもよー」

「これは、これからあなたの中に入れるんです」

「んふふ、そんなのでこのクレマンティーヌ様をどうにかできると思つてるわけー？

あ、せめて土は払ってくれるとお姉さん嬉しいなー」

素直にマールレが土を払うと、ささくれのような部分が少し剥がれて白い欠片が落ちる。

——嫌な白さだ。

「えっと、おなかの中が、トロトロになります」

「へえ、すっごい自信だねー。あの血塗れの魔女にでも仕込まれたのかな？ 最近のガ

キは進みすぎててお姉さんもびっくりー」

血塗れの魔女エンリが閻妖精以外に、慰みものにするための幼い少女の奴隷を連れているとは聞いていたが、その風貌までは聞いていない。クレマンティーヌはそれが巫女姫のことだとは気付いていなかった。

「それじゃ、じつとしていてくださいね」

マーレが何か魔法を詠唱すると、クレマンティーヌの四肢の付け根が硬質な槍のようなものに貫かれる。

「ぎいっ……乱暴な……のは、下手糞の……証拠だろ」

槍は太い荊の蔓だった。鋭利な棘がびっしりと生え揃ったそれは肩口と両腿の皮膚を、肉を抉り、激しい苦痛を与えながらクレマンティーヌを拘束する。

貫かれたクレマンティーヌが持ち上がると蔓はざわざわと蠢き、仰向けのまま鎧に覆われていない臍のあたりをマーレの前に向けて止まる。

「少しずつ、入れていきますから」

「そんなとこだけ……お優しいのか」

蔓が動くたびに肉を抉られる苦痛に顔を歪めながらも、クレマンティーヌは毒づく。「食べてもらってもいいけど、時間がかかるので」

——食べる？

《マキシマイズマジック／最強化》《アスシーニア／虚弱化》

《ペネトレート・オールポリューション／状態異常抵抗難度強化》

その言葉に違和感を覚えたクレマンティーヌに、マーレの魔法がかけられる。本来は

単体行動の際に使うものではなく、姉や魔獣の群れとの共闘でこそ活きる魔法だ。

既に四肢に傷口を開かれているクレマンティーヌは、そこから抵抗力が極端に落ち衰弱した身体の変化を感じ取る。回復も消毒もしなければ脆弱な病人のように容易に傷を腐らせてしまいそうな、嫌な感じだ。

「魔法で身体を変えなきや……けないなんて、所詮ガキのお遊び——」

瞬間、クレマンティーヌの下腹部が熱い痛み贯穿される。

激痛を撒き散らしながらクレマンティーヌの腹の中を掻き回すのは、臍の下を突き破って入れられたマールレの腕だ。

「ぐあつ……怒らせちゃ……かな。……れ使うんじゃ……いのか……よ」

マールレが杖を抱える逆腕に持っているはずのそれを見ると、先端が無くなっている。棒状の部分の断面は少し縦に裂け目が入り——。

「少しずつ入れると言ったはずですよ」

マールレは血に塗れた腕を引き抜くと、棒状になった白いそれを幾度も筆ってはクレマンティーヌの腹の中に突っ込んでいく。痛覚が少しずつ麻痺して目の前の状況が見えてくると、クレマンティーヌはそれが硬質な白磁の欠片ではなく、何か柔らかいものであることに気付く。

白磁の張形と思ったそれは、傘が開く前の——。

——キノコ？

マールは全てを入れ終わると、クレマンティーヌの腹に片手を突っ込んだまま立て続けに魔法を詠唱する。

《グロウ・プラント／植物成長》

《ヘイスト／加速》

クレマンティーヌは下腹部の激痛の中に、自分の身体が作りかえられていくような不快感が生まれていることに気付く。同時に、自分の中を何かか激しく昇ってくる。

「——おげえええつ！　げはつ、うげえええつ！」

それは猛烈な吐き気だ。拘束されたクレマンティーヌは胃の中のもの全てを自分の腹の上にぶちまけてしまうが、それでも吐き気は止まらない。酸っぱい液体が出て、大量の血を吐いても、それでも止まらない。最後には、血肉を溶かしたようなどろりとした桃色のスープ状のものが断続的に出てきている。

「ここからは、回復は少しずつにします」

回復を受けて吐き気が緩んだ時、クレマンティーヌは見てしまう。嘔吐物に塗れた自分の腹に開けられた穴から、そして下半身の穴という穴から漏れ出しているもの——それは、自分が吐き出した桃色のスープと同じものだ。激痛に隠されて自分では何かを漏らしているという感覚は無いのだが、液状のクレマンティーヌは確実にポタポタとこぼ

れ続けている。

「何を……しやが……た」

「おなかの中をトロトロにするって、言ったじゃないですか」

マールは時折腹を突き破って手首を入れ、その中を掻き回しながら説明する。普通に食べれば内蔵が溶けて死ぬまで一週間かかるような平凡な毒キノコでも、直接身体の中に混ぜ込んで魔法で成長を促せばすぐに色々なものを溶かしてくれるということ。

ここまでの行為は準備に過ぎない。マールは、工房で幾度も腹を裂かれながらも従わなかったクレマンティーナが、最も動揺した行為を覚えている。それが、クレマンティーナの身体に異物を混ぜ込むことだった。

マールが促すと、回復魔法によって再びクレマンティーナの吐き気が止まる。

《イトアンタイディリ・ワームス／食い散らかす蠕虫群》

「……ひっ……まさかそれ、おまああえええ!!」

桃色のスープで満たされたクレマンティーナの上にほとほと落とされた太さが親指ほどもある白いミミズ状の生き物は、滋養に満ちたスープ状のクレマンティーナを求めて次々と腹の穴の中へ潜り込んでいく。

「溶かすだけなら酸とかの方が早いんですが、生き物に与える場合はそうはいかないんです」

魔法で作り出したものなら大丈夫かもしれないが、実験したことがないので何とも言えない。皮膚の下に迷い込んだものを見つけると、マールはクレマンティーヌの蟲の形に盛り上がった皮膚をつまんで蟲ごと筆り取る。筋肉と皮膚の間に迷い込んでしまったものは、餌の食いが悪くなってしまふからだ。

「うええええっ！ 殺せ……いや、殺して……ください……」

この吐き気は、毒によるものではない。

「ほら、もう白から桃色に変わってます。トロトロで食べやすくなってるから、こんなにたくさん詰まっていますよ」

指二本分の太さに膨れた虫をその場で潰して腹の中へ突っ込むと、そのまま腹の中で丸々と太った虫たちをぐちゃり、ぐちゃりと全て握り潰してしまう。

「ひ……やめ……嫌……」

クレマンティーヌはマールと目を合わせる。その瞳の中にあるのは、やはり深い闇だけだ。

「よく混ぜてから回復してあげます」

それは幾度か繰り返され、身体の回復も、心の回復も繰り返された。足元にできたクレマンティーンの水溜りが大きくなると、そこに群がっていた現地の蟲たちも、そしてそれを食べていた蛙の群れまでもが腹の中に混ぜ込まれた。蛙の方は別の目的で、何かを宿しているものを探すために集められていたらしい。

潰されて嫌な汁を撒き散らしながら混ぜ込まれていった蟲や蛙たちが実際に回復後の身体を汚染することはなかったが、クレマンティーンの記憶は、精神を幾度回復しても消えることのない取り返しのない汚染に晒され続けることとなった。

そして、夜が明けるずっと前に、クレマンティーンは完全に服従した。

一九 クレマンティーヌの最初のお仕事

——どうして早く従わなかったのかな。

反抗心を完全に磨り潰された後、マールレと話をしながら、クレマンティーヌは無駄な抵抗を続けていたことを心の底から後悔した。全ては不要だったのだ。何度も回復されながら身体の中身を撒き散らされ、身体を裂かれながら終わらない逃走を続け、最後は下腹部をあのを白くて長いモノでドロドロに——。

思い出すことで狂気の中に閉じこもろうとする心は、すぐに魔法で引き戻される。それを命じるマールレには、面倒だという以外の感情は見えない。

クレマンティーヌには、捨て石としての価値すら無かった。マールレが欲しかったのは、法国の情報を持っていて、攻撃を仕掛ける時に案内ができるだけのシモベでしかなかった。

魔法詠唱者が戦う場合、前衛が必要というのが常識だ。クレマンティーヌにはマールレの前衛として働けるだけの力などは無いが、その時が来れば当然に捨て石とされるものと考えていた。その上、マールレ一人では漆黒聖典の番外席次や隊長を含めた法国全体を相手にすればどうなるかもわからない。だからこそ、法国との戦いを恐れ、従うことが

できなかったのだ。

しかし、マールレは慎重だった。法国のまだ見ぬ強者を警戒し、探している自分の主人や仲間と合流してから戦うという。クレマンティーヌが忠誠を誓うことになった『アイズ・ウール・ゴウン』というのがそれらが属する組織の名であるらしい。

「場合によっては、念のためぼくと同格の存在七、八人で当たって押し潰す感じになると思います」

それを聞いた時、クレマンティーヌの時間が止まった。

「足りないですか？ そういえば、さっき聞いた漆黒聖典の隊長とは召喚した魔獣が戦ったことがあるんですが、えっと、あれくらいの存在なら召喚以外で二十か三十は連れていけると思いますが……」

マールレにとって、法国とはナザリックを踏み荒らした千五百人に連なる恐るべき敵だ。以前訪れた時はたいした強者が現れなかったが、元より自分一人でどうにかなる相手とは思っていない。

止まった時間からクレマンティーヌが戻ってくると、世界は存亡の危機を迎えていた。

法国の追つ手とか番外席次の恐怖とか、そんなものはもうどうでもよかった。

「そんなものを支配すルナンて、マーレ様の主はまるで神かソレ以上の……」
「そうですよ？」

——この人間は何を当たり前のことを言っているのだろう。

マーレはこの当然の話に驚くクレマンティーヌを心の底から理解できず、不思議そうに首をかしげた。

クレマンティーヌは考えた。法国が弱すぎてもマーレ一人で対処することになりかねず、案内役の自身の危険も増してしまふ。

かといって、強すぎても偵察や情報収集などを強いられる可能性が出てくる。

人類の守り手であるスレイン法国は、クレマンティーヌを危険に晒すことのない形で滅びるべきだ。それがクレマンティーヌが出した結論だった。

結果、マーレにとつて脅威と見なされるのは、番外席次と最高神官長の二人とマーレの召喚した魔獣を奪ったという『ケイ・セケ・コウク』など数ある強力な神器だということになった。クレマンティーヌは法国をある程度は強く見せたかったが、マーレに明らかかな嘘についてそれが露見した場合の恐ろしさを考えると、自身の知らない神器があ

る可能性を誇張気味に指摘することと、最高神官長の強さを誤認したことにしておく程度が限界だった。

マーレが焦って法国との戦いを急がないよう、それ以外の部分で有利な情報はうやむやな部分も必死に思い出し、勝手に補い、全て活用した。クレマンティーヌが動向を探る羽目になっても困るので、神人、特に番外席次が向こうから出撃してくることはないということもすっかりと納得してもらった。その理由を問われた際は法国が警戒する評議国と竜王のことを足りない知識で説明したが、味方でなくあくまで将来の敵の一つとして興味を持つているふうに見えて不気味だった。

二人が工房の最初の部屋に戻ると、床はおびただしい量のクレマンティーヌの残骸で満たされていたままだった。回復によって身体に戻るものと戻らないものの差異を知ることとなった有意義な「実験」の結果だが、ここは協力者の所有する家屋であり、これは片付けなければならぬものだ。

「()をきれいにしてもらえますか」

「は、ハひつ……あのお、ドオやってこれを……」

跪いた状態で、クレマンティーヌは途方に暮れる。

「わかりませんか？」

マールはきよんとした顔で少し悩んでから、クレマンティーヌの髪を掴んで頭を押し下げ、土下座のような体勢をとらせる。

クレマンティーヌの顔の前に、潰れた臓物の欠片が迫る。

「まさか、食べるトかいわ——」

「はい、食べてもらえばきれいになります」

思わず顔を背け、マールの顔色を窺う。その瞳には闇だけが浮かび、嗜虐も憐憫も、感情と言えものは何も無かった。

「嫌、ですか？ だったら——」

その瞬間、クレマンティーヌは潰れた臓物の欠片にかぶりついていた。マールの瞳の中の闇の向こうに、あの森での地獄を見たのだ。むせかえりながら、溢れる涙が床に零れ落ちるのが視野に入った。そこにおぞましい桃色の濁りが無いのを見て、クレマンティーヌは透明の体液を出せる身体に戻ったことに安堵した。

「本当はもつとラクなやり方があるんですけど……」

唐突なマールの言葉に、口の端から濁った血を滴らせるクレマンティーヌが顔を上げる。

「エンリが、ラクしないで自分の汚した所は自分で綺麗にするようになって言ってたんです」

——血塗れの魔女、か。

クレマンティーヌは必死に口の中の苦味から意識を逸らしながら、冒険者エンリの持つ大仰な二つ名を理解し、それに納得した。

「……らくなやり方って、魔法デすか？」

「二応、魔法も使いますけど、死んでる間に終わるからラクですよ」

マーレはカルネ村ではじめてのおそうじに挑戦した時のやり方を説明する。ただし、復活に必要な金貨を出せば、という条件付きだ。

クレマンティーヌは食べ続けた。床に残った血糊についてはどうすればいいかわからないが、それを聞く気にはなれなかった。こみ上げてくるものがあり、部屋の端で見つけた掃除用の木桶を抱えて涙ながらに嘔吐の許可を求めたが、与えられたのは許可ではなく回復魔法だった。

クレマンティーヌは食べ続けた。汚れの酷いものを巧妙に木桶に隠しながらも、マーレの目がある以上、大部分は食べるしかなかった。幾度かの心の回復を経て、食べることに慣れて掃除が捗るようになった。

掃除が順調に進んでいることにマールは満足していた。わざわざ動死体にしなくても、人間はそのままでも意外に素直だということを学んだ。

もちろん、食べるのが嫌なら何か別の方法を考えて掃除してくれてもよかった。しかし、掃除とは本来メイドがやるものであって、その技術を持たないマールにも掃除のやり方はわからない。そして、クレマンティーヌも掃除のやり方がわからないようだったので、試しに動死体と同じやり方を教えてみたところ、こうして積極的に掃除をしていくれている。メイドの技術を持たない普通の人間であれば、能力的には動死体と大差がないのかもしれない。

木桶に溜めているものについては、マールが気付かないはずがない。ただ、マールも人間と動死体の違いを知らないわけではない。人間は生食以外の方法で食事をすることが多いので、木桶に溜めている分は朝食なのかもしれないと考えたのだ。掃除が苦手なクレマンティーヌも、料理はそれなりにできるのだろう。

マールとしては、部屋がきれいになるのだっただろうという方法で食べてもらっても問題はなかった。もちろん食べなくても構わないのだが、人間のような下等生物とはいえずシモベとなったものがその能力の範囲で頑張っているのだから、ここは好きにさせておくべきだろう。

「奥にいますので、掃除が終わったら声をかけてください」

マールが去ると、そこからクレマンティーヌによる掃除は臓物や肉片を拾って木桶に突っ込む作業になった。壁の一辺まで歩ける領域が増えると、戸棚の陰にモツプを発見することができた。クレマンティーヌはしばらく逡巡してから、それを手にとって人間としての掃除を始めた。

クレマンティーヌは独り、自らの血肉を掃除しながら、狂気をモツプで抑えつげながら、木桶に溜まった血肉の分だけ少しづつ心の平静を取り戻していった。

マールは掃除をクレマンティーヌに任せ、死の宝珠と名乗るアイテムと会話をしていた。最高でも骨の竜程度の弱いアンデッドを支配できたり大抵の人間を操れるという程度の、物珍しさ以外にたいした価値は無いものだが、アンデッドを感知する能力に優れているという点に強い興味を持った。マールの主についての知識はなかったが、それが偉大な不死者であることを説明すると、一も二もなくその搜索に協力することを約束してくれた。

死の宝珠の側も、カジットとともに長い時間をかけて集めたものを上回るような強大な負のエネルギーを一度の魔法で生み出したマールへの関心は高く、その主が偉大な不死者だと聞けば会わずともその期待は膨らみ、敬意と憧憬すら感じるほどだった。

マールは二名の協力者を得た翌日、早くも一名と一つのシモベを得ることができた。

上機嫌なマーレは、死の宝珠の頼みを一つだけ聞き、宝珠に注がれるべきエネルギー溜められている場所へ向かった。

この日、エ・ランテルの巨大墓地の一部で局地的な地震が起こり古い霊廟が崩壊したが、それを気にとめる者は居なかった。

夜明け前、『漆黒の剣』は再び薬師の工房が立ち並ぶ通りを訪れていた。

ニニヤは昨日あったこと全てを話し、仲間たちはその全てを受け入れた。しかし、その全ての結果を受け入れようというわけではなかった。自分の手を汚さないとしても、他人をけしかけて他の冒険者を殺すような状況を看過するわけにはいかない。『漆黒の剣』としては、間に合えば命を狙われている冒険者——エンリに警告し、間に合わなければ脅されたという形で内容も薄めつつ関与を冒険者組合に報告するという方針を決めていた。

そして『漆黒の剣』の四人は僅かに開いていた戸に手をかけ、薄明かりを残した血塗

れの室内を確認する。漏れる臭気で状況はわかっていたため驚きは無いが、あまりの惨状に全員が顔をしかめる。

「ひと足、遅かったみたいだな」

「ここまで血塗れとは、異常なのである」

声を聞いて、部屋の物陰から一人の女が姿を現す。

「命が惜しけりや帰——ああ、君かー。昨日はありがとうね。血塗れどころか臓物も転がってるから、踏まないでねー」

「こ、この人で……す」

入口の手前で踏みとどまった四人は、その姿にうろたえながらも戦いの態勢をとる。言葉が出なくなりそうになったニヤも、他の三人もすぐに気付いたのは、女の鎧の異様さだ。そこには、彼らと同格のシルバーや格上のゴールドどころか、ミスリルやオリハルコンの輝きも含まれている。幾多の冒険者のプレートを張りつけたその鎧は、殺戮者である女のハンティングトロフィーとも言えるもの。四人は死を間近に感じながら武器を構えじりじりと後退する。

女は先端に血肉の塊のようなものをつけた長い棒状のものを持ったまま、場違いなほど気楽な声で応じる。

「んふふ、この桶の中にもたくさんあるんだよ。これ、誰のだと思う？」

「あの女を、殺してしまっただけですか？」

「だったらよかったよねー。私もハッピー。あなたもあいつらの死体を見に来たんでしょ」

「いや、私は……」

「ごーめんねー。せつかく情報もらってけしかけてもらったのに、私、あつさり負けちゃったんだー」

気楽な間延びしたようなその声の中にも、女の持つ影の部分がゆらゆらと見え隠れしている。

「それじゃ、これはいい……」

「住人も無事とは思えないのである」

女に気圧されるニニヤの背を、ダイスが支える。

「誰のだろうねー、なかなか掃除が終わらなくて困っちゃう。……全部私のだけだな」

気楽そうな声から一転、最後は低くささやくような、呪うような、その場の全員の背筋を震わせる声で女は言う。

「あなたの……どういふことなんですか？」

「一晩中翻られたんだよー。いちいち回復されながら内臓全部ぐちゃぐちゃになるまで

何度も何度も犯されて、私はあいつらの奴隷に成り下がったんだ」

女の顔には亀裂のような笑みが浮かんでいる。笑いものになっているのは、自分自身だ。その高めの声には自嘲と畏れの入り混じった独特の揺らぎがあり、女の境遇に引き込まれそうなものさえ感じられる。

「奴隷……ですか」

「いい趣味してるよねー。あの女の指示らしいけど、てめえの臍物はてめえで片付けるつてのが、哀れな奴隷クレマンティーヌの最初のお仕事なんだよ。私つてかわいそー」

女は手に持っていた棒状のものを、にちやり、と持ち上げる。四人は、それが血塗られたモツプだとようやく認識する。

「そこまでされて、逃げようと思わないのか？」

女の迫力から仲間を守るように、ニニヤの前を塞いだペテルが問う。

「逃げたよー。ボロボロになるまで逃げて、駄目だった。相手は転移魔法も使うし、何でもありませんだよ」

「ごめん……なさい」

仲間に守られながら、ニニヤは自分でも信じられないような言葉を発する。奴隷という言葉、奴隷という状態は、たとえ殺戮者であつても背負わせたくないほどに、ニニヤ

にとつては限りなく重いものだからだ。

「謝らないでよー、殺したくなっちゃうから。……でも、侵入者なら殺しても大丈夫かもしれないから、暇ならまとめて相手するよー?」

女の殺気は本物だ。四人には、部屋の中へ踏み込めばすぐに自分たちも散らばる血肉の一部となるであろうことが、すぐに理解できた。それは女の持つオリハルコンやミスリルのプレートのせいばかりではない。

「……行こう」

「俺たちは、何も見てねーよ」

ペテルがニニヤを引つ張り、ルクルツトが肩に手をかけて連れていく。ニニヤは黙つて二人に従い、歩き出す。

善良で、勇敢で、正義感の強い者たちだが、それでも彼らは冒険者だ。命を賭ける場面を選べるくらいの分別はあつた。

女は自嘲気味に笑いながら、小さくなつた四人の背中に関心を失い、作業に戻る。魔法によつて遮断され、建物から離れた四人には届かなかつたが、その笑い声はいつまでも止まなかつた。

「まだ、関わりたいのであるか?」

ダインの声に、ニニヤは黙って首を振る。

「二昨日の小さな女の子のことだけ詰め所に通報して、全て終わりにします」

ンファイレアは人生最高の夢から醒めて、人生最低の朝を迎えた。

強引に腕を引くエンリの姿に、この日のために詰め込んであったあらゆる知識は吹き飛んだ。「ンファイ、ちよつと向こうを向いていて」そう言われた時は頭が真っ白になり、このままエンリに全てを委ねて天井のハーフトインバーの染みでも数えていれば終わるのだろうか、などと情けない考えにも至ってしまった。着替えの衣擦れの音を聞くたびに心臓が飛び上がりそうになり、柔らかいベッドが僅かに軋む音はその終わりを告げる。そして待ち望んだエンリの声――。

「今日は有難う。……おやすみなさい」

大好きな人のすぐ隣のベッドで固まったまま、空が白んでくるまで眠れなかった。恋とは緊張であるという不条理も、その間だけは少しだけ理解できた。

大好きな人の声で目覚めることができたにもかかわらず、ろくに顔も合わせないまま水場へ走らなければならず、一心不乱に洗濯をしたことは、おそらく一生忘れられない思い出となるだろう。

僅かな睡眠ではあったが、夢を見ていたのは間違いない。それも最高の、極上の夢だ。ノンフィーレアがそれを確信できるのには確固たる理由がある。目覚めた瞬間に頭に浮かんだのが、いつエンリがわざわざ寝間着を着なおして隣のベッドに移ったのかという疑問だったということ、それだけを鮮明に覚えているからだ。

それでは、夢の内容はどうか。それは、起きた瞬間の自分自身の状態を自覚し、理解し、焦り、するべき事を考え、水場の場所を思い出し、そこへ走るという一連の慌しい流れの中で、跡形もなく吹き飛んでしまったらしい。

下着を洗濯しながら苦悩しても、冷たい水に手を浸して呆けても、何度も水をかぶって自分の愚かさを呪い続けても、どうやっても取り戻せない。せめて寝間着姿のエンリだけでも思い返そうと気持ちを切り替えるも、ここまでの半狂乱状態の中でその記憶さえも曖昧になってしまっていた。今から戻っても間に合うとは思えない。そこで、このようなことでエンリとのかけがえのない時間を無駄にしている自分の愚かさに気付くと、堰を切ったように涙が止まらなくなった。

ずぶ濡れのままなら涙を拭わなくてもいいと割り切って、ただその場に座りこんだん

フィーレアは、その目を真つ赤に泣き腫らしていた。大事な記憶だけ何もかも失つておいて、妙にスツキリと冴えわたっている自分の頭が恨めしかった。

宿の格は上がっても水場は共同の場所であり、占拠し続けるのは本来ならば迷惑行為だ。しかし、その場を訪れる者は皆、少年を憐れむような目で一瞥して去るのみで、咎める者はいない。文句は無くとも、普段なら早朝に下着を洗う少年など格好のいじりの対象となるはずだが、魔女に食われて心が壊れかかっているようにしか見えないその少年をからかおうなどという心無い大人は、この宿には一人もいなかった。かといって、慰めることも難しい。不用意に近づいて、もしその下着か下半身が血塗れだったりしうものなら、何と声をかけて良いかもわからなくなってしまうからだ。

黒衣のエンリが相手でも、宿の一階での朝食はンフィーレアにとって幸せな時間だった。自分を待っていてくれて、体調を心配してくれたエンリは黒衣の天使と言つてもいいだろう。そこでの話題は周囲に聞かれないものが多く、自然とひそひそ話になつてしまうのだが、顔を近づけて吐息がかかる位置でエンリと話ができるだけで傷ついた心も癒されるといふものだ。

もちろん、深刻な話も多い。マーレヤリイジーの安全面については問題はないものの、エンリは拷問の残骸などバレアレ家の世間体を心配し、それを話し合う。そういう

ことを普通に話題にできてしまうエンリの変化には驚くが、それでもンファイレアは男としてエンリを守る立場を貫き、先に戻って残骸があればどうにかすることを申し出た。

結局、ンファイレアが先に戻り、エンリは冒険者組合に立ち寄ることとなった。エンリは冒険者として一度くらいは実績を積まなければならぬ。簡単なものを見繕ってくれるという組合長の厚意があるのだから、毎朝顔を出しておいた方がいいというのがンファイレアの言い分だった。ゴブリンや狼に対し戦いでなく屠殺程度の認識しか持たない今のエンリを守るような力は無いが、せめて汚れ仕事くらいはやっておこうという考えによるものだ。

白金やミスリルクラスが利用する宿ともなると、貧しさや分不相応な買い物のために食事を抜くような愚か者は居ない。一日の最初の食事は重要であり、さほど多くないテーブルは冒険者たちで満席に近い。充実した肉食と十分な睡眠で肌ツヤが良くなつたエンリと寝不足でフラフラのンファイレアが去ると、酒が入っている時間帯ほどではないがどうしてもその珍客の話題は外せない。

「だいが絞りとられたようだな」

「ああ、『血塗れ』は夜の方もスゲエんだろう。一人でピンピンしてやがる」

「あの男、うめき声をあげながら何度も水をかぶってたな。よほどのことをされたんだろっ」

「小声だったけど、血塗れの部屋がどうか言ってたぜ」

「何があつたか考えたくもねえな、飯がマズくなる」

「五体満足で終わっただけで、何よりだ」

「そーいや、昨夜は戦士団が大挙して街の中を何やら探しまわっていたけど、ありや何だ」

「さあ。結局貧民街でごろつきを一人捕まえただけらしいが」

「あれだけ動員してそれかよ。そういうのは冒険者に任せればいいのにな」

——良くない笑いだ。

工房に戻ってきたンフィーレアは、笑いの主が狂気と正気の境界線上にあることを悟る。

確かに、エンリはきちんと掃除も頼んでおいたと言っていた。ンフィーレアはマールに頼んだのだろうと考えていたが、部屋の状態も掃除をしている者も予想とは全く違っていた。

血の汚れくらいは想像していたが、半分以上は掃除された部屋の残りには、血に塗れた臓物の破片のような不気味な肉片が大量に散らばっていた。そして、それを時折幽鬼のような笑い声をあげながらモップで掃除していたのは、襲撃者、すなわち肉片の元の主であろうクレマンティーヌその人だ。

こうなつてしまえば、相手が危険な襲撃者であろうと関係なく自然と身体が動く。ンフィーレアは精神安定・鎮静効果のある薬を用意し、半ば強引にクレマンティーヌに飲ませてしまう。無差別に治療するわけではないが、狂人ではマーレの情報源にもならないだろうという考えと薬師としての行動が半々といったところだ。

クレマンティーヌは少しの間呆けてから、ンフィーレアを睨んで舌打ちを一つ。そして掃除を続けながら口を開く。

「余計なことするよねー。わざわざ正気に戻つてからこれを掃除しろとか、デリカシーなさすぎ。……それにしてもあの化け物、何なんだよ」

「知り合つたばかりなのでわかりません。……治療はあなたのためではなく、情報源として確保したと聞いているから回復しただけです」

「ふーん、ちよおつとは心配してくれてたみたいに見えたけどねー。あ、モップ借りてるから」

態度や雰囲気似合わず、ひたすら掃除を続ける姿に疑問を持つ。

「掃除、やめないんですね」

「逆らっても床に散らばってるようなのが増えるだけだし。……あのエンリとかいう女の指示だってね。てめえの臓物をてめえで喰らって掃除しろとか、闇妖精もあの女も頭おかしいだろ」

ここに戻った時のマーレの言葉を思い出し、クレマンティーヌは身震いする。話に聞いているところではない。まともじゃない。

ンファイレアは驚いたが、このことで揺らがなかった。エンリを盲信するわけではなく、クレマンティーヌが生きのこったことをうけて、別のことを考えていたからだ。

クレマンティーヌは強い。冒険者を相手に商売をしてきたンファイレアには、鎧にびっしりと付けられたプレートの意味くらいは理解できる。人間の世界においては屈指の実力者に違いない。そして、法国の関係者でマーレの知りたい様々なことを知っている。

——エンリが用済みになったら、そして、いずれこのクレマンティーヌが用済みになつたらどうなるんだろう？

そこまでの考えに至るのは、エンリだけが今の運命から解放されたらどうなるかというムシのいいことを何度か考えていたからだ。あの時の一つ屋根の下で暮らす提案のように思えたものについても、未練がないといえば嘘になる。むしろ未練しかないから

こそその着想だった。

しかし、その先の見通しは決して甘いものではない。マーレにとつてはあの王国戦士長さえ取るに足らない弱者だという。クレマンティーンが用済みになつた時は殺してくれば後腐れもないのだが、こうして拘束すらせず確保できるほどの相手であり、あつさりと解放されるかもしれない。その時、エンリは、自分たちはどうなつてしまうのか……。殺した冒険者のプレートに鎧に飾るような女に対し、少々心証を良くしたところで安心できるとも思えない。

もしかしたら、エンリもそれをわかつているのかもしれない。

そうであれば、今の自分にできることは――。

「……少なくともあなたは、全てエンリの指示でそうなつた。それだけは忘れない方がいい」

もちろんハツタリだが、女の迫力に負けまいと少し強い語調で言う。エンリの立ち位置を考えれば、最も安易で効果的な方法であるように思われた。

「ふん、てめえとアホみてえにデートしてた女が、私を内臓までグチャグチャドロドロになるまで犯しぬくよう指示したつての？ イカれてやがるねー」

「エ……エンリはああ見えて、敵には容赦しないんだ」

――エンリ、ごめん。そこまでとは思わなかつた。

ンファイレーアは戸惑うが、今さら引き返すことはできない。

「掃除もだけど、人間の発想じゃないよね。あの血塗れを普通の女みたいに扱ってめえもチャームでもかかってんじゃないの？ さっきの薬、自分で一度飲んでみたらいいよ」

「そうなる前から……好きだったんです」

そこだけは、誰に対しても嘘をつきたくない部分だ。

「ふん、まあいいよ。私はあの闇妖精に従うし、それと繋がってる『血塗れ』にも逆らえない。それだけ」

——本当にこれで良かったんだろうか。

ンファイレーアが黙ってその場に留まっているのを見て、クレマンティーヌが苛立った声で追い立てる。

「あのさー、てめえの臓物を掃除させられてる女を眺めていたいような特殊な趣味があるんじゃないければ、ちよつとあっち行っててくれるかなー。でないと血塗れが帰つてきた時に、おなかの中まで全部この男に見られたーって言っちゃうよー？」

工房にマーレの姿は無かった。ンファイレーアが工房の奥へ行くと、ちようどリイジーの作業が一段落したところだった。

それはンファイレアのよく知るいつもの姿だ。祖母はひたすら研究に没頭し、クレマ
ンティーンの存在など忘れているかのようだった。ンファイレアが声をかけると、鉋物
を使ったポーシヨンの溶液自体が劣化しない状態を指摘するという研究の方向性と、一晚
のうちに試したこととその結果までを足早に説明する。説明が終わると手に持つてい
た道具をンファイレアに押し付け、マーレとの約束を果たすために魔術師組合へ向かう
と言つて出て行ってしまった。きつちりと戸締りをしていったのは、入つてすぐの部屋
の惨状からすれば仕方のないことだろう。

エンリが戻つてくるまで少し眠ろうかと思つていたンファイレアだが、工房の鍵は面
倒な作りのため、エンリが帰宅したら出迎えなければならぬ。赤いポーシヨンの特性
から逆算された新たな研究の方向性にも強い魅力を感じたので、いったんそちらを引き
継ぎながら待つことにした。

二〇 世界中探せば、きつともう一人くらいいる

「話は承った。君は冒険者のようだが、通報者として名前と、身元を示す上でチーム名を伺えないだろうか」

そこは詰め所の一室。最初に話をしてから長時間待たされたニヤだが、ここへ来た時に既に名乗っていたことを忘れてはいない。

話というのはもちろん、エンリの連れている幼い奴隷のことだ。結局、自分たちの力ではどうすることもできなかった。最低限こうして通報することで何か状況が良くなるかもしれないという淡い期待も無いわけではないが、ニヤがここへ来たのはこの問題から手を引く際のけじめという意味合いが強かった。助けたい気持ちは変わらないが、これ以上仲間を危険に晒すことはできない。

しかし、素直に問いに答えて帰ることはできなかった。待たされた時間はあまりに長すぎる。後から来た、こういう問題の担当だという男の様子もどこかおかしい。改めて名前とチーム名まで聞かれるということに大きな引っかけりを感じるが、冒険者のプレートをつけて来ている以上、明らかな偽名を使うわけにもいかない。

考えすぎかもしれないと思いつつも、ニヤは答える。

『漆黒の剣』のミニニヤです。通報の件、よろしく願います」

これなら、何か問題が起こっても聞き間違いで済む範囲だろう。

長時間拘束されたものの、しっかりと通報は受理され、身の危険も感じなかった。あとは兵士や役人に任せるしかない。

ミニニヤは詰め所を出て、仲間たちの待つ日常の中へ帰っていった。

この日をもって、この件は彼らの手を離れた。エ・ランテルの冒険者チーム『漆黒の剣』は、時折仕事をこなしつつ合間にモンスターを狩る、いつもの生活に戻ることができはるはずだった。

エンリは組合長から受け取った依頼書を持って帰ってきていた。
今回も、言えなかった。

自分のためにちょうどいい依頼を用意してくれたという組合長は、冒険者組合の中で唯一の味方だ。わざわざ話の腰を折ってまで、文字が読めないなどと失望されるような

ことを言う勇氣は出なかつた。話を合わせていたら依頼を受諾したことになつてしまつたが、簡単なものというので問題は無いだろう。依頼者が現れるまで時間があつて、一応ノンフィーリアに読んでもらうため依頼書を持つて、いったん家に戻ることにした。

組合を出てから、組合長も例のガゼフの書状を見ていたことを思い出したが、そこでは説明は不要だろうと思へたので問題は無い。冒険者の親玉だけあつて人を見る目があり、全てを理解した上で簡単な依頼を用意してくれたのだから、元々誤解が無いのなら煩わしく失礼な説明となつてしまうかもしれない。

「エンリ、ちよつと奥へ。話があるんだ」

鍵を開けて出迎えたノンフィーリアは髪を元通りおろして見慣れた雰囲気に戻つていたが、昨日とは違つた種類の真剣な表情だ。

「えつ、うん。ちよつと待つてね。……朝御飯、良かったらあなたの分もあるけど」
エンリは買ってきた食べ物のお包みを、掃除を終えて座り込んでいたクレマンティーヌに差し出す。

「そんな、食べられるわけ……。朝からマーレ様にたくさん食べさせてもらつてお腹いっぱいなので、遠慮させてもらいまーす」

食欲などあるわけがない。食わされた自身の血肉を吐き出すことさえ許されず、回復

魔法で吐き気も止められたため、いまだにおぞましい満腹感すら残っていた。

それでも、相手があの異常な掃除のやり方を指示した女とわかっていて多少の皮肉を利かせられる程度には、クレマンティーヌの精神は回復していた。荒い言葉遣いができる相手では無いが、気だるげな呆れたような声色だ。

「そう、マールもちゃんとした扱いができるようになったんだ」

嬉しそうな返事とエンリリの屈託の無い微笑みを見て、クレマンティーヌは理解する。この『血塗れの魔女』もまた、心の底からマールと同類なのだ。色々と半端な存在に見えたのは気のせいだったのかもしれない。この女も、悪意や嗜虐の感情すら持たず、涼しい顔であるような所業を指示することができるのだ。所詮は過去とか苛立ちとか怒りとかを嗜虐衝動で晴らしていたに過ぎなかった自分など、とても人間らしく、まともであるように思えてくる。

ンフィーレアは、クレマンティーヌが何を食べさせられたかを知っている。その上で、いざとなったら割って入って誤魔化すつもりで二人のやりとりを見守り、結局何も問題がなかったことに軽い驚きを感じつつも胸をなでおろした。

そして、奥の部屋で扉を閉め切った後、ンフィーレアは将来起こりうる問題についてエンリリに説明した。ンフィーレアはエンリリもある程度はわかっていて行動しているの

かと思っていたが、反応を見るとそうでもなかったようだ。

マーレがいくら強いといつても、エンリとンフィーレアはその協力者に過ぎず、一緒にいるわけではない。いずれマーレが目的を果たして去った時、同じように解放されるであろう危険なクレマンティーンが自分たちに何をするかを考えなければならぬ。

「そういうわけで、これは将来を見据えての話なんだ。あのクレマンティーンに、エンリが普通ののに——冒険者だと認識されるのは不味い」

普通の人間と言いかけたが、今のエンリはそうでもない気がして言い換えてしまう。「だったら、ンフィーがそういうふう……」

「僕は血塗れの薬師でもなければ、王国存亡の危機でもない。異能も含めてできることとできないことはこの街で結構知られてるんだ。彼女だつてそれを調べて攫いにきたわけだからね」

最初の方のくだりでエンリの顔がひきつっていたが、ンフィーレアは言うべきことを言い切る。

「ンフィー……あなたは今日までとてもいい友達だった。思い出させないで欲しかったよ」

「だったら、うまくいくかはわからないけど、情報源としての価値がなくなった時に彼女

を殺してもらえないようにマールに頼み続ける？ 殺してくれるとも限らないし、マールのことだから秘密にしてくれるかもわからない。駄目だったら確実に彼女に殺されるし、こつちの方が命がけだよ。マールを挟んだ殺し合いと言ってもいい」

「そういうのは、したくない……」

エンリは目を伏せて俯く。自分たちの意思で人を殺してもらおうというのは、エンリにとってもンフィーレアにとつても考えたくはないことだ。

「だったら、エンリもマールと同類だと思ってもらおうしかない。幸い、今の段階でもそうなっている部分が結構あるんだ」

ンフィーレアは、クレマンティヌが口にした拷問の内容までは触れる気になれなかったが、その拷問が全てエンリの指示で行われたことになっていて、そのためにクレマンティヌが『血塗れ』にも逆らえないと言っていたことを説明する。もちろん、自分のせいでエンリのせいになった部分があることに触れることはない。

エンリにとつて、それはどう考えても「幸い」ではない。しかし、ここまでの話でそれ以外に許容できる手段が無いことも理解している。

「私なんかで、あのクレマンティヌって人を抑えられるのかな？」

「今まで通りにして、弱気な部分だけ隠していれば大丈夫だよ。さっきの食べ物の時だって、知らないのに問題なかったし」

ンファイレーアは、クレマンティーンが食事を遠慮した理由を説明し、エンリの言葉がどう伝わったかを想像して語った。エンリは「ひつ!」「うう」などと相槌でない何かを口にするばかりで、涙目になって聞いていた。

「エンリがしたことじゃないし、今までみたいに気付かなかったつもりで、あまり考えないようにした方がいいよ」

エンリは大きな溜息をつく。

「……もうさ、世界中で私だけなんじゃないの？ 会ったばかりの人たちいきなり怯えられて化け物みたいに思われたり、夢にも思わなかったような身分にさせられて、周りの事情で本当に恐ろしい人みたいなきやいけないなんて」

「そう悲観しないでよ、エンリ。世界中探せば、きつともう一人くらいいるかもしれないよ」

疲れた顔で肩を落とすエンリに、ンファイレーアは心の籠っていない軽口で応じる。

話の途中から、ただ強いふりをさせるだけで良かったような気もしていたが、今のやり方の方がこれまでの評判も利用できる上、自分の過ちを隠すためにもなるので仕方ないことだと割り切っていた。

その頃、二人の声の届かない最初の部屋で座ったまま呆けていたクレマンティーン

が、誰にも聞こえない程度に抑えた声で呟く。

「動死体とか拷問とか色々言つてたけど、あの話も丸ごと本当だったわけね。血塗れの

魔女……血塗れエンリカ」

声を出すと、何度もすすいだはずの口の中がまだ何か気持ち悪いような気がする。

——食べ物、貰つておいた方がよかつたかなー。

クレマンティーヌはそれが残されていないか部屋を見回し、床に落ちた一枚の羊皮紙を見つめる。エンリカが食べ物を差し出した時に落としたものだろう。

「やつと帰つてきたか。今、ちょうど俺たちに指名の依頼があつたんだぜ」

「再出発にはおあつらえむきのタイミングである」

ニニヤを出迎えたのは平凡な日常ではなく、冒険者としての幸運であり名誉といえるものだ。

「凄い。どういう仕事なんですか？」

「いや、ちよつと気になる部分もあつてね。全員揃つてからと思つていたんだ」

気になるといつても、それはちよつとした手違いでしかなく、指名依頼という喜びを皆で分かち合いたくて待つていたに過ぎない。

話を聞いたニニヤは、涙をぼろぼろと流しながら仲間たちに謝ることになる。

その依頼は、『漆黒の剣』と、そのメンバーの「ミニヤ」を指名するものだった。

「行くしかないだろうな。金も相当いいし、格上げの紹介状まで付く。王都の組合だから素直には上げないだろうが、一つ仕事をすれば金級確定だろう」

依頼への対応を保留として組合を出ようとした『漆黒の剣』の四人は、そこでミスリル級冒険者のイグヴァルジに声をかけられ、酒場で彼のチーム『クラルグラ』に相談に乗つてもらつていた。

「指名の形で送り出すのは情だよ。それか、その名を名乗つた時に相当な弱みを握つたのだが、本当に始末したければ北の盗賊団にでもぶつけるしな」

「さすがに銀級に盗賊団は無いだろ」

「結果的にぶつかるようにすることはできる」

「断れば、そういう手段もあるってことだな」

「それ以前に、都市長名での指名を断るような冒険者は干されて終わりだろ」

「王都に送り出す程度で口止めになるんでしょうか？　もしかしたら途中で命を……」

「そこまでは無いな。それに、向こうがあのガゼフ・ストロノーフを使つてでも殺すというなら、どうあがいてもお前らは死ぬから諦めろ」

「殺さずとも口止めとしては充分だ。王都ともなると、よそ者の金級程度が騒いでも信用が無いから無駄だろうしな」

「……もう使えなくなる弱みでも、情報としての価値がありそうなら俺達に適正価格で売りつけて行ってもいいんだぜ」

イグヴァアルジは、『漆黒の剣』が銀級でありながら銅級の『血塗れの魔女』と酒場でもめていたという情報を得ていた。生意気な魔女の話でも聞けるかと思つて呼び止めたのだが、気が付けばそこから離れ、先輩冒険者としてチームで真摯に相談に乗っていた。イグヴァアルジは自分を踏み越えてきそうな存在は大いに嫌つて嫉妬もするが、自分の下に留まっている後輩に対しては、自分を大きく見せたいという目的ではあるが面倒見の良い男だった。

そして、情報は対価を求めることなく受け渡された。『血塗れの魔女』と幼い奴隷の少女、そして今朝見てきたことまで、『漆黒の剣』が知る全てが語られ、『クラルグラ』は

自分たちも知らなかったエ・ランテルの街と冒険者組合の暗部に驚きを隠せなかった。『血塗れの魔女』を嫌うイグヴァルジでも、それがすぐに活用できる情報では無いことくらいは判断できたが、チャンスがあつたらその問題に関わることを約束した。

「俺はお前らごときのためにリスクを負うようなめたい人間じゃないからな。その女がちやうど個人的に気に入らない奴だっただけのことだ」

『漆黒の剣』の四人は尊敬の眼差しを向け、『クラルグラ』の仲間たちはイグヴァルジらしい言い回しにニヤニヤしていた。

「イグヴァルジが嫌ってるのは本当だぜ。今朝なんて最低な男娼連れて俺たちの宿で遊んでたしな」

「最低な男娼？」

「八本指がやってる、奴隷同然の壊してもいいやつだよ」

「そういえば、連れてる奴隷は少女だって言ってたよな。両方イケるってことか」

「その上、襲ってきた女を壊して楽しんだその夜に男を黓って遊んでたわけだろ……すげえ女だな」

「やられたのも、プレートは眉唾としても戦士団の奴らを一撃で殺るような女だろ。お前らはもう関わりなくて正解だな」

結局、『漆黒の剣』の四人は依頼を受諾し、王都へ向けて出発する時間まで『クラルグラ』に連れられて豪華な食事を楽しんだ。先輩が後輩に対価を払わないのでは示しがつかないと言われれば、断るわけにはいかなかった。

今回の仕事は二つ。指名自体は不自然ではあったが、冷静に考えれば、仕事自体はまともなものであるようにも思われた。

一つ目は、王国戦士長の戦士団とともに、盗賊団の情報を持っていたザックという男を護送して王都へ向かうこと。野営などの雑用を手伝いつつ、暗殺など戦士団の手が届かない部分を守れば良いという話だった。単独で盗賊団の手から守るなら銀級では心もとないが、戦士団の盲点を塞ぐ程度なら問題はないだろう。

二つ目は、都市長からある大貴族への内密の手紙を届けること。都市長も貴族であり、貴族間の派閥の問題を避けるため手紙のやりとりも内密にせざるをえず、手紙を届けた『漆黒の剣』も最低一年はエ・ランテルに帰還してはならないということになっていた。そのため、組合長により王都の冒険者組合で仕事を得られるよう紹介状が付けられ、よそ者としての不利に配慮して金級への格上げ相当と付記された。

その好条件と依頼自体の高額の報酬、そして一年という長すぎる時間は、『血塗れの魔女』と冒険者組合及び都市長との間の不適切な関係を『漆黒の剣』と『クラルグラ』に強く理解させることとなった。

エンリが落とした依頼書を探しに来た時、それはクレマンティーヌの手に握られていた。

「この仕事、私も一緒に行つていいですかねー」

「……あなたが、手伝つてくれる——の？」

くれるんですか——と言つてはいけなるところだ。獰猛な肉食獣のようなクレマンティーヌでも字が読めることに軽いシヨックを受ける。

「どうせ逃げられないし。何か役に立つたら、少しは人間らしい扱いしてもらえるかな——つて思つただけですよ」

エンリの顔が引きつりかけるが、目で合図するンフィーレアに気付いて平静を装う。

「僕にも見せてください」

エンリが字を読めないのを知られるのもどうかと思ひ、ンフィーレアは自然に依頼書を受け取り、ただ確認するように音読する。

依頼内容は、隠れ家が判明したばかりの北の盗賊団を退治すること。盗賊団は戦士団の二名を拉致あるいは殺害した可能性があるという。

ンファイレアはこれを「簡単な仕事」と言って持つて帰ってきたエンリノ感覚に疑問を抱きつつも、マールに加えクレマンティーヌの協力が得られるなら問題ないように思っていた。

いずれにせよ、クレマンティーヌに見られてしまった時点で、危険だから断ろうなどと言うことはできない。弱みを見せれば、クレマンティーヌの方が遥かに危険な存在になりかねないからだ。そのクレマンティーヌは、何か隠しているようにも思えるが――。

「ヒいっ！」

尻餅をついたクレマンティーヌは、顔に恐怖の表情を張りつけたまま後ずさりする。部屋に突然現れたのはマールだ。

「ちよつとこれに頼まれて墓場の方まで行ってみました」

「レ、霊廟の隠し部屋、デすか？」

マールの手にあつたのは、カジットの持つていた死の宝珠だ。それが頼むというのがどういふことかはわからないが、クレマンティーヌにはなんとなく行き先が予想できた。

「はい。片付けてきました」

これで、ズーラーノーンの側から辿られる可能性は小さくなった。クレマンティーンにとつて、それはもはや取るに足らない些事にすぎなかったのだが。

エンリは組合で一人で説明を受けることになった。ンファイレアが付いてこようとしたが、クレマンティーンがマールと二人きりになりたくないと言つて縋りついたのだ。盗賊団と聞けば物騒にも思えるが、組合長が簡単だというのだからコソ泥の集団のようなものだろうし、仕事にはマールも一緒に行つてくれるというので問題はないだろう。

依頼者は都市長パナソレイ・グルーゼ・デイ・レッテンマイア。エンリはその代理だという衛士長を名乗る男から説明を受けた。

依頼内容の説明としては北の盗賊団の被害から見る難度の予測と、判明したばかりの北の盗賊団の隠れ家の場所を地図で示されて終わりだが、隠れ家が判明した経緯についての説明が長めに加えられたのは情報の確度を担保するためのものだろう。

難度の予測は20前後の構成員多数に30—40程度の幹部が混じり、60以上の強者が一人居るといふものだったが、エンリがかつて組合長から受けた難度についての説明は非常に曖昧なものだった。

——簡単な仕事って言ってたけど、こそ泥でも人間だから強いよね。私の場合、50以上は油断すると怪我をするんだっけ、嫌だなあ。

武器に慣れていないのなら、難度50以上は油断をすると怪我をするかもしれない。それがエンリが聞かされていた冒険者組合長プルトン・アインザックの見立てだった。適正な難度は、幾つか簡単な仕事をこなしながら探つてもらおうという話だった。

盗賊団の隠れ家が判明したのは、昨夜、行方不明となつた戦士団の二名の捜索において、その所有物である血のついたペンダントを持つた男を捕らえたことによるものだった。当初は拾つたなどと言っていたが、他に手がかりが無いので背後関係を徹底的に追及したところ、戦士団については口を閉ざしながらも、別の街へ収監することを条件に盗賊団との繋がりを吐いたのだという。他に八本指などに連なる情報が得られる可能性もあるため、その男は他の冒険者の監視のもと、王都へ戻る王国戦士団と同行する形で護送されるということだ。

話が終わると、その場に留まるよう言われ、依頼者の代理人と入れ替わりで忘れもしないあの男が部屋へ入ってきた。それはエンリから見れば卑怯者にして災厄の象徴。王国戦士長ガゼフ・ストロノーフその人だ。

言いたいことは色々あったが、真つ先に思いついたのは、エンリの鳩尾を最も厳しく

締め上げたあの紹介状の件だ。人々を過剰に怯えさせるような書状についてエンリが精一杯の負の感情をぶつけてやろうと槍玉にあげると、ガゼフはすんなりと自分の非を認め、深く頭を下げた。

「申し訳なかった。組合長からも言われているのだが、私の表現はどうも刺激的に過ぎるらしい」

少し難しい仕事を紹介されたことでエンリの組合長への信頼は揺らいでいたが、戦士長に物申してくれたことで再びその信頼は固まってくる。ただ、唐突な謝罪によつてぶつけようと思つた感情は宙に浮いてしまった。

「いつまでも危険を押し付けるつもりはない。王都に戻つたら最高の冒険者に非公式に依頼し、君の立場を代わつてもらえるよう頼んでみるつもりだ」

「……代わつてもらえるのは、いつですか」

最低限、あのクレマンティーンをどうにかできる相手でないかと困るのだが、それはここで言うことではないだろう。

「わからない。委ねられるかどうかとも向こうの判断だが、少なくともアダマンタイト級冒険者の協力があれば今より安全にはなるだろう」

独自に調査してから動くこともあつて、数週間後か一カ月後か、数カ月後になるかもしれないという。そんな先の見えない説明に不満を隠し切れないエンリの前に、一つの

指輪が差し出された。

「どれだけ身を守る足しになるかはわからないが、戦士としての力を増してくれる指輪だ。これはかつて世界のために働いた偉大な英雄から受け継いだもので、今の私にはふさわしくないものだ」

「世界のためとかいっても、ずっと危険に晒されたいとは思いません」

拒むエンリに構うことなく、ガゼフはテーブルのエンリの前に指輪を置く。

「その危険に晒されている間、預かってくれるだけでいい。王都から送り出す冒険者たち——『蒼の薔薇』に依頼するつもりだが、彼女たちが全て引き受けてくれたら、そのリーダーにでも渡してやってくれ」

「……では、それまでお預かりしておきます」

ガゼフは王都で知り合った真つ直ぐな若者のことを思う。いずれリグリットの指輪を託すならあの者と考えたこともあるが、今のガゼフは世界の危機に背を向けて退いた身だ。そんな自分に、指輪を受け継ぐ者を選ぶ資格があるとも思えなかった。かつて蒼の薔薇にいたリグリットから受け継いだものは、世界の危機に立ち向かう若者に、そして蒼の薔薇のリーダーに戻しておくのがふさわしいだろう。

「それまで、その指輪は君のものだ。ただし、大丈夫とは思いますが、それは決して邪悪な者には渡さないで欲しい。それだけは、託された時からの約束なんだ」

「わかりました」

邪悪と聞いてすぐにエンリが思い浮かべたのは、昨夜のクレマンティヌの姿だ。ガゼフではなく偉大な英雄の想いとなれば、それは守らねばならない。邪悪な者には渡さないということを中心に刻むが、エンリの考える邪悪にはマーレは含まれていなかった。

話を聞き限り貴重なもののようなので、失くさないようにサイズがきつめになりそうな親指に装着するが、指輪にかけられた魔法により自然とサイズが調整されて装着感がとても良くなった。マジックアイテムのそういう特性を理解していないエンリは、そのことで指輪が自身を邪悪と見なしていないのだと考え、勝手に安堵した。人間の理解者が数えるほどしか居ない今のエンリは、自分を理解してくれるのがたとえモノであつても嬉しさを感じてしまうのだ。

ガゼフは、エ・ランテルを去る直前の慌しい時期でも冒険者組合を訪れて本当に良かったと思う。こうして渡すべきものを渡すことが出来ただけでなく、その前の冒険者組合長との会見も有意義なものだった。以前の非礼を詫びるだけのつもりだったが、蒼の薔薇に依頼をする上で役に立つ話も聞くことができた。出発に向けて準備をしなが

ら、その時のことを思い返す。

「怒つてなどいませんが、私は戦士長殿が心配なのです」

ガゼフが正面から受け止めてしまったその言葉は、実際のところは、ガゼフに皮肉をぶつけておきながら正面から謝られてしまった冒険者組合長プルトン・アインザックがそのことに戸惑った上での言葉でしかない。謝られたら自分も謝らなければならぬような気もするがそれも癪だという、子供じみた感情から出たものだった。

曰く、話の内容が刺激的に過ぎる。

曰く、エンリ君の協力が得られたのは奇跡であり深く感謝すべき。

曰く、アダマンタイト級冒険者でも普通は仕事として受けようとは思わないだろう。

この大都市で冒険者を束ねる者の発言として、それは実績と経験に裏打ちされた、かなり重いものであるように感じられた。

ガゼフは率直に教えを乞い、冒険者の世界における難度という概念について簡単に説明を受けた。問題の闇妖精マーレの難度については、百三十から百五十と伝えれば良いというのがアインザックの提供した判断だ。

「具体的な情報から推定されるものをそうして伝えるのが我々冒険者のやり方です。百五十といえは国家存亡の危機であり、魔神か竜王にも匹敵するもの。アダマンタイト級冒険者といえども戦いとなれば百あたりが限度で、このくらいならば必ず戦いを避け、

戦士長殿の意図通りにうまく立ち回る事を考えるでしょう」

アインザツクの見立てでは魔法のモニターの中の出来事が真実ならば百五十を超え
る可能性があるが、そのような本人が作り出した不確定な映像をもとにして、わざわざ
怯えさせるような数値を出すべきではないという考えがあった。

「難度くらいは伝えるにせよ、戦いが目的ではないでしょう。殊更に刺激的な話をする
より、依頼を受けた冒険者が戦わずにうまくやるための材料が必要ですよ」

「材料、とは？」

「マーレ殿が法国とあなたで揺れていたとか、敗勢濃厚になつてからようやく加勢して
くれたとか、それでも今はエンリ君のもとで大人しくしていると、そういう性質や性
格的な部分をしっかりと伝えていくことが重要だと思いますよ」

ガゼフの誠実な態度にほだされ、アインザツクはいつの間にか時を忘れて親身に依頼
者の心得を説いていた。

ガゼフは蒼の薔薇への依頼に際して、この時の助言を忘れずに活かそうと心に決め
た。

この日、王国戦士長とその戦士団は、一人の囚人と四人の冒険者を連れて城塞都市工・
ランテルを後にした。

二二 死を撒き散らすために

エンリが戻ると、そこには陰気な黒いローブを着た人影があった。

「や、やあエンリ。僕もエンリと一緒に行くと言ったら、二人にこれを勧められたんだ。魔法がかかかっていて安心らしいけど、どうかな？」

それは、マールが森にカジットの死体を捨てた時に確保しておいた、魔法の護りを施されたローブだった。旅支度としてそれを勧めたのはマールとクレマンティーヌだという。

「すごくぴったり合ってるし、いいんじゃないかな」

エンリはマジックアイテムの常識など知らないので、多少陰気な品でもンフィーレアのために作られたようなローブを否定する気にはなれなかった。故郷では母親の作業を間近で見ても洋服を成長に合わせ直していく大変さを知っている、見た目に多少の難があっても完璧に身体に合った服となれば、本人にとつてとても価値のあるものと考えてしまうのだ。クレマンティーヌも「いいって、よかったねー」などと同じ意見のうだが、若干何かを面白がっている感じもある。

——この二人、さっきより随分打ち解けたような……それより！

「マールレ、マールレはどこへ行ったの？」

マールレは、リイジーに連れられて魔術師組合へ行っていた。今朝方リイジーが組合長に約束を取り付けに行ったところ、いつでも来てほしいということになり、そのまま会いに行くことになったという。

故意に一人で放り出したわけではないが、それでエンリが万一の際の責任を逃れられるとも思えない。エンリはンファイレーアに場所を聞き出すと、すぐに魔術師組合へ向かった。クレマンティーヌとンファイレーアがこそこそ話をしているのが少し気になったが、それどころではない。

エンリが去ると、残された二人は共同作業を再開する。早々とンファイレーアが普段と違う格好をしていたのはそのためでもあった。

「さて、その袋で最後ですね」

「ンファイレーアちゃん、本っ当にありがとう」

「……外套の前をとめてください。通報されますよ」

「せっかく感謝してるのに、人を変態みたいに言わないでよー」

クレマンティーヌの胸と臀部は天下の往来で晒すことが許されない状態ではあったが、別に変態呼ばわりされるような格好ではない。ビキニアーマーにびつしりと貼られた殺戮者の証である冒険者プレートを他人の目に触れさせないわけにはいかないという、

ただそれだけのことだ。クレマンティーヌが不満だったのは、マーレと巫女姫が魔術師組合へ向けて出発する時と全く同じ言葉をかけられたというその一点でしかない。

二人が向かうのは、バレアレ家と付き合いのある肉屋の捨て場だ。酸っぱい臭いのする錬金術溶液をかけられた袋の中身は、万一看られてもそれが何の臓物であるかわからないように変質している。薬師であり錬金術師でもあるバレアレの家では稀に動物の生き肝なども用いるため、時に危険な溶剤も混じる廃棄物を腸詰の材料に使ったりしないような信頼できる肉屋を選んで処分を依頼していた。

無事に最後の袋を運び終えると、クレマンティーヌはその場へあたり込んだ。ンフィーレアは今朝のことを思い出し、しばらく待つてから手を差し伸べた。

マーレはこの日、世界を知った。

幾度も幾度も冒険者組合長プルトン・アインザックに恋する相手のことを問い合わせ、その度にはぐらかされて気をもんでいた魔術師組合長テオ・ラケシルは、思わぬ所から想い人との繋がりを得ることができた。

ラケシルは、古い知り合いで久々に顔を見たリイジー・バレアレの申し出に対し、この日の予定を全てキャンセルして一刻も早く応ずることを約束した。リイジーからそれを伝えられたラケシルの一方的な想い人——マールレの方も、エンリが戻るのを待つことなくラケシルのもとへ向かうことになった。法国を含めたこの世界の情報を集める目的に関連して、巫女姫も一緒に連れてきている。

場所は魔術師組合最上階の応接室で、人払いは済んでいる。元々機密に属するものが多く、人の出入りの少ないフロアだ。

部屋へ案内してすぐに、ラケシルはマールレの持つ上等な装備品を、神器級の黒い杖から竜王鱗の帷子まで舐め回すような視線で見つめていた。実際にそれほど上等なものを知っているわけではないが、ただならぬものを感じたのだろう。マールレが別世界の存在であることを理解すると、何でもいいので素晴らしい魔法の品を鑑定してみたい、見せてほしいと迫った。

しかし、マールレはこの者に至高の御方から授かった品々を見せることを躊躇した。特に理由は無いが、この世界に来てから得たもの程度がふさわしいような気がしたのだ。「あの、先に十分な知識をもらってからです。ただし、危険なものも多いので、程度が低いものから問題無い範囲で見てもらいます」

そんなわけで、ラケシルが最初に鑑定することを許されたのは巫女姫の額冠となっ

た。程度が低い方から二番目のアイテムだが、法国について話を聞く上では必要なことだ。

「すげえ！　えげつないけどこれすげえよ！」

巫女姫がつけたままの額冠に頬ずりし、舐め回そうとしたところで引き離される。リイジーがラケシルを押さえ、マーレが巫女姫をひよいと抱えてラケシルから一番遠い場所に持つていく。外套がめくられて徐々にその肌色が派手に晒されるが、鑑定により事情を理解できている二人はそれに対して何の反応もなく、他に衆目もなかった。すなわち、この場には自らの興味や目的より常識的感覚を優先する者など一人たりともおらず、この時点では痴態を見せたラケシルも含めて全員の世間体は護られていた。

情報収集はそれなりに有意義なものとなった。ナザリック地下大墳墓やアインズ・ウール・ゴウンに関わる名称や地理的な手がかりについて一切の情報が得られないのはここでも同じだったが、周辺地理に関してはスレイン法国を除けばクレマンティーヌよりかなり詳しく、広範な知識が得られた。途中から地図を指しての説明となるにあたってマーレが地図の購入を希望すると、これは本来は許可が必要なものだと言いながらもラケシルはすんなりと魔法複写代のみで後日届けることを約束してしまった。「この相手に国防上の事情など……」という眩きを聞いたリイジーは浅く頷いた。

地図では人間の国が中心となっていたが、ラケシルの話によれば、この世界では人間の国などほんの一部でしかなかった。そして、亜人の国については情報が少なく、互いに情報の行き来が少ないということでもある。つまり、たとえ人間の国でアインズ・ウール・ゴウンの情報が得られなかったとしても諦める必要は無いということだ。

亜人の国の中で警戒すべきは、やはりアーグランド評議国だった。統治に参加する複数の竜というのがクレマンティヌの言う竜王であるとすれば、こちらも一人で対処できる相手ではない。敵であるスレイン法国と対立しているとはいえ、「敵の敵が味方とは限らない」とは至高の御方々もよく口にされていたことでもあり、法国ともども警戒しておくべきだろう。

これに対し、竜王国という国は、竜の血を引く者が治めているながら亜人の国に侵食されているという。こちらはたいした国ではなさそうだ。

多くの情報を記憶に押し込みながら、マールは現状を考える。

現状、群れの結びつきの強い人間という種を利用することができている以上、まずは王国、帝国といった人間の国での情報収集を続けるべきだろう。その後、亜人の国について調べる場合は、亜人の国と抗争中の人間の国から当たれば効率が良いということになる。

地図を指しての説明が終わり、次に世界の強者について聞くことにした。この弱者ば

かりの世界にあつては、仲間の一人でもこちらへ来ていれば臆病な人間たちならきつとその情報を共有したがるだろうと考えたからだ。

伝説や遠い過去における神だとか英雄だとかは記憶の片隅にしまい込む。この世界の強者といえ、やはり竜であり、冒険者などはいくら強くてもガゼフ程度が限界であるらしい。

不死や異形の者に絞つて聞けば、一つ興味深い話が聞けた。それは、過去に存在した『国墮とし』という吸血鬼ヴァンパイア・ロード王侯の話だ。吸血鬼の主であるものが「突如現れて一国を滅ぼした」と聞けば、マーレとしてはその種族だけでなく性格などの面からも、具体的に顔が思い浮かぶほどに可能性を感じてしまう。『国墮とし』は十三英雄に滅ぼされたときからいるが、この世界に散在する危険な要素を考えればそれもありえない話とは思えなかった。スレイン法国での不可解な事態を思い起こせば、慎重さを忘れないようにしなければマーレとして他人事ではないのだ。

「吸血鬼の主を、この世界の人間が簡単に滅ぼせると思いませんか？」

「十三英雄ならできたかもしれないし、仮初の勝利で滅ぼすことができたと思っただけかもしれない。それが伝説というものだ」

「わからないということですか」

「ふむ、『国墮とし』に関心があるなら、その文献や伝承は王国内に多く残っているから

この国に留まることを勧めるよ。私もできる限り調べてみよう」

ラケシルは、この日最も言いたかったことを言えたために口の端を吊り上げた。理由は『国墮とし』でも何でも良かった。

その後、ラケシルは実際に調査を始めるが、それは今後またマーレに会うための口実作りが九割、それらの記録がマーレとその背後に見え隠れするものを知る手助けになることへの淡い期待が一割といったところだった。

情報収集が一段落した頃、不意に部屋がノックされる。大切な時間を邪魔されたくないラケシルはすぐに追い返そうとするものの、「お客様のお連れの方です」との言葉ですぐに態度を翻して入室を許した。

魔術師組合の受付嬢に連れられて現れたエンリは、マーレが問題を起こしていないことを察して安堵した。

「アインザックに話は聞いているよ。これから、マーレ殿にマジックアイテムや魔法を見せてもらおうところなので、そこで楽にしていってくれないだろうか」

ここからがラケシルのお楽しみの時間なのに、連れて帰られてはたまらない。ソファへの着席を促し、受付嬢にはエンリの分も含めて新たな飲み物を用意するように促す。

「見るといふのは、魔法で調べるのですか？　よかったら、これがどういふものか見てほしいのですが」

エンリはガゼフから受け取った指輪を差し出した。悪いものではないと考えてはいしたが、ガゼフからの品であることを考えると、正体を知っておかなければ安心はできない。

ラケシルは普段はタダで鑑定をするほどお人好しではないが、アインザックからただならぬ存在と聞いているエンリの持ち物にも興味はあった。

それは確かに有用なもので、その説明はエンリを安心させるものとなった。しかし、付与されている魔法がおかしい。

「この世界の魔法では……ない!？」

その言葉にマーレも興味を示し、同じく鑑定を行った。マーレの疑問に対し、ラケシルは既存の魔法体系と違う太古の魔法が存在するという不確かな伝承について触れる。「そんなもの、太古より生きる竜でも無ければ知らない世界の話でしょうな。それより、次は……」

ラケシルはお楽しみを忘れてはいなかった。マーレの装備品にねっとりとした視線を張りつけたまま、熱のある口調で見せてもらえるようせがむ。面倒ではあったが、

マールは既に手早く終わらせる方法を考えていた。

「人間にはちよつと難しいかもしれませんが、自信があるならどうぞ。今ぼくが持っている中で一番程度が低いものです」

マールは黒い宝珠を取り出すと、応接テーブルの上に無造作に転がした。ラケシルはその言葉の意味を察し、鑑定を行うことができるギリギリの距離までゆつくりと近寄り――。

「ふははは！　そうか！　私はこの街の人間どもに死を撒き散らすために、これまで魔法の研鑽を積んできたのだな！」

ひつたくるように掴み取った死の宝珠を愛おしそうに胸元に抱え込み、血走った目つきで自らの人生を定義し直したラケシルの姿がそこにあった。

その時、部屋の入口で、ガシャン、という音が響く。グラスが床でばらばらになり、冷却の魔法がかかったデカンタが横倒しになって液体を溢れさせ、飲み物を用意した受付嬢は蒼い顔をして呆然と立ち尽くしていた。

嫌な予感を感じて振り返ったエンリと目が合うと、受付嬢は脱兎のごとく走り出し――廊下の奥で、エンリに追いつかれた。

「偉大なる者よ、ともにこのエ・ランテルを死の街に変えようではな――」

芝居がかったような口調で高らかに方針を語りかけたところで、ラケシルは糸が切れたようにソファに崩れ落ちた。その横には、宝珠を取り返したマーレの姿。

その声は、僅かに開いたままの扉から外、廊下の奥まで聞こえていた。

エンリは脱力し、壁に手をつけて身体を支えた。何があつたのかはわからないし知りたいとも思えない。ただ、エンリの何でもない動作にさえびくりびくりと怯えてその場で小さくなる受付嬢の姿を見れば、マーレの下へ連れて行って事情を聞いた上でわかってもらふような気の長い作業ができるとも思えない。連れていく最中で泣き叫ばれ、他の人々が現れて全てエンリが悪いかのように思われるとか、今のエンリにはそういうろくでもない想像しかできなくなっていた。

受付嬢の震える声での命乞いが鳩尾の奥まで染み渡る。このフロアに他に人が居な

いことを確認すると、魔術師組合長を元通りにすることを約束し、今日見たこと聞いたことを秘密にするように約束してもらった。元通りになるかどうかなど知らないが、ならなかったらその時はその時だ。

部屋では、リィジーとマールレの手でラケシルがソファに寝かされていた。巫女姫によつて精神の回復も済まされている。

——マールレ様、このような者は私がそのまま支配した方がよろしかったのではありませんか？

「あなたには他に使い道を考えてありますから、ここはもういいです」

マールレは小声で宝珠に語りかけた。

気が付いたラケシルは頭を振って、朦朧とする意識を束ね直した。

「やややばすぎるだろ、その宝珠……」

「このように、ぼくには何ともなくても普通の人間には危険なものも多いので、このくらいにしておきましょう」

ラケシルは物欲しそうな顔でマールレの装備を眺め、しよんぼりと頷いた。しかし、マールレを見る目の輝きは失われていない。

「それではせめて、何か高位階の魔法を見せていただけないだろうか。カルネ村で騎士が爆発したと聞くが、それはどのような——」

「はあ。では、ちよつと移動しましょう」

「移動？」

ラケシルが初めて体験した高位階の魔法は、伝説の世界にしか存在せず、それも物語の語り手の都合で捏造されたものであるというのが定説となっていた集団転移魔法だった。

「すげえ！ 短距離転移って距離じゃないぞ！ みんな来てる！ 夢じゃない！」

そこは入口からかなり離れた巨大墓地の一角だったが、ラケシルは子供のよう走り回り、徘徊していた動死体と正面からぶつかりながら「邪魔だ！」と振り切り、汚い汁で服が汚れたことも忘れてはしやぎ回った。

——さあ、ここで第七位階アンデス・アーミーの死者の軍勢です！ 壮大な死者の行進を目にすればその感動もひとしおに違いな——。

マールは死の宝珠をアイテムボックスに放り込んだ。うるさいのは一人で充分だ。

「その動死体、魔法で爆発させておきますね」

マールの詠唱とともに動死体は四散した。

ラケシルは子供のように目をキラキラさせて、破裂した動死体の残骸を調べ始める。マールレたちは、ラケシルに気付かれないようにそつとその場を離れ、集団転移魔法でバレアレの工房へ戻った。

「私は今日、新たな世界を知った。あれはまさに神の領域にある者だ」

墓場から戻ったラケシルは、心配する受付嬢に対して夢見るようなうつとりとした顔で答えた。そのローブには形容しがたい汚れがこびりつき、死臭のようなものを漂わせていた。

受付嬢はその日のうちに退職を考え、細かな事情は伏せつつも今後について冒険者組合に勤める友人に相談したが、仕事の苦勞はどこも似たようなものだと言って思いとどまった。

男の視界に広がるカルストの窪地には、鳥たちが羽を休めることのできる岩が沢山突き出ていた。

普段なら鳥のさえずりを聞きながら眠気に耐える時間帯だが、先ほどから鳥の姿が全く見えなくなり、一緒にこの場所を守る鼻の詰まった男の耳障りな鼻息ばかりを聞きながら過ごすことになってしまった。

眠りに落ちれば後で叱られるが、かといってこのような不快な眠気覚ましを望むわけではない。

そんな時、不意に望んでいた静寂が訪れた。

ようやく鼻が通ったことを祝福してやろうかと隣の男の顔色を窺う。

その瞬間、それは破裂した。

赤い鮮血と白っぽい何かを浴び、混乱し、驚愕し、大きく息を吸い込んだところで、顎に冷たいものを押し当てられる。顎下の皮膚につぶりと潜り込む鋭利な先端は何らかの武器のそれだろう。持ち主は、肉食獣の笑みを浮かべる金髪の女だった。

「死を撒く剣団、傭兵団とか言ってたけど、ここで間違いないみたいですよ。あ、入口はここだけだってー」

「……殺しちゃったんですか?」

用が済んだらあつさり血を噴いて崩れ落ちる盗賊を見て、シヨックを受けるエンリ。非現実的な殺戮は幾度か見たが、武器による等身大の殺しの光景には少し違う衝撃を感じる。

「騒がれても面倒だし……もしかして、とつておいて昨夜みたいな事したかったんですか?」

殺しを済ませたばかりとは思えない、幾らか不安定な感じもする気楽さに一握りの卑屈さを加えたような女の声。急いで否定したい話だが、今やそれさえも許されない。エンリは動揺を見せまいと心の中で自分を叱咤する。マーレの方を見ると、何かとぼけたような顔で軽く首をかしげている。その白々しい態度が恨めしい。

「エンリはつまらない相手にそんなことしないよ。先へ行きましょう」

エンリがボロを出さないうちにインフィーレアがフォローする。このクレマンティーヌに弱みを見せるわけにはいかない。

「この奴らは私が片付けますよ。むしろやらせてくれると嬉しいな」

クレマンティーヌは、盗賊を一人仕留めたことで少しだけいつもの調子を取り戻していた。スレイン法国が相手なら最前線に立つのはまっぴらだが、盗賊団程度が相手なら

戦闘に参加するのは楽しみでしかない。そして、今の主人は闇妖精マーレであり、この集団をまとめているのは『血塗れの魔女』エンリだ。二人の性質を考えれば、任務の様々な事情に縛られた漆黒聖典時代とは違って殺し放題なのは間違いない。マーレという幼い少女の姿をした恐怖そのものから目を背けてさえいられれば、自由な時間には及ばないまでも漆黒聖典の頃より快適かもしれなかった。

もちろん、最初は捨て石以下の扱いから始まることも覚悟していた。クレマンティーヌ又は奴隷以下の存在であり、あのおぞましい部屋の掃除のような扱いを思えば、それは当然のことだ。

森で先頭を歩くよう言われ、レンジャーなど居ないと聞いた時は全ての罠をその身に受ける役回りを覚悟した。しかし――。

「二十歩ほど前の足元、蔓の巻きついた木の横に罠があります。面倒なのではまらないでください」

「森が途切れる角ばった大岩から向こう側は、下草が短い所と長い草が倒れてる所は全て落とし穴で三つあります」

それらは全て、木々や下草の茂る森の中では視界にすら入っていなかったものだ。ク

レマンティーンとソフィーレアはもちろん、『血塗れ』さえも驚きを隠さない。クレマンティーンが、まるで伝説の竜王のような知覚力だと驚きを口に出せば、その竜王について再び事細かく聞かれ、その話の間も遙か彼方にいる敵の見張りの位置などを教えられた。そうして、罨の標的としての覚悟はいつの間にか霧散していた。竜王の能力については、その桁外れの知覚力を恐れて番外席次を神都から出せないとか、戦いになったら巻き添えで神都が滅ぶとかそういう程度しか知らないが、ここでする話とも思えなかった。

結局、マーレにとつての脅威などこんな場所には存在せず、クレマンティーンが犠牲になるような状況なども存在しないのだ。そうなると、急にただの同行者でいることがつまらなくなり、自分の武器をふるいたくなってきた。

盗賊の罠を丸ごと埋めてしまおうか、などと言いつつマーレに対し、仕事の成否がわからなくなるという『血塗れ』。そこでクレマンティーンは自然と、先頭に立つて戦うことを申し出た。もともと、そのつもりで来たのだ。かつて自分が手にかけて王国の戦士たちについても、ついでにここの傭兵団に罪を押し付けておいた方が機嫌を損ねずに済むだろう。

「大丈夫、一人も逃がさず殺しますよ。楽しみー」

「んふふふー。身体軽すぎでさ、命乞いとか聞いても間あに合わないんだよねー。マール様の強化すぎすぎ、楽しー！」

歯をむいて笑いながら賊たちの間に飛び込んで猛威を振るうクレマンティーヌと、その少し後ろで何をするでもなく立ちつくすマーレと巫女姫の姿は対照的だ。エンリとンフィーレアはそのさらに後方から、クレマンティーヌの恐るべき戦いぶりを眺めていた。

多数の攻撃を同時に浴びせられても、軽やかな動きで馬鹿にするように賊たちをあしらう。複数人を相手に、脚を貫き、腕を貫き、囲まれて余裕が少なくなるとつまらなさそうに頭や心臓を貫いていく。

「なんかさ、あの人も人間の範疇をちよつと超えているような気がするんだけど」

「……そうだね、とつても強いね」

「あれより強いふりをするとか、できるのかな。いったいどこの誰が考えたんだろうね」

「……うん、大変だよね」

「どこかに可哀想な村娘のありえない役割を代わってくれる、やさしい血塗れの薬師とか居ないのかな」

「……気分が優れなかったら、いつでも薬を出すよ」

「そうだ、その服装に今朝の髪型だったら別人に見えなくもないし！」

「……運気が優れなかったから、あれは二度とやらないよ」

「何それ——」

ンファイレーアは暗い表情で俯き、エンリは納得がいかない表情でンファイレーアを窺う。その時、盗賊の最後の一人が断末魔の悲鳴をあげ、倒れた。

寧猛な肉食獣の所業にも似た一方的な蹂躪劇が終わると、十人以上の賊が身体じゅうを穴だらけにして洞窟の床を埋め尽くし、おびただしい量の血が洞窟の奥へゆるゆると流れを作っていた。クレマンティーヌはそのままステイレットをぺろりと——ちらと一瞥して血のついていない部分を確認してから——ひと舐めする。

「おーわりっ。先、いきましょーか」

「……少し歩きにくいですね」

「ヒッ！ ごめんなさいっ」

マールレの言葉にクレマンティーヌはびくりと背筋を伸ばしステイレットを取り落とす。そのままマールレの足元へ飛び込むように四つ這いになると、上目遣いでちらちらとマールレの方を窺いながら邪魔な死体をぐいぐいと押し退けて道を作っていく。その間もびくり、びくりと身体を震わせる姿は、まるで透明の鞭で打たれて怯える従順な獣の

ようにも見えた。

「敵は女一人だ！」

「うしろに小さいのが二人いたぞ」

「五人だ、五人入っ——ぎやあああ!!」

ブレイン・アングラウスは武器の手入れを中断し、状況の把握に努めていた。

戦時以外は野盗同然となる傭兵団『死を撒く剣団』は公権力から敵視され、その情報がひとたび漏れれば討伐隊が組まれることもありうる存在だ。しかし、公権力の動きというものは総じて鈍く、大規模に動く場合は必ず情報が漏れる。そして、偵察等で派遣される者たちであれば、七十名に迫る人数を揃え戦闘経験豊かな者も少なくない『死を撒く剣団』の敵ではないはずだった。

「冒険者……まさか、蒼の薔薇ってことは無いと思うが」

アダマントイト級冒険者による電撃作戦——最悪の可能性も考慮しなければならな

い。ブレインは身支度を整えながら、出迎える位置を洞窟の奥の方へと修正する。

身支度を終えると、見知った男が「敵襲です！」と駆け込んでくる。耳が遠いとも思っているのだろうか。

「ガキを含め女が四人、男が一人です」

「……それは、気をつけなさいといけないな。奥を固めておいてくれ。あと、バリケードは一応端を開けておいてほしい」

男が焦るのも無理は無いと納得し、ブレインは自身の考えが正しかったことを知る。

ブレインが警戒する、王国最強とも言われるアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』は女性五人で構成されるが、そのうち一人は筋骨隆々の大女として知られている。薄暗い洞窟の中では、いや、たとえ白昼の屋外であつてもそれを女性と認識できるかどうかはわからない。そして、たった五人での強襲でここまで『死を撒く剣団』を混乱させられる者など、彼女らを含め数えるほどしか居ないだろう。

つまり、襲撃者はほぼ『蒼の薔薇』であるものとして対処せねばならない。

「この仕事も、ここらまでかね」

走り去る男に聞こえない程度の声で呟きながらも、すぐに逃げるといふ選択肢は存在しない。

洞窟内の小部屋から音の通りの良い通路へ出るが、既に悲鳴は聞こえない。入り口付

近に詰めていた十人以上の傭兵が、三分もたたずに無力化されたということになる。

「……間違い無いな」

ブレインは様々なマジックアイテムを次々と発動させて自己を強化しながら、戦いの準備を整えていく。『蒼の薔薇』に一人で勝てるという確信は無く、洞窟の奥という撤退も考慮しての位置取りだったが、それでも一当たりもせず逃げるなど考えられない。ブレインは強者との戦闘に飢えており、アダマンタイト級の誘惑には抗し難いものがある。そして、たとえ『蒼の薔薇』の全員が相手でも、初手で前衛に必殺の剣が届けば勝機は充分にあると計算していた。

二二二 クレマンティーヌ、ブレインと戦う

「おんやー？ この距離でも悲鳴とか聞こえてたはずだけど。たった一人で待っていると、頭でもおかしいのかなー」

現れたのは、外套に身を包んだ短い金髪の女戦士だ。その装備は刺突に特化した鋭利なステイレットで、外套のシルエツトからかなりの軽装であることが窺える。顔立ちには猫科の動物じみた愛らしさもあるが、訓練や怪物相手ではなく実際に人間を狩り続けてきた者に特有の危険な雰囲気も備えている。

少し離れて姿が見える仲間が四人、その全てが魔法詠唱者マジック・キャスターのような雰囲気だ。聞いていた通りに五人のチームではあったが、蒼の薔薇とは構成が明らかに違う。

「前の連中に手間取るようなら、この俺がわざわざ一人で出てくる価値もないぞ？」
「ふーん、もったいつけるほどの——あ、刀なんて使うんだー。いいものを手に入れると無駄な自信持って死に急いじゃうんだね」

一人で前衛を張っている以上、女の自信ある態度は本物だろう。
「ぬかせ。……こつちも蒼の薔薇かと思つて楽しみにしてたんだが、たった一人抜けば終わりつてのはつまらんな」

それでも、戦士一人に魔法詠唱者^{マジック・キャスター}四人。蒼の薔薇とは異なり、前衛を抜けば勝利は容易い——そう思ったところで、最後列の黒衣の少女に目が留まる。実力者であるはずの集団の中で、申し訳程度に短剣を持っているがたいした品でもなく、持ち方もまるでなっていない。それがかえって不気味だった。輝きの鈍い、おそらく下位の冒険者がつけるプレートも見えるが、それは冒険者に登録してからの実績が少ないという意味でしかなく、ここまで侵入してきている以上は考慮に値しないものだ。

対人戦に特化して情報を集めていたブレインは、戦い方として実物は見た事がないが剣を射出する浮遊する剣や武器に《舞踊》^{ダンス}の魔法付与を乗せて牽制に使うような例まで聞いたことがある。これほどの実力者が必然性の無い武器を漫然と持つことなど考えられず、それらを警戒すべき状況かと考えてその注意を分散する。

「んふふ、その蒼の薔薇のガガーランを含めて、この国じや私とまともに戦える戦士なんて五人くらいしか居ないはずなんだけどねー。あ、後ろは気にしなくていいよ。今日は私が一人で片付けることになってるから」

「随分と自信家だな。俺はブレイン・アングラウスだ。その五人に入っているといいんだがな」

「おめでとー。大穴のあいた糞情報だったけど、ちゃんとあなたも入ってるよ。で、私はクレマンティーヌ」

「それは光栄だ。お前のことは知らないが、そのガガーランともやりあえる程度なら期待しないでもないぞ」

「そんなの強化なしでも勝てるけど、今はとんでもなく凄い強化魔法貫つてるから楽勝かなー。それにしても、こんな穴ぐらに籠つてて元漆黒聖典のクレマンティーヌ様と殺り合えるチャンスが来るなんて、運がいいね」

「聖典——法国の強者には疎いんでね。……で、せっかくのその強化が切れる前に、そろそろ来るかい？」

ブレインは一瞬の逡巡の後、誘うようにクレマンティーヌに向けていた刀を中段に残し、正眼の構えをとる。

一人でかかると言ってはいても、不利になれば四人の魔法詠唱者から波状攻撃が来るのは間違いない。そうなると初手から最も得意な構えを選びたいところだが、騙し討ちで魔法攻撃を伴う可能性も考えればそうもいかない。相手の手数が多い場合は、武器による防衛も含め機動的な対処ができる正眼とならざるをえない。

「そだね。……じゃ、行つくよー」

僅かに低い姿勢を取ったクレマンティーヌが、一気に駆け出す。ブレインの利き手から遠い側へゆるい弧を描くような軌道は次第に直線へと変わり、爆発的なまでの加速によつて瞬く間に距離を詰めてくる。

ブレインはクレマンティーヌの動きによって開けた後衛からの射線を意識し、初撃は防御に専念する。真っ直ぐに迫るステイレットの前に刀を割り込ませようとするが――間に合わない。

刀が届いたのは、ステイレットの先端から十センチ。拳ひとつの差は埋めがたく、即座にブレインは迎撃を諦め、さらに二撃目への選択肢も捨てる。

ブレインは身を反らし、合わせた刀でステイレットの軌道がその身を追わないよう支えながらギリギリまで粘り、それでも抗しきれず後ろへ倒れ込んだ。

その無防備な頭部を襲った二撃目は――足だった。

「ぶはあっ!!」

尻餅をついた状態で顔を蹴られたブレインは、横に一回転してから抜き身の刀を地につけて座り居合の形に体勢を整え、クレマンティーヌが向かってこないのを見てゆつくりと立ち上がる。見下ろすクレマンティーヌの顔には余裕の笑みと、僅かな怒りがあつた。

「つままない! せっかく一人で楽しもうと思ったのに、いつまでも後ろを気にして馬っ鹿じゃないの? 全部こつちに集中しないとあつさり死んじゃうんじゃないかなー」

「……確かに、一対一でも厳しいか。十回やって二回勝てるかも怪しいくらいだ」

ブレインは刀を鞘に納める。

「んふふ、どうしたのー？ 諦めちゃった？」

「勘違いするな、忠告を受け入れただけだ。今はこの一回を勝てばいいだけだからな」

ブレインは強敵との戦いに湧き立つ心を抑えつけるようにゆっくりと息を吐き、腰を低くして抜刀の構えをとる。

〈領域〉

極限まで研ぎ澄まされた集中力が、ブレインの身体から溢れ出して周囲を満たす。ブレインの一つ目のオリジナル武技であるそれは、半径三メートルの範囲内のあらゆるものを自らの体の一部であるかのように把握し、極限まで攻撃の命中と回避の精度を向上させるものだ。

「抜き打ちの一撃？ 攻撃の軌道を見せないって考えはわかるけど、その一撃に失敗したら終わりだよ。切り札なのかなー。……それを搦め手なしで破ってあげたら、どんな顔が見られるんだろ」

「……ふん、ぬかしてろ」

〈能力向上〉

ブレインは武技を発動し、クレマンティーヌが間合いに入り込む瞬間を待つ。

クレマンティーヌはブレインを凌駕する戦士だ。その軽い得物による鋭い一撃は、防

御に専念したブレインでも体勢を崩さずに受けることはできなかつた。撃ち合いになれば小回りの利く相手に翻弄され、反撃の機会も無いまま圧倒されるのは間違いない。

しかし、人との戦いに特化して鍛えてきたブレインには、そんな相手にも対応できる切り札があつた。

——戦いつてのは、一撃で充分なんだ。

刃が急所に届けば、それで戦いは終わる。相手より一瞬でも早くそれができれば、相手の反撃すら考える必要は無い。そういうブレインの考えは二つ目のオリジナル武技〈瞬閃〉として形をなし、無限とも思える繰り返しの鍛錬により〈神閃〉の名を冠する程の速度を得ていた。

「ブレイン・アングラウス。あんた程度を相手に武器見て合わせる必要なんて無いんだよ」

クレマンティーヌは異様なほど低い前傾姿勢を取り、武技を発動していく。賢明な考えだが、ブレインはもとより合わせられるような一撃を放つつもりはない。〈領域〉の極限の精度と、〈神閃〉の極限の速度、これをあわせた一撃は回避不能かつ一撃必殺となる。

それは、ブレインが虎落笛もがりぶえと名づけた秘剣。両断された頸部より吹き上がる血飛沫の音からとつた名だ。

絶対的強者に翻られ続けて間もないクレマンティーヌは、等身大の戦いに飢えていた。ブレイン・アングラウスとの戦いは、癒しようのない身体と心への蹂躪の記憶の上に、戦士としての喜びを上書きする得がたい時間となった。許されるなら一日中撃ち合っていたいほどの充実感を感じながらも、戦士としての勤がブレインの一撃必殺の構えに警鐘を鳴らし、この場での決着を求めざるをえなかった。

二本のステイレットを両手に持ち、一本を選ぶような動き。そして――。

——私の方が、絶対に速い！

〈能力向上〉〈能力超向上〉〈疾風走破〉

クレマンティーヌは飛ぶように、滑るように一直線に踏み込む。その先にあるのは、半身になったブレインの肩口であり、心臓だ。最速のクレマンティーヌが、最短で到達可能な部位を狙う。それはクレマンティーヌの軽妙な口先とは対照的に、一切の遊びを削ぎ落とした万全の攻撃だ。これが通用しないようなら、クレマンティーヌという存在は今度こそ、完全に終わってしまうかもしれない。

クレマンティーヌの言葉通り、ブレインの優位は打ち砕かれたかに見えた。

本来ならば太刀筋を見せない構えは、刀身の短いステイレットに対して優位に働くものだ。しかし、そのステイレットはクレマンティーヌと一体となり、突き出された槍の如く、ブレインを襲う。

それは、果たして神速の槍を前に利き腕を晒す愚策か。

〈神閃〉

ブレインは構わず全てを賭けた一撃を繰り出す。それでも〈領域〉による知覚能力で、神速の槍によって肩を貫かれることはわかっている。斬撃自体の速度では決して負けていないが、クレマンティーヌは大きく加速した状態で〈領域〉へ踏み込んでくる上、武器の軌道の距離が違いすぎるのだ。それでも、その槍はクレマンティーヌ自身でしかない。すなわち、肩一つを差し出して槍を断ち切れば全ては終わる。

「ぐうっ！」

ブレインの肩に鋭いものが入っていく。全てを知覚できていても、身体能力において対処には限界がある。〈神閃〉の切っ先が乱れない範囲の動きでステイレットの軌道から身体の芯をそらしつつ、その肩をステイレットに貫かれながら、名付けの通りに神の領域に達する一閃を放つ――。

〈――不落要塞〉

一瞬感じた肉と骨を断つ感触が止み、刀が完全に止まる。ありえないことを前にして

ブレインは思わず瞠目する。

そこに武器を受けるものなど無いはずだ。普通の攻撃ならまだしも、腕で〈神閃〉を受けるなどすれば腕が千切れ飛ぶしかない。ブレインも見たことのある〈要塞〉の上位武技のようだが、腕を断ち切る一瞬の間に発動することなど不可能なはず――。

「……っ！」

そこにあつたのは、鎧の外れた短いステイレットだ。クレマンティーヌはそれを掌の側、腕の内側に隠していた。腕を返して受けるのでは間に合わないとの判断か、そのまま逆腕を捨てステイレットを隠したまま〈不落要塞〉でブレインの斬撃を止めたのだ。その腕は骨まで断ち切られてほとんど千切れかけ、すぐにステイレットが取り落とされる。

〈流水加速〉

肩を貫かれながら全てを賭けた〈神閃〉を放ったブレインには二撃目を放つことなど不可能だが、異常な速度の斬撃に警戒したのかクレマンティーヌはブレインの肩に突き込んだステイレットから手を離して距離を取る。

ステイレットが肩から落ちると、貫通する両側からおびただしい量の血が噴き出した。出血自体はクレマンティーヌも大差無いが、利き腕の肩を壊されたブレインにもはや勝算は無い。

——逃げるか？

ブレインは剣士としての矜持を持たないわけではないが、それを守る手段はただ戦って死ぬことではなく、生き延びて再戦して勝利することだと考えている。目標が増えただけ強くなれる余地も大きい、そう切り替えることができる。

だが、肉体能力の差、肉体速度を増す武技など、目の前のクレマンティヌは逃げようと思つて逃げられる相手とも思えない。普通に逃げにかかれば、後ろの魔法詠唱者たちも黙つてはいないだろう。

「そろそろ回復してあげてください」

マールに促され巫女姫が第五位階の回復魔法を使うと、クレマンティヌの千切れかけた左腕は、時間が戻っているかのように垂れ落ちつつある血を巻き込みながら繋がって元通りに全快する。エンリとンフィーレアはもちろん、ブレインさえもその絶大な効果に驚いた様子だ。

「ミコちゃんありがと。で、こいつどうしましよーかねー」

「ま、待て、まだ決着は付いてない！ 俺も奥に行けばポーションがあるんだ」

血のあふれ出る肩を押さえながら、ブレインは顔をあげてまくしたてる。

「うっわ、往生際悪いんだー。それで逃がすと思ってるわけ？」

「い、一合だけいいい！ あと一合だけ剣を合わせたら、全員でかかってもらって構わない。逃げられるとは思わない。もう一度だけ最高の戦いを味わいたいんだ！」

クレマンティーヌは感じていた充実感を見透かされたような気がしたが、それでも悪い気はしなかった。ブレインの武技は侮れないものだったが、その速度を知ったからには次は大きな傷を負わずに対処できる自信もある。どうせ袋のネズミで逃げられるわけでもなく、ただ戦士としての魂を癒されるような戦いを続けられるのは魅力的な提案だった。

「いーよ。回復したブレインちゃんを殺す方が楽しそうだし、行つてきなよ」

「……それじゃ、この先で待ち構えてる連中の向こうで待つてるぜ」

ブレインはよろめきながら走り去る。

「逃がしたんですか？」

「いえ！ に逃がられないから大丈夫です」

マールは少し首をかしげる。別に情報を持つていそうにもない男の処遇には全く興味は無いが、逃がさないとと言う割に簡単に逃がしてしまうクレマンティーヌの行動が理解できなかつただけだ。

洞窟の中には、マールにしか感知できない僅かな空気の流れが——もう一つの出口があった。

ブレインは下唇をかみ締めながら、その場を逃れる。

また、戦いたい。

ポーションなど奥へ行かずともその身に隠し持っている。

しかし、自分の殻を破らねばクレマンティヌとの再戦は無意味だ。

ブレイン・アングラウスは、かつて王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに破れ、ガゼフを乗り越えるべき目標として戦いを重ねてきた。

ガゼフとの戦いでは己の才への過信があった。努力せず、努力した男に敗れたことで、ガゼフに勝利するため努力をすることができた。

クレマンティヌとの戦いでは、そんな想いに囚われた自身の弱さを思い知った。軽口を叩きながらも己の全てを出し尽くし、斬撃の前にその腕を差し出してまでブレインの最高の技を正面から打ち破ったクレマンティヌ。あれは戦いに全てを賭けることができる存在だ。

それに対し、ブレインは全てを出し尽くすことができたのか——。

否。

ブレインには、封印していた技がある。それは、ガゼフに敗れた後、憧れと悔しさの間で揺れながら練習し、習得し、封印した、当時のガゼフ・ストロノーフ最高の武技〈四光連斬〉だ。ガゼフに負けまいという想い、それに伴う安い矜持のために、出し切れなかった力。

それこそが、ブレインがクレマンティーヌを凌駕しうる可能性でもある。〈領域〉と〈神閃〉による最高の速度と精度をもつて〈四光連斬〉により四の同時斬撃を放てば、〈不落要塞〉に護られた神速の槍を打ち砕くことができるかもしれない。もちろん、そこには僅かな迷いさえあつてはならない。これを躊躇する想いなどは、鍛錬によつて振り払つていくしかないだろう。ブレインが乗り越えなくてはならない相手は、もはやガゼフだけではないのだ。

強くなりたい。その想いだけは変わらず、より強いものになっていた。

「悪いがしくじった。ポーションを使って戻るからそれまで粘つてくれ。クロスボウは予備も全部巻いておいた方がいい」

仲間たちが守りを固める洞窟で最も広い空間に至ると、ブレインは余裕の表情を繕う。予め空けさせておいたバリケードの端を通り抜けると、痛みを堪えその意図を気取

られないよう堂々とした態度を装いながら、奥の小部屋の扉を開けて中へ入る。その部屋は、盗賊たちのほとんどが倉庫として認識している場所だ。

「あのブレインが深手を負う相手なのか」

「ポーションつて買ったら身につけておくものじゃないのか」

「俺たちはそうだが、ブレインが怪我をしたのなんて見たことないからな」

「そんな相手にここを守れるのかよ……」

ざわめきは止まない。盗賊たちはバリケードの隙間を埋め、不安を口にしながらクロスボウを構える。

盗賊の頭——自称庸兵団の頭である男だけが、顔を歪めてブレインの入っていった小部屋をちらちらと気にしていた。

バリケードは横倒しにしたテーブルと商隊などから略奪した時の木箱を積み上げたもので、それと入り口との間に行動を阻害する目的で腰上の高さに渡した幾重ものロープで簡易な防御陣地を構成している。

「二人で大丈夫。もしもの時は回復だけお願いしまーす」

入り口の奥から、気楽そうな女の声。その直後、ロープと木箱を足場にバリケードを

軽やかに乗り越えた一人の女によって、広間に死が撒き散らされることになる。

広間のほぼ全員による数十のクロスボウからの苛烈な十字砲火を受けても、どうにか命中した矢はたった一本。その傷にひるむことさえなく、女は『死を撒く剣団』残存兵力への蹂躪を開始する。正面の集団がなすすべもなく壊滅し、その矢さえも後方からの回復魔法で女の身体から排出されると、盗賊たちの士気は完全に挫けた。逃亡者が続出するが、入り口の他に逃げ道を知る者は無く、バリケードに阻まれたままでは幾つかある行き止まりの副洞へ隠れるほかない。

その場で唯一隠された逃げ道を知る男は、既にステイレットで頭蓋を貫かれて地に伏していた。集団を相手に襲撃をかける際は、一瞬で指揮系統を判断して可能なら速やかに叩く。そこまでは、かつて女が所属していた部隊では日常的な行動だ。ただし、その後の殺戮は訓練された動きとは言いがたく、猫がネズミの群れを襲うような愉悅に満ちた嗜虐的なものとなり、そのことが逃亡者たちに時間を与えた。

「ま、待て！ こいつらの命が惜しかったら戦いを止めろ！」

「そうだ！ 冒険者がワーカーか知らないが、誰かを助けに来たんじゃないのか?！」

「お前らも手を貸せ！」

戦いから逃れた者たちのうち、性欲処理のための女たちを捕らえておく小部屋に逃げ

込んだ三人は、逃げ場の無い絶望的な状況においてそれらを人質にすることを思いついた。三人が人質に武器を突きつけながら戻ると、広間の生き残りのうち動ける三人がこれに加わり、六人で四人の人質を盾に女と対峙する形となる。

クレマンティーヌは殺戮を存分に楽しんでしたが、元々はそれだけが目的だったわけではない。しなければならぬことに賊たちの茶番を利用できることに気付き、薄い笑みを浮かべる。

「んふふ、女しか居ないみたいだけど、男の方は、殺してしまったのかなー?」

「……そうだ。そういう用で来たのなら話は早い。せめて女だけでも連れ帰った方がいいんじゃないか?」

盗賊の一人が、女の言葉に少し怪訝な顔をして応じる。捕えていた女たちは隊商や旅人を襲撃して得た戦利品であり、護衛や同行者の男を殺してしまうのは聞かずともわかる当たり前のことだ。

「それなりの戦士も二人いたはずなんだけど、さっきの男にはかなわなかったかー」

「ああ、ブレインは強い。俺たちが生かしておくのは若い女だけだ」

盗賊はクレマンティーヌの狙い通りに、襲撃対象の護衛などで手ごたえのあった相手

を勝手に思い浮かべて応える。

しなければならぬことを終えたクレマンティーヌの笑みが深いものになる。これで盗賊たちは用済みだ。

「んふふ、それじゃ、仕方ないよねー。どうしますー？ お仕事には関係ないみたいだし、私は全部殺しても構わないけど」

エンリとマールが言葉を交わし、マールが口を開く。

「入り口と同じで」

それを聞いたクレマンティーヌがマールと目配せをすると、マールの魔法で五人の盗賊が爆散し、残る一人はクレマンティーヌによつて無力化された。元々壊れかけていた人質たちは、血肉を浴びて呆然とする者、薄い笑みを浮かべる者、卒倒する者など様々だ。最後の盗賊は耳元で何やら囁いたクレマンティーヌに恐れをなし、何かを聞かれるたびにびくびくとそちらを窺いながら、言葉少なく洞窟内を案内することとなった。

その男は『死を撒く剣団』団長の死体から鍵の束を取って差し出し、ブレインが去つた後の部屋を案内した後、激高したクレマンティーヌのステイレットを額に突き込まれて絶命した。

部屋には逃げ道だった穴があった。土砂を崩され半ばが埋められていたが、クレマンティーヌは一縷の望みをかけ潜り込む。マールの魔法によつて土砂が排除されること

で、速やかに外へ出ることができた。

そこは、やや湿った空気の漂う森の中だった。入り口のあった窪地からも近く見通しはそれほど悪くはないが、もちろんブレインの姿は無い。

「あの男！ 逃げやがったか……」

焦って周囲を見回すクレマンティーンに続き、立つて歩けるほどに広げられた抜け穴から囚われていた女たちを含めた一行が出てくる。

「あの、逃げられないって言ってましたよね」

「モ、申し訳ございません!!」

マーレの声に反応し、一行の真ん中のエンリとマーレが並び立つ前に、賊たちの返り血に塗れたクレマンティーンが飛び込んできて土下座をする。その光景に助け出された女たちはたじろぎ、二人からじりじりと距離を取る。

——不味い、思いつきり怯えられてる。

エンリは少しでも和やかな雰囲気を作ろうと、話題になるものを探して周囲を見回す。

変な形の枯木……こぼく……恐ろしげな老人の顔に見えてくるのでやめておく。

地味な色の太い蛇……害が無いのは村の野伏から聞いていたけど、和やかな話題とは

違う気がする

可愛らしい小鳥たち……二羽いっぺんに樹上の何かに食われて、搾り出すような断末魔の悲鳴。残ったのも食われた。

美味しそうな白い茸……帰りの食材にもなるし、何かあっても断末魔の悲鳴をあげない。これしかない。

薬草採取と違って相当に筋が悪いとされ、エンリは故郷のカルネ村でキノコ採取に関わることを禁じられていたが、毒草などにも詳しい薬師のンフイーレアや森に生きる妖精族のマーレがいる今なら問題無いだろう。

「ねえ、あれ……すごく美味しそうじゃない？」

間の悪さから逃れようとしたエンリが指差す先のものを、マーレが拾い上げ、同じくそれを知っているはずのクレマンティーヌに見せる。湿り気のある枯れ葉の多い地面の上、それは卵のような繭のようなものに護られるようにして立ちあがった、まだ小さな白い――。

「小さいけど拷問に使ったやつと一緒にですよね。これは食べられないです」

「ああ……も……イヤ……ダメ……ごめ、んなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

まだ傘も開いていない小さな白い茸を見せられたクレマンティーヌは、ただその場にうずくまって謝り続けた。生暖かい液体がその下半身を伝い、湿った地面に吸い込まれていく。

クレマンティーヌの状況を見て、持ち歩いていた鎮静薬を差し出すタイミングをはかりかねていたンファイレアは、マーレからその茸を手渡される。

「これで毒薬を作れますか？」

「あつハイ。まあ、できると思うけど……」

茸のままの方が効果は抜群かも、とは口に出せなかつたンファイレアだった。

黙ってクレマンティーヌに水袋を渡すと、洞窟へ戻って戦利品を持ち帰ることを提案し逆方向へ一行を誘導する。そこには気遣いもあつたが、残つたメンバーで最も冒険者に近い感覚を持つのがンファイレアとなる。金貨を最優先し、素人ながらに物品の価値を見定め、少し離れた所で作業をさせたクレマンティーヌにも意見を聞きながら、手際よく進めていった。

「それで、討伐隊はいつ編成するんだ？」

「最低三チームは必要だろう。他にサポートも要るだろうな」

「二応傭兵団なんだろ。戦争みたいなものだし、ここに居る全員でやつてもいいくらいだ」

この街の最上位であるミスリルと白金クラスの冒険者の集まる酒場は、北の盗賊団のねぐらが判明したという情報をうけて大きな仕事の気配に活気付いていた。数チームの連合が見込まれるとなれば、リーダーや役割分担など先の話題には事欠かない。

本来、そんな話題であれば最も活気付くはずの男は、同じく話題に乗り切れないチームメンバーたちと静かに酒を酌み交わしていた。

「話を持ってきたお前にその気が無いってのは意外だったな」

「イグヴァルジがまとめてもいいと思うくらいなんだが」

「……俺はいいよ」

——不要な情報だから流したんだよ。

イグヴァルジは、心の中だけで呟く。世話をしていた後輩が街を去ったことで消沈していると周囲に言っているが、実際は違う。元々『クラルグラ』の仲間だけで共有する

独自の情報で、北の盗賊団にとんでもない剣士がいるということを知っていたのだ。

『クラルグラ』は細かい調査任務を厭わない、使いやすい冒険者チームとして知られていた。しかし、実際のところは報酬の良くない事後調査に類するものを好み、事前調査は自ら握る情報で安全が確認できない限り絶対に受けないという方針を守っていた。報酬が悪くとも、事後調査は情報の宝庫だからだ。北の盗賊団についても、商隊護衛に出た者たちが戻らないことで派遣された事後調査で鎧から骨まで一気に切断されたような死体を見てその危険性を知ることとなってからは、そちら方面の護衛や警護は一切請けないようにしていた。

そういうわけで、イグヴァルジは下手に討伐隊の一部として指名を受ける前に、同格の冒険者たちが組合に問い合わせをして勝手に望んで請けることを待つつもりだ。仲間たちにその意図は話していないが、長年の付き合いでそのあたりの間合いは心得たものだ。

街への帰路についた一行は、組合への報告について話を整理していた。といっても、取り逃がしたブレインの扱い以外に大きな問題は無い。

「クレマンティーヌさんの話を聞く限り、逆に普通の冒険者だったらブレイン・アングラウスという人のことは言わないでおくべきだと思う。もちろん、組合長が気を遣ってくれているなら、それで信じてくれることを期待するのもいいかもしれないけど——」

話というのは、ブレイン・アングラウスが御前試合でガゼフ・ストロノーフと互角に近い戦いを見せた有名な強者だというものだ。そうなるとそれが盗賊団の中に居たことは重要な情報であるように思われるが、エンリの中ではそのこととンファイレアの意見がうまく繋がらない。

「よくわからないけど、そういうのは甘えすぎだと思う。でも、信じてもらえるかわからないと、言っちゃいけないのはどうして？」

ブレインは盗賊団の一員であり、立派な犯罪者だ。それをあえて報告しないという判断を、エンリは理解できなかった。

「そうだね。それほどの人なら経歴を隠して他の国に逃げてくれればまだいいけど、護衛としても優秀だろうから、どこかの貴族が雇ってしまいかもしれないんだ」

「悪い人だつてわかつたらその貴族が捕まえてくれるんじゃない……」

「王国戦士長と互角に戦ったことがある剣士だったら手放すわけがないよ。この国では

貴族が身元を保証すれば、証拠が無い以上、冒険者でしかないこつちが嘘をついたことになるだろうね」

「へえー、ンファイーちゃん賢いねー。確かにあのブレインだったら漆黒聖典だつて喜んで迎え入れるよ。私の穴までは埋まらないけど」

クレマンティーヌでさえ理解できているのに、エンリはンファイーレアの話を理解できなかった。弱味を見せられないというのは少し違うかもしれないが、頭が弱そうに見られるのもまずいだろう。ンファイーレアに顔を寄せ、小声で囁く。

「……今のところ、帰ったらもう一回説明してくれる？」

第六章 マーレとザイトルクワエ

二三 薬草採取という平和な仕事

二日後、『クラルグラ』は北の盗賊団こと『死を撒く剣団』の罫を訪れていた。

討伐隊が組まれないまま銅級一チームに全てを攫われ呆然とする同格の冒険者たちを尻目に、格下の白金級相当とされた安い事後調査の依頼書を迷わず取ったイグヴァルジは、ただ凄惨な殺戮の現場を眺めて帰ることとなった。その痕跡を綿密に調べれば、それが盗賊団の剣士によるものを凌駕するかもしれないということばかりでなく、殺戮者の嗜虐的な性格さえ見えてくる。鋭利な刺突武器で数箇所から数十箇所を刺された死体が多かったが、人間とは思えない力で破裂したかのように引き裂かれたものなどは『血塗れの魔女』の評判通りのものだった。

刺突武器を使う者——『血塗れ』の奴隷となった女がそうであったはずだ。一笑に付したはずの、高位の冒険者のプレートを奪って鎧に貼り付けていたという話が急に真実味を帯びてくる。

しかし、『血塗れ』に敗れて鬨りものにされた女がミスリルやオリハルコンの冒険者を殺せるほどの存在なら、冒険者に登録したばかりの『血塗れ』は既にアダマンタイト級

並みかそれ以上の実力者だともいうのだろうか。

英雄を夢見て、必死に冒険を繰り返して、ようやくこの街で最上位のミスリル級にまで昇ってきたイグヴァルジにとつて、それは考えたくもないことだ。殺戮の現場を見て『血塗れ』の評判に嘘が無いと知ったことで、『血塗れ』への苛立ちは怒りに変わっていた。想いと情報を引き継いだ『漆黒の剣』のものとは異質な怒りではあるが、することは変わらない。この仕事も、蹴落とす材料を探すためのものでもある。

—— 刺突武器を使う女はそこまで強者ではないはずだ。単純に『血塗れ』がその女の武器を奪って使ったのでは……。

そのように、イグヴァルジは自らの思考を不快感の少ない方へ誘導しようとするが、それも適わない。『血塗れの魔女』の非常識な膂力と、恐ろしいまでの精密な技術に裏付けられた刺突の傷跡とは、どうしても結びつかなかった。仲間たちも死体を調べるうちに刺突武器を持つ女への興味を強め、それは仕事を終えた後も『クラルグラ』の話題の中心となった。

「際立った強者はいなかったようですがね。……あれは異常ですよ、組合長。間違いない危険な女です。盗賊どもは皆、弄ばれるように身体中を穴だらけにされたり、バラバ

ラに引き裂かれたりして殺されていました。人を殺すのを楽しんでますよ」

組合へ報告に訪れたイグヴァルジは、『血塗れの魔女』の異常性を強調する。ここでは刺突武器を使ったのは誰かという問題は関係ない。

盗賊団の強者について独自に握っていた情報と違う答えを返したのは、自分たちさえ追い抜いていきそうな生意気な新参者の昇進を少しでも抑えさせたい感情によるものだが、実際に死体からはそれらしい情報も得られない状態だったので問題はない。

「……力とは危険なものだよイグヴァルジ君。それに、彼女は正義感が非常に強い……あるいは、盗賊団のような者たちに恨みでもあったのかもしれない。誰しも生まれた時から強者ではなく、冒険者になる者は様々な事情を抱えているものだからね」

冒険者組合長プルトン・アインザックは本来、過剰な殺戮や嗜虐性などを良しとする男ではなかったはずだが、ここではイグヴァルジと目を合わせようとしてもしない。聞いていた通り、『血塗れ』との間に何かあるのは間違いないだろう。

「……ともかく、盗賊団の方はたいした連中では無かった。そういうことになります」「ふむ……強者がいればオリハルコンも考えたが、ここはミスリル級あたりで良いところか……」

それは問いかけといったものではなく、調査任務の報告者が意思決定に関わるような問題でもないのだが、わかっているにもイグヴァルジは黙っていられない。盗賊団の規模

からミスリル級複数チームの動員が必要な実績であっても、銅級の駆け出しがたった一度の仕事で自分たちと肩を並べることを許せようはずがない。

「ミスリル級といつても、今はこの街最高のランクですよ。新入りが急に目立ちすぎるのは良くないんじゃないかと思えますがね」

昇格関係など本来は他の冒険者と話題にするようなことではなく、普段なら適当に煙に巻くところだが、イグヴァルジの言葉はアインザックの中へ素直に入っていた。

『血塗れ』ことエンリ・エモットは、恐るべき闇妖精マーレの存在を隠蔽すべく、自らの評判を省みずたった一人で冒険者として登録して他の者を使うという形をとってくれている。アインザックはそのことを思い返すことができた。

「ありがとう。君が言うならまあ、その通りかもしれない」

目立つ目立たないで言えば、『血塗れの魔女』の噂は冒険者の間にも広まっており、エンリの思惑がうまくいっているとは言いがたい部分もある。それでも、協力できる部分は協力しておいた方が良さだろう。

——昇格ということならチーム名も必要だが、『血塗れ』や『血塗れの魔女』で……良いわげがないな。組合としても少し困るし、聞いておかなければ。

「——で、昇格の方は当初ミスリル級を考えたんだが、事後調査を担当してくれた『クラ
ルグラ』のイグヴァルジ君が、目立ちすぎて困るだろうと言っていてね。今回は白金級
ということにさせてもらった。……もちろん、エンリ君が望むなら本来適正なミスリル
級以上への変更も考えるが」

「いえ、そのまま白金級で。もつと下でもいいくらいです」

もつと控えめな評価にしてもらっても良かった。

組合長の部屋に来ているのは、またもエンリ一人だ。その方が強そうだというン
フィーレアの言い分には思うところもあるが、エンリは貴重な理解者である組合長の前
では氣を楽にすることができた。

エンリは、この部屋で対応してもらえること自体が特別扱いだと理解してはいるが、
この配慮には深く感謝していた。

確かに、受付から組合長の所へ連れられる際の他の冒険者からの視線が気にならない
わけではないが、視線が痛いのは特別扱いのせいばかりではない。最初に組合でモンズ

ターの討伐証明のための部位を提出した時、マールが素手で骨ごと抉り取ったものを出してしまい衆人環視の受付で化け物扱いされたエンリとしては、この特別扱いが本当に有り難かった。

「悪いが、それ以下は考えられないな。出した結果とあまりに釣り合わないことをしては組合の信用にも関わる」

「わかりました」

——『クラルグラ』のイグヴァルジさんか。わかつてくれる人、ほかにもいるんだ。エンリはその名を記憶に残しておく。

事後調査という言葉に『死を撒く剣団』の惨状を思い出して少し不安になったが、良き理解者であるアインザックからその点への言及は無かった。そして、調査がある以上、ブレインのような証拠が無く後で問題になるかもしれない部分は伏せておいて正解だったのだろう。

その後、チーム名を登録することを勧められ、エ・ランテルへの旅路で出会った剣士エルヤーの勧め通り『漆黑』としておいた。悪口を言われる時も短い方がいい、そんな彼の言葉は、今はあの時以上に理解できた。

「ところで、これからのことなだけど——」

バレアレ家の工房の一室に戻ったエンリは、仲間たちとテーブルを囲んでいた。エンリは受け取った報酬の大部分をクレマンティーヌの前に置く。

「これはあなたの分。クレマンティーヌにはミコヒメの世話もお願いしていいかな。白金級だからあの宿で過ごして、冒険者組合からチーム『漆黒』への連絡があったらこちらへ知らせてく——知らせてほしいの」

「は？　これ全部？　ここから離れていても……いいんですか？」

クレマンティーヌは目を丸くする。奴隷同然の身と考えていたところへにポンと大金を渡されれば、訝るのも当然かもしれない。

しかし、クレマンティーヌが前で戦ってくれたおかげで、「事後調査」とやらがあつても問題が起こらず、エンリの評判は悪化しなかったのだ。さらに、エンリには自分たちを守つて戦つた者の装備に気を配るのは当たり前だという考えもあつた。幾多の冒険者プレートが貼り付けられた殺戮者の証である鎧を使わせておくわけにもいかないが、かといつて鎧も着せずに戦わせてクレマンティーヌを危険に晒そうという考えにもな

れない。それは、マールに用済みになった後クレマンティーヌを殺すように頼もうとまでは思えないのと同じことだった。

クレマンティーヌはちらちらとマールの顔色を窺い、それに気付いたマールが口を開く。

「どこにいてもわかるようになってるので、これの管理をお願いします」

「ハひっ」

マールの言葉に裏返った声で返事をする、クレマンティーヌは不安な表情のまま何かが残っているであろう自らの腹部をさする。

「そのお金は人に見られても大丈夫な新しい鎧を買う分も含めてのものなので、まずは買物が先で、ミコヒメを連れていくのはそれからということ……」

語尾を濁すエンリ。弱気な言い方にならないよう意識してはいるが、年上で経験も迫力も何もかも違うクレマンティーヌを相手に、大きな態度で接することに慣れるのは難しい。

「鎧……そつか。それじゃ、案内にインフィーちゃん借りますねー」

「えっ、僕？ まあ、別にいいですけど」

——なんか仲良くなつてない？

エンリは二人を少し複雑な気分で見送る。

ともかく、これで今夜からは部屋でマールと二人きりだ。常にいかかわしい薄絹一枚の格好を鑑賞できるよう、当初は外套の前さえとめさせなかったミコヒメを、あのマールが手元から離すことを簡単に認めたのは意外だった。ただ、何をしても反応が無さそうなミコヒメでは飽きが早かったのかもしれないし、世話が面倒だったこともあるのだろう。もちろん、その場で断られたらエンリが装っているものも剥げ落ちかねないため、事前に話し合つて了承を得た上でのことだ。

エンリたちは仕事の後、バレアレ家で余っている部屋を提供してもらつていた。そこへ、これまでミコヒメだけでも余計だったというのにクレマンティーヌまで加わつてしまい、夜は大人しく寝ることしかできなくなつていた。とはいつても、クレマンティーヌに見られるような状況でマールが手を出してくれば自分を装うことができなくなつてしまいかねず、エンリは気まぐれなマールの欲望に警戒して眠れぬ夜を過ごしていった。

エンリの中では、今でもマールは玩具であるエンリとミコヒメを支配する嗜虐のご主人様のままだ。それでいて、クレマンティーヌに対しては強者であるように装わねばならないのだから難しい。安易にその道を勧めたンフイーレアにそのあたりの繊細な事情を説明しづらいのが辛いところだった。

もちろん、クレマンティーヌではマールのような嗜好の持ち主にとっては流石に歳が

いきすぎているようにも思うし、持っている情報が目当てだとマールレから聞いていたのでそういうしもべではないということもわかつてはいた。しかし、それでも近くに居られると、ちよつと大きすぎると思う。エンリが持つていて、同じくマールレのそういう対象であるミコヒメが持つていないものの差が、クレマンティーヌの前では吹き飛んでしまうような気がするのだ。

——でも私、それでいいのかな？

少し迷惑そうに腕を引かれながらも、クレマンティーヌと打ち解けた様子に見えたンファイレーアの姿を思い返す。ほんの少しだけ心の奥に引っ掛かりを感じるが、今のエンリにはそれが何であるかを理解できない。

——ンファイレーアと食べた御飯、美味しかったな。

そんなンファイレーアを困らせてしまったことも忘れてはいない。一緒に美味しいものを食べながらも、ンファイレーアはエンリに対し緊張を感じていた。これは多大な迷惑をかけていた証拠だろう。なぜなら、エンリが同じ感情を抱いたのは、あのマールレに対してなのだから。

エンリはマールレとの関係を思い返す。

当初は、高価な服を着た妖精族のマールレはどこかの貴族の哀れな慰みものだと考え

た。主だというモモンガへの純粹な忠誠心を知り、その純粹さを汚さないまま助け出したいと思った。そのマールレが絶対的な強者であったことで、その認識は揺らぎ始めた。

モモンガというのは、幼い少女とともに地下の墳墓に住まう恐ろしい存在だ。可憐なマールレに全く似合わない、動死体^{ゾンビ}に死体を食わせるような恐ろしい所業は、モモンガの獸欲に蹂躪され壊された幼い少女たちを「片付け」るために教え込まれたものと考えられないだろう。

そして、マールレが裸同然の薄絹姿のミコヒメを連れてきた時、モモンガのための「数を揃えないと意味ない」玩具だと言い放っておきながら、主の居ないその場でも「すぐ使えるように」しておく——そのことで、マールレ自身もまた主モモンガと同じ側の存在だと知った。

そのミコヒメの小さな透ける薄絹——エンリでは色々な所が露わになってしまいうれに着替えるよう求められたあの時から、エンリのマールレの玩具としての立場は決まってしまうてしまっていた。

マールレは恐ろしい主モモンガに捧げる使い捨ての少女を集めていた。その列に加わるくらいなら、マールレに見初められているうちにマールレのものになった方が遥かにマシだという後ろ向きの考えが、今の関係の端緒だった。

——マシだから、仕方が無いから、恐ろしいマールレが望んだから、ネムまで巻き込み

たくなかったから。

今は、どれもしつくりこない。何かが違う。

——命を、村を、救われたから？ マーレが可愛いから？ ずっといつしよにいたか

ら？

わからない。

考えたこともない。

絶対的強者の所有物となつて、考えるのを止めているうちに、わからなくなつた部分だ。

エンリはマーレの真意を知らない。マーレがモモンガに幼い性を捧げる寵姫ではないことも、ミコヒメがモモンガやマーレの性的な玩具として連れられたのではないことも、その玩具という呼び方さえ魔法を使うだけの道具である割にたいした魔法が使えないという意味に過ぎないということも、エンリがミコヒメの露出度の高い薄絹に目を奪われていた間にマーレがそれではなく今着ている黒衣を勧めていたことも……。

それらの全てについて、エンリは今さら遡つて気付くこともできないし、かといつてマーレの口から語られるようなことでもない。

そして、年頃のエンリは毎晩のように覚悟を決め、焦らされ、一抹の寂しさとともに

「安堵する。その繰り返しが少しずつ意識を塗り替えていることにも気付かずに、エンリは今日も強くマールレを意識する。」

当初、クレマンティーヌは自身の待遇に混乱しかけたが、ニニヤという冒険者から聞いていた『血塗れの魔女』についての情報を思い出してようやくその意図を察した。あれには幼い少女を甦るような趣味があり、慰みものの少女を飼っているという。何らかの理由で今進んでいるンフィーレアの籠絡と並行してそれを愉しむには借りている部屋で夜の間に行うしか無く、大切な回復役ではあっても目の見えない巫女姫の世話が煩わしくなったのだろう。

クレマンティーヌは、どこかに監禁されているであろう慰みものの少女を見てはいないが、興味もない。むしろ、そういう類の趣味を一時的にでも我慢していた欲求不満が自身への苛烈極まる拷問の指示に繋がったかもしれないとすれば、そんな欲求は好き放題に発散させておいて欲しかった。別に目の前でやってももらっても構わないのだが、そ

ういうことをするのに第三者が邪魔だということも理解はできるし、マールから離れて過ごせる以上、喜んで従うのは当然のことだ。

巫女姫に食事を与え部屋に置いてきた後、クレマンティーヌが宿の一階で食事をとっているとき多くの視線が集まってくる。以前調べて知っていたことだが、この街にはそれほど実力のあるワーカーはいない。主に白金級以上の冒険者たちが利用するこの宿で、プレートを持たないクレマンティーヌが注目を浴びるのは当たり前前のことであつて、本来なら気にするようなことではなかつた。

ただ、その視線の中に、こそこそと胸元を探るように見てくる粘ついたものが含まれている。マールから離れることができた開放感で気分が良かったクレマンティーヌは、その視線の主を少しからかってみることにした。

「うわー、このオッサンこそこそ人の胸元見てかっこわるー。えろすけべー」

「なっ……ちがっ……この女っ!」

ミスリル級相応の風格を持ちながらもどこことなく小物感を感じさせるその男はたまらず立ち上がり、それでもたまにちらちらと胸元を覗き込みながら近づいてくる。

「うぶぶぶ、変態さん、喧嘩なら買うよー」

「お、俺はただ、お前の鎧が……違……う?」

クレマンティーヌが男に向き直ると、マントの前が少し開いて買ったばかりの鎧が露

わになる。露出度は以前とさほど変わらないもので、今は男をからかうためにわざと見えやすくしたのだが――。

「鎧？ そつかー。……どこかで見たの？ それとも、誰かから聞いた？」

「……ふん、弱みを握ってる相手がいるってことだけは覚えておけ。『血塗れ』の事はよく聞いている」

急に雰囲気が変わり低い声になったクレマンティヌに気圧されながらも、男は強がる。鎧を観察しての行動だったということか。

「弱み、ねえ。騒いでもその命が危ないだけだと思うけどね。どうなつても知らないよー」

「ぼ、冒険者同士で殺しなんて無いだろ。そんなこと組合が――」

男はたじろいで半歩退く。何か知っているのか、あるいは、本能的にもものわかりが良いのなら長生きできるタイプかもしれない。

「んふふふ、誰が冒険者だつて？ たとえ私一人でここの全員を片付けたつて、無関係のワーカーが問題を起こしただけってことになるんだよ」

クレマンティヌは声を抑えるのをやめた。コソコソやっついては、周囲を嗅ぎ回る人間が増えることになりかねないからだ。

その男——イグヴァルジは、背後で椅子を蹴って立つ音を幾つも聞いた。

——く、くるな！

「おいおい、一人でここの全員を片付けるだと」

「女、調子に乗るなよ」

——おいやめろ。

「イグヴァルジ、いつまで言わせておくんだ」

「お前らしくもないじゃないか」

「どうせワーカーだろ、軽く痛い目を見せてやったらどうだ」

——やめてくれ。やるなら俺と今すぐ代われ！

同格の冒険者たちが多く居る酒場で、冒険者のプレートを持たないような者に馬鹿にされたままでいるわけにはいかない。自身の名声を大切にするイグヴァルジは、適当に女の弱みについて折れさせ、矜持を保ったままその場を誤魔化すつもりでいた。

しかし女は折れず、気がつけば周囲を巻き込んで、退くに退けなくなってしまうてる。

目の前の女は、とてつもない強者である可能性が高い。ただし、その情報は盗賊団討伐の事後調査を行ったイグヴァルジと『クラルグラ』の仲間たちだけが持っている。他の冒険者たちにとっては、調子に乗っているだけのワーカー風情でしかない。

イグヴァアルジは、険悪なふりだけでもして、外に連れ出して話をすることを考える。「口だけなら何とでも言えるだろうが、話してんのは俺で、周りは関係ねえ。ちよつとそこまで顔貸し——」

めきよつ

立ち上がった女の細腕から放たれたものは目に見えないほど速く、そして重かった。イグヴァアルジは薄れる意識の中で鼻の形が変わってしまったことを感じながら、どこかのテーブルを巻き込みつつ後ろへ倒れこむ。顔面に受けた衝撃を拳だと認識する頃には、多くのミスリル級、白金級チームを巻き込んだの乱闘が始まっていた。

「弱いねー。ちよつと前なら全員殺しちゃったかもよ。今は『血塗れ』から問題起こさないと言われているから降りかかる火の粉を払っただけで済ませたけど」

クレマンティーヌは無事なテーブルから酒瓶を取って直接あおる。

「も、問題おこしてないつもりか……」

「絡んできた変態ひとりのぼしただけで、別に何も起こってないよねー。ほら、テーブルとか戻そうか」

ミスリルのプレートを付けた男が、クレマンティーヌに尻を蹴られて慌てて手近なテーブルを起こす。

店内は荒れ果てていたが、黙々と片づけを行う冒険者たちには、鼻骨を折られて盛大に鼻血を撒き散らしたイグヴァルジを除けば目立つ外傷は無い。ただし、服や鎧の下は痣だらけで無残なものだ。漆黒聖典で様々な特殊任務に従事してきたクレマンティーヌは、痕跡を残さずに人間を痛めつける方法も熟知していた。

近くで片づけをしていた戦士がおそろのおそろの口を開く。

「あ、姐さんはワーカーなんでしょうか?」

「ワーカー? まあ、そうとも言えるね」

「言える?」

「実際は『血塗れ』の所の奴隷だよ。絶対服従。まー、仕事手伝わたら律儀に分け前たくさんくれたからワーカーってことにしてもいいのかな」

マールレの名前は出してはいけないことになっている。

「こ、こんなに強いのに奴隷つてのは、何か弱味でも握られて——」

「ないない。ちよつとした仕事であいつら襲つて、負けて、一晚こつてり拷問されただけ」

「ち、『血塗れ』に負けたんですかい!？」

「……人間の中では負ける気がしないんだけどねー。私らなんか人外の世界ではゴミ同然なんだよ」

仲間から回復魔法をかけられて意識を取り戻したイグヴァルジは、呆れ顔で話を聞いていた。自分たちだけが握っていた情報の一部が共有されたことを残念に思いつつも、まさか当事者からそれをばら撒かれては呆れるしかなかった。

そこには怒りも、意識を失う前の焦りも無い。周囲を見れば、この場の殆どのチームがクレマンティーヌ一人にやられたことがわかる。つまり、イグヴァルジの名声に傷はついていないのだ。それは、少なくとも英雄を夢見て冒険者になったこの男にとって、回復魔法で治った鼻の骨よりも重要なことだ。

ただし、情報を持っているイグヴァルジには、クレマンティーヌの話は価値を持たない。だからこそ、それに集中することなくその場への侵入者に気付くことができたのだろう。

「思い出したくもないけど、あの『血塗れ』の二つ名は本物だよー。ガキにえげつない拷

問やさせた後に、ちゃんとできたって聖女みたいな顔で笑って喜んだ。あれはもう、人間やめてるっ——ん？」

——馬鹿女、後ろを見る！ 後ろだ！

イグヴァルジは、侵入者の存在をクレマンティーヌにジェスチャーで伝えていた。

クレマンティーヌに同情があるわけでも、屈服したわけでもない。もうとぼつちりは懲り懲りだという思いの傍らに、『漆黒の剣』から聞いた話もあわせて人外の世界とやらに比べれば目の前の女の方がマシだという思いくらいはあつたかもしれない。

クレマンティーヌが小首をかしげてから振り向くと、そこには笑顔のエンリが立っていた。

一転してしおらしく謝り続けるクレマンティーヌを引きつった笑顔で受け流すエンリ。マールを連れていないせいか、土下座までいかなかったのは幸いだった。問題も起こしていないというし、周囲の冒険者たちもクレマンティーヌはこの態度通り慎ましい性格だと思ってくれるだろう。

もちろん、クレマンティーヌが目を逸らしし、何か隠している態度なのはわかつている。周囲の冒険者たちが片付けのようなことをしているのもそれと関係あるのだろう。ここはしっかりと釘を刺しておかなければいけない。

「上のランクの冒険者はこうやって掃除まで自分たちでやる立派な人たちなんだから、クレマンティーヌさ——もさぼってないで手伝ってね」

すぐにさぼっていたクレマンティーヌも片付け作業に加わり、「立派な人たち」の動きも目に見えて良くなる。後輩の前でいいところを見せようとしているのかもしれない。やはり、クレマンティーヌはこの店の不文律みたいなものを隠していたのだろう。

そして、冒険者たちはそんなクレマンティーヌを文句一つ言わずに受け入れ、一緒に作業を続けている。やはりミスリル級や白金級冒険者ともなると人間の出来も違うのだとエンリは感心した。

エンリがここへ来たのも、そういう立派な冒険者の一人に感謝の言葉を言うためだった。

「この中に、イグヴァルジさんという方はいらっしやいますか」

「イグヴァルジは俺……ですが」

仲間たちから優しく肩を叩かれ、一人の男が出てくる。一流の冒険者だけあって目つきは鋭いが、腰が低く丁寧な物腰の立派な男だ。銀級の『漆黒の剣』とは違って、下のランクの冒険者にも紳士的に接することができるあたりに、この街最高のランクであるミスリル級冒険者の風格のようなものが感じられる。

「はじめまして、『漆黒』のエンリです。今回は目立たないようわざわざ配慮していただ

き、ありがとうございました」

「そ、それをどこから……」

エンリは柔らかに微笑み、感謝を伝える。

現れた時は腰が低かった男だが、いつの間にもやらぴんと伸びたその背筋は、見ているだけで気が引き締まる。顔色からすると体調は良くないようだが、それでも威厳のある姿勢を保っているのはやはり一流の冒険者の矜持なのだろう。

「はい、組合長さんから教えてもらいました。おかげさまで、今回はここまでになりました」

両手で持っていたものを片手にまとめ、真新しい白金のプレートを指差した。まとめた重みで、持ってきたもののことを思い出す。

「ところでクレマンティーヌ——、よ、用事は済んだの？」

「はい。いただいたお金で鎧買ってきました。今はちよつとこいつらと遊んでただけですよ」

「うまくやってるようで良かった。これ二本、忘れ物。どっちも攻撃魔法を込めてあるけど、質が悪いから第七位階以上は入らないって」

エンリはマーレが魔法を込めたステイレットを渡し、酒場を去る。まだクレマンティーヌとの接し方には慣れることができず、第三者の前ではなおさら居心地が悪かつ

た。

「……ちつさい男だねー」

多くの冒険者を殺してきたクレマンティーヌは、ランクと実績の相関はわかっているつもりだ。あれほどの盗賊団を討伐しておきながら白金級などに留まった理由をなんとなく理解し、顔面蒼白のイグヴァルジを新しい玩具を見るような目で眺める。片付けに加わっていたのは、エンリの姿が見えなくなるまでのことだ。

「怒ってない……んでしようか？」

「さあねー。えげつない拷問やらせて喜んでた時も、ちようどあんな顔で笑ってたからね」

「た、助けてく——助けていただけじゃないでしょうか」

「んふふ、どーしよっかなー」

実際は自分のことで精一杯だが、暇潰しの相手にはちようど良いのではぐらかしておく。

その夜、クレマンティーヌは巫女姫を宿に残し、ンファイレアから聞いていた街一番の肉料理を堪能した。肉汁の滴る感覚から蘇る嫌な記憶は、高い酒を沢山飲んで流し込

んだ。

支払いを任されたイグヴァルジは涙を滴らせながらもその酒に付き合わされていたが、クレマンティーヌの半分も飲まずに潰れて路上に置き去りにされ、仲間の盗賊に回収された。

財布は軽くなつたが、厄介な女の相手を一人で引き受けたイグヴァルジの評価は同格の冒険者を中心に高まることとなつた。他のチームにも率先して情報を提供し、誰もやりたがらない事後調査は率先してこなし、厄介者が現れれば自分からその相手を買つて出るこの男には、皆が頭が下がる思いだつた。派手な『血まみれの魔女』の話題が出ている今こそ、冒険者たちの中では力だけではない本物の存在が評価される。

そういう大切なものを得たかもしれないイグヴァルジは、記憶ごと意識が飛ぶ前に少しでも厄介者の情報を回収しようとする仲間から何度も頬を叩かれたため、顔を真っ赤にした無残な姿で眠っていた。それは、組合での事情を知らない仲間たちにとつても、身銭を切り身を挺して情報を持ち帰ってきた素晴らしいリーダーの姿だつた。

エンリは考えた。

前回の依頼は、思ったより危険なものだった。

あとでクレマンティーヌにそれとなく聞いたところ、一番強い男の難度は80を超えていたかもしれないという。

アインザックが配慮してくれているといっても、マーレがいる以上、戦いが中心になる仕事は危険なものにならざるを得ないのかもしれない。

査定が済んだとの連絡を受けたこの日は、受付で戦利品買い取り分の金貨を受け取るだけの予定だったが、ついでに組合長に会わせてもらうことにした。受付嬢が「さ、査定にご不満でしょうか？」などと決して小さくない震え声でいちいち余計なことを言うのが気になったが、受付から出てきてみればやはり最初にエンリを晒し者にした女だった。思わず大きなため息が出ると、先導するはずの女は走るように階段へ向かう。最近他人の怯えた顔は記憶に残したくないのでお尻の大ききで覚えていたが、受付嬢に関してはそれでは意味が無いようだ。

「あくまで希望なんです、できれば戦い以外の仕事もしてみたいんです」

「ほう、戦い以外とは……」

アインザックは難しい顔で腕組みをする。駆け出しのエンリに対しいつでも相談に

乗ると言ってくれた最高の理解者だが、実際にこうして無理を言うのは心苦しい。

「世間体は諦めています、あまりに評判とか……その……。とにかく、戦いとか討伐とかじゃなく冒険って感じのがいいんです」

「しかし仲間に盗賊もおらず野伏も……闇妖精は森なら……そうだ！ 適任者がいなくて王都へ回そうと思っていたのが確か……」

離れた棚で書類を見つけたアインザックは、神妙な顔で戻ってくる。

「トブの大森林で、希少な薬草を探す仕事だ。ただこれはかなり難し——」

「やります！ 森ならいけると思っています。私も薬草を探ったことがあるので」

エンリはアインザックの言葉を遮ってまで、目の前にぶらさがった魅力的な仕事に即座に飛びついた。

願ってもない仕事だ。マールレの感知能力で危険も避けられ、薬草ならエンリにとつても得意分野で、専門家のンフィーレアもいる。何より、人の血が流れない薬草採取という平和な仕事というのは、血なまぐさい日々へきえきに辟易へきえきしていたエンリにとつて非常に魅力的だった。

「そ、そうか。君がそう言うなら大丈夫だろう。……これは、以前に採取に成功したローファンローファンのチームが遺した地図だ。だいぶ昔のものだが、大森林の奥の方はそう変わるものでもあるまい。そして薬草の特徴は——」

情報は薬草採取の心得のある者にとって十分なものだった。希少薬草で地図まであるということは、その地点にあつて他の場所がない所を探せばいい。地図が示された警告もトブの大森林を知る者として納得のいくものだったが――。

「どうしても、まつすぐ突つ切るわけ？」

「はい。転移が使えるのに回り道は面倒だし、長く生きていて森の賢王というくらいなら、魔獣でもいろいろなことを知っているかもしれないので」

皆を集めて説明を試してみれば、地図上の警告は無視されることになった。森の奥を指すのなら森の賢王の縄張りを避けるのはこのあたりの住人にとって常識だが、そんなことはマールレには関係なかった。

「それじゃカルネ村から出発でいいけど、近隣の村のためにも森の賢王は生かしておいてほしいんだけど……」

「殺す必要がなければそうなります」

微妙な返事だ。やはり、マールレには人間の側の事情など知ったことではないのだろう。

マールレが転移魔法を使いたいということことでカルネ村からの出発となり、森の賢王との

衝突は避けられなくなってしまった。しかし、実際に戦いになってそれを殺してしまうようなことがあれば大変なことになる。エンリの故郷であるカルネ村の周辺で魔物があまり出ないのはあれの縄張りが近いおかげであって、殺してしまえば森の魔物への備えがない無防備なカルネ村は数年以内に地図からなくなってしまうかもしれない。

「……この回り道のルートを見る限り、森の賢王の縄張りはかなり広い。君の探してる人たちに対して、何かの目印にはならないかな」

「なるほど。しもべにして言うことを聞いてもらった方がよさそうですね」

「そうそう、それがいいよ！ その方が話も聞きやすいし！」

ンフィーレアの助け舟のおかげで、村は救われたかもしれない。エンリが後押しする声は自然と大きくなる。

そんなやり取りを呆れ顔で眺めるのはクレマンティヌだ。

「はあ……その森の賢王って、何百年も生きてる伝説の魔獣でしたよね……それを生かしておくとか、しもべとか」

「……何か知ってるの？」

「昔のローファンのチームでも避けて通ったわけだし、一人で戦えって言われたら無理だって言いますけど、どれくらいかまでは……」

そのローファンについて聞いてみると、今は老いて引退しているが冒険者をしていた

頃なら今のクレマンティーヌより強かったかもしれないという。しかし、それがチーム分ければマールに勝てるかと聞いてみれば、三チームでも五チームでも無理そうだというので、全く根拠にもならないがどうにかなるような気がしてきた。

その後、出発までマールは相変わらず布団に潜って魔法で近郊を調べ、エンリは食料などの旅支度ついでにネムや村人たちへの土産を買い込み、ンファイレアは希少薬草について手持ちの資料を調べ、ミコヒメはバレアレ家に預けられた。クレマンティーヌはミスリル級冒険者の一人と食事を楽しんでくるという。

クレマンティーヌに宿で過ごしてもらうのは少し不安だったが、先輩の冒険者たちとそこまで仲良くしてくれているのはエンリにとって嬉しい誤算だった。やはり、同じ人間の強者同士であれば何か通じ合える部分があるのだろう。これで、少しは評判なども良い方向へ変わっていくかもしれない。

二四 大森林の支配者たち

マーレの魔法でカルネ村に転移した一行は、空き家のエモット家に一泊して、早朝に出発した。

久々に会ったネムは少しだけ聞き分けの良い子になっていたが、エンリたちと一緒に泊まるという点だけは頑として譲らなかった。マーレだけでなく、妹の教育上あまり接点を持たせたくなかったクレマンティーヌに「カツコいい!」と懐いてしまったことは妹の将来に一抹の不安を感じさせたが、子供らしい部分を見せてくれたことにエンリは少し安堵した。

朝になって、なかなか離れないネムには村人たちに土産を配るといふ仕事を任せ、その間に出発することにした。感情的な問題から村長個人の分だけは用意しなかったが、村長夫人の分とネムを含め家族で食べてもらう分は用意したので問題はないだろう。

一行はトブの大森林の南、森の賢王の縄張りに踏み込んでいた。

「幹の割れた枯れ木の少し右あたりから、大きなものがこちらへ向かってきます」

マールレの言葉に、前を歩くクレマンティーヌは神経を研ぎ澄ませる。続いて与えられる強化魔法により、全身に力がみなぎってくる。

前衛を務めているのは、マールレの非常識なまでの知覚能力を信頼しているのもあるが、結局そこが最も最適な場所だからだ。まだまだ心の傷は深く、マールレの姿を長く視野に入れたままではいつもの自分ではいられなくなってしまうかもしれない。

微かな、空気が軋むような音。木の葉が弾け、クレマンティーヌが大きく横へ跳ぶ。それを追うように傍らの樹木へ穴が穿たれると、それを貫通した太い鞭のようなものは急に硬度を失ったかのように垂れ下がるとズルズルと戻っていく。

「それがしの初撃を避けるとは、やるでござるな」

「ふん、伝説の魔獣という割にはお粗末な攻撃だったね。糞兄貴あのティマーじゃないけど、私も魔獣を従えてみるつても悪くないかな」

木々の向こうから響く声に、クレマンティーヌが応える。目の前の魔獣は、魔獣使いビーストティマーである大嫌いな兄が従えていた魔獣たちが束になっても対抗できない、遥かに格上の存在だ。それを戦って従えるというのは困難極まる仕事だが、悪い気はしない。

それでも、強がっているわけではない。尻尾による攻撃はクレマンティーヌの攻撃速度をも上回っていたが、それが加速しながら向かってきていたことを見逃してはいない。攻撃の性質さえわかれば対処は可能であり、魔獣が木々の枝葉を避ける軌道を選ぶ

ような思慮深さを持たない時点で今のクレマンティーンにとつては脅威とはならない。「口だけは回るようでごさるな。縄張りへの侵入者にそれがしの偉容を晒すのはどれくらいぶりであろうか……」

「……素直に言うことを聞けば、痛い目にあわずに済むかもしれないよー?」

茂みをかき分け現れた姿は強大な、まさに伝説の魔獣にふさわしい偉容。小山のような巨大な体軀も、それを覆う白銀の体毛も、力を感じさせる大きな瞳も、全てがこの森の支配者としての風格を漂わせていた。

しかし、クレマンティーンの言葉は本心から出たものだ。魔獣の攻撃は威力も速度もクレマンティーンを上回るが、技量や駆け引きでその差は容易に埋まるだろう。すなわち、マールが出てくれば行われるのは戦いではなく屠殺となる。そして、殺さずに情報を得ようとするからには、その一歩手前の繰り返し——数日前のクレマンティーンと同じ運命を辿るのは確実だ。伝説の魔獣といっても、もはや親近感さえ覚える、こちら側の存在でしかない。

「命の奪い合いはこれからだというのに、随分と大口を叩くものでござる。……行くで
いばるよー」

「話を聞きたいので、殺さない程度に傷めつけてください」

そんな声に従って戦うクレマンティーヌだが、戦況は芳しくない。

クレマンティーヌと森の賢王の戦いは周囲からはクレマンティーヌが優位であるように見えただろう。確かに傷は負っていない。魔獣の攻撃は殆どを回避し、受けざるを得ないものも《不落要塞》で弾いている。魔獣の使う《チャームスレシズ全種族魅了》や《ブライントネス盲目化》といった魔法には驚かされたが、それらも英雄級の戦士であるクレマンティーヌの抵抗を打ち破るほどの力は無かった。

ただ、クレマンティーヌの攻撃は魔獣にそれなりの痛みは与えているものの、見た目の雰囲気よりずっと硬い体毛に阻まれてステイレットを深く突き入れることが難しく、たまに突き入れることができても中を挟むことができず巨体の魔獣にとってそれほど痛手とはならない。身体能力に優れ、急所を守るだけの知恵を持つ魔獣に対して、巨体に致命傷を与えるには短すぎるステイレットで戦うクレマンティーヌは決め手を欠いていた。

結局、一方的に攻撃を命中させていても魔獣の体力を多く削るには至らず、逆に疲労が目立ってくると回復魔法が与えられた。

——人間同士ではそれなりでも、人類の敵である異形種や亜人相手では兄クワイエツセに遠く及ばない。

クレマンティーヌは漆黒聖典に所属していた頃の不快な評価を思い出し、苛立ちを強

める。

もちろん、自分の弱点への対策がなかったわけではない。基本的には人間との戦いに特化していたクレマンティーヌだが、こういう時のために《魔法蓄積》マジックアキュムレートで魔法を込められるステイレットを用意している。そして、さほど長くはないステイレットとはいえ、どんな魔獣が相手でもその表皮を突き破るのに十分な長さはある。身体の中までステイレットを突き込んだ状態で元々込めてあった第三位階の魔法を発動できれば、必殺の一手とはならないまでも隙を作って魔獣の眼球を抉るには充分だ。すなわち、クレマンティーヌにとって、本来、森の賢王は単体で勝てる相手なのだ。

しかし、今込められている魔法はマーレによる非常に強力なものであり、一撃で魔獣を殺してしまう可能性がある。殺さずに傷めつけるよう命じられたクレマンティーヌは魔法を解放することができず、魔獣を傷めつける以上に疲労を蓄積していく戦況を打開することができない。

つまり、ここでは完全に手詰まりだった。

「チクチク痛いでござる。埒が明かないので、回復役を潰させてもらおうでござるよ」
状況を不利と見ているのは一方的に手傷を負っている森の賢王の側も同じだった。

魔獣の尻尾が加速し、巫女姫に迫る。その瞬間、クレマンティーヌの視界の端で欠伸

をしていたマーレの姿が消え、巫女姫の前で尻尾の先を掴んでいた。

「なんと！魔法詠唱者マジック・キャスターがそれがしの攻撃を完全に防ぐとは、いったい何者でござろうか！」

「あの、少し話を聞きたいんですが」

「そなたらが勝つたら何でも……なななっ……何でござ——」

尻尾を手繰り寄せるマーレに、なすすべもなく引き摺られる森の賢王。最後にふわりと浮き上がり、背中から地面にびたんと叩きつけられる。

「ぐぎゃ!!」

「話を聞いてもらえま——」

「そのような小さな身体でその力!! いったいどういうからくりで——いただだっ!!」

仰向けになった森の賢王が自分の言葉に応えないと見ると、マーレは尻尾を手繰り寄せたまま魔獣の下腹を踏み潰す。その細い足で魔獣を大地に縫い留めたまま、尻尾を両手で掴み——。

「ぎゃあああああああつ!! もげるもげる! いい痛いでござるううっ!」

「……聞きたいことと、頼みたいことがあります。話を聞く準備はできましたか?」

強い力で引かれた尻尾の付け根から一瞬白いものが見えると、すぐに赤みがさして血がどくどくと流れ出る。

「ななな何でも言うことを聞くでござる！ 殺さないで欲しいでござる！」
「マール、それくらいにしてあげて！」

心配して駆け寄るエンリの声にマールが手を離すと、森の賢王は血が流れ続ける尻尾の付け根を短い手で押さえようとしても手が届かず、丸くなって転げ回った。

「……所詮獣ね」

圧倒的な体力の差で全く傷を受けないまま押し切られそうになっていたクレマンティーン又は、激戦を繰り広げた相手の変わり身の早さに呆れたような声をかけた。

転げ回る巨大な毛玉は、回復魔法を与えられるとすぐに従順なしもべとなった。

かつての侵入者から森の賢王という名を与えられたこの魔獣は、二百年間この森で引き籠っていただけの存在だった。アインズ・ウール・ゴウンに関する情報や痕跡どころか、現地の強者や伝説なども知らず、探している薬草についても縄張りの外のことなのでよくわからないという。

「お役に立てず申し訳ないでござる。しかし、命を助けてくれたこの恩には、絶対の忠誠で報いるでござる！」

「いい心がけだねー、賢王ちゃん。……もし従わなかったら、死んだ方がいいくらい大変

な目にあつたんだよ」

クレマンティーヌは自分が苦戦したことは気にしてはいないが、森の賢王の獣らしい単純さが少しだけ妬ましかった。

「冷静に考えれば、敗れて殺されないだけマシでござるよ。すぐに降伏しなかつたそれがしが愚かでござつた」

「まあ……死ななきやいってものでもないんだけどねー」

「いずれにせよ、マーレ様の力を知つてなお逆らい続けるとか、よほど頭が悪いのでなければありえないでござろう。それこそオーガやトロールでもわかることとでござるよ」

「お、オーガやトロール？」

クレマンティーヌの顔がひきつる。

「話ができる程度の知能があれば当然として、そうでない獣などの中でもそこまで知能の低い生き物が居るとは思えないでござる」

「知能の低い、生き物……」

「まあ、虫とかナメクジとかならそういうこともあるでござろうが」

「……賢王さん、やめてあげて」

肩を震わせるクレマンティーヌを心配しエンリが口を挟むが、少し遅かった。

「んふふ、ふふふつ……糞がああああつ!!」

「痛つ、痛たたつ、ヒゲを引つ張らないでほしいでござる！」

「遊んでないで先を急ぎますよ」

「はヒツ！」「了解でござる！」

マールは薬草には関心が無かったが、森の賢王が縄張りの外と繋がりが無いのなら、他にも同様の広い縄張りを持つものを従えて目印にしていくしかないと考えていた。一行は森の賢王を従え、その縄張りから北へ向かった。

その道程において、一行の最後尾では知られざるもう一つの戦いが繰り広げられていた。

「……やっぱり私、欲しい」

「今は駄目だよ、エンリ」

「だってチャンスだよ。欲には勝てないよ」

「見られたら駄目だって、わかっているはずだよね」

欲望に突き動かされる少女を、少年が諫める。しかし、その少年も少女と同種の欲望と戦いながら、どうにかそれを抑えつけているに過ぎない。

「でも、みんな先を歩いているから、見えない所でこっそり抜けば大丈夫じゃない？　ンファイなら凄く早いだろうし」

「確かに早い方だとは思うけど……でも、さすがに臭いでわかっちゃうよ」

少年はそこまで早いつもりはないが、少女からはそう見えるのだろう。

「そういえば、臭いを消す薬とかないの？」

「臭いっていうのも大切なものなんだよ。くさいから消せばいいってもものじゃない」

少年は仕事柄、鼻がよく利いた。

「ンファイって……くさいのが好きなんだ」

「違うよ。……残念なものを見るような目で見ないでよ。臭いの中にも、色々な情報が含まれているんだ。それを消すっていうのは、目を閉じてしまうのと同じくらいもったいないことなんだよ」

「……知らない世界だ。私にはわからないや」

少女の意識は既に少年の言葉から離れている。くさかろうが見られてはまずかろうが、欲しいものは欲しいのだ――。

「そう言いながら掴もうとしないですよ。手に臭いがついたら水で洗ったくらいじゃ落ちなくなるからね」

「これ、そんなにくさいの?」

少女はそれへ伸ばした手を引つ込める。個体差が大きいのは経験上知っているから、少年がそう言うのなら本当にくさいのは間違い無いだろう。

「抜いた時に汁が手についたら、さすがに誰でもわかると思うよ」

「そんなの気をつければいいし、とりあえず、後のことはこれ抜いてから考えない?」
少女の視線はまだそれに釘付けだ。

「駄目」

「ンフィーのケチ」

「こう見えて、ぼくだって相当我慢してるんだよ」

溜息混じりの少年の、その言葉も確かな本音だ。実際のところ、ンフィーレアの方がエンリより早くからその扱いに長けている分、欲求も強いくらいかもしれない。

「そうだよね……でも手を出さずに通り過ぎるなんて、悔しくて夢に出そうだよ。このあたりのエンカイシなんて全部抜いたら金貨何十枚になるんだろう。あそこなんてアジーナが雑草みたいに群れてるし」

「森の賢王の縄張りですら長い間誰も踏み込めなかったからだろうね。でも、あの人の前で

低位の冒険者みたいに普通の薬草を集めるわけにはいかないよ」

「わかっているけど……地面からお金が生えてるみたいな状態なのに無視しなきゃいけないなんて……」

「森の賢王は君にも恩義を感じているし、この旅が終わったら……その時、エンリが普通の女の子に戻れたら、大きな台車を引いて二人で集めに来ようよ」

「……うん」

この旅が終わったら――。

少年にとっては、少女とそんな約束ができただけでも大きな前進だった。

「てめー、トロールちつともわかってねーじゃねーか！ 適当なこと言いやがってこの二頭身魔獣！」

「細かいことを気にするなでござるチクチク人間！」

それは、しもべとなって数時間後のこと。

森の賢王はクレマンティーンの扱いが自分と同等であることを早々に見抜き、ここまですり合いを繰り返していた。同じ主に仕えるものを害することはできないが、クレマンティーンは人間にしては頑丈で、さらに粗暴で攻撃的な性格な上に鋭利な武器を持つためあまり加減をしてもいられない。

今、一人と一匹が揉めている向こうでは、グと名乗ったトロールの王が凝りもせずマールに襲いかかっている。これは森の支配者の一人で、東の巨人と呼ばれる存在だ。

先程までクレマンティーンの一方的な攻撃を受けながらも圧倒的な回復力で戦闘状態を維持していたところまでは森の賢王と同じだが、回復力への自信から漫然と戦闘を続けた結果、グは長い戦闘を見飽きたマールに杖で片脚を折り飛ばされることとなった。その回復の後、マールの話を聞くことなく武器を持った腕をもぎ取られ——今は、殴りかかった腕を砕かれたところだ。

グのあまりの愚かさに、先に透明化状態での追跡を見抜かれてしもべとなった西の魔蛇ことナーガのリュラリユースも頭を抱えていた。胸から上は骨ばった老人の姿のリュラリユースはその姿に相応の知能を持ち、蛇の胴体を素手で千切られかけた段階で即座に降伏していた。東の巨人グのもとへ一行を案内したのもリュラリユースだ。

「話も通じないし使えそうもないので、潰しちゃいます」

《破
裂》
エクステラード

マーレの詠唱とともに、グの身体は爆散する。クレマンティーヌは自身と互角の戦いを繰り広げた巨人の回復力が気になり、あっさり肉片となった姿を食い入るように見る。すると――。

「うわっ、こんなになってもこいつ、少しずつ回復してますよ！ きもちわるー」

「はい、いま処分します。……これ、本当は実用的な魔法なんです」

スキルで自然回復能力を持つのが、《生命力持続回復》の魔法をかけていようが、ぷれいやーの心まで回復するわけではない。

かつて至高の方々のお茶会で話されたそんな説明の意味はよくわからないが、至高の御方が実用的と言えば実用的に決まっている。幸い、強化を加えてマーレの魔力で使えば、遥か格下の目の前の相手に対しては充分に実用的に使うことが可能だ。

《魔法三重化》トリプレット・マジック
《食い散らかす蠕虫群》イートアンタイディリ・ワームス

「ひいっ——おげええええっ！ うええええええっ！」

クレマンティーヌは、かつて自分の中に潜り込み混ぜ込まれたおぞましい蟲たちを見て大粒の涙を流し、大量の嘔吐物を撒き散らした。

魔法で生み出された大量の白いミミズ状の生き物は次々と回復途上のグの肉片に潜り込み、這い回りながら回復を超える速度で無抵抗の肉片を喰らっていく。グの存在を完全に喰らいつくすと、倍以上の太さに膨れて白から桃色に変わった蟲たちは少しずつ地面に潜り込むようにして去っていった。

「だ、大丈夫でござるか？」

「やめ……やだよ……混ぜちゃやだ……やだ……」

自身の嘔吐物に構うことなく、その場に座り込んで頭を抱え子供のように泣き続けるクレマンティーヌ。直前まで鋭い爪でそのステイレットを受け止めながら喧嘩をしていた森の賢王も、その豹変ぶりにおろおろするばかりだ。

「確か、グの剣には毒があったはずじゃな」

訳知り顔のリュラリユースの言葉に、クレマンティーヌを見守るンフィーレアは首を振る。クレマンティーヌはグから一度も傷を受けていないし、この症状も毒ではない。ンフィーレアが鎮静薬を与え回復させたのは、クレマンティーヌの正気を食い散らしたものが全て地面の下へ去った後のことだった。

東の巨人の部下は半数ほど斃されたところで降伏し、大森林の東半分とともに西の魔蛇リユラリユースに任されることとなった。マーレとしては単純に相手をするのが面

倒だつたに過ぎないが、急に部下と支配地を与えられたリユラリユースは「踏み潰す前の蟻でも見るような」視線だとしてマーレの瞳の奥に広がる闇に強い畏れを抱きつつ、よりいつそうの忠誠を誓った。

リユラリユースとグの部下により、東西それぞれの縄張りの先には広い縄張りを持つ支配者が居ないことが判明すると、マーレは森の賢王とリユラリユースにしもべとしての役割を説明していく。

その役割とは、森への侵入者を監視し、アインズ・ウール・ゴウンに連なる者を探すことだ。そこにはマーレと同等の存在が幾人もいるという話に、魔獣たちは震え上がった。リユラリユースの質問に答える形でそれら仲間たちについても説明がなされた。魔獣たちは、絶対に敵対してはならない者たちの名を心に刻み込んだ。

近くで話を聞いていたエンリは、クレマンティーンの事前、必死に驚きを抑えていた。マーレと同格の存在が他に七人もいるというのは、世界の危機どころの騒ぎではない。それが全てあのモモンガに仕えているというのだから、モモンガがその気になればすぐに世界中の少女たちが使い捨ての玩具として地下の墳墓に集められてしまふだろう。

しかし、既にそうなっていないということは——マーレによる簡単な説明では種族のようなものまでしかわからなかったが、やはりそれらの者たちもマーレと同じようにモ

モンガの寵愛を受ける、外の存在の全てが霞むほどに美しい少女たちであるに違いない。

ダークエルフ
闇妖精でマールレの姉のアウラ、吸血鬼の少女シャルティア、二人の悪魔の少女デミウルゴスとアルベドまではどうか想像がつく。竜人の少女セバスというのは鱗や尻尾でもあるのだろうか。その大木くらい巨大なゴーレムの少女ガルガンチュアというのはどうやって寵愛を受けるのだろうか。蟲の少女コキユートスともなるともはや想像もつかないが、常に裸で過ごしているというからにはモモンガの性欲の対象なのだろうし、その濃厚な寵愛を受けているのは間違いない。

エンリの想像の中の異形の少女たちは、どうしても主であるモモンガの恐ろしさに引つ張られ、美しくも恐ろしげな姿と考えざるをえない。それらの全てがモモンガやマールレと同様の性的嗜好を持つのだとすれば、やはり早々に可愛いマールレのものとなったエンリはまだ幸せな方なのかもしれない。

エンリが悶々と想像の迷宮に迷い込む間、マールレはエンリの持っていた粗末な短剣を思い出し、グの持っていた巨大なグレートソードを拾い上げる。魔法武器であるそれは、マールレが拾い上げるとその体格に最適な大きさのグレートソードに変わった。

「エンリ、そんな短剣よりこれを持った方がいいですよ」

「えっ？ ……う、うん。それくらいならいいかな」

——こんな剣、どこから出てきたんだろう。

異形の少女たちを幻視するのに忙しかったエンリは、短剣よりは長いが細身で扱いやすそうなマールレにとっては少し大きすぎるくらい、の剣を疑いもなく受け取る。

「な、何？」

急にずしりと重くなったそれは、受け取ったはずのものともまるで違う巨大な剣。本来のグレートソードより若干小さい程度の、グレートソードという分類の剣においてエンリの体格に最適なサイズに変化していた。

「魔法の武器は体格に合わせて大きさが変わるんだ」

「ちよ……私には重いし大きすぎるよ」

「諦めて。弱い所を見せちゃ駄目だよ」

「そんなあ……」

ンフィーレアが耳打ちし、ひそひそと話す二人。

エンリはげんなりした顔で周囲を見回し、放心したような顔で木にもたれかかっているクレマンティーヌに声をかける。

「クレマンティーヌさ——、あなたこれ使わない？」

「あ……私はそういう重いのは無理です。力のある人が使ってください」

上下関係を守りながらも、はつきりとした拒絶の意思が伝わった。マーレのしもべになつているとはいえ、クレマンティーヌは伝説の魔獣と互角に戦えるほどの戦士だ。武器に拘りがあるのも当たり前で、失礼な申し出だったかもしれない。

既に日は暮れ、一行は木々が少し開けた場所を選んで野営の準備を終えた。残念ながら地図に示された野営に適すという場所までは辿りつけなかったが、明日にはどうにかなりそうだ。

エンリは皆のいるあたりから少し離れた場所で、地面に突き立てても肩の高さまであるグレートソードを眺めて深い溜息をついた。両手であれば振るうことができないうけではないが、身長に迫るほどの大きな剣を持つというのは気持ちの上での抵抗が残る。

——って私、どうしてこんなの振るえるわけ？

そんなわけがないと思ひ直し再び振るってみると、しつかりと風を切る音。決して鋭い斬撃とは思えないが、ふらつくことなくグレートソードを振るうことのできる自分が信じられない。信じたくもない。村で使われていた一番大きい踏み鋤より重そうなのに。

エンリは頭を振って、嫌な考えを追い出す。自分は戦士などではないし、本来は冒険

者でさえ無い。最近筋肉がついてきたような気がするが、それでも重い農具を使える農民もいるし、今のエンリも普通の村娘の範囲に含まれるはずだ。

確かにこの剣を振り回すことはできた。しかし、剣とは切るためのものだ。短剣を受け取る時の戦士からもそう聞いている。身近な戦士——クレマンティーヌの場合は刺して使う武器だが、その戦いぶりを見れば、武器を本来の目的で自在に操れるのが戦士の技術なのだろう。あのステイレットという武器は重くはないが、それをただ振り回せるだけで戦士とは呼べない。

すなわち、エンリはまだ戦士の領域には達していないのだ。この巨大な剣を振り回し叩きつけることしかできないうちはエンリはただの村娘であり、自在に操り斬りつけるようになってはじめて戦士と呼ばれる存在になる。そこまで考えて、ようやくエンリは安堵した。

刀身にある溝から絶え間なく刃の方へちろちろと流れ続ける不気味な液体は毒だろうか。後でンフィーレアにでも聞いてみることにする。

「気に入ったようで良かったです」

戻ってみると、そんなマーレの言葉。背中に目でもついているのだろうか。

テントの外では、丸くなった森の賢王にクレマンティーヌが寄りかかり、昼間ずっと

いがみ合っていたように見えた一人と一匹が一緒に眠っていた。もう一匹の魔獣であるナーガのリュラリユースは、東の巨人の地域をまとめるために既にこの場を去っている。カルネ村のことを考えれば、明日になったら森の賢王にも縄張りに戻ってもらった方がいいだろう。

一行は森の賢王と別れ、地図に示された目的地に来ていた。

そこには、希少薬草はおろか生命の一つさえ無かった。森の支配者たちを従えた後はやる気が全く見られないマーレだが、その感知にさえ引つかからない以上は本当に何もないと考えるべきだろう。

木々が枯れて荒れ果てた土地は、当然のことながら、森の中としては見通しがいくらか良くなっていた。

「この地図で野営に最適だっという場所、実はここのことなんじゃないかな」
ンファイレアが指摘したのは、取り違えの可能性だ。

「つまり、逆に野営場所として示されてる場所が本当の薬草のありかってこと？」

確証は無いが、他に手がかりなどは無い以上、その可能性に賭けるしかなかった。

しかし、地図に示された野営場所に辿り着くと、その考えが間違いであつたことがすぐにわかつた。

「どう見ても、こつちが最適だね」

「……そうだね」

そこは広場だつた。綺麗に開けすぎているほどで、「野営に最適」という点においては枯れ木で半端に視線が通る程度の先ほどの場所とは比べ物にならない。少し休憩にして食事をとっていると、先に食べ終えたマーレが立ち上がり来た道の方へ歩いていく。

「そこでドライアードがこちらの様子を窺っています。ちよつと出てきてもらいますね」

「……ちよ、待つ、何!? 魔樹から充分離れてるのに何で力吸われてるの!？」

マーレが何かしたのだろう。唐突に姿を現したのは、肌が薄く緑がかつた木の幹のよ
うな色をした人型の種族だ。頭髮の代わりに大小の葉を散らした姿は亜人ですらなく
異形の領域だが、小柄で快活な人間の女のような柔らかい雰囲気を持つ。その容貌や表

情にも緊張感を感じさせる部分が乏しく、その姿はエンリやインフィアさえ恐れさせるものではなかった。

「あ、あのつ、すみません。ちよつと話がしたかったです」

「うわつ、話がしたいだけで何てことするのさ!」

「……ちよつと面倒だったので」

「面倒!? そんな理由で私の枝は数本いつぺんに枯れそうになったの!?」

木肌色の人は不機嫌だ。おそらくマーレが悪い。

森の住人なら、探している薬草の手がかりを得られるかもしれない。そう思い、エンリが間に割って入る。これ以上怒らせる前に話を聞いた方がいいだろう。

「ごめんなさい! あなたに危害を加えるつもりじゃなくて、隠れているから敵だと思っただよ。……だよ。ほら、話聞くんだから元に戻してあげて。とりあえずあなたも、そういうことになったから」

マーレは面倒がりながらも木肌色の人から活力を奪った分を回復させる。

「そ、そういうことって何さ。……で、その子が闇妖精で、あとは皆、人間かな。こんな所へ何しに来たの?」

エンリがマーレの行為を詫びて名を名乗ると、木肌色の人はピニス・ポール・ペルリアと名乗る。少し怯え気味なのは気にしても仕方がないので、エンリはここへ来た理

由と、探している薬草の特徴、あるいは場所の何もないことを説明する。隣で武器を持ってニヤニヤしているクレマンティーヌのことも気にしない。

「その薬草って……。それってきつと難しいんじゃないかなあ」

「確かに、マールでも見つからないみたいだし、あの枯れ木しか無い場所であればどこを探せばいいのか……」

困り果てるエンリに、哀れむような目を向けるピニスン。

「場所はそれで合っているんだよ」

ピニスンは薬草の在り処を知っていた。ただし、それは木々が枯れている場所に封印されている、世界を滅ぼせる魔樹『ザイトルクワエ』の上に自生するというものだった。それを聞いたエンリは思わず隣にいたンファイレアと顔を見合わせる。

「薬草を採取するだけのお仕事だったはずだよね」

「森って危ないからね。僕だって冒険者に護衛を頼むこともあったよ」

「でもでも、木に生える薬草なんて……」

「苔とか蔓植物なんかで結構あるよ。他の植物から水分や栄養を取り込むんだ」

目の前の現実から少し逃げたい気持ちのエンリと、それをいまいちわかってくれないンファイレアがそこに居た。

「でも、魔樹みたいな珍しい植物にだけくっついてないと生きられないんじゃないや、増えるの

が難しいからすぐ滅びちゃうんじゃない？」

「そこにだけあるわけじゃないから大丈夫だよ。他の場所にもある植物が、その木に生えることもあるってだけで」

「だったら危なくない所のものを取って帰れば——」

「駄目だろうね。魔樹に寄生することで樹液などを取り込んで、もともとその植物が持っている成分と合わさって薬効成分ができるから、その植物のうちそう言ったものだけが希少薬草として珍重されるんだよ。ただ特定の種類の植物を探すってだけなら、いくら希少でも報酬額が高すぎる」

ンフィーレアは平然とエンリの希望を打ち砕く。薬師としての知識を披露するその姿は旅の疲れを感じさせない活き活きとしたものだ。マールだけでなくクレマンティーヌもその話に聞き入っている。

「へー、ンフィーちゃんって賢いんだ」

「わ、私だってンフィー程じゃないけど薬草のことはわかるよ」

割り込んできたクレマンティーヌに、よくわからない対抗心を持つエンリ。最近自分は本当にクレマンティーヌより頭が悪いのではないかと心配になることが多いが、薬草に関しては何かに自分の方が上なので安心して話ができる。

「……そうですかー。凄いですね」

クレマンティーヌは気のない返事だ。この前の依頼の時の、茸のことでも根に持っているのだろうか。確かに村の野伏も、茸の毒には一生忘れないような酷いものがあると言っていたが、たとえ過去にそういう失敗があったとしても他人を恨むのは筋違いだろう。

「それにしても、ローファンって人はその魔樹から採取したってことだよな？」

「アダマンタイト級チームだし、なんとか取ってうまく逃げたんでしょうね」

——アダマンタイト級?! 一番上の人たちなんて聞いてないよ!

出かかった言葉を飲み込む。世界の危機ならともかく、冒険者程度のことではクレマンティーヌの前でうろたえるわけにはいかない。

話を聞いてみると、ピニスの言う魔樹とはとても存在のようだ。ピニスが詳しいのは、それが復活すればピニスの本体である木は数日かそこらで魔樹に喰われてしまうという危機感によるものらしい。

曰く、空を切り裂いて世界に降り立った幾多の化け物の一つ。

曰く、竜の王と互角の、世界すら滅ぼせる力を誇っていた。

時折暴れるのはその一部だというが、前にそれを倒した七人組は、本体が目覚めたら倒しに来ると約束したという。人数構成などが話に聞いていたローファンのチームと

は違うようだが、エンリとしても、ぜひともその英雄たちの再度の活躍を祈りつつ、ここは諦めて帰りたいところだ。

しかし、退屈そうにしていたはずのマーレが、いつの間にやら強い興味を持って話に加わっていた。

「それは、どれくらい昔のことですか？」

その問いは時間の概念の違うピニスンには通用しなかった。マーレの欲する情報は試行錯誤の末、「あの木がここまでの大きさになる時間いくつ分くらいか」という形で得られたようだ。

「マーレ、ちよつと嫌な予感がするんだけど、あの木が四回育つくらいの時間って……」
「それは黙っていてください」

エンリの疑問はマーレに遮られる。エンリが見上げるその木はかなり大きく、一回そこまで育つだけで人間なら寿命を迎えてしまうような気がするが――。

「なんだい、何か知っているのかい？ 彼ら七人組の居場所とかわかれば、いや、呼んできてもらえれば最高なんだけど！」

「えつと、七人組というのは、十三英雄と呼ばれていたりはしませんか？」

興奮気味のピニスンに対し、マーレはいつも通り落ち着いたものだ。

「さあ……彼らはそんなふうにな乗ってはいなかったし、人間がどう呼んでいるかなん

「知らないよ」

「確かに十三英雄の英雄譚では常に全員が一緒に行動していたわけではないけど、もしその人たちが十三英雄だったとしても、もう……」

話題になった木を調べていたンファイレアが口を挟む。

「もして……誰だかよくわからないくらいじゃ、探してもらっても間に合わないね」

「ぼくもその人たちに興味があるんですが……魔樹の復活は、そんなに差し迫っているんですか？」

「うん。蘇るのは時間の問題だよ。次の太陽がのぼった時かその次か、もつと遅いのかもしれないけど……もう少して完全に蘇ってしまうんだ」

「えっと、その人たちが来なかったらどうするんですか？」

「強い竜ドラゴンでも来てくれることを祈るしかないね」

ピニスは下を向く。

「竜ドラゴンってこういう時、助けてくれるものなんですか？」

「竜王なら、そういうこともあるんじゃないですか。盟約とか何とか世界の守り手を気取ってるらしいし」

マーレの問いにクレマンティーヌが答える。

「それで……助かりたいですか？」

「あ、当たり前じゃないか！ でも……自分の本体の木からは長期間離れることもできないし……」

「ぼくのしもべになれば、助けてあげられます」

「ええつ、君が？ どうやって？」

マーレはピニスンに触れて本体の木を探ると、ピニスンと本体との繋がりを利用し、集団転移魔法でその本体ごと数メートル先へ転移する。僅かな距離を移動した二人の横に現れたのは、魔樹の近くから転移し根ごと引きぬかれたような状態の一本の木だった。

本体を剥き出しにされたピニスは、木肌のようなその肌の変化を見てもわかるほどみるみる顔色が悪くなるが、幾つかの魔法で本体はずぶずぶと地面に埋まり、土が潤い、その場に根付いた。ピニスの顔色もいつの間にか元の木肌の色に戻っている。

「ちよつとちよつと！ やり方が乱暴すぎるし、ここじゃ花実が落ちて種ができるまで生きられるかもわからないよ！ もつと遠くへ逃がしてくれなきや……」

「できますよ。危なくなったら、もつと遠くへ逃がしてあげます。でも、その前にやることがあります」

「やんぱんぱん……」

「助けを呼ぶために、しもべとして協力してもらいます。支配下に入った植物なら自由

に操ることができるので」

「自由に？ 助けを呼んでくれるならお願いしたいけど、しもべとか支配とか……なんか嫌だなあ」

ピニスは顔をしかめる。しもべや支配というのは、ドライアードには馴染まない感覚だ。森妖精でも闇妖精でも、時にはそのような状態になるにせよ、大抵は信頼関係によつてそうなるものだが――。

「助かりたくないなら、元に戻して帰りますよ」

「魔樹のエサにするくらいなら、野営の薪にでもしますか？」

退屈そうなクレマンティーヌも空気を読む。

「ちよ、待つて!! ……はあ。私も枯れるのは嫌だし、安全な所に移してくれるのならそれでもいいよ」

二五 世界を滅ぼすという魔樹の復活

森の広場には、巨大な亀か甲虫のような硬質な殻を持つ何か鎮座していた。その殻の内側には濡れた黒土のような風合いの人の脚ほどの太さの触手が無数に蠢き、その隙間からちらちらと歪んだ蹄のようなものが見え隠れしている。

草原を突き破ってそれが現れた時の膨大な土煙は、ゆるゆるとした心地よい初夏の風に広場の向こうまで運ばれ、ゆっくりと森の中へ吸い込まれていく。

呆気にとられその場に硬直していた者たちのうち、人ならぬ者の鋭敏な感覚も、魔法詠唱者としての常識的な感覚も、熟練の戦士として目の前の存在の力を察知する能力も持たないエンリがどうか硬直から脱して口を開く。

「……あ、あれは……何？」

「えっと、土の上位精霊なんですけど、気休めみたいなものです。何かあった時、クレマンティーヌでは無理そうなので」

その名を出された人間最高の戦士は、流れ出る嫌な汗に背中を濡らしながら、腰のスライレットからそつと手を離した。

「さて、最低限の守りは用意したので、ぼくの支配下に入ってもらいます」

「うう……仕方ないか……」

マールはピニスの木に手を触れ、スキルでピニスとの間に繋がりを構築する。相手の同意が必要な、一時的ではない深い支配の繋がりがりだ。そして――。

「な、なんか力が流れ込んで……あばばばばばば!!」

「……ちよつと急すぎました。ゆつくりやりましょう」

白目をむいて全身を硬直させ奇声を発するピニス。その様子を見て、マールは注ぎこむ力を抑える。

「ぜー、はー、ぜー、はー。見た目と違って、君ってかなり乱暴だよね。……つて、あの、ちよつと、私の根っこ凄い伸びてるんだけど！ そつちは危ないのに!! ひつ、ひゃああああああつ!!」

「あ、居ました」

「居ました、じゃないよーっ!! 今ちよつと吸われたよ!? せつかく遠ざかったのに、なんで魔樹の所まで伸ばしちゃうのさ!」

力を注ぎ込まれたせいかな慎ましい少女から大人びたメリハリのある形態に変化したピニスだが、落ち着きが無いところは変わらない。

「助けを呼ぶって言ったじゃないですか。その前にちよつとその『ザイトルクワエ』の方

を調べてみたんです」

興奮するピンスンに対し、マーレは涼しい顔だ。ただ、一度繋がりができた以上、ピンスンの方からそれを切り離すにはマーレの支配力を上回る抵抗を行うほかなく、何をさせられても文句を言うことしかできない。

——大昔に来た人たちに助けを呼ぶ方法なんてあるのかな。

「マーレ、助けを呼ぶっていうのは、実際にはどうやるつもりか教えてくれる？」
とてつもなく嫌な予感を感じたエンリは、再び会話に割って入る。

「はい。まず、時間がもつたないので『ザイトルクワエ』に出てきてもらいます」

その言葉に、その場のほぼ全員が凍りついた。

「ちよーちよちよつ、ちよつとおつ！ なぁんてことを言うのさ！ あれは世界を滅ぼす魔樹だよ！ ででてきてもらうって、君、正気なの!?!」

「助けにくるっていう人たちもその気があるなら、実際に復活したら来るんじゃないですか。それに、どうせもうすぐ復活するなら、それを待つ時間ももつたないので」

「待って何だよ！ 時間があつたら普通逃げるだろおお!! 馬鹿なのか君は!! だい

たい君はさつきか……ら……」

「あのさー、少し黙ろうか」

「……はい」

わめき立てるピニスをステイレットの刃のない腹でコツコツ叩くクレマンティエ。人間の強さなどわからないピニスだが、その鋭いオリハルコンコーティングを施された先端には千の啄木鳥キツツキさえ凌駕する重大な脅威を感じ押し黙る。

「マーレ、もしかしてその魔樹と戦うつもりなの？」

クレマンティエとソフィーレアに半ば促されるように、エンリが全員の危惧する部分を確かめる。

「ぼ、ぼくは戦いません。あれを倒しに来る人たちをここで待って、その人たちに戦ってもらいます」

マーレの目的は魔樹ではなく、それを倒しに来る者たちだった。二百年前の十三英雄と『国墮とし』の話に仲間の影を感じたマーレは、それと近い時期に魔樹と戦ったという七人組にも大きな関心を持っていた。

「そんな昔の人たちが、マーレの仲間と接点なんてあるの？」

「探すための色々な魔法が効かないんです。ぼくの居た世界とはまるで違う世界のように

だし、先に来ている人もいるかもしれませんが」

「……なるほど、そうなんだ」

エンリはマールレの言っていることが全く理解できないが、頭が悪いように見られるのも不味いので適当に返事をする。そんなエンリの態度を見透かしてか、ンフィーレアが言葉を繋ぐ。

「人間だったらもう生きてないと思うけど……種族によつては生きているかもしれないね。それで、魔樹を倒しに来た人たちとはその後で戦うのかい？」

「えっと、ピニスンを通して『ザイトルクワエ』の力を見ましたが、あれを倒せるほどの存在とぼくが戦ったら巻き添えで全員死にます。それも困るのでまずはそういう存在を知るだけ、戦い方を見ておくだけです」

全員の緊張が高まる。魔樹を倒しに来るのが人間に友好的で善なる存在とは限らない。村をマールレに助けられたエンリはそれを特によく知っている。

「……マールレが敵かもしれないと思っっているなら、向こうもマールレを警戒したりはしないかな」

エンリのこれまでの経験上、マールレが関わって穏やかに済むとも思えない。

「近づいてきたら隠れるつもりですが、ぼくの仲間と戦った人たちかもしれないので、もしかしたら見つかって戦いになるかもしれません。死にたくなければ『ザイトルクワ

身体の中を駆け巡る力の奔流に耐え切れずピニスンが意識を手放そうとした瞬間、重々しい轟音とともに大森林が震えた。木々の悲鳴がピニスンを揺さぶり、厳しい現実へと引き戻す。

「な、何!？」

「エ、エンリ……あれ……」

「マーレ様、あれが魔樹……ですか……」

北の空にそびえるのは、百メートルは超えるだろう、天を突かんばかりの大樹の幹だ。その周囲には、その数倍の長さを持つ枝の触手がゆらゆらとうねりながら立ち上がる。その先端は六つほどあるだろうか、それを空を丸ごとその手に戴くかのように大きく広げた姿は、まさに世界を滅ぼし全てを奪い尽くす者としての風格を備えていた。

「ぜー、はー、ぜー、はー、……あ、あ、あのさ、今やったのって、もももしかして……」

「はい。ちよつと刺激して、出てきてもらいました」

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと刺激いい!? ででてきてえ!? ……き、きき君、いつ、一体、自分が、何をしたか、わわわあかかてるのおお!？」

「割と大きかったですね。あれくらいだと、ここはちよつと近いかもしれません」

「なな、何を他人事みたいに言ってるのさっ!! おかしいだろおっ!! ……あああああ、

もお駄目だああ!! 本体が! 本体が蘇ったんだよ!! あ、あ、あんなのなんて……」

「うるさいです。大きな足音も立てない方がいいです。とりあえず地面から離れましよう」

マス・フライ
《全体飛行》

その場の全員が地面から浮き上がる。

「ちよつと足場作りますね」

「わわつ、私の枝がつ!」

ピンスンの本体の枝がざわめき、高い所に枝葉を集めて見晴らしの良い樹木の展望台のようなものを作り上げる。一行がそこへ降り立つて視線の高さが森の木々の高さに近づくと、魔樹の姿は今にも我が身に迫るかのように感じられる。

「に、逃げよ? 葉草とかもういいから……凄く近くに來てるし!」

「……あれが居るのはさっきの場所みたいだ。葉草は頭頂部のあれかな? エンリ、あれは近いんじゃないかと、とてつもなく大きいだけだよ」

「枝の触手で掴んでそのへんの木を食べてますねー。共食いつているのかな? 気付かれないうちなら逃げられるかも」

「あああ……終わりだ……君たちのせいで世界は終わりだよ……」

「力を吸うより、食べる方が好きみたいです」

「君たちだって他人事じゃないんだよ！ ほら、木だけじゃなく森の獣を捕まえて食べてるじゃないか」

「えっと、これくらい大きいモンスターって、ほかに居ますか？」

「いいわけないだろおっ!! 強い竜ドラゴンだつてたぶんあの本体の半分も無いよっ！」

「あー、竜王でも半分の半分も無いと思いますよ？」

興奮するピニスを冷めた目で眺めていたクレマンティーヌが補足する。見たわけではないが、法国に居た頃に得ていた曖昧な知識だ。

「でも、これじゃあまり遠くからだと見えないかもしれませんね。山の方へ誘導してみます」

「何を呑気な……って、誘導!? もう私の根っこは使わないでよ！」

「……嫌ですか？」

「当たり前だよっ!! 死ぬかと思つたんだからねっ！」

「では、ちよつと行つてきますね」

あからさまに面倒くさそうな顔をしながらも、マールはピニスの本体から広場に鎮座する土の上位精霊グレート・アースエレメンタルの上に飛び移る。そこで何やら魔法を詠唱すると、巨大な精霊ごとその姿が消える。魔法で転移したようだ。

「行っちゃったね」

「私らは、ちよつと逃げておきます?」

「足音を立てない方がいいって言うし、やめどころ。エンリもいるし、大丈夫だよ」

「え……あ、うん。身を守るくらいは……ね」

ンフィーレアの考えは、あくまでマーレの意図に従うものだ。この場に他に魔樹をどうにかできる者など居ないからこそその判断だが、弱気になって地が出かかっているエンリをフォローしておくのは忘れない。

答えに窮するエンリはンフィーレアの方を恨めしそうに見ながらも話を合わせておく。世界を滅ぼす魔樹を相手に弱気になったところで問題があるとも思えないが、情性みたいなものだ。ともかく、ピニスンと巫女姫も含め、五人は枝の上で待つことしかできない。

「ちよ、上に乗って何かむしり取ってるよ!! 命知らずにも程がある! ほら、触手が……危ないっ!!」

巨大な精霊とともに魔樹の北側に転移したマーレは、《飛行^{フライ}》の魔法で魔樹の上へ移動していた。迫る攻撃にも構わず、へパワー・オブ・ガイアを発動しながら、ついでの作業を続ける。精霊はそのまま距離を保って北へ移動する。

「ええっ!! 受け止めた? あんな小さい身体で、嘘でしょう!!? って、まだ筆^{むし}ってる!!」

「あ……薬草、とつてるんだ」

「薬草うう!! 死んだらそんなの使えないんだよっ!! 君たちはどーしてそんなに平然と見ていられるのさっ!!」

ピンスンとエンリのやりとりを聞いて、ンファイレアの目が輝く。

「本当? うーん、見えにくいけど、ああいう薬草は耖るんじやなくて根元を残して刃物で丁寧に切らないと、次に採取する時に生育が——」

「なあに冷静に薬草の心配してるのさ!」「ンファイ? 次つて何!」「次とかないでしょーが!」

「あ……そっか、うん、そうだよね」

全員の声突き刺さり、希少薬草に思いを馳せていたンファイレアは現実に戻ってくる。

気が付けば、既に魔樹の上にマールレの姿は無かった。魔樹の頭頂部に生えていた草のようなものも既に無く——。

その時、不気味な轟音とともに、魔樹の周囲の森が大きく揺れた。その音は魔樹が出現した時ほど大きくはないが、地獄の底から響くような深く禍々しいものだ。

「なんで向こうだけ揺れて——」

言いかけて、エンリはガゼフから聞いた、マールレが隣の国でしてきたことを思い出す。

そして目を凝らし、揺れの中央の魔樹の様子を見るが——そこには何の異変も無かった。まるで、揺れから取り残されたように静かにその場に立っている。ただし、異変が無いのは魔樹だけだ。

「森が……消えたね……」

「うわあ、世界を滅ぼすつてだけはあるねー」

魔樹の周囲の森が、大きく損なわれていた。そこにあるのは、多くの木々を飲み込んだ複雑な地割れの跡ばかり。トブの大森林に開けられた大穴は魔樹の周囲からエンリたちのいる広場まで繋がり、その全容を晒すようになった魔樹の向こう側には巨大な精霊の居場所も含めてかろうじて森と呼べる領域がぼつりぼつりと残され、地割れを逃れた森林の向こう側に繋がっていた。

エンリだけは、マーレが試み、そして失敗したであろうことに心当たりがあった。

「あああ……木々の悲鳴が……。木々を食べるだけでなく、大地を……あんなむごいことまでするなんて……」

ピニスは恐怖に顔を引きつらせながら、呆然と魔樹を眺める。ンファイレアとクレマンティーンも、地形すら変える強大な力に言葉を継げなかった。

静まり返った一行の前に突如マーレが姿現し、皆のいる足場にふわりと降り立つ。転

移の魔法だろうか。

「ええと、ついでに取ってきました、薬草です」

「こ、これはっ!! す、凄い、生きてる間にこれを見られるなんて!! ちよ、ちよつと預かっていい?」

ンファイレアはマールから薬草の束を受け取り、足場に座り込む。その息は荒く、血走ったような目にはもはや魔樹も見えていない。それを残念なものを見るような目で一瞥し、地獄のような光景から生還したマールにピニスンが驚きの声をあげる。

「よ、よくあの凄い地割れに巻き込まれなかったね!」

「いえ……あれ、やったのぼくですけど」

「ええつ、君があっ!?!」

「……凄い魔法だけど、それでも魔樹には効かなかったんだね。これからどうするの?」
エンリは、あれがマールの魔法と知っていたのは自分だけだと気付き、マールの理解者になれたような気がした。そんなエンリの抱いたささやかな優越感のような思いは、次の瞬間あっけなく崩壊する。

「えっ? 『ザイトルクワエ』の所は魔法の範囲から外しましたけど」

「は？」

「外し……た？」

「な、何?! どういうこと?」

——こいつはいったい何を言っているんだ？

その時、マーレを除く全員の思いが一つになった。……希少薬草を吐息がかかる距離で食い入る様に見つめるンフィーレアと、命令が無いので居眠りをする巫女姫も除く。

「さっき、山の方へ誘導するって言ったじゃないですか」

「はあ……。確かに、少しずつ遠ざかって行ってますね」

この場の人間では最も目の良いクレマンティーヌが状況を確認し、持っていたステイレットを鞘に戻す。

マーレは周囲の驚きを理解できない。魔樹が目立つように北の山の方へ誘導するには、召喚した精霊による釣り出しだけでなく北側に多少の木々^{エッサ}を残して周辺の森を消しておく方が効率が良いし、そのことで約束したピニスの安全も確保された。ついで

に、エンリが必要らしい薬草まで取ってきた。時折遠距離から枝の触手による攻撃を受ける精霊は長くはもたないだろうが、あとは何の心配も無く魔樹を倒しにくる者たちを待つことができる。

「と、ともかく、ピニスンも助かったし、無事薬草も採れたから帰ろうか」

「いえ、ここで『ザイトルクワエ』を倒しに来る者を待ちます。先に帰りたかつたら帰ってもいいですよ？」

エンリは周囲を見回す。鳥の動きは明らかに普段の秩序を欠いている。森からも魔樹の咆哮のような不気味な音に混じって様々な音が聞こえ、やたらと騒がしい。

昔、村の野伏^{レンジャー}から聞いた、絶対に森へ入ってはいけない時の雰囲気。今の大森林は、それを何十倍、何百倍も悪くしたような状態だ。マール^の存在なしで、さらにエンリが本当は強者などではないことをクレマンティーヌに気付かせないまま森を抜けるのは、どう考えても不可能だろう。

「……一緒に待つけど、いつまで？」

「来るまで、ずっとです」

そこでクレマンティーヌが食料の問題を気に掛けるが、採取困難な希少薬草が相手ということで元々食料は多めに持ってきており、水は手持ちもあるが、マールが魔法で出せるというので飲み水を探する必要さえ無いようだ。

エンリが大森林の滅びの生き証人となることを覚悟した時、ピニスは俯いて何やらブツブツと言っていた。

「——復活させて、山の方へ動かすためだけに森の木々を地割れに沈めて、魔樹は利用するために無傷のまままで、今も破壊の限りを尽くして……」

「ピニスン……大丈夫？」

エンリが声をかけると、ピニスは、きつ、と顔をあげてマーレの方へ詰め寄る。

「君は、なんてことをしたんだ!! それでも闇妖精ダークエルフなのかい!? こんな酷い……こんな森の住人の考えることじゃないよっ!!」

「ぼくの守らなきゃいけない森は、ここじゃないですから」

「でも、沢山の木々が地面に飲まれて死んでいったんだよ!! その悲鳴は聞こえないのかい!?!」

「どうせ食べられちゃうので一緒です。誘導に使うのは、ピニスの根っこでも良かったんですよ」

ピニスは食って掛かるが、マーレにはピニスが興奮する理由さえ理解できない。

「どうせ……って……。でも、根っこは嫌だけど……あんなことができるなら君が魔樹を——」

「あのさー、過ぎたことをギヤーギヤー言うのやめようよ。余計なことを聞かれて、魔樹を倒しに来た奴らとマール様が戦いにでもなったら、私ら全滅するかもしれないんだよ」

古びた鳥の巣をくるくる回しながらクレマンティーンが口を挟む。ピニスの枝のどこかにあつたものだろうか。

「確かにマールは手段は選ばないし……その……色々あるけど、協力すれば助かるからね。……そうだ、そろそろ食事にするけど、あなたは食べる？」

「色々って何なのさー！……私は人間の食事なんて食べないから、勝手にしなよ。美味しい水と太陽と土壌の栄養があれば充分なんだから」

エンリもピニスを宥めつつ、危険が遠ざかったことで自覚できるようになった空腹感を思い出していた。

「火口箱ありますー？」

「あ、ハイ。これでいいかな」

「つて、ちよつとそこつ、何してるのっ!？」

「いや、ちよつどいいのがあつたからね。古い鳥の巣なんていらないでしょ？」

「そうじゃなくて、その上だよっ！」

「鍋だけど？」

答えたクレマンティーヌは、足元に置いた古びた鳥の巣の上に荷物から出した鍋を載せて安定感を確かめていた。確かに、あれなら乾燥していてちょうど良さそうだ。

水がいくらでもあるとなれば、食事はスープとなる。クレマンティーヌの偏食——泣くほど嫌いな食べ物ってどうなんだろう——のために道すがら茸を採取できなかったのが残念だが、代わりに取っておいた木の実なども使えるので、冒険中としてはかなりまともな食事になるだろう。

「わっ、私の枝の上で何をしようとしてるの!!」

「勝手に料理でもしようかと」

クレマンティーヌは深い笑みを浮かべ、火口箱を開く。

「なああつ!! 何考えてるのさ、ここは火気厳禁だよ!! 火事になったらどうするのさつ!!」

「逃げる」

「そういうのは駄目だよ。近隣の村に迷惑がかかるから、火の管理はきちんとしないと」

エンリは、ピニスンとじゃれあっているクレマンティーヌを真面目な顔で諭す。

冒険者が起こした火事で森が荒れると、最大で数週間は森へ入れず近隣の村人が薬草などを採れなくなってしまう。火の管理を怠るようでは冒険者失格だ。

「管理しても駄目だよおつ!! 私の本体が一緒に燃えちゃうでしょーつ!!」

「あつ、そつか」

「でも、生木は燃えにくいって言うよー」

「焦げるよ!!」

居心地の良さに忘れかけていたが、今居るのは木の枝の上だ。この木は木の精霊ドレイアードである。ピンスンの本体で、焦がすわけにはいかない。

そんな時、エンリは炭も貴重な木々の恵みだから大切にしなければならぬという母親の教えを思い出す。

「炭の精霊とかつて、いないのかな」

「いるかーっ!! もお、降りてよおっ!!」

既に魔樹とも距離が開いているので、下に降りても大丈夫だろう。マーレに頼んで皆で下へ降り、食事の準備にとりかかる。

結局、最初の食事はスープ無しの簡素なものとなった。地表で火を使おうとしたところ、マーレから「念のため」魔樹の北側の森に何発かファイアボール《火球》でも撃つて煙などが注意を引かないようにしようという話が出て、ピンスンが大騒ぎしたからだ。

その後、距離もだいぶ離れた五食目にしてようやく美味しいスープにありつくことができた。魔樹の周辺を警戒していたマーレの魔法の知覚によって、この場より魔樹に近

い所で火の手が確認できたからだ。

「北の方で火を使う集落があるって、それ、助けた方がいいんじゃない？」

「助けて、何か意味あるんですか？」

「い、意味……」

「意味なら、あると思うよ——」

言葉に詰まったエンリの後をンフィーレアが引き継ぐ。ちようど希少薬草を取り出し愛でるという日課を終えたところで、満たされた表情だ。

既に全員が理解していたマーレの狙いは、魔樹に戦いを挑むような強者を釣り出すことであり、魔樹と戦わせてその手の内を見ることだ。しかし、マーレ自身もわかっているように、その強者が魔樹より先にマーレの敵に回る可能性も無いわけではない。そこでンフィーレアが提案したのは、助けられるものは助けておいて魔樹から保護している姿を見せることで、魔樹に挑む者の警戒心を削ぐことだ。

助けに行つた先には湖が広がり集落があったが、それは人間のものではなかった。二日後には森の広場は北から大回りで逃れてきた蜥蜴人リザトマンの避難所となり、その数は部族をまたいで呼びかけによって日を追うごとに膨れ上がっていった。

最初の部族こそ魔樹を侮り、クレマンティーヌがゼンベルという巨大な蜥蜴人を一騎打ちでねじ伏せることで強引に従える形となった。

しかし、森の広場に連れていく途中で魔樹の姿を目にすると、ゼンベルの『竜牙』族は自ら他部族への連絡役を買って出て、途中で出会った旅人のザリユースという蜥蜴人とともに速やかに全部族への呼びかけが行われた。懐疑的な部族も、斥候を出させて魔樹の姿を知らしめることですぐに避難を開始した。

「これ、法国の連中が来たら逆効果かもね」

そう言いながらも、ゼンベルだけで飽きたらまずザリユースとも揉め事を起こしてねじ伏せたクレマンティーヌは上機嫌だ。揉め事の理由は、火勢の衰えた焚き火のために、近くにいたクルシユという白い蜥蜴人が身につけていた草の塊を剥ぎとったことらしい。ザリユースとクルシユというのは、確か避難後の食糧事情を最も強く心配していた者たちだが、部族は違っていたはずだ。

——いつの間にあんなに仲良くなったのかな。

まるで恋人を侮辱されたかのように激しく戦ったザリユースは、野次馬の蜥蜴人によると、今回の騒動までクルシユとは面識さえ無かつたらしい。

戦いの後でンフィーレアが何やら仲裁をしていたので蜥蜴人の側にも遺恨は無いようだが、たとえば亜人種が相手でも必要以上に恐れられるというのは気分の良いものでは

ない。

「今さら帰ってくださいいとも言えないし……それにしても、姐さんはやめてほしいなあ」
「いい練習になって、いいんじゃない？」

リザードマン
蜥蜴人の社会では強者に純粹な敬意が払われる。族長やそれと同等の強者を軽くねじ伏せるクレマンティーンはもちろん、それを従えるエンリを見る目も相応のものになる。

エンリは近くで無責任なことを囁くンファイレアには恨めしそうな目を向け、移動の準備を進める。既に魔樹は蜥蜴人の集落あたりで破壊の限りを尽くしており、その北の蛙人^{トドマン}たちは動向を探った蜥蜴人によると川沿いに逃げてしまったらしい。この広場には普通の蜥蜴人を残し、魔樹の監視のため、明日には蜥蜴人の族長級とともに北へ拠点を移す予定だ。

——私、普通の村娘なただけで、なんで族長級の方に混ざることになってるんだろう。ンファイレアも混ざっているから大丈夫。そう考え、エンリは心を落ち着ける。その族長たちからも「エンリの姐さん」と呼ばれていることから、目を背けることしかできなかつた。

樹木の滅んだ荒野を北へ進めば、魔樹の復活の地へ繋がる。かつての枯れ木も一つとして残っておらず、荒野となったその地を異形や亜人たちを従えて進む。

そこには^{リザードマン}蜥蜴人の族長級だけでなく、今や森の東西を支配するリユラリユースとその配下のゴブリンの族長に護衛のオーガも加わっている。異変に気づき手勢を引き連れて駆けつけたリユラリユースは本来なら蜥蜴人たちを自らの領域から追い払うために戦うところだが、事情を知ると蜥蜴人の森への滞在を認め、手勢から精鋭を選びすぐつて同行することを望んだ。「姉さん」呼びが広まるのは問題だが、狩りの上手いゴ布林たちが尽きかけた食料を調達してくれるのはありがたかった。

そして、魔樹によって^{リザードマン}蜥蜴人の集落も、その北の^{トードマン}蛙人の住処も破壊し尽された頃――。

「少し強いのが来ます。魔樹でなく、こちらへ――。ぼくが仕掛けるまで防衛に専念してください」

そう言い残し、マールレの姿は消えた。

二六 魔樹を滅ぼすもの

マールは既に居ない。気配すら無いということは、どこかへ転移したのだろう。そして、あのマールが少し強いというものが魔樹ではなくこちらへ向かっている。

巫人の有象無象とは違って、クレマンティヌはマールやエンリの冷徹さを知っている。そして、ソフィーレアのように守られるだけの価値がある異能を持っているわけでもない。持っている情報に価値を認められ生かされているが、その大部分は既に吐き出してしまっている。つまり――。

——ここは、危険だ。

クレマンティヌは集団から一気に駆け出す。罰を受けることは覚悟の上で、それ想像するだけでこみ上げてくるものがあるが、それでも戦士としての勤がその道を選ばせた。

逃亡するつもりは無く、言い訳のできる距離に留めるつもりだが、ただ離れられれば一応の安全は確保できる。また、エンリに追いつかれるとしても、それはむしろ望ましいことだ。エンリがマールのように集団転移魔法を使うのでなければ、この賭けはクレマンティヌの勝ちとなる。

なぜなら、未知数とはいえ強者であるはずのエンリと二人きりなら、それはそれで最も安全な状況となるからだ。エンリがクレマンティーヌを追うにせよ、少なくとも常人であるンファイレアを伴うことはできない。

つまり、これは一人で安全を確保するか、エンリという護りを独占するかという、集団転移の可能性さえ排除すれば完璧な賭けなのだ。

駆け出した瞬間、集団の中で意識を失い倒れるものがあつた。エンリとンファイレアに介抱されるのは、マーレの支配下にあつたピニスンだ。マーレが離れすぎたためか、あるいは――。

そして、クレマンティーヌは自ら思い描いた賭けに勝つた。エンリは、追つてこなかった。

しかし、クレマンティーヌは一つの可能性を失念していた。それに気づいた時には、手遅れだった。

その時、集団から充分に距離を取ったクレマンティヌの方へ、方向を変えながらさまざまに速度で向かってくる気配があった。失念していたのは、相手が自らの方へ向かってくるという可能性だ。

遭遇が不可避と覚悟すれば、クレマンティヌの判断は速い。集団への距離を詰めつつ、それが光の粒も同然のうちから金属鎧の白い輝きを見て、自らの短い刺突武器が少しでも有利であろう森の中へ駆け込む。格上が相手でも戦いの基本は変わらず、金属鎧にふさわしい大きな武器を持つであろう相手とは障害物の多い所で対峙するべきだ。

クレマンティヌと白く輝く騎士が対峙したのは、魔樹が食い荒らした荒れ地との境界近くの森の中だ。当然、エンリ率いる集団の方への逃走も考えての位置取りとなる。

輝く騎士は、白金のような輝きを放つ豪華な全身鎧に身を包み、面頬付き兜クロイズドヘルムの奥の表情さえ窺うことはできない。そのせいというわけではないだろうが、強者の気配のようなものが希薄な存在だった。マーレの言葉が無ければ、そして向かってくる時に並外れた速度でなければ、侮ることもあつたかもしれない。

騎士は手にした斧ハルバートの柄を地面に突き立てると、そのままクレマンティヌの姿を観察するかのようにしばらくその場に立ちすくみ、そして静かに言葉を紡いだ。ものものしい鎧姿に似合わない、柔らかな声だ。

「やはり、君たちか。……世界を滅ぼしかねない魔樹をなんとかしに来たら、とんでもないものを見つけてしまったよ」

「世界が危ないってわかってるなら、自分でなんとかしたらどうかかな。私なんか、世界をどうこうできるようなには見えないと思うけど？」

「500年というのは人間には長すぎたのかな。まさかスレイン法国が世界盟約を破っていたとはね」

世界盟約——世界を汚す猛毒に対する同盟。破ればスレイン法国の存亡に関わる最強の契約。

つまり、輝く騎士は竜王やそれが属する評議国の側の存在だ。漆黒聖典にいた頃なら、それを葬る任務を与えられていない限り刺激することを避けるべき状況だが、今はむしろ法国とぶつかってもらった方が都合が良い。

「ふーん、よく知ってるねー。竜王か評議国の関係者かな？　でさー、盟約？　そんな馬鹿なもの誰が守ると思ってるんだか。確かに法国の神都ではてめえらを警戒して動けないけど、六大神の血を引いた先祖返りの人外が大事なものを護ってる。盟約とかてめえらの優位を維持したいだけのワガママが通らなくて、残念だったねー」

お偉方が時折口にする面倒な話を軽視していたクレマンティーヌに細かいことはわからない。ただ、神人を隠蔽しなければならぬ状況や、法国上層部が評議国を刺激し

ないよう常に注意を払っている状況からすれば、そんな盟約は竜王・評議国側が世界における自らの優位を維持したいが為に押し付けたものとしたか思えなかつた。そうした感覚は、クレマンティーヌが人間である以上、法国を捨てた後も変わることはない。

「……漆黒聖典の一員である君が言うなら間違いは無いんだろうけれど、本当に残念だよ」

「ちよおつと情報が古いけど、物知りだねー。でも今の私には関係ないし、神都にでも行って、好きに争って来ていいからね」

「関係ない？ とぼけないで欲しいね。今は本拠地を離れて自由に動いているもう一人の方を問題にしているんだ」

——隊長のことかな。

「私さー、もう漆黒聖典なんかやめてるし、そんなの知ったことじゃないんだけど」

「言い逃れても、大きな力を持つ者を隠しているのはわかってる。盟約を破った以上は痛い目を見せてでも話を聞かせてもらおうよ——」

騎士は大きく踏み込んでくる。クレマンティーヌは騎士の斧槍ハルバートの軌道を読んで小さな動きでかわそうとするが——得物の大きさの割に、その初速は速すぎる。

〈不落要塞〉

差し出したステイレットは騎士の得物に比べ細く頼りないものだが、武技により斧槍ハルバート

の斬撃を完全に受け止める。

——弾けない！ 何で!?

この武技で受け止めた攻撃は、普通は弾かれる。そうならなかったのは、過去にたった一度だけ。

あれは、クレマンティーヌを地獄へと誘ったあの日の、エンリの攻撃だった。それは、この恐るべき斬撃とはまるで質の違うもの。

〈流水加速〉

クレマンティーヌは目の前の騎士に不気味なものを感じ、武技を発動して全力でその場を逃れようとするが——。

「ぎいいいいっ！」

その脚に斧ハルバート槍の細い槍先が突き込まれる。その瞬間、金属の何かを叩き壊すような音が響くと、クレマンティーヌの脚に抉るような傷跡を引きながら斧ハルバート槍を持った騎士の腕が落ちた。目の前の結果とは程遠い、空虚な音だ。

「……………っ！」

「ぐあああああっ!!」

クレマンティーヌは激痛に耐え、無事な方の脚を踏ん張って騎士から離れる。何が起こったかはすぐに理解できたが、その場には理解できない光景もあった。腕を落とされ

た騎士は一滴の血も流さず——鎧の中には、血を流す身体自体が存在しない。その騎士は空つぼの、鎧だけの存在だった。

騎士は突然の奇襲に驚いたふうではあるが、痛みを感じている様子も無い。

そこへかけられる、場違いな声。

「ご、ごめんなさい。これはぼくのしもべなので、殺されると困るんです。これを狙うということは、スレイン法国の方ですか？」

現れたマーレは自信なさげなおどおどとした雰囲気ではあるが、空つぼの騎士の異様な姿に構わず声をかける。騎士の腕を落としたのはマーレの杖による一撃だ。不可視化——気配すら断つものだから、もっと上等なものか——を解除したのだろう、マーレはクレマンティーヌと騎士の間に立っていた。

「君たちこそ、法国の者ではないのか？」

「あのつ、法国は敵です。これも法国の情報が欲しくてもべになってもらったんです。あなたが法国と関係ないのなら、戦う理由はありません」

「私は確かに元漆黒聖典だけど、法国なんてとつくに捨てたよ」

「……だとしても、世界を汚す者には変わりないのかな」

騎士は残った腕で斧ハルバトを軽々と拾い上げる。

「待つてくださいい！」

勇気を振り絞って集団から歩み出たエンリに、空っぽの騎士の面頬クロイズドヘルム付き兜が向けられる。その空虚な隙間の奥に目や顔といったものがあるか疑わしいが、長く注意を引いたのは間違いはない。

「そうか、指輪まで……世界を汚す者の仲間に渡ってしまったんだね」

「世界を汚す者って、何ですか？」

エンリは空っぽの騎士をまっすぐに見つめて、問う。

「世界の外からやって来て、この世界に悪い影響を与えるものだよ」

「それは、あの魔樹ではないんですか？」

「魔樹もそうだし、その闇妖精ダークエルフもそうだと思う」

「そんな……」

「その世界を汚す魔樹から救える者を救おうとしているマーレが、いったいどんな悪い影響を与えているんでしょう」

言葉に詰まったエンリに、ンファイレアが助け舟を出す。救うこと自体はンファイレアの提案だが、元々こういう時のためにしたことだ。ンファイレアの助けを得て、エンリも再び口を開く。

「……あなたは法国の人間と勘違いして襲ってきたようですが、私の居た村は法国の人間に襲われ、マールはそれを助けてくれました。ここにいる蜥蜴人^{リザードマン}などの亜人たちも、マールがいなければ魔樹に滅ぼされていたかもしれない。そうやって私たちを助けることが、世界を汚すことなんですか？」

蜥蜴人の族長たちやリユラリユース配下の精鋭たちも状況を理解し、敵意に近い感情を込めて空つぼの騎士を睨んでいる。

「そういうことではないんだ。ただ、百年に一度——」

「私たちから見れば、あなたこそ世界を汚す者です。マールは私の村を、私たちの世界を守ってくれたけれど、あなたはそうじゃない」

「魔樹から皆を守る側のマールと戦おうというなら、魔樹による犠牲を増やそうとする、魔樹と同じ側の存在になりますね」

「法国と繋がってたら、亜人なんて絶対に助けられない。それくらい、あっちの関係者ならわかるでしょう」

エンリが、ンフィーレアが、そしてクレマンティーヌまでもが、空つぼの騎士を魔樹に差し向けるため、心の一部に蓋をして言葉を繋ぐ。

——戦ったら巻き添えで全員死にます。

——死にたくなければ『ザイトルクワエ』と戦ってもらえるように交渉してください。

脳裏にはマーレの言葉が真実味を持って蘇る。奇襲に成功したマーレが、一気に無力化しようともせず睨み合っているような相手だ。なんとしてもマーレでなく魔樹と戦ってもらわなければならない。

「……君たちから見れば、そういうことになるのか」

「あなたはこの指輪のことを気にしていたけど、これは絶対に邪悪なものに渡さないように言われて預かっているものです。あなたが魔樹でなくマーレと戦おうというのなら、私たちにとってその邪悪なものとは魔樹と今のあなたのような存在です」

「言いたいことはわかったよ。リグリットからそれを奪えるほどの存在とも思えないし、その指輪に免じて今回は魔樹だけを相手にすることにしよう」

騎士は、ツアーと名乗った。エンリは詮索を受けることを警戒したが、指輪を受け継いだ者として名を問われたのみで済んだ。リグリットが何者かはわからないが、クレマンティーヌの前で強者を装っている鍍金メッキが剥げればまずいことになる。エンリは止まらない冷や汗を背中に隠しながら、クレマンティーヌより遥かに強い鎧の化け物の前で背筋を伸ばし、虚勢を張り続けた。

ツアーと名乗った鎧の主、『白金の竜王』の二つ名を持つ竜ツアインドルクスⅡヴァイ

シオンは、操る鎧を通して見た状況を整理する。結果はともかく、最初の判断まで間違っていたとは思わない。スレイン法国が盟約を破れば世界は歪められてしまうのも、ここで現れたマールと呼ばれる闇妖精ダイクエルフが本質的には悪質な側に寄っているよう感じられたのも確かなことだ。

ただ、目の前のエンリという人間が持つ指輪は、かつての仲間との繋がりの証とも言つていいものだ。その仲間と繋がりがあるであろう指輪を受け継いだ者の厳しい言葉は、空っぽの騎士に——鎧を操作する主にとって、決して無視できるものではなかった。

——リグリット、本当にこれでいいのかな。

鎧の主にとって、人間とは滅びを待つばかりの弱小種族の一つでしかなかったが、かつての仲間たちへの想いと信頼は強い。そして、世界を汚す力——ふれいやーの多くは人間や人間と関わりを持つとうとする者たちだ。それと思しき存在おほが現れたこの時期に、人間たちの中に溶け込むその繋がりを軽視するわけにはいかなかった。

そして、ふれいやーの中には世界に協力する者も存在する。マールは単体ではとてもそうは見えないが、マールに助けられたというエンリは世界に協力する側に見えるため、マールもそうなってくれるかもしれない。百年毎の災厄が既に訪れているのなら、どれだけ来ているかわからない状況であえてマールを敵に回す理由も無い。

ツアーはマーレに声をかける。

「君と一緒に戦ってくれないのかな？」

「ぼ、ぼくは皆を守らなくちゃいけないし、守りながらあんな大きいのと戦うのは無理です」

マーレはおどおどとした態度のままだが、その瞳には何の感情も宿っていない。この小さな身体で鎧を破壊する恐るべき力を持ちながら、こちらへの敵意も無ければ、魔樹への恐れも見えないのが不気味に思えた。

「私らは、いきなり襲ってきた鎧の化け物からも守ってもらわなきゃいけないからね。……つつ、ミコちゃんお願い」

漆黒聖典の女戦士は動きの割に深手を追っていたようで、脚を引きずりながら仲間の回復魔法で傷を癒される。

「私たちはあなたを信頼したわけではありません。マーレには私たちを守ってほしいと思います」

エンリが厳しい視線を向けてくる。普通なら会ったばかりの人間の感情など気にならないが、リグリットとの繋がりを考えるとこうした感情をぶつけられることが残念でならない。かつて鎧の姿で人間の騎士のふりをして旅をしていて、仲間たちに正体を明

かした時のあの何とも言えない雰囲気さえ思い出してしまふ。

「あのつ、他に倒しに来る人は来ないんでしょうか？」

「今は、私だけだろうね」

周辺にそれらしい気配は無いし、彼らはもう帰ってしまったはずだ。

「その腕ですが、その、普通の回復魔法は効きますか？」

マールが声をかけてくる。仲間を守りながらも、できる限りの協力はするのだろうか。「状態変化の護りは必要ですか？」「では、強化は」「防御を補いたい属性はありますか」などと、魔法詠唱者^{マジック・キャスター}としては必要なことのようにはあるが――。

「私には構わなくていいよ。君は皆を守っていてくれればいい」

感情の無いマールの瞳を見ているうちに、情報を探られているような嫌な感じがして、ツアーは支援の申し出を断った。

――この子は、苦手だ。

もやもやとした気持ちのまま、ツアーは魔樹との戦いに赴く。

――この戦いは、古き仲間たちとした約束を果たすためのものだ。

この約束には、マールの不気味さも、指輪^{エム}を持つ者から信頼を得られなかった寂しさも関係はない。元々自分がするべきだったことを、予定通りにするだけのことだ。

――不幸な出会い方をしていなければ、古き仲間たちとの約束を、新たな仲間とともに

に果たすことができたのだろうか。

ツアーは考える。かつて世界を汚す者たちと戦った古き竜の仲間たちはその殆どが死に絶えた。それらに比べれば、現代の竜王たちは子供のような強さしか持たない。それに対し、世界を訪れる者は百年の周期でこうして現れ続けていく。

世界を訪れる者の中には、かつて共に旅をしたりリーダーのように世界に協力するものも存在するはずだ。今回のような事を繰り返し、それを味方につけることができなければ、いつかこの世界は――。

「ちよつと様子を見てきます」

ツアーに続いてマールが去ると、エンリは大きく息を吐き出した。ツアーと魔樹の戦いは始まっており、命懸けの交渉はどうか成功したようだ。

「エンリ、ピニスンが居なくなってる！」

「ええっ」

緊迫の交渉の場面で最大の不安要素だった木の精霊ドレイアードは大事な場面で都合よく意識を失っていたが、今からでも余計なことを言っただけはよくはない。その所在は気になるところだが――。

「あれ、マーレ様が連れていったみたいですよ」

戦いを注視するクレマンティーンには、何かが見えているようだ。

「……何か、口止めでもするのかな」

「さすがにヤバい相手だから、何か小細工でもするんじゃないですか」

「そっか、さすがに協力して戦うんだね」

エンリの方を一瞥したクレマンティーンは、呆れたような皮肉な笑みを浮かべていた。

——私、何か変な事言ったかな。

ツアーは終わりの見えない、永遠に続くような戦いを続けていた。魔樹は周辺の森から力を吸い取っているのか、その回復力は想像以上で、この世界の生物の常識に真っ向から反するものだった。触手を幾つか切り飛ばし、本体に大きな傷をつけても暫くすると回復してしまう。この森にそこまでの力の源があるとは思えないが、この魔樹はかつての仲間からユグドラシルの生物だと聞いている。あの時は魔樹の一部が相手だったのでそこまでではなかったが、今回は本体との戦いであり、世界の常識を逸脱した能力を持つていてもおかしくはない。

ツアーは焦っていた。それは消耗のせいなどではない。このような巨大な魔樹を長く暴れさせておけば、いずれはマーレ以外の同種の者たちが現れ、この場に集う呼び水となってしまうかもしれない。もしそれが悪質な側の者でマーレと手を組むようなことがあれば、かつて世界を汚した者たち——八欲王の再来ともなりかねない。

背後から戦いを観察するマーレは、今は敵対するつもりはないようだ。その横に倒れているのは——木の精霊^{ドライアド}か。その手を取っているのは治癒か介抱でもしているのだろうか。既にツアーの鎧はボロボロで、マーレがその気になれば背後からの攻撃で鎧はすぐにでも破壊されうる状況だ。それでもそうしないということは、今だけは信じてもいいということだろう。

魔樹の振り回す枝の触手を蹴り、それに弾かれたように大きく距離を取る。ただそれだけの衝撃で、痛めつけられた鎧のあらゆるパーツが悲鳴をあげる。残念だが、鎧の姿での戦いはここまでだ。

白金の輝きを纏う偉大な竜の姿のツアーは、護っているものを慎重に台座ごと掴み、大空へ舞う。これは、踏み出してはいけない一歩なのかもしれない。しかし、あれがないくとも結局は自分がやらねばならなかったことだ。鎧の姿でどうにかならなかつたのだから、割り切るしかない。

もちろん、この姿を見せるつもりはない。魔樹を始原の魔法で葬ることができないギリギリまで近寄って、すぐに元の場所へ戻るだけだ。

護っているのは、剣だ。鎧騎士の姿のツアーでも装備することができないその剣は、ギルド武器と呼ばれるもの。八欲王の遺した八武器の一つで、ツアーがこの場所から離れられなかった理由となるものだ。その力も性質も不明だが、世界を汚したあの力にも似た、運命さえ操りかねない不気味な力が感じられるギルド武器は、漆黒聖典や新たに世界を訪れる者たちに決して渡してはならないものだ。

——彼らが居たら、これを持ち出すことなど考えられなかった。

スレイン法国は甚大な災害に見舞われ、ツアーが警戒する漆黒聖典は今回の出撃ではたつた二人となっていた。そこには常に隊を率いていた人間を逸脱した強者もおらず、危険な雰囲気を漂わせる神器と呼ばれるユグドラシルのアイテムも存在しない。さらに一人は十年近く前から見かけなくなっていた者だ。そして、若い方が大きめの梟を偵察に出して様子を窺うと、手に負えないと見てすぐに引き返してしまった。彼らが向かった先の魔樹は明らかに人間たちにも重大な脅威であり、充分な戦力を揃えずに出るのはこれまでの彼らにはありえないことだ。魔樹の近くにも漆黒聖典の女が居たため、あれは別働隊だったのかとも考えたが、それも違っていた。

もちろん、漆黒聖典だけが問題というわけではない。世界を汚す者たちにこれを奪わ

れることもあつてはならず、その危険を冒すことも絶対に避けたい。

しかし、世界を汚す者たちが集結してしまうという最大の脅威を避けるために、このことは冒さざるをえない危険だ。今の世界にはかつての八欲王に対抗できるような戦力は存在せず、もし敵対するなら八欲王が仲間割れをして滅びていった時のように分断して個別に斃たおさなければならぬ。

「いったん魔樹のもとを離れるけど、魔樹は必ず滅ぼす。そのために、このあたりから北へ立ち入るのは避けてほしい。立ち入れば、魔樹を滅ぼす攻撃に巻き込まれることになるよ」

鎧のツアーは警告を発する。そうしなければマールを倒せるかもしれないが、倒せないかもしれない。そして、ぶれいやーという存在は倒せたとしてもどこかで蘇生して再び現れるのだ。たとえ一度倒せる可能性があつたとしても、敵対するつもりのないぶれいやーをわざわざ敵に回すのは愚かな事ではない。そして、こちらがぶれいやーに騙し討ちをしたことがわかれば、たとえ交渉すれば世界に協力する側に回ってくれるような者でも殆どが敵となつてしまふだろう。

「そ、そんなに広い範囲が危険なんですか？」

「君たちの知らない魔法で、魔樹のあたりに巨大な爆発を起こすんだ。あつちの蜥蜴人リザードマン

「や人間たちも立ち入らないように伝えてほしい」

「わかりました。少しの間でも魔樹を自由にさせてしまふのなら、念のため監視目的のモンスターを魔樹のまわりに配置します。それは巻き込んで構いません」

「……わかった。すまないが、陽が赤くなる頃までこの場は頼むよ」

少し時間はかかるが、このマーレが守りに徹すればどうにかなるだろう。

ワイルド・マジック
始原の魔法。

長い竜ドラゴンの歴史の中で、これほど大きな不安に包まれながらこの力を振るつた者がいた
だろうか。

八欲王との戦いにあつては、怒りや勇氣、時には悲しみや怯えとともに行使されるこ
ともあつただろう。

それでも、竜ドラゴンたちはいつでもこの力こそが戦いの帰趨きすうを決するものだと思つて、力を
振るつていたはずだ。

絶対的な力である始原ワイルド・マジックの魔法は、人間種を含めたこの世界でその存在を知られていな
いわけではない。むしろ、人間たちにとっては、スレイン法国の行動を縛っているよう
に抑止力にさえなつているところがある。

しかし、あのマーレの前でそれを使うことには、言い知れない大きな不安があつた。

「本当に、これでいいのかな」

答える者は居ない。

そうしなければ、大きな脅威に晒されるかもしれない。

では、そうしたら何が起こるといふのか。

その先にあるのは、この世界を数百年にわたつて見守つてきた『白金の竜王』ツアインドルクスⅡヴァイシオンにも見通すことができない、真つ暗な未来だ。

覚悟を持つて、闇へ踏み出す第一歩。そこへ灯されるのは、世界を染めあげる白い閃光。

大気を、大地を揺るがす轟音と、あらゆるものを灼き尽くす豪熱の爆風。

極限の爆発が傷ついた魔樹を白の世界へ包み込み、万物に死をもたらす閃光は一瞬にして広大な領域に拡がっていく。

森の木々は塵芥となり、緑の大地は剥ぎ取られ、粉塵と化して空に舞うそれらは魔樹の亡霊の如く、丸みを帯びた巨大な大樹を形作つて大空に漂う。

ツアーは、二百年前の約束を果たした。

閃光と豪熱に包まれた致死の領域とその周辺には木々の他にも少くない生命が存在したが、魔樹のほかは全て不自然なモンスターばかりだった。その数の多さや多様さが気になったが、亜人や人間たちは無事、魔樹から離れた安全な場所に固まっており問題は無い。

——あれは、何を監視していたのか。

ツアーはぶるりと身震いをする。魔樹が消滅した今も感じるこの視線は、あのマールワイルド・マジックのものなのだろうか。この場は魔樹に始原の魔法の巨大爆発が届くギリギリの距離で、あの闇妖精ダークエルフが居る場からは現代の竜王たちでも知覚できないほど離れているはずだ。

少し南へと意識を向けると、マールワイルド・マジックの姿は蜥蜴人や人間たちの近くに確認できた。そのことに安堵した瞬間、ツアーはマールの感情の無い瞳が自らを捉えていることを確信した。

ツアーはすぐに森に背を向け、数百年ぶりに出す全速力でその場から飛び去る。他の竜ドラゴンがその姿を目にすれば、『白金の竜王』の威厳が失われていることを驚いたかもしれない。悠然と空を跳ぶ本来の竜ドラゴンの王の姿はそこには無かった。

二七 御遣い様はお見通し（蜥蜴人編）

遙か遠方で事を済ませて引き返すツアーを、マーレはただ見送った。

マーレは、生命が死に絶えた広大な領域へと踏み込む。自身の数倍の大きさの巨石が不自然に並ぶ場へ辿り着くと、その一つを押して難なく転がす。表と裏でその色は全く変わり、裏側に隠されていた草や虫は巨石の表側の世界のように塵芥とはならないまでも、焼石に押し付けられたように死に絶え変色していた。巨石に触れるのが強力な装備や様々な耐性を備えたマーレで無ければ、確実に深刻な火傷を負っていただろう。別の石を押し退けると、その下に隠されていた穴の中を観察する。

マーレはその広大な領域を、魔法の移動手段に頼らず、ただ歩きまわって観察していた。

すさまじい破壊の光景を前にしてしばらく呆然としていたエンリとンフィーレア、そしてクレマンティヌの三人だが、よろよるとマーレの方へ歩み寄る途中、変わり果てた広大な領域の僅かに手前で柔らかない茂みの上に寝かされているピニスンに気付く。そう遠くない場所を調べていたマーレに声をかけると「忘れてました」との返事があり、すぐにピニスンが目を覚ます。

「うああああっ!!……んんっ?」

「よくこんな大変な時に寝られるね」

「精霊が寝るわけないだろうっ! あの子に本体との繋がりを絞られていたんだよ! それから、それからあっ!」

平和な寝顔に呆れたようなエンリに対し、抗議の声が止まらなくなるピニスン。ツアーの前では喋らせない方が良くということは何となく察していた三人はピニスンの怒りを適当に受け流すが、どうも問題は口止めだけではないらしい。

「——それで、とんでもない力が私の中をどんどん流れていったんだよっ! 本っ当に死ぬかと思ったんだからね! あれは一体何なのさっ!!」

「うわ……やってるのかなーとは思ったけど、本当に回復してたんだ……」

クレマンティーヌは何か知っているようだ。回復というからには魔樹と戦う騎士を助けていたのだろうか——。

「そういうのはピニスンじゃなくてミコヒメがやるんじゃないの?」

「あの鎧には普通の回復魔法は効かないと思うよ。そういうのじゃなくて……まあいいや」

ンフィーレアも何か気づいたようで、クレマンティーヌと目配せをする。この二人は、最近妙に分かり合っているようなことが増えている。だからどうだというわけでは

ないが、それを見るとエンリは少しだけでもやめた気持ちになつてしまふ。

「——エンリがそう言うのなら、この話は後にしよう」

「何っ!!? 何か知つてるなら教えてよっ!!」

ピニスンがうるさいが、ンフィーレアのこれは後で説明するという意味——だとエンリは考えた。

適当にピニスンを誤魔化しながらマーレの用事が済むのを待つっていると、夜中になつてしまった。騒いでいるうちに魔樹の気配が無いことに気づいたピニスンには、何を怒っているのかよくわからないままに、魔樹を倒すため必要な犠牲だったのでだろうと説明しておいた。クレマンティーヌの生暖かい視線は気にしないことにする。

——何か知っているなら代わりに説明してくれればいいのに。

マーレが戻つた時、一行があてにしていた集団転移魔法は魔力切れで使えないということがわかり、遅い時間から夜営の準備をする羽目になつたが、リユラリユースの配下のゴブリンたちが森へ帰る前に手伝つてくれたので助かつた。マーレは早々に手近な木にもたれかかつて眠つてしまい、ンフィーレアとクレマンティーヌはそれも仕方がないといった雰囲気、エンリだけが色々な疑問を抱えたまま一夜を過ごした。

——魔力切れなんて初めて聞くけど、きつと鎧の人が居ない間、頑張つて魔樹を抑えていてくれたんだよね。

その時マーレは忙しく森を飛び回り、色々な魔法を使って色々なものを喚び出したりもしていた。直接戦っていた雰囲気は無かったが、魔法というのは何でもありだから、魔樹を抑えるために色々な事をしていっているうちに魔力を使い果たしてしまったのだろう。

翌日、マーレが曖昧な関係ながら恭順の姿勢を取る蜥蜴人リザードマンの族長たちに対してリユラリユースらと同様の役割を求めると、蜥蜴人たちは申し訳無さそうに役割を果たせないことを打ち明ける。昨日の巨大爆発の影響で地形が変わり、蜥蜴人の住処である湖へと注ぐ川の流れが失われてしまったらしい。蜥蜴人たちは湖が干上がるまでに川を辿つて新たな住処を探さなければならないが、そこでも先に逃れた蛙人トードマンたちとの衝突は必ずで、縄張りを確保できず散り散りになってしまふ可能性が高いという。

「ちよつと状況を見に行きましよう」

世界を滅ぼす魔樹は長らく野放しにしたマーレだが、『アインズ・ウール・ゴウン』を探すための布石には手間をかけるらしい。

途切れてしまったという川に来てみると、蜥蜴人リザードマンが長年暮らした住処を諦めるだけ

あつてその状況は深刻だ。爆発の範囲にかかつて崩れた斜面が、川を巻き込む形で百メートル近い規模での地すべりを起こして、それに沿って新たな流れができてい。元の流れに戻るのには絶望的な状況だった。

「残念だけど、これはもう——」

「この程度ならすぐに戻りますよ」

絞りだすようなフイーレアの言葉を遮り、マールが平然と言い放つ。

「この程度だつて？」

「皆で掘り返しても、半分も終わる前に湖が干上がるぞ」

「駄目だ……早急に移住先を探さないと……」

リザードマン

蜥蜴人の中にはこの光景を初めて見る者も多く、絶望がその場を支配していた。そんな中、マールは少し思案してから魔法を詠唱する。

《大地の大波》

アース・サージ

マールの詠唱に従って、地すべりで本来の河川を覆った剥き出しの大地のほぼ全域が広大な範囲でうねりながら多数の隆起を作る。それらはまるで意思を持ったかのように、身を寄せ合い大きな隆起となつてその場を離れていく。

かつて川だった場所を覆う土砂は、そうして大きな波のように川の兩岸だった場所へと交互に打ち寄せていく。土砂に生まれた裂け目が深く広くなつて歪められた川の流

れから水を呼びこむと、余った大量の土砂が動き出し、元と違う方へ流出していた余分な流れに叩きつけられる。

「大地が……」「おおおお」「……奇跡だ」「川が……創られた」

「両岸を踏み固めてください。少し固めたら雨を降らせませす」

「はあ？」「雨？」「今……何と？」「いいから行け！」「よし、皆を呼んでくるんだ！」

蜥蜴人たちは耳を疑いながらも、取り戻した川の流れを守るべく川岸へ走り出す。空は雲一つ無く晴れ渡り、雨乞いなどしても無駄だということはどの部族の者でもわかることだ。

新たに出来た川岸は広い。蜥蜴人のうち、足の速い幾人かの斥候たちは仲間を呼びに走る。両岸が蜥蜴人で溢れる頃、マーレの魔法一つで晴れた空が厚い雨雲に覆われ、すぐに強い雨が降り出すと雨音は蜥蜴人の歓声で塗り潰された。

かくして、〃大地と水の神にして我らが主〃マーレは蜥蜴人の神として崇められ、エンリたちは神の御遣いみつかとなった。マーレが探し求めるアインズ・ウール・ゴウンは〃主神と神々の住まう地〃として認識されたようだ。

「しもべとしてここに群れを維持できればいいので、あとはエンリにでも相談してください」

その投げやりな言葉が、敬虔な蜥蜴人リザードマンに下された最初の神託だ。マーレは爆発のあつた辺りでもう少し調べたいことがあるらしい。

離散の危機を回避して喜びの中にあるはずの蜥蜴人だが、先の先を考えて不安を抱いているやはりクルシユとザリユースだった。クルシユは蜥蜴人で最も力のある祭司で一つの部族の族長であり、ザリユースは勇敢な戦士で別の部族の族長の弟だという。正直なところ、白い方——クルシユと最初にクレマンティーヌと戦った巨大なゼンベル以外は単体では見分けがつかないので、ザリユースはクルシユとの仲睦まじい雰囲気だけで識別する対象だ。

相談の内容は、避難時と同じく食料問題だ。

確かに、マーレの魔法によって水源は復活し、湖周辺の土にも栄養が与えられた。長期的に見れば湖の魚が戻ってくるのは間違いない。

また、新たに生簀いけすを係留するための巨石が湖の浅瀬の所々に顔を出している。これは巨大爆発の前に魔法で巨石を作り出すマーレを見たザリユースが懇願したものだ。元々彼が発案して作っていた蜥蜴人集落で初めての生簀は全て魔樹に破壊されてし

まったが、数年後にはその数倍の規模の生簀に沢山の魚が溢れていることだろう。

しかし、次の冬を越せるかとなると別問題だ。蜥蜴人たちは、荒れ果てた湖の現状を説明していく。このままでは、冬を待たずに蜥蜴人が深刻な食糧危機に晒されるのは明白だった。神の御遣い^{みつか}などと持ち上げられても、ただの人間であるエンリがそのような相談に何か有効な手立てを考えられるはずもない。

——突き放すのは可哀想だし……でも、何て言えば……。

少し下がって従者のように控えているンファイレアは、無言で小さく首を振る。打つ手は無いのだろう。普通に横に並んでいて欲しかったのだけれど、蜥蜴人側の態度の違いに遠慮したのだろうか。

衛兵のような立ち位置のクレマンティヌは、蜥蜴人たちを冷たい目で見下ろしている。彼女の前で、あまり同情的な態度を示すのも良くないのかもしれない。

現状の説明が一段落したところでエンリが意を決して口を開こうとすると、蜥蜴人たちはその場に平伏し、ザリユースが口を開く。

「そこで、来るべき蜥蜴人部族間^{リザードマン}の戦争について、予め神のお許しを頂きたいのです」

「はっ……戦争？」

エンリは耳を疑う。

「はい。いずれ少ない食料を巡り、戦争が起こるのは確実です。そのことは、神マーレの

命令に背くことに見えるかもしれませんが。しかし、いずれの部族が勝利するにせよ、蜎人の数が減れば食料も足りましょう。その後もこの地で神の命令を守り続けることを誓いますので、何卒お許しを……」

「戦争で相手の集落を襲つたりしたら、互いに生活が成り立たなくなってしまうのでは？」

エンリは故郷のカルネ村を襲つた災厄を思う。

「いえ、狩人や戦士たちが中心の戦いとするつもりです」

それでもエンリは気に入らない。同族間で、それもこうして共に行動した者たちの間で戦うなど考えたくもないことだ。

「……それでも戦争で働き手を失つたら、後に残されたひとたちは大変だよ？」

「そういえば、逃げた蛙人トリドマンっていうのは蜎人の敵なんだよね。それが住む場所を見つげられずに戻ってきた時に戦えるだけの戦力がないと、群れがなくなっちゃうかもしれないよ」

エンリの言葉を、ンファイレーアが違う視点から後押しする。

「それでは、どうすれば……」

「しかし、今のままでは皆で飢えて死ぬだけです。食べ物が無ければ蛙人トリドマンと戦うこともできません」

困惑するクルシユに対し、ザリユースはあくまで戦争を譲らない。どう見ても番の二匹だが、考え方が合わないこともあるのだろう。こういう時、男オスというのは頭が固くて駄目だ。女メスの方が平和的な解決を考えるのに向いているのは蜥蜴人でも同じなのかもしれない。

エンリはその場で屈むと、平伏するクルシユの肩に優しく手を置く。

「戦争で殺しあうことばかり考える前に、親を失う子どもたちや、残される老いたものたちのように、弱くて戦争に出られないようなものたちのことを思い浮かべてみて」

「それは！ どういうこと……でしょうか」

クルシユはびくりと大きく震えると平伏したまま顔をあげ、エンリの顔を覗き込む。その反応に驚きそうになるのを必死に堪え、エンリは虚勢を張っているのを気取られないよう表情を引き締めると、クルシユの方を真っ直ぐ見返す。両者の視線がぶつかるクルシユの表情はすぐに弱々しいものになり、不安のうちに頭こぶを垂れる。

——戦争で残される側の辛さとかも、考えてくれたのかな。

エンリは王国戦士長の都合で今のような身分になり、妹のネムの生活も守られることになったが、それが無ければ両親を失って困窮する運命だったかもしれない。そういう、残された者の立場を想像できるからこそ、安易に戦争で数を減らすような考え方には賛同できない。

しかし、その思いは感傷でしかない。どうということかと——飢えにどう対処するのかと問われれば、その思いからでは適切な答えを導くことはできない。

それならば——答えがわからなければ、どうすればいいのか。

エンリは考える。エンリが村に居た頃は、わからないことは年長者に問うしかなかった。年長者がわからない時は、薬草の買い付けで年に一度来るかわからない神官に聞くように言われたものだ。その神官は大人から子供まで分け隔てなく皆の話をよく聞いてくれて、様々な悩みに答えてくれていたが——。

——そういえば、白い方は祭司だって言ってた！

閃きに従って白い蜥蜴人リザードマンを観察すると、他の蜥蜴人と違って獰猛な感じがしない。祭司だという神官のような身分からくる先入観によるものかもしれないが、他の蜥蜴人は違う柔らかな雰囲気をもつことから、思慮深く心優しいそうにも見えてくる。

そして、クルシユには迷いがあるように見える。もしかしたら、確信は無いにしても、手の届く所に何か答えを持っているのかもしれない。虚勢を張ったことで怯えさせてしまったかもしれないので、相手の立場に立って、丁寧な話をしていくことにする。

「あなたは、祭司よね。あなたたちは日々何に祈っているの？」

「祖霊それいですが……お望みならば、全ての祈りを神マーレに捧げます！」

——ソレイ？ 何だろう、蜥蜴人の神様のことかな。

このあたりの人間種——少なくともカルネ村において祖霊信仰の概念は存在せず、エンリにはその言葉は理解不能なまま蜥蜴人の信仰対象の名称として伝わった。

「そのソレイはあなたたちが大切にしてきたものなんだから、簡単に捨てたりしたら駄目だよ。そして、そのソレイならこの問題に向き合う貴方たちをどう導いてくれるか、そういうふうを考えていけば必ず正しい答えは見つかるはず。日々祈りを捧げてきたあなたならわかるでしょう？」

エンリは、ただその場しのぎのために根拠の無い神頼みを口にしてしているわけではない。祭司なら先人の様々な知識を引き継いでいるはずで、その祭司であるクルシュの迷いを見て取って、そこに賭けたのだ。戦争に躊躇の無いザリユースとは違う、心優しそうな祭司のクルシュが抱えている答えであれば、少なくとも戦争よりは皆が幸せになれるに違いない。

クルシュがクークーと微かな鳴き声をあげる。蜥蜴人は人間とは異なり涙が流れ落ちるようなことはないが、その身体は小刻みに震えており、その心は泣き崩れているのだろう。それでも、その口は固く結ばれ、迷いを振り切った決意の表情を浮かべているようにエンリには感じられた。

すぐに隣のザリユースがクルシュの崩れ落ちそうな身体を優しく支え、ぐつと顔を上げる。今にも喰い付いてきそうな鋭い視線でエンリを射抜き、ザリユースが吠える。

「御遣い様!!」

「ザリユース! いいの。これは私の背負うべきことだから」

「クルシユなら、ソレイに従って正しい道を選べるはず。少なくとも、私はそう信じるよ」

——祭司だからって丸投げしたから恋人として怒ってるのかな。でも、気圧されちゃ駄目だ。

エンリはそのままクルシユに全てを委ねた。どうにもならない以上、蜥蜴人のことは蜥蜴人が決めるべきだ。その中では戦争以外の答えを持っていそうなクルシユが適任なのは間違いない。

ただ、その反応はあまりに悲壮なものだ。蜥蜴人全体の運命がかかっているような重い重圧を背負うのは、祭司とはいえ辛いに決まっている。周囲の蜥蜴人の助けが得られるようにしなければならぬ。

クルシユはザリユースの支える腕を優しく解き、平伏の格好に戻って顔を上げる。

「神は……御遣い様は……全てをお見通しなのです」

「私はあなたが積み重ねてきたものに委ねただけだよ。それだって、実現する者がいなければ意味が無い。……ザリユースは、クルシユに協力できる?」

「……クルシユが望むなら」

ギギギツとザリユースが歯を噛みしめる音が聞こえてくる。その強い思いで彼女に協力してくれるなら大丈夫だろう。

結局、この問題はクルシュに委ねられ、二人は戦争を回避する方向で族長たちの同意を取り付けていくという。エンリの前で話し合いたいというクルシュの希望には、蜥蜴人の問題だからとエンリが難色を示し、ンファイレアの提案によりクルシュの護衛としてクレマンティーヌが同行することとなった。

蜥蜴人たちとクレマンティーヌが部屋を出ると、二人は大きく息を吐き、素に戻る。

「ンファイ、ありがとう。助かったよ」

「よく頑張ったね。戦士ではないあの蜥蜴人に任せたのもたぶんいい判断だと思う。ところで、エンリは何をお見通しだったの？」

「そんなの、普通の村娘でしかない私にわかるわけないよ。ただ、あの蜥蜴人だったら戦争以外にうまくやれると思っただけだし、私なんて関わらない方がいいんだよ」

「そうかな。僕は最近、エンリには人を引っ張る才能があるのかもしれないって思い始めているんだけど」

「……とんでもないことに巻き込まれる才能しか無いと思う」

「才能は一つとは限らないからね」

否定してくれないインフィーレアを前に、エンリは溜息しか出ない。

戦争を好まない彼らは、人間の国家間の戦争しか知らない。本当の飢えと欠乏をめぐる争いについて、十分な想像力を備えてはいなかった。

「エンリ様と違って、私はあんたらの考えとか全然知らないからねー。だから相談事は受け付けない。ただ話を纏めるためのおど……仲裁役のつもりでよろしく」

「どうして言い直すんですか？」

「二応、エンリ様が好む言い方にしたただだよ。意味は同じだし、私はどっちだっていい」

クルシユとザリユースが最初に説得することにしたのは、ゼンベルだ。蜥蜴人^{リザードマン}全部族の中でも、蜥蜴人の至宝として伝わる魔剣『凍牙の苦痛』^{フrostペイン}を持つザリユースと互角に渡り合える戦士はゼンベルだけであり、意思統一にどれだけ時間がかかるかわからない状況では、護衛のクレマンティーヌが居てくれるうちに、強い順に話をするしかない。

なぜなら、この話は誰が相手であつても容易に敵意や憎悪を抱かせるものだからだ。

同族喰い。

それが、食糧不足に対するクルシユの部族の祖霊の——『朱の瞳』レッド・アイのかつての族長の知恵だった。

クルシユが心の奥底に仕舞い込んでいて、御遣いみつかエンリによつて抉り出されたものだ。

かつて、蜥蜴人リザードマンたちは不漁による深刻な食糧不足に見舞われ、漁場を巡る争いは多くの部族が参加する戦争にまで発展した。今回の懸念も、その経験によるものだ。戦争に参加した『緑爪』グリーン・クロウのザリユースとしては、荒れ果てた湖の現状では同じことが起こると考えざるを得ない。

ただ、『朱の瞳』レッド・アイは祭司は多いが戦士は少なく、戦争には向かなかつた。食糧不足は祭司の能力でも補えず、僅かな食料を分け合いながら緩慢な滅びの道を進んでいたところで、族長が素性のわからない肉を持つてくるようになったのだ。

「その肉を食べられるのは、決まって、部族の厳しい掟に反した者の一族が追放された後のことでした」

その後、『朱の瞳』^{レッド・アイ}はクルシユが族長代理という形でまとめられている。族長は反乱によって討たれ、最高の祭司として反乱の旗印に祭り上げられていたクルシユに優しく微笑みながら息を引き取った。同族喰いと反乱で数を減らしたことの結果、部族は危機を逃れることになった。『朱の瞳』^{レッド・アイ}として族長の名誉を回復することはできないが、クルシユは祖霊への様々な儀式や祈りに際してその族長を含めなかったことは一度もない。

同族の血肉を喰らって助かり、その罪の全てを背負った者を葬って忘れ去ろうとした自らの部族の歴史を、クルシユは血を吐くように語る。ザリユースはそんなクルシユにずっと寄り添っていた。

戦争に参加しなかった『朱の瞳』^{レッド・アイ}が危機を乗り切った手段について興味があつたザリユースは、避難の呼びかけの際にこのことを聞き出し、クルシユの苦悩を受け止めていた。だからこそ戦争以外に手段は無いと考えていたのだが、蛙人^{トードマン}の存在がそれを許さなかつた。

蛙人^{トードマン}とは、湖の北東に棲息していた亜人だ。魔獣などを使役する技術を持ち、^{リザードマン} 蜥蜴人にとつては大きな脅威だった。数十年前に大きな戦争があつて以来は互いに湖の反対側で棲み分けていたが、湖の漁場も何もかもが壊滅的な打撃を受けた状況では棲み分け

も何もあったものではない。魔樹を恐れて川を遡って逃げた蛙人たちが新天地を得られず戻ってきた場合、蜥蜴人にとつて極めて厳しい戦争が起ころのは間違いがなく、そのためには蜥蜴人同士で戦争をして戦える者を減らすわけにはいかないのだ。

戦える者は残さねばならない。そんな状況で、同族喰いの過去を持つクルシユの心に突き立てられた言葉の刃。

——親を失う子どもたちや、残される老いたものたちのように、弱くて戦争に出られないようなものたちのことを思い浮かべてみて——

御遣いみつかエンリの言葉は、蜥蜴人リザードマンがこの湖で生きていくための優先順位を明確化し、切り捨てるべきものを冷徹に示したものだ。

年月が経てば蜥蜴人は必ず豊かに暮らせるようになる。その繁栄は約束されている。神マールレの助力により、これまで絶対に作ることができなかったような規模の生簀を作れることもできる。

しかし、目の前の危機を乗り越えることができなければ、そんな未来も全てが水泡に帰す。

蜥蜴人たちが生きていくためには、最大限の戦力を維持したまま、食糧不足を乗り越

えなければならぬのだ。未来の繁栄のために、過去に部族を支えてきた老いたものたちを切り捨て、未来ある子どもたちをも切り捨てなければならぬ。

ゼンベルは普段の豪快な印象と異なり、目を閉じて静かに話を聞いていた。クルシユの話が終わると、その裂けたように大きな口の端で器を傾けて酒を流し込む。

「必要なことだというのはわかるぜ。筋も通つてる。何より、御遣いみつかの言葉じゃ無視はできねえ」

「それじゃ……」

クルシユの言葉を遮り、ゼンベルは剛槍を手にとって立ち上がる。三メートル近い長さのそれは、二メートルを大きく超えるゼンベルの巨体であっても長大に過ぎるものだ。その動きとほぼ同時に、ザリユースはクルシユを庇うようにその前に立つ。

「けどよ、これは仲間の命がかかった話だ。戦いもせずに決められることじゃねえな」
「でも、あなたはこの人に一度……」

「勝ち負けは関係ねえ。やらなきや示しが付かねえんだよ！」

ゼンベルは臆さずクレマンティヌの前に立つ。大人と幼児ほどの体格差がありながら、この小さな人間を相手になすすべもなく四肢から大量の血を流しながら膝を屈したことは一生忘れられない悪夢だ。それでも、それは部族にとって正当な戦いであり、

蜥蜴人たちを助けるためのものでさえあった。そこに悔しさはあっても恨みは無く、今となつてはある種の親近感さえ覚えていたのだが――。

「くーだらない。でかいだけの雑魚を二度も相手する方の身にもなつてよねー」

「てめえ!! わざわざついてきて、どういうつもりだ!!」

「おい、言葉が過ぎるんじゃないか!」

「……あなた、どういうつもりなの?」

覚悟を決めていたゼンベルはクレマンティーヌによる最大級の侮辱を受けて激昂し、怒りに満ちた唸り声を漏らし続ける。ザリユースも同じ戦士として怒りを露わにし、クルシユはその振る舞いに困惑していた。

「つてか、ふざけるなよ糞蜥蜴トカゲの奴隷ども。ミツカイサマが言ったから、それだけでめえらは同族の肉を喰うのか? それじゃ目え瞑つて口開けて待つてるのと変わらねえだろ。それでてめえは私に負けたら仕方なく従うつて? 甘えてんじゃないやねえよ糞が」

「あなたは……御遣い様みつかから私たちを助けるように言われたのではないのですか?」

クルシユは絞り出すように問う。

御遣いみつかの言葉が無ければ蜥蜴人リザードマンたちは漫然と対策も無いまま食糧危機に晒され、戦争へと向かったであろうことは間違いない。しかし、自分たちが直面する危機について理

解してしまつた以上、御遣いみつかの言葉に従うだけでなく自らの意思として同族喰いを選んだつもりだ。その部分に楔を打ち込むような、この人間の容赦の無い言葉は深く胸に刺さつていた。

「確かに護衛は任されたよ。このデカブツが敵に回つたつていうんなら、面倒だからそれ以上の敵が出てこないようにコイツの部族や他の族長連中の前に引きずり出して、見せしめに拷問しながらじーっくりと殺してあげる」

「てめえがそうしたいなら勝手にしやがれ！ 戦う以上覚悟はできてる」

ゼンベルは鋭い牙を剥き出しにして、口の端から敵意に満ちた唸り声を漏らす。

「勘違いすんなデカブツ、私は護衛でしかないからね。やるかやらないかを決めるのはこの白いのだよ」

「どうしてそのようなことを……。神は、御遣いみつか様は、私たちを苦しめることをお望みなのですか？」

クルシユはわからない。御遣いみつかの言葉とクルシユたちの苦渋の選択は、密接に結びついたものでなければならぬ。そうでなければ辛すぎる。その両者に手をかけて無慈悲に引き裂こうとするこの人間の意思は、そして御遣いみつかの、神の意思は、いかなるものなのだろうか。

「あのさー、確かにマーレ様は神様かもしれないよ。エンリ様も普通じゃない。けどね、

少なくとも私は神でもミツカイサマでも無いんだよ。奴らに絶対服従の奴隷でしかない。護衛を任されたからには、逆らう蜥蜴は百でも二百でも殺してあげる。でも蜥蜴どもの運命とか背負うつもりもないし、できるのはそれだけ」

「……それでは、私たちはどうすればいいのでしょうか。これまで戦いで物事を決してきた部族も多く、しかし戦争は避けねばなりません」

——この苦しみは他の誰のものでもなく、私たち蜥蜴人リザードマンのものだ。

クルシユは考える。喰らうのも蜥蜴人なら、喰らわれるのも蜥蜴人だ。この人間の言うことは正しい。しかし、それならば部族の戦力を維持しながら同意を取り付けるにはどうすればいいのか。

「ふふ、そうだね……だったらそこのお前がやったらどうか。さつき自然にそいつのために身体が動いてたし、エンリ様の前でも一緒にやるってことになってたよね」

「俺が……果たすべき役割だとしても言うのか」

ザリユースは人間を睨む。

「蜥蜴同士で戦えばいいよ。これから同族の肉喰って生き延びるんでしょ？ 他人の肉程度でウジウジ——ってのはいいとして、せめて自分たちの運命くらい自分たちで決めたらどうかかな」

「そんな……この話を受け入れさせるときの戦いなんて、それでは私だけでなくザ

リユースまで……」

族長に全ての罪を被せてしまった過去を御遣いに見透かされたことで、クルシユは自分一人が罪をかぶる事を覚悟していた。ザリユースの誇りを罪で汚すことなど考えたくはない。

「クルシユ、そんなことはどうでもいい。この人間の言うとおりだ。それに同族喰いとか関係なく、俺はクルシユのために戦えるだけで充分だ。……ゼンベル、やるのは俺でもいいか？」

「俺は構わないぜ。こんな形でやれるとは思わなかったが、『凍牙の苦痛』を持つお前とやりたいとは思ってたんだ」

湖畔の広場には『竜牙』ドラゴン・タスク族が集まっている。ここでは過去の戦争に絡んでザリユースに敵対的な者は多く、圧倒的な魔樹の脅威を前に協力して避難したとはいっても遺恨が消えているわけではない。ただ、そうした者たちのざわめきも族長のゼンベルが現れれば静まってしまうのだから、この部族ではこのやり方しか無いのだろう。

予め仲間たちに決闘の条件を伝えようとするゼンベルを、ザリユースは止めた。クルシユの全てを独占したいザリユースは、クルシユが一人で背負おうとしたものをゼンベルにまで分け与えるつもりはなかった。そのため、蜥蜴人の群衆は戦いの理由について

何も知らされていない。

ある者はゼンベルが遺恨を晴らしてくれることを期待し、ある者は全部族が協力して避難したこの機会に過去を水に流すための手打ちなのだろうと考える。

そんな中で、ザリユースとゼンベルは蜥蜴人リザードマンの誇りを賭けてぶつかり合う。その場の全ての蜥蜴人が、二人の激戦に時を忘れて魅入られた。

あまりにも素晴らしい一戦は、蜥蜴人たちの誇りをも取り戻すものとなった。巨大なゼンベルが小さなクレマンティーヌに蹂躪された衝撃も、魔樹に集落の全てを破壊された絶望も、ゼロから集落を再建しなければならぬ苦しみも、今だけは忘れることができた。

周囲の蜥蜴人リザードマンたちは、この戦いの後にどのような運命が待ち受けているかを知らない。しかし、それは知る必要も無いことだ。

彼らの運命を決めることができるのは強者のみ。それが彼らの生き方なのだから。

第七章 漆黒と蒼の薔薇

二八 その闇妖精は私の見立てでは一流だ

——例年の戦争のことを考えねばならないこの時期に、国家存亡の危機と来たか。

エ・ランテル都市長パナソレイ・グルーゼ・デイ・レットンマイアからの書状を読み終えたエリアス・ブランド・デイル・レエブン——レエブン侯は、開いておいた机の引き出しをそのまま閉じ、書状を二つに分けて懐へ隠した。防諜対策の尽くされた執務室の鍵のかかる引き出しには今年の戦争に備えて集めた様々な資料が収められているが、これを収めるのに相応しくないということだ。

レエブン侯は王宮の諸日程を確認し、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフを呼んで行われるであろう宮廷会議の時期を逆算する。あらゆる予定を後倒しにしても、必要な情報を手元に確保し整理するには時間が少し足りない。

「しかし——冒険者か、どうする？」

答える者は無い。苛立つて机を叩く音さえ漏らさないこの執務室は、レエブン侯が普段薄い笑いの下に隠している怒りや焦りといった感情を出すことが許される唯一の場所だ。

——充分に王子と話をしてあげれば良かったのだが。

第二王子はいくらか物分りが良い程度の凡庸な男だが、それなりに話をできる関係にはなっている。本来なら積極的に関係を築くほどの存在では無く、王位を継ぐことがあつた場合にそれから関係を構築しても充分かもしれない程度の存在だが、王国の国力は既に衰えすぎていた。物分りの悪い第一王子が王位を継げばこの国はもたないため、レエブン侯は少し前から第二王子に接近していた。

しかし、何らかの危機が目に見える形で訪れたならともかく、今の段階で第二王子を巻き込む前提のみで行動するのは性急に過ぎる。数年かけて取り組まなければならぬ国力衰退の危機に対しじっくり準備しているとところへ、別の危機をいきなり突き付けられても困るのだ。かといって、他派閥にこうした事態を相談できる者が居るわけではない。優秀な者は全て自らの派閥に取り込んでしまっており、数年かければ様々な事態に対処できるものの、逆に今すぐとなると出洩らし同然の他派閥の存在が重荷になってしまう。

あとは王宮に——未知数な部分も多いものの——ただ一人いるにはいるが、第二王子を巻き込まずに接点を作る場合も想定すれば色々面倒が——。

「王子とも時間を作らねばなるまいが、とりあえずは……あの馬鹿でいいか」

レエブン侯は机から便箋を出し、王国六大貴族の末席とされているリットン伯に宛て

て適当に書状をしたためる。近年、王家の血を引き込むことを狙っている彼は、独身の貴族としては最も家柄が良いだけのつまらない男だ。

——土産も用意しなければな。今の時期で奴の領地だと……あれか、あれだな。

部屋を半歩出て鈴を鳴らし従者を呼び出すと、すぐに用意するべきものを指示し、比較的最近部下になった者たちを呼ぶように伝える。

「戦士長の方はそれでいいとして、あとは……」

「レエブン侯、屋敷に留めてある冒険者たちはいかがが致しましょうか」

「冒——ああ、あれだったら彼らに任せてある。客人としてそれなりの部屋と、そうだな、食事は彼らと同じものを提供してやってくれ」

レエブン侯に手紙を届けた『漆黒の剣』の四人は、その屋敷を出ることを許されなかった。

「先に言っておくが、俺たちはお前たちを監視する以外の命令は受けていない」

「大人しくしていれば大丈夫ってことだ」

『漆黒の剣』を屋敷内に押しとどめたレエブン侯の部下だという五人は、そこそこ歳はいつているようだが、鋭い眼光と引き締まった身体つきは現役の冒険者とくらべても遜

色の無いものを持っている。鎧までは着ていないが思い思いの武器を身につけ、暴力を生業とする者特有の雰囲気纏っていた。武装を預けることなく屋敷に入ることができたのは、『漆黒の剣』ではこの五人に遠く及ばないと見做されたからなのかもしれない。

「パナソレイ様は清廉な方と聞いている。手紙の内容にもよるが、運び屋を消さねばならないような事態にはなるまいよ」

「清廉……であるか」

「手紙の内容なんかで対応が変わるんですか？」

「二ニヤー！」

「ペテル、ここまで来て遠慮しても仕方ねーと思うぜ。で、あの手紙は俺達を追放する口実だと思ってたんだけど、どうなんでしょうね」

レエブン侯の部下の言葉を、素直に受け取る者は居ない。都市長に裏切られ、冒険者組合に切り捨てられた身だ。手紙を届けた先で軟禁されるとなれば、全てが繋がっていると考えてしまうのも無理は無い。

「お前ら、銀級程度でちよつと自意識過剰じゃねえか？」

「つてか、落ち着けよ。そんなのここで聞かれてもわかるわけないだろ」

「……それでは、帰してもらえますか？」

「数日は無理。……見ればわかるだろう。俺たちも仕事なんだ」

「俺らも歳をとったってことだな。仕事でも後に続く若いのを潰したくはない。穏便に行こうぜ」

その男たちのうち、特徴的な装備を持つ者に気付いたニニヤが顔を上げる。同程度の剣を四本というのは珍しく、チーム全員の武器の質の良さや見た目の年齢をあわせれば候補は絞られる。

「あなたたちは、もしかして平民の希望の星と言われたオリハルコン級の——」

ニニヤが挙げたのは、かつて王都で人気があった、全員が平民出身のチームとして最高位にあつた者たちの名だ。

「ああ、昔はそんな風と呼ばれていたな。平民の希望なんていっても、金になれば貴族の依頼も大歓迎だ」

「もちろん、相手は選ぶ」

「今の依頼主は、ああ見えて人相以外は悪くないお方だ」

監視役は、かつて王都で活躍していたオリハルコン級冒険者チームだった。全員が平民出身者のチームとしては王国内で最高位だったことで知られており、貴族嫌いのニニヤは聞きかじったその噂話を日記に残していたほどだ。

遙か格上の存在を前にして銀級の『漆黒の剣』は抵抗を諦め、話をしていくうちに若

干の好意と共感を覚えるようになっていく。そのまま、追放されたと考える理由まで口を滑らせてしまったのは、かつて王都で平民の希望の星とまで謳われた彼らの名声や、人当たりの良い話術のせいばかりではない。『漆黒の剣』は、極度の緊張状態から解放されたばかりで、心が緩みやすくなっていたのかもしれない。

彼らはエ・ランテルから王都までの長い旅路において、ずっと疑心暗鬼の中にあつた。幸いザックという男を八本指の暗殺者から守るといふ仕事を与えられていたため、常に武器を携行し、王国戦士長の動向を窺い、いつでも逃げられるように神経を張り詰め身構えて過ごしていた。先輩冒険者チーム『クラルグラ』からは口止めの可能性を否定されていたが、王国最強の戦士長の存在をひとたび敵かもしれないと認識してしまうと、それからの旅路は悪夢のようなものとなつた。

戦士長のみならず戦士たちの存在全てに大きな圧力を感じるようになる、逆に犯罪者であるザックと接している方が気持ち安らぐほどだった。妹を探していたというザックと姉を探すニニヤは、ザックが罪を着せられたペンダントの件でのニニヤの負い目もあつて、ザックに余罪があることも忘れて話し込むこともあつた。

レエブン侯の屋敷に軟禁されながらも、『漆黒の剣』の四人は久しぶりによく食べ、よく飲み、よく話し、そしてよく眠つた。心配していた食事も、監視役の者たちと同じ鍋のものだったので安心して食べることができた。そもそも、ここはエ・ランテルから遠

く離れた王都リ・エステイーゼであつて、『血塗れの魔女』の息の掛かった者は居ない。監視役の五人は元オリハルコン級冒険者で、殺すつもりならとつくに殺されているところだ。手紙に関連する会議まで屋敷から出せないと伝えられているのも、単に貴族間の関係を秘匿しなければならぬ事情なのだろう。

ガゼフは宮廷で行われた会議を振り返る。

その場における『カルネ村の協力者』に対する貴族たちの態度は、やはり——いや、予想を超えて危険極まりないものだった。マーレのことをそのまま伝えていれば大変なことになったかもしれない。

曰く、胡散臭い女だ。

辺境に隠れ爪を研ぐ危険人物。

魔法学院を出た帝国の手の者かもしれない。

果ては、自分を売り込むために、彼女自身が襲撃をお膳立てした可能性を邪推する者

さえあつた。

——警戒心や敵意の方が、まだわかりやすいだけいい。

『カルネ村の協力者』について、警戒や邪推の声に対し薄い笑いを浮かべながら宥める者がいた。それは、「私欲ならば田舎者のつまらぬ傭兵と思えば良い」「危険ならば他国で存分に暴れさせれば良い」「帝国と法国がぶつかったなら好都合」と、怒りや敵意を皮肉な笑いに置き換えていく人物。

レエブン侯——ガゼフが最も警戒すべき存在と考える大貴族だ。

金髪を全て後ろに流して固め、切れ長の目に碧く冷たい眼光を光らせるその姿は、王派閥と大貴族派閥の双方に通じて利を求め蝙蝠のように動くこの男の隙のない狡猾さを象徴するものだ。しかし、この日は珍しく後ろ髪に乱れがあり、顔貌にも普段の不健康な白さだけではない疲労感がにじみ出ていた。

——法国と組んでいたのがこの男だとすれば、また何か危険な策謀でも巡らしているのだろうか。

貴族の中に裏切り者が居るのは明らかだ。その策謀は誰も予想しえないマールという存在によって打ち砕かれたが、それさえ無ければガゼフを囚える致死の罠として完璧なものだった。だからこそ、『カルネ村の協力者』に警戒心や敵意を持つ者の中に裏切り者が居るのではないかと思えたのだが——。

レエブン侯。普段は全く隙のない、冷たい蛇のようなあの男が、人らしい隙や存在感を感じさせるほどに憔悴している。

そして、会議での対応を見るに、彼は間違いなく何かを掴んでいる。『カルネ村の協力者』についての詮索を抑える方向に話を誘導しているのは有り難くも不思議なことには思えたが、彼こそが法国を動かした裏切り者だとしたら、今の王国が真の協力者と関わることの危険性を理解しているのは当然のことだ。そして、完璧な策謀が失敗したからこそ、その後始末か次なる策謀のためかわからないが、珍しく疲労した姿を見せているのかもしれない。

さらに、話題が他へ移った時、そこにあつたのは安堵だ。これは、彼にとつて危険な情報が——裏切り者たちの策謀の手がかりとなるような情報が表へ出なかつたことに對する態度だと考えるしかない。詮索を抑えようとしたのも、そのためだろう。

——やはり、王国を裏切っているのは奴だ。絶対にこの件に関わらせるわけにはいかない。

ガゼフは冒険者組合への道を急ぐ。『カルネ村の協力者』という緩衝材を一枚挟んでいるが、やはりこれは王国と接点の少ない冒険者に任せるべき問題だ。

ガゼフは、エ・ランテルの冒険者組合長アインザックの助言を反芻する。

——刺激的な話を控え、不確定な情報を排除して、難度は組合長の分析に従い百三十

から百五十。性格的な部分は同行を頼む以上は依頼の肝なのでしつかりと伝える。

あのエンリ一人でいつまでも対処できるとも思えない。『蒼の薔薇』に確実に依頼を請けてもらうためには組合長の助言に従うべきだろう。

王都で最も格式のある宿の一室では、アダマントイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のリーダーにして神官戦士のラキユース・アルベイン・デイル・アインドラが冒険者組合で「内密に」請け負ってきた仕事について、仲間たちに説明していた。

依頼について事前調査も行う組合で「内密に」というのもおかしな話で、普通に依頼をしても秘密はそれなりに守られるのだが、そういう依頼者が依頼内容も口にせず別室で待たされていたのだから仕方がない。

依頼者と依頼先の双方ともが特別な身分の者でなかったら、そして偶然旧友に会いに組合へ来ていたという元ミスリル級冒険者が親切心でラキユースの所在を探し出して困り果てた職員を連れて来なければ、依頼者は相手にされずに帰されていたかもしれない

い。もちろん、他人の親切心を疑おうとしない依頼者の真っ直ぐな性格もあつてのことだ。

依頼者は、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。その仕事の内容は、曖昧で、厄介で、依頼としての要件が色々足りないもの。アダマンタイト級でも敵わないような強力な存在と同行し、可能な限り懐柔し、味方とならないまでも王国の敵に回らないように務めることだというが、終わりが定義されていないのも組合での依頼にはそぐわないものだ。敵に回らないようにと言いながら、最終的には友人か仲間にするような形を想定しているのかもしれない。

その者——マールという名の闇妖精ダークエルフの少女は、王国の味方とも言い切れない態度を見せ、また公然と死者を道具のように扱うなど性格に大きな問題があるようだが、王国戦士長とその戦士団が危うく全滅するところだった恐るべき敵を一人で倒したという。その敵が、かつて『蒼い薔薇』が戦い痛み分けに終わったスレイン法国の特殊部隊『陽光聖典』となれば、敵対することは非常に危険なのは間違いない。

ただ、その者は現在、エンリ・エモットという少女と行動を共にしている。そのエンリこそ、ガゼフが宮廷会議で『カルネ村の協力者』と呼び、マールの存在を隠蔽することに協力している存在だ。

エンリの正体は「よくわからない」という。ガゼフも当初は「ただの村娘だと思って

いたのだが」、元々彼女がマールを村へ連れてきていたこと、マールとともに冒険者となることを勧めたところ気を遣ったのか自信があるのか自分一人で冒険者登録を行ったこと、そして何より冒険者組合長の評価が高くガゼフの知らない間に実力者と見做されていたことから、ガゼフもその評価を改めたいらしい。

とはいえ、そのエンリもマールとの同行を渋っていたのをガゼフが無理に頼み込んだに過ぎない一時的な関係で、その立場を引き継ぐことが『蒼の薔薇』への依頼だった。

なお、依頼に際しては組合が絡んでしまったので、情報を伏せたいガゼフの意思も尊重しつつ、組合を通すのはその一部——『カルネ村の協力者』の素行調査のみということにして、それ以外の部分は組合を通さずに請けるといふ形を取ることになった。

「大変な仕事だけど、今の王都では……いえ、王国全体で考えても、私たちの他にできる人が居ないの」

仲間たちを前に、ラクユースは熱っぽく語る。こうなっては、他のメンバーではなかなか止められるものではない。

「……ふん、ラクユースは英雄譚が大好きだからな。さぞ楽しかったろう」

「確かに、鼻息は少し荒いけど」

「乙女の荒い吐息……悪くない」

呆れ顔の小柄な少女は魔法詠唱者のイビルアイ。茶化すティナと匂いを吸い込むような動作をするティアは双子の暗殺者だ。

「おいおい、そんな呑気な話じゃないだろ」

「そうよ。陽光聖典とは私たちも戦ったけど、あの時は追い払うのが精一杯だったじゃない」

緩む空気を咎めるのはガガーラン。身体の全てが巨岩のような、顔つきから逞しい筋骨隆々の女戦士だ。ラキユースも過去の戦いを挙げて慢心を諫める。

「状況が違うな。その闇妖精は、私の見立てでは二流だ。そう買ひ被るものではない」

「さすが、自信と態度は超一流のイビルアイ」

「強い子供って所が被ってるから気に入らない？」

小ぶりなソファを大きく使ってふんぞり返るイビルアイ。少女のような外見と異なり、その態度は『蒼の薔薇』で最も大きい。

「でも、人間がひしやげるほどの打撃ってことは、魔法も使えて直接攻撃もできるってことで相当なものじゃないのか」

「私も使うが、近接戦闘用にも使える攻撃魔法もある」

ガガーランの疑問に答えるイビルアイ。得意な水晶を扱う魔法の中には、槍や短剣の形でそれを撃ち出すものもある。

「でも、陽光聖典を一人で倒したことはないんじゃない？」

「ふん、ストロノーフとその部隊を死ぬ寸前まで囲抜いていいなら、私でもできるぞ。戦士団はゆつくりと傷を治してからの帰還だったそうじゃないか」

「確かに危うく全滅するところだったって言ってたけど……」

「そこが問題なのだ。その状況であれば、魔法詠唱者としての王道は、戦士たちの支援を再優先にした戦い方だ。隙を見て天使や召喚者に仕掛ける場合も前衛が瓦解しないように細心の注意を払わねばならない。それに対し、闇妖精ダークエルフがいきなり敵の隊長を狙ったのは、戦士たちを踏み台とする問題の多いやり方だ」

イビルアイが語るのには、冒険者としての魔法詠唱者マジック・キャスターの戦い方だ。

「仲間の信頼が得られないやり方では二流だってこと？」

「……言うと思った」

「リーダーの中ではそれでいい」

「よくわからんけど俺が仲間なら終わったあとでぶん殴る」

「それは殴ってもいいとは思いますが……ティアとティナだけはわかってるようだな」

「当然。私たちの世界でも想定外に備えないのは二流」

「前衛を盾として使い潰した後で敵の増援が現れたら対処できない」

「その通りだ。自分を強く見せる方法をわきまえてるだけで、我々の脅威とも言えな

いな」

ティアとティナ、そしてイビルアイが胸を張る。それを見て、ガガーランが悪戯っぽい笑みを浮かべ口を開く。

「つまりあれか、負けたら蒼の薔薇に入れ、とか言えば自信満々で戦いに応じるタイプってところか」

「なっ、一緒にするな！ 私なら戦士団の支援に回るさ。それでも私の強さは肌で感じられるだろうからな」

古傷を突かれて顔をしかめながらも、イビルアイの態度は大きいままだ。

「強さは見せつけないんだ」

「うるさい。……それから、奇襲で隊長を失って浮足立つ相手を範囲魔法で刈り取って全滅させたのも同じことだな。その状態でも戦士団の支援だけで充分で、魔力も温存できる。やはり攻撃魔法ばかりに頼るのは二流ということだ」

「いつも見せ場を譲ってくれてるわけじゃなかったんだな」

「そうだ、私たちも温存しよう」

「賛成」

「それには反対ね」

「……鬼リーダー」

「温存、鬼ボスにこそ必要な言葉」

「……回復魔法を温存しようかしら」

「ふう……つまりだ、そこで盾役の戦士団を総崩れにしても自分を強く見せようとした闇妖精は、ダークエルフ実際のところは——」

「たいしたこと、ない？」

「そうだ。そのマールとやらは、ストロノーフには手に負えないかもしれないが、私より弱い。魔法に無知なストロノーフは騙せても、私は騙せんぞ」

ラクユースから依頼の概要を聞いていた時は緊張感に包まれていた『蒼の薔薇』の面々だったが、イビルアイが言葉を重ねるごとに場の雰囲気は和らぎ、今は当初の緊張感是完全に霧散してしまった。

「まあ、参考程度とは言ってたけど、エ・ランテルの組合長判断での想定難度は百三十から百五十らしいし、そんなところかもしれないね」

「組合長が想定難度で表現したくなるほど警戒されてるのか」

ラクユースの示した普通のアダマンタイト級冒険者では困難な数値とは違う部分に引っかけりを感じ、ガガーランが顔をしかめる。

「直接見てもいない人間が出す数字は眉唾」

「エ・ランテルくらいなら難度で百も超えたら大騒ぎ」

「たとえ実際には百程度だったとしても、それを警戒しすぎるのは悪いことじゃない。性格に問題があるようだし、広範囲魔法の使い手を王城に呼び込むリスクを考えたらストロノーフが慎重になるのもわかるしな」

ティアとティナは否定的だが、イビルアイは弱者が弱者なりに警戒心を持つことは大切なことだと考えている。魔法詠唱者を下に見て、ろくな対策もせず情報がダダ漏れになっているこの王国にあつては、特にそれは必要なことだ。その結果、自分がラキユースと共に王城に出入りできなくとも——いや、出来ない方があるべき姿だとさえ思う。

「根性が曲がつてる。たたき直す？」

「子供だし、やつぱり泣くかな」

わざとらしくちらちらとイビルアイの方を見るティアとティナを、イビルアイは口への字に結んで無視する。

「そういえば、戦士長と陽光聖典を天秤にかけている様子もあつたっていうけど、陽光聖典に味方しようとする存在なら仲良くできるとは思えない。最悪、戦いになるかもしれない」

かつて『蒼の薔薇』が陽光聖典と遭遇して戦いになったのは、敵種族だからといって平和に暮らしている村を丸ごと殲滅しようとする彼らのやり方が許せなかったからだ。

ラキユースは、その陽光聖典に味方するような存在ならば仲良くできるとは思わない。

「いや、本当に天秤にかけていたらストロノーフは生きて帰れなかつただろう。そうやって相手を油断させて奇襲を成功させたと考えるべきだな。そのために自分も部下もボロボロになって罔を務めさせられたストロノーフは気に入らないだろうよ」

「なるほど」

「寝返るフリしてやつちやつたのね」

「そもそも常識で考えてみる。闇妖精ダークエルフがあいつらに味方したがると思うか？」

「まず、無い」

「寝返ると思う方が馬鹿」

陽光聖典の属するスレインスレイン法国は人間至上主義の国で、森妖精エルフの国とは戦争が続いている。その国民感情は、闇妖精ダークエルフなど近い種に対しても相当に悪い。人間以外の種族の者が、かの国の特殊部隊に味方する理由は乏しい。

「だから、騙し討ちをしなければ勝てないと考えたのか、あるいは——」

「そういうえば、陽光聖典は全員殺されてしまつて、捕虜が取れなかつたつて……」

「それだ。騙し討ちにしても皆殺しにしたかつたと考えられるし、その両方かもしれない。ストロノーフは甘いから、殺すのを止められないように盾代わりにしたのかもしれないな」

「ここで、ようやく陽光聖典の壊滅という結果に繋がる。数十人の部隊を、一人の捕虜も取らずに皆殺しというのは尋常ではない。」

「まさか、そんなことのために……」

「リーダーも甘いからわからない」

「法国では森妖精^{エルフ}は奴隷。闇妖精^{ダークエルフ}も迷い込めば似たようなことになる」

「でもよ、一緒にいる協力者つてのは、強いのか弱いのかわからんといつても襲われた村かそのあたりの人間なんだろ。そいつの立場なら復讐を頼んでも仕方なくねえか？」

「そうよね。陽光聖典の別働隊は実際に幾つかの村を襲っているし、こんな役目を引き受けてくれるのだからそういうこともあるかもしれない」

ガゼフは協力者に「申し訳ないことをしている」とは言ったが、さすがにどういう頼み方をしたかまではラキユースに説明できなかった。

「——ともかく、戦いの可能性もあるけど、できれば平和的に関係を築く。難度は絞りきれてないけど、依頼者から出たのは百三十から百五十で、この場の予想は百から百五十。今やっているものより緊急性が高いので、皆が良ければ近日中にエ・ランテルに向かうことになるけど、それでいい？」

異論は出なかった。この時期、『蒼の薔薇』は王国をゆっくり蝕みつつある病巣との静かな戦いに取り組んでいたが、それを後に回してでも目の前の危機をどうにかしなければ

ばならない。但し、マーレの難度が低い方に振れるか、とりあえずの安全が確保できた場合、ティアとティナはすぐに王都に引き返して元の戦い——王国を蝕む病巣の調査に戻ることになった。二人が「鬼ライダー」「鬼ボス」とぼやく姿は『蒼の薔薇』では通常営業だ。

『蒼の薔薇』が今取り組んでいる仕事を後に繰り延べるため、ラキュースとティア、ティナの三人はその依頼主でありラキュースの友人でもある第三王女ラナーのもとを訪れていた。もともと、調査でそれなりのものを得るにはあとひと月以上かかると見込んでいたのだが、王都を離れるとなればきつちりと話をしておかねばならない。ガーランとイビルアイは、王宮のような堅苦しい場は苦手だとして宿に残っている。

調査対象は、王国に流通する麻薬の製造拠点だ。聡明な王女ラナーは麻薬をはじめとする王国を蝕む様々な病巣を憂いていたが、第三王女ともなると王家においてその存在は政略結婚の道具にすぎず、政治力などを持たない。そのため、貴族の出で友人のラ

キュースを頼り、自らが自由に出来る金銭によって冒険者を雇う形でしかそういう問題に対処できなかった。

「私は、戦士長様が帰ってくることはまず無いと思っていたのだけれど」

宮廷会議には参加もできないはずのラナーの言葉に、ラキュースは目を丸くした。彼女はいつでも、狭い王宮の中で得られる乏しい情報だけで正解に近づいている。

そして、話題は王国戦士長の件に絡めつつ、八本指——麻葉だけでなく王国内の様々な犯罪に関わる巨大犯罪組織——へと移る。仕事を放り出して王都を出るのだから、ラナーのもとで情報くらいは整理しておかねばならない。『蒼の薔薇』における情報収集の主役であるティアとティナが現状を報告していく。それは自らの調査経過に留まらず、衛士たちが取り締まる犯罪の動向から市井に溢れる様々な噂話にまで多岐に及ぶものだ。

こうした情報の瓦礫の中からも、時にラナーは宝石のような価値あるものを拾い上げる。

「気になるのが、エ・ランテルから護送されてきたという、八本指の末端かもしれない情報を持った者です。暗殺のおそれもあつたと思うのですが、戦士団だけで守れるものなのでしょうか？」

「相手が本気なら無理」

「そこは護送のために冒険者が付いてたって話」

「それで、実際に襲撃はあったのですか？」

「特に問題も無く戦士団は到着したらしいけど……」

法国よる追撃を心配したラクユースは、王都に着くまでの間に敵の気配が無かったことを既にガゼフから聞いている。

「であれば、考えられる可能性は三つです。一つ目は、冒険者が八本指と繋がっていて、睨みが利いて末端の者は王都に連れてきても情報を吐き出すことができないか、既に身代わりとすり替わるなどしている場合」

「……手引きした冒険者を揺さぶるしかない」

情報を持ってきたティアは、すぐにすり替わりの方を考えた。護送されてきたのは誰から見ても小物と思われる男だったらしい。

「はい。そして二つ目は、八本指と関係は無いが、関係があるものと誤認したため護送した場合。もちろん冒険者は八本指と繋がる者で、疑いを解かせないよう誘導するのが目的でしょう」

「これも対処は同じね。でも、冒険者は指名で選ばれたみたいだけれど……」

指名依頼とは信頼関係によるものだ。少なくとも、ラクユースはそう考える。

「指名でも、実際には部下や冒険者組合が話し合っただけです。八本指の側に必

要性があれば、押し込むための手段はいくらでもあるでしょう。逆に、押し込むことに失敗していれば、本当の繋がりであれカモフラージュであれ、襲撃はあつたはずです」

「うーん、なるほどね……」

「最後に三つ目ですが、八本指とは関係が無く、関係があると誤認させるものでさえなかつた場合。これについては、護送自体は現地の犯罪組織について情報を吐き出させる条件と考えるにしても、冒険者をつけたのが不可解になります。……この場合、冒険者は何らかの理由で疎まれていたとかそんな感じでしょうが、国王直轄領のエ・ランテルではそういうトラブルはあまり——」

「今頃エ・ランテルの組合は大騒ぎ」

「その場合はエ・ランテルで何かあつたつてことだから、私たちにとつて価値のある情報を持つているかもしれない」

ティナの呟きに、ラキュースが反応する。この場合はエ・ランテルでの仕事に関わつてくる。

「では、王都を出る前にその冒険者について調べてもらえますね」

同行した戦士団の人間を探して聞いたところ、護送を担当した冒険者たちは銀級の『漆黒の剣』というチームだった。特徴をおさえて聞き込みをするも、その足取りは貴族の館が立ち並ぶあたりで途絶えてしまう。

そうして途方に暮れていたところで、当初何も知らなかった情報屋が不自然に情報を持ち込みに来た。冒険者がレエブン侯の屋敷に入っていくのを見たという情報だが、その情報屋が同時期に調査を始めてティアやティナよりも高い結果を出せる能力を持っているはずがない。念のため情報屋を調べても新たな情報源を開拓した様子も無く、そのような挑発的な形で情報を流したのは、部下に多くの有力な元冒険者を抱える大貴族のレエブン侯の手の者と考えて間違いないだろう。

数日ぶりのラナーの部屋には、いつもの紅茶に加えて果物の爽やかな甘い香りが漂っていた。

「残念だけど、悪い方の話みたい。既に冒険者はレエブン侯の屋敷に確保されているらしく、手を出せるものなら出してみろって意味なのかしら……わざわざ情報屋を使って知らせてきたわ」

「あれは王派閥と貴族派閥の間を彷徨う蝙蝠のような男」

「八本指との関わりもありそう」

「やはり、そういうことですか。……レエブン侯なら大丈夫です。せつかくなので、ここへ呼んでみましょうか」

「ええっ？　ちよ……何か知ってるの？　それに、レエブン侯って良いイメージが無いんだけど……」

「虚偽情報でも流して冒険者を引き離す？」

「化かし合いなら先に意図が知りたい」

「違うわ、テイナさんにティアさん。彼は八本指から見返りは貰っているけど、協力する側では無い……と私は見えています。また、もし八本指のために冒険者を確保するなら自ら動かず子飼いの貴族を使うはずですから、冒険者が八本指絡みという線はもう無いものと考えていいでしょう」

「……それはわかったけど、さっきのあれ、やはりっていうのはどういうこと？」

「ちようどレエブン侯にお返事をしなければならぬ件があるのです。それはとても、とてもくだらない件なのですが、彼はその際、エ・ランテルからの客人に私の部屋の薔薇を見せたい、と言っていたのです」

くだらない件というのは、ラナーとの結婚を望む貴族の売り込みのような話だ。今

テーブルの上に供されてティアとティナが食べている赤い果肉の果物がその貴族の領地の特産物として知られるもので、その時の土産物だというのが――。

「ん、それはおかしい。種が多い」

「これは値段だけ高くて食べにくい王都産」

「でしようね。おそらく、レエブン侯御自身が急ぎで用意させたものと思います」

「……私たちが目当てで、わざわざあのリットン伯なんかとの縁談を後押ししたわけ？

ラナーもいい迷惑じゃない」

「正確には、王女様の前にいる私たちが目当て」

「国のために働くのは冒険者としては例外」

「だからって……」

「私の提案する政策が貴族に不利なものが多いこともあって、色々な派閥から勘ぐられないよう必要な手間なのだと思います。だったらお兄様でも連れてくれば早いのですが……。ともかく、これ以上要らない後押しをされないよう、直接お会いして文句を言わなければ収まりません。協力してくれませんか？」

「もちろん。……ラナーがあんなのと一緒になるなんて想像したくもないし」

「ではクライム、レエブン侯を呼んで下さい。昨日の返事と言えば、程なく来るでしょう」

側に控えていたクライムという王女付きの戦士が、レエブン侯を呼びに走る。

ラナーとレエブン侯——王国の未来を憂う二人は、この場で胸襟を開くことはなかった。この時点ではそうする必要が無かったからだ。ラナーは時候の挨拶のようにあっさり縁談の売り込みを退け、レエブン侯は幾分申し訳なさそうにそれを受け入れる。

その後、レエブン侯は悪びれもせず、部下にガゼフを尾行させていたことを明かす。もちろん、『蒼の薔薇』のラキユースのもとへ冒険者組合の職員を連れてきた元ミスリル級冒険者も部下の一人だと認める。ラキユースは目を丸くするが、その仲間で盗賊系の雰囲気を持つ冒険者二人は納得の表情だ。

そして、ラキユースの顔色を窺いながら、エ・ランテル都市長パナソレイから連絡を受けたという件についてゆっくりと説明していく。それは、パナソレイから伝わった中で、ガゼフが依頼の際にラキユースに伝えたであろう最低限の部分だ。勿論、目新しい部分がるまで無いのもおかしいので、エ・ランテル上層部の危機感についてはしっかりと伝える。そして——。

「法国の件について、この他に何かご存知ですか？」

「依頼についてはお話しできませんが……」

拒絶感が薄く、少しの興味を見せるラキユースの反応に、レエブン侯は目を細める。

「では、念のためお教えしておきましょう。過日の法国における大災害は神殿勢力を直撃したことが確認されており、陽光聖典の件の意趣返しは心配しなくて良いと思われま

す」

「……そうなんですか」

視界の端でラナーだけが怪訝な顔をしている。当たり前前だ。こちらはパナソレイから得た情報を基に話をしているのだから、「法国の件」もその情報によるものに決まっている。

そこで情報源の違う話にすり替えたのは、ガゼフがあえて伝えなかつたであろう部分に触れることを避けるためだ。ラキユースの反応を見るに、法国大災害との関連性は伝わっていない。

「そういうわけで、私も安心して部下を送り出せる状況です。ストロ……いや、理由はどうあれエ・ランテルに向かう可能性のある貴方がたに、戦力の追加が必要か聞きたいと思ひまして」

「何を ご存知かは知りませんが、私たちは実力に見合う仕事しか請けません。ご厚意だけいただいております」

「連携が無い戦力に意味は無い」

「都市長に恩を売りたいければ勝手に部下を送ればいい」

受け入れられても困るので、想定通りの答えで助かる部分だ。

「……状況が知りたいので送りますが、何の対処もできないでしょう。ただ、情報源としてエ・ランテルから来た冒険者を確保してあります。折角なので、貴方がたにも彼らと話をする場を提供しようかと」

「ムシのいい話」

「……そのことに、レエブン侯のメリットはあるのでしょうか？」

「あちらへ送る私の手の者に、そちらが出て構わないと思える情報を随時頂きたい。それだけで、こちらでも勝手に動く必要も、リスクを取らせる必要もありませんので」

「部下の方々を無断で対象に接触させないとお約束いただけるのなら、それで良いでしょう」

ラクユースの条件も想定内のものだ。レエブン侯の持つ戦力は、元オリハルコン級冒険者まで含まれる。対象の難度を考えればどうにもならない実力ではあるが、その気になれば『蒼の薔薇』の足を引っ張ることは十分に可能となる。

ラクユースは仲間が頷くのを確認し、レエブン侯の提案を受け入れた。エ・ランテルから来た冒険者との会見の場は、レエブン侯の屋敷だ。

ラキユースらはラナーの友人としてここに来ている。レエブン侯の屋敷へ向かうにしても当然ながら王城から同行するわけにはいかない。レエブン侯が「何かあれば、今後は迂遠な手を使わずいつでもクライムに手紙を」というラナーの言葉に申し訳なさそうに一礼して去り、『蒼の薔薇』はしばらく紅茶を楽しんで時間差を付けてから出ることになる。

「ラナー。ここから、しばらくは別の仕事になってしまおうけど……」

「元はといえはその冒険者との接触も私が頼んだことですし、緊急性が違います」

「……ありがとう」

「くれぐれも、無茶だけはしないでくださいね」

二九 殺人者の鎧と巨大な貴婦人

ラナーはレエブン侯の話で一応の状況を把握したが、ガゼフの依頼については聞いていない。それは、冒険者として誠実なラキユースには聞いても仕方のないことだからだ。

マールという闇妖精ダイクエルフが、法国の特殊部隊を殺し、冒険者となった『カルネ村の協力者』に同行する意味。そこには、並び立つ者が居ないほど卓越した思考力や洞察力を持つラナーを以ってしても見通しきれない、深い闇のような部分が残っている。

レエブン侯の話から、王国やガゼフへの好意や情による行動だったという線は無い。エ・ランテル上層部の警戒心から、それだけは明らかなことだ。

かといって、殺戮を闇妖精ダイクエルフとしての法国への敵対的感情のみで片付けるには、その後の行動において人間に関心を持ちすぎている。

内面も見た目通りの子供であれば衝動的な殺戮も考えられるが、ただ一人冒険者となった『協力者』の影に隠れて大人しくしていることと矛盾する。

今の王国に肩入れする理由など闇妖精ダイクエルフの強者にあるとは思えず、あちらの立場で利用価値すら思いつかない。

それでは『協力者』に何かがあるかというところ、国境近くの開拓村にそういう者が都合よく存在している理由が無い。隠遁するならもう少し平穏な場所だろう。凡人か、あるいは元々マーレと関係があつたか……。

結局、わかつているのはマーレがスレイン法国を敵視しているということだけだ。

ただスレイン法国と敵対する者が身を潜めるのなら、王国というのは悪くない。王国は人間の国家の中で最も風通しが悪く、素性の知れない者たちの居場所が豊かだ。いずれ八本指などに協力すれば多額の財貨も簡単に得られるだろう。

その場合、『蒼の薔薇』の申し出はどうなるか。同行した場合、財貨の面ではせいぜい共に冒険をしてアダマンタイト級の報酬を分け合うのみで心許ないが、戦力の面では無視できるものではない。『蒼の薔薇』が敵に回るデメリットを考え合わせれば、八本指の財貨より『蒼の薔薇』の戦力を選ぶのが妥当な選択だろう。

それでは、マーレが『蒼の薔薇』の戦力など無視できる存在だった場合は――。

全ての前提が崩壊する。八本指の財貨に転ぶというわけではない。そのような者は財貨の誘惑すら意味をなさないからだ。

ラナーは貴重な手駒を失う可能性を考える。

ただ、『蒼の薔薇』は、直接その力を目にして実際にマーレと話もしているガゼフから直接依頼を受けている。ここにある情報だけで判断するよりは慎重な行動が取れるは

ずだ。

——あのイビルアイ以外は。

もつとも、そのイビルアイも強者ゆえの尊大さを備えているだけで人間の善悪には興味が薄い。もし今回の法国側の意図——おそらくは、人類にとつて有害な、不甲斐ない王国の排除——を聞けば理解を示しかねないところさえある。仲間のために戦うならともかく、彼女自身が受容できない悪というのはあまりないだろう。国を滅ぼしたという自らの過去への強い嫌悪感に比べれば、物事の善悪への感情も薄まりがちなのかも知れない。その闇妖精を幾らか侮ることはあつても、衝突に繋がる要素は今のところ見当たらない。

つまり、個々の情報を見れば、現状でも問題は無い。しかし、不確定な部分が多く、その中には不気味さすら感じる部分も残っている。

やはり、情報が足りない。それはレエブン侯も同じなのだろう。手持ちの情報源を『蒼の薔薇』に引き合わせてでも、少しでも多くのものを得ようと考えている。その者たちを王城（こ）に連れてきてもらうわけにはいかないのが残念なところだ。後でも、レエブン侯にその時の話を聞いておかなくてはいけない。連絡手段は用意したが、こちらは受け取るだけなので——。

——クライムにいちいち余計な事を言うから、なるべく関わりたくなかったのだけ

ど、仕方ないか。

それでも、犬のように忠義を尽くしてくれる大切なクライムには、日頃から兄の言葉に動揺しないよう手は尽くしてある。

とりあえず、兄にレエブン侯の不躰な売り込みを言いつけておくしかないだろう。兄が何を企んでいるのかと問えば事も早まる。こちらが兄を巻き込む構えを見せる場合、兄の信頼を固めておかねばならないレエブン侯としては自分の口から兄に状況を説明せざるをえなくなる。

その後のことは——レエブン侯からの情報は次へ備える参考程度にしかならないが、そういう場があれば他にやりたいこともある。

マーレについては、結局は、『蒼の薔薇』次第だ。そして、王国の未来を切り拓く力を得るにせよ、滅びを早める脅威に備えるにせよ、早い段階でその闇妖精ダイクエルフの性質を知っておくことで、個人的な活路くらは見出だせるかもしれない。

ラナーは王国が滅ぶ事には何の痛痒も感じない。元々、ゆつくりと滅びの道へと進むこの国を微力ながら支えようとしていたのは、大切なクライムを手放さず生きる道を模索する時間を稼ぐためではない。ラナーが守りたいのはクライムという愛しい忠犬と、忠犬から無邪気で純粋な尊敬を向けられる時間だけだ。

そのためには、友人として付き合っているラキュースと『蒼の薔薇』の運命さえも、手

駒としか考えない。最高位のアダマンタイト級冒険者である『蒼の薔薇』の価値は決して低いものではないが、仮にそれが失われるような異常な状況ならば、そのことで得られる情報の価値はラナーにとって『蒼の薔薇』そのものよりも大きくなるかもしれない。「そんな都合よく、大きな変化が起こるとは思えないけれど」

まだ温かい紅茶をカップへ注ぎ、砂糖を三杯入れる。銀の砂糖杓シユガーレイドル子が輝きの欠けたラナーの瞳を逆さに映し出し、中身の無くなった陶器の器に戻された。

『蒼の薔薇』はレエブン侯の屋敷でエ・ランテルから来た銀級チーム『漆黒の剣』から話を聞いた。傍らには、情報収集に協力するという名目で、レエブン侯配下の元オリハルコン級冒険者チームの五人。彼らが『漆黒の剣』を軟禁しつつ、その心を解きほぐしておいたらしい。

『カルネ村の協力者』である少女、彼らの言うところの『血塗れの魔女』ちまみエンリについての話は、ラキユースにも仲間たちにも信じがたいものばかりだった。

「一言で言えば、ド外道」

「人面獣心の少女である」

「最低の冒険者ですが、大胆に見えて巧妙です。裏では冒険者組合長とも繋がっています」

「幼い少女を奴隷にして愉しむクズです。王国では許されませんが、誰も止められないんです」

まずは、ガガーランドころではない異常な怪力。指先で狼の頭蓋を抉るという話は人間のものとも思えない。そこまでなら、興味を煽られるだけの存在だった。特別なアイテムによるものか、魔法によるハツタリか、筋骨隆々の大女か、などと『蒼の薔薇』も盛り上がる。

しかし、興味をそそられるのはそこまでだ。エンリが「玩具」だという人間の少女の奴隷を連れていくという話になると、『蒼の薔薇』の全員の表情が引き締まる。少女は外套の下に裸同然の薄絹というあられもない格好をさせられていて、『漆黒の剣』からの追及に対してエンリは挑発的な態度で開き直ったという。

そして、あらゆるマジックアイテムを使用可能という強力な生まれながらの異能を持つ男に接近している。『漆黒の剣』はエンリの方に危険を感じているようだが、マーレのような強者であつても十分に利用価値を考えそうなものだ。

その男の家に滞在するエンリを襲撃した女の末路も凄い。その女は高位の冒険者を殺害した証を大量に身につけ、戦士団の二人を一度に倒すほどの強力な戦士だったが、あっさりと返り討ちにあつて、回復魔法を併用した酷い拷問を受けてエンリの奴隷にされたという。

結局、『漆黒の剣』は、手に負えないと見て少女の件だけを偽名で通報したところ、その日のうちにその偽名宛ての指名依頼で王都へ送られてしまった。勿論タダでは去らず『クラルグラ』というミスリル級チームに情報を託してあるため、彼らが『血塗れの魔女』について注意を払っているはずだという。『漆黒の剣』はエ・ランテルの都市長も冒険者組合も腐っていると憤るが、マールレに対するエ・ランテル上層部の警戒心を考えれば対処に困るのは当然のようにも思えた。

「私たちなら彼女を止められる。後は私たちに任せて」

ここは、そう言っておくしかない。銀級チームでは手に負えないどころではなく、下手をすると命が無かったかもしれない相手だ。情報を託されたというミスリル級チームも『漆黒の剣』の熱意を引き継ぐかどうかはともかく、彼らをこの危険な相手から遠ざけるために同じような態度で情報を受け取ったに違いない。

「ボリスさん、『蒼の薔薇』と合同なんて王都最大戦力じゃないですか！ 凄いですか！ 凄いですか！」

目を輝かせる少年を前にラキュースは言葉に詰まる。『漆黒の剣』は小柄な

魔法詠唱者の少年を中心に、レエブン侯配下の元オリハルコン級チームを慕っているらしい。彼らも現役時代は王都でもかなり人気があったので無理も無いことだ。

彼らが目で合図をしてくるので話を合わせていたら、この屋敷内限定で名称未定の臨時合同チームが組まれたことになった。その場で互いに自己紹介まで始める羽目になり、後輩をダシにして少しでも協力関係を築こうとする彼らの老獪さに呆れそうになったが、ボリスと呼ばれた彼らのリーダーも気まずそうな苦笑いを浮かべていた。

その後、情報を全て出し尽くした『漆黒の剣』の四人はレエブン侯の許可を得て宿へ帰した。数日間の軟禁だったが、「迷惑料でも情報料でも好きに考えろ」「冒険者なら遠慮無く受け取っておくものだ」として渡されたレエブン侯からの金貨袋と、エ・ランテルの問題に王都の最大戦力が当たるといふ安心感もあつて、全員が気分よく帰つていった。

「若いのに懐かれると良い顔をしたくなるのさ、歳を取ればわかるだろうよ」

「そういう歳のとり方ができるといいですね」

「お前ら、こつちを見るな」

元オリハルコン級チームのリーダーの言葉に反応して『蒼の薔薇』全員の訝しげな視線が集まり、イビルアイが仮面の下から不機嫌な声をあげる。態度は元々大きく顔を隠

して声も変えているので、年長者扱いしても問題ない場面だ。

「それにしても、組合丸ごとが不正を行つていような場合、どうすればいいんでしょう」

「うちの雇い主に相談していきなよ。領^{エ・レ・エブル}内の組合で何かあつた際の対処法を決めてあるくらいだから」

「貸し借りとかは考えなくていいですよ」

「そうそう。若い奴らの前で格好つけさせてくれただけで充分だ」

勧められて聞かせてもらったレエブンの「対処法」にラキユースは気乗りしなかったが、他の仲間全員の賛同があり、他に有効な手段が見当たらない状況では仕方がない。それに従つた準備を済ませ、翌日には『蒼の薔薇』は王都を離れエ・ランテルへ向かった。

エ・ランテルに到着した『蒼の薔薇』は、冒険者の居る宿や冒険者組合に立ち寄るこ

となく、真つ直ぐ都市長のもとへ向かった。

『蒼の薔薇』の名を出すだけで、都市長バナソレイ・グルーゼ・デイ・レットンマイアとの会見の場はすぐに用意された。バナソレイはその風貌からも接した雰囲気からもあのレエブン侯が手紙のやり取りを秘匿するほどの相手とは思えなかった。

「きみが『あおのぼら』のらきゆうすくんか。え・らんてるへようこそ」

言葉の脇から、ぷひ、ぷひーという音が漏れる。鼻が詰まっているのだろうが、切羽詰まった音を出してヒクつく鼻先は豚か太ったブルドッグのような雰囲気だ。これから追及をしようという気分には水を差されながらも、挨拶もそこそこに『漆黒の剣』の告発と追放について聞いただしていくが――。

「ふむー。わしはちとわからんなー。ぼうけんしゃのぎわくなら、こくはつをうけたものがくみあいにといわせをしたのではないかね？」

秘書官のような人物が、「おそらく、組合で調査されたことでしょう」「指名依頼は勇氣ある告発を評価した現場の判断かも」などとそれらしいことを並べ立てていく。本当にこの件に関心が無いのか他意があるのかはわからないが、最低限の成果は得られた。これで冒険者組合は、エンリが連れている奴隷の少女について知らぬ振りはできないことになる。

「ぷひー。ふせいがあるのなら、ぼうけんしゃどうしで、ちやつちやとかいけつしてほし

いものなんだがね」

「それでは、その許可はいただけますか？」

ラキュースはレエブン侯から教わった「対処法」に従い、冒険者組合でこれから行うことを説明した上、書類にサインを要求する。そこには、ティアが交渉材料（よわみ）と引き換えに貰つておいた王都の冒険者組合長のサインもある。

「ぼうけんしゃやどうしのとらぶるに、かんしようするというのはね。ぷひー。わたしはちよつと……」

「干渉されないということを確認していただく書類です」

「それならわざわざかくことも……。いや、どうしてもひつようだというのなら、しかたがないな」

続くぷひーという音で、五人からの厳しい視線は幾らか和らぐ。パナソレイは震える手でサインをする。

「手紙と違う」

「ひとつがみなどみるものではないとおもうが、ぶかにかかせてばかりでできとうにやっているからね」

手の動きのままに震える文字をティナが咎めるが、パナソレイはさらに、自分は関わりをもたないという旨の一文まで加えていく。『蒼の薔薇』に解決を委ねたように見ら

れたくないのは、何らかの力が働いているからかもしれない。

「こんな字でわかるとは——」

「ぷひー。こんなじは、わたししかかかないよ」

ラキユースも顔をしかめるが、パナソレイは気にしていない。

「筆跡の特徴は一緒」

「問題ない」

「ご協力、ありがとうございます」

ティアとティナが書類に顔を近づけ、頷く。書類を受け取ったラキユースは都市長に一礼する。

「ぼうけんしゃくみあいがうごいていないと、ぶっそうだからね。よくわからないとらぶるはさっさとすませてもらいたいものだね」

「まるで他人事だな——」

「もちろんそのようにしますし、モンスター退治などが滞って都市に迷惑がかかりそうな事態となったら私たちも協力させていただきます」

苛立つガガーランを制するラキユース。都市長の態度に思う所はあっても、エ・ランテルの住民は守らなければならない。

「ターゲットは仕事に出てる。じっくりやれそう」

「チーム名は『血塗れの魔女』ではなくて『漆黒』というらしい」

「……元々そんなチーム名なわけないでしょ」

「おいおい、ふざけてるのか」

戻ってきたティアとティナの言葉に、ラキュースとガガーランが食事の手を止めて文句を言う。ここは冒険者の酒場ではなく、街の食事処だ。アダマンタイト級の『蒼の薔薇』ともなると冒険者の中では知らない者は無い。事を起こすまで、少しでもこの街の冒険者たちと距離を置きたいがゆえの選択だった。

「でも職員が一瞬迷った。街の冒険者の間でも『血塗れ』とかで通じるみたい」

『魔女』では通じないので魔法詠唱者ではない可能性もある。これが真面目な調査というもの」

ふふん、とティナが胸を張る。ティアは急に動きが早くなつたラキュースのスプーンとガガーランのフォークを見て何かを察知し、店員を呼ぶために手をあげようとするが――。

「それで、例の『クラルグラ』の協力は得られるの?」

「少し怯えてて、この店での待ち合わせは断られた」

「スラムの奥の方で待つてもらおうことになったけど……リーダー？」

ラキュースはティアの手をがっしりと掴んだまま、加速したスプーンでオムライスの最後の一口まで平らげる。いつの間にか肉料理を平らげていたガガーランと、大人しくしていたイビルアイまで加わり、ティアだけでなくティナの両手までもが完全に封じられている。

「それじゃ、早速会いに行かないとね」

「ちよ……まだ私たち食べてない」

「オムライス一食分くらいなら待たせても大丈夫」

ティアとティナの抗議の声を無視して、三人は席を立つ。

「ここは注文してから結構かかるの。怯えてるなら気が変わらないうちに会わないといけないわ」

「美味かったけど、まあ、また来ればいいだろ？」

「大丈夫、私はお前達の仲間だ」

三人が二人の腕を掴んで、引き摺るように店を出る。

「——鬼リーダーには、頑張った仲間をねぎらう気持ちが無さすぎると思う」
「空腹にむせび泣く仲間とほっぺにおべんと付けた鬼ボスの格差が酷すぎる」

スラムの奥で、建物に不似合いなほど頑丈そうな扉が破壊された廃墟が並ぶ一角。そこが指定の場所だ。盗賊団絡みの事件で王国戦士団が大挙して踏み込んでから、このあたりに近づく者は居ないらしい。その後すぐに盗賊団が壊滅したという噂も、それがたった一人の銅級冒険者『血塗れの魔女』によるものと言われれば一気に胡散臭くなる。そんなものは最近腐敗が噂される冒険者組合まで巻き込んだ茶番で、明日にも彼らが帰ってくるのではないかと考えれば、盗賊団に関わる者たちが使っていた一角を勝手に占拠できる者など居るわけではない。

協力者はイグヴァルジという男で、ミスリル級冒険者チーム『クラルグラ』のリーダーを務める男だ。当初『蒼の薔薇』に対しては値踏みするような視線を送ってきたが、ラキユースが礼儀正しく握手を求めると気分良く話に応じた。アダマンタイト級冒険者チームである『蒼の薔薇』が彼の想像より若かったことで戸惑いも見せていたが、対等な関係で話ができることで満足しているようにも見える。

イグヴァルジの話では、『血塗れの魔女』こと『カルネ村の協力者』は、おおむね『漆黒の剣』の話通りの人物のようだ。眉唾ものだったエンリの膂力についても、盗賊団壊滅後の事後調査では人間をバラバラに引き裂いた死体が幾つかあったという話から、実戦でも脅威となるものとわかった。

「耳の長いイビルアイと普通サイズのガガーランか」

「いや、ガガーランの普通サイズはこれだから、エンリは人型ガガーラン」

「私をあダイクエルフの闇妖精と一緒にするなど言ったらう。それに、鍛え上げたガガーランにも失

礼だ。人間の形状のままそういう力を出すならやはりマジックアイテムを疑うべきところ——」

「お前達、俺を何だと思っているんだ？」

憤然とするガガーランの隣で、ポンと軽く手を合わせたラキユースが口を開くが——

「みんな、止め。世の中には良いガガーラ——ゴホン、ただ怪力の女性といっても良い人も悪い人もいるんだから、そういうのはよくないわ」

「……何を言いかけた？」

「リーダーが一番酷い」

「さすが鬼ボス」

「いつもながら容赦ないな」

テイアとティナ、そしてイビルアイまで加わって梯子を外す。

「……さて、続けていいかい？」

「は、はい、お時間をいただいているのにすみません。で、その盗賊団ですが、ほとんど

の死体は違う殺され方だったって、魔法ですか？」

取り残されたラキユースは、良いタイミングで口を挟んでくれたイグヴァルジに無駄話を詫びて話題を戻す。

「いいや、刺突武器だ。使い手もわかってる」

ここで名前があがったのが、エンリらに敗れて従ったというクレマンティーヌだ。イグヴァルジの事後調査に基づく殺しを愉しむ嗜虐的な人物という評価は、殺人者の証である鎧を着ていたという『漆黒の剣』の話とも符合する。

「俺が見た時は別の新しい鎧を着ていたが、奴らから聞いてはいたからな。それをちよつと匂わせてみたら脅されたから、間違いはないだろう」

「脅すくらいなら、処分まではしていない？」

「冒険者プレートを黙って錆潰す所なんて無い」

「その通りだろうな。俺が喋ったと思われたくないから、そこを攻めるならモノでも見つけてからにしてくれ」

イグヴァルジが恐れる理由は、エンリより弱いはずのクレマンティーヌの実力だ。実際に実力を測る機会は酒場の喧嘩だけだったが、その場に居たミスリル級と白金級あわせて四チーム二十人近くの集団が一方的にやられたとなれば「少なくともアダマンタイト級」という評価にならざるをえない。イグヴァルジ自身はその際に難癖を付けられ

て、度々クレマンティーヌにたかられているという。

奴隸と思われる少女については、『漆黒の剣』が通報した少し後からバレアレ家に滞在するエンリと別れ、そのクレマンティーヌと二人で宿に泊まっていたらしい。クレマンティーヌは「自分が何かしても無関係のワーカーが問題を起こしただけ」と言っていることから、通報が組合経由でエンリ側に漏れたことでそれに対処したというのがイグヴァルジの見方だ。

「つまり、やりたい放題のそのクレマンティーヌをどうにかしないとエンリまで辿りつけないわけですね」

「しかし、組合もエンリの味方だ。もしかしたら八本指も繋がっているかもしれない。盗賊団討伐だっておかしいだろ。指名依頼でやらせたらしいけど、あの時エンリは銅級だぞ? そして逃げる奴らまで皆殺しにしたような傷跡もおかしい。盗賊団が八本指を裏切って粛清されたんだって言われても俺は信じるぜ」

八本指についてはエンリが特殊な男娼を買っていたという話しか無いが、奴隸を連れてくることもあわせて考えれば調べておいた方が良さだろう。冒険者組合については、ここまで来ると用意していたものを使わざるをえないかもしれない。

ラキュースは、組合での用事があれば早めに済ませておくように、そして、それを知り合いの冒険者たちにも伝えておくようにイグヴァルジに言い含める。

その鎧が持ち込まれたのは、『蒼の薔薇』が衛兵詰め所でエンリに関する話を聴き終わった頃のことだった。

ここへ来たのは、奴隷の少女が外から連れ込まれたのかこの街で買われたのかを判断するために、その結果は後者だった。これで八本指との関係も洗わねばならないことになる。

「集団での転移など物語の中だけの話だ」

詰め所の記録によれば、エンリは一人で街へ入っている。マーレは転移か不可視化の手段で入ったものと考えられるが、奴隷の少女を街へ入れる手段は無いというのがイビルアイの結論だ。そしてエンリが衛兵を蹴り倒すなど一見短絡的な暴れ方をしていたのは、騒ぎを起こして短距離転移しかできないマーレをフォローするためだと付け加える。

「長距離転移ができるなら、こんな場所で騒ぎを起こす必要など無い。わかるな」

「——おや、こんな所で見覚えのある仮面の御方。そしてアダマンタイト級の『蒼の薔薇』の皆様ではありませんか！ これは、ちょうどよかったです！」

イビルアイが小さな胸を張っている所へ、どこかわざとらしい大きな声。それは王都

のレエブン侯の屋敷で聞いたものに似ている。

「街でこそ泥を追っていたら逃がしてしまっただんですが、盗品を落としていきましてね。その中にちよつと問題のあるものがあつて持ってきたんですが、この人らが事の重大さをよくわかつていないみたいなんですよ」

「いや、だからここで預かつて冒険者組合から人を……」

衛兵をぐいと押しつけて大きめの袋を持ってきたのは、ロックマイアーという精悍な雰囲気を持つ中年の男。先にエ・ランテルへ向かつていたレエブン侯配下の元オリハルコン級冒険者チームの盗賊だ。合同で事にあたると勘違いしていた『漆黒の剣』の手前、仕方なく自己紹介しあつた関係でしかなく、特に連携する予定は無かつたはずだが――

「その冒険者の最高峰がここに居るんだから話は早いですな！ あんたらが組合の人間を待つ時間も勿体無い。これは冒険者の命に関わる品ですぞ！」

「まあ……こちらの方々がよろしいのならそれでも構わないが……」

「あの、いったいどういう……こ、これはっ!!」

ロックマイアーの意図を図りかねていたラキュースの前に袋の中から現れたのは、胸当てと腰当てに分かれた軽装鎧。そこには、ランダムに配置された様々な輝きがあつた。

それは、スケイルアーマー鱗 鎧などではない。輝きの異なる一つ一つが、冒険者の証である金属プレートだ。一人が一枚しか保有しないはずのそれは、鎧の所有者が多くの冒険者たちを殺してきた証、ハンティング・トロフィー狩猟戦利品とでも言うべきものだろう。

「これは、バレアレ薬品店の窓から出てきた不審な男を偶然発見して追っている最中に落としていったものです。金銭などは家人に事情を話して返却しておきましたが、こちらはそのはいきません」

「ど、どういふことなんですか?」

「私らは今はしががないワーカーですが、元冒険者として偶然こんな酷いものを目にしたらさすがに義憤にかられて通報くらいします。いやあ、頭に來すぎてね、こそ泥を逃してしまうわ、顔立ちも忘れてしまうわ……歳を取ったということですか! では、仕事があるので失礼しますよ」

ロックマイアーは大げさな物言いと動作でラキュースに鎧を押し付けると、風のようにその場から去っていった。

この場ですべきことを終えていた『蒼の薔薇』も、衛兵の気が変わらないうちに鎧を持つて外へ出る。

「抜け目ないやり方だな。さすがはあのレエブン侯の犬と言うべきか」

「リーダーの許可さえあれば私たちでも簡単なこと」

「許可がなくても普通に考えていた手段の一つ」

感心するイビルアイに、仕事を取られた形になったティアとティナは少し不満げだ。「あまり感心できる手段とは思わないけれど、こんなものを見てしまったからには黙ってはいられないわ」

「おい、オリハルコンのプレートまであるぞ」

ガガーランの太い指が示すあたりに、複数枚のオリハルコンの輝きがある。

「向こうのチームでは手に負えない相手」

「演技は下手だけど引き渡してきたのは賢明な選択」

「……まだ戦うと決まったわけではないけれど、気を引き締めていきましょう」

「クレマンティーンってのは戦士なんだろ。不謹慎かもしれないが、少し楽しみだな」

ガガーランは口の端に笑みを浮かべて巨大な刺突戦鎚ウオーピックを握りしめる。

「その前に、ガガーランには女としての戦いが待っている」

「頑張れガガーラン。ボス、ちよつと耳を……」

夕暮れ時、筋肉でできた小山のような巨大な貴婦人が、夜の密会に備えてドレスアップしていた。

ラクユースの手による化粧は目鼻立ちに留まらず、豪快な顔面の陰影までこれ以上無いほどに際立たせてくれる。ティアとティナが選り抜いたゆつたりとした衣装は、その圧倒的なサイズ感を除けばまさに有閑な貴婦人といった風合いだ。イビルアイは何もすることがなかったが、貴婦人——ガガーランの願いで、覗き見などを防ぐための魔法的な監視を行っている。少なくとも王都から来ている冒険者にだけは見られたくないらしい。特に『見えざる』の二つ名を持つ盗賊ロックマイアーには細心の注意が必要だ。「仕事だから、俺じゃなきや駄目だっていうから仕方なくやるんだからな」

そう言うガガーランは、時折まんざらでもない女の表情も見せる。

「お金持ちの有閑な貴婦人といったらガガーランにしか務まらない」

「リーダーとは違う、包容力のある大人の魅力が必要な仕事」

冷酷無比なティアとティナは調子のいいことを言いながら平然とガガーランの飾り付けを続けるが、ラクユースだけは罪悪感に負けそうになる。

——そのうち、きちんとしたメイクもしてあげたいな。

今施しているのは、明らかに顔が大きく見える力強いメイクだ。髪型も服装も貴婦人という範疇の外枠ギリギリを迂回しながら、全てが一つの方向へ向けられている。

「盛り付け終了。これから相手を呼び出してくる」

「了解。こっちは歩き方の練習がてらゆつくりと向かう」

従者を装うティアが教える歩き方も、どこかが違う。しかし、今回の仕事で求められる雰囲気には合致しているというのだから、黙って見守るしかないところだ。

密会相手の男は、ティナが繋ぎをとった犯罪組織『八本指』の末端の娼館関係者だ。上品な貴婦人として黙っているのが仕事と言われ、ただ黙って頬をひくつかせるガガーラの傍らで、従者に扮したティアは普段とはまるで違う上品な従者の口調で好き放題のことを言う。

「——つまり、ガーラ様の愛は男性を壊してしまうのです。商売の男性でも、勿論金額はそれなりに弾みますが、そうなることがわかっている前提で来てくれる方でないと後でトラブルになっても困りますので」

「……壊しても金だけで円満解決するというのをお望みですかい？」

ガガーランは破顔した。もちろんティアの合図通りだ。そして、会話の方は従者になりきったティアが続ける。

「わざとそうするわけではありませんが、ガーラ様の愛の形は特殊でして、そのように何かあっても愛しあう者の自己責任という形をお望みです」

男はたまたま巨大な貴婦人に目を向けながら、少し納得したような、それでいて困ったような表情で幾度か頷く。

「そういうのはね、最近は男娼ではやってないんですよ。娼婦の方なら王都の方で聞かないわけではないですが……」

「最近、宿にその手の男娼を派遣していたという話を聞いたのですが」

それは複数のミスリル級や白金級冒険者からの目撃談だ。その情報を上手く街の住人の噂話風にすり替えながら、顔を寄せて囁くように説明するティア。その内容に男は目を見開く。

「その条件で宿に派遣？ そんなのは元々俺やそこらの娼館の連中じゃ無理ですよ。上の方にツテがあるとか、組織がどうしても接待しなきゃならない相手なら人を調達してでもやりかねないですが、手広くやるにはリスクが大きすぎる」

そもそも、やめた時に証拠になるものは組織が全て王都の方へ引き上げてしまうという。王国の暗部を牛耳っておきながら今でも連絡に暗号文を多用する八本指の慎重さを考えれば当たり前の話だ。『蒼の薔薇』が王都に置いてきた仕事も、それで情報収集に時間がかかってしまっていた。

男は、下つ端の自分では想像するしかできない世界ですがね、と話を続ける。

「王都の方からこの街でそこまでのことをやるほど価値があるといったら、せいぜい都市長狙いで夫人でも抱き込むか、あとは北の盗賊団を一人で全滅させたという『血塗れの魔女』くらいだと思いますよ。ちよつと裕福な奥様が大金積んだくらいじゃ無理で

す」

末端の男がそう認識するような状況なら、八本指の警備部門は既にエンリをスカウトしているかもしれない。ガガーランは表情を硬くしてしまうが、頼みを断られたのだから問題は無いだろう。そして、会話の方はティアの担当だ。

「……お金ならそれなりにありますし、代わりに奴隷などでも良いのですが、駄目ですか」

「奴隷だつて堂々と受け渡せる時代じゃないですぜ。力になれなくてすみませんね。もしガーラ様の家が相当儲かつてるようなら商売か何かで組織の方が食い込んでるかもしれないから、そつちを当たつてみるといいですよ。今の時代でも『使い潰せる従業員』つてのがありますからね」

男と別れると、物陰に潜んでいた数人が後をつけてくる気配を感じ、従者のティアはほくそ笑む。これは変装が成功していることの証のようなもので、危ない道に踏み込んだ貴婦人の身元を調べてその家に食い込んでいくつもりなのだろう。

少し連れ歩いてからティアがこれを挑発すると、どこからか現れた「ガーラ様のボディーガード」と名乗る男装の麗人と仮面の少年とともに数秒で無力化し、縛つて娼館の裏口に並べておいた。

宿に戻ると、化粧を落としたガガーランは不機嫌なまま不貞寝してしまった。色々と不満を飲み込んで頑張ったのだから「せめて最後に戦わせてくれれば」という気持ちはわかるが、相手を生きて返す以上あくまで『蒼の薔薇』ではなくガラ様御一行で終わらなければならない。

「結局、そういう男娼なんて居なかったってこと？」

「いや、裏が取れなかっただけで目撃者は多数。男娼以外の可能性を否定するものまでいる」

「最悪の可能性としては、八本指の幹部がエンリを重要人物として勧誘してるか、既に繋がっている」

それは悪夢のような話だ。ただでさえ八本指の警備部門はアダマント級冒険者チームに相当するとされているが、そこにアダマント級と言われるクレマンティーンとそれを従えるエンリ、そして難度百から百五十のマーレが加わってしまえば、王国の夜明けは永遠に来ないかもしれない。

「我々の敵だったら早めに叩いておかないと厄介なことになるな」

「そうね。決めつけたくはないけど、曖昧な態度でいて手をこまねいているうちに八本指に入られても大変なことになるわ。しっかり調べましょう」

翌日、『蒼の薔薇』は冒険者組合長プルトン・アインザックに面会を求め、充分な協力が得られないと判断すると、翌々日には冒険者組合を「閉鎖」した。

組合の扉に書かれている内容は――。

「エ・ランテル冒険者組合を暫くの間、閉鎖する」

「問い合わせは『蒼の薔薇』まで」

「報酬払い出し業務は通常通り行う」

「但し、白金級以上の冒険者は要面談」

「エ・ランテル都市長パナソレイは、閉鎖の決定に異議は申し立てない。本件に一切の関わりを持たない」

「王都リ・エステイーズ冒険者組合長――は、閉鎖の決定に異議は申し立てない」

都市長と王都の組合長の部分は、それぞれの自筆のように筆跡が異なるが、内容はほぼ同じものだ。

三〇 漆黒と蒼の薔薇

「おかしい……エンリって奴は何者なんだ？」

「所業は腐れ外道、力は化け物級？ そんな凶悪な生き物がいるなんて聞いてないんだけど」

「でも、クレマンティーヌはきちんと居るようだし、その『漆黒』で間違いは無さそうですよ」

「今回の仕事では、クレマンティーヌ以外はどうでもいいはず。エンリ・エモットは偽物」

そこは流れ者たちが集う酒場。男女二人ずつの四人組が、自分たちの任務について語り合っていた。その身には冒険者のプレートは無い。

「そうなんだよな。エンリが偽物だというのはあの人の見立てである以上、今回の仕事の前提と考えるしかないんだろうが……」

「わざわざ悪評が立つように行動してるってことかな？ さすがに沢山ある悪評が本物なら胸糞悪すぎるし」

「やはり、クレマンティーヌの存在を目立たせないための煙幕なんでしょうが、そこまで

する必要があるのでしょいか」

「本当なら他の冒険者に討伐されてもおかしくない」

隣国よりやって来た彼らの目的の人物は、現在は白金級冒険者チーム『漆黒』に同行しているという所まで調べがついていた。しかし、そのチームは長く仕事に出ているつ戻るかわからないという。

普通なら怪しまれないよう軽い路銀稼ぎでもしながら待つところだが、そのチームそのものであるエンリ・エモットの評判がどうもおかしい。彼らはそれが中身の無い偽物だという話を予め聞いた上でここへ来ていたのだが、次々と出てくる常識から大きく外れた評判にはさすがに不安を抑えきれず、ダラダラと調査を続けざるを得なくなっていた。

大森林での長い冒険を終えたマーレたちは、集団転移によって冒険者組合の前に出現した。場所を指定したのはエンリだ。マーレが当たり前のように転移魔法を使ってい

るので、白金級の冒険者ともなれば転移してくる姿を見られても問題は無いと考えたのだ。

そして、実際に周囲の反応は特別なものではなかった。転移の瞬間は驚かれたが、周囲に居た冒険者風の者たちはそれが『漆黑』——彼らの認識では『血塗れの魔女』とその取り巻きなのだが——とわかると、騒ぎもせず非友好的かつ消極的な態度で距離を取るといふ普段通りの状態に戻る。ひとの背中を指差して何やら囁きあう程度なら、どこか陰湿なところがあるこの街では日常的なことだ。つまりは、転移くらい問題が無いということだろう。本当に魔法というのは何でもありだ。

組合の近くの広場から、バレアレア家と宿へ道が分かれる。それがここを転移先へ選んだ理由だが、なんと組合の扉には文字が書かれた貼り紙がある。もちろんエンリには一文字たりとも理解できない。気を利かせて読み上げてくれるンファイレーアを見ながら、エンリは皆でここへ来ることができて本当に良かったと思う。

貼り紙の内容は、『蒼の薔薇』が冒険者組合を閉鎖するというもの。理由すら書かれておらず、エンリは「ほんとうにそれだけ？」という言葉をギリギリで飲み込んだ。クレマンティーヌがいる前で字が読めないことを知られてはならない。目を凝らして訳の分からない記号の集合体を読み返すふりをして、「何度見ても書いてあるのはそれだけだよ」とンファイレーアが察してくれる。

「たぶん、ガゼフさんの紹介で来ているんだと思うけど——」

「でも嫌な感じがする。冒険者組合を閉鎖なんて、聞いたこともない。一人では行かない方がいいんじゃないかな」

エンリは『蒼の薔薇』がガゼフの紹介で来ることはわかっていた。ンフィーレアに話した時は、王国最強の冒険者だからマーレと一緒に大丈夫だろうとも言っていた。しかし、こういう形で関わってくると警戒せざるを得ない。

冒険者組合は、沢山の冒険者たちが生活のために出入りする場だ。閉鎖などすれば多くの冒険者に迷惑がかかるはずで、それを厭わないほどの何かがあると考えるべきだろう。

「白金級以上は面談ってありますけど……あの宿の連中が一番上つてくくらいだから、この街は雑魚ばかりです。アダマンタイト級の『蒼の薔薇』に目を付けられるような冒険者は一人を除いて居ないでしょうね」

「ひ、一人って、まさか……」

「二人チームの冒険者なんて他に居ないよね。戦士長の紹介だとしても、『蒼の薔薇』のリーダーは貴族だと聞いたことがあるし、素直に頼まれたことをやるだけとは限らないよ」

「そうなの!?!」

エンリは、クレマンティーヌとンフィーレアの言葉を否定する材料を持たない。確かに、この国の貴族というのはろくなものではないと聞く。

「この国の貴族は派閥争いと化かし合いで忙しいって聞きますからね。そんな中で、戦士長……ガゼフ・ストロノーフですか。こっちのお偉方の中では馬鹿正直な方だつて聞きますけど、紹介つてどういう話なんですか？」

—— マーレが手に負えないから同行を代わつて欲しいとか、クレマンティーヌの前で言つたら不味いし。……あとガゼフが馬鹿正直な方つてどんな人外魔境!?

「ま、まあ、クレマンティーヌに会う前にいろいろとあつたの。でも、そんなに信用出来ない相手なら気をつけなきゃね。ンフィー、一緒に来て」

「僕じゃ役に立たないし、冒険者組合が機能してないなら皆で行つてもいいんじゃないかな」

「面白そうだし、私も行きますよー」

「面倒だけど、有名な冒険者なら何か知っているかもしれないので、ぼくも行きます」

エンリはお腹のあたりをさする。心配だが、アダマンタイト級冒険者に狙われているかもしれないとなれば、戦力が居なければ話にならない。さらに、建物の中にまた張り紙でもあろうものなら、エンリ一人ではひとたまりもなく逃げ帰ることになる。

最近はクレマンティーヌも最初の印象と違って宿の冒険者たちとうまくやっている

し、マールも問題を起こさなくなってきた。どうにかなるだろうとエンリは自分を納得させる。

「仕方ないか。……ミコヒメについてマールは関わらないで、誰に何を聞かれても絶対に黙って知らないふりをしていてね」

「信用できない相手なんですか?」

「そういうことみたい。お願いね」

エンリが目線を合わせて言い含めると、マールは不思議そうな顔で頷く。

——玩具とか言われると聞こえが悪すぎるし、目が見えないこの子を保護してるってことにしよう。

戸を半分閉めきった組合に踏み込む時点で、エンリは不安に押し潰されそうになっていた。相手は、あのガゼフでさえ馬鹿正直な方だと言われるほど信用ならないこの国のお偉方に連なる貴族の一人だ。マールやクレマンティーヌを伴って組合に入ることは少なからず不安はあるが、自らの身を守ることを優先するべき場面だろう。

組合の応接室で待ち構えていた『蒼の薔薇』はリーダーの神官戦士ラキュース、細身で盗賊風のティア、小柄な仮面の魔法詠唱者^{マジックキャスター}イビルアイの三人組だ。仲間はあともう二

人いるというが、今は街へ出ているらしい。

無難に自己紹介を行うが、その表情はどこか固く、この場に似合わない完全武装が物々しい。

そして、エンリの危惧はある意味で正しかった。しかしその対処は甘すぎた。『蒼の薔薇』とは戦いにこそならなかつたが、凜とした真つ直ぐな美しさを持つラクユースはまるで狙つたように痛いところを突いてくる。話をそらそうとするンフィーレアにも構わず、エンリ一人を狙い撃ちだ。

「——それでは答えになっていません。今はエンリさんに、その女の子は何者かと聞いているのです」

「それは……わからないから保護しているというか……元々この子はマールレが……」

退路を塞がれ観念してマールレの方を見ると、そこには少し首を傾げ、上目遣いで大人たちの様子を窺う無垢な子供の所作しよさがあつた。目の前の大人たちが何を言い争つていくのかわからない、そんな態度だ。

——確かに黙つててつて言つたけど！ 言つたけど！

エンリはマールレに不用意な事を言つたことによる災厄——オーガとゴブリンの一団の前に「交渉役」として取り残された過去を思い出すが、目の前の状況はそれより酷い。エンリに厳しい視線を送る三人の誰もが、一人である集団を血塗れの肉塊に変えること

ができる存在だ。

その時、ミコヒメに音もなく近寄る者がいた。それは獲物に近づく獣のような滑らかな動きで、エンリが声をあげようとした頃には全てが手遅れだった。盗賊風の女によって、ミコヒメの外套が一気に捲り上げられる。

「ちよつと失礼……うわあ、これは露骨。そそられなくはない」

それは久々に見る、全開の肌色だ。

「ティアより重症だな。少なくとも子供になすり付けられるような趣味ではない」

「語るに落ちたわね、エンリさん」

「ちよ……違つ……」

少し遅れて、外套と一緒に捲られた薄絹うすぎぬだけが元に戻ってその幼い肢体を覆う。外套は後ろへ回ってしまつたままだ。

実力行使に出た盗賊風の女は、ミコヒメに少しねつとりとした視線を貼り付けながら薄い笑みを浮かべている。あれは狡猾な者が相手の弱みを握った時にするような、嫌らしい笑顔だ。

その場を繕う道を失つたエンリは言葉を失うが、同時に、これまで味わってきた鳩尾を締めあげられるような激しい反応が無いことに強い違和感を覚える。精神的に袋叩きに遭うことを確信して歯を食いしばって縮こまっていたら、軽く小突き回された程度

で済んだような感覚だ。

「仲間が勝手なことをしたことは謝りますが、同じ冒険者のプレートを持つ者としてとても残念ね、エンリさん。あなたの性的嗜好にまで立ち入ってとやかく言うつもりはないけれど、リ・エステイーゼ王国の法によって奴隷の保有は禁止されています。ストロノーフさんも、あなたがこんな人だとわかっていれば——」

その口調には若干の怒りも滲むが、この状況でこの反応は、若い女性の神官としてはあまりに平易に過ぎる。やはり、最初からこのことを知っていたのだろう。

そもそも、この女は貴族だ。健康的で美しい外見に騙されてはいけない。エンリに全てを押し付けたあの卑怯なガゼフでさえ正直者扱いされるような、嘘と謀略の渦巻く修羅場を生きる腹黒い女なのだ。わざわざ冒険者組合を閉鎖までしてエンリを断罪し追い込むことにも何か特別な意図があるのだろう——。

「エンリ様、この程度のこと、もう隠しても仕方ないんじゃないですかー？」
「クレマンティーヌ!?!」

エンリは戦慄する。クレマンティーヌを連れてきたことが悪い方に出してしまった。露悪的に開き直るといふなら、それはこの状況では最悪の手段だ。しかし、どう止めて良いかもわからない。

「……申し開きがあれば聞きます」

「申し開き？　ものを知らないあんたらに教えてあげるだけだよ。まー確かに奴隷みたいなものかもしれないけど、これはスレイン法国の風の巫女姫。コレを付けている以上、魔法を使うだけのマジックアイテムみたいなものだから奴隷以下かもしれないね」「スレイン法国の巫女姫だと？　そんなものがどうしてここに」

不気味な仮面の向こうから驚いたような声を出すのは、イビルアイと名乗った者だ。くぐもったような奇怪な声からは性別さえ判別できない。

エンリはその場に固まって呆然としていた。マーレの玩具で慰みものだと思っていた幼い少女を、いきなり魔法を使うだけの存在だなどと言われてもわけがわからない。

—— 気に入ったから持ってきたわけじゃなかったんだ！

とりあえず面倒なことを横へ置いて、今の自分に都合の良い方に考えるエンリ。これは、最近思いついた、色々辛い時にお腹の痛みを悪化させないためのただ一つの方法でもある。そして、日記どころか文字の一つも書けないエンリには、今の感情を形作る前提の一つが崩壊したことに気付く手段も無い。

「マーレ様も私も含めて、スレイン法国とは敵対してるから色々あるんだよ」

「法国には私たちもいい感情は持ってないけど……この子を自由にしてあげるわけにはいかないんですか？」

「これを外したら糞尿垂れ流しの狂人になるだけだよ。実際に見てきたから知ってるけ

ど、信じられないならここにもう一つあるから調べてみる？」

クレマンティーヌはミコヒメが装着しているものと似た額冠を取り出し、イビルアイに見せる。

仮面の顔を近づけてミコヒメの額冠と見比べていたイビルアイはそれに何やら魔法をかけると、驚いた様子でクレマンティーヌの言葉を肯定する。

「確かに、服装も発狂の呪いもこのマジックアイテムの性質に関わるものだ。残念ながらこの少女の自由を取り戻す手段は無いな。法国が常に高位の神官を多く揃えていたからくりが、まさかこんな禍々しいものだったとは……」

「んふふ、これはそこらの神官に治せる呪いじゃないからねー」

「うちのリーダーは蘇生魔法まで使える。そこらの神官ではない」

冷静な口調のティアだが、クレマンティーヌを軽く睨む。仲間を軽く見られたくはないのだろう。

「その程度ならこの子でもできるよ。第六位階まで使える法国の最高神官長でさえ治せないものを、たかが冒険者の神官が治せるわけじゃないよねー。やりたかったらやってみる？ もちろんお前にはこの子の代わりを務めてもらって、失敗したら他の連中は狂人になったガキの下の世話でもしてもらおうか」

「治せないことはないだろう。法国の巫女姫は若いうちに代替わりをしていると聞く

し、その額冠の制約も——」

仮面のイビルアイは、クレマンティーヌの次に法国のことを知っているようだ。エンリには何もわからない別世界の話だが、せめて口が開けつ放しにならないよう気をつけなければならぬ。今わかるのは、クレマンティーヌを連れてきたおかげで性的な奴隷所有者として断罪されるという危機を脱したかもしれないということだけだ。

「んー？ 昔から役目終わったのは、私ら漆黒聖典がいちいち殺してんだよ。処分とか、六大神の御下みもとに送るとか、役職によつて言い方は色々だったけどね」

「漆黒聖典……だと!？」

「名前くらいは聞いたことあるのかな——」

クレマンティーヌはその出自を明かす。エ・ランテルでの計画——ンフィーレアを攫さらいに来た目的までは明かさなかつたが、漆黒聖典を裏切り額冠を奪つて法国から逃走したという話と額冠の鑑定結果だけで充分だったのだろう。『蒼の薔薇』の反応を見るに、漆黒聖典というのはアダマンタイト級冒険者にとつても恐るべき存在であるらしい。

エンリはもはや話の中身についていけなくなっているが、心の中だけで祈りのポーズを作つてクレマンティーヌを応援する。

——がんばれ、くれまんでいーぬ。

「だいたい奴隷つてのが問題なら、私の方がずっと奴隷に近いんだよー。戦つてあつさ

り負けてぐちやぐちやになぶ翻られて従わされてる。こっちも殺すつもりだったから仕方ないけどね」

「ちよ……」

無責任な祈りを捧げた途端に雲行きが怪しくなるのはどういうことか。人聞きの悪すぎる表現にエンリが固まる。

確かに身の安全を考えてマールと同類のようにふるまってはいたが、その所業まで背負わされるのはやはり辛いものだ。

「でさー、この元漆黒聖典第九席次クレマンティーンとそれを力で従える存在に喧嘩売りたいなら、喜んで買うよ？ アダマタイトのプレートは奪ったことないんだよねー」

「プレートを奪うですって!？」

「クレマンティーン、やめなさい!!」

クレマンティーンの挑発にラキユースが反応し、ティアとイビルアイが抑える。

エンリも腰の武器に手を伸ばすクレマンティーンを見て、慌てて大きな声を出す。

「でも、向こうもその気みたいだし、やつちやつた方が早くないですかー？ 今ならたつた三人、純粋な戦士も居ないし楽勝ですよ」

「人数なんて関係ないよ。クレマンティーン、私の言うことが聞けないの?」

「はいはい、わかりました」

「すみません、この人は少し常識が無いので」

エンリが謝ると、その場の緊張感が少し和らぐ。

「……ともかく、その子のことはわかりました。呪いを解く方法が見つかるまでは保留ということでもいいかしら」

「それでいいです」

少しの沈黙の後、「忘れないうちに」ということで報酬の支払い業務を挟むことになった。依頼書を確認した『蒼の薔薇』の三人は何やら驚いた様子だったが、組合の職員を介して無事報酬が支払われる。

職員の顔は、どこかで見た感じがする。かつてエンリを晒し者にした女ではない。その瞳に燃える好奇心の炎は――。

「ち……じゃなくて、『漆黒』は王都にでも引き抜かれるんですか？」

支払いの手続きを進めながら見当違いの事を聞いてくる職員は、最初に組合へ来た日はどこか怖い感じがした、もう一人の受付嬢だ。

もちろん、今日しているのはそんな呑気な話ではないのでエンリが曖昧に否定していると、手続きを待っていたはずの『蒼の薔薇』が話題に便乗してくる。

「そうね、王都に来れば国のために犯罪組織の『八本指』と戦うような仕事も紹介できるけれど、エンリさんはそういうのはどうかしら？」

「国のためとか、そういうのには一切興味ありませんので」

エンリはきつぱりと断る。王国戦士長であるガゼフの口車に乗せられて酷い事になったというのに、これ以上国の関係者のために働くなど考えたくもない。

「でも、国を蝕む犯罪組織は誰かがなんとかしないと——」

「王国を蝕んでるのは頭の悪い貴族連中とか、それを放置してる王家の連中だって聞いているけどね。一度滅びなきや手の施しようが無いって」

しつこいラキユースの言葉を遮ったのはクレマンティーヌだ。面倒を跳ね除けてくれるのはいいが、目の前のラキユースも貴族だ。怒らせてしまえばどんな仕返しがあるかわからない。この国の貴族が危険だとわかっていのに挑発するのは本当に勘弁してほしい。

「クレマンティーヌ、私は国のために働くつもりなんて無いけど、貴族や王様が何をしてるかにも興味は無いよ。……とりあえず、話の邪魔だから先に宿へ戻っていてくれるかな」

「はい。……『蒼の薔薇』のお嬢ちゃん、目の前の相手は王国なんかの手駒に収まるよ
うなちっさい存在とは違うからね、諦めなよ」

「ちよつと、あなた——」

「ラキユース、後にした方がいい」

「人数が揃つてない」

「……いいわ。彼女の話はまたの機会にします」

軽口を叩きながら出て行くクレマンティーヌをラキユースが咎めようとするが、仲間たちに止められてそのまま見送る。王国の貴族でもある以上、敵国の人間のクレマンティーヌに対し何か含むところがあつたのかもしれない。

エンリは自分の判断を悔やむ。『蒼の薔薇』のクレマンティーヌへの警戒心は思いの外強かつたようだ。一人で帰すくらいなら全員で帰るべきだったかもしれない。

「あの、確か、冒険者組合は国などの利害関係から独立していたはずです。まだ組合に入つてひと月ほどしか経つてない『漆黒』が組合の方針と違うことをするのは難しいと思います。……ですよね？」

ンフィーレアが助け舟を出してくれたが、それでも『蒼の薔薇』の視線がきつくなつているように感じる。

「——あ、はい。行動を完全に縛るわけではありませんが、仰る通りです。ここエ・ランテルでも、冒険者に国境はありません」

促されて答えるのは、気軽に聞いた話で場の雰囲気が悪くなり、少し小さくなつてい

た受付嬢だ。

「そういうわけで、『漆黒』は王都には行きませんし、あなた方の手伝いもできません。よろしいですね」

冒険者組合の原則を持ち出されては、『蒼の薔薇』もそれを受け入れるしかない。さすがはインフィーレアだ。

王都行きという勝手な危惧を否定された受付嬢は、エンリの手を取り「イシユペンです。今後ともよろしく！」と名乗ってから満足した様子で去っていく。ぐいぐい踏み込んでいきそうな雰囲気、本来なら今のエンリが苦手なタイプだが、理解者かもしれないとなれば顔を覚えておかざるを得ない。対応されるたびに過剰に怯えられ悪い噂が増えるような気がする、あのウイナとかいう女よりは遥かにマシだろうから。

「えっと、王都というのは王国の中心ですよね」

「え？ まあ、そうなるね」

何か考え事をしていたようなマールが当たり前のことをインフィーレアに確認してから、『蒼の薔薇』に問いかける。

「あのつ、みなさんは『国墮とし』のことを知りませんか？」

質問はマーレらしく唐突なものだが、問われた方の雰囲気がおかしい。『蒼の薔薇』の二人は目を見開き、仮面で顔の見えないもう一人も態度に動揺が表れている。

マーレが興味を持っている『国墮とし』についてはエンリもンファイレアと一緒に時に聞かれたが、ンファイレアが言うには十三英雄の時代に国を滅ぼした伝説の吸血鬼のことらしい。魔術師組合でその存在を知り、それから詳しく調べてもらっているという話だ。

「な、何故わたつ、私たちにそのようなことを聞くのだ！」

「は、はい。魔術師組合で王国内に多く記録が残っていると聞いたので、その、王国の中心から来た人たちなら何か知っているかなって思ったんです」

なぜか落ち着きのないイビルアイに対するマーレの答えに、『蒼の薔薇』から一斉に漏れるよくわからない溜息。ピリピリした関係の相手に、その場の誰も生まれてないような大昔の伝説のことを聞くというのは唐突すぎる。少しでも気が抜けて追及が緩めばいいのだが――。

『国墮とし』とは遠い昔に滅びた吸血鬼だ。今の時代に興味を持っても仕方あるまい」
「で、でも、吸血鬼の主つてくくらいだから、この世界の人間なんか簡単に滅ぼせる相手とは思えないんです」

「……何故、そう考える」

「詳しいことは言えないんですが、『国墮とし』はぼくの仲間かもしれないので」

多少の警戒はしているようだが、マーレが自分のことを話している。つまり、目の前の『蒼の薔薇』は大森林で出会った鎧ほど危険な相手ではないのだろう。

——クレマンティーヌの肩書を警戒するくらいだから当たり前か。

そして、当然ながらその言葉は『蒼の薔薇』の二人に一笑に付される。

そんな中、イビルアイだけは「二百年の間、歴史の表舞台に出てきていない『国墮とし』が生きているわけがない」「お前はせいぜい百歳いくかどうかだろう」などと真面目に相手をしていた。荒唐無稽な話にいちいち付き合うのが不思議だったが、話題が『国墮とし』や幾多の魔神を葬ったという十三英雄に移るとまるで自分のことのように誇らしげに語っていたので、イビルアイというのは英雄譚のようなものが大好きな人種なだろう。

その後は、食事から戻ってきたといつてその場に加わったガガーランという敵つい戦士も交え、互いの敵意や距離感をはかるような他愛もない話が続いた。その中で出てきたのが意外な接点だ。エンリの真つ黒な服をきつかけに膨らんだ話は、マーレが『蒼の薔薇』の敵だった『陽光聖典』を倒したという所へ行き着く。

「真つ黒で誤解されやすいかもしれないけど……」

「それは大丈夫。黒とか暗黒が悪をあらわすとは限らない」

「……そういえば、その黒い魔剣とか闇のラキユースは大丈夫なのか？」

「闇のラキユース？」

ティアに続いてガガーランが漏らした言葉は、イビルアイも初耳のようだ。ラキユースがびくりと震え、目を見開く。

「そ、そういうのは今はいいから！ それより、私の剣だって真っ黒だけど別に大丈夫だし、色なんかで誤解はしないわ」

エンリは、ラキユースのその声には焦りを、紅く染まった顔には隠し切れない怒りを見た。

——そうだ、邪悪な者に渡してはいけないうつて。

エンリは指輪に触れながら思い出す。それはガゼフを介したとはいえ、英雄の意思だ。

闇のラキユース。

それはエンリの胸にストーンと落ちてくる。正義の神官のような態度でありながら、最初からエンリを陥れるつもりとしか思えないような詰問を繰り返した『蒼の薔薇』のリーダー。エンリはその本質を理解したような気がした。今の焦り、そして怒りは、口の軽い仲間に秘密をばらされたことに対するものだろう。

服に関連して、『陽光聖典』の話題が戻ってくる。確かガゼフの部隊と戦っていた者たちだったか——敵の敵を倒したからといって、味方とは限らない。それでも、このことは今日この場での決定的な対立を避けるきっかけにはなったようだ。『蒼の薔薇』がこの日仕事を終えて帰ったばかりのエンリたちを気遣う形で、一旦休んで明日また会うとういうことで解放される。

「明日は、必ずクレマンティーヌさんと一緒に来てください」

その言葉の意味は、バレアレ家に戻ってすぐに理解することになる。

「『漆黒』は既に八本指の側の存在と考えてしまった方がいいのかしら」

「現時点では早計だな。単に素行が悪く半ば開き直っていて、さらに王国に友好的でないだけだ」

「その時点でもう——ティア、どうしたの?」

「どう考えてもあの五人が監視の目を盗んで街へ潜入できたとは思えない。様子を見に

行きたい」

「確かに魔法では不可能だ。隠密行動の技術を持つようには見えなかったし、転移や不可視の魔法を使う者がいるにせよ、誰も網にかからないということはないはずだ」

「ティナの監視体制を潰されたかもしれないってことか！」

「行きましよう！」

この後、冒険者組合に『蒼の薔薇』の全員が戻ったのは夜になってからのことだ。

ティアとティナが交代で指揮していた監視網は、イビルアイの助言で魔法への対策も万全のはずだった。ミスリル級冒険者を雇って街の全ての入り口だけでなく城壁周囲からの転移者も漏らさないような体制だ。本来なら発見次第、監視者が交代で街で休憩するメンバーを回収し、全員が揃った状態で『漆黒』を迎えていたところだが、実際にはたった三人で迎えることになってしまった。

それより痛手だったのは、失敗を想定していなかったため、冒険者たちに失敗を知られたことだ。この時、ティナの身を案じる余りその点の配慮を欠いてしまったのは『蒼の薔薇』らしからぬ失態だ。

そして、『蒼の薔薇』は監視に失敗した理由を説明することができなかった。

雇っていた冒険者たちは酷く動揺し、『蒼の薔薇』についていたことを後悔して秘密にするよう頼んでくる始末で、今後は仕事の形でも協力を得ることは難しいだろう。そして、

その話が広まれば、ただでさえ不便を強いている冒険者組合の閉鎖についても不満が強まってくるかもしれない。『蒼の薔薇』はアダマンタイト級とはいってもよそ者であり、厄介者として煙たがられる『血塗れの魔女』こと『漆黒』のエンリをどうにかできないのであれば、組合への強すぎる干渉を彼らが黙認し続ける理由もなくなってしまう。

ただ、全員が揃っていたとしても、完全に戦いを覚悟して行動することは難しかったかもしれない。クレマンティーヌについてはイグヴァアルジから強者だと聞いていたが、それが元漆黒聖典を名乗り、さらに実際にエンリに従っているところを見せられてしまうと、二人の想定難度を上方修正せざるをえない。

現時点での想定難度は、元漆黒聖典のクレマンティーヌを肩書通りに九十から百と見ると、それを従えるエンリは百から百十くらいを想定しなければならない。そうなるならマールは最高は百五十のままとしても最低ラインを百十以上に修正して考えるべきだろう。そこへ復活魔法まで使えるというスレイン法国の巫女姫も加わり、残るンフィーレアという少年もその生まれながらの異能を求めてエンリが近づいたことから何らかの恐ろしいアイテムを行使してくる可能性が高い。総合力では上回るにせよ、正面からぶつかると『蒼の薔薇』の側にも少なからず犠牲が出る可能性が高い。

「国墮とし本人として責任を持って、少しカマをかけてくるとしようか」

イビルアイがそう口にした時、『蒼の薔薇』のメンバーは『漆黒』を分断して対処する

様々なパターンを考えていた。そのためには、最も強くそして依頼の対象であるマールが邪悪なものかどうか、それが一番の問題となる。

マールが『国墮とし』に興味を持ち仲間かもしれないなどと言いつつ理由はわからないが、『国墮とし』は多くの人々を殺し国を一つ滅ぼした邪悪な吸血鬼として伝えられている。イビルアイが初対面である以上仲間であるはずがないのだが、それに関わる部分について話を聞くことがマールという存在を理解する上では最も近道なのは間違いない。そして、依頼者のガゼフは敵対しないように言っただけだが、それが人間の社会と相容れない存在であれば王国最強の冒険者チームとしてやる事は一つだ。

「正体など明かささないさ。場合によっては懲らしめたり情報を聞き出してこななければならないし、私だけなら万一の場合は転移魔法で逃げることもできる」

『冒険者として『蒼の薔薇』に所属するイビルアイは、実は伝説の吸血鬼王侯である『国墮とし』本人だ。ただ、特別なマジックアイテムの指輪によってアンデッドであることを魔法的にも隠蔽し、さらに仮面で顔を隠して若すぎるまま永遠に変わらないその姿を見せないようにしているため、そのことを知る者はごく少数の『蒼の薔薇』関係者だけだ。

そのため、イビルアイは強い。その難度は百五十ほどで、他の仲間たちは九十以下だ。そこには『蒼の薔薇』の他のメンバー全てを相手に一人で戦っても勝利できるほどに圧

倒的な差がある。だからといって、一人で危険を冒すことを仲間たちが認めるはずもないのだが――。

「チーム内では実力差は少ないものと考えるのが普通だ。我々もそう見られているだろう。しかし、『漆黒』の中には明らかに序列がある。マーレを私が大きく凌駕するなら勿論、たとえ互角に近かったとしても問題ない。その後は、あの漆黒聖典の女の鎧の件も含めて、こちらのペースで話ができるだろう」

つまり、マーレが邪悪な者だった場合はイビルアイの実力の一端を見せることで、『蒼の薔薇』全員がイビルアイ並みの難度百五十近い集団であるように見做させるという発想だ。

結局、他に妙案も無くイビルアイの考えが実行されることになったが、そこには走って逃げられる距離にティアとティナが潜み、短距離転移魔法で飛べる距離にラキユースとガガーランが控えるという修正が加えられた。

三一 マーレと国墮とし

「戻った『漆黒』が早速『蒼の薔薇』ともめていたらしいわ」

「静観すべき。私たちの動きを王国側に知られるのはまずい」

「まさか、討伐されるってことはないだろうな。いくらクレマンティーヌでも『蒼の薔薇』が相手では……」

「アダマンタイト級冒険者ともあろう者が、あんな露骨な煙幕に釣られて行動するとも思えません」

彼らは専ら街の中で張っていたため、『漆黒』の帰還後まもなく、冒険者組合の前に突然現れたという噂を聞くことができた。あとはギルドの裏口で職員の帰宅時間を狙って最低限の情報を得たというわけだ。

「でも、あれが煙幕かしらね。狼煙だと思って近づいたら村が全焼してたつてくらい盛大な悪評じゃない。仕事で事情を聞いていなければ今すぐにも討伐されてほしいくらいよ」

「釣られたふり、という考え方もある」

「討伐したことにして王国に引き込むってことか？ だつたら困るな」

「それも迂遠すぎるような気がしますね。そんな考えで焦って火中の栗を拾って、本当に討伐だったら大火傷を負うことになりかねません」

彼らの腕は『蒼の薔薇』には遠く及ばない。

結局、この場の結論は静観ということになった。クレマンティーヌという人物については事前に聞いてあるので、今の王国と馴染むとも思えない。慌ててもリスクの方が大きいという判断だ。

宿に戻ったクレマンティーヌは久しぶりに気分良く酒を飲んでいた。空きっ腹でも飲むのはそこらじゅうのテールブルに久々のタダ酒があるからで、食べ物控えるのは後で旨いものを食べに行くことになっているからだ。

「久しぶりー、みんな元気だった？」

テールブルを渡り歩き、冒険者たちに声をかけながら勝手に酒を拝借する。

イグヴァルジが目を合わせないようコソコソと逃げていくのを視界の端で確認する

が、今は奢らせる必要もないので放っておく。あの態度は、少し教育が足りないのかも
しれない。

エンリたちが宿へ立ち寄り、合流してようやく食事だ。あの後『蒼の薔薇』とは特に
トラブルにはならなかったらしく、気分良く食事を楽しむことができた。冒険中の簡素
な食事は恭順する巫人たちから肉や魚が提供され少しづつ立派になっていったが、やは
り人の手に入った本格的な料理は違う。何より大切なのはスパイスだ。

クレマンティーヌは、人間が人間であるのはスパイスのおかげなのではないかと思
う。あの悪夢のような朝から、日を追うごとに生臭い食べ物に苦手になっている。スパ
イスを多めに、そしてよく焼くように注文できるこの店は素晴らしい。

そして、幸せな食事の時間の後は現実に戻らねばならない。

今後のことを考えるためいったん全員でバレアレ家へ戻ると、そこには青い顔のリー
ジーが待っていた。バレアレ家を襲った盗難事件の顛末を聞けば、すぐにマーレを除く
全員が青ざめる。

クレマンティーヌは『蒼の薔薇』などどうでもいいが、すぐにマーレやエンリのお仕
置きの可能性を意識して震えあがる。

エンリと視線が合うと思いい出してはいけないものを思い出し、こみ上げてくるものが

あつたので、てくてくと歩く巫女姫を押しつけてトイレに飛び込んだ。

「うええつ、おげええええええ！」

コツ、コツと弱弱しく扉が叩かれるが、相手をしている余裕など無い。たつぷりと飲み食いしたものを全部口から出しながら、部屋から漏れる会話を拾おうと耳を澄ます。

巫女姫が扉を叩く音が邪魔なので叩く瞬間に合わせて扉を蹴ると音は止み、室内の会話を聞くことができた。巫女姫はとぼとぼと部屋の方へ戻っていったようだ。

幸い、クレマンティーヌの責任を問う者は居ない。

鎧を盗んだのは『蒼の薔薇』の手の者だろうとンファイレアが指摘するが、これは当たり前前の推論だ。

そして、今問題になっているのは鎧を盗んでおきながら何も言っていない『蒼の薔薇』の姿勢だ。『蒼の薔薇』などどうでもよいが、この流れには乗らなければならない。責任を問う流れにはならない。

クレマンティーヌはトイレの扉を勢い良く開けると、足早に部屋へ戻って話題に加わる。

勢い余って巫女姫を突き飛ばしてしまうが、よろめきながらも手近な木桶に捕まっただけで済んだので気にしなくていいだろう。顔色が悪いのは体調でもよくないのだろうか。

エンリは目の前の現実と向き合いきれない。最初から敵視されていた。『蒼の薔薇』との会談を乗り切ったと思つたら、全ては茶番だったということだ。

ンファイレアだけでなく、部屋に戻ったクレマンティーヌも一緒になつて現実を突きつけてくる。頭を抱えるエンリに、クレマンティーヌが軽口を叩く。

「たかが冒険者だし、邪魔ならやっちゃえばいいだけじゃないですかー？」

「べ、別に『蒼の薔薇』なんてどうつてことないけど、これからも王国でやっていくわけだからいろいろと——」

「何かやる気なんですか？ 確かにあいつらは王宮に出入りしてるつて情報もあるから、王国で大きなことをするなら利用価値はありますけど」

エンリがクレマンティーヌに強気を装うのはいつもの光景だ。そうしなければマーレとの関わりが無くなった後のクレマンティーヌが怖いから仕方なくそうしているのであつて、別に大それたことをしたいわけではない。

エンリはンファイレアにちらちらと助けを求める視線を送るが、反応が悪い。

「いや、利用とかそういうのじゃ……」

「違うんですか？ 冒険者として上も見えてるし、王国なんかですることといつたらそ

ういうのしか——」

「違ふと思うよ。じ、自分から強引に地位を狙つては軽く見られる。大きなことをするなら、足場は望まれて得た地位でなければ難しいんじゃないかな」

ようやく助けに入つてくれたンファイレーア。

何を言つているのかわからないのは最近よくあることだが、何か動揺しているような雰囲気がある。少し顔が赤いのは、いつもの冷静さを欠いている証拠だ。

やはりバレアレ家として殺人常習者クレマンティーヌの犯罪の片棒を担がされたような形になつたダメージが大きいのだろう。本当に、バレアレ家の人々には迷惑をかけた通しだ。

ンファイレーアの視線の先には、何故か木桶の上にしやがみ込んでいるミコヒメ。目は塞がれているが、口元だけでもどこかほつとした表情のように見えるのは、誰がどう見ても彼女だけはクレマンティーヌの共犯には見えないことを理解しているからだろうか。

そして、ンファイレーアは気楽な彼女を羨んでいるのかもしれない。

そんな時、バレアレ家の扉に一本のナイフが投げつけられる。

荒事に慣れたクレマンティーヌが音で気づかなければ翌朝まで放置されたかもしれない

ないそれは、一通の手紙を扉に縫い付けていた。

クレマンティーヌは口の端に笑みを浮かべながら、手紙をマーレに見せる。——結局、クレマンティーヌが読むことになるのだが。

手紙の主は、『蒼の薔薇』のイビルアイ。マーレと一対一で話をしたいらしい。

『国墮とし』について詳しい話を聞きたければ、スラムのゴミ山の前の赤い屋根の廃屋に一人で来いという内容だ。

どう考えても罨——その考えだけは共通だが、罨の中身についての認識はエンリとそれ以外で全く違っていた。

エンリはマーレを引き離れた隙に『蒼の薔薇』に襲撃されることばかりを考えていたが、クレマンティーヌが呆れ声で『蒼の薔薇』を心配したことで認識を改める。おそらく罨にかけられるのは一人でおびき出されるマーレであり、間違いなく犠牲になるのは『蒼の薔薇』だろう。

「あいつらが勝手に襲ってきて全滅するなら別にいいんじゃないですか？」
「別に強そうな人はいなかったの、ぼくは大丈夫です」

誰もマーレを止める者は無く、止める理由も無い。自分たちを追い詰めようとしていた者たちが、実際に自分たちに悪意を持っていれば勝手に奈落の底へ落ちるといっ

のことだ。

エンリのイメージの中で、エンリを執拗に責め立てていた『蒼の薔薇』の面々と、マーレに四肢を潰された時のクレマンティーヌやカルネ村で肉片にされた騎士たちの姿が重なる。心の中で、これで問題が解決するかもしれないと悪魔が囁く。

「……マーレの安全が優先だけど、なるべく殺したりはしないでね。あと、やむを得ず戦う場合はできるだけ人目につかない場所で、お願い」

エンリはそれなりに保身を考えながらも、どうにか悪魔の誘惑に勝利した。

ゴミ山への道がわかる辺りまでマーレを案内するのはクレマンティーヌだ。

目的地を知っているのは他にインフイーレアしかいないため、もし『蒼の薔薇』と遭遇して戦いを挑まれても身を守るクレマンティーヌが適任ということだろう。

もちろん、手紙の条件に反して目的地まで同行するようなつもりはないし、マーレもそれを望んでいない。

クレマンティーヌはマーレが望むなら喜んで『蒼の薔薇』と戦い、奪ったことのないアダマンタイトプレートを鎧には飾らないまでも手元にコレクションしておきたいと思っているが、とりあえずマーレが戦いを許可するか襲撃でも受けない限りは大人しくしているつもりだ。

エンリの言っていた「問題が起こらないように気を遣って」というのはよくわからないが、あの女の子だから死体が出たらマーレの代わりに片付けろということだろう。幸い、目的地はカジツトと組んでいた時に見つけておいた死体の置き場所から近い。でかいのも混ざっているが、五人分くらいなら大丈夫だ。

マーレに道を教えて送り出した後、目的地に近づきすぎない範囲で周囲をうろついていると、声をかけるものがある。

「よお、良い夜じゃねえか」

「……んふふ、良い夜だね。やっぱり畏だったんだ」

「そんな気はねえんだが、おめえこそ護衛のつもりか？」

「私は下っ端だからね。ただの道案内」

声をかけてきた偉丈夫は『蒼の薔薇』の戦士ガガーランだろう。かつて風花聖典が王国内でクレマンティーヌと戦える数少ない戦士として挙げた時の特徴や、先ほどエンリ

たちから聞いておいた風貌にも合致する。

クレマンティーンにとっては以前のブレイン・アングラウス同様、一度戦ってみた相手ではあるが、マールとエンリに逆らって勝手なことをするわけにはいかない。

ガガーランの声は大きい。その巨体からすれば自然でもあるが、人間として会話をする以上は不自然な大ききさで、近くにいる仲間知らせるためのものだろう。

クレマンティーンは奇襲に警戒するが、背後から現れた女——ラキユースにはそのつもりはないようだ。

「今回はイビルアイを守るつもりでいただけなのですが、あなたには少し別のお話があります」

「おめえ、最近人様に見せられねえようなものを失くしたろ？」

二人は退路を塞ぐ形でじりじりと動く。

たかが神官戦士がクレマンティーンを相手に仲間の後ろに隠れずに包囲に加わるその姿は、愚かを通り越して滑稽にも見えた。向こうから戦いを挑んでくれるのなら、相手をしない理由は無くなる。

クレマンティーンは初手でラキユースの頭蓋を貫いてからガガーランと一戦を交えるイメージを固め、口の端を吊り上げる。育ちの良いラキユースは嫌いなタイプではあるが、さすがにガガーランと同時に虜りものにする余裕も無さそうで、それだけが残

念だ。

「ふうん、王国にはアダマンタイト級のこそ泥なんてのもいるんだねー」

「私たちは盗品の鎧を発見した方から通報を受けて、色々調べさせてもらっただけです」
「……わりいな。それでも王国としてトツプを張ってる冒険者なんだわ。冒険者殺しの常習者をはいそうですかって見逃すわけにはいかねえな」

「御託はいいよ。昼みたいにゴチャゴチャ難癖付けられるのも面倒臭いし、勝負を付けようっていうならさんせー」

クレマンティーヌは腰のステイレットを手に取ると、低い姿勢を取る。

露骨にラキユースの方を向くことはできないが、最初に地を蹴るべき足に力が入る。ガガーランに比べ距離の開いた位置取りだが、並の戦士なら無理でもクレマンティーヌなら一瞬で詰められる範囲内だ。

クレマンティーヌは横目でラキユースの綺麗な顔を一瞥すると、ガガーランの側の足で地面を蹴って——その場から消えた。

廃屋で待つイビルアイのもとへ、マーレは約束通り一人で現れた。

イビルアイはマーレの問いには『国墮とし』に関する一般的な伝承通りの答えのみを

返しつつ、聞きたいことを聞く。

「このように邪悪な『国墮とし』を仲間かもしれないと考えるのはどういうことか、逆に教えてもらいたいものだな」

「あなたが味方かどうかかわからないので話せません」

「ふむ……お前は闇妖精ダークエルフとはいえ二百年前では生まれていないと思うのだが、その吸血鬼が国を滅ぼしたことをどうやって知ったのだ？」

「いえ、あのひとがその時期に来ていたならそうなたかなって思うだけです」

——仲間とは……魔神か？

イビルアイは仮面の下で表情を硬くする。自身の過去を知る者では無いようだが、これは人違いで済ませて良い話ではない。

国を滅ぼせるような吸血鬼が他に存在する——マールレの言葉が意味するのはそういうことだ。もし、それが世界に災厄を招く者であれば、ここで情報を得ておかねばならない。

「私は十三英雄と協力して『国墮とし』を歴史の表舞台から葬り去った者だ。お前の仲間がそうであるかはともかく、国を滅ぼすような吸血鬼の仲間かもしれない者を放つてはおけない。詳しく話してもらえないなら、少し痛い目を見てもらうことになるぞ」

嘘はついていない。

イビルアイが十三英雄と協力し共に旅をすることでそれ以降『国墮とし』の名は歴史の表舞台から消え、そのことで『国墮とし』は十三英雄によつて退治されたと伝えられるようになっていく。すなわち、自らその名を葬つたと言つても良いだろう。二百年という時間は問題だが、人間でもそれだけの時を生きる者が居ないわけではない。

マーレの方を見るとその顔には表情と呼べるものは無く、疑いの色は無いようにも思える。ただ、その瞳の奥には引きこまれそうな深い闇があるだけで、その考えは読み取れない。

「そういうつもりなら仕方ないです。あなたも何か知っているようですし、ぼくも強引にでも話を聞かなければと思つたところなので——」

場の空気が変わった。マーレは戦いの気配を表に出すようなタイプでは無いようだが、一瞬の判断でイビルアイは先手を取る。

一対一で戦うことになれば、マーレが突撃して来ることは読めていた。マーレの奥の手は陽光聖典の隊長を葬つた何らかの近接戦用魔法による奇襲であり、魔法詠唱者同士の戦いならば接近にも躊躇は無いはずだ。

——ならば、近寄せなければいい。簡単なことだ。

《魔法最強化・結晶散弾》

マーレが駆け寄るその距離を無数の尖った水晶の欠片が埋め尽くし、その全てが散弾

となつてマーレの身体に叩き込まれる。

元々、戦端を開く場合はこの魔法を加減して打ち込むつもりだったが、この場では逆に最強化していた。これは理屈では説明できない恐れ of 感覚によるものだ。

光の散弾が消えた瞬間、腹部に大きな違和感。

これは、痛みだ。

イビルアイの腹部を襲うのは臓腑を抉られるような強い痛み。

吸血鬼であるイビルアイにとつてあらゆる痛みは戦闘の妨げとなるほどとはならないが、危険信号としての痛みは存在する。

そして、この痛みは、たった一撃によるものとしてはかつての魔神との戦いでも経験のない危険なもの。

打ち出した魔法の輝きとともに、マーレの姿は消えた。それが短距離転移であるならば、この痛みは何だ――。

見下ろすと、胸元に迫るマーレの頭。懐に入られ、腹を何かに貫かれたようだ。しかし、転移を発動して魔法による近接戦を行えるタイミングではない。何より、水晶の散弾の全てが跡形もなく消え失せたことの説明もつかない。防御魔法の後の攻撃魔法と考えても同じで、間に合うわけがない。

イビルアイの腹を貫いたものは、細い腕だ。

腕が背後に回りイビルアイの身体を捕えようとするが、うまく掴めていない。イビルアイの持つ行動阻害耐性のおかげだろうか。

この短い時間であらゆる可能性を考えたイビルアイは、最も恐ろしい結論に辿り着く。

短距離転移など無かった。マーレはイビルアイの魔法を無視し、全てを完全に無効化し、ただ恐るべき速度で接近してきたに過ぎない。

近接戦用魔法など無かった。マーレはイビルアイの上質な装備や魔法的防護を貫いて、ただ恐るべき脅力で腕を突き込んだに過ぎない。

——化け物。

イビルアイは動けない。理解が追いつかない。追いつきたくもない。

とにかく、振り解いて転移で逃げなければならぬ。仲間を呼ぶことはこの場に死体を積み上げることにはかならない。

装備品の効果で拘束は無効化できているが、貫かれてはもとより完全な拘束状態ではない。そのため、相手を殴ることはできるし、魔法で攻撃することもできる。

勿論、もがき、身体から腕を抜いて逃げることも容易だ。

しかし、イビルアイを貫いた者がそれを待つてくれるはずもない。

直後、イビルアイの前で初めて使われたマーレの魔法は、位階もわからない高度な転移魔法だった。

廃屋の傍らで聞き耳を立てていたティアとティナはイビルアイの魔法が放たれたことで駆けつけるが、その後で何が起きたのか知ることはできなかった。わかるのは、イビルアイとマーレの姿が消えたということだけだ。

周囲を調べてからラキユースたちの方へ向かうと、同じようにクレマンティーヌが目の前で消えたことで慌てていた。

「この近くにいるはず。おそらく『漆黒』は全員でイビルアイを狙ってきた」

「戦士のクレマンティーヌも転移させたのだから、遠くへは行ってない」

「奇襲に注意して二人一組で、手分けして探しましょう」

転移魔法についてはイビルアイから聞いて多少の知識はあった。マジック・キヤスター魔法詠唱者本人だけなら遠距離での転移も可能だが、仲間と一緒に転移するのなら、たとえ世界最高のマジック・キヤスター魔法詠唱者が転移の魔法を究めたとしても短距離転移がせいぜいだという話だ。

これは、イビルアイの持つ転移魔法を羨んで街と街の間を移動するのに魔法でできた

ら楽だという話になった際、多少説教じみた雰囲気は無理だと諭されたことで聞いていた知識だ。

そして『蒼の薔薇』はスラム近辺を徹底的に搜索した。近郊の盗賊団がかつて使っていた隠し部屋や八本指絡みらしき地下室なども見つかったが、イビルアイの姿どころか『漆黒』に繋がるものは一切見つからなかった。

「逃がさないようにはしてありますが、少しの間これを見ていてください」

「説得を手伝いましょうか？」

「……殺さない程度でお願いします」

マーレが作り出した迷いの森では、高位の転移魔法以外では転移ができない。今回は別に飛行魔法の対策もしており、「木に登ったり高くジャンプしたりはしないでください」との事だが、地に這うイビルアイに対してそのようなことをする必要も感じない。

それならば走って出られるかというと、それも不可能だ。それは同じ場所で必死に逃

走り、そして拷問を受けたクレマンティーヌが一番よく知っている。そして、たかが魔法詠唱者マジック・キャスターごときが自分より速く走れるはずがない。

しかし、それを目の前の獲物に説明する必要は無い。自分の手で希望を打ち砕く方が楽しいに決まっている。

クレマンティーヌはステイレットをべろりと舐めると、四肢の骨を砕かれたイビルアイへ近づいていく。ラキュースとガガーランをやれなかったのは残念だが、殺しだけでなく拷問も大好物だ。

「な、何をしようと、お前らに話すことなど何も無いぞ」

「んふふ、私はそれでもいいんだよ。拷問するの大好きだし。愛してると言ってもいいね」

「……それがお前らの本性か」

「私なんて優しい方だよ」

目の前のイビルアイは腹部を二度貫かれ、四肢の骨を砕かれその損傷も激しい。自然なほど出血が少なく見えるが、魔法というのは何でもありなので何か対策をしているのかもしれない。それでも、普通の人間なら死んでいてもおかしくない状況に見える。

「——殺すなって事だし、地味で悪いけど指一本ずつでも行ってみる？」

多くの人間を嬲り殺してきたクレマンティーヌの経験上、体幹や頭部への攻撃が許さ

れる状況には見えない。拘束できれば眼球でも挟りたいところだが、イビルアイが拘束に耐性を持つているのは、マーレに捌られている時にその拘束を不自然に逃れたことから間違いないだろう。

もし暴れられて手元を誤って殺してしまえば、命令に反した自分の方がマーレに眼球を挟られかねない。あるいは口にでも突っ込まれるか、何かおぞましい蟲でも潰して眼球に混ぜ込まれるかもしれない。

——ガキの癖にしぶとすぎ。それと、これは生気が無いっていうのか……どうも調子が狂うなー。

クレマンティーヌにはその違和感の正体まではわからず、ここでは「地味」な手段に甘んじるしかなかった。目が赤いのも怪我を負っているのだろうがよくわからない。魔法的な力か何か知らないが、死なないギリギリの線がわかりにくいというのは本当に不便だ。

転移魔法でバレアレ家に現れたマーレは、白い手袋を血に染めていた。回復魔法が必要になったとしてミコヒメを呼び寄せる。

「もしかして、イビルアイという人と何かあったの？」

「はい。捕まえて話を聞くことにしました」

ンフィーレアの問いに、当たり前のように応えるマーレ。その平然とした顔を見ながらエンリは軽い目眩を覚える。

「ちよ、他の人たちはどうしたの!？」

「二対一で、他の人間はその場にはいませんでしたが」

「あのね、その人の仲間は他に四人もいるんだよ。もう一対一の問題じゃなくなったの」
「でも、イビルアイ以外は全然弱いですよ。クレマンティーヌと同じかそれ以下だと思います」

「クレ…………ええと、強い弱いじゃないの。冒険者は仲間のために命をかけるっていうし…………もう、大変なことになるよ」

エンリの脳裏に浮かんだのは、クレマンティーヌと同じような邪悪な笑みを浮かべる『蒼の薔薇』の面々だ。そんなのが四人もいる集団に恨みを買ってしまえば命がいくつあっても足りない。

しかし、こういう時のマーレは説得してどうこうなる相手ではない。

「——とにかく、私たちは…………ええと、ンフィーとリジーさんの安全を考えて、この街で最初に泊まった安い宿屋に身を隠すから、事が終わったら迎えに来てね」

イビルアイの事は既にエンリの頭の中から抜け落ちていく。それどころではないの

だ。

かつてクレマンティーヌの拷問が行われる直前のこと、マーレに拷問を行う理由を聞いて「エンリが言ったから」などと言われたことをエンリは忘れてはいない。

そして、今回イビルアイの仲間たちは健在で、それら全て「クレマンティーヌと同じかそれ以下」というアダマンタイト級冒険者だ。下手に関われば余計に大変な事になりかねないから、考えないようにしているのもある。

既にクレマンティーヌの鎧が盗まれている以上、この家は安全ではない。

マーレがイビルアイの所へ戻ってしまふ以上、一人一人がクレマンティーヌに近い強さだという『蒼の薔薇』に対抗する戦力は、この家どころかエ・ランテルの街を逆さに振つても出てこない。クレマンティーヌを呼び戻しても無駄だ。

もとより、マーレと離れるのなら身を隠す以外に手段は無い。

マーレは「わかりました」と頷くと、ミコヒメを連れて転移魔法で去っていった。

エンリとソフィーレアは急いで荷物をまとめるが、レイジーだけは既に準備を終えていた。盗難事件の際、鎧の押収を聞かされた時から夜逃げの準備を始めていたということだ。もちろん、今回持っていくのは旅装と貴重品の手荷物だけではあるが。

森の中では、クレマンティーヌがイビルアイの説得作業を続けていた。

「どうしてそこにアンデッドが居るんですか？」

驚いたようなマールレの声。

この場にはクレマンティーヌとイビルアイ、そして今戻ってきたマールレしか居ないはずだ。クレマンティーヌはイビルアイの大切な品であろう指輪を、ステイレットで貫いて捻じ切った指ごと踏みにじりながら振り向く。

クレマンティーヌはイビルアイの表情を観察しながらも上機嫌でこの「地味な」拷問を続けていたが、当初は異常なまでのイビルアイの我慢強さに苦戦していた。嘲笑あざわらいながら様々な痛みを与え、ようやく辿り着いたのがこの指輪だ。

指ごと奪ってやることでようやくクレマンティーヌが大好きな不安や畏れの表情を引き出したこの指輪は、イビルアイにとって大切なものに違いなかった。だから踏みにじっていた。それだけのことだ。

マールレはアンデッドなど知らないというクレマンティーヌから拷問経過の説明を受けると、仮面や指輪など幾つかの装備品をイビルアイに装着しては外しを繰り返し、納

得したような表情になる。さらにその顎に手をかけ、口をこじ開けて中を見た。

「この指輪で隠していたみたいです。イビルアイはアンデッドで、おそらく吸血鬼の系統です。えっと、この世界で吸血鬼というのは、人間に混じって生活しているものなんですか？」

「人間の国では絶対ありえないし……少なくともこのあたりでアンデッドと共存してる国なんて無いですね」

マーレは少しだけ残念そうにしてから、イビルアイに向き直る。ここからはマーレの時間だ。アンデッドが相手となればせっかく連れて来た巫女姫の回復魔法は使えないが、マーレはアンデッドを回復させる魔法を使えるらしい。クレマンティーヌも本来は拷問をする側ならば喜々として参加を申し出るところだが、マーレと一緒に拷問というのは嫌な記憶を呼び覚まされそうな部分があり、どうしても一歩退き、目を背けてしまう。

回復手段が確保できたことで、説得は本格化する。

イビルアイは容赦なく引き千切られ、身体の中を掻き回され、様々なものを混ぜ込まれた。

それでも説得作業は遅々として進まない。種族由来の毒への耐性は魔法でも奪えなかったためクレマンティーヌと同様のメニューをこなすことはできなかったが、回復魔法が使われた回数はクレマンティーヌの時より多く、激しい苦痛が与えられ続けていたことは間違いない。

なお、相手がアンデッドでは連れてきた意味がなかったかと思われた巫女姫は、作業を手伝うクレマンティーヌの精神を幾度か回復することで役に立っていた。

そして、幾度となく繰り返されるイビルアイの「早く殺せ」——その張りのある声はとても長時間の拷問を受けた者のものではない。それでも肉体は限界に近づいているため、マールレの魔法によって回復が与えられる。

「アンデッドのせいかな、どうも精神が自然に回復しているような……難しいです」
「エンリ様にでも聞いてみたらいいんじゃないですか？　こういう事は大好きでしょうに」

エンリが蜥蜴人に共食いを命じた時から、クレマンティーヌはエンリがそういう存在だという確信を得ている。それまではたまにマールレに合わせてぎこちなく振舞っているような雰囲気を感じることもあったが、さすがに今はそれの方がンフィーレアの前で体裁を繕う白々しい演技だと考えるようになった。

クレマンティーヌ自身も、少しふぎけた自分を作って演じているうちにそれが素の自

分に混じってしまったので、そういう変化について理解はできる。

「アンデッドで血があまり出ないから、エンリは喜ばないと思います。……そういえば、他の四人はどうしたんだって言ってました」

「他の四人？ 結局、全員捕まえろって話ですか」

クレマンティーヌは横目でイビルアイを見ながら、少しだけ声を大きくする。

これは揺さぶりだ。マーレの拷問は嫌な記憶が蘇るので、早く終わらせてもらいたい。そういう気持ちからのものだ。

マーレの魔法と暴力でただ極限の苦痛を追求していく拷問とは次元が違うので比べたいとも思わないが、クレマンティーヌも相手に合わせた尋問や拷問の経験は豊富なつもりだ。

「そうなんでしょうか。そういえば、もう一対一の問題じゃないとも」

「まー、確かに『蒼の薔薇』の仲間連れてきて目の前で拷問するって手もありますよねー」
「なるほど、そういうことですか」

二人のやりとりを前に、イビルアイの顔色が変わる。これは当たり前だ。

アンデッドでありながら、心の部分を見た目通りということか。

「やめてくれ！ あいつらは関係無い！」

もしこれが漆黒聖典の頃の仲間を伴った任務だったら、マニュアル通りに心を揺さ

ぶつて尋問するところから始めるので数分で落ちていた相手だったのかもしれない。

勿論、そういう邪魔者が居ない今は自分の趣味で肉体的苦痛を与えるところから入ったため、アンデッドであるイビルアイ相手には通用しなかったのだが。

「そうなんですか？ 冒険者は仲間のために命をかけるんですね。エンリも大変なことになるって言ってますし」

素っ気ないマールの言葉に、イビルアイは天を仰ぐ。

——アンデッドのくせに随分と仲間思いなものだ。

「んふふ、二百年も前のことなんて、隠してもしょうがないんじゃないかなー。人間用としてはこの世界でも最悪を突き抜けて最悪な拷問を四人分、たーっぷり見学してみたいのならいいけどね」

そう言つて、クレマンティーヌは深い笑みを浮かべたままイビルアイの耳元に顔を近づけると、畏れと震えの交じる声でその内容を語り始める。それは嘘や誇張の一切ない、真摯な体験談でしかないものだ。

説得はあつけなく終わった。イビルアイは観念し、マールの求める情報を吐いた。

イビルアイは、『国墮とし』本人だ。

十三英雄と戦わず行動をともしたとかそういう部分は確かめようがない。ただ、こ

れは間違いのない事実だろう。

マーレに首根っこを掴まれた状態で魔法を使う姿は哀れにすら見えたが、試しに撃たせた魔法が第五階だとマーレが言う以上は間違いは無い。

第五階を使う吸血鬼——それはまさに国をも滅ぼしうる大きな脅威であり、法国に知れたら確実に漆黒聖典が討伐か捕獲に動く存在だ。

——やつと、終わった。

拷問は大好きだが、嫌な思い出しかないマーレのものは別だ。クレマンティーヌは安堵して、今後のことを話そうとマーレに近づく。

マーレはイビルアイの腕を取る。話は転移してからということなのだろう。

集団転移に備えクレマンティーヌがマーレに寄り添うと——。

「ぐあああああつ!!」

イビルアイの腕が肩口から捻り上げられ、乱暴に塗り取られる。ブチブチと大小の繊維が切れるような音が生々しい。

——終わらないの!?

「適当なことを言わないでください」

マーレの拷問は終わらなかった。再び、人間の身体が相手では考えられないような大

雑把で凄惨な行為が再開される。

そこにあるのは、そもそもこの程度の弱者が伝説にまで残るのか？ という冷淡な態度だ。

クレマンティーヌには拷問を受けるイビルアイを哀れむような気持ちは全く無いが、自身の嫌な思い出を呼び起こすような行為を何度も見たいとは思わない。

そして、ここからイビルアイの側がマールレの望む答えを出せるはずもないので、マールレの機嫌が悪くなる前に話に加わることにする。

クレマンティーヌの説明もあって、マールレはようやく人間の脆弱性とイビルアイの話をつなげて理解することができた。

そして、『国墮とし』本人であるイビルアイが実は十三英雄に出会ってから一緒に旅をしていたこと、そうやって歴史の表舞台から消えたことが『国墮とし』が十三英雄に倒されたという伝承に繋がったことについても、どうにかマールレは納得した。

クレマンティーヌは十三英雄が全員死んでいるという部分について胡散臭くも感じたが、それは確認のしようのないことだ。マールレの求めていた情報が、マールレの望まない結果であれ得られたのだから問題は無いだろう。

問題は、『蒼の薔薇』との関係だ。

マーレは関心が薄くイビルアイの言い分のまま放置しているが、二百年生きているはずのイビルアイは拷問の場数を踏んでいるクレマンティーヌを誤魔化せる程の演技力を持つていなかった。

そこから見えたのは、『蒼の薔薇』がイビルアイが口先だけで主張するような、「私が勝手に愛着を持つて拘っているに過ぎない」吸血鬼に騙されていただけの愚かな冒険者ではなさそうだということだ。もしかしたら、正体を知っていて一緒に冒険をしていた可能性さえ考えられる。

もちろん、今さら『蒼の薔薇』が仕掛けてきたところで何の問題もない。

ただ、戦い以外の方法で敵対的な行動を取られた場合、困るのは何らかの理由で冒険者をやっている、王国内に家族も住んでいるエンリだ。そして、エンリの機嫌を損ねればクレマンティーヌの身にも危険が及ぶ。

やはり、ここはエンリやンフィーレアを交えて今後のことを話し合うべきだろう。

三二一 蒼の薔薇討伐依頼

こんな世界、もう嫌だ。

伝説なんて嘘だ、物語なんて気休めだ。

そう思い知って広い世界に踏み出して、そろそろ一月ほど経つだろうか。

世間体は諦めていた。街に出てからも、それは悪化の一途だった。

ついには王国最高の冒険者さえ自分を責め立てた。かなり堪^{こた}えたが、それも耐え忍んだ。

それでも、この世界でおかしいのはマーレだけで、その影響さえ我慢していれば大丈夫だと自分に言い聞かせていた。

しかし、世界はそんなに優しいものではなかった。

伝説に残る英雄も、王国最高の冒険者も、みんな国を滅ぼすような恐ろしい吸血鬼ヴァンパイアとグルだった。

辛い現実と向き合うのが嫌になりそうになるが、そういう状況を説明するのがクレマンティーヌとなれば、エンリはそんな弱さを見せることさえ許されない。

それでも、マーレに聞けば「役に立ちそうなので持ってきました」「ただの玩具です」みたいな酷い説明で済まされかねないのだから、いくらか状況が理解できるだけでもクレマンティーヌの存在はありがたい。

十三英雄も、『蒼の薔薇』も、国を滅ぼした吸血鬼『ヴァンパイア』と行動をともした。つまり、様々な困難から人々を救っていたように見えて、そういうものを生み出していた側の存在だったということだ。

ンフィーレアはエンリより現実を受け入れるのが早い。「二百年前に急に世界が大変なことになった理由がわかった」という。災厄をばら撒く側の存在が世界各地で好き放題のことをやって、最後にそれを解決したことにしていただけと推理する。

そして、英雄が使っていたような強力な武器や防具が国宝となっていることなどにも触れながら、そんな過程で国が出来たからこそ王国の貴族は問題のある人が少なくないのかもしれないと繋げる。

クレマンティーヌも「そんな考え方もあるかもね」と否定せず話に乗っている。彼女の祖国スレイン法国では王国はかなり悪しざまに言われていたらしく、むしろその理由として納得して受け入れているような雰囲気だ。

エンリには会ったことも無い大昔の英雄のことなどよくわからないが、お伽話の英雄が吸血鬼の仲間で、そういう邪悪な者たちと仲が良いか従っていたような連中が国を作って今の王国があるという上つ面の部分だけは理解できた。

それより『蒼の薔薇』だ。ラキユースは貴族だというが、何不自由なく生きていける身分でありながら、食い詰めた人間がやるような危険な冒険者稼業に身を投じるなど不自然にも程がある。考えてみれば、こういう裏がない方がおかしい。

それでも、あまりに暗澹たる世界のありようを知って、エンリは目まいさえ感じた。クレマンティーヌの目が無ければ顔を覆って座りこんでしまったかもしれない。

「ただ、吸血鬼ヴァンパイアの方は『蒼の薔薇』を騙していただけだって言ってます。まー、庇ってるんでしょーねこれは」

「とにかく、ぼくが用があるのはイビルアイだけなので、他はどうでもいいです」

マールによつて意識を奪われた状態のイビルアイは、二百年以上の時を生きた吸血鬼だという。様々な状況で情報を求めるため、マールはクレマンティーヌのように手元に置くつもりらしい。

「こう言ってるし、吸血鬼はこちらで何とかすると言えばわかってくれるかな」

「どうでしょうねー。わかかって仲間やってたなら話にならないだろうし、そうでなくても、ねえ」

「どちらにしろ問題なのは、『蒼の薔薇』の弱みを握ってしまったことだね。『蒼の薔薇』のリーダーは貴族の出だから、吸血鬼ヴァンパイアと一緒に旅をしていたなんて洒落にならないよ。騙されてましたで済む問題じゃない」

クレマンティーヌが嗜虐的で捻くれているのはわかりきったことで、本来なら吸血鬼ヴァンパイアだと知って仲間にしていたなどとは思いたくもないが、この世界はエンリが考えていたほどまともではない。さらにインフィーレアにそう言われると円満に解決できる気がしなくなる。

「知らずにしたことでも、罰を受けてしまうの？」

「人の上に立つということとはそういうことだけど、向こうだって素直に罰を受けるわけがない。揉み消して僕らの口も封じてしまえばいいわけだからね」

「そうだねー、この国の貴族なら誰でもそう考える。たとえ相手が強くても弱みを探す。今回の場合、エンリ様の村も危ないでしょーね」

インフィーレアに続いて、クレマンティーヌがろくでもないことを言う。

「でも、向こうだって弱みを広められたら困るから、めつたなことはできないんじゃない？」

「ただ広めても、流言を流して人心を惑わしたって言われるのがオチだよ。貴族と冒険者では信用度が違い過ぎるし、冒険者としても向こうが上なんだから」

「そういえば蒼の薔薇は王族とも繋がりがあったはずですよ。王宮に出入りしてゐるって情報があつたんで。……これはもう、闇討ちして片付けてもこつちが悪役にされそうですね」

よくわからないが、その理屈はおかしい。逆に闇討ちしておいて悪役にされない方法があるとも言うのだろうか。

「アダマンタイト級冒険者といえば英雄みたいなものだから、それくらいのコネもあるだろうね。それなら、こちらが何を言つても英雄の足を引つ張る流言を流す者として非難されるだけで終わりだよ」

「それじゃ、どうすれば——」

困り果てたところを、何をつまらないことで悩んでいるのか、という雰囲気口を挟むのはマールだ。

「えっと、困つてるならどうにかしてもいいですけど、その王宮っていうのはスレイン法国の神殿の百倍以上大きいですか？」

——うわ、嫌な予感しかしらない質問。

「そこまで大きくないです。た、たぶんマール様の考えてる天災つばい何かでもカタはつくけど、それは最後の手段にした方がいいかなーって思います。私も目立ちたくないし、マール様もそうでしたよね」

「そうですね。いい手があればそっちにしてください」

凶悪なクレマンティーヌも、マールの前では常識人として振る舞うことが増えている。ありがたいことだ。

「うんうん、それがいいと思うよ。……ンフィー、何か言いたそうにしてるけど?」

「この街には蒼の薔薇に迷惑を蒙ってる人たちがいるから、それを味方につければチャンスもあると思うんだ」

「お、ンフィーちゃん賢い。それなら相手が貴族でも王族でも大丈夫かも」

——ん? なんか馴れ馴れしい……。

こういう時、たまに二人の関係が気になってしまいが、それより今はンフィーレアの話だ。クレマンティーヌがわかったふうな態度をとっているからエンリもそうせざるをえないが、当然ながら何が言いたいのか全くわからない。

「ちよつとずるいかもしれないけど、吸血鬼ヴァンパイアの件を『蒼の薔薇』に閉鎖された組合を解放する大義名分にすれば、少なくとも組合は味方になってくれるよ」

「へ? それだけ? それじゃこの街以外では向こうが正義だよ。組合に目をつけたところまでは凄かったんだけどなー」

クレマンティーヌは拍子抜けしたような反応。感心してその話に乗っかろうと思つたエンリはギリギリの所で踏みとどまる。

こうして、聞きたくても聞けない立場の辛さを味わうのは何度目だろうか。困ってンフィーレアの方を見ると、同じように早く続きを聞きたいという態度だ。

——ンフィーは自分を取り繕う必要なんて無いんだから、早く聞けばいいの……に……。

——そうだ！ 私以外の人に説明してもらえばいいんだ！

「クレマンティヌ。あなたの考えていることをンフィーにわかりやすく説明してあげて。」

エンリは会心の一言を思いついたことで心の中で小躍りしたが、ンフィーレアはエンリとは違う方向できちんと頭を使おうという姿勢があつた。

「待つて。……ええと、組合を通して僕らが正しいってことを皆に知ってもらえばいいってことでいいのかな？」

「まあ、正解だね」

「でも、どうやって？ 組合が処分とかできるのはエ・ランテルの冒険者だけで、『蒼の

『薔薇』は無理だし……」

「ンフィーちゃんのおかげで思いついたんだけど、わっかんないかなー。組合とか冒険者たちを見届け人として蒼の薔薇を潰せばいいんだよ。つまり、エンリ様のいつもの発想でいいってこと。ですよねー」

「ええっ……あー……うー……潰すって、ちよつとわかりやすく説明してあげてほしいんだけど」

——ですよねーじゃない。いきなり振られても困るし、そんなのがいつもの発想なのはマールレだけだと思おう。

「はい。まず、組合に押し入って組合長でも助け出して蒼の薔薇の罪を晒して、組合から討伐の依頼を貰ったことにしまーす。蒼の薔薇には、勝負に勝てば秘密を守るとか、ヴァンパイア吸血鬼を返して欲しいなら返すとしても言えばいい」

「返す気はありませんよ」

話を聞いているように見えなかったマールレだが、すかさず口を挟む。

「どうせその勝負で蒼の薔薇を潰せば、危険な吸血鬼はこつちでどうにかするって話にもできます。でも、見届ける組合の冒険者たちが怯えないような戦い方にしてくださいね」

クレマンティーヌはマールレの希望には逆らわない。ヴァンパイア吸血鬼をどうするつもりなのか

はよくわからないが、その表情に迷いが無いことから何か考えがあるのか。これまでに『蒼の薔薇』が隠してこれたのだから、どうにかする方法があるのだろうか。

とにかく、ここまで来たら蒼の薔薇とはぶつかるしかないということではエンリも頭では理解しているが、王国最強の冒険者チームと戦う覚悟などあるはずがない。クレマンティーナの前で強者を装ったまま戦いを避けられるような上手い理屈が全く思い浮かばないのが辛いところだ。

その後、イビルアイが人質として通用しなくとも冒険者組合へ力づくで押し入ろうというクレマンティーナの案は、ンフィーレアによつて各神殿勢力と都市長から依頼を取り付けてから押し入るという形に修正された。

少し穏便になったのは助かるが、最後に『蒼の薔薇』と戦うという部分はどうかにならないのだろうか。

この時、都市長が冒険者組合の閉鎖を認めるサインの後ろに自筆で書き足した「本件に一切の関わりを持たない」という一文をもつて『蒼の薔薇』に協力的でないことを見抜いたンフィーレアと、ンフィーレアの提案を聞いてすぐにそのことを思い出し話に乗ったクレマンティーナは、エンリとは別次元の存在のように思えた。

しかし、エンリは信じたい。文字さえ読めれば、きっと自分だってそれくらい思いつ

いたか、少なくとも二人と同じ立ち位置で会話に入っていけたはずだと。

クレマンティーヌとンフィーレアは盗まれた鎧がどうか決闘の条件がどうか細かな部分の打ち合わせをしているが、エンリの頭には入ってこない。

それでもこの日、これからの人生の強い支えになるかもしれない「説明してあげて」という言葉に到達することができたエンリは、少しだけ自分自身の可能性について前向きに考えることができるようになっていた。

まず、一行は神殿へ向かった。

神官というのはアンデッドを見分けられるので、吸血鬼ヴァンパイアであるイビルアイがどれほど酷い状態でもそれに同情することはありえないとのことだが、今のエンリはその程度の話で安心できるほどおめでたくはない。

国を滅ぼしたという恐ろしい吸血鬼ヴァンパイアに同情するわけではないが、街中で血塗れの少女を持ち運ぶか引きずり回す冒険者というその見た目がどうしても心配になり、一応マーレに回復してもらおうことにした。

やはり街では人目が無いわけではなく、通りすがりの四人組の旅装の男女にはジロジロと見られたりもしたので、その判断は正しかったはずだ。

——神殿や都市長が代わりに『蒼の薔薇』の処罰とかやつてくれないかな。
 そんなエンリの期待は空振りに終わる。

エ・ランテルは比較的大きな街だが、それでもアダマンタイト級冒険者を自ら断罪しようなどという組織が存在するはずもなかった。それどころか、ンファイレアとクレマンティーナの二人はいきなり『蒼の薔薇』の名を出せば討伐依頼を貰えるかどうかも怪しいという。

結局、ンファイレアの立案によって、最初の神殿では『蒼の薔薇』の名を出さずイビルアイとその正体を隠蔽してきた手段を見せるだけで「吸血鬼を街に連れ込んだ冒険者」への討伐依頼を書面にして貰い、次以降の神殿では吸血鬼とともに書面を半端に見せて事情を話すことで「吸血鬼を街に連れ込んだ『蒼の薔薇』」への討伐依頼を貰うことができた。そんな時、イビルアイはクレマンティーナに何やら囁かれ、何かに耐えるように黙り込んでいた。

こちらから声をかけて依頼先まで書かせるのはおこがましいとして冒険者チーム『漆黑』の名を書かせなかったのは、エンリのせめてもの抵抗だ。

「どこの神殿だつて自分たちが最初に『蒼の薔薇』に敵対する勇氣は無いだろうけど、勝手に横並びだと思つてもらえれば大丈夫なんだよ」

そう言うンファイレアに、いつも通りわかつたふりで応じておいた。エンリはこのこ

とを二人きりになれる時まで覚えていられたら、きちんと説明を聞いておくつもりだ。

都市長も「しんでんせいりよくのそういなら、しかたないね」と言いながら書面を書いてくれたが、その内容は『蒼の薔薇』の吸血鬼ヴァンパイアの討伐依頼となっていた。ンファイレアが目を丸くして、クレマンティーヌは「食えないおっさんだね」などと言っていたが、ぷひーぷひーと可愛い鼻息を立てていたあの人に限って複雑なことを考えているということはないだろう。あまり話を聞いていなかっただけに違いない。

「蒼の薔薇に迷惑を蒙ってる人たちを味方にするんだったら、他の冒険者にも声をかけた方がいいんじゃないかな。ランクの高い人たちだけでも」

それが今のエンリの精一杯だ。討伐依頼には依頼先の記載が無く、結構な金額が提示されている。もしかしたら宿屋にいたミスリル級や白金級の立派な冒険者たちが複数チームで連合を組んでどうにかしてくるかもしれないと考えたのだ。

エンリの気持ちを知ってか知らずかンファイレアが賛成し、宿に滞在している間に冒険者たちと親交を深めていたクレマンティーヌが今いる全員を連れてくると約束する。

エンリは逆転の一手が思い通りに動き出したことで胸をなでおろす。

しかし、連れてこられた三十人余りの冒険者たちに戦意は無い。『漆黑』が『蒼の薔薇』

と戦うという前提で、彼らはその見届け人として、また冒険者組合の業務を再開させる手助けとして連れてこられていた。

状況を説明する中で、複数の信仰系魔法詠唱者がイビルアイがアンデッドであることを確認してもそれは変わらない。怯えや畏れの色を見せるかエンリたちを遠慮がちに激励するかで、ともに戦おうとか自分たちがやってやろうという気概は全く見られない。

「無茶を言わねえで下さい。俺たち全員が束になっても『蒼の薔薇』の相手なんか無理ですぜ」

「我々なんてその魔法詠唱者の吸血鬼マジック・キャスター ヴァンパイアだけで全滅ですよ。たとえば『漆黒』と一緒に足手まといにしかありません」

「クレマンティーヌの姐さんに言われた通り組合は元通りにしますし、決闘は全員で見届けますんで、後はよろしく頼みます」

——決闘とか伝わっている。よけい逃げ道が無くなっただけかも。
「お、俺は……死ぬ気で『漆黒』のために頑張りますから……」

頑張ってくれそうな人もいるが、顔面蒼白で小刻みに震えている。

見ると、それは以前エンリの理解者として組合長に意見してくれたイグヴァルジというミスリル級冒険者だ。クレマンティーヌにほんぽんと肩をたたかれて親しげな雰囲気

気だが、体調でも悪いのか、あるいは『蒼の薔薇』の英雄然とした顔の裏にある恐ろしさのようなものを知っているのかもしれない。

この日、エ・ランテルの冒険者たちは、自分たちの本拠地^{ホム}を取り戻した。

この街の上位の冒険者の大部分が集まって組合長への面会を申し込んでくれば、よそ者の『蒼の薔薇』は一步退かざるを得ない。

リーダーのラクユースは神官であり、マールが連れているイビルアイの変化にも気づいているようだ。今のイビルアイは正体を隠すマジックアイテムを外されており、神官であれば簡単にアンデッドだと見抜くことができる。

エンリたちは冒険者たちに守られながら軟禁状態だった冒険者組合長プルトン・アインザックに会い、がっちり握手を交わした。組合長は『蒼の薔薇』への協力を拒み続けていたらしい。

「エンリ君も含め、この街の冒険者を信じるのが私の仕事だ。どちらがつよ——ゴホン

！ どちらが正しいかは、私には最初からわかっていたよ」

アインザックは討伐依頼書に躊躇なく冒険者組合長印を押していく。最後に、組合長を依頼者とする『蒼の薔薇』の討伐依頼書を作成し、『漆黑』への指名依頼とした。

エンリは思わず声をあげる。

「そ、それはちよつとー！」

「心配しなくていい。これは私が君の味方だという証だ。後の責任は全て私が取る。エ・ランテルの冒険者組合を取り戻してくれ」

——心配しているのはあなたのことではないんだけど。

「姐さん頑張ってください」

「エンリさん、お願いします」

「俺達の組合を取り戻しましょう！」

「な、何でもしますから……」

退路は塞がれた。こうなったら、これ以上戦いを煽られる前に冒険者組合の正常化を急がねばならない。

エンリたちは冒険者を引き連れ、『蒼の薔薇』のもとへ向かう。ここですべきは戦いではない。

「組合の鍵や書類などを返してください。みなさん困っています。吸血鬼を連れていた

あなた方にそんなことをする資格は最初から無かったのです」

これはエンリの本音だ。人のことを疑ってかかる前に我が身を顧みてほしい。

討伐依頼を突き付けられた『蒼の薔薇』のラクユースは顔面蒼白になりながら、武器に手をかける仲間たちを制する。

戦士のガガーランは苦虫を噛み潰したような顔でラクユースを守るような位置取りをするが、盗賊風のティアともう一人の同じ顔の女は表情を変えずにラクユースの方を窺っていた。

もしラクユースが一言でも指示をすれば、すぐにでも襲いかかってきそうな雰囲気だ。

「ここで事を荒立てるつもりはありません。まずは話をしましょう。そちらのお二人は、こちらの冒険者の皆さんと一緒に組合を元に戻す作業を手伝ってください」

「鍵が開かない扉が開かないでは困るから、よろしくねー」

戦いを恐れるエンリは理屈も考えずに飛び道具を持っていそうな盗賊風の二人を引き離しかかるが、クレマンティーヌの的確なフォローに後押しされる。

「ティア、ティナ、ここは仕方がないので、言う通りにしましょう」

応接室ではエンリたちと『蒼の薔薇』のラクユースとガガーランがソファに座り、各

冒険者チームのリーダーがそれを取り囲んで立っている。ソファの端に座ったマーレが意識の戻っているイビルアイの腕を掴んでいるのは、拘束への耐性を持っているとかで縛ったりすることができないからだ。マーレとクレマンティーヌがしつかりと脅してあるらしいので、無茶なことはいらないだろう。

「こいつの方から喧嘩を売ってきたらしいね。あんたら偉そうにしてるけど吸血鬼ヴァンパイアなんか連れてたんだ」

「いや、私は正体を隠していた。こいつらは——」「黙りなよ」

「こういう時、『蒼の薔薇』の威圧感に負けないクレマンティーヌの存在は助かる。すぐに口を挟むイビルアイを黙らせてくれた。」

「おいお前、あの時は一体どこへ逃げたんだ」

「んー？ ちよつとこいつの化けの皮剥がすの手伝ってただけだよ」

クレマンティーヌは、マーレがイビルアイと会った時に『蒼の薔薇』とひと悶着あったと聞いている。ガガーランが問うのはその話だろうか。

「卑怯者が。最初から二人で仕掛けるつもりだったのかよ」

「二人？ んふふ、それはどうだろうね」

顔を歪めて吐き捨てるガガーランをクレマンティーヌが嘲笑う。

「イビルアイは……『蒼の薔薇』の大切な仲間です。私たちの仲間を返しなさい」

——仲間？

他の冒険者たちも立ち会っているというのに、ラキユースの言葉には迷いが無い。それはエンリリにとっては軽い驚きだった。

イビルアイは元々マジックアイテムで正体を完璧に隠していた。それなら、『蒼の薔薇』は正体に気付いていなかったことを前提に、口封じに来るか、仲間であったこと自体を否定してしらを切るかと考えていたからだ。

それが、アンデッドを看破でき神官のラキユースがこのような事を言えば、言い逃れはできなくなる。また貴族の縁者という立場でも、吸血鬼ヴァンパイアを仲間と認めるのはとんでもないことのように思えるが——。

「違う、仲間じゃない!! 私を騙してたんだ、そうだ、お前たちが仲間と思ってるのは私の魔法の力だ。私のことは諦めて、帰れ!」

「何を言ってるの!? そんなわけにいかない。イビルアイは私たちの大切な仲間よ!」

「そうだ、俺たちは仲間だ! イビルアイは人間に危害を加えるような存在じゃない!」

ヴァンパイア
吸血鬼のイビルアイがまるで仲間を庇うようなことを言う。そして、ラキユースが、ガガーランが、イビルアイを庇う。

まるで茶番だ。アダマンタイト級冒険者ともあろう者たちが、イビルアイが正体を隠すマジックアイテムを失っていることに気付いていないわけがない。

あるいは、そんなことは関係なく、そういう演技をすることでこの場を自分たちの信
 用力だけで押し通そうとしているのかもしれない。

つまり、『蒼の薔薇』は吸血鬼ヴァンパイアを仲間として扱い、これまで通りにやっていきたいとい
 うこと——それは、『蒼の薔薇』がイビルアイを吸血鬼ヴァンパイアと知っていて仲間にしていたとい
 うことでもある。そして、イビルアイの正体が露見してもなおそれを止めるつもりはな
 いようだ。

「こいつらは不味い！ 頼むからここは諦めてくれ！ お前たちでは——」
 「ちよつとうるさいよー。黙らないとその仲間が………」

クレマンティーヌが耳元で何やら囁いてイビルアイを黙らせる。

『蒼の薔薇』の行動は理解できない。吸血鬼ヴァンパイアを連れて王宮に出入りしていたような者
 たちを、こんな白々しい演技で誰が信じるだろうか。全てが露見し、全てが手遅れだと
 いうのに。

エンリはラキユースからの厳しい詰問を思い出し、ふと暗い笑みを浮かべてしまう。
 その笑みには、事前に粗探しをしてまで自分を陥れようとした相手が英雄などではなく
 邪悪な存在だったことへの安堵の感情も含まれていた。

「ラキユースさん、あなたは神官なので、今はイビルアイヴァンパイアが吸血鬼だとわかるはずですよ。

……わかっていてそんなことを言っているんですか？」

「イビルアイは吸血鬼ヴァンパイアですが、それでも『蒼の薔薇』にとつてはかけがえのない仲間です。人間に危害を加えるような存在ではないことは私たち『蒼の薔薇』が保証します」

ラキユースはエンリの方を目をまっすぐ見て、堂々とした態度で言い放つ。引き込まれそうな澄んだ目は、とても嘘をついているようには見えない。

——こんな綺麗な目でそんなでたらめを言えるなんて、このひと怖い！

『蒼の薔薇』が連れていたイビルアイは国を滅ぼしたことがある吸血鬼ヴァンパイアのはずだ。本人が明かしたのだから間違いはない。そして、国が滅ぶような状況なら、その犠牲は数百や数千では済まなかっただろう。

エンリは戦慄し、僅かに残っていた暗い笑みは引きつったものになる。

このラキユースは冒険者である前に嘘と謀略の世界で生きてきた貴族ばけものなのだ、エンリは思い知った。

追い詰められているのは『蒼の薔薇』のはずなのに、何故かはわからないが、この場

の善悪さえ簡単に引つ繰り返されそうな不気味さがある。

この場でも、仲間の神官たちから確実な答えを得ているはずの冒険者たちにさえ戸惑いが見える。これでは、確証をもたない役人や他の貴族であれば『蒼の薔薇』の方を信じてしまうかもしれない。

「んふふ、つまり『蒼の薔薇』は『国墮とし』を手放したくないわけだ。一緒に王宮にまで出入りしてたらしいねー。詰んでるわこの国」

——がんばれ、くれまんでいーぬ。

後ろ暗い世界で生きてきたクレマンティーヌには、ばけもの貴族の技は通用しないようだ。エソリはクレマンティーヌを心から応援する。

「王宮とか関係ねえだろうが！　そもそもてめえのあの鎧こそ冒険者殺しの動かぬ証拠だ！」

「……へえ、あれつて殺して奪ったものなんだー。初耳いー」

クスクスと笑うクレマンティーヌ。窮地のはずだがその余裕……どうするつもりなのだろうか。

クレマンティーヌの催促するような視線を受けて、ソフィーレアは少し顔を歪め、大きく息を吐いてから口を開く。

「クレマンティーヌが発見して隠してあった鎧ですが、貼り付けられていた沢山の冒険

者のプレートは『蒼の薔薇』の吸血鬼の犠牲になった人たちのものかもしれませんが、『蒼の薔薇』があれの存在を知っている理由も盗み出す理由もわからなかったのですが、吸血鬼の存在で全てが繋がりました」

「き、貴様！」

「だよー。私は盗まれたプレートかと思つてたんだけど、吸血鬼連れてた連中が殺して奪つたつていうならそうなんだろうね。……イグヴァルジはどう思う？」

クレマンティーヌが憤るイビルアイの頭をぽんぽんと叩きながら言い放つ。

これは明らかでないが、相手は国を滅ぼした吸血鬼と、聖女のような顔で平然とそれを正当化する貴族だ。クレマンティーヌの過去に絡んでややこしいことになってそこに付け込まれれば、平民の冒険者に勝ち目など無くなってしまふ。これは仕方のないことなのだろう。

「は、はい。姐さんの言う通り、全て恐ろしい吸血鬼の仕業だと思えます！」

「イグヴァルジさん、あなた！」

イグヴァルジは気まずそうにラキユースから目をそらす。

この人はエンリの事もよく理解してくれて、最近はクレマンティーヌと特に仲が良い。やはり最初の印象通り、信頼できる冒険者だ。

「まー、吸血鬼の冒険者殺しについては、プレートがそれだって証拠も無いから追及はし

ないけど、王宮に出入りしてたのはまずいよねー」

「それは！ 私たちがこの国のために戦っていたから——」

「国のことを言うのなら、王都で『蒼の薔薇』と貴族であるあなたが吸血鬼ヴァンパイアと一緒に冒険者をやっていたという事を公表して、吸血鬼ヴァンパイアの処遇を国で決めてもらうのが正しい道だと思います」

クレマンティーヌの言葉に、演技を続けながら食い下がるラキユース。それに怯まず、正論を言ってくれたのはインフイーレアだ。

勢いを得てクレマンティーヌも楽しそうに追撃を入れる。

「んふふ、貴族なら色々な知り合いに迷惑がかかっちゃうねー。取り潰しとか、追放とか？ 派閥争いが捗りそー。少なくとも王宮であんたらと仲良くしてる奴は確実に終わるね」

「……そんなこと、絶対に許さない」

ラキユースの瞳に怒りの色が灯る。貴族が普通ぼけものの人間になった瞬間をエンリは見逃さない。

「それなら、こんどは貴族としての力でも使って、このことを握り潰しますか？」

「そんなことは……」

「エンリ、この国では貴族と正面からやり合うほど馬鹿らしいことはないよ。……ラ

キユースさん、あなた方が正義だけでやり合える相手ではないのはわかっています」

そう言い放ったンフィーレアは固い決意を込めた眼差しを向けてくる。それは、『蒼の薔薇』がただ諦めてエ・ランテルを去るような流れを期待していたエンリにとつては嫌な予感しかしないものだ。

エンリはすべての力を思考に回すが、今さら何も出てこない。

「私には貴族のそういう力はないし、あつても使いません！」

「そんな言葉を信じられるわけがないよねー。国を滅ぼした吸血鬼ヴァンパイアを無害だとか堂々と
言える女の何を信じろつての？」

「それは……」

クレマンティーヌの言葉にラキユースは困惑する。貴族らしい分厚い面の皮でもこのあたりが限界なのだろう。

「まー信用できないからこそ、決着をつけておかないとやっつてのはあるよねー。『蒼の薔薇』の冒険者としてのプライドくらいは信じてあげる」

「決着？」

「そ。私らは『蒼の薔薇』討伐依頼をもらつてる。あんたらは吸血鬼ヴァンパイアを返してほしい。だつたら戦つて決着をつけるしかないよねー」

「それで、イビルアイを返してもらえるの？」

「絶対にありえないけど、あんたらが勝ったらそれでいいよ。私たちは今回のことを無かったことにしてあげるから、あとは口止めでも何でも勝手にすればいい。元々誰も逆らう奴なんて居ないだろうけどね。でも、負けたら『国墮とし』との関わりを絶ち、この街と私達にも二度と近寄らないこと」

クレマンティーヌが提示したのは決闘だ。その内容は先程話し合ったものなのだろう。ンファイアに目配せしながら話は進む。

場所は今夜のうちに使者を送って指定し、時刻は明日の正午。もしその場に来なければ、すぐに神殿勢力を伴って王都を訪れ、アルベイン家と『蒼の薔薇』のパトロンの処罰を求めるといふ。

「下種野郎が……仲間を人質に取られた状態で戦えつてのかよ」

ガガーランが吐き捨てる。その言葉に戦いを止められそうな気配を感じ、絶望に濁り始めていたエンリの瞳が輝きを取り戻す。

「確かに、そんな状態で戦えというのは無理な話かもしれないね」

和解に向けて作った表情は微笑みだ。優しい微笑みを浮かべて発したこの一言で、戦いへと向かう恐ろしい流れが滞る。その隙に、エンリは戦いを回避する道筋を全力で考える。

——まずはクレマンティーヌを黙らせるために……ここはマールで！

エンリは膝を折ってマーレに視線を合わせ、問う。

「マーレはイビルアイを解放するつもりはないのよね？」

「情報源として確保したんですが、戦う間だけ解放してもいいですよ。どこに逃げても捕まえられるようにしてありますから」

期待していたのと逆方向の答えに、エンリは口をぱくぱくさせる。笑顔が引きつる。前提が崩れ、思考が崩れ、立て直せない。頭がうまく働かない。

「そんじゃ、いったん解放して改めて吸血鬼ヴァンパイアと『蒼の薔薇』を討伐するって形でいきましょーか。エンリ様も全員まとめて潰したいみたいだし」

冒険者たちが驚愕の表情でエンリに注目する。とっさに引きつった愛想笑いで応じるが、正しい表情はこれじゃない気がする。しかし、もう遅い。

決闘の条件としてクレマンティーンに付け加えられたのが、直前にイビルアイを解放し『蒼の薔薇』とともに戦うことを許すということ。

有効な手を打てないままこれを聞いたエンリの心臓は飛び跳ねた。

——死ぬ。絶対死ぬ。アダマンタイト級冒険者で、投げナイフみたいなもの持ってるのが二人居て、さらに吸血鬼ヴァンパイアの魔法詠唱者まで相手に戻すなんて。

エンリはぱくぱくと口を動かすが、うまい言葉が出ない。

インフィーレアに視線を合わせると、目を伏せて小さく首を振る。どうにもならないと

いう雰囲気だ。

「……わかりました。全員でということなら、その勝負受けます」

ラキユースは静かな怒りをたたえた瞳をエンリに向け、決闘を受け入れた。『蒼の薔薇』だけでなく冒険者たちの視線も集まってくるので、エンリは動揺を押し込めて表情を引き締めた。

三三 身代わりを立てる

冒険者組合の閉鎖は解かれた。『蒼の薔薇』は組合に踏み込んだ冒険者たちを避けて一段グレードの低い宿に引込み、組合の業務は再開された。

『蒼の薔薇』が去ると、冒険者たちは普段から親しくしているクレマンティーンに疑問を投げかける。

「姐さん、あんな条件でいいんですか？」

「アンデッド連れてた連中を戦った後は野放しになんて……」

周囲の冒険者が戸惑うのも無理は無い。『蒼の薔薇』は今や立派な犯罪者集団だ。

「そう言うけど、追い込みすぎてあいつらが逃亡して冒険者に復讐するようになったら、あんたら対処できるの？」

クレマンティーン又の言葉に冒険者たちの顔色が変わる。貴族としての復讐も怖いのだが、そういう考え方もあるのだろう。

「それはわかりやしたが、わざわざ吸血鬼を解放して一緒に戦わせるってのは一体」

納得のいってない顔で盗賊風の冒険者が疑問を呈するのは、エンリの生死もかかっている危険な行為に対してだ。

——がんばって、名前わからないけど。

「吸血鬼無しで叩きのめしても、吸血鬼を助け出して一緒に戦えば勝てるなんて思われただら後が面倒だからねー。最初から絶望的なまでの差を思い知らせて心を折っておく方が早いし、それがエンリ様のやり方ってこと」

クレマンティーヌは「吸血鬼単体の討伐依頼もあるからね」と言って笑った。

冒険者たちから再びとてつもないものを見るような視線を向けられ、エンリは慌てて半開きになっていた口を閉じた。

——帰ったらンフィーに相談しよう。明日までに何とかしないと、本当に死ぬ。

エンリの脳裏には走馬灯のようにマーレとの思い出が蘇る。

オーガやゴブリン、そしてクレマンティーヌの襲撃——エンリは様々な場面で矢面に立たされ、時にはモンスターの攻撃を受けることさえあった。それでもどうにか今日まで生き延びてきた。

しかし、明日はこれまでとは全く違う。おそらくエンリなど一撃で殺せてしまうようなアダマンタイト級冒険者が、五人同時に襲ってくるのだ。そしてそのうち少なくとも三人は遠距離攻撃の手段を持っている。飛び道具だけならマーレに頼んでおけばどうにかなるかもしれないと思っていたが、魔法まで来るなら対処のしようがない。

チーム同士の戦いとはいえ、エンリは冒険者チーム『漆黑』のリーダーどころかチームそのものであり、最初の瞬間から複数人に狙われる可能性が高い。ただでさえ鷹揚に構えているマールの護りでは、これまでのように一つを防いでも二つ三つと同時に来ればエンリの命運はそこで尽きるだろう。

——逃げるか。

マール相手にそれは不可能だ。きよとんとした顔のマールに簡単に連れ戻され、クレマンティーヌに弱さが露見してしまう。

——いつそクレマンティーヌに真実を話し守り手を増やすか。

エンリは間接的にクレマンティーヌの拷問に関わったことになっている。マールと別れた後、クレマンティーヌに確実に殺される。

——どうにかしてこの戦いを中止にする方法を考えるか。

弱いことがバレれば後でクレマンティーヌに殺される。さらに、秘密を知る者として後で『蒼の薔薇』にも殺される。殺されすぎだ。

エンリは八方塞がりの思考を止める。今のエンリにとって、本当に頼りになるのはエンリだけだ。

冒険者組合に押し入ってきた上位の冒険者たちとちか合うことを避けるため、普段より質素な宿をとった『蒼の薔薇』だが、その一室には重い空気が漂っていた。ここでは『漆黒』と話をしたラキユースとガガーランが、その場にいなかったティアとティナに状況の説明を終えたところだ。

「そうね、私がどうかしてたかもしれない。……あの時、二人がかりかそれ以上だったとしても、イビルアイがああなるような相手に勝算は無い。明日の戦いをみんなに強要するつもりはないわ」

ラキユースの目には涙が浮かぶ。組合では気丈に振る舞っていたが、苦楽を共にした仲間たちの前では本音が出る。

「鬼の目に涙？」

「らしくない」

ティアとティナは心配そうにラキユースを見つめる。仲間たちの意思を尊重するべく、ガガーランは腕組みをしたまま口を結んでいる。

ラキユースは意を決したように、大きく一呼吸入れてから口を開く。

「私たちの負け。『蒼の薔薇』は、今日限りで解散します。みんな、いままで有難う。……
不甲斐ないリーダーで、ごめんね」

「リーダーが諦める？」

「賢明だけど、似合わない」

「解散ってお前、明日はどうするつもりだ」

それは『蒼の薔薇』のリーダー、ラキユースの言葉として最もありえないものだ。ティアにティナ、そしてガガーランが一斉に詰め寄る。

「私は、一人で行くつもりです」

「……おい、てめえふざけてるのか？」

ガガーランがラキユースの胸倉を掴み、ティアとティナもラキユースに厳しい視線を向ける。

「これは『蒼の薔薇』のリーダーとしてさせてもらう、最後の決断です。明日の戦いは、私一人で——」

「そんなのは戦いではなく公開処刑」

「二人で死のうとする理由を知りたい」

「認めるわけじゃねえが、一人で行くなんて戯言を聞かされた俺たちには理由を聞く権

利くらいあるはずだ」

先走りの理由を問われたラキユースは小さく息を吐き、寂しげに微笑む。

「そうね、ごめんなさい。結局『漆黒』は、私たちの秘密を知ってしまったの。そこから、私たちを倒すかイビルアイを王都に連れていっておごごとしなければ自分たちの身が危ないと考えてしまうのは、私が貴族の出だからよ。だから私さえ『漆黒』の前に現れれば、みんなもラナーも守られる」

ガガーランが手を放し、ティアとティナの視線も和らぐ。

「わかってくれたのなら、今夜のうちに早くこの街から——」

「リーダーは甘い」

ラキユースの言葉を遮るのはティアだ。

「リーダーがやられたら、次は私たちの番。向こうの視点で私たちの復讐などを考えないわけがないし、例の鎧とか『漆黒』に都合の悪い情報を掴んでる私たちを始末するのは当然のこと」

「そんな……」

「エンリはあの時、私たちを引き離そうとした。これは『漆黒』の弱点を考えて私たちを警戒していることを意味している」

「ん、飛び道具に弱いとか？」

「どういふこと？」

ティナが、そしてラキユースが問う。ティアの把握していることをティナが察していないというのは珍しいことだ。

「これは私しかわからないのも無理はない。私はあの巫女姫の恰好に興奮して、幼い身体のラインを完璧に脳裏に焼き付けてあるから」

「それなら仕方ない。姉妹を隔てる性嗜好の壁は果てしなく高い」

「……まじめな話ではなかったのかしら」

ティナは即座に理解を示すが、ラキユースの視線は少し冷たいものになる。

「コホン、今は真面目。あの未熟な身体は細すぎず太すぎず、それでいてふんわりと柔らかそうで——それはともかく、俊敏に動けるようには見えなかった。信仰系魔法詠唱者マジック・キャスターとしても筋肉は無さすぎで戦闘経験があるとは思えない。冒険者から町娘まで幾多の女子を凝視してきた私の見立てに間違いはない。あの子だけなら簡単に仕留められる」

「なるほど、唯一の回復役を潰せばチャンスはある」

ティアは女の子が大好きだ。『蒼の薔薇』で公然と晒されているその同性愛者としての立場にブレは無く、その観察眼は確かなものだと思われた。

「そーいやイビルアイを解放する話の時も、あのエンリはいい顔をしなかったな。俺はてつきりあいつが魔法を苦手にしてるのかと思っただが」

「二人で冒険者チームを名乗るほどの人がそれは無いと思うわ。あの服だつて陽光聖典の隊長と戦つた時は攻撃魔法の効果を軽減していたし。今考えると、それも全体を見渡すリーダーとしてチームの弱点の巫女姫さんを心配してのことね」

ガガーランも自分の観察した部分を思い出すが、あまりに都合の良すぎる部分はラキュースが否定する。ただ、『漆黑』が飛び道具や魔法を嫌っているという考えは『蒼の薔薇』に希望を与えた。

「そういえば、他にも弱点はある。前髪で顔を隠した男もたぶん弱い。ちよつと育ち過ぎだからティアほどまじめに観察してないけど」

今度はティナの嗜好である少年愛に基づく視点だ。彼女は少年が大好きで、ンフィーレアは少年と大人の狭間の存在だった。長く接点があつたわけではないが、女ばかりの『漆黑』が相手ならティナの目のやり場はそこしかなくなる。

「あの童貞については俺も見ていたから、それは保証するぜ」

ガガーランが好きなのは童貞だ。既に身体の準備ができていて本番を迎えていない男性であれば、直感で獲物と判断してしまうところがある。あの場にいた獲物はンフィーレアだけだ。

「——ついでにあの闇妖精も見た目では弱そうだと思ふんだが、飛行魔法とかイビルアの言っていた強力な近接攻撃魔法とかを考えるとこれは駄目かな」

「飛び道具を集中すればいけるかも」

「位置取り次第」

マジック・キャスター

遠距離から魔法詠唱者を狩るのはティアとティナが得意な分野だ。体術を鍛えず魔法ばかりで対処してくるタイプなら、虚を突いて一撃を入れるだけで致命傷を与えることができる。

『蒼の薔薇』はいつの間にか活力を取り戻し、明日の戦いに備えて熱く話し合った。

もちろん、純粋な勝算は全く無い。イビルアイを倒したのがマーレとクレマンティーヌの二人であろうと、何らかの方法で全員でかかったのであろうと、『蒼の薔薇』の残り四人ではイビルアイに勝てないのだから総合力ではどうにもならない。イビルアイが諦めろと言う程なら、そこで希望を持つことはできない。

しかし、味方に犠牲が出る前に何としても『漆黒』の巫女姫を殺し、できればンフィーレアという少年まで殺すことができれば、その場でラクユースしか使えない復活魔法を交渉材料としてイビルアイを返してもらいうことができるかもしれない。『漆黒』にとつては復活魔法まで使えるという巫女姫はもちろん、どんなアイテムでも使える異能を持つ少年も重要度は高いはずだ。

「『漆黑』が『蒼の薔薇』の討伐依頼を受けたらしいぞ」

「はあ!?! 逆じゃないの?」

「私も聞いた。『漆黑』の奇襲を受けて捕まった『蒼の薔薇』の魔法詠唱者イビルアイが吸血鬼だったという話」

「英雄のように言われていた『蒼の薔薇』が吸血鬼の仲間だったというのは……残念です。それにしても、魔法を使える吸血鬼というのは恐ろしい存在ですよ。各個撃破できたのなら本当に良かった」

神官ふうの男は胸元の聖印に触れながら安堵の表情で語る。

「それが、その吸血鬼も『蒼の薔薇』に合流させてから決闘をして倒すらしい」

「何それ! 頭おかしいんじゃないの!?! 確かにそういう人だって聞いてるけど、無茶にも程があるでしょ」

「あのイビルアイは第五位階まで使う。まとめて相手をしようなんて馬鹿げてる」

「ある意味、私たちが聞いてきたことが正しかったという証明ではありませんね」

充分な情報を与えられている彼らは、当事者を除けばこの街で最も『漆黑』の行く末を心配していた。

「でも、エンリとか死ぬだろ。仮初の仲間でも露骨に危険に晒すのはおかしくないか？」
「そうよね。戦士が魔法詠唱者から弱い仲間を守るわけがないし、私たちの情報通りならそうなるけど……」

『漆黑』の側には生まれながらの異能持ちもいるらしい。何か切り札があるのかもしれない」

彼らは王国側に知られないよう密かにクレマンティーヌと接触しなければならない。最上位のアダマンタイト級冒険者である『蒼の薔薇』に察知されずに動くのは彼らの能力では不可能であるため、何を話し合っても今は袋小路となる。

結局、彼らができることは群衆に紛れて明日の決闘を見に行くことくらいだ。『漆黑』が敗北してもクレマンティーヌが囚われることはないであろうし、もし逃亡するならばその方角は把握しなければならない。

「クレマンティーヌと、あとマールレとエンリがいれば勝てるのはわかってる。でも、ただ力押しで勝つだけじゃ駄目なんだ。色々な面で『蒼の薔薇』に仕返しを諦めさせるような準備をしたい」

ンファイレーアがクレマンティーヌを扉の外へ連れ出し、話をしている。彼女を先に宿へ返すというだけなのに、エンリには少しいい雰囲気にも見えてしまう。

「――僕は弱い。戦いの中で身を守るかわからないし、後で捕まって人質にされて迷惑をかけるかもしれない。この先、たとえマールレが離れても『蒼の薔薇』が敵対しようと思えないような勝ち方を考えたいんだ」

「うん。そういうことならンファイちゃんに任せるよ。弱いなりに自分の身を守ろうって姿勢は悪くない」

「ちよつと込み入った話になるから、先に宿へ戻って休んでほしい。クレマンティーヌは前衛の要で大変だと思うから」

「わかった。余裕って言いたいところだけど、受け持つ人数次第ではそうでもないから休ませてもらうね。それじゃ、また明日」

一人分の足音が遠ざかっていく。

「行ったかな？」

「うん。もう何を話しても大丈夫だ。エンリが生き残るための話し合いを始めよう」

エンリは扉の裏で全てを聞いていたのだが、そういう行動はさもしいような気がするのです。と椅子に座っていたふうに振る舞う。

自分でも盗み聞きなどどうかとは思いますが、二人のことは何かと気になってしまふ。

「まず一番安全なやり方は、マールに頼んでできるだけ早く全員殺してもらおうことだよ」
物騒な言葉に驚いたエンリは慌てて雑念を追い払う。

「殺しちゃうのは……貴族の家からの仕返しとかも心配だし……」

「確かに、貴族は冒険者を侮っている。身内がやられたらカルネ村などへ仕返しをすることも考えられる。でも、手加減するってことは時間がかかるってことで、それだけエンリのもとへ飛び道具や攻撃魔法が来る確率も上がってくるよ」

ンフィーレアは真剣だ。そして、仕事で付き合ひの多い冒険者というものもそれなりにわかっている。戦いになれば巧妙に弱点を突いてくるし、それがアダマンタイト級冒険者の飛び道具や攻撃魔法となれば、最近少したくましくなったとはいえエンリなどひとたまりもない。

大切な人の命がかかっている以上、相手の命を奪うことに躊躇は無かった。

「貴族のラキユース以外の何人かをそうする方法もあるけど、逆に強い復讐心を持たれてしまうかも——」

「えっと、あの、エンリを守りたいのなら身代わりって手もありますけど」

見せしめ的な案も考えるンフィーレアの言葉を遮ったのは、マールだった。

「身代わり？　化け物とか亜人を連れてきて、エンリです、って言い張るとかじゃなくて？」

「そんなのじゃないです。姿はそのまま人間のエンリですよ」

これまでマールが森で呼び出したり従えたりしたものを思い出したエンリは、街に出現した奇怪な化け物が地獄の底から響くような声で「エンリデス」と名乗る姿を思い浮かべてしまうが、そういうことではないようだ。

「それはどういうこと？　魔法か何かで私の姿で戦ってくれるの？」

「はい。えっと、特殊能力みたいなもので、誰にでも成り替わることができます」
あまりに都合の良い話に、エンリの目が輝く。

これまでの経験上マールを信じるのは不安が大きいですが、戦わなくて済むのなら期待してもいいのかもしれない。

「——さらに、あの人たちが使うくらいの魔法に対し身を守る手段を持っているので、ぼ

くとそれが連携すればンフィーレアやミコヒメを守るのも簡単になると思います」

「あ……そっか。危ないのは私だけじゃないんだよね」

エンリはハツとして、今の自分の態度を恥じる。

ンフィーレアだつて魔法を使って強いとは聞いていたが、それは普通の人間にしては強いというだけで、アダマンタイト級冒険者の前ではエンリと同じように死の危険に晒されるはずだ。ミコヒメはマールにずっと手厚く守られてきたから考えていなかったが、今回はそれでも危険かもしれない。

「私は話とかしなきゃいけないかもしれないから、ンフィーの身代わりをやってもらった方がいいかも」

「それは断るよ。『蒼の薔薇』のリーダーは口が上手いし、人を引き込む力がある。エンリたちに相手をさせてフォローする人が居ない方が心配だよ。戦いの前に群衆の前でエンリとクレマンティーヌがあの人と言ひ合いをするとところなんて想像もしたくないね」

それは、ンフィーレアが当たり前のように戦いに参加する側として振る舞っていた理由でもある。顔を出さなければならぬ以上、戦いに参加しない方がかえって人質などにされる危険が増すというのがその考えだ。

「うっ、それはちよつと……」

エンリは巻き込まれただけのンファイレアが助かるべきだと考えたが、そう言われると返す言葉も無くなる。いつの間にか断罪される側になっていくイメージしか湧かないからだ。エ・ランテルの人々の心を『蒼の薔薇』に持っていかれてしまったては決闘の意味さえなくなってしまう。

「マール、身代わりっていうのはこつちが頼んだ通りにふるまったり喋ったりすることができるのかな？」

「あつ、はい。しもべなので、ぼくが命令すれば他の人の言うことも聞くとはいいます」
ンファイレアは満足げに頷いて、エンリに向き直る。

「そういうことなら、エンリに身代わりを立てて、喋る内容とかは僕が教える。それでいいね？」

「……うん。お願い」

こうして、エンリは自身の生存から全員の生存に向けて考えを改めることで、細かな不安を置き去りにしてしまった。

身代わりが戦う間の隠れ場所に悩むエンリとンファイレアに対し、「それは心配しなくていいですよ」と微笑むマール。

「えつと、早速、身代わりを立てますね。エンリ、ちよつとこつちへ来てください」

その場に『身代わり』が現れると、すぐに隠れ場所の心配は霧散する。

ンフィーレアはエンリの身を心配するが、マーレと『身代わり』が安全を保証することですぐに治まる。

但し、『身代わり』はなかなかの難物でンフィーレアも根負けしてしまい、あまり喋らせずに済むよう最後に決闘の場へ駆けつけるといふ方針が決まった。そこで諦めたのは、朝になったらクレマンティヌも呼んで、マーレも含めて戦い方についても話し合わなければならぬからだ。

翌日。エ・ランテルの巨大墓地内中央の広場には、その場に似つかわしくない生暖かい風が吹いていた。

広場を遠巻きに囲う群衆の中で、最も多いのが神官や神殿関係者だ。これはわざわざ呼び集めたものだから当たり前のことだ。『蒼の薔薇』が街へ吸血鬼を連れ込んだ罪人であることを広く知らしめておく必要がある。

その他には、冒険者やワーカー、兵士など荒事に関わる者も多いが、そうでない者も相当数含まれている。冒険者組合の閉鎖という異常事態を心配していた者は少なくとも、扉の同じ場所に張り出した情報を見てこの場を訪れたのだろう。

既に決闘の刻限は間近に迫っている。

しかし、この場にエンリの姿はまだ無い。

「早くイビルアイを、私たちの仲間を返して！」

「エンリは逃げたのか？ 戦うんじゃねえのかよ！」

ここでは、ラキユースの要求もガガーランの怒りも、涼しい顔で無視しなければならぬものだ。

ンファイレアは震えそうになる全身に力を入れて大きく息を吸い込み、腹の底から声を出す。

「ご存知の方もいるでしょうが、蒼の薔薇のイビルアイ！ その正体は、かつて国をも滅ぼした邪悪な吸血鬼、『国墮とし』です！」

「おい、てめえ！」

ガガーランが吼える。武器を構え怒りの視線を向けてくる『蒼の薔薇』からは、言葉で言い表せないような圧力を感じる。変形の投げナイフのようなものを持つ双子からは「口を塞ぐ？」など物騒な言葉が風に流され聞こえてくる。

ンファイレアは冷や汗を背中に隠しつつ、大きく深呼吸をして続ける。話を聞く態勢になった群衆に対しては、最初ほどの声量は必要ない。

「エンリがここへ来る前に、その言葉を伝えます。この『国墮とし』の陰謀に加担した蒼の薔薇のこの街での専横は目に余りますが、アダマンタイト級冒険者としてのこれまでの貢献に鑑み、蒼の薔薇については罪人として王都へ突き出すのではなくこの場で決着をつけるのみとして、諸悪の根源である『国墮とし』のみ改めて捕えることとします」

群衆にざわめきが広がる。ただし、それは邪悪な吸血鬼を街へ連れ込んだ者への対処が甘すぎるがゆえのものだ。

しかし、それは望ましい反応だ。英雄級の名声を持つ『蒼の薔薇』への同情の萌芽は予め摘んでおかねばならないのだから。

「ほーら、お仲間の所へ行きなよー」

段取りに従ってマーレが手を放しても動こうとしないイビルアイを、クレマンティーヌが蹴り飛ばす。

既に怪我などはマーレが全快させてあるが、この対応にはンファイレアは眉をひそめる。予定では軽く突き飛ばすことになっていた。

「やめてくれ……罪があるというならそれは私だけのことだ！ 『蒼の薔薇』は関係ない！」

「何を勝手なことを！ イビルアイ……彼女は、たとえどんな存在であろうと一緒に戦ってきた私たちの仲間です！」

地面に倒れ伏したイビルアイは『蒼の薔薇』を庇うが、それに構わず墓穴を掘るラキユース。

この場でイビルアイがアンデッドの正体を晒していることは、神官ならわかっているはずだ。同情を買うのが得意なのかもしれないが、この選択は策謀に長けた王国貴族としては愚かとしか言いようが無い。

この好機をクレマンティーヌが見逃すはずはなかった。

「聞いたー？ 私たちの仲間だってよ！ ふふっ、神官の人たちはよく見てやんなよ。そのアンデッドを仲間だって蒼薔薇のリーダーさんが言ってるよ！」

「おお……アンデッドだ」「本当に……そんな……」「何ということだ……蒼の薔薇が……」「皆を騙していたのか……」

「待って！ みんな、違うの！ イビルアイは吸血鬼でも、遠い昔からずっと私たち人間のために——」

「見苦しい言い逃れをするな！」「吸血鬼とつるんでいる連中が、組合を閉鎖して何をするつもりだったんだ！」「化け物をかばって、それでも冒険者か！」「アダマンタイト級の極悪人め!!」

声を荒げてラキユースの声を塗り潰すのは、クレマンティヌから「事情を改めて説明して味方に」しておいてもらった上位の冒険者たちだ。声出しをする者は巧妙に他の者の影に隠れて『蒼の薔薇』に顔を見せないあたりが彼らの限界だ。

それでも、上位の冒険者たちの態度を見れば金級以下の冒険者たちが『蒼の薔薇』へ向ける視線もさらに厳しいものになる。もちろん彼らの中にもチームごとに神官がいて、イビルアイが吸血鬼であることを知った上でのことだから当然だ。

これは『漆黑』が身を守るための戦いだ。『蒼の薔薇』には王族ともパイプを持つ貴族ラキユースの強い政治力があり、群衆の中の神官や街の有力者の中にもその影響下にある者が少なからず潜んでいるはずだ。その者たちが同調の声を上げて空気を変えることができないよう、この場では彼女の主張は速やかに潰さなければならない。

もし、この場での主張が五分に近い状況であれば、ラキユースの根回しによって平民だけの『漆黑』など簡単に犯罪者にされてしまうだろう。ンフィーレアはエンリとその家族を守るため、心を鬼にしてクレマンティヌとともに言葉の戦いの準備をした。

さらに、冷静さを欠いて準備を怠ってくれることも期待していたが、さすがに相手が『蒼の薔薇』ともなるとそこまでは難しい。

イビルアイの方を見れば、挑発に耐えながらティアとティナの双子に何やら話をして

いる。イビルアイの持っていた拘束を無効化するアイテムなどをクレマンティーヌが奪って所持していることや、マール魔法の魔法に関する情報なども伝わっていることだろう。

うまくいかなかった部分を振り返っても仕方ない。ンファイアは大きく息を吸い込んで、言うべきことを言い放つ。

「無責任な『蒼の薔薇』がここエ・ランテルで吸血鬼を野放しにしたことで、強力なアンデッドが発生しやすくなっています。それを心配したエンリは、戦いの直前にもかかわらず、単身で墓地へ乗り込んでしまいました。そろそろ、アンデッドをねじ伏せて戻ってくるはずですよ。戦いの場を巨大墓地に指定したのはそのためです」

「くっ、適当なことを……」

正体を隠すとともにそうした力もアイテムで抑えていたイビルアイは言いがかりに呆れるが、神官、衛兵、そして冒険者たちを中心にざわめきと動揺が広がる。

アンデッドは墓地などで自然発生するが、多くのアンデッドを放置すると強力なアンデッドが出現し、強力なものを放置すればさらに強力なものが出現する。彼らはそのことを知っている者たちだ。

ここエ・ランテルの巨大な墓地が城壁の内側に作られているのも、毎年戦争の死者の中から強力なアンデッドが生まれないう、巡回して間引きを行わなければならない

からだ。

「待たせたな!!」

斜め上から凜として芯の通った女の声。それはエンリのものではあるが、声の出し方が普段と明らかに違う。腹の底から響かせたような強さのある声だ。

それは、エンリでありながらエンリではないもの。エンリの身代わりとして戦うことになったマールレのしもべの『死の宝珠』という存在。

その正体は、意思を持ち人間の身体を乗っ取ることができるマジックアイテムだ。

昨夜からエンリの身体を一時的に支配しており、この決闘ではアンデッドや魔法を駆使してその身を守りながら戦うことになっている。魔法や飛び道具に対する強力な防御手段となるものを使役できるため、エンリとンファイレア、そして巫女姫の生存のためには不可欠な存在だ。

「見よ! 『蒼の薔薇』が化け物を連れ込んだことで、墓地のはずれにこんなものが発生していたぞ。化け物には化け物を用いて当たらせてもらうことにしよう!」

今のエンリは幾つかの魔法を使えるが、《飛行》^{フライ}が使えないわけではない。空中で足場に

しているのは、巨大な白い人骨の集合体だ。

スケリトル・ドラゴン
「骨の竜!? そんなものが現れるわけ——」

「てめえ、卑怯だぞ! 降りてこい!」

「卑怯? 勘違いされては困るな。……これは決闘ではなく、懲罰である!!」

死の宝珠
エンリは色めき立つ『蒼の薔薇』を一喝する。

スケリトル・ドラゴン
この場に現れた骨の竜は二体だ。もちろん墓地で見つけたなどでたらめで、マールレのしもべとなった死の宝珠が支配していたものに過ぎない。一応、その存在の原因まで『蒼の薔薇』に押し付けるための最低限の話はしてくれてはいるが——。

——確かに禁止した語句は使っていないけど、もつときちんと話をしてあげればよかった。

「我らがわぎわぎ捕えた吸血鬼を再び『蒼の薔薇』へ合流させるのは、その双方の討伐任務を受けたこともあるが、何より衆目の場でまとめて懲罰を下すために他ならない」

死の宝珠
エンリの声は群衆の隅々まで響き渡る。

ンファイレーアは頭を抱えてうずくまりたい気分になっていた。

力及ばなかった。昨夜教えたことは跡形もなかった。

ただ、「死」だの「滅び」だのといった禁止語句を設定しておいて本当に良かったということだけは、感覚的に理解できた。

最後に「理解した通り、自然にできることをやってくれれば」などと甘いことを言ったのが悪かったのかもしれない。

確かにこの場で最低限言うべきことは理解してくれているし、逃げ腰で戦っても弱者のように見られないよう気丈に振る舞うという指示通りの行動には違いない。そのため、口調やエンリのイメージなどは全てが置き去りとなっていた。

「皆の者、刮目せよ!!」

とりあえずこの惨状については後でエンリに謝ればいいとして、始まりが近いので腹をくくらねばならない。

「エ・ランテルの敵、すなわち『漆黑』の敵である『蒼の薔薇』の惨めなる敗北を、その両の眼まなこに焼き付けよ!!」

そう言つて、エンリ死の宝珠は森で手に入れたグレートソードを高々と突き上げる。これが合図だ。

——後でエンリにどう説明しよう。

ンファイレアはそんなことを考えながら、持ってきていた大きな袋のようなものを握りしめる。

エンリや巫女姫とともにマーレの魔法で空へ浮き上がると、すぐに骨スケリトル・ドラゴンの竜に守られる態勢になる。地上に残るのはクレマンティーヌだけだ。

「待ちやがれ！」

「これは……まずい」

「計画の修正が必要」

ガガーランが吼え、ティア、ティナが警戒する。

『漆黒』の後衛の護りは強化され、『蒼の薔薇』の計画は早くも修正を強いられようとしていた。

「お願いしますー！」

ンファイレアが慌てて合図を要求すると、冒険者組合長のアインザックが古びた軍ラツパビュッグルを吹き鳴らす。

命を賭けた戦い感 闘の始まりだ。

三四 漆黒、蒼の薔薇と戦う

決闘を見守る群衆の目は、二体の骨スケリトル・ドラゴンの竜にくぎ付けだ。人骨で出来た禍々しい竜について『漆黒』への非難の声が出ないのは、エンリの言い分が通ったということなのだろう。

ともかく、合図は鳴らされ、戦いは始まった。

ほぼ同時になされたエンリの詠唱により、エンリとマールスケリトル・ドラゴンが乗る骨死の宝珠の竜が黒く禍々しい炎のようなものを纏う。これはアンデッドには防御魔法となるものだ。

骨スケリトル・ドラゴンの竜は前後に二体。地上からの攻撃に対し盾となるための存在として、前のものにはマールとエンリが乗り、後ろのものにはンファイレアと巫女姫が乗ることになる。

ミコヒメは指示通り外套を脱ぎ捨てる。透ける薄絹一枚の恰好で宙に浮きあがることで、ほぼ全ての群衆に対し全開の肌色が露わになるが、これはもはや気にしても仕方のないことだ。クレマンティヌを地上に一人残す以上、ミコヒメの回復魔法は必須のものとなる。

ンファイレアは、合図を頼む段階で既に大きな包みを手に持っていた。予定通りに、早いタイミングで包みの中身をぶちまける。小さな小箱に続いて、黒や白、青など様々

な色の粉塵が地面へ向かって時間をかけて舞い落ちていく。様々な粒度のものを混ぜてあるので、早く落ちるものとゆっくり舞うもので差が大きい。

先に落ちる小箱は火口箱で、粉塵は錬金術に用いる様々な鉱物の粉やその廃棄物に小麦粉などを混ぜたものだ。有害なものも含まれているが、物量や落ち方を重視して持ってきたのでたいしたものではない。まして、火薬などでもなければ、粉挽き所で時折起こる爆発事故に関わるようなものでもない。

これは自身が薬師だという情報を利用した子供騙しの陽動だ。一流の冒険者が相手であれば一瞬で見抜かれるものを二重三重に用意したに過ぎない。『蒼の薔薇』ならば僅かな時間で無意味なものと判断するだろう。むしろ、スケリトル・ドラゴン骨の竜によつてこの戦いの狙いを半ば封じられた衝撃による迷いの方が大きかったかもしれない。

しかし、その僅かな時間があればクレマンティーンには十分だ。

対峙している間に幾度もイメージした通り、即座に武技〈疾風走破〉を発動し、ガガーランを避ける軌道でラキユースへ向け疾走する。

事前の話し合いでは、貴族の家の恨みを買わないようラキユースを殺さないことになっていた。だが、それはエンリの都合を考えた上でのンファイレアの判断に過ぎず、

マーレやエンリから直接命じられたものではない。そして、クレマンティーヌは冒険者やワーカーチームを皆殺しにする際、先に回復役を葬った時の絶望感溢れる表情が大好きだ。いざ対峙してみると、初手はラキユースへの攻撃以外考えられなくなっていた。

無論、クレマンティーヌは後始末の方法まで先程の茶番の間に考えてある。巫女姫の魔法による蘇生費用を『蒼の薔薇』に負担させ、足りなければ王宮のパトロンに出させれば良いのだ。生き残りを拷問すればパトロンは簡単に判明するだろうし、それを裏から脅せば蘇生費用に限らず幾らでも出すだろう。

何より、この案なら拷問を好むエンリも喜んで賛同するのは間違いない。それは少なくともクレマンティーヌにとっては確かなことだ。

したがって、クレマンティーヌは躊躇なくラキユースを葬ることができ。ガガーランは一応ラキユースを庇う位置取りをしているが、それが機能するのは速度や対応力において同格の相手だけだ。

前衛の三人が動き出す時点で、クレマンティーヌは前衛の間を鈍重そうなガガーランに近い軌道で通過しつつある。近いといっても重装備のガガーランでは絶対に間に合わないタイミングだが——ありえない場所からティアがラキユースの前へ割り込む。まるで、影から湧いて出たかのように。

「リーダーはやらせない！」

「ふふ、お前でもいいんだよ」

目の前に来たのは、本来最初に葬るべき相手の一人だ。

クレマンティーヌは牽制に近いティアの攻撃が振り切られる前に高い位置でスティレットを合わせ、わざわざ武技〈不落要塞〉を発動して一瞬ティアの動きを止める。弾くことも容易な一撃だったが、止めることに意味がある。

〈流水加速〉

そこから狙うのはティアの心臓だ。

刺突特化のスティレットの円柱断面は受けた刃と噛みあうことも合わせた武器に引つかかることもない。その頼りない細身の刀身で打ち負けることなく相手の攻撃を防ぐことができるという前提であれば、最速のタイミングで次の攻撃に移ることができ

る。
しかし、ティアは素早く身をよじってかわし、必殺の攻撃は脇腹の肉を薄く貫くに留まる。

「く………甘く」

スティレットはそのままティアの腕と体で、脇に挟み込むようにガツチリと押さえ込まれた。そのようなことをすれば脇腹の痛みも増すはずだが、勝機の前には取るに足らないことなのだろう。

その瞬間、動きを止められたクレマンティーヌの顔に浮かぶのは焦りではなく笑みだ。

それに気付く間もなく、ティアはクレマンティーヌの頭にくないを叩き込む。攻撃を止められた状態では首をそらし身体をひねっても避けきれず、くないはクレマンティーヌの眼球に突き刺さる。

「肉を斬らせて——」

「痛えな——死ね」

クレマンティーヌが武器に込められた魔法を解放すると、ティアの脇腹を貫いたまま抱え込まれたステイレットから、そしてティアの全身から大きな炎が吹きあがった。マールが込めた魔法の威力は、同じ炎系統でも以前込められていたものとは比べ物にならない。

ラキュースを守る二人とは別に、ティナとイビルアイは攻勢に出ている。

「隙を突けばいい。あんな小娘がたやすく二体も支配できるはずがない。リグリットじゃあるまいし、こんなものアイテムか何かの力に決まってる」

「……了解。やってみる」

魔法も刺突武器も通用しない骨スケリトル・ドラゴンの竜の出現で戸惑うティナを前に、イビルアイが作戦の強行を主張する。

それは確信に満ちた言葉だ。死霊術師の古い友人を持つイビルアイは、その技の習得の難しさをよく知っていた。

二人はそのまま散開して術者のエンリから死角になりやすい位置取りをしつつ、息の合ったタイミングでティナはくなくいを投げ、イビルアイは《水晶騎士槍クリスタルランス》を放つ。狙いは巫女姫だ。

「馬鹿なっ！」

二体の骨スケリトル・ドラゴンの竜は、自らの意思でそうしたかのように正確に二方向からの攻撃を受け止めた。『蒼の薔薇』から見れば決して強靱な存在ではないが、骨スケリトル・ドラゴンの竜に対しては突と魔法では一切のダメージを与えることはできない。

攻撃を止められた二人の背後で強い炎が吹き上がり、むせ返るような熱気とともに人の焼ける匂いが漂う。

「ティア!!」

『蒼の薔薇』の時間が止まる。全身が焼けただれたティアはその場へ崩れ落ち、びくり

とも動かない。

「ぐ……しくじったな」

クレマンティーヌは忌々しげに顔に突き立てられたくないを引き抜き、纏わりつく自身の眼球ごと投げ捨てる。

その眼窩の激痛は、死が確定したティアを嘲笑おうとした一瞬の間に与えられたもの。それを理解することで、クレマンティーヌは嗜虐の人から戦場の兵つわものとなった。

しかし、同時に『蒼の薔薇』の敵対心ヘイトも一手に集まる。

それは感情的なものばかりではない。その武器から発せられた魔法の力は、有利な形でその武器を抑えたはずのティアの身体を内側から簡単に焼き尽くした。このクレマンティーヌを放置すれば蘇生魔法による取引どころではなくなる。

「ティアああっ!! 糞野郎が!」

僅かに遅れてクレマンティーヌを襲うのは、怒りのままに振り下ろされる刺突戦鎚ウオーピックだ。

「おら! おら! おら! おらあつ!」

「大振りで連撃とか馬鹿じゃ——って、なかなかやるねー。〈超回避〉」

クレマンティーヌは大振りでありながら隙の小さい連撃に驚き、回避力を大きく向上させる武技で対応する。

横合いからのガガーランの攻撃は、その勢いを殺すことなく疾風怒濤の連撃に繋がる。これこそがガガーランの切り札、超級連続攻撃——複数の武技を同時に発動させて放つもので、一撃一撃が防御武技の〈要塞〉さえ突破する全力攻撃となる非常識な十五連続攻撃だ。

戦士としての技量で上回るため当初は余裕をもつて回避していたクレマンティヌも、二度の回避のうちに完全にラクユースへ向かう進路を塞がれる。それまでガガーランに専念していなかったせいもあって、その後は回避のたびに少しずつ不利な体勢となってしまう。終わりの見えない連撃は、このような集団戦では初見殺しとして効果的だ。

「仇は討つわ——射出!!」

連撃が続く中、ラクユースの周囲を滞空していた浮遊する劍群フロートイング・ソールズの全てがガガーランを避けつつクレマンティヌに襲い掛かる。

「無理! 糞っ!」

同士討ちを避ける軌道で射出されたのでなければ完全に逃げ場が無かった。ただ、双子を除けば『蒼の薔薇』にそこまでの覚悟が無いことは雰囲気であわかってしまう。

クレマンティヌは牽制のためステイレットを手放し、身体の数か所に裂傷を負いながら、ガガーランの側へ転がり込むように回避する。

そして、連撃はなお続く。

クレマンティーヌが武技の連続使用による離脱を考えたところで、巫女姫の回復魔法により傷が全快して失われた眼球が復活し、視界が広がる。

そこへ与えられたマーレの《上位全能力強化》グレート・フルポテンシャルによって全身に力がみなぎってくる。

元々、目立ちたくないというマーレは可能な限り守りと支援に回り、エンリは特別な手段——骨スケリトル・ドラゴンの竜のことでろう——でンフィーレアと巫女姫を守ることになった。

もちろん、クレマンティーヌ一人で『蒼の薔薇』を狩っていくことができなければ二人が出てきて蹂躪することもあるだろうが、ここで強化の魔法が与えられるのはこの場で戦線を維持しろという意味だろう。そして、巫女姫の回復魔法とあまりに強力なマーレの強化魔法はそれを可能とする。

直後、ンフィーレアの《鎧リィンフォース・アーマー強化》もクレマンティーヌを強化する。こちらはたいした魔法ではないが、使いどころは的確だ。

〈不落要塞〉

クレマンティーヌは膝をついた姿勢で武技を発動し、新たなステイレットでガガーラの重い一撃をたやすく受け止める。〈不落要塞〉は一部の天才しか習得できない最強の防御武技で、あらゆる攻撃を、たとえ華奢な武器でも完全に受け止めることができる。

驚きを隠しきれないガガーランの表情に連撃の終わりが遠くないことを確信し、か細いステイレットで連撃を受け止めながら体勢を整える。

クレマンティーヌは連撃のタイミングをはかりつつも、終わりを待たず隙の小さい連撃の間を自らの武技でこじ開けることを考える。

これは一対一の戦いではない。『蒼の薔薇』ほどのチームなら、互いの切り札は知り尽くしているはずだ。連撃に終わりがあれば必ずその隙を埋めるため仲間からの牽制が入るはずで、必殺の好機はそれ以前となる。

そして、クレマンティーヌは連撃を崩せる力をまだ見せていない。それを見せる時は、確実に殺す時だ。

〈流水加速〉

クレマンティーヌは高めの位置で、ステイレットの先端近くで攻撃を受ける。〈不落要塞〉が無ければ確実にステイレットが弾き飛ばされるような無理な受け方だ。

そのまま腕を翻し、攻撃を受けたステイレットをガガーランの巨体へ突き込む。

「ガガーラン、危ない！」

最後の連撃を受け止められた直後にガガーランのカバーに入ろうと駆け寄ってきたティナは虚を突かれるが、それでもクレマンティーヌの攻撃の軌道にくないを差し入れる。

クレマンティーヌは利き腕を切り裂かれながらも躊躇せず、そのままガガーランの装甲の隙間を突く。攻撃を止めないことで、くないの刺突はそのまま腕全体に大きな裂傷を作り出す。

痛みを感じないわけではない。ただ、今のクレマンティーヌにとっては一度や二度の激痛など、マーレやエンリの不興を買うことに比べれば大した問題ではないのだ。本物の地獄を見てきた彼女にとって、回復魔法一つで消える痛みなど戦いで選択を左右するものには成り得ない。

それでも、ティナの横やりによつて幾らかガガーランの傷は浅くなり、そこから心臓を抉る余裕もなくなったが――。

「無駄なんだよ、学べよ」

既に決着はついている。クレマンティーヌの声に滲む苛立ちは、自らの攻撃のみで仕留めきれなかったことに対するものでしかない。

同時にステイレットから放たれた激しい雷撃がガガーランの身体中を駆け巡り、その余波が近づいていたティナをも襲う。これも、マーレが込めておいた強力な魔法だ。

ガガーランはびくりと痙攣すると、硬直したままその場に倒れ込んだ。その巨体からは不自然な熱気が染み出し、周囲に肉の焦げたような匂いが漂う。地に伏した時、その皮膚は所々炭化し、鎧の隙間からは幾条もの煙があがっていた。

『蒼の薔薇』のガガーラン——じつくりと戦ってみたい相手だったが、このような集団戦では最速の死こそが最適解となる。ティアによって眼球にくないを叩き込まれたその時から、相手を嬲りながら殺すクレマンティーヌの性癖は影を潜めている。

余波を受けただけでティアも深手を負ったが、こちらは片膝をつくのみでまだ戦える状態だ。

直後、イビルアイの魔法がクレマンティーヌを襲う。

クレマンティーヌが束縛系魔法の行動阻害に耐性を得られるアイテムをイビルアイから奪って身に着けているため、イビルアイは似た位置付けの状態異常魔法を選択してきた。《リージョン・ベトリフイケーション部 位 石 化》によってクレマンティーヌの左脚の脛から下が硬直し、ゆつくりと石化していく。

その場での戦闘は可能だが、クレマンティーヌの持ち味の機動力は大きく失われた。こうなっては複数を相手取っての戦線の維持は困難だ。

この状況でティアの、そして次のガガーランの攻撃を受けていたら——もし連撃の終わりを待っていたら、亡骸になっていたのはガガーランではなくクレマンティーヌの方だっただろう。

二手に分かれてラキユースの方へ向かう骨スケリトル・ドラゴンの竜スケリトル・ドラゴンの上からマーレが放つのは《電撃ライトニング》だ。

イビルアイを貫いて進む太い電撃の奔流はステイレットに込めたものには大きく劣るが、マーレが放てばその威力はありふれた低位階の魔法でもその場の誰も見たことがない程に強力なものとなる。

電撃はそのまま深手を負っていたティナの意識を奪った。もちろん、加減して低位階の魔法を選んだのは情報源のイビルアイを殺さないためでしかなく、マーレは他の人間たちの生死に関心は無い。

ラキユースはすぐに気絶したティナを回復するが、迫る二体の骨スケリトル・ドラゴンの竜スケリトル・ドラゴンの攻撃を剣で捌きながらじりじりと後退し、孤立する。

「ラキユース！ その闇妖精ダークエルフから離れる!!」

骨スケリトル・ドラゴンの竜スケリトル・ドラゴンに乗るマーレがラキユースに迫ったことで、イビルアイが血相を変えて飛び込んでくる。骨スケリトル・ドラゴンの竜スケリトル・ドラゴンには魔法は通用しないとはいえ、イビルアイであれば素手で戦うことは十分に可能だ。

「いいや、今しかないわ! —— はああああつ!」

ラキユースは魔剣キリネイラムを構え、残る魔力を注ぎ込む。

本来なら回復と支援に使うべき魔力だが、既に仲間二人が死亡し『蒼の薔薇』の前衛は瓦解している。もはや勝利は考えられず、イビルアイを取り戻すには交渉によるほかない。

狙いは、蘇生魔法まで使えるという巫女姫だ。ここで彼女の命を奪うことができれば、蘇生魔法を使える者はラキユースしか居ないことになり、巫女姫の蘇生を条件にした交渉も可能になる。

魔剣の柄がほんのりと熱を帯びる。漆黒の刀身に浮かぶ星のごとき輝きがきらきらと危険な気配を漂わせ、刀身の闇が膨れていく。

魔法が通用しない骨スケリトル・ドラゴンの竜に対し、魔力によつて放つ攻撃が効くかどうかはわからない。しかし、骨スケリトル・ドラゴンの竜が接近してきている間に仕掛けなければ方に一つも勝機は無い。

一瞬の躊躇の後、飛び込んできたイビルアイを避ける形での攻撃を思い描く。

「超技！ 暗黒刃超弩級——」

魔剣より純然たる力が放たれる直前、蛇の群れのように変化した幾条もの土の塊がラキユースの腕を絡め取り、全身を縛り上げた。

これは二人が接近するタイミングを狙ったマールレの魔法だ。ラキユースとイビルアイは土の蛇に完全に束縛され、ぎりぎり締め上げられる。

「そんな、イビルアイまで！」

「くっ……こんな魔法で……」

代わりにラキュースの浮遊する劍群が巫女姫を襲うが、スケリトル・ドラゴン骨の竜が全てをその身で受け止め、すぐにエンリの放つ禍々しい黒い光線——レイ・オブ・ネガティブエナジー《負の光線》によつて回復される。

クレマンティーヌは巫女姫から状態異常の回復魔法を受けるとすぐに複数の武技を発動する。深手を負つたままの腕で攻撃を仕掛ける相手は、起き上がつてラキュースを助けに入ろうとしたティナだ。

この時、ンファイーレアから振りかけられた高級ポーションは空しく地面に降り注いだ。クレマンティーヌからもその動きは見えていたが、優先順位が違う。

「背を向けられる相手とでも思つてるのかよー」

クレマンティーヌがこの日最速の攻撃を繰り出したのは、戦いの終わりの気配を察知したからだ。

ここで仕留めれば、一人多く殺すことができる。それが自身に深手を負わせた忌々しい相手なら、なおさら殺せるうちに殺しておきたくなる。ならば、回復など待つていない場合ではない。継戦能力を考えなくて良い程に有利な状況では、そういう本音も出てくる。

勝負の趨勢を見て、クレマンティーヌは元のクレマンティーヌに戻っていた。状態の

悪い腕からの少し無理のある攻撃だが、それでも実力で劣り、体勢も不利なティナには避けようが無い完璧な致死の一撃だ。たとえ急所をそらしても、少しでも刃が体内に食い込めばこれまでのように致死の魔法が発動するかもしれない。

ティナは迷わず〈遁術〉で鎧を犠牲にしてその場を逃れる。

しかし、抵抗もそこまでだ。拘束されたラキュースの首筋に突き付けられた剣を見て、ティナは足を止める。

「降伏してこの女の蘇生魔法を残すか、全滅するまで抗い続けるか、好きな方を選ぶがい

い」

死の宝珠
エンリのよく通る声が響き渡る。

「降伏だ！ 私のことは好きにして構わないし、必要なら裁きも受ける。でも、こいつらは助けてくれ！」

「……降伏する」

スケリトル・ドラゴン
イビルアイは骨の竜から降り立ったエンリとマールに懇願する。

ティナは武器を捨て、その場に座り込んだ。

「こういうのはリーダーが率先して決めることだろう。最後まで戦うというのなら、特別に仲間の死体で動死体でも作ってやろうか」

ラキユースの顔色が変わる。

もし死体が動死体ゾンビとなれば、ラキユースの蘇生魔法では手に負えなくなる可能性も出てくる。

死の宝珠 エンリは薄い笑みを浮かべ、反応を促すように突き付けたグレートソードで拘束されたラキユースの肩を小突く。

その切つ先から滴る毒液が鮮血と混じり合い、ゆるゆると流れ落ちていく。

ラキユースはギリイと歯軋りをするとその場に武器を捨て、巫女姫を守る骨スケリトル・ドラゴンの竜と対峙していた浮遊する劍群も全て地面に落ちる。

「……………降伏、します」

静寂がその場を支配した。

この勝負は、観戦者から見ればあまりに一方的なものだった。

全力を出し尽くし次々と地に倒れ伏していったアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』に比べ、『漆黒』はその力の片鱗を見せたに過ぎない。

特に、クレマンティヌを知る上位の冒険者たちは戦慄した。クレマンティヌの強さを知っていれば、自らを奴隷と言っていたのは口先だけで、恩義か何かの縛りがある

のだろうと考えるのが普通だ。

それが、実際にこの戦いで『漆黑』ではクレマンティーンだけが血を流し、大剣を持つエンリは他の魔法詠唱者風の者たちとともに骨スリトルドラゴンの竜の上で高みの見物を決め込んでいた。これは恩義や信頼関係で繋がる者の所業ではない。

すなわち、エンリは『蒼の薔薇』を相手に一人で前衛を務めきったクレマンティーンを本当に力でねじ伏せて従えている上位者ということになる。

これは、クレマンティーンが死闘の傷を癒されてすぐ、一人で『蒼の薔薇』の生き残りに縄をかけていることから明らかだ。

「これは吸血鬼ヴァンパイアと手を組んで街を脅かした邪悪な『蒼の薔薇』に対する、エ・ランテルの全ての者の勝利だ。遠慮なく皆で勝利を歓ぶよろこぶが良い」

エンリが静寂を断ち切って喝采を求めると、突き動かされるように群衆の中で歓声が広がった。口調など些細な違いが積み重なって当初の予定とかなり違った印象を与えるものになってはいるが、これはンファイレアから言われていた内容を喋ったもの過ぎない。

最初に歓声をあげたのは上位の冒険者たちだ。それが下位の者たちへ、神殿勢力へ、そしてすべての者たちへと波及する。

歓声、拍手、喝采——次第に大きくなるそれは、確かに群衆の、エ・ランテルの街の

総意ではあった。

その総意とは、恐怖だ。

ヴァンパイア

スケリトル・ドラゴン

吸血鬼が駄目で二体の骨の竜が良いなどという法は無い。

死の宝珠

スケリトル・ドラゴン

エンリが自在に操って見せた二体の骨の竜が『蒼の薔薇』のせいで出現したものだ
という話も、その場の全員が心から信じられるほどの信憑性は持たない。

それでも、この場で『漆黒』に、死の宝珠エンリに異を唱えられる者など存在するわけがない。

ただ、圧倒的な強者が別の強者を降し、その場の弱者は喝采せねばならない。それだけのことだ。

第七・五章 イビルアイを連れ歩くということ

三五 イビルアイを連れ歩く方法

喝采が止むと、次は戦いの後始末となる。

ンファイレーアの耳打ちをうけたエンリの指示により、クレマンティーヌは『蒼の薔薇』の生き残りを縄で拘束した後、冒険者プレートを剥ぎ取っていく。罪人として突き出すわけではないが、『蒼の薔薇』は冒険者組合を含む多方面からの討伐依頼の対象であり、少なくとも街から追放することは決まっている。冒険者資格の剥奪も確実なものと考えて良いだろう。

また、『国墮とし』の処分が『漆黒』の望み通りに落ち着くまでは、それを実現するためのカードとしても『蒼の薔薇』をいったん『漆黒』主導で拘束しておかねばならない。「それは組合から討伐対象とされたこの負け犬どもには不要なものだ。預かっておけ」たとえ前言を翻して罪人として扱っても、貴族などの繋がりでその罪が不問となるのは間違いない。せめてこの場では『蒼の薔薇』の名誉を失墜させ、報復をやりにくくしておかなければならない。

クレマンティーヌはコレクションにアダマンタイトの輝きが加わることでご満悦だ。

鎧に堂々と貼り付けることはできないが、これまで集めていたコレクションのプレートは今も金貨袋にまとめて残してある。

「プレートは奪われても冒険者としての魂までは——あぐつ！」

「犯はんざい罪者ざいしや、でしょ？ 状況わかってるー？ 私らに突き出されたら終わりだよ」

気丈に振る舞うラクユースをクレマンティーヌが蹴り倒し、歪んだ笑顔で見下ろしながらその綺麗な顔に靴底を押し付ける。

「——死刑も、拷問も、あるんだよ」

「やめろ！ 罪は吸血鬼に関わるものだろう！ ならばまず元凶である私を裁け！」

たまらずイビルアイが叫ぶ。

ティナは怒りの声が相手を喜ばせるに過ぎないことを悟つてか、クレマンティーヌを睨むだけだ。

「遊んでいないで、街へ戻るぞ」

死死の宝珠の宝珠
エンリの言葉は、もちろんンフィーレアの耳打ちを受けてのものだ。この場では、嗜

虐嗜好を持つ者はクレマンティーヌしか居ない。

「はい。——ほら、起きなよ」

「うぐつ！ げえほつ、げほつ」

クレマンティーヌは上機嫌に返事をする、ラクユースの腹部を思い切り蹴り飛ばし

てから縄を引いた。

一部始終を見ていた上位の冒険者たちはクレマンティーヌに命じられるがまま、ある者は縄を持たされ、ある者は『蒼の薔薇』の生存者に武器を突き付けてこれを護送した。その誰もが、『蒼の薔薇』の者たちと一切目を合わせることもなく、クレマンティーヌの指示によく従った。吸血鬼のための拘束具の購入を命じられたイグヴァルジは特に協力的で、街へ走る前にクレマンティーヌの意図を汲んで買い物内容の提言までしていた。

この時、巨大墓地からの帰路において『漆黑』に「アンデッドの処遇」を問うことに成功した冒険者組合長ブルトン・アインザックは、その瞬間においてエ・ランテルでも勇氣ある者だったかもしれない。もちろん、骨スケリトル・ドラゴンの竜について堂々と咎めることなどできるはずもないが、吸血鬼ヴァンパイアは『漆黑』の敵としてその存在を問題視しやすいため、それを含めての表現だ。

普段のエンリが相手なら戦いが終わった直後に話しかけることもできたかもしれないな

いが、この日のエンリは近寄りがたかった。強敵を前にすると豹変するタイプなのかもしれない。

「処遇とは、何か問題でもあるのかな？」

エンリの口調は全く違う。声質も近いようで全く違う。腹の底から響く声には威圧感さえ感じられる。さらに、その視線は踏みつける前の小虫を見下ろすような背筋の冷えるものだ。アインザックは小さく震えた。

そこには冒険者組合で信頼関係を築いてきたエンリ・エモットはいなかった。そのエンリからの冷淡な言葉に、アインザックは組合としての対応を諦めかける。

「その件なら冒険者組合の規則に準じて対応しますよ。私に考えがあります」

意外な所からの助け舟。それはクレマンティヌという女戦士からかけられた言葉だ。

「クレマンティヌがそう言うのなら任せよう。よろしく頼む」

「冒険者組合長さん？ 詳しくは組合で話すから、後でよろしくー」

割って入ったクレマンティヌの言葉にアインザックは首をかしげるが、エンリが任せるというならば仕方ない。組合の一員ではないクレマンティヌと組合で話をする義理は無いが、今の『漆黑』にそういう些細な難癖を付けられるわけがない。

そもそも、今の『漆黑』が公然とアンデッドを連れ回すと宣言したところで、先刻の

戦いを見せられた上で、そうでなくともアダマンタイト級の『蒼の薔薇』に圧勝したと聞いた上では、この街で逆らえる者など居るはずがない。

それが、組合の規則に準じると言ってくれている。この件については、それだけで十分な回答だ。『漆黑』はエ・ランテルの冒険者組合の恩人であり、エ・ランテルでは初のアダマンタイト級に昇進するチームなのだから、規則に準じようというなら全力で便宜を図るのがアインザックの仕事となる。

昇進について考えることで、アインザックは冒険者組合長としての仕事を思い出した。宙に浮いたアンデッドの件が不安だが、考えても仕方がない。まずは日常の仕事のことを考えるべきだ。

まず『漆黑』の昇進内訳だが、功績としては『国墮とし』を含めた『蒼の薔薇』討伐の方が遥かに大きいものの、希少薬草採取の方もアダマンタイト級に相当する仕事だ。先に終えた薬草の方で白金からオリハルコンへの二階級昇進、今回の討伐でオリハルコンからアダマンタイトへの一階級昇進とするのが適切だろう。

次に、アダマンタイト製冒険者プレートの問題だ。エ・ランテルにはアダマンタイト製プレートとの在庫が無い。元々は素材も無いのだが、幸い今回は素材の寄贈があった。手近な冒険者に伝言を頼み、アダマンタイト製プレートの再加工を依頼しなければならぬ。

寄贈された素材とは、もちろん『漆黑』が『蒼の薔薇』から「没収」したプレートのうち一枚だ。冒険者プレートの再加工など本来なら厳格な手続きが必要とされ、組合長印を押した正式な書類で依頼しなければならぬところだが、決闘を見守る群衆の中に姿のあつた鍛冶師ならば書類は後でも問題ないだろう。元々、吸血鬼ヴァンパイアに冒険者としてのプレートが支給されていたことの方が、あつてはならない異常なことなのだ。

残りのプレートは『漆黑』預かりとなつている。冒険者としての登録すら無いクレマントリーヌがこれを剥ぎ取つて所持しているのが少し引つかかるが、エ・ランテルの組合に渡しては『蒼の薔薇』に奪還され悪用されるおそれがあると言われれば、これを認めざるを得ない。

なお、既成事実化しつつある『蒼の薔薇』の冒険者資格剥奪については、事情が事情なのでエ・ランテルの組合で強行せざるをえない。『蒼の薔薇』による組合閉鎖に協力した王都の組合には何のフォローも必要ないだろうが、リーダーが貴族の出であることから、場合によっては同じく討伐依頼に嘯んでいる都市長に相談すればいいだろう。

その後、アインザックは溜まりに溜まった業務をどういう順序で片付けるかなどに頭を悩ませていたが、彼とエ・ランテルの冒険者組合が日常を取り戻すにはもう少しだけ時間が必要だった。

この日、冒険者組合の大広間では組合始まって以来の非日常的な光景が繰り広げられ

ることになる。

命を懸けた戦いは終わった。殆ど役には立てなかつたンファイレアも、どうにかエンリとともに生き残ることができた。

イビルアイの問題も、『蒼の薔薇』との関係においては解決している。

だが、エ・ランテルの街や王国との関係においては何も解決していない。むしろ、ここからがンファイレアの戦場となる。

なぜなら、クレマンティーンの時と同じように、マーレは決してイビルアイを手放さないからだ。街の安全も、人々の感情も、王国の法も一切関係ない。マーレがそう決めているのだから、それを人間如きがどうこうできるはずもない。

当然、死の宝珠ンファイレアもクレマンティーンもその意思決定に関わることはできない。今のエンリも、マーレのしもべとして異論を挟むことさえあり得ない。

しかし、意思決定に関わるができなくても、尻拭いはしなければならぬ。それ

は誰に強制されたわけでもないが、マーレ以外がどうにかしなければならぬことだ。もしイビルアイを連れていることが問題になってマーレ本人に解決を委ねることがあれば、話の流れ次第では四大神の神殿が幾つか更地になりかねない。ここは人間の側で予め問題を解決しておくしかない。

ンファイレアは慎重な性格だが、今回その慎重さはエンリと自身の生存のためだけに発揮されていた。戦いの後でマーレがイビルアイを確保しておくことについて、対策は白紙だった。それは生き残った後で皆で考えればいいことだと割り切っていた。

だからクレマンティーヌの考えというのもわからない。それでも、この場を誤魔化してくれたのはとても有り難いことだ。

もちろん、「懲罰だ」と啖呵を切ったエンリ死の宝珠も後の事など考えていない。話に参加させても面倒なことになるだけだ。

かといって、ここで正気に戻ってもらおうわけにもいかない。

死の宝珠については昨夜エンリが支配された後、マーレからしつかりと聞いてある。エンリはマーレの手で死の宝珠を取り返してもらえば元通りにはなるが、その支配下にあった間の記憶をどの程度かはわからないが残しているらしい。

そうであれば、元通りになった途端、エンリは確実に取り乱す。クレマンティーヌの居る場所ですうなるのは非常にまずい。気まぐれなマーレが目的を達成してふらつと

去った時、エンリの意思でマールレの拷問を受けたことになっているクレマンティーヌに殺されるおそれがある。そうならないために、エンリは強者のふりをしなければならぬ状況となっている。

マールレが手に入れて間もない死の宝珠についてそこまで知っているのは、「他の人間で実験した」ということらしい。それも考えてみれば物騒な話だが、昨夜はそれどころではなかったなのでその部分には目をつぶった。どうなるかわからないものをエンリに使われるよりはマシだからだ。

したがって、現時点ではンファイレアの相談相手はクレマンティーヌしか居ない。神殿とか世間体への気遣いとは縁遠そうな彼女にこのことを相談するのは気が重かったが、ここでは意外なほど頼りになった。

「冒険者組合できちんと筋を通しておくから、神殿の方に使いを出してもらえば大丈夫。ただ、神殿は面子を重視するところがあるから、うちらを代表するエンリ様と口が回るンファイちゃんが直接挨拶をして適当に事情を説明しておいた方がいいだろうね」

クレマンティーヌはかつて所属していた組織で、特殊な任務で冒険者として他国に潜入することを前提に、冒険者組合の特殊な規則について詳しく教えられていたらしい。助け出した組合長へのコネやごり押しでも脅しでもなく、そういったやたらに豪放な手

段ではなく普通に合法的手続きとして、イビルアイの問題を解決する手段があるという。それは、商売の顧客として冒険者のことをある程度知っているンファイレーアでも詳しくはわからない手続きではあるが、説明されてみればすぐに納得できる内容のものだ。

そのため、ンファイレーアが考えるのは実際に吸血鬼を連れ歩く目的という部分だけで済むことになった。それを思考の中でどうにか組み立てると、クレマンティーヌにもその考えを託していったん別れる。

結局、クレマンティーヌとイビルアイを押さえるマーレ、そして巫女姫が冒険者組合へ向かい、ンファイレーアとエンリ死の宝珠が神殿をまわることになった。まともに話ができるのは各々一人ずつ、クレマンティーヌとンファイレーアだけだ。

『国墮とし』の昔の仲間を探して討伐するため、そしてその者たちの復讐の対象をエ・ラントルの街ではなく『漆黒』へ向けておくため、やむなく生かしておくことになりました」
エンリ死の宝珠に黙っていてもらったため、神殿での説明はそう難しくなかった。

吸血鬼の仲間が十三英雄であることなど言えるはずがないが、抽象的でも仲間が居て復讐の恐れがあるとなれば、安易に処刑を求めることは難しくなる。神殿勢力には、イ

ビルアイと同格の存在に対して自衛する能力は無いからだ。

仲間の姿について聞かれたので、伝説の中で幾つか覚えのある十三英雄の姿を適当にぼかして充てておいた。それでも、神官たちの思考の中で邪悪な吸血鬼の仲間と伝説の英雄たちの姿が重なることはないだろう。真相を語るにも信頼関係が足りないので仕方ない。

『蒼の薔薇』については、もともと『漆黒』の方から促して討伐依頼を出してもらったこともあり、冒険者資格の剥奪とエ・ランテルからの永久追放という方針に異論は出なかった。

そこへ、クレマンティーヌが「筋を通して」おいた冒険者組合からの使いが来て、場が和む——そういう段取りだったのだが、それに対応した神官たちの中で急に怯えの色が濃くなったのは気がかりだ。

「わ、我々の安全のためにあえて『漆黒』が恨みを買われるということなのです」
「ここで吸血鬼を殺してしまえばどうしても神殿が関わったことになりますし、こちらで捕らえておく事にはそういう面もあります」

——恨み？ 組合で行われているのは何かの手続きだけだったはずなだけど。

ンフィーレアは相手を立てながらも、違和感を覚えたため話を早めに切り上げるよう努めた。神官たちが決闘のことを知らないはずがなく、この反応は不自然だ。

使いが来た後、そしてそれ以後の神殿では、確かにクレマンティーヌの計画通りに、吸血鬼を生かしておく事での『漆黒』への疑心は氷解していた。どうやら、クレマンティーヌの自信には確かな裏付けがあったようだ。性格面からとてもそういう知識があるようには見えないが、神殿勢力がまとめている国で高い地位にあっただけのことはある。

しかし、どうもそこからの相手の態度がおかしい。怯えや恐れがその場を支配し、精神的な距離が大きく開いてしまう。『蒼の薔薇』に圧勝し、冷たい目をしたエンリ死の宝珠を連れている時点で元々そういう傾向はあるものの、使者が来てからはさらにその傾向が著しい。

そんな違和感が、ンフィーレアを急がせた。それでも、四大神の神殿を巡り終える頃には結構な時間が経ってしまうのだが。

冒険者組合では、クレマンティーヌのアイデアに周囲の冒険者たちからも驚きの声があがった。

「魔獣登録だつて？ こゝ、この吸血鬼を？」

エ・ランテル冒険者組合長ブルトン・アインザックも戸惑いを隠さない。吸血鬼を生かしておかねばならない理由については既に説明を受けて納得せざるをえなかったが、魔獣登録という言葉と今の状況がうまく繋がらない。

「ええ。人外で、それなりの知能がある魔物を従えて街中に居るわけだから、危険無く従えていることの証明としてこれを冒険者組合に登録する——あまり使われてない規則だけど、特に吸血鬼を除外する規定は無かったはずだ」

クレマンティーヌの知識では、魔獣の種類の制限は無い。街に連れ込んでも問題の無い大きさであることと、表皮や制御できない吐息などで街に被害を及ぼさないことという規定があるのみだ。

これは、漆黒聖典に所属していた頃に隊員に周知されていた知識だ。同じ聖典に属するクレマンティーヌの兄クアイエツセは、ビーストテイマーとして様々な魔獣を操ることがができる。それを含むチームで冒険者を装ってどこかへ潜入することを想定すれば、必要な知識ということになる。

ただ、強力なビーストテイマーなどの前例が少ないためか魔獣の種類に制限が殆ど無く、その気になれば伝説に謳われるような強大な魔獣を街へ連れ込むこともできてしまう。

もちろん、規則の上では組合長の裁量で不許可とすることもできるのだが、強大な魔獣を連れて目の前に居る者を相手にそのような判断を下すことができる者などいるはずもない。

「確かに規則としては問題は無いが……人間に近い姿の者では魔獣らしくないというか——」

「はあ？」

「ひっ……」

アインザックは首に縄をかけられ暗い赤のローブを纏うイビルアイの方を見ようと
して、クレマンティーヌの鋭い視線に射すくめられ黙り込む。

「まー確かに、魔獣の分際で人間様みたいに服を着てるってのは駄目かもしれないね
……仲間の命が惜しかったらおとなしくしてなよー」

「な、何を……くっ……」

クレマンティーヌはイビルアイの耳元で脅しの言葉を囁きながらそのローブを剥ぎ
取り、その下の複雑な形状の服を脱がしにかかる。

イビルアイの縄を掴んでいたマーレが不思議そうに問う。

「服を脱がせれば、連れてても大丈夫ってことですか？」

「魔獣としての登録ですからね。そういうことみたいです。組合長さんも『漆黑』とも

めるつもりはないでしょーし、ねえ」

クレマンティーヌは無遠慮にアインザツクの肩を叩く。

アインザツクは集まる視線に耐えられず、呼吸が荒くなってくる。宙を彷徨っていた視線が、顔をあげたイビルアイの感情を抑えた紅い瞳とぶつかり、怯えた表情を隠せなくなる。

「も、もも勿論だとも。ただ別にその、何というか、君たちであればそこまでしなくても——」

「ふふ、組織の頭に吐いた唾飲ませる気はないですよ。そういう特別扱いでは他の町で通用しないでしょーしね。まさか、『漆黒』を相手に適当な事言ったわけじゃないですよー。……黙って見てなよ」

「はい……いや、う、うむ……君たちに任せるから良いようにしてくれたまえ」

アインザツクはふらふらとその場を離れ、カウンターの端の椅子に座り込む。視線を落とすと、高位階の回復魔法を使う神官の少女が視界に入る。

——そういえば、例の「奴隸」とはこの子のことだったな。

裏が取れるまで信じるつもりはなかったが、『血塗れの魔女』こと『漆黒』のエンリが奴隸を連れていてという告発は『蒼の薔薇』から出てくる以前もあつた。そのいずれも、容姿から見てこの少女のことを言っていたものと考えて間違い無いだろう。

そして、少女がつけている額冠こそ、以前、魔術師組合長のラケシルが興奮気味に語っていた呪われた強力なアイテムだ。その効果についても、くどい程に聞かされている。すなわち、神官の少女は実質的には奴隷かマジックアイテムのようなものだ。そうされたのは法国でのことで『漆黑』には責任は無いそうだが、それで現状が変わるわけではない。

——吸血鬼の扱いがかつての奴隷以下となるのも、仕方がないことか。

釈然としない部分ばかりだが、味方として回復役をこなす神官の少女よりまともな格好をさせておかないと考えると、理解できないわけではない。

無論、自我さえ無いという少女のためにそのようなことをする必要も無いのだろうが、喜々とした表情のクレマンティーヌを見る限り、そこが問題ではないことはアインザックにも理解できる。

つまり、考えても仕方がないことだ。クレマンティーヌに意見できない以上、アインザックは状況を受け入れるしかない。

——人の姿をしていても、相手は魔物だ。どうなっても仕方がない。

アインザックは考えを切り替える。冒険者として現役だった頃、自分に酷い傷を負わせた魔物が戦意を失ったとして、常に見逃そうと思えただろうか。

回復したとはいえ、クレマンティーヌは『蒼の薔薇』との闘いで眼球を潰され、多く

の傷を負っていた。その怒りの矛先が魔物であるイビルアイに向けられている以上、第三者が口を挟むことは難しい。

「では、こつち持ってますね」

「ぐあつー！」

マーレが不意に足首を掴み上げると、イビルアイは濃灰色の石の床に後頭部を強打する。

「あ、助かります。……それじゃ、剥ぎ取るよー」

クレマンティーヌが服を引っ張り、逆さになったイビルアイが抵抗する。魔法詠唱者マジック・キャスターとはいえ吸血鬼のイビルアイの力は強く、マジックアイテムである服も千切れることはないため、白いお腹が露わになったところで膠着状態になる。

「遊んでないで、抵抗するなら肩や肘でも潰したらどうですか」

「いえ、登録までは汚すと面倒なんで、説得しますよ」

いかにも面倒そうなマーレと違って、クレマンティーンはこの過程をじっくりと楽しみたかった。しかし、マーレがじれているなら先へ進めなければならぬ。

クレマンティーンはいったん手を放し、イビルアイの耳元で囁く。

「面倒臭いなー。そこらの神殿言いくるめて全員処刑にしてもこっちは構わないんだよ」

「……卑怯者め」

イビルアイは逡巡しつつも、マーレに足首を持たれたままでのろのろと服を脱ぎ始める。

「おっそいなー」

「うぐっ！」

クレマンティーンはイビルアイの腹に靴裏をめり込ませると、黒タイツを乱暴に引つ張る。露わになるのはアンデッドとは思えないほど健康的な、薄桃色の太腿だ。

そして吸血鬼イビルアイは、衆人環視の冒険者組合大広間で生まれたままの姿となる。そこにあるのは、満開の肌色だ。

規則によれば、魔獣登録とは受付でも行うことができるものだ。もちろん、サイズの大きな魔物などに配慮して屋外で済ませることも可能とされているが、今回はそのような判断をする者は誰一人として居ない。冒険者たちに囲まれ、首に縄をつけられてうず

くまる全裸の少女というのは、それが人類の敵である強力な吸血鬼『国墮とし』だとしても組合前の広場で晒すにはあまりに世間体が悪すぎる光景だ。

もちろん、「別室で」などと口にしかける職員も居ないわけではないが、その全てがクレマンティーンのひとと睨みで萎縮する。上位の冒険者たちが揃っていないながら、職員の側に立つ者は誰も居ない。

帰りたくても帰れない、逃げ出したくても逃げ出せない雰囲気の中、一人の受付嬢が敢然と立ち上がる。『漆黒』に興味を持ち、今日の戦いを観戦までしていたイシユペンだ。

カウンターの端にあつた予備の小机を少し持ち上げると、全裸の吸血鬼少女を足蹴にするクレマンティーンを見て少し頬を引きつらせながらも、どうにか声をかける。

「これから大型魔獣である骨スケリトル・ドラゴンの竜の登録に備えて、外でエンリさんをお待ちします」

「あの、私も——」

「あなたには別の仕事があるでしょう」

イシユペンは便乗しようとしたウイナを冷たく突き放す。二人が声を交わしたのはエンリがこの街へ来て以来のことだ。

入り口の外に机を置いたイシユペンは、手書きの『依頼者専用臨時受付』という札を貼り付ける。エンリが実際に骨スケリトル・ドラゴンの竜を連れてくるかはわからないが、それまでは普通の依頼者を建物の中へ入れないことが主な仕事だ。

もちろん、組合を守るような使命感があったわけではない。好奇心旺盛なイシユペンであっても、さすがに今日の大広間に留まりたくはなかったというだけのことだ。スケリトル・ドラゴン骨の竜を理由に外へ出ようと考えるから、組合のためにやるべきことを思いついたに過ぎない。

冒険者組合大広間では、上位の冒険者達はクレマンティーヌが従えてこの場に残っているが、中位以下の冒険者達は通常通りに依頼を選び、討伐報酬を受け取りに来る者もいる。イシユペンの気遣いで依頼者だけは屋外で受け付けている点を除けば、組合はあくまで通常営業だ。よって、先に小部屋の一つに監禁されている『蒼の薔薇』を除き、建物に立ち入った全ての冒険者が全裸の吸血鬼少女イビルアイを目にすることになる。

しかし、冒険者に取り乱す者は居ない。もはやこの街の冒険者で、エ・ランテル最強の『漆黒』とアダマンタイト級の『蒼の薔薇』の決闘とその顛末を知らない者など居ないからだ。さらにミスリル級、白金級といったエ・ランテルの組合トップレベルの冒険者たちが目を背けながらも直立不動で控えていることも、これが組合として当たり前のこと、自然に受け入れるべきことだという感覚を後押しする。生まれたままの姿で満開

の肌色を晒す少女は、この場では登録を待つ一匹の魔獣に過ぎないものとして扱われた。

「ちよつと用意してほしいものがあるんだけど」

白金級冒険者の一人が、クレマンティーンに呼ばれ用事を頼まれる。

魔獣イビルアイの新たな装備品が届くのは、イビルアイが「獣なんだから獣らしくね」と用意されたミルク皿の中に顔を突っ込まれた後のことだ。

三六 首輪の少女【加虐回・飛ばし可】

イグヴァアルジは走る。

『漆黒』——『血塗れの魔女』エンリとその取り巻きたちが邪悪でありながら何者も対抗し得ない強大な存在だということは、クレマンティーヌという存在を理解した時からなんとなく悟ってはいた。しかし、イグヴァアルジは『蒼の薔薇』なら何とかしてくれると思いたかった。そして、そこへ肩入れしてしまった。

ただ、囚われた吸血鬼——王国でも二百年も昔から伝わる伝説の『国墮とし』の哀れな姿を目にしてしまえば、否が応でも認めざるをえない。あれほどの存在を、それも力で従えることが出来るのであれば、その力を抑えられるものなどこの国に、いや、人の世界全体を見回してもいるはずがない。

『蒼の薔薇』の敗北を目の当たりにする頃には、イグヴァアルジの心を支配していたのは恐怖だけだった。

クレマンティーヌの態度を見ればわかる。鎧を盗み出すという『蒼の薔薇』の短絡的な行動によって、おそらくイグヴァアルジが情報を与えたことも露見している。決闘の場でエンリが高らかに宣言した「懲罰」は、自らのもとにも下されるかもしれない。

もうお終いだ——實際、イグヴァルジはそう感じていた。

英雄を夢見て、必死に鍛錬と命を賭けた冒険を繰り返して、徐々に階段を昇ってきた。そんなイグヴァルジは、横手から現れてたつた二、三步で頂点へ昇りつめた強大な存在によつて、あつさりと踏み潰されるのだ。

それでも、ここで逃亡すれば完全に敵対者となる。相手は、あのクレマンティーヌでも逃げられないという存在だ。

だから、『蒼の薔薇』の声を罵声で塗り潰した。『漆黒』の勝利に喝采を送った。チャンスがあれば土下座だつてする。そのつもりで今回、決闘を観戦したのだ。

そして、クレマンティーヌが組合へ戻る途中に自分を呼びつけ、吸血鬼のために首輪を買つてこいと命じた。これに一切の躊躇無く従うのは当然のことだ。恐怖を感じながらも誰よりも卑屈に彼女の意図を察し、拘束のための他の品物まで提案できたのは、これ以上強者同士の争いに巻き込まれたくないという思いばかりでなく、自身が危機に陥つたのは『蒼の薔薇』の浅はかな行動のせいだという仄暗い怒りの感情に駆られたからだ。そのうち一人が邪悪な吸血鬼だったとなれば、そこへ負の感情をぶつけることに何の躊躇もない。

——ざまあみろ。あいつを踏み台にして、俺は絶対に生き延びてやる！

邪悪な吸血鬼が『蒼の薔薇』の仲間だったということは群衆の前で明らかになった。

そんな者たちがイグヴァアルジを危険に晒したのだ。ならば、その危険から逃れるために『蒼の薔薇』が守ろうとした吸血鬼ヴァンパイアに何をしたらつて構わないはずだ——イグヴァアルジは胸の奥から湧き上がる感情を抑えられず、嘲笑した。

考える。走る。買う。走る。走る。

息を切らせず街の中を走り回り、知恵を絞る。そんな状況で研ぎ澄まされた判断力が衰えないのは、イグヴァアルジがミスリル級冒険者チームのリーダーである証だ。

媚びる目的ではないイグヴァアルジの提案をうけたクレマンティーヌは深い笑みを浮かべ、上機嫌な様子で様々な要望を語ってくれた。それに従い、驚くべき短時間で幾つかの鍛冶師や騎馬装具師などを巡っていく。

別に倒錯した趣味を持つてゐるわけではない。これは冒険者として蓄積された経験に裏打ちされた調査能力の賜物だ。馴染みの娼館で情報収集も行い、特殊な装具を扱う店まで紹介してもらった。残念ながら幼い少女に丁度良いものは無かったが、特注の場合の納期などまでしつかりと聞いておく。

「俺は、何をしているんだ……」

ふと荷物を眺め、イグヴァアルジは呟く。

クレマンティーヌが冗談のような言い方で挙げたようなものまで用意するのは、『蒼の薔薇』に味方するつもりはないという意味をより明確にするためだ。

媚びるのは呆れられるくらいで丁度良い。元々、泥をすすつてもこの世界でのし上がると決めて今日までやってきた。本当に命の危険が迫った今、靴を舐めるような行為さえも厭うことはない。

「迷う? ……馬鹿な。俺はこの世界で生き延びるためなら何でもすると決めただ。この程度のこと……」

イグヴァルジは袋の口を開いて、荷物をじつと見る。

「いかがわしい……変態みたいだ……」

ただクレマンティーヌの要望や軽口に応じて用意したものを眺めただけで、不安とも迷いともいえるものが、心の底からこみ上げてくる。

鉄板の仕込まれた革首輪は、小柄なイビルアイに使えるようその場で穴を増やして調整してもらった。少女の姿をした吸血鬼に使うのだと説明したが、店主の生暖かい視線は最後までそのままだった。

イグヴァルジにはそのような趣味は無いが、まともな人間の子供が相手なら鉄板の入っていない普通の革首輪で十分なだから、品物を見て本当に危険な相手を拘束するのだと理解してほしいところだ。「俺が使うわけじゃない、恐ろしい姐さんの命令で――」などと言っても含みのある表情は変わらず、そんな店主の態度には本当に納得がい

かなかった。

そこで購入した革手錠には幾つか種類があつて、腰に装着するベルト固定式の革手錠に、手足をあわせて固定する八の字の革手錠、そして手足を個別に拘束する革の手錠に足枷も購入し、首輪と同様に調整してもらつた。それぞれ鉄板入りの頑丈なもので、全てが鎖を繋ぐことができるようになってゐる。繋いでよし吊るしてよしとの説明もあつた。足枷につける鎖付きの鉄球は迅速な調達^{パシリ}の障害になるので冒険者組合への配達をお願いした。

その他、これらのものを言い値で買ったことによる様々なオマケについては、勧められるがままに受け取つておいた。もし勝手に断つて、そのことがクレマンティーヌの耳に入つたら大変だから仕方がない。「姐さんとやらによろしく」と言われれば、万難を排してもよろしく受け渡さねばならない。

オマケには統一感というものが無い。幅広な革の目隠しや木製の反り返つた茸のような形状の棒までは理解できる。しかし、どぎつい赤色の蠟燭や、大ぶりのボトルかデカンタの栓のようなものは売れ残りの雑貨にしか見えない。ワイヤーに沢山の小さな鉄球を通したものは武器か何かだろうか。振り回して使う殴打武器ならもつと重量があつても良さそうなものだ。このあたりはどうでもいい余りものか何かなのだろう。

ただ、クレマンティーヌが言及した轡だけは、少女に適したものは特注となつてすぐ

には用意できないとのことだ。嗜虐趣味として求めていたのなら代わりの品があれば足りるだろうが、イビルアイが魔法詠唱者だマジック、キヤスターということを考えれば魔法を封じる用途も考えられる。別の拘束具を用意すれば良いというものではないかもしれない。

急ぎの発注を打診すると、馬具の店に行くよう勧められた。そこではもちろん人間用などは無いが、仔馬の訓練に用いる最小サイズのものを用意した。人間用の特注については、後で聞いて必要だと言われれば改めて発注すればいいだろう。

馬具の店では、鞭も用意しておく。相手が吸血鬼である以上、そこらの馬よりはよほど頑丈には違いない。ここでは八足馬スレイブニールの調教にも使えるというしつかりしたものを選んでおいた。先端の平たいタイプで、革の内側には鉄板が仕込んである。

イグヴァルジは買ったものを確認すると袋の口をそつと閉じ、組合への道をひた走る。

いつもの広場、そして組合の入り口が見えてくる。ここから先は、不安や迷いを抱えたまま進むことは許されない。

イグヴァルジは顔貌から迷いを消す。眉間の皺を伸ばし、眼力をやんわりと弱め、頬骨を上げ、口角を上げ、軽妙な声を出す自分をイメージする。イメージするのは、無心で尾を振る犬だ。

「姐さん、買ってきまし……た……」

そしてイグヴァアルジの前に現れたのは、幼い少女の満開の肌色。

イグヴァアルジはその場で硬直し、大きな袋を取り落とす。

クレマンティーヌの性格を知らないわけではないが、こうしたことが公然と行われているというのは想定外だ。

袋の口から真つ先にこぼれ出るのは、いかがわしい小物たち。

「な、何買って来てんのイグヴァアルジ、イヒヒ、これ趣味に走りすぎでしょ、イエヒヒヒヒ」

「いや、姐さん、それは店主のおマケであつて、俺はその……趣味とかじゃなくて……」
腹を抱え、漏れ出る甲高い変な笑いを堪えようとしなないクレマンティーヌ。

イグヴァアルジは必死にこぼれたものを袋へ戻しながら、集まる視線にその身を竦める。

「必要なものが来たのなら、早く進めてください」

「ちよ、待つ……」

イグヴァアルジが拾い上げようとした袋を、ここでの作業を面倒がるマールレが持ち上げて中身をすべてぶちまける。周囲に見られまいと慌てても、ここ最近のイグヴァアルジの不幸を象徴するかのよう、いかがわしいものほど軽快に元気よく転がっていく。

「ウエヒヒヒ、変態だ、変態がいるよ」

イグヴァアルジはこの光景を忘れない。他の冒険者たちの遠くを見るような視線を忘れない。組合の女性職員たちの冷たすぎる視線も忘れない。清楚だと思つていた裏方のあの娘がイグヴァアルジも知らない器具を見て顔をしかめた衝撃さえも忘れない。

この時、仲間たちの生暖かい視線に含まれる一片の温情、一片の理解を感じなければ、この場から駆け出して二度とエ・ランテルに戻らなかつたかもしれない。

——俺にはもう、こいつらしか居ないんだな。

リーダーとして仲間たちからそれなりの信頼を得ていながら、イグヴァアルジはそれを通過点と割り切り一人で英雄への階段を登ってきたつもりだ。しかし、個人の名誉や名声などというものは、些細なことで簡単に吹き飛ぶものだと思ひ知ることになった。

『道具屋』イグヴァアルジは、この日から冒険者チーム『クラルグラ』の真のリーダーとしての階段を登り始めることになる。

なお、周囲の冒険者たちにも最低限の温情はあり、この日彼に付けられた新たな二つ名の意味が広く知られることはなかつた。

温情があるなら、そういう二つ名を弄ぶのも勘弁してほしかった。

受付嬢ウイナ・ハルシアは広間に背を向け、一心不乱にハタキを振るっていた。

閉鎖の間、この部屋に埃が溜まっていたわけではない。むしろ業務を止められながら、一応交代で出勤していた受付嬢は掃除くらいしかすることがなかった。落とす埃など無い所へ、ウイナはただハタキをふるっていた。

——あの人たち、もう嫌。

冒険者組合の閉鎖が解かれ、日常とともに戻ってきたのは、アダマントイト級へと昇進したあの『漆黒』だ。これまでウイナの恐怖の象徴だった『血塗れの魔女』ちまみエンリのチームは、ここへ現れた仲間たちの所業までアダマントイト級に恐ろしいものだった。

「くっ……殺せ!!」

広間の床に転がされた哀れな少女が叫ぶ。

じやらり、と重々しい金属音。そして鎖の擦れる音が生々しい。

少女はこの場で魔獣として扱われている。一条纏わぬ姿とされた後、四肢を黒革の手錠をはじめとする幾つかの拘束具に囚われ、スレイブニル八足馬でも繋ぐような太い鎖を垂らしている。

公然と辱められる哀れな少女にしか見えないそれは、かつて国をも滅ぼした吸血鬼ヴァンパイア『国墮とし』だという。

白い肌と薄い肉を晒し武骨な首輪を嵌められた少女には、そのような恐ろしい気など感じられない。哀しげな赤い瞳だけが、かろうじてその正体を物語っている。

「んー、まーだ、何か足りないんですよー」

「四つん這いにさせれば黙ってことでもういいんじゃないですか」

この場の凶行を主導する恐ろしい少女はクレマンティーヌ。その凶行に一片の哀れみも関心も持たないまま、投げやりな言葉で応えるのは闇妖精ダークエルフの可憐な少女マールだ。

クレマンティーヌはアダマンタイト級の『蒼の薔薇』を相手に一人で前衛を務めたと聞かすが、それでも『漆黑』では奴隷の扱いだと嘔かれており、ここでもマールのほうが立場が上のように見えるのが底知れない。

むしろ、一連の行為で嗜虐心を満たすクレマンティーヌより、嗜虐も憐憫も何も無いマールの方が恐ろしい——それは、この場に居る者たちだけが知ることのできる感覚だ。

「もちろん魔法複写では四つん這いですけど、黙っていつたらもうちよつと必要なものがあると思うんですよ——ほら、ああいうの」

「はあ。必要なら早く済ませてください」

ウイナは声の方を見ないよう顔を逸らす。

声の主はこの凶行の主である金髪クレマンティーンヌの悪魔。そして、あろうことかその足音はウイナの方へと向かってくる。

ウイナは意識をハタキに集中し、既に塵一つ無くなっている書類棚をパタパタとはたき続ける。

——来ないで、お願い！ 関わりたくない！ ……こんな仕事、やめればよかった！
「ひいっ！」

ハタキを振るうウイナの手が止まる。手首を掴んだのはもちろん金髪クレマンティーンヌの悪魔だ。アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』相手に一人で前衛を務めた女戦士にして、組合の大広間で少女を甦る悪魔の名はクレマンティーンヌ。彼女には冒険者としての登録は無いが、今やアダマンタイト級へ昇格した『漆黒』の唯一のメンバーである『血塗れの魔女』エンリ・エモットの仲間であり部下であり、そして奴隷だという。

「ちよつとこれ、貸してくれるかなー」

「は、はひっ！」

「あ、汚しちゃうから、これで新しいの買ってきてね」

「よ、汚……いい、行ってきますっ！」

クレマンティーンヌは顔面蒼白になったウイナのハタキを奪って銀貨を握らせると、首

輪の少女——伝説の吸血鬼『国墮とし』だとされるイビルアイの方へ向かっていく。ウイナは短めの柄のハタキに関する嫌な想像を必死に頭の中から追い出しながら、カウンターにお尻をぶつけつつ転びそうなほどの勢いで建物の外へ駆け出した。

「お、お前、それで何をするつもりだ！」

「んー？ 自分の立場、まだわつからないかなー。そこらの魔獣にあつて、イビルアイちゃんに足りないものだよ」

「ま、まさか、お前それ——がはっ！」

クレマンティーヌは立ち上がろうとしたイビルアイの口元を容赦なく蹴り飛ばす。吸血鬼や高位の冒険者でなければ顎の骨が折れてもおかしくないような一撃だ。

「んふふ、組合長さんがらしくないって言うから、わざわざ尻尾まで付けてやろうつてお情けだよ。察しなよ」

受付の一角の丸椅子に燃え尽きたように座り込んでいた冒険者組合長プルトン・アインザックは、雷に打たれたようにびくりと全身を震わせて顔を上げる。

「いや、私は特例としてこの登録は認めると——」

「ほーら、まだ特例とか言ってる。特例だったらこの街だけつてことになるし、よそでも通用するように、それっぽくしておかないとダメなんだよ」

「あ……いや、そういうことでは——」「チツ……人の氣遣いは黙って受け入れなよ」

冷たい目で見下ろすクレマンティーヌの舌打ちに、アインザックは口をつぐんだ。これ以上は無理という表情だ。

「さて、獣らしく四つん這いになるうか」

「……くっ……戦いには負けたが、たとえどんな辱めを受けようと——かはっ！　ぐはっ！　げはっ！」

クレマンティーヌは嗜虐の笑みを浮かべたまま、鉄靴の爪先を何度も少女の柔らかい腹部にめり込ませる。

「さっさと裏返りなよ。何されるかわかってんでしょー」

「ぐあっ、くはっ……」

「んふふ、今さら人間らしい扱いを望むなら、死体の布でも羽織らせてやろうか？」

「くっ……」

少女は足蹴にされ転がされるような状況から、最後は抵抗を止めて自らうつ伏せになる。

死体の布というのは、別室で囚われている『蒼の薔薇』の生き残り二人が何を奪われでも守ろうしたものだ。極めて高価な装備品の数々と少女の尊厳を無抵抗のまま差し出してでも守らねばならないそれは、二人の死体を保護し、蘇生の望みを繋ぐ

シユラウド・オブ・スリシフ
安眠の屍衣。

敗者にはまだ失うものがあり、それゆえに戮られ続ける。生者も死者も、敗者は等しくその命運を勝者に握られる。

クレマンティーヌは少女の臀部でんぶを踏みつけ、その薄い肉に靴の踵を押し付けながらハタキを持ち替えた。

広間でこの光景を見せられていた『漆黒』の関係者を除く全ての者たちが、金髪クレマンティーヌの悪魔の所業から目を背けた。

イビルアイの魔獣登録に際して、当初クレマンティーヌは別室で監禁してある『蒼の薔薇』でも連れて来させて、その前で他の冒険者にゆつくりと絵でも描かせようかと考えていた。イビルアイを生かしておく条件として、『蒼の薔薇』に描かせるのも良いという考えさえあった。

しかし、面倒を嫌うマーレの顔色を伺うことで、金貨を払って魔法による複写を依頼することになった。

念のためと称して枚数を多く依頼したのは、その原資がイビルアイから奪った金貨袋ということもあるが、沢山あった方が面白いからだ。冒険者プレート同様、勝利ハンティング・トロフィーの証

は多いほど良い。今後『国墮とし』に絡んで神殿や貴族を利用する用途が生じても、まだ余るほど用意させておいた。

その時、屋外に受付を構えていた受付嬢イシユペンの制止を振り切り、二人組の中年男が建物へ入り込んできた。

「すまない。よろしければ、その吸血鬼の身柄を我々に預からせてもらえないだろうか」「ああ？」

「君たち『漆黒』の悪いようにはしない」
声をかけてきたのは、火神の聖印を持つ聖騎士と風神の神官だ。冒険者プレートは無い。

「無理。あんたらみたいな雑魚の手に負える相手でもないしね。神殿とは今頃話もついでるはずだし。まー吸血鬼のガキに興味でもあるならそこで見ててもいいよ？」

「神殿とは関係無い。私たちは、君たちが王国内でうまくやっていく手助けをしたいんだ」

答えはマールに聞くまでもないことで、クレマンティーヌは少々の煽りを込めて対応する。雑魚には違いないが、もし喧嘩を買ってくれれば少しは楽しめる程度の程良い相手だ。

しかし、男たちは冷静そのもの。吸血鬼の身柄が難しいようなら魔法複写でも構わないという。

話を聞いてみると、彼らは『蒼の薔薇』のパトロンに敵対する貴族の手の者だという。『蒼の薔薇』の不祥事を政敵の追い落としに利用するため、身柄を得られれば最良、そうでなくとも少しでも物証を持ち帰りたいということだ。そのことが『漆黒』への有形無形の報復をやりにくくすることに繋がると言われれば、クレマンティーヌは納得せざるをえない。それに、どうせエンリも喜んでこの姿のまま連れ歩くだらうと考えれば、特に複写を得させるデメリットも無さそうだ。

こういう場合、貴族の側も報復を恐れている。吸血鬼の報復など考えたくも無いだろう。それに、裏も取れない状況では貴族の名前なども聞くだけ野暮というものだ。

結局、マレーの許可を得た上で、男たちの負担でさらに魔法複写を増やすことになった。着衣のものにして欲しいと言われたのは少し残念だったが、その方が用途上都合が良いなら仕方がない。もちろん、クレマンティーヌの手元に残る五枚の魔法複写は、全てが獣らしい装備や構図で作らせたものだ。

夕暮れの街は（永続光）コンテニューアル・ライト式街灯の白い光に照らされ、思いのほか明るい。大通りに立ち並ぶ店からは呼び込みの声も絶えず、昼とは違った賑わいがあった。

冒険者組合閉鎖に始まる『蒼の薔薇』討伐の騒動は、終わったようでも終わっていない。エンリが久しぶりに街の風景を見回すのも、そうする余裕ができたからではなく、周囲の視線が気になるからだ。

表向き平穏なエ・ランテル——その光景は人々の態度を除けば、以前とそう変わらな
い。変わったのは、エンリたち『漆黒』の方だ。

エンリは滲み出る脂汗を拭き取り、立ちくらみに抵抗するため飲み水を口にしようと立ち止まる。

あるいは、おぞましい記憶に抵抗して速やかに行動できるよう与えられた幾つかの薬が、今なお水を求めているのかもしれない。

往来で突然立ち止まっても周囲に影響はない。それは、エンリたちの周囲に大きく人の居ない空間ができているからだ。

完全に虚勢だが、エンリは胸を張った堂々たる姿勢を維持しながら、不安いっぱいの横目で人々の様子を窺う。

殆どの群衆がエンリたちを眺め、周囲の者たちとヒソヒソ囁き合っている。

囁きの直接聞こえてくる部分では、伝説の吸血鬼を捕らえた、悪の冒険者チームを討伐したなどと肯定的な言葉が多いように思える。しかし、そういう説明をしてくれる者がなければ、これまでのような純粋な恐怖の対象としての扱いに留まらず、いかがわしいものを見るような目で見られたに違いないことは、人々の表情を見れば明らかだ。

エンリは黙って見下ろす。そこにあるのは、まさに満開の肌色。

全開どころではなく、満開だ。これまで幾度も見てきた、ミコヒメのめくれ上がったコートの中の肌色程度の生易しいものではない。たおやかな肩口も、平坦な胸も、細い腰も、肉の薄い臀部も、華奢な太腿も、ほぼ全てが満開で、全てが公然と晒されている。そして、それらを引き締め、あるいは引き立たせるかのように悪目立ちしているのが、黒革の首輪と革手錠に太い鎖、そして鉄球の付いた足枷だ。

少女は馬が使うような器具を口にかまされている。当初の予定では、四つん這いになったその背中に騎乗することになっていた。

もちろん、『国墮とし』に乗るというアイデアはエンリのものではない。そうであるはずがない。

強く勧めたのは当然、クレマンティーヌだ。急に迎えに来たマーレに連れられ、『死の

感覚的には、本当にありえないほど酷い状況だ。ここまでする必要があるのであるのかも疑問だった。

しかし、マールが手放さないといい以上、連れ歩かなければならない。

それならば、恐ろしい吸血鬼が人々に被害を与えないよう、そして人間のふりができないよう魔獣として扱って全身を拘束する。

そんなクレマンティーヌの説明には、エンリが異論を差し挟む余地はほとんど無かった。口を挟んだのは、クレマンティーヌが尻尾と称する不要な掃除用具を処分してもらった部分だけだ。

ンフィーレアは目を背けつつ思索していたが、「処刑を要求されないようにするには、これくらいした方がいいのかも」などと意味のわからないことを言うだけで異論はなかった。上機嫌なクレマンティーヌの感覚にはついていけないが、二人が一致するならこれは仕方のないことなのだろう。

次第にその数を増やしていく沿道の群衆は『国墮とし』の屠所の羊も同然のうなだれた姿に衝撃を受けていた。

クレマンティーヌの指示を受けた冒険者たちが街中で『蒼の薔薇』の悪事と『国墮と

し』の脅威を喧伝してくれた効果だろう。英雄然として振る舞い王国民を謀たばかっていた邪悪な吸血鬼に怒りを感じた者は多く、投石のための石を持って路地から現れる者も少なくなかった。

しかし、過剰なまでの拘束具を身に着け、か細い手足を地につけて瘦せた家畜のように石畳の上を進む『国墮とし』の状況をひと目見た途端、その怒りはことごとく削がれていく。手に持った石を仕舞いこむ者、取り落とす者など様々で、実際に石を投げる者は一人としていなかった。

エンリは、ンファイレアの言っていたことを少しだけ理解した。

人として、本来は殺さなければならぬ存在を、マーレのために殺さずに連れて行かなければならない。

その時点で、国をも滅ぼす危険な吸血鬼イビルアイを殺さず連れていくという時点で、人としての常識を手放しているのだ。

このようなことで、それが許されるのかはわからない。

しかし、少なくとも『蒼の薔薇』との違いを見せることをしなければ、人類の敵となった彼女らと同じになってしまう。

エンリは、抑え難いイビルアイへの憐憫の情をゆつくりとすり潰しながら歩を進めた。

慣れてはいけないうように思えた光景も、いつの日か、慣れなければいけないものなのかもしれない。

第八章 バハルス帝国へ

三七 鮮血帝の目は誤魔化せない

エンリが正気を取り戻したのは、冒険者組合でクレマンティー又たちと合流する殆ど直前のことだ。

そこは、待ち合わせ場所でもある宿の一室。エンリが正気を失った場所と変わらない景色の中に、他人の姿は無い。

「……ひっ！」

エンリはマーレの掌の上の死の宝珠に怯え切った視線を向ける。一瞬感じた宝珠への強い渴望は、すぐに宝珠の側から断ち切られた。

エンリは知っている。死の宝珠は手放した者に耐えがたい渴望を強いる力を持っている。

しかしエンリは知っている。死の宝珠はマーレに忠誠を誓っている。マーレに逆らってその力を行使することはできない。

そしてエンリは覚えている。死の宝珠に支配されていた間の記憶は全て覚えている。自分の口から出た物々しい言葉ばかりではなく、聴衆の反応や表情まで、隅々までしつ

かりと残ってしまっている。

記憶を反芻した後のエンリは、嘔吐物を吐き散らしたところで色々と途切れている。居なかつたはずのミコヒメの姿が見えたり、エンリ正気ではないエンリ死の宝珠が再び体を支配して、ンフィーレアの差し出した沢山の薬を飲んでいたり、記憶に混乱が見られる。

朦朧とした状態で、マジックアイテムである法衣を着たまま嘔吐物を洗い流され、仕上げだという薬を渡され、身支度を迫られる。

待たせているのは、クレマンティヌ。この状況、この精神状態を決して知られてはならない相手だ。

エンリは許されるならその場でしゃがみ込み、ずっと頭を抱えてうずくまっていたかった。寝床があれば、一日中、いや、三日三晩でも布団をかぶって暮らしたかった。

故郷のカルネ村では働き者と言われたエンリだが、この街では許されるなら部屋に閉じこもって何もしたくない。もちろん、今すぐカルネ村へ帰してくれるのなら、すぐに働き者に帰ることが出来る。見渡す限りの広大な麦畑でえんえんと雑草取りに取り組むのもいいだろう。きつい抜根作業だつて厭わない。狩人が取ってきた獲物の処理のような血なまぐさい仕事だつていい。今の自分なら、いざという時に魔物と戦つて村人を守るのだつてできるかもしれない。

つまりは、この街の人々に会わなくて済むのなら何でもいい。ゴブリンやオーガより

人間が怖い状況だ。

しかし、エンリがこの場に戻った時、冒険者チーム『漆黒』のエンリとしての仕事はまだ残っていた。マーレが迎えに来るまで正気に戻れず、そのマーレが転移魔法を使うのだから、その仕事に戻るまでにろくに猶予さえ与えられない。それを後押しするように差し出されるンフィーレアの怪しげな薬の数々も恨めしい。

——気持ちの整理を薬でつけさせようなんて、ちよつと酷い。

その時、エンリはンフィーレアを恨みかけた。元凶のマーレはもはや天災のようなもので、考えても仕方ない存在だからだ。不条理な考え方もしれないが、それは『漆黒』の関係者全員が受け入れていることだ。

しかし、ンフィーレアも悩んだ上の判断だと言う。

「大変なところで戻ってもらうのは気の毒だけど、ここで本当のエンリに戻っておかないともっと大変なことになると思うんだ」

そして、その判断は正しかった。エンリの心を完膚なきまでに痛めつけたが、それでも正しかった。

冒険者組合では、何故か建物の外へ机を出していた受付嬢イシユペンスケリトルドラゴンに骨の竜のこ
とを聞かれた。あれを街へ持ち込むような非常識な人間だと思われていたことが残念
だが、押し**の強**そうな雰囲気の割に深追いされなかつたのは助かつた。

魔獣登録のためだとして、拘束具のみを身に着け肌も露わな「獣らしい恰好」にさせられたイビルアイ。それを見た瞬間、エンリは意識を手放しそうになった。

そこにはマールも、クレマンティーンもいる。死の宝珠の恐怖が去っても、この二人が居ることに変わりはない。エンリが正気とともに取り戻したのは、変わることはない狂気の漂う危うい日常だ。

ここでは、エンリは狂気を装う。正気であれば間違いなく取り乱すところだが、弱みを見せられないクレマンティーンの前ではそれさえも許されない。幸い、水のように飲み干した大量の鎮静薬の効果は残っており、心の粟立ちは生じた端から抑えられている。

そこからはクレマンティーンの段取りに流されつつ、一足先に囚われの『蒼の薔薇』と会う。イビルアイのような恰好ならどうにかしなればと思ったが、こちらは普通に拘束されているだけだった。

ラクユースとティアは仲間の死体の埋葬を拒み、自分たちで持ち運ぶという。暴れられても困るので、二人の手がそれで塞がるのは都合が良い。

そして、『蒼の薔薇』の生き残り三人の対面はエンリの前で行われる。

「私たちは、あなたたちを絶対に許さない。今は敵わないけど、いつの日かきつとイビル

アイを助け出す」

「手段は選ばないし、リーダーにも選ばせない」

ラキュースとティナの敵意がエンリへ真つ直ぐ突き刺さる。

轡をかまされたイビルアイは哀し気な目を向け、仲間たちの思いを拒むように首を横に振る。

エンリは薬の鎮静効果に身を委ね、感情の籠もらない目でじつと二人を見つめながら今後のことを考える。クレマンティーヌだけでなく『蒼の薔薇』にも命を脅かされるとなれば、マーレと別れた後に明るい未来は全く見えない。

——今は、考えるのをやめよう。

暗い考えが鎮静効果を上回れば不味いことになるかもしれない。クレマンティーヌにも『蒼の薔薇』にも弱みを見せることは未来の死に直結する。

こうして、エンリはクレマンティーヌの狂気のシナリオに身を任せた。

その先にあつたのが、あの凱旋だ。

薬の鎮静効果が緩む中、エンリはイビルアイの拘束具から伸びる鎖を持たされて街を練り歩いた。沢山の群衆にその姿を見られた。

これも、死の宝珠の所業を考えればやむをえないことだ。強者のふりをしなければならぬ以上、戦いの身代わりについてもクレマンティーヌに知られるわけにはいかない。さらに、『蒼の薔薇』にも知られてはならない。エンリが弱点だと知られれば、この日の勝利も無駄となってしまうかもしれないからだ。

エンリはそれまでの死の宝珠の所業と矛盾なく振る舞うため、薬の効果が緩んで狂気のシナリオに抵抗を感じた後も、それを続けざるを得なかった。そのまま鎖を持たされ、晒し者になった。本当につらかった。

それでも、正気のエンリがその役割を担ったのは正しいことだ。

心に居座られていたエンリには、死の宝珠の行動パターンが手にとるようにわかる。わかっってしまう。

死の宝珠ならば、クレマンティーヌの求めに応じてイビルアイに騎乗するどころか、スケリトルドラゴン骨の竜とともに出現した時のように、その背に立って移動したことだろう。

クレマンティーヌの勧める鞭を抵抗も無くその手に取って、裸同然の哀れな少女にか見えないイビルアイにそれをふるったことだろう。

『蒼の薔薇』に対しても、死体を動ゾンビ死体にして歩かせたり骨スケリトルドラゴンの竜に引きずらせたりしたことだろう。

さらにその場で、群衆に向かってどのようなことを言い放つかなど、想像もしたくな

い。

だから、エンリが死の宝珠から解放された状態でエンリとして突然このような状況に放り出されたのは、仕方がないことであり、そして必要なことなのだ。

「轡は馬用ではよくなかったですか」

宿の前でイビルアイの轡を眺めていた時、先輩冒険者のイグヴァルジが変なことを聞いてきた。

「……馬用って、人間みたいな姿なのにおかしいと思わないんですか」

「そうですね……申し訳ありませんっ」

あまり気力が無かったので投げやりに答えると、何故か恐縮して走り去ってしまった。

それにしても轡といったら馬用しか無いだろうに、少し変なやりとりだ。彼もクレマンティーヌにつき合わされて疲れていたのかもしれない。

ともかく、問題は全て片付いた。

街中を凱旋させられたのは、エ・ランテルからの永久追放となった『蒼の薔薇』を街の外へ放逐するためだ。

クレマンティーヌが色々と脅していたようで、それぞれに死体を背負った二人は無言のまま街道を王都方面へ歩いていった。

邪悪な吸血鬼とその仲間たちの大粒の涙に心がざわつくのは、冒険者として未熟だからかもしれない。経緯はともかく、相手は冒険者組合からも四大神全ての神殿からも討伐対象となつた存在だ。

しかし、冒険者という命の奪い合いをする仕事にそういう覚悟の無いまま就いたのだから、これは仕方のないことかもしれない。

その後、組合へ戻つてクレマンティーヌが他の冒険者に鑑定させながら剥ぎ取つたという『蒼の薔薇』の様々なマジックアイテムを回収した。全てを奪うようなやり方に驚いていたら、死体に巻いて蘇生魔法を助けるマジックアイテムを奪わなかったことをクレマンティーヌに謝られた。『蒼の薔薇』が面倒を起こさなためだというので咎めるつもりはないが、最大限に恨みを買うようなことをして、蘇生のチャンスにだけ配慮するクレマンティーヌのやり方に対しエンリは溜息しか出ない。

「蘇生をさせるラキュースを残したつてこと自体、二度三度殺せて楽しめるつて意味もあるんでしょーし」

それは貴族の家からの仕返しを恐れての判断だったが、クレマンティーヌは違うことを考えていたようだ。

そんなクレマンティーヌには、疲れて引きつった顔に歪んだ笑みを向けるだけで応えておく。否定したくても、死の宝珠昏間のエンリと違和感の無い形で話ができる気がしない。身代わりを秘密にしなければならぬことで、何もかもがクレマンティーヌのペースで進んでしまう。

さらに組合では、何故か新品のハタキをしつかりと胸元に抱え込んだいつもの受付嬢にいつも以上に嫌な目で見られ、これまで堂々と接してくれていた組合長の怯えたような視線もつらかった。気が重いのが、冒険者組合で何があったのか——正しくは、何をしでかしたのか——少し気力が戻ってからクレマンティーヌにしつかりと聞いておくべきだろう。

こうして、宿へ戻る頃にはエンリは憔悴しきっていた。

この日は注目され過ぎていた。バレアレ家に戻れば迷惑がかかるため、全員で宿に泊まるつもりだ。

——あとは何もかも忘れて、休むだけ。

そう思っていたところへ、とんでもない来客が現れた。

当初その四人組には、表面上は友好的な関係を築けそうな雰囲気があった。仕事に關係ない部分では、なるべくエンリや『漆黑』の所業に関心を持たないようにしてくれている。積極的にあら捜しをしてきた『蒼の薔薇』とは大違いだ。

もちろん、『蒼の薔薇』討伐の労をねぎらう際はいくらか距離を置くような態度をとっていたが、それは今日の一部始終を少しでも見られていれば仕方がないことだ。エンリでもそうするか、できれば近寄りたくもない。目も合わせないかもしれない。

ただ、問題はその後で、彼らは驚くほどあっさりと、エンリたちが看過しえない言葉を口にしたことだ。

「実は、エンリさんは偽物——などというのは失礼ですが、本当はあまり強くないんじゃないかと考えていたんです」

「昨日まではあんな魔法を使えるようには全く見えなかった。今も同じで、昼間とはまるで別人のよう」

神官の男と魔法詠唱者マジック・キャスターの少女の言葉に、エンリとンファイアは一気に顔色を失った。

来客は、普段バハルス帝国で活動しているというワーカーチーム『フォーサイト』の四人組だった。衛兵や旅人では無い神官、街娘などバラバラに装った恰好はワーカーのそれには見えずチームとしての統一感もないが、『蒼の薔薇』に感づかれないうち街に溶け込むためだという。

爆弾発言をしたのは神官のロバーデイク、手に持った杖から魔法詠唱者^{マジック・キャスター}とわかる少女はアルシエと名乗った。あとは軽装の戦士ヘッケランと、おろした髪に違和感のあるレンジャーのイミーナ。この二人は、なんとなく距離が近い。

彼らの目的自体は、そう悪い話ではない。帝国の立場のある人間が内密の依頼をしたので、帝都まで会いに来てくれるだけで報酬を出すという。少なくとも、早いうちにこの場を逃れたいエンリヤそれを察しているンフィーレアには魅力的な申し出だ。

そのことに安心して、和やかに打ち解けたことで明かされたのが、「エンリが偽物」だという昨日までの彼らの認識だ。

苦難の一日は、まだ終わっていないなかった。言葉が、状況が、エンリの疲れ切った心に鞭を乱打する。

ロバーデイクは半信半疑といった雰囲気だが、アルシエは何かが見えているかのよう
に確信に満ちた視線を送ってくる。そして、アルシエの確信が昼間の戦いを見ていたと

いう『フォーサイト』全員に伝播しているようにも見える。

エンリとンフィーレアは一瞬の目配せの後、言うべき言葉を必死に探る。

クレマンティーヌはこれから起こることを楽しむかのように、エンリとアルシエの間で興味深げな視線を往復させる。

何かに気付いたというよりは、無礼な少女がどういふ目に遭うかを楽しみたいような雰囲気だ。クレマンティーヌに席を外してもらって口止め、などという手段はとれそうにない。

「……思っていた、というのは、何か理由あつてのことですか」

ンフィーレアは思考を整理してからエンリの状態を一瞥し、どうにか言葉を絞り出す。まずは、相手の出方を知らなければどうにもならない。

エンリの対応は期待していない。死の宝珠に支配された状態で群衆の前に出た記憶について心の整理がつく前に、イビルアイのあの姿、さらにあの凱旋だ。ンフィーレアでも同じ立場に立たされれば、この危機に対応するほどの余力は残らないだろう。

ただ、憔悴しきった状態で顔をしかめるエンリは、一回りして死の宝珠に支配されていた頃と比べても違和感があまり無くなっている。見ようによっては、少し怖い雰囲気

だ。『フォーサイト』が居なければすぐにでも薬を追加したいところだが、今はこのままの方が都合が良い。

『フォーサイト』の四人は顔を見合わせると、戦士のヘツケランが口を開く。周囲の態度から、この男がリーダーのようだ。

「失礼とは思いますが、仕事に関わる事なんです。実のところ、これは依頼人の判断なんです。今となつては何かの間違いだと考えるしかありませんがね」

「遠い帝都でそう判断するというのは、それなりに理由があつてのことですか？ 知っているようならお聞かせいただきたいのですが」

「判断材料が入つてくるといふ時点でできない臭いよね。ただの妄想好きが会うだけで報酬つてもおかしい。何者なの？」

そんな判断をした依頼人については知つておかねばならない。ワーカーにいきなり依頼人のことを聞くのも気が引けたンファイレアは遠回りな質問に終始するが、クレマンティーンには遠慮が無い。

「……秘密は、守つていただけますか？」

「冒険者が依頼を受ける以上は、当たり前前のことです」

「当たり前前、です」

どうにかエンリが話についてきた。エ・ランテルから逃げたい気持ち支えになつて

いるのかもしれない。

「表向きの依頼人は下級貴族のエイゼル家つてことになっていてるんですがね、実際に会つてもらうのはバハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクス陛下つてことになります」

「はあ？ 鮮血帝が!？」

各国要人の名前を聞いてすぐに反応できるのはクレマンティーヌだけだ。帝国皇帝ジルクニフは帝国民からの評判は悪くなく、むしろ名君と呼ばれる部類の皇帝だが、権力掌握の過程で貴族等へ苛烈な粛清を行ったことから鮮血帝と呼ばれていた。

「俺らは詳しく聞いてるわけではないんですが、依頼人はカルネ村で起こったことをご存じの上で、あなたがたを密かに帝国で保護したいと考えているそうで」

「法国の敵を抱え込むならこっさりっていうのはわかるけど、鮮血帝つて大胆な人だね。とりあえず法国出身の私は顔を出さない方がいいのかな」

「いえ、クレマンティーヌさんですよ。あんたが来てくれないと俺らは報酬が出ないんですよ」

「……たが。」

「ははっ、鮮血帝の目は誤魔化せないつてことです。間違いもあるようですが、大体の力

関係程度は聞いてきているんですよ」

ハツケランは訝しげな視線を向けるクレマンティーヌに人懐っこい笑みを返した。

ここで、場面は十日以上遡る。

帝都アーウィンタールにカルネ村での事件の概要が伝えられるまで、リ・エステイーズ王国の王城ロ・レンテ内で王国戦士長ガゼフ・ストロノーフが『カルネ村の協力者』についての報告を行ってからそれほど時を要さなかった。

王国の内通者からの情報は、それだけではバハルス帝国の聡明な若き皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスにとつて充分なものではなかった。決定的なピースの欠けたパズルを前に、空中にメモをとるように考えを書き出していく皇帝のいつもの動作にも精彩を欠いていた。

「厄介ごとですぞ——」

部屋に入ってきた帝国主席宮廷魔術師フルーダ・パラダインも追加調査を行っていたが、充分な情報を得ることができなかった。そのことが、温厚な「じい」を珍しく興奮させていた。

それは、すなわち『カルネ村の協力者』が、フルーダと同等あるいはそれ以上の魔法を行使する者であるかもしれないということだ。もちろん、そうと決まったわけではなく——。

「ガゼフ・ストロノーフが嘘をついて何かを隠している、ということもありうるな。じいには残念かもしれないが」

ガゼフの報告は不自然なもので、ジルクニフにとっては何かを隠しているであろうことは想像に難くない。

ジルクニフが新たな可能性を示唆すると、フルーダの熱気あふれる喜びの表情に曇りが生じた。

「確かに、報告は具体性に欠けますな。魔法なのやら直接攻撃なのやら——全てが前者であればと望んではおりましたが、これでは……」

「それもまだわからん。それに、じいでも見つからないのなら本当に村や周辺には何も無いのだろう。突然強者が湧いて出るはずもないし、法国が見逃すとも思えん。エ・ラントルからの追加の情報を待つしかないだろう」

結局、エ・ランテルからの情報にも決め手となるものまでは無かったが、後に帝都に到着した一人の剣士がパズルの最後のピースとなって、ジルクニフは一つの結論に至る。

その剣士の名はブレイン・アングラウス。エ・ランテル方面からの情報を統合すれば、彼は『カルネ村の協力者』として名の出ていた冒険者エンリの一行に敗れたことになる。帝国最高の四騎士を凌ぐほどの使い手というだけでも有り難い人材だが、さらに重要な情報を持ってきてくれたとなれば、後の調査で後ろ暗い過去が垣間見えたところで問題にはならない。

傍に控える四騎士の一人バジウッド・ペシユメルが、ジルクニフに促されるまま直近の手合わせを振り返る。

「実際手合わせしてみたら、冷や汗が止まりません。あれは本物の殺しの剣です。一対一ならガゼフ並みかそれ以上か、違った怖さがあります」

そんなバジウッドの評価一つで、召し抱えることは確定だ。ジルクニフが力量だけで人を得るのは珍しいことではなく、四騎士の中には忠誠心を期待されていない者さえいるほどだ。

そして、ブレインの証言と付き合わせれば、エ・ランテル方面の情報もそれなりに意

味を持つものが出てくる。

「さて、じいには気の毒だが、法国の部隊長を倒したのは魔法ではなかったというのが結論だ。もちろん、ガゼフの報告通りに辺境の村に隠遁していた強力な魔法詠唱者が居たという可能性もゼロだとは言わないが、状況と新たな情報から見ての話だ」

「いえ陛下。もとより期待は薄いものと考えておりました。辺境の村にいきなり強力な魔法詠唱者が湧いて出るなど、魔法を知らぬ者の浅知恵ですぞ。特に高位階の魔法は、師も書も無い開拓村で学べるものではありません」

魔法というのは自然発生するものではなく、長い時間学んだ積み重ねとして身につけるものらしい。それを語らせると長くなるため、ジルクニフは早めにこれに同意しておく。

「じいの言う通りだな。そんなことを考えたのは魔法を知らない者——すなわち、実際に現地で法国の部隊と戦ったガゼフと協力者ということになるだろう。王国では魔法は軽視されているから、この計画にエ・ランテルの都市長などが囁んでいてもおかしくない」

「魔法がでつちあげだつて言うくらいなら、陛下はもうその目的までわかつてるつてこ

とですか」

バジウッドが少し身を乗り出して問うのは、『カルネ村の協力者』が戦士かもしれない

という話を既に聞いていたからだ。ブレイン・アングラウスという存在だけでも驚異的なのに他にも似たようなものが居るといふのだから、無関心ではいられない。

「ああ。ガゼフとともに法国の特殊部隊を撃破したのは、戦士だ。それも、存在を隠蔽しなければならぬほどの者であり、かつ、法国の罨を食い破れるほどの力を持つ者。さらに、法国の奸計を察知しその場に居合わせる必然性もある。ここで、すべてが繋がったのだよ」

フールーダは自身が創設した魔法学院の優秀な生徒を見る時のような優しい目でジルクニフを見る。この「厄介ごと」に関わった当初のようなギラギラした瞳の輝きは影を潜めているが、こうした場合でそんな魔法の深淵を求める時のフールーダなど見られる方が珍しい。その多くを知るジルクニフから見ても、今が本来のじいの姿だ。

ジルクニフは自らが空中に書き留めた考えをまとめて幻視するように宙へ斜めに視線を走らせると、小さな咳払いをしてから口を開く。

「エ・ランテルで冒険者になったという『カルネ村の協力者』、血塗れの魔女エンリとかいう女だそうだが、そんなものは最初から存在しないのだ。いたとしても、それは本当に偽装も同然の、取るに足らない存在でしかないだろう」

ジルクニフは自信を持って『血塗れの魔女』の虚構を看破する。

毎年続く王国との戦争においてエ・ランテル都市長の離間策なども検討にのぼったこ

ともあって、ジルクニフはエ・ランテルの都市長が自らの評判さえ偽装するようなやり手の人物であることまで知っている。もちろん、ガゼフ・ストロノーフと協力関係になりうる立ち位置であることも。

「エンリというのは、都市長パナソレイの手の者か、あるいはガゼフらに助けられた村人あたりであろう。これを冒険者組合が特別扱いしていたというのも、真実を隠すための偽装に過ぎない」

「そんな面倒なことをしてまで隠すつてのは——ブレインが戦ったつていう、あの？」

「そうだ。奴らが躍起になって隠しているのが、かのガゼフ・ストロノーフに匹敵する剣士ブレイン・アングラウスさえ敗れたという、クレマンティーヌという女戦士だ。この者は、最近漆黒聖典を裏切ってスレイン法国を去ったと聞いている」

ジルクニフが『漆黒聖典』の名を口にする、フルーダはその脅威について語る。それは、帝国最高の、いや人類最高の魔術師であるフルーダ・パラダインに帝国最高の四騎士を加えても決して勝利を約束できない、スレイン法国最強の特殊部隊だ。

「奴らはクレマンティーヌから法国の内情をつかんだことを隠すため、そして何より味方となったクレマンティーヌの存在を隠すため、その隠れ蓑として『血塗れの魔女』をでっちあげたのであろう」

果実水のグラスを手に取り、ジルクニフは心地よく喉を潤す。

「クレマンティーンは漆黒聖典を裏切つてエ・ランテルでエンリと同行している。実際に戦つたというブレイン・アングラウスから聞き取らせたと、エンリ一行は殆どクレマンティーンが一人で戦い、他はせいぜい高位階の回復魔法に支援魔法があつたかどうかだという」

帝国四騎士をも圧倒するブレイン・アングラウスが直接戦つたことによる分析ならば、信頼せざるをえない。

「陛下、支援魔法を甘く見てはいけませんぞ。帝国戦史においても、戦場にあつてより大きな成果をあげてきたのはむしろ攻撃魔法より支援魔法と言えるでしょうな。一流の魔法詠唱者というものは、攻撃魔法ばかりに頼らず臨機応変に戦況を見て——」

フルーダの講釈は、始まると長い。

「今問題にしているのは魔法詠唱者ではなく、クレマンティーンの方だ。じいの話は後で聞かせてもらうさ。——で、このクレマンティーンという女は、仲間に攻撃魔法などを使わせることなく、一人で現れたブレイン・アングラウスと堂々と一騎打ちを行い、さらに敗色濃厚だったブレインを生かしたまま逃がしている」

「ブレインから直接聞いた話では、どうにも少しイメージが違うんですがね。あと、正体を隠さず名乗ってますが」

「そのイメージというのも、演技だろう。王国関係者から演技するよう頼まれていても、

一騎打ちの相手には本当の名を名乗ってしまう。まさに私が考える通りの存在だ」

「はあ。そんなもんですか。——ところで、スレイン法国の漆黒聖典を裏切つてあの王国なんかに行く理由なんてあるんですかね」

バジウッドが疑問を口にする。帝国や法国の中枢にある者なら、リ・エステイーズ王国にろくな未来が無いであろうことは誰でもわかることだ。

しかし、話題をそらされた形のジルクニフは、我が意を得たりという風な笑みさえ浮かべる。

「その理由にも繋がる話だ。一言でいえば、クレマンティーヌという女は——正義を重んじる誇り高い戦士なのだろう」

「正義……ですか？」

「そうだ。義の人クレマンティーヌは、ガゼフ・ストロノーフを罠にかけるために国境の村々を襲撃するというスレイン法国の計画に憤慨し、ひとり漆黒聖典を裏切つて出奔した。そして、ガゼフ・ストロノーフとともに村人を救い、ともに法国の罠を食い破つたのだ」

「確かに話は……繋がりますか。完璧に」

「義の人クレマンティーヌを隠すため、同行するエンリの悪評を立たせる。戦いの勝利は魔法詠唱者によるものとする。出来る限りクレマンティーヌにもエンリの従者とし

て演技をさせる。奴らもここまですれば完璧に隠せているつもりなのだろうが——」

「所詮、魔法に疎い王国の者たちらしい浅知恵ということですね」

「なるほど……さすがは陛下です。陛下の洞察力を前にすれば、王国の半端な策士程度ではどうにもなりませんね」

ジルクニフは、そしてフルーダは確信を持って王国側の意図を読み切る。

バジウッドもようやく説明を理解し、納得の表情になる。

普段全くおべつかを使わないバジウッドだけに、その賛辞は本物だ。魔法に明るくないバジウッドから見れば、王国も十分に策を尽くしているように見える。

「いずれは誰もが読み取る事だろうが、この段階で気付くことができたのは僥倖だ。法
国の諜報網は大災害以来かなり弱つているとはいうが、出奔したクレマンティーンに
とつて脅威でないわけではなからう。クレマンティーンにはその危険を伝えつつ、我が
帝国ならば安全を提供することができると伝えれば良い」

ジルクニフはちらりとフルーダに視線を送る。帝国においては人類最高の
魔法詠唱者であるフルーダの存在こそが、他国からの魔法的手段での諜報活動を防ぐ
最大の抑止力となっている。その防御は相手が国力に勝るスレイン法国であつても万
全だ。

「召し抱えるつもりですか」

「当たり前だ。義の人といつても、ガゼフ・ストロノーフと違つて王国に忠誠心など無く義憤で動いただけであらうし、法国中枢にあつた者ならば王国より我らの方が善政を敷いていることも理解していよう。情が移る前にこちらへ来てもらおうではないか」

ブレイン・アングラウスに加えクレマンティーヌを得られれば、以前のようにガゼフ・ストロノーフ一人の猛攻で戦況を覆されることも無くなる。

これは王国との戦争においても、極めて重要な戦力となる。

「今年の宣戦布告は少し遅れているが、クレマンティーヌを帝都に迎えたらずぐに出せるよう準備せよ」

戦争は王国の国力を削ぐために行う毎年恒例のもので、今年は王国領で起こつた事件の趨勢を見極めるまで手控えていたに過ぎない。

それが王国の戦力を著しく増強するものでなく、ましてそれに関わる者を帝都に招くことができるのなら、手控える必要などなくなる。

ジルクニフは秘書官のロウネ・ヴァミリオンを呼び、ワーカーを使う前提で帝国情報局に指示を出して手筈を整える。

法国との関係もあるため、騎士を迎えにやるようなことは絶対にできない。誠意としてクレマンティーヌ本人には皇帝の名を出すにしても、送り出すのはワーカーで、依頼人は無関係の貴族という形を取ることになる。

この後、クレマンティーン、あるいはそれが同行する冒険者チーム『漆黑』を帝都へ招くという依頼を受けたのがワーカーチーム『フォーサイト』だ。

『フォーサイト』がエ・ランテルに乗り込んだのは、エンリたち『漆黑』がトブの大森林から戻らず、『蒼の薔薇』が『漆黑』についての調査を続けている間のことだ。さすがの鮮血帝も『蒼の薔薇』の行動までは読むことができず、戦力面で遥かに劣る『フォーサイト』では任務の秘密を守るため傍観せざるをえなかったという。

三八 義の人で行こう

クレマンティーヌは一時、息も絶え絶えの状態となっていた。

嘲りの笑いには慣れていても、本気の笑いとなると勝手が違う。買ってきたいかがわしいものをぶちまけられて慌てるイグヴァルジを見た時から、どうも抑えが利かなくなっていた。

本気の笑い声を初めて聞いたエンリヤンフィーレアはそれとなく一步步離れて距離が開く。変な笑いが出ていた自覚はあるが、少しだけ薄情に思う。無関心なだけだとわかつてはいても、引かないマーレや巫女姫の存在が少し嬉しい。

『フォーサイト』の四人は慎重にこれは自分たちの見解ではないという言葉を示し挟みながら、依頼者たる皇帝ジルクニフ側の考えと自分たちの仕事について余すところなく説明する。もちろんワーカーである彼らに対して根拠として細かな推理が示されたわけでもなく、単にカルネ村で何らかの事件があったことと、状況からそれができる人間など限られているという事実のみにまとめられた形だ。

すなわち、皇帝にとって必要なのは偽物のエンリではなくクレマンティーヌであり、マーレや他の二人については全く知らないということだ。

「そんなわけで、場合によっては脅しても連れてくるようにと言われていたんですよ」
「あんたら程度が脅し？ 鮮血帝の話と別の意味で笑えるんだけど」

目の端に笑い過ぎて出た涙の粒を残しながらも、クレマンティーヌの瞳には危険な輝きが宿る。

クレマンティーヌの瞳には危険な輝きがあるが、ヘッケランは意に介さない。

「何せクレマンティーヌさんは義の人ですからね。そんな前提なら、いくらでもやりようはあると思ってたようですよ」

剣呑な空気をヘッケランはあつさりを受け流す。

「法国に所在が漏れれば周囲にも迷惑がかかるといふこと」

「ちよつと、ヘッケランもアルシエもそうやってこつちの手の内を——」

「イミーナ、前提が間違っていて使えない手ですから仕方がないでしょう。この仕事はもう相手の意思で決まるだけのものです。こちらは頼むしかできません」

仲間たちにもその気は無いようだ。

そして、『フォーサイト』は工作資金として預けられていた少くない資金も含めて報酬を提示する。これは、招くことの対価に加え、ジルクニフが「偽物」だと看破したエーリのような周囲の者たちを買収するために用意されたものも含まれる。

「アダマンタイト級冒険者チームを雇うには若干物足りないかもしれませんが、帝国で

話を聞いてもらうだけのお仕事ですから、悪い話じゃないでしょう。……とりあえず、明日また来ますよ」

ヘツケランはその場での返答を求めず、『フォーサイト』のメンバーを連れて別の宿へ戻っていく。

エンリは『フォーサイト』の依頼について確答はしていないが、気持ちはほとんど決まっている。

改めて『漆黒』だけで宿の一室に集まると、エンリは部屋の端でうずくまるイビルアイの肌色を一瞥して軽い溜息をつく。

——やっぱり、何か着せておきたい。

イビルアイを人の敵である吸血鬼だからと割り切ったところで、目の前の光景が変わるわけではない。何度目か数えることも放棄したほどの投薬を受けて心を落ち着けたエンリは、ようやくそのことに気付く。

イビルアイを魔獣として扱う必要性はわかっているものの、エンリとしては、妹のネムと大差ない幼いイビルアイの肢体を晒しものにし続けることには抵抗が大きい。

そして、時折フラッシュバックする死の宝珠の頃の記憶。そのたびに逃げ出したくなく

る気持ちだがそれを後押しする。

「もし帝国へ行くとしたら、クレマンティーヌが正義感溢れる人物だと思われるんだから、イビルアイにも服を着せておいた方がいいんじゃないかな」

視線が合うと、イビルアイは鎖の擦れる音をさせて顔を背ける。今さら対応を少し改めたところでエンリたちへの感情が変わることは無いだろう。これは新たな街での世間体のための提案でしかない。

「いや、エンリ様それ冗談きついですって——」

「そうだね。確かに、帝国へ行くなら皇帝に恥をかかせるようなことは絶対に慎むべきだ」

笑いながら否定するクレマンティーヌを遮って、少し真剣な表情を見せるンフィーレア。

「ンフィーちゃん、どういうこと？」

「皇帝は鮮血帝と呼ばれるほどの人物なんだよね。皇帝の見立てと明らかに違う所を見せれば、臣下の前で恥をかかせたような恰好になる。吸血鬼を連れてくるような弱い立場では、立場のある人から睨まれるようなことは避けたい」

——恥？

きよとんとした顔でンフィーレアを見つめるエンリとは違って、クレマンティーヌは

何かを察したように表情が曇る。

「ええと、それは私がそういうふうには振る舞わなきゃいけない……ってこと？」

「そうなるね。帝国内では鮮血帝の見立て通り君は義の人クレマンティーヌで、エンリは仮初のリーダーということにするべきだろう」

「うわ、ちよつと勘弁してよそれ。『義の人くれまんでいーぬ』とか、正気なの？」

「正気かどうか聞きたかったら皇帝陛下に聞くといいよ。それに、クレマンティーヌが鮮血帝の評判を教えてくれたんじゃないか。その話から、自分の判断には自信を持っている人なのは間違いないよね」

ンフィーレアの言葉にクレマンティーヌはがっくりと肩を落とし、マーレとエンリ——今後の行動を左右する二人の方へ向き直る。

「だからって……はあ……面倒くさい皇帝に関わるより、王都でも行って『蒼の薔薇』のパトロン調べて脅したりした方が良くないですか？」

脅しという言葉にエンリがびくりと反応する。これ以上、王国で札付きの大悪人のように振る舞うわけにはいかない。

そもそも、『蒼の薔薇』の件は身を守っていたらこうなってしまった、戦わざるを得なかったという状況だ。恐ろしくもおぞましい『死の宝珠』の記憶がちらつくことで時々そこを見失いそうになるが、完全に見失ってしまえばマーレが去った時に全てが終わ

る。

「これ以上王国で貴族とやり合うのは村のこともあるし嫌かな。何か仕掛けてきても困るし、できれば帝国へ行きたい。……マールレはどうかかな」

「えっと、王国でここまで手がかりが無いので、国を潰したりして人間たちに警戒される前にいったん別の国もいいと思います」

王国とやりあうことが王国を潰すようなことにすり替わっている。マールレなりに王国での状況をわかってくれているようだが、冗談や軽口を言っているわけではないから困る。

「そ、そうだね。マールレを手伝うことを考えても、『フォーサイト』と一緒に帝国へ行くというのでいいかな」

「はあ。お二人がそう言うなら……」

クレマンティーヌは露骨に残念そうな顔だ。よほど『義の人クレマンティーヌ』が嫌なのか、演技を強いられることに不満があるのか――。

「あと、その皇帝って人には情報が集まるみたいなので、せっかくだからクレマンティーヌに話を聞いてきてもらいます」

マールレは人間の国を相手にこちらの情報を全て出すつもりはないようだが、マールレと同格の存在が沢山居るアインズ・ウール・ゴウンのような非常識な存在が国内や周辺に

現れれば異変を察知する可能性は高く、そういう所に期待しているようだ。

マーレが皇帝に関心を持ったことでその場の緊張感が高まるが、直接会う気が無いことでエンリとンファイレアは胸をなでおろす。

逆に、魔法で会話を聞くかもしれないと言われたクレマンティヌは、その考えを退けるため必死に帝国の魔法対策の優秀さについて説明する。そして、それを語れば語るほどマーレは帝国への興味を強めていく。

クレマンティヌは魔法詠唱者マジック・キャスターにあまり詳しくないということで、イビルアイの鬘くつわが外され、マーレは帝国最高の魔法詠唱者マジック・キャスターについて話を聞く。

人間なのに二百年生きているとか位階がイビルアイより上だとかそういう話を上の空へ放り出して、エンリは粘り気のある糸を引く小さな鬘くつわから目が離せなくなった。

「たとえ第六か第七位階程度の魔法詠唱者マジック・キャスターでも、弟子を沢山育成しているなら、情報収集を頼んだら上手くいきそうな気がします」

大した相手でないとしても安易に敵対すれば情報が得にくくなる。そんな理由でクレマンティヌがどうかマーレに会話の傍受を諦めさせた頃には、何か皇帝側から依頼があればそれを請け負ってでも帝国から情報や協力を引き出すという方針が決まっていた。帝国がクレマンティヌに会って求めることなら、戦いの力さえあれば可能なことだろうというンファイレアの助言もあった。

クレマンティーヌの表情は暗い。それは、『義の人クレマンティーヌ』を暫く続けなければならなくなったせいだろう。笑い飛ばしていた『義の人』が、今やマーレの命令の一部となった。

実のところ、エンリにとってはクレマンティーヌが『義の人』を演じなければいけないということも大きな魅力だ。これまで気を張って、強いふりをして、結果としてとてもない目で見られるようになってしまった。その大きな原因を占めるクレマンティーヌが『義の人』を演じることで大人しくなるかもしれない。これは本当に魅力的なことだ。ただ都市間を旅するだけでも、心安らぐ夢のような冒険の日々に感じられる。

もちろん、クレマンティーヌが同行する以前の旅がマトモだったわけではない。しかし、街道で現れる程度の魔物ならクレマンティーヌが居れば全く危険は無く、ワーカーチーム『フォーサイト』も居て、今となっては自力でもどうにかなるような気がする。ンフィーレアも少し安心したような表情だ。帝国行きは意外な理由で心安らかなものになるかもしれない。

そんな緩んだ空気は、クレマンティーヌが問いを発することですぐに霧散することになる。

「情報収集はわかりましたが、もし帝国が『漆黒』を消したがつているか、あるいは既に

アインズ・ウール・ゴウンを知った上に敵対しているなどして、攻撃を仕掛けられたりしたらどうします？」

「その場合は、相手を殺すなり逃げるなりしてください。時間が経って戻らなければ、大きな魔法を使つてからクレマンティーンを回収して蘇生してあげます」

全く安らかではない。バハルス帝国の、そして帝都中枢に詰める数千人の命運が『義の人クレマンティーン』の双肩にのしかかる。ついでに本人の命も。

「殺すとか、武器預けるから無理ですつて。だからそこには人類最高の化け物マジック・キャスター魔法詠唱者が——」

「それなら、助かることを考えて頑張るといいですよ。森で見せた地震の魔法にするので、うまく上の方にしがみつけば手足の一、二本で済みますから」

広大な範囲の森を一瞬で荒野に変えるような魔法を一度や二度見たからといって、何か対処ができるとも思えない。

クレマンティーンは青ざめた顔で、慎重に情報収集を行うことを約束した。マールも人間の国を滅ぼすことが目的では無いようで、敵対的であつてもこちらが敵だと気付かせない方が情報を得やすいという意見は受け入れる。

ともかく、帝国行きと『義の人クレマンティーン』は確定だ。

エンリは手の出しようがない明日の帝国の末路より、自力でどうにかできる今日の自分の世間体を考える。用済みとなったイビルアイは再び轡を嚙まされ、相変わらざる拘束具の他は素肌を晒しているが、服だけでも着せることができればだいぶ見栄えもマシになる。

さつそくエンリはミコヒメのために用意しておいた予備の外套を持ち出すが、この街で着せておくことにはクレマンティーヌだけでなくンファイレアまでもが反対し、エンリは大切な友人を白い眼で見失ってしまう。

その視線を受けると、ンファイレアが急におどおどとした雰囲気になる。まるでエンリが悪いことをしているかのように不本意だ。

「ぼ、僕も着せておきたいとは思うけど……そんな目で見ないでよ……。ただ、今はやめた方がいいって話なんだ。エ・ランテルにいる間に態度を変えたら、街の人たちは吸血鬼に甘いと考えて僕らを疑うかもしれない。ただでさえ……まあ、色々あったし」
ンファイレアは言葉を濁す。骨スケリトルドラゴンの竜の件かそれ以前の悪評かはわからないが、これは氣遣いなのだろう。

エンリが縮こまっていた凱旋の時、ンファイレアは周囲を観察していたらしい。

吸血鬼イビルアイに投げつける石を持ってきたような人々も、『漆黒』が厳しい態度をとっていたからこそそれを投げなかった。逆に言えば、ああいう恰好をさせていなければ

ば皆で石を投げつけていたわけで、街の人たちのイビルアイへの感情は最悪だということだ。

「もちろん、街を出たらそれを着せてもいいと思う。帝国領内で説明する時は、クレマンティーヌの温情だということにすればいい」

イビルアイの唾える小さな鬚くわが、がりりと削られる。温情などという言葉が受け入れがたいのだろう。率先してその尊厳を奪ったクレマンティーヌに対し向けられるのは、恨みの籠もった仄暗い視線だ。

エンリはンファイレアの案に納得し、外套をいったんしましう。クレマンティーヌの前で、そして街の中で情けをかけるのは不味いので羽織らせておくわけにもいかない。

街から出た後に備えて試着させることも考えたが、着せたままにしないのなら首輪や革手錠など全てを外して付け直すのは大変だから後回しだ。

そして、クレマンティーヌの渋い顔と深い溜息は気にしない。少しでも『義の人』に染まれば良いとエンリは考える。演じているうちにそちらへ引つ張られるということも、少しはあるような気がするのだ。

エ・ランテルを離れることが決まると、話題はバレアレ家やネムのことに移る。エ・ランテルに居なければ、万一の報復の際に対処が難しくなるからだ。

ンファイレアがリイジーを連れてきて話をすると、幸か不幸か、『蒼の薔薇』に知られていて差し迫った危険のあるバレアレ家の方はクレマンティーヌの鎧の盗難事件の際に夜逃げの準備ができていたという。エ・ランテルほどの大きな街で薬師の元締め的存在となっているリイジーが新たな街で一から出直しとなってしまうことを心配すれば、リイジーは第五位階のポーシオンを沢山用意すれば新たな街での立場などすぐに築けると笑い飛ばす。

移転後の店の再興資金については『蒼の薔薇』の装備品のうち不要なものを処分して充てることになる。善悪そして無関心と考え方がバラバラな『漆黒』一行だが、金銭に執着が少ないのは共通だ。特にエンリとしては、トラブルに巻き込んだ形のバレアレ家に負担を負わせたくはない。

他方、カルネ村の方はこちらから動くことでエンリとの繋がりを意識される方が不味いということ、ネムはバレアレの店が帝都でうまく根付いてからこっそり引き取ってくれるということ、話が決まる。

翌朝、宿の一階でとった朝食は、身体の中へ流し込むのに思いのほか手間がかかった。身体の不調は全て魔法で回復してもらったが、わけがわからなくなるほどお腹の中のも

のを吐き出し続けたことが気持ちの上で後を引いている。

ンフィーレアは先に食事を終えると、健康状態についてしつこく聞いてから一旦自宅へ戻ってしまった。引越しの準備はすぐ終わるが、鎮静薬の手持ちが無くなったので出発までに補充しなければならぬという。その薬はクレマンティーヌの常備薬で沢山用意していたようだが、最近そんなに飲むことがあったのか、エンリには覚えが無い。最近のクレマンティーヌはそれをがぶ飲みする機会も減り、色々と恨み言を言いたくないほどに調子が良さそうだ。

そんな時、約束のある『フォーサイト』より先に現れたのはイグヴァルジだ。

「在庫をもう一度探してもらったら、馬用でなく人間用でちょうど良いものがあつたそうです！」

そう言つて渡してきたのは、人間の小さめの口に合わせた轡くつわだという。

——大きな街だと、馬具じゃなくて人間用の轡くつわなんてあるんだ。

エンリは自分の常識が揺らぐのを感じる。

構造は馬用と違つてボールのようなものを口の中に噛ませるもので深く口を抑え込むことができるが、これまでの馬用のものと違つてどことなく嫌な感じもする。

「これならしつかりはまつて、魔法の詠唱なんかもできませんぜ！」

「う、うん、安全対策として悪くないのかな。……ええと、ありがとうございます」

動揺を悟られないように振る舞う。先輩冒険者であるイグヴァルジに実用性を言われれば、経験の浅いエンリは頷くしかない。

それを見てクレマンティーヌが轡くわを手に取り、付け替える。

「……うっわ」

「エ、エンリの姐さんが馬用じゃおかしいっていうんで、しつこく聞いて使えそうなのを探してもらいました」

自分から付け替えたくせに、クレマンティーヌが変な声をあげて一步引き、イグヴァルジが言わなくてもいいことを言う。

確かに、昨日エンリは「馬用ではおかしい」というようなことを言ったが、これは――

――落ち着かない。おかしい。心がざわめく。何かが違う。

噛まされている状態から、啞えさせられている状態になった。表面上はそれだけの違いとしか言いようが無い。

しかし、実物を見ると、それだけでは済まされない何かを感じる。少なくともエンリは落ち着きを無くす。

イビルアイの表情も、元々あった諦めの表情が怒りに変わっているように見える。何か感触に不快なところがあるのかもしれない。

強力な魔法詠唱者である吸血鬼イビルアイを捕らえておくには必須のものかもしれないが、エンリも見ているとはいけないものを見たような気分になってしまふ。こういうものを何とも思わないはずのクレマンティーヌが引いた態度になっている時点で、実際に色々と問題が大きいのだろう。

しかし、これが魔法詠唱者マジック・キャスターを捕らえておく時の常識だとしたら、それに疑問を持つのは弱者であることを晒すことにもなりかねない。

エンリは粟立つような強い違和感をいったん心の奥へ押し込もうとする。

クレマンティーヌの前では、エンリは強者でなければならぬ。冒険者の世界、弱肉強食の世界に慣れているふりをしなければならぬ。そこに普通の村娘の感覚を持ち込める余地などあるはずがない。

——『道具屋』とまで呼ばれてるイグヴァルジさんが選んだ品に間違いは無いだろうけど。

エンリはイグヴァルジの顔を立てることを、この場で自身の粟立つ感覚を抑える言い訳とする。

等級が逆転しても先輩は先輩であり、ミスリル級の『道具屋』のプライドは尊重しなければならぬ。少なくともエ・ランテルから出るまでは嫌な感じのする人間の轡を使うのも仕方がないことだろう。

——でも、あとで馬用に戻してもらおう。

獣として扱うということを徹底するなら、弱肉強食の世界に生きる冒険者として問題無いかもしれない。

——魔法複写も、馬用だし！

エンリは自身の感覚を優先する。人間用とか馬用とか、そんなことより大切なことがあるような気がするのだ。

「お、お愉しみのところ悪いんだけど、昨日の返事は——」

「はいっ!?!」

濡れて糸引く轡を手を取つて眺めていたエンリは、びくりと震えてそれを取り落とす。

振り向くと、入口近くには既に『フォーサイト』の面々が揃っていた。旅装を整えたこともあり、少しだけ雰囲気が変わっている。

声をかけてきたのは、ばつが悪そうな表情をしたリーダーの戦士風の男ヘツケラン。旅装の下に軽装鎧を着こんできたようだ。大きな変化は感じない。

その傍らに、顔をしかめて露骨に嫌悪の視線を向けてくる細身の女イミーナ。レンジャーの様々な装備品を身に付け髪を結ぶことで少しきつい雰囲気——。

普段の優しげな表情を崩さず窓の外を眺め遠い目をしている神官風の男口バーデーク。神官服の下の金属鎧が長身を巨軀に見せて屈強な印象に変わっている。

半ば青ざめて伏し目の奥に汚物を見るような視線を隠す魔法詠唱者の少女アルシエ。マントや粗野な革手袋が加わっただけで冒険者らしく見える。

「ちよ、っと、はい、帝都には行くことにしましたが、こちらが先客なので待っていてくださいね——」

この時、エンリは恐ろしいものを見つけた。それは、髪を結んだことでわかった、イミーナの人ならぬ耳。昨日は変装していたということなのだろう。

エンリは声にならない小さな悲鳴を口の中で押し殺す。その衝撃は、最悪な場面を見られたことより大きい。

——なんでこんな所に森妖精が！

かつてエルヤーが連れていた三人のような陰鬱な感じは無いが、性格のきつそうな雰囲気はやはり大きな不安を感じさせる。

エンリは妖精族を恐れている。闇妖精であるマーレの非常識も異様な力も、そして森妖精を三人も連れてエルヤーがエンリと同様に世間体を諦めているのも、全て妖精族の脅威に由来することだと考えているからだ。特にマーレが文字も読めないのに、すなわち魔法を学ぶこともできないのに強力な魔法を使うという事実は、エンリに広範囲の

恐怖心を植え付けるのに十分なものだった。生まれた時から魔法を使えるという非常識な話さえ聞いたが、嘘をついているようには見えなかった。

エンリは挫けそうになる心に鞭を打って、イグヴァルジへの用件を優先する。

イグヴァルジは、盗賊団退治のあと、『漆黒』が悪目立ちしないよう過剰な昇進を抑える方向で動いてくれた信用できる冒険者だ。最近はクレマンティーヌと親しくしているので真実までは明かせないが、決して話の通じない相手ではない。エンリは『義の人クレマンティーヌ』の件を利用して、もう少し見た目が無難な拘束具を用意できないか相談するつもりだ。

「イグヴァルジさん、ちょっと店の裏に来ていただけますか？ お話があります」

しかし、この試みは失敗する。そして、イグヴァルジが後をついてくる気配が無いとわかった時には手遅れだ。

後ろで、鈍い音が一つ――。

「申し訳ございませんでした！ 蒼の薔薇が怖くて、脅されて、当初奴らに協力していません！」

音は、床に額を打ち付けたものだ。

その場へ飛び込むように座り込み上半身を地に伏したイグヴァルジの姿勢は、尻が高々と上がって背筋のよく伸びた非の打ちどころのない完璧な土下座だ。

「——何でもします！ 命だけは！」

「あつ、ハイ……」

エンリは全身の力が抜けるのを感じ、手近な椅子へ座り込んだ。

エンリが放心している間、事情を聴くのはイグヴァルジと仲の良かったクレマンティーヌだ。良い関係にあったつもりが裏切られたのだから、心穏やかではないだろう。話が鎧の件に及ぶとクレマンティーヌがテーブルに大きな音を立ててコップを置き、イグヴァルジがびくりと震える。

「この街は不用心みたいだから離れるなら貴重品を持ち歩く手段が必要かもね、イグヴァルジ」

最後にクレマンティーヌが何やら話をして、元々自分たちで用意しようと思っていた荷馬車を、なぜか出発までにイグヴァルジが用意することになる。クレマンティーヌは御者もやらせるつもりだったようだが、『漆黒』を帝国へ送り届けるのは自分たちの仕事だとして『フォーサイト』の面々がその役割を買って出る。さすがに哀れに思ったようだ。

貴重品というのは、帝都に引越すバレアレ家の荷物だけでなく、クレマンティーヌが『蒼の薔薇』から奪った装備品やマジックアイテムが含まれる。これからそれらを自分たちで使うものと売るものに分けて、高価なものだけは高く売れる帝都に運び込むこ

とになる。

帝国では冒険者の質は王国と大差無いが、国が騎士の強化に取り組んでいて装備品やマジックアイテムだけでなくポーションなどの購入意欲も旺盛だという。そんなクレマンティーンの知る状況は『フォーサイト』に聞いても同じことで、バレアレ家にとつては明るい材料だ。

装備品の配分は、戦いに赴くわけではないので最低限にして、鎧など大物は後回しにした。マーレが最初に調べてくれた乙女しか着られない鎧、無垢ヴァージン・スノーなる白雪の扱いに困ったからだ。

エンリはもちろん現役の乙女だが、これを着てしまうと何かと侮られるのではないかという気持ちがあり、それがこれを着ようとしないうことへの自分の中の建前だ。この点、アダマンタイト級チームのリーダーが着ていたという事実は都合よく頭の中から抜け落ちている。

心の奥底には、一瞬着てみせるのは望むところでも、これを着続けることでマーレに距離を置かれるかもしれないという複雑な思いもある。さらに、防御力を乙女であることに依存するというのは、十六歳という結婚適齢期の冒険者として不味いことのような気がするのだ。

このような鎧を、結婚適齢期も終盤に入っているように見えるあのラキュースが着て

いたということにエンリは驚きを感じざるを得ない。女の幸せより戦いと謀略の世界を選んだラキユースはやはり覚悟から違う。一度退けたといえども決して侮ってはならない存在だ。

なお、クレマンティーヌは戦いの時にティナが捨てた鎧を確保していて、使おうか迷っているようだ。邪魔だと言って布を取り去ったら、腰回りがあまりに開放的すぎて困るという。元から色々と開放的すぎて胸元の主張が気になるので、戦士なら戦士らしくトゲだらけのごつい鎧でも着ていれば良いのにとエンリは思う。

武器に小物や靴、上着などは適当に分けて、クレマンティーヌの敏捷性や回避力が上がった、エンリの抵抗力が上がったり、ンファイレアが魔力で浮かぶ六本の剣に守られたり、ミコヒメの魔力が上がったりしている。

禍々しい黒い刃が目立つ強力な魔剣キリネイラムは、クレマンティーヌが使わないという以上は魔力を込めて爆発を起こす剣の力を考えてンファイレアに持たせたかったが、攻撃力を考慮してエンリに押し付けられた。さらに悪いことに、必要な時にンファイレアに渡して剣の力を使ってもらうことを言い続けたことで、今までの毒液の出る大剣グレートソードとあわせて二本も背中に背負っておく羽目になった。実力を誤解させているクレマンティーヌはともかく、ンファイレアまでそういう意見になることにエンリは納得がいかなかった。

エンリは後で押し付けられかねないトゲだらけのごつい鎧も含めて、全てにおいて最強のマーレに使用してもらうのが一番だという逃げ場を探ってみたが、この場にある最強の剣の威力はマーレの杖の打撃にも劣り、最強の鎧はマーレの服より遥かに脆いという。エンリはせめて今の快適で鎧らしくない黒衣を守ることに全力を傾けることに心に決める。

メインの武器としては使えるものが無いというクレマンティーヌは、吸血ヴァンパイア・ブレイドの刃を確保していた。物事を穏やかに済ませるのに良い武器だが、穏やかな用途など無さそうだ。

出発前、バレアレ家に立ち寄って準備を手伝うと、荷物は驚くほど少なかった。小さくても貴重な素材などは沢山あるようだが、生活雑貨は殆ど置いていくらしい。

家を出ようかという時、クレマンティーヌとミコヒメが部屋の同じあたりでふと足を止め、同じ木桶に手を触れる。何を通じ合っているのかわからないが、荷馬車の上の僅かな家財の領域に小さな木桶が加わった。あれは、マーレがイビルアイを捕らえた日、急いで宿へ身を隠そうという時にインフイーレアがわざわざ洗っていたものだ。何か価値があるものなのかもしれないが、エンリにはよくわからない。

結局、『フォーサイト』に対してエンリは何のフォローもできなかった。帝国へ向かうことを了承して出発の時間も決めたものの、世話になったバレアレ家の引越しも手伝

わずにはいられなかったからだ。ただでさえ雰囲気^クがイグヴァルジの土下座で悪化している上、イミーナの耳^ミがエンリが苦手な森妖精^{エルフ}のものとわかるとさらに近寄り難くなる。視線を合わせず全てを後回しにしているうちに、約束の時間にはさらに話をしづらくなっていた。

三九 イミーナの怒りとロクシーの心配

『漆黑』と『フォーサイト』はエ・ランテルを出発して、バハルス帝国の帝都アーウィンタールへと向かう。

宿屋での諸々で心の距離が開いた『フォーサイト』とは、早めに『義の人クレマンティーン』について話をしておかなければならない。彼らは現実を十分に理解しているようだが、帝都においては鮮血帝という絶対者のプライドはあらゆる現実に優先する。ンフィーレアは幾らか戦力になれそうな武器を手に入れはしたが、『漆黑』においての自身の役割はこういうことだと考えている。

ンフィーレアは、ただのクレマンティーンではなく『義の人クレマンティーン』を連れていくことに理解を求めらる。

「そんなわけで、まだ若い鮮血帝は威厳を保つことを替えの利くワーカーや冒険者よりは大切に考えていると思います。恥をかかせることになればお互い不味いことになるでしょうから、うまく対応しましょう」

最も不味いことになりそうなクレマンティーンは、昨日の凱旋の時の笑顔からは見る影も無いような、げんなりとした表情だ。

「それは……騙しとおせますかね？」

「本人は、不満そう」

「皇帝陛下ともなれば、信用というものを大切にしてくれればいいのですが……」

ヘッケラン、アルシエ、そして御者台からロバーデイクが応える。そっぽを向いて話題に加わらないイミーナは、耳をジロジロ見るエンリの視線のせいかわかっているようだ。エンリはマレーの話をする時、時々それが妖精族全体の問題のように話をしていくようなところがあつたが、この態度では何か偏見があるのかもしれない。後で話をしておくべきだろう。

このことを彼らがそこまで深刻に考えていないのは、帝国では支配者側からもたらされる不条理が少ないからかもしれない。それは確かに鮮血帝の善政によるものかもしれないが、クレマンティーンの情報ではその鮮血帝自身は結構強引な手段で貴族を取り潰したりしているらしい。ここは慎重を期すべきところだ。

「依頼人は別の貴族ということになっていましたよね。それは、王国や法国の横槍を含め、何かあつた時に切り捨てるためだと思います」

「確かにそこだけはちよつと引つかかつたが、元々俺たちは誰かに仕事の内容を保障してもらえない身分じゃないんでね。……とにかく、話はわかりました」

ヘッケランがワーカーの立場を語りつつ、幾分白々しい笑顔を作つて同意する。今回

の仕事はそもそも『漆黑』の同意が無ければ進まない話で、それが互いのためになるのなら受け入れない理由はない。演技が失敗したとしても、その頃には『フォーサイト』は報酬を手にして次の仕事へ向かっているだろう。

それでも、『義の人』一行へ向けられる視線は微妙なものになる。土下座した冒険者が用意してくれた馬車の中では仕方のないことだ。

街が見えなくなった辺りでンフィーレアは御者台へ近づき、ロバーデイクに交代を申し出る。遠慮されながらも今は互いに旅の仲間だということを押し切り、そんな会話のおかげで少しだけ空気が和やかになる。

国境付近ともなると街道は次第に状態が悪くなり、御者台の上では木製の車輪からの振動と騒音がなかなか大きくなる。今の白々しい雰囲気では会話など殆ど無いが、声も聞こえないほどで思ったより不快だ。良好な関係を保つため、この役目は『漆黑』の側も交代で受け持つべきだろう。

半日ほど進んでから街道脇の小さな森をその場所を選び、ようやくイビルアイにも服を着せることになる。着せるのは簡単だが、拘束具の付け直しがあるので面倒だ。そして拘束具を全て外し、ミコヒメの予備として用意してあった外套を着せたところでその短さに気付くが、もはや後の祭り。このまま旅を続けるしかない。

とはいえ、街道を歩いてみればそれほど気になるものでもない。本来この外套が想定するミコヒメとの体格差から生まれたひぎ上二五センチの状態は外套としては短すぎるが、クレマンティーヌの恰好と並べればそれほど違和感のあるものでもない。普通に歩いている分には余計な所も見えないので良しとしておく。

同行する『フォーサイト』の中で、エンリが注目していたのが人ならぬ耳を持つイミーナだ。前日は変装のせいか髪に覆われて分かり辛かったが、今日は髪を結んでいるために危険な種族の証である尖った耳がはつきりと見えている。

そして、話題が途切れたところで恐る恐る見ていたエンリの視線に気づいたのか、苛立った雰囲気で近づいてくる。

「あのさ、何か言いたいことがあるんだったら言ってほしいんだけど」

「おい、イミーナ——」

「あ、耳……いえ、大丈夫です。なんていうか、そういうの大丈夫な人もいますよね」

正面から苛立ちをぶつけられたエンリはイミーナから完全に目をそらし、ヘツケランに乾いた笑みを向ける。

エルヤーの連れていた三人のような陰鬱な雰囲気とは違って、尖った耳もいくらか小

さく見えるが、無闇に攻撃的な態度はやはり危険な種族であることを思い起こさせる。

剣呑な雰囲気か漂ったところで、ヘツケランが間に入ってくれる。この戦士はチームのリーダーでありながら、危険な森妖精エルフの責任も負っているようだ。同じように、三人も連れていたエルヤーも立派な体躯の剣士だった。やはり問題を起こしやすい妖精族の相手は体力のある人間がするべきなのだと思える。エンリは思う。

「大丈夫というのは、どういう意味ですかね」

「はい、森妖精エルフを連れていても世間体さえ気にしなければ大丈夫って聞いてますから」

小声で問うヘツケランに対し、エンリは堂々と答える。元々、同じ帝都のワーカーから聞いたことだ。

それに対し、何故かヘツケランの表情は硬くなる。

「彼女は半森妖精ハイフエルフですが、大切な仲間です。……世間体がどうこうと言われるようなことがあるんですかね」

「あ、いえ、問題が無いならいいことだと思います。前に森妖精エルフを三人も連れてくる方と会ったのですが、あれは大変そうでしたから」

——本当は絡んできている時点でかなり問題だと思っただけ。なんか怖いし。

しかし、エンリ自身もマールレが問題を起こさないよう完璧に対応できているわけではない。エンリは、格の違うエルヤーを基準に考えてはいけないと思っただけ。

「三人連れてるって、それワーカーの男じゃないでしょうね！」

「おい、イミーナ——」

ヘツケランを押しつけて睨みつけてくるイミーナの強い口調に、エンリは眉をひそめる。考えてみれば同じ帝都のワーカー同士、それもエルヤーほどの大人物となれば知られていない方がおかしいのかもしれない。

「知っていましたか。帝都でワーカーをしているエルヤーさんという方で、旅立つてすぐの頃にいろいろ教えてくれたんです」

「あなた、あんな最低男——あれ見て何か思わなかったの？」

「最低なんて何を言ってるんですか。紳士的ですごく立派な方でしたよ」

エルヤーは自分の世間体さえ諦めて、危険な妖精族を三人も引き受けて頑張っている。そこには敬意を感じざるを得ない。さすがにマールは規格外に思えるのでエンリの三倍とはいかないだろうが、あの三人の森妖精がエンリへ向けたおぞましい嫌悪の視線はいまだに忘れられないほどのもので、それを引き受け続けることの艱難かんなんしんく辛苦は想像するに余りある。

「三人の森妖精を見た上で、あのクズが立派とか、本気でそんなこと言ってるの？」

「ええ。エルヤーさんは体力だけだと謙遜していましたが、世間体を諦めてまで三人も連れてるのは凄いです。度量があるというか、人間として大きいと思います」

「なあつ……つく……」

言葉が継げず目を白黒させて小さく震えるイミーナの肩を引いて、ヘッケランが顔を近づけてくる。何故か不穏な雰囲気だ。

「この話は、そろそろ止めにしませんか？」

「そうですね。普通は一人でもエルヤーさんのように上手くやつていくのは難しいですよね」

そう言つて、ヘッケランと情緒不安定な半森妖精ハーフエルフを交互に見比べる。

上を見てはきりが無い。マールに苦勞するエンリは、イミーナに苦勞しているであろうヘッケランとは同じレベルで苦勞を語り合えるだろうと思つていた。

少し疲れたような微笑みを浮かべるエンリに向けて、雰囲気割に太いヘッケランの腕が伸びる。

「おい、ふざけるなよ——」

ヘッケランがエンリの法服の襟元を掴む。その目に宿る強い怒りの感情、その唐突さにエンリは面食らう。

森妖精エルフの血が流れるイミーナが無闇に険悪な雰囲気を作るのは仕方のないことで、それをきつかけにしてヘッケランと分かり合えれば良いと考へていたが、結果は正反対だ。

「何？ 喧嘩だったら私がやりたいな」

クレマンティーヌの細い指がその腕を撫でるとヘッケランはびくりと震えて手を放し、その不穩に過ぎる雰囲気にあてられたのか剣の柄に手をかける。エンリの襟元を掴んだ瞬間は獐猛な肉食獣のようにも見えたヘッケランだが、今は狩人に追い詰められた小動物のように小さく見える。

いつの間にか、小動物は四体だ。イミーナはもちろん、アルシエもロバーディクも身構えている。しかし、彼らは武器に手をかけてさえいないクレマンティーヌと対峙しているだけで小さく震え、後ずさり、あるいは玉のような汗が浮く。戦いに不慣れたエンリの目から見ても、狩る側と狩られる側の違いは明らかだ。

「んふふ、いいよ、ほら抜きなよ。……エンリ様、こいつら全部もらっていいですか？」
「——クレマンティーヌ、彼らは仕事の依頼人で、あなたには『義の人』でいてもらうのがマールと私との約束よね」

エンリはクレマンティーヌを咎めるが、おかげで冷静になることができた。

『フォーサイト』にとって、エルヤーの『天武』は同じ都市を本拠とするワーカーとして商売敵なのかもしれない。感情的なもつれもあるのだろうし、今後は話題にしない方がよいのだろう。それが不条理な感情でも、依頼人が不機嫌になる話題は避けるべきだ。

「……はーあ。でも私は王都で喧嘩する方がいいんで、気が変わったらいつでも言つて下さいねー。ふふ、必要ならこいつらも掃除しますから」

「マールも私も帝国へ行くつもりなんだけど、クレマンティーヌは私たちの邪魔をしたいの？」

「いえ、そうい——ヒッ、申し訳ございませんっ」

その時、マールがクレマンティーヌの方をじつと見ていた。その感情の抜け落ちた瞳には、覗き込むと不安に包まれる闇のようなものが漂う。

クレマンティーヌはその場に跪き、がちやりと鎖の音をさせてイビルアイも顔を背ける。かつてマールに敗れた二人には、何か違ったものが見えているのだろう。

エンリがその場を取り繕おうとヘツケランに向けて口を開きかけたところで、御者台にいたはずのンファイレアが間に入ってくる。

「あの、仲間が失礼しました！ 私たちは出身地もさまざまなので色々と常識が違うかもしれません、今回は実質的に皇帝陛下依頼の話ですから、互いの安全のためにもどうにか最後までお付き合いいただけられないでしょうか。——エンリは荷馬車をお願い」

ンファイレアがエンリをその場からどかすように強引に肩を押ししてくる。それはンファイレアにしては珍しく乱暴に力を入れてるように見えながらも、この場に留まろうと思えばびくりとも動かなくて済む程度の優しさのある押し方だ。

当初、ンファイレーアはこんなに力が弱かったのかと驚いたが、これは演技に違いない。男のンファイレーアがエンリの腕力に遠く及ばないなどありえないことだ。エンリは演技の意図を察して、少し遅れてわざと押された方へ動いてみせる。一瞬ンファイレーアが驚いた顔を見せたのは、すぐに意図を汲むことができなかつたからに違いない。

この演技は『フォーサイト』への配慮なのだろう。エンリはその場をンファイレーアに任せ、跪くクレマンティヌを起こしてから御者台に登る。鎖が引つかかつてイビルアイの首が締めりかけたので、荷馬車の馬具の低い所へ繋いでおく。

「ふん、法国出身ならそうやって人間以外をいびつてれば義の人で通用するんじゃない？」

イミーナのそんな言葉を残して、全ての会話は荒れた街道と軋んだ車輪が生み出す騒音にかき消されていく。

ンファイレーアと『フォーサイト』の四人の会話は続くが、不穏な空気はすぐに霧散する。

——霧囲気が和らいでいく……ンファイって凄いい。

エンリはもう人前に入るのを止めて、全てをンファイレーアに任せてしまいたくなつた。

感じの悪かつたハーフェルフのイミーナまで上手く扱っていると見ると、ン

ファイレアにもエルヤーのような才能があるのかもしれない。少なくとも、一緒に旅をしながらハーフエルフを抑えられないどころか一緒になつて喧嘩腰になつてしまふハツケランよりは、ずっと度量が大きくて立派なのは間違いないだろう。

その後、野営の際にエンリは自分が法国出身者の移民だということを知られた。身に覚えは全く無いが、ンファイレアの判断なら従うしかない。

法国の田舎で育つて王国の開拓村に移つたエンリ・エモットは、森妖精^{エルフ}などについてよく知らず、強い偏見を持つていたということになつたらしい。

正直なところエンリは怖くて知りたくもないのだが、その場で少し森妖精^{エルフ}について考えを聞かれて話をしたところ、ンファイレアの側もその場で顔を押しさえ、教えることを放棄した。やはり、口にするのも恐ろしい何かの色々とあるのだろう。エンリもマールからその生態の一端を聞いた時は逃げ出したくなつたほどだ。

結局、ずっと警戒はしていてもいいから、目の前の森妖精^{エルフ}やハーフエルフはとりあえず人間と同じように考えてそう扱うこと。それだけは守つた方が良くというのがンファイレアの考えだ。あのイミーナともある程度打ち解けることができたンファイレアだけに、もしかしたらエルヤーのように苦勞をした経験があるのかもしれない。

実際、ンファイレアは魔法も使えるし、薬師の使う薬草もよく危険な所に生えている。エンリの知らない所で冒険のようなことをしていたかもしれないし、そういう時に森妖精などを連れていてもおかしくはない。

——森妖精か……怖いだけじゃなくて、やつぱり苦手だ。

人間に馴染まない危険な存在がンファイレアにだけ打ち解けている姿を想像すると、エンリはさらに少しだけ森妖精が嫌いになった。

なお、『フォーサイト』がこの仕事を投げ出さなかった理由としては、ンファイレアの説得もあるが、皇帝の依頼という事が大きいらしい。『フォーサイト』が去った後で『漆黑』が単独で帝都に到着してクレマンティーヌが皇帝の下へ向かえば、仕事を投げ出した『フォーサイト』の評価は地に落ちることになるばかりか、皇帝を虚仮こけにしたようにも見られるかもしれない。

結局、彼らの側も関係の修復を望んでいたということだ。

——それなら、突然怒り出したりしなければいいのに。

同じワーカーなのに随分な差——そんなことを考えたエンリは、『フォーサイト』がエルヤーの『天武』とライバル関係にあるという可能性にたどり着く。エンリが想像したのは、正しくは対等なライバル関係ではなく、ヘツケランの側がエルヤーを一方的にラ

イバル視しているような関係だ。

——あんな人がかなうわけないし。……可哀想なことしちやつたかな。

エンリは少しだけ反省した。そういう前提で思い返せば、『フォーサイト』の面々はエルヤーの名を出した時に良い顔をしていなかった。同じ帝都のワーカー同士でも、複雑な感情があるのかもしれない。

「——これは陛下、部屋をお間違えではありませんか？」

「私はお前の態度の方に間違いがあるような気がするのだがな」

ジルクニフは不機嫌さを隠そうともせず、この部屋の主——ロクシーの方を見る。後宮の一室にそぐわない言葉を発したのは、その雰囲気からは後宮という場にそぐわないようにも見える飾り気の無い女だ。

「それでは、正しい態度のできる見目麗しい娘たちを二人でも三人でも妊娠させてあげてください。帝国の現在は昼の陛下にかかっていますが、未来は夜の陛下にかかっています」

るのですよ」

「二日の半分をそればかりに費やすというわけにもいくまい」

ロクシーは自身の栄達を望まず、ジルクニフの寵姫として後継を産むのではなく母替わりとして育てることを望むという稀有な存在だ。

ジルクニフは後宮の中では知恵に優れている彼女との会話を好みもするが、何より彼女が育てることを望むという部分を高く評価している。後継者を権力闘争の道具とせず、肅々と教育できる人材は後宮では希少だ。その結果として、後宮にあるまじき会話を許すことにもなっている。

「国が落ち着き多忙でないうちに沢山作っていただかないといけません。……それで、お間違えでなければどういった御用ですか？ 無駄うちしたくて来たとも思えません
が」

「うむ……実はな、前に話をした、あの黄金の姫と正反対のような女のことだが、あれが順調に帝都へ向かってきているのだ」

黄金の姫とは、類稀なる美貌と深い叡智で知られるリ・エステイーゼ王国第三王女ラナー・ティエル・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフのことをいう。そしてそれと正反対というのは——前にロクシーに話した時は「戦力になるならばまずは召し抱えれば」と軽く返された、義の人クレマンティーヌのことである。

それをわざわざここで話題にするのは、ロクシーが常々、黄金の姫との縁談を勧めてくることへの反発のせいかもしれない。少なくともジルクニフはそう考えている。

「ブレインとかいう剣士もそうですが、戦力が増えるのならありがたいことですね」

「そ、そうだな。それで、クレマンティーヌの謁見では、お前も傍らに居てほしいのだが」
「私などでは華がありませんが、陛下がお命じになればいつでもお供致します。相手がお話のような女戦士ならば地味な私が控える方が質実剛健な皇帝として忠義を得られやすいかもしれませんね」

そこには嫌味のようなニュアンスは無い。ロクシーは自身に寵姫としての価値を認めない。

「飾りではなく、私とともにクレマンティーヌを見定めて欲しいのだ」

ロクシーは小さく溜息をつく。

「……よほど気になっていいるのですね。あまり幻想を膨らませすぎると、また幻滅した時に立ち直るのが大変ですよ」

「じ、人物が気になるのだ。お前の言う通り、戦力として召し抱えるところからと考えている」

「から、ですか。それでよろしいとは思いますが。ただどうにも、黄金の姫が奴隷解放を打ち出してから陛下が彼女の本性に気付くまでの、あの時の落差を思い出すと心配になり

ます」

「昔のことを掘り起こすな。臣下に失望するのも女に失望するのも、そう珍しいことではない。たいしたことでもない」

ジルクニフは、当初より黄金の姫ラナーをひと時たりとも気にしたことが無いかわれれば嘘になる。自身や実家の栄達のために媚びるばかりの後宮の女たちに囲まれていれば、少し違ったものに興味を持つのは自然なことだ。

そして、才能は才能を求め。ラナーについて、理想のために邁進する年若く美しい賢人——そんな幻想が全く無かったわけではない。

しかし、今やラナーはジルクニフの嫌いな女一位に君臨する存在となっている。無関心ではなく、はつきりと嫌いなのだ。

当初ラナーに関心を持って色々調べさせてみれば、彼女が理想を掲げるのは大抵のことが実現しないとわかった上でのこと。そうでありながら、予め人間を数字として考へ割に合うものだけを選んでいる。そこにあるのは清廉さではなく白々しさと不気味さだ。ラナーの提案する施策を帝国が採用していることさえ、予め計算されているように思えてしまうような所もある。ジルクニフは賢い女も好むが、何を考えているかわからずそして手段を選ばないであろう王女ラナーとは関わり合いになりたくはない。

「そうでしょうか。平気なふうに装っていても、他の娘たちの所へ行く回数でわかるの

ですよ。跡継ぎが充実しなければそれは帝国の損失です」

「いや、だからな、今はそういう対象と考えるわけではないぞ」

ジルクニフは話を戻す。本来ならラナーのことなど思い出したくもないのだ。

「今は、ですね。もう陛下も慣れたでしょうから、次はもう少し早く立ち直ることを期待しておきます」

「立ち直るって、お前はクレマンティーンについて何かわかつているのか?」

「いいえ、全く。強いて言えば、女の勘です。陛下の女運しか存じておりませんので」

人類の生存領域で最も充実した後宮を持つバハルス帝国皇帝に吐くべき言葉とも思えないが、一度似たような事を言われた際にジルクニフが軽く咎めたら「私などの所へ幾度も現れる程度の女運と存じておりますが」などと切り返されたことがある。それ以来、言われるがままにしている部分だ。

「では、お前の知るものたちと比べてどうであるか見定めてもらおうとしよう」

「かしこまりました。良い『臣下』が得られると良いですね。……それで、ご用件はそれだけですか?」

ジルクニフが頷くと、ロクシーは満面の笑顔で皇帝を部屋から追い払う。

「それでは、とつと跡継ぎを増やしてきてください。お相手はくれぐれも、まだ妊娠していない娘にしてくださいね」

そこは国境を帝国側へまたいで最初の街。『フォーサイト』は夜半まで宿の一室に集まって、翌日以降の行動を検討していた。

「俺も、アルシエの言っていたことがわかるような気がするんだ」

「……あのエンリが別人だということ？」

「ああ。詰め寄ったが全く怖さを感じなかった。戦士としてもそこまで実力があるとは思えない。直後のあのクレマンティーンとは全然違う」

「あれは四人でかかっても無理ですね。それに比べて、エンリさんの方はちよつとわかりません。墓場での戦いを見る限りでは死霊系魔法に秀でているようですが」

「この目で見えないのだからそれも納得いかない。気がかりなので帝都に着く前に話を聞いておきたい。それとあのマーレという闇妖精ダークエルフもわからない。信仰系だけど、それだけでもないような……」

アルシエは魔力系魔法詠唱者の位階を見抜ける生まれながらの異能を持っている。

エンリが骨スケレットドラゴンの竜を操って回復までしたような死霊系魔法はその多くが魔力系で、アルシエにとっては実力が見えるはずのものであるらしい。それが全く見えないというのだから、不安になるのも仕方がないのだろう。

依頼に直接関係のある部分ではないが、仕事とはいえ得体の知れない相手を皇帝の下へ連れていくことに不安があるのは皆同じだ。少しでも相手のことをわかつておきたい。

「エンリは嫌。これ以上話したら憤死しそうだから私のいない所でやってよ。クレマンティーン又と話をする方がずっとマシ」

「そうだな、俺もそっちに回ろう。連れて行って不味いようなら考えなきやいけないしな。エンリの方はアルシエとロバーでそれとなく聞いてもらえばいいと思う。仕事自体はクレマンティーンだけ居ればいいので、無理はしなくていい。マーレってのもどうも不気味な感じがする」

「エンリさんとクレマンティーンさんがおかしなことをしなければ、今回の仕事は問題ない気がします。それでも藪をつついて蛇を出さないよう、詮索は最小限にした方がいいでしょう。彼女らは私たちよりよほど、何とというか、ワーカーク的です」

「そうだな。それと、ンファイレアってのも居るが」

「旅の間、当り障りのない会話をしたければお勧めよね」

「情報は、まず出ない」

「いい人だとは思いますがよ」

「そこは皆、同じ意見か。それじゃ、それを踏まえて明日は——」

普通に考えれば、危ないと思えば報酬を受け取ってすぐに帝都から離れて身を隠せば良い。しかし、『フォーサイト』のアルシエには帝都に守るべき妹たちが居て、他の三人もそのことを知っている。事前の面接など仕事には含まれないが、連れていって何かあつてからでは遅いのだ。

「昨日は何ていうか、すみませんね」

ヘツケランはンフィーレアに御者を頼んだ後、先頭に行くクレマンティーヌに声をかけ、イミーナとともにその左右へ回る。エンリやマーレといった他のメンバーを間に挟んでいるため、もめた際のンフィーレアの仲裁は遅れるが、その分邪魔もされにくい位置関係だ。

「私はどつちでもいいよ。喧嘩売るなら殺すか痛めつけるかだけど、そうでないなら別にどうでも。『義の人』とか面倒だし、戦いたいっていうなら歓迎だけどね」

「エンリはともかく、あなたと喧嘩する理由は無いわ。でも、あなたほどの人がどうして

エンリなんかに従ってるの?」

「んー、知りたい?」

「俺もそこは疑問かな。蒼の薔薇との戦いも見せてもらいましたが、どう見てもあんたの方が強そうだ」

「そーね。言いたいことはわかる。私もそう思つて殺しに行つて、あいつらに負けただら——」

クレマンティーヌは、かつてエンリと敵対したことを明かす。

スケルトルドラゴン
「骨の竜にやられたの?」

「あれも二体も居たら勝てないけど、その時はあんなの出してこなかったよ。マーレ様にあつさり捕まつて、つるんでた奴は殺された。私は利用価値もあったからエンリ様の指示で拷問されて、今は二人の奴隷みたいなものかな」

「奴隷……つて、あなたが?」

「じゃなかったら『義の人』なんて鬱陶しい役割、受け入れるわけないつて。まー拾つた命を散らしたくなければ、あの二人の機嫌を損ねないことだね」

「エンリさんだけでなく、マーレさんですか……」

ヘツケランはイミーナとともに恐る恐る闇妖精ダークエルフの方を見るが、そこにいるのは可憐な少女でしかない。目が合うと、少しおどおどとした様子で愛想笑いを浮かべ、すぐに目

を逸らす。その向こうでは、アルシエとロバーデイクがエンリに話しかけるところだ。

——魔法を見たロバーが森司祭ドリュイドだと言っていたし、クレマンティーヌが恐れるほどの強力な信仰系魔法詠唱者マジック・キャスターか。見た目に惑わされず、万一の時は真つ先に……。

ヘツケランは蒼の薔薇を捕らえた魔法について聞いたことを思い出して警戒するが、実際にぶつかることを考えればクレマンティーヌ一人が相手でも壊滅する以外の未来が見えず、すぐに不穏な考えを収める。

「それにしても、ほんと面倒臭い。鮮血帝つてやつは何考えてんのかなー。帝国とかお先真つ暗なんじゃないの？」

「……それは同感ね。本拠地にしといて何だけど、帝国はあの皇帝の代で滅ぶんじやないかしら」

「国が乱れれば俺たちの仕事は増える。悪いことばかりじゃないさ」

クレマンティーヌには大いに不満があるようだが、これはしつかりと躰けられたい首輪を付けられた猛獣のようなもので、ヘツケランは今回の依頼では問題は起こりそうにないと判断する。

これを力と拷問で押さえつけているというエンリとマーレは底が知れないが、エンリの方を見ればアルシエとロバーデイクと話しながらも不穏な雰囲気は全く無い。前日のイミーナへの悪意溢れる言葉が嘘のように平穏だ。

——エルヤーの野郎みたいなものか。

薄汚い欲望を持つ者でも、外面はそれなりに繕うものだ。エンリについてもエ・ランテルでは様々な噂があり、クレマンティーヌや吸血鬼の境遇を見ればその大半は真実のように見える。ンフィーレアは法国の田舎の出ゆえの偏見と言うが、素行を見ればそれだけではないのは明らかだ。

せめてもの救いは、イミーナとクレマンティーヌが皇帝の悪口から少し打ち解けたことか。エンリとイミーナを離しておくのはそれほど難しいことではなくなりそうだ。

イミーナはクレマンティーヌと話をしながら、ちらちらと闇妖精ダイクエルフの少女マーレの方を気にしていた。こちらがうまくいっているのでエンリたちの相手をするアルシエやロバーデイクが気になるが、エンリだけは視界に入れたくもないということなのだろう。ヘッケランが様子を見ると、そちらでは会話に荷馬車の上からンフィーレアが割って入り、御者をエンリに代わるところだった。さすがに帝国領内に入れば街道もよく整備されており、馬車の上からでも会話は聞こえるのだろう。

次の宿では、互いに結果報告といったところだ。主にイミーナが奴隷同然の身だというクレマンティーヌの状況を話すと、アルシエとロバーデイクは戦慄する。クレマンティーヌが介入せずとも、ヘッケランがエンリの胸倉を掴んだ時点で『フォーサイト』は

終わっていたかもしれないのだ。

少し遅れてエンリとマーレに接触したアルシエとロバーデイクの方は、収穫無し。あちらとしてはクレマンティーヌを使つて情報収集をするために今回の話に乗ったので、自分たちの実力については語る必要は無いということだ。あまり自分たちのことは話したくないらしい。

「魔法について踏み込んだ質問をしたところで、あのンファイレアに遮られた。彼の方はそれほど使い手ではない」

「闇妖精ダークエルフの少女には少し危険なものを感じました。聖印はありませんし、そもそも四大神を信仰する者とも思えません」

ロバーデイクが感覚的な理由で他人を悪く言うのはとても珍しいことだ。

「そういえば伏し目がちで最初は気付かなかったけど、両の目の色が違つてた。あれは森妖精エルフでは王族の特徴と言われているものよ。あの子は闇妖精ダークエルフだから何とも言えないけど、森妖精エルフの国は法国と戦争しているし、その法国を裏切つた実力者クレマンティーヌと一緒にいるのは何かあるのかもしれないわ」

「それが帝都で皇帝と接触するわけか。もしかしたら、何かわかつていて呼び寄せているのかもしれないな。……正直なところ、俺たちには手に負えない話だ。もう詮索もやめた方がいい」

「わかった。気になるけど、仕方ない」

「そういう繋がりもあるのなら、マジックアイテムか何かで力を隠すようなこともできるのかもしれないね。問題を起こさず、帝都まで案内することに専念しましょう」

この仕事は、既に後戻りが難しい段階にある。確かに仕事を請ける時はしつかりと情報を調べて可能なら裏を取ってリスクを全て掘り起こすべきだが、この段階にあつては見つけたリスクには近づかないという選択肢も忘れてはならない。

元々は皇帝の下でトラブルを起こされるリスクを考えて慎重になつていたところもあるが、クレマンティーヌの話聞いた今となつては、皇帝を怒らせるのも『漆黒』を怒らせるのも、結果は等しく最悪なものだと割り切れる。ならば、触れるべきではないものには触れないことこそ最善だ。

四〇 義の人、謁見する

「ここがどこであれ、大通りを真つ直ぐ歩いていけば大丈夫なんですがね」

そんな適当な案内が許される唯一の街が、ここ帝都アーウィンターだ。この街で、あらゆる大通りが行政機関や魔法学院など何らかの重要施設を経由して皇城へ繋がっている。多くの街が無秩序なスラムを抱える王国や、同格の幾つかの神殿を中心に分散型の街が出来上がることの多い法国とは異なり、一つの秩序に纏められた市街地の規模としては世界でも最大のものかもしれない。

つまり、ただ歩いていけばいい。依頼だけを考えればそういう状況だが、全員で皇城へ向かうというのはどうにも都合が悪い。薄情かもしれないが、演技をさせるのはクレマンティーヌ一人で十分だ。イビルアイを連れているので、なるべくそういう場所には行きたくない。

そこで、クレマンティーヌが戻った時のために待ち合わせ場所が必要になる。

「城に行く前に、いったん適当な宿へ案内してください」

見たことも無い帝都の賑わいにあてられて、エンリは茫然と周囲を見渡す。『フォーサイト』の誰かから宿の格などを問われても、普段使っている所でいいなどと適当に返

す。田舎者と見られないよう時々表情を引き締めるよう心掛けてはいるが、どこまで効果があるかはわからない。

大通りが交差する角に二人組の騎士の姿を認め、クレマンティーヌはフードを目深に被る。顔は割れていないはずだが、帝国で後ろ暗い仕事をしたことが無いわけではない。

その角にそびえるのは、帝国最高級の宿。『漆黑』は警備兵の立つその入り口の前を素通りする。アダマタイト級冒険者ともなれば本来ならこういう場所に泊まるものだが、この日の宿は『フォーサイト』の常宿でもある『歌う林檎亭』に決まっている。着衣とはいえ首輪を付けた吸血鬼を連れている状況では、慣れない高級宿への躊躇も大きくなる。脛に傷を持つものも少なくないワーカー御用達の宿を使うというのも悪い選択ではなさそうだ。

——ゆううつ。宿にも皇城にもずっと着かなくていいのに。

クレマンティーヌは大きく溜息をつく。戦争相手のエルフの集落へ潜入して百人殺して火をつけてこいと言われる方がまだ気が楽かもしれない。

「結局、鮮血帝の思い描いた通りにするわけですか」

「え、あ、うん。そうだったかな」

クレマンティーヌが問うと、エンリはンフィーレアに何かを促すように目配せをする。

「そうなるね。対応に困ったら、皇帝の考えている通りの『真実』を隠そうとする義理堅さでも見せればいいと思う」

「はあ。でも情報とか色々集めてみたいだし、バレてたらどうすれば……」

「向こうからそういうことを言ってくれる場合は、皇帝に恥をかかせることにならないから普通にしていれば大丈夫じゃないかな。クレマンティーヌの実力を評価して呼んだみたいだし」

ンフィーレアの励ましが逆に煩わしい。どうせ考え直すつもりは無いのだろうか――

「相手は皇帝だし、クレマンティーヌで言葉遣いとか大丈夫かな」

そんなエンリの言葉に、クレマンティーヌは乗っておきたい。全力で。

「確かに帝国の作法なんて全然わからないから、迷惑にならないように少し考え直して――」

「国外からも広く人材を求めるくらいだから、法国の偉い人と同じ扱いで大丈夫じゃないかな。クレマンティーヌは法国のエリートだったっていうし、僕らの中では一番慣れているはずだよ」

「まあエリートつてほどでもないね。ただ人間としては一番強いからそれなりの役目をもらつてただけ。実は給料も安いし」

確かに、ソフィーレアを相手にそういう身の上を話したこともあつた。そして、ここでも無駄に乗せられて胸を張つてしまう。

そして、すぐにそれを後悔する。

「それじゃ、失礼の無いようにね」

——軽く言つてくれる。

実際は、皇帝相手の言葉遣いなど心もとないに決まつている。法国のお偉方は国民相手には権威ある風に振る舞つてはいるが、少なくとも漆黒聖典の隊員には極めて甘い。

これは地位の高低の問題ではなく、組織や役職の権威などより人類の守護者としての戦力の方が優先される結果に過ぎない。お偉方が耳に心地よい言葉だけを聞いて過ごす価値は、クレマンティーヌの戦力としての価値を大きく下回つていたのだ。もちろん、調子に乗り過ぎれば人外の強さを誇る漆黒聖典の隊長の仕置きということにもなりかねず、たまたま憎まれ口を叩いて呆れられる程度の穏やかな関係ではあつたのだが。

ともかく、クレマンティーヌは本物の礼儀作法など知らない。皇帝どころか貴族に通用するものも持たない。それが必要な潜伏任務など、当初から適性が認められるはずもなく訓練の経験さえない。よつて、皇帝を相手にする自信は無い。まともに話をするよ

り、やらかした後の人類屈指の逃げ足の方に自信があるくらいだ。

宿は大通りからそれなりに賑わいのある通りを一本入った場所だが、目印に困るほどではない。宿からの道筋を簡単に確認した後、『フォーサイト』によつてクレマンティーヌだけが皇城へ連れられる。

約束は二つ。普通に戻る場合は宿で待ち合わせで、だめならマールレによつて「回収」される。「救出」ではないので、生死については考えない。それどころか、戻らなければマールレの魔法に巻き込まれ殺される可能性が高い。

そして、そのまま皇城へ。

『フォーサイト』に対する建前上の依頼人の「エイゼル家」とやらはどこへ行つたのかと思えば、クレマンティーヌ自身が「エイゼル家からの使者」という形になつていた。騎士に全ての武器を預け、狭い部屋で少々長く待たされた後は身体を調べられることも無く、驚くほどあっさりと謁見の場に通された。同行した『フォーサイト』は門前で約束

の報酬をクレマンティーヌに渡し、別室で報酬を受け取るようだ。

謁見は、儀礼的な謁見とは違った、皇帝が現れるには質素な空間で行われた。小都市の神殿程度に抑えられた天井高はこうした目的の空間としては低く、天井にはそれなりの装飾は施されているが内壁にバルコニーの設えも無い。強めの光量でへ永続コンテニューアル・ライト光を灯されたシャンデリアはクレマンティーヌの跳躍力なら容易に飛びつくこともできる高さだが、バルコニーも窓も無い状況では万一の場合の逃走ルートにもならない。

この部屋を用いる意味は、垂らされた瀟洒な光沢のある布で左右の壁面が隠されていることで理解できる。布とシャンデリアでかろうじて数ある謁見の間の一つとしての体裁を整えているのだろうが、ただの装飾であろうはずもない。布のすぐ向こうに壁があるとは限らず、布の向こうからこちらを窺うことは可能となっているのだろう。いくらでも兵を伏せることが可能な内装だ。

一国の皇帝がよそ者の強力な戦士に会うのだから、これくらいは当然のことだ。そして、いくら兵を伏せていようともクレマンティーヌには意味が無い。

意味があるのは、皇帝とともに現れその横に控える帝国最高にして人類最高の魔法詠唱者マジック・キャスターフルーダ・パラダインだけだ。その存在がなければ、クレマンティーヌにとっては帝国四騎士さえ有象無象に過ぎない。この場に居るのはそのうち二人のよう

だが、フルーダの魔法に動きを封じられでもしない限りは問題にならない存在だ。盾を両手に持つ男さえ、皇帝の盾にすらならない。他に武装の無い女が一人いるが、雰囲気から女官長か侍女長といったところか。

バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファード・エルニクスは、口を開けば驚くほど率直に「法国の非道な策略から人々を救った、義の人クレマンティヌ」を褒め称える。実際に自分の耳で聞くと呆れの感情が強まるが、目の前の皇帝にその感情は似合わない。観察するうち、騙し続けるのは難しいのではないかと思えてくる。

話がエンリから聞いていたカルネ村に留まらずエ・ランテルからも情報を得ていることがわかると、さすがにクレマンティヌも違和感を感じざるを得ない。情報というのは、多人数で旅する者より早いものだ。『フォーサイト』が依頼を受けた時とは状況が違っているかもしれない。その部分を利用して試されているかもしれない。——様々な思考が脳裏を巡る。

あわよくば面倒な演技をしなくても済むのではないかと考え、ここで皇帝の描くシナリオを軽く否定しておく。

「カルネ村を救ったのはエンリ・エモットであって、私ではありません」

マールの名前を出すことは許されない。これは拷問の直後より言われていることで、『義の人』の演技よりも重要であり、クレマンティヌにとって絶対だ。

「それはお前たちの偽装であろう。王都での報告の不自然さからエ・ランテルを発つ直前のことまで、こちらは全てわかつているつもりだ」

「不自然とは、何を仰いますかと思えば……」

——こいつ、まだ気付いてないのかよ。

クレマンティーヌは心の中で舌打ちする。『フォーサイト』に依頼した頃より情報が増えているようだが、それでも結論が変わっていない。

「調べはついているのだよ。強者というのはそう突然に現れるものではない。それも魔法詠唱者となれば——」

皇帝の言葉は、『フォーサイト』から聞いていた通りのものだ。確信に満ちた表情が手に負えない。この場に他に知恵者を求めるならばとフルーダの方を見れば、皇帝の言葉に静かに頷いている。

「……何と言われましても、今の私はアダマタイト級冒険者エンリ・エモットの従者のようなものです」

「くだらぬ筋書きだ。……私は、本音で話したいのだよ。誰かの従者などではなく、法国最強の漆黒聖典を裏切り出奔したクレマンティーヌその人と」

クレマンティーヌは肩をびくりと震わせる。漆黒聖典での事が少しでもわかってい
るならば、『義の人』などという不条理な寸劇は終わりにしても良いのかもしれない。

「本音とは、いかなる意味でしょうか」

「本音は本音だ。私は、君が王国の者たちへの義理を果たすような下らぬ理由のみでここへ来たとは思っていない」

クレマンティーヌの緊張が緩む。義理を「下らぬ理由」と見放す皇帝は、全てわかつていて茶番に付き合っていたということか。

——だったら早く言えつての！

「はあ、本音ですか。義理が下らないと。ふふ、それなら義の人とか寝惚けたこと言つたのは、馬鹿にでもしてたんですか？ 皇帝陛下とはいつでも、随分と悪ふざけが——」

「下手な……演技……だと？」

啞然とするクレマンティーヌ。人類社会の頂点の一つとして君臨する者の自信に満ち溢れた態度と言葉に、完全に吞まれてしまう。

「クレマンティーヌの高潔さはわかつている。そのことは、いかにエ・ランテルの凡愚どもと謀り、吸血鬼やその仲間どもに苛烈な扱いをしてみせようとも播らぐことはない」

「……はあ。」

表向きは厳しい扱いをしながら、死罪が相当である冒険者たちを追放のみで済ませた——そんな情報さえも、ここではクレマンティーヌの温情のように扱われる。

「——そもそも法国の非道な作戦を許すことができず、見も知らぬ他国の民衆を救うために自らの地位を捨てて国を出奔したのだから。その覚悟は大したものだ。法国の聖典ともなれば出奔は命がけとなろう。その選択は、王国の奴らがいかに泥を塗り込めて隠し通そうとしても隠しきれない輝きを放っている」

——うわ駄目だこいつ、もうどうにもならない。頭痛い。

「そ、それはエンリ・エモットの成したことです」

「ああ、そういう事になってるのだったな。しかし、今はエ・ランテルでの戦いについても話は聞いている。想定より優れた魔法詠唱者^{マジック・キャスター}ではあるようだが、『国墮とし』を抑えるほどの力はあるまい」

「しかし、現に『国墮とし』はあのように——」

「それを成し遂げる力となつたのはクレマンティーヌ以外にありえんだろう。エンリとやらについては実はこちらも見くびっていた部分はあるのだが、死霊系魔法に秀でた王国の隠し玉だとしても単体で『国墮とし』を抑える力を持つはずがない。——だったかな。じい、説明してやってくれ」

「客人よ。エンリとやらは、探知防御を行つておる。それは、力を隠すに値する理由があるということだ——」

多くの魔法詠唱者の教育にも携わっているらしいフルーダの説明は、戦士であるク

レマンティーヌにとつてもわかりやすいものだ。

帝国最高の魔法詠唱者マジック・キャスターフルーダ・パラダインは、自らの力を探知防御で隠すことはない。その存在が魔法を用いた様々な諜報活動の抑止力となるからだ。

これに対し、魔法詠唱者マジック・キャスターエンリは自らの力を探知防御で隠している。それは、抑止力となるほどの力を持たないことの証だという。

帝国と違って王国が常に他国の諜報活動に晒されて丸裸になっているのは、クレマンティーヌでも知っていることだ。

エンリが王国の中央と繋がりが無いというクレマンティーヌの主張は、鼻で笑われ軽く退けられる。魔法は独学で学べるものではないということは、法国でも幾度か耳にしていることだ。マーレとその背後に見え隠れする世界の危機について口にするのが許されない以上、クレマンティーヌの言葉がフルーダに届くことはあり得ない。逆い話を聞かされるうち、エンリが本人の言うような辺境の出身とは思えなくなってくる。

説明が一巡する頃には、逆にクレマンティーヌの方が、そもそも正体がよくわからないエンリがどこかの王族か貴族の隠し玉的な存在だったのではないかと考えるに至っていた。イビルアイを蹂躪したのはマーレだが、エンリも相当な、少なくとも以前共闘したカジットに匹敵する高位の魔法詠唱者マジック・キャスターだ。話や態度から窺えるように王国出身者であるなら、王族や貴族と何らかの繋がりが無い方がおかしい。逆に冒険者やワーカー

として鍛えたことを想定するには、あまりにものを知らない部分が目立つからだ。

そして、フルーダーに代わりジルクニフが口を開けば、その関心はクレマンティーヌ本人へと向かう。

「義理堅いのは悪いことではないが、別にエンリとやらに個人的な忠義を尽くしているというわけでもあるまい」

「……………」

——ぞうぶ臍腑を捧げる程度の忠義なら、とでも言つてやろうかな。

「もし王国に何か弱味を握られているとか、問題があるのなら帝国として協力することもできる。法国の追手から守るにしても、こちらの方が安全だろう。ここで聞きたいのはそういう部分の本音だ」

「いえ、弱味などは……………」

クレマンティーヌは、マールの名を出せないことで身動きがとれなくなっている。

マールには命も身体の中身も握られているも同然だが、王国に弱味は無い。本来なら、従う理由さえ無い。義理だ何だと、相手の側がおめでたい考え方を想定してくれなければ演技の方針さえ定まらない状態だ。

しかし、続く言葉でクレマンティーヌは身構える。

「こちらも、別に法国に売ろうとか脅そうとか、そういうつもりではないのだ」

帝国が法国の側に立てば、クレマンティーヌにとつて不味いことになる。四騎士や数百の衛兵などものともしないが、フルーダー・パラダインだけは未知数だ。

「——法国を出奔するきっかけとなつた行為は尊いものだ。それに際して王国の一部と繋がりができたことは承知している。しかし、王国の民は圧政にあえいでいる。一握りを救つたとしても、何も変わらないのが現状だ。帝国の力を以てするほか、有効な手はあるまい。法国の中枢にあつたならば、少しは世界の情勢も聞いていよう」

ジルクニフは『義の人クレマンティーヌ』に語り掛ける。王国の民を圧政から解放する役割は、法国のお偉方が帝国に期待していたものだ。

皇帝の目的は、クレマンティーヌを召し抱えることだ。これは招かれる理由として想定できないでは無かつたが、皇帝という身分の人間から直接に誘われるとなると、それが明らかに間違つた前提からの判断でも悪い気はしない。法国の追手も、帝国の中枢までは届かないかもしれない。

しかし、『義の人』を装つて働くなど鳥肌もので、到底長く持つものではない。そして、マールに無断で縁を切ろうとすれば、そもそも帝国自体が消えてなくなる可能性さえある。

「理由はどうあれ、私は一度スレイン法国を裏切つた身です。その、今さら表舞台に出る

わけには……」

「法国を抜けたのはお前だけではないぞ。法国は髪の長い若い男と、その男が持つていたという神器の槍を血眼になって探しているそうじゃないか。時期的に大災害にでも乗じて出奔したのだろう。いずれこの者も探し出し、我が帝国へ——どうした？」

「髪の長い男に、神器の槍……それは確かな情報なのでしょいか」

「大災害から行方が知れず、奴らが血眼になって探しているのは事実だ。……何か、知っているのか？」

クレマンティーヌの顔から自然と笑みがこぼれる。

法国が帝国に察知されるほど露骨に、そして必死に探すその男は、間違いなく漆黒聖典の隊長だ。そして、隊長が出奔など考えられない。通常なら情報が洩れるのもおかしい。

マーレから聞いた話と現状をあわせて考えれば、既に隊長の命は無いということになる。蘇生の成功率を考えれば、情報漏れなど構うことなくふり構わず死体や神器を探さなければいけない状況なのだろう。

「いえ、その男が法国にあるのでなければ、私も逃げ隠れせずに済むかもしれないというだけです」

「では、我が帝国の力となってもらえるか」

——しまった!

最強の番外席次が残るとはいえ、それがクレマンティーヌ程度のために国外へ出てく
ることは考えにくい。元々隊長程度でマールがどうにかなるとは全く思っていないが、
自分の力ではどうにもならない相手だ。実際に身の危険を意識せずに済むとわかつた
解放感で、余計なことを口にしてしまった。

ただ、相手の目的がわかれば、それを棚上げすれば良いだけだ。

「私は、王国で出会った者たちと行動をともにしていますが、それは個人的な恩義による
ものです。そして今、世界の情勢が大きく狂わせるような存在の出現が予言されてお
り、今はその者たちとともにその予兆などを調べています。それが判明し、私のなすべ
きことが終われば、法国に戻ることはできませんので、いずれかに仕官させていただく
こともあろうかと思います」

アインズ・ウール・ゴウンのことを直接伝えるわけにはいかないが、ちょうど法国で
の破滅の竜王の預言があり、こちらの機密は守る必要もない。それはマールのことか魔
樹のことか、あるいは森で巨大爆発を起こした鎧のことかもしれないが、マールの言う
アインズ・ウール・ゴウンのことを指している可能性も無いわけではないだろう。

「ふむ、我が帝国は盤石だが、周辺には色々ある。軽々にこの場で語るより正確な状況
を纏めさせよう。食事でもしながら少し待っていれば揃うだろう」

——少し待ってれば……普通そういうの後日じゃないの？

ジルクニフは口ウネという秘書官を呼びつけると、周辺諸地域について最近の情報を纏めるよう指示を出す。絶対者一人の意思決定は速い。この迅速な行動力が帝国の強みなのだろう。

クレマンティーヌは謁見のみならず、会食まで逃れることができなかつた。皇帝とフルーダ。そして謁見の間では品の良い侍女に見えた女が会食の装いで現れたため、あれは地味な寵姫なのだろう。そこへ会食から新たに現れるのは、以前に見た顔。

謁見だけで終わりたかつた。作法に無礼があつてはと身を退こうとすれば、より無作法な者も同席させるから問題ないとして現れたのがこの男、ブレイン・アングラウスだ。今は皇帝に仕えているらしい。フルーダ・パラダインとブレイン・アングラウスが揃つたことで、この場からの逃亡さえもほぼ不可能となる。

帝国に仕えなくてもいいから試合だけはしたいなどと無邪気なことを言うブレインは、綺麗に髭を剃られてしまつて外見は幾らか貧相にも見えるが、身の運びや雰囲気などはやはり油断ならないものがある。

ブレイン・アングラウスは熱烈に再戦を望んでいる。その熱意が情報の形を成して、

皇帝にも伝わっていたようだ。

——『漆黒』が私でもつているとか、余計なことを吹き込んだのはこいつか。殺しておけばよかった。

ブレインとの戦いとその言い分を前提に考えれば、皇帝の不思議な理解にも納得はできる。盗賊団を相手にクレマンティーヌだけが殺しを愉しんだ報いは決して小さくはなかったのかもしれない。

秘書官ロウネ・ヴァミリオンによつて、会食の途中で持ち込まれた情報は二つ。

一つは帝国西方の大森林北部で亜人の勢力分布が激変してゴブリンなどが辺境の村へ押し出されて来ることが増えたことで、大森林ではこれまで見られなかったトードマンの生活圏が確認されたらしい。これに関連して大森林と接する山脈の南端辺りで火山のような爆発を辺境の村より観測したという情報もある。これらの原因に心当たりのあるクレマンティーヌはこの件について詳しく聞く必要を感じない。

もう一つは、南東の竜王国がピーストマンの大侵攻に晒され危機に瀕していることだ。これもマールレによつて陽光聖典が壊滅し、漆黒聖典も隊長と互角の魔獣を送り込まれたことで神都に張り付いているであろう状況では当然のことのように思われた。

しかし、その侵攻の頻度と規模は法国に居た頃に耳にした状況と比較にならないほどで、たとえ陽光聖典が健在でも持続的に守り続けるのは困難極まる状況となっている。

ビーストマンの国で何かが起こっている可能性も否定できず、マーレが興味を持ちそうな内容に思える。

「放っておけば、竜王国は間違いなく数年中に滅びるだろう」

これに対しては帝国も援軍を前提に近々強行偵察部隊を送るといふ。既に帝国の客人扱いであることを前提に、もし危険なカツツエ平野を渡るならこれに同行するよう勧められるが、今さら法国の代わりに亜人撃退など柄でもない。

「……何か？」

「いえ、何もありません」

クレマンティーヌはこのことを報告するかどうかを迷い、黙つていようと決めたところだ。相手から見ても、何か顔に出ていたのかもしれない。

そんな話が一段落したところで、鐘の音が聞こえてくる。

漆黒聖典から出奔して以来、気にしたこともない時の鐘。それがあと二つで、この場は終わりだ。クレマンティーヌが戻らなければ、マーレは必ず回収に来る。

それはおそらく、バハルス帝国の終わりの始まりをも意味する。心配しなくとも、クレマンティーヌには長く虜囚となることも、仕えることを強いられ屈服することもあり

えないのだ。

しかし、それを待つわけにはいかない。目立ちたくないマールレは、帝城を破壊し全てを更地とした上で、死体となったクレマンティーヌを回収するつもりでいる。マールレやエンリリにとってはクレマンティーヌの死亡による弱体化など誤差の範囲かもしれないが、クレマンティーヌにとってはそうではない。今さら痛みや死そのものを恐れるような感情は薄れているが、戦いの力が衰えることだけは許容できない。蘇生があるからといって、ただ死体として回収されるのを待つわけにはいかない。

義理を通すために一度戻ると言えば、伴をつけてエンリリともども招待したいという。フルーダも一応自分の目でエンリリや吸血鬼を確認したいと言い、その護衛をブレインが務めるとなれば、さすがのクレマンティーヌも完全に身動きが取れなくなる。それでも紹介は難しいと言えば、帝国の使者として赴くので道案内のみで構わないと返される。おそらく帝国における個人戦力最上位である二人が使者などというふざけた話は、この国では絶対者の意思が絶対であることをよく示している。

マールレとエンリリ。そして、フルーダとブレイン。進退窮まったクレマンティーヌの選択は――。

——こんなの、自分でどうにかしようってのが間違いなんだろうね。

この日、バハルス帝国は何ごとくも無くその命脈を繋ぎ、クレマンティーヌは生きて宿

へ戻ることになる。但し、それはフルーダとブレインを伴つてのことだ。

エンリやマールは良い顔をしないかもしれないが、その場で命を奪われるほどではないだろう。後でフルーダ・パラダインに情報収集を依頼したいような話もあったので、それも視野に入れた行動だということにすれば良い。それがこの日のクレマンティーヌの選択だ。

『フォーサイト』！ あなたがたは仕事を終えたのですか！』

ヘツケランを呼び止めるのは、涼やかな響きを残しながらも焦燥に満ちた声だ。

声でわかるほどの相手ではないが、隣のイミナーナの露骨な舌打ちでその正体を知り、振り返る。

『天武』か。少し待たされたが、それなりにいい仕事だったぜ』

声をかけてきたのは、『天武』のエルヤー・ウズルス。帝都の闘技場でも不敗の天才剣士だが、そのチームは彼と彼が所有する三人の森妖精エルブ奴隷だけという歪な構成だ。

エルヤーは三人の妙齡の森妖精エルフの女を時には気まぐれに殴り、遺跡に潜れば罨除けの囿にし、夜には欲望のはけ口として使うような男だ。当然ながら、半森妖精ハイフエルフのイミーナを含む『フォーサイト』との相性はすこぶる悪い。イミーナはこの男を猛烈に嫌っている。

ヘッケランとしても仲良くしたい相手ではないが、それでも冒険者全般に忌避されがちなワーカーとして同業者との情報交換は必要になる。最低限の言葉は交わさざるを得ない。

「それで『漆黑』は、エンリ・エモットはどこですか！ 吸血鬼を連れているというのは本当ですか!？」

「吸血鬼まで聞いてるなんて耳が早いな。不敗の天才剣士と言われるあんたが興味を持つてことは、勝負でも挑むのかい?」

「仕事で関わったばかりの『漆黑』に関わることなら、ヘッケランも念のため知っておきたい。」

「とんでもない。あれは私の運命の人です。吸血鬼の件が事実でも、狙われているのでお助けしなければならぬ!」

「は? 運命? 狙われている?」

「何かとんでもない言葉を聞いたような気がするが――。」

「場所を教えてください。早く！ 私は襲撃者から彼女を守りたいのです！」

普通ならエルヤーも襲撃者の仲間である可能性を考えるとところだが、この男はプライドだけはやたらと高い。こういう卑屈なやり方で情報を聞き出すことはなさそうだ。

『漆黒』はすぐには帝都を発たないはずで、宿を替える理由も無いだろう。どうせエルヤーも宿へ戻ればわかることだが、判断に迷ったヘツケランは仲間たちと顔を見合わせる。すぐに全員の視線がイミーナに集まる。

「気を遣わなくていいわ。仕事で関わつたし、後で私たちが手引きしたみたいに難癖付けられても困るからね。あれのために戦うとかはごめんだけど、案内して危険を知らせるくらいはいいんじゃない？」

「確かに、あの宿へ案内した私たちを疑われたら面倒」

「むしろ襲撃者の方が心配です」

すぐに方針が決まる。冒険者から見たワーカーのイメージも悪く、宿を勧めたことで疑われたり、争いに巻き込まれてはたまらない。

「移動しなれば場所は『歌う林檎亭』、俺たちの宿だ。狙ってるのは誰かわかるか？」
「主力は名高い暗殺者集団イジヤニーヤの手の者が十以上。もしかしたら他にもワーカーが雇われているかもしれません」

「おいおい、そいつをわかっているってことはお前も——」

「察しがいいですね。私も依頼を受けてから、ターゲットをエンリ・エモットが連れていくことを知りました。おかげで彼女を守ることができません」

「……いいか、襲撃なんて話、俺たちは聞いてない。お前の惚気のろけを聞かされて仕方なく教えてただけだ。わかつたな」

「構いません。もしもの時は私一人で十分です。余裕があつたら彼女に逃げ道だけ示してもらえると助かります」

「一人で十分とは、なかなか言うね」

「惚れた女の一人も守れないで、最強の剣士は名乗れませんよ」

不遜でありながらも、真摯さも垣間見える。目の前の男がエルヤーであることを忘れてしまえば好感さえ感じてしまいそうだ。

しかし、後ろからついてくる陰気な雰囲気エルフの三人は、エルヤーの欲望のはけ口である森妖精エルフの女奴隷だ。奴隷の証として半ばで断ち切られた耳はその身分を一目瞭然のものとする。妙齢の女奴隷ばかりを連れていれば『フォーサイト』でなくてもそういう目で見るのが普通だ。

——これを手を連れているながら、惚れた女などと言われてもな。

「おいおい、後ろの連中はどうするんだ？」

「問題ありません。何しろ、エンリ・エモットも私と同じ側の人間ですから」

思わずイミーナと顔を見合わせる。この時イミーナが見せた全ての感情が抜け落ちたような表情は、およそ他人の色恋話を聞いた者のものとは思えない。そして、おそらくヘツケランの表情も大差ないのだろう。互いに言葉が出てこなかった。

——なんとなく、わかつてはいたがね。

エンリとのトラブルや『漆黒』の面々についての疑問や違和感が、エルヤーの言葉一つで打ち払われた。

それでもヘツケランは、『フォーサイト』はエルヤーとともに『歌う林檎亭』へ向かう。——襲撃者の仲間ではないことを示すだけ、それだけだ。

四一 エルヤー・ウズルスの告白

帝都アーウィンタールでは表通りの近くは人通りの少ない通りでも区画が整っており、王国の古い都市のように道に迷うような複雑な路地はかなり奥へ入らないと見られない。

そのため、エンリは宿で人目につかない道順を教えてもらい、マーレとともに裏通りを通じて冒険者組合へ向かうことができた。イビルアイの魔獣登録自体は一つの街で行ってれば、あとは求めに応じて魔法複写画を含んだ登録書類を見せれば良いだけだが、ここは登録を行った王国とは別の国、バハルス帝国の首都だ。組合にイビルアイと魔獣登録書類を見せ、報告をしておいた方が良いというンフィーレアの考えには賛成せざるをえない。

とはいえクレマンティーンを待つ必要もあるため、ンフィーレアとミコヒメを留守番として宿へ残している。何かとフォローしてくれるンフィーレア無しでマーレと出るのは不安だが、マーレもクレマンティーンも無しでイビルアイを連れるような恐ろしい真似もできない以上は仕方がない。ミコヒメを置いていくのは『蒼の薔薇』から受けた誤解の影響だ。

イビルアイは拘束具こそ外せないが、裸だったところへミコヒメの予備の外套を着せたことで大事な所は隠れている。丈が足りず太ももがかなり上の方まで露わになっているが、拘束具とあわせて見なければ、露出度だけならクレマンティーヌよりはマシなように思える。拘束しなければならぬ理由があるのだから、これで問題無いだろう。

組合で提示した魔獣登録書類の魔法複写画では魔獣扱いのイビルアイは全裸に首輪や拘束具だけの姿だが、こちらの組合では特に服を脱がすような指示は無かった。それがアダマンタイト級冒険者への信頼と思えば、このあまりに過分な地位も悪いものではないように思えてくる。ただ、魔法複写画を見せた時から腫れ物に触るような扱いをされたのは納得がいかないが、国を滅ぼすような恐ろしいアンデッドを前にした以上仕方のない反応なのだろう。

——私が退治したわけじゃないけど、アンデッドへの偏見を退治した側にまで向けるのはちよつと違うよね。

いかがわしいものを見るような目で見られたのは、邪悪なアンデッドを滅ぼさず連れ回しているからだだろう。マーレが決めたことなので仕方がないが、ンファイレアが居てくれればもつと上手く事情を説明できたはずだ。クレマンティーヌを待たずに出たのは失敗だったかもしれない。

帰路もイビルアイを連れていく以上は裏通りになるが、やはり人通りは極端に少な

い。よく整備された帝都では真つ直ぐに伸びた表通りこそが近道で、それに並行する曲がりくねった裏通りを使う者は少ないのだ。

そのことは人目を避けたいエンリには都合が良かったが、他の人目を避けたい者たちにも都合が良かった。

「えつと、組合を出たあたりから敵意のある人間が増えてきて、囲まれています」

「ええっ！」

「たいしたことないので、全部殺しちゃいますか？」

「え……いや、転移魔法ってあったよね」

「宿を出たあたりから確認できている気配もあるので、後で宿で戦うことになっても良ければ」

振り返るが、エンリには気配などわからない。だが、相手の方はこちらの行動をある程度把握しているということなのだろう。宿へ戻ってから遭遇すればファイアはわからないが、少なくともマールはエンリよりミコヒメを守る。逆にエンリたちが逃げたままなら宿の二人が狙われるかもしれない。

「……そ、空を飛んで距離を取るっていうのは？」

「飛び道具でエンリが狙われるのと、結局は宿で戦うことになります。——あ、来まし

た。《上位硬化》《上位全能強化》……」

戸惑うエンリに対し、マーレの判断は早い。すぐにエンリに幾つかの魔法がかけられる。

エンリがただならぬ気配に気付く頃には、裏路地や建物から総勢十二名の男たちが現れ、包囲を完成させていた。

「……『漆黒』のエンリ・エモットとお見受けする」

「あ、はい——」

言葉が終わるより早く、金属の細長い煌きがエンリを囲み、そのまま黒い法衣に吸い込まれる。

顔をかばう小手から複数の金属音が響くが、そこで受けられたのはごく一部だ。エンリは胸元や背中に鈍い痛みを感じて呼吸が一瞬止まる。

大地にばらばらと落ちる長い針のような武器は、ちょうど十二本だ。痛みは残るので痣はいくらか出来てはいても刺さってはいないのだろう。どれも血はついていない——血の色ではないが、濡れたような光を放っている。

全員からの奇襲をその身に受け、なおその場に立ち続けるエンリを前に、男たちは目を見開く。

「——強い」

「当たり前ながら、通らぬか」

通つていれば、法服を貫けていれば起こるべき変化が起こらなかつた——そういうことなのだろう。

「……毒？」

「そうみたいです。それで、またエンリが『交渉』しますか」

マーレの判断は早い、それがエンリにとつて甘いものとは限らない。むしろ厳しいものばかりではないかとエンリは思う。

何か魔法がかつた今の状態なら、攻撃が来るのがわかつていれば服と小手で防げるような気はするが、明らかに命を奪いに来ている相手と命をかけて話をしたいとは思わない。

——もう「交渉」は嫌。毒針を使うような相手なのに、無理無理無理！

交渉と言われ、エンリはマーレと旅立つてすぐに一人でオーガと対峙させられたことを思い出して身震いする。今回も以前のようにマーレの魔法で体が軽くなつたが、もう騙されはしない。これは飛べない軽さだ。

目の前の男たちは、一人一人がオーガより危険なように見える。交渉相手としても攻撃前にマルカジリとか宣言するだけオーガの方がマシだ。毒針の威力も、普通に受けていれば法服で防げなかつたかもしれない。

「……流石はアダマンタイト級冒険者か。この二人は強い。幾人か死ね」

「畏まりました」

男たちは一斉にナイフを抜き、構える。猶予は無い。

次は法服では防ぎきれないだろう。エンリは軽く抜きやすい魔剣キリネイラムを構えつつ、この場をマーレに委ねる。

『交渉』はしない。どうにかしてほしいけど、でもいきなり全員殺すとかじゃなくて、私たちを狙う理由を聞きだせるかな」

「はい、いいですよ」

そしてマーレが何やら詠唱すると、裏通りに複数の鈍い爆発音が響く。爆発したのは人間の血肉だ。

男たちが本当の意味で彼我の戦力差を認識できたのは、短い詠唱の終わり際の僅かな時間だけだった。そこには殺気も威圧感も無い。ただ濃厚な死の気配にあてられ、男たちは自身が踏み潰される直前の地虫でしかないことを理解し、すぐに無数の肉塊となつて飛び散った。勘の鋭い者だけは、刹那にかすれた叫び声をあげることを許された。

最初に声をかけてきた男だけは魔法の対象から外されたが、部下たちが肉塊となったことを認識する頃にはマーレの腕に腹を貫かれていた。

「ちよ………マーレ？」

「では、ちよつと話を聞いてきますね」

マーレは確保した男を貫いたままの腕で抱え、イビルアイを連れて消える。集団転移魔法だろう。

エンリは殺してしまうのを止めたつもりだった。

マーレは、確かに全員は殺さなかった。言う事を聞いてくれたのだ。

エンリは助かり、この場は安全になった。全身の力が抜けたエンリは、男たちの血肉を浴びたまま血塗れの裏路地に立ちつくした。

——血塗れだ。……とにかく、ここを離れなきや。

エンリが向かうべきはマーレの消えた先ではなく、背後の宿の方向だ。

血塗れの恰好も問題はあるが、今は村娘でなく冒険者であり、襲撃者を撃退したと説明すれば大きな問題にはならないかもしれない。村で血塗れになった時と違って魔法のかかった服なので、水をかぶれば汚れも落ちる。

それより、問題なのは戦力だ。一人となった今、新たな敵が現れたらどうにもならない。宿に戻っても戦力があるわけではないが、ワーカーの常宿だという『歌う林檎亭』なら少なくともこの場よりは襲撃を受ける可能性は少ないだろう。

しかし、無情にもそちらの方向から駆け寄る者がある。その足音はマーレでもクレマンティーヌでもンフィーレアでもありえない、重い金属鎧を着た戦士のものだ。

「アダマンタイト級冒険者、『漆黑』のエンリですな」

涼やかな優しい声だが、肩書から入るのは先ほどの刺客と同じだ。先行したのは一人だが、遠くからばらばらと複数人の足音も聞こえる。

エンリは慎重に活路を探り、先ほどは無かったアダマンタイト級という言葉と、少し距離を取って止まった足音にそれを見出す。

——虚勢を張って、マーレかクレマンティーンが戻るか、見回りの騎士が来るまで時間を稼ぐ！

思えば、こういうギリギリの判断をするのは久しぶりだ。マーレもクレマンティーンも居ない状況では、死への距離はあまりにも近い。

エンリは魔剣キリネイラムを構え、言葉を選びながらゆっくりと振り向く。

——大丈夫、剣の持ち方もおかしくないし、真似事くらいなら。

「あ、あなたもそこへ転がっている連中のようにならないの？」

そこに居たのは、新たな刺客ではなかった。

「エルヤーです。あなたは、夏の初めにエ・ランテル近郊の村から旅立った、あのエンリですな？」

エルヤー・ウズルス。

忘れもしない。この男は、マーレとともに旅に出たばかりのエンリに様々な助言をくれた恩人だ。頼れる雰囲気も、涼やかな声も、変わっていない。

後ろには、陰鬱な三人の森妖精エルフの女。この三人からの粘つくような敵意を含む視線もあの時と同じだ。

「は、はい。あの時のエンリです。『漆黑』という名前もエルヤーさんがつけてくれたもので——」

エンリはさらに後ろから追いつがる足音に気付き、口をつぐむ。エルヤーを追ってきたのは『フォーサイト』の四人、クレマンティヌとも接点ができている者たちだ。

エルヤーだけなら話したいことも沢山あるが、あまり打ち解けることができなかつた『フォーサイト』は別だ。半森妖精ハーフエルフのイミーナに至っては、性格的に合うのかクレマンティヌと仲良く話していたくらいだ。弱味を見せるのは危険だろう。

「ただ者ではないと思っていました、ふた月もしないうちにアダマンタイト級冒険者ですか……。あなたを狙う者についてお知らせしようと思つて探していたのですが、イジャーニーヤの刺客がこうなるようではその必要も無かつたようですね」

エルヤーはエンリの身に着ける冒険者プレートと周囲の血塗れの肉片を見比べる。

「あ、いや、これは私じゃ——」

言いかけて、エンリは虚勢を張つたことを後悔する。

「『漆黒』は俺たちの見ている前であの『蒼の薔薇』を倒したんだ、ただ者なわけがないだろう。運命の人とか勝手に盛り上がったから黙ってたが、エルヤー、あんたが守るような相手じゃないと思うぜ」

——運命の……人？

物騒な話の中におかしな言葉があることに気付き、エンリは耳を疑う。挑発するような口調で言うのはヘツケランだ。それを聞いてエルヤーは微笑む。

「そのようですね。——エンリ、いや、エンリさん。会いたかった。……私は不遜にも、あなたに再会できたならあなたのことを手に入れるつもりでした」

「て、手に入れる？」

エンリは自分の顔が熱を持つのを感じる。

エルヤー・ウズルス。

旅立ったばかりのエンリに的確な助言をくれた尊敬できる先輩。

エンリの抱える事情を察し、エンリ以上の苦難を背負いながら笑って生きられるような大人物だ。

「しかし、あなたは今やアダマンタイト級冒険者です。あなたの大きな器にふさわしい力を付けてからお迎えしようと思っていたのですが、いつの間にか、私はあなたを追う立場となっていたのかもしれない」

「いえ、私はそんな、大した人間じゃないです……」

「それでも、私の心は初めて出会ったあの日からずっと、あなたの虜になっています。男の見栄で力を付けてからの再会を考えましたが、離れてみればあなたを求める心が燃え上がるばかりでした。……私はやはり、あなたと一緒に旅がしたい。あなたの前で剣を振りたい」

エルヤーは真つ直ぐにエンリの目を見る。その言葉はどこまでも情熱的だ。

エンリは物語の中のお姫様になったような気持ちで、その涼やかな声に、甘い言葉に聞き惚れる。

頼りがいのある立派な戦士に護られる旅。そこにはエンリがこれまで求めて得られなかったあらゆるものが揃うように思えた。

「そして、私はあなたを愛し、愛されたい。あなたの隣に、私の居場所を作りたい」
熱の籠もった口調で、エルヤーはあけすけな恋心を打ち明ける。

——ええつ、愛？ そんな、いきなり……私なんか、どういうこと？

真つ直ぐな気持ちもぶつけるような告白にエンリは混乱する。

曰く、あなた自身にも、その誇り高い生き方にも惚れた。

曰く、あなたの存在に勇気づけられ、私は初めて人を愛することを知った。

曰く、世間体など忘れて一緒に生きていきたい。あなたと全てを共有したい。

一言一言がエンリの心を揺さぶり、顔が火照る。普通なら戸惑うような歯の浮くような言葉にも、強い気持ちで籠もっているのが感じられる。あまりに情熱的な告白だ。ヘツケランの小さな口笛やロバーデイクの優しい視線に晒され、エンリは今起こっていることを実感する。

エンリが見つめるのは、まるで物語の中の王子様のような、強さと物腰の柔らかさを併せ持つエルヤー・ウズルス。

それでいて、時折見せるどこか品の無い笑みには、エンリの後ろ暗い部分を理解し、暖かく包み込んでくれるような優しさが感じられた。

「そして、私はあなたの甘美で淫猥な世界に踏み込みたい。私の居場所を作りたい」
熱の籠もった口調で、エルヤーがあけすけな欲望を打ち明ける。

——ええつ、淫猥？ そんな、いきなり……経験もないのにどういうこと？
突然のわけがわからない言いがかりにエンリは混乱する。

曰く、自分と一緒になれば特殊な嗜好を抑え、隠しておく必要も無い。

曰く、少女を奴隷として愉しむ倒錯的なエンリの世界と一緒に愉しみたい。

曰く、ただ愛し合うだけでなく、ベッドの上で奴隷を交換して愉しんだり、互いの行

為を見せあうのもいい。

一言一言がエンリの鳩尾みそぢらを締め上げ、血の気が引く。普通なら呆れるような唐突過ぎる言いがかりにも、強い確信を持つているような雰囲気がある。あまりに変態的な告白だ。イミーナの無遠慮な舌打ちやアルシエの汚物を見るような視線に晒され、エンリは今起こっていることを思い知る。

エルヤーが幻視するのは、まるで物語の中の魔女のように、倒錯的で嗜虐的な嗜好を備えたエンリ・エモット。

それでいて、度々見せる極めて品の無い笑みには、魔女の後ろ暗い趣味を共有し、ともに愉しもうとするような嫌らしさが感じられた。

エンリは混乱に陥る。気分まで悪くなってきたのは、鳩尾のあたりが痛いせいだろうか。

何か言い返さなければいけないのはわかる。しかし、こういう時は下手に口を挟めば事態がさらに悪化しかねない。

さらに、『フォーサイト』が居る以上、クレマンティーヌに聞かせられないようなことも言えない。弱いエンリを見せるわけにはいかないのだ。

事態の急変についていけず、思考が滑る。エンリは目の前の現実の一番厳しい部分か

ら逃れつつ、遠巻きに事態を把握しようとする。

エンリは、すぐにでも家庭を築けるような生活力のある一人前の男性から告白を受けたのは初めてだ。村に居た頃はそこに働き者という条件が加わったが、今ならエルヤー・ウズルスの強さはなんとなく雰囲気を感じられる。クレマンティーンとどちらが強いかなどはわからないが、ワーカーとして一人前どころか一流なのは間違いなさそうだ。

そうした一人前の男性が告白をするには相応の勇氣と覚悟が必要だと両親から聞いている。村では結婚をすれば自立して生活の基盤を築くことになるからだ。それゆえ、感覚的なものだけで決めず、しっかりと相手のことをわかった上で、冷静に考えて決めるように言われている。

だから、エンリは真面目に考える。混乱して思考力は相当に落ちているが、幸い熱を持っていた顔は冷め切っていて考えるには都合が良い。

エルヤー・ウズルスは人前で果敢な告白を行う勇氣を持っている。エンリの世界を包み込み、丸ごと守ろうとするような覚悟も伝わってくる。おそらく、その力も十分にあるのだろう。

今はエンリの側にも力や金銭はあるが、そうしたものはここでは関係ない。自分の持ち物次第で相手に求めるものを上げるようでは、働き者ほど結婚から遠のいてしまう。

稼ぎのある冒険者で考えても歳をとるほど売れ残りやすくなってしまふので同じことだ。大事なのは、相手自身の勇気や覚悟とそれを実現する力。そして、エルヤー・ウズルスにはそれがある。

つまり、条件としては悪く無いということだ。

もはやエンリも十六歳で、結婚適齢期の半ばを過ぎている。本来ならその場で応じようと思えなくても、返事を待ってもらって前向きに考えなくてはいけない状況と言える。

しかし、エンリは決して肯定的な言葉を口にすることはできない。

たとえ倒錯的と言われようと、エンリがそういう対象として強い緊張を感じたことがあるのは少女であるマーレだけだ。ただ、エルヤーの方も倒錯的であっても構わないというので、この点は問題ないものとして――。

――違う！ そうじゃなくて！

そうじゃないのだ。最初からマーレは関係ない。これは誰にそういう緊張を感じるとか、同性がいいとか異性がいいとか以前の問題だ。

エルヤー・ウズルスが見ているのは、少女でありながら奴隷の少女たちを愉しむようなどこかの魔女であって、断じて自分^{エンリ}ではない。

エルヤーの後ろに来ていた『フォーサイト』の四人がおぞましいものを見るような目

で見るべき相手も、自分^{エンリ}ではないのだ。

エンリは混乱し、考え、考えすぎた。答えに詰まる時点で、周囲からの印象はエンリの意図せざるものとなってしまふ。

そして、周囲にあつて話を聞いていたのは『フォーサイト』だけではなかった。

「んふふ、血の臭いに誘われて来てみれば、何？ 奴隷を交換して愉しむって？ その君、ずいぶんと面白いこと言ってるねー」

ここでエルヤーに声をかけたのはエンリではない。大通りに続く細い路地から現れた短い金髪の女——クレマンティーヌだ。

「おや、どちら様でしょうか。依頼を受けたワーカーなら、周囲の状況を見て引き返すことをお勧めします。彼我の実力差もわからない愚か者なら、代わりに私がお相手しましょう」

「へえ、実力差のわからない馬鹿はどつちだろうね。……やりたいなら抜きなよ。おねーさんが遊んであげる」

「ちよつと、クレマンティーヌ！」

エンリが強く呼び止めるが、クレマンティーヌはひるまない。いつもの卑屈さが感じられない。

「エンリ様がそういう趣味なのはわかつてますよ。でも、こんな身の程知らずの雑魚に貸し出すとかは勘弁して欲しいかな。私にもまだプライドとかあるんで、どうしてもやりたくないなら前みたいに手足でももぐとか、動けなくなるまで痛めつけてからにしてください」

「あ、いや、そういうことは……」

殺気を抑えようとしないうクレマンティーヌの鋭い眼光に、エンリは気圧されて言葉に詰まる。マールレの拷問以降では初めて見るような表情だが、これが本当のクレマンティーヌなのだろう。

浅く息を吸って吐いても、まだエンリは言葉を継ぐことができない。かつてクレマンティーヌに拷問を指示したことになっているエンリが実は弱者だと知られたら、この殺気はそのままエンリに向けられるのだろう。それを頭でわかっているだけでなく、身体で感じてしまった。目で、肌で感じてしまった。

しかし、殺気を向けられたエルヤーは止まらない。

「あなたも彼女の持ち物ですか……いいでしょう。確かに奴隷くらい力で従わせられなければ、エンリさんに愛を受け入れてもらうのも難しそうです」

「いい心がけだね。弱くても物わかりがいい男は嫌いじゃない。——あ、すぐ終わらせらるんでパラダイン様ちよつと待っててください。ブレインちゃんも」

「舐めるなよ、奴隸」

「パラダー——つて、ちよ、クレマンティーヌ?!」

——待つて! 何、連れてきてんの!?! どこから話聞いてたの!?!

フルーダ・パラダイン——その名は、イビルアイから聞いた帝国最高の魔法詠唱者マジック・キャスターのもの。見れば、クレマンティーヌの少し離れた後ろに佇む高級そうなローブを纏った老人は明らかに帝国の要人だ。ブレインというのは無精髭も無くなつていて、街で歩哨をしている騎士の服装を豪華にしたようなものを着ているのでわかりにくいだが、盗賊団討伐の時に逃げたブレイン・アングラウスだろう。不思議な組み合わせだが、ブレインについてはインフィーレアがどこに仕官してもおかしくないと言っていたので、クレマンティーヌの監視役か老人の護衛のようなものかもしれない。

そして、エンリの不安は一気に膨らむ。

縛り首。

火炙り。

そんな物騒な言葉が脳裏を駆け巡るのは、カルネ村で王国戦士長に誤解された時以来のことだ。

クレマンティーヌが戻った後でも、どうにもならなくなつたらマーレは全てをまつさ
らにして解決してくれるのだろうか。

——違う！ そうじゃない！

今は城や街が更地になるような事を考えるべき時ではない。エンリは恐ろしい考えを必死に頭の外へ追いやる。

『義の人クレマンティーン』はどこへ行ってしまったのか。人間の奴隷は王国では違法だが、帝国ではどうなっているのか。

エルヤーとクレマンティーン。二人の交わす言葉でエンリが現実に取り戻された時、その戦端は開かれる。

といつても、クレマンティーンは強い殺気を漂わせ挑発をしながらも、いつもの疾走から鋭い刺突を繰り出そうとはしない。先に動くのは、殺気にあてられたエルヤーの方だ。

「私はエンリさんの前で力を示さなければなりません。手加減はできませんよ！ ——
〈能力向上〉〈能力超向上〉」

エルヤーはクレマンティーンと同じ二つの武技を発動して剣を上段に構えるが、クレマンティーンは構えもせず、武技を使う気配も無い。

「格の違いを見せましょう。〈空斬〉！ —— 〈縮地改〉！」

空を切り裂く斬撃がクレマンティーンに迫る。そしてエルヤーは振り下ろした剣を

下段に構え直しながら、不自然な動きで自らが飛ばした斬撃の後を追う。

足を動かさない、滑るような不思議な動きでクレマンティーヌに迫り、そこでエルヤーの姿が大きくブレる。エンリがどうか視認できたのは、ほぼ同時にクレマンティーヌに迫る二つの斬撃だ。

この時点で、エンリには勝敗が見えた。クレマンティーヌの動きはエンリの目では追いきれない。エンリから攻撃が見えているようでは通用しない。

「——遅すぎ」

「ぐあああああつー！」

裏通りにエルヤーの叫び声が響き渡る。

「——治癒だ、ちゆを寄越せ！」

「ふふ、それで格つてのはどれくらい違ったのかなー」

気が付けばクレマンティーヌは剣を振り切ったエルヤーの背後に回り、エルヤーは片膝から勢いよく血を吹き出しながら脂汗を滴らせ、足を震わせていた。エルヤーの鎧には膝当てがあるが、クレマンティーヌのステイレットは並みの鎧など貫通してしまう。

エルヤーは仲間の森妖精エルフに魔法による治癒を命じ、傷の回復をさせる。

「すみません。私もそういうつもりはないので、こういうのはやめませんか？」

エンリは口にしたくない言葉を色々と回避しながら、この場を収めることを提案す

る。思っていたのとかかなり違っていたエルヤーの発言やその嗜好には衝撃を受けてはいたが、わざわざ殺したり痛めつけたい相手とまでは思わない。

そもそもエルヤーの思っているような趣味も無いのだから、それを共有するつもりだつて無い。奴隷を交換して愉しむとかクレマンティーンが怒りを見せたようなことは、そもそもエンリも考えていないのだ。言葉は全く足りないが、そういう意味だ。

「嫌です！ そんな気遣いは要りません。私はこの奴隷に勝つて、あなたと並び立ちたい。受けに回ると手強いようですが、次は油断しません！」

——気遣いじゃなくて、奴隷とかそういう話が嫌なんだけれど。

それでも、下手に言い返すとまた帝国の要人に聞かせたくないような話が始まってしまふような気がして、エンリは黙り込む。

エルヤーは滑るように距離を取ると静かに剣を構え、クレマンティーンに切っ先を向ける。

「いい心がけだね。まだお仕置きが足りないし、続けようつてのにはさんせー。……で、今度はそつちが受けに回ってみる？」

「あなたの使う武技はおそらく防御系かカウンター狙いのものだけでしよう。リーチも短く、私の〈空斬〉を先に潰すこともしなかつた。攻め手に回れば何もできないはずだ」

エルヤーは自信溢れる態度で言い放つ。

「あん？ お前程度に武技なんか使つてないけど？ まー、こつちのお客さんに免じて、見たいならやつてやんよ」

クレマンティーヌはブレインの方を一瞥する。眼光鋭く戦いを注視する姿は、確かにあの時のブレイン・アングラウスその人だ。

あの時エンリの目では殆どとらえられなかつたが、今ならわかる。盗賊団の場で見たクレマンティーヌとブレインの戦いは僅かな時間だが『蒼の薔薇』との戦いにさえ劣らない本物の殺し合いだった。

クレマンティーヌがその気になれば、エルヤーはここで死ぬ。

「クレマンティーヌ、殺すのは——」

「はいはい。言われなくても、この身の程知らずを簡単にラクにさせる気はありませんよ」

「そのような挑発は無駄です！ あなたに間合いを詰める手段はありません。〈空斬〉

！——まだまだいきますよ、〈空斬〉！——〈空斬〉！

確かにクレマンティーヌが遠距離攻撃を行うのを見たことはない。

しかし、エルヤーが幾度も放っている空中を走る斬撃は、幾度か見たクレマンティーヌの疾走よりも遅いように見える。

クレマンティーヌはそんな斬撃を最小限の動きでかわし、受け流していく。

「うんじゃ、いつきますよっ！ 〈能力向上〉〈能力超向上〉——っと、〈疾風走破〉」

連続で放たれた二発の〈空斬〉を受け流しながら武技を発動させると、クレマンティーヌの姿がその場から消える。まだまだエンリの目で追えるような速度ではない。

エルヤーの方を見れば、既に両膝から血を吹き出して崩れ落ちるところで利き腕の肘をステイレットに貫かれ、言葉にならない叫び声をあげている。そして瞬きをするような間に、ステイレットは逆の肘へ。

そのまま地に倒れ伏したエルヤーの頭へクレマンティーヌの足が乗せられる。エルヤーは襟首にステイレットで浅い傷を付けられるまで立ち上がろうともがいていたが、先に潰された膝と肘から先は殆ど動かせなくなっているようだ。

「んふふふ。普段だつたらもつと痛めつけるんだけど、ここにうちの回復役居ないから、残念だつたね」

「……………ちゆをはやくしろ！ 腕も、足もだ！」

裏通りの路面に押し付けられたエルヤーの口から出るのは、恐怖で半ば裏返った割れ鐘のような声だ。涼やかな声の偉丈夫はもうどこにも居ない。地に伏しているのは恐怖と苦痛に顔を歪め、がなりたてるだけの存在だ。

仲間の森妖精たちは動かない。さすがの森妖精も強者であるクレマンティーヌを前

に恐怖に縛られたのかとその表情を窺えば、三人ともねつとりとした暗い笑みを浮かべている。クレマンティーヌの本気の連撃を前に恐怖も警戒も見せないその姿に、エンリは戦慄した。

——不味い。この三人を野放しにしちや駄目だ。

エンリはエルヤーとクレマンティーヌの下へ歩み寄る。

「エンリ様もこいつで遊びますー?」

「……はあ。しないよ。クレマンティーヌ、足をどけて」

エンリは疲れた顔で倒れたエルヤーを見下ろす。

エルヤーは奴隷をどこかに囲って、下衆な享樂に溺れている男だ。さらにエンリのことを同類だと考えていて、それを大きな声で言い放ってくれた迷惑な男でもある。

エンリはエルヤーを殺したいとも助けたいとも思わない。ただ、この男の背負ってきたものを引き受けたくないだけだ。今のエンリにそんな余裕はない。

エンリから冷たい視線を向けられ、エルヤーは斜めに持ち上げた顔に怯えの表情を張り付ける。

「た……助け……」

「エルヤーさん、今後、私たちにはもう関わらないでください。それと後ろの人たち、連れ歩くならきちんと管理してください」

エンリは黒衣の腰あたりにある薬瓶ポーションホルダー受からポーションを引き抜くと、少し逡巡してからエルヤーに振りかける。

与えるのを躊躇したわけではない。直接手渡すという程度の関わりさえ持とうと思えなかつただけだ。

「あの時の助言には感謝しています。さようなら」

見殺しにしたいというわけではない。しかし、助けたいとも思えない。ここでエンリにポーションを使わせたのは、恐ろしい三人の森妖精エルフの存在だ。

エルヤーが動ける程度までポーションを振りかけてから顔をあげると、森妖精エルフの一人と視線が合う。

——やっぱり、この人たちはエルヤーさんじやなきや無理だ。

先ほどの暗い笑みは消え、濁った目に背筋が寒くなるほどの敵意が揺らめく。それは三人とも変わらず、さらに『フォーサイト』のイミーナまで刺すような敵意を向けてくる。エルヤーが弱つたままであれば彼女らが徒党を組んで、この街で何か恐ろしいことが起こっていたのかもしれない。

エルヤーは完治にまで至らない傷の具合を気にしながら、のろのろと立ち上がる。

「……………あなたたち、行きますよ。早く！」

エルヤーは視線を合わせず屈辱に顔を歪めながらも、森妖精エルフたちを率いてくれる。

——自分の危機にあんな笑みを浮かべる人たちと一緒にいたら、色々おかしくなっても仕方がないのかも。それとも、男の人は辛い旅をしていると、そういういかがわしいことが必要なのかな。

「私は……大丈夫、かな？」

誰に問うでもない独り言を小さくつぶやいて、エンリは去りゆくエルヤーたちから視線を外す。

思えば、マーレと出会った当初は常に日常と狂気は隣り合わせだった。血に塗れ、魔物の肉片も浴びた。村にも居られなくなった。冒険者組合で化け物扱いされ、関わった冒険者チームに目の敵にされることもあった。同じ妖精族の森妖精^{エルフ}を三人も連れてくるエルヤーがまともでいられるはずもないし、そのエルヤーがエンリをまともだと考えないのも仕方のないことかもしれない。

四二 いったい何を見ていたんだか

ジルクニフの広大な後宮に居室を持つロクシーは、いつものようにベッドでなく丸テーブルを囲む椅子の一つに腰かけて皇帝の相手をしていた。淡々としたその態度には気負いも無ければ媚びも無い。

「陛下、私にはあのクレマンティーヌの浮かべる笑みが、義の人や忠義などとは程遠いものに見えたのですが」

「正直なところ、私にもそうとしか思えなかった。本当に見事な演技だ。精神防御のアイテムを持っていなければ魔法的な力で騙されているのを疑うところだ」

「私も陛下の様子を見てそういう可能性を考えただけですが、そういうものをお持ちなら違うのでしょうか。……で、いったい何を見てあれを演技だと？」

ジルクニフの表情は変わらない。ロクシーの露骨な皮肉をそれとわかった上で受け流せるほどの確信があるからだ。

ロクシーもその事に気付いて問いを発したのだろう。彼女には相應の知恵はあるが、その手元には情報が揃っていない。

「計算高い者ならば、法国を裏切って王国などに味方することは絶対に無い。たとえば

国で納得のいかない事があつたとしても、私の誘いを断る理由も無いはずだ。王国戦士長やエ・ランテル都市長の出せる謝礼も知れていよう」

「義の人でも計算高い者でも無いとしたら？」

「ふむ。例えば、ただ戦いを好むような者——そんな者なら法国にあつてもいくらでも戦いの場はある。村を助けるなどという切っ掛けで法国と対立するのは不自然だ。あるいは欲深き者——ならば羽振りが良いのは王国の犯罪組織を束ねる八本指だろうが、そこでも強力な戦力が加わつたという話は無いのだ。王国に仕官せず、私の誘いに応じもしないのでは、そういう線もあるまい」

ジルクニフは様々な可能性を潰してみせる。

「それでも、陛下はパラダイン様とアングラウス様を同行させましたが」

「エンリの正体も気にならないわけではない。謁見までに『蒼の薔薇』にも通用する死霊系魔法の使い手という情報が入っていたが、これは王国の関係者としても少々過剰戦力で、じいも気になっていらいしい。本当に実力があるようなら、まとめて勧誘することも考えよう」

そのためにブレイン・アングラウスまで付けてじいを送った。帝国の最大戦力である二人ならば何が起こつても問題は無いはずとジルクニフは考える。

「結局、状況を知るがゆえの判断ということなのです」

「そういうことだ。あの女も、背後にいる王国の関係者も、私の裏をかけるような者であるとは考えにくい。『蒼の薔薇』の件もあり、『漆黒』がああ厄介な黄金の姫と通じている可能性も無いからな」

「……もし、かの黄金の姫が陛下が仰るような恐ろしい方で、そうする目的さえあるなら、同じように高潔な賢人であるようふるまうことも容易なのでしょうね」

微笑むロクシーを前に、ジルクニフは顔をしかめる。

「手厳しいな、まあロクシーの判断はそうなるか。可能なら召し抱えるという方針は変わらないが、ここでは心にとめておこう」

「ここではということとは、後宮での話ということでしょうか。それならば、せめて今のように幾人かと子供を作ってきていただけませんか？ 陛下は落ち込んでも執務はこなしますが、こちらでは随分と後を引きますから」

「……落ち込むことが前提か。まだ召し抱えることもできていないのだが」

ロクシーは扉の方を一瞥し、腰の重い皇帝に退出を促す。

「人生も一夜も短いものです。先を見通して布石を打つのも陛下の得意とするところではありませんか」

ジルクニフは大きなため息をつきながらも、今日のところはロクシーに従っておくことにする。

いずれにせよ、フルルーダを送ったことで既に道筋は出来ている。

クレマンティーンが期待通りの人物であるなら法国出身の彼女の心に響くように帝国の度量を示さねばならないし、それは義の人の方が演技であるという不本意な想定においても決して帝国の不利益となるものではない。もはやできることは、待つことだけなのだから。

場面は再び、血肉が散らばってむせ返るような臭いの漂う帝都の路地裏。

エンリの危機はまだ終わっていないかった。

「陛下に代わって、エンリ・エモットを見定めに来た」

クレマンティーンとともに来たのは、本物のフルルーダ・パラダイン。人類最高の魔法詠唱者だ。
マジック・キャスター

エルヤーを黽りものにしたことで上機嫌なクレマンティーンが軽く詫びてくる。

「すみません、エンリ様とかに会えば納得するみたいなんで一緒に来ちゃいました。時

間切れの時のアレよりはマシかなと思つて……」

その判断にはエンリも異論は無い。——異論は無いのだが、いきなりこんな大物と会つて平然としては居られない。

どう考えてもこんな所に現れるはずのない人物だが、同行したクレマンティーヌだけでなく、『フォーサイト』の魔法詠唱者^{マジックキャスター}で知り合いらしいアルシエまで本物として扱つているので間違ひは無いのだろう。護衛のように佇むのがクレマンティーヌと互角の戦いをしたブレイン・アングラウスというのも物々しい。

黙つてエンリを射抜くような視線を向けてきてから、フルーダは軽く息を吐く。

「すまないが、探知防御の効果を持つ装備を外してもらえないだろうか」

フルーダの言っていることはよくわからない。敵意は無いようなので、クレマンティーヌの前ということで余裕のある態度を装いつつ、求められるままに指輪などを外して装備品の鑑定魔法とやらも受け入れるが、何やら納得できない様子だ。エ・ランテルでのラケシルの時と同様、ガゼフから預かった指輪には驚きを見せていたが、それでも満足はしない。エンリの許可を得て指輪を付けたアルシエをフルーダが凝視し、ゆつくりと首を振る。

エンリの方をちらちらと見ながら、フルーダが元弟子らしいアルシエと勝手に何やら話し合っている。見るといつても、視線が合うわけではないのが不気味だ。エンリの

身体のラインを念入りに確かめるような、落ち着かない視線に晒される。

そして、そのアルシエが近づいてくる。歳は近く幼い雰囲気もあるが、フルルーダと同じような視線を向けてくるのが少し怖い。

「この服の下に何か装備品を付けている?」

「あ、いや、その……何も……」

エンリは少し赤面する。黒い法服の異常なまでの着心地の良さで忘れていたが、エンリは下に何も着ていない。血染みだらけの肌着など村へ置いてきてしまっている。法服だけとはいえ、外套の内側のゆつたりとしたズボンとシャツは肌着より着心地が良く、生地も厚く安心感があるためそれで充分だったのだ。

「上から触れて確かめても良い?」

「えっ……あ、ハイ」

アルシエの無遠慮な手が外套の中へ伸びる。上というのはシャツやズボンの上ということなのだろう。

「……………つふ……………」

鎖骨から手を滑らせ、胸を横から軽く持ち上げるように触られ、脇から背中へ回る。エンリは変な声が出かかるとを抑える。

たまらずアルシエの顔を見返せば、普段通りの冷淡な表情のままだ。

「あう……あの、いったい何を……」

「装備品が無いかを調べている」

言われてみれば、そういう触り方なのかもしれない。

フルーダー・パラダインは帝国の重鎮だ。そんな相手と話をするのに、武器などを隠し持っていないか調べられるのは仕方のないことなのだろう。

だが、これは武器どころか、薄い服や下着、あるいはペンダントなどのアクセサリ一つまでも見逃さないような調べ方だ。

法服のズボンの上から腰を撫でられ、太腿から脚の付け根にもアルシエの細い手が滑り込み、そしてすぐに引っ込められる。

「——ひうつ」

「やっぱり、下着……」

小さな声でそう呟いたアルシエから一瞥されると、エンリの顔は一気に熱を持ち、耳まで真っ赤に染まる。この上品な雰囲気を持つ少女が少し眉をひそめてエンリへ向けるのは、何か違う世界のいかかわしいものを見るような、そんな視線だ。肌着を着ていないのはとづくにわかっているだろうに、この段階でそういう反応になるのがエンリには理解できない。

アルシエは少しの躊躇の後、元の無表情に戻ってエンリの脚に触れていく。

色々あつてエンリ自身の買い物までではできなかったが、エ・ランテルでミコヒメの外套を探した時、そこその店であれば当たり前のように下着を売っていた。

もちろん、普通の村娘であつても手製の服の質がよくないこともあつて、着心地のためには肌着くらいは着るものだ。本来なら生活レベルも服の質もずっとそのままだから、エンリもそういう感覚のまままで不都合など何もないはずだった。生地がしつかりしている上に肌触りがあまりにも良かった今の服では必要を感じていなかった。しかし、質の良い服を売る店でも下着は必ずそろえているのだから、今着ているような立派な法服を着て下着を付けないのはおかしいことなのかもしれない。

——でも水洗いだけで綺麗になるんだから、旅をするならこれだけの方が絶対ラクだし。

エンリが言い訳を考えている間、エンリの身体検査を終えたアルシエが三步ほど余計にエンリから距離を取つてフルーダに向き直る。その距離感が少しつらい。

「装備品はなさそう。でも先生、そんなはずはありません」

「ふむ、それなら死霊系の使い手はエンリ・エモットでは無かつたとか——」

「いえ、私がこの目で確かに見た。あの時はきちんと見えていました！」

アルシエがフルーダに反論する。よくわからないが、下着の有無の話だつたら嫌なのでエンリは注意深く会話を聞き取る。

「それなら……うむ、旅の疲れもあろうし、陛下の大切な客人の連れでもある。今日は城の方で浴場でも用意させるとしようか」

「よ、浴場って!？」

「体を洗ったり、湯につかって寛ぐ場所のことですよ」

横からクレマンティーヌが教えてくれるが、それくらい物語などで知識くらいはある。身を清める場所だ。ただ、それは王族や貴族以外は無縁のもののはずだ。

「大丈夫、私が一緒に行って使い方を教える」

距離はとられたままだが、それでも無遠慮に体を触ってきたアルシエに言われるとエンリは身の危険を感じてしまう。このアルシエは何をしたいのか。エルヤーの告白の時の、汚物を見るような目は何だったのか。

以前から、このアルシエは無表情に見えてたまに目つきが怖かった。一緒に帝都へ向かうことになった当初は、エンリの全てを見通そうとするような不思議な視線を浴びせてきていた。帝都に着くころはそういう視線もなくなっていたが、下着をつけていないことを知られたことでアルシエのそういう感情を刺激してしまったのかもしれない。

ワーカーというのは普通に冒険者としてやっていけないドロップアウト組——エンリはエルヤーへの敬意を根拠にそんな言葉を心の中で否定していたが、エルヤーの正体がアレであった以上、このアルシエにも見た目からは想像がつかないような問題があっ

でも不思議ではない。

「——あとで、案内するから」

「い、嫌っ……普通に、宿に泊まります」

女同士ということに抵抗する気持ちはいつの間にかどこかへ行ってしまっているが、それは相手がマールレだからであって誰でもいいというわけではない。

「ふむ、手の内を見せたくないということなら——ふおおっ!!」

「マールレ!!」

窮地に陥ったエンリの前に現れたのは、マールレだ。イビルアイも連れているが、捕らえた襲撃者の姿は無い。傍らには宿に残してきたはずのミコヒメの姿もある。

「エンリ、ちよつと上手くいきませんでした。襲撃者の拠点らしい場所にも手がかりは無く、それ以上口を割らないまま死なれてしまつて、蘇生も駄目みたいです」

マールレの方はいつも通りだが、当然ながら周囲は転移魔法での出現に戸惑っている。特に二人の魔法詠唱者マジック・キャスターの様子がおかしい。

「せ……先生」

「転移、それも集団転移か。アルシエよ、見えるか?」

「いえ、全く。……吸血鬼の方なら、先生の一つ下です」

「そうだな。私にもそれしか見えていない。……マールレ殿と言うのか。私の名はフー

ルーダ・パラダイン。少し、話をさせてもらえないだろうか。探知防御——いいや、今そんなことはない。まずはその魔法について教えていただきたい！」

「フルルーダさんですか。えっと、あの、ぼくの方も色々聞きたいことがあります——」

こうして、人類最高の魔法詠唱者マジック・キャスターはマールに縋り付くことになる。

その熱意は、異常とも思えたあのエ・ランテルの魔術師組合長のものにも全く劣らない。面倒がつて距離を取ろうとするマールもフルルーダの正体を知ると最低限の情報を開示した上で情報収集を依頼し、フルルーダの側は皇帝の意思を確認することもなく独断で協力を惜しまない態勢だ。マールの探し求める先にマール以上の力を持つ魔力系魔法詠唱者が居るといふ話が決め手となつたらしい。

エンリとしては、真つ先に不穏な浴場行きをお断りした上、あとはこの場の後始末だけをお願いして、積もる話はマールと宿で待つンファイレアに任せることにした。無責任な気もするが、魔法の話題を振られて答えられないと身代わりの件がクレマンティーヌにバレてしまいかねないからだ。最近はクレマンティーヌにも馴染んで、時にはエンリが弱いことがバレても大丈夫なような雰囲気を感じることにさえあつたが、エンリはエンリヤーとの件でそれが間違いだつたと思ひ知つた。

同行していたブレインによって表通りで治安を維持する騎士たちが呼び出されると、

フルーダの命令ひとつで何ら事情を聴くこともなく血塗れの裏通りの後始末を請け負ってしまふ。

——国の騎士って、それでいいの？

『フォーサイト』もアルシエ經由で口止めされ、裏通りでの事件は終わったものとなった。エルヤーは既に立ち去っているが、ヘツケランによると彼はプライドが高いので敗れた以上は何も口外することは無いだろうということだ。

後始末というのは死体などのことを言ったつもりで殺害のみみ消しのように対処されたのは心外だったが、マーレとフルーダの間に問題が起こらないようびくびくしていたエンリはその部分に口出しする余裕も無かった。ただ、人数と雰囲気を与えたところ、刺客を送ってきたのが『イジャニーヤ』という組織で、撃退した戦力規模からこれ以上の襲撃は考えにくいということを聞くことができたので、一応は安心することができた。

エンリはフルーダたちを宿へ案内し、そのまま状況をインフィーレアに委ねた。クレマンティーヌはブレインと打ち解けて、宿へ戻ると気楽に二人で酒など飲んでいた。

翌日、エンリは下着を買うため、宿から逃げるように街へ出た。

もちろん問題は山積で、この日もフルーダが宿まで来ることになっているが、ン

フィーレアが対応してくれることになっている。ンフィーレアは昨日も頑張ってくれたのだが、そのためにはンフィーレアの居ない所で起こったことを説明しなければならなかった。説明しながら、気が付けばエンリは涙目になっていた。酷い顔をしていたらしい。そこで何かを察してくれたようで、この日は一日ゆっくりするように言われたのだ。

幸い、滞在した宿は冒険者以上に他人の詮索を避けるワーカーたちの常宿で、エ・ラントルでの冒険者の宿ほどには奇異の視線を集めることはなかった。同じワーカーのエルヤーとはトラブルになったが、『フォーサイト』のヘッケランによれば彼はそれほど人望があるわけではないようだ。数日前にそれを聞いても絶対に信じることはできなかったが、今なら納得できる。

そのヘッケランとはまだ距離を感じるが、クレマンティヌとエルヤーが衝突したことで幾らか態度が軟化したような気もする。危険な妖精族を連れている中では貴重なまともそうな人なのでもう少し仲良くなりたいのだが、じっくり話をするのはあの感じの悪い半森妖精（ハーフェルプ）の居ない時の方が良いだろう。

宿に滞在する他のワーカーとの関係も問題のあるものではなかった。強者のように扱われるのは話が回っているということだろうが、エルヤーの人望が偲ばれる。ただでさえ危険な森妖精（エルプ）を三人も連れていて、さらに公然と奴隷で……そういうことをして楽

しむと口にするような性格では仕方がないのだろう。

『フォーサイト』のアルシエに下着の話をするのは少々身の危険を感じるので、朝食の時間帯に同じワーカーと思われる妙齢の女性を見つけて下着を売っている店を聞いた。少しこちらを怖がっていたのが心外だったが、親切に教えてくれたので一安心だ。帝都なので色々あると言われたので、似合いそうな所を教えてもらうことにした。

この日はイビルアイを連れていけないので心置きなく大通りを通れる。おかげで道順通りスムーズに到着することができた店だが、入ってみればどうも何かが違う。

店内には一面の、黒、黒、黒。確かにエンリは黒衣に身を包んではいるが、黒さの質が違う。そして売り物たちは黒さ以上に皆どこかがおかしい。値段は決して安くはないのに身体を覆う面積が不条理に狭く、やたらと黒くて艶のあるものが多かった。

素材を見ると、革が多い。身体を守る丈夫さが売りの革製品を狭い面積で使うというのは、何を考えてのことだろう。あのクレマンティーンの装備のように、俊敏な戦士であれば身を護るのは狭い範囲で良いとでもいうのだろうか。そのクレマンティーンは人類最強の戦士だなどと自称することがあるが、この店の非常に狭い面積しか護つてくれない不思議な革の防具を見る限り、俊敏さではまだまだ上には上がいるのかもしれない。

——何かが違う。私は下着を買いにきたはずなのに。

素材面積の多いものを探せば、貴婦人が付けるようなコルセットを伸ばして下半身下着まで繋げたようなものもあるが、充分な面積の割に見えて全く安心感を感じない。なぜか小脇に陳列してある黒革の鞭との関連はわからないが、あわせて見ると表現しよりの不安感を感じる。全く関係のない武器を置いているのは、この攻撃的な雰囲気

を誇張するためなのかもしれない。

さらにその奥の方の片隅では、イビルアイの拘束具のようなものさえ並んでいた。あの不思議と落ち着かない気分になる人間用の轡まである。

——うわ、本当に人間用なんだ。

エンリは後ずさりから回れ右をして、そのまま黙って店を出る。途中までは都会に馴染もうと頑張つて受け入れようとする気持ちもあったが、例の轡まで並んでいたことでさすがに自身の許容範囲を超えてしまった。

——イグヴァルジさんみたいな、上級者のためのお店だ。きつとそうだ。

エンリは街中で妙齢の女性を捕まえて道を聞くことにして、三人目でようやく下着を売る店を教えてもらうことができた。

一人目はエンリの姿を見ただけで無言で逃げた。二人目は服装を念入りに見た上で選んで「あなたが下着を買うような店を教えてほしい」と聞いたなら気味悪がつて逃げた。三人目は実は道を教えるふりをしたスリだったが、エンリの外套ごと金貨袋を切ろうと

してナイフの刃が立たなかつたところを捕まえて、詰め所に突き出す代わりにようやく道を聞くことができた。結局、都会の同性と普通にコミュニケーションが取れなかつたという事実は、少しかだけエンリの心を傷つけた。

しかし、スリから聞いた服屋の下着売り場はエンリの服装に見合う普通の高級店らしく、まるで宝石箱のように綺麗だった。スリの女はそこで買物をしたことがあるわけではないが、店から出る客を狙うことがあるという。

エンリは気分を良くして、旅立つ時に一枚も持つて出られなかつた肌着を新たに買い揃えただけでなく、街の裕福な女性が使うという下半身下着にも挑戦した。価格は高く見栄えも良いが、もちろん着心地は法衣には及ばない。それでも、今では下着をつけること自体が重要なことのように思えてきている。下着を何もつけていないとわかつて眉をひそめるアルシエの表情もはつきりと覚えていて、下半身に触れた段階でそうなつたことも無視できない。店員の態度とあわせて考えれば、エンリの法服くらいのものを着るなら下もつけるものなのかもしれない。

もちろん、この法服を着るような金持ちの使うものを揃えるなど贅沢な発想だということにはわかつている。

それでも、エンリにとってアルシエの行為と態度は気がかりだ。一度そういうことを気にすると、アルシエどころかフルーダまで見ただの見ただのと言つていたことも

何か関係があるように思えてきて、普通には見えない部分の身だしなみの必要性を痛感させるのだ。

これはエンリの女の勤でしかないが、あの二人にはきつと常人には見えない何かが見えている。少なくともエンリはそう確信している。

——二人揃って、いったい何を見ていたんだか。

人生初の下半身下着は、何か股に引つかかるような不思議な感触だ。イマイチ歩きづらいのだが、慣れるべきなのだろう。これは下着が悪いのではなく、エンリの服の方が快適すぎるのだ。店員の反応を見ても、エンリの服の質ならその下に下着を付けているのが当たり前のようだから、少々出費は嵩むがやむをえない。

ついでに、たまにンファイレアがくれる「薬草採集袋の底に敷くような、水分の吸収が良い布切れ」の固定もだいぶラクになる。どうもあれはカルネ村に立ち寄った時のネムの手回しらしいので、ンファイレアは理由をわかって用意しているわけではないのかもしれないが、薬草採取と無縁なクレマンティーヌも率先して手を出すので定期的な問題について余計なことを考えずに済んで助かっている。

「たぶん、一度僕らも謁見することになるよ」

買い物済ませて気分よく戻ってきたエンリに、少し憔悴したンファイレアがそんな

とんでもないことを言ってきた。

この日も宿にフルーダが現れてンフィーレアらと話をしていた。ブレインはクレマンティーンを誘って模擬戦をせがんだらしい。ミコヒメが居るといつても、怪我をすれば痛いのに何を考えているのだろうか。残されてマールとフルーダに挟まれたンフィーレアの苦勞が偲ばれるが、クレマンティーンが居た方が余計に苦勞する部分もあるので居ないなら居ないで良いのだろう。

ともかく、その一言でエンリは眠れぬ夜を過ごすことになる。クレマンティーンでも大丈夫なのだから、という慰めの言葉もあったが、皇帝にとつてはクレマンティーンは最高の戦力で、エンリはどうでもいい有象無象でしかない。そう思うと、昼間の刺客さえも皇帝のさしがねではないかと思えてくる。

エンリは寝つきは良い方だ。村で血塗れの魔女のように扱われマールにその身を許そうとした夜も、襲撃してきたクレマンティーンがマールに四肢をもぎ取られるのを目の当たりにして宿へ避難した夜も、マールがイビルアイを捕らえて蒼の薔薇との敵対が確定的になった夜も、どんな時でも布団へ入って目を閉じればどうにか眠りの世界へ逃げ出すことができた。

それが、この日は全く違った。エルヤーとの最悪の再会も悪いが、何より悪いのは謁見だ。ただの村娘が、皇帝の前に引つ立てられる。それを考えると心がざわつき、とて

つもなく落ち着かない。

頭ではわかつている。マールと同行さえすれば、危機を迎えるのはエンリたちではなくバハルス帝国の方だ。何も問題は無い——わけではないが、これまで起こったことに比べて突出して恐ろしいようなことはないだろう。

それでも、村でなくただの大都市でもなく帝都で、街の商人や神官でもなく貴族でもなく皇帝と会うともなれば、雲の上すぎて自身の緊張の度合いさえわからなくなる。

エンリはふらりと階下へ向かう。深夜で営業はしていないが、宿泊者が水がめから水を貰うくらいは許される。迷惑になるので音を立てないように階段を降りようとするれば、暗闇のほずの下階から明かりが漏れている。

立ち止まって聞き耳を立てると、話をしているのは昼も来ていたはずのフルルダと、マールだった。だが、フルルダの声質は昼間とはまるで別人で、深夜ということもあって声自体は抑えているが声の奥の震えはマールの転移魔法を見た直後のような、心の昂ぶりを隠せないものだ。マールはラケシルの時のように魔法でも見せたのだろうか。あるいは、あの危険な宝珠を……。

——今度は、関わるのはやめよう。

エンリは喉の乾きを癒せないまま、静かに部屋へ戻る。

今のエンリはきちんと下着をつけている。だから、フルルダにあるかもしれない何

かを見抜く目の力を恐れているわけではない。

それでも避けるのは、ラケシルのことを思い出したからだ。下へ降りて話に加わった所である人類最高の魔法詠唱者マジック・キヤスターが血走った目で「ともにこの帝都アーウィンタールを死の街に」などと叫びだすような事態を思い浮かべてしまった。そうなれば、エンリとマーレだけで相手をするのは嫌な感じがしてくる。

話題はフルーダが魔法談義を持ち出し、マーレが「竜王国」の事を聞くなどすれ違いい気味だが、少なくとも二人はそれなりに良い関係にあるように見える。それなら、エンリの関わる余地は無い。エンリだって学習しているのだ。

エンリは自分の水袋をひっくり返し、同室のクレマンティーヌのものまで漁って僅かな水を得て、寝床へと戻った。

「えっと、ぼくたちは帝国の人間たちと一緒に竜王国へ行くことになりました」

唐突なマーレの決定は、謁見の日の朝に伝えられる。

バハルス帝国あるいはフルーダ・パラダインは、それなりにマーレを満足させるだけの情報を持っていた。マーレはフルーダと何度か話し合いを持ち、次の情報収集の地を竜王国と決めたらしい。

「向こうで話を聞くには、帝国から依頼を受ける形で行くのが一番いいそうです。あと、クレマンティーヌは皇帝の思う通りのふりをして、帝国の人間として話を聞く手伝いをしてください」

「ええ、まだそれやるんですか？ 竜王国みたいな小国相手にそこまでしなくても——」
「どれほどかはわかりませんが、竜王国の女王はあの巨大爆発と同じ種類の魔法を使うそうです。なので、その、きちんとやってください」

言葉は柔らかいが、有無を言わせない雰囲気を感じられる。拷問を受けたことのあるクレマンティーヌには、より強いニュアンスで伝わっているのだろう。

謁見では緊張感ばかりが先立ったが、特にものを考える必要も無かった。事前に様々なことがマールとフルーダの間で決まっていた、マールや直前に現れたフルーダから予めすべきことを聞いていたからだ。そのマールが参加せず、エンリ、ンフィーアにクレマンティーヌの三人でというのはどうも納得はいかなかったが、その三人で招かれたのだから仕方ないことだ。マールはあくまで表には出たくないということらしい。

エンリたちは王国との関係を問われ、王国出身の冒険者でしかないことを説明する。クレマンティーヌについても単なる旅の仲間としたが、ジルクニフは納得していない様子だ。それでもフルーダ主導で話が進み、予め聞いていた通り、冒険者として依頼を

受けることとなった。それが今回の竜王国行きだ。依頼自体はバハルス帝国の紹介で竜王国のために働くという単純なもので、帝国へ来る時の依頼に近い。それで報酬が入るのだから普通に考えれば悪い話ではないが、竜王国は激しい戦争の只中にあるため、マールが決めたことでなければお断りしたい仕事だ。

なお、マールの求める情報は謁見の場においては『漆黒』が求めていることになっている。帝国と『漆黒』との間で行われたのは、そういう前提での取引だ。

竜王国はピーストマンの侵略に抵抗するため精強な冒険者を求めているが、ここ最近の大侵攻で滅亡の危機に瀕している。『漆黒』だけでは効率的な情報収集は難しく、バハルス帝国からの援軍の関係者として赴く形をとればそれも容易になるという。

そのため、クレマンティーンが一時『漆黒』から離れ、帝国軍の一員として従軍することになる。白銀に輝く鎧を用意されそうになって固辞した結果、普段の露出度の高い鎧の動きを阻害しない範囲で純白の布を使った服を仕立てられ、聖女のような装いになってしまった。前で合わせるショールで肩を覆い、胸と腰に分かれた鎧は動きやすさを損なわないようツーピースに分けた神官服のようなドレスで覆われている。

その身分は仮のものだが、クレマンティーンはバハルス帝国准将軍ということになっている。竜王国の女王からでも情報を得られるような身分としたのは竜王国での情報収集のために帝国が図った便宜でもあるが、同時にそれに対する対価にも繋がっ

ている。フルーダを介して決まっているのは、後々マールにとつて必要がなくなった後、クレマンティーヌを帝国へ譲り渡すということだ。後付けでエンリがこれを承認する時は幾らか白々しくなりそうだったが、ンファイレアの助け舟で事なきを得た。

それにしても大仰に見えるクレマンティーヌの装いは、竜王国がこれまで対亜人における国防をスレイン法国に頼り切っていたこととも関係があるという。この服装のイメージは人類の守護者なのだそう。実際の援軍部隊の指揮は別人が担うにしても、スレイン法国最強の漆黒聖典出身であるクレマンティーヌを人類の守護者として出した援軍の名目上の指揮官としておけば、竜王国側が勇気づけられるだけでなく、将来正式にクレマンティーヌを帝国へ仕官させる際に法国の横槍が入りにくくなるのではないかという計算もあるらしい。

大災害以降は竜王国への援軍も殆ど出せなくなったとはいえ、法国は亜人との戦いでは率先して矢面に立ち、人類の守護者を自認してきた。その役割を「バハルス帝国の騎士クレマンティーヌ」が担ったとなれば、その存在を認めざるを得なくなるのだとか。

——ンファイヌが一通り説明してくれたけど、やっぱり難しいや。クレマンティーヌの将来が決まったのなら、私たちの安全を考えると嬉しい状況なのかな。

しかし、行先は戦場だ。マールはクレマンティーヌを伴って竜王国の女王から情報を得るといだが、その後でピーストマンの国で起こっていることを調べたいという。ビー

ストマンといえば、人間を食料とする恐るべき亜人だ。エンリが役に立てるとは思えないので、できればマーレには一人で行ってほしい。その際の居場所を考えれば、竜王国での情報収集の際は積極的に関わって、マーレ不在の際にはできるだけ安全な場所に居られる状況を作った方がいいだろう。

第九章 オーバーロードと新世界（四五くマーレ再登場）

幕間一 オーバーロードと新世界

時は物語の始まりの頃か、それ以前か。

ナザリック地下大墳墓。その一室で、墳墓の支配者モモンガは一つのマジックアイテムと格闘していた。

覗き込むその中へ映し出されるのは、見渡す限りの草原。

草が風になびいて、雲が流れる。これは動画だ。

モモンガは目の前の動画へ——それを映し出す鏡へ向けて手を動かす。その動きに従って、動画の中の風景が右へ左へと揺らいでいく。

これで、周辺の実験は上手くいっている。上手くできているつもりだ。

——ゲームの世界が現実になって、その中でレトロゲームのような操作をしなければならぬというのも不思議なものだ。

あの日は——正確にはつい前日のことだが——モモンガにとって楽しい日々の終わ

りとなるはずだった。

もとの世界における西暦二一三八年、かつてのDMMOORPG（脳内ナノコンピュータ網と専用コンソールを接続して仮想世界を楽しむ体感型オンラインゲーム）の雄、『ユグドラシル』はひっそりとサービス終了の日を迎えた。

現実世界は徹底した格差社会だ。自然環境も破壊し尽され、こうしたゲーム類を除けば庶民にはろくな娯楽も無い。さらに、現実におけるモモンガ——その名を鈴木悟という——は世界の大多数を占める貧困層の人間であり、この時代の会社員は同僚と暖かな関係を築けるほど甘い就業環境に無い場合がほとんどだ。

モモンガの場合も、自然と交友関係はユグドラシル内のものに限られた。大切な仲間たちが居る場所で給料もボーナスも多くを突っ込んで必死に楽しみ、ゲーム内では有力ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』のギルド長としての地位を得た。そんな強い思い入れのある世界が終わる日——その日に、異変は起こった。

サービス終了の延期かと考えた。システム関連の不具合も疑った。しかし、NPCの自発的な会話や行動は不具合では説明の付かない範囲に及ぶ。そのNPCに本来の仕様を越えて与えた命令によって確認させたギルド拠点の周辺地理も激変しており、モモンガはユグドラシルの世界とは違う、どこかの異世界に転移してしまったのだと知ることになる。

そして、まずは安全なギルド拠点、ナザリック地下大墳墓の内部からこの鏡——
ミラー・オブ・リモートビューイング
 遠隔視の鏡で周辺を観察している。

これは遠くを見ることのできるゲーム内のアイテムだが、鏡という形状であるせいか、ゲームの時のようにウインドウがでることもなく、得られる視野は鏡の中へ映し出されることになる。操作もゲームシステム上のもとは違っているので試行錯誤が必须要だ。

モモンガは感覚的に学び取った画面のスクロール方法に従って、鏡へ向けた腕を動かして続ける。

しかし、映し出されるのが何事もない草原の風景ばかりだと、どうも不安になってしまふ。

モモンガは横目で傍に控える人物を窺う。こちらへ来てから一貫して落ち着き払った姿を見せるこの男が少しでも焦れているようなら、他の守護者たちを待たせるのも限界かもしれないと考えて。

「——モモンガ様、どうかなさいましたか」

「い、いや、なんでもない。もう直ぐだ」

誰も急かしているわけではないとわかつてはいても、傍らに控えるセバスの鋭い眼光

に気圧されてしまう。

ギルドが不明な場所に転移したかのような状況に加えて、守護者の一人が行方不明という状況——守護者たちがそう認識しているのも、自身の関与については言い出せなかった——にあつては、全ての守護者も絶対の忠誠を誓いながらも、どこか棘のある神経質な雰囲気であるように感じられてしまう。

その中でセバスを傍に置いたのは、最も落ち着きがあるように見えたからだ。

ただ、見れば見るほど、かつてのギルドメンバー、たっち・みーを思い出してしまふ。仲間想いで真つ直ぐな性格だが、切羽詰まった状況になると口数が減り、それゆえに誤解されることも多かった男だ。セバスはたっち・みーが設定を作ったキャラクターなので、色々と似ているのも無理はない。

モモンガはそれをわかつていながら、それでもセバスの雰囲気を少し怖いと感じてしまふ。実際にたっち・みーは怒らせると怖い所があつた。行方のわからない守護者の仲間をすぐに探しに行かない事を決めたモモンガの判断もあつて、今のセバスも怒っていないのではないかと不安になってしまふ。

——あれは、アルベドに続いてちよつと設定を弄つたのがいけなかつたのか、途中で時間切れみたいになつたのが悪いのかな。

とはいえ、モモンガはそれほど心配はしていない。設定を弄つたといつても、ギルド

から去ったままいなくなってしまうような設定にしたわけではない。同じく設定を弄ったアルベドの変化を見れば、行方の知れない守護者ともいずれ会えるような気がするのだ。

問題はむしろ、他の守護者たちかもしれない。これ以上心配させないよう早急にギルドの所在地や状況を調べ、安心させてやりたいところだ。

しかし、状況は停滞している。二次遭難を避けるための遠隔視^{ミラー・オブ・リモートビューイング}の鏡だが、操作さえろくに把握できず、単純な画面スクロールしかできていない。そのことを感づかれないうように振る舞っているが、セバスはわかっていて黙ってくれているのだろう。

そんな状況で、それでも怒っているのではないかと心配するのは良いことではない。セバスとも、たちち・みーとの関係くらい馴染んでいたらまた違ってくるのかもしれないが、今はまだそこまで慣れていない。

モモンガは若干の焦りを反映して腕を大きく動かし、それまでと違う操作方法を知^るる。

「おっ、これは！」

似た動きで違う角度、違う方向。試す切り口さえわかれば、様々な操作が見えてくる。やはり難航していたことをわかっていたらしく、セバスも拍手と称賛を送ってくれる。それを受け入れながら、モモンガは優しく見守ってくれていた部下を恐れていた自

分を少しだけ恥じる。

光が見えれば、走りださずにはいられない。まして、大切なギルドを守るためのことだ。そろそろ休息をといてセバスの提案を退け、モモンガはひたすら操作を続ける。

やがて、建物と知的生物を同時に発見することに成功する。

ナザリック地下大墳墓から南へ数キロ、やや立派な建物と多くの粗末な建物が同居する牧歌的な集落。

それは激しく逃げ惑う知的生物——人間たちの背景としてのみ認識される。

「祭り——ではないか」

朝早くに大勢が慌ただしく走る姿は不自然極まりない。時間が昼過ぎで、追う側が被り物や作り物だったなら祭りとも思えたかもしれない。

「はい。これは違います」

セバスの声は硬い。鏡の中へ鋭い視線を送っている。

鏡の向こうでは、質素な服を着た村人と思しき人々に、武装した牛頭人ミノタウロスが襲い掛かっている。その武器には血がついているが、今は武器で脅して生け捕りにしようとしているようだ。

それは、捕食者と被捕食者の関係なのだろう。村人たちは逃げ惑い、牛頭人ミノタウロスは舌なめずりをして追い回す。

「ちっ！」

モモンガは舌打ちとともに光景を変えようとする。亜人の食い物になる村など情報源になりはしない。もし、より情報を得ていたら踏み込む価値を見出したかもしれないが、今のこの状態ではそうする価値を感じない。

——今の俺がアンデッドだからか？ 人間を助けようと思えない。正義の味方であろうとも思わないが、これは、あまりにも……。

牛頭人ミンタウロスに囚われた村人の一人と目が合う。——いや、合った気がただけかもしれない。この鏡による監視を知り得るはずがない。

「どう、致しますか？」

不意にかけられるセバスの言葉。モモンガは当然、見捨てると答えたはずだ。助けに行く価値も利益も無い。

しかし、わざわざ問いかけてきたセバスの背後に感じたのは、かつてのたっち・みーの姿。

——誰かが困っていたら助けるのは当たり前、だったかな。

誤解されやすい所もあるたっち・みーと親しくなれたのは、モモンガがかつてたっち・みーに助けられたからだ。陳腐な言葉だが、ゲームの中の異形種狩りに苦しめられた自分を救ってくれた言葉。それを思い出してしまえば、助けに行かないわけにはいかな

い。

——恩は返します。……いずれにせよ、外の世界の脅威がどれほどかは調べなくてはならないし。

映像の中では、逃げる途中で転倒した少女の足に牛頭人ミノタウロスの太い腕が迫っている。

「セバス、ナザリックの警備レベルを最大限にせよ。私は彼らを助けに行くとしよう」
命令の伝達役としてセバスを残し、前衛として完全武装のアルベドを、後詰として隠密行動の得意なしもべを複数送り込むよう命じる。

《転移門》ゲート

距離無限、転移失敗率ゼロの魔法によって、モモンガは映像の向こうへ踏み出す。

眼前に広がるのは、映像の中の光景だ。

少女の細い足首を掴み上げる牛頭人ミノタウロスに対し、モモンガは躊躇なく魔法を発動させる。

《心臓掌握》グラス・ハート

初手に選んだのは第九位階の即死魔法。抵抗されても朦朧状態にさせることができ
るため、その場合は《転移門》への撤退の時間も稼いでくれることになる。敵の力がわ
からない場合の、モモンガにとっての定石の一つだ。

魔法が発動すると、モモンガの手の中で柔らかいものが潰れる感触が得られ、牛頭人ミノタウロスが少女を手放し、自由になった少女に続いて無言で地面へ崩れ落ちる。

牛頭人ミノタウロスの死骸はゲーム時代と違って圧倒的な存在感を残していたが、その存在自体が非現実的なものであることもあり、それほど気にはならない。それより少し高い所から落ちた少女を気にするが、こちらは無事なようだ。

少女の顔を覗き込むと、明らかな怯えの色がある。助けに来たモモンガに見せるべき表情では無いが、まだ脅威が去っていないということなのだろう。気が付けば他の村人を追っていた別の牛頭人ミノタウロスが接近してきている。

「せっかく来たんだ、実験させてもらうとするか。——ドラゴン・ライトニング《龍 雷》」

次は第五位階の攻撃魔法を、あえて特殊技術スベキルでの強化無しで放つが、牛頭人ミノタウロスは白い電撃を纏って輝き、焼け焦げた死骸となって地面に転がる。

「弱い……この程度でも一撃か……」

一撃で終わっては実力を見ることもかなわない。幸い、まだ牛頭人ミノタウロスは残っているため、モモンガは特殊技術スベキルの中位アンデッド作成によって死の騎士デス・ナイトを生み出す。これはどんな攻撃でも一度は耐えるという防御に秀でた盾役だが、その分攻撃力は先程のドラゴン・ライトニング《龍 雷》にも大きく劣るため、敵の実力を見定めるのにもちようど良い。

——えーと、そこから生えてくるのか？

黒い靄もやが心臓を握りつぶされた牛頭人ミノタウロスを覆うと、その死骸に溶け込む。死骸がゆらりと立ち上がると、牛頭の口からゴボリと粘液状の黒い液体を吐き出し、それが牛頭人ミノタウロスの姿を覆っていき、形を歪めていく。

数秒後、闇がスリりと去った所へ残ったのは、モモンガも知っている、ゲームだった頃の死デス・ナイトの騎士の姿。獰猛で暴力的な、まさに死霊の騎士と呼ぶべき存在だ。

——これの原材料は人間ではなく少し大きな亜人だったのか？ そんな設定無かつたと思うけど、体格的には合うのか。

ゲームの頃のビジュアルと同様、兜の中の顔が腐り落ちていてよくわからないこともそんな考えの支えになる。しかし、今するべきことは設定を思い出すことではない。

「この村を襲っている牛頭人ミノタウロスを殺せ」

「オオオアアアアアアアアア——!!」

咆哮、そして疾走。

モモンガはなすすべもなくその背を見送り、ユグドラシルと違う世界であることを思い知る。

ゲーム時代なら周辺に付き従い、牛頭人ミノタウロスを迎撃することになる。しかし——。「盾役なんだけど、まあ、動けるなら行くよなあ……命令したの俺だけだ」

モモンガは口の中で失敗を振り返る。NPCが自由に動く以上、特殊技術スぺシャルで喚び出し

たアンデッドが命令通り無制限に動くのも当然のことだ。

——ここは盾役としてもう一体作っておくか。次は死体無しで試してみようかな。

そう考えた所で、《転移門》から漆黒の全身甲冑を纏う細身の戦士が現れる。

「準備に時間がかかり、申し訳ございません」

その声はアルベドのもの。防御系最強の戦士として、ナザリックのNPCの中でもこの上無いほど優秀な盾役だ。

「いや、ちょうど良いタイミングだったな」

「ありがとうございます。それで……その下等生物の処分はどうなさいますか？ お手を汚さぬよう、私にお任せいただくのがよろしいかと」

「……セバスから何を聞いてきたのだ」

組織において引き継ぎは大切なものだ。モモンガは少し呆れつつアルベドにここへ来た目的を告げ、少女の方へ向き直る。

恐ろしい目にあつた直後だけに、少女にも怯えの色が濃厚だ。掴み上げられた時か下へ落ちた時かわからないが、膝が腫れ上がって歩いて歩けそうにない。

「ひっ……」

「待て、私は敵ではない。お前たちを助けに来たのだ」

モモンガは、肘で地面を擦りながら後ずさりする少女をなだめる。

「……ご主人様の、お味方なのでしょいか」

「ご主人様？ よくわからないが、お前たちの味方のつもりだ」

少女の怯えの感情の緩みを見て、モモンガは下級治療薬マイナーヒーリング・ポーションを差し出す。

「怪我をしているな。これは薬だ、飲むといい」

「この色は？ それにお薬をいただくには、あの、私はまだ準備ができておりませんが……」

「準、備？」

「温情によつて薬を下賜されながら受け取らないとは、この下等生物風情が——」
「待て。武器を下げる。何か誤解があるようだ」

モモンガは少女と意思疎通が上手くいっていないことに困惑するが、今はそれよりアルベドが危険だ。振り上げた武器は下ろさせたが、それでも濃厚な殺意が滲み出している。

「何を言いたいのかわからないが、これは治癒の薬だ。まずは飲め。それから話を聞かせてもらおう」

「治癒？ ……私は、召されるのではないのですか」

少女に押し付けるように渡すと、一瞬の躊躇の後で一気に飲み干し、そして治癒の効き目に戸惑いを見せる。

「さて、準備とは、召されるとは何のことか教えてもらえるかな」

「は、はいっ。お菓をいただいて我が身を捧げるには、その、まだ充分に育っておりませんので——」

モモンガは少女をまじまじと見る。歳の頃は十二、三といったところか、確かに幼い。それより、ご主人様とは何者か。こんな少女がそういう目的で囲われるとはどういうことなのか。

——こつちの世界も、甘くはないってことか。

生き残っていれば向こうの一番大きな建物に立て籠もっているはずだという「ご主人様」には騒動が終わってから会ってみるとして、モモンガは少女が魔法というものの存在を知っているかどうかだけを確認しておく。人目のある所で魔法を使っても問題の無い世界かどうかは今後の行動を決める要素だ。

「魔法——見たことはありませんが、長老からそういうものがあると聞いたことがあります」

「そうか、なら問題ないか。私は魔法を使える者、魔法詠唱者だ」

モモンガは少女に護りの魔法を与えると、その場に留まるよう言い置いて、死の騎士の向かった方へ歩きだす。

周辺に敵影は無く、記憶にある村の全体像から見ても襲撃の危険は少ない。少女に関

してはこれで充分だろう。

「あ、あの、助けてくださってありがとうございます！ごさいますー！」

モモンガは片手を上げるだけで声に応える。本当の意味で少女が助かるには「ご主人様」とやらがどうにかならないといけないのだろうが、そこまでしてやる義理も無く、どうなるかはわからない。これ以上の会話を切り上げるのは、情が移らないようにするためだ。

ただ、現実の存在として見る牛頭人ミノタウロスは凶暴かつ醜悪で、確かにあれに捕まるくらいなら同じ人間に支配されていた方がマシに思えるのかもしれない。

——しかし、俺の方が怖くないってことか。うん、助けたしな。当たり前だよな。

モモンガは自身の骨の手を見て今の自分が骨だけの姿だということを思い出すが、牛頭人ミノタウロスよりはマシなのだろうと自分を納得させる。

——それにしても、この姿の割には怯えが少なかつたな。牛頭人ミノタウロスの素行が悪いだけで、ユグドラシルみたいに結構色々といえるのかもしれないが……一応隠すだけ隠しておくか。

モモンガはアイテムボックスから適当なガントレットと仮面を取り出す。装備品として一般的なガントレットはいくらでもあるが、マスクというのはそう多いものではない。必然的に十二枚も所有しているアイテムへ行き当たる。

その名は『嫉妬マスク』。クリスマスイブの夜に一定時間ゲームを遊んでいると手に入る、あてつけのようなアイテムだ。ユグドラシルの歴史が十二年間であることから、その枚数はそのままモモンガの歴史でもある。効果は、プレイヤーの心に染み渡る諸々の感情を除き、特に無い。

「オオオアアアアアアアアアア——!!」

咆哮が空気を震わせる。

体格では互角に見える死の騎士^{デス・ナイト}と牛頭人^{ミノタウロス}だが、その戦いは一方的だ。牛頭人^{ミノタウロス}の側も数体で囲んで戦棍^{メイイス}や戦^{バトル}斧^{アックス}で攻撃しているが、ダメージが通っている様子は無い。

一体の牛頭人^{ミノタウロス}が三メートルほど軽々と吹き飛び、のろのろと起き上がる。これは巨大な盾による攻撃だ。死の騎士^{デス・ナイト}の側は弄んでいるだけなのか——そう思った瞬間、それまでに無い素早い動きで背を向けて走り出した別の牛頭人^{ミノタウロス}に迫り、その腹をフランベルジュで貫く。

与えた命令は「殺せ」だ。だから逃げる者は殺す。期限は定めていない。だから逃げない者は弄ぶ。

モモンガは召喚者として、なんとなく死の騎士^{デス・ナイト}の行動が理解できた。ゲーム時代とは

違う、圧倒的な自由度だ。

——ゲームではないから当たり前前なのだろうが、牛頭人^{ミノタウロス}といつても皆、顔立ちや装備が少しずつ違うのだな。

殺戮を眺めていても何ともないのは、死んでいるのが牛頭人^{ミノタウロス}ばかりだからかもしれない。牛頭人^{ミノタウロス}たちは、人間を全て生け捕りにしようとしていたようだ。村人の幾人かは木製の粗末な檻のある馬車に詰め込まれていて、そうでない者は逃げ出そうとすることもなく呆然と座り込んで戦況を眺めている。

「お、おれを逃がすために立ちふさがった者には金をやるぞ!!」

そんな声を聞いて、モモンガは気付く。凶暴に見える牛頭人^{ミノタウロス}であつてもこの世界では知的生物であつて、世界を知るために役立つかもしれないということ。

『死の騎士^{デス・ナイト}よ、そこまでだ。残りは生け捕りにする。あとは逃さないようにしておけ』
モモンガは思念で命令を下す。死の騎士^{デス・ナイト}に殺された牛頭人^{ミノタウロス}が従者の動死体^{スクワイア・ゾンビ}となつて起き上がり他の牛頭人^{ミノタウロス}を襲つていたので、これも片付けさせておく。

生き残つた牛頭人^{ミノタウロス}たちは、死の騎士^{デス・ナイト}によつて人間たちに代わつて檻の中へ移動させておく。村人の見えていない所で幾人か情報源としてナザリックに送つておくつもりだ。死の騎士^{デス・ナイト}に方法を伝えずに拘束を命じると牛頭人^{ミノタウロス}たちの両足の腱を切り始めたので、途中で止めさせて彼らが用意していた縄で縛らせた。

——これは設定通りに残忍なのか、あるいは召喚者の俺が牛頭人ミノタウロスどもを所詮モンス
ターと考えているせいかもしれないな。……やらせてみれば意外と手先も器用じやな
いか。

簡単な結び方で、力任せに外れないよう締めているだけだが、死デス・ナイトの騎士のいかつい姿
とその作業が似合わないため、それだけでも器用に頑張っているように見えてくる。

「さて、君たちはもう安全だ。私はこの村が襲われているのを見て助けに来た者だ」
馬車の檻の扉を開け、解放した村人たちに告げる。仮面の怪しい男を前にしても、村
人たちは先程の少女と違って心から安堵の表情を浮かべている。

——仮面の効果は抜群だが、どうも警戒心がなさすぎるような気もするな。……おや
？

厳しい世界に育ったモモンガは、無償の善意ほど怪しいものは無いことをよく知って
いる。ここでは怪しまれないよう助けたことについて報酬を要求するつもりだったが、
村人の反応をうかがううちにその必要を感じなくなった。それでも、文明レベルの割に
栄養状態の良い村人たちの姿を見れば、ここで現地通貨などを得ておくことも悪くない
と思えてくる。

そこで所在なさげに周囲を見回すと、村人たちの中で一人だけ老いた男が沈痛な表情

で俯いている。他は全て若者と子供ばかりであることから、少女の言っていた長老なのだろう。

「どうした？ 危険はもう去っただろう。身内でも亡くしたのか？」

「……お答えしたいのですが、ここでは他の者たちが混乱します。よろしければ、ついてきて戴けませんか？」

長老が大きな建物を指し示す。例の「ご主人様」とやらが居る場所だ。少女の話からあまり良い感情は無いが、立場のある相手なら得られる情報の価値も高くなるのは間違いない。

「あの建物で話を聞けるといふことか。それなら、先へ行っていてくれないか。私はさきほど助けた少女をここへ連れてきてから向かうとしよう」

——あの少女には素顔を見られているしな。さて、魔法による記憶操作だが……この世界ではどう作用するものか。

長老が入っていった家は村の広場からすぐのところであり、掘つ建て小屋のような村の殆どの建物に比べて堅牢な作りだった。しかし、襲撃で破られたのか扉は破壊され、中へ入ると屋外とは違って壁や調度品に血飛沫が飛散している。視線を動かすと、広い

土間の隅に一体の死体が――。

「これは、牛頭人……撃退したのか」

「しかし、多勢に無勢でした。私たちの主の亡骸はこちらです」

現れた長老により、奥の部屋へ案内される。そこではさらに増えた血飛沫が、殺し合
いがあったことを物語っている。部屋の左には真新しい傷のついたテーブルと数脚の
椅子が、右には暖炉があり、暖炉の前に二つの死体が寝かされている。非力な人間によ
り運ばれたのを物語るように、床には少し引きずった跡も見える。

「これが主とは……人間では無いのか？」

「はい。我々の主はこちらのビーストマン様でした。もちろん人間ではなく、人間の視
点で言えば亜人という存在と聞いております」

長老が言うには、この村の人間たちは全てこの家に住んでいたビーストマン夫婦の庇
護下であり、その死亡を伝えればビーストマンから知識を授かっている長老以外の人々
には深刻な混乱が起きるといふ。

ビーストマン夫婦二人分の遺体を見た後、長老が椅子に残っていた血糊をボロ布で拭
き取って着座を勧めるので座る。

「亜人……人間はその庇護下にあるというのか」

化け物に従うと考えれば理解しづらいかもされないが、牛頭人ミノタウロスのような危険な種族が

襲ってくるような世界なら、より強い異形種に従うのも悪い選択ではないのかもしれない。モモンガは異形種ギルドを率いていたこともあり、後者の考えが通用するならこの世界も案外暮らしやすいかもしれないと思えてくる。

「庇護と呼べる状況かどうかはわかりません。牛頭人の王国では、人間は潰されれば食料となることもあります。命の尽きる最期の時まで鞭打って働かされると聞いております。また、トロールの国では赤子が好まれるため、人間は繋がれたままの繁殖となり潰されるのも早いそうです」

「それで、彼らは牛頭人ミノタウロスやトロールと違って温厚なのか？」

「はい、ビーストマン様の国では肉付きの程良いものが好まれます。特にこの牧場では高級な畜肉を産出する伝統があるため、腹いっぱい食事を与えられて行動の制約も少なく、主様に召される時まで幸せに生きることができます」

「——おいおい、巫人だらけか。それにどこも悲惨じゃないか。
「そ、それなら、体力も十分にあるのだろう。今は皆で逃げ出すチャンスということになるな」

長老は怪訝な顔をする。お前は何を言っているのだ、という雰囲気だ。

「私たちは自分の力で生きていくことができます。別のビーストマン様が主に収まってくださるのを待つしか無いでしょう」

「それでは、最後は喰われてしまうではないか」

「何を当たり前のことを仰っているのでしょうか」

「は？」

話を通じているように通じていないような不安感に、苛立ちが混じってくる。

「私たちはここでたくさん食事をいただき、子供をたくさん作って、天寿として主様に召される、そういう存在です」

「……人間とは、皆そのように生きているのか？」

「他の牧場では、ここまで豊かでないと聞いておりますが、牛頭人ミノタウロスやトロールの国よりは幸せであると聞いております」

「ここは甘い世界ではない。それがわかっていても、モモンガは問わずにはいられない。」

「じ、自由な人間というのは存在しないのか？ ビーストマンの支配に抵抗して、自由を求めるといふことではないのか？」

「辺境へ逃れてそこで増えた野生の人間も居ると聞きますが、狩猟を楽しむビーストマン様もおりますので、戯れに腕や足をもがれて不具となる者も多いそうです。かつては捕らえられた子供が牧場へ来ることもありましたが、皆が野生に戻りたくないと申しておりました。痩せた土地で飢えや魔物と戦いながら狩りに怯える野生の生活になど何

の価値がありましようか？」

モモンガは愕然とする。

頭をウォーハンマーで殴られたような衝撃だ。種族特性である精神の沈静化がそれを抑え、そのあとに来るのは静かで深い嫌悪感。

モモンガとて、元の世界でそれほど幸せだったわけでも、幸せを勝ち取るために戦っていたわけでもない。

モモンガの居た世界でも、企業に所属しない人間のありようは、まさに長老の言う「野生」も同然だった。それどころか、企業に所属する道を選んだとしても安らかな暮らしが保証されるといふわけではない。職を失うか一定の年齢になればささやかな予防医療も制限の厳しい健康保険も全て切られ、ガスマスクやゴーグルでも防ぎきれない環境汚染のツケを払って幾多の病魔に蝕まれる苦痛にまみれた死が迫るのみだ。その恐怖から逃れるには、無事な臓器が残っているうちにそれらに対価として尊厳ある最期を買わねばならない。それさえ受け入れれば安らかな――。

これは、同族嫌悪のようなものかもしれない。

仲間たちの中には、パンとサーカス――食べていく上で最低限の給与と、現実逃避が可能な娯楽――で誤魔化されていた現実に目を向ける者もあつたが、モモンガはずっと目を背けていた。それは直視してもどうにもならないことだからだ。

そんな日々でも、モモンガにはユグドラシルがあった。そこには仲間が居て、皆で作り上げたギルドがあった。

——それでも、楽しかった。楽しかったんだ。

モモンガはすぐに長老に反論できなかった。抗いようのない運命に抗うことを、当たり前のこととして他人に求められるような生き方をしていたわけではない。

この時は、アンデッドの身体になったことで得られた精神の沈静化作用があった。そして沈静化の後には、種族が変わったことで人間に親しみをほとんど感じなくなった心の変化に注目し、そこへ長老に反論しなかったことの原因を求めた。

モモンガは唾棄すべき現実を半ば受け入れつつ、この世界の人間という存在から一歩距離を置くことになる。

「……わかった。お前たちのことについては、少し考えさせてくれ」

この時、モモンガは苦々しい感情を声に宿した自覚はある。傍らのアルベドがモモンガを心配するほどに、それは明らかだった。

「モモンガ様、幸い、ナザリックには人間を食料とするしもべもおります。この下等生物どもは言わば戦利品、そのままそうしたしもべたちの食料として持ち帰っては——」

「アルベドよ、少し黙れ」

骸骨の表情は変わらないが、モモンガの声は苛立ちを露わにしたものだ。

「——は、はいっ！ 申し訳ございません！」

「……いや、すまない。アルベドよ、お前に苛立っているわけではないのだ」

アルベドの言葉は受け入れられないが、モモンガを心配しての言葉には違いない。それはすなわち、支配者としての威厳を保つため、早く方針を決め指示を与えなくてはならないということだ。

「も、勿体なきお言葉！ 苛立ちの原因が何であれ、守護者統括としてそやつらに——」
「アルベドよ。いったん外へ出て《転移門》を開く。お前は捕らえた牛頭人の半数を連れてナザリックへ戻り、守護者統括の任に戻れ」

「申し訳ございません。私に粗相があつたのなら罰をお与えください。しかし、モモンガ様を守る任務だけはどうか私に」

「心配するな。ナザリック地下大墳墓の戦力を全て把握している私が、盾役として最も信頼しているのがお前だ。しかし、脅威の無いことが確認できた今、見知らぬ土地に来てしまったナザリックの護りこそが最大の仕事と知れ。捕虜どもはそのために役立てよ」

「かしこまりました！ しかし、そうなると護衛の者は——」

モモンガはアルベドの答えを待たず、《伝言》でセバスとアウラを呼び出す。

セバスはアルベドと同様に優秀な戦士だが、モモンガは護衛の必要を感じていない。

ただ、長老や人間たちから話を聞いて目の前の問題を考えるにあたっては、人間を戦利品と言いつつ放ったアルベドでなくセバスを傍へ置くべきと考えたのだ。

アウラについては牛頭人ミウタウロスの残り半数を逃がす際に追跡させ、配下の魔獣とともに偵察を任せる旨を伝えておく。アウラは優秀なビーストテイマーであり、単身でなく飛行能力や隠密能力を持つ魔獣を中心に連れてくることになるだろう。

—— たっちさん、俺、どうすればいいんでしょう。

幕間二 オーバーロードと亜人の国々

《ゲート転移門》で捕虜を連れたアルベドを送り出したモモンガは、セバスとアウラに命じて残った牛頭人ミノタウロスたちを解き放つ。

「この辺りで騒ぎを起こすな。もし次があるならば貴様らの国まで死を告げに行くこととなろう」

転がるような勢いで散り散りに逃げる牛頭人ミノタウロスを見送りながら、偵察を任せられたアウラはすぐにはこれを追わない。牛頭人ミノタウロスの視界や認識能力の遙か外側からでも十分に追跡が可能だからだ。

モモンガはセバスに先に長老の待つビーストマンの屋敷へ戻っているよう命じ、その場に留まる。

「モモンガ様、牛頭人ミノタウロスの群れが弱ければそのまま従えて参りましょうか」

「やめておけ。どれだけの戦力を有しているか不明な以上、慎重を期するべきだ。まず最優先の命令として、偵察に気付かれたと判断した場合は速やかに撤退せよ。そして可能な範囲で、奴らの拠点の位置や数、そして戦力を調べるように」

「はいっ！」

元気な返事をするアウラの頭を撫でると、モモンガはセバスが屋敷の中へ入ったのを横目で確認し、小声で耳打ちする。

「偵察の際にマールを発見したら、連れ戻すように」

不意に顔を寄せられ、ほんのりと赤面するアウラ。しかし、言葉の意味に気付くとすぐに顔を戻し、驚きに目を見開く。

「も、モモンガ様、マールは——」

「少し問題が起こっているだけだ。後で事情を話すが、このことは他言無用と心得よ」

「……は？」

マールの姿が無いことが知られた時に守護者たちに不穏な雰囲気漂ったので、モモンガはそれが自らの意図通りであるように振る舞っていた。そこには混乱を避けたい気持ちもあったが、それだけではない。NPCはギルドの仲間たちが作り出した、いわば仲間の子供たちのようなものだ。モモンガは、そんなNPCである守護者同士がいがみ合うのを見たくなかったのだ。

だが、偵察を出す以上そこでマールを発見できる可能性もある。幸い、偵察に適した能力を持つのはマールの姉のアウラだ。モモンガは、同じ創造主を持つきょうだいであれば本当のことを知ってもいがみ合うことは無いだろうと考えた。

神秘的な顔で返事をするアウラの頭をもう一度撫でると、モモンガはできれば柵上げに

したかった仕事へ戻る。

向かうのは、セバスと長老の待つ屋敷。そこにいるのは、食料としての扱いを口にされても抗議の声ひとつあげなかった人間の長老だ。

——ああ、気が重い。

もはや見ていたくもない相手だが、情報は得なければならぬ。

周辺地理については、ここはビーストマンの国の辺境で、北にあるミノタウロスの王国の国境と比較的近いということしかわからない。ただ、ナザリツク地下大墳墓はミノタウロスの王国の領内に存在している可能性が高そうだ。

「遙か遠くで、野生の人間が多く暮らす国というのもあるそうですが、すぐに滅びるだろうと聞いております。畜肉業者のビーストマン様から伺った噂話ではありますが、人間狩りが続く中、恐怖のあまり女王が幼児返りを起こしたとか」

モモンガはビーストマンより人間の扱いが過酷だというミノタウロスの王国と、遠くの人間の国が気になった。先程話に出たトロールの国については、人間の国同様、どこにあるかはよく知らないらしい。

「それほど近いのなら、以前にもこういう襲撃があつたのではないか？」

「亡くなられたビーストマン様ご夫婦が受け継がれる前、この牧場を創設されたビースト・ブラザー様の頃には何度かありましたが、非常にお強い方で、お一人で最大百以上

もの牛頭人^{ミノタウロス}たちを撃退されました」

「ビースト・ブラザー？」

「この牧場の創設者でございます。私どもが安定した給餌を戴き、服まで用意して戴けているのは全てビースト・ブラザー様の新しい牧場経営方式によるもので、私どもにとつては神のごとき存在です」

長老の持つビースト・ブラザーとやらへの敬意は本物だ。少なくとも、ビースト・ブラザーによつてそういう知識を与えられているのだろう。

聞けば、ビースト・ブラザーが牧場経営に携わるまで、ビーストマンにとつて人間を困う牧場というものは主に狩りの際に捕らえた稚児を大きく育てて喰らうためのものだったらしい。時折、繁殖を試みて数を増やそうとする者もいたが、牧場に囲われた人間は栄養やストレスなど様々な事情によつて乳児の保育に失敗することも多く、非常に効率が悪いものとされていた。

ビースト・ブラザーが牧場経営で成功したのは、安定した給餌だけでなく、人間たちに服を着せ、ある程度の自由を与えることにかえつて繁殖力が上がる結果になったからだ。

人間に自由を与え、この長老のような人間の中の代表者に知恵を与えて牧場に生きる者としての教育をさせる。誇りあるビーストマンがそこまで下等な人間の世話をして、

わざわざ食料や服を充分に用意する滑稽さを笑う者は多かった。繁殖に成功しても、かけた手間やコストに見合わないという見方をされていた。

だが、ビースト・ブラザーの牧場の肉が上流階級の食卓で高く評価され、最高級の肉として高額で取引されるようになると、誰もビースト・ブラザーを悪く言う者は居なくなつた。

この成功によつてビーストマンの国では人間を繁殖させる牧場は増えたが、その経営の真似事は表面的な部分に留まっている。知恵を与えることもなく、食餌の量は増えてもその質はこの牧場に大きく劣り、服もボロ布を巻く程度となつていそうだ。

——富裕層向けの肉牛に、貧困層が飲めないような本物の発泡酒を与えるようなものか。強かつたというし、まさか……。

「ビースト・ブラザーとやらは、お前たちを喰……食事として扱うことはあつたのか?」
「はい。牧場の決めごととして決して私どもの前で、私どもの肉とわかる形ではお召し上がりになりませんが、自家用の肉も残しておりましたのでお召し上がりにはなつていたものと思います」

「そうか。うん、そうだよな」

モモンガはその声に安堵の色を隠さない。

——人肉を食つてる時点で違うよな。別に異世界の人間でなくても工夫くらいする

か。

そこから、ビースト・ブラザーへの関心はこの世界のビーストマンという種族のことを知るためのものとなった。彼はその中の改革者の類に過ぎないものとモモンガは考える。

長老の案内で書齋へ踏み込むと、牧場に関連する資料や帳簿などが整然と並ぶ中、鍵のかかった堅牢な箱が見つかった。

「それは、代替わりの後でビーストマン様より開ける方法を聞かれたことがございますので、ビースト・ブラザー様のものと思われまます」

もちろん、その時には開けることができなかつたらしい。

モモンガは箱を懐へ入れる。貴重な情報源には違いないが、この場で開けようとは思えなかつた。

ビーストマンの館を調べ終えた後、モモンガはセバスとともに他の人間たちにも話を聞いた。彼らの恐怖の対象である牛頭人ミンタウロスを撃退したことで人間たちは落ち着きを取り戻していたが、混乱を避けるため牧場主たるビーストマンの死は伏せたままだ。

牧場の人間たちは、長老ほど知識を持たない。といつても、違いといえば牧場の外の世界やビーストマン以外の亜人へのおそれが極めて大きいことと、慣習的に牧場主を「ご主人様であるビースト・ブラザー」と認識して牧場主の代替わりなどを意識しないこ

とくらいだ。自らを喰らうために飼育するピーストマンを敬愛し、依存し、そして喰われることを「天寿」として受け入れて入れていることは全く変わらない。

人間たちはその全てが互いを分け隔てなく家族として扱い、ともに原始的な遊びを楽しみ、「天寿」まで与えられた環境にただ安住する。そこには異性愛と家族愛の区別も無い。ピーストマンから食料が与えられるため、することといったら子を育てることと遊ぶこと、そして生殖活動くらいなものだという。

——どうしてこいつらは、家畜の立場なのにこんなに幸せそうなんだ……。

その答えはモモンガの手の届く所にあるが、実際にそれを手に取って納得したいとは思えない。

そこにあるのは、集落の全ての人々に慈しまれて育ち、競争も不安も無い環境。多くの異性と交わり、皆で子供たちを育てながら自由に暮らす、家畜としての生活だ。畜肉となる「天寿」までの時間が短いことを除けば、そこにあるのは人間だった頃のモモンガが望んで得られなかったあらゆるものを備えた人生のようにも見えてしまう。

しかし、それを支えてきたピーストマンはもう居ない。

——もう、たくさんだ。

充分に話を聞いたと判断し、モモンガはセバスを伴っていったんその場を離れる。話を聞いている間、人間の女たちが人間型でありながら立派な体躯を持つセバスに熱い視

線を送っていたが、別にそれを煩わしく思ったからではない。

「セバスよ、アルベドはあの者たちを食料として扱うことを考えていたが、私の方針はまだ定まってはいいない。お前はどうか考える？」

「……人間とは本来あのようなものではなく、自らの足で立って、誇りを持つて生きることでできる存在だと考えます」

セバスの言葉は、冷え切ったモモンガの心に一筋の温かな流れを生み出す。

しかし、それは想定外のことだ。モモンガはここへ来るきつかけとなったセバスに対し、心のどこかで違う答えを期待していた。どうにもならない人間たちの処遇について、セバスの言葉を免罪符とするつもりだったのだ。

「ふむ……そうか、できるか。あんな立場で幸せそうにしているような奴らでも、それができるといふのだな」

「彼らは、真実を知らないから幸せでいられるのでしょう。ただ真実を知り、もし己の力で生きようとあがくことがあれば、許されるならば助力を——」

真実を知らせる——それは、いつかしなければならぬこととわかつてはいても、モモンガには少し抵抗のある考えだ。モモンガ自身もかつて人間だった頃、目を背けてきた厳しい現実をわざわざ直視したいとは思わなかった。だから、真つ直ぐにそういう考えへ至ることができるセバスに、その背後にちらつくたち・みーとその生き方に、モ

モンガは軽い嫉妬をおぼえてしまう。

「そうだな。セバスを呼んで良かった。セバスよ、お前にこの牧場を委ねる。人間どもに真実を知らせるか否か、そしてその後の対応も含めて、全てを委ねよう」

「……全て、でございませうか……」

「ああ、全てだ。この牧場をアインズ・ウール・ゴウンの所有する拠点の一つとして確保し、その全てをセバスの裁量に委ねる」

モモンガはセバスと目を合わせずに言い切る。

「はっ！」

硬い表情で頭を下げるセバス。一抹の後ろめたさを覚えながらも、これ以上の問答を望まない主の意思を汲んだその動きにモモンガは満足する。

「現在のナザリック地下大墳墓が立地しているのは、おそらくミノタウロスの王国の領域だ。この牧場への襲撃者どもを退けたことから、何らかのリアクションがあつて然るべきで、その対処のためにもアウラを偵察に出している。近いうちにミノタウロスの王国と事を構えることになるかもしれないが、この地でセバスに背後を守つて貰えれば安心だ」

「……必ずや、ご期待に沿う働きを致しましょう」

モモンガの言葉は半ば自分自身に言い聞かせるような内容だが、この地を委ねるセバ

スを異世界におけるナザリック防衛の要と位置づけることで、残った後ろめたさを忘れようとするものだ。

そしてこの時、ミノタウロスの王国の運命は決まった。

ひとたびセバスに特別な任務と裁量を与えた以上、一定の慎重さを保ちながらも、他の守護者にも次々と広範な裁量を伴う形で新たな任務が与えられることになる。それがギルド長でありながら主に調整役として動いてきたモモンガのあり方であつて、巫人の国から心が離れつつあつた今のモモンガにとつてはそれこそ都合の良い行動だつた。

モモンガがナザリック地下大墳墓で様々な実験を終え、仕舞い込んだビースト・ブラザーの箱の存在を思い出す頃、ミノタウロスの王国はアインズ・ウール・ゴウンの支配下に降つた。形式的には最強の戦士である国王とその親衛隊をコキュートスが打ち破つたことによつて。実質的にはアウラの偵察結果をうけて潜入したデミウルゴスの呪言によつて。

偵察でマールレは発見できなかったが、それを任務に加えるような形となつたことで、アウラの偵察は想定よりかなり大胆なものになり、多くの成果が得られた。姉としての情を考えてそれを追認するうちに、ミノタウロスの王国の支配が容易だと考えたデミウ

ルゴスの提案を拒む理由も無くなっていった。ナザリック地下大墳墓はミノタウロスの王国の端に位置しており、小競り合いを繰り返すより王国を支配してしまった方が目立たずにいられると判断したからだ。

亜人種の国では、権力の源は権威や血統ではなく支配者の純粋な戦闘能力となりがちだという。ミノタウロスの王国では国王とその親衛隊は最強の戦闘集団であり、支配が個人の武勇ではなく一応は集団の武勇によつてなされているところが仮にも王国と名乗るこの国と他の亜人の部族国家群との違いらしい。いずれにせよ少数の武勇に頼る支配ということで、人間の価値観を持つモモンガから見ればたいした違いは感じられない。

ミノタウロスの王が持つ武器は、ユグドラシルに存在したような強力なもので、一〇〇レベルのコキュートスをも傷つけうるものだった。しかし、王国に存在する脅威はその武器一つのみで、肝心のまともな使い手が居ない。彼らが戦力に不釣り合いな武器を持つていた理由については、わざわざ問いただす間も無く判明した。

このミノタウロスの王国には、かつて『口だけの賢者』と呼ばれた存在が居たらしい。それが武器の元々の所有者だ。現れたのが二百年ほど昔のため既に天寿を全うして久しいが、様々な奇想天外なアイデアで王国内外に多くの影響を与えた存在だ。王位には興味を示さなかったというが、当時絶対的強者であった彼の尽力によつて王国における

人間種の地位は食料から奴隷へと変わり、彼が考案したマジックアイテムの幾つかは遠方の国にまで広まっているという。

——魔法を使った、家電か？　こんなもの、プレイヤー確定じゃないか。

彼以外の者によって作り出されたマジックアイテムは效能こそ家電に似ていたが、その実態は魔法の力で実現された別モノだ。

モモンガは王国に残るその手記を取り寄せた。支配下となつたとはいえ、現地の者たちががやすやすと引き渡してきた以上期待してはいなかったが、その内容は期待以上のものだった。

まず前半は現地の言葉で占められていて翻訳にマジックアイテムの助けが必要となつたが、そのほぼ全てが元の世界の知識に基づくアイデアノートだ。「密封されて中が冷える箱」や「回転して涼しい風を出す硬い羽」のように漠然としたものばかり。

——どうしろというのだこれは。……ああ、だから口だけの賢者か。

そして後半は日本語の手記で、現地の牛頭人たちにとつては謎の文字列であつたようだ。牛頭人^{ミンタウロス}の学者たちは、これを翻訳できれば列挙された道具の製法がわかるだろうと考え、国内に『口だけの賢者』に相当する強者が現れたら見せようと考えていたらしい。

もちろん、日本語部分に道具の製法などあるわけがない。内容は彼の異世界旅行記や覚え書きのようだ。

——日本語が読めるくらいでそんなこと期待されても困るんだが……。だいたい、こいつは何も知らないくせに無責任にこれだけ列挙しやがって。最悪にとつ散らかった仕事でもここまで投げっぱなしにはしないもんだ。

モモンガは軽い苛立ちを感じつつも、ユグドラシルのプレイヤーの質が様々であることを思い出す。社会人限定ギルドのアインズ・ウール・ゴウンの中はおおむね快適だったが、外の世界には世間知らずの子供から操作を理解していない老人まで様々なプレイヤーが居た。無責任なプレイヤーの存在も、他のギルドとの抗争において離間策などの手段を取る時はありがたいものだったことを思い出す。

——子供なら仕方ないか。それにしても、新たな支配者として一つくらい作ってやっただ方がいいのだろうか。電気とか回路とか詳しくないし、何か無いだろうか……。いや、今するべきことは違うな。

モモンガは横滑りしそうになる思考を修正する。

確かに、異世界で無邪気に元の世界の品の再現に挑戦するのもゲーマー的な遊び心をくすぐる行為ではあるが、今の状況はゲームでなく現実だ。敵が牛頭人^{ミナタウロス}というゲームのモンスターのような存在であったこと、偵察の結果知ることができた相手の戦力があまりにも拍子抜けするものだったために苛立ちに任せて部下の大胆な行動を許可してしまっただが、プレイヤーの痕跡が発見されたとなれば気を引き締めなければならない。

モモンガは手記部分をじっくりと読んでいく。

——攻略メモとしては下の下だな。情報が全然足りない。

足りないが、無邪気に元の世界の表層だけの知識をばらまいた『口だけの賢者』が何を考えてそうなったのか、言い換えれば、何を恐れて自身の強さではない部分で満足を得ようとしたのかという重要な部分については理解することができた。

八欲王の末路。

それは、『口だけの賢者』の出現よりさらに三百年も前に現れたというプレイヤーと思われる存在だ。『口だけの賢者』自身もプレイヤーだと断定している。互いに争って滅びたということになっていくらしいが——そこで、モモンガは気になる記述に目を留める。

『あいつはそう考えていない。竜王と戦って何人が死んだという話の方を信じている。確かにプレイヤー同士で全滅するまで殺し合うなんて考えにくい——』

——あいつ？

ここで急に仲間かもしれない存在が示唆される。読み進めてもギルドや拠点などの話はないが、隣国の知人として定期的に会い『口だけの賢者』をたしなめる「あいつ」は少し慎重派であるようだ。プレイヤーであるなら、ゲーム内の知人のような位置づけだろうか。

その所在地は、隣国であるビーストマンの国。『口だけの賢者』の大胆な行動を諫めつつ、深入りはしない知人。昔の——ユグドラシル時代の、ということだろう——名を出さないよう口を酸っぱくして言っていたとあるためか、その名の記載は無い。

その後、二人は自国内での人間の地位の改善を目指し、その結果ミノタウロスの王国では人間が奴隷階級まで引き上げられた。しかし牛頭人ミノタウロスより器用さに勝るビーストマンには人間の有用性は認められなかったとのことで、ビーストマンの国では食料のままであつたらしい。

そして、急に別れが訪れる。

『あいつは唐突に、もう二度と会えないと言った。獣になつたから合わせる顔が無いだつて、わけがわからない。亜人の姿なのはお互いさまだというのに』

以降、一度も会えなかつたようだ。そこから『口だけの賢者』の寂しさ心細さが伝わってくるような記述が続くが、モモンガの心には響かない。

——新しい世界で、わかりあえる時間がこれだけあつたんだ。十分だろう。

モモンガは、思い出してアイテムボックスから机の上に放り出してあつたビースト・ブラザーの箱を手取る。確証は全く無いが、ここまでの段階でモモンガはこの箱のかつての所有者が手記の中の「あいつ」であることを確信していた。

気持ちの上ではあまり関わりたくはなかったが、『口だけの賢者』よりも慎重なプレイヤーだと確信してしまえば、それが残したものを確認しないわけにはいかない。

モモンガはユグドラシルの解錠手段でも上位のものを用いて箱を開けると、中にあった紙束を取り出す。パラパラとめくれば、中身はやはり日本語だ。

現地の質の悪い紙をわざわざノート状に束ねてあるのは、現地人の手から他のプレイヤーに渡らないようにということなのかもしれない。ユグドラシル産のノート類であれば現地のものとは質が違うため、何かの拍子に現地人に渡れば読めなくとも高い確率で保存されてしまうが、この見た目であれば廃棄される可能性も高くなる。すなわち、私的な、他のプレイヤーに見せたくない記録である可能性が高い。

モモンガは机に頬杖をついて、ゆっくりとページをめくっていく。

紙束を箱にしまったモモンガは、再び箱に封印を施してからアイテムボックスへ戻す。封印は、自身の持つ最高のものだ。

ビースト・ブラザーは既にこの世にいないが、その正体はプレイヤーだった。気分は最悪だが、するべきことをしなければならぬ。

もちろん、竜王の脅威についても幾らかの記載はあった。かつてのプレイヤーが警戒

するほどのものが現地に存在している以上、慎重さを取り戻すべきだろう。ミノタウロスの王国では、極力表に出ず影から支配する形を維持しなければならない。今後、周辺に干渉する場合も同様だ。

——そうだ、ミノタウロスの王国を知るデミウルゴスなら、セバスの助けになるかもしれない。

モモンガはデミウルゴス呼び出す。

牧場の人間たちは牛頭人ミウダウロスを恐れていたが、ミノタウロスの王国では奴隷の人間が畑を耕す姿も見られた。それを見てきたデミウルゴスなら、牧場が何も生み出さずただ資源を浪費していくことを見ていて気の毒になるほど気に病んでいるセバスの助けになるかもしれない。

「気にするな」「お前の好きにして良い」「拠点で資源が消費されるのは当たり前のこと」そんな言葉にはセバスを癒やす力は無かった。

モモンガはセバスの言葉尻をとらえて牧場を任せ、そこにあった現実から目を背けたが、セバスも大事な仲間の子供のような存在には違いない。牧場について思い出したくもないとはいっても、思い悩むセバスを放っておこうとは思わない。

「モモンガ様。デミウルゴスでございませす」

呼びつけたデミウルゴスは優雅に跪く。

「用件は——」

わかるな？　と言いかけて止める。

——ダメだ、それじゃ前と一緒にだ。

内面においては凡人としての自覚を持つモモンガは、ナザリック地下大墳墓最高の知能を持つという設定が現実のものとなったこのデミウルゴスから信じがたいほどの過大評価を受けている。しもべたちの過剰なまでの忠誠心が、モモンガが凡人であることがわかってしまえば無くなってしまふのではないか——そんな危機感から自らの意図をぼかし、あるいはデミウルゴスがモモンガの意図を察して理解したものを説明させることでその場しのぎの対応をしてきた。その結果がミノタウロスの王国の支配成功で、結果自体は悪くないものとなったが、そこで得た情報から考えても同じようなことを続けていくのは危険だと判断している。簡単に態度を全て変えることは難しいが、少しずつでもコミュニケーションを増やしていくべきだろう。

「——セバスの牧場の件だ」

モモンガはセバスへの援助を依頼するが、どうも反応が思わしくない。デミウルゴスの端正な顔に様々な色が宿るたび、モモンガは自身の説明が悪いのか、牧場を維持していること自体が悪いのかと気を回してしまふ。

ただ、今回はアルベドの時と違って、後付けながら大義名分がある。

「あの牧場は、プレイヤールの残したもので貴重な手がかりなのだ」

そこで得られた情報について話すと、デミウルゴスの眼鏡の向こうの目が見開かれる。

悪魔であるデミウルゴスには倫理的な問題は意味をなさないし、ここで話すことでもない。話の大筋は、ビースト・ブラザーから得たこの世界の脅威についての情報だ。

いずれ皆に話をしなければならぬことで、二つ目の用件にも関わることで問題は無い。

「この世界に来てすぐにそこまで重大な手がかりを得ていたとは、さすがはモモンガ様でございます」

——偶然だ、なんて言えたらラクなんだろうな。

類似種族の国で隠棲することを決めたビースト・ブラザーは、竜王の一人が作ったという人間の国、竜王国を警戒していた。竜王の脅威を伝え聞き、ビーストマンの国を生存域と考える以上は当たり前のことだ。竜王が滅んでからは一貫してビーストマンの側が攻め手となっていたようだが、彼の残した情報には竜王の力を引き継いだ子孫が国を治めているとある。牧場の長老は末期的な状況であるような事を行っていたが、あれは捕食する側、ビーストマンの側からの情報なので、安易に真に受けるわけにはいかない。

この情報が重要であることには疑いは無いが、それが直接に牧場維持の必要性に繋がるわけではない。それでも、感触が良いのでなんとなくひと押ししておく。

「別に、あれを確保した理由はそれだけでは無いがな。ともかく、少し手助けをしてやってほしい」

「かしこまりました。セバスが牧場にあつてエサとしての役割をまっとうできるよう、しっかりと助力いたします」

「うむ、よろしく頼む」

——え、エサ!?

牧場の確保について、一つ良いことがあつたから他にも何かあつていいだろうと考えて、そう匂わせた。もちろんこれはハツタリだ。得た情報と牧場維持の必要性が繋がらないことを見透かされているような気がしたから言ってみただけのことだ。

だが、デミウルゴスは察してくれる。まるで、無から有を作り出すかのように。言われてみれば、確かにエサというか囿のような位置づけだ。受け身なのは良くないように思うが、牧場から目を背けず自分で考えていても同じ結論になるような気がするので良しとしておく。

——ピーストマンを挑発する囿つてことでいいんだろうな。後で、機会があつたら誰かの前で説明させてみよう。

ともかく、デミウルゴスにセバスを手伝わせることはできた。これで、人間型の外見を持つレベル一〇〇のセバスは牧場に留まり、次の行動を実行に移す際に最も警戒すべきデミウルゴスもそれを認めたことになる。

セバスへの助力だけならばデミウルゴスより適任な者が他にもいるような気もするが、今回はこちらが主目的だからそうするほかは無かった。モモンガの次の行動を皆に認めさせるためには、セバスの手が空いては都合が悪いのだ。

この二人のNPCの作成者が仲が悪かったたつち・みーとウルベルトであることは若干気になるが、それでも同じギルドの仲間だし、二人のNPCの忠誠心も絶対のものに見えるので問題は無いだろう。

幕間三 モモン・ザ・ダークウオリアー

モモンガはデミウルゴスに牧場の手助けを命じると、そのまま残る守護者を集め、自ら竜王国に向かうことを宣言した。

セバスを別の任務に充てている以上、レベルー〇〇で人間の姿を取れるのは自分しか居ないのだ。セバスを牧場に張り付ける前提でデミウルゴスに仕事を与えておけば、反対し辛いだろうという読みがあった。根回しは社会人の基本である。

実はもう一人該当者がいるのだが、宝物庫を守るパンドラス・アクターのことは——今は考えないことにする。ワールドアイテムを含む膨大なギルド資産を保管する宝物庫の守りは重要であり、彼を除外しておくのは不自然なことではない。

モモンガの竜王国行きについて、守護者達の中で最も強く反対したのはアルベドだ。ただ、彼女が反対に回ったのは同行できないとわかった後のことだ。反対のタイミングは納得いかないものだが、アルベドもデミウルゴスに並ぶ知恵者だ。モモンガはデミウルゴスにしか根回しをしなかった自分の迂闊さを呪った。

モモンガは転移直後、守護者らの動揺を抑えるため、勝手に出歩くのを我慢してアルベドの望み通りにしてきた。しかし、あの牧場のような陰鬱な気分になる場ではなく、

人間が暮らす国があるとわかった以上、見て歩きたい欲求は耐え難いものがある。そして、アルベドの人間に対する感情を考えると、巫人との戦いで神経を尖らせているであろう人間の国に連れていくわけにはいかない。

議論が平行線となったところでデミウルゴスがアルベドに何やら嘯くと、アルベドが引く。おそらく、先程のハツタリのおかげかデミウルゴスは勝手に何か理由があるのだと察してくれたのだろう。その直後のアルベドの熱い視線には単純な敬意とは少し違うものを感じたような気もするが、モモンガは心の平穩のためにそういうことにしておく。

——察してくれたということは、それなりに結果を出さなきゃいけないんだよなあ。

どうにか守護者たちの同意も得て、冒険者チーム『ザ・ダークウォリアー』のモモンは竜王国へ旅立った。

このようなチーム名と決まったのは、外の世界で初めて名乗ったモモンガの偽名を都市の衛兵たちがそういうものだ と解釈したからだ。

「モモン・ザ・ダークウォリアーとか、変な名前乗ってたんだが」

『ザ・ダークウォリアー』のモモンってことだろ。冒険者は大事な戦力なんだから変と

か言わずに察しろ」

「ああ、そうか。ネーミングセンスで戦うわけじゃないもんな」

冒険者を熱烈に募集し歓迎している竜王国にあつては、衛兵がそのまま冒険者候補をギルドに案内することも珍しくはない。心無い言葉に傷ついたモモンガが自身のネーミングセンスを色々と後悔し始める頃には、チーム名『ザ・ダークウオリアー』での登録が完了していた。モモンガたちがチーム名など最初から届け出なくとも良いという事実さえ知らぬうちに。

『ザ・ダークウオリアー』は漆黒の鎧を身につけ、大剣を二本背負つて戦士を装うモモン——モモンガがリーダーを務める三人組の冒険者チームだ。その傍らには魔法詠唱者のナーベに盗賊のソリュシア——マジック・キヤスター戦闘メイドのナーベラルとソリュシャンが同行する。モモンガ自ら選んだナーベラルのほか盗賊系の技術に優れるソリュシャンが追加されたのは、情報収集の目的を強調したためだ。

冒険者にとってその出自は重要ではないが、亜人の侵攻にさらされる竜王国ではその傾向はひととき強い。出来る限り多くのビーストマンを倒し、出来る限り長く戦場に立ち続けた者が良い報酬を貰い、昇進し、国の信頼さえ容易に得ることが出来る。重視されるのは第一に戦果、第二に戦力、第三第四第五が継戦能力といった具合だ。

『ザ・ダークウオリアー』が請けた仕事は、町や村の防衛に討伐任務、従軍任務などそ

の名目だけなら種類はあるが、それらの全てがビーストマンとの戦いだつた。これは商隊護衛や採し物など時間のかかるもの、効率の悪いものを避けていた結果でもある。

敵となるビーストマンの実力は、この世界で最初に戦った牧場を襲う牛頭人ミンタウロスと変わらずレベル十程度のもが多く、強いものでもせいぜい十五から十八といったところだ。

モモンガはその実力のみに着目し、この国でも実力のある冒険者ならいくらでも倒せる雑魚だと考えてしまったが、これが群れをなして四方八方から幾度も奇襲を試みているという状況の難易度は単純にそのレベルだけで考えて良いものではない。モモンガが弱い敵を気持ちよく倒し続けるゲームのようにこれを長時間軽々とこなしてしまつたのは、疲労しないアンデッドの特性あつてこそだ。

そんな状況では、本来の戦力を見せないように戦う『ザ・ダーク・ウォリアー』であつても迅速すぎるほどの速度で昇進することになる。アンデッドであるモモンガは、戦力の加減はできても継戦能力の加減については考えるのが遅れ、気付いた頃には膨大な戦果を積み上げていたからだ。

いつしか、『ザ・ダークウォリアー』は竜王国の誇るアダマンタイト級冒険者チーム『クリスタルティア』に次ぐ戦力として認められ、女王ドラウディロン・オーリウクルスへの謁見の機会が与えられた。

「たかが竜の子孫ゴとときがモモンさ——んに頭を垂れさせようとわぶつー！」

「……進歩しませんわね」

一緒に旅に出てすぐわかったことだが、演技力のあるソリュシアと違ってナーベは何かと融通が利かないので手元に置くしかないようだ。モモンはそんなナーベの頭にチョップを入れてから初めての謁見に臨む。

女王ドラウデイロンは、幼い少女だった。

まるで無邪気な少女のように、屈託のない激励の言葉をかけてくる。そこにはそれくらい年の頃の少女特有の人見知りや警戒心も見られず、モモンガは見た目通りの少女とは少し違った何かを感じた。

そして、その服装は清楚な雰囲気の色彩でありながら太股まで丸出しにしたデザインで、若い少女が自ら選ぶものには見えない。かといって、それを恥じらうような様子も見えず、逆に開き直っているわけでもないのだ。

さらに、激励の合間に現状を語り聞かせる大臣とも息があっていて、役割分担を理解しているような雰囲気があった。

ここで、モモンは滅亡に瀕している童王国の現状を知る。ピーストマンの国の側では恐怖のあまり幼児返りをしたなど言われていた女王だが、大きな危機感を感じてはいても現実逃避や絶望まで至っているわけではない。

ただ一つ間違いが無いのは、女王も大臣も本気で冒険者を頼りにしているということ

だ。

モモンガはこの謁見を機に、ナーベに課していた使用魔法の制限などを緩めることを決める。元々は目立たないよう戦力を小さく見せるつもりだったが、冒険者の中で目立つことで女王から情報が得られるのなら大いに目立つべきだからだ。

そして、この国には強者を警戒する余裕など無い。少なくともこの国最強のチーム『クリスタルティア』と同程度までの力量なら見せても問題なさそうだ。

他方、臨機応変に演技をしてくれるソリュシアには多少不真面目で奔放な性格を演じてもらい、基本は仲間の一人としつつも時折不可視の護衛を付けて『ザ・ダークウォリアー』を離れての情報収集を任せている。

「——女王が冒険者を頼りにしているのは真実ですが、女王の幼い姿は仮の姿。その真の姿は気怠そうな大人の女性で、日々愚痴と酒量が増えているようです」

『クリスタルティア』のセラブレイトは大人の女性に全く興味が無く、幼い姿の女王のために命を賭けて働いています。女王はいずれ幼い姿でそれに報いなければならぬことを悩んでいるようです」

「もう一つの主戦力、ワーカーチーム『豪炎紅蓮』は戦況の激化で仕事を上積みしてきたため、財政難の竜王国側は『ザ・ダークウォリアー』の依頼料を優先して契約継続を断念しようです」

幼い女王の不自然さについては、すぐに納得のいく裏が取れた。

時折混じる全身が脱力してしまうような報告でも気の抜けた態度をとれないのが辛いところだが、甲冑で顔を隠したモモンなら表情は見られないで済む。骸骨でも表情など出ないのだが、隠されていることの安心感は強い。モモンの存在が竜王国で大きくなるとともに、モモンガは自然とモモンの姿でいることが多くなった。

そんな時、モモンはいったんモモンガに戻らねばならなくなった。もちろん、竜王国で『ザ・ダークウオリアー』は既に無くてはならない存在であり、必要な情報を得るためにはこれからもそうあり続けなければならない。この国の冒険者に求められる継戦能力には、継続的にビーストマンとの戦いに参加するということも含まれているからだ。

モモンガはやむなく宝物庫を訪れ、自らが創造したNPC、パンドラズ・アクターを呼び出した。ドツペルゲンガーであるパンドラズ・アクターは変身能力を持ち、唯一モモンの代役を務めることが可能だ。

冒険者モモンは、モモンガの趣味を多分に含む存在だった。現地の存在が強くないのいいことに、下手の横好きとも言える戦士職を楽しみ、亜人相手の傭兵同然である冒険者の位置付けに辟易する部分もありながらも、モモンガはどこか異世界を楽しむよう

な姿勢でモモンを演じていた。

しかし、代役に指示を与えるとすると、同じように楽しめというわけにはいかない。元々アインズ・ウール・ゴウンでは参謀寄りのまとめ役・調整役だったモモンガは、フリーハンドで冒険者を楽しんだ後は、フリーハンドで参謀役を楽しむことになる。そこで、モモンガはパンドラズ・アクターに対し、モモンの代役を務める際の指針となる指示を出しておく。

「ソリユシヤンを自由に使い、ナーベラルとともに竜王国の信頼を得るように動け。手間はあくまで人間の冒険者モモンとしての穏便なものに限るが、可能ならば『クリスタルティア』を追い落とし、女王より最高の信頼を得て竜王とその血に由来する力について情報を得よ。——複雑な任務だが、時間をとってモモンを理解してもらおうつもりだ。

いけるか」

「Wen^我nes^がme^神ines^のGot^おtes^望Wil^みlie^とbe^あ」

その言葉は忘れもしない。かつて若き日のモモンガが書き溜めていた『カツコいい外国語セリフ集』の筆頭にあつたものだ。

モモンガは無いはずの胃のあたりを押さえながら、パンドラズ・アクターに口調や敬礼についての注意を与える。

——頼むから、古傷をえぐらないでくれよ。

会話の端々で顔を出す、自ら書き下ろした数々の中二病的セリフ、オーバーアクション、そして昔からの中二病の定番の一つである第三帝国期ドイツ軍人風味の敬礼や動作……。自ら設定したものとはいえ、いや、自ら設定したからこそ、実際に形を成して動き出すと思いのほか心を削る痛手になることもあるのだ。設定という単なる文字情報として書き込むことと、三次元の動きとして見てしまうことの落差は果てしなく大きい。

与えた命令は、そうした方が良いと思っていながらあまり手を付けていなかった事だ。冒険者としての昇進も進み、そろそろこの国へ来た目的へ向けて行動を開始すべきと思っただけだが、なんとなく先送りにして冒険者稼業を楽しんでしまっていた。

——勝手なものだな。

自分が「そうあれ」と作り出したNPCに設定通りの行動をしないように言うことも含め、モモンガには勝手なことを言っている自覚が無いわけではない。それでも、自身の黒歴史と何度も向き合いたくない気持ちもあるし、NPCを動かすには行動の指針となる命令があった方がよい。それを与えずに守護者クラスのNPCを野に放つことを考えると——。

——人間の国なんてすぐになくなってしまいかもしれないし、場合によってはとんでもないものを敵に回してしまうかもしれない。

まず警戒すべきは、巫人のプレイヤーたちが警戒していた竜王だ。モモンとして竜王国へ取り入るのも、引き継いでいるとされる竜王の力がいかなるものか知ることが目的ではあったが、ミノタウロスの国で起こった問題について、その裏で支配しているアイズ・ウール・ゴウンが悪目立ちしないようわざわざモモンガが対応に向かうことも、NPCが派手なことをして竜王のようなこの世界の強者やまだ見ぬ存命中のプレイヤーを刺激しないようにするためだ。

問題自体は、ある程度の時間はかかったもののモモンガが関わることで容易に解決できるものだった。そもそも、この件では守護者がやりすぎることを恐れて自ら出ていったのであって、ミノタウロスの王国やその周辺国家にナザリックを害する力など存在しないのだ。

結果としては、ただ何ごともなかったようにナザリックによる間接支配が続き、幾らかアンデッドの材料になる死体が出たというだけのものではない。

ただ、せっかく解決に訪れたのだから、出た死体は全てアンデッドの軍勢に変えておくことになる。最初に得たミノタウロスやビーストマンの死体を活用して様々な実験を行った結果、元の世界では時間制限があつた特殊技術スキルによるアンデッド創造が、死体

を媒介として行うことで永続的なものになることがわかっている。

中位アンデッド創造で一日十二体、下位アンデッド創造で一日二〇体。その制限はそのまま、支配下にあるアンデッドの総数がそれらの数倍を超えても創造したアンデッドが消えることはなかった。

つまり、死体さえあればノーコストで軍勢が作れるのだ。モモンガは上位アンデッド創造も可能だが、このあたりで出る亜人の死体ではレベル四〇以下の中位アンデッドが上限となる。それでも、やればやるほどギルドを強化できる行動を見つけたモモンガは、性格上これに手を付けないわけにはいかない。普段は死体がなくなるまでモモンガがこれを手掛け、モモンガがモモンとして活動している間はモモンガに変身して同じ能力を使うことができるパンドラズ・アクターがこれを手掛けることに決めていた。

もちろん、パンドラズ・アクターの変身能力はオリジナルと同等の力を持つわけではない。モモンガが作る方がアンデッドの能力が高くなることもあり、この時は数日余分に滞在して、出た死体を全てアンデッドに変えてから冒険者生活に戻ることにした。

この数日のロスが問題だったのかもしれないと、モモンガは思う。

これを終えればすぐに冒険者モモンに戻るつもりだった。しかし、パンドラズ・アクターの勤勉さがモモンの置かれた状況をモモンガの手に余るものとしてしまったのだ。

「モモンガ様、女王ドラウディロンとの密会の約束をとりつけることができております

！」

「み、密会だ?!」

「はい。『クリスタルティア』のリーダー、セラブレイトは女王ドラウディロンへ懸想しており、それ以上の情熱で女王と接するのが近道かと考え、そのようにしております。女王との関係を諦めさせることができれば、彼はこの国を去りましょう」

「懸想……それ以上の情熱……。モモンは今、そんなことになっているのか」

「冒険者モモンとして穏便に、とのご命令でしたので」

パンドラズ・アクターはモモンとして、女王に対し花束とともに情熱的な言葉を贈り続けた。ソリユシヤンによる潜入調査により、女王の真の姿が成熟した女性でありロリコンのセラブレイトに辟易していることを把握した上で、それを踏まえてあくまで女王を淑女として扱った。アダマンタイト級に昇進した際、「本当の貴女にお目にかかりたい」という趣旨の情熱的なメッセージを添え、濃い色の大きな花束と葡萄酒などを贈ったところ、密会の機会を得ることができたという。

——引き継げるわけがないだろう！ 思った以上にちゃんと仕事してくれてるから文句も言えないし、そのまま任せられないじゃないか。

今の段階では、密会といってもせいぜい女王が正体を示唆するか現すか、そして国防に関する相談が行われる程度だろう。だが、パンドラズ・アクターにとってはそれも良

いアピールの機会になるようだ。

一応命令はしておいたが、人間としてライバルを排除するのは難しいと思っていたため、これは予想外の活躍だ。それでも、女王を口説きにかかっているような状況を引き継ぐなどモモンガにできるわけがない。女王の側は国を守るため距離を縮めているだけとわかつてはいても、異性経験の無いモモンガには手も足も出ない状況だ。

結局、モモンクの今後はバンドラズ・アクターにそのまま任せることとなっている。「身分違いの忍ぶ恋として、ああくまでプラトニックに進めて参ります！」などというテンションで説明されるが、既に先方が受け取っている様々な口説き文句を聞けばさすがはアクターであると言わざるを得ない。モモンガの感覚では少々オーバーな表現も多いが、寡黙なモモンクが女王にだけ情熱的だというのが良かったのかもしれない。

「あんなものは、冒険者じゃなくてピーストマン相手の傭兵みたいなものだし」

モモンクは呟く。冒険者という言葉から想像できるのは、もつと心躍る、未知の世界を切り開くような仕事だ。それに比べれば、実際に童王国でやってみた冒険者稼業は夢が無い、とてもつまらないもののように思えてくる。

もちろん、そう思わないとやっていられないという事情もある。モモンクは間違いない冒険者モモンクとしての生活を楽しんでいた。モモンクはモモンクがカッコいいと思う

硬派なダーク・ウォリアー的なものを具現化した存在だった。それが女王だけに情熱を向けて口説くから効果があるというパンドラズ・アクターの考えは頭では理解できるが、自分がそれを引き継ぐのは考えられない。

モモンガは不意に玩具を失くしてしまった子供のような気分ですべて部屋に籠もり、苦行に励む修行者のようにひたすら支配者らしいセリフや態度の練習に励んだ。

「騒ぞつ、いや、うん。……騒々しい。静かにせよ。——よし、これだな」

ようやく手首の角度が定まり、仰々しく左手を振るって部下たちを黙らせるこのポーズが完成するまでに、モモンガの沈んだ気持ちは元に戻っていた。

この作業を繰り返し、少しずつ気持ちは沈み込むうちに限界を超えることで、アンデッドの特性として精神が強制的に鎮静化されるのだ。もちろんキリの良いところまで練習を続けることで再びベッドに潜って叫び声をあげたいような気分になったりもするのだが、それでも一度気持ちをリセットする上で悪くない方法だと思っっている。いずれにせよ、早いうちに進めておかなければならないことなのだから。

——本来は冒険者などやらずに、非常事態に備えて知識を、対応力を磨かなければいけないのはわかっている。だが、誰も教えてくれるわけじゃないこの立場で、いつたいどうすれば良いというんだ……。

この練習が恥ずかしい行為である自覚はモモンガにもある。しかし、かつての仲間たちの子供たちともいうべきNPCに慕われ、その尊敬を裏切ることができない状況では、それにふさわしい振る舞いをできるようにしておかなければならないのだ。

「頑張るにしても、区切りつてものが必要だよな」

モモンガは周囲を見回すが、目当てのものは無い。アイテムボックスの中から選び出したのは、弧を描く金属板だ。腕に嵌めたその上には数字が並び、刻一刻とその数を増していく。

これは貰いものの腕時計だ。アイテムの中には部屋の調度品に合う置時計もあったのだが、今の気分では少しでも昔の仲間を感じさせるものを使いたかった。

モモンガは操作方法を思い出しながら、板の上に指を這わせていく。

『モモンガお兄ちゃん！ 時間を設定するよ！』

腕時計から響くのは、存在しないはずの鼓膜の上端を撫でつけるような、無理に甘く幼い調子で出された女の声。

モモンガは「全力でぶっこんだよ、お兄ちゃん！」という、この時計に声を吹き込んだギルドメンバーのぶくぶく茶釜の悪戯っぽい笑顔を思い出した。声優をやっている彼女の悪ノリの結果であろうこのボイスを聞くのは初めてではない。この誰も居ない部屋の中では引いた反応を試してみせる必要も無いのだが、それでもモモンガをびくりと

させてしまうのがその「全力」の効果なのかもしれない。

モモンガは時間単位で考えていたこの作業の刻限を数十分単位でいったん区切ると、守護者のアウラに会ってみることにした。アウラがマーレ同様ぶくぶく茶釜によって設定を作られたNPCであることから、二人のことを思い出したのだ。そのアウラには、ただ一人、マーレが純粹に行方不明であることを示唆してしまっている。

「申し訳ありません。ミノタウロスの王国の全域の搜索を終え、再び第六階層の搜索をしているのですが、いまだマーレは発見できておりません」

モモンガの部屋に現れたアウラはひと目見てわかるほどに顔色が悪い。アウラの状態異常への強靱な抵抗力を考えれば、マーレが行方不明であることによる気分的なものだと思われるが――。

それより、広大ではあるが階層守護者のアウラにとって庭のようなものであるはずの第六階層で改めて搜索をしたという部分にモモンガは引つかかる。

「第六階層というのは、しもべの魔獣たちを含めれば改めて探すほども無いほどに把握していたはずだと思うのだが、搜索するような場所があるのか？」

「は、はい。……えっと、普段は近寄らない“大穴”なども探していますので」

アウラは口をかたく結ぶが、泣きそうな顔になっている。責任を感じているのかもし

れない。

「あまり根を詰めるな。マーレのことは別にお前の責任というわけではないし、あくまで私の策によって出払っているということにしている」

「……は？」

アウラの返事には普段の活力が感じられない。考えてみれば、広大なミノタウロスの王国全域に範囲を広げていたアウラの偵察任務は過酷なものだ。ナザリックのNPCの中で最も長い距離を移動し、最も多くのしもべを動かしていた。そんな状況ではさすがのアウラもオーバーワーク気味なのかもしれない。疲労無効のアイテムは持たせているが、モモンガも感じているように心の疲れなどアイテムでどうにかできないものもあるのだ。

そこで、モモンガは以前に守護者たちを集めて説明だけしておいて、導入を先延ばしにしていた「休日」のことを思い出す。

——いけないな。この体だと疲れが溜まらないから忘れていたが、ナザリックをブラック企業にしないと決めたくないか。

ナザリックのNPCたちは、至高の御方、すなわちギルドメンバーを神のように崇め、そのために身を粉にして働くことを至上の喜びとする。今となってはその忠誠はモモンガ一人に向けられているのだが、これがなかなか重い。

そこで「休日」だ。守護者たちに説明をして理解を得ても不満が多かったため、まずはやりやすい所から実施しようとして一般メイドからその制度化を試みた。

しかし、一般メイドさえも「仕事を奪わないでほしい」「毎日働きたい」と直談判してくる始末。決定であると押し付けければ従ってくれそうではあったが、結局は一般メイドたちの感情に配慮して「モモンガ様当番」というシステムを作る羽目になった。「しっかりと側仕えるための準備として休息を取ること」という具合である。

このことにより、他のNPCへの「休日」の制度化はいったん棚上げとした。このあたりにも、守護者が足りないことによるモモンガの遠慮が表れている。モモンガ自身、慎重すぎると思うほどで、全員が揃っていたらここまで及び腰にはならなかったかもしれない。

棚上げした直接の理由としては、「モモンガ様当番」という前例ができたことに問題があった。戦闘能力の無い一般メイドならば、モモンを演じたり外へ出る時に置いていくことができるが、戦闘能力のある守護者や戦闘メイドにまで「モモンガ様当番」が波及すれば危険な場所でもどこでもついてくることになりかねず、モモンガの方が困ってしまう。モモンを演じるとしても、それについてこれる隠密能力を持つ者だって少なくはないのだ。

したがって、戦闘能力のあるNPCに「休日」を与える方法は、その場限りの命令で

行うことに決めていた。それで慣らしてから、命令を定期的に出すようにして、いつの間にか制度化してしまうのだ。

そうなる、今は好機とも言える。アウラにも自分の階層の未踏部分などほとんど無いはずで、残る仕事は少ない。そして、少しだけ仕事が残っている方が休日を与えやすい。

「アウラよ。とりあえず、明日までに第六階層の搜索を終えよ。その後、いったん搜索を打ち切って翌日から二日間休日を取るように」

「大穴」のデータ量を考えれば今日じゆうにでも終わるような気がするが、そこは問題ではない。大切なのは期限を区切るついでに休日を押し付けることなのだ。そうすれば、期限までに終えた仕事を続けることは許されず、「仕事をしない日」と定義付けた休日を守られる可能性がより高くなる。

「は、はい、了解しました」

その声にくらか動揺を感じたためアウラの顔色を見ると、少し青ざめているようにも見える。考えてみれば、マーレの搜索はアウラにとって大切な身内の問題だ。「打ち切って」という言葉には問題があったかもしれない。

「もちろん、いずれ他の地域でも時機をみて搜索を任せるつもりだ。その時はよろしく頼むぞ」

「はいっ」

相変わらずアウラの顔色は優れないが、マールを諦めることはないということが伝われば大丈夫だろう。

モモンガは退出したアウラの足音が遠ざかるのを確認すると、再び支配者としての訓練に戻る。

セリフや動きを記したメモ帳は、中断するたびに自身にとつて最高のセキュリティを誇る場所に保管している。セバスの牧場で手に入れた胸糞悪い紙束の保管場所は、セキュリティの面では二番目に降格済みだ。他人の暗部より、自身の暗部を強く守るのは当然のことだからだ。

第六階層に戻ったアウラは覚悟を決めると、ジャングルの一角を占める『大穴』へと向かう。命令による期限は明日であり、もはや時間を選んではいられない。

『大穴』——そこには、ナザリツク五大最悪の一角、『生態最悪』として知られる餓食狐蟲王が配置されている。彼と無数に存在するというその眷族は、人間や亜人の身体に寄生して巣を作り、その巣を丸々と太らせて眷族を増やすという性質がある。

先日、その巣の材料として問題を起こしたという牛頭人ミナタウロスを放り込むことになったが、その時はデミウルゴスの配慮によつて牛頭人ミナタウロスの運び役に回ったエントマがこれを代

わってくれた。蜘蛛人であるアントマなら、いわゆる寄生虫に近い生態を持つ餓食狐蟲アラクノイド王の“大穴”のおぞましさに嫌悪感を持つこともないからだ。

しかし、アントマは今、連絡役としてコキュートスとともにミノタウロスの王国に身を置いている。

そして、もとよりマールマールの搜索はナザリック内においても極秘で行わなければならないことだ。プレアデスといえども知られるわけにはいかない。

そんな状況では、“大穴”の搜索は餓食狐蟲王とその眷族たちが休眠状態になるといふ一日のうちのほんの僅かな時間を利用して、少しづつ行わざるを得なかった。それも、あとひと月もすれば終わる見込みは立っていた。

それでも、アウラにとつては非常にきつい仕事だった。物怖じしないマールが居れば、これは絶対にマールに任せていた場所だ。ほぼ初めて見ると言つていい餓食狐蟲王とその眷族たちは、休眠状態にあつても吐き気を催す存在だった。しもべに任せるにしても本気の搜索であれば感覚を共有せざるをえないので同じことになる。むしろ、身体が小さいので周辺の眷族たちに触れてしまう可能性が少なく、迅速に動けておぞましいものからも目を背けやすい自分自身の身体の方がマシなくらいだ。

そしてこの日、アウラは命令を受けた。受けてしまった。

「明日までに第六階層の搜索を終えよ」

弱音を吐くことはできない。アウラはナザリックの守護者であるだけでなく、一刻も早く探し出すべきマールレの姉なのだ。

アウラは、実際に亜人の身体に食い込んで蠢き増殖していく餓食狐蟲王とその眷族たちを視野に入れながら、一気に「大穴」の搜索を済ませなければならぬ。

予定していた食事は断りを入れておいた。もともと飲食不要のアイテムは持っている。あとで吐くだけのものなら最初から無い方がいい。

その後、予定通りに搜索を終えたアウラは守護者として初めての休日を迎えた。

仕事を与えられないまま所在なく過ごしたアウラの脳裏には、おぞましく変容した肉塊に挟まって蠢く餓食狐蟲王とその眷族たちの姿がずっと張り付いたまま離れることがなかった。もちろん、ナザリックの中でアウラの内心を窺い知る者など居ない。

後日、モモンガが世話をするメイドたちから聞き取ったところ、アウラはあまり休日をうまく過ごせていなかったことがわかった。

一人で籠もっていると、どうしても一般メイドたちのように「仕事を取り上げられた」という悲しみが先に出てしまうのかもしれない。

そこで、今後は休日は近くで過ごす複数人にまとめて与えるべきだと考えを改めることになった。NPCの性格も様々で、辺境の山岳地帯で「狩りと日曜大工を楽しんだ」と

だ。いうデミウルゴスのように休日を一人で楽しく過ごせる性格の者ばかりではないよう

四三 あくまでプラトニックに

異変に見舞われ見知らぬ土地へ転移してから数ヶ月、アインズ・ウール・ゴウンの本拠地ナザリック地下大墳墓は落ち着きを取り戻していた。

現状の把握は順調に進み、一部周辺国家にも大きな影響を及ぼしている。

「ふんふんふんふん」

ナザリック地下大墳墓における守護者統括。そんな地位を持つアルベドは、執務を終えて上機嫌に廊下を歩いている。

自作の鼻歌が漏れ出るにはまだ早いのだが、扉まであと数歩ともなれば既に最愛の主モモンガの腕の中も同然だ。

目的地は、モモンガの部屋。

留守がちなのはわかつている。もちろん、今日も留守なのは把握している。アルベドは守護者統括として、あらゆる予定を把握しているからだ。

そして、主なき部屋で、日々、主のベッドにその身を擦りつける。それは主の腕の中に抱かれるも同然の、アルベドが一人の女に戻る至福の時間。

今日もこの日課のために、この日課を前提にして、増えた仕事をきっちり片付けてき

た。

——本当はモモンガ様の在室中に、堂々とご寵愛をいただきたいのだけけれど。

たとえそれが実現しても、不在時のベッドを堪能する時間は別腹になるかもしれない。

別腹などというのも不敬な表現のように思われるが、「眷族は別腹」などというところの吸血鬼に比べれば真摯な愛のありかたであるように思うのだ。

そんなアルベドがモモンガの部屋の扉に手をかけようとした、その時——。

『——アルベド』

心臓が飛び跳ねるようなタイミングだ。アルベドはびくりと体を震わせ、その背筋が伸びる。

引きつった顔で周囲を見回すが、誰も居ない。——これは、魔法による声だ。

『先日、セバスが管理する牧場にビーストマンどもの小部隊が攻撃を仕掛けてきたのは知っているな？』

「……はぐ」

牧場と言われ、アルベドはそれが何かをすぐに思い出す。

それは、ナザリック地下大墳墓に異変が起こって間もなく、アルベドがモモンガに付き従って訪れた地。

当時は何もわからなかったが、今は判明している。ビーストマンの国の東、ミノタウロスの国と国境を接する辺境にある牧場だ。

その時、モモンガとアルベドは襲撃者のミノタウロスたちに追い回される人間たちを助けたものの、人間たちは襲撃者によつて屍となつたビーストマン牧場主の所有する家畜であり、ろくに自活の手段も持たない動く畜肉に過ぎない存在であつた。

ナザリックには人肉を食べる存在も少なくはない。アルベドはそのまま畜肉としての扱いを進言したが、モモンガはセバスを呼び出すと人間たちの処遇を問い、そして牧場をセバスに委ねた。

つまり、牧場とは守護者に等しい実力を持つセバスが常駐する場所だ。ビーストマンの小部隊程度、問題となるとは思えない。

『よつて、ビーストマンの国へ報復を行わねばならない。とりあえずデミウルゴスに協力し、準備を整えてもらいたい』

——報復？ あんな者たちのために!?

アルベドはセバスの牧場が好きではない。それは、人間を下等と思う感情のせいばかりでもなければ、もちろん自らの進言が容れられなかつたせいでもない。

理由はわからないが、あの人間たちは確かにモモンガを苛立たせ、そして哀しませた。助けに行つた時のモモンガと戻つた後のモモンガではまるで別人だつた。アルベドに

はそれが不快でならない。

さらに、モモンガはセバスに牧場を委ね、セバスは人間たちのあり方を変えさせようとしているようだが、成果は出ていない。

守護者統括の立場から見れば、守護者に相当する実力者のセバスがあのような者たちのために拘束されている。これは由々しき事態と言える。

すなわち、あの牧場はナザリックにとつてもマイナスとなっている存在だ。それも大変に不快なことだ。

「モモンガ様の御決定に疑問を差し挟む愚かさをお許してください。しかし、かの牧場の人間などという下等な生き物どもを、これ以上飼っておく必要があるのでしょうか？　むしろ良い厄介払いかと思うのですが……」

牧場の人間たちは、ただ下等なだけではなく何の役にも立たず、自らの消費する食料すら生産しようとしなない。人間のような下等な生き物を保護しようというセバスの意見自体全く理解できなかったアルベドだが、それでも最近のセバスの様子は幾らか心配になる。

考え方に理解できない点はあるけれども、セバスはナザリックの忠実な僕だ。それが、自ら管理する牧場において僅かとはいえナザリックの資産を食いつぶし続け、さらに改善の見込みも立たないとなればその心労は想像するに余りあるが――。

『アルベドよ。私はあの牧場を我がギルド、アインズ・ウール・ゴウンの拠点の一つとして確保し管理するようセバスに申し付けたのだ。分かるか?』

モモンガの語気は強く、それまでとは雰囲気を一変させるものだ。

それは、焼け付くような憤怒。

アルベドは震えながら頷くが、声が出ない。

そしてアルベドは思い出した。牧場をセバスに委ねた一件から、モモンガの怒りは何故かビーストマンへ向けられていたのだ。

『分かるな? 分かるよな? この俺がギルドの名を出してまで拠点としたんだ! それを襲撃する愚か者がいる。それはこの、皆の大切な名前を侮っているということだ。たとえ知らなかったとしても許されるはずがない!!』

強い言葉が途絶えると、不意に憎悪の気配が緩む。アンデッド特有の性質によって感情が抑制されたのかもしれない。

『……すまない。ビーストマンの屑どもに対して少々苛立つてしまった。アルベド、許してくれ』

「いや、謝罪の必要など全くございません! 許されるならば、守護者統括としてビーストマンどもに容赦なき報復を——」

モモンガはこの場に居ないが、アルベドは深く頭を下げる。

『そうだな、アルベドは良い事を言う。これは報復だ。ただ、今回の報復では物資を奪うことを重視しようと考えている』

「物資、でございませうか？」

『奴らにとつては牧場の人間も物資の一つだ。その報復ならば膨大な物資を失うことで、困窮と欠乏の中で我々の物資もに手を付けたことを悔いるべきであろう。人間などは不要だが、ギルドの維持のためにも物資はあればあるほど良い』

「かしこまりました！ 物資を大量に確保するとともに、モモンガ様を不快にさせたビーストマンどもに鉄槌を下します！」

『そうだな、頼んだぞ。———そういえば、デミウルゴスがセバスの牧場とミノタウロスの国を歩き来していたはずだ。奴を責任者に据えよ』

「私が直接に行動を———」

『いや、アルベドにはナザリックの防衛を任せる。今回はデミウルゴスを送れ。それと、デミウルゴスには正体を隠し、拠点との繋がりも露見しないよう注意を払わせろ。それではビーストマンへの報復の件はお前とデミウルゴスに一任する。よきに計らえ』

「うけたまわりました！」

《メッセージ伝言》の魔法が解けると、アルベドはゆつくり立ち上がって抱き枕を片付ける。

「……アインズ・ウール・ゴウンではなく、モモンガ様の拠点を襲撃した愚か者どもに報

復を」

至福の時間をおあずけにされたアルベドは、誰に言うでもなく呟く。

「このナザリツク地下大墳墓は貴方様だけのもの。このアルベドも含め、全ては貴方様おひとりの所有物にございます——」

モモンガはアルベドとの《^{メッセージ}伝言》のやりとりを終えると、忘れないうちに机の上に広げてあったメモ帳を魔法の箱の中へしまい込み、アイテムボックスに保管する。特に何か力が籠もっていたり価値が合ったりするわけでもない自筆のメモだが、自身の持つ最高の封印を複数施して守っている。そのセキュリティレベルは例のビースト・ブラザーの手記を大きく越えて、ワールドアイテムに迫るほどの扱いだ。

ここは、ミノタウロスの王国に用意した小さな拠点の一角。視察などの際に立ち寄りたり、この地で働くことの多いデミウルゴスやコキュートスと話をするための場所だが、ナザリツク地下大墳墓に居る時ほどの重圧を感じないためモモンガの第二の自室となっていた。

——どうも、ビーストマンには冷静になれないな。

この世界にギルドごと転移して最初に接触したビーストマンの牧場は、心に人間で

あつた頃の残滓を残すモモンガにとって極めて不快なものだつた。種族が変わつたことによるものか、この世界の人間には虫程度の親しみしか覚えはないが、それでもそれを専ら食用として飼うビーストマンの所業を受け入れられるわけではない。

牧場をセバスに預けたのは、一種の逃げかもしれない。それでも、セバスなら人間を人間として扱つてくれそうな期待もあつた。

現状では、自助努力を知らない人間たちが僅かとはいえナザリックの資源を浪費する一方であることをセバスはかなり気にして、畜肉としての生き方を刷り込まれた人間たちの扱いに苦慮しているようだが、デミウルゴスにも手助けするよう命じているのできつとうまくいくだろう。

ただ、そんな牧場の件もあつて、モモンガはこのあたりの亜人たちが人間と同様の知的生物だとわかつていても対等に交渉する気にはなれなかつた。そして、NPCたちもそうした感情を煽り立てた。

周辺の調査は、有能な部下たちに任せてそれなりに成功を収めている。亜人たちの国は強者こそ王であり絶対であるから、国というものの支配も思ったより簡単だつた。今やナザリック地下大墳墓の北にあるミノタウロスの王国はコキユートスとデミウルゴスによる間接的な支配下にある。

最初にミノタウロスの王国を支配下に置いたのは、偵察を進めていくうちに驚くほど

相手が弱いことがわかってそうだったという事情もある。ただ、その流れを止めなかったのは、牧場で牧場主から知恵を与えられていた人間がミノタウロスをビーストマンより遙かに残虐な亜人だと恐れていたことで攻撃することに躊躇が無くなったのと、そんな残虐な集団にプレイヤーが居るとも思えず危険が少ないと考えたからだ。

しかし実際は、ミノタウロスの国で人間の地位は食料よりはマシな労働奴隷階級となっていた。労働を課される過酷さは確かにあるが、労働ができるということは牧場の人間たちに比べれば遙かに自立しやすい状況と言える。

当初、モモンガの脳裏には奴隷の待遇改善や解放も浮かんできたが、牧場の人間たちの状況を考えるとすぐに言い出すことはできなかつた。そのうちに、牧場の手助けを命じられたデミウルゴスがミノタウロスの王国の奴隷に目を付けた。牧場の状況改善に役立てることを提案してきたので、任せることにした。

詳しいことはわからないが、デミウルゴスは奴隷として働くことに慣れた人間を牧場へ移したり、牧場の人間を幾らかミノタウロスの王国に滞在させるなどして、人間たちの意識改革に努めているらしい。セバスとも激しく議論を繰り返しているということ、NPC同士で色々なことを考えてくれるようになるのは良い傾向かもしれない。

きつかけはそんな誤解からの支配でも、一つの国を従えることは、世界を知るうえで大きな前進となる。ミノタウロスの口だけの賢者や、おぞましい牧場を作ったビース

ト・ブラザーなど、他のプレイヤーの足跡を発見することもできた。

——ビースト・ブラザーか。……何が霜降り肉だ、狂人め。

物語でしか読んだことのない食材を、最も冒険的な方法で得ようとする狂人。それが、獣人系種族として転移したプレイヤーのなれの果てだ。

もちろん、プレイヤーである以上、彼は最初からそういう嗜好を持つていたわけではない。その名を残さず、牧場の人間たちからの呼び名しかわからないことも、後ろめたさのあらわれなのかもしれない。

封印された箱の中に秘匿されていた手記を見る限り、彼はむしろ人間として、人を喰らうビーストマンの嗜好を捻じ曲げようと様々な努力をしていた。ビーストマンの社会に入り込んで、様々な畜肉に様々な調味を施し、どうにかして代替食材に人間を上回る反響を得ようと努力していた。

しかし、ミノタウロスに比べ小柄な分だけ器用さ俊敏さに勝るビーストマンにとつて、同じように小柄な人間種は奴隷としての有用性が低く、逆に食肉としては非常に優れた存在だった。人間種のことを神が我らに与えた肉と表現する者さえいたという。

それゆえ、どんな努力もビーストマンの嗜好を変えさせるには至らず、とうとう禁忌を犯す日を迎えることとなった。

彼はその日、人を食った。正確には、食わされた。

雇っていたビーストマンの料理人たちに様々な創意工夫を命じた結果として、それを混ぜられたものをそうと知らずに食わされたのだ。

彼は激怒した。

しかし彼は知った。人を喰らう種族特有の、人には無い味覚。

彼が書き記すのは、生まれて初めて糖か脂を摂取したに等しいような感動だ。すぐに代替など不可能であることを確信した。例えるなら、甘味の全く無い最高の料理を用意されたとしたら、砂糖の入った甘いものを一生遠ざけられるかということだ。塩気の無い最高の料理によって、塩気のあるものを忘れられるかということでもいい。ひとたび獣人系の舌に特有の新たな味覚を知ってしまったえば、その無い生活へと後戻りはできなかつたという。

その経験が、同族に人間を喰わせないようにする努力を、喰われる人間の待遇を上げる努力へと変化させた。自らの種族特有の味覚を目覚めさせてしまったことで、前者の努力が不可能であることを思い知ったからだ。

幸い、実際にストレスの少ない環境で育てた人間の肉は、獣人系の味覚においては非常に美味なものとなった。そのことが、より多くのビーストマンの目を人間の国へ向けさせたことを深く後悔しながらも、彼は牧場の人間たちに豊かな環境を与えた。牧場の環境を、さらには喰われる人生まで肯定的にとらえる教育を与えることで、食味の向上

した肉はビーストマンの国の多くの上流階級に認められるものとなつていった。価格が上がることで牧場の人間たちは僅かな労働からも解放されて、健康で気楽な生活を謳歌しつつ、出荷が近づくると多くの食餌を与えられてその身に高価な霜降り肉を蓄えた。

その後、彼は家畜としての人間の扱いを研究しつつ、この世界の人間と元の世界の人間との違いについて様々な記述を残している。それは、元々は人間であるプレイヤーとして、せめて自分が喰らう相手は同じ人間ではないと考えたかつたがゆえのものだろうが、そこには一定の真実を含んでもいる。魔法を使おうということもそうだが、生命力や身体能力にも個人差を越えた明らかなる差異が認められるようだ。

精神に人間の残滓の残るモモンガは、情報は確保しながらも彼の行為の全てを嫌悪した。そして、彼の種族までも嫌悪した。もはや今のモモンガにとって、現地のビーストマンはゲームの中のモンスターと同じ扱いだ。

そして、竜王国で得ていた情報によつて思い付きながらも躊躇し棚上げしていた一つの作戦が、ここで現実的なものとなつてくる。

モモンガはこの世界の人間たちに虫程度の愛着しか感じない状況をアンデッドゆえの種族特性によるものと思つていたが、この世界の人間が元の世界と同じ人間ではないのであれば、そうなることも無理もないと納得できる。この世界の人間を積極的に害す

るつもりはないが、ナザリツクを危険に晒してまで守ろうという気にもなれない。

——何より、手の内を見せてもらわなければ、何も始まらないからな。

ビーストマンの国から徹底的に物資を奪えば、彼らは勝手に物資の確保に動く。セバスの牧場では襲撃者を追いつ返すような守りを用意するとして、主に狙われるのは当然、ビーストマンにとって食料である人間の住む竜王国だ。パンドラズ・アクターから作戦は順調に推移していると聞いているが、たとえその時までには竜王国の最大戦力である『クリスタルティア』が残っていても、乱戦の中で早めに行方不明となってもらえば良いだろう。

モモンガは頭を振って、パンドラズ・アクターに任せざるをえなくなった冒険者モモンへの未練を払おうとする。

——冒険者モモンか……。もう少し、楽しんでいたかったんだが。

そんな思いとは裏腹に、パンドラズ・アクターに任せたモモンの状況は非常に良い。竜王国からの情報というのも、殆どはパンドラズ・アクターが女王に接近したことで得たものだ。

それは、血を受け継ぐことで女王が行使できる、竜王の力についてのものだ。元々は潜入していたソリュシャンが聞くことができた女王と大臣との会話をヒントにしてパンドラズ・アクターがハツタリを利かせ、ある程度まで聞き出すことができていた。

その力である『始原の魔法』は、ビーストマンに押されつばなしの竜王国が持つものとしては、モモンガの予想を遥かに超えるものだった。相手がビーストマンの軍勢であろうと都市の一角であろうと、広大な効果範囲内に存在するものであれば全てを一撃で破壊し尽くすことができるものだという。

ただ、竜王の力を行使できるといつても女王自身は脆弱な人間だ。自らの肉体に力を持たないがために、その力の行使には多くの国民の犠牲が必要となり、国が滅亡に瀕した時の切り札としてたった一度使うのが限度になる。具体的には聞けなかつたそうだが犠牲の大きさは甚大で、女王としても出来る限り避けたい選択らしい。

モモンガは竜王の力とやらを簡単には見られないことを知って幾らか落胆した。

それでも、ビーストマンの国と竜王国の力の差は歴然。放っておけば、そのうち切り札を見ることができるのは確実だ。ならば、その時期だけでも把握しておきたい。そんな考えはいつしか、十分な準備をもってその時期を迎えるためにその時期をコントロールできればナザリックにとって最も有益だという所にまで変容していた。モモンガは竜王国の人間たちに情が移るほど長く冒険者モモンをやれていないのだ。

そこへ与えられた、この世界の人間がモモンガの知る人間とは違うという免罪符。

竜王国女王の信頼を得る方針は、必要な情報を得るといふ目的をそのままに、その戦力を削ぐ方針として継続させることとなる。

モモンガがパンドラズ・アクターへ与える次の命令について考えていたところへ、ちようど当の本人からの連絡が入ってくる。

——まさか、作戦の完了か？

NPCに任せたミノタウロスの王国の支配はあつけないほど早かった。思わず期待をしてみようモモンガだが、作戦は最終段階まで進展していたものの、状況は期待を大きく裏切るものだった。

「申し訳ございません。実は『クリスタルティア』のセラブレイトから女王の前での決闘を挑まれ、これを受諾してしまいました」

既にアダマンタイト級冒険者にまで昇進して肩を並べた『ザ・ダーク・ウォーリアー』と『クリスタルティア』の対立関係は熟しきっていた。主にモモンとセラブレイト、リーダー同士の確執が中心のようだが、盗賊ソリュシアとして振る舞うソリュシヤンの演技力もなかなかのものでチーム単位での対立関係になりつつあつたらしい。ナーベと名乗るナーベラルは人間が相手なら誰にでも分け隔てなく平等に失礼な態度を取るため逆に個別にはほとんど嫌われていないが、全体としては順調に印象を悪化させていたとのこと。

これは、女王の側もパンドラズ・アクター扮するモモンの行為を半ば利用していたことによるものだ。モモンがセラブレイトを挑発すれば、モモンだけでなくセラブレイトも功を焦り、二つのチームが競うようにビーストマンと戦うことになる。

だが、そんな女王の前で事件は起こった。女王の守り手に相応しいのはいずれか、という話題で挑発していた時、とうとう先方が激高したとのことだ。女王もモモンの側に依存して多くの情報を垂れ流しながらも、セラブレイトも働かせるためにどっちつかずの対応をしており、決闘を認めざるを得なかったという。パンドラズ・アクターにはモモンガの存在しない胃をキリキリと締め上げるだけでなく、他人を苛立たせる才能もあつたらしい。

セラブレイトの排除は既定路線だ。モモンとして決闘に応じること自体には全く問題はない。

それが竜王国女王ドラウデIRON・オーリウクルスの前で行われるということが問題なのだ。

「――それで、勝利すれば追い出すことも容易となりましょうが、どれくらいの力量差を演じ、どのように決着をつければよろしいでしょうか」

その気になればモモンガやパンドラズ・アクターは単体でもビーストマンの国を滅ぼすことができる。そんな存在が全力で戦うわけにはいかないが、茶番を茶番と見抜かれ

することもあってはならない。目の前で見せる力によつて女王の今後のモモンへの期待も変わってくるであろうし、最後に女王が力を使うかどうかの決断にも影響するかもしれない。つまり、この決闘はただ勝てば良いというものではない。

命令として、これを言葉で指示するのは不可能だ。常に女王を観察しつつ、今後を見据えてどれくらいの強さを見せながら勝つかということを考えながら戦う必要があるため、NPCであるパンドラズ・アクターに任せるには少々荷が重くなる。

「……これは、私がモモンに戻つて対応しよう。パンドラズ・アクター、ご苦労であつた」
結局、モモンが自分で対応するしかない状況だ。現地の冒険者として怪しまれない程度の力量を維持しつつ、女王の反応を見ながら加減を考えつつ、セラブレイトに勝利して『クリスタルティア』を追い出す。しっかりと引継ぎを受けた上で、自由の無い、ひたすら気を遣う部分だけを自分でやらなければならない。

久しぶりにモモンに戻れるといっても、そこに気晴らしや冒険という要素は残されていなかった。

——女王からは十分に情報は引き出してあるが……戦いの後でパンドラズ・アクターに戻して女王と会わせた方がいいか。忙しくなるな。

やはり口説きの流れは手に余る。モモンガには鎧の中の顔も幻術でしか用意できないし、言葉だけでプラトニックな恋愛を装い続ける自信も無い。

とにかく、今は決闘に専念すべきだ。セラブレイトの戦闘スタイルについても、パンドラズ・アクターとソリュシャンでしっかりと情報と情報を纏めてくれている。

モモンガが戦士化の魔法を使って一〇〇レベルの戦士となればこれを圧倒するのも容易いが、それで女王に怪しまれては意味が無い。手段としてそれも使える準備はしておくが、魔法で作った鎧は戦士化と共存不能だ。一瞬で着替えるための課金アイテムが勿体ないので実際に使うことはないだろう。

セラブレイト。元は竜王国唯一だったアダマンタイト級冒険者チーム『クリスタルティア』の一員で、『閃烈』の二つ名を持つホーリーロード。

その二つ名は『光輝剣』という技を持つことに由来するというが、アンデッド系統の魔物に対して極端に強いという評価は無い。それより、時に群れで襲い掛かってくるビーストマンとの戦いでは、重戦士系の防御力と回復魔法を持つホーリーロードらしい継戦能力こそが高く評価されている。

ただ、そのレベルは三〇以下で、ソリュシャンやナーベラルであっても本気ならば瞬殺だ。しかし、それがこの世界屈指の強者の水準であり、そのことに配慮して戦わなければならぬ。

これに対し、モモンガはあえて魔法詠唱者のまま鎧を装備した状態——三〇レベル強の戦士相当の戦闘能力でこれに挑むことを考える。それでもモモンガの持つへ上位物理

無効化Ⅲの恩恵により六〇レベルに満たないセラブレイトの攻撃ではダメージを受けることもなく、戦士としての能力でも幾らか上回っているからだ。

多くのビーストマンを迎撃することになる竜王国の冒険者に最も必要とされているのはやはり継戦能力だ。今回の戦いでも、持久戦で相手を上回ればより強い信頼が得られることになる。長時間、適切な手加減を続ける難しさを考えれば、最初から適切なレベルで行くべきだろう。圧倒しすぎれば怪しまれるが、レベルが近ければ――。

――拳や剣を合わせて語った後は友情、なんてこともあるか？ 現地の一流の冒険者から情報を貰えるなら悪くないな。

こちらの世界の人間には親しみを感じないモモンガだが、冒険者モモンとして情報収集のために他の冒険者と最低限の交流を持つことはあった。元人間として、そういうアニメ・漫画的な展開にも郷愁のようなものを感じるのだ。もちろん、パンドラズ・アクターがわざわざ相手を苛立たせている状況でそういう関係作りは難しいかもしれないが、可能ならどこからでも情報を得たいということも近いレベルで戦う理由となる。

――どうせダメージを受けることもないのだ。PVPの真似事も悪くはない。

「陛下、何ということをしてくれたのですか！」

少女の部屋に飛び込んできたのは、この国の宰相だ。

不意の来訪者の正体を見極めると、少女は目をぱちりと見開いたかわいらしい表情を引きつらせ、目を合わせないようにそっぽを向く。

その顔は数秒後には見る影も無く、大きな瞳はどんより濁って気怠そうな半目になり、引き締まっていた口角がだらりと下がって口が半開きになり、玉座の背もたれにだらりと背中をもたれさせて肩が落ちる。

この少女こそ、ここ竜王国の女王であるドラウディロン・オーリウクルスだ。竜王の子孫ということで、ブラックスケイル・ドラゴンロード「黒鱗の竜王」などという名も持っている。

そして、宰相はこの王城で唯一、彼女が本音で話をできる相手だ。

「今は戦力がどれほどあつても不安な時期だというのに、決闘で負けた方が去るような話を認めるなど、何を考えているのですか！」

心底嫌そうなドラウディロンの表情を見る限り、本音で話せるからといってこの宰相が優しい理解者だというわけではない。

「むむ、し、仕方なからう。あのモモンはな、本当の私のために命を賭けたいとまで言っ

てくれた男なのだ」

女王は誇らしげにその平坦な胸を張る。その体形が真実のものでないことを示すように、その動きには一片の曇りも無い。

「——それに対しセラブレイト、あいつは絶対ロリコンだぞ。あの時、奴はモモンなど見もせず、ひたすらねっちよりと私の身体を凝視しながら言い返していたからな。モモンが私のために決闘を受けるといふなら、水を差す理由など無いではないか」

「陛下のために命を賭けるべき戦線は一つではありません。それに、我々はモモン殿が現れる以前から、そのロリコンの彼をこの国に留めおくためにその形態で頑張ってきたではありませんか。今のお召し物もそのためにわざわざ用意させたものだというのに」

宰相が事も無くセラブレイトのことをロリコンと評すると、ドラウデイロンは小さな眉間にしわを寄せる。ほぼ確信に至っていても、当たり前前的事实として扱われるとやはり気持ち悪さを余計に感じてしまうのだ。

そして、話が服装に及んだところでドラウデイロンは騙されていたことに気付き、憤慨する。

「何だと？ お前は私のことをいったい何だと思っているんだ。あと形態とか言うもの。それと、この服はそういうものなのか!? これはそもそも国民全体の士気に関わるものと言っていたではないか！ 守るべき純粹無垢な子供の演技を効果的なものにするた

めに必要というのは出まかせか！」

「陛下……お疲れなのですか？ 純粹無垢な子供を助けたいような気持ちだが、脚を丸出しにするかどうかで変わるわけがないでしょう。まあ国民全体をくまなく探せばそういう趣味の男も幾らかは居るでしょうから出まかせではありませんがね。……まったく、陛下はそういう所で少し鈍感なところがあるから、あんなロリコン一人うまく囲い込んでおけないのですよ」

はーあ、とわざとらしく出てくる宰相の溜息が、ドラウデイロンには我慢ならない。「おいー、なんだその飯屋の軒先に吊るす豚のような扱いは！ 私は女王であり、国のために働いた冒険者に恩賞を与える立場ではあるが、そういう欲望まで満たしてやらねばならないような立場ではないのだぞ」

「別にそんなのどちらでもいいではないですか。集落を襲われ、焚火の上に吊るされている民よりはまだまだましですよ」

宰相に視線を合わせられ、ドラウデイロンはぐうの音も出なくなる。女王を黙らせたところで宰相は続ける。

「——だいたい、モモン殿は著しい戦果を挙げてくれているとはいえ、この国へ来て日も浅く、まだ素性もよくわかっておりません。ちよつと元の形態に優しくされたくらいで、何を年甲斐もなく盛り上がっているのですか」

「と、としつ……くつ、それなら言わせてもらうがな、それ以上に年甲斐の無い恰好をさせて私を酷使してきたのは誰だ！」

「形態に合わせた適材適所です。あちらの形態についても、取り急ぎモモン殿が喜ぶようなものを仕立てさせなければなりませんね」

「だから形態言うな。だいたい、あちらの方が私の本当の姿なのだぞ」

「陛下、これは失礼しました」

服を仕立てる件について文句が出なかつたため、宰相は微笑みを隠さない。

「おい、それが謝罪をする臣下の顔か？」

「いえいえ、反省していますよ。申し訳ございません。——で、決闘の方はどうにもなりませんか」

「ならんな。どうにも、ならん。……まあ、その件について反省くらいはしてもよいぞ」

「反省で戦線は維持できませんからね。決闘については、ほとぼりがさめた頃に責任を取っていただきますよ」

「責任？」

「もうお一方との密会なども、後から臨機応変にセッティングしますので、どうぞよしなに」

宰相と目があうとドラウデイロンは露骨に顔をしかめる。

——またこいつは、私のことを明日の食事になる豚を見るような目で見やがって！

四四 我こそは女王の護り手 / ゲヘナ

竜王国の王都は以前より少しだけ雰囲気明るくなっている。この街は対ビーストマンの戦況に非常に敏感で、この活況にもモモンがアダマンタイト級まで昇進するにあたって積み上げた戦果が影響しているのだろう。

モモンガは冒険者の最上位を示すアダマンタイト製のプレートに触れてみる。

——この程度の金属が一番上のランクというのも締まらないが、ロール・プレイング・ゲーム黎明期にはこのあたりも結構最強扱いされていたんだっけか。

モモンガは無駄な知識語りを好むかつての仲間、タブラ・スマラグデイナの話を思い出す。語源からすれば最強扱いでも問題無いというような話も聞いた気がするが、その理由までは覚えていない。話はファンタジー金属の歴史、その中二病的鉍脈の深く深くへと進んでいったからだ。百年以上のロール・プレイング・ゲームの歴史の中で、あらゆる国のあらゆる物語の金属が掘り尽されたらしい。

ただ、ユグドラシルではその様々な金属が登場したものの、この世界では今のところアダマンタイトより強靱な金属の存在が確認できていない。やむなく、モモンガもアダマンタイト製の鎧を用意することになった。普段の魔法で作っているものと、同じ見た

目のものだ。

「鎧ですが、宿に置いてきてしまつて本当によかつたのでしょうか」

「現地の人間相手に戦士化など不要だ。万一の際は課金アイテムで取り寄せるという手もあるし、そのため目くらしも用意している」

用意した鎧は戦士化の魔法を使う場合に利用するためのものだが、どちらかという心配性の部下たちを安心させるためのものだ。たかがアダマントイト製の鎧など何の安心材料にもなりはしないが、モモンガが戦士化の魔法で一〇〇レベルの戦士となる場合、戦士として鎧が装備できるようになる。鎧を用意するということは一〇〇レベルの状態で戦うということを意味するため、そちらで安心してもらうのだ。

しかし、今のモモンガにとっては過剰な安全率より手加減の難しさの方が問題だ。モモンガはモモンとして戦うことで戦士としての動きを幾らか理解しつつはあったが、戦士としてのプレイヤースキルはまだ初心者同然で、それらしく手加減できるとは思えない。どうせダメージを受けるような相手ではないのだから、三〇レベル強の戦士相当の攻撃能力しかない一〇〇レベルの魔法詠唱者マジック・キャスターのまままで頑張つて戦う方が良いと考えている。

——戦士化を避けて正解だったな。

この日行われるのは、女王の前での決闘。いわば御前試合だ。

この国で最強の二人が戦うとなれば、当然、観客は女王だけでは済まない。

現地の戦士なので二〇レベル行けば良い方だろうが、竜王国の多くの騎士たちが観戦するつもりなのだろう。眼光の鋭い鎧姿の男たちが多く集まっている。意図してのものではないだろうが、これも派手好きのパンドラズ・アクターが無意識に招いてしまった結果なのかもしれない。

彼らは攻撃でも防御でも今のモモンガにさえ大きく劣るが、それは筋力や敏捷性など、レベルや種族に由来する差によるものだ。手加減を手加減と見抜く力まで劣っていると考えるのは無理がある。

モモンガは視線のよく通る決闘の場を眺めると、わざわざアイテムボックスでなく腰の袋に入れた魔封じの水晶を確認する。

水晶に封じられているのは、効果ではなくエフェクトで選んだ目くらましのための魔法だ。色々と試したが、ユグドラシルで派手なエフェクトを持つものは、こちらの世界でも派手になる。万一の場合はそれで誤魔化している瞬間に鎧を消して戦士化の魔法を使い、課金アイテムの力で離れた所にある鎧を一瞬で装備するつもりだ。魔封じの水晶よりずっと貴重な課金アイテムの在庫を考えると、出来る限り避けたい手段ではあるが。

「よくぞ逃げずに現れたものだな、モモンよ」

低くべつとりとした声は、セラブレイトのものだ。前に挨拶をされた時、モモンガはナーベが変なことを言わないかヒヤヒヤしていたために何を話したかも覚えていないが、今は相手に気を遣わずに済む状況なので問題はない。

「約束したこと、だからな」

「ふむ、あの腹立たしい慇懃な口はきかないのか。今日は純粹に勝負を受けるといふことだな」

「……そう思うのなら、そういうことなのだろう」

——口調とか確認するべきだったか。確かに向こうは先輩だし、パンドラズ・アクターは挑発するにしても丁寧な言葉で対応してたんだろう。

「剣を交える前に、聞きたいことがある」

モモンガは努めて太く雄々しい声を出し、問いかける。

パンドラズ・アクターの演じる慇懃無礼なモモンというのも容易に想像はつくが、それと違った切り口で相手を見極めてみたいと思えたのだ。

「何故、この竜王国に固執する？ いくらでも仕事があるというのは分かる。しかし、最近ではこの国も十分な報酬さえ出せない状況だ。君たちほどの実力なら、他の国へ行ってもいくらでも良い仕事は得られるはずだ。特にしがらみがあるというわけでもなか

ろう。何が君たちをピーストマンとの戦いに駆り立てるんだ？」

セラブレイトは嗤う。にちゃりとした、粘着質な嗤い。

そして口の端をつり上げ、粘つくような声で答える。

「それは、女王陛下以外あるまい」

これが、セラブレイトの中では完璧な答えなのだろう。

向かい合った二人の他に届かないような小声だが、視線を向けられた幼い姿の女王は小さく身震いしたように見える。

即答ではないが、彼に迷いなどあるはずもない。当たり前前の答えが返ることを知っていないながら何を聞いているのだ、という態度だ。

「その命に釣り合うだけの忠誠心を持つているということか？」

「陛下は命を懸けるに値する尊く魅力的なお方であり、我らの望みをどこかでわかって、それを覚悟されている部分さえある。今後の戦果次第では追加で陛下御自ら働きに報いて下さることは確実だろう。我らのような男たちが命を懸けるには、それだけで十分だと思うが？」

セラブレイトはその欲望を隠そうともしない。女王にチラチラと向ける視線も、その顔より身体に向けられる無遠慮なものだ。

実際に得ている情報でも、竜王国の財政事情は火の車だ。なにしろ次々と押し寄せる

ビーストマンを撃退するため軍事費や依頼料はかかっても、撃退したところで何かが得られるわけではない。もはや金のかかる傭兵のようなワーカーを雇うこともできず、国内の冒険者もだいぶ減っている。

それは、もしモモンが現れていなければ、セラブレイトは今頃望みの報酬を得ていたかもしれないということだ。

そしてセラブレイトの方も、モモンが同じことを考え、互いに同じ理由で相手の存在を忌々しく思っていると考えているのかもしれない。

「なるほど……それがお前の決断か。よく分かった。本当にくだらないことを聞いた。……だが、これだけは言っておきたいのだが、そうやって我らなどと一緒にするのは勘弁してもらえないだろうか」

最後の方はモモンガの少し萎えた気持ちをあらわすように、今までのモモンの演技とは少し違った、溜息混じりの軽めの口調になってしまう。

「ふん、今の報酬事情でもここに残っている時点で我らは同類としか思えんのだが——」
「一緒にするにやー！」

その理屈はおかしい。少し噛んだけどおかしいものはおかしいのだ。

しかし、実際にはセラブレイトは女王の身体を欲し、モモンは女王の情報を欲している。下心があることには変わらない。

そんな状況ではどんな言い訳をしようとも、女王の前で格好をつけているようにしか見えない、白々しいものになるような気がする。

それでも、モモンガは無駄な抵抗をやめられない。一緒にされたのを認めてしまつては、対外的にロリコンを認めることになる。負けのようないやがするからだ。

ただ、セラブレイトの本音を引き出せたのは良かった。

モモンガは幼女愛好者のレッテルを張られないよう慎重に回り道をしながら、どうにか会話の終着点に到達する。

「——ともかく、お前が私の存在を快く思わないのはわかった。ならば、勝者がこの国に残り敗者は去る。そういう勝負としよう」

「良からう。女王の護り手にふさわしいのは、このセラブレイトだけだ」

これはセラブレイトにもメリットがある条件で、それがわかったから提案することができた。

セラブレイトが居なければ、いずれモモンは女王の情報の全てを得られる。

モモンが居なければ、いずれセラブレイトは女王の身体の全てを得られる。

これは絶対的に有利なPVPではあるが、条件くらいは平等であつて良いような気がするのだ。

「では、行くぞ！——〈光輝劍〉！」

初手から迷いなく放たれるのは、セラブレイトの二つ名『閃烈』のもととなったもの。光の煌きの中で放たれる不可視の太刀筋を、初手で見切れる者は少ない。多くのピーストマンを葬ってきた一撃だ。

モモンガは概念として武技の存在を聞いてはいたが、実際に目にするのは初めてだ。しかし、一〇〇レベルのモモンガがこの程度の光で視界を遮られることはない。太刀筋はしっかりと見えている。本来なら対応できない速度ではないが——。

モモンガは両手に装備した二本の大剣でこれを受け、体勢をわずかに崩す。光に感じた僅かな聖属性に不安を感じ、躊躇し、そして確実に受けに回った。

二本の剣で受けてみれば、実際にはたいしたものではない。属性もダメージも、全てにおいてモモンガの護りを貫くようなものは何もない。

これは、おそらくは現地の冒険者が使うという武技なのであろうが、万一このセラブレイトがプレイヤーであればユグドラシルの特殊技術スキルということになる。武技ならば未見で当たり前だが、モモンガは特殊技術スキルもその全てを把握しているわけではない。特に、このような自身と関係が薄い系統で弱いものについてはなおさらだ。

この技は属性もついて威力もスピードも増して、視覚的にも強い光が単なるエフェクトに留まらず目くらましの効果もある。こういう多彩な効果を持つ特殊技術スキルであれば

大抵がハズレだ。取得できた当時は有用でも、レベルが上がったら使いどころが無くなってくるのだ。

「我が光輝剣を受けるとは、なかなかやるではないか」

セラブレイトが剣を合わせたまま押し込もうとする力は、モモンガと比べれば半分にも満たない。一気に押し返し、攻勢に回る。

「しかし、我こそは女王の護り手セラブレイト、我が不落要塞、抜かせはせんぞつー！」

——我が不感幼妻？ 抜かせないだと？ こいつ、女王の正体を知っているのか？

表面的な嗜好まではわかっていたが、モモンガは創作に毒されていない現地人が見た目は子供で中身は中年（？）の不感幼妻をそれと知りながら好むということに軽い衝撃を覚える。

——ペロロンチーノじゃあるまいし、エロゲも無い現地人としてはちよつと守備範囲広すぎだろう。

モモンガはアインズ・ウール・ゴウン随一のロリコンエロゲーマーの名を思い出す。しかし、問題はそこだけではない。

確かに彼は救国の英雄だったかもしれない。しかし、一国の女王相手に自分の妻と宣言するばかりか、抜くだ抜かせないだとか、あまりに不敬に過ぎるのではないか。それが現地人の感覚とも思えず、もしかしたらプレイヤーかもしれないと思えてくる。ロー

ルプレイをやめたら「ドラウたんハアハア」とか言いだす種類のアレだ。綿密な調査によつて知りえた女王の正体を知っていることも、外装だけが幼いという特殊な対象にそれとわかつていて欲情する性的嗜好も、およそ現地人とは考えにくい要素だ。

モモンガは安易な選択を後悔し始めている。手加減が難しいことから戦士化の魔法を避けたため、今のモモンガはレベル三〇強相当の実力しかない。もちろん相手がそれ以下だという前提での選択だが、プレイヤーがそう装っているだけであれば、先に正体を現した方が勝つことになる。もちろん身の危険を感じた時は正体を現して本来の力で戦うことになるが、そうなってしまうえばこの場での目的を果たすことはできなくなる。一瞬で装備を入れ替える課金アイテムを使えば正体を隠したまま戦士化の魔法で一〇〇レベルの戦士となることもできるが、もし相手がプレイヤーであれば、魔法で一時的に作っただけの、戦士としてステータスを伸ばしていない一〇〇レベルの戦士などでは対抗できるはずがない。

不感幼妻ふわくよゆうさい——女王のことを指すらしいその言葉を時に力強く、時に誇らしげに唱えながらセラブレイトが行う防御は、その気持ち悪さに似合わず、まさに鉄壁だ。最初の方こそあまりの不気味さに腰が引けてしまっていたモモンガだが、時折決定的と思える攻

撃を入れても完璧に受けられてしまい、彼の防御の凄まじさを思い知ることになる。

だが、攻撃の方はそれほどもなく、鎧で幾度か受けるうちに慣れてきて今の状態でも対処が可能になってくる。

戦いは日が昇りきり、そして落ちきって、松明が何度か交換され、空が白んでくるまで続いた。

モモンガはかつて、「ロリエロゲはいいぞ」「時にパンチラは全裸に勝る」などと言うギルドメンバー、ペロロンチーノの尖った話題にも笑顔でサムアツプすることで温かい友情を育んできた。それができたのは大人として嗜み程度の知識があったこともあるが、何より言い出すペロロンチーノの方にも多少の照れがあったからだ。彼のロリコンはネタに走る部分が大きく、またどこか強い姉のいる弟としての反発心から出ているような雰囲気もあって、どちらかというロリコンより巨乳好きのモモンガであっても若干の共感さえ感じられるものだった。

しかし、セラブレイトはそうした弱さとは無縁の屈強な男で、かつ、真摯に幼い身体を求め、そのために命まで懸けられるような洒落にならないガチロリだ。異性に抑えられているような雰囲気も無く、実際にはずっと年上である女王の本質も知っているようでありながら、それでも一步も引く所が無いどころか、そのことを戦いの糧にしている

雰囲気さえある。その嗜好は、幼き少女の身体への汚れきった賛歌とも言うべきものだ。

かつてギルドメンバーからカルシウムと優しきで出来ていると言われたさすがのモンガも、一昼夜ぶつ通しで続く不感幼妻ふわくようさいの連呼にはドン引きしている。たまに混ぜられる光輝劍の方が、ダメージに至らないながらチクチクしてくる聖属性の不快感を加味してもだいたいバシに思えたほどだ。

「さすがは『クリスタルティア』のセラブレイト、ピーストマンの一軍に包囲されても仲間を逃がして生還した男の継戦能力は人間の範疇を超えているな」

『ザ・ダークウォリアー』のモモンも一人でチームの前衛を張るだけはあるぞ。当初は押されていたが、動きの鋭さも斬撃の重さも全く変わっていないように見える」

戦いは長丁場となり、観客はずっと留まっているわけではない。思い思いに去り、また現れて勝手なことを言っている。

最近では『ザ・ダーク・ウォリアー』の名を聞くのも黒歴史じみた雰囲気があつて少しつらかつたのだが、そんなものは目の前の生き物が口にする言葉に比べたら些細な問題だ。無我の境地で聞き流すことができる。

このままで負けることはありえない。セラブレイトの攻撃は幾度か命中しているが実際にレベルは低いようで、へ上位物理無効化Ⅲによってその全てが無効化されてい

る。つまり、ダメージを受ける要素が無いのだ。相手がアンデッドでない以上、疲労が重なるのを待てば良い。回復魔法もいずれば尽きるだろう。

逆に、絶対に負けないからこそ、限りある資源である魔封じの水晶を消費する気になれず、モモンガはこの面倒な戦いを続けていた。

こうしたアイテムが貴重というわけでも、数がそれほど乏しいわけでもないが、何しろ相手は三〇レベル以下の、ゲーム初期の雑魚に相当する実力だ。それに対して限りあるアイテムを使うのはゲーマーとして考えられない。たとえ相手が低レベルでも派手に倒して見せ付けるような目的があるなら話は違ってくるのだが、今回は地味に接戦を演じなければならないのだ。

そして、もし相手が何らかの方法で力を抑えているプレイヤーであるなら、相手もこちらがプレイヤーである可能性を感じているはずだ。当然、本来の力を発揮する備えがありながら、ここまでそれを使わずにいる理由を考えなければならぬ。

それはおそらく戦力差だ。向こうから見れば、最悪『ザ・ダーク・ウォーリアー』の三人がプレイヤーである可能性を考えるだろう。これに対し、『クリスタルティア』の殆どがNPCか現地人であった場合、正体を明かさないので得策ということになる。

逆に、こちらが先に正体を明かすのも愚策だ。警戒されて全力の抵抗にあつた場合、プレイヤーは当然一〇〇レベルとして、相手側に一〇〇レベルNPCが一人でも混じつ

ていれば六三レベルのナーベラルと五七レベルのソリュシャンで対応できない。

こうして長々と剣を交えることで、その間にもモモンガの戦士としてのプレイヤースキルは向上している。元々地方の差がある所へ技術が向上すれば有利になるのは当然だが、その分だけセラブレイトのでたらめな防御が目立つようになる。攻撃の方はさほど力が乗っていないくせに、筋力で大きく上回るモモンガの全力の一撃を時には剣先だけで完全に止めてしまうのだ。不感幼妻ふわくようさいの連呼で幾らか脱力はしているが、さすがにそこまで力のない一撃を放っているつもりもない。

「回復魔法を使っている様子も無いが、疲労を抑える武技でも持っているのか？」

「武技か……まあ、そんなようなものだ」

そういうことしておくべきだろう。セラブレイトのように回復魔法を使えるので無ければ、人間がここまで長時間戦い続けるのは難しい。

「ふん、継戦能力だけは立派なものだが、我が不感幼妻ふわくようさいを抜けない以上勝機は無いぞ」
——ん？

モモンガはその会話に不自然なものを感じ、ひと呼吸おいて攻撃のリズムを変え攻勢に出る。不感幼妻ふわくようさい——女王に手を出すなどというのは、あつたとしても勝負の後の話で、何かがおかしい。

「——無駄だ。不落要塞！……不落要塞！」

先入観を振り払ってみれば、攻撃を放つモモンガの耳に聞こえたのは、防衛系の特殊技術なのだろうか。でたらめな防衛が出るタイミングとも合っている。

「それは、防衛系の特殊技術なのか」

「すぎる？ 何を言っているのかわからないが、我が武技はまさに鉄壁。力押しで抜けるものではないぞ」

「武技……そうか、防衛に使う武技というものもあるのか」

偽っているようには見えない。誇らしげな顔も単にこの技の絶対性を誇っていたものなのだろう。モモンガは思考の前提の大部分が崩れたことで、大きく脱力する。精神的な疲労の影響が少ないアンデッドの体に感謝したくなるほどに。

——はあ、特殊技術と違って武技というのは現地産だし、プレイヤーではなさそうだな。

モモンガは警戒を解くが、今から急に強くなつて決着を付けるのも不自然で、何より本物のレベル三〇以下を相手にわざわざアイテムを消費するのも勿体なく思えてくる。

結局、モモンは三日三晩戦い続け、最後は天候が悪化して雨が降り続く中、水たまりに足を取られたかのように不自然に転倒したセラブレイトの肩へ重い一撃を与えて勝利した。心配だった勝利の後の演技も、気疲れを正直に出していれば良いだけなので全

く問題は無く、謁見は後日ということにしてナーベの肩を借りながら宿へ戻った。人間であるモモンは武技で疲労を抑えられるとはいえ、相当に疲労していなければおかしいからだ。

この時ソリュシアの姿が無かったのは、飽きてどこかへ遊びに行つたという性格設定通りの適切な演技をしてくれたのだろう。その日からナーベとソリュシアの仲が少しだけ悪くなったような気がしたが、モモンガは演技については任せているので気にしないことにした。どうせ謁見までにはパンドラズ・アクターに代わらなければいけないのだ。

一方そのころ、ビーストマンの国の首都では、ナザリック地下大墳墓から潜入した多くのNPCやそのしもべたちが獣の頭部で作られた仮面を手に持ち、作戦の開始を今か今かと待っていた。

デミウルゴスを筆頭とする報復作戦には、守護者からはシャルティア、アウラが参加

し、戦闘^{ブレアデス}メイドからはシズとエントマが加わった。もちろん、デミウルゴス配下の魔将^{イビルロード}など、守護者と戦闘^{ブレアデス}メイドの中間の戦闘能力を持つ高位のしもべたちも数多く揃えている。それだけでも過剰戦力と言えるが、特筆すべきは街の東側を遠巻きに囲うように配置した百体強の中位アンデッド、ソウルイーターの部隊だろう。

ソウルイーターは、少数で都市を壊滅させたなどと伝えられるビーストマンに最も恐れられているアンデッドでありながら、モモンガであれば一日あたり一二体も生み出すことができるものだ。パンドラズ・アクターの活躍によつてモモンに戻りそこなつたモモンガは、ビーストマンの国の情報を得てからは牧場やミノタウロスの王国で出た亜人の死体でこればかりを量産していた。もちろん、それ以前に作つていた死^{デス・ナイト}の騎士も多数揃っているが、こちらは数体を伴うのみで大部分をミノタウロスの王国の守備に残している。

「ビーストマンの数を無駄に減らしてしまわないよう、上手くやるように」

とはいえ、万一の際の逃亡対策としてソウルイーターの部隊を配置している以上、特定のNPCが殺しすぎることさえなければ問題は無い。

デミウルゴスは細かく作戦区域を区切り、短い時間で首都に蓄えられた大量の物資を奪う完璧な段取りを準備している。それは、シャルティアが大量の鮮血を浴びて踊ろうとも、エントマがビーストマンの味を知つて派手に晚餐を愉しもうとも、ユリが都市に

住む弱者に多少の情けをかけようとも、結果において全く揺らぐおそれのないものだ。

情報収集については、それまでのアウラによる偵察結果だけでなく、全ての守護者と戦闘メイトブレアデスの協力を得ることが認められている。

さらにはモモンガさえも、秘匿資料を秘匿扱いのままデミウルゴスに一時的に提供している。

秘匿扱いを変えないのは、ナザリック内のしもべたちの中に、人間を食料とする設定を与えられながらもまだ人間の味を知らない者が少なくないからだ。その者たちがピーストマンと同様の味覚を持つかどうかは不明だが、モモンガが人間を完全に彼らの食料だと割り切ることができない現状でそういう要求や不満が強くなると都合が悪い。

その点、デミウルゴスは人間を食料とするわけでもなく、提供することに問題は無かった。悪魔である以上人間の苦痛や恐怖を心の滋養とする部分はあるのだが、ゲームであるユグドラシルの中では悪魔という存在も一般的すぎて、モモンガの側にそこまで具体的な認識は無い。

当のデミウルゴスも、精神的な意味で人間を食い物にすることを愉しむ感覚は有しているものの、提供された資料から人間への扱いを変えるようなことは考えなかった。

そんな些細な愉しみなど問題にならないほど、今のデミウルゴスはこの作戦に集中している。

デミウルゴスは大きな野心を抱いていた。自ら不遜であると思いなながらも、決して抑えることのできない野心だ。

——偉大なモモンガ様の叡智に、少しでも追いつくことができらうか。

大きな裁量を与えられたこの作戦は、自らの主であり至高の叡智を誇るモモンガに対し自らの知恵をアピールする絶好の好機と言える。

命じられたことをただ遂行するのみで、デミウルゴスが満足できるはずはなかった。

情報収集の対象は、当然ながらモモンガの意を受けて隣国で動いているパンドラズ・アクターにまで及んでいた。

パンドラズ・アクターは、モモンガが自ら、その意味を誰にも言うこともなく携わっていた重要な任務の代役を任されている。そこに、モモンガがいまだ守護者たちに伝えていない次の行動への布石が隠されているに違いない。少なくともデミウルゴスはそう確信していた。

——私も先の先を読んで、お役に立てるようにしなければ。

モモンガが一つの牧場を確保した後、最善を尽くし最速と思えるほどの段取りで国を一つ制圧してみれば、出てきたのは最も警戒すべきユグドラシルのプレイヤーの情報だった。それも、最初に牧場で手に入れた情報があつて初めて活きるものだ。デミウルゴスには、全ては至高の叡智を誇るモモンガの掌の上でのことにしか思えない。

ならば、その情報の線を辿った先にある竜王国の状況を知ることこそ、モモンガの手先へ布石を打つことに繋がるのではないか。

そんな思いが、ビーストマンたちの繁栄の歴史を終わらせることとなる。

「倉庫街制圧完了。物資を回収中でありんす」

「制圧区域内の民間人も回収中ですう」

「……………上空に不審な影無し」

始まってみれば、あらゆる作戦は順調だ。本来の任務はシャルティアに任せている物資の略奪だが、ここでエントマが民間人を回収しているということは、ビーストマンもまたナザリックにおいて物資となりうるということを意味する。

シズの任務は、不審な飛行物の監視と撃墜だ。鳥などは全てアウラの影響下に入るため、味方以外で空を飛ぶものはビーストマン側の魔法詠唱者か斥候代わりの生物しか考えられない。最弱の手段で攻撃し、万一生き残ったら他の者が捕獲することになる。

首都の物資が集積される倉庫街を魔法による炎の壁で分断し、一気に物資を回収する。触れても火傷せず通り抜けが可能な壁だが、衛兵だろうが民間人だろうがビーストマンの中にこれを通り抜けようという者など皆無に等しい。

問題は、同様に炎の壁で分断する権力の中核、連邦政庁だ。ここへ押し寄せて来るであろう諸部族軍へのアウラの対処次第で次の一手が変わってくるが――。

「諸部族軍は全てあたしの方で掌握した。タイムの障害になるような強者は居なかったよ」

「では、予定通りプランAでいきましょう」

状況はデミウルゴスにとって理想的とわかっていい。借り受けたソウル・イーターを中心とするアンデッドの部隊を後退させると、部下の魔将のうち数人をアウラに合流させる。貴重な《全種族魅了》^{チャーム・スピーシーズ}の使い手たちだ。

自身は、しもべたちが未掌握のまとまった数のビーストマン部隊を発見するたびに移動しなければならぬ。獣の頭皮の仮面を被って〈支配の呪言〉で命令するのは、アウラの掌握する部隊に合流してその指揮下に入るといふ一点のみ。

そして、アウラに使役されるがまま政庁を破壊したビーストマンの大部隊は、首都の異変を知って駆けつけた多くの部隊を従えて首都を出立する。命令系統は使役者のアウラと《全種族魅了》^{チャーム・スピーシーズ}で支配された指揮官たちで二重になっている部分もあるが、その行軍の目的は明確で、仮に支配の行き届かない部隊が合流していても問題の起こらない状況になっていた。

その目的とは、冬を越すための物資の確保だ。

彼らは内乱の鎮圧に成功した。少なくとも《全種族魅了》チャーム・スビーシースで支配された指揮官たちは、政庁で諸部族の族長たちを殺し尽くした武器を掲げ、首都の広場で誇らしげにそう宣言していた。その政庁に詰める親衛隊はアウラによって使役され、ビーストマンの中タイムでは強者であるはずの族長たちもほぼ全てがアウラによって動きを止められ、あるいは様々な状態異常を付与されていたのだが、最終的に族長たちが「反逆者」として彼らの武器によって息の根を止められたのは間違いないことだ。

そんな彼らにとって、内乱によつて失われた物資の確保は急務である。内乱に乗じて現れたという謎の悪魔やら魔物やらのことなど理解の範疇に無く、そこで奪われた物資を取り返す方法などわかるわけがない。西の空へ飛び去ったという目撃談は多いが、今から追つてどうなるとも思えない。

それでも、物資を確保しなければ首都のビーストマンたちは冬を越すことができない。
い。

そんな時、一部の指揮官たちから自然にあがる声を聞いて、彼らは思い出すのだ。脆弱な隣国には大量の食料がある。ビーストマンにとつて最高の滋養と食味を誇る良質な食材が、二本足で歩いている。その食材は時に武器をとつて戦いを挑んでくるが、たいてい強くない。

西へ飛び去った悪魔たちのことはわからなくとも、西へ向かえば食糧は得られるの

だ。

西の人間の国『竜王国』への進軍は性急なものではないが、物資不足に不安を抱く多くのビーストマンたちを巻き込み、拡大に拡大を続けながら進められた。

この進軍は、過去に例をみない規模のものだ。

近年、ビーストマンたちの中で人間の旨味の違いが語られるようになってからは竜王国へ狩りに向かう者が増え、個人の狩猟からチームでの狩猟が主流になっていた。複数チームが連合すれば、人間たちは軍を動員した。

しかし、ビーストマンが人間に対し本当の軍という規模で動くのは、少なくともここ二百年では初めてのことだ。そのうち、竜王国への侵攻はビーストマンの生存を守るために不可欠な、重要な軍事行動とされ、それはビーストマンたちの間で「明白なる使命」とまで称された。

ただ使役される者がいる。無心で操られる者、操られながらも西への進軍に納得する者、何者の支配も受けずただ西への進軍に活路を見出す者もいる。そんな中、軍勢の中で遠目に見える謎の同盟者とやらの疑問を持つ者も少なくなかったが、ほとんどの部隊がその同盟者に友好的であることから大きな問題にはならなかった。

そういう内心は多種多様だが、ビーストマンの大部隊は竜王国へ近づくほどに膨れ上がり、大国間の軍事行動と比較しても未曾有の規模となっていた。大規模な軍事行動は

さらなる物資の不足をもたらし、物資不足が波及した途中の街や村からも食い詰め者が兵士として参戦した。

ひと冬の食糧のために、ひとつの国を容易に滅ぼしうる軍勢が動く。深刻な物資不足と種族の違いによつて、それは当然のこととして受け入れられた。

四五 マーレとドラウディロン

竜王国への援軍としてバハルス帝国を出発した軍勢は霧に包まれたカツツエ平野の東寄りを進み、途中で同行者の過半と別れることになる。

援軍の出立と前後してリ・エステーゼ王国に対し行われた宣戦布告は、その時期はやや遅くなったものの概ね例年通りの内容で、その決戦の場はカツツエ平野と決まっている。援軍に交じって同行したのは、そこに築かれた要塞に先行して駐留し開戦準備を整えるための部隊だ。

援軍の規模が多く伝わることは帝国の名声に繋がり、戦争準備を始めているであろう王国側による戦力読み違いを誘う可能性も得られる。実際の当事国である竜王国に到着するのは実質的に強行偵察部隊でしかない千数百だが、極めて危険な状況にある竜王国は周辺諸国との人の往来が相当に少なくなっている。この援軍に関して周辺諸国では専ら帝都アーウィンタールを出立した時の規模に基づいて語られることになるだろう。

その差を埋めるのが、アダマンタイト級冒険者チーム『漆黒』であり、元漆黒聖典のクレマンティーヌの存在だ。

特に、クレマンティーヌの存在は大々的にアピールされる。竜王国ではスレイン法国の特殊部隊といえば救世主のような扱いとなっており、全容は知られてないとはいえず、多く救援に来ている陽光聖典より格上の最強部隊の一員が来たとなれば反響も大きい。そこで、人類の守り手として聖女の如き扮装をさせられたクレマンティーヌが、名目上の指揮官として帝国軍を率いているのだ。

「なんかもどかしいよね、あのあたり、サクツと殺しに行っちゃ駄目なわけ？」

「ここでは激しい戦いは新手を呼び、無駄な消耗を招くだけです。騎士団と魔法学院の共同研究の成果として、霧の出ているカツツエ平野の行軍ではこうして静かに進軍し、近づいてきたもののみ槍袈で処理する戦術が採用されています」

クレマンティーヌの言葉に答えるのは、長い黒髪を後ろで太い三つ編みにまとめた、学者の助手のような雰囲気を持つ女騎士だ。

帝国軍は高い密度で槍を並べた部隊で味方を守りながら進軍し、広い平野をうろつく大量のアンデッドを極めて緩慢な速度で「処理」していく。殆どは槍袈で事足りるが、騎兵や魔法詠唱者の遊撃部隊も控えている。

騎士といっても、その内訳は様々だ。その他、野伏レンジャーの能力を持つ斥候から、盗賊や職人まで様々な者がいる工兵まで、その全てが帝国騎士団の騎士とされる。帝国における騎士とは、冒険者をも凌駕するほどに多彩な職種を含む戦闘部隊・支援部隊のことであ

り、軍馬に騎乗する戦士といった狭い範疇に限られるものではない。そして、槍衾のような戦術は、少数の熟練兵が現場指揮をとることで多くの支援部隊を比較的安全に戦力化することができる。

開戦後、両軍が大規模に布陣した状態では霧が晴れて何故か出現しなくなるアンデッドたちも、帝国がカツツエ平野に要塞を築いて以降、戦争の準備段階で相手をしなければならぬ状況が増えているらしい。そのため、こうして効率よく相手をして突破するノウハウが蓄積されているのだ。

「クレマンティーヌ様は、スレイン法国から幾度も送られたという竜王国への援軍に参加したことは無いのでしょうか」

「ないない。私はもつと後ろ暗いやつ専門だったから、こーいうの困るんだよね」

クレマンティーヌは聖女然とした純白の衣装のヒラヒラをつまみ上げ、渋い顔をすする。思えば、援軍に参加したことがないと正直に明かしてしまったがために、このような強いアピールを含む服装を用意してしまったのかもしれない。あてがわれたこの白亜の馬車の中も、どうも居心地が悪い。

しかし、絶対に逆らえないマーレから任務に従うよう釘を刺さっていては、大人しくしているしかない。クレマンティーヌにとって、恐れて従っているという点ではマーレもエンリも同じだが、直接に拷問を受けたマーレの命令となると遊び心も縮こまってし

まう。

話し相手になっている女は帝国魔法学院出身の普段は魔法詠唱者部隊に所属している女騎士で、フルーダの息のかかった名目上の副官だ。クレマンティーヌは、この派兵が決まった後のマールとフルーダの話し合いの場に踏み込んでフルーダに泣きついた。そのおかげで衣装通りの演技をしないで済んでいることには感謝しているが、この副官とそれほど距離を縮めようとも思えない。

——どう考えてもマール様との繋がりが目当てだし、解放された後でも窓口になればたまらないよね。

それは渡りに船とばかりに素早く対応してくれたフルーダの態度を見ていればわかる。クレマンティーヌは接点を減らし、多くの時間を副官以外の目にとまらない馬車の中で椅子寝をするなどだらけた姿で過ごしつつ、たまに武器を手にとって小窓から外を眺めながら軽口を叩くような退屈な時間を過ごし続けた。

カツツエ平野を抜けると、そこからは帝国軍が行軍ノウハウを持たない領域だ。驚馬ヒボケリフに騎乗した少数の斥候部隊が先行し、行軍速度は極端に落ちることになる。現段階で遭遇の可能性があるのは「狩猟規模」のピーストマンの群れだとされているが、帝国軍はこの行軍で迅速性より安全性を重視していた。

「遅いですね。ちよつと、急いでもらおうと思います」

マーレの言葉を聞いて、エンリは帝国軍の指揮官ということになっていてクレマンティーンに同情する。エンリは借りてきた猫のようになっていた行軍当初のクレマンティーンしか見ておらず、その緊張感の中に居るクレマンティーンが今の立場とマーレの指示との間で板挟みになるように思えたのだ。

「えつと、エンリが行く先のピーストマンを掃除してくるつて帝国軍のひとたちに言つてきてください」

「は？ 掃除してくる？ 私？」

マーレは戸惑うエンリを冷やややかな目で眺めると、アイテムボックスに手を入れる。

「ちよ、それは！」

寸前で意図に気付いたンファイレーアの制止も間に合わない。

「では、これをどうぞ。——行きましょう」

マーレから黒い宝珠を押し付けられ、その瞳を暗く濁らせたエンリは速やかに主人の意を汲む。

「聞け、帝国の愚図ども！ ここから先はこの『漆黑』が掃除してやる。貴様らはその貧相な馬どもに鞭を入れ、行軍を早めるだけでよい！」

鋭くしなる鞭が、連れているイビルアイの足元の地面を打つ。マーレの忠実なしもべ

としては、許可なく主人の所有物を傷つけることはできない。そんなイビルアイの状況は、さすがにこの行軍では魔獣としての扱いはできないものの、よく見れば捕虜か罪人の類であることはわかるようになっていた。

どこからともなく現れる二体の骨スケリトル・ドラゴンの竜に帝国軍はどよめき隊列を乱すが、これはすぐに正常化する。名目上の指揮官であるクレマンティーヌに諮ることさえなく行軍速度が早まるのは、事前に部隊の上層部にフルーダを通して力関係が伝わっていたためだ。

もちろん、そこにマールレの名は無い。マールレにとって表に出るべきはエンリであり、クレマンティーヌなのだ。

ビーストマンの一団が近づくと、骨スケリトル・ドラゴンの竜に騎乗したエンリ死の宝珠が二体を巧妙に操ってこれを牽制しつつ、不可視化の状態で行軍するマールレの魔法で焼き尽くしていく。骨の竜を巻き込まないよう攻撃魔法の位階は抑えているが、ここでは抑えすぎたことが仇になったかもしれない。

「おい、フルーダ様の火ファイヤーボール球より大きいぞ。幻覚でも見せられているのか」

「幻覚だつて？ それならあれを二体操りながら魔法使ってる時点でそうなんだろうよ」

「なあ、『漆黒』の残りはクレマンティーヌ准將軍より弱いと聞いてるんだが」

「おいおい……俺たちはいったい何を連れているんだ」

馬車で昼寝をしていたクレマンティーヌは周囲が騒然とする中で目を覚まし、状況の報告を受けると、慌てふためいて権限も無いのに全速前進を命じてしまう。漆黒聖典時代も、格上から怒られたらとりあえず突撃して戦果をあげて誤魔化したのが、疾風走破の二つ名を持つクレマンティーヌだ。少し怖い状態のエンリに急げと言われたことを知って反射的に他人を走らせるくらいは当然のことかもしれない。一定以上の地位の者には権限が無いとわかっていても騎士全体がこれを無視するのは難しく、隊列は大きく乱れた。

結局、実質的な指揮官たちは事態を收拾するため、秩序を保ちうる最大の行軍速度を保つことになった。幸い、出会い頭に次々と焼かれていくピーストマンの末路を見れば、この行軍にリスクは感じることもない。部外者による無理を通してしまう形になったが、被害が出そうにないとわかると早く首都へ到着して状況を知ることが優先された。

竜王国の首都は、戦時中に相応の緊張感だけでなく、重い泥の底に沈んだような陰鬱さに包まれていた。安全な城壁内の街でありながら、全ての民がまるで死地に漂う避難

民であるかのように暗く沈み、希望を手放しかけていた。

クレマンティーヌは聖女のような格好で群衆からよく見える位置に出されて大人しくしていたが、この即席の『聖女』がどうにか意味をなしたのは城内に到達してからのことだ。城内の兵士たちの士気はいくらか上がったものの、他国からの援軍にも大して盛り上がりがないこの街の状況は異様なもので、帝国の将兵も戸惑いを隠せない。

「雰囲気、おかしいですね」

「巫人の餌場ならこんなもんだと思うけどさー、それより、なんでこの街の衛兵は門の内側ばかり気にしてるわけ？」

「……確かに、配置も含めて不自然な感じがします。特に情報はありませんが」

クレマンティーヌが感じた違和感の正体は、その日の夜には判明することになる。

「我が王都の国民は、女子供に至るまでその全てが命を散らすこととなる戦力なのだ。だから、街を逃れることは認められず、衛兵もそういう配置になっている」

形式的には歓迎の場として、実質的には援軍の対価として実施された非公式な謁見の場で、女王ドラウデイロンは臆面もなく言い放った。

全て包み隠さず情報を出すように言ったとはいえ、これにはエンリヤンファイアードどころかクレマンティーヌさえ驚きを隠さない。

沈黙を破るのは、深いフードを目深に被った少女マーレだ。

「えっと、あの、それは竜王の力を使うための時間稼ぎか何かですか？」

あまりに不躰な質問に、ドラウディロンはエンリに非難の籠もった視線を向ける。フード付きマントから出た肌の色から闇妖精ダークエルフとわかるこの少女は冒険者チーム『漆黒』の側の存在であり、従者のようにエンリに付き従っていたからだ。

だが、それを見たクレマンティヌが口を挟む。エンリもあわあわと対処を悩んでいたが、身分の高い相手に対応する胆力も、マーレを不機嫌にしないよう行動する俊敏さも、何もかもが劣っている。

「こちらのマーレ様も、私が援軍とともにここへ来た理由である『漆黒』と同等のお方とお考えの上、誠意をもって答えてもらえますか」

それは、謁見の始めに語られたことの繰り返し。クレマンティヌは既に、援軍とともに竜王国へ来たのはこの場を設けるため、すなわち『漆黒』の利益のためではないと言いつつ切っていた。

そして、ドラウディロンにはクレマンティヌの聖女の装いが単なる外向きの衣装ではないことも、とつくに理解できている。ここまでの謁見の会話や反応からだけでも、恐ろしいな冒険者チームとして噂を聞く『漆黒』のエンリの方がよほど人間的な良心や善性といったものを備えているように見えるほど、その本質は冷酷だ。そうでなけ

れば、ここまで深く話を引き出されることもなかった。

ドラウデイロンは苛立ちながらも、質問に答えるしかない。

「——っ。時間稼ぎなど、そんなことに国民を使えるものか！　そもそも、私がそのような力を使えるのは竜王の血を受け継ぐことによる生まれながらの異能の恩恵であって、私自身は人間と変わらない脆弱な存在だ。そんな脆弱な私が竜王の力を使うには気が遠くなるほど多くの無辜の魂をすり潰し、対価として捧げなければならぬ。永遠に使わずにおきたい力だが、もし東の守りが破られれば他に方法は無くなる」

沈痛な面持ちで語るドラウデイロンに、マーレはただ観察するような無機質な視線を向けて質問を続ける。

「それで、さっき言っていた巨大爆発だと、この街の人間を全てすり潰したら何発撃てるのですか？」

「……………一発だ」

ドラウデイロンがマーレを見る目には、もはや憎しみの炎さえ灯っている。しかし、ここで情報の提供を拒めば、アダマンタイト級冒険者チームどころか援軍までも失われてしまう。

「——たった一発で、百万人。この街の人間の七割から八割が犠牲となるのだ。侵攻は止まるだろうが、あれを使えばこの国は終わってしまう」

「えっと、人間をよそからもう百万捕まえてきたら、また撃てますか？」
「何、を……」

俯いていたドラウディロンは、驚きに包まれて顔を上げる。

深いフードの奥には長い耳と左右で色の違う瞳をもつ、美しい少女の顔があった。

——まともではないと思つたが、こいつは例の王族か!? 元漆黒聖典のクレマン
ティーンが遠慮するほどとなると……相当な……。

女王ドラウディロンは少し氣勢をそがれた。

物資の不足でも話題にするかのような平易さで百万の人命を語るのは、力に魅入られて狂つたと法国より聞いている森妖精エルプの王族と、同じ特徴を持つ闇妖精ダークエルプの少女マーレ。こうした特徴を持つ者を見かけたら法国に通知するよう言われているが、確かに相応の危険な人物であるように見える。

援助をよこさなくなつた法国に義理立てするつもりはないが、法国に敵視されるほどの存在ならば一目置かざるを得ない。

そして、得体の知れない不気味さは感じるが、これは怒りをぶつけるべき言葉ではない。この闇妖精ダークエルプは人間とは別種だからこそ、考えようによつてはこの場の誰よりも、ドラウディロンよりも事の深刻さをわかっているのかもしれない。

人類という種の生存だけを考えるのであれば、マーレの考え方は決して無茶なもので

はない。最前線にあるのがたとえ帝国や法国であっても、本気になったビーストマンの侵攻を止めるのは非常に困難で、奇跡的に退けたとしてもそこを別の亜人の国に攻められればひとたまりもない。

そんな状況では、数百万の人間を生贄に出してでもビーストマンの侵攻を完膚なきまでに打ち砕き、二度と人間の領域に侵攻しないように思い知らせるといのはむしろ最善手と言えるかもしれない。そこまでの戦果があればビーストマンも他の亜人もその敗北を知る世代が消えるまで相当な長期間にわたって手を出せなくなる。そうやって時間を蓄え、その間に繁殖力に勝る人間が数を増やせば、その数を力に種族間の生存競争を戦い抜くことができるだろう。

そのように人間の命を単なる力の源たる数字と割り切るのならば、ドラウディロンの『始原の魔法』は有力な選択肢となる。だが、そのような選択肢は心情的にも元から考えもしないようなものであるばかりか、実現の可能性も皆無に等しい。

「……できぬ。魂を対価とするには、予め儀式が必要だ。私はこの国を、この王都を守るためだけに力を行使することを誓い、国民の多くは幼子のうちから同意の必要な儀式を済ませている。よそから連れてきた人間たちでは、生贄に捧げるような同意は得られない」

すなわち、強制は不可能で、竜王国の国民でもなければまず同意は得られないという

ことだ。出生及び定住の機会に儀式を行った国民が、王都に百数十万。これが使える魂の全てとなる。

「——お前のような考え方をするならば、もしスレイン法国のような強大で民の信仰心も集める国が、その力であらゆる国民に幼いうちから生贄になることを受け入れさせて育てることができれば、亜人など怖くはないのかもしれない。しかし、そんな提言も法国と敵対する者のもものでは意味を持たぬか」

ドラウディロンの前からクレマンティーヌの姿が消え、その場に棒立ちのマーレからはぞくりとするような気配が放たれる。

「……………」

「誰が、法国と敵対している？ 耳が早いのですねえ」

「——ひっ」

後ろから鎖骨を撫でるのは、クレマンティーヌの両手なのだろう。武器は持っていないが、その手にかかればドラウディロンの細首など簡単に折られてしまう。

前後から鋭利な殺気に挟まれたドラウディロンは、クレマンティーヌの言葉をうけて無言のマーレの方を見る。

「確かに、法国は敵です。だから、ぼくたちがここへ来たことを喋ってもらっては、困ったことになります。ところで、どこでそれを知りましたか？」

ドラウデイロンの知る限り、スレイン法国は主に森妖精^{エルフ}の王国と戦争を続けており、森妖精^{エルフ}に限らず人間以外は劣った存在として奴隷にすることが許されている。そういう扱いの闇妖精^{ダークエルフ}で、さらに森妖精^{エルフ}の王族の特徴を持つ少女に対し、法国の漆黒聖典から出奔したクレマンティーヌが従っているとこの状況があるのだ。つい口に出してしまつた敵対というのは、観察するうちに得た確信のようなものに過ぎない。

——不味い。虎の尾を踏んだか？ いったいどうすれば……。

「情報源、喋つちやいましょうよ。この街で神都みたいな事が起こつたら、人口百万切つちやうんじやないですかあ？」

「ちよ、クレマンティーヌ！ そういうのは——」

一国の女王を相手にした不穏な脅しに、ンファイレアから背中を押されたエンリが口を出す。

「まあ、待て。情報源など無いんだ。ただ、そのマール殿の目、左右で色の違う目はスレイン法国と戦争を続けている森妖精^{エルフ}の王族の特徴とされている。さらに、法国大災害以降は戦力が逼迫している状況だ。クレマンティーヌ殿が帝国に仕えているのも調略でなく裏切りの可能性が高く、それがマール殿に仕えているとなれば、法国と敵対関係にあるのは間違いないと考えただけだ」

「……こういう目が、森妖精^{エルフ}の王族なんですか。そこには、他にこういう目をした闇妖精^{ダークエルフ}

の女の子はいませんか？」

「そこまではわからんが、強者を増やすためにそういう血を持つ王族を増やしているとか聞いたことがある。そのあたりは、クレマンティーヌ殿の方が詳しいのではないかな」

「いや、全然」

そんなはずはない。以前戦況が厳しくなった時、ドラウディロンも普段救援に来ていた陽光聖典より格上の漆黒聖典の援軍が欲しいなどと話をした時、法国の人間から色々と聞かされて知っている。

「漆黒聖典なら一度はそちらの戦いにも投入されると聞いているのだが」

「ええ、一度きりならね。ある集落の村長を殺せって言われて、ついでに戦力になりそうなの二十人くらい殺して遊んでた時、最初に殺したのが臭ってきたから適当な家に運び込ませて火をかけてみたら、ぱーつと燃え広がって村みつつくらい無くなっちゃったんですよ。それ以来ずっと、対森妖精戦線エルフの任務どころか状況報告やら会議やらの資料も何も来なくなりました。向いてなかったんでしようね」

「任務が成功してるなら、向いてないということもないと思いますけど」

露悪的なクレマンティーヌ以上に、その所業をまるで問題にしないマーレの異常性が際立つ。女王ドラウディロンとエンリ、そしてンフィーレアは漂う視線の行き場を失い

かけたところへ互いのドン引き具合を確認することができ、奇妙な連帯感さえ覚えた。「とにかく、今は目の前の戦いのことを考えた方がいいと思います」

エンリを立てて発言を控えていたンフィーレアが、ここで場を引き戻す。

「わ、私たちは東の方から来るビーストマンと戦えばいいんですよ」

「うむ、そういうことになるな。健闘を祈るぞ」

そのまま、常識ある三人で軽く場をまとめにかかる。実際は、ある地点を抜かれて接近を許したら百万の命を犠牲にしなければならぬという悲壮な話なのだが、この場ではこれ以上話を続けても収穫があるとは思えなかった。そして、この悲壮な状況を正面から受け止めるにはエンリやンフィーレアはこう危うい状況に慣れすぎていたし、ドラウディロンはその只中に身を置き過ぎていた。

「とりあえず法国に援軍の事は伝わってるだろうし、それは私が円満に縁を切るためな感じでいいんですが、マーレ様絡みの余計な話は絶対に漏らさないように」

正面に戻って釘を刺すクレマンティーヌに、ドラウディロンはぶんぶんと首を縦に振る。

「もちろんだ。それに、法国は援軍要請に応えなくなつたからな。今後は帝国を頼りにしていくつもりだ」

「別に援軍呼んで法国の戦力削ってもらつてもいいですけど、私らが帰つてからにして

「くださいね。……でない、巻き込まれちゃいますよお？」

「わかった。全て望み通りにする」

「しかし、法国が援軍出せなくなつてから随分経つと思つんですが、よくこの国持ちましたね。軍以外に何か戦力とかあるんですか」

クレマンティーヌの問いに、ドラウディロンは肩を落とすし、しゅんとしてしまう。

「少し前までは、頼れる戦力があつたのだ。そのあたりは、すまないが私でなく宰相から説明を聞いてほしい」

宰相が呼ばれ、ドラウディロンが去ると、この国が失つたばかりの戦力——『ザ・ダークウォリアー』と『クリスタルティア』について淡々と説明がなされる。隠しても街の噂などで知れてしまうことではあるが、それは女王自らは話しにくい内容なのかもしれない。

二つのアダマンタイト級冒険者チームのリーダーは女王を巡つて決闘をし、片方が国を去ることになってしまった。必死に引き留めようと探させたが敗者の姿は既に無く、勝者さえ残つていなかった。これは後でわかつたことだが、二つのチームは動き出していたピーストマンの大軍勢の首魁を討ち果たすため、ともに潜入したらしい。

結局、唯一逃げ帰つてきた『ザ・ダークウォリアー』の女盗賊から、二つのチームが

瓦解して全員生死不明だという報告があった。彼女は事の顛末を簡単に報告するとこの国を去っていったという。

「……屈強な戦士二人が、女王陛下を巡って決闘ですか？」

「はい。あの陛下を巡って、決闘です」

「あの、もしかして女王陛下には、男性を虜にするような能力が——」

「世の男性の好みというものは、様々なのです」

途中、聞き返したエンリに答える宰相は、少し遠い目をしていた。

ここでは、東の国境に迫るピーストマンの大軍勢についても、その行軍速度や到着予想時期など具体的な情報もたらされる。地形や位置関係についてマールレが強い関心を持ち、ここまで迫られたら切り札の巨大爆発を使うという方針には急に異を唱える。

「別の街へ皆で逃げて、追いつめられてから使うのではダメなんですか」

「不可能です。効果範囲は広大とはいえ制限があるため、東の大渓谷を抜けてくる前であれば壊滅的な打撃を与えられません。そうなればピーストマンの大軍は国中を覆い尽くすでしょう。あれを一気に葬れるような地形は、大渓谷を除いて他には無いのです」

「使ったらこの国は終わりと言っていました。どうにか後へのばそうとは思わないんですか」

「そこで使わなければ、国どころかこのあたりの人間が全滅しますから」

マーレ以外にはマーレがそこで食い下がる理由は理解できなかったが、竜王国にとって国境の大渓谷を抜かれることが死活問題であることだけはその場の全員が理解できた。不真面目なクレマンティーンでも、翌朝には実質的な指揮官を呼び出して情報を共有したほどだ。

王城に部屋を用意されたクレマンティーンと別れ、『漆黒』は用意された王都で最も上等な宿へ着いて部屋へ向かう。用意された部屋は、二人部屋が三つ。援軍を送ってきたバハルス帝国からの使者扱いということで、これは最上位の冒険者を超えた待遇だ。

その宿の廊下で、エンリはほっとしたような、残念なような気持ちでいた。何より、二人部屋をすっかり人数分以上確保されているのがよくない。マーレがイビルアイの鎖を持つている以上、部屋割りには最初から期待できないからだ。ちなみにインフィーレアは男なので、既に一人で一つの部屋に収まっている。

「エンリ、今からぼくと同じ部屋へ来てください」

不意に後ろから声をかけられ、エンリはぶるりと震える。勝手にミコヒメと同部屋だと考えていたところが、思わぬ事態だ。

「あ、あの、ミコヒメを部屋に連れて行つてから、ちよつと色々と心の準備をしてからで、いいかな——いや、急ぐから、ちよつとだけ待つてね？」

旅の途中ならともかく、上等な宿の綺麗なベッドを共にするのだ。身体を拭いて着替えなければならぬし、乙女には色々準備というものがあるのだ。

エンリは顔を真つ赤にしてマーレの顔色を窺うが、マーレの視線が冷たいものになつたように感じてあわあわと焦つてしまう。マーレとの間でじわりと染み出すような緊張を感じるのは久しぶりのことだ。

「えつと、準備とか要らないんで急いでください。身体だけあればいいですから」

無機物を見るような冷たい視線を浴びせられながら身体だけを求められたエンリは、無遠慮な言葉に下腹部から首筋までを電流が走り抜けたかのような衝撃を受け、その場にへたり込んでしまう。

——あう……腰の下着つて、こういう時に意味があるんだ。

そこに明確な不快感が残るといふことは、何かを食い止めてくれているといふことでもある。

エンリは震えが来るほどの緊張に押し流されそうな心の片隅で、このような一見無駄とも思える下半身下着を考え出した上流階級の知恵に素直に感心していた。このような下着はトイレが面倒になるだけの只の飾りではなく、大きな安心感をもたらしてくれ

るものだと理解したのだ。

そんな現実逃避気味の思考に逃げつつも下着のおかげでノロノロと立ち上がる事ができたエンリリだが、マーレはそんな僅かな時間も待つてはくれなかった。

「やっぱり、部屋じゃなくてここがいいです」

「は、はひー」

あまりのことに、エンリの声は裏返る。

エンリは、マーレが周囲を確認するように視線を動かしたのを見逃さない。今、このフロアの廊下には巫女姫とイビルアイがいるが、それだけだ。他人の目は無い。

そして、その二人はマーレの所有物でしかない。今更マーレが二人の視線を問題にするとも思えない。その巫女姫もイビルアイも、マーレから屋外で晒し者のように扱われることも少なくなかった。巫女姫の方には露出の多い姿に魔法的な理由があるような話もあったが、結局はマーレがそういう女の子を好んで連れ帰ってきたから今があると考えることもできる。

マーレが近づいてくる。ちよつと必要な荷物を取りに来るような、無遠慮で素っ気ない足取りで。

今夜は、エンリにとつて特別な、忘れられない夜になるだろう。しかし、マーレにとつてはおそらくミコヒメやイビルアイで楽しんでいたのと変わらない、爛れた日常の一部

でしかないはずだ。同じマールレの所有物なら、命令されてすぐに部屋へ向かわない時点で廊下で慰みものになるのも当然のことかもしれない。

「や、やさしくして、ください」

どんな場所で、どのように蹂躪されても構わない。ただその前に一度だけ、やさしく手を取ってほしかった。

そんな願いとともに差し出したエンリの手の上にそつと載せられたのは、禍々しい雰囲気を撒き散らす黒い宝珠死の宝珠だった。

マールレにあてがわれた部屋で、跪いた姿勢のエンリ死の宝珠は小さな悩みを下着の中に留めたままにマールレの問いに答えている。拘束を減らされたイビルアイは巫女姫とともに別の部屋だ。

「カツツエ平野のアンデッド大量使役自体は、私とマールレ様か額冠のいずれかの力があれば可能です。ここまで引つ張ってくることもできるでしょう。しかし、例のビーストマンの大軍の動きを止めたいとかそういう事なら、申し訳ありませんが、まず間に合いません」

「間に合わないのはどうでもいいです。それができるくらいの数は引つ張って来られる

ということでもいいですか」

問いが続くのはありがたいことだ。言いたくないことを言わずに済む。

「それは可能です。毎年の戦争にさえかち合わなければ、負の力を戴いてカツツエ平野で《不死の軍勢》を増幅することで、そこそこの大国でも国全体に死を撒き散らすくらいのことではできるでしょう。私はまさにその日のために、マーレ様に忠誠を誓って——」

「いや、今はまだいいです。必要になつたらやりますから」

「はっ！ 我らが世界に死を撒き散らすその日まで全身全霊にて忠誠を尽くし、一日千秋の思いでお待ちしております！」

話ながら下着に留めた悩みを散らそうと両脚をもどもぞさせるが、不快感が強まるだけだ。

「それじゃ、適当にその身体を休めておいてください」

マーレが興味を失って隣のベッドで横になると、エンリは安心して小さな溜息をつく。

——この身体の状態など、やはり言わなくて正解だ。藪蛇にならずに済んで良かった。主たるマーレ様の命令なら常に絶対服従の覚悟で仕えているが、それ以前に私は死の宝珠なのだからな。

死の宝珠

エンリは黙ってベッドにその身を横たえる。下着に付着した悩みの量は相変わらずで、その不快感に加えてまだ少し下半身の芯のような辺りに落ち着かない感じも残っている。だが、こんなものは安静にさえしていれば忘れられるものだ。

主の命令でこうして生命力溢れる妙齡の少女の身体に入り込んでいても、やはり自身は世界に死を撒き散らすための存在だという確固たる自我だけは消し去ることができない。

いくら主に絶対服従の身で、借りている体が主のそういう玩具であるとわかっている、さすがに死の宝珠としては生命創造系の活動だけは遠慮したのであった。

四六 大溪谷の戦い、そして――

東の大溪谷は、バハルス帝国からの援軍に竜王国の正規軍を加えてもなお、守りに有利とは言い難い場所だった。確かに切り立った岩山の崖によって閉ざされた領域であつて敵の侵攻ルートは限定されるが、左右の岩山の間は広い所で数キロ、狭い所でも数百メートルから一キロ程もある広大な溪谷では、砦を築いて守ることも難しい。

非情ではあるが、帝国軍は竜王国のために存在しているわけではない。大溪谷の中でも比較的に見晴らしが良く、いざという時に速やかに撤退できる場所へ陣取することを決め、竜王国軍側にもそこで時機を見極めるという方針を伝えた。

これに対し、竜王国軍の主力も同様の配置を取る。こちらも敵の規模を見極めるのが目的だが、その後は普通に戦うか、指定された防衛線まで下がって肉の盾として時間を稼ぐかという二択でしかない。

他方、工兵隊と思しき部隊は二手に分かれ、主力は陣地の守りを固めつつ、一部は大溪谷でも少し後方、防衛線を少し越えた辺りの広い場所へ薪を集めるなど大規模な範囲で野営の準備をしていた。

それを見た名目上の指揮官クレマンティヌは、自分の代わりに竜王国軍との作戦会

議に参加もしている名目上の副官に対し疑問の声をあげる。昨日はマールレのために充分に働いたつもりなので、帝国軍のお飾りとしてのその手の仕事はこの副官に任せているのだ。

副官にはマールレと密約を結んだフルーダの息もかかっているので、帝国軍の中では目の前でだらけることも本音を言うことも許される唯一の相手でもある。

「あれ、ずいぶんな場所で準備してるけど、夜はあんな後方へ下がっちゃうの？　なんだか広くて守りにくそう」

「いえ、あの場所は使いません。防衛線が早期に瓦解した場合、時間を稼ぐため何割かがあのあたりで焼かれて喰われるところまでが彼らの作戦だそうです」

言われてみれば、肉食のビーストマンにあわせたのか、用意された薪の量はやたらと多めだった。

「うげ。適当に逃げればいいのに」

「私もそう思います。彼らの凄惨なまでの覚悟に、我々の側は皆、驚きを隠せておりません」

どうせ生贄になるので逃げ場など無いとわかつてはいるクレマンティヌと、そのことを知らない副官では温度差が大きい。もちろん、わざわざ教えてやる必要もないことだ。

帝国軍としても、防衛線さえ維持できれば切り札が使えるという程度の話は聞いてい
るようで、撤退するにしても一応後方からそれを見届けておこうという考えになつてい
るらしい。

「どうでもいいけど、私はあんたらがそれに驚けるくらいのマトモな人間で安心したよ」
将来的に帝国への仕官も視野に入れているクレマンティーヌにとって、法国上層部の
ような滅私奉公の忠誠心を持つ者は邪魔でしかない。帝国騎士たちが思っていたより
現実的な考え方を持つことには幾らか好意的な目を向けるようになっていた。

——これで皇帝も現実見えてたら良かったんだけどな。

現実的な人間というのは他人を利で動かすので、余計な干渉が少なくなる。クレマン
ティーヌにはクレマンティーヌの楽しみがあり、それは国家にとって無益な人間の血を
少々余計に流すだけで簡単に得られる程度のものだ。決して多くはない給金にも特に
不満は無かったので、そういう部分での自由を与えてもらえていれば法国を裏切ること
など無かつたかもしれない。任務はしっかりこなしていたのだから、少しの遊びくらい
はお目こぼししてくれても良いと思うのだ。

その点、風通しが良く、国家への忠誠心より雇用条件で繋ぎ止められている帝国騎士
団の組織は合格だ。あとは皇帝ジルクニフさえ現実を見てくれたら完璧なのだが――。
クレマンティーヌは聖女のような服のヒラヒラをつまみあげて、大きな溜息をつい

た。

白き聖女——今のところ、これが皇帝ジルクニフの、そしてバハルス帝国におけるクレマンティーヌの現実だ。

人間の軍が陣地の構築を終える頃、帝国軍のざわめきとともに骨スケリトル・ドラゴンの竜で近づいてきた『漆黒』、はクレマンティーヌと一時合流する。カツツエ平野で既に見ているとはいえ、周辺の帝国軍は動揺を隠せない。

「色々考えましたが、ここは手早く片付けることにします」

「足手まといはここへ置いていく。一応戦場だからな、クレマンティーヌが面倒を見ておけ」

「は、はいっ！」

珍しく自ら事を起こそうとするマーレとただならぬ雰囲気死の宝珠を纏うエンリを前に、クレマンティーヌは周囲の目も忘れて思わず跪ひざまずいてしまう。

ここで骨スケリトル・ドラゴンの竜から降ろされたのは、ンフィーレアに巫女姫、そしてイビルアイだ。クレマンティーヌは細めのものに替えられているイビルアイの鎖を躊躇なく受け取る。

一連の流れに頭を痛めるのはンフィーレアただ一人だが、唯一まともに意思が伝わり

そんなクレマンティヌに目で合図しても全く目が合わないとなれば、頭を抱えて諦めるしかない。かつてンファイレアの言うことを素直に聞いて演技指導をされていた死の宝珠エンリの方も、今回はマールからそういう命令を受けていないので知ったことではないのだ。

色々と諦めたンファイレアは遠い目になって、死の宝珠エンリに演技指導をした時の思い出に浸ることにした。

あの時のエンリは元のエンリ以上に世間を知らないというか、年頃の少女としてはやたらと無防備に見える場面が多く、それと死中の宝珠ひと自身の危険な雰囲気とのギャップがンファイレアには刺激的だった。

演技指導の時は追い詰められていたので必死だったが、危機が去ってしまおうと、その時のことを宿のベッドの中などで思い出すようになっていた。もちろん、元のエンリへの強い想いがあってこそその感覚なのだが、それを裏切るかのような背徳感もそういう感覚を大きく後押ししていた。

そんな時、前衛の竜王国軍、そして周囲の帝国軍へとどよめきが広がり、別の動揺が伝染する。

見れば、大溪谷の薄い霧が晴れ、地平の辺りにビーストマンの大軍勢が姿を現してい

る。軍勢は数百メートルから二キロにも及ぶ大渓谷の端から端までを埋め尽くし、その奥行きも決して薄いものではない。

この動揺を切り裂くのは、上空から全軍へと向けられ、一帯に鋭く響き渡るエンリの声だ。

「静まれえっ!! 多いというなら我らが間引いてやろう。愚かな獣どもと一緒に死にたくなければ、ここで震えて見ているがよい」

そして、二体の骨スケリトル・ドラゴンの竜に乗ったエンリとマールは敵軍へ真っ直ぐ向かっていく。相

変わらず表に立たされるのはエンリだが、やる気になっているのはマールなのだろう。その理由が竜王国を助けたいというより、巨大爆発をここで使わせたくないからであるように見えるのが気になるが――。

ンフィーレアは、黒衣を翻して飛び去っていくエンリ死の宝珠の後ろ姿をただ凝視する。

残念ながら、この状況ではできることはそれだけだ。露出度が皆無に近い黒衣でも、骨スケリトル・ドラゴンの竜に乗っていると歩いたり馬上にいる時とは違った形で身体のラインが浮き出るといふことがわかってきている。

「あんな数だけど、やつちやう気なのかなー」

「……………森でのあれが一度きりじゃないのなら、そのつもりだろうね」

しっかりと最後まで見送ってから、クレマンティーヌの言葉に答えた。

前方には、見渡す限りのビーストマンの大軍勢。それは、上空の魔獣の視野を借りても同じことだ。

アウラの鋭敏な感覚は、そんな大軍勢のほぼ全域を把握していた。遙か前方の本隊から自らの周辺の後詰めまで、地を埋め尽くす無数のビーストマンのうち使役対象となっている何割かに広く浅く及んでいるのだ。

基本的に未使役状態の部隊は前を行く本隊に送り込み、ナザリックのしもべが視野に入ってしまう後詰めやそれに近い領域に完全に支配した部隊を配置している。それらが散らばる領域はレベル百のアウラが誇る圧倒的な索敵能力をも上回り、前衛が実際に接敵するまで交戦状態がわからないような状況になっていたが、そもそもこの行軍は勝利ではなく交戦自体が目的なので問題はない。少なくともプレイヤーのような強大な存在が現れた時、ナザリックの存在に危険が及ぶ前に知ることができればよいのだから。

「モモンガ様の真意か……あたしも、できることを頑張ろう」

デミウルゴスは、モモンガの真意を考え、『ザ・ダークウオリアー』としての竜王国での準備を活かすことまで視野に入れてビーストマンの首都での作戦を組み立てていた。この行軍についてモモンガより作戦続行を任せられてもいる。アウラはそんなデミウルゴスが羨ましいが、今はその行軍を支える重要な任務をやりきることが大切だと考えている。

なお、デミウルゴスに非常事態があつたり連絡がつかない際はアウラが作戦を指揮することになってはいるが、ビーストマンやそれに圧倒されている人間の国ごときを相手にそのような事態に陥ることなど想像さえできない。

「——空!？」

支配している最前線のビーストマンたちの一群が、一斉に前方の空へ敵意を向ける。アウラが彼らへ意識を向けようとした瞬間——。

アウラの五感が前方の轟音と地響きを捉える。同時に本隊に属する全ての支配対象に浮遊感を覚え、すぐにそれらの全ての命が失われた。

これは、とてつもない質量による、圧殺か——。

アウラはすぐに、しもべの飛行魔獣による空からの視野を確認する。

「地割れ!? それに、人影——あれは、マーレ!？」

もはや作戦どころではなかった。それどころか、行軍を続けるのに十分なビーストマンが残っているかもわからない。

それより、今はマーレだ。

アウラはそうした諸々を置き去りにして、手近な魔獣の背に乗り前線へと駆け出した。

マーレの起こした大地震と地割れを前に、ビーストマンたちはなすすべもなかった。阿鼻叫喚さえも間に合わず、ただ踏みつぶされた蛙のように一瞬だけ声にならない断末魔の悲鳴をあげるか、蟲のように音もなく潰れていった。

ビーストマンの大軍勢の大半が大地の亀裂の中に消えると、そこへ転移の魔法で現れるものがある。亜人相手とはいえ大量の死を前にして蕩けた笑みを浮かべていたエンリは、死の宝珠すぐに表情を引き締めると警戒を露わにしてマーレへ寄り添う。

「マーレ様、これはただならぬ心配――」
「デ、デミウルゴスさん！」

現れた悪魔は、マーレのよく知る顔だった。しかしその表情は硬く、駆け寄ることも再会を喜ぶこともためらわれた。

マールは死の宝珠エンリに命じて、静かに地面に降りる。

「久しぶりだね、マール。……再会を喜びたいところだけれど、君は今、自分が何をしたのかわかっているのだろうか?」

「はい。それは、竜王国の女王に頼まれて——」

その言葉に、デミウルゴスは目を細める。

「女王に……あれに取り入ろうというのは良い発想だ。しかし、その者の力について知った上での行動とは思えな——」

「あ、あのつ、その力をここで使わせるのは勿体無いので、ビーストマンを少し倒して、追い払うつもりでした」

「ふむ……勿体無い、とはどういうことかな?」

デミウルゴスは目を見開き、警戒を解いて歩み寄る。

「ぼくは他の所でその巨大爆発を一度見ています。その時に色々なことを試しました。だから、次はきちんと時間をかけて準備してからにしたいんです」

「見た——そして試したのですか!? マール! あなたはやはりモモンガ様の意思によつて……ああ、なんとということだ!」

激しく動揺し、大きな動作で天を仰ぐデミウルゴス。その姿はマーレの知るデミウルゴスとは思えない激しさだ。

「――やはり、モモンガ様の叡智はあまりに凄まじい。真意を知ったつもりでいた私が愚かでしたよ。全ては至高の御方の掌の上でのことに過ぎなかったとは」

「えっと、デミウルゴスさんも凄く頭がいいですけど、モモンガ様の足元にも及ばないなんて当然ですし、落ち込まないでください」

マーレにはデミウルゴスの激しい感情までは理解できないが、至高の御方の意に沿うよう努力する姿に強い親近感を覚える。つまり、これでも励ましているのだ。

「落ち込んでいるのではないよ、マーレ。私は感動しているんだ」

「そ、そうなんですか。ところで、ピーストマンが逃げ出したくなるまで数を減らしてきてもいいですか」

「それはアウラでも制御可能かもしれないし、まずは少し話をしてから――」

そこへ現れたのは、もう一人の闇妖精^{ダークエルフ}。

作戦は台無しになった。そこでアウラを包みこんだ感情は、純粹な怒りだ。

アウラはナザリックのしもべたちの中ただ一人、聞かされている。

モモンガが、ナザリックに残った唯一の支配者にして守護者たちの生殺与奪の権利を持つ至高の御方が、マーレの行方も、何をしているかさえも全く把握していないという

ことを。

つまり、マールレは命令などと与えられていない。混乱を防ぐため、それを知るのはモモンガとアウラの二人のみだ。

「――裏切り者とする話なんて無いよ」

優先されるべきは、身内の情より忠誠心だ。アウラは勝手にいなくなったマールレを捜索するうち、必要あらば自ら始末を付ける覚悟さえ持つようになっていた。だが、優しいモモンガはマールレが何者かに連れ去られたか困難な場所に囚われている可能性にまで言及してこれを宥めてくれた。

それならば、アウラは姉として、少々とろい所のあるマールレを自分が責任を持って救い出さねばならないと考えていた。

しかし、マールレは自らアウラの前に現れた。さらに、そこでしたことはモモンガの裁可した作戦の妨害だ。

「お、お姉ちゃん。裏切りなんて、そんな……」

アウラはマールレに冷たい視線を向け、鞭を構える。周囲には続々としもべの魔獣たちが集まり、すぐにでも飛びかかれるようにマールレを緩やかに取り囲む。

「デミウルゴス、どいて。そいつ殺せない」

「アウラ。君には申し訳ないが、作戦の前提が変わった。今からビーストマンたちの行

軍の中止と撤退は可能だろうか」

「勝手に話を進めないでもらえるかな。あたしはそんな命令は聞いてない」

小さなマールレだけでなく、デミウルゴスの顔にも影が落ちる。辺り一帯を覆う影は、その全てがアウラのしもべのものだ。巨大な魔獣たちの包囲網がマールレとデミウルゴスを押し包んでいた。

「作戦の責任者は私だ。マールレが持ち帰ってくれた情報は非常に重要なもので、それを前提に――」

「この行軍はモモンガ様の裁可された作戦で、それを阻んだマールレは万死に値する。デミウルゴスがマールレを庇うなら、あたしはそれを非常事態だと判断して作戦を引き継ぐよ」

たとえ守護者の仲間うちであっても、なあなあで済ませられる問題ではない。アウラがデミウルゴスへ向ける視線も、果てしなく冷たいものだ。

「アウラ。それは、本気で言っているのか？ 私は君の知らないことをモモンガ様から聞いた上で、この判断をしているのだよ」

「デミウルゴス。自分だけがモモンガ様から全てを聞かされていると思わない方がいいよ。マールレに関しては、あたしの方がわかってる」

マールレについて至高の御方より真実を聞かされ、任されていたのはアウラだけだ。た

とえ知恵者のデミウルゴスが相手でも、丸投げしてしまうわけにはいかなかった。

「……マール、再会して早々にすまないが、君には生きて情報を届ける義務がある。この場は逃れて——」

「デミウルゴスさん……ぼくがモモンガ様のご命令を阻んだのなら、お姉ちゃんの邪魔はしないでください」

庇おうとするデミウルゴスを制し、マールは一步前へ出る。マールの態度を察した死の宝珠スクリトル・ドラゴンのエンリによつて二体の骨の竜がアウラからデミウルゴスを隠すように動いて翼を広げるが、威嚇の雰囲気は無い。

もちろん、そんなものはアウラやデミウルゴスにとって小虫が視界に入った程度の意味しかないが——。

「まあ、いいか。マールが素直に罰を受けるなら、デミウルゴスの出る幕じゃないよね」
「アウラ！ マール！ 何よりモモンガ様の、ナザリックの利益を考えたまえ！」

デミウルゴスはその場を動かず、ただ叫ぶ。この場に耳を向ける全ての者に聞かせるかのように。

アウラの武器はマールに向けられたまま、その視線はデミウルゴス一人を射抜く。「ぼくはナザリック地下大墳墓の守護者です。モモンガ様の意に反する行動をとつたら罰を受けるのは当然です」

「情報はどうなるのですか！ この作戦自体、現段階では始原の魔法だけが目的です！
マールレの情報があれば、作戦も成果も全く違うものになるでしょう！」
アウラの耳がぴくりと動く。

「そ、それは僕が独断でしたことなので、モモンガ様が判断されることです。いざとなつたらニューロニストさんなどもありますから」

「ねえデミウルゴス。今、いったい誰に向かって喋って――」

デミウルゴスの挙動と口調の変化に強い違和感を覚えたアウラだが、守護者の仲間という意識もあつて即時の対処はしなかつた。

そして、にわか膨れる禍々しい気配。

「――騒々しい、静かにせよ」

死の支配者が、三人の守護者の間に降臨した。

一触即発か、その一歩手前か。

モモンガは、デミウルゴスの機転によってアウラとマールレの衝突を知り、ここへ来る

ことができた。

まさかこの事態に備えたわけではあるまいが、作戦を主導する二人が同時に持ち場を離れた場合、伝言の魔法メッセージを使える戦闘メイドのエントマが随時状況を確認してモモンガに報告することになっていた。もちろんデミウルゴスが予め決めていたことだ。

なんとなく、マールレの状況についてアウラのみと情報を共有していたことが裏目に出たことは理解できたが、それでどう対処すれば良いかまで思いつくわけではない。それでも、エントマから状況が伝わった以上、速やかに動くしかなかった。

まずは自分にできること——散々練習した支配者らしい台詞と態度、そして直前の思いつきで加えられた、それを補強する絶望のオーラ——によつて対処するしかないのだ。

沈黙。その中でよくわからない雑音と、マールレが鼻をすする音がする。この世界で初めて見るマールレは、やはり他のNPC同様、ゲーム時代とは全く違う生きた存在感のある姿だ。それが、人間性と涙腺があれば思わずもらい泣きしてしまいそうな寂しさと嬉しさの入り混じったような表情で、モモンガを真っ直ぐ見つめている。

——素直に再会を喜んでいい状況では無さそうだが、どうしたものか。

モモンガが困っていると、マールレの傍らで雑音マールレの連れらしき女の正体がドサリと倒れた。そういえばマールレばかり見ている間、近くに電撃に撃たれたようにびくんびくんと痙攣する気配が

あつたような――。

「ぶぼつ、がぼぼ……な、なんとという濃厚な死の気は……がぼぼぼつ」

――うわあ、やっちゃったよ。鼻血とか泡とか盛大にふいてるし。

そして晴れ渡った空の下、倒れた先には水たまり。黒衣の股間から下がわかりやすく濡れている。

モモンガは慌てて絶望のオーラを引つ込め、思考を整理する。

犠牲者の方はさらに目や耳からも血を流しているが、大切な友人の子供たちの前で取り乱すわけにはいかなないので後で考えることにした。即死でなく泡をふけるだけの元気があるなら、ナザリックに連れ帰れば手遅れということはありません。

まずは、目の前の状況だ。大切な友人の子供たちも同然のNPCが、身内同士で衝突している。止めなければならぬが、わざわざ衝突の原因などを聞いてしまえばどちらかに肩入れする形になって後味が悪いかもしれない。

「さてアウラよ、ここは私が判断しても良いのだろうか」

「は、はいっ！ ここにはモモンガ様のご判断に逆らう者などいません。いたら、あたしが殺します！」

「では……即時撤退だ。デミウルゴス、良い判断だった。そしてアウラ、ここからの難しい撤退を任せられるのはお前しかない。ピーストマンのこれ以上の損耗をできるだ

け避けるよう、よろしく頼む」

「はっ!!」「はいっ!」

デミウルゴスに促されて撤退指揮へ向かうアウラの顔色が悪いが、身内に武器を向けたことを気にしているのかもしれない。後でフォローしておくべきだろう。

とにかく、今は――。

「も、モモンガ様……ぐすっ……」

モモンガは、ゆっくりとマールへ歩み寄る。

マールの視界はどうしようもなく滲んでいた。邪魔な水気がこのまま至高の御方の姿を滲ませてしまうのなら、炎で我が身を灼いても排除してしまいたい。そう思いながらも、ひとたび裏切り者とされたマールには魔法という手段を取ることさえできないのだ。

「マールよ、よく戻ってきてくれた」

「ごめんなさい、ももんが様……ももんがさまあ……」

やっと、逢えた。

長く長く、マールの胸にぽっかりと空いたままだった穴が、満たされていく。

忠誠を向けるべき至高の御方、その前に傳く自分のあるべき姿かしず、そして自分の役割、繋がり、存在意義——全てが終わろうとした時、全てが揃うことができた。

再び手にすることができたのなら、終わりが来るその瞬間まで、マーレはマーレであり続けたい。裏切り者として処分される前に、その最後の時間を至高の御方の前で過ごすことができる、こうあれと生み出された通りに振る舞っていられる。それがたまたなく嬉しかった。

いまだ死の覚悟を纏い続けるマーレだが、その頬を流れ続けるのは間違いなく嬉し涙だ。

「苦勞をかけたようだな。これまでの話をナザリツクでゆつくりと聞かせてもらえるだろうか」

「でも……ぼくはモモンガ様のご命令を阻んで……」

一緒にいたい。沢山話をしたい。けれども、今のマーレはそれが許される身分とは思わない。

聞いてもらうべきは、苦勞話ではなく情報なのだから。

「しかし、それはアインズ・ウール・ゴウンのためになると思っ、自分で考えてしたことなのだろうか？」

「……はい。それがモモンガ様の作戦を台無しにしてしまったので……罰を受けなければ

ばならないんです」

白磁の手がマールレの髪をさらりと撫でる。

マールレは溢れ出る喜びを抑えるように、目を細めて小さく震えた。

「罰など無意味だ。それより、マールレが考えていたことも聞かせてもらって、今後のことを考えなければならぬ」

「ぐす……それが、モモンガ様の……意思なら」

守護者たちを後詰に置いた状態で軍を進めさせたモモンガは、マールレと似たものを見ていたに違いない。現地の脅威をそれだけ重大視しているのなら、罰を棚上げしてそれに対応するということもあるのかもしれない。

マールレはもう少しの間、アインズ・ウール・ゴウンの守護者マールレであり続けることができる幸せを噛み締めながら、脅威に対し矢面に立つことを決意する。

転移の寸前になって、白目をむいたまま呻き声をあげて地べたで蠢いていた^{死の宝珠}エンリも回収された。

死の宝珠の力によって絶望のオーラの負の影響からは逃れていたが、宝珠が一気に大きな力を吸い込みすぎたために身体の色々な部分がエネルギー過供給でおかしくなっていたらしい。

そのエネルギー自体は今の^{死の宝珠}エンリにとって本来素晴らしいものであったはずだが、量

が問題だった。絶頂を軽く突破し、血管や神経から臓器まで様々な所に多くの損傷を抱えた形だ。さらに宝珠が強引に肘で這わせたり色々試みたせいで全身が傷だらけになっっている。

顔じゅうから泡やら血やらを垂らし、宝珠の持つ気力だけで動かなくなった身体を無理に動かそうとするエンリ死の宝珠の姿は、宝珠から漏れる負の力も相まって、その道の専門家であるモモンガさえも壊れかけの動死体ソシビと一瞬見紛うほどのものだった。

かくして、ナザリック第六階層守護者マーレは、ナザリックに一時帰還を果たす。しかし、マーレの旅はもう少しだけ続く。

第十章 墳墓に至った冒険者たち

四七 ルプスレギナに話してみるつす

《転移門^{ゲーム}》の手前で、モモンガの足が止まる。

「マールよ、どうしたのだ。まだ他に回収すべきものでも——」

「あの……離れたく、ないです。ごめんなさい」

モモンガの張り詰めたロープが弱く震える。その振動は、端を握って離さないマールから伝わってきていた。

「まずは、ともにナザリックへ帰るのだ」

「でも、その……転移は……」

マールの顔に張り付いているのは、ゲーム時代にデザインされたおどおどとした表情とは違う、本物の恐怖のように見える。

——そうか、この世界に転移した時、一人きりになってしまったからな。

モモンガはそつとマールの頭を撫でる。

「も、ももんがさま……」

「心配なら、私にしつかりと掴まっけてもいいのだぞ」

「は、はいっー!」

マールは嬉し涙を隠そうともせずモモンガの下半身に抱きつき、腰骨と大腿骨を固定する。

——あ、歩けないんだが。

モモンガには束縛耐性は無い。そもそも接近後の束縛を許すようなビルドではないので必要も無かったのだが——。

そのまま、二分が経過する。力の差が大きすぎて、一度固定されればその部位からは抵抗の意思さえ伝えることができない。

そして、泣く子には主人といえども勝てないのだ。

「……ももんが、さま」

——マールも嬉しそうだし、俺から言うのもなあ。でもハンゾウとかもらい泣きして対応してくれないし、早く戻らないとあれ死んじやうかもだよな。

護衛である人間型モンスターハンゾウに持たせた女は、先程の絶望のオーラによって虫の息だ。もちろん、モモンガにとつてはこの馬の骨かわからない現地の死にかけの女より、大切な仲間の子供のような存在であるマールの感情の方が大切なのだが。

「ま、マールよ。久しぶりだからな。ナザリックまで……コホン……抱っこ、というのはどうだろうか?」

モモンガの下肢を固定する絶対的な拘束が、緩んだ。

「だ、抱っこ……ですか？ ええと……」

マールは涙に濡れた顔を上げ、きよとんとした表情になる。

手を放し、両の掌とモモンガの顔を交互に見るその意図は不明だ。

モモンガはそんなマールに優しく手を差し伸べる。

「ぼ、ぼくが抱っこしてもらって、いいんですか？」

「も、もちろんだ」

マールは顔を赤らめて骨の手を取る。胸元に抱き込む瞬間、にへらと顔を崩すマール。

「では、戻るとしよう」

モモンガがマールの細い身体を抱えると、その子供らしい高い体温と早い鼓動が骨身に伝わってくる。

マールの細く柔らかい腕が抱擁するようにモモンガの肋骨を囲うと、肋間には服越しに子供らしい少しぷにぷとした身体が押し付けられる。

子供がいなかったモモンガは初めての抱っこの感触に気が緩むが、《転移門^{ゲート}》へと踏み出した瞬間――。

細い腕が万力のように締まり、モモンガの肋骨が悲鳴をあげるように軋んだ。

マールレの旅は、ここでは終わらない。

なぜなら、マールレと死の宝珠による幾分偏りのある説明により、マールレが築いてきたものの有用性をモモンガが認識することになったからだ。

なお、宝珠は気絶した身体エンリから離して単体でモモンガの許へ引き合わされ、やたらとうるさくしてマールレに割られそうになっていた。

宝珠を黙らせた後、モモンガはマールレの旅の経緯や仲間たちについて話を聞いていく。

カルネ村と異形種スレインの敵、クレマンティヌとエ・ランテルでの情報、巨大爆発の時の鎧ツアルと竜、吸血鬼イビルアイと『蒼の薔薇』、そして帝国のフルルーダから竜王国まで、簡潔な説明が続く。詳細な報告は後でマールレから提出されたため、今は当面必要な部分を確認することになる。

「アダマンタイト級冒険者になったのは、ぼくではなくてエンリ一人だけです」

モモンガがマールレの話を聞いていくうち、エンリについては親戚の可愛い子供に変なことを教える不埒な女という目で見ざるをえない部分も出てきてしまうが、大筋ではマールレのために役立つくれた協力者という理解に留まっている。基本的にナザリッ

クの守護者は常識に欠けるところがあるため、後で本人に話を聞いてみなければわからない部分も多いのだ。

モモンガには、竜王国の冒険者モモンとしての経験とそこで集めた情報がある。モモンの時は絶え間ないビーストマンの侵入によって素早い昇進が可能となったが、普通の国であればアダマンタイト級まで到達するのはそう簡単ではないということを聞いている。

そんなアダマンタイト級冒険者がマーレと親密な協力者で、囷として使うことも可能となれば、これはなかなか非常に有用な存在だ。使い捨てにするつもりはないが、絶望のオーラで死にかける程度ならば万一のことがあっても蘇生費用も知れている。話を聞いておく必要があるだろう。

このエンリの他にもマーレの偽装身分アンダーカバー的な役割を担ってきた人間の協力者やしもべたちについて簡単に説明がなされるが、これらもいずれはナザリックを訪れてもらうことになる。マーレが異形種を敵視する仮想敵国として紹介したスレイン法国の手がかりとなりそうな二人はもちろん、不思議な生まれながらの異能を持つという少年も興味深い存在だ。

そして、人ならぬ者もまた重要だ。情報の宝庫と思われる長い時を生きた吸血鬼については、マーレがいまだ引き出せていない情報を引き出すための特別な措置を考えなけ

ればならない。

「そういえば、その吸血鬼なら街で作った魔法複写があります」

「魔法複写？ ……うおっ!! なっ、何だこれは……」

モモンガも元は健全な男だが、異世界転移などという大事件があったため、いかがわしい画像を見るのは久しぶりのことだ。それが元の世界では絵でしか表現することが許されない実写ロリとなれば、動揺を隠すのは難しい。

「吸血鬼は街の中にはいけないらしくて、魔獣として登録すれば街の中でも問題ないってことで、服を脱がして魔獣っぽくしたらいいです」

マーレの説明に、モモンガは骨しかない顔をしかめる。

人間というのは異質・異端に厳しい生き物だ。女王が竜の血を受け継ぐ竜王国と違って、西側の人間の国々では異形の者への風当たりはずっと強いものと考えるべきだろう。

「これは、あのエンリがやったのか？」

「いえ、クレマンティーヌの提案で、道具は他の冒険者に用意してもらっていました」

クレマンティーヌ——マーレの話にもよく出てくる、スレイン法国の特殊部隊にいたことがあるという女だ。その法国が異形種を敵視する人間至上主義の国である以上、吸血鬼のような異形に対しては強い蔑みを感じられるような扱いになってしまうのも仕

方がないことなのかもしれない。

この女の吸血鬼へのやり口を見る限り、法国との対立はマーレの短慮や不幸な衝突によるものではなく、必然であつたと考えるべきだろう。

そして、冒険者がここまでのことに協力するということは、他の人間の国々も基本的には異形種のギルドであるアインズ・ウール・ゴウンとは相容れないと考えた方が良いということになる――。

そういう戦略的観点からの分析の必要があつたため、モモンガが魔法複写をしばらく凝視していたのは仕方がないことにやのだ！

……ことなのだ。

――吸血鬼のことは後で考えるところとして、異形種を狩る国か……。早い段階でマーレに仕掛けてないということはそれほど大戦力でもなさそうだが、敵対的なプレイヤーがいる可能性は高い。巨大爆発を使う竜王とともに警戒しておくべきだろう。

モモンガは、自分ならば情報が集まらない限り仕掛けようとは思わない。だから、スレイン法国を攻撃し、竜王と思われる存在とも接触したマーレが泳がされているだけである可能性を前提に行動する。

「第六階層のメンテナンスの他、少しやってもらいたいことがあるが、その後はナザリツクと無関係を装ってしばらく旅を続けてもらうつもりだ」

第六階層のジャングルは、マーレが魔法で降らせる雨によって成り立っている。月単位でのマーレの不在となれば荒廃するのは当然のことだが、それを回復させるのは高位のドルイド系クラスを持つマーレにとって難しいことではない。

それから、ナザリック地下大墳墓周辺の地形改変。

その後、旅を続けさせるつもりだが、それは人間の国々における囿としての役割を求めているのだ。

ギルド『アイズ・ウール・ゴウン』に戻ったマーレは、NPCとしてギルドのシステムに掌握されている。もう見失うことはありえない。

マーレに対するあらゆる連絡手段、探知手段についても、こちらの世界でマーレと再会したことで利用が可能になっている。《伝言》^{メッセージ}のような魔法で状況報告も容易で、ナザリック入口への転移も可能だ。これらは、肋骨を痛めたモモンガがナザリックに着いてすぐ、マーレが納得するまで念入りに確認したことだ。

「現地のしもべには簡単なテストをさせてもらうが、逆に状況に応じて護衛も出すつもりだ」

さすがに、無条件にナザリックへ招くわけにはいかない。

逆に、マーレには本来従えているもの以外にも護衛が必要になる状況があるだろう。囿といっても、身一つで旅立たせるようなことができるわけではない。

「はい。……えっと、厳しい相手もいるかもしれませんが、がんばりま——ふわあつ！
も、モモンガ様!」

モモンガはなんとなくマールレの頭を撫で、その長い耳に触れてしまう。

「ああ、いや、小さな身体だと思つてな。そこへ大変な任務を背負わせてしまうので、必要な護衛や支援があつたらいくらでも言つてもらいたい」

「い、いえ！ モモンガ様のために命を賭けて頑張るのは当然のことです！」

「そうか。お前たちはそうなんだな……。ならば、生きて戻り、報告を行うところまでが任務だと知るが良い」

「も、モモンガ様……」

骨の手がマールレの頭を強く撫でつけ、整った金髪をかき乱す。モモンガが支配者としての演技を続けるには、こういうマールレの表情を見ていられないからだ。

マールレが従えるものには、もちろん死の宝珠も含まれる。

当人はモモンガに熱烈に忠誠を誓っていたため、一応ナザリックに属するものと認めつつ、マールレ直下のしもべと位置づけた。

一応ユグドラシルには存在しない意思疎通のできるインテリジェンス・アイテムということでコレクション欲は刺激されたため配下としたが、レベルは低く、何よりうるさいのが問題だ。

マーレ自身が便利だと言っていたからこそその厄介払いだが、もしその場にマーレの所有するモンスターでもいたら、その口の中にも放り込んでしまったかもしれない。いずれにせよ、モモンガはこの時点で死の宝珠の存在を忘れてしまうのだ。

——確か、茶釜さんがガチャで出したドラゴンが二体いたか。うちの女性陣は引きが強かったよな。

当のモモンガのガチャ運は、お察しである。

マーレはアウラのように多くの魔獣を従えているわけではないが、ギルド内にマーレの所有という形でドラゴンが残されていた。それがこの場に居なかつたことが、宝珠の幸運だろう。

もし、先にエンリ宝珠の被害者に事情を詳しく聞いていれば状況は変わっていたかもしれないが、

この日の運命は宝珠の処遇を先に決めることとなった。

モモンガの意識は、エンリや他のマーレの協力者やしもべたち、そしてスレイン法国や竜王といった仮想敵へと向けられる。巨大爆発の竜が竜王であることや、スレイン法国の情報など、モモンガの側が得ていた情報もマーレと共有しておく。

マーレが荒廃しかかった第六階層・ジャングルの回復に尽力する頃、モモンガとの会見に先立ってエンリに治癒が与えられた。現地の人間であることに配慮して、これに当たったのは人間型の外見を持つ戦闘メイドのルプスレギナだ。

これまで、現地の存在に治癒行為を行うのは殆どが拷問担当のニューロニストとなるのは当然の前提として、僅かに友好的に扱う場合でも相手がミノタウロスやピーストマンばかりだったこともあり、獣人的な外見を持つ方がトラブルが少ないだろうというところで犬の頭部を持つペストーニヤが護衛を伴って担当していた。そんな中、珍しく連れて来られた人間——先日のアダマンタイト級冒険者チームもニューロニストの担当であつたことから、ルプスレギナにとつてこの類の仕事は初めての経験になる。

ルプスレギナとしては、その仕事はニューロニストのものであろうとペストーニヤのものであろうと一向に構わないのだが、今回は初めてという以上に張り切るだけの理由があつた。

「現地人で最も長く一緒にいた協力者」「マーレと非常に近い関係にあつたらしいため、客人として丁重に」「他の人間はしもべと、この女を介して協力者となつた者だけ」

こうした話が伝わっているのだ。相手が格上の守護者ではあつても、小さなマーレと

人間の妙齡の少女の間にただならぬ関係があるようなことを耳にすれば、噂話の種として聞き込んでみたいというのが人情というものだ。まして、そういう噂話はルプスレギナとしても大好物である。モモンガから「治癒のついでにマーレとの関係など、話を聞けたら聞いておいてほしい」と言われれば、いや、言われなくても張り切ってしまう。

相手の人間については特に関心は無く、どちらかというくと下等な人間などいたぶったり玩具にする方が好きなのだが、至高の御方に客人と言われてしまえばそこは仕方がない。

ルプスレギナはエンリに体の不調を聞きながら少々過剰なまでに治癒をかけつつ、話しやすい環境を作っていた。

「ふむー、最近の記憶だけが戻らないと。そういうのは治癒魔法では厳しいっすね」

「いえ、無理ならいいですけど、前は操られている時でも記憶があつたので、不調といえども不調かなと思っただけです」

恐縮するエンリ。たまにお腹のあたりを気にするような様子はあるが、その身体はルプスレギナの治癒魔法によって完全に全快している。

記憶が戻らない原因は、モモンガと死の宝珠にある。すなわち、絶望のオーラだ。

絶望のオーラによる甚大な負の力は、死の宝珠によってプラスのエネルギーに変換された状態でエンリの身体に流れ込んで強い絶頂を引き起こし、そして受け止めきれな

かった暴力的なまでのエネルギーがその身体を内側から破壊した。

この時、エンリが宝珠に支配されている間の記憶は、エンリ側に引き継がれることなく断絶した。

憑依による無意識のものとはいえ、同じ記憶をエンリと死の宝珠という二つの人格が共有するのは本来とても困難なことだ。もちろん、ただの人間のエンリが宝珠の支配下で意識を保ち続けられるはずもなく、宝珠の側の精神にエンリとの繋がりを維持できる程度の余裕があるからこそ記憶が残されている。普通、宝珠が人間の支配を手放すことは考えられず、この繋がりが宝珠の側が人間の記憶にアクセスする能力の副産物ではないのだが。

そして、その宝珠の側に、気絶や昏倒はもちろん、瀕死、発狂、トランス状態、強い絶頂状態など、精神の余裕が著しく損なわれるようなことがあると一時的に繋がりが切れてその憑依の間の記憶が失われてしまうのだ。

ルプスレギナはナザリックの戦闘メイドだ。目上の相手には意外と几帳面などところのある死の宝珠からの説明が伝わって事前にこうした事情を聞いていたが、支配者たるモモンガに都合の悪い情報をそのまま伝えることは考えられない。

だから、今のところは記憶については保留だ。このエンリは大切な情報源でもあるのだから。

「モモンガ様から治癒だけじゃなく少し話を聞くように命じられてるんで、最後に記憶が残ってるあたりのこと話してもらっていいっすか？」

「さ、最後って、昨夜……マールに……」

エンリは顔を真っ赤にして口ごもる。

「こう見えても神官なんで、秘密は守るっすよー。私は信じなくてもいいから、この聖印を信じるといいっす」

軽すぎる口調や腰布の下から出てきて指先でくるくる回される聖印の扱いに多少疑問はあっても、相手は初対面で治癒を施してくれた聖職者だ。田舎で育って生臭坊主など知らないエンリには効果てきめんとなる。

エンリはルプスレギナと目を合わせず、その豊かな胸元あたりに視線を固定したまま、ぼつりぼつりと竜王国での宿でのことを説明する。

そのルプスレギナの美しい顔が深い笑みに歪むのに気づくこともなく。

もちろん下着の中の状況についての説明は無かったが、全ての着衣は意識を失っているうちに血やら何やらで汚れていたのを魔法や一般メイドたちの力も借りて綺麗にしてある。全ては筒抜けなのだ。

「うっわ、身体だけあればいいとかマール様、可愛い顔してまじばねえっす。二人つてどういう関係なんすか？」

エンリはルプスレギナの反応にびくつきながらも、次第に警戒心を解いて話し始める。聖職者になりがちな堅苦しさや潔癖さを微塵も見せないルプスレギナの態度が、今のエンリには話をしやすく感じられたのかもしれない。

「うう……ううという関係って、どうなんでしょうか」

モモンガの意図通りのものであるかはともかく、情報収集は順調だ。エンリを所有する玩具の一つとして扱いつつも放置して反応を愉しんでいるという、エンリの中のマーレ像がルプスレギナにしっかりと伝わっていく。放置プレイという概念を知らないエンリ自身は、放置される部分について寂しさを滲ませているのだけでも。

そして、それはルプスレギナにとっては知っていたよりずっと嗜虐的だったマーレへの共感を高めるものにはかならない。まさに一を聞いて十を知る勢いで相談に乗ってしまう。

——結局は、全員玩具みたいなものだったってことですか。冒険者として一番上まであげてから落とすとかも、最高に楽しそう。

もはや、ルプスレギナに驚きは無い。

マーレはモモンガからある程度の仕事を期待され、それを果たして帰ってきたようだが、それ以外では好きにやって良い身分だったのだろう。それならば、仕事に支障が無い範囲で暇つぶしに現地の人間を玩具にするのはルプスレギナから見て至極当然のこ

とでしかない。

感想を持つにしても、「子供のうちからお盛んすぎっす」程度のものだ。

「人間が逆らってどうにかなる相手でもないし、嫌ではないようだから、ここは開き直って愉しんだらどうっすか？」

投げやりなようだが、元々結論はこれ以外ありえない。ナザリツクの存在が愉しむための玩具とされた人間が取るべき態度としては、これが唯一の正解だ。

たとえば、ルプスレギナが同じ立場——ナザリツクの仲間として尊重されることのない外部の人間であって、マーレに玩具として使われる立場——であつたとしても、力の差を考えればこれ以外の対処はとりようがない。ならば、これはエンリの身になって考えた真摯なアドバイスともいえる。少なくとも、ルプスレギナの方はそういうつもりだ。

まして、エンリの態度はまんざらでもない感じなのだ。

「開き直っ——そんな、でも、どうしていいかわからないです」

「別にどうもしなくていいんじゃないっすか？ まあ、これで記憶が繋がらない理由もわかつたし」

「え？ わかつたんですか？」

もちろん、真実だけを話してやる義理などあるわけがない。

エンリの前に立つのが誰であれ、モモンガの利益のために誤魔化すべきを誤魔化すの

は当然の前提だ。穏健な性格のペストーニヤであれば無難に戦闘中に瀕死になったとでもしておいたところだろう。

しかし、エンリの前にいるのはナザリックのメイドたちの中でも最も悪戯心に溢れるルプスレギナだ。さらに、ここでは嘘を減らす方がよりモモンガの絶望のオーラという真実から目を背けさせることができ、さらに楽しいことになりそうな状況とわかった今、躊躇は無い。

「記憶が繋がらないのは、たぶん身体が強く絶頂とかしたせいっすよ」

「ええっ！……ぜ、絶頂？」

ルプスレギナは笑みを押し殺して極力できる女らしい聡明な雰囲気を作りつつ、記憶の繋がりが断絶する仕組みについて嘔み碎いて説明する。

「そうなんですか。でも、絶頂なんて、いったい……」

「身体だけあればいい。そしてマーレ様の部屋——のつもりがモタついてたから廊下になったと。……はーあ。そこまでわかってその後を考えないとか、もしかしたらそういうところが面倒くさがられてるのかもしれないっすね」

「え？ 私、面倒くさい女なんですか?! うう、そんな……でも、経験とかないし……」

「無いつもりなのは自分だけかもしれないっすよ。あつちの、えーと、死の宝珠？ あれならモタついたりせず、命令一つでいつでもどこでも即座に手軽に絶対服従って感じ

じゃないっすか？ もちろん宿の廊下でも——」

「えっ、それって……ええっ！ つえー……っ!!」

ルプスレギナの言わんとすることを理解したのか、エンリは悲鳴にも似た驚愕と戸惑いの声をあげて自身の下腹部をおさえる。

身体の損傷は回復魔法で全快させてあるが、その直前の絶頂の余韻まで完全に消えているとは限らない。そういう健康的な行為の事後の違和感があるとしても、それは傷や身体の不調とは正反対の、生命としてとても正しいものだ。

ともかく、都合の悪い部分を少しだけ面白そうな形で誤魔化すことができた。もちろん、嘘はついていない。

それに、洗濯した者から聞いている下着の状態からすれば、それに近い行為があったのではないかと考えられるのだ。だから大きな問題はない。

むしろ、至高の御方が気にしていた部分について、有効な情報収集ができたといえるかもしれない。エンリの方は完全に心当たりがあるような反応をしているのだから、当たりを引いたと見るべきだろう。

ルプスレギナはその顔に浮かんでくる笑みを隠すようにエンリに背を向ける。

「うう……ぐすっ……私は、要らない子なんでしょうか」

「そ、そんなことないっすよー。マール様だって、ずっと例の宝珠に乗っ取らせないでわ

ざわざ元に戻してっすから」

一転してフオローに回るルプスレギナ。

このあとモモンガが会うのだから、遊び心の痕跡を残すわけにはいかない。最後には軽い目の充血さえも治癒魔法で対処するつもりだ。

「それじゃ、なんで私じゃなくて……その……」

「きつと、身体だけ玩おも——じゃなくて、良い関係を作るために身体から開発してるんすよ！」

「か、身体から?!」

「大事なことっすよー。特に、面倒くさがられてるかもしれないって言われて、すぐに悲しそうな顔をして悩んでしまうような子には」

ルプスレギナは既にすっかりと頼れるお姉さんの顔を作っている。こぼれる嗤いを隠すのは少々苦手だが、自分では要領がいい有能なメイドだと思っているので問題ない。できているはずだ。

エンリも少し真面目な顔をしているので、やはりそういう関係で間違いないのだろう。興味本位の方の情報収集としても完璧だ。

「まー、難しく考えることは無いっすよ。身体の準備さえ出来ていけば、いざという時にスムーズに関係を持つことができ、二人とも幸せになれるっす」

——どうせ、私なんて玩具みたいなものでしかないから。

マーレとの関係についてはそのように割り切って考えることも少くないエンリだが、ルプスレギナの言葉には逆に勇気づけられていた。

なぜなら——。

「……街の裕福な女の子がする花嫁修業つてのも、そういうのなんでしようか」

エンリはインフィーレアから聞きかじった言葉と、帝国で売られていた高価で刺激的な下着たちを思い浮かべ、知らない世界を勝手に繋げてしまった。

さらにエンリは故郷のカルネ村でも、近くの村から嫁いできた新妻が「田舎者だから花嫁修業とかしていけないので不安だったけど……」などと打ち明けるのを聞いたことがある。田舎者からすれば、出たとこ勝負の田舎の結婚生活と違って、都会ではじっくりと事前に準備をしているイメージがあるのだ。

そして、村娘だったエンリ感覚では、仕事も家事も結婚前からできて当然のことだ。結婚生活で新たに始めることといったら、子作りしかない。

自分なら結婚したその日から頑張って研鑽を積んでいくのだろうが、街の女の子はそれを先取りするわけだ。それも、日々の農作業も無いのに家の手伝いも村ほどはやらな

いというから、毎日毎日だらだと、ひたすらそればかりの生活になってしまう。

街の女の子は綺麗な服を着ているのに、一日中だらだと。だから下半身下着が守つてくれるのか、などと思ってもあらぬ方向へ飛んでいく。少なくとも、エンリにはそれしか想像ができないのだ。

もちろん花嫁修業という言葉を聞いた当初は、本で読むとか親から聞く程度のことを想像していたのだが、今のエンリはそんなおめでたい子供ではない。

それに対し、ンファイレアは街で暮らしていても昔から薬師として薬のことばかり考えていて、そういう経験があるとは思えない。「花嫁修業とかしてる女の子は苦手」というのも当然のことなのだろう。

もちろんエンリだって、農作業も家の手伝いもせず毎日毎日そういうことばかりしている人が相手では困ってしまう。

それが天使のように可愛らしくて、悪魔のように強く残酷で、絶対的な力を持っている、無遠慮に自分のことを弄ぶような子だったとしたら、流されてしまうのも仕方ないかもしれないが――。

「き、きつとそうつすよ！ ちょっと裕福なら、人間だってセーキョーイクくらいするはずつす」

「……セーキョーイク？」

「身体の花嫁修業のことっすね」

——身体のか？ 結婚するのに、身体以外に何を頑張ることがあるんだろう。

エンリは素直な疑問を持つが、そこまでは恥ずかしくて口に出せない。好きだから結婚するのだし、働けないような人間は結婚する資格がない。そういうエンリの常識を前提とすれば当然の疑問だ。

だが、アダマンタイト級冒険者となったエンリは旅の経験の中からすぐに答えを見つけ出す。冒険者とは未知に出会った時、怯むことなく自らの頭で考え、自身の経験の引き出しから適切な答えを選ぶことができる者なのだから。

かつてエンリが訪れた帝国の高価な下着屋の一角。そこには使いみちのわからない、どこかグロテスクな雰囲気の道具たちも並んでいた。

あれらを使いこなすのは、さすがに誰かに教わらないと不可能だ。となれば、そういうものを学ぶことが身体以外の花嫁修業に違いない。

そこまで考えて、エンリはようやくマールレについて理解できたような気がする。

エンリは周囲を見回して、静かに頷く。

やはり、そうなのだ。

この場所は、マールレほどの存在が仕えているのだから当たり前かもしれないが、帝都の豪華な建物よりも絢爛豪華で、あらゆるものが上質だ。

ならば、女の子はたつぷりと開発されなければならぬし、セーキョーイクとやらも、身体以外の花嫁修業も山盛りだろう。

酷いものに見えたイビルアイの処遇も、ここでモモンガに所有されていたマーレから見ればたいしたことではないのかもしれない。

——そんな、まさか、この凄く綺麗な人も？

「あの……ルプスレギナさんも、その……ここのご主人様からそういうことを求められたら、応じるんですか？」

「もしモモンガ様が私などを求めてくださるのなら、いついかなる時でも全てを賭けてお相手させていただくに決まっています。人間ごときが応じる応じないを語って良い御方ではありませんよ」

「は、はい、も、申し訳ありません」

突然、口調が変わって殺気すら孕んだルプスレギナの低い声に圧倒されつつ、エンリはなんとか頭を下げる。このメイドの殺気を知ってしまったえば、『蒼の薔薇』の人間たちやクレマンティーヌなどのそれは子供の癩癩程度にしか思えなくなりそうだ。

全身が栗立って危険を訴えているのに、エンリは足を全く動かさない。

ただその場で小さく震えるしかないエンリに対し、ルプスレギナは優しく微笑む。

「ここ人間ごときが私らの忠誠心を疑うような言葉を口にすれば、相手が誰であれ簡

単に殺されるっすよ。モモンガ様がお会いする予定があつて命拾ひしたっすね」
「ごめんなさい……」

——やっぱり、モモンガ様つてそういう存在なんだ。

殺気だけでエンリを縛り付けたルプスレギナにとつても、モモンガが絶対者であるのは間違いない。それがエンリにとつての絶対者であるマーレや、それと同格の者たちの主人でもある。エンリにとつてモモンガとは、絶対者の中の絶対者だ。

「とうか、忠誠心以前にモモンガ様に求めていただけたらナザリツクの者は誰だつて喜んで身体を使つていただくはずっす。生き物として、いや、生きてようが死んでようが当然のことつすね！ たまに死んでる方に無駄に情熱的なのがいるくらいで……」

「……？　そ、そうなんですな」

やはり、セーキョーイクは完璧だった。女の子は開発され放題だ。

狭いカルネ村で、外部の男の子はせいぜいインフィーレアくらいしか知らなかったエンリとは、本来住む世界から違うのだ。

——インフィーカ。もしかしたら、私くらいがちょうど良かったのかな。

ささやかな自覚が、チクリと胸に刺さつて引つかかる。

インフィーレアが街の女の子を避け、自分なんかの色々と良くしてくれたのは、「身体から開発してる」女の子を避けただけでなく、それより自分の方が良いと考えてくれたの

かもしれない。そう考えると、ンフィーレアの様々な行動にも納得がいくようになるのだ。

しかし、エンリは既に「開発」されつつある。もちろん、まだまだ開発途上かもしれないが、未開発ではないのだ。自分で一から開墾したい働き者のンフィーレアには似つかわしくない。

何より、今のエンリはマーレに合わせて「開発」されている。マーレは子供だが、それでもあれだけのことをするのだ。間違いなく、このセーキョーイクは充実しているのだろう。

「はあ……。私は田舎者だからそういうの無かったけれど、このセーキョーイクもきつと凄いでしょうね」

「も、モチロンっすよー！」

幸い、この時のルプスレギナの表情は、虚空を見上げて溜息をつくエンリの視界に入らなかった。

その視界を満たしていたのは、帝都の高級店より遥かに上質なシャンデリアや調度品といった、ナザリックにおいて日常的なありふれたものでしかなかったのだが。

四八 モモンガと、エンリの涙

ルプスレギナに軽く聞き取りを任せたモモンガは、少し心の準備をしてからエンリという人間に挑むつもりでいる。

モモンガとしても、ただ一言「移転当初からの協力者」と聞いた時は、大切な部下と長く一緒に旅をしてきた女性への配慮があった。当初はマーレへの協力に感謝しつつ、自ら話を聞くつもりだった。

だが、先にマーレや死の宝珠から話を聞くうち、そんな考えも変化していた。

エンリという人間は、どうやらこの世界の人間の基準では、そしてモモンガの居た世界の基準で考えても、まともな人間ではない。

もちろん、冒険者をやるくらいだから、血を浴びるのを好むなどは仕方のない部分もあるだろう。殺伐としたこの世界で危険を引き受けるような人間は、別の世界から来たモモンガの基準で考えればどこか壊れていて当たり前なのかもしれない。

——でも、小さな子供のベッドにたまたま全裸で入ってくるというのはどうなんだよ。人間性疑うよな。……この世界って、そういうのも普通のことなのか？

不感幼妻——は誤解だったが、セラブレイトは本物のガチロリだった。女王の方も中

身がいい大人なのに、わざわざ若い少女の姿になって太ももを丸出しにしていたのは確かだ。

しかし、マールレ本人が人間について「しもべ」と「協力者」を分けていて、このエンリについては力で支配した経緯も見られないが、「身体だけ使う」こともあるという言葉ばかりが強烈に耳に残った。

そこには確かにマールレ自身の意思が介在しており、どちらかというとならマールレの側がそれをコントロールしている雰囲気さえ感じられる。

もちろん、経験の無いモモンガには、「使う」という言葉の意味を聞き返すことなどできない。できるわけがない。

たまに全裸でベッドに入ってくる女を「使う」といつても、マールレはまだ可愛い子供なのだから、そういうこととは限らにやいのだ。

アルベドやシャルティアが相手でも言葉に詰まってしまうような話題なのに、相手は完全に子供にしか見えないマールレだ。予想通りの答えが返ってきた時、支配者らしい振る舞いを維持できる自信があらうはずもない。

ただマールレのステータスを開いて、記憶通りそこに人間種を支配するような系統の魔法が存在しないことを確認するくらいしかできない。

——心臓に悪いよな。そんなもんないけど。……こういう時は、相手の側に聞く方が

気が楽だ。子供相手に直接そういう肉体関係の話とかできるわけないだろう。

そして、モモンガはルプスレギナから報告を受ける。間接的に聞く方がもつと気楽なのだから、これは仕方のないことなのだ。

たとえ間接的であっても、そつちの経験の無いモモンガにとっては充分に重すぎる話なのだから。

「あの人間の女は、マーレ様の、その、性的なおもちやだつたようです」

モモンガは唐突なめまいに苛まれる。脳も神経も無いのに。

「きよ、強制なのか？」

「いえ、本人もまんざらでもないようですが、マーレ様が面倒くさがつて死の宝珠を使つて、あの、身体だけを、みたいなこともあるみたいで」

モモンガは突然の立ちくらみに襲われる。血も流れていないのに。

——茶釜さん……俺、どうすればいいんでしょう？

マーレが戻つてこられたことは喜ばしいが、まさかこのようなことになるとは想像もつかなかつた。モモンガはマーレの創造主であるかつての仲間にも現状を申し訳なく思つてしまう。

目をらんらんと輝かせたルプスレギナの説明は、モモンガに存在しないはずの状態異

常の症状を感じさせるものばかりだ。

「ただ、あれは田舎の出身なので、自分とマーレ様ではセーキョーイクのレベルが違うのだと納得している模様です」

そんなフオローにもなっていない言葉は、骨の指で支えられるモモンガのこめかみに深々と突き刺さった。

——性教育、か。済んでしまったことは仕方ないが、力の差が大きい世界では幼いうちからしておかないと大変な事になってしまうのだな。

モモンガはふとセバスとその牧場の媚びた人間たちのことを思い浮かべ、そして頭を振る。

——たっちさん、さすがに大丈夫ですよね……？

そして、モモンガは仮面を装着した状態でエンリ・エモットを自室に迎える。

もちろん、選んだ仮面は嫉妬マスクだ。充分に選ぶ時間があっても、その選択に迷いがあるはずもない。

一旦戻ってエンリをエスコートしてきたルプスレギナが退出すると、問答は静かに始まる。

泣いたような笑ったような、そして怒りを湛えたような仮面の顔貌に反して、モモンガは冷静だった。そういう余計な感情を仮面が背負ってくれたかのように、意識して触れたくない部分を避けながら話を聞くことができた。

それが容易だったのは、エンリの方も同じようにそういう部分を避けていたからだ。現地の人間という弱者の視点からの情報はそれなりに有意義なものだ。

ただ二百年以上生きてだけの情報源と考えていた吸血鬼^{イビルアイ}も、エンリの話では世界の危機に等しい存在だった。狙い撃ちするかのような『漆黒』との確執からしても、『蒼の薔薇』とイビルアイという繋がりにはきなくさいものが感じられた。

——国を滅ぼすような吸血鬼がアダマンタイト級冒険者に混じっていたとは……どこも考えることは同じということか。

モモンガは、アインズ・ウール・ゴウンがこの世界のパワーバランスにおいて極めて優位であることを自覚し始めているが、既に故人とはいえ口だけの賢者、ピースト・ブラザーといった他のユグドラシルプレイヤーの足跡を発見している以上、他に生きたプレイヤーがいてもおかしくないと考えている。

そして、そのプレイヤー、あるいはギルドが存在する場合、アインズ・ウール・ゴウンがミノタウロスの王国を裏から支配しているように、現地の人間や国々の背後に隠れている可能性が高い。

『蒼の薔薇』とイビルアイなどは、まさに、モモンガの考えるプレイヤー勢力の尖兵としてのイメージそのままの存在だ。

マーレによればイビルアイは戦闘メイト単体に若干及ばない程度の実力とのことだが、これは、あえて足がつかないよう現地産の吸血鬼を味方にしたか、レベルの劣るNPCを使っているものと考えられる。

モモンガは戦士モモンとして冒険者をやってみたが、この世界ではレベル三三相当のモモンで充分に英雄たりうるのだ。レベル五〇程度と見込まれるイビルアイに有望な現地人をパワーレベリングさせるだけでも、思い通りに動くアダマンタイト級冒険者チームを作り上げるのは容易だったことだろう。

それは、レベル一〇〇が当たり前のユグドラシルプレイヤーとしては実に控えめな動きではあるが――。

――慎重で、プレイヤーが少人数しか残っていないギルドなら、当然の考えだろうな。もし大人数のギルドが同時に来ていけば、絶対に尻尾を掴まれるわけにはいかないのだ。八欲王など過去の記録に触れることがあれば、誰でも同じことを考えるだろう。

幸い、アインズ・ウール・ゴウンの側にも生死不明ということにしたとはいえ、アダマンタイトプレートを持つモモンがいる。さらに、マーレが連れてきたエンリは西のリ・エステイーゼ王国で名声を持つアダマンタイト級冒険者で、生粋の現地人だ。忠誠

心を確かめるには触れにくい部分にも触れなければならぬが、生まれ育った村をマーレが助けたという背景がある分、ある程度信用することはできそうだ。

つまり、マーレの方ではこれまで通りエンリの後ろにマーレが潜み、時にはモモンを活用することにすれば、アインズ・ウール・ゴウンはずつと安全な場所であり続けることができる。このエンリが、それを任せて良いほどの存在であれば、だが――。

「――そういえば私、治癒魔法をいただいておきながら、まだ支払をしていません!」
「支払? ……ああ、そうか。それなら必要はない。こちらが怪我をさせてしまったのだからな」

モモンガが冒険者を体験した竜王国でも、治癒魔法は有料だった。

他人である以上、エンリの申し出は当然のことなのだが、モモンガもさすがに自身の絶望のオーラで死にかけた相手から対価を取るような話は続けようと思わず、つい口を滑らせてしまう。

「あの……もしかしてその時の私、モモンガ様に無礼なことでもしてしまったのでしょうか?」

エンリが青ざめ、小さく震える。怯えの色は明らかだ。

モモンガは思わず片手で仮面の装着具合を確認するが、素顔は見えていない。

単にエンリには記憶が無く、何があつたかわからないのだ。

「い、いや、そういうことではないのだ。あの時、私の方が加減を誤ったというか……脆弱な存在への配慮が足りなかったのだ」

「えっ、それってどういう……？」

口を滑らせた流れで、モモンガは怪我の部分に限って堂々と支配者らしく謝罪することにしたが、どうも歯切れが悪くなる。「普通なら死んでた」などと言うわけにはいかず、もちろん人間を必要以上に怯えさせるような自身の特殊^ス技術^キに言及するわけにもいかない。

とりあえず、ここは誤魔化すしかない。話題を変えるべきだろう。

話題といえ、これから協力者となってもらうエンリの実力が気になるところだ。

「しかし、さすがはアダマンタイト級冒険者だな。身体の内部の損傷だけで持ちこたえたのだから、やはり普通の人間とは違うということか」

「な、内部の損傷……!!」

エンリは何かを思い出したかのように下腹部を押さえ、歯をガチガチと鳴らして震える。

怪我など日常茶飯事であるはずの冒険者としては少々過剰な反応に、モモンガは幾らか慌ててしまう。

「も、もちろん完璧に回復しているはずだ。調子が悪いのならまた治療をかけさせ——」

「あのっ!! ……その時、マールは近くにいたのでしょうか?」

涙目で、継ぎようなエンリの問いに対し、モモンガはその意図さえわからない。エンリの震えは続き、膝が笑っているようだ。

一流の冒険者としては異様な姿にも見えるが、現地には内部から身体を損傷させるような魔法などは存在しないのかもしれない。

何より、このエンリは記憶の欠落があつて混乱している。ならば、まずは現状を理解してもらわなければならない。味方としてふさわしいか、そして仕事を頼むかどうかを考えるのはそれからだ。

「あ、ああ。もちろん居たぞ。今は少し仕事をやつてもらっているだけだ」

「……私は、モモンガ様に捧げられたのですね?」

エンリの目が光を失い、涙がこぼれ落ちる。

——ちよ、捧げるって、俺、どこの大魔王だよ。……でも、そう見えてた方が身内にはいいんだけど、なんか泣かれてるし。……この格好のせいだよな。うん、きつと仕えるというくらいの意味だよな。

モモンガは一般メイドのフォアイルに選ばせた深い艶のある漆黒のローブを身につけた際、「まさに現世に顕現した死そのものでございます」とか言われていたことを思い出す。この部屋の雰囲気もあつて、仮面一つ被れば平和的に見えるわけではないのだろ

う。

こうして女の涙を見てしまった途端、モモンガは戦意のようなものが萎えるのを感じる。

もともと、エンリをどうにかしようと思っていたのは死の支配者ではなく、人間としてのモモンガなのだ。そこらの現地人なら死の支配者として虫ほどの親しみしか感じないが、ここではマーレの連れだという意識が多少よろしくない方向へ作用している。

「私に直接仕えてもらおうつもりはない。お前は……マーレの、ものなのだろう？」

「は、はいっ!!」

エンリの表情がふわっと生気を取り戻す。

女心に鈍感な自覚のあるモモンガから見ても、非常にわかりやすい変化だ。

——はあ……これ、相思相愛ってことなのか？ やたら教育に悪い気もするけど、今更取り上げてても可哀想だし、本人たちがいいならいいや。

子供のいないモモンガは、こんな時どうして良いかわからない。非行に対処するより、久しぶりに会えた大切な子供の心を傷つけないことを優先してしまう。

「ただ、マーレは私の部下だ。これまで通り冒険者としてマーレの指示に従ってもらえるなら、相応の報酬を約束しよう」

「マーレと一緒にいてもいいんですか!？」

エンリの顔には隠しきれない安堵と喜びが表れている。やはり、旅の仲間として大切にされてきたのだろう。

——このエンリの忠誠心も大丈夫そうだし……。よし、ひとまず教育とかは後回しだ。

マーレは他の守護者同様、人間を下等な存在と見ているようだが、それでもしもべでなく協力者でありつつ性的な玩具にしているということは、このエンリに対してそれに強い愛着があるはずだ。

ここで引き離すことは、元の世界で考えれば子供からペットを取り上げるような状況なのかもしれない。それなら、いきなり取り上げるのは酷というものだろう。

それはそのままにしつつ、ゆっくりと性教育を施していくしかないのだ。

「もちろんだ。私は部下のものを取り上げるような狭量な主人ではない」

「あ、ありがとうございます!!」

マジック・キヤスター

モモンガは童貞のまま偉大な魔法詠唱者となった男だ。一見してエンリの表情が晴れても、自身を見る目が決定的に変わったままになっていることなど、気付けるはずもない。

とにかく、この場は元々考えていた方針通りということ、マーレとエンリの関係については棚上げにすることにした。

「ただ、マーレはまだ子供だからな。あまり変なことを教えてくれるなよ」

「はい。私は田舎者でそういう花嫁修業は受けておりませんので、もし今でもこの身を
受け入れてもらえるのなら、人形のようにマーレに身を任せるつもりです」

——花嫁修業って、そういうのだったのか！

モモンガは、世界の秘密にも少しだけ触れることができたような気がした。

花嫁修業というのは格差の激しい元の世界ではもはや上流階級でしか聞かれない言葉だが、そこでは裕福なほど本音と建前が大きく乖離してくる。いくら金持ちの令嬢が暇だといっても、ひたすら礼儀作法の勉強や古臭い習い事をやるようなものが結婚前の「修業」とされているのはおかしい、建前に決まっていると思っていたのだが、その疑問がこの異世界に来てはじめて解けたのかもしれない。

モモンガは元の世界にいたころ営業の仕事先で見かけた幾人かの令嬢たちの夜の修業を想像し、少しだけモヤモヤして、そして冷静になった。

骨盤の隙間を、程よく空調の利いたぬるい空気が流れていく。

——「人間ごときが応じる応じないを語って良い御方ではありませんよ」

ルプスレギナの殺気とともに脳裏に刻みつけられたその言葉も、エンリの涙まで止め

ることはできなかつた。

不気味な仮面をつけた禍々しい雰囲氣の魔法詠唱者^{マジック・キヤスター}。それがマーレの主人であるモモンガの姿だ。

ナザリック地下大墳墓と称するその住処は、エンリが通された僅かな場所だけ見ても墳墓というより王城の如く豪華絢爛だが、モモンガの姿はエンリが思い描いていたのと大差無い、幼い少女を集めて嗜虐の宴を愉しむにふさわしいものにも見える。

そして、現実にモモンガはマーレのような美少女やルプスレギナのような美女を多く所有し、応じる応じないの問題ではなくいつでも好きな時に愉しむことができる存在だ。

マーレもルプスレギナも、モモンガの部屋の隅で控えているメイドも全て美しい。田舎臭いエンリなどお呼びびでないように思えるが、エンリはそのモモンガにマーレのいる場で捧げられ、どれだけ使われたかはわからないが、身体の内部が損傷するまで蹂躪されたのだ。

——私が、面倒くさい女だから？

そのモモンガには、その場限りで飽きられた。

それ自体は、エンリから見ても自然に理解できることだ。自身にマーレやルプスレギナを差し置いて何度も相手をされるほどの器量があるとも思えないし、もちろんそれを

望むわけでもない。

そして、マールレのもとには戻してもらえない。それも喜ばしいことだ。だから、「人形のようにマールレに身を任せる」などという恥ずかしい言葉も自然に出てきた。

ただ、エンリはマールレとの間で「人形のように」使われる以外の関係を知らない。それどころか、実際にマールレに使われたかどうかともわからない。

マールレが手を出すことなく、モモンガに捧げられたのだとしたら――。

マールレもまた、モモンガと同じ判断を下したら――。

元から必要ないものと思われていたら――。

「人形のように、か。……これは本格的に性教育セキキョウイクを考えなくてはいけないかもしれないな」

最後は呟きのようなモモンガの言葉が、エンリの暗く沈んだ心に小さな光を灯す。

「ぜ、ぜひともしょしくお願ひしますっ!!」

人形のように身を任せるのではなく、自分から頑張るための花嫁修業をしてもらえないかもしれない。

ここナザリックでは、開発されることは女として最低限のスタートラインなのだ。

「う、うむ。そうだな。マールレのためでもあるし、いづれ善処しよう」

マールレのため――エンリは何よりその言葉に安堵する。

モモンガは恐ろしいが、部下のマーレを自分の子供のよう大切にしている気持ちだけは伝わってくる。マーレのためということなら、少なくとも使い捨てるの扱いはならないだろう。

肝心のセーキョーイクをいつ受けられるかはわからず、ただ善処してもらえろというだけだが、今はそれで充分だ。逆に、すぐにやると言われればひるんでしまうだろう。

エンリは高まる鼓動を感じながら、まだ見ぬナザリック地下大墳墓のセーキョーイクに思いを馳せる。マーレの所有物としてふさわしい存在になるために、エンリは本格的に「開発」されなければならないのだ。

目指すは、脱・面倒くさい女。

純潔がどうこうと、終わってしまった事で悩んでいる場合では、ない……。

エンリはなぜか潤んでくる目元を黒衣の袖で拭う。

「ところで、一応君が捕らえているということになってる吸血鬼だが——」

吸血鬼イビルアイについては、モモンガから一つの提案があった。

提案の形を取つていても、エンリは恐ろしいモモンガの言葉に逆らうなど考えることもできない。

だが、逆らうどころか、それはむしろ両手をあげて喜びたいほどのものだった。

エンリは当然にそれを受け入れ、マーレの拷問を受けても屈しない吸血鬼イビルアイの状況につ

いて、知っている限りのことを説明した。

「拷問か……。クレマンティーヌについてもマーレから聞いたが、具体的にはどういうことをしていたんだ？」

「わ、私は関わっていないんです。たぶん同じような感じだと思っんですが、クレマンティーヌは自分の内臓を食べさせられたり、ぐちゃぐちゃに捌られたとか、その、犯されたとか……」

「ぜ、善処しよう!!」

「……?」

仮面の向こうの表情は見えないが、吸血鬼イビルアイについても何やら善処してくれるらしい。

——そっか、モモンガ様の大好きな小さい子だから、真っ先に開発されるよね。可哀想だけど、吸血鬼なら頑丈そうだし、それに私が応じる応じないを言っつていい状況じゃないから仕方ないか。

自分は一度身体の中から壊されてしまったが、強靱な吸血鬼なら問題無いのだろうかと考え、エンリは自分自身を納得させる。

話をするうち、エンリはどうもこのモモンガがマーレやルプスレギナより話のわかる存在であるかのような気がしてくるが、下腹部に僅かに残る違和感が自身の心を開くことを妨げていた。

——本当は私なんてただの村娘で何の力も無いんですけど、言いたいんですけど。

本当に話のわかる存在ならば、出会ってすぐのエンリを「使う」ようなことは無いだろう。そのことだけが、エンリを押しとどめていた。

ここで実は役立たずだなどと思われてもいいのかどうか、その場でエンリには判断がつかなかった。

役立たずだと知れば、次に壊された時は掃除の対象になって、動死体ソッピの腹の中かもしれない。故郷から引き剥がされた時のトラウマは根深いのだ。

結局、エンリはここでのマーレの仕事が終わって、他の仲間たちが合流するまで何もできない。

エンリは、再びモモンガの歎心を買ってしまったわないう祈りながら、しばし休息の時間を過ごすことになる。

その日の夜半のこと。唐突な勝利によって弛緩した竜王国の王都を人知れず出発し、

渓谷を進む者たちがいた。

先頭には、月明かりで青白く浮かび上がる少女の細い身体。

大事な所は全て晒されているが、腕や足の一部、そして首などが黒革の拘束具に覆われて夜闇に溶け込んでいる。

「いい気になるなよクレマンティーヌ。お前は人間の中ではできる方かもしれないが、私よりは弱い」

「うっさいなー。だったら戦うなり逃げるなりすれば？ どっちかというのと戦ってみたかなーって思うけど」

少女の背中を足蹴にするのは、短い金髪の子だ。少女の首輪から伸びる鎖を短く持つて引きながら、気の向くまま蹴りつけている。

全裸の少女ほどではないが女の子の方も露出度が高く、やや筋肉質なウエストや太ももが青白く目立っている。

夜半に王都を出ておきながら、そこには隠密行動という雰囲気は無い。

「……身体の中に何か埋め込まれていなければ、とつくにやっている」

「奇遇だねー、それ私もなんだよ。こっちは人間なのにあの拷問食らってるんだ。痛みに鈍感な人外はいいよねー」

「ふん！ あんな目にあっても尻尾を振っているとは、元漆黒聖典もたいしたことな

いのだな」

「こっちは生身だからね、あんなの二度とごめんだ。元から死体のでめーとは違うんだよ。……でも、逆らう元気があんなら相手してあげるけど？ ついでにマール様が転移してきて、一緒に蒼の薔薇を捕まえに行って拷問まで楽しめるオマケ付きだし」

「……お前など今すぐにも殺してやりたいが、仲間たちのために耐えているだけだ」
「だったらその生意気な口も閉じなよ」

女は武器の柄で裸の少女の後頭部を殴りつける。人間なら頭皮が割れるような容赦のない打撃だが、イビルアイは目に見える傷を負わない。

「くっ、そうしたければ前のように轡くっわでも使えばいいだろう。さもないと、お前など私の魔法でいつ殺されるかわからんのだぞ」

「チツ、マール様が魔獣登録の時の格好で連れてこいっていうから仕方ねーんだよ。……ンフィーレア、この『魔獣』とやりあうかもしれないから、あんたも少し離れてなよ」

裸の少女——イビルアイは、ここでようやく轡くっわを噛まされない理由を知った。

この金髪の女——クレマンティーヌは、イビルアイが本気になれば拘束具を付けたままでも倒せる相手だ。

戦力的にも状況的にも脱出は容易な状況だが、轡を付けられていないことまでマールが把握しているのなら、短慮を起さずにいて正解だろう。

これがクレマンティーヌによる悪ふざけなら活路もあつたかもしれないが、マールが相手ではそうもいかない。

「大丈夫。その子は何もできないし、クレマンティーヌだつてマールの言いつけは守るだろうから、心配はしていないよ。それより、そういう余計な情報は伝えない方がいいと思うけど」

クレマンティーヌの後ろを歩くこの男の名はンフィーレア。一行の中では常識的な人間のようなだが、エンリを慕っているので味方にするのは不可能に見える。戦闘能力は無さそうだが、世間からズレているエンリやクレマンティーヌに的確な助言をすることもあるので、少し厄介な存在だ。

今は、普段マールが連れているスレイン法国の巫女姫を伴っているため、度々遅れ気味になっている。

「ンフィーちゃん細かいね。別に私の方は、こいつの見た目が変わらなければ何したつていいんだよ。——ほつら、四つ足で歩きなよー」

首輪の鎖が緩んだ状態で背中を強く蹴られ、イビルアイは両手を地面につく。

吸血鬼のイビルアイは力でも人間のクレマンティーヌに負けているとは思わないが、

「ここで逆らっても良いことはない。

暴力より嘲りの言葉を浴びる方が、少しでも情報を引き出して今の状況を知るきっかけになるからだ。

「こんな夜中に、いったいどこへ行こうというんだ」

「さあね。とりあえず合流して何かするんじゃないかな。——ンフィーちゃんは何か聞いている？」

「いや、僕は連絡を受けてない。それに、知っててもその子の前では言わないよ」

「ふーん、慎重なんだ」

「僕は弱いからね。できればクレマンティーヌも、足手まといを連れていてという自覚を持ってほしいんだけど」

「わかっているけど、こいつ一人なら大丈夫だよ。マジック・キャスター魔法詠唱者なんて、スツと行ってドス！

で終わりだから」

「ふん、弱い犬ほどよく吠えると言われる通りだな」

「ふふ、その気になったらすぐ言うんだよ。おねーさんがかわいがってあげるから」
クレマンティーヌのステイレットが、イビルアイの首筋を撫でる。

「——何か、こちらへ向かってきているな」

イビルアイは、遠方から接近する気配だけを感じながら告げる。

どうせクレマンティーヌならそれほど間を置かずに察知するだろうが、わざわざ教えるのはできるだけ長くクレマンティーヌとソフィーレアの反応を観察するためだ。

——何らかの報告をしたり、連絡手段やそれを使うタイミングを意識しているようには見えないが。

夜空を飛来したのは、二人の人影だ。

こちらへ気づき、方向を微妙に変えて真っ直ぐ向かってくるのは、軽装の女に手を引かれた全身鎧の戦士。その姿は、竜王国で聞かされていたアダマンタイト級冒険者の――

「これは驚いたな。お前たちは人買いか何かか？　ビーストマン狩りをしながら戻ろうと思ったら、まさかこんな集団に出会うとは」

声をかけてくるのは、夜闇に溶け込む漆黒の鎧を纏った巨大な体躯の戦士だ。

「なんだよ、てめえは……」

「私は竜王国の冒険者『ザ・ダークウオリアー』のモモン。この国では奴隷の所有は禁じられている。その少女を離したまえ」

イビルアイは目を見開く。目の前の戦士には、まるで要塞のような存在感を覚えた。

四九 がんばれ、ももんさま

夜の大渓谷で、モモンとクレマンティーヌが睨み合う。

イビルアイは——迷っていた。

「ふん、ビーストマンにやられて行方をくらました程度の奴が、このクレマンティーヌ様に喧嘩を売るわけ？」

「くっ、モモンさ——ん、このカマドウ——」

「ナーベ！ 黙っている。——さて、クレマンティーヌと言ったか。私はただビーストマンの策にはまり、別働隊を深追いしすぎたに過ぎない。『漆黑』の手下に過ぎんお前程度では相手にならないと思うが」

「言ってくれるねえ。いいよ、殺し合おうよ。隣の女もやるならたぶん先に殺しちゃうけど、どうする？」

クレマンティーヌにも迷いが見える。

イビルアイを甘く見ているとはいえ、アダマンタイト級冒険者チームとあわせて相手にできるとは思っていないのだろう。

何より、こういう問題が起こった際、必ずマーレが来るという確信までは無いのか——

「……この地では人が死にすぎた。非道な行いを改め、その少女を大人しく引き渡すなら、お前たちは見逃そうと思ったのだがな」

「見逃す見逃さないとか、喧嘩売られたこっちの台詞なんだけど？」

言葉は勇ましくとも、クレマンティーヌは距離を詰めない。

「……ここは、私だけで相手をしてやろう。どこからでもかかってくるがいい」

ももんの存在感が膨れ上がり、要塞どころか巨大な城塞のように感じられる。かなりの実力者なのだろう。

クレマンティーヌは静かに身を屈め、前傾姿勢で地面に片手を突く独特の構えを取る。

——人類のために戦う『ダークウオリアー』のももんか。クレマンティーヌを殺し、この戦士の仕業とするなら好機だが……。

イビルアイはももんを味方とってはいいない。むしろ、こんな所で安い報酬にもかかわらずビーストマンと戦い続けた冒険者となれば、法国の人間のように異形に敵しい考え方を持っている可能性が高いだろう。もし、一部の噂にあったように女王を愛するような嗜好の者だとしても、さすがにアンデッドは討伐対象に違いない。

せいぜい、クレマンティーヌらと敵対してくれば逃亡の機会になるという程度の認

識だ。

それでも、マーレが来た時に叛意を見せれば、蒼の薔薇の仲間たちが危ない。逃亡するなら、その証拠は消さなければならぬ。

この状況を活かすとしたら、モモンとクレマンティーヌの戦いの最中にマーレが戻らなければこの場の全員を殺すことまで視野に入ってくる。そこでマーレが戻ればモモンに罪を着せ、それでも戻らなければようやく体内に埋め込まれたものへの対処を考えるなり、逃亡の準備をすることができる。

——いや、事情を知らないとはいえ、私を助けようという戦士に対し何を考えているのだ。

イビルアイは自身の思考の醜さに顔をしかめる。

しかし、万一モモンが最後まで味方をしてくれたとしても、ともにマーレと対峙するのは無謀というものだ。同格のアダマンタイト級冒険者の協力を得たからといって、底の知れない強大な力を持つマーレを相手に勝算があるとも思えない。

それに——。

「待つてください！　そいつは邪悪な吸血鬼なんです!!」

ここで叫んだのはインフィーレアだ。

やはり、こうなるのだ。吸血鬼であることを隠すアイテムや仮面を失った状況では、

そもそも味方など得られるわけがない。

クレマンティーヌと未知数とはいえアダマンタイト級冒険者チーム『ザ・ダークウオリアー』を相手にすれば、勝てないと思わないが、マールが戻るか連絡が付くまでの時間を容易に稼がれてしまうだろう。

「わ、私は確かに人間ではないが、元はアダマンタイト級冒険者で——」

人間ではない——その言葉に反応したのか、モモンは不機嫌そうな溜息をつく。

「イビルアイ。そういう名を持つ吸血鬼の話なら私も聞き及んでいる」

「——!!」

モモンの言葉に、イビルアイの止まっているはずの心臓が、跳ねた。

言葉を継がなければならないのに、出てこない。

「イビルアイは、この邪悪な吸血鬼『国墮とし』がアダマンタイト級冒険者チームを引き連れていた時の名前です！」

本当に先に殺しておくべきなのは、このンフィーレアなのかもしれない。

「ふむ、『蒼の薔薇』と『国墮とし』は『漆黒』が討伐したと聞いているが、それを、なぜ君たちが連れているのか——」

モモンはンファイレアと名乗る男から『漆黒』による『蒼の薔薇』討伐についての詳しい話を聞く。話は『蒼の薔薇』から、二百年前の『十三英雄』まで広がっていく。

「デタラメだ！ 私が邪悪だというなら倒せばいいだろう。私の仲間たちまで貶めるな！」

「……イビルアイよ。私は一応、双方の話を聞くつもりでいるのだが」

モモンはイビルアイの抗議を制しつつ、ンファイレアの話を促していく。後でマールエの主モモンガとしてなら幾らでも聞ける話だが、冒険者モモンとしての立場を考えれば話を遮るのは不自然だからだ。

もし、イビルアイが吸血鬼であることを否定してくれれば、奴隷商人の戯れ言と決めつけてしまうこともできたのだが、当のイビルアイが自分で人間ではないなどと言い出してしまえばどうにもならない。

ただ、この話の内容にはさすがに驚きを隠せない。王国の英雄『蒼の薔薇』どころか、過去の英雄『十三英雄』までもが、壮大なマッチポンプの一部なのだ。

ンファイレアはその中心が『国墮とし』ことイビルアイだと考えているようだが、モモンガはそうは思わない。

——完全にプレイヤーのやり口だな。マールエに仕掛けてこなかったとはいえ、また死んでいるなどと考えるのは都合が良すぎるといふものだろう。

もちろん、ンファイレアの話はあくまで現時点から見た、想像の域を出ないものだ。

真実には、安全な場所からでは手が届かない。

だからこそ、モモンの姿でここへ来たのだ。

『漆黑』の立場は理解した。確かに『蒼の薔薇』は悪だ。冒険者の身でありながら『国墮とし』と組み、その身分を隠して王宮へ伴うなどともないことだ」

「ま、待つてください!! 私の話は——」

「ああ、お前は人間のため、あるいは正義のために戦っていたとしても言うのだろうか？ 討

伐以前の『蒼の薔薇』としての名声は聞き及んでいるからな。そういうのは改めてこの場で聞く必要は無いと判断した」

「なっ……!!」

イビルアイはその顔を絶望に染める。

「ところで、『蒼の薔薇』やその手下に、吸血鬼化していたものや魅了状態にあったものは居たのかね」

「そんなもの、いるわけが——」

「……全員、自分の意思でこの吸血鬼に味方しているように見えました」

「そうか——君たちは、そんな者たちの罪を不問としてしまったのか!」

直感的には拘束の仕方が気に入らないというだけで充分だと思っていたモモンガは、

「ここでもうやく難癖を補強できる部分へと到達した。

この世界はアンデッドには厳しいのだ。

「は、はい。功績も多い冒険者なので、吸血鬼さえ居なければ——」

「甘〜!!」

モモンは一喝する。

——この男が話に入ってこなかったらスッキリ終わっていたのになあ。面倒なことになったから、モモンの正体は明かさないことにするか。

「さて、イビルアイよ。実際のところ、お前は『蒼の薔薇』を従えていたわけではあるまい」

「あいつらは、大切な仲間です!」

「……私は、そうは思わない。お前は騙されていたのだ」

モモンは、イビルアイとも視線を合わせず、自身の意見を押し付ける。

外した視線が幾度も月明かりに照らされた素肌へと吸い込まれるのは、仕方のないことかもしれない。

「——吸血鬼を純粹に仲間として扱う人間など居るはずがなからう。しかし、お前は『蒼の薔薇』を仲間と信じ込んでいる。私の立場であれば、今はそう考えるしかあるまい」

イビルアイは吸血鬼だ。人間としてそういう視線を向けていないと思ってもらおうし

かあるまい。

実際は、裸体へ向けた視線よりも『漆黑』から見たももんの立場が問題になるから、こういう回りくどいことを言っているわけだが。

「……今は？」

イビルアイの目に僅かな輝きが戻る。

「そうだ。お前は私が連れていく。話を聞かせてもらって、信じられるようなら——」
「ちよつと待とうよ。そういう勝手は困るんだよねー」

「その吸血鬼は、私たち『漆黑』が邪悪なものと判断して、責任を持って捕らえています
！」

クレマンティーヌが前へ出て、ソフィーレアも抗議する。

「巫人との戦いの中で、我々の側は常に戦力が足りない状況だ。この吸血鬼の内心はどうあれ、『蒼の薔薇』の頃のように戦力として活かせるのなら、活かすべきだろう？ 殺すのも仲間にするのでもない半端な状態で連れ回す『漆黑』には委ねられん」

「そんなこと、神殿が許さないのでは？」

「その神殿はビーストマンの大侵攻の時、何かしてくれたのかね？」

理屈の通らないことを言っているのはわかっている。正体を明かさないことにした以上、丁寧に理屈を通さなくて良いのだ。

視界の端で、イビルアイが目を丸くしているのを確認する。怪しまれてさえいなければ問題ない。

吸血鬼と明かされ、本人も否定してくれないのでは、友好的に接するのは難しい。せめて中立的にふるまうしかない状況だ。

「あのさ、こつちにも立場つてもものがあるんだよ。そんなもん、ハイそうですかって聞けるわけないでしょーが」

『漆黒』については情報屋から少し聞いていてな。——お前は奴隷なのだろう？ 主人に申し訳が立つよう、軽く相手をしてやろうか」

このクレマンティーヌだけが相手なら、これだけで十分なのだ。

あとは剣で語れば良い。

モモンは軽く手を上げ、後ろのナーベに合図する。

「……予定通り——様のもとへ。はい、————お願いします」

ナーベは小声で何やら呟く。《伝言》^{メッセージ}だろう。

準備は万端だ。

「へー、吸血鬼だつてわかつてるくせに、裸の小娘の姿を見て助けたくなくなるとか、竜王国名物のロリコンつてやつ？」

あとは剣で、語ってほしかった。

ももんとしても、全裸の少女に首輪を付けて連れ回す提案をしたような女にそういうことを言われるのは心外なのだ。

マッチポンプというのはする側は気楽でも、される側は気分が悪いものなのだろう。

「へ不落要塞」——ぐうっ!!」

武器を受けられた直後のももんの蹴りで、クレマンティーヌが転げ飛ぶ。

——武技というのは凄いな。レベル差は三倍近いだろうに、軽く受けるだけで強打を完全に止めてしまうのか。

今のももんは、戦士化の魔法により一〇〇レベルの戦士となっている。むしろ武器は受けてもらった方が殺してしまう心配が無くなるので、あえて速度を落として受けさせている。受けてもらわないと殺してしまう斬撃なので、クレマンティーヌの方は必死なようだが。

このクレマンティーヌの「へ不落要塞」はセラブレイトの「不感幼妻」ふわくようさいのように誤解を

招く発音ではなかったが、三日三晩続いた戦いの気疲れを思い起こさせるものだ。実力的にもクレマンティーヌはセラブレイトを上回っており、三三レベル相当の元の状態で来ていたら色々と不都合な状況を招いただろう。

だが、一〇〇レベルの状態ですぐ怪しまれず手加減するというのもまた面倒なものだ。

マーレから息があればどうでもいいと聞いてはいても、モモンガとしては大事な仲間のもしもべに重傷を負わせるのも気が進まない。

——あ、しまった。あれ足折れてるな。

どうにか立ち上がったクレマンティーヌが引きずる足は、膝が二つあるかのように余計な所で曲がっていた。

すかさず目に包帯を巻いた少女が治癒魔法を使い、モモンガを安心させる。

同時にその裸同然の薄絹姿を見て、マーレの性教育について余計に心配したりもするのだが。

——さて、そろそろのはずだが。

痛覚は無いが、モモンは来るとわかっている攻撃に対し少し身体を強張らせる。

「戦士モモン、上です!!」

声を張り上げるのは、戦況を見守っていたイビルアイだ。

この状況で逃げていないということは、よほどマーレの脅しが効いていたということ

だろう。

——言われたら、避けなきゃいけないじゃないか！

上空から奇襲をかけてくるのは、転移してきたマーレだ。

あえて問題が無い程度の攻撃を受けて、軽く反撃する——そんな段取りになっているのだが。

マーレの攻撃手段は、魔法だった。

《大^{グレート}致^{タリイナル}死》

マーレの両手から禍々しい負の力がほとばしり、ももんを襲う。

——ちよ、それは問題がなさすぎて、逆にバレルだろ！！

これは本来は攻撃魔法だが、ももんガ^アの同類^{デッド}にとっては回復^{ごほうび}魔法なのだ。

当然、アンデッドであるイビルアイもその力の性質に気づかないはずがない。

ももんは大きく身を翻し、横っ飛びに魔法を避けようとする。

この魔法が回避不能なのはわかってはいるが、それでもももんは鎧の肩で大地を削る。

ももんが立ち上がる間、マーレは心配そうに見ているだけだ。

——俺じゃなくて演技の心配をしてくれ、頼むから。

この状況は、ももんの側から整えていくしかない。

「ぎ、残念だったな。私の装備の負の力に対する護りが、お前の魔力を上回ったようだ」

「あの、あなたは何者なのでしょう。『漆黒』に敵対するものなら、ぼくは容赦しません」

——容赦しかしてないよな？ えーと、ここでマーレの名は、出していいんだっただか？ 確認しておけばよかつたな。一応慎重にいくか。

「私はモモン。お前は『漆黒』のエンリか？ この吸血鬼の扱いを見て、勝手ながらこちらで保護させてもらうことにした」

「そ、それをぼくは黙って見過ごさなければならぬのですか？」

モモンガは開いた口——顎骨が塞がらなくなる。全身鎧のフルフェイス兜に感謝せざるをえないところだ。

新世界で一人でアインズ・ウール・ゴウンのために結果を出してくれたマーレなら、完璧にこなしてくれると思っただけに、衝撃は大きい。

——NPCの忠誠心を考えれば、先に命じたことを優先しモモンの姿での言葉を受け取らないとか、ある程度しつかりと言い含めておくべきだったか。

そもそも、この件を提案したのはデミウルゴスなのだが、そのデミウルゴスはマーレがモモンガの深謀遠慮の担い手として一人旅をしてきたと考えている。モモンガは守護者間の和を考えて、あえてデミウルゴスの認識を変えずにいたが、それがデミウルゴスのマーレへの過大評価に繋がっていたのだろう。

さらに、提案ではモモンに扮するのはパンドラズ・アクターということになっていた。たかが現地の存在をどうにかするのにモモンガの手を煩わせるわけにはいかないというのは、守護者としては当たり前前の考え方には違いない。

しかし、モモンガは提案を勝手に修正して、自ら実行した。マールレほど表へ出るつもりはないが、冒険者に未練が無いわけではない。モモンをパンドラズ・アクターに取られたくはないのだ。

だから、修正したことによる影響は自ら背負わなければならない。

マールレもパンドラズ・アクター扮するモモンが相手であれば、攻撃や発言に遠慮も無くもつとまぐやれたことだろう。

「た、ただ見過ごせなどと都合の良いことは考えていない。実際に戦って、私の力を見せることでそうさせるつもりだ」

「つまり、その、ぼくたちは敵同士という道しかないんですか?」

マールレの方も、指示を待ちながらも合わせてくれている。

イビルアイの反応が気になるが、強者であるマールレと対峙するモモンが今振り返るわけにはいかない。

「ああ、そういうことだ。どこからでもかかってくるがいい」

モモンは、マールレを迎え入れるかのように巨大な剣を構えた両手を広げる。

「わ、わかりました。そういうご命——つもりなら、戦おうと思います」

「人類の戦力を減らすつもりはないが、殺さない程度に痛めつけてやるとしよう」

「で、では……行きます!!」

マールレの姿が一瞬消え、至近から黒い杖による剛撃が振るわれる。

風を切る音をたてての大振りは、一〇〇レベルの戦士となつたモモンにとつては緩慢な動きだが、周囲の者たちにとつては恐るべき速度となる。

夜の渓谷に、鈍く重い音が響きわたる。

受けるモモンは、大剣グレートソード二本がかりだ。元のモモンの装備より良いものに替えてき

ていなければ、間違いなく二本とも粉碎されていただろう。

マールレの力が抜けたところで、モモンは受けた剣を振るって杖ごとマールレを弾き飛ばす。

イビルアイは、モモンの意図する救いの道を最初はうつつすらと、そして次第にはつきりと理解するに至っていた。

エ・ランテルで起こったことを伝え聞いた冒険者であれば、元々見知った仲間でもない限り公然と『蒼の薔薇』を支持することなどありえないことだ。だから、現時点でモモ

ンが『蒼の薔薇』に否定的な態度を取るのとは当然のことと納得するしかない。

それでも、『漆黒』のイビルアイへの扱いに納得がいかず、吸血鬼だと知りながらも救出しようとしてくれる——『蒼の薔薇』の関係者でもなければ、それ以上は望みようなない状況だ。

だが、アダマンタイト級冒険者が一チーム味方になったところで、イビルアイや『蒼の薔薇』の状況が好転するとも思えない。

クレマンティーヌを圧倒するモモンに護られ、僅かに希望を見出しながらも、絶望から這い出せるとまでは思えなかった。

そこへ、マーレの出現で絶望はさらに深まる。

さらに、アンデッドとしてマーレの魔法の圧倒的な負の力に魅入られ、イビルアイは自身を見失いかけた。

マーレとモモン、敵対しているはずの二人が交わす言葉がまるで身内同士の情報のやりとりであるかのように聞こえるほど、目の前の現実から意識が離れかけていた。

そんな状況でも、イビルアイは二人の激突を見届けた。

モモンならどうにかしてくれるかもしれない。そんな根拠のない、予感というより願望に近い感覚従ったまでだ。

だが、実際に戦えることがわかれば、そんな願望よりも先のが見えてくる。

——確かにただ者ではない。確実に私より強いが、それでも魔法詠唱者のマールマジック・キャスターの近接攻撃を二つの武器でどうにか受け止めただけだ。

イビルアイは、マールに對抗しうる存在が各個に撃破されることを恐れる。

「戦士モモン、そいつは危険です!! 過去二百年のどんな魔神よりも強い! ここはいったん逃れて——」

「そうか。ならば私は、過去五百年のあらゆる存在を凌駕しよう」

モモンはイビルアイを後ろに隠すような位置取りまで戻る。

その背に庇われ、イビルアイは心の底から湧き上がる安心感に包まれた。

——そうか。さつき、この二人が同じ側に立っているように錯覚したのは、ともに私など及ぶべくもない遥かな高みに存在しているからか。

高いレベルで実力の拮抗した者同士なら、敵同士であつても格下には理解できない共感のようなものがあるのだろう。

イビルアイは、一瞬でも疑念を持った自身の愚かさを恥じずにはいられない。

かつての十三英雄に対しても、対立関係が存在しないのに恐れを抱いて距離を取るような者たちが存在した。強者と弱者の間にはそうした壁があるものなのだ。

そして、今のイビルアイは間違いなく、弱者の側の存在でしかない

——せめて、モモン……様に、護ってもらえるに足る存在でいなければ。

イビルアイが見守る先で、今度はモモンの方が仕掛ける。

無数の剣の煌めきは、イビルアイには目で追うことさえできない速度で場所を変え、ただ連撃の音ばかりを無秩序に撒き散らす。

マーレの杖や、時には腕で弾かれる大剣^{グレートソード}。しかし、その圧倒的な剣閃の速度は確実にマーレを追い詰めていく。

「すごい……」

イビルアイは、あらゆる賛辞を超える存在を前に、言葉を飾ることさえできない。

自身を守るのは、過去二百年のどんな戦士をも超える存在だ。おそらく、過去五百年でもそれは変わらないのだろう。

戦士モモンは、間違いなく今後数百年にわたって吟遊詩人^{バイド}に詠われるべき存在だろう。

それに護られているのが——全てを失い、哀れにも裸身を晒す自分なのだ。

イビルアイは、捨てたはずの女としての感情——恥じらいが蘇るのを感じる。

それは、衣服を奪われた際に感じた屈辱とは全く別の感情だ。

兜の中からのモモンの視線の行く先はわからない。しかし、それを意識することで、イビルアイの夜風に晒される股間から分厚い首輪をかけられた首筋まで走り抜けるものがある。

至近で炸裂した負の力の余韻をも消し去って身体の芯を貫くのは、それと対極の、熱くほとばしる何かだろう。

イビルアイは小さく震え、下腹部に手をあてる。

やはり、そこには体温など感じられない。それでも、この熱さは気のせいではないはずだ。

そのまま股間へと下がろうとする手を、他方の手が押しとどめる。

偉大な戦士モモンに対し、その視線を疑うような態度を取るのは冒涇のような気がするのだ。

イビルアイは顔を真っ赤に染めて、両の手を持ち上げる。

その手は祈りの形をつくって、胸元に収まった。

「……がんばれ、ももんさま」

冷たい両手に心の熱を帯びさせて、イビルアイは願う。

偉大な戦士モモンの、勝利を。

小さなマーレがモモンの攻撃を杖で受け止め、そのまま吹き飛ばす。

しかし、モモンはそれを追わない。

「ナーベ、あの戦士を抑えてくれ」

「はい、モモンさ——ん」

見れば、ももんの死角を求めて移動するクレマンティーヌの姿。

イビルアイとともに格違いの戦いに圧倒されていたクレマンティーヌだが、マーレの奴隸として役に立たねばならないとでも考えたのだろう。

「わ、私があいつを抑えます!! お仲間は何もモン様のフォローを!」

「は? このガガン——」

「そのようにしろ、ナーベ」

見れば、同じく呆然としていたはずのインフィーレアも、マーレに防御魔法をかけている。そういう支援は見知った仲間の方が良いだろう。

イビルアイの声には舌打ち交じりで不機嫌な反応をしていたような気もするが、実際にナーベと呼ばれた魔法詠唱者マジック・キャスターの姿を見ると、それは幻聴だと思えない。

それは、その姿があまりに美しかったからだ。南方系の濡れたような黒髪に、端正な顔立ち。息を飲むほどの美を前に、イビルアイは溜息しか出ない。

竜王国の王都で評判だった『ザ・ダークウオリアー』の女たち——『美姫』と『令嬢』のうち、魔法詠唱者マジック・キャスターは前者の方だと聞いている。よくもそんなこつ恥ずかしい二つ名を、などと内心小馬鹿にしていたものだが、これではそれ以外に表現のしようがないというものだ。

「じつとしていてくれ——ふん！」

モモンが剣を軽く振るうと、イビルアイの拘束具が全てごとりと、ごとりと落ちる。

「先にこうすべきだった……か。……イ、イビルアイよ、大丈夫か？」

「は、はいっ!!」

あつさりと拘束から解放され、完全な全裸となったイビルアイはその顔をより濃い朱に染める。

しかし、高潔な戦士モモンの前でわざわざ身体を隠すこととはためらわれた。

今のモモンは、イビルアイを護る騎士のような存在だ。

どんな英雄譚^{サーガ}であっても、自身を護つて戦う騎士に対し下卑た疑いをつけるような振る舞いをするような、愚かな姫などいるわけがない。

まして、モモンはナーベという美しい仲間を伴っている。イビルアイの未発達な身体など、関心を持つてもらえるかも怪しいものだ。

何より、イビルアイとモモンとの繋がりには、助け助けられる騎士と姫のようではあつても、この場限りの関係でしかない。そこで無作法をしてしまえば、何も残らなくなつてしまう。

かつて小馬鹿にしていた吟遊詩人^{バード}たちの英雄譚^{サーガ}だけが、今のイビルアイの行動の指針となっていた。

イビルアイは、萎縮してしまいそうになる身体を精一杯に伸ばして、戦いに赴く。衣類も武器も、自然に裸身を隠せるものなど何も無いし、モモンの前で隠すような姿勢も取るべきではないのだ。

自分の態度によって高潔なモモンを汚すような真似はできない。するべきではない。存在しないはずの鼓動が激しく感じられる。体温も無いはずなのに、顔から全身に熱が回るような不思議な感覚に惑わされる。

モモンを信じていないわけではない。見られているとは思わない。

しかし、モモンの前で——自身を護る騎士の前で隠すことなく裸身を晒していると思ふと、色々なものがこみ上げてくる。

——数百年ぶりに少女らしい想いを抱いた相手に、一糸まとわぬ姿を見られている。……既に人ではないことも知られてしまっているのだが、それでも。

イビルアイにとって自身の不死の身体は、もはや屍蟻か何かでできた取るに足らないものと割り切れなくなっている。

そんな苛立ちの原因を作った女こそが、今倒すべき相手だ。

遠巻きにモモンの隙を伺っていたクレマンティーヌの前に、全裸のイビルアイが現れる。

「おんやー？　もしかして、やる気なのかなー」

「クレマンティーヌよ、お前の相手は私だ！」

「——へえ、本当に逆らうんだ」

「お前たちをここで潰せれば問題はない。よくも私や仲間たちを苛めてくれたじゃないか、この変態女め」

「んふふ、変態とか、てめーの格好思い出してから言えば？」

イビルアイは顔を歪め、手で大事な所を隠す。この時モモンは後方で戦っているので問題は無い。

……別にわざわざ見せたいというわけではないのだが。

「お、お前の仕業だろうがっ!! ……とにかく、マーレが相手でなければ負ける気はしない。この場で逆に苛められるという経験を味わわせてから殺してやるぞ。感謝しろ」

イビルアイは距離を詰められる前から《飛行^{フライ}》を使っている。モモンの仲間ナーベも同様なので、この戦いにはクレマンティーヌの付け入る隙は無い。

戦いは一方的なものとなった。

クレマンティーヌは幾度も地に這い、回復魔法を受け、そして地に這った。

死に直結するような攻撃はマーレが防いで助けることもあったが、そのマーレもすぐにモモンの斬撃に弾き飛ばされる。

逆にイビルアイがマールレの攻撃を受けるような隙は、ももんが一切与えていなかったのだろう。警戒していたが、不自然なほど攻撃が来なかった。

イビルアイはマールレが来る前のももんの行動に倣い、支援と回復に回っているン
フィーレアと巫女姫の二人には攻撃を加えなかった。

ももんの信頼を完全に得ているわけではない状況を考え、恨みがあつて向こうからも敵意をぶつけてくるクレマンティーヌに集中した。それができるほどの力の差があつた。

「クソがあつ！ 降りてこいよ化け物！」

「断る。得意のスツと行ってドスとやらで、空でも飛んでみたらどうだ？」

返答もせず大きく跳躍するクレマンティーヌの軌道は読めている。イビルアイはそこから軽く身かわし――。

《水晶防壁》――《結晶散弾》！

《水晶防壁》――《結晶散弾》！

水晶の壁に阻まれたクレマンティーヌは、空中で水晶の礫に滅多打ちにされる。

その身体より先に地面に落ちるのが、跳躍しながら投擲され壁に阻まれたステイレツトだ。身かわすだけでは貫かれていたのだろうが、実力だけでなく戦いの駆け引きでもイビルアイは後れをとるつもりはない。

——苦しまずに逝けると思うなよ！

クレマンティーヌはタフで、特に敏捷性に優れている。魔法で一方的に攻撃することはできても、致命傷は防がれる。勝ち急いだところで簡単に仕留めきれぬ相手ではない。

それでも、モモンもイビルアイも優勢なのだ。押し続けて押し続けられれば、いつか力尽きるのは間違いない。ならば、その過程は仲間の無念を晴らす絶好の機会と考えれば良いことだ。

戦いは、モモンとイビルアイの側が圧倒的に有利なまま終局へ至る。

「全員でできるだけ近くへ！ 集団転移で逃げます」

何度も地を転げ、土埃を纏って距離を取ったマーレが指示を出す。

後衛の二人だけでなく、クレマンティーヌも速やかに従う。

だが、この場でマーレに従属すべき者はその三人だけではない。

「——イビルアイ、遊んでいないでこちらへ来てください」

「くっ………私は………」

マーレはイビルアイとクレマンティーヌの戦いをまるで気にしていない。

それどころか、脅しの言葉さえ必要無いのだ。それはイビルアイもわかっている。

モモンは強いが、戦士だ。ここで終わらせられないのなら、マーレに逆らい続けるこ

とはできない。

重い一步を踏み出す。モモンのもとへ残れば自分は助かるが、仲間たちは――。

「勘違いをするなよ、イビルアイ」

イビルアイの視界が黒いものに覆われる。闇に溶け込む全身鎧の巨軀――モモンだ。

月明りを遮る闇の戦士は、大グレートソード剣を持ったままの鎧の豪腕でイビルアイの小さな腰を掻き抱く。

「お前は選択肢を持たず、ただ私に囚われるだけだ。――自分の意思でないのだから、人質は意味をなさない。わかるな？」

モモンはイビルアイを片腕で抱き上げながら、最後は耳元へ小声で囁く。

鎧の腕が素肌を冷やし、冷たい兜が耳の先に触れると、イビルアイは自身の状況を自覚してぶるりと震える。

――なんだ！ なんなんだこれは！ 高潔な騎士に助けられ、そして一糸まとわぬ姿でその騎士に囚われるのか。順序やら何やらが色々とおかしいような気がするが、この胸の高まりの前ではそんなものはどうでもいい!! ……もしかしたら、そんな英雄譚サクもどこかにあるのかもしれないな。

縦に抱っこされた形になったイビルアイは、吟遊詩人バドたちの言葉にもっと真摯に耳を傾けておけば良かったと思う。

抱き返すには体格差がありすぎ、どう反応して良いかわからないのだ。そのまま肩に担ぎ上げられていないことだけが救いかもしれない。

そんなイビルアイとモモンの前に、硬い表情のマーレが進み出る。

「あの、ぼくはそいつの仲間の『蒼の薔薇』の人間たちをいつでも転移して殺しに行くことができません」

これがイビルアイを支配してきたマーレという存在だ。

ちよつと明日買い物に行くような軽い調子で脅しをかけてきて、それを軽く実現させる力も持っている。

しかし、そのマーレを相手に終始有利な戦いを続けていたモモンが動じることはない。

「私はこいつが『蒼の薔薇』に騙されて使われていたと考えている。仮にお前がそいつらを殺しても、この吸血鬼を取り返した時に使える人質を失うだけで、私は痛くも痒くも無いのだよ」

「そ、そうなんですか」

「だから、こいつを取り返したければいつでもこのモモンに、いや、我々『ザ・ダークウオリアー』に挑むがいい」

「わかりました。——えっと、今日のところは退きます」

そして——驚くほどあっけなく、『漆黑』の者たちはその場から消える。

先ほどの遙かな高みでの戦いが無ければ、イビルアイもあまりにあっさりとしたマーレの引き際を不審に思ったかもしれない。

しかし、モモンとマーレの間では、必要なことは全て戦いの中で語られたと見るべきだろう。

魔神や神人をも軽く凌駕するような異次元の戦いを繰り広げた者たちを、イビルアイも容易に理解できるとは思わない。

夜の渓谷には、アダマンタイト級冒険者チーム『ザ・ダークウオリアー』のモモンとナーベ、そして囚われの身のイビルアイだけが残った。

五〇 墳墓に薔薇がやってきた

「モモンさ——ん、このような事態となった以上、当初の予定通り北へ向かうということ
でよろしいでしょうか」

モモンの太い腕に抱かれ、新たな英雄譚サーガに酔いしれていたイビルアイは、モモンの仲
間ナーベの声で現実に戻される。

「……そうだな。大侵攻は我々が解決したわけではないし、王都に立ち寄るべきではな
いだろう」

「ただ、これよりその近郊を通過しますので、そちらの大蚊ガガンボは地面に落とされることをお
勧めしますが」

「ん？ あつ……ああ、これは失礼をしたな。こういう扱いでなければ、あのマーレに付
け込まれて面倒だと考えたのだ」

モモンはイビルアイをそつと下ろし、自らのマントを外して差し出す。

——やはり、私は助けられたのだな。

モモンのマントを羽織らせてもらったイビルアイは、舞い上がる気持ちを必死に抑え
ながら問う。

「あの……なぜ、吸血鬼の私を助けてくださったのですか」

「吸血鬼でも、冒険者として人の役に立っていたことはわかっているからな——」

そして、モモンは吸血鬼と知りながら同行させた『蒼の薔薇』の仲間たちの方に邪悪な意図があるものと考えている。

もしイビルアイが邪悪な吸血鬼として仲間たちを従えていたのであれば、たとえ正体が知れていても仲間の中に眷属を含め、支配を確実なものとするはず——そんなモモンの理屈には、まるで冒険者として過去に強大な吸血鬼と対峙し、その習性を知っているかのような真実味があった。

——知っているからこそ、安易に敵対せず、安易に信用しない。私が守ってやりたいと思っていた真つ直ぐで無防備な所もある『蒼の薔薇』の仲間たちとは、対極の存在なのかかもしれないな。

仲間が疑われたことは悲しいが、モモンへの不思議な感情については、何やら胸にストンと落ちるものがある。イビルアイは、自身の浮ついた気持ちの正体を理解する。

少女のまま成長を止めた小さな手を、少女のままの胸元に合わせ、イビルアイは自身と向き合う。

二百年以上前、少女のまま自身の時を止めてしまったイビルアイは——。

——守りたいのではなく、守られたかったのか、私は。こんな身体で長い時を生きて

いながら、心まで成長を止めていたのかもしれないな。

しかし、モモンはイビルアイを守ってくれる仲間というわけではない。『蒼の薔薇』に対しては、イビルアイを利用する「悪」の側の存在と認識している。

それでも、話のわからない相手でもなければ、『漆黑』のようにイビルアイや『蒼の薔薇』に敵意を持っている相手でもない。

イビルアイは、モモンに、『ザ・ダークウオリアー』に縋るしかないのだ。

「なぜ、あれほどの相手を敵に回してまで、私を……」

「お前が吸血鬼である以上は状況的に『蒼の薔薇』は信用できないが、私は元々あの『漆黑』の方を危険な存在だと考えているのでな——」

モモンは、突如現れ非常識なほど短期間でアダマンタイト級まで駆け上がった『漆黑』について不自然さを感じ、色々と調べていたらしい。

——やはり、モモン様は私の騎士だ。曇りなき眼まなこを持っている。

「どうか、私の話を——『蒼の薔薇』の仲間としての私の話を聞いてもらえないでしょうか」

「もちろん、聞かせてもらうつもりだ。お前と『蒼の薔薇』との繋がりも、それ以前のこともな」

モモンは、情報屋を通して『漆黑』と『蒼の薔薇』の戦いの詳細を知ったという。そ

の上で、先の戦いでクレマンティヌを圧倒したイビルアイと、そのクレマンティヌに劣るはずの『蒼の薔薇』の実力差が大きいことを確信し、イビルアイと『蒼の薔薇』の関係について大きな疑問を持っている。

イビルアイは語らざるをえない。『蒼の薔薇』との関わりの全てを。

そして、塗り替えなければならぬ。『漆黑』によって語られた、十三英雄を貶める偽りの歴史を。

イビルアイが覚悟を決めると、先にモモンの声がかかる。

「——だが、その前にこの場から逃れるべきだろう。遠方から魔法が飛んでこないとも限らん。ナーベ、頼む」

モモンは、マーレの遠距離からの攻撃魔法に警戒している。

防戦一方だったとはいえ、戦士のモモンが倒しきれなかったマーレは魔法詠唱者だ。甘く見ることはできない。

ナーベが手を差し伸べる。移動手段は《飛行》フライなのだろう。

「はい、モモンさ——ん。お手を」

「わ、私も《飛行》フライなら使えます！二人で支えた方が——」

「チツ……。モモンさ——ん、このような吸血鬼、信用なさるのですか？」

「そう言うなナーベよ。この場から早く離れた方がいいので、ここは二人に頼むとしよ

う。少し遠いが、北の国境寄りの小さな町で宿をとるつもりだ」

イビルアイはモモンの大きな手を取り、少しだけ顔が熱くなるのを感じつつ夜風を受けて空を行く。

他方の手を取るナーベの不機嫌な顔を見ると、自分にも少しだけチャンスがあるような気がしてくる。

モモンはイビルアイを守る騎士なのだ。『蒼の薔薇』のことも、話せばわかってくれるはず。そう信じるしかない。

「本気の殺し合いになれば、我々だけでは『漆黒』には勝てない」

夜空を飛びながら、ぼつりとモモンが言う。

「そんなことは——」

「気付かなかったのか？ 向こうに足手まといを守ろうという意思が無ければ、あの闇妖精ダークエルフの魔法で形勢は簡単に逆転したはずだ」

「そ、それは……」

魔法という言葉を聞き、イビルアイは同時に別のことも考える。

先の戦いでは姿が無かったが、『漆黒』には複数の骨スケルトン・ドラゴンの竜を自在に操るエンリもいる。あらゆる魔法を無効化するそれで守られればイビルアイとナーベの魔法は通用せず、モモンは最強の存在でも戦士でしかない。空を飛ばれたら一方的に魔法を打たれ放

題になるということだ。

そこで飛んでくるのが、モモンが物理戦闘で倒しきれない魔法詠唱者マジック・キャスターマーレの魔法となれば、勝機はほとんど見えない。

「でなければ、私はあの女戦士を殺していた。もちろん回復や支援に回っていた二人も、自由にさせておく理由は無いだろう。お前もそれをわかっていて女戦士の相手をしてくれていたのではなかったのか？」

確かに、当初のモモンの戦闘には歯がゆさを感じる部分もあった。復讐心に支配されたイビルアイには、そういう感じ方しかなかったのだ。

仲間たちの恨みを込めて、クレマンティーヌを痛めつけてやりたかった。ただそれだけだ。

イビルアイは、そんな視野の狭い自分が恥ずかしくなる。

「はい……一応は」

「無理でしょう。モモンさ——んの意図を察して行動できるのは私だけです」

ナーベの勝ち誇ったような、見下すような表情が視界に入るが、今のイビルアイはモモンとの間で他の女に対抗できるほどの地位には無い。僅かにゆらめいた嫉妬の炎はまたたく間に鎮火してしまう。

むしろ、当初はモモンの揺るぎないパートナーのように思えた美女のそんな露骨な表

情を見て、自分にも入り込める余地があるのではないかと思えてくる。あれは約束された地位にある女の顔ではない。そう思うとモモンとの関係にも晴れやかな希望が出てきて、元の嫉妬に代わってイビルアイの心を占めていく。

——私の方は、まだ出会ったばかりなのだ。私より強いばかりか、優れた洞察力や視野の広さを持つ……こんな男に二度と会えるはずがない。未来を作るのだ。

イビルアイは、この男を逃せば、この先数百年、いや数千年先まで満足できる男には出会えないような気がしていた。

一気に膨れ上がるとうとする気持ちを言葉へ替えることもできずにいると、モモンが静かに口を開く。

「イビルアイよ。お前が庇う『蒼の薔薇』だが——」

びくりと震える。イビルアイの存在しないはずの心臓が跳ねる。

「マーレによつて人質とされぬよう、外向きにはああいう立場でいなければならぬが、確実に邪悪な者たちだと決めつけているわけではない」

「信じて、ただけるのでしょうか？」

イビルアイの心は、モモンに縋ることしかできない。

「それには根拠が必要だ。……例えば、もし、お前が騙されていたのでなければ——『蒼の薔薇』が邪な意図を持ってお前と共に旅をしていたのではなければ、その背後にはよ

り強き者が居るのではないかと思うのだ」

「それは、どういう……」

「より強く、正しき者の導きがあればこそ、普通の人間にも自分たちより遥かに強い吸血鬼を仲間として受け入れることができるかもしれない。そう思うのだ」

「……………」

イビルアイは言葉を読み込む。確かに、古き盟友たちの保証が無ければ、吸血鬼であるイビルアイが『蒼の薔薇』に加入できたかはわからない。

「つまりその場合、私がああ『漆黒』と戦う際に力になってくれる者がいるのではないか。そういうことを期待してしまうと、お前だけでなくその仲間まで丸ごと信じたくもなくなってしまう」

兜の中の表情は見えないが、冷静に敵との戦いを見据えて行動しているモモンの中に、イビルアイへの期待が見えたような気がする。

信じたいたい、信じてみたい——そういう種類の期待かもしれない。

その期待を裏切るとは、イビルアイにはできない。

「モモン様、あの『漆黒』の話はでたらめですが、私には十三英雄の時代からの盟友がいます——」

老婆は笑いながら、報酬の先払い分は一人の仲間だという。

「これはお前たちを助けるなんて話じゃなく、れっきとした依頼じゃよ。だいたい、わしが復帰したところで、あの娘がなすすべもなく潰された相手に手出しできるものか」

「でも、リグリットの『古き友』なら——」

「あれでも対処しかねるから、こんな婆が働かされておるんじゃ」

「そんな……だって、その方は世界でも最強の存在で、魔神と戦った時のまま年老いたりも——」

「相手は魔神どころではないわ。あやつも実力をはかりきれず警戒しておるし、例のダークエルフ闇妖精の力は最悪、欲王並みを想定する必要があるかもしれん」

「それじゃ、イビルアイはもう……」

「早まるでない。百年の揺り返しならば、一人だけではあるまい。そして、あやつも世界を巡って、既に目星をつけておる」

老婆——リグリットの依頼は、味方を増やすための交渉役だ。それに先立ってリグ

リットの知る過去と、伝え聞く伝承が語られる。

かつて、六大神は苦境に陥った人間たちと出会った。そしてそれを助け、人類の守護者たるスレイン法国の基礎を築いた。

八欲王が出会ったのは、覇道を突き進む亜人の王や、世界の頂点に立つ竜王たちだ。そしてそれらと争い、ついには世界を手中に収めかけた。

十三英雄のリーダーも同類だが、彼は冒険者たちと出会った。そして共に旅を続け、数多の魔神を倒して十三英雄として名を遺した。

同時期のミノタウロスの『口だけの賢者』のように、食人を行う種族でありながら食料扱いの人間種を奴隷に引き上げた者もいる。

リグリットは、百年の節目に現れる強大な存在が総じて人間的な側面を持っていて、その運命や選択はこの世界の存在との出会いにも大きく左右されているのではないかと考えている。十三英雄のリーダーが最後の戦いの後に蘇生を拒んだのも、戦いの中で殺した相手が内面においてはさほど差の無い、同類の存在だと思えたからこそなのだ。

本当の邪悪を滅ぼしたのであれば、相手が人間であろうと同郷であろうと、自らの人生の残りを放棄することには繋がらないだろう。

「だから、強大な存在に縋るなら、むしろ辺りがちょうど良いのだ」

向かうは亜人の領域の奥深く。アダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のほかに、

そこまで到達できる者は多くない。

しかし、イビルアイを欠いた『蒼の薔薇』程度の存在であれば、強大な存在に危機感を与えることは考えにくい。

そして、大切な仲間と冒険者の地位を一度に失った『蒼の薔薇』には、他にできるところはなかった。

「あー、確かにこれはとんでもないモノが居そうな遺跡だな」

「ええ。でも、こういう未知の領域に踏み込んでこそ冒険者って感じがするわ」

山あいの丘陵地に隠された、墳墓の体裁を持つ遺跡。目的地はリグリットから伝えられた通りのものだったが、その威容は世界中を冒険した『蒼の薔薇』にとっても衝撃的なものだ。

その驚きは、周囲が見晴らしの良い山間の丘陵地で古い都市跡など文明の痕跡が全く無かったこと、そして遺跡が丘陵の起伏と点在する小さな森林に巧妙に隠され、丘陵の一つから下を見下ろして初めてその存在と巨大さが認識できることによるものだ。

「冒険者登録を剥奪された後の方が冒険者らしいという不思議」

「他に仕事があったらこんな人外の領域奥深くまで来ない」

ティアとティナは軽口を叩きながらも、どこか納得のいかない表情で周囲を観察している。

「そうね。ラナーの仕事ができなくなったのが申し訳ないけれど」

「今の俺たちが出入りしたら姫さんの立場が悪くなるからな。リーダーが悔やむことじゃない」

「中を荒らしてはならんぞ。相手の怒りを買っては元も子もないからな」

少し遅れて登ってきたのはリグリットだ。そこまで体力が衰えているわけではないが、絶えず魔法で周囲に気を配っていた。

「でも、最近来た奴らなんだろう？ この遺跡はどう見ても数百年は前からあるし、居座つてるだけなんじゃねえか？」

「むしろ私たちがここの宝物を探し出して、手土産にするのもいいんじゃないかしら」

ガガーランとラキユースは遺跡に強い興味を持つが、リグリットの関心はその主に向けられている。

「海上都市の近海の漁師などは『触らぬ神に祟りなし』とよく言っておる。世界には、我らが触れてはならぬものもあるのじゃよ」

「同意。ここは手を付けるべきじゃない」

「遺跡を隠している林が不自然すぎる」

ティナは鳥や虫の巣や樹皮に張り付いた虫の繭跡に着目する。中身のある新しいものはあるのに、風化しかけた古いものの痕跡が全く残されていないのが不気味だという。

そして、ティアは樹木や下草の病害に注目していた。健康なものと病害に侵されたものは適度にあるが、病害に侵され時間の経ったような部分が見当たらないことを指摘する。

「ふーん、俺から見ると自然な感じだけどなあ。この樹なんて、たまに葉っぱに木の実ができる所まで故郷にあったのと一緒だ。葉っぱにつくやつは味が薄いけど、種が柔らかくて食べやすいんだ」

ガガーランは手近な低木に触れると、葉の上にくつついた丸い木の実状のものをむしり取って口に持っていく。

「ちよ、それは!!」

「ガガーラン、待つべき!」

「んん、この安っぽい味、懐かしいな。果肉は薄味だがぶちぶちと潰れる柔らかい種にコクがあつてガキの頃好きだったんだが……。ん? どうした?」

「いや……。何でもない」

「全て王国民の貧しさが悪い」

ティアとティナはガガーランから目を背ける。

重税にあえぐリ・エステーゼ王国の寒村の子供にとつては、木の実が立派なおやつなのだ。

実のところ、葉の上のできるのは木の実で無いことの方が多いのだが。

「なんか美味しそう。これもそうよね？」

「リーダー、ちよつと——」

「それ、果実に見えるけど実は虫こぶつて言つて……」

食べてしまったガガーランに聞こえないよう、植物に稀に作られる寄生幼虫の揺り籠についてラキユースに説明するティアとティナ。

「どうした？ ラキユースは喰わないのか？」

「あ、うん、種ごとつて苦手なの思い出したの。それより！ こんなことしてる場合じゃないわ。急ぎましよう！」

『蒼の薔薇』は、遺跡の地表部で居住が可能そうな建物が無いか搜索した後、中央にある大霊廟の前に来ていた。

周囲には、今にも動き出しそうな巨大な戦士像が四体。さらに四方には遠巻きに小霊

廟が配置されている。

探索であれば四方を囲う小霊廟を調べて財宝や罫などの質を見るべきで、ここが“敵”の拠点ならば魔法的な仕掛けを警戒して戦士像を破壊することも考えられる。

しかし、訪問の目的は拠点の主との交渉だ。正面から呼びかけるしかない。

「どなたか、いませんかーっ!」

ラキユースが張りのある声で、次にガガーランが太い声で呼びかけるが、反応は無い。

「——ダメだな。眠ってたりすることもあるんじゃないか?」

「中で響いてるだけ」

「リグリット、あの石碑は何?」

ティナが指さすのは、戦士像の足元の石碑だ。

「ふむ……この世界の言語には見えん。2・0という数字しかわからんな」

「リグリットの知らないような時代の遺跡ってこと?」

「でも、古くからあったにしては色々とおかしい」

「そうじゃな。違う世界のものかもしれない」

「返事も無いし、わからないならせめて扉のある所まで進もうぜ」

一行は大霊廟への階段を昇り、内部の広間へと入っていく。

「死の臭いがする」

「ただの遺跡ではない。これは、いる」

「カツツエ平野と同じね」

腐敗臭でも打ち捨てられた墓所のものでない、アンデッド特有の臭いが漂う中、『蒼の薔薇』は歩みを止めない。こうした墳墓の遺跡であれば、アンデッドとの遭遇はやむを得ないことだからだ。

生命を憎むアンデッドは生ある全てのものにとって危険な存在で、手なずけることは難しい。もちろんリグリットののような死霊系の魔法詠唱者マジックキャスターという例外もあるが、そうでなくとも宝物を守るような目的で配置することはあり、多くは捨て石だ。遭遇したら倒してしまっても、遺跡を荒らしさえしなければ問題は無い。五人はそう考えていた。

広間には無数の石の台が並び、その先に下り階段がある。その先には開かれた扉があり、臭いもそちらから流れてきている。

「進みましょう」

ラキユースが先導し、階段下へ。その先にあるのは——玄室なのだろう。立派な装飾を施された扉が行く手を塞ぐ。

閉まっている扉を開けることには抵抗があり、幾度か呼びかけを続ける。

「む……土の掘り返されるような音が沢山」

「入口の外から不穏な気配」

「土つて、ここ墳墓よね」

「おいおい、不味いんじゃないか？」

少し遠目から、カチャカチャ、ガチャガチャと骨の鳴るような音が次第に増え、コツコツ、ガツガツという足音も大量に重なって波のように押し寄せてくる。

「今から広間に出ても囲まれる。狭い階段で迎えるんじゃない」

狭いといつても、大霊廟の階段は前衛三人でようやくカバーできる程度の幅はある。囲まれるよりマシという程度で、相手が高所な分の不利もある。

墓地が一齐にめくれあがるような土の音、そして幾重にも重なった骨の鳴る音と足音が、大霊廟の中に不気味に響く。

「待つて。量だけかもしれないし、広間に雪崩れ込んできたところで一気に浄化すれば数を減らせるかも！」

「よし、階段の上で俺がフオローするから、危なくなったら後ろへ滑り込んでくれ」
ラキユースはガガーランを伴って階段を駆け上がる。

濁流のように大霊廟に雪崩れ込む骨の音は、スケルトン種の大軍だ。普通に見かける亜種も含めて、『蒼の薔薇』であれば数百体単位で襲われたとしても対処は容易な相手のはずだ。そもそも濁流のように襲い来るような状況ならば相手は低級の存在と決まっている。

そこへ先制攻撃を行うのは、身動きが取れないところへ強敵が現れる可能性を恐れていることだ。低級のモンスターの大軍が「敵」でなく「罠」として作用する場合、先制して数を減らすことが罠自体を無効化する最良の方法となる。それは熟練の冒険者としては当然の対応なのだ。

ラキユースは階段の半ばより詠唱を始め、遭遇する一瞬で神官として浄化を行うつもりだ。タイミングを合わせ、すぐにガガーランの陰に隠れる。強敵が混じっている可能性も考えての万全の態勢だ。

広間に視線が通った瞬間、ラキユースは魔法を発動する。同時に、濁流のように迫るスケルトンの姿に大きな違和感を覚えながら。

「《不死者浄化》！——そんなつ……、《魔法抵抗難度強化》《浄化の炎》!!」

雰囲気、そして武装が違う。濁流のように部屋を埋め尽くしつつある大量のスケルトンは、その全てが立派な装備を身に付け、そこには魔力の輝きさえ有していた。

そんなスケルトンの中で、広間全体を覆いつくすラキユースの《不死者浄化》で倒れる者は無かった。

恐怖の中で至近のものへ放った二撃目は今のラキユースが使える最高の浄化手段だが、浄化の炎の及ぶ狭い範囲にしか効果を及ぼさない。一体が軽く傷つき、一体が膝をつき、中心で焼かれた一体が崩れ落ちる。

「ラキユース、下がれっ！」

ガガーランがラキユースを押しつけるようにカバーに入るが、間に合うタイミングではない。

しかし、ラキユースは攻撃を受けない。広間に雪崩れ込んできた重武装のスケルトンたちは、階段の手前で停止し、整列していく。

階段の左右には、ラキユースが浄化を行う以前から、停止していたものも居た。

「なんだよ、こいつらは……」

「スケルトン・ウオリアー骸骨戦士の亜種ね。私の広範囲浄化で一体もやれなかったから、少なくとも

「レッド・スケルトン・ウオリアー紅骸骨戦士より強いと思う」

「レッド・スケルトン・ウオリアー紅骸骨戦士でもこの数ならお手上げ」

「リグリット、ここは何なの？」

「知らん。ただ、ここには味方につけねば世界が終わるような存在が——」

リグリットが言葉を紡ぐのを待たず、重い音を立てて玄室の扉が開く。

「侵入者の皆さまが全滅される前に、ご挨拶に参りました」

静かな、そして平坦な女の声。

扉の前に居たりグリットは反射的にその場を飛び退き、階段上へ向かおうとしていた

ティナとティアがカバーに入る。

「メイ……ドゥ？」

「……あ、圧倒的」

全体を見るティナに、その胸元を注視するティア。その視線の先にいるのは、扉を開いた女がただ一人だ。冒険者としての『蒼の薔薇』とすれば、その玄室側に活路を見出せる状況になる。

しかし、その女のあり得ないほどの美しさと、不思議な装いが敵対行動を躊躇させた。豊かな胸を覆う奇怪なメイド服のような装いに、全く似つかわしくない武骨なガントレット。メイド服といっても、布のように見えるそれには金属の輝きがある。

女はその指を軽く滑らすようにして、女一人では開けられそうに無いような重々しい扉を軽々と開ききった。

「わ、わしらには敵意は無い。交渉に来たのじゃ！」

「先ほど、墳墓の衛兵に攻撃をなさいましたが」

女は、能面のように感情の無い顔で静かに言う。

完全武装の五人を前にして警戒の色が全く無いどころか、見下し、蔑むような雰囲気さえある。

「それは、武器を持ったスケルトンが大挙して襲ってきたから！」

「抜き身の武器を持った方のご訪問があれば、衛兵を集結させて現地のサンプルを……失礼しました……当方の安全を確保する前提で応対することになっていたのですが、そこへ一方的に攻撃を加えたのはあなた方ではありませんか」

「そんな!!…あの時は凄いい勢いで……」

見回せば、衛兵と呼ばれた骸骨スケルトン・ウォリアー戦士の集団は上階の広間を埋め尽くし、整然と隊列を維持している。『蒼の薔薇』に手出しをした事実、無い。

ラキユースは抗議しながらも、壁を背にじりじりと階段を下りる。

戦いの態勢を整える『蒼の薔薇』を嘲笑うかのように、メイド服の女は棒立ちのまま言葉を継ぐ。

「動きや装備を見ていただければ、統制の無い部隊ではないことはおわかりいただけると思いますが」

「装備つたって、アンデッドだろ——」

「降伏するつ!!」

ガガーランを遮って、リグリットは腹の底から大きな声を出してその場へ座り込む。

「——そちらの衛兵を攻撃したのは我々の不手際と認めよう。わしも死霊を操る術の心得があるから、ここまで屈強な衛兵たちを大量に準備する大変さは理解しておるつもりじゃ」

リグリットはメイド服の女の口の端に小さな笑みの形を見て、小さく安堵の溜息をつく。

神官でもあるラキユースは納得のいかない表情でリグリットの顔を覗き込む。

「リグリット?」

「おい、婆さん!」

「わしらはここの主と交渉するために来た。敵対行為と見なされたのなら、降伏した上で話を聞いてもらおうしかあるまい」

『蒼の薔薇』の面々はその場で武器を収める。

「……わかりました。侵入者であっても、捕虜ならばボ……コホン……私はそれが何者かを主人にお伝えせねばならない立場にあります」

女は、武器を預けようとするリグリットを手で制する。

「既に降伏の意思は承りました。武器は誤差の範囲なので、持っていて結構です。……それでは、まずは自己紹介を——」

女はユリ・アルファと名乗った。

その身分を『七姉妹』の副リーダーと称するが、『七姉妹』ブレイアデスというのはここを拠点とする

組織の名ではなく、侵入者を掃討する権限を与えられている一部のしもべたちを指す呼び名のようなのだ。

組織の名については明かされない。あらゆる情報の開示は「至高の御方のご判断次第」ということらしい。

だが、その後の待遇は悪くない。『蒼の薔薇』は拘束をされるどころか、衛兵たちに周囲を固められることもなかった。

ただ、ユリのどこまでも不遜な態度やその所作に滲む優越感は誰もが露骨に過ぎると感じられるもので、一度は冒険者の頂点に立った『蒼の薔薇』としてはその高慢さが相対に鼻についた。苛立ちを隠そうとしないガガーランはもちろん、普段は温厚なラキユースさえも時折ユリへの嫌悪感を滲ませる。

「同じように美しくても、心が外見と正反対の人って駄目ね。同じ空気を吸っているだけで気分が重くなる」

ユリの先導で墳墓の中を進みながら、後方のラキユースが聞こえないよう小声でぼやく。立場上気軽に会えなくなってしまうた絶世の美女である王宮の友人^ナと比べているのは皆わかつていて、しかも面のガガーランも無言でうなづく。

しんと静まり返った墳墓の通路を、完全武装の『蒼の薔薇』は進む。旅慣れた五人の足音と違って静寂の中でひときわ目立つのが、ユリのハイヒールが立てる音だ。

骸骨^{スケルトン・ウォリアー}戦士の大軍勢を支配下に置くとはいえ、ごついガントレットの他はメイド服にハイヒール。そんなユリに見下された『蒼の薔薇』は、ガガーランを中心に苛立ちをく

すぶらせていった。

ユリが案内したのは、湿った石壁の通路を進んだ先の横道だ。慎重に、ユリが歩いた所を選んで進む『蒼の薔薇』の足元に、急に大きな魔法陣が現れる。

全員が光に包まれ、気付けば景色は一変していた。

そこは、松明の陰影が揺らぐ薄暗い通路の途中。その通路は雰囲気反してスケールが大きく、幅も高さも相当なものだ。

陰鬱な墳墓にふさわしい湿った石壁ではなく、堅牢な作りの建造物の内部なのだろう。

流れる空気も、墳墓の内部というより、半分屋外のように過ごしやすいものに変わっている。

通路の先には巨大な格子戸が落とされ、白い魔法的な照明とともに爽やかな風が洩れてきている。薄暗い反対側には幾つも扉があるが――。

「この辺りで、しばらくお待ちいただけますか？」

「そっちの扉の方じゃねえのか？」

「牢などでないだけ良かろう」

椅子も何もない通路に文句を漏らすガガーランを宥めるように、リグリットが座り込む。

ティアは格子戸の光の向こうを見通すように目を細める。

「ここは——闘技場？」

「だとしたら、帝国のものよりスケールが大きい」

「そんな……ここ、墳墓の中よね？ どうしてこんなものが……」

見上げれば、竜や巨人も通れそうな天井高だ。

「墓地にメイドって時点でセンスおかしいし、わかるわけねえだろ」

軽口を叩いたガガーランはその直後に小さく震え、ユリから一步離れて身構える。

ガガーランを身構えさせたのは、底冷えするような殺気だ。ユリの瞳が、その苛烈な輝きがガガーランに向けられる。

『蒼の薔薇』の全員がその殺気に晒され、辺りの温度が一段下がったかのように錯覚する。

「私ユリ・アルファは無礼な侵入者への対応を任されていますが、残念ながら侵入者を殺さないよう申し付けられております」

「あ？ それが何だよ」

「わかりませんか？ 無礼な方を殺さない程度に痛めつけるところまでは許されているのです」

「だったら、武器を取り上げておくべきだったな」

「ガガーラン、ちよつと」

「待つてくれ。我々は降伏したのじゃ。戦うつもりは無い」

喧嘩を買う姿勢のガガーランをラキユースが抑え、リグリットが間に入ろうとする。しかし――。

「降伏は了解しておりますし、私は弱者を一方的に甦るような真似は好みません。皆様
の交渉という目的に支障のないよう、正々堂々と試合の形式を取つてお置きさせてい
ただきたいと考えます。勇気があるなら武器をお取りください」

「試合か……いいねえ。婆さんも、交渉とは別に俺が勝手にやるんだからいいだろ。
……ほら、お前も早く武器を取つてこいよ」

「私は、これで充分です。――そちらは全員で来られても構いませんよ」

ユリは武骨なガントレットに包まれた両の拳を打ち合わせてから、格子戸と逆の方へ
ゆつくりと歩き出す。

闘技場への格子戸は開かず、広い通路でやりあうつもりなのだろう。

「正々堂々と、なんだろ。サシで相手してやるよ」

ガガーランは仲間たちから離れてユリと対峙し、広い通路を大きく使つて間合いを取
る。

五一 ユリの鉄拳と世界の脅威

そこは国境の街の小さな宿の一室。モモンはようやく女たちから解放され、一人部屋で自身と全く同じ姿の戦士を迎える。

「パンドラズ・アクターよ。先にソリュシヤンを寄越してくれたのは、お前のアイデアか？」

ソリュシヤン——『ザ・ダークウオリアー』での名ではソリュシア——はこの街の入口で、非常時に落ち合う約束をしていたかのような口ぶりでモモンたちを迎えた。

それまで、イビルアイの無遠慮な質問に困惑しながらどうにか対応し、イビルアイからさらなる話を引き出そうと苦心していたモモンとナーベだが、ソリュシアが加わることでようやくペースを掴むことができた。

ソリュシアだけが、なぜかイビルアイの聞きたいことをわかつているかのように、質問の矛先をそらすことができた。

例えば兜をいつ脱ぐのかとイビルアイが問うにしても、モモンならば冒険者として隙の無い態度がどうのと堅苦しい答えでその場を逃れるしかない。ナーベに至っては知らぬ存ぜぬで、二言目には「あなたごときがそのようなことに関心をもつ必要は——」な

どと刺々しさばかりが出てくる。

これに対しソリュシアは余裕の薄笑いを浮かべ、モモンへのアスタイルや目つき、肌の触感、髭の処理といった幻影として設定してあるに過ぎない容姿や身だしなみ全般の話にすり替えることで、どういうわけかイビルアイの関心を満足させてしまう。

そして不思議なことに、イビルアイの面倒な関心はなぜかソリュシアへの僅かな苛立ちへ変換されるのだ。

モモンガは女同士の会話の機微などはよくわからないが、この変化にはソリュシヤンによる魔法の発動を見逃したのではないかと思つたほどだ。魔法でないとしたら、ソリュシヤンにはこうした会話ではヘイト管理を行う盾役タンク的な素質があるのかもしれない——そんなことまで考えた。

そうやって会話が膨らみ、今ではソリュシアの仕切りで女三人が宿の部屋に固まり、ようやくモモンは一人になることができた。

パンドラズ・アクターとの、引継ぎの時間だ。

「——はいっ！ 女三人寄れば何とやらと申しませうか、牽制し合うには宜しいかと思つた次第です」

「牽制？」

「心の問題でございませぬ。今度は吸血鬼の小娘からの情報収集が目的と伺いまして、全

員分の真つ赤な花束も用意しました。女心を考えますと競い合わせるライバルは多ければ多いほど良いのです」

「いや、そういう面倒なこととはしなくていいから。花束なんか持って帰れ……じゃない、帰るのは私の方だったな。そこまでする必要は無いから、私が持って帰るぞ」

情報収集——その目的は、竜王国の女王の時と同じだ。つまり、そういうことなのだろう。

竜王国でも、パンドラズ・アクターの所業によって街で陰口を叩かれることが無かったわけではない。幼い姿の女王に大量の花束を贈った筋金入りのアレという評価を思いつ出し、モモンガは残念な気持ちに包まれる。

色恋はもう懲り懲りなのだ。

「もしや、ソリュシャンも不要でございましたか?」

「それは、まあ、上手くいっているようだし、『ザ・ダークウオリアー』の一員として居た方がいいだろう。でも、何というか、競い合わせるとかそういうややこしいことはしなくていいからな」

そのソリュシャンも宿の部屋を分ける時「モモンさん当番」のような不穏な言葉を口にしていた気がするが、イビルアイの扱いに関して頼りになるのは間違いない。今の『ザ・ダークウオリアー』にとっては外せない存在だ。

「申し訳ございません。恋慕と嫉妬の狭間へ誘い込み揺さぶるドラマテイイックな展開こそが、全てを吐き出させる早道かと考えたのですが……」

「そういうのはいらん。マールがいくら拷問をしても駄目だったというし、ここは純粹に信頼を得ることを考えてほしいのだ。とにかくしっかりと話を聞いて、人間の社会で居場所の無いイビルアイを受け入れるようにして、さらなる情報を引き出すことだけを考えてほしい」

「はっ、かしこまりました！」

びちっ、という感じのわざとらしい敬礼が、モモンガに小さな溜息をつかせる。

一瞬、このオーバーアクションは吸血鬼の少女の教育に悪いのではないか、とも思えたが、イビルアイは二百五十年以上生きているのだ。設定だけ七十六歳でも実際には自分の意思を持って数か月でしかないマールとは違う。

そして何より、イビルアイは身内ではない、情報を確保できれば良いだけのどうでもいい存在だ。拷問が効かないというから、違う方法で情報を引き出そうとしているに過ぎない。酷い目にあっているところを正義の戦士に助けられて仲間になるという状況だけでも、信頼関係を構築するには充分だろう。この世界で使えるかどうかかわからないが、かつて自分を助けてくれたたち・ミーが背中に背負っていた「正義降臨」の文字エフェクト（合計二〇〇円）くらい洒落で買っておけばよかつたかもしれない。

モモンガは自分の存在しない胃袋だけを心配することにして、パンドラズ・アクターの動作から目を背けた。そもそも、モモンを演じる限りでは不自然な動作は無いはずなのだ。

——頼むよ、ほんとに……。ずっとこっちに張り付いていたいけど、あつちも気になるし、タイミング悪いよなあ。

モモンガは諦めの大切さを理解しつつある。自分自身、二つも三つも同時に仕事をこなせるほど優秀だとは思わない。部下たちを最大限活用し、自分が赴く必要性の高い部分以外は任せるべきだ。

今回、パンドラズ・アクターを呼び寄せたのは、ナザリック地下大墳墓に珍しい人間の侵入者が近づいているという報告を受けたからだ。殺さずに捕獲するように命じてはあるが、モモンガとしても興味深い相手であれば早めに戻って対応を考えたい。

パンドラズ・アクターの装備などがモモンとして完璧であることを確認すると、モモンガは《上^{グレイター・テレポーターション}位 転 移》を発動する。

転移先は、警備状況を一覽できる無数の監視用水晶画面を配置した一室だ。転移障害を素通りする指輪の効果で、そのような要所にもすぐにたどり着くことができる。

そこは、かつて電気街の博物館で見たVR以前のゲーム廃人の部屋のように、一面に

クリスタルモニター
水晶画面が並べられた一室だ。指示通りに用意されているとはいえ、
クリスタルモニター
水晶画面が群れることで生まれる独特の雰囲気にもモンガは少し引いてしまう。

しかし、余分にあつた応接室をベースとしているため、部屋の調度などを視界に含めれば随分とそういう雰囲気も和らいでくる。ソファを用意して、複数人で談笑しながら警備状況を確認することができるとは違った方向性だ。

この世界でかつての仲間に出会うことができれば、まずこの部屋の改変について反応を見てから——守護者の設定の書き換えについて、どう言い出せばいいか考えるつもりだ。

この部屋で迎えてくれるのは、もちろん守護者統括のアルベドだ。

そのアルベドがいつものようにすぐに出迎えの挨拶を口にしないのは、仕事熱心ゆえか——。

「……お……お帰りなさいませ、モモンガ様」

「ただいま、アルベド」

普段なら深々と頭を下げるアルベドだが、目を丸くしてこちらを見ている。

——部屋の外へ転移して、足音をさせて入ってくるべきだったか。

サラリーマン経験のあるモモンガとしても、突然上司が部屋の中に現れるような労働環境では下の者がやりにくいのは何となくわかる。

監視に集中して挨拶が遅れたことを気にしているのかもしれないが、それだけ仕事熱心なのは素晴らしいことだ。ここは、アルベドの動揺には触れずに優しく見守っておくべきだろう。

「あの、そそそれはっ……」

「ああ、うん、ちよつと荷物かもしれないが、どこかに適当に飾っておくといい」

モモンガは少し顔を背け、荷物を押し付けるようにパンドラズ・アクターから回収した花束をアルベドに手渡す。

——俺が放置しておれさせるより、女性に飾ってもらう方がいいよな。

ここで事情を話さないのは、余計な心配をさせないためだ。遊び心で「モモンガを愛している」設定にしてしまったアルベドは、竜王国の女王をモモンガが籠絡するという話を聞いた時、大変に心配していた。

今回も同じことになっては面倒なので、モモンガは少し後ろめたく思いながらも、ただ歯切れの悪い言葉を返しつつ花束を押し付けるだけで何も説明できないのだ。

ナザリック随一の盾役たるアルベドは、少しカチコチと緊張を見せながらも花束を受け入れる。先程の動揺が残っているのか、あるいは、モモンガの困惑を察して、余計なことを聞かずに受け止めてくれたのかもしれない。

「か、かか飾ってまいりますッ!!」

アルベドは愛する何者かを抱きすくめるように花束を両腕で包み込み、部屋の外へ駆け出した。

「うおっしやああああつ!!」

雄叫びが、聞こえた。困惑ではない何かをもぎ取っていったつもりなのだろうか。けたたましい足音は猛烈な勢いで遠ざかる。

「え? あ、誰か……? そうだ、侵入者はどうなったんだ……」

しんと静まり返った部屋の中に人影は……一応残っていた。

帰還前からこの場を掃除していた二人の一般メイドが、部屋の隅で顔を赤らめてモモンガの方を窺っていた。

水晶画面モニターの向こうでは、戦闘メイドのユリ・アルファが怒りの鉄拳を振るっていた。

——なんでユリが赤い鎧のおっさんボコボコにしてんの? って、こっちの二人の恰

好は忍者か? こいつらって、もしかして……。

モモンガの記憶に引つかかったのは、マールから聞いていた『蒼の薔薇』の忍者風の双子の女だ。

女だけのチームと聞いてはいたが、殴られている偉丈夫は助っ人なのかもしれない。いくら顔の形が変わるまで殴られても、女が男になることまではないだろうから。

——それより、殴ってる場合じゃないだろ、これ。……どうする？ 少し喋らせてから確保するか……。

『蒼の薔薇』はマールの敵だ。イビルアイから聞き出した情報もあるので、いずれモモンガの方からアプローチするプランもあった。だが、ナザリツクまで踏み込んでくるとなると既に相当な情報を握られている可能性がある。

とはいえ、実力差を考えれば相手は捨て石にされているのかもしれない。どんな仕掛けがあるかはわからないから、万一の事態でも最低限の情報しか渡らないようマールを呼んで対応させるか、あるいは拷問の専門家のニューロニストか……。

迷ううちに戦いが収まる。赤い鎧の偉丈夫は味方の魔法で地面に落とされたように見えたが、それでユリが攻撃を止めたのも不可解だ。

モモンガは音声をカットしたままであることを悔やみつつ、『蒼の薔薇』の態度に興味を抱いた。仲間を叩きのめされながらも耐えているのは、何らかの目的があつてのことかもしれない。

——そうか。『敵』の拠点と考えているなら、耐える理由は無いよな。かといって絶望している雰囲気でもない。今はまだそういう認識ではないってことか。

モモンガはモニターの向こうの人間たちの運命を少しだけ修正する。

懐に手を入れれば、十二年間ひたすら受け取り続け、こちらでは被り慣れたマスクがある。

モモンガは骸骨の顔を覆うと、アウラとマーレに《伝言》^{メッセージ}で第六階層及び墳墓の入口周辺から離れ、しばらく立ち入らないよう命じてから、侵入者の処刑場とされる場所へ転移する。

四肢の骨や肋骨の多くが碎けるまで殴打され、一時は全身が腫れあがっていたガガーランだが、ラキュースから数度の回復魔法を受けてほぼ全快している。

『蒼の薔薇』の面々はユリ・アルファを睨むが、ガガーランが痛めつけられたのは『試合』でのこと。その『試合』への他のメンバーの参戦を強く止めたのは、真っ先に降伏を決めていたリグリットだ。

最後には魔法で介入したが、それはガガーランが宙に浮かされたまま殴られ続けているからだ。倒されるまで、すなわち、背中か腹を床につけるまでの勝負だという『試合』

“を終わらせなければ、ガガーランは最大限の苦痛の末に死を迎えていたかもしれない。

そんな時、キィイ、ギィイと軋むような音を立てて格子戸が開いた。

「準備が整いました。こちらへおいでください」

まるで「試合」など無かったかのように、無表情なユリ・アルファが『蒼の薔薇』を先導する。

格子戸の先は、やはり巨大な闘技場だった。帝都のものと比べても遜色のない、壮大な建造物だ。

それは遺跡というにはあまりに煌びやかだ。無数の《コンティニユアル・ライト永続光》が中央の戦場から周囲の客席までを彩り、真昼のごとく明るくなっている。

客席には、動かぬ人影。土人形のようにも見える。大量にあると見れば、高価なゴーレムとは考えにくい。

ガガーランは借りていたラキユースの肩を離れ、身体の調子確かめるようにゆっくり歩きだす。

「ガガーラン……」

「大丈夫、俺の美貌も元通りだ」

「面の皮まで全快なら頭は諦めてもいい」

「戦った後で闘技場とか——って、夜空？」

ティアの声に反応し、数人が上を見上げる。

そこにあるのは、星空だ。

「わしらは降伏した身なのだが、ここは随分と物騒な場のように見えるな」

「あなたがたは捕虜となった侵入者ですから、生殺与奪は我らが主、至高の御方がお決めになります。では、ごきげんよう」

ユリは通路を出てすぐの所で立ち止まり、闘技場の中央へ向かって深々と一礼すると、『蒼の薔薇』を先へと促す。

そこには一見場違いな黒曜石の大きな椅子があり、仮面にローブ姿の巨軀の男が座っていた。

——なんで俺、椅子なんて作ったんだろう。

モモンガは立ち上がるタイミングを掴めないまま座っていた。

ゆったりと通路から出てきたユリ・アルファの優雅な歩き方を見て、クリエイト、プレジャーゲーム《上位道具創造》でとっさに作ってしまったのだ。

優雅なメイドの前では、優雅な支配者らしく振る舞わねばならない。この世界で初め

て客を迎える主人の立場ならなおさらだ。これは一種の職業病かもしれない。そして、前へ進み出てきたのはやはり、『蒼の薔薇』で間違いなさそうだ。

——ええと、今日はアウラは顔を見せない方がいいから居ない。でもこの場所の段取りは決まってるから、ユリはアウラの反応を待つてるつもりなんだよな。つてことは、俺から声をかけた方がいいのか？

ここは第六階層、アウラとマーレの階層だ。マーレの居ない段階で決めた段取り通りなら、ここでの侵入者への対応を仕切るのもアウラということになる。

だが、『蒼の薔薇』はマーレと面識があるため、双子のアウラも遠ざけてある。モモンガの臨機応変な変更により、本来の段取りがここで途切れてしまっているのだ。

「お前た——」

その時、万雷の拍手が口にしかけた言葉を覆い潰す。全て、観客席のゴーレムたちにやるものだ。

そんな予定も、確かにあった。侵入者の検分を行うケースの一つとして。おそらく、侵入者が所定の位置に達した時に合図があつて、そうなるのだ。

モモンガは詳しい所はわからない。なぜなら、ここではアウラの仕切りに任せればいいとだけ覚えていたからだ。

しかし、そのアウラは咄嗟の判断でこの場所から遠ざけたばかりだ。

モモンガは拍手が終わるのを待つが、なかなか止まない。

次に、これを機会に椅子から立ち上がって拍手を制することを考えるが、実行に移そうとした途端、一斉に拍手が止んで静寂が訪れた。

あまりの間の悪さにモモンガは一センチ浮かせた腰骨を椅子へ戻し、思わず不機嫌そうに溜息を漏らす。

その場で立ち尽くしていた『蒼の薔薇』の面々がびくりと震える。

「ま、まずは謝罪をさせていたただきたい。わしは『蒼の薔薇』のリグリット・ベルスー・カウラウ。失礼ながら、貴方様のお名前は——」

先手を取られ、モモンガはマスクの下の骨の顔をしかめる。

せつかくの席を立つ機会も台無しだ。

——名前って、ちよつと待てよ……。マーレがナザリックを探す時に名前出してるかもしれないんだよな。

モモンガは、『ザ・ダークウオリアー』以外に咄嗟に出てくる格好いい名前のストックを持たない。思考の片隅ではモモスケなどという文字列も踊っているが、それは用途が少し違う。

「……そうだな。アインズ・ウール・ゴウン、とても呼んでくれ」

咄嗟に出たのは、仲間たちと過ごした大切なギルドの名前だ。その存在は、もはや、自

分自身の人生とも等しい。

誇らしげに、そしてもちろんユリにもしつかりと聞かせるように言い放った。

だが、モモンガはすぐに失敗に気付く。マーレがギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の名を出して探していた可能性もあるのだ。

しかし、『蒼の薔薇』の面々の表情に大きな変化は無く、モモンガは心の中でほつと胸をなでおろす。

「——アインズ・ウール・ゴウン殿。この墳墓に無断で侵入し、大変に貴重な衛兵を傷つけ倒してしまったことを謝罪する」

——大変に貴重なのか？ ああ程度のが？ ……確かに、ビーストマンやミノタウロス相手に一体も犠牲が出たことはないけど。

ここへ来る前の防衛システムの確認で、犠牲はたったの一体とわかっている。他に損傷も二体だけだ。その時対応した個体だけでも百は下らず、その総数は数千にも及ぶのだが。

「勝手な謝罪を受け入れる前に……お前たちに聞きたいことがある——」

モモンガは何より自分自身の気持ちを落ち着けるため、太い声でゆつくりと語り掛ける。もちろん椅子には座ったままだ。

「ここは人間の領域ではない。西の人間の国々でも、我らを知る者は居ないはずだ。そ

んな状況で、お前たちはなぜこのような所へ訪れたのだ」

「勝手な願いではありませんが、力あるお方を探しに参りました。世界を滅ぼしかねない脅威に対抗するために」

——世界とは大きく出たな。ゲームみたいな設定を仕込んでまで戦わせたっていうのは、やはりプレイヤーが背後にいるのかね。勢力が複数あって対立しているのか、あるいは騙して釣り出そうってのか？

情報が足りない。喋らせるだけ喋らせたなら捕えることも考えていたが、モモンガにはまだ迷いがあった。

対応を考えつつ、いったん話を逸らすことにする。

「なるほど、交渉に訪れたのだな。ならば——ユリよ。先ほどの戦闘行為は、守ご……コホン……然るべき者が許可したものののかな？」

「あの、然るべき者とは、階そ——」

「そこが問題なのではない！ 今の問題は、裏の通路での一戦、あれが如何なる意味を持つものなのかということだ」

跪いたユリがびくりと震える。

モモンガは自身の不用意な発言を反省する。「なんでいきなりボコボコにしてたんだよ」という言葉を支配者風に飾り付けたら、出してはいけない名前がユリの口から出そ

うになってしまった。相手の意図が完全に見えていない以上、マーレの名がここで出てしまつては不味いし、アウラの名だつてどこで出てしまつていくかわからない。

だが、まさかマーレと接点のある者が乗り込んでくるなど想定外で、対応を任せていたユリたちにもそういうことは伝えていない。ここはモモンガがどうにかするしかないのだ。

「はっ！ それは、ぶ、無礼があつたのです！」

ユリの声が震えている。とりあえず、アウラやマーレの名からは離れることができたようだ。

ここは簡単に事情を聴いて、相手の側に問題があればそこを軽く突く程度で良い。

「ふむ……ユリには入り口の守りを任せていたはずだが、無礼とはいうのはそれと直接に関係のある——」

「無礼はお互い様だろうよ！ 俺もその女がいけ好かなかつたから、喧嘩を買つたんだよ」

モモンガの言葉を遮つて、赤鎧の偉丈夫が声を荒げる。いかつい風貌の割には高めだが、芯の通つた豪快な声だ。

「喧嘩を、買った？」

「互いに相手が気に入らないから、勝手に試合をしただけだ。お陰で気持ちよく交渉の

場に臨むことができたぜ」

ニヤリと笑う偉丈夫に、モモンガは言葉を失う。

——ユリに一方的に殴られてたくせに、器がでかいというか、凄い奴だな。おっさん顔のくせに一人で若い女を沢山連れているだけはある。

モモンガはこの赤鎧の偉丈夫を眩しく思う。たとえ弱者とわかつてはいても、その誇り高い姿には敬意さえ感じる。

これで若い女を三人も連れていなければ、小動物へ向けるほどの親しみも感じたかもしれない。そこは少しマスクが疼くのだが。

「……それはよかった。ならば、私もお前たちの話をじっくりと聞かせてもらうことにしよう」

ふわりと場の空気が弛緩する。『蒼の薔薇』もユリも幾らか緊張状態から解放されたようだ。

「世界を滅ぼしかねない脅威について語る前に、八欲王という存在について知っておいていただく必要があります」

二百年以上の時を生きたというリグレットの口から語られるのは、六大神、八欲王、そして十三英雄の物語だ。

苦境に陥った人間を助けた六大神。それを滅ぼして世界を制覇しながら、互いに争って滅びの道を進んだ八欲王。

そして、その最後の生き残りが力を蓄え、多くの魔神たちをまとめて再び世界を手にとしようとした時、それを討伐した十三英雄。

この世界には人間が人間として生きている。何者かがひとたび圧倒的な力で全てを得ようとしても、必ず人の心に触れ、世界を救おうと立ち上がる者が現れる。リグリットが説くのは、そういうことだ。

それは、モモンガのいた世界の人間、すなわち、他のプレイヤーの心にも通用する話には違いない。

「わしは、貴方様もぶれいやーであると考えております。こうして話を聞いていただけただことで、この世界に協力する側の存在になっていただけると確信しておるのです」

リグリットは、ぶれいやーを信じているようだ。八欲王の問題は、彼らの側が、世界がその敵に回ったと認識したことで起こったものと考えている。

この世界では神や神に等しい力を持つとされている者たちについて、人間の尺度で見ているのだ。

だからこそ、モモンガの側にも通用する。

——確かに、これだけ力の差があれば、世界との出会い方次第で神にも魔王にもなってしまうのかもしれないな。

そして、魔王はいずれ他のプレイヤーによって倒される。

今のモモンガには、もちろんこちらへ来ている仲間を探したいという思いも強いが、それも含めてギルドとしてのアインズ・ウール・ゴウンの安全こそが最重要だ。だから、ただリグリットの口車に乗せられるつもりはない。

「十三英雄とやらが居れば、世界を救う側の戦力としては充分なのではないか」

正直な答えが返ってくるとは思わないが、他の強者の情報はあればあるほど良い。

異形種ギルドのアインズ・ウール・ゴウンは他のプレイヤーから忌避されやすく、ゲム内での立場の延長で敵視される危険も考えなくてはならないからだ。この世界には異形種を狩るなどという人間至上主義の国家も存在し、そういう感性を持つプレイヤーはユグドラシルのゲム内にも多く存在した。双方が結びついていないと考える方が都合が良すぎるといふものだろう。

「あれから二百年経ち、十三英雄も殆ど残っておりません。そして、その中でふれいやーは一人だけで、最後の戦いの直後に亡くなっておるのです。共に歩んだ仲間を殺したシヨックで、蘇生を拒んで……」

そこにあるのは、魔王も勇者も同郷の、同じ人間だという世界だ。

そして、十三英雄の時代を生きたりグリットの態度は、明らかに大切な仲間を悼むもの。

リグリットは、その遺志に従って“世界に協力する側の存在”であり続けてきたのだろう。

ただし、それは使者として他のプレイヤーの懐に飛び込むことが許される程度の存在ではない。

その話は、モモンガがこの世界で収集してきた情報と完全に附合するわけではない。さらに、背後にはその“世界”を背負う側を気取る者が居るはずだが。

——待てよ。こちらから聞く前に考え、相手の出方を見るべきだ。

モモンガは、ギルド間の権謀術数について必ずしも主導してきたわけではないが、ギルドの長という立場でその全てに関わっている。

そこでは様々な教訓があるが、ここで思い出したのは、出てきた情報を精査すれば情報の出し手の立場がわかるという考え方だ。

特に重要なのは、欠落した部分だが——。

「ふむ、戦力が欲しいのは理解した。しかし、頼みごとをするなら、必要な情報は簡潔に伝えるべきではないのかね？」

話したいことの全容を聞かなければ、何が欠落しているか、欠落させておきたいかを

知ることもしできない。

簡潔に、というのは、その方が相手の立場が理解できるからだ。

そして、リグリットは世界の脅威を語る。それは小さき少女の姿でありながら、過去二百年のあらゆる魔神を凌駕する最強の存在にして、世界最悪の災厄。

「——その名を、マールという」

——あ、ハイ。

『蒼の薔薇』との関係はマールとエンリ、そしてイビルアイと、既に両側から聞いている。

八欲王と敵対したような勢力から見れば、そういう脅威の再来のように見られてもおかしくはないのかもしれない。

——ライトノベルだったら『友人の子供が魔王になってしまいました』みたいなタイトルが付く状況か。せめて偽名で活動してほしかった、なんて贅沢を言っても仕方ないか。こっちから探す時に困るもんな。

モモンガはついでに少しだけ偽名を考え、すぐにマールの創造主ぶくぶく茶釜に申し訳なくなつて止めた。自身のセンスがおかしいなどという明確な自覚は無いが、どうも聞かれたら弟を見るような目で見られそうな気がしたからだ。

「その者は、その姿に似合わぬ恐るべき力を持った闇妖精ダークエルフということじゃ……ラキユー

ス、細かな特徴など、説明せい」

「は、はいっ。あの、彼女は『漆黑』という冒険者チームと行動を共にしている——」
ラキュースと呼ばれた若い女の話の中身は、仲間だったイビルアイから聞いたもの
そうは変わらない。違いがあるとすれば、マーレや『漆黑』の者たちの容姿が話の上で
少し禍々しくアレンジされていることくらいだ。

モモンガらとの繋がりについては気付かれていないようだ。

しかし、全体としてはイビルアイから聞いた話と相当に大きな温度差がある。どちら
も『蒼の薔薇』だというのに。

リグリットが脅威と見なすのは、マーレそのもの。『漆黑』はマーレに従う人間たちと
いう位置づけとなっていた。

だが、イビルアイが脅威と見なすのは、マーレを含めた『漆黑』だ。あの場に居た面々
を恐れるところはまるで無いにしても、マーレではなく『漆黑』なのだ。

そして、ラキュースら、実際にマーレと遭遇しているリグリットの同行者はその中間
のようにも見える。

そのあたりが、モモンガには腑に落ちない。

この世界の脆弱な人間たちにとって、一〇〇レベルのマーレの力は深刻な脅威には違
いないが、マーレがその力の片鱗をより強く見せたのは『蒼の薔薇』というよりイビル

アイを相手にした時なのだから、むしろ逆であるべきだ。

だが、そうした違和感を安易に質問の形に変えてはならない。何かが見えてくるまで、泳がせておくべきだ。

交渉事において泳がせるということは、相手に交渉の方針を絞らせないことだ。

曖昧な対応をして、義を説くことも利を説くことも妨げないようにするべきだ。交渉の方針について、相手の自由な選択を観察することで、相手を知っていかなければならない。

調整役タイプのギルド長として「聞き役」をやってきたモモンガには、そういう忍耐力が備わっている。

「ぶれいやー同士で戦うことがいかに辛いことであるか、わしも知らぬわけではありませんが……」

態度の上でも協力を渋りかけていたモモンガだが、この一言によって方針を変える。

ぶれいやー同士。それが指すのは、モモンガと、マーレだ。相手からすれば、そういう扱いになっているのだろう。

その言葉に閃きを与えられ、モモンガは相手の懐へ一歩踏み込むことを決めた。

「そのマーレとは、どのようなプレイヤードと考える？」

「八欲の、同類でしような。世界に敵対するような存在とでも言うか。……そのような相手でも、やはり敵に回すのは気が引けるものでしょうか」

「いや、プレイヤーでも攻撃的だったり問題の大きな者が居る場合、それは仕方のないことだろう。だが、次にこちらが標的となるようでは困る。特に私はこんななりをしているのでな」

モモンガはマスクを外し、骸骨の顔を晒す。

「——ひっ!」

「うおっ!」

ラキユースと赤い偉丈夫は驚きを隠さず、双子は一步下がって軽く腰を落とす。武器を構えなかっただけマシな反応なのだろう。

リグリットだけは、その場で真っ直ぐモモンガを見据えている。

「……お前は、驚かないのか?」

「かつて六大神には、アンデッドのぶれいやーも存在しておったのです。私は死霊系の魔法も使うので、恐れはありませんが……」

「それは興味深い。是非とも一度、会ってみたいものだな」

リグリットの話では、六大神の生き残りは八欲王に殺されている。

わかつていて言っているのだ。

「いえ、かの者は八欲によって滅ぼされてしまっておりませう」

「ああ、そうだったか。やはり、私も安穩としてはいられないということなのだ。……それで、君をここへ寄越して、いずれ私と共にそのマーレとの戦いに挑むことになっているのは、どのような者なのかね？」

ここで出てくるべきは、ここまでリグリットが伏せていた者に違いない。それは、イビルアイの言っていた“盟友”の一人にして、プレイヤーである八欲王とも戦った、この世界で最強の種族に属する存在。

プレイヤーを警戒しているからこそ、プレイヤーの前で戦いの過去に触れないのだから。

危険な相手には違いないが、それでもモモンガの求めるものを持っているかもしれない。

そして、モモンガは落胆する。

六大神、八欲王、そして十三英雄を知り、さらにナザリック地下大墳墓を発見するほどの者が、現段階では他のプレイヤーの存在を把握していない。

すなわち、この世界でギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の仲間たちと出会える可能性は極めて低いということだ。

「……安心してほしい。私は決して八欲王のようにはならんよ」

最後の言葉だけは、モモンガの正直な気持ちだ。

この場では『蒼の薔薇』の要請を受け入れることにしたモモンガは、そう言って彼女らを送り出す。

背後にプレイヤーが居ないというのは意外で、完全に鵜呑みにはできないが、それはこれから調べさせれば良いことだ。

アインズ・ウール・ゴウンは悪のギルドだが、モモンガ自身はゲームの中で仲間とそういうロールプレイを楽しんでいたに過ぎず、プレイヤーの善性を期待するリグリットと積極的に対立して見せる理由はない。

そのリグリットは、他にプレイヤーが発見されたら仲間を引き込むと言っている。十三英雄の例を見るまでもなく、実際に他のプレイヤーが現れればその言葉に耳を貸すこともあるかもしれない。

だが、アンデッドとなったモモンガは、曖昧で相対的な人間性よりも人間であった頃

の思いに目を向けたくなる。

「仲間同士で争うなど、そんな愚かなことをするわけがない。——たとえば世界が滅んでも、あつてはならないことだ」

その眩きを聞く者は、周辺には居ない。

浮ついた気持ちを残したままモニターの前へ戻ってきた女悪魔だけは、主のその底冷えするような厳しい雰囲気小さく震えたが。

第十一章 超位と始原

五二 楽しみだ。ああ、楽しみだ

リグリットらに見送りを付けた後、モモンガはマーレの引き連れる『漆黒』への対応を考える。

『漆黒』はマーレの転移でモモンら『ザ・ダークウオリアー』から逃れ、しばらく追尾の無いことを念入りに確認してからこちらへ向かうことになっている。

これは、もちろん時間稼ぎだ。モモンとして必要なことを済ませてナザリックへ戻り、少しでも支配者らしい態度の復習をして心を落ち着けるくらいの時間を確保するつもりだった。

その時間的余裕を予定ごと吹き飛ばしてくれたのが、この侵入者騒動だ。

『蒼の薔薇』自体はたいした存在ではないが、それを見守る者があるのではないか。周辺を監視する者がいるのではないか。そうした疑心暗鬼に囚われ、複数の守護者に大量のしもべたちを動員して周辺の哨戒を行うこととなった。

そこで何者かを発見することができれば、予定通りに事を進められたかもしれない。しかし、徹底した搜索の末、周囲に怪しい者は一切発見できなかった。ユグドラシル

であれば、何者も存在しないと確定したも同然だ。

それでも、現地には武技のようなユグドラシルに存在しない技術もあるため、本当に何者も居ないということを実証することにはならない。

結局、モモンガと『漆黒』との会見は、場所を移して行われることになる。

「このあたりに仮の要塞を築いて、ナザリックのダミーの一つにしようと思うのだが」

モモンガは、適当に決めた候補地をミノタウロスの王国の管理を任せているデミウルゴスに示す。

西に人間の国があると聞いた後、なんとなく遠目にそれを眺めた山を隔てて亜人領域側にある、最辺境の村の郊外。

王国の西側全体を一望できる標高の高い場所に、カルデラの小さな湖と温泉の湧く僅かな盆地があったのを覚えていた。

「さすがはモモンガ様！ 数ある候補地からこの地をお選びになるとは、何という慧眼！」

「デ、デミウルゴス……何やら気付いたか」

「人間の国の位置を知った直後、偵察を送られるのではなく遠方より自らの目で確かめたのは、ここまでお考えの上だったのですね」

「ま、まあ、そういうことだ」

——デミウルゴスの中ではどうなっているんだろう。温泉くらいでここまで喜ぶとは考えにくい……。後で、他の守護者がいる時に説明してもらおう。

考えられる限りの護衛を付けて現地へ飛んだモモンガは、すぐに全力の「クリエイト・フォートレス要塞創造」の魔法で巨大な漆黒の塔を作り出す。デミウルゴスの勧めもあつてギルド武器まで持ち出し強化したその巨塔の姿は、ナザリック地下大墳墓には遠く及ばないもののアインズ・ウール・ゴウンの前線基地として恥ずかしくないものだ。

このままでも使えるが、後にデミウルゴスと共に王国を支配するコキュートスがミノタウロスたちを使って周辺を整地し、周辺に建造物を築いていくことになった。先制攻撃と隠蔽で亜人社会からアンタツチャブルな存在のままのナザリックと違い、こちらはマールレの属する拠点として表舞台へ出していく。

モモンガはギルド武器を仕舞いにナザリックと塔を往復する。

——なんだか、思ったよりデカいな。

元の標高が高いとはいえ背後の山の稜線を突き抜ける巨塔の威容は遠めに見てもなかなかのもので、近隣どころか少し遠方のミノタウロスたちを大いに威圧しそうだ。

もちろん、この世界ではミノタウロスに限ってはコキュートスらが威圧しまくっている。あまり問題にはならない。

そもそも、亜人を相手にする際の拠点はコキユートスを置いてあるミノタウロスの王城で、王国の支配者として接することになっている。

ナザリツク地下大墳墓は、先ほどより『蒼の薔薇』の背後にいる者に友好的な「アイズ・ウール・ゴウン」の拠点となった。

ならばこの場所は、『蒼の薔薇』やスレイン法国と敵対するマーレと、その背後にいる存在——モモンガの拠点ということになる。

マーレのしもべたちをここへ迎えることがきつかけにはなつたが、『蒼の薔薇』の背後の者が接近を図ってきた以上、いずれやらねばならないことだ。

漆黒の塔の執務室に通されたクレマンティーヌは、酷く怯えていた。

イビルアイを奪われたのは、マーレとクレマンティーヌの両名の失態ということになつているからだ。

——現地人から見れば油断ならない危険な人物ということだが、怯えきつた野良猫の

ようになっていゝな。マールが脅かしすぎたのか？

モモンガは自身の骸骨の顔に触れ、仮面を外していることを思い出す。

外向きにはアインズ・ウール・ゴウンが嫉妬マスクの男となった以上、現地勢力に恐れられるマールの主人モモンガは素顔で良いような気がしたのだ。既に嫉妬マスクを見せたエンリに対しては、魔法で記憶を改変すれば良い。

マールの性教育セキキョウイクの問題については、エンリから聞いたのもう充分だ。このクレマンティーヌも黽られたとか犯されたとか大変な被害者ではあるようだが、元は敵対していた者だということが必要以上に甘い顔をする必要は無いだろう。

——シャルティアの所の眷族と同じようなものだよな。性教育が上手くいけば待遇もよくなるはずだけど……何か生々しいというか……。

エンリと違ってクレマンティーヌは戦利品なので、単なるマールの所有物と考えることに躊躇は少ない。

しかし、モモンとして会ったクレマンティーヌの姿との激しい落差と、戦士として不自然にも思えるほど露出度の高い格好は気がかりだ。

弱肉強食の論理に支配されたクレマンティーヌは、圧倒的強者の前では極めて卑屈であるらしい。女としてマールに仕えているように見えるエンリと違って、クレマンティーヌの扱いはエンリから聞く限りでも悲惨なものだ。

さらに、装備品もろくに力のあるものでもないのに、やたらと露出度が高い。プレイヤーが選ぶアバターではあるまいし、現実にも命を賭けて戦う女戦士が選んだものとは考えにくい。

その部分はエンリの話には無かったが、おそらくそういう部分もマーレの欲望をいつでも満たせるように強制されていたのだろう。だからこそ、次にマーレに囚われた弱者であるイビルアイを自分の次の慰みものと考え、あのような恰好を強いたのだ。

アンデッドとなったモモンガには性欲などは無いが、人間だった頃の感覚は残っている。露出度の高い恰好で怯えるクレマンティヌを見ると、まるで自分が悪いことをしているような気がしてしまう。——マーレは、そういうのが好みなのだろうか。

モモンガは小さく溜息をつく。喧嘩を売って捕らえられたという目の前の女に甘い顔をするつもりはないが、やはりこれでは子供への悪影響は否めないように思う。

少し話をしてから考えようにも、こう縮こまっていられたらどうにもならない。

——失敗したな。次から別の仮面を被ろう。嫉妬マスクのデザインも十二年間で随分と変わったしな。

アンデッドになつて性欲などは消えたのに、全マスクをコンプリートしたことを思い出す時の何とも言えない気持ちだけは健在なのがモモンガには少し不満だ。

それはともかく、いちいち記憶を消して話をやりなおすのは面倒なので、ここは優し

く声をかけてみる。

「別に取って食おうというわけではないのだ。そこから外の景色でも見て落ち着くがよい」

土下座の姿勢で床にへばりついているクレマンティーヌに、その後ろにある窓を指し示す。

「ここはなかなか見晴らしの良い場所だな。この拠点は作ったばかりなのだが、なかなか気に入っている」

クレマンティーヌはゆらりと立ち上がり、一瞬顔を上げて紫の瞳をびくつかせると、一礼して窓へ振り向く。

——そういえば、湖が見えて綺麗なのはこっちの窓だったか。まあ山の景色でも心を落ち着けるには充分か。

「作ッたつて……こんな……」

「ああ。魔法で作った塔だから、小さいだろう」

まるで逃げ道を求めるかのように、窓枠に手をかけ遠くを眺めるクレマンティーヌ。

優しく声をかけているつもりだが、耳が言葉をとらえるたびにびくりびくりと身体を震わせる。

外を眺めたまま、深呼吸。

そしてクレマンティーヌは何か気付いたかのようにこちらを振り返り、跪く。

「こ、このようなものを作っては、周辺から攻撃されるのではありませんか？」

「撃退すればよからう。既にミノタウロスの王国は我々の支配下にある」

「では、帝国も併呑するのでしょうか」

モモンガは、怯えの光が籠もっていたクレマンティーヌの瞳に別の色が灯ったような気がした。

——て、帝国って、竜王国に援軍を送ってきた人間の国の一つで、中枢の人間にマーレが会っていたはずだが……。どういうことだ？

よくわからないが、マーレのしもべに対し主の主として弱みを見せるわけにはいかな
い場面だ。

「いずれ、そういうこともあるかもしれないな」

「て、帝国を圧迫するのであれば、私でも何か役に立てることがあると思います。失態を
取り返したく……」

いきなり圧迫とか言われても困るのだが、とりあえず話を合わせる。

「ふむ……それで、お前は何ができるのかね」

クレマンティーヌの話によれば、西の窓からは国境の山々を越え、帝国の穀倉地帯が
一望できるとのこと。

逆に、この塔も人間の領域であるバハルス帝国側からは丸見えなのだ。

これまでは厚い山脈に隔てられていたが、突如山並みから顔を出した人工物の衝撃は大きい。放つておいても帝国は驚き戸惑い、偵察や何らかの行動に出る可能性が非常に高い。

つまり、クレマンティーンの言う「周辺」には、山の向こうのバハルス帝国も含まれていたのだ。

そして、帝国から元漆黒聖典としての実績を買われて誘われているクレマンティーンなら、マーレと通じているフルーダの口添えもあれば帝国の中枢に入り込むのも難しくはない。もちろん、竜王国に駐留する援軍を連れ帰る際にすべきことがあれば、何でもするということだ。

——あー、せつかくだから少しでも立派なものを作ろうとギルド武器まで持ち出したのがまずかったか。でもなあ……喜んでいたデミウルゴスもこのことも織り込み済みだろうし、今さら他へ作り直すとか、言えないし。

何より、今さらデミウルゴスの前で温泉と景色が目当てだったなどと言えるわけがない。

それどころか、この立地に賛同したデミウルゴスの意図を聞かないままでは帝国への対処にも迷うところだ。

「そうだな。名目上でも援軍の指揮官だったか。それならば最後まですべきことをしなければなるまい」

「戦略的なことはあとでデミウルゴスに相談するまで棚上げだ。

そうなると、モモンガに残された懸案は、マールのこと。すなわち、性教育上の問題。マールが始めたことを後押しする形ならば、一時的にクレマンティーヌを引き離しても、所有物を取り上げたことにはならないような気がするのだ。

「——そして、帝都へ戻ったらそのまま帝国へ潜り込んでおけ。帝国の処分は、追って知らせよう」

「か、畏まりましたっ！」

床に打ち付けるんじゃないかという勢いで頭を下げるクレマンティーヌ。少し嬉しそうなの、ほっとしたような雰囲気もあるので、やはりマールの性欲を受け止めるのは大変なことだったのかもしれない。モモンガは自分の判断が正しかったと考える。

退出を促しかけたところで、モモンガはクレマンティーヌの服装の件にも一歩踏み込む。

「……潜入の間の服装だが、援軍を率いていたときのような白い落ち着いたもので通したまえ」

「そ、それは……」

びくりと肩を震わせるクレマンティーヌの表情には、明らかに困惑の色が見える。

——よほどマールレから強く言われているのか。まあ、あの酷い拷問が効いてるんだろうけど。

モモンガはこの女に気を遣うつもりはないが、これはマールレのためだ。マールレの保護者として、お節介をしなければならぬ。

「任務に必要な恰好をするだけのことだ。マールレの主である私が命じるのだから、問題なからう?」

「は……はい」

帝国との関わりで『漆黒』の一員としてマールレが出ていくこともありうるので、《そういう》位置づけだった女に露出度の高い恰好を続けられたら教育上困るのだ。

もちろん、マールレからこの女を後宮的に奪うというわけではない。いずれは第三階層におけるヴァンパイア・ブライドたちのような扱いになるのもやむなしとは思っているが、性教育を考える少しのあいだだけでも格好を改めてもらうつもりだ。帝国への潜入などは、方便でしかなかった。

部屋を出ていくクレマンティーヌは少し肩を落として元気がないように見えたが、早熟なマールレの性のはけ口という役割から解放されて脱力しているのかもしれない。まともな服に着替えればきつと元気になるはずだ。

それで、元気にならないというのなら――。

――爆発すればいいのにな。あんな子供の頃から……ちくしょう。

しかし、口に出すことはできない。子供相手に嫉妬心を露わにするのは恥ずかしいし、ナザリツクの守護者の忠誠心では理由も聞かずに本当に自爆しかねないからだ。

――とにかく、性教育だな。上司と部下より、もう少し近い距離で話せる場を作ればいいのだが。

次に仮面を付けて会ったンファイレアからは、しつかりと情報の裏付けを取ることができた。やはり人間相手は仮面を被った方が無難なのだろう。もちろん、アインズ・ウール・ゴウンの名を使った時とは最もデザインの違う嫉妬マスクだ。

『漆黒』について色々と聞くと、これまでマーレやエンリから聞いた部分以外に、エンリとクレマンティーヌはなるべく引き離れた方が良いという話になる。

もちろん、その理由までは口にしなのだが、それは仕方のないことだ。ンファイレアはどう見てもモモンガと同類で、異性経験は皆無のように見える。そんなンファイレアから見てもマーレは小さな子供に過ぎず、そんな子供の性的な行動をわざわざ咎めるのはまるで嫉妬しているようで格好悪いような気がするだろう。

だから、モモンガはこれに共感し、勇気づけられ、そして勝手にこういう思いを正当化する。

このンフィーレアは、一步引いた冷静な立場からマールをめぐる三角関係を心配してくれた。そういうことになる。

——いくら子供でも、ハーレムってのはよくないよな。

モモンガとしては、格好悪い感情はあくまでマールの健全な成長を願うことだという大義名分の後ろに隠しておきたい。だから、意見の近いンフィーレアからは勇気をもらった形だ。

「エンリは、長く厳しい世界で生きてきたクレマンティヌと違って普通の感覚を持った女の子なんです。だから——」

そんな、友人を大切に思う気持ちがあるがモモンガには心地よい。

「うむ。クレマンティヌにはしばらく別の仕事があるので、安心してほしい」

「そうなんですか！ あ、ありがとうございます」

モモンガの判断は、間違っていないなかつたのだろう。

目の前の男も、仲間としてマールのことを心配してくれている。エンリの方がマールに良いだろうと考えてくれているのだ。

エンリもマールに色々なことを強いられて歪んだ部分があるかもしれないが、一度に

何もかも切り離すわけにはいかない。今はそのままが良いのだろう。

その後は、ポーシヨンの話になる。

マーレがこの男の身内に何となくポーシヨンを見せてしまったのは、ユグドラシルとの繋がりを示す失態だったのだろう。

モモンガは最下級のポーシヨンへの強い情熱に若干戸惑いながらも、その情熱を見て安心することができた。

実のところ、当初エンリに話を聞いた時は誰も彼もマーレとそういう関係であるように言われていたことで、そこで話に出なかつたこの男のことも疑っていたのだ。

マーレは見た目は可憐な少女であるが、中身はケダモノの如く容赦も節操も無い。それでも、モモンガとて一人の男である。どんな事情であっても、友人から預かっている可愛い子供に手を出すのが男であれば絶対に容赦はしないつもりだった。成長して恋愛適齢期に相手を見つuckerのは——少し寂しいが——仕方ないにしても、小さい子供のうちは守らなければならないのだ。

ンファイレアは知らないあいだに拾った命を慈しむかのように、貰ったポーシヨンを大事そうに抱え込んで忠誠を誓った。

スレイン法国の巫女姫については、法国の情報源として治療を試みることにした。強

力な癒し手であるメイド長のペストーニヤに預け、額冠を外した後の発狂に対処させる。

表向きは、クレマンティヌが詳しくない神殿側の事情を知るためで、それはスレイ
ン法国全体の考え方を知ることにも繋がってくる。そういう建前ではあるが――。

――忠誠心を利用して玩具を取り上げる形になるのが可哀想だが……いずれ大人になつたらわかつてくれるだろう。

あくまでモモンガは、マーレの健全な成長を第一に考えていた。

良かれと思って少しだけ設定を弄つたら、人格など変えていないはずなのに家を出て、悪いことを覚えてきてしまった。

だから、マーレの気持ちを尊重しながらも、少しずつ良い方向へ修正していかなければならない。

そんな大切な仲間の子供のような存在を慈しむ気持ちは、この世界の存在へ向ける些細な情とは比べ物にならない。

モモンガにとっては、ギルド『アインズ・ウール・ゴウン』こそが、かつての仲間たちと、仲間たちの残したものこそが全てなのだから。

戦勝に浮かれる竜王国の中枢では、いつもの二人が眉間にしわを寄せてスレイン法国からの親書を広げていた。

『先般の貴国による“大侵攻”の完全なる撃退について、スレイン法国は人類の守り手としてこれを歓迎する。』

しかしながら、禍々しき破滅の竜王の力によつてこれをなした竜王国に対し、同じ力によつて神都を引き裂かれて間もない法国として、現時点で派遣しうる援軍は存在しない。

願わくは、再び強大な力が貴国を、そして人類を護られるために振るわれんことを『こんなものが戦勝祝賀の親書と言えるのか』

「援助ではありませんが、祝儀として少なからぬ金銭も送ってきましたから、そうなんですよな」

法国の不興を買うことは予測の範囲内だが、こうまで明確に切り捨てられてしまうと
は思わない。

——この街で神都みたいな事が起こったら——

クレマンティーヌの脅しの言葉はあったが、あの『漆黒』にそのような力があるなどと、正面から信じていたわけではない。別のアダマンタイト級冒険者チームを一蹴したという話だけでも^{すが}縋るには充分なのであって、それ以上の力の有無など考えても意味がなかったからだ。

だが、ビーストマンの軍勢は、現実にもそのようにして壊滅した。

そして、東の渓谷の大地に残された傷痕は驚くべき規模で広がっており、その跡地は伝え聞くスレイン法国神都の被害地域の状況と変わらない。当然、それはスレイン法国の諜報員も確認しているはずだ。

「しかし、これではまるで絶縁状と手切れ金のような……」

「実際に、そうなんでしょうな」

「ええい、これでは次があつたら終わりではないか！ 帝国の援軍は呼び戻せないのか？」

「敵もあれだけの数が壊滅したんですから、普通に考えればしばらくは来ないと思えますがね。でも、どうも嫌な予感がしていたんで、実は私の方から駐留の延長をお願いして、きつぱり断られた後だつたりします」

この大臣はするべきことをする男だ。いつの間にかクロウゼットの中身を足丸出しの服だけに入れ替えるなど小賢しいところもあるが、先回りしての行動には信頼できる

部分もある。

「帝国軍はともかく、あの『漆黒』やクレマンティーヌの方なら、金を積めば動くんじゃないか？」

「それが、断つて撤退を急がせたのがそのクレマンティーヌなんですよ。あと、『漆黒』の他の者たちはあの日の翌朝から行方がわかりません」

「な、何だと!」

「だから、嫌な感じがするんです。『クリスタルティア』も『ザ・ダークウオリアー』も戻りませんし、せつかく風の噂で少女性愛者だとわかった『漆黒』のエンリまで消えてしまった。せつかくの幼い玉体を差し出す相手が誰も居ないのでは、いざというときどうにもなりませんよ」

「そうやって私の身体を切り札みたいに言うな!」

「しっかり人の身体が使えるかどうかまで調べている。そんな小賢しいところが気に入らないのだが。」

「良いではありませんか。百万の国民を磨り潰して戦うようならくでもない自爆の切り札ではない現実にも目を向けるより、誰も死なない分よほど健全です」

「こう言えば何でも許されると思っている。もはや不敬を通り越して、身も蓋もない。」

女王はぶいと顔を背け、部屋へ戻る。大臣と顔を突き合わせていても、状況は何も変

わらないのだ。

この二人のもとへ東の渓谷から流れる川の異変が伝えられるのは、数週ほど後のことだ。

その後まもなく、渓谷は以前のものより幾分みすばらしい恰好のビーストマンの軍勢で埋め尽くされることになる。

——いない。いるはずがない。

モモンガは魔法陣を展開しながら、周囲を警戒する。

ビーストマンの国の首都に、プレイヤーはいない。既に綿密な調査が済んでいるし、派手な収奪に軍事行動を起こして何のリアクションも無かったのだから、当たり前のことだ。

それでも、無防備となる超位魔法の発動に際しては周囲に注意を払わずにはいられない。護衛もこれまでになく多数だが、それでも相当に数を抑えている。本来の作戦より

も人数をかけてしまつては本末転倒だからだ。

——急ぐものでもないし、困らなつておくか。

大規模戦であれば、敵の超位魔法には即座の反撃が基本だ。モモンガは今回そのような戦闘を想定していないが、ビーストマンの街にプレイヤーがいればそうは思わないに違いない。

もちろん、モモンガは魔法陣を展開したままになる長い発動時間を短縮する手段も備えている。だが、それも限りある課金アイテムによるもので、もはや補充も不可能なものだ。

ここは、超位魔法を知るようなユグドラシルの存在が出てくればそれも良しと考え、面倒でもじつくりと発動を待つほかない。

それでも、この魔法によつてナザリックの総力をかけなければならぬ作戦の手間がそれなりに圧縮できるはずなのだ。

そして、ゲーム中では大規模とはいへ数値の変化をもたらすだけだった魔法だが、名前だけは結構立派なものなのだ。ゲームが現実となつたこの世界では果たしてどのような結果を出すことになるのか——。

「楽しみだ。ああ、楽しみだ」

ユグドラシルの頃は、この魔法は超位にしては地味と言われ、取得者がほとんど居な

かった。ロールプレイ重視で浪漫溢れるキャラ作成ビルドにこだわったモモンガだからこそ習得し、さらにその存在を覚えているのだ。普通のプレイヤーであれば、何かの間違いで習得しても、システムウィンドウで習得魔法を確認できないこの世界では存在自体を忘れてしまっているかもしれない。その程度のものだ。

効果は未知数だが、必要な効果が出なければ、あらためて予定していた作戦行動を規模を縮小して実行し、それを補えば良い。

一つの国が存亡の危機に陥り、結果として多くの生命が失われるだろうというのに、モモンガは何の憐憫も感じない。

この世界は、弱肉強食なのだ。

特にビーストマンという種族については、モモンガはそれを強く認識している。自分——ひいてはナザリック地下大墳墓の利益になるのならば、細かいことを考える必要は無い。この世界で最初に出会った牧場のありようなどが頭にちらつくと、モモンガはそれ以上を考えたくもなくなる。

——せめて、アルベドやデミウルゴスを軽く驚かすくらいの効果があればいいか。

最近は二人の提案を丸呑みにするようなことも増えている。

マール帰還後に智者二人が想定していた大規模な作戦を後押しして、少しでも結果を出すことができれば、支配者としての責任も果たせるというものだ。

このあたりは見晴らしが良く、遠目に魔法陣を見て逃げる者も少なからず出てきている。

モモンガを囲う不死の軍勢は必ずしも大軍ではないが、その姿があるといっても無駄に挑みかかってくる者が全くいないのは意外なことだ。

むしろ、逃亡者が増えすぎかもしれない。ビーストマンの視力が優れているのはわかるが、たかが中級アンデッドでおびえすぎではなからうか。

あまりビーストマンを散らしてしまわないよう、魔法を撃つたら即座に撤収した方が良いかもれない。

——死の騎士^{デス・ナイト}だけじゃ絵面が地味だから三十体くらい魂喰^{ソウルイーター}らいに乗っけただけなのに……。

こんなものは、近場のビーストマンが無闇に襲ってきて無駄死にしなければいいかな、という程度の気分で持ってきた間に合わせの肉盾だ。騎獣の方が強いというチグハグさから、そのうちミノタウロスの王国で荷車でも引かせようかと思う程度の存在ではない。

それなのに、視認できた者はほとんど逃走しているのではないかと思えるような過敏な反応だ。モモンガは少々面食らいつつ、大きい目の集団は確保^{ティム}しておくようアウラに指示を与えておく。

「よし、そろそろかな」

もはやモモンガの意識の中に現実のビーストマンたちの姿は無い。ゲーマーがアツプデート後の新要素を期待するかのように、モモンガはこの世界に来て初めて見る超位魔法のエフェクトを素直に楽しみにしていた。この国の数十万の亜人の命運など、まともを考えてはいなかった。

そして——ようやく超位魔法が発動する。

《デイズスター・オブ・アバドンスローカスト黙示録の蝗害》

空が、二つに割れた。

その裂け目から漏れ出るのは、赤茶色の雲のようなもの。

それはまたたく間に広がり、空の全てを覆い尽くしていく。

降り注いでいた陽光は僅かに赤く、そして次第に薄暗くなり、この国の首都は夕暮れよりも暗い正午を迎えることになった。

それは、実際には雲などではない。数億、いや数百億はあるのだろうか。雲のように群れる赤茶色の粒子はその一つ一つが蠢き、黒の斑点のある黄色と、半透明の赤の二組

の翅をせわしなく震わせて自らの力で飛行していた。

赤茶色のものたちは、出陣の用意のととのえられた馬のように黒ずんだ鎧あぶみを背負い、頭には兜のような真鍮色の輝きを持つ——飛蝗トビハッタの群れだ。その翅の音は馬に引かれ戦場に急ぐ戦車の響きにも似ていて、うなるような羽音の群れが空から街を押し潰していく。

彼らは地上へ降り立ち、一昼夜の間、あらゆるものを貪り続けた。

災いが過ぎ去るまで、ビーストマンたちはただ混乱し、嘆き、あるいは怯えて暮らした。

それが過ぎ去ってしまったえば、晴れやかな日差しが戻り、何もかもあつさりと元通りになったかのように見える。

しかし、そこにいたビーストマン十数万。

それらが生きていくための物資は、飛蝗トビハッタより大きい家畜を除いて全て——失われた。

五三 始原の魔法

予定されていた二度目の物資収奪作戦は、苛烈を極めるものだった。残された多くの非戦闘員を含むビーストマンたちに再び人間の領域へ侵攻してもらうため、デミウルゴスにお任せ気味で出来上がりつつあったそれを前に、モモンガは少しだけ躊躇していた。

——やりすぎると、気力が削がれて何もできなくなってしまうのではないか。

モモンガの居た世界では、全てを失った者は暴れるより無気力に陥ることの方が多かった。世界が違うとはいえ、徹底的な収奪によって相手を動かすことができるのか、疑問に思わざるを得ない。

そして、この世界の存在について、モモンガはもちろん、デミウルゴスであっても完璧に把握しているとまでは思えない。

そこで、モモンガは一度この世界の存在から意見を聞いてみることにした。

動かすべきビーストマンは、雌など非戦闘員の割合が多い。そのため、性的にいづらか問題があっても女で穏やかな雰囲気を持つエンリを話の相手を選んだ。もちろん、ビーストマンにとっての人間は、人間にとっての野生の熊や大猪など、肉も怪我人も生

み出す動物に置き換えなければならないが。

「人間の場合、たとえ困窮したとして、女子供まで危険な狩りに出ることはあるのか？」
「まず森の周辺や草原で、普段食べないけれど食べられるものを探すと思います。干ばつとか天変地異でそういうものも無くなつて、薬草みたいなお金になるものも取れなければ、そうすると思います」

この世界に生きるエンリが口にした天変地異——その言葉で、モモンガは魔法の使用を閃いた。その中で最も即効性があるのが、超位魔法・《デレザスター・オブ・アバドンスローガストの蝗害による》による蝗害だ。

この魔法は、拠点の物資を喰いつくす膨大な飛蝗トレバツダの群れを召喚するというものだ。ゲーム中では一時的に拠点の維持費を著しく増大させ、維持費不足で諸機能を麻痺させるという、超位魔法にしては非常に地味な効果を持つ。

もちろん、プレイヤーが多くの余剰資金を気軽に注ぎ込める中位以上のギルドでは、ゲーム内で通常の都市の物資が無くなる程度の被害ではたいした痛手ではない。それでもその損害額に比べて低コストな傭兵やNPCなどに使用させて使い捨てにすればゲームバランスが大きく崩れかねないことから、原則としてプレイヤーしか使えず発動にも時間がかかる超位魔法とされていたのだろう。

つまり、一見すればギルド間での嫌がらせ程度にしかならない使いどころに困る魔法

でしかない。モモンガがこれを習得したのも、いわゆる黙示録にある世界の終末の天変地異をモデルにした魔法という浪漫に惹かれて、ロールプレイ的な意図で選んだようなものだ。

それでも、今回は物資を喰いつくすという効果が文字通りに発揮されれば、ビーストマンを減らさず食料や物資だけを奪う天変地異としてはこれ以上ないほどの最適なものになる。

また、エンリの言っていた薬草のように、ビーストマンの社会で交換価値があるものが貯蔵されていたり収穫可能な状況にある集団は戦いに出ない可能性もあるし、食べられる野草のような代用品などモモンガや部下たちの理解の範疇に無いものもあるかもしれない。それらを全て判別して、一つ一つの集落を襲撃して奪っていくのは容易ではないが、この魔法ならばそういうものにもある程度被害を与えることができそうだ。

そして、世界に放たれたディサスター・オブ・アバドンスロウキャスト《黙示録の蝗害》は、この地のビーストマンのあらゆる希望を奪い去る。

首都の全てを奪い尽くした後は、四方の街や集落へ襲い掛かり、広く猛威を振るう。ビーストマンたちもその動きを見て、周辺ではどこへ行っても物資は無いということ

理解する。

ビーストマンたちは、もはや餌を失った家畜を使い捨ての糧食として携え、存在自体が食糧庫そのものである人間の国を襲撃するしかない。大敗を喫したばかりとはいえず物資が目的なら最も安全な相手には違いないし、この状況で他の亜人の国を攻めても、前線から物資を引き上げて守られるだけで野垂れ死にが確定だからだ。

一国の食料を奪いつくすまでに要した時間は――。

「私もモモンガ様の密命を受けていたからよくわからないのだけれど、おそらく正味五日ぐらいね」

同僚の口から信じがたい話を聞いて、デミウルゴスは目を見開く。

密命といっても最愛の主人から初めて貰った大量の花束にはしやぎ、モモンガの生活空間を中心に丁寧に飾り付けていただけなのだが、アルベドの崇高な任務を果たし終えたような満ち足りた表情からはデミウルゴスでも真実を読み取ることはできない。

デミウルゴスの準備していた作戦では、最低でも一か月ぐらいの時間と、首都における暴動が見込まれていた。時間がかかれば逃亡するビーストマンも増え、暴動となつてもその分だけ戦力が減ってしまう。

ビーストマンから徹底的に物資を収奪しつつも、完全に絶望させない程度にそれを行い、人間の国を攻める程度の気力は残しておかねばならない。

収奪自体も困難だ。先の出兵でビーストマンが激減したため、首都以外では食料にはむしろ余裕がある。首都のみならず郊外の隅々まで徹底して奪いつくさなければ、残された雌のビーストマンを中心とした軍事行動には繋がらないだろう。

かといって、派手な見せしめなども使えない。アウラのティムやその他の手段で中心となる部隊を形成するとしても、ビーストマンを完全に心が折れた集団にしてしまえば大軍での侵攻は不可能だ。

そういった困難を考えれば、一か月でも性急に過ぎるか検討を重ねていたところだった。それを――。

「五日ですか？ いったい、そのようなことがどうやって……」
「ちなみに死者は出なかったそうよ」

もはや開いた口がふさがらない。絶対なる支配者に対しての畏敬の念に包まれ、デミウルゴスはその場でただ震えていた。

「流星は、流星はモモンガ様……。やはり、私などの及ぶところではありませんね。本当に素晴らしい。――これで、万全に万全を尽くし、全力で事に当たることが出来ます」
「ただ、それ以外の被害が避けられないことになっていてね――」

相手は空を飛んで移動する生き物だ。蝗害の広がりには国境など関係ない。

アルベドのまとめた被害想定はミノタウロスの王国だけでも甚大なものだ。

「それで、モモンガ様は蝗害の広がりについて、あなたに対応を聞いているのだけれど」

アルベドが先ほどより優越感の上乗せされた穏やかな笑顔を浮かべ、問う。

「そ、それは——もちろん、最低限の対処に留めますよ。モモンガ様の魔法ならば、次の策への布石であるに決まっています。しかし、そんなことを私に聞くというのはどうい
う……」

デミウルゴスとしては主人の意図が何より気になるところだが、当のモモンガはデミウルゴスと顔を合わせるのを避けているかのように不在がちだ。

「あなたを信頼しているからよ。つまり……あなたの作戦に手を加えてしまったことで、あなたの能力を疑っているかのように思われたくないでしょう。ならば、ここで次への布石について理解を共有することで、あなたが遠慮なく次の作戦を立てられるようにしたかったのだと私は思うわ」

「それは……信頼に応えなければなりませんね」

「ええ」

アルベドが示したのは、納得がいく答えだ。デミウルゴスは主人の優しさに心を打たれ、さらなる忠勤を誓う。

至らない部下の成長を願って、あえて安易に答えを与えないということなのだろう。こうして、かつて竜王国で実施しかけた作戦は、万全な形で再開されることになる。

この作戦はアインズ・ウール・ゴウンとしては二度目だが、マーレのもたらした情報によつてその内容は大きく変わっている。

前を行くビーストマンの大軍勢の方も以前に比べればだいぶ見すばらしくなっているが、そちらは脆弱な人間の国家から見れば誤差の範囲だ。亜人の視点であれば小国規模の食い詰め難民でしかない者たちでも、竜王国にとつては普通に攻め込まれば国が十回滅んでもおつりがくるほどの終末的脅威ということになる。

大きく変わったのは、その後ろだ。

以前と同様、アウラが率いるビーストマンの軍勢の後ろにはナザリック側の手勢を混ぜることになるが、ユグドラシル的発想で巨大爆発の属性を知るためただ多様な耐性を持つモンスターを配置した程度で挑んだ前回とはまるで違う手の込んだ陣容になって

いる。

まず、耐性ばかりに頼ることはしない。マーレが試せなかった耐性を試しはするが、耐性があるから大丈夫という考え方は一切とらない。

当然、一〇〇レベルの守護者たちも例外ではなく、NPCは全て後方に下げておかなければならない。仲間の課金ガチャで出たマーレのドラゴンのように、二度と獲得できないシモベも同様だ。

同様に、どんな攻撃も一撃は耐えるような特殊技術スキルも完全に無効か、あるいはダメージ機会が一回ではないのかもしれないものデス・ナイトと考える。マーレの話通りなら死の騎士でも駄目だということだ。

そして、効果範囲もゲーム的ではないものスキルと考える。マーレによれば、範囲内の全ての岩や鉄が溶けていたわけではなく、熱線か爆風を遮断された場所では草さえ焼けていなかったという。

そうになると、高温に耐えうるような防具や、実際に熱線や爆風を遮断しうるような性質のものに期待をするべきかもしれない。

そういう考えに基づいて、宝物庫の中の様々なアイテムが運び出された。図書室のユグドラシル関連資料も参照され、超高温で鍛えたかのような設定を持つ防具であれば遺産級レガシーに満たない凡庸な——それでもこの世界の国宝級をも凌駕するが——ものでも

持ち出された。

多くはギルドメンバーが適当に放り込んでいた遺産級^{レガシー}、聖遺物級^{レリック}が中心だが、メンバーの引退などで次の使用者の見込めない伝説級^{レジェンド}と神話級^{ゴッズ}の一部までもが含まれている。

装備には使用者が必要で、使用制限を考慮すればアンデッドや人間型モンスターだけで賄えるとも限らず、時には現地で調達した人間や亜人も含めて準備しなければならぬ。そういう部分で手間もかかるため、ビーストマンを困窮させる作戦との同時進行には幾らかの困難も予想されていたが――。

「モモンガ様の素晴らしい魔法のおかげで、ビーストマンの数を確保するための物資狩りの手間が全くと言っていいほど無くなりました。全ての手間をこちらにかけられるので、ぬかりはありません」

さらに、護衛に付けられる戦力が多いほど、より多くのアイテムを試すことができる。ギルドの貴重な資産を持ち出す以上、ギルドの総力を尽くして守れる状況こそが効果的な調査を可能にするのだ。

デミウルゴスは、モモンガの超位魔法によってビーストマンの物資を奪う作戦の必要が無くなると、すぐに調査の規模拡大を提案した。元々、人員に余裕があれば試みたいことは多かったからだ。

慎重なモモンガも、八欲王を脅かしたという竜王の始原の魔法を丸裸とすることこそがアインズ・ウール・ゴウンの防衛にとつて最重要だということは理解している。まして、その手の者がマーレと敵対していて、さらにナザリツク地下大墳墓の場所を把握して接触を試みてきたという時点で、始原の魔法は具体的に差し迫った危険だと考えなければならぬ。

そんな状況で、自分からは決して言い出そうと思えないほどの規模でのアイテム持ち出しの提案が「超位魔法を行使したモモンガ様の真意」として自分の替わりに説明させた流れで出てきてしまえば、許可せざるをえなくなってしまう。

そこで予想以上に広がりつつある蝗害への対策を助言してもらえなかったのが非常に不本意だが、そのデミウルゴスは後でどうかしてくれそうな余裕のある態度を見せていたので今は考えないことにする。

——ここで襲われたら本当に不味いよな。課金アイテムで超位ぶっぱなしして逃げるにしても、アイテムの移動はシャルティアの転移門^{ゲイ}まで計算に入れていいのかなあ……。

ゲーム時代の様々なギルドの襲撃を、NPCの多くが護るとはいえプレイヤーが自分一人の状態に対応するのだ。考えれば考えるほど行き詰まってしまう。

もちろん、これまでこの世界で色々なことをするあいだ、他のプレイヤーによる干渉

が無かったことが今回の作戦の前提であつて、それでも完璧な襲撃対策は済ませてある。予定外の事情で隠密行動が得意な高レベルのシモベたちの何割かを別の仕事に割かなければならなくなったが、渓谷という有利な地理的条件や、滅びることになるピーストマンの国の側で人目を気にしなくても良いという状況では対策も容易だ。——大丈夫なはずなのだ。

その上で、最悪の最悪を考えて——完璧な対策はできないにしても最善の行動を模索するのが、ギルドマスターの仕事なのだともモンガは考えている。

そうやって目に見えない、存在さえ確認できていない敵に警戒する一方、竜王国側の情報収集は完璧だ。

戦力も全て把握できており、さらに今回はスレイン法国やその他の国からの援軍が無いことも確定している。

そのため、ほとんどがピーストマンの民間人で占められる今回の軍勢であっても、普通に戦えば竜王国を数回滅ぼせるだけの戦力となつていて、竜王国の切り札が使われるのは間違いない状況だ。その意思決定の過程さえも、潜入したシモベから克明に伝えられていく。

ピーストマンの前衛が竜王国軍と交戦に入ると、連絡を受けた王城ではすぐに「儀式

“の準備が始まる。

“儀式”の対象とするのに有効な効果範囲が決まっているのだろうか。王都の門は固く閉ざされ、残された兵士の殆どが城壁周りを巡回する。

前線の戦いは凄惨でありながらも緩慢に進む。防戦一方の竜王国軍が長槍兵で数十人ごとに密集隊形を作れば、飢えたビーストマンは力押しで無秩序に襲い掛かり、それでも数と基礎能力の差で人間の守りを食い破っていく。しかし、戦闘中でも仕留めた人間を担いで前線から下がる者が続出してしまふ。

密集隊形を崩された隊には後から来るビーストマンが次々と襲い掛かるが、後続の隊が槍を構えて突撃し、喰われている人間ごとビーストマンを貫いていく。崩壊した隊の兵士はあらかじめ決められていたように、すぐに地に伏して槍先をかわしている。

竜王国軍の狙いは見たままの消耗戦ではなく、この場でしのぎながらビーストマンの長大な隊列を圧縮し、巨大爆発の範囲に誘い込むことなのだろう。そして、その策は奇跡的に成功を収めつつある。それは戦闘を注視するモモンガからアインズ・ウール・ゴウンの側から見ても驚きだった。

なぜなら、竜王国軍の戦術は、王城の側では失敗することを前提にしていたからだ。軍事行動に失敗して滅びの淵に立たされることで、ようやく百万の魂を磨り潰す行為が正当化されるのだ。

ここで選ばれた戦術も、当然ながら成功を想定したものではない。本当の目的は、ビーストマンが食事にありつくたびに攻撃を加えることで、その怒りを増幅することだ。これまで幾つかの村や集落を滅ぼされたときにわかつていることだが、そういうストレスを加えると彼らは食欲が増して、必ず行軍の途中で人肉による大宴会を行うことになる。それを想定して、今回も喰われるべき兵士たちの手で薪を積み、彼らに野営をさせるべき場所も準備してあるのだ。

そんな状況でも、竜王国軍は持ちこたえた。持ちこたえてしまった。

アインズ・ウール・ゴウンの側としても、始原の魔法を使ってもらわなければ困るため、それを撃つ側にとって理想的な状況を作りたいと考えていた。軍を動かしていたアウラも脆弱な人間たちを見下していたため、能力でも勝るビーストマン側がまともな攻撃を仕掛ければ即座に総崩れになってしまうと考え、あえて半端な状態で当たらせていた。

そのことがビーストマンの側に散発的で無秩序な攻撃を続けさせ、竜王国軍の予想外の健闘に繋がった。現状の戦力差を考えれば何も状況は変わらないはずなのだが、竜王国軍にとって数に勝るビーストマンを相手に戦線を維持できたことは国軍始まって以来の奇跡であり、そのことがますます兵士たちの戦意を高揚させる。

興奮はすぐに全軍に伝わり、伝わるうちに増幅される。

普通に戦っても撃退できるのではないか。

戦場全体を俯瞰できる者など殆ど居ない状況で、そんな希望が広がることを止めるのは難しい。そして――。

「竜王国軍が反乱……だと?」

優勢な戦況を伝えるという名目で首都へ戻った部隊はごく僅かだが、またたくまに首都の守備隊の一部を吸収して王城へ迫り、門前で「戦略上の重大な方針の変更」を強く求めているという。残りの守備隊は中立を保ち、首都の民を城壁の内部に閉じ込め続けている。

膨大な準備を要した作戦の全ての前提が崩れかねない報告にあたって、なぜデミウルゴスは薄い笑みを浮かべているのか。

「ええ。私も彼らのあまりの愚かしさにいささか驚いておりますが、その愚かさまでも読み切ったモモンガ様のご用意された布石の一つが活きる状況でございます。いかが致しましょうか」

「……thc。」

——そのモモンガ様とかいう奴をちよつと連れてきてくれないかな。

思わず疑問の声をあげてしまったモモンガだが、空っぽの眼窩を覗き込むように見つめてくるデミウルゴスの視線がつらくなってくる。何しろ、眼窩だけでなくその先も空っぽなのだ。

いや、脳の有無など関係なく、何が布石なのかもわからないのに、指示などできるわけがない。

しかし、こんなときは心を落ち着けて、いつも通りにやればいいだけだ。

「……いや、そこまでわかっていて、私に次の行動の伺いを立てる必要はあるのかね？」
「も、申し訳ございません。すぐに——」

「よい。この作戦の重要性を考えれば、デミウルゴスが慎重になるのは正しい。そして、私もその正しさに付き合うことにしよう」

「モモンガ様……」

「では、デミウルゴスがどこまで理解しているか、このあと皆の前で説明してみるがよい」

竜王国における反乱は、すぐに終結した。

女王の危機に舞い戻った一人の男によって、王城はあつけなく落ち着きを取り戻すこ

とになる。

「我こそは女王の護り手セラブレイト。……我が不落要塞ふらくようさい、抜かせはせんぞつ！」

この男に全く話を通じなかつたことをそれほど疑問に思う者は居ない。この日の様子が少しおかしいと思つても、それは男が想いを寄せる女王にとって重大な局面だからでしかないと片付けられてしまうのだ。

そして、反乱軍にあつてもピーストマンの一軍を食い止めた男の名声を知らぬ者はいない。反乱の勢いは一気に萎み——戦場から戻つた首謀者たちだけが、何かの衝動に突き動かされたかのように一斉にセラブレイトに襲いかかつて、全て躊躇なく斬り殺された。

このセラブレイトに違和感を覚えたのは、謁見してねぎらつた女王だけだった。

「これだけの危機を救われたのですから、彼に報いてさしあげる日も近くなつてしまいましたね。タイミングが良すぎる気もしますが……」

「それが、おかしいのだ。視線に欲望を感じないというか……。さすがのあやつも、人を斬つて汚れ役をやるのは辛かつたということなのだろうか」

城門前は石畳の広い範囲が血肉にまみれ、目をそむけたくなるような惨状だった。見せしめとしても徹底しすぎていて、そこには悲惨な選択肢を選ばざるを得なかつた女王

自身とこの国の状況への怒りが込められているように感じられた。

「戦場は人を変えるといいますけど、本当に欲望が無いのならここに残る理由も無くなってしまいませんか。再び欲望を滾らせていたただかないと——」
「構わん。どうせ守るものも殆ど無くなってしまふのだ……」

反乱軍の首謀者たちが言っていた緒戦の善戦に、女王は何も期待していない。粛々と「儀式」の準備を進め、タイミングをはかるだけだ。

何も求めることなく大人しく城門の護りへと戻っていったセラブレイトが不気味だが、気の重い仕事を前に、余計なことを考えずに済むのは幸いだ。

この戦争は、戦術を綿密に組み立ててきた人間の軍隊と、ただ人間を食料として狩りに来たビーストマンの群れとの戦いだ。

竜王国の人間たちは戦術によって半日ほど優勢を維持したが、人間は疲労し、ビーストマンは学習する。

さらに、用意された戦術は、その疲労を十分に考慮したものではなかった。

状況を見極め、確実に「儀式」の準備の時間を稼ぐために考えられた戦術は、持久戦に対応したものではありえない。

そして戦況は悪化し、王城での準備も肅々と進められた。

「儀式」の準備が整う頃、ビーストマンの大軍勢の後方から中ほどへと、多様なアイテムを持たされ、あるいは装備させられた使い捨ての者たちが差し込まれていく。

創造者の支配におかれたアンデッドや絶対服従の召喚モンスターも、支配の呪言や《チャーム・スベジションズ全種族魅了》、ビーストテイマーの支配を受けた亜人や人間たちも、予め決められた動きでビーストマンの軍勢の中へ混ざり込む。さすがにビーストマンの側は全てが完璧な支配下にあるわけではなく無数の混乱が生じるが、この段階に至ってはいつでもよいことだ。

「結局、こうするしかないのだな」

ドラウディロンは陰鬱な表情で「儀式」を完遂し、祖先より生まれながらの異能という形で受け継いだ始原ワイルド・マジックの魔法を行使する。

あらゆる戦いの帰趨きすうを決してきた偉大な力は、この国の終末と引き換えにあらゆる敵を打ち払うものだ。

東の空へ向けられた大窓から眩いばかりの白い閃光が飛び込んでくる。

民を代表してこの場で「儀式」に参加した者たちは、顔を白い光に染められて安らかな顔で事切れていく。

その光は彼らの命を奪うものではない。彼ら百万の民の魂を糧として生み出された始原ワイルトン・マジックの魔法の巨大爆発——それは、東の溪谷で敵の大軍を一瞬にして滅ぼすものだ。

溪谷が白の世界に支配され、轟音がビーストマンの大軍勢を包み込む。

極限の爆発は、以前の作戦における守護者たちの立ち位置を軽々と越えて広大な領域を焼き尽くした。

それでも、その効果範囲はマーレから伝わった通りのもので、そこからさらに安全を見て後方に控えていた守護者たちや重要なシモベたちに一切の損害は無い。

他方、範囲内ではビーストマン十数万の軍勢が一瞬にして失われた。溪谷の下草は剥ぎ取られ、河川は沸き立ち、砂利は黒く焼け焦げた。

しかし、全てが灰燼かいじんに帰したわけではない。

閃光と爆風、続いて訪れる煤煙の去ったあと、原型を留めている者もいる。守りの無い部分を焼かれ、胴体だけになって転がる者もいる。もちろん、鎧ごと全てを焼き尽くされた者もいる。

この結果で、巨大爆発による破壊はユグドラシルとは違った法則でなされていることが明確になった。

防具について、耐性が一切通用しないのは事前の情報通りだが、それ以外のスペックの部分もゲーム通りにはいかない。

それが伝説級^{レジェンド}どころか神話級^{ゴツズ}であっても、防具で覆われていない部分は容易に焼き尽くされるが、遺産級^{レガシー}や聖遺物級^{レリック}であっても、きっちり覆っていた部分は守られているのだ。

例えば最高級のビキニアーマーを装着したナザリック・マスターガーダーなど、哀れにも鎧に覆われた数本の肋骨と腰骨、そして背骨の欠片しか残っていない。

魔法による護りも、単に魔法的な防護や耐性を与えるものは最高のもので全て貫通されたが、現実に分厚い遮蔽物を創造するものはそれなりに効果を発揮した。

特に、マーレに使わせた第十位階の《自然の避難所^{ネイチャー・シェルター}》などは、爆風の及びにくい地面の下であることから、脆弱な者をも無傷で守り切った。

「爆発跡は未知の毒などに汚染されている可能性がある。実験対象の回収はシモベを使って、立ち入った者はステータスを注視しつつその後も監視しろ」

モモンガが思い出したのは、元の世界の歴史の授業で習った強力な爆弾の被害だ。

初等教育しか受けていないので戦争の背景などはわからないが、将来テロリズムの担い手にならないよう、戦争や兵器の被害や苦痛について古い映像を見せられた記憶があ

る。

もちろん、金に困って「正規軍」に志願する者たちのため、クリーンな現代戦に参加できる立場ならば酷い苦痛は無いという、お上に都合が良いらしい情報も刷り込まれている。

だが、モモンガはミリタリー系のゲームは好まないで軍に関心は無かった。何が都合が良いのかも、反骨精神が強かったかつての仲間ウルベルトに聞かなければよくわからないほどだ。

いまだ安全が確認されない土地へ、アウラに操作されたビーストマンの生き残りが踏み込む。その背後でアンデッドやビーストマンの一部を使った実験材料の回収が進められる。

想像を絶するほどの殺戮を前にしても、撤退する者は居ない。もはや従軍したビーストマンたちはアウラが操作しきれぬ程しか残っていないのだ。

竜王国軍に動きが無いとわかると、これを刺激しないよう、爆発跡地で仲間を搜索するような動きをさせる。

情報では一撃しか撃てないということではほぼ間違いないが、もし別の切り札があつ

て、貴重な実験結果が失われたらたまらないからだ。

アウラを焦らせたのは、西から空を埋め尽くすように跡地へ向かってきた野鳥の大群くらいなものだ。こればかりは大量のピーストマンを支配したままではタイムが追いつかず、特殊技術^スの吐息とターゲットイングを組み合わせた遠距離攻撃で大半を落としてしまうことになった。少しばかり対処が遅れたのは、痕跡を残してはならないという命令があつたからだ。

だが、至高の御方が跡地には毒があるかもしれないと言っていたので、鳥が落ちても不自然ではない。

対処が遅れたことも問題視されることはなかった。万にも届こうかという鳥の数からすれば、この群れ自体もピーストマンやそれ以外の何者かの作為とも考えにくい。アウラと同等以上の存在なら万単位の鳥を操ることも不可能ではないかもしれないが、それほどの存在なら鳥など使う必要は無いのだから。

結局、アウラは夕暮れまでピーストマンたちを爆発跡地で動かし、そして双方が自然と撤退する流れを作り上げた。大量の鳥が落ちるのを見た童王国軍にも、跡地へ踏み込んで戦おうという戦意は湧かない。

二撃目は来ず、爆発跡地に近寄る者があれば強化^バをかけたピーストマンを差し向けて足止めした。

「ビーストマンの群れをものもしない者たちも存在したが、特に跡地へ踏み入ってくるわけでもなく、撤退する竜王国軍の後を追うように帰っていった。

「異常、ありませんでした！」

アウラの報告をもつて、作戦は終了だ。一つの国の消失、もう一つの国の半壊と引き換えに、アインズ・ウール・ゴウンは新世界で知りうる最大の脅威について、多様な実験を行うことができた。

しかし、歴史書に記されるのは、アインズ・ウール・ゴウンの勝利ではない。

アインズ・ウール・ゴウンが恐れた力など、この世界に存在してはならないのだから。死者の折り重なる部屋から連れ出される竜王国女王ドラウディロン・オーリウクルスの絶望と比例して、その功績は後世において輝かしく誇張されることとなる。

ビーストマン大侵攻の撃退——それは、世界の秩序が塗り替えられる前の、人類側勢力における最後の輝きとなった。

エイプリルフール I F 『マーレひとりでやれるかな』プロローグ

それは、ナザリック地下大墳墓の守護者の男衆が睨み合うアルベドとシャルティアを放置して、女の戦いから逃れたすぐ後のこと。

アウラが仲裁を押し付けたデミウルゴスを恨みがましい目で見たり、コキユートスがモモンガの子息に忠誠を尽くす未来を妄想して恍惚となっていた頃のこと。

不敬ともとれる女の戦いに男たちが寛容になれるのは、ナザリック地下大墳墓の未来を考えてのことだ。至高の御方が子を作ることがあれば、守護者たちは忠誠を尽くす対象を得ることができ、ナザリックの戦力も充実する。

そして、戦力の充実という果実は、守護者が子を作ることによっても得られるのだ。「どうだね、マーレ。ナザリック地下大墳墓の戦力を増やすため、子供を作ってみないかね？ ……もし人間や闇妖精ダークエルフ、森妖精エルフなどの近親種を捕まえてこられたら、の話だが」生殖能力を持つ男性の守護者といえは、闇妖精ダークエルフのマーレしか居ない。

デミウルゴスがマーレを選んで声をかけてきたのは、女性の守護者は男性であるモモンガ様の世継ぎを生むべきであるからか、男性であれば外部の存在といくら子作りをし

ても戦力がダウンする時期が生じないからか、その両方が理由なのだろう。

「え？ ええ？ ……そ、それがモモンガ様の役に立つなら……いいですよ」

顔を赤らめるマーレの幼い決意に応えるように、再度の転移が発生した。当初の転移と同様、あくまでその原因は不明だ。

ナザリック地下大墳墓の他の者たちは、突然マーレが消えたと考えた。

しかし、転移したのはナザリック地下大墳墓のマーレ以外の者たちの方であった。

マーレ消失の原因究明の際、当然ながら注目されるのはデミウルゴスの発言となる。

デミウルゴスが「せくはら」の罪を問われてナザリック防衛戦の責任者から外されたことで、かえって時間ができて現地の最前線で辣腕を振るう機会が増え、本来あるべき歴史よりよほど凄まじい勢いで侵略支配活動が捗ったのはまた別の話。

ここからは、その場へ一人取り残された守護者マーレ・ベロ・フィオーレの物語となる。

気が付けばマーレは草原の中に居た。

しばらく歩いて出会うのは、見知った第六層の森とは違う雑然とした深い森。

マーレは先程、転移をしていない。その確信はある。

転移魔法を使えるマーレには感覚としてわかるのだ。

NPCが喋れるようになった直前に転移はあったが、今はそれが無い。

それでは、これはどういうことか。

動いたのは、ナザリック地下大墳墓。

あれを丸ごと動かすなんて、偉大なる至高の御方でもなければ到底不可能なことだ。

つまり、唯一お残りになった至高の御方、モモンガ様の御業以外には考えられない。

そして、深い知恵を持つ御方が無意味にそのようなことをするはずがない。

世界の全ては、至高の御方の掌の上にある。

ぼくにはするべきことがある。

心当たりは、一つしかない。

——ナザリック地下大墳墓の戦力を増やすため、子供を。

それが、マーレが最後に聞いた言葉だ。

デミウルゴスの口から出た言葉だが、それを了承した時点でマーレを転移させるとい

うことは、間違いない。

そうまで急ぐ理由はわからないが、今日のモモンガ様は色々なことを望まれている。

望まれるなら従わなければならぬのは当然のことだ。

ご自身でも、わざわざ《^{ファイアボール}火球》のようなとても簡単な魔法を実験していた。藁人形を

幾つも用意して、たくさん撃つていた。

そのあと、マールは姉とともに実験ということで戦闘を行った。

今度はデミウルゴスの言うように、ぼくが人間や闇妖精、森妖精などの近親種を捕まえて、子供を作る実験をすればいい。それだけのことだ。

きつととても簡単なことだから、藁人形を積み重ねるようにそれら人間種をいくつも用意して、たくさん子供を作ればいい。

それが、ナザリツクの守護者としてマールに与えられた使命だ。

マールは、それら人間種を探すことにした。やり方はよくわからないが、捕まえたものから聞けば問題ないはずだ。

ところで、森といえは森妖精か闇妖精。至高の御方がマールたちを創造した理由を語る流れで、そんなことを言っていた気がする。

そんなわけで踏み込んでみれば、この森は広いばかりでろくに使える魔獣も居ない弱者の楽園でしかない。

ようやく見つけた言葉を解する魔獣も、見掛け倒しで格好と態度ばかり立派なくせに弱いアンバランスな生き物だった。

「それがしの縄張りへの侵入者よ。命の奪い合いの前に言い残すことはあるでござるか？」

「あ、あのつ、このあたりに人間やその近親種の女の子はいませんか？」

事情を話すと、森の賢王と名乗った魔獣は少しだけ鼻をひくつかせ、人間の集落が南の方にあると教えてくれた。

少女の服装で女の子を求めることについては、嗅覚でそういうことを判断する魔獣には気にならないのだろう。

そして、残念ながらこの森には森妖精エルプなどは居ないらしい。

「それがしも生物として子孫を作らねばならないのでござるが、これまで一度も同族と会ったことがないのでござるよ」

「だったら、縄張りから出て探せばいいんじゃないですか」

「それはちよつと面倒でござるなあ。せつかくの縄張りを捨てるというのも……」

至高の御方が大規模転移を用いてまで計画するくらいだから、子供を作るということは大切なことなのだともマーレは考える。

つまらない現地の生き物であっても、同じ使命を持つ者ならば積極的になるべきだ。

「それなら、ぼくが勝つたらこの森はアインズ・ウール・ゴウンのものということにします」

「むむつ、命の奪い合いに縄張りを賭けよということではござるな！ それならおぬしが敗れば、それがしの糧となるでござるよ！」

毛皮が良い土産になりそうなので、マールは少し距離を取って毛皮を傷めないような魔法を考える。

「魔法詠唱者でござるな！ 逃がさないでござるー！」

本体の動きより幾らか速い攻撃を繰り出してきたのは、森の賢王の尻尾だった。

マールはこれを掴み取ると、毛皮を傷めない冴えた方法を思いつく。

「それがしの攻撃を完全に防ぐとは、いったい何者でぎやぶっ！」

尻尾の根元付近へ音もなく移動し、そのまま尻尾を手繰り寄せて森の賢王を裏返しに地面に叩きつける。

「べぎやつ、いぎやあああああつ!! ももももげるもげるうっ！ いい痛いでござるううっ！」

尻尾を引き抜こうとすると、森の賢王は絶叫をあげる。

血抜きなら頭を抜いた方がいいのかもしれないが、森の賢王の二頭身ボディでは頭部の毛皮の確保も重要になるのだ。

「毛皮をもらつていいですか？」

「ななな何でも言うことを聞くでござる！ 殺さないでほしいでござるー！」

「……わかりました。それでは、ぼくのしもべということにしますので」

毛皮の保存は面倒なので、生きたまま保存した方がいいかもしれない。

しかし、いざしもべとして見てしまおうと、少し不安を感じてしまおう。

子供を作る使命を持ちながら縄張りに引きこもっていたような者をしもべとするこ
とで、将来ナザリツクに迷惑がかかってはいけない。

マーレも引きこもるのは大好きだが、使命を怠ってまでそうするのは良くないことだ
と思う。

だから、ここで森の賢王に厳しく接するのは、引きこもり体質の近親憎悪によるもの
ではないつもりだ。

「ええと、とりあえず命が惜しかったら二時間以内に人間の棲む場所を正確に把握して
きてください」

脱兎のごとく駆け出す森の賢王。南へ向かったので逃げたのではなく命令を聞いて
いるのだと思うが、念のため魔法による超知覚を発動する。

——あ、これで探せばよかったんじや。

超知覚の認識範囲は広い。森の中で目的の木を探したり街の中で特定の人間を探す
ような用途には弱味もあるが、森や草原で大きな魔獣を認識しつつ人間種を探すくらい
は容易なことだ。

目を血走らせトップスピードで草原へ出た森の賢王は、そのまま人間型の生き物と激
突し撥ね飛ばす。

物言わぬ骸になったのは、大きさや肉付きから人間種の男性のようだ。

——男なら、いいや。

マーレとしては、使命に支障もないので見なかったことにする。

もともとナザリツク外の存在には徹底的に無関心なマーレだが、今は程良く生殖可能な女の子を見つけたら、ナザリツクの守護者として捕まえて子供を作らなければならぬ。

守護者としての使命の都合が無ければ男女も調べず切り捨てたはずであり、その点ではマーレも人間種の側に半歩歩み寄ったと言えなくもない。

ともあれ、ここで骸となった男——カルネ村の野伏^{レンジャー}、ラッチモンのことをマーレが振り返ることは無い。

たとえ自分が何らかの形で関わって殺してしまったとしても、マーレであればすぐに忘れてしまうのかもしれないが。

そんなことより、今のマーレにとって重要なのは、森の南端辺りに認識できた人間種の女の姿だ。

——ナザリツク地下大墳墓の戦力を増やすため、子供を。

脆弱な人間に、マーレから逃れる手段は無い。

マーレはとりあえず近くへ転移し、その姿を観察しながら対処を考えることにする。

——子供って、どうやって作るんだっけ。

草をむしっている人間の娘を見ながら、マーレは困り果てた。

こんなとき、マーレは脆弱な存在から知識を得る方法を知らないわけではない。

しかし、子供を作るには、人間種の女の身体が必要なのだ。

情報を得るために拷問をしたら、その身体がダメになってしまう。子供のマーレに

だって、それくらいのことわかる。

マーレが特に存在を隠さないまま使命の難しさを改めて噛みしめっていると、作業を終

えた人間の娘が気付いて近づいてくる。

「あなたは、この森に棲んでいる妖精さんかな？」

最初の相手は、決まった。

第十二章 霸王の凱旋

五四 法国と薔薇と、再び旅立つ 『漆黒』

スレイン法国の最高意思決定機関は、神殿勢力から七名、司法・立法・行政で三名、そして魔法と軍務を司る二名から成り立っている。

神聖不可侵の部屋で行われる密室での意思決定は、法国と人類の未来のみを考えたものだ。

時には王国のガゼフ・ストロノーフ暗殺を目論んだときのように多くの人々を犠牲にするような非情な方針を選ぶこともあるが、この日は竜王国難民の総員受け入れという温情溢れる決定を下すことになった。

生活再建のため安い賃金で労苦を厭わず働く難民たちの存在はエルフとの戦争が長く引く法国において貴重であり、まして竜王国の難民は足手まといになる老人や戦傷者の比率が異様なほどに低い。

いや、むしろそれら比率が低いことを知っていたからこそ、法国への道が開かれていたのだ。

竜王国では戦傷者の多くはピーストマンの携帯食料とされてから救出されるため悲

惨極まりない状況となるが、その殆どが味方のはずの女王の起こした巨大爆発で蒸発してしまった。

その巨大爆発の対価として魂を差し出し死んでいくのは生贄としての簡易儀式に応じた順、すなわち老いた者たちからということになる。

国内には排外的な主張もないわけではないが、会議は常に理性的で、良質な労働力と将来の戦力を補充するための受け入れは全会一致となった。

密室というのは、参加者の全てが理性的でさえあれば、特定の者の利益を代弁せずに済むという利点もあるのだ。

もちろん、十二名が対等の立場で会議を行うため、バハルス帝国のような専制国家に比べてやや意思決定が遅くなる欠点もある。

それでも、次の議題にあつては会議における全ての参加者が、意思決定の責任を一人で負わずに済むことに感謝した。

参加者たちは心から思う。

このような情報に基づいて自分だけで意思決定を行うなど想像するだけでも恐ろしいことで、そのような状況に置かれたら神経も胃袋も毛髪も何もかも駄目になってしまうのではないかと。

「もう一度聞いても良いか？　このようなものが、事実だと——」

「間違いはございません。皆様が『一人師団』の報告を信じられるのであれば、ですが」
全員が、陰鬱な表情で伝えられた情報を確認する。

ビーストマン大侵攻撃退の第一報を受けたときの喜びは、既に枯れ果ててしまった。
「真なる竜王の巨大爆発を受けてなお生き残りが複数という時点で、何かの間違いとか思えん。あるいは、伝承の方が間違っておるのなら良いが——」

「さらに、背後の魔獣の群れを確認、難度は全てが魔神級以上を推定、というのはどういう冗談だ」

「心臓に悪い表現だが、実際には数が多すぎて全て合計すればそれくらいの脅威だということなのではないか」

「そうに決まっている！ でなければ人類どころか亜人の国々さえとうに滅びているはずだ」

「『一人師団』では難度の正確な把握はできないが、群れの脅威度を把握することには長けているからな。間違いなからう！」

「記載のあるデス・ナイト数十に、ソウルイーター数十というのも……もちろん、含めての計算なのだろうな」

「そうでなければ人類は終わりだから、考えるだけ無駄というものでぞ」

デス・ナイトとソウルイーター——それぞれ、たとえ一体でも都市や小国を滅ぼしう

る脅威だ。法国の切り札であった漆黒聖典の隊員たちでも、同数のこれらを相手するのが精一杯となる。

彼らにとつて救いであったのは、もたらされた情報が鳥に託された手紙によるものだったことだろう。そのため、誤解を解いて彼らを絶望の淵に叩き込むことができる男はここには居ない。

「見間違いか、こちらの監視を見越して用意された幻術ではないのか？　これまで、幾度も監視に失敗していたのであろう」

「漆黒聖典にはモンスター知識が必須です。特に魔獣については人類最高のビーストテイマーの『一人師団』に見間違えは無いです。監視の成功は、執念としか言いようがありません——」

その執念によって、例年なら今頃神都近郊に溢れているはずの野鳥が一斉に消えることとなった。

『一人師団』は人類最高のビーストテイマーだが、大災害で犠牲となった仲間に代わって出た監視任務では失敗が続いていた。

純粋な地力ではどうやっても対抗できない存在が暗躍している可能性を考えた彼は、群れをなして飛ぶ鳥の習性に着目し、百を操ることの方を動かす策を選んだのだ。

その成果が、今回の壮絶な情報となつて実を結ぶこととなった。万を数える野鳥の群

れが全て落とされるまでの僅かな時間でも、これだけの成果を持ち帰ることができた。

人類とナザリツクの力の差を考えれば、これは人類史上屈指の快拳とさえ言えよう。

しかし、会議は“一人師団”の偉大な快拳を讃えることもなく、ただ重苦しい疲労感に包まれてしまう。

「漆黒聖典の大半を失った我々が、そんな化け物どもにどう対応すればいいというのだ

……」

「いや、全てを合わせて魔神級というなら、最高位天使か神人を動員すれば対処は可能だ」

「しかし、残された神人——あの娘を出せば、評議国の竜王が動く可能性もあろう」

「問題無い。そもそも打って出るほどの戦力も無いのだ。対エルフの戦況次第では竜王との話し合いも必要となろうが、今は神都の守りに専念してもらおうしかあるまい」

既に法国内の神人は、神都から出ることが許されない漆黒聖典の番外席次一人だけだ。

もう一人の神人である漆黒聖典隊長は、神器の槍とともに執拗に搜索した事実が外へ漏れてしまったため、法国大災害に乗じて出奔したということになっている。これをあえて否定しないのは、隊長の本質を知る者なら出奔を装って破滅の竜王を追っているものと考えられるだろうから、放置した方が内外の動揺を防げるという判断によるものだ。

実際には——他の隊員たちが地の底から掘り起こされ蘇生されて再訓練の途上にある中、彼の遺体と神器だけはいまだ発見されていない。領域を絞りながらも未練がましく搜索は続けられているが、蘇生も不可能な消失^{ロスト}という最悪の結果となったものと断定されている。

それを裏付けるのは状況証拠だけだが、根拠は搜索の結果ばかりではない。

破滅の竜王は神都の中核の一つ、神都における最高の護りの施された風の大神殿の内部に直接転移してきた。それが、漆黒聖典の隊員たちを一撃で屠る広範囲殲滅攻撃を仕掛けてきたのだ。ならば、それは神都のどこにでも現れ、その全てを破壊できるという想定をしなければならぬ。

すなわち、隊員たちが壊滅しケイセケウクが使えなくなった以上、隊長はその存在を賭けても神都を守る以外に選択肢を持たなかったのだ。逃げることも、逃がすことも許されない戦いの結果が、神器の力の解放による双方消滅だったのだろう。

真実を知る者たちは、人類のために消滅した隊長の忠節に涙し、そんな英雄に出奔の汚名を着せなければならぬ現実を嘆いた。

だからこそ、破滅の竜王の残したものと酷似した大地の傷跡が竜王国の東で確認されたとき、この会議は強硬論一色に染まった。

そこには、神器と神人という多大な犠牲を払ってまで消滅させたはずの破滅の竜王が

再出現したという不条理への怒りがあった。

幾度も援軍を送りながら、竜王の血を受け継ぐ女王にどこか懐疑的な視線を向けていた法国首脳部は、冷徹に竜王国の切り捨てを決定したのだ。

「そもそも、大侵攻を撃退した方の破滅の竜王はどこへ行ったのだ！ あれを亜人とぶつけるために手を引いて様子を見ていたというのに、亜人の背後からとんでもないものが出てくるなど——」

言葉を発した男は、破滅の竜王が二人いるという悪夢のような考えを披露し、周囲から強く拒絶されたことがあった。それを示唆する言い方に、多くの者が眉間にしわを寄せる。

「あのとき、竜王国の側は破滅の竜王など知らぬと言っていたではありませんか。今回こうして百万の魂を磨り潰した以上、あれは真実なのでしょうよ」

「竜王国切り捨ては間違いだったとしても言うのか」

「いや、私は感情論でも破滅の竜王への報復からでもなく、純然たる戦力不足から賛成しましたからね。仕方のないことです」

「最悪の結果だが、百万の犠牲で東の亜人どもの歴史に大敗を刻み込むことができたと考ええるしかあるまい。少なくとも数十年単位でビーストマンの侵攻は無くなるだろう

よ」

一同は溜め息を隠せない。竜王国の状況を把握した後、対亜人の防衛計画を再構築しなければならぬからだ。

「破滅の竜王といえ、最初の大侵攻に関わった冒険者から情報は得られたのですか」
「今のところ『セラブレイト』の一人と接触したが成果なしということだ。迎撃に参加した冒険者チーム『漆黒』と、『セラブレイト』とともに先にビーストマンの領域へ向かっていったという『ザ・ダークウオリアー』は見つかっていない」

相手が力のある冒険者ということで、風花聖典などが搜索するが、発見後はそれなりの者を出向かせることになる。

この二つのチームについて、会議は比較的好意的だ。人類の敵であるビーストマンとの戦いで頭角を現した『ザ・ダークウオリアー』は当然として、『漆黒』についても法国と険悪な『蒼の薔薇』と衝突した事情が伝わっている。

「彼らが金で動いてくれるなら良いが、冒険者というのは金になる情報と見ると抱え込みたがるものだからな」

「経費を惜しむわけではないが、こんな状況でいちいちもったいつけられてはたまらん。我々人類がどれほど危機的な状況にあるか、広く知らしめた方が良いのではないか」

「いやいや、我々の世界が荒天の海へ向かう脆い船の上も同然だということを知ったところで、自棄になる者の方が多いかもしれんぞ。それなら目先の金銭のために勤勉であ

る方がまだ冒険者や帝国の騎士のように戦力も揃うというものだ」

「百年間隔の巨大な嵐を見込んで刹那的に生きる者が増えたらたまりませんね。知識がある者なら、既にそれが来ていることがわかってしまうような状況ですから」

「それならば、かの元神官長殿はどう動かれるのだろう」

一同は表情を複雑なものにする。

「わからぬが、既に動いているのは間違いない。なんらかの切り札を用意されているようだ」

「あの元第九席次、疾風走破を冒険者などに預けたままにしているのだ。動いていないと困る」

「あえてそうしているなら、疾風走破の方に接触してもわからぬということか」

はあ、と複数のため息が聞こえる。

こういうときに選択肢を増やすため国とは別に動いているのだとわかってはいても、実際に危機が訪れた段階で動きがわからないのは不安なものだ。

このあと、大災害直後に続いて二度目となる漆黒聖典元隊員への復員要請を決めただけで、会議は次々と細かな議題を処理していく。

そして、議題は食料生産に関する事項へ。

「本年は東寄りの集落の幾つかより、飛蝗の被害が深刻であるとの報告が——」
国境付近で、集落単位では存亡の危機。

しかし、スレイン法国では国が災害時の相互扶助を仕切っており、局地的な飢饉で人が死ぬことはない。

普通なら、食料を西から東へ動かすというだけの報告だ。

「そういえば、“一人師団”の報告でも川に飛蝗の死骸が多く流れていたというものがあつたではないか。大がかりな飢饉となれば難民受け入れどころではないぞ」

「いやいや、軍人はものを知らんから困る。幸い、今は渡り鳥の多くが国内に留まる時期だ。いくら飛蝗が来ようと容易に食い尽くしてくれよう」

「鳥か……。街では糞の害に苦情が出るぞ。面倒なことだ」

「待て——。鳥といえば、クインティア殿が大量に——」

青ざめるのは、やはり軍人だ。文官たちに憂いはない。

「使役したとしても、命ある限りもとの暮らしへ戻るものと聞いておる。十万もの鳥が一斉にどうかなることもなからう」

簡単な野生動物の使役ならば農業ともかかわりがあり、文官でもこの程度の常識は持っている。

結局、この場は軍人たちが身を退いた。

一万の農民を徴兵したとしても、収穫期まで拘束し続けるのでなければ一万の畑の収穫が失われるわけではないのと同じことだからだ。

この瞬間、「一人師団」——クアイエツセ・ハゼイア・クインティアの次の任務が決まった。

彼は国許へ戻って詳細な報告を行うと、すぐに次の任務を与えられることになる。

その任務は極めて安全ではあるが、極めて絶望的なものだ。

クアイエツセは自らの任務の犠牲にした十万余の野鳥に代わって、無限とも思える飛蝗の群れと戦うことになる。

ナザリツク地下大墳墓からさらに東の山あいでは、『蒼の薔薇』が焚き火を囲んでいた。既に食糧は調味料を除いて全てが現地調達になっているが、肉食種の多い亜人の領域では山の恵みが豊富で旅の困難は少ない。

「それじゃ、殴りメイドは下っ端で、あの死者の大魔法使いをかなり豪華にしたようなだけだ。プレイヤーってこと？」

「……………はあ」

「リーダー……………」

仲間以外の人類と長期間接しないことによる会話センスの衰えの方が深刻かもしれない。

「……………そうじゃろうな。ただ、下っ端といつても法国ふうにいえば従属神——制御が利かなくなったら魔神と呼ばれる存在じゃ。侮れるものではない」

リグレットが話を進める。

「勝手に喧嘩売ってくる時点で制御できてねえと思う。つまり、俺は魔神とサシでやりあつた女つてことになるな」

「激しい戦いだつた。縦横無尽に揺れるメイドの乳が目焼き付いて離れない」

「もしや、十三英雄も数々のメイドたちと戦ってきたとか？」

「誇らしげに胸を張るガガーランドが、ティアとティナはメイドの方に関心があるようだ。」

「まさか。わしも従属神をメイドとして傳かひかせるというのは、良い趣味ではないと思うぞ」

「心当たりがあるから怒らせたのかもしれないねえな」

ナザリックから離れ、緊張も和らいで『蒼の薔薇』にも笑いが戻ってきている。

「でも、それがあの場のぶれいやーを一人だと判断する理由になるつてのはどういうこと？」

姿を見せないだけで、他にもぶれいやーがいるかもしれない——そんな可能性をリグレットは否定した。

これは、特に必要のない技の名を仲間の前でも叫ぶことができるラクユースにはすぐに理解しにくいことなのかもしれない。

一般には、趣味の世界とは一人になるほど大きく花開く。もちろん、美しき神官戦士のノートの中も人目に触れないからこそ日々全力満開なのだが。

「わかる者にはわかるということじゃ」

「そのへんはわかんねーけど、少し人恋しそうな感じで、仲間に恵まれてるようには見えなかったな。あと童て——いや、それは骨だからどうでもいいか」

むしろこのガガーランが孤独とかそういう部分まで観察できてしまうのは、アインズ・ウール・ゴウンという存在を前にして、なぜか特定の段階にある男性の雰囲気を感じ取ったからこそである。

そうでなければ、人の言葉を話すとはいえ強大なアンデッドを相手に精神的な部分ま

で観察する視点を持てるはずがない。まして、その相手が人恋しいなどと見立てるとなればなおさらだ。

「ガガーランが言うなら、間違いない。やはりあれは強大なアンデッド」

「生き物として最大の未練を抱えている。とてもとてもおそろしい」

どうでもいい部分を掘り起こし、ついでに真つ直ぐラキユースを見据えるティアとティナ。

確かに神官として、アンデッドの未練の強さが脅威度を上げることもあると教えたこともあるラキユースだが、この文脈で視線をぶつけられると違う意味で少しモヤモヤしてしまふ。

「あ、あれほど桁外れな存在になると、そういうのはあまり関係ないと思うわ」

何かと言いつ返したい部分もあったが、いい言葉が出てこないので無難な答えで本音を抑える。

別にラキユースとしては今の生き方に未練など無いし、そういう経験の無いまま志半ばで倒れても強大なアンデッドになどならないと思うのだ。

「アンデッドのぶれいやーは六大神にも例があるが、成り立ちが違うという説も根強い。通常のアンデッドのように人の世に恨みを持った敵と考えておつたら、そもそも交渉などせずに逃げておるよ」

リグリットの話題転換に、ラキユースはテーブルに少し乗り出した身を落ち着ける。この人にとっては神は“六大神”であるばかりか、その中にはアンデッドの神も存在する。それは仕方のないことだ。

出会った当初、こうした話題には“四大神”の神官として不快感を覚えることもあったが、リグリットは六大神を奉ずる法国の神殿関係者と違って温かみのある人間で、今は大切な仲間だ。法国風の宗教観の深い所に話が及ぶとラキユースとしては直感的に一歩引いてしまうが、今さらそのことをとやかく言うつもりはない。

そして、話はアインズ・ウール・ゴウンの孤独へと戻る。

「闘技場は雄大であったが、結局は墓地と闘技場だけじゃ。伝え聞く空中都市や海上都市の比ではない。それで孤独だというなら、世界をどうかしてしまふほどの戦力はなからう」

ギルドの戦力については、遠い昔に少し話を聞いたただけだ。拠点が大きく、ぷれいやーが多ければ従属神えぬびしなどの戦力も大きくなるなど、基本的なことしかわからない。「そういう戦力があつたらどうするつもりだったんだよ」

「我らとしては纏るしかあるまい。あとは古き友が考えるだけのことじゃ」

協力関係を結び、そのあたりを判別するところまでが、今回の訪問の目的だった。

ギルドの仲間がいれば、ぷれいやーが一人で方針を決めるはずがない。八欲王でさ

え、仲間割れをする以前はそうだったはずだと聞いています。

依頼者の方が容易に訪問が可能だが、彼はあの姿でリグリットだけでなく同じぷれいやーの一人であるかつての仲間からも不興を買っている。初対面で信頼関係を損なうのは得策でないという判断だ。

「最強の存在なのに、味方となつてもらえるまで顔を出せないというのだから、少し勝手よね」

「仕方あるまい。あ奴に何かあれば、我々の世界で対処できる者は法国の神人くらいしか残らんからな」

それに、ぷれいやーというのは元が人間の精神を持つていて、空っぽの鎧や竜のような存在より人間の方により親しみを感じやすいということは、この仕事に際して『蒼の薔薇』の仲間たちにも説明したことがある。

「依頼人のことより、早く帰りたい」

「まともなベッドと宿の食事が恋しい」

「まだ駄目。私たちにはまた未知と出会う冒険が待っているんだから」

帰れないと知つていても言わずにおれないティアとティナを、ラキユースが優しくたしなめる。

「鬼ボスがいる」

「……鬼ライダー」

「海か……あまり好きじゃねえんだけどな」

次の目的地も、この世界の大部分がそうであるように亜人の領域にある。『蒼の薔薇』が狭い人間の領域に帰れる日は、まだ先のことだ。

ある来訪者の一団は、図らずもナザリックと漆黒の塔に小さからぬ混乱を巻き起こした。

それは、空駆ける不可視の騎兵の一団だ。

とはいっても、その脆弱極まりない騎兵たちを恐れる者など居ようはずもない。

むしろ事態を軽く見るあまり、モモンガへの報告が遅れ叱責を受けたことが大きな問題となった。

モモンガにしてみれば、現地の存在で不可視の者と遭遇すること自体がこの世界に来て初めてのことであるのに、それが小なりとはいえ軍を構成しているという事実には驚

かざるを得ない。

ろくに相手の戦力の詳細を聞く前より、報告・連絡・相談の欠如が最も悔やまれる深刻な事態であるとの態度を隠そうともせず、それが部下たちの対応を著しく先鋭化させることとなった。

こうして、モモンガがその正体を知る頃には、皇室ロイヤル・エア・ガード空護兵団の刻印を持つ騎士たちとその騎獣たる鷲馬ヒホグリフの全てが昏倒し、一カ所にまとめられて乱雑に積み上げられることになった。

「バハルス帝国だと！ ……なんということだ」

人間の国であるし、他にプレイヤーが関わっている可能性も捨てきれない。そう考えてじっくりと慎重に接触を図ろうと思った矢先にこれである。

漆黒の塔から人間の国が見えるとはいえ、それに対応した防衛方針を決めるには至っていないかった。

それ以前の、亜人に対するモモンガの冷淡な態度が反映された防衛体制に加え、初動の焦りが仇となった形だ。

「こいつらはマーレたちを使って送り返す。取り急ぎ、体裁を整えさせろ。……ああ、お前たちでは扱いが荒そうだから、人間の奴隷にでもやらせることにしよう」

捕えるときに千切れた手足まで適当に積まれている惨状を見れば、これをやった者たちにそのまま彼らの扱いを委ねるわけにはいかない。

幸い、支配下のミノタウロスの国には、少なくとも人間の奴隷が居る。既に農場作りなどに試用していて実績もあり、奴隷らしく卑屈ではあってもビーストマンの国の牧場の者たちのように会って気が滅入ることもない。モモンガが人間のことは人間にやらせるべきだと考えるのも無理もないことだった。

「ヒボケリッ驚馬も返してやった方が良いでしょうな。ミノタウロスの旧王都にも大きな檻があったはずだ」

牧場を襲った人間狩りのミノタウロスが用意していたような檻は、大きささままなのが国中で見かけられていた。

帝国へ送り返す役目は、帝国を訪れたことがあって繋がりもできているマーレとその一行に任せる。

マーレはアインズ・ウール・ゴウン捜索の際、帝国に世話になったというので、そのマーレが帝国兵を送り届けるといふのは友好関係を築くうえで悪くない選択肢だとモモンガは考える。

デミウルゴスとコキュートスによるミノタウロスの王国の制圧といい、マーレが関わったことで巨大爆発の性質を知ることができたことといい、NPCたちを適材適所で

使うことで物事がうまく回ってきた面があるから、今回もそれで行く。

「デミウルゴスよ、何か言いたいことがあるようだが」

モモンガは問題があれば軌道修正を期待する。

たとえ上司の能力が至らなくても、部下の助言を受け止められれば組織は盤石だというのが元会社員のモモンガの考えだ。

「いえ、全ての事象がモモンガ様の掌の上で踊るばかりで、もはや感服しかございません」

——そういうの、やめてほしいなあ。説明しろつて言えないじゃないか。

「ただ、相手が人間の身でありながら不遜にも皇帝を名乗るのであれば、こちらも相應の肩書を用意した方が良くもありません」

「既に国を支配しているし、王とでもしておくか?」

「王を名乗ることに異論はございませんが、単なる王ではその辺りの虫けらでも名乗る肩書でございます。もつとアインズ様に相應しい肩書を——」

正直、それどころではない。

この件に関してはデミウルゴスに丸投げし、守護者たちと話して候補をいくつか出しておくように命じておいた。

さつそく守護者たちが一堂に会し議論が始まるが、モモンガは最終的に並べられた候補しか把握していない。

最終的に採択されるのは、『魔導王』というコキュートスの案で、語呂的に『魔導王モモンガ』ということになる。

さて、目の前の問題についてはデミウルゴスの反応から、このまま進めて良いのだろうと考えるしかない。

突っ返す騎士たちは、周辺に生息する亜人勢力に囚われたところを塔の主が救出して保護したということにする。

魔獣の群れに囲まれ、全軍が一瞬で昏倒したという経緯から、筋の通らない話ではないだろう。

先方にも当事者の騎士たちにも疑念は残ろうが、重要なのは事の経緯ではなく、彼らを圧倒する存在が友好的に接触してきたということになるはずだ。

もちろん、惨状をそのまま突き返すわけにもいかない。作業員は人間の奴隷を使えばよいとして、それらへの指示役も含めて人間を驚かせず上手くやれる者——ルプスレギナにでも騎士たちや驚馬ヒボクリップの回復を任せるべきだろう。

ブレアデスのまとめ役で善良なユリの存在もちらついたが、彼女はなかなか直情的

などところもある。出発直前に騎士と“試合”でもされたらたまらない。

「回復するといつても、捕虜としての立場を理解してもらって、暴れたりしないようにしてやってほしい」

「了解いたしました。すぐに取り掛かります」

エンリるときも、短時間で信頼関係を築いて難しい話をしつかりと聞き出してくれた。

相手が人間ならば、ルプスレギナに委ねたところで一安心だ。

信じて送り出したルプスレギナが、騎士たちが“暴れたりしないよう”選んだ手段がミノタウロスの王国内に豊富にある奴隷輸送用拘束具であることは、モモンガの関知するところではない。

このとき、ンファイレーアはモモンガに乞われてバハルス帝国について一般的な情報を語り、エンリは一般メイドらの助けを得つつ旅の準備を進めていた。

エンリが与えられた馬との相性を確認するとき、驚馬ヒガリフとともに拘束され繋がれる騎士が視界に入る。

「あの……あれはいつたい……」

「ああ、あれっすか？　ロイヤル何とかの貴重な騎獣だと言つて引き離すと抵抗するんで、セツトで繋いでおくことにしたっすよ」

ルプスレギナの言葉に、エンリは慌てて騎士から目を逸らす。

マールが言っていた、帝国へ連れていく捕虜というのは彼らのことなのだろう。

詳しいことは聞いていないが、彼らは救出したことにして帝国へ帰すと聞いている。

きつく拘束するということは、途中で助け出すような茶番でも演じなければならないのだろうか。

——嫌だなあ、そういうの。

どうせ拘束を解くのに嚴重に繋ぐことについては理解に苦しむ部分もあるが、人間の奴隷に命じながら料理を盛り付けるように拘束具を加えていくルプスレギナの表情を見れば、そういうものだと言えざるを得ない。

ルプスレギナもまた、マールと同じアインズ・ウール・ゴウンの一員なのだから、エンリごときが口を挟むだけ無駄なのだ。

先に帝国へ向かったクレマンティーンが出発前に喧嘩を売って酷いことになっていったようだが、そんなものを見るより前から、知っていた。

出発直前、エンリは巨大檻が布で覆われているのを見て安堵する。

単に、こちら側の情報を与えないためという説明を聞いて、演技をするのは布が外れ

てからで良いという意味だと勝手に納得してしまふ。

全体として見れば助けるふりなど白々しい限りだが、演技とはいえあの惨状を見れば、早く助けたいという表情も自然と出てくるだろうし、一刻も早く助けたいのが本音だ

そう考えておけば、気が楽になる。

クレマンティーヌやイビルアイといった脅威を抱えながら、少しでもアダマнтаイト級冒険者にふさわしい雰囲気を出そうと演技してきたエンリだが、この数日は彼女らと引き離されて弱者として扱われる時間ができたことで気が緩んでいた。

エンリは、冒険者として騎士たちを助け出す様子を思い描きながら、馬具を点検する。また『漆黑』としてアダマнтаイト級冒険者を演じなければならぬことに胃を傷めつつ、出発の準備をする。

そこへ現れたのは、マールだ。

「あの、急いだほうがいいみたいなので、馬ではなく飛んでいくことにしました」

「……沢山連れていくんだけど、大丈夫？」

「檻ごとでも飛ばしますから」

「檻ごとって……何でもありません」

出発時間にはまだ早い。何か用事があるのか、転移魔法でその場から消えるマーレ。エンリとしても、酷い拘束状態の騎士たちは一刻も早く助けてあげた方が良いと思う。

自作自演の救出劇について何も聞かされていないが、マーレが関わっている以上は仕方のないことだ。

自分がその場で考えて動かなければ大変なことになる。

もう、慣れた。

魔法で飛ぶなら心の準備をする時間がなくなってしまうが、エンリはこれまで様々な事態をどうにか乗り切ってきた。

自分ならできる。なんとかなる。なるようになる。頑張つて日々を生きていけば、きつといいことがある。

そう信じるしかない。

覚悟を決めたエンリは、出発の時間を迎える。

ギリギリまでバハルス帝国について知っていることを聞かされていたンフィーレアも合流する。

馬も馬車も無いのは、最後まで魔法で移動するつもりなのだろう。

——助け出すとき、どういう形になるんだろう。

どんな形でもその場で考えるしかないが、宝珠を押し付けられての悪役だけは勘弁してほしいエンリである。

とはいえ、冒険者チーム『漆黒』はエンリのチームということになっている。

帝国に連れていくのは名目上はマーレではなくエンリの仕事なので、そういうことにはならないだろうという安心感があった。

結局、エンリたちは無事、帝都まで騎士たちを送り届けることに成功することになる。悩みの種であった救出劇など、演じる必要さえ無かったというのは、少しだけ先の話。そもそも、自作自演の救出など予定されてなかったのだから。

五五 寵姫クレマンティーヌ

帝都アーウィンタールにあつては、既にフルーダを通して話が伝わり、『漆黒』を迎える準備が進められていた。

東方国境の先へ突如出現した漆黒の塔——そこへ偵察へ向かつた不可視の精鋭、ロイヤル・エア・ガード皇室空護兵団は、帝都に異常を知らせることもできずに連絡を絶つた。

そこへ入つてきたのが、囚われの帝国騎士たちが「救出」されたという話だ。

バハルス帝国より東は亜人の領域だが、漆黒の塔はそこにあるミノタウロスの王国を支配している魔導王モモンガなる者の拠点だという。

そして、その勢力は他の勢力に囚われた帝国騎士を「偶然に救出」し、これを送り返すとともに国交を結ぶことを希望している。

その使者として騎士たちを送り届ける役割を担うのがアダマンタイト級冒険者の『漆黒』であつたために、以前交流のあつたフルーダへ連絡が入つた。

ロイヤル・エア・ガード皇室空護兵団を、メッセージ《伝言》等の緊急連絡さえ許さず一気に壊滅させる勢力。

それらを打ち払つて、囚われの帝国騎士たちを「救出」したとする魔導王モモンガの勢力。

その二者が別々に存在し、貴重な空挺部隊が偶然救出されたと考えるのは都合が良い。ぎる考えに過ぎる。

実態としては間違いなくその魔導王モモンガの勢力が皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードを捕虜としたうえで、その返還をきっかけに帝国へアプローチしていると考えるべきだろう。

しかし、皇帝ジルクニフは表向き相手の言い分を受け入れなければならぬ立場にあることを自覚していた。

フルーダの意見を聞くまでもなく、争うべきでない相手である。

知らなかったとはいえ、強行偵察を可能とする部隊を送り込んでおいて、敵対せずに済むだけでも僥倖というものだ。

「それで、なぜ捕虜を送り届けるような重要な仕事を受けたのが、お前のいない『漆黒』なのだ」

「だから、私なんて弱っちい方だって何度も何度も言いましたよね」

ジルクニフは渋い顔をこの部屋の主——クレマンティーヌへと向ける。

強いだ弱いだという本来この場にそぐわない会話は、この部屋で幾度も繰り返されたものだ。

帝国四騎士と連続で試合をしてその全員を叩き伏せるような女が『漆黒』の中では弱者で下つ端だったなどと、ジルクニフが信じられるはずもなかったのである。

そう、ここはジルクニフの後宮の一部屋だ。

ならばクレマンティーヌがいつジルクニフの寵姫になったのかといえば、その答えはまだ確たるものとして存在していない。

そのことを知るには、少し時を遡る必要がある。

バハルス帝国においては、先進的なスレイン法国には劣るものの、戸籍や結婚などの制度も一応は整備されつつある。

帝国では奴隷の所有が認められているが、それさえも戸籍制度の恩恵を受け、偽の奴隷などの心配をせず安心して取引できる環境が与えられているのだ。

五年や十年、二十年といった有期奴隷など、身分と期限が戸籍に記載されるからこそ成り立つ制度であるといっている。

しかし、この後宮だけはそうした制度の外側にある。

その根底にあるのは絶対君主として権力を強めていくべき皇帝の下半身事情を役人風情に安易に晒すべきではないという専制国家特有の感覚だったが、安定した権力を保

有し、様々な制度の穴を埋めて帝国の統治体制を完成に近づけた皇帝ジルクニフの代において、この状況が変わることはなかった。

それは何故か。

想像してみてほしい。皇帝ジルクニフが、かつて寵姫ロクシーを後宮に招いたときの姿を。

男としては、うやむやのうちに後宮に部屋を用意しておく方が気楽なのだ。求婚とか結婚の続きとか、そういう話題を口にせずに済む方が相手を招き入れやすくなる。

それは、この青年皇帝としても同じことだ。権力や財力など、この世界で男性に求められる全てを兼ね備えているその身では、わざわざ愛を囁いたりロマンティックな求婚の手続きを踏もうとは思えないのも仕方のないことだ。

かといって、いくら身分の違いがあるにしても、「私のものになれ」とストレートに言える相手ばかりとも限らない。

それでも、貴族の美しい令嬢を求めるのは容易なことだ。直接口説く必要さえ無い。

あの娘は独り身だったか。どういう娘か——そうやって娘の親に、あるいは人づてにでも示唆するだけで向こうから売り込みが来て、それを受け入れるだけで娘が運ばれてくるのだ。

もちろん、後宮で女同士が派閥を作れば国が乱れるから、あまり確固たる地位の差な

どが生まれないよう、形式的なものを整備しない方が良いという理屈も成り立たないわけでもない。

だが、そんな面倒な言い訳よりも、ジルクニフがロクシーを手元へ置くときの経緯こそがこの状況が手つかずになっている理由である。

決して華やかとはいえないロクシーの器量では、その親に皇帝の意思が正しく伝わらないのも仕方のないことだったのだろう。

うやむやのうちに後宮へ迎えるような道筋が無ければ、ジルクニフはわざわざ求婚の意思表示をしなければならなかったのだろうから。

その結果、両親が現実を理解して望外の喜びに打ち震えた後も、ロクシー自身は皇帝が口にした言葉——理想の母親像——だけを自らの仕事だと言い張って譲らない状況にあるのだが。

それでも、バハルス帝国の宮殿においてロクシーは何の問題もなく一人の寵姫として扱われ、舞踏会などの場では皇帝のパートナーさえ務めている。

後宮というものに形式的な秩序を持ち込んでいけば、ジルクニフはロクシーという逸材を得るのに余計に苦労したかもしれない。得たとしても、世継ぎの教育係のような名目で遠ざけられ、気軽に話もできなかつたかもしれない。

そう思えば、形式的な秩序を整備しようと思えるはずもなかつた。

普通に口説けば良い——などという発想は無い。帝国の絶対者にそのような選択肢は存在しない。

女の口説き方を覚えるくらいなら、為政者として挑むべき課題を一つでも二つでも片付けたのがジルクニフの本音だ。

国政のあり方を定めるのが皇帝の理性だとすれば、後宮のあり方を定めるのは皇帝の現実である。

そして、同じようによくわからないうちに後宮の端の部屋を与えられたのが、このクレマンティーヌだ。

帝都への帰還時、以前のような演技を捨てて聖女のごとく振る舞うクレマンティーヌを見てしまえば、ジルクニフにはこれを手元に置かない理由は無かった。

実際にはクレマンティーヌの側が恐ろしい主の主から命令された恰好にふさわしい演技をしていたに過ぎないのだが、そんなことは知る由もないことだ。

見た目はそれなりに美しく、帝国では最高峰となる武力を持ち、正義のために法国の最強部隊を出奔し、皇帝の前でも物怖じしない女。

ただ、一度は仕官さえ断られている。『漆黒』への義理を果たして戻ったと聞いてもなお、召し抱えられるだけで上出来だと思っていた。

が。そのため、謁見の際にまず交わされたのも仕官の話で、それで終わるはずだったのだが。

「常に帝都に置いていただけるなら、陛下にお仕え致しましょう」

帝都への潜入を命じられて戻ったクレマンティーヌだが、すぐに仕官を求められたことで気が緩み、思わず口を滑らせた。

仕官する者が皇帝を相手に任務地を指定するなど、ありえないことだ。

「……帝都に？」

訝しむような皇帝の表情に失言を悔やむが、吐いた言葉は戻らない。

「い、いえ、この帝都アーウィンタールの気候が肌に合うと感じたままで、その……」
誤魔化しの言葉も、ろくなものが出てこない。

聖女然とした恰好はしているが、ベースはへその出た鎧であって、実は少し寒いくらいだ。仕事を言いつけられていなければ、路地裏でチンピラでも殺して温まってから今の恰好に合う外套でも買に行っただろうか。

あるいは、そもそも今の恰好を強いられていなければズーラーノーン時代から使っている刺々しい雰囲気の黒の外套に身を包んでいたかもしれない。

クレマンティーヌは柄にもなく緊張を覚えていた。アンデッドであるモモンガから与えられた仕事を失敗すれば、次は生きた人間でいられるかさえわからないからだ。

マーレの主であるモモンガという絶対者は高い知能を持ち、一般的なアンデッドのように生者を憎むような雰囲気は持たない。

しかし、クレマンティーヌの洞察力は、モモンガが時折クレマンティーヌの身体を煩わしげに見ていたことを確認している。

それが、服装がマーレの性教育に悪いなどという理由であつたなどと、クレマンティーヌが気付けるはずもない。

クレマンティーヌとしては、半端な生者などアンデッドの材料にしてしまった方がマシだとか、そういう目で見られているのではないかと怯えるしかないのだ。

「ふむ、法国のエリートが帝国へ仕えるとなれば、それくらい我が儘は聞いてやらねばならんということか」

愉快そうな皇帝の声に皮肉の響きを感じ、クレマンティーヌはびくりと震える。

帝国も法国同様に実力社会だと聞いて甘く見ていたが、当然ながら皇帝と臣下の間には厳然たる身分の差が存在する。

さすがに、皇帝を前に武官として非常識な要求を口にするのは緩みすぎだ。

皇帝への無礼を気にするクレマンティーヌではないが、この仕事の失敗は死か、死よ

り辛い運命に直結する。

「も、申し訳ございません！ 私ごときが陛下に対し、身の程をわきまえないことを考えておりました！　どうか、聞かなかったことに！」

慌てて詫びるクレマンティーヌに対し、皇帝は何か気付いたように目を見開き、歩み寄る。

——潜入の意図に気付かれたか？

クレマンティーヌは頭を下げたまま、一瞬だけ逃走のイメージを思い描く。

しかし、その後はノープランだ。モモンガやマーレからは何をしてもし逃げられる気がしない。

ここは、有能な人材に寛容だという皇帝の人格に賭けるべきだ。

少しくらい牢で暮らすことがあつたとしても、最後まで諦めずにいた方がマシかもしれない。

「いや、顔を上げてくれ。実は、私も同じ考えなのだ」

お見通しではなく、同じ考えというのはどういうことか。

皇帝ジルクニフも同じ考えを——何かの仕事に失敗してアンデッドにされるのが嫌だとも言うのだろうか。

いや、そんなはずはない。単に帝都の守りに使おうという程度の考えならば、何かに

気付いたような皇帝の反応が不自然だ。

クレマンティーヌはわけもわからず、それでも潜入を諦めないためには友好的な態度を崩さない皇帝に追従するしかない。

「あ、ありがとうございます！」

表情を読まれないよう、クレマンティーヌはさらに深々と首を垂れる。

「ところで、今日の宿は決まっているのだろうか」

「い、いえ……」

このとき、クツ……と何かを堪えるように小さな声をあげたのは、存在感を薄めつつ近くに控えていたロクシーだ。

顔を歪めて堪えているのは笑いだが、それに気づく者は居ない。

「——もしクレマンティーヌがよければ、今夜からでも私の宮殿に部屋を用意しようと思っている」

「それでは、お仕えできるのでですね。まだ宿はとっていないので問題はありません」

問題はないのだが——。

翌朝でなくわざわざ夜から拘束していったい何をさせるつもりかというのは、愚問だろう。

戦士としての価値しかないクレマンティーヌが仕官するのに訓練参加も力試しもで

きなければ、本来の仕事は何も始まらない。

「う、む？ ……ああ、そうか。余計な手間が無いのは何よりだが。ん？——どうした？
浮かない顔をして」

「申し訳ございません。陛下にお仕えできるのは幸せなのですが、私のような田舎者には色々な段取りが煩わしく……」

全くもって本心からの発言には程遠い。スレイン法国の神都で暮らしていたクレマンティーヌにとつては、近年よく整備され規模も大きくなったとはいえ帝都アーウィンタールなど薄っぺらい新興都市でしかないのだ。

それでもこのようなことを言うのは、わざわざ夜のうちから宮殿に缶詰にする理由——そこで用意されるであろう、膨大な書類や手続を危惧してのことだ。

戸籍制度の整備されたスレイン法国では、国に仕える際に少なからず面倒な書類が存在した。クレマンティーヌはその殆どを共に仕える兄に任せることができたのだが、今回は兄は居ない。

そして、皇帝はわざわざクレマンティーヌを宮殿内の部屋に囲い込むと言っている。

帝国四騎士を一蹴する実力を示したクレマンティーヌには、相応の役職が、それも複数用意される可能性が高い。

役職の分だけ書類があつて、それらの全てが皇帝の改革によつて新旧の制度が混乱し

ているとしたら、無駄だらけ重複だらけの惨状を覚悟しなければならぬだろう。

そんな感覚が、六大神の知恵の賜物だとして文明レベルを大きく超える書類仕事を抱えさせられているスレイン法国の公人限定のものだということを、クレマンティーヌはまだ知らない。

「ふむ、段取りが煩わしいとはどういうことか。遠慮なく申してみるといい」

「はい。立場上いろいろあるんでしょーけど、正直なところ私は頭より身体の方に自信があるんで、面倒なことはすつ飛ばしてほしいんですよ。皇、帝、陛、下」

仕官が確定した安心感もある。そこで皇帝が思ったより話がわかる相手だったことで、クレマンティーヌは少し調子に乗った。

柄でもないが、最後は少し媚びたようになってしまった。

それだけ、書類仕事が嫌なのだ。

法国に仕えるとき、書類から逃げるためには——当時は殺したいほど憎むまでには至っていないかつたとはいえ——嫌いな兄にも少しだけ媚びたクレマンティーヌだ。

任務で取り入らなければならぬジルクニフに媚びるくらいは何でもない。

「そ、そうだな。クレマンティーヌが望むなら、私は段取りなど飛ばしてしまっても構わない」

表情を変えないようにしているようだが、皇帝の顔がうつすらと赤みを帯びる。表情

が動かないよう、抑えている。

そうだ、この国の多くの制度は、この青年皇帝自身が新設したもの。

まだ見ぬ書類の山を恐れるクレマンティーヌの態度は、彼が自ら手がけた制度を煩雑だと非難しているようなもので、少し苛立たせてしまったのかもしれない。

——でも、書類作業で一晩拘束とか最悪だから仕方ないかな。ここは一応、ご機嫌とっておけばいいか。

「ありがたきお言葉、感謝いたします。形式張ったことは苦手ですが、いついかなるときでも、陛下のお望みのままにお仕え致します」

「うむ、良い心がけだ。こゝ、今夜よりよろしく頼むぞ」

「——陛下」

脇に控えていた女が一步前へ出る。

「ゴホン！ 宮殿での生活については、このロクシーから説明があるだろう」

——何この皇帝、口だけ？ もしかして書類減らないの？ 宮殿で一泊どころか本格的に生活しなきゃならないほど書かされる？

クレマンティーヌは思わずロクシーと呼ばれた女に厳しい顔を向けるが、敵意のない優しい微笑みを返されて表情を隠す。

ロクシーというのは、以前に皇帝と会ったときも立ち会っていた女だ。後宮の住人と

してはあまりに地味というか――。

――監視役、つてこともあるか。

そう考えると、気が楽になってくる。

そもそも法国の漆黒聖典出身の人間を取り込むのだ。スパイ行為を防ぐために監視をつけるのは当然といえれば当然。

実際、クレマンティーヌの任務はまさにそれそのもので、マーレとその主のために潜入しているのだが、人智を超えた存在である主たちに対して監視など無意味だろうから何も問題は無い。

書類漬け一晩までは現実的な危惧だが、宮殿で生活するほどとなるとさすがに違うような気がするのだ。

後に調度品からベッドや寝具の希望まで聞かれたクレマンティーヌは、やはり監視であると同様に安堵した。

思いがけず華やかな部屋に、注文品待ちの代品ながら極めて快適なベッド。

書類などについて問えば、役人が勝手にやるから心配するなどの素晴らしいお言葉。

常に役職名無し『クレマンティーヌ様』なので、単にまだ何も決まっていないうちかもしれないが。

それでもここまで待遇がいいのは、戦力として見込んでいる存在を監視する心苦しきからとしか思えない。

あるいは手癖の悪さまで見抜かれているのかもしれないが、憂さ晴らしならいざれ訓練と称してそこの騎士でもかわいがればいいことだ。

血はあまり見られないとしても骨の五本や六本は問題にならないだろうし、恐怖を刻みつけて遊ぶくらいはできるかもしれない。

とにかく、どのような形であっても潜入することができれば良いのだ。

それがまさかこのような形となるとは、夢にも思わなかったのだが。

皇帝ジルクニフは、以前何度かクレマンティーヌへの好意を漏らした際のロクシーの反応が芳しくなかったこともあり、クレマンティーヌに対しては臣下として一歩ずつ距離を詰めていくという姿勢になっていた。

しかし、それを漏らした相手はロクシーだけではなかった。貴族どころか臣民ですら

ない相手を、ということになると、話が具体的になるずっと以前より、何かと根回しの準備をしなければならぬからだ。

もし相手が貴族の娘であれば、そのようなことをするだけで輿入れの日取りについての相談が始まってしまふのだが。

もちろん相手が臣民ですら無い冒険者であれば、そんなことは起こらない。

せいぜい気を回した誰かがクレマンティーヌ本人に意思確認を試みる可能性があるという程度だ。

当初、ジルクニフはそんな可能性まで思い至らず、クレマンティーヌが帝都に置けと言っていた意図を深く考えなかつた。

仕官してもらつたために最大限の便宜をはかるつもりはあつたので、普通に要望を要望として受け取つた。

もちろん、戦争や反乱鎮圧でこそ輝く武官が帝都から離れない条件を望むなど、興味本位でその意図を確かめたくなる状況にはあつたので――。

我が儘という言葉を使つて、反応を見てみることにしたのだ。

曰く、身の程をわきまえないことを考えていた。聞かなかつたことにしてほしい。

以前は演技とはいえ不遜な態度を取つていたクレマンティーヌが、ここでは焦りを見せて大げさに謝つてきた。

最高クラスの冒険者としての地位もあり、雇われねば死ぬわけでもなからうし、どのあたりが「身の程をわきまえない」発言だったのかと不思議に思ってしまう。

そうなる——さすがにジルクニフも、クレマンティーヌの背後にある状況と繋げて考えざるをえない。

おそらく、いや、間違いなく、皇帝の意を受けていた誰かがクレマンティーヌの背中を押してくれていたのだ。つまり——。

——帝都に置くというのは、私の後宮に置くということと言っていたのか。

ジルクニフも女を誘ったり娶る際に後宮という言葉を使うようなタイプではないから、回りくどい言い方をする気持ちもわかる。

実際に地方貴族の娘を迎えるときなど、「後宮に迎える」でなく、「帝都に迎える」「帝都に置く」などと言っていたこともあるのだ。

ロクシーのときも後宮や寵姫という言葉を使わなかったために、「乳母か教育係のよな使用人とするおつもりか」となどと言われ続け、今の関係に収まった経緯がある。

そして、クレマンティーヌをそういう対象として考えていたことはそれほど多くの相手に話したわけではないが、誰かが気を回して彼女に示唆する可能性を考えてよいほどには広まっているはずだ。

そうした示唆まで考慮するのは迂遠に見えるかもしれないが、後宮入りに関してはそ

ういうことまで察してやらないと臣下の家に恥をかかせてしまうこともあるため、皇帝は常にそういう可能性を考えておかなければならない。

ならば、ここで放っておいては彼女は遠ざかってしまうかもしれない。

数百の兵より個人の武勇が勝る世界において、クレマンティーヌの価値は後宮の秩序やジルクニフの心の準備といった些細な問題など吹き飛ばすほどに高い。

そのうえ、ジルクニフとしても異性として意識する部分はあったのだ。

あくまでジルクニフの主観においてだが、どこぞの器用で不気味な黄金の姫などは正反対の印象を与える不器用な義の人クレマンティーヌは、嫌いな人ランキング1位の対極とまではいかないまでも、好きな人ランキングの中ほどくらいには入っていた。

ジルクニフは、クレマンティーヌが唐突に伸ばしてきた手を取ることにした。皇帝として、当然の選択だったと考えている。

ただ、少し焦りもあつたかもしれない。「今夜からでも」というのは、気が変わらないうちにすぐにでも部下にしたいという意味では完全に本音だ。

すぐにでも迎えようと思ひ、彼女が冒険者であることを思い出し、皇帝の身でありながら無意味に宿の心配までしてしまった。

ロクシーは笑いをこらえていたようだが、ここで冷静になれという方がおかしい。

皇帝という立場にある者の人生には、断られるかもしれない状況で女を誘うという行

動は本来存在しないのだ。

皇帝が女に後宮入りを断られるなど、帝国のメンツが丸つぶれになってしまう。

事前に臣下を通じてそれとなく意思を確認するのと同じように、根回しの何かを確かめなければと考えてしまうのは、皇帝としての職業病と言つていい。

そして、ジルクニフはクレマンティーヌを迎えることに成功する。

自身の気持ちはもちろん、帝国の戦力充実のためにも、この選択は間違つていないはずだ。

そもそもクレマンティーヌは法国出身者で、経歴からすれば雇うなら絶対に監視は付けないといけない。

ならば、潔白を証明するにも近くに置くのが一番なのだ。

なお、これは他の臣下に向けての証明で、ジルクニフ自身は心配していない。

義の人クレマンティーヌへの信頼もあるが、そもそもこのレベルの人材については警戒するだけ無意味だ。

本気でその叛意を警戒するならば、四六時中ブレインかフルーダを側に置いていなければ安全は確保できない。

ブレインを雇ったときも同様だったが、信じないなら雇わない方がマシという状況なのだ。

そうであるならば、後宮に置くことについても特に警戒する意味はないということになる。

むしろ後宮に元漆黒聖典のクレマンティーヌありとなれば、フルーダの魔法的な防御とあわせ、皇帝の身の危険はほとんど皆無となるだろう。

男女の関係という部分については、ロクシーという例もあるので、判断を焦ることもない――。

そんな悠長な考えは通用しないようだ。

やはり皇帝という仕事は、何かと判断を急がされる。

「――正直なところ私は頭より身体の方に自信があるんで、面倒なことはすつ飛ばしてほしいんですよ。皇、帝、陛、下」

この性急で少し品のない甘え方には、違和感を覚えないわけではない。

しかし、このクレマンティーヌならば、それも仕方がないのではないか。

クレマンティーヌは人類屈指の強者ではあるが、義の人としての生き方を見るに、極めて不器用な人間だ。おそらく他者を助けるばかりで自分が甘えたことなど無いのだろう。

そんな女が、無理をしてまで寵姫としてのふるまいを見せているのだ。

元漆黒聖典、義の人クレマンティーヌ——彼女については今のロクシーが自ら決めつけているように、帝国のために必要な役割を担ってもらうことが主となつて、寵姫であることが従となるのだろう。

ジルクニフとしても、そんなふうにかけている部分があつた。

しかし、一転してこのアピールを聞けば、クレマンティーヌも女だということを考えざるを得ない。

受け入れたジルクニフとしても、貴重な戦力でもあるクレマンティーヌに恥をかかせるわけにはいかないとこだ。

ロクシー風と言えば、子供が皇帝の聡明さとクレマンティーヌの強さを受け継いでいれば問題ない、ということにでもなるのだろう。

その女、名をクレマンティーヌという。

姓は法国を出奔した際に捨て去ったが、新たな生活の場ではもはやそれを問う者は居ない。

外戚が力を持つことを許さないバルルス帝国の絶対君主ジルクニフ・ルーン・ファード・エルニクスの後宮にあつては、出自を表明しないことはむしろ美德ともされるからだ。

クレマンティーヌはこの日、ただのクレマンティーヌのまままで皇帝ジルクニフの寵姫となり、同時に、将軍格ながら役職を持たない騎士となった。

——どうして、こうなった。

皇帝の方に、思わぬ意図があつたということだ。

そんな可能性には夢にも思い至らなかつたクレマンティーヌは、話の行き違いで、それに応じてしまった。

それが、クレマンティーヌの理解だ。

だが、それをわかつたところでどうしろというのか。

行き違いがあつたとはいへ。今さら寵姫の身分から身を退くなど現実的ではないのだ。

このようなことでバハルス帝国皇帝に恥をかかせてしまえば、潜入任務を果たすことはもはや不可能となろう。

ちなみに書類の山など無かつた。

代わりに人生の岐路がやってきた。

アンデッドになるか。

寵姫になるか。

気持ちの上ではほどほどの差で、しかし冷静に考えれば大差で後者が勝るのだ。

ロクシーの説明を聞き流しつつ、それでもクレマンティーヌは一応の覚悟を固めていた。

——どうせ末席だろーし、戦力としても期待してると言つてたしね。そっちの方がメインで、女としての私なんか好奇心の対象でしかないでしょーに。

街へ出れば自身がそれなりに男たちの目を引く容姿であることを自覚しているクレマンティーヌだが、皇帝の後宮というのは世界が違いすぎる。

法国の諜報部隊である各種聖典においては貴族の愛人のふりをするような任務も無いわけではないが、クレマンティーヌはそういう訓練とは無縁だった。

ただ、実際に後宮へ案内されてみれば、元漆黒聖典の視線からは皇帝以外の男を排除した空間の無防備さばかりが気になってしまふ。

そこには、確かにクレマンティーヌの居場所があった。

帝国最強の戦士が後宮で皇帝を護衛すると考えれば、偽装としての寵姫の身分も理にかなった選択となる。

クレマンティーヌでは後宮でありがちな皇帝の毒殺などは防ぎようがないが、そのような細かいことを知る者はそうはいない。圧倒的強者がいるというだけで大きな圧力になるのだ。

——三食、昼寝付き、殺し無し。あとは礼儀作法だ何だを叩き込まれんのかな。潜入の間だけの我慢だけど、めんどくさ……。

後宮に入ることになったとはいえ、クレマンティーヌにはその身分にふさわしい品位も品性も礼儀作法も何もない。

皇帝の前に出すに足る女となるまで数週間から数ヶ月、その手の女官からネチネチと指導を受けるだけの日々となるはずだ。

おそらく、面倒な指導を受けている間にマーレやその主から新たな任務が与えられるか、潜入任務が終わるかするのだろうか。

もちろん、それが指導の期間を越えて長引いたとしても、クレマンティーヌには皇帝

の護衛としての価値しかないという現実が変わるわけではない。

つまり、実際に後宮の女としての役割を果たすことは無い。

寵姫という身分でいるのはむず痒いが、形だけだ。そう考えていた。

そんなクレマンティーヌが急な皇帝の来訪に驚くのは、部屋を与えられてから僅か数時間後のことである。

礼儀作法の指導など無かった。

事前の連絡も、人を使った所在・意思確認なども無かった。

スレイン法国神都の娼館でも、もう少し段取りというものがあるのではななかりうか。

「面倒なことば飛ばしてほしいと言っていたからな」

クレマンティーヌに迫るのは、バハルス帝国の絶対者、皇帝ジルクニフ。

その発端は、仕官に際しての面倒事の省略を狙ったクレマンティーヌの発言で。

気がつけば、後宮で寵愛を受けるに至るまでの諸々の面倒事が綺麗さっぱりとなくなっていたのだった。

後宮では、皇帝に無礼が無いよう、寵姫たちはいわゆるOKサインとNGサインを使

い分けなければならぬ。

それは寵姫本人の我が儘が認められるなどということでは決してない。

当然、皇帝が望めば月のものであるであろうが体調不良であろうが断ることはできないのだが、貴族の娘が多い寵姫というのは基本的に身体が強くはない。

途中で倒れたり皇帝の望むように動けなければむしろ無礼であるということでも出来上がった体調申告のシステムだ。

あくまで皇帝が快適に世継ぎを作る行為を楽しめるように、そして露骨にならないよう、寵姫たちは後宮に伝わる教養に溢れた方法でサインを出す。

しかし、人類最強の戦士であるクレマンティーヌには、身体についての心配は全く無い。

そこへ、面倒は飛ばせという本人のお墨付きがあるのだから、これは本当にいつでも良いということなのだ。

『——正直なところ私は頭より身体の方に自信があるんで、面倒なことはすつ飛ばしてほしいんですよ。皇、帝、陛、下』

これが、先ほどのクレマンティーヌの発言だ。

指摘されて思い返してみれば、その意味はあらぬ方向へ明快すぎて、覆しようがない。いつでも良いどころか、直ぐにでも抱きに来いと言わんばかりの、皇帝に向けた必死

のアピールである。

クレマンティーヌは自身の発言が持つ新たな意味を理解し、顔が熱を持つのを感じる。頭を掻き毟つて暴れ出したい気持ちになる。

目の前の男を血まみれの皮袋に変えてしまつて、全て無かつたことにしたい。そんな衝動にかられる。

しかし、クレマンティーヌはまだアンデッドにはなりたくない。

だから、ぐつとこらえる。

ぐぐぐとこらえる。

ぐぬぬとこらえる。

——柄じゃないし。そういうえば、もうそういう身体でもないんだよね。どうでもいいことだけだ。

クレマンティーヌは一つため息をつく、卑屈な笑みを浮かべる。

こんな所で取り乱す必要もなかったのだ。

ここまで近づけたのなら、皇帝に恥をかかせない限りは一步退いても軍には入れるだろう。

そして、それだけが自分の正しい役割だ。こんなのは違う。

クレマンティーヌは間近に迫るジルクニフの顔を正面から見据える。

そう、ここは皇帝が世継ぎを作る場所で、自分は――。

「少しはご存知と思いますが、私はこれまで平穩な人生送ってきてないんで、子供はできない身体だと思えます。たばかったように申し訳ありませんが――」

過去に酷い拷問を受けたため、使い物にならなくなっているかもしれないと思つていました。

クレマンティーヌの中では、それだけが真実だ。

しかし、実際のところ、つい先日にはそうでもなくなつていたりする。

たかがメイドと侮つて險悪になつたルプスレギナと内緒の「試合」をしてあつさり内臓ぶちまけて、そして聞いたこともない高位の回復魔法で証拠隠滅までされて。

実際にはいかなる古傷が残つていたとしても全快しているのだが、早々に意識を刈り取られていたクレマンティーヌに自覚は無い。

「全く問題は無い。実際、私が後宮で最も多く通つているのは、子供を作る予定のない女性の部屋だ」

そう語るジルクニフの顔は、決して無味乾燥な交流を語る男のものではない。

そのことに王侯貴族にありがちな闇を幻視し、クレマンティーヌは絶句する。

過去に酷い拷問を受けたクレマンティーヌは、その女にも厳しい事情があるのではないかと考えてしまう。

武力があり護衛として意味のある自分は例外として、バハルス帝国皇帝の後宮で子作りを拒んだり、元々生殖能力に問題のあるような女が入るなどありえないからだ。

まして、後宮に入っておきながら野心も持たず「世継ぎを生むに相応しい見目麗しい女に産ませてこい」などと言い放つロクシーのもとへ皇帝が足繁く通っていることなど、想像もできない。どちらも皇帝と寵姫というものに対する世間の理解の範疇を逸脱しているのだ。

つまり、その女に子供ができないのは、皇帝自身が原因だ。そして皇帝はそれを望み、後宮で最も多く通うほどそういう行為を楽しんでいる。

クレマンティーヌの頭の中では、そういうふうに繋がる。

「……陛下は、その女のように、私には他の後宮の女ではできないことを求めていると」「まあ、そういうことだな。子を成すだけが後宮での過ごし方ではない」

クレマンティーヌは大きなため息をつく。

生娘でもあるまいし、いまさら貞操がどうこう、相手の男がどうこうなどとくだらないことで悩むつもりはない。

しかし、これはあんまりではなからうか。

最近は、あっちへ行っても拷問、こっちへ行っても拷問だ。そういう運命、そういう人生なのだろうか。

二人きりの場で皇帝をどうにかするのは赤子の手をひねるより簡単だが、潜入任務をこなさなければアンデッドにされてしまう。

アンデッドになるか。

皇帝の後ろ暗い欲望を受け止めるか。

——はあ。そんなの、一度やられてから考えるしかないよね。

そう思える程度に色々と摩擦しているのが今のクレマンティーヌだ。

もちろん後者を選んだのは言うまでもない。アンデッドになつたら考えることさえできないのだから。

「気を悪くしないでくれ。必要なら、それなりの神官医に見せることもできる」

ジルクニフの言葉は、まるで他人事である。クレマンティーヌの表情は晴れない。

——神官医に見せるとか、それ当然だから。子供ができなくなるよーなことをするのに回復なしじゃ死んじゃうでしょーが！

自身の殺人衝動も特殊性癖だと言われれば認めざるをえないクレマンティーヌだが、だからといって他人の特殊性癖をぶつけられる立場になって笑顔でいられるほど人間ができていくわけではない。皇帝の前で取り繕っていた態度や口調も、漆黑聖典の頃ほどではないが次第にぞんざいなものになっていく。

だが、抵抗を諦めていたクレマンティーヌに対し、その場でジルクニフの特殊性癖が

牙をむくことはなかった。

普通にしている目新しさを感じてもらえるうちは、後ろ暗い欲望の出番は無いのかもしれない。

その後、バハルス帝国最強の直接戦闘能力を持つクレマンティーンが皇帝ジルクニフにだけ時折見せる怯えの表情は、その部屋へ皇帝を頻繁に通わせる原動力となった。

五六 絵になる女

それは出発も間近になって、エンリがマーレのドラゴンを見上げ呆気に取られていたときのこと。

「エンリ、帝国の皇帝と話をしてもらうことはできますか」

「こつ、皇帝!? 無理無理無理む——あ、ちよつと宝珠そいつはやめて！ お願いだから！ 死の宝珠なんかには喋らせたらず殺し合いになつちやう！」

「そうですか。……それなら手紙を渡すという方法もあるらしいのですが」

モモンガは色々な方法を提示しているようだ。それなのにマーレが残念そうなのは、どういふことか。

一緒に行くならエンリより宝珠の方がお手軽だと思っっているのかもしれない。あんまりだ。

「け、喧嘩を売るような手紙じゃないよね……」

「はい。モモンガ様が帝国と友好関係を結びたいというものです。今回は、滅ぼすとかはしないみたいです」

「よ、よかった。それなら、仕事として届けるしかないね」

ここ漆黒の塔では信じられないほどご飯が美味しいが、そんなご飯をいつまでもタダで戴いていいはずがない。

それに、既に報酬は受け取っている。「亜人の国の金貨では都合が悪かろう」ということで、まるでガラクタを押し付けるような気軽さで凄そうな武器を渡された。

倉庫に転がっていたというそれは、やたらと高級そうな大グレート剣だ。

刀身に黒いもやがかかっている不気味ではあるが、元々使っていたトロールの剣よりはマシだ。あれは常に油のような毒液がポタポタと垂れて感じが悪い。

ンファイレアは血のような不気味な赤いポーシオンを幾つか貰って至福の表情を浮かべていたが、きつとろくでもない薬に違いない。

ミコヒメの首には呪いを緩和するという首飾りがかけられ、自分でご飯が食べられるようになった。口もきかず自我を取り戻したようには見えないが、マールとエンリの間に入ってくるのが以前より増えたような気がする。少し感じが悪いので別の呪いでもかかったのかもしれない。

ともかく、仕事だ。

ナザリック地下大墳墓では「倉庫の肥やし以下」だという報酬だが、その価値は金貨数百枚か、下手をすると数千枚になるのではないかとンファイレアが言っていた。

そして、長い目で見れば冒険者を続けるのは本意ではないが、今の不安定な客人の立

場から冒険者に戻ることに躊躇は無いのだ。

あとは、未練があるとすれば。

——性教育、してもらえなかったなあ。
セーキョーイク

マールにふさわしい女にしてもらうため善処してもらえる約束だったが、モモンガも多忙だったのだろう。

エンリはナザリック地下大墳墓の女としてふさわしい「開発」を施してもらうことができなかった。

——先にイビルアイあたりと、しつぽりと善処してるのかな。

イビルアイは自分のいない間に他の冒険者に奪われたらしいが、「こちらで対応する」の一言で済まされている。

ならばモモンガはこれを奪還するため多忙であったか、既に奪還して開発の真つ最中であるか、いずれかなのだろう。

幼いまま永遠に年を取らず、頑丈でどんな行為にも耐えられそうなイビルアイは、モモンガにとって最高の玩具であるはずだから。

それは、マールから最初に話を聞いた頃からわかっていたこと。

ナザリック地下大墳墓の主はモモンガなのだから、当然に小さい子が優先だ。真つ先に開発される。

育ちすぎているエンリは、開発済というナザリックにおける女として最低限のスターラインにも立つこともできない。

これは仕方のないことなのだ。

一方、帝国ではその皇帝自身が『漆黒』との関係強化を目論むに至っていた。

漆黒の塔——魔導王モモンガとその勢力については、クレマンティーヌやフルーダからも手掛かりは得られず、全くその正体が見えてこない。

ならば、それとの間に介入する存在を上手く使うしかない。

「クレマンティーヌの口添えで、『漆黒』を我が国に取り込むことはできないか」

「だから私は下つ端だったから無理ですつて。話くらいはしてもいいですけど、露骨に取り込むつてのはどうでしょうね。そういうの警戒されるかもしれませんよ」

「では、どうすれば帝国に与してもらえるだろうか」

「ご存知の通り王国とは色々ありましたし、私の件があるから法国とは縁がありません。

『漆黑』は冒険者ですから、帝国を本拠とするメリットが大きければ自然とそうなるんじゃないでしょーか」

何も答えていないに等しい。

詳しくは聞かされていないが、『漆黑』に加えて『ザ・ダークウオリアー』も帝国に集結する予定だと聞いている。

だから、助言など必要ないのだ。

「ふむ……メリットというと？」

「エ・ランテルでは組合で優遇されてたみたいですよ。冒険者なので仕事をして名声が高まれば居心地は良くなるでしょーから、警戒されない程度にそうなるように誘導するとか……」

言葉の途中で聞こえたジルクニフの小さなため息に失望の色を見るが、奴隷同然だったクレマンティーヌに元仲間として過剰な期待をする方が悪い。

「居心地……名声……。そうか、名声か！ それだ！」

「何か思いついたんですか？ 不自然なことをすると警戒されますよ」

「ああ、大丈夫だ。わざわざ仕事を与える必要もないし、誘導をする必要も無いのだから」

何かの閃きを得て自信に溢れるジルクニフは、まるで別人のように輝き始める。

まるで世界の全てを見通しているかのような、圧倒的な自信。圧倒的なカリスマ感。それが少しだけ愛しく、少しだけ可哀想にも見えて、クレマンティーヌは余計な口出しを控える。

許されるなら、もう少しの間だけでもこの輝かしい青年皇帝を人類の常識が通用する平和な場所に居させてやりたい。そんなふうに思えた。

「——ところで、エ・ランテルでの優遇について、知っていることを教えてもらえるだろうか」

冒険者組合でのことにはあまり関心が無かったが、何も見聞きしていないわけではない。

マーレやその主の利益に反することはなさそうなので、クレマンティーヌはジルクニフに知っていることを説明していく。

もちろん、モモンガのことを一切話さなかったようにマーレに関する部分は伏せ、エニリを中心とする表向き『漆黒』の話には留めるが。

クレマンティーヌとしては、帝国やジルクニフのためにマーレらから睨まれるリスクを負いたいとは思わない。

しかし、ジルクニフと『漆黒』との間がうまくいって今の生活が続くなら、それも悪くないように思えるのだ。

——あとは、戦場かスラムの路地裏で遊べる自由時間がもらえたらいいんだけど。

別に殺さなければ発作を起こすとか絶対に我慢できないとかいうわけではないのだから、

残念ながら今のクレマンティヌには、そういう趣味嗜好を発散する時間どころか、そういう話ができる相手さえいない。

ジルクニフと四騎士の關係を見て口調や態度に幾らか地を出せるようにはなったが、さすがに後宮に快樂殺人者が居てはまずいことくらいクレマンティヌにだってわかる。

先の不安以外に問題があるとすれば、そのくらいだろう。

エンリヤンフィーレアのように聞き流して放置するだけであつても、最初から口できかないよりはだいたいマシなのだ。

ジルクニフは『漆黒』への対応について腹を決めた。

田舎者で成り上がり。そんな相手を一気に抱き込む必要があるならば、本人の対応力を超える規模で担ぎ上げてしまえば良い。

「我が帝国に、新たな英雄を迎えるかのように準備せよ！」

普通に考えれば、漆黒の塔に関わる謎の勢力に捕まった部隊の護送を請け負った『漆黒』は、その勢力との繋がりも含め警戒すべき対象でしかない。

しかし、桁が違うのだ。

皇室守護兵団《ロイヤル・エア・ガード》を一気に壊滅させる塔の勢力と『漆黒』とをまとめて敵に回せば、帝国は傾くどころでは済まないかもしれない。

それに、ジルクニフは開き直って相談相手としていますが、クレマンティーンが後宮入りを望んだことも繋がっているのなら、既に喉元に刃を突きつけられているに等しい。

ジルクニフが優れた人材に目がないことは広く知られていることであり、後宮入りはそういう意図であつたと考える方が自然なくらいだ。

フルーダとブレインを使えばクレマンティーンとの排除は可能だが、そうなると『漆黒』は確実に敵に回るだろう。

もし相手に敵意があるならば、帝国は既に詰んでいるのかもしれない。

だが、それは『漆黒』と塔の勢力が一枚岩である場合の話だ。

『漆黒』が人間の領域で活躍する冒険者チームであつたことは確かな事実であつて、そ

ういう冒険者にとって拠点として魅力的なのは亜人の領域より帝国の方であるはずだ。ならば、この露骨なまでに白々しい捕虜送還劇に関わる『漆黑』を警戒するより、むしろ正反対の対応をするべきだ。

人ならざる者たちの領域に位置する塔の勢力が冒険者に提供できるのはせいぜい相應の金銭や財宝止まりだろうが、帝国は英雄としての栄光と未来を与えることができるのだ。

——消息を絶った皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードが救出されたなどという理屈には変な笑いしか出なかったが、いいだろう。それに乗らせてもらおう……乗りつぶしてやる！

ジルクニフは儀典長のみならず実務に携わる儀典官まで呼びつけ、あらゆる手段について提言させ、仔細に検討していく。

バハルス帝国に存在する力は、武力だけではない。

今回用意するのは、強いだけの冒険者では決して対抗できない、それ以外の武器だ。

——『漆黑』のエンリは、国として全力で迎えば確実に抱き込むことができる。

それが、事前にエ・ランテルから得ていた情報とクレマンティーヌの話から導き出した結論だ。

理由はわからないが、エンリはエ・ランテルの冒険者組合に最初に訪れたときから優遇され、当人もまんざらではなかったように見えたという。

『漆黒』ほどの冒険者が帝都行き^の依頼を受けるまで本拠地から動かなかつた理由は、愛着のような単純なものかもしれない。

そして、『蒼の薔薇』との戦い^のときは吸血鬼の存在に気づいたことで討伐という形になつたが、当初は国の秩序に敬意を払い、かけられた嫌疑にも真剣に悩んでいたというのだ。

ならば、バハルス帝国としても、『漆黒』を華々しく迎え入れよう。

国家というものに一片の敬意でも持つものならば、逃れ難いほどの熱意をもつて。

幸い、『^{ロイヤル・エア・ガード}皇室空護兵団救出』という大義はある。

実際には漆黒の塔の勢力が『救出』して『漆黒』が運んでくるという話だが、そんなものは帝国において公式に広まっている情報ではないのだ。

「城門に至る大通りの左右を儀仗兵で固めれば見栄えはするだろう。皇室空護兵団^{ロイヤル・エア・ガード}を救出した英雄の、記念すべき凱旋だ。この事実を確実なものとして残しておくために必要な措置は——」

帝国はなりふり構わず、既成事実として英雄を確保する。

これは恐るべき漆黒の塔の勢力に敵意を見せることなく冒険者チーム『漆黒』という所属不明かつ強力な手札についての綱引きを始める、唯一の冴えた方法だった。

少なくとも、皇帝ジルクニフはそういうつもりでいた。

『漆黒』ことエンリ・エモットはドラゴンの背の上にあつて、ひたすら西へ向かつていた。

涼しい顔で座り込むマーレの横で、鱗の凹凸に指をかけて必死にしがみついていた。

「これは『漆黒』としての仕事なので、向こうへ着くまでに立てるようになってください。

……少しゆっくり飛ばしますか？」

エンリはぶんぶんと首を縦に振る。

一応速度は落としてくれるが、それでも膝立ちになるだけで命の危険を感じるほどだ。

このあたりは、以前と何も変わらない。マーレはいつもそうやって陰に隠れて、エンリを矢面に立たせようとする。

『漆黒』というチームは、目立ちたくなかったマーレの隠れ蓑だったのだから。

救出して運ぶことになる騎士たちは、漆黒の塔に接近したところでマールレの姉アウラが率いる恐ろしい魔獣の群れに囲まれ、すぐに昏倒させられたという。

遠目に見ただけだが、あの魔獣の軍勢はこの世の終わりが形をなして群れているような常識を超えた存在に見えた。

ならば、巨大なドラゴンに乗っているくらいでなければ、助け出したという話に信憑性がなくなってしまうのかもしれない。

せめて騎士たちの檻に向き合う時くらいは、ドラゴンの背に立てるようにならなければならぬのだ。

潰れたカエルのような姿でしがみついただけでいいインフイーレアや、マールレに風の結界で守られてちよこんと座っているだけのミコヒメが羨ましくないとはいえ嘘になる。

しかし、エンリは一人、立ち上がらなければならないのだ。

幸い、マールレによるピーストマンの大量殺戮に立ち会った頃から、身体が妙に軽くて全身に力がみなぎっている。

慣れない下半身下着に脚が引つかかったときなど、以前は頭からすつ転んでいたものだが、今は下着の布のほうが木の葉のように千切れてしまう。高かったのに。

最初は湿気がこもる不快さが気になっていた下着も、無ければ無いですーすーして落ち着かない。人間とは贅沢になっていく生き物なのだと思う。

そんなことより。

エンリは決死の思いで立ち上がり、風に煽られ、尻尾の方まで転がってしまった。

なぜか身体が強くなっても、経験のない動きがすぐにできるわけではない。無理だ。

エンリはそう思っていた。

しかし、強くなった身体というのは、強い踏ん張りだけでなく柔軟な対応力を備えている。

尻尾の方から這いずって戻る際には、鱗に引つ掛けた指の数本で自分の体重を支えられるという事実が気付かされた。

次に転んだとき、ついンファイレアの片足に掴まってしまっただけのつもりがその全身を龍の背から引き剥がしてしまったり。

そんな失敗を繰り返しながらも、足の踏ん張り方とバランスのとおり方を工夫することで、エンリはどうか龍の背に立つことに成功した。

帝国領空へひとり飛んでいったンファイレアだが、エンリには彼のその後について、よく覚えていない。

都合の悪いことは忘れてしまったとかではなく、対応を面倒がったマーレがエンリに宝珠を投げてよこしたからだ。記憶が残っていないのは、おそらく宝珠の側の問題なのだろう。

エンリに取り憑いた死の宝珠が骨スケリトルドラゴンの竜にでも乗って助けたのだろうか、エンリはそのことを考えないようにしている。もちろんンフィーレアとも会話さえしていない。

片手で放り投げてしまった詫びを言いたくても、元通りにカエルのように張り付いているンフィーレアが決してエンリの方へ顔を向けようとせず、「お姫様抱っこ……お姫様抱っこなんて……」とうわ言のように言っている状況では、放っておいてあげた方が良いでしょう。

エンリは龍の背の上でそれなりに動けるようになると、人目につかない羽の裏へと滑り込んで、手持ちの布で身体を拭く。

用がすんだ後、色々と頑張ったときの汗など問題にならないくらい無駄に新陳代謝レククンレククンを活発にしていたらしい自身の状況に気づき、人目を忍んでコソコソと拭く。

ンフィーレアを助けたときの記憶が飛んでいることも繋がるのだが、どうも死の宝珠がエンリに意識を明け渡す直前、余計なことを思い出して浸っていたようなのだ。

だから、入れ替わっていたエンリの記憶には、モモンガによる恐ろしい力の奔流を回想しているイメージしか残っていない。

宝珠によって意図的に記憶を飛ばされているなら大変なことだが、まるで恋わずらいのように、宝珠当人もつい無意識に浸ってしまったただけなのが救いだらうか。

——また下着を買っておかないと。

最後に見落としかけていたヨダレの跡を拭いたエンリは、布から漂う諸々を思いきり吸い込んでしまい、人生の大部分において無縁だった下半身下着の必要性を痛感する。

何より、次からは拭く順番には気をつけようと心に誓った。

「そろそろ、竜の背に立っててください」

マーレの指示は、本当にエンリが竜の背に立てるようになってすぐのことだ。

また懐から宝珠を出しかけていたので、間に合わなければエンリの自我はお役御免だったのだろう。

エンリは心底、頑張った自分を褒めたい気持ちになった。

確かに死の宝珠は切れの良い身のこなしと毅然としたふるまいができるからこういう仕事に向いているのかもしれないが、言動や雰囲気あまりにも最悪だ。

さらに、いくら宝珠にとって信仰の対象にも等しい偉大なアンデッドのオーラが忘れられないといっても、それを思い出して所構わず新陳代謝ヒクンを活発ヒクンにしてしまうのはあまりにも酷い。

どうしても宝珠を持たされる場合、先に水でもかぶっておいてやろうかと思うくらいだ。

そんなとき、地平の大部分を占めていた草原に切れ目が生じ、そこから煉瓦色の部分が大きく広がってくる。

「わあ、凄い大きな街……。マーレ、ちょっと買い物したいのだけど、あそこに寄ることはできない?」

「あそこが目的地なので、用事が済んでからなら行っていいですよ」

「へ? 目的地?」

——救出は? 騎士の人たちは? どういうこと!?

東の空より突如現れた巨大なドラゴンの姿に、この日の帝都アーウィンターは大変な騒ぎとなったという。

皇城より出て、帝都アーウィンターの中央を貫く大通り。

帝国騎士団のパレードも可能な広大な通りは不思議な静寂に包まれ、そこかしこでくぐもった金属音が奇妙な不協和音を奏でていた。

帝国の恩人が、ロイヤル・エア・ガードの驚馬ヒカクリフと比べて相当に大きい騎獣でやってくる。

そんな曖昧な情報だけを与えられていたのが、大通りの両脇を儀仗兵の装備で固める帝国騎士たちだ。

儀仗兵が隊列を崩せば、帝国騎士の恥となる——そんな意識だけが彼らの足をその場に縫いとめていた。

騎士たちの鎧がそこらじゅうでカタカタ、コチコチと音を立てているのは震え以外の何者でもないが、それでも彼らは帝国騎士の鑑と言える。

そんな音が聞こえるほどの静寂を生むまで群衆を大通りから完璧に避難させておきながら、なおその場に留まっているのだから。

なお、曖昧な情報の割に徹底した避難指示は、何が来るか聞かされているフールーダの判断によるものである。

後々の士気を考え、騎士たちの配置も最低限で良いと進言していたのだが、これは何か別の目的に突き進むジルクニフによって退けられている。

そんな、騎士たちのほか誰もいないはずの街並みの中に、息を潜めて潜伏する者たちがいる。

大通りに交わる細い路地や通り沿いの建物のバルコニーに分散して、彼らは街の背景に必死に溶け込み、潜んでいた。

儀典官があらゆるコネクションを活用してかき集めたその数は、十や二十に留まらない。

それら全てが、慣れない打ち合わせを経て、それぞれの角度から大通りに来る者たちを狙っている。

普段は冒険者組合と酒場くらいにしか出入りしない無精髭の男などは、帝都中央通りの品の良い街並みに溶け込むこともできず、通りに面したバルコニーで洗濯物のシーツを被つて息を潜めている始末だ。

もちろん、怯えがないわけではない。大半は膝が笑っているだろう。

しかし、それが自身の危機を越えて帝都の危機、あるいは帝国の危機とまで感じられれば、逆に彼らは奮い立つ。

彼らは最後まで自らの姿を目立たせることはないが、このハレの日には必須の存在である。

ドラゴン
竜が巨大な牢獄を携えたまま着地し、若干の地響きを生じたあとは、静寂がその場を支配した。

口を開くべきエンリが竜の背ドラゴンに立ったまま硬直していたからである。

マーレだけはマイペースに不可知化の魔法で身を隠しながら布の留め具を外し、ンフィーレアが落ちていないか確認し、風の結界が切れる前にミコヒメを安全な場所へ移動したりしていた。

そして、役に立たないエンリを諦めかけて懐の宝珠に手を伸ばしたとき——。大通りに、強い風が吹いた。

巨大な布が風に煽られ、箱状の構造物から外れてしまう。

が、徐々に下着を付けない下半身を強風に煽られたエンリはそれどころではない。

不思議と俊敏になった身のこなしで黒衣の裾を自然に抑えつつ。

巻き上がらないよう足を開き気味のポーズを取り。

黒衣の中で目立たない程度に膝を突っ張り。

『漆黒』のエンリとしての堂々とした態度を守りながら、下着の無い下半身を隠し切った。

——守り切った。大丈夫。見えてない。というか、こっちは見んな!!

エンリは儀仗兵たちの視線が集まるのを感じ、蔑みの情を隠さず睨み返す。

その刹那——。

「どんちゅう緞帳が上がったぞ!」

声をあげてにわかには色めき立ったのは、エンリに視線を集める儀仗兵ではなく、街並みに潜む者たちだ。

ロイヤル・エアガード
皇室空護兵団が居るならそこであろうと、誰しも見当はついていてた。

しかし、緞帳ドゥンチュウがおりている間は、舞台は始まらないものだ。

皇帝が儀仗兵まで並べた榮譽有る舞台において、早まった行動は許されない。

だから、全ての者たちは、ただ待つていた。

緞帳ドゥンチュウがあがつて、ロイヤル・エアガード
皇室空護兵団との再会を喜べる瞬間を。

その瞬間、皆が駆け寄り、助け出された者たちはもみくちやにされるかもしれない。

それも素晴らしい光景だが、彼らがとらえなければならぬのは感動ではなく英雄な

のだ。

ロイヤル・エアガード
皇室空護兵団が帝国に戻る記念すべき瞬間といえども、それが彼らを救出した英雄を

覆い隠してしまつては台無しになってしまう。

ならば、そうなる前に記録しなければならぬ。

『漆黒』を救出者として、英雄として帝国に固く紐付けしておきたい皇帝の意図からす

れば、それは絶対的な要請だ。

だから、彼らはその瞬間を一齐にとらえる。

その手段は、時に冒険者組合などでも実用的に使われている、魔法複写と呼ばれるも

のだ。

重要な式典に訪れる要人の馬車の扉も、この箱状の構造物を覆い隠していた巨大な布も、彼らにしてみればそれら全てが緞帳じんちやうであって、それがあがった瞬間から彼らの勝負が始まる。

その緞帳じんちやうが、たった今、取り払われた。

「あらゆる角度からの魔法複写も残しておくべきだな。魔法だけでは味気ないから、画家も幾人か用意できるか」

準備の段階において、ジルクニフはそう言っていた。

儀典官は青年皇帝の意見を尊重しつつ、こう申し添えた。

「画家などに瞬間を切り取ることはできません。魔法複写に脚色を加えるだけの存在となりますが、場の空気を吸わせておくことには確かに意味がありますよ」

脚色を加えるだけなど、とんでもない。

姿を見せた皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードへ誰一人駆け寄る者もないままに時は過ぎ、画家たちは手早く大枠のデッサンまで終えてしまう。

魔法複写の使い手たちも、当初の予定を超え、魔力の限りに幾度も記録を続けている。

彼らが入ったまま布をかけられていた大きな箱は、巨大な牢獄だった。

それも、東の亜人たちが人間を輸送し売買するときの禍々しいもの。

全くわからないのならまだ幸運だったろうが、不幸にも帝都には闘技場がある。

どこかの国がいつ鹵獲したかもわからない半分サイズのものが、今でも亜人や怪物を收容し、運び込むような演出のために使われていたりするのだ。

牢獄の中では榮譽有る皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードのエリートたちが、騎獣の驚馬ヒポグリフとともに奴隷繋ぎで無造作に転がされている。

当初はモノ扱いとはいえ整然と詰め込まれていたのだが、高速飛行と着地の衝撃で散々な状況だ。

そして、牢獄を無造作に掴んで運んできた巨大なドラゴンの威容がある。

その背には、黒衣の女が一人。

儀仗兵たちを見下ろす女の厳しい視線には、明らかに蔑むような色がある。

榮譽有る皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードをゴミのように詰めた牢を放り出して。

帝都を容易に滅ぼしうる巨大な竜の背の上に仁王立ちとなり。

歓迎ため儀仗兵の装いで終結した帝国騎士たちにゴミを見るような視線を向けている女。

これが、皇帝ジルクニフの厳命によって英雄のごとく——いや、英雄そのものとして

迎えなければならぬアダマンタイト級冒険者、『漆黑』のエンリ。

その姿は、幾多の魔法複写に、そして絵画に写し取られることとなった。

このときの画家たちの幾人かが流出させた絵画と魔法複写。さらにそれらの複写や脚色を加えた絵画までも含めれば、その数は後世の美術史家でも把握しきれぬものではない。

当初つけられた表題は多種多様なものだ。『悪夢の凱旋』『霸王の使者』『漆黒の悪夢』『帝都の落日』……初期においては表題ごとにそれにあつた脚色を加えられ、作品が作られていく。

そして、後の時代にはそれらの全てが一つの表題に統一される。

『霸王の凱旋』

スレイン法国の宗教芸術や王侯貴族の肖像画が中心であつたこの時代の絵画・複写芸術としては、あまりに冒瀆的であまりに刺激的な作品及び題材であつた。

それも、絵画・複写芸術の被写体が光り輝く神話の神々から闇に佇む不死の王やその眷族たちへと激変する、いわば黄昏時とも呼ばれる時期のことである。

神でも不死者の眷族でもない実在の人間を被写体とした“剥き出しの悪”の表現は、強い時代性をもつものとしてではやされることになる。

まさに人間たちが闇の勢力の支配を受け入れる下地を持っていたことの証左として、
絵画・複写芸術の歴史に燦然と輝くものとならざるをえない。

当然、時代を問わず愛好家・収集家に生まれ、その多くが数千年後まで受け継がれて
いくことになる。

五七 恫喝外交とジルクニフの秘策

「陛下！ 御避難を！」

そんな声で、皇帝ジルクニフは我に返る。

——むしろこの状況、この因果から避難する道筋を誰か示してはくれないだろうか。ジルクニフが英雄として迎えるよう厳命した客人は、果てしない恐怖と嗜虐を携えて現れた。

牢の中で奴隷繋ぎとなつた皇室ロイヤル・エア・ガード空護兵団のありようは、まるで見せしめだ。

「逃げてどこへ行く。それ以前に、逃げてどうなるというのだ！」

帝都を捨てて逃げれば、いい笑いだ。まして、その災厄は皇帝自ら呼び込み、英雄として迎えよと厳命したもののだから。

そうなれば皇帝の求心力は失われ、貴族たちの一斉蜂起さえありうるだろう。

求心力の背景にあるのは騎士団という軍事力であり、それを辱め踏みにじるような客人をわざわざ歓迎するため呼び込んだしまったのだ。

かといって、戦えば——その結果は、もはや想像もしたくないものになる。

クレマンティーヌを超えるという『漆黒』だけでも四騎士が壊滅しかねない上に、巨

大なドラゴンがいる。さらに背後には、囚われた皇室空護兵団ロイヤル・エア・ガードを助けた——いや、実際には何もさせずに捕えた漆黒の塔の勢力もいる。

——戦うも逃げるも破滅しかない。つまり、これは……。

ジルクニフは苦虫を噛み潰したような顔で、儀典長に計画の続行を指示する。

驚馬ヒホクリフを利用した開放型空挺馬車の準備があることを聞かされると、その顔は怒りに紅潮する。

その理由を問い詰めれば、『漆黒』と個人的にも交流があるというフルーダの助言に行きつく。

——当初の予定通り、歓迎するしかないということか。

ジルクニフは冷静さを失った。

まずフルーダの裏切りの可能性を考えたが、『漆黒』が巨大な飛行騎獣で帝都に乗り付けることを聞かされていただけと考えることもできる。

それは捕虜輸送の必要性を考えれば無理もないことで、捕虜があのような状態で運ばれてくるということを知っていたわけではない。

そもそも、冒険者である『漆黒』がバハルス帝国に正面から喧嘩を売ることなど想定外なのだ。

漆黒の塔の勢力——魔導王モモンガと名乗る存在の名代として手紙を届けるなどと

通告はあったが、所詮は冒険者、単なる手紙の運搬人と軽く見ていた。

むしろ、そこで冒険者などを使うことは、恐ろしい軍事力を持つであろう魔導王にもつけ入る隙があるのではないかと思わせた。

だから、相手の手がかりを持ち、力もある『漆黒』を取り込むことを考えていた。それさえも、巧妙な罠に絡めとられ、誘導された思考であるように思えてくる。

「魔導王モモンガ……何者……いや、それはこれから見定めていくことだ」

国を背負った使者——外交官には本来、国を背負うに足る威厳と優れた弁舌が必要で、そうでなければ国家が軽んじられてしまう。アダマンタイト級でも屈指の強者とはいえ、若い冒険者などに務まるものではない。

しかし、それは背負う国の姿がある程度見えている場合の常識なのだろう。

底知れぬ存在である魔導王モモンガは、その正体を見せることなく、既知の存在としては人類最強のアダマンタイト級冒険者を使者し、それを竜の背に乗せて派遣した。

これは、情報を抑えたまま示威行為デモンストレーションを行う、一挙両得の手だ。

だが、何もわからぬからといって、相手の思うがままに振る舞うわけにはいかない。少なくとも、魔導王モモンガは『漆黒』との繋がりにある。

そして、『漆黒』は帝国の敵である王国と繋がり深い、『蒼の薔薇』と敵対している。世界を俯瞰すれば、『漆黒』を抱き込むという当初の計画を進めることにまだ意義はあ

るはずだ。

「……空挺馬車を出せ。皇帝が客人を見上げるのでは恰好がつかん。それと、最上級の歓待準備を整えておけ」

ジルクニフは、『漆黒』の手を取らざるを得ない。

たとえその背後に存在する悪魔の手を取るようになるうとも。

ジルクニフがどう対応しようと、帝都にドラゴンが現れ、帝国はそれに対し何もできなかつたことは変わらない。

バハルス帝国の喉元に突き付けられた刃は現に存在していて、その事実を変えようがない。

ならばそれと対峙するのも、もちろん手を結ぶのも、皇帝以外ではあつてはならない。

内向きの発想だが、竜ドラゴンに乗つた無法者に怯える皇帝の排除は容易でも、竜ドラゴンに乗つた無法者を抱え込もうとする皇帝ならば、その排除は難しくなる。

皇帝の権力を象徴する騎士団を辱められ、その威信を傷つけられたのは大きな痛手だが、その力関係を覆しようが無いのであれば、それを成した者をも皇帝の力の背景として取り込むしかないのだ。

ジルクニフは勝てない戦いに挑む男ではない。そうやって国内を抑えながら相手を見極め、必要ならば他国の力も結集し、反撃の時を窺うつもりだ。

——クレマンティーヌは、『漆黒』に関して伝えていない情報はあっても、嘘をついている雰囲気はなかった。

幌の無い豪華な空挺馬車は、足の悪い場所への視察などで皇帝の所在を示すことができるものだ。

防御の手段を持たないため、これで味方以外の前へ出る際は腹をくくことになる。

ジルクニフが空挺馬車に乗り込み、建物に隠れてやや上方に回ってから竜の背に接近するよう指示する。

竜は賢い生き物なので、騎獣とされているならば危険は無いという判断だ。

せめて少しでもペースをつかみたいがゆえの行動だが、ジルクニフが前へ出ていく直前に先手を打たれてしまう。

「皆さん、聞こえますか!?! 私には魔導王モモンガ様にお仕えする、『漆黒』のエンリです!」

ジルクニフは耳を疑う。

『漆黒』は王国出身の冒険者のはずだ。

かつて中央との繋がりの深い『蒼の薔薇』と揉めた直後という最高のタイミングで帝国へ呼ぶことができたため、実質は根無し草に近い状態だと考えていた。

魔導王モモンガと接近して帝国を威圧するような暴挙に出たとはいえ、それでも冒険

者は冒険者。魔導王とやらとは別個の存在と考えていた部分がある。

しかし、このエンリは「お仕えする」と言った。

ジルクニフの前提が、また、崩れた。

「この騎士たちは、モモンガ様のお住まいの近くで魔獣の群れに襲われ囚われていたため、その慈悲により救出されたものです。私たちはそのモモンガ様の使者として——」

エンリの口からは、何か聞かされた内容をそのまま読み上げているような、白々しい言葉が続く。

これは、事情を知らない冒険者の言葉ではありえない。

救出に関わっていても、あるいは輸送だけを請け負ったにしても、ここまで白々しい読み上げとはなるまい。

そして、その内容も聞くに堪えない。

これだけの圧倒的な示威行動に出ておきながら、慈悲だ救出だと並べ立てるのだから。

ジルクニフは、エンリの言葉を遮るように大声を張り上げる。

「皇帝、ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスである！ 話がしたい！ 使者殿、足場の良いこちらへ来てもらえるだろうか！」

同時に、御者には接近を促す。

交渉では弱腰にならざるをえない可能性もあるため、通りに居並ぶ騎士たちにあまり話を聞かせるべきではないからだ。

「……話をするつもりはありません。私はただ手紙を届けに来ただけですから」

一転して口をつぐみ、書状を差し出してくるエンリ。

届け物がそれだけなら、今頃和やかな雰囲気を迎えていたのだが。

ジルクニフが巨大な牢獄の中に詰め込まれた手紙以外の重要な届け物と差し出された書状とを見比べると、視線の動きに気づいたエンリは気まずそうに目をそらす。

ロイヤル・エアガード
皇室空護兵団の惨状について思うところがあつたのかもしれない。

あるいは、手紙の内容が、届けた者が長居することに危険を感じるようなものなのか。

——これが宣戦布告であつたら、帝国は終わりだ。

逆上して使者を殺すような時代でもないが、今回は使者に怒りをぶつけてしまえば最低でも帝都の半壊は免れない。

ジルクニフは臍腑を締め上げられるような不安に苛まれる。

魔導王モモンガなる者と接点があるのは、この『漆黒』だけだ。

手紙がそういう最悪のものでなくとも、その接点を失うのは危険すぎる。

「それでは、報酬を出そう。冒険者を留め置くには必要なものだ。仕事の依頼を出すの

で留まってはもらえないだろうか」

もはや、エンリがその気なら一刀のもとに斬り伏せられてしまう距離に近づいている。

皇帝のなりふり構わない態度に、会話が漏れないよう配慮した側付きが促して距離を詰めさせたのだ。

「申し訳ありません。依頼主の元へ戻るまでが仕事ですので……」

ジルクニフは諦めない。

最後の手札が残っている。

「そうだ、クレマンティーヌに会っていかないか。彼女は今、私の後宮にいる。元仲間なのだろう」

「いえ、結構です。彼女と話すことはありません」

何か彼女の前で話をする都合の悪いことが起きるかのような、明確な拒絶感。

クレマンティーヌに絡めれば誘い方も色々あると考えたが、これでは話も広がるまい。

もしかしたら、魔法でクレマンティーヌと連絡を取るなどして、同時に会って話をすれば口裏が合わせにくくなるのかもしれない。

それならば全てが裏目に出ることも当然だが——さすがにそれは悪い方へ考えすぎ

だろうと、ジルクニフは軽く頭を振って不穏な考えを追い出す。

全ての手札を失っても、ジルクニフは諦めない。

ここで帰られてしまったら帝国は負け犬も同然だが、現実には戦いを挑めば国が傾く。

『漆黒』を引き留めることこそが、今のジルクニフの戦いなのだ。

ただ強者に侮辱されて終わると、強者と何らかの密約を結んだと周囲に思われるのでは、その後の皇帝の求心力が全く違う。

「用が無くとも、義理として会わねばならぬ用事があるとすれば、どうだろうか」

「ぎ、義理ですか？」

そんな用事など無いのだが。

これは、エンリが義理を重んじる性格らしいという事前の情報から出たジルクニフの先走りだ。

「クレマンティーヌの元仲間として、さすがに帝国に留まらざるを得ない話というか――」

繰り返すが、そんなものはない。

クレマンティーヌという手札を持つ手の震えを隠しながら、ブラフをかけているだけだ。

唯一の手札の使い道を、必死に考えながら。

「あの、今回の手紙は友好目的のものと聞いていますから、また日を改めて来ることもできますので」

ありえない。

側付きに渡した書状をひつたくるように見るが、確かにそう書いてある。

しかし、やっていることは明らかに恫喝外交だ。

ここで『漆黑』を帰せば、恫喝を受けて何もできなかった弱い皇帝ということになって求心力を失う。

——それが狙いか！ 弱り切ってからじつくり喰らおうという魂胆とは、魔導王モモンガ、忌々しい奴だ。

つまり、いずれにせよ『漆黑』を返すわけにはいかない。

「むしろ、魔導王殿の使者として訪れたのであれば、残ってもらわねばならない理由があるのだ」

だからそんなものは——。

ジルクニフは必死に考える。

友好国の使者が残るべき行事を。

同盟に関わる外交儀礼はどうか——。

同盟と呼ぶなら、この手紙では無理だ。

新たな書状を用意して届けさせる形になるが、魔導王の所在を聞かされれば済むことで、ある程度の期間引き留めておくには弱い。

他に、他国の使者の参加を求めような出来事――。

弔事などはない。

慶事も――無い。皇帝の身边では、せいぜいクレマンティーヌが後宮入りしたくらいだ。

これが正妃であつたなら、『漆黒』としては元仲間の慶事であり、魔導王の名代としても友好国の皇帝の慶事でもあるということ、引き留める理由にはなつたのだが――。現状は八方ふさがりだ。

しかし、ジルクニフはバハルス帝国の絶対者であり、あらゆる現状を変える力を持つ。あらゆる選択肢と、その道筋にあるものを検討することができる。

ジルクニフは周囲の状況が見えなくなるほど、懸命に思い悩んだ。

現在より未来に繋がるあらゆる因果の系に思考を集中して。

そして、とうとう望みの道筋を引き当てて。

空挺馬車の上へ招いた『漆黒』のエンリの手を取り、帝都に引き留めることに成功した。

誤算があるとしたら、魔法複写や画家の存在を忘れていたことくらいだろう。

『闇に堕ちる青年皇帝』もまた、この時代の絵画・複写芸術の世界を彩る有名な題材の一つとなる。

クレマンティーヌは、最近は皇帝から昼騎のお仕事団の訓練参加を許され、それなりに充実した日々を過ごしていた。

純粹に戦士としてであれば、自分より少し前から騎士となっていたブレイン・アングラウスとの訓練くらいしか有意義なものはないが、クレマンティーヌには他にも楽しみがある。

少し猫を被って「特別扱いは困る」と自分の過去を伏せさせて新入り用の鎧一式を用意してもらったら、予想通り、色々と釣れるのだ。

騎士団は実力社会だ。育ちの悪い寵姫がお遊びで騎士団に入り、新入り扱いとはいえ様々なお偉方と一緒にいる所を見ることになれば、面白くなく思う者も多い。

実際には將軍どころか四騎士クラスが相手でも、帝国最強の戦士であるクレマンティーンにとつては格下の訓練に付き合つてやるような関係なのだが、鎧の質も違えば貫禄も見え方も変わってくるのだろう。周囲からはそれが逆に見えてしまう。

クレマンティーンは人間の負の感情が大好物だ。正確には、感情そのものではなく、それがもたらす愉しみを好んでいる。

わざわざ人目の無い場所へ向かう姿を見せておけば、ありがたいことに先輩騎士たちが「居残り訓練」と称して遊びに来てくれるのだ。

最初は我慢してビギナーズラックを装つて痛手を負わせるようにすれば、少しずつ人数も増えて手ごたえもマシになってくる。

命まで取れない上、訓練で考えうる最悪の重症程度に留めなければならぬのが残念なところだが、一応の戦闘訓練を積んでいる集団で遊べるのはクレマンティーンとしてもそれなりに気分の良い時間なのだ。

この日もそんな上機嫌な「訓練」をこなし気分よく休んでいたクレマンティーンだが、後宮にある自室で少々難しい顔の皇帝を迎えた時は少し嫌な予感を覚えた。

「儀礼的な場に出てもらうことが無いわけではないと以前にも説明があつたと思うが――

――やはり、面倒ごとだ。

「何というか、近々そういう機会があるのだ。もちろん、面倒は省けと言われた通り、手続きなどはこちらでやらせてもらうので心配はいらないのだが」

嫌だが、仕事なら仕方がない。

もちろん、仕事以外の部分で楽をさせてもらえるように釘は刺しておく。

「わかつてますよ。難しいことを覚えろとか言わなければいいです。私が一番近くで護衛すれば、相手が魔法以外で来るならだいたい大丈夫ですからね」

「それは心強いな。私のパートナーとして少々面倒な式典に出てもらうことになるが、それが済めばクレマンティーヌの身分や待遇も今より良くすることができらるだろう」

「身分や待遇とか、どーでもいいんですけどね。面倒つてのはどんなもんなんですか？」
クレマンティーヌの言葉を聞いて、ジルクニフが少し安堵したような。

皇帝などという地位にありながら、無欲な女が好みなのだろうか。

「時間はかかるし、服装も華美な、お前にとっては煩わしいものになるかもしれない。しかし、段取りは全て側付きの者の指示に従っていけばよいようにしよう」

「それなら別にいいですけど。……でも、ダンスなんかはまだ無理ですよ」

習わされているのだが、無理ではない所まで向上する気がないのでからお察しである。

知識や教養の座学などは免除されても、皇帝と同伴して恥をかかせないための最低限

の教育までは回避できなかつた。

そのため、クレマンティーヌでも華美な服装といえは舞踏会という程度の発想はできるようになっている。

「はは。最高の護衛とダンスで距離を離してしまうわけにもいくまい。私たちは上から見ていられるようにするさ」

ダンスに参加すれば、二人で踊るだけではなくなる。

護衛としての価値を認められているクレマンティーヌには、やはりダンスの練習など必要ないのだ。

「お願いしますよ。恥をかくのは陛下もなんですから」

「そうだな。皇室としても大事な式典だが、クレマンティーヌが無難にこなせるよう調整させよう」

「陛下……そんな大事な式典に私なんかでいーんですか」

「いや、お前でなければ駄目なんだ。だから、よろしく頼む」

クレマンティーヌでなければ駄目ということは、よほど危険な場だということになる。

しかし、ジルクニフにとって危険でも、クレマンティーヌが護衛を務めればどうということもない。

やや硬い表情のジルクニフに対し、クレマンティーヌはその緊張を解きほぐすように微笑みかける。

「私でなければ……結構恨み買ってるんですね。ま、そっちが本来の仕事なんですよーから、どんな危険な式典でもお付き合いますよー」

「よくぞ言ってくれた。クレマンティーヌも多くの貴族に恨みを買うかもしれないが、そこは覚悟しておいてくれ」

「どーでもいいですよ、そんなの。それに暗殺の首謀者とか、判明したら即取り潰しできるんですよー」

この時のジルクニフの笑いは、どうも苦笑というな雰囲気のものだった。宮廷の常識などはわからないが、何か的外れなことでも言っただろうか。

この苦笑の意味を、この時のクレマンティーヌは理解できなかった。

帝都に滞在することになったエンリは、空いた時間で念願の下着を買いなおしたこと

でようやく落ち着くことができた。

その時に勧められ断り切れずに試着購入した夜着の滑らかな肌触りは感動ものだったため、宿へ戻ったらさっそくンファイレーアを廊下に追い出して着替えてしまう。

確かに良いものだ。だが、高品質なマジックアイテムである陽光聖典隊長の黒い法衣と比べればそれほど差があるわけではなく、裸の上に法衣を着ていた頃と快適度においてそう変わるものではない。

それでも、アルシエに腰回りから脚の間の付け根までべたべた触られて奇異なものを見る目でみられたり、アルシエやフルーダから妙に鋭い視線を向けられ見えただけ見えないだのと不穏なことを言われたエンリは、下着を付ける文化に目覚めてしまったのだ。今さら後戻りはできなかつた。

ついでに部屋用の楽な下着は無いのかなどと口にしたことで、その答えとして店員より提示されたのが一枚だけで済ませられるこの夜着である。

繊細な薄布ながら一応大事な所は透明度が低く、伸縮性があって動きやすく寝心地が良い。それは身体のラインが丸みから小さな突起に至るまで完全に出てしまうということでもあるが、帝都という大都会の店員が「貴婦人の寝室での正装」とまで言っていたという絶大な安心感を前にすればそれは些細なことだ。

すなわち、エンリの感覚では極めて健全な部屋着ということになる。

身体のラインが丸出しの薄布であっても、その上に「都会人の正装」という分厚い概念のガウンを羽織っているから恥ずかしくないのだ。

都会であろうが田舎であろうが、貴婦人の寝室には夫以外の異性が入りしなないなどということも、誰かに教えて貰わなければ最初から知ることできないのだから。

だから、着替えを終えて呼び戻したンファイレアがちらちら見えてきても、エンリには気にならない。

そういえば、今日は色々なことがあった。

話をしなければならぬことが沢山ある。

ンファイレアも話したいことが沢山あるのだろう。そう考えた。

話題はすぐに、皇帝との会話の内容に至る。

「ねえンファイ、ケージって何だろう？」

「慶事^{ケージ}ってというのは、めでたいことってという意味だよ」

それは、友好の使者が帝都に居残るだけの理由となるものだ。

「それならンファイ、セーヒってというのは？」

「正妃^{セーヒ}ってというのは、正式な皇妃様っていう意味だよ」

それは、その慶事に背を向けるのは失礼になりかねないということでもある。

「だとしたらンファイ、クレマンティーヌって誰なんだろうね？」

「僕たちと一緒に旅をしていた、ちよつと怖い人、のはずなんだけど……」

「こゝこの国つて、大丈夫なのかな」

「えつと、ほら、ここでは義の人クレマンティーヌだからね。そういうことなんだよ。僕らの知っていることは黙っていて、素直に祝福してあげるしかないんじゃないかな」

「……なんかンファイ、寂しそうじゃない？」

「そ、そんなことないよ！ エンリこそ、命の危険が減った割には嬉しそうに見えないけど？」

「そうかな……うん、そうだね。この国ではクレマンティーヌのオマケみたいに見られていたはずなのに、いつの間にかそうじゃなくなっていたことも気になるし——あの時、すごく嫌な視線がいっぱい集まったんだよね」

エンリは帝都にドラゴンで乗り付けた時と、皇帝と握手した時、二つのタイミングで、その場に永遠に縫いとめられるかのような無数の強い視線を感じていた。

たとえ記録目的であれ、今のエンリのような高レベル冒険者を魔法で偵察すれば気付かれずに済むはずがないのだ。

もちろん、エンリの側が群衆の中に敵がいるかもしれないと認識していなければ、それまでなのだが。

「視線くらいで済んで良かったと思うべきだよ。皇帝陛下が空挺馬車に招いてくれな

かつたらと思うとぞつとする。たとえ罪人扱いされなかったとしても、今後はこの街ではとんでもない極悪人が闘技場の大型モンスターを見るような目で見られたかもしれない」

そんなンフィーレアは高速飛行するドラゴンにしがみつきながら意識を手放しかけていたため、大事な所では何の助けにもならなかった。

身体能力を考えれば仕方のないことかもしれないが。

「きつと、全てモモンガ様が望んだ通りのことなんだと思います。準備は完璧に決まっています、予めクレマンティーヌに何か命じていたんだと思います」

そんなマールは目立たないように、エンリに追従する弱い仲間か従者のようにふるまっていた。相変わらずエンリを使い減りのしない盾か何かだと思っている。

力関係を考えれば仕方のないことかもしれないが。

ともかく、エンリは自身の悪名を決定づける魔法複写の違和感について、ここで意識の中から外してしまう。

エンリにとつて、大切なのは過去や知りもしない悪名より、具体的にわかっている未来だ。

皇帝との接触やクレマンティーヌの栄達などの非日常を語って現実逃避したい気持ちもあるが、何より目前に迫る非日常に対処しなければならぬ。

——モモンガ様が望んだ通り……準備は完璧……。それなら、やっぱり私はあれに出なくて良いはず。

エンリはモモンガの名代として帝都に留まることになった原因——皇帝ジルクニフと正妃クレマンティーヌの結婚式という現実と向き合わなければならぬ。

問題となるのはただ参列していればよい結婚式そのものではなく、その後の舞踏会だ。

「それで、結婚式の後の舞踏会だけど、踊り方を知らない田舎者の私が出ても、モモンガ様の恥になってしまうだけだと思うの」

田舎者として、上流階級の貴婦人に見下されるだけなら仕方がない。分相応として受け入れられる。

しかし、あのクレマンティーヌが皇帝の正妃などという遥かな高みに収まり、高所から田舎者の自分（エンリ）のぶざまな踊りを見下ろすというのはいかがなものか。

あの大口をこれみよがしに扇子などで覆ってクスクス笑っている姿を想像すると、よくわからない薄暗い感情に支配されそうになってしまう。

マールに従って結婚式には参加すると返答してしまっただが、舞踏会があると聞いたことで様々な感情が募ってきて、勇気を出して意見を翻してみた。

「わかりました。既に決まっているとは思いますが、モモンガ様に対処を聞いてみます」

マーレはそう言い残すと、宿の部屋から消えてしまう。

残されたのはエンリとンファイレア、そしてミコヒメだ。

「はあ。なるようにしかならないよね。……寝よつか」

エンリは脱力して、自身のベッドに身を預ける。

考えたり話をしてもしどうにもならないから、身体を休める。それだけのことなのだが。

静かな寝息を立てるミコヒメの向こうで顔を真っ赤にして硬直しているンファイレアにとっては、違う響きを持つ言葉に聞こえたのかもしれない。

彼にこの部屋でベッドを与えたのは、部屋を用意した帝国側の手違いだ。

ローブを目深に被り長いさらさらの前髪で顔を隠し、さらにドラゴンの背に張り付いたままぐったりしていれば、元気なエンリや平然と付き従うマーレより虚弱な女性だと思われるのも仕方のないことだ。

エンリは細かいことを気にせず、ぐっすりと眠る。

貴婦人の夜着に身を包んでいても、中身は田舎育ちのエンリだ。

着るものが上品になったところで、寝相まで上品になるわけではない。

そういう問題を予測し、強烈に意識することができるのも、街で育った者だけなのだが。

翌朝。

目の下に重々しい影を湛えたンファイレアは、移動中の消耗もあって、朝食後にベッドに戻って寝込んでしまった。

——ひどい顔。そんなにダンスが心配だったんだ。

ンファイレアは都会育ちだが、薬師としての研究一筋だったのでそういうことには疎いのだろう。

エンリは大切な友人を守ることを決意する。

万一、舞踏会に挑むことになっても、大きなストレスを感じて倒れてしまったンファイレアを抜きにするなら——エンリのパートナーはマーレしかない。

普通に考えれば嫌な予感しかしないのだが、それを緊張ととらえることでよりポジティブな思いに昇華してしまうのがマーレと出会ってからのエンリだ。

マーレがモモンガの「対処」を携えて戻る頃には、エンリは様々なリスクに目をつぶり、マーレとともに踊る自分の姿を思い浮かべてにへらと笑みを浮かべていた。

第十三章 舞踏会と二人の不死者

五八 黒鉄の悪夢と、式典の正体

「舞踏会、か……」

モモンガは、自らを仰ぎ見ていたマーレのキラキラした瞳を思い出し、骨しかない頭を軽く振る。

これまでは、NPCたちの過分な期待は、NPCたちの過分な働きによつて満たされてきた。

だが、モモンガは本来慎重な性格だ。今回もそうなるのではないか、などと楽観的に考えていたわけではない。

それでも、舞踏会についてマーレの前で自信ある態度を示したのは、単に間が悪かったからである。

なぜ自分は、デミウルゴスも居る場でマーレの話を聞いてしまったのか。

デミウルゴスの眼鏡越しの瞳もキラキラと輝いていた。その瞳は宝石でできてるから当たり前なのだが、普段の五割増しで輝いていた気がする。

——「さすがはモモンガ様。既にしもべの人間を正妃とさせて皇帝に首輪を付けて

あつたとは、何という神算鬼謀」

——「あのクレマンティーヌがこんな所でも役に立つなんて、す、すごいです」

モモンガが予め潜入を命じておいたクレマンティーヌは、皇帝の正妃となることが明らかされた。

魔導王モモンガの名を出して接触したときには、既に帝国はモモンガの手中にあつたも同然だ。

そんな不思議な事態を前に、感動を隠すことができなかつたデミウルゴスとマーレ。しかし、モモンガとしてはクレマンティーヌはマーレの教育に悪いから遠ざけただけであり、騎士たちは帝国を敵に回したくないのでどこかの魔獣のせいにして、慌てて送り届けさせただけなのだ。

もちろん、モモンガにはデミウルゴスやマーレを失望させるようなことを言える勇氣など無い。

むしろ、全ては自らの掌の上の出来事であるように振る舞うことで、当然ながらその結果である舞踏会への対処も考えなければならなくなる。

その場で気軽にデミウルゴスに話を振ってみると、なんとダンスの知識は持つていなかった。

二人を下がらせた後、一流の執事のような作法を見せるセバスに期待したが、そちら

も駄目。

駄目元で、セバスにダンスの知識のある者を探させてはいるのだが。——期待はできない。

モモンガは頭を抱えて部屋の中を転げまわりたいような気持ちになってきた。

試しに少し転げまわってみたが、何も事態は改善しない。

「やばいな……デミウルゴスも、セバスも駄目か。予想外の事態の好転に気が緩んだと思えば、このざまだ……」

当初、事態の好転に気を良くしたモモンガは、ダンスなどどうにでもなるという態度をとっていた。

所詮は他人事である。自分が直面していれば精神的重圧を感じただろうが、今回は使者として出る者たちのために指導役でも用意してやればよい。

クレマンティヌ
人間の女を使って不健全で爛れた性生活をしていたマールに、上品な社交を学んでもらえれば教育という点でも良いのではないかとさえ考えた。

紳士とか淑女とかいう、上流階級のアレである。昔の仲間ペロロンチーノなどが語っていた変態紳士いまだきのしんしとは違う。

モモンガは子供に習い事をさせる親のような気持ちになって、そういう部分への期待

が細かなりスクを塗りつぶしてしまった。

もちろん、帝国と付き合っていくならいざずれば自分も呼ばれることもあるかもしれない。友好関係を築くなら幾度も誘いを断るわけにもいかない。

モモンガは社会に出た後は勉強しないタイプの社会人だったが、期限さえ迫ってさえいなければ趣味のような気持ちで入っていくことはできる。

だから、適当に指導者を探し、良い機会なので後で自分ものんびりと訓練をしておけば、などという前向きな気持ちにさえなっていた。

しかし、甘かった。

セバスの牧場や山狩りで獲得したというシャルティア所有の人間おもちゃの中にも、ダンスができる者は居なかった。

ナザリック地下大墳墓の付近の人間には文明など無いに等しいので仕方のないことだ。

人間の獲得は初耳で、シャルティアは汚部屋が露見したような顔をしていた。だが、幼さを残した少女しか居なかったことでペロロンチーノの趣味を思い出し、酷いことをしているふうでもないので大目に見ることにした。——所在地の情報の拡散を防ぐため、デミウルゴスに乞われて墳墓周辺の山狩りとその始末を一任したのはモモンガ自身だからだ。

踏み込んだタイミングが奇跡的に良かっただけかもしれないが、モモンガは着せ替え人形遊びのようなものだと思うことにした。

ともかく、このままダンスができる者が見つからなければ、せつかく皇室空護兵団ロイヤル・エアガードの救出”という不測の事態を活かしてバハルス帝国との対等な交渉に成功した魔導王モモンガの立場もいきなり丸潰れである。

それより辛いのは、守護者たちの期待を裏切ることだろう。神算鬼謀の果てに迎えた赤っ恥で部下の信頼を裏切ってしまったえば、これまで綱渡りのようにして保ってきた支配者としての面目まで丸潰れとなる。

使者がデミウルゴス御一行様なら「ここからは、お前にもわかるだろう」などと思わせぶりなことを言って責任転嫁しておけばどうにかしてくれそうな気もするが、マールレのような子供にそんなことをすれば人間性——アンデッドにそんなものはないが——や支配者としての資質を疑われるかもしれない。

とはいえ、ダンスの知識のある者など、誰もいないのではないか。

モモンガ自身、必死に記憶を辿ってすべてのNPCの設定を思い出し、次にNPCの創造主たちのことを思い返しても、全く心当たりがない。

ダンスができそうな設定を持つ者も、そういう設定をNPCに与えそうな者も、居な

い。

そうやってモモンガがベッドの上で悶えていると、この寝室に向けて慌てて走ってくる者がある。

「ある方が、ダンスの件でお話があるとのこと——」
舞い込んだ吉報に、モモンガの眼窩に光が戻った。

セバスと、ユリ、シズ、エントマといった戦闘メイドたちが半包围する、その真ん中で。

「あの……やあろお……。あれを、ちよろまかしたって……」

モモンガは見てしまった。

希少金属、星の揺らぎを湛えた銀スターシルバーでできたゴキブリの、その装甲の継ぎ目から漏れる輝きを。

それは、体長三十センチのゴキブリの貴族「恐怖公」に与えられたゴキブリとしては巨大な騎獣、シルバーゴレム・コックローチ。

巨大なゴキブリの完璧な造形に嫌悪感を覚えないのは、その素材感のためか、単にアンデッドになったことによる精神の変容のせいか。

そんな取るに足らない興味で視線を固定したところ、見つけてしまったのだ。スターシルバーのコーティングに隠された、その名状しがたい輝きを。

ゴキブリ型ゴーレムの素材として使用されてしまった、神器級武器の素材となりうるような超希少金属の存在を。

素行の悪かったギルドの仲間にしてゴーレム職人^{クラフター}「るし★ふぁー」の甚大な無駄遣いに対し、モモンガがしばらく憤怒に燃えてみたり。

その白銀のゴキブリが素材の力で七〇ものレベルを誇ると聞き、自分より強いことに衝撃を受けた戦闘メイド数名が卒倒しそうになってみたり。

そんなことがありつつも、今対応しなくてはならない問題への処方箋を持っているのは、騎獣に乗ってやってきた恐怖公の方なのだ。

「我輩、モモンガ様がお求めのダンスの心得がございますゆえ、取り急ぎシルバーに乗って全力で馳せ参じました」

ゴキブリがやたら突破力のあるゴキブリに乗って走ってきた。

もちろんゴキブリはここナザリックでもゴキブリである。モモンガの命令でもなければ、本来の居住区域である黒棺の外への立ち入りを全力で拒まれてしまっている存在だ。

数人の戦闘メイドたちが集まっているのは、追いかけてこの結果ということなのだ。

う。

ただ、実際にモモンガが探していたのだから、恐怖公に非は無いら。

非は無いが、ゴキブリにダンスを教わるというのは、人間を辞めた身であるモモンガにとつても言いようなない感情をもたらずものだ。

それしか手段が無いのであれば、そんな感情も飲み込むことができたらう。

しかし、今回は別にモモンガが出ていくことは必須ではないのだ。

ならば——今回はそのままマーレたちに頑張ってもらえば良い。

次以降のためであれば、今回ダンスを覚えた者からでも教われればいいのだ。

——これは良い教育にもなるかもしれない。マーレに健全な男女の付き合い方を学ばせるチャンスではなからうか。

大事なことから繰り返すが、マーレには変態紳士いまだきのしんしではなく紳士とか淑女とかのまっとうな世界を知ってもらいたい。

身体の関係ばかりに溺れるのではなく、健やかな付き合い方を覚えてほしいところだ。

——そうだ。俺がやりたくないから押し付けるといっただけじゃないぞ。教育的配慮だ。

「残念だが、恐怖公一人しか居ないのであれば、既に出席が決まっている者たちを優先し

て教えてもらうしか無いだろうな。その方法については、マールと打ち合わせてうまくやってみよう」

むしろ、恐怖公しか居なくて良かったと思っただのは秘密だ。

——サンプルとして、貴族を一人くらい浚わせておけばよかったか。

そんな危険な考えが頭をよぎるが、今さら意味の無い考えだ。

竜王国との関わりでそうした手段を選んでいたとしても、貧乏性のモモンガでは、情報を吸い出した後はアンデッドの材料として使い切つて残つてはいなかっただろう。

人間とは捨てるところが無い素晴らしい生き物なのだ。

恐怖公とマールとのあいだでは、踊りを教える際の身体のサイズの問題が議論されている。

その議論の輪にエントマが加わつて恐怖公が怯んだりもしているが、きつとうまくやってくれるだろう。

——ん？ ……あれは、恐怖公を唾えているのか？

そういうエントマなりのコミュニケーションなのかもしれない。

仲良くやつてもらいたいものだと思います、モモンガは寝室へと戻る。

「今回ダンスの指導補助を担当するう、エントマですう」

——さすがにモモンガ様のメイドだけあつて凄く綺麗だけど……表情が動かなくて、少し冷たい感じ。

それでも、まさにモモンガの嗜好ど真ん中と思えるような小柄な身体と滲み出る何とも言えない危険な雰囲気は、エンリから見ればモモンガの深い寵愛を予想させるものだ。

しかし戦闘メイドというのは、美しいばかりでなく恐ろしい存在である。

人当たりの良いルプスレギナでさえ、笑いながらクレマンティーヌのはらわたをぶちまけていたくらいだ。

下っ端のエンリとしては、直立不動で迎えるしかない。

「え、エンリです。よろしくお願ひしますっ！」

エンリのパートナーは、マーレだ。

皇帝の侍従より、「男性より少女を好むという話も伺っております。そちらの美しい

お嬢様と踊られる形でも構いませんので」などと歪んだ形で気を遣われてしまったが、訂正の意思を伝えようか迷っているうちにインフィーレアが寝込んでしまった。

エンリとしては、マーレと踊るのはまんざらでもなかったりもするのだ。

「よろしくう。エンリって少し細いけど肉質が締まっててえ……じゆるう」

「あ、あのひと……なんか怖いんだけど」

「大丈夫です。エントマは今回の指導では身体を提供する協力者でしかないので」

何を言っているのかわからないが、大丈夫らしい。

視線をマーレからエントマに移せば、反対を向いてしやがみ込み、頭部に何やら黒々とした兜のようなものを装着している。

代わりに何か頭くらいの大きさのモノを取り外したようにも見えたが。

——ダンスって兜被らなきやいけなほいほど危ないものなのかな。

意外感はあるが、筋力や身体のキレが恐ろしく向上した自覚のあるエンリにとっては、たいしたことではない。

「ええと、私はどうす……れ……ば——」

その時、エントマが振り向いた。

正確には、エントマだったものが振り向いた。

美しくも可憐な、小柄な戦闘メイドのエントマ。

その顔もまた、黒々とした兜のようなもので覆われていた。

その兜は、動いていた。

蠢いていた——わさりわさりと。

美しくも可憐なその顔の代わりに、メイド服の襟元から生えていたのは。

毛羽だった六本の手足が蠢く、体長三〇センチ大のゴキブリの裏側お腹側だった。

「ひい……いあ……いあ……」

言葉を失うエンリに対し、そこに居るゴキブリは礼儀正しく一礼する。

「我輩が、モモンガ様よりダンスの指導を仰せつかった恐怖公である」

脂で黒光りする腹部が不自然に折り曲げられると、節々にできる隙間から黄色やク

リーム色の見えてはいけないものがチラチラとのぞいてしまう。

「——!!!」

そこまでで、エンリは意識を手放した。

「倒れちゃったあ。ちよつと味見していいですかあ？」

「……これは、食べては駄目な人間です」

「それじゃ、代わりに恐怖公を一口だけ——」

「わ、我輩には使命がありますぞ!!」

きつい冗談を口にするアントマは、慣れない仮面よりずっと下にある口に口唇虫という蟲を隠して、そこからかわいらしい声で普通に喋ることができる。

全身が幾多の蟲で構成されているアントマにとって、頭部とはそれほど重要な意味を持つパーツではない。

今回は、普段美しい少女の顔として乗っかっている仮面蟲を恐怖公そのものに取り替えただけなのだ。

蟲たちと感覚を共有し融合あるいは支配する能力を持つアントマは、今回、恐怖公がダンスを教える際の人間サイズの身体を務めるといふ役目を担っていた。

「とりあえず、やりましょう。エンリには身体で覚えてもらおうと思います」

マールは死の宝珠を取り出しながら、今回の手段を実験したときにアントマから大きく距離を取った他の戦闘メイドたちのことを思い出した。

しかし――。

「我が名は死の宝珠！ 魔導王モモンガ様の忠実なる臣下でございます！」

「我輩は恐怖公。改めて、我輩がダンスの何たるかを教えて差し上げよう」

幸いなことに、この二人はすぐに意気投合した。

妙な波長の合い方を見てマールの方が少し距離を取り、アントマは双方一口ずつかじってやりたい衝動を耐える。

「かつて我に魂を捧げし者の中には貴族もおりましたが、不思議と我に関わる人間は社交に難のある者ばかり。その者も舞踏会は苦手で時流に合ったダンスができぬとコンプレックスを抱えていたようで、さらにその記憶も薄れゆくばかり。やはり習わねば難しいところですよ」

「なるほど、人間の国の時流など我輩にはわかりかねるが、一度こちらの型を見ておけば教えることはできよう」

そんなわけで、型を見ておかなければならないことになった。

もちろん、ここでマーレが使うのは、クレマンティーヌだ。

「ロクシー、様。突然のお願いですみま——申し訳ありません。場所はこちらですよ」
クレマンティーヌは後宮の主のように語られる存在を迎えて、しおらしい寵姫を演じる。

もちろん、マーレの命令を遂行するためである。機嫌を損ねるわけにはいかない。

「クレマンティーヌ様は今や陛下の寵愛を最も受けておられるお方。私などに様付けなどおやめください。それに、後宮での生活については何でも相談に乗ると最初に申し上げたはずですよ」

「いやいや、本来はロクシー様こそ最も多くお部屋に陛下をお迎えしているとか——」
誰が上かをはつきりさせることは、クレマンティーヌのいた世界でも重要なことだった。

漆黒聖典では槍の演武一つでクレマンティーヌを屈服させた男が更なる上位者に馬の小便で顔を洗わされていたように、寵姫の世界でも上位の相手の前では慎ましさを見せなければ大変なことになるはずだ。

特に、皇帝のアブノーマルな嗜好を満たしているであろう、特殊な寵姫が相手ならなおさらだ。

同じ嗜好の対象となる寵姫として、彼女より上の存在になど決してなりたくはないのだから。

「いいえ。私などただ陛下にお会いしているだけで、世継ぎなどもありえませんし、寵愛を受けているとはとても言えませんから。」

「あの……もしかして、陛下のご来訪は、あまり喜ばしくは……」

意外なまでに冷めた反応を見て、上位者へ向けた視線は同じ境遇の仲間を見るものに

近づく。

「ええ、正直なところ、その通りです。……周囲を見なくても問題ありませんよ。陛下にも常々申し上げていますし、それをわかっていて来ているのですから」

「そのような関係……つらくはないのですか」

「つらくても、やめてもらっては非常に困るのだが。」

「別に、何でもありません。私には私の役割があるというだけなので」

不思議なことに、ロクシーの表情は一種の誇りさえ感じさせるものだった。

だが、クレマンティーヌの中には、それを納得できる思考回路もある。

クレマンティーヌにはクレマンティーヌの特殊性癖があるように、ロクシーにはロクシーの何かがあるのだろう。

矛盾するようではあるが、皇帝を好ましく思うかどうかと、その行為を好ましく思うかどうかもまた別問題であり。

そんな会話を経て、目的の部屋に辿り着く。

潮時だ。これ以上この問題に踏み込むのは無礼というべきだろう。

「では、ロクシー様。ご指導をお願いします」

用件は、ダンスの特訓である。

次に講師が来るまで間があるため、皇帝から困りごとの相談先とされていたロクシー

に相談したら本人の協力が得られることになった。

もちろん、実際にはマーレが連れてきたダンスの指導者に帝国風のダンスの型を見せるのが目的なのだが。

当然ながら、恐怖公とも、恐怖公と合体したエントマとも直接に引き合わせるわけにはいかない。

場所が後宮なので、死の宝珠エンリさえも入れるわけにいかないくらいだ。

そのため、恐怖公の目となり耳となることができる眷族たちを大量に潜ませた部屋で、クレマンティーヌがダンスの特訓を行うことになった。

何事も完璧主義の恐怖公は、床や壁の隙間、物陰など、あらゆる場所に大量の眷族たちを潜ませた。

ただし、無数にいる眷族は、異常に体が強く硬い以外は普通のゴキブリだ。

少しくらいやられても多くは残るので大丈夫。恐怖公の眷族たちが詰めている黒棺の設計思想も、そういうものだったりする。

「……この部屋、駄目です。メイドたちを呼んだ方が良いでしょう。不穏な気配があります。それも沢山」

「じ、時間が無いので、どうか特訓の後でお願いします」

実は恐怖公の眷族たちには、見たまま以下の隠蔽能力しかない。

それは、恐怖公自体の創造主より、むしろ白銀の騎獣を与えた者の仕業かもしれない。彼らが人の目に止まることはその存在意義であるという考えでもあったのか。

あるいは、転移民としての黒棺の威力向上を願って、あえて隠蔽性能を落とした者でもいたのか。

「薄暗いダンジョンの中でありながら、ひとたび灯りを向ければ、まるで明るい部屋の中で出会ったときのような明確なGの衝撃！」

そんな売り文句が実際にあつたかどうかはともかく。

黒棺ではどうせ逃げ場がないから、襲われて初めてGに気付くより、壁にびつしりと張り付いて潜んでいる段階で気付いた方が心に与える負荷は大きくなる。——そんな仕様のままこの世界に来てしまったのだ。

ともかく、寵姫二人は不気味な空気の中でダンスの特訓を続けた。

皇城に詰めるプロフェッショナルであるメイドたちは、わざわざ呼ばずとも集まってきた。

部屋の外から不気味な気配を窺って、掃除用具で武装して集結して。

そして、特訓の終了とともに、黒鉄くろがねの悪夢と呼ばれた夜が始まる。

宮殿じゆうを走り回って逃げる黒鉄ゴキブリの蟲たちは通常の害虫を装って無抵抗ながら、メイドの箒が直撃したくらいでは動きさえ止めず。

さほど時を置かずに増援が呼ばれ、剣が抜かれ、魔法が飛び交う。たいした実力では無いが、後宮でも女の衛兵くらいは詰めているのだ。

それでも、驚くべき正確さで非戦闘員の多い安全な場所を目指す黒鉄ゴキブリの蟲たちの暴走は止まらず、宮殿の各所で悲鳴の交響曲が奏でられた。

ロクシーは失神したメイドの手から長い箒を取って勇敢に戦い、最強戦力のはずのクレマンティーヌは蟲が苦手なふりをして縮こまっていた。

クレマンティーヌはこの一件で、マールレの不都合な秘密を握ったつもりになっていたのだが――。

「えっと、今夜のことは、ぼくもあなたも、何も知りません。いいですね？」

「は、ハビ……」

その瞳の奥にたゆたう闇が手招きしているような気がして、余計な記憶は早めに忘れることにした。

。その後は、幻術で隠れたエントマが恐怖公に映像を見せる形をとって事なきを得た。

皇城と周辺地域で帝国騎士団一個師団を動員した前代未聞の規模での清掃活動が行われ、恐怖公の眷族に少なからぬ犠牲が出たり。

様々な角度から一度に見られないことでクレマンティーンが特訓の回数をこなす羽目になったり。

そんな隠れた努力が皇帝に伝わってクレマンティーンが舞踏会に参加する可能性が生まれ、さらなる特訓を積む羽目になったり。

生まれ、死の宝珠エンリとマーレがダンスの練習をする姿を見て、ンフィーレアが静かに涙を流したり。

そんな平穏な日々を経て、帝国最大の慶事の日がやってくる。

皇妃が元冒険者——そんな衝撃的な情報は、とりあえず伏せられた。

ただし、伏せられていながら、帝都に滞在する全てのアダマントイト級冒険者チーム

に招待状が送られた。

ある者は、帝国貴族らに配慮して口止めしつつも冒険者組合に悪く思われぬようフランスを取ったものだと言分析した。

またある者は、きな臭い『漆黑』が来賓となつていことから、それに対する抑止力としてタダ働きさせる魂胆だと考えた。

しかしその実態は、いずれとも違う。マールを通してフルーダに実現してもらつたモモンガの我が儘である。

——何もかも部下任せではなく、たまには自分の目で見てチェックしないと。

そういうことにしているが、本音としては、子供の発表会を見に行く親のような心境になつていた。

ダンスを習うという面倒を押し付けた罪悪感もないわけではないが、守護者たちに対する大切な友人の子供を見守るような愛情もまた本物なのである。

もちろん、貴族でも来賓でもない冒険者たちはダンスに参加する必要は無い。立食くらはいは戴けるが、パーティを仰ぎ見る安心な立場だ。

——もしエンリの方が率先して教育に悪いことをしていたら遠ざけなければならぬ。これは親心みたいなものだ。

実際、招待状は思ったより早くに届いた。

フルーダの側もまんざらではなく、現れる冒険者の中にマーレの関係者が混じっているなら魔道の深淵を語り合える者がいるかもしれないと考え、一も二も無く快諾したのであった。

このことが別の不都合な招待客を呼び込んでしまうのだが、それはまた別の話。

舞踏会を前にしたモモンは、高度な幻術で正体を隠蔽するアイテムを二つ用意していた。

全身鎧の兜は脱がねばならないかもしれない。いくら人間が相手とはいえ、帝国の総力を結集したセキュリティに護られた中へ踏み込むのには不安があったからだ。

イビルアイの分は万一の備えとして一緒に持ってきただけで、今回は留守番をさせるつもりでいたが、本人が強硬についていくことを主張したのでモモンが折れた。

今の彼女はモモンに迷惑をかけないよう変装し、「キーノ」という人間の冒険者として再出発して新たなプレートも保有している。公の場に出るのは遠慮するかと思っていたが、既にそういう理由もなくなっていたのだ。

——これが終わったら、少し彼女とも話をしなきゃいけないな。

イビルアイは義理堅い性格らしく、助けた恩を強く感じたことでモモンの近くをひとときも離れずその役に立とうとしている。都合の悪いときはナーベヤソリュシアが相

手をして引き離してくれるが、今回ばかりはそれが上手くいかなかつたようだ。

今回は『ザ・ダークウオリアー』を含む他の冒険者と揉めないようマーレから『漆黑』の仲間たちに伝えさせておく。

敵対したクレマンティーンは現在『漆黑』から外れているが――。

――まさか皇帝の正妃になる日に率先して戦おうとか、ないよな。トラブルを起こさず上手く潜入するよう言つてあるし。

そもそも、こちらはアダマンタイト級冒険者だ。よほどの大義名分が無い限り、喧嘩を売つたら不自然に思われるはずだ。

変装も幻術もあるので、まず大丈夫だろう。

あとはイビルアイの方だが――。

「皇妃……クレマンティーン、だと?」

――あ、書いてあつたか。

アダマンタイト級冒険者モモンとしては、毎度毎度翻訳の眼鏡を使つていては恥ずかしいので招待状の文面までチェックしてはいられないのだ。

「う、うむ、よくある名前のような気がするが、皇妃になるような貴族令嬢に心当たりでもあるのか?」

「い、いや、まさか……。あいつが貴族なはずもないし、関係ないですよね」

とつさに誤魔化したのが、会場でイビルアイに会わせたくなかった人物はクレマンティーヌだけではない。

こうなったら、秘密にしておくより逆に情報を少し明かして予防線を張っておくべきだろう。

「そういうえば、色々と噂には聞いているかもしれないが、今回は例の『漆黒』が来賓として呼ばれている。招待を受けることにしたのは、奴らの監視も理由なのだ」

『漆黒』が……では、あの噂も……」

詳細は話を聞かされた際にバラバラだが、ドラゴン竜で帝都に乗り付けたという噂はモモンやイビルアイの耳にも届いている。

「だから、何が起ころかわからない。しかし我々は招待客でしかない。彼らが何らかの暴挙に出た場合は全力で抑え込むつもりだが、こちらから仕掛けるわけにはいかない」

「——モモンさん、やはり自分を抑えられない残念な子は置いていかれた方が」

イビルアイの表情を見てソリュシアが横から挑発し、ナーベがふふんと鼻で笑う。

「決して邪魔はしません。何があってもモモン様の許可が無い限り手出しはしないで、私も連れて行ってください！」

最近、こういう流れでは縋り付くように素直に言うことをきいてくれる。これがイビルアイの操縦法らしい。

どうも恩義を感じさせすぎたのか、忠実さをナーベヤソリュシアと競うようなところがあるのだ。

時間が無いので、適当に礼装になるコートを買って会場へ向かった。

事前に用意が無いのは、見物はしたくてもダンスはしないというモモンガの固い決意の表れである。

皇城の大広間の一つでは沢山の生花が並んで準備が進められ、付近の控室では純白のクレマンティーヌが眉間にしわをよせていた。

「陛下……ドレスが重苦しいのですが」

そう言いながらも、不自然に豪華で重みのあるそのドレスはクレマンティーヌが細かく注文を付け、最低限の動きやすさを確保したものだ。

ドレスとしては目的外の注文で、革鎧に冒険者プレートを固定できるようにするくらい不自然なもの。

普通ならそういう我が儘に不機嫌になる職人が、晴れやかな顔をしていたのが不気味だった。

「そういえば、側仕えやメイドも、法国でいえば洗礼直前の子供に向けるような暖かい視線を向けてくる。」

「動きやすくする工夫はしたそうだから、別に良いじゃないか」

素つ気ない返答をするジルクニフだけが、帝国でクレマンティーヌにそういう視線を向けてこない唯一の存在だが、どうも何かを隠している雰囲気だ。

ただ、いくら問い詰めてもさすがは為政者の中の為政者、はぐらかすのが上手い。

護衛の切り札であるクレマンティーヌにまで情報を隠すのは下策だと思うが、寵姫程度では漏らせない国家機密もあるのかもしれない。

とりあえず、今日は余計なことを考えず寵姫の仮面を被った護衛としての役割を全うするしかないだろう。

「これだけ着膨れるときさすがに動きは鈍りますつて。死にたくなかったらあまり離れない方がいいですよ」

「そうだな。しばらくしたら、式典を取り仕切る司祭からも似たようなことを言われることだろう」

「……はい?」

何か、自分の知らない上流社会の常識があるのかもしれない。

ドレスの裾を持ちながら笑いを堪える側仕えに苛立つクレマンティーヌであった。そして――。

「――死が二人を分かつまで離れることなく、ともに愛し慈しみ――」

似たようなことを、司祭から言われた。

――結、婚？

素行の悪いクレマンティーヌでも、漆黒聖典に入りたての頃などは大人しく他の隊員の結婚式に参列したこともある。

司祭がいったん言葉を切つて新婦の側にだけ「貞節を守ることを」誓わせる所まで法
国で聞いたものと似ているこの台詞にも、もちろん覚えがある。

「……誓い……ます」

こそこそと指示される通り、答える。

漆黒聖典の隊員が子孫を増やすことは人類にとって重要であり、男性隊員の「一夫多妻はよくあることだ。」

そして、バハルス帝国の皇帝ともなれば、やはり一夫多妻は当然のこと。

数多くいる寵姫ひとりひとりにこのような式典を行うのは無駄遣いと思えないが、口先だけお付き合いするのに特に躊躇は無い。

だが、問題は「貞節」か。

それが普通の男女の間のものであれば、守るのはそう難しくはないのだが。

ジルクニフがクレマンティーヌを迎えた特殊な目的を考えれば、マールにされたことがあるような行為も「不貞」になるのかもしれない。

下腹部をぐちゃぐちゃにかき混ぜられた、あの暗い森の中の行為——。

「……うっぷ」

かつての拷問を思い出して若干の吐き気を催すと、気付いた参列者たちが一斉に青ざめる。

——いや、世継ぎを産むとかそーいう担当じゃないし、時期があわないでしょーが。

……その奴、泣くな。泣きたいのはこっちなのに。

そんなことを考えながら、やたらと大仰な式典に流されていく。

そして、寵姫全員で使いまわしているにしては妙に輝きの強すぎる指輪やらティアラやらを与えられ。

クレマンティーヌが、自身が正妃となったことを理解した頃には、式典はほぼ終わり

に近づいていた。

宴に向けた僅かな休憩時間に説明を求めたクレマンティーヌに対し、ジルクニフは涼しい顔でただ一言。

「身分や待遇はどうでもいいと聞いたので、面倒な説明は省かせてもらった」

そのポーカーフェイスからは、このことがジルクニフの意思によるものか、マーレラの暗躍によるものかはわからない。

ただ、メイドも側仕えも事情を知っているようで、微笑ましいものを見るような目を向けてくる。

それが、やたらと苛立つのだ。

クレマンティーヌは誰も殺さずに堪える自分を褒めてやりたいと思いつつ、力を抜いて身支度を手伝う者たちに身を任せた。

五九 アルシエと不死の恋人たち（舞踏会／前編）

アルシエは急いでいた。

かつての師フルーダが、その身を隠して内密に伝えてきた依頼。

報酬も魅力だが、何より、フルーダとの間にできた繋がりが続くかもしれないことこそが重要だった。

『漆黒』を帝都まで連れてくるという容易に見えて緊張感に満ちた仕事は、かつて手放してしまつた細かい繋がりを数倍のものとして取り戻させてくれた。

実家の借金で行き詰りつつあるアルシエにとつて、具体的な処方箋は何もないものの、帝国最高の魔法使いとの繋がりは最後の希望だった。

その依頼で、一つの手違いがあつた。

先程、密会のために通してもらつた学院の裏口は閉ざされている。

自ら退学した身で学園の正門をくぐるのは抵抗があつたが、アルシエは一気に駆け抜けた。

人目を気にしている余裕はない。最短距離で学園長室へ。

「フルーダ様も慌てた」様子でした。火急の用ができたとかで視察を切り上げ、いず

れかへ転移を」

その後の復学だ何だという学院長の優しい言葉は、右から左へ抜けていった。

依頼の際に紹介された高弟も既におらず、どうにもならない。いずれも式典までには城内に戻るとのことだが、それでは間に合わない。

アルシエはワーカーとしてフルーダが他者に明かせない依頼を受けるために、指定されたこの部屋で依頼を受け、その件で戻ってきたにすぎない。

ここで話をすれば、ワーカーへの依頼ではなく過去の有望な学生の復学に向けた相談などと誤魔化すことができるというフルーダの側の事情によるものだ。

第三位階魔法習得間近で、家の没落による金銭的事情で退学したアルシエは、在学中は稀有な天才という扱いだっただ。フルーダが目を掛けてもおかしくはない。

それはつまり、誰にも不審に思われずフルーダの内密の依頼を受けられるという利点に繋がる。

つまり、学院長の考える復学などの話は存在しないしアルシエもそのつもりはないが、むげに否定もできないので適当に受け流して部屋を出る。

今回の仕事は、皇帝の舞踏会に赴き、自由に動けないフルーダの代わりに会場内外の人間全てをアルシエの「目」で調べるといふものだ。

普通に調べるならば対象が多すぎるが、フルルーダの求めているのは自身と同等かそれ以上、第六位階以上の使い手なので容易な仕事だ。

宿へ招待状二枚と男女それぞれの衣装を届けると聞いていたため、アルシエは迷いなく仲間たちの中でロバーデイクにパートナーを頼んだ。

身を護るなら戦士のヘッケランの方が優れているが、今回の仕事には戦闘の可能性は無い。何かあっても通報するだけで済む、帝都で最も安全な場所での仕事だ。

そして仲の良いヘッケランとイミーナの間に入るつもりもないし、そうでなくてもヘッケランの雰囲気では舞踏会は難しいからだ。

帝都の休日をごす二人を送り出し、暫くして招待状と衣装が届くと——問題が発生した。

「これは無理ですね。はち切れんばかりというか……報酬も良いようですし、服を買いに行きましょう」

「先に許可を取った方がいい。招待状にある名前に合わせたレベルの服なのだろうし、仕立てでなく吊るしの服ではこれくらいのもを探すのも難しい——」

大柄で筋肉質なロバーデイクでは、標準サイズをゆったり作つてある程度の衣装に無理があつた。

もちろん、デート中のヘッケランたちの行方はわからない。

そんな状況で学院へ急いでみたものの、依頼者は既に去った後だったという状況だ。学院の廊下を速足で戻りながら、次の行動を考える。

そこへかけられたのは、懐かしい声だ。

「もしかして——お嬢様?!」

「……………ジエット?」

ジエット・テストニアはアルシエの実家フルト家が没落する前に仕えていた使用人の息子で、互いに幼い頃から面識がある。

学院では後輩となったため多少の世話をしたことでアルシエに恩義を感じてくれていたのだが、実家が次々と使用人を解雇していた時期のことで、手が届く所へ温情をかけるのは貴族の娘として当然のことだ。

もちろん、普通ならそんな関係の相手をワーカーの仕事に巻き込むことなど考えられない。

しかし、帝国で最も安全な場所に行くだけの仕事なので、それも問題がないように思われた。

生徒の中でも家柄の良い者は幾人か会場にいるだろうし、受付さえ通ってしまえば知

人に会っても大丈夫だろう。

ジエツトなら標準的なサイズの衣装に対して体格がちょうど良く、さらに他の者では得られない利点もある。

あらゆる幻術を打ち破る、アルシエとは違う「目」の力だ。

人間の常識の外の存在であるはずのフルーダが目を輝かせて期待するような未知の来訪者を期待しているならば、アルシエは何があってもおかしくはないと思うのだ。

何より、時間が無い。アルシエは最後の希望を手放さないため、ジエツトに協力を依頼することにした。

学院の外で待っていたロバーデイクも、元々アルシエの仕事だからと賛同する。

そして、ジエツトは――。

「お嬢様、本当に自分なんかがお相手でいいんでしょうか」

「私の仲間よりはあなたの方が品が良いし、他に心当たりはない。巻き込んでしまつて申し訳ないけど――」

恩義のあるアルシエの頼みを断ることなど、できるわけではない。

ジエツトは何度も謙遜してみせたが、それは没落したとはいえ元は名門貴族のアル

シエと自分では釣り合わないという本音もあるものの、密かに想いを寄せる幼なじみのネメル以外の異性とパートナーを装って舞踏会へ行くことの後ろめたさにもよるところが大きい。

提示された報酬も金銭で苦勞しているジエットには魅力的にすぎない額で不自然に感じるほどだったが、アルシエの「目」を使う仕事でもあるから」との言葉で納得する。「万が一を考えると、あなたが居た方が心強い」

相手が、自分の「目」——あらゆる幻術を見破る能力——を知ったうえで普段は隠すよう助言してくれたアルシエでなければ、ジエットは「目」を使う仕事など受けたいと思わない。幻術を見破ったことが相手にも違和感として伝わってしまうこの能力を仕事で使うのはあまりに危険だからだ。

しかし、今回は万一のことであっても周囲の衛兵や騎士たちの助けが得られる場所で、話を持ち込んだのも信頼できる恩人のアルシエだ。

むしろ、多い報酬を納得して受け取らせるために「目」の力に言及した、そんな雰囲気を感じてしまったジエットは、仕事の危険よりも後で多すぎる報酬を固辞する道が塞がれたことを気に病むことになった。

受付で、ジエットは片目の眼帯を外す。

久々に見る真実の世界は、変わりなく平穏だった。不審な者は何もいない。当たり前だ。

人類最高の魔法詠唱者フルーダ・パラダインが目を光らせる帝都アーウィンタールの皇城において、皇帝の結婚を祝う舞踏会で幻術を使う不届き者などいるわけがない。見渡せば、屈強な騎士たちが会場を守り、鎧の装飾などから地位も戦闘能力も高そうな精鋭が揃っていることがわかる。

「来賓にアダマンタイト級最強と言われる『漆黒』が来るから、国内のアダマンタイト級冒険者も招待されているらしい。めったなことは起きないはず」

そう言うアルシエは、その『漆黒』や背後にいる魔導王の関係者が来る可能性を考え、会場内外の人々の中で魔法の位階が高い人間を見つけて報告するというのが今日の仕事だ。

その目的は監視や戦闘といった敵対的なものではなく、フルーダが交流を持つに足る存在を見つげるためだという。有能な者を勧誘でもするのだろうか。

ゆつくりと参加者の群衆に紛れていこうとすると、不意にアルシエが足を止める。

「そんな……森妖精でもないのに、あんな小さな子が……第五位階!」

ジエットが振り向くと、受付のあたりに絶世の美女が二人。黒髪と金髪で対照的だが、いずれもこの世のものとは思えない完璧な美を見せてくれている。

それと、漆黒の戦士——深い艶のある漆黒に、金と紫の装飾を乗せた絢爛豪華な全身鎧に身を包んだ巨軀の男。

冒険者なのだろう。一流であることも、ひと目でわかる。

少し遅れて三人へ駆け寄り少女は、今まさに仮面を取るところだった。

ジエットも舞踏会ともなれば「目」を封印していた眼帯を外さざるをえなかった。

同じように、少女も受付から先では、その泣いたような笑ったような不思議な表情の仮面を外さざるを得ないのだろう。

その中に何かあるのか、気にはなる。

——何かあるのかもしれないけど、第五位階つてのはまさかあの子じゃないよな……

え？ 目が……!!!

ジエットは背筋に寒気を感じ、小さく震える。

仮面に隠されていたのは、赤い眼光。

間違いない。あれは吸血鬼の特徴だ。

ジエットは小さく震えながらも決して首を動かさず、目だけで周囲を見回すが、高度な魔法詠唱者も含むはずの帝国の衛兵は誰も気づいていない。

この場でジエット以外に隠蔽しきれるほど高度な幻術で隠さねばならないということとは、間違いない彼女は吸血鬼なのだろう。

当然、向こうも違和感を感じ、こちらへ視線を向けてくる。

これがジエットの能力の欠点で、看破した相手に違和感を感じさせてしまう。すぐに逃げなければならない。

数年ぶりに触れたアルシエの指は表面が少しかたく冒険者らしくなっていたが、幼い頃と変わらないしつとりとした柔らかさも――。

そんな場合ではない。ジエットは余計な迷いを振り払うようにアルシエの手を掴み、逃走を促そうと振り返る。

――「本当に危険なときは、任務など関係ない。振り返らずに全力で逃げろ」

あれは対モンスターの座学だったか、学院でそんなことを言っていた教師が居たが、あれは正しかった。

ジエットが振り返った時、冒険者四人組を凝視していたアルシエの向こうで、ちょうど漆黒の戦士が兜を取ったのだ。

――「げえつ、エルダーリッチ!?」

新たな魔物の出現にこんどはジエットが凍り付くが、その手を引いてアルシエが走り出した。

「危険だから口を開かないで。見えていると思うけど、あれは私の知っている吸血鬼ヴァンパイア……全て私に任せてほしい」

ジエツトは驚きに目を見開いて、走りながらコクコクと頷く。自分が教える前に教えられた驚きは大きい。

かつての恩人は、学院屈指の天才の面影と聡明さを残したまま、頼り甲斐のある本物の魔術師になっていた。

アルシエは第五階と言っていた。彼女の目もまた生まれながらの異能で、相手の使える魔法の位階を見抜くもの。

ならばそれは間違いのない事実なのだろう。

そのような高度な魔法を行使する吸血鬼など存在自体が国家存亡の危機とも呼べるものだが、アルシエはそれを知っているという。

知っていて、生き残っているのだ。それだけで、冒険者で言えば最低でもミスリルかオリハルコンという程の風格を感じさせてしまう。

エルダーリツチについて言及は無いが、第五階を使う吸血鬼と一緒に居たのだからその部下と考えるのが自然だろう。そいつだけなら、会場の騎士の中で上位の者たちが徒党を組めば倒すことができるので、こんな場所に潜入できるはずもないからだ。

ジエツトは吸血鬼からすぐに視線を外したが、向こうはジエツトではなく隣で凝視していたアルシエに視線を向けてきたようだ。恩人でもある敬愛するお嬢様を盾にしたような形になるのは男としてあまりに情けないが、今回の相手はさすがに次元が違い過

ぎる。そして本物の魔術師になったアルシエもまた、ジエットとは別の世界の人間なのだ。

そして、アルシエの住む世界は、当たり前のように話題のアダマンタイト級冒険者にまで繋がっていた。

「あの『漆黒』に相談するとうんですか」

「だいたい悪評通りの人たちだけれど、一人だけ話を通じる人がいるから」

相談に乗ってくれたのは、ンファイレアという男だ。

偉ぶるところのない感じの良い男だが、それ以上に風格が無さ過ぎて、高位の冒険者にはとても見えない。

アルシエによれば、あの吸血鬼はかつて『漆黒』が捕えていたものらしい。

ンファイレアも、苦い顔でそれを認める。

別のアダマンタイト級冒険者チーム『ザ・ダークウォリアー』が助け出すと称して奪っていったというのだ。

「安全だなどとは到底思いません。しかし、『ザ・ダークウォリアー』とは考え方が違うようですし、正面からやりあつたら大変なことになってしまします」

『漆黒』は、魔導王モモンガなる存在の使者としてこの場に来ていた。

冒険者というのは薄情なもので、仕事の成功が帝都の安全よりも優先するらしい。

「つまり、何もできないということ?」

「申し訳ないですが、僕たちは今日のところは関わる事ができません」

まさかの返答にジエツトは絶望的な表情で天を仰ぎ、もはや二人で逃走することしか考えられなかったが、アルシエはそうではなかった。

次は、今回の仕事に際して紹介されていたフルーダの高弟のもとへ向かうという。

見れば、吸血鬼ヴァンパイアも死者の大魔法使いエルダールリッチも、追ってきてはいない。こちらには幻術を見破ったことを証明する手段など無く、向こうにはアダマントイブ級冒険者としての絶大な信用があるからだろう。

あるいは、この舞踏会が終わった後でいくらでも対処できると思われるのかもしれない。

着く。ジエツトの手を引くアルシエは、特に妨害も無いままフルーダの高弟のもとへ辿り着く。

そこで高弟の協力を得て、警備担当の騎士だけでなくこの日の段取りを詳細に把握している儀典官まで集めさせ、即席の会議を成立させる。

帝都の中枢に第五位階を使う吸血鬼が出現したなど荒唐無稽に過ぎる情報だが、さすがは帝国最高の魔法使いフルーダからの依頼だというだけあって恐ろしいほどの信

頼度だ。

ジエットの見た吸血鬼——ヴァンパイアアダマンタイト級冒険者チーム『ザ・ダークウオリアー』の一員として舞踏会に現れた少女キーノの正体は、かつて王国のアダマンタイト級冒険者『蒼の薔薇』を支配し王宮にまで出入りしていた邪悪な吸血鬼イビルアイであるらしい。それは伝説の『国墮とし』と同一人物である可能性も高いという。

その正体が語られると、当然ながら集まった者たちの緊張は最高潮となる。

ジエットも死者の大魔法使いの恐ろしい姿を思い出して口を挟もうとするが——。

「あ、あの、ヴァンパイア吸血鬼の部下に化け物がいたとしたら、どうでしょうか」

「人でも化け物でも変わるものか！ 我々はそのらの化け物を軽く蹴散らせるアダマンタイト級冒険者が吸血鬼のシモベだという前提で話しているのだぞ！」

冷静沈着なアルシエと違い、怯え混じりのジエットでは話にもならない。

確かにヴァンパイア吸血鬼は人間をシモベにすることができるし、アダマンタイト級冒険者の脅威度はそれ自体が化け物級であって死者の大魔法使いとも大差は無い。

——やっぱり俺なんて、戦闘経験のある人たちとは違うよな。

そんな打ちのめされた考えで、ジエットが自分と同じ側の人間であろう儀典官を見れば、その目には確かな光が輝いていた。

「そういえば、かの『ザ・ダークウオリアー』には最近フルード様との面会の記録がこ

ございますが——」

儀典官は、重要な行事では招待客の全てについて独自に照会を行うらしい。

その時は、冒険者組合で登録されているより少ない人数で来ていたため、注意すべき事柄として儀典官全員で情報を共有していたという。

来ていなかったのは、当然ながら問題の吸血鬼だ。

もちろん、こういう悪夢のような状況を予見したのではなく、別行動による招待状態への対処など快適なもてなしを考えての情報のようだが。

「おそらく、フルーダ様の前には露見を恐れて出られなかったのでしょうか」

そこからは、方針はすぐに決まった。

こちらを追わなかった吸血鬼は、まだ通常の冒険者として振る舞うつもりであるため、そこを突く。

まずはフルーダの名を出すことで以前に訪れた三人を呼び出し、分断することになった。

「——よし!! 吸血鬼だけが残ったぞ!!」

監視用のマジックアイテムの映像を見て、ジエットは目を疑った。

死者の大魔法使いが、フルーダのもとへ向かうことに同意して美女二人とともに

去っていったのだ。

人類最高の大魔法使いであるフルーダならば、死者の大魔法使いごときはもの数ではないだろう。

よほどの幻術を施されているのか、愚かなのかはわからないが、最強の吸血鬼が一人になったのは大きい。

「さて、次はモモンの名を使って呼び出すことを提案致します」

また儀典官だ。男女関係についても事前に調べておくことで、招待客への失礼を避けられるとのこと。

「人外であるため演技なのでしようが、あの吸血鬼はモモンなる男を慕うような関係を周囲に見せておりました。それを活用する策がございます」

非戦闘員といっても、やはり一流の役人である。結局、この場にはジエットと同じ側の人間など一人も居ないのだ。

儀典官は、「このような場の機微に関してはお任せください」などと絶対の自信を見せる。

周囲は吸血鬼ヴァンパイアとシモベの間にそのような関係などあるものかと訝いぶかしげな顔をするが、ジエットからは良案であるように見える。

モモンとはあの死者の大魔法使いだ。生前の仲間か気に入った男を何らかの方法で

アンデッドにしたのかもしれないし、そうでなくても共に行動するアンデッド同士であればしもべの人間たちより一段近い存在である可能性が高い。吸血鬼の眷族ではないのだから、単純な上下関係ではないと考える方が自然かもしれない。

「俺も賛成です！俺の『目』にもそういう風に見えました！」

ジエットの唐突な発言に、たかが学生が何を、という視線が集まるが、何かを察してくれた雰囲気のアルシエがすぐにその意見を支え、フールーダの高弟が賛同することで流れが決まった。

命を賭けることになる儀典官は数秒だけ戦う男の顔になり、すぐに柔らかなものに戻る。

そして、戦闘能力皆無な一人の役人の身で、第五位階の魔法を使う吸血鬼ヴァンパイアに挑む――。

『ザ・ダークウオリアー』のキーノお嬢様でございますか？ 実は、モモン様よりサプライズで依頼されておりましたドレスが出来上がっております」

その言葉に、監視側の全員が凍り付く。

吸血鬼ヴァンパイアの魅了能力について、重大な行き違いがあったのだろう。全てを操作されているしもべがサプライズで主人に贈り物をするなど、人類の知る限りではあり得ないことだ。

しかし、ジエットだけは成功を確信する。なにしろモモンはしもべではなく、自由意

志を持つてであろう死者の大魔法使いなのだから。

「大丈夫です！ きつと、大丈夫」

その一言が暴発を防ぐ間に、一同は奇跡を目にする。

吸血鬼——アダマンタイト級冒険者のキーノと名乗る少女が、世にも幸せそうな顔で
ヴァンパイア
 儀典官の後をついてきたのだ。

まるで本当の少女のような、ウキウキとした踊るような足取り——吸血鬼と
ヴァンパイア
 死者の大魔法使いは、本当に恋人関係だったのかもしれない。

そこからは、警備の騎士たちの出番となる。

儀典官もブロックサイン等を駆使して意思疎通を行い、キーノを目標の地点までやす
 やすと誘導していく。

ほっと一息ついたジエットの前に、アルシエの顔が迫っていた。

抜けるような白い肌、品の良い端正な顔立ち。透き通るような蒼い目。

憧れ、尊敬し、大恩のあるお嬢様だが、これほど近くで見ることができたのは初めて
 だ。

爽やかなライムのような香りは、お嬢様の汗からくるものだろうか。

じつと瞳の中を見つめるような視線を受け、ジエットの顔が熱くなる。

「どうして大丈夫なの？　そういう風に、というのは何を見たの？」

「実は、俺が見たのは吸血鬼ヴァンパイアだけではなくて——」

頬を、強く打たれた。

ジエツトが真実を話した瞬間のことだ。乾いた打撃音が頭の中で反響し続ける。

その衝撃はよろめくほどのもの。

アルシエに頬を張られたのだ。それも、かなり強く。

「もう、帰っていい。あなたを巻き込んだのは間違いだった」

「お嬢様、申し訳ありません。口を挟みにくくて、その……」

「そういう問題じゃない」

ジエツトは、アルシエの怒りの表情を初めて見た。

長く世話になつていなかったら真顔にしか見えないような表情だが、確かに眉が少し

寄つていて、目つきには険しさがあつた。

「何か困つたら歌う林檎亭の『フォーサイト』を探せばいい。報酬は家まで届けるから安

心してほしい」

「いえ、俺だつて尻尾を巻いて帰るわけには——」

「あなたはもう要らないから、帰るべき。あなたの言葉では誰も信じないし、もうできる

ハハハハハハ」

アルシエから向けられた厳しい視線には、不思議と冷たさのようなものは含まれていなかった。

その瞳の奥には姉が弟を護るような温かみさえ感じられる。

確かに、ジエツトは未熟だ。それでも、アルシエの豹変に自分を危険から遠ざけようとする意図さえ透けて見えてしまえば、納得がいくはずがない。

しかし場の空気にもまれたとはいえ、重要な情報を飲み込んでいたジエツトに反論の材料も無い。

「——フルーダ様に重要な情報を直接伝える必要がある。速やかに案内をお願いします」

「その彼は？」

「必要ない。大人しく帰らないなら混乱を防ぐため安全な場所で拘束してください」

住む世界の違いを思い知らされたせいだろうか。

アルシエの声は、今のジエツトには以前より遠くで聞こえているように感じられた。

「お客様のお召し物はこちらでござい用意させていただきますいております」

イビルアイが案内されたのは、奇妙なデザインのランタンが灯るだけの、何も無い部屋。

直感だが、あのランタンは魔法のアイテムだ。部屋にもものが無いのは、何らかの効果を隅々まで及ぼすためか。

それに気づけば、頭は瞬時に切り替わる。

左右の扉からは、少なからぬ不穏な気配。背後にも近づいているが、そちらは少ない。今いる廊下にも、何らかの魔法的な防護がありそうだ。

「……やはり、遠慮させてもらおう」

その一言で、周囲の気配が慌ただしく動き出す。

イビルアイは来た道を駆け出すが――。

「(ト)は――通さぬ！」

両手に盾を持った豪胆な男が行く手を遮り、その盾を蹴りつけて方向を変えれば豪槍を持った金髪の女が無言で容赦ない一撃を繰り出す。

いずれも黒く瀟洒な鎧を身に着けていて、帝国四騎士かそれに比肩する地位にあるものと思われる。

「いきなりご挨拶だな。理由を聞いていいか？」

「第五位階マジック・キャスターの魔法詠唱者でありながら、その身のこなし。間違いはありませんね。人外に常識は通用しないのでしょうか、皇城の守りを甘く見ないでいただきたいものです」

口を開いたのは、同じ黒の鎧を身に着けた端麗な雰囲気の男。

豪槍の女も近づいてくる。

「帝国四騎士が三人も揃えば、どんな化け物でも抵抗は無意味。観念した方がよろしいですわ」

——私が人外、化け物だと！ モモン様のアイテムの高度な幻術が破られたとでもいうのか！

第五位階まで使えるイビルアイでも決して破れない幻術だったはずだが、帝国には第六位階に到達した究極マジック・キャスターの魔法詠唱者フルーダ・パラダインの存在がある。高度な魔法か未知の手段によって正体が露見したと考えるほかないだろう。

そして、この間合い——何らかの魔法を発動しても、少なくとも二人の攻撃を受ける距離だ。他に、ボウガンを持った騎士が幾人かこちらを狙っている。

それでも、攻撃を受けながら倒すことは可能だ。だが、それでは冒険者であるモモンに取り返しのつかない迷惑がかかってしまう。

ただ、騎士の口ぶりからすれば、イビルアイの正体について完璧な証拠を持っている

ようには思えない。

イビルアイは迷わず逃走を選択した。

少々の混乱は起こるが、通路を戻り、広い会場を通過する逃走ルート进行を描く。

そこへ到達する直前、通路に現れたのは純白のウェディングドレス姿の女だ。

「んふふ、ひっそりしつぶりー」

「な……クレマンティーン、だと！　ここで会ったが百ね——ぐっ！」

クレマンティーンはドレスの腰元から、以前と同じオリハルコンの輝きを持つスティレットを取り出してきた。

驚いた拍子に、背後からボウガンの矢を受けてしまう。

「待て！　皇妃様だ！　撃つな！」「皇妃様をお守りせねば！」「不動」！　皇妃様の前へ回れないか」

騎士たちはボウガンの次弾を思いとどまる。

——この女が皇妃……馬鹿な!?

イビルアイにとっては痛覚の鈍い不死の身体に受けた傷より、騎士たちの言葉の衝撃の方が大きい。

当の「皇妃」は、高級そうな純白のドレスを床につけることも躊躇せず、身を屈めて戦闘態勢をとっている。

その目に灯るのは、復讐の炎だ。

モモンと二人でマールとクレマンティーンを痛めつけて以来の、再会——。

「あんたらは逃げ道塞いでてくれればいーから。私はこいつを徹底的に痛めつけて、殺したいけど——捕まえる！」

「ふん、マールが居なければ同じことだ」

そんな挑発が意味をなしたかはわからない。

クレマンティーンクレマンティーンの純白の皇妃が繰り出す刺突はあまりに速く、鋭い。吸血鬼ヴァンパイアであつても魔法詠唱者マジック・キャスターのイビルアイが狭い通路ではやりあうには危険な相手だ。

だが、ここでの対処は決まっている。目的は違うが、『蒼の薔薇』の大切な仲間が命を賭けて見せたやり方だ。

次の瞬間、イビルアイの差し出した左腕をステイレットが貫いていた。

「ふふ、腕一本もらったよ」

「そうだな——『飛行』フライ！」

イビルアイの詠唱とほぼ同時にクレマンティーンがステイレットに込めた魔法を發動する。

そこから噴き出すのは、かつてティアの命を奪つたのと同じ大きな炎だ。

左腕は一瞬にして赤熱し、炎を吹き出しながら膨れあがる。

ステイレットが貫いていた骨が炭化すると、解放されたイビルアイはそのまま全力で後方へ飛ぶ。

身体にも大きなダメージを負いながら、ファイアボール火球の爆風に飛ばされるように騎士たちの方へ突っ込んでいく。

「ぐうっ！ 《砂サンドの領域・全域》！」

このとき使ったのは、仲間を巻き込みかねないため『漆黑』との戦いでは使えなかった対集団の行動阻害魔法。

多対一の「一」の側で輝くのは、クレマンティーヌだけではない。イビルアイもまた、かつてはそういう生き方に合った戦い方を磨いてきたのだ。

目潰しの砂塵に襲われることで通路を埋めた騎士の一団に隙が生じ、活路ができる。

女騎士の豪槍で肩口に傷を負いながらも、どうにか突破することに成功した。

本来ならここから距離を離して魔法一閃で終わりだが、守るものがあるイビルアイにはそれはできない。

——深追いは無いはず。今日の主役がいつまでも不在というわけにはいくまい。

返り血に染まったクレマンティーヌを尻目に、イビルアイは一転して会場から離れる方向へ逃走を開始する。

厄介な騎士の精鋭に行動阻害をかけた以上、クレマンティーヌさえ引き離せばどうに

でもなるからだ。

六〇 帝都を救った大賢者（舞踏会／後編）

フルーダは湧き上がる興奮に小さく身を震わせていた。

騎士たちから事情は聴いている。同時に懇願されたのは『ザ・ダークウオリアー』の足止めのための、面会。

奇しくも、フルーダがマーレから依頼されて舞踏会の招待状を出すよう手配させたアダマントイト級冒険者チームの一つである。

そして、最も気になっている冒険者チームでもある。

フルーダは魔導の深淵を語り合える者を常に求めている。

帝国を本拠としていたアダマントイト級冒険者チームについては、全て自分の“目”で魔法の位階を確認する機会を作って把握済みだが、それほどの実力者は居ない。

だから残る一つ、『ザ・ダークウオリアー』こそがマーレの関係者であろうと、期待は大いに膨らんだ。

だが、『ザ・ダークウオリアー』は、見えなかつたのだ。

高弟に得させた情報でフルーダの“目”で見ることができる魔力系魔法詠唱者と確認していたはずのナーベさえ、全く魔法の力を持たない者であるかのように、力が感

じられなかった。

「使いの者が招待状を渡す際の僅かな時間、離れた場所より覗き見ただけだが、フルーダの『目』に狂いはないはずだ。

あるいは、探知防御か。よそ者であるはずの彼らに舞い込んだ突然の招待に、警戒させてしまったのかもしれない。

だから、彼らにせよ他の何者かにせよ、自分の居ない場所で何かが見えればと考え、同じ『目』の能力を持つアルシエを使って会場を調べさせていたのだが。

——まさか、あのと同居なかった幼い少女が第五階とはな。

それが吸血鬼などと言われれば、さすがに何者かは理解できる。

変装などをして正体もマジックアイテムで隠していたのだろうが、考えてみればマーレが捕えていた第五階を使う吸血鬼と背格好も近い。

となれば、『ザ・ダークウオリアー』は騎士たちが言うように吸血鬼のしもべなどではなく、逆に吸血鬼を従えるだけの力を持っているはずだ。

——さて、これで良いか。

フルーダは出るつもりはなかった舞踏会のため運び込まれた最高級品のローブを身に着け、身だしなみを整える。

立场上、自身の身だしなみは帝国の威信に繋がるが、今日に限ってはそんなことはど

うでもいい。

礼を尽くせばこそ、探知防御をしたまま人と会うことの非礼を指摘することも許される。そう思うのだ。

——探知系の能力を行使するのも礼儀知らずだが……私の生まれながらの異能は広く知られているからな。

フルーダは扉をノックし、中へ。

「お待たせ致しました」

すぐに視線は『ザ・ダークウオリアー』の「美姫」ナーベに固定される。

残る一人について話をするべきなのだろうが、フルーダとしてはまだ見えていない方が重要なのだ。

「……魔力系魔法マジック・キャスター詠唱者と、聞いておりましたが」

「ああ、なるほど。……ナーベよ、ここでは指輪を外しても良いのではないか」

「畏まりました」

指輪が外れると——力の奔流がフルーダの視界を染め上げた。

「な、な……」

信じがたい感覚。フルーダにしか見えない世界で押し寄せるのは、見たことも感じたこともない強大な圧力。

マーレの集団転移という異次元の力を見てより、期待はしていた。

己を超える力の存在についても、覚悟はできていた。

しかし――。

「この強大な力は……第八位階……か……」

フルーダの第六位階さえ、前人未到の領域だ。

人智を超える神話の領域の力を持つのがこのような若く美しい女性だという現実を前に、フルーダは驚愕に身を震わせる。

それが、マーレのような長命の種族でさえないのだ。

――この者もまた、見た目通りの存在ではないということか。そういえば、吸血鬼がどうか言っていたな。

第五位階を使う吸血鬼――そんな帝都アーウィンター存亡の危機も、今のフルーダにはどうでもよいことだ。

どうせ目の前のナーベが使役している下っ端であろう、という程度にしか思えない。

そんな時、部屋の裏口がノックされる。

来訪者は、至福の出会いのきっかけを作ってくれた、かつての優秀な生徒だ。

――そういえば、この世界は私だけのものではなかったのだな。

この世界とは、“目”を持つ者の世界ということ。

扉の向こうのアルシエこそ、その世界を共有できる存在であり、ここで彼女に閉ざす扉は無い。

この出会いに貢献してくれた彼女には、この至福を共有する権利がある。
フルーダはそう考えた。

アルシエは、困難な仕事に挑もうとしていた。

ジエツトが言うからには、あのモモンが死者の大魔法使いであるのは間違いないはずだ。

ならば、なぜアルシエの「目」で魔法の位階が見えなかったのか。

それではフルーダの「目」によっても同じ結果となるはずであり、真実を伝えても説得力は得られない。それが、あの場で死者の大魔法使いに言及しなかった理由だ。

ジエツトを帰したのも、彼の能力を証明する方法が無く、連れてきたところで説得力が増すことはないからだ。万一の場合を考えれば、真実を知る者を安全な所にも残しておいた方が良いという考えもある。

とはいえ、魔力系魔法詠唱者であるはずのナーベもフルーダからは見えないのだから、その不審さを直接に指摘して危険性を説くくらいは可能はず——。

そう考えて急いだが、既に先客が居た。

当然だ。

フルーダは第六位階魔法を使う帝国最強の存在であつて、第五位階を使う吸血鬼のしもべとなる程度の相手に不覚を取ることはいない。

また、帝都の中枢でフルーダに狼藉を働く愚か者が居るわけがない。普通ならそのように考える。

具体的なことを言えなかつた以上、アルシエの「重要な情報」を待たせる必要など無いのだ。

——駄目だ。私もジェットのことを言えない。

当人たちを前に危険性を指摘するのは難しいが、今さら悔いても仕方がない。

戦いになれば自分は生き残れないだろうが、この場でそれはありえないという考えもあつた。

アルシエは意を決して、扉を叩く。

「——先生、人払いをお願いします。大至急お伝えしたいことが」

「構わん！ 今すぐ入つてくるといい」

部屋の中には、圧倒的な力が渦巻いていた。その元は、魔法詠唱者のナーベだ。

マジック・キヤスター

アルシエは荒れ狂う圧力に魂を揺さぶられたような気がして、身をすくめてしまう。

ガントレットの片方を外し、なぜか手持ち無沙汰のように頭を描いている黒鎧エルダーリッチの戦士の動きも不審だが、元々アンデッドの考えることなど理解できないし、今はそれどころではない。

「……………ううっ」

アルシエは両手で口を押さえ、ガタガタと震える。絞り出さなければならぬ言葉があるはずなのに、出てこない。

ナーベの位階は力としては嫌というほど感じられるが、想像もつかない領域だ。第六位階のフルーダと見比べることで、どうにか認識できる。

「アルシエよ、わかるか？ このお方は、第八位階に到達しているのだよ」
フルーダさえも震え声だ。

——先生でさえかなわない存在なんて……でも、どうせ駄目でも何もしないよりは！
あの吸血鬼は確かにアルシエの方を見ていた。今さら逃げ隠れしても遅いだろう。

アルシエは奥歯を噛みしめ、力の奔流に抵抗して口を開く。

「先生！ その戦士は死者エルの大魔法ダーリッチ使いです!! おそらく吸血鬼とともにその女が、使役、をし、て……」

刹那、膨れ上がった強烈な憎悪、いや、明確な殺意とも呼ぶべきものにさらされ、アルシエは声を継げなくなる。

フルーダさえも、出かかった言葉とともに息を飲む。

殺意の出所は、ナーベと、隣の金髪の美女だ。

「言うに事欠いて、エルダーリツチ、だと」

ナーベから発せられたのは、その美貌からは想像もできない、底冷えするような声だ。そこにあるのは、秘密を暴露された怒りだろう。

「待て、ナーベ、ソリユシア。そう怒るな。今回はこちらが視野を塞いでいるせいなのだから、見せてやればいいさ」

対照的に、エルダーリツチ戦士は状況を楽しんでいるかのような余裕を見せる。

そして、ガントレットを外してあつた手を少し大仰な動作で前に出し、嵌めている指輪の一つをゆっくりと外した。

「——！」

一瞬、閃光が全てを満たした。

次に襲ってきたのは悪寒と極度の恐怖——そして、吐き気だ。

「——うおげええええ!!」

人智を超えた存在が不快げに首をかしげる。

「どうした？ 人の顔を見ながら吐くとは、失礼ではないかな？」

「あ、ありえな——おえええええ！」

酸っぱい汚液が服を汚すが、構ってはいられない。

頼みのフルーダを見ても、ただ震え、はらはらと涙を流しているだけ。

——逃げないと。逃げるしかない。今すぐ！

膝がカクカクと笑い、立っていられなくなつてその場に崩れ落ちてしまう。

未曾有の恐怖がアルシエの心を押し潰していく。

「桁が違う！ 死者の大魔法使いなんて範疇で収まる存在じゃない！ もう駄目！ 何もかも終わり！」

発狂したように頭を振るアルシエは、剥がれゆく正気の部分でフルーダから向けられた視線に驚く。

それは、帝国中の魔法使いの敬意を一身に集めてきたフルーダがおよそ他人に向けたいことが無いような、忌々しい虫けらを見るような目だ。

「うるさい！ 黙っておれ！ 獅子の心ときき心」

フルーダの魔法により、アルシエは恐慌状態より強制的に回復させられる。

しかし、回復しない方が良かったかもしれない。

「……神よ」

杖に掴まって立ち上がったアルシエが見たのは、額を床に叩きつけて平伏するフルーダの姿だった。

「——貴方様がどのような存在であろうと、私にとつては神にも等しい存在でございませぬ。愚かな弟子が無礼を働いたことをお許しく下さい」

「……………そ」

油断を誘う言葉か——そう思いたかった。

しかし、何を犠牲にしても教えを乞おうという師の言葉、その姿勢には、一切の偽りは感じられない。

アルシエはより深い絶望が全身を満たしていくのを感じた。

「ところで、娘よ。お前はいつたい、何を見たのかな？」

幻術で作りに出しているであろう戦士の顔が問う。その偽りの顔に優しい笑みを浮かべて。

「アルシエー… 知っていることを全て言うのだ！」

厳しい声を向けてくるフールーダの顔は、アルシエの知る偉大な大魔法使いとは似ても似つかぬもの。

魔導の深淵を覗き見るためならいかなる者をも食い散らす魔物のようにさえ見えた。

アルシエは全身を侵食する絶望と震えを抑え込み、最後の気力を振り絞って駆け出す。

入ってきた扉に手をかけ、引く。

しかし、視界の端に滑るように急接近してきた金髪の女を認めると、すぐに腕を掴まれてしまう。

そのまま押さえ込まれ、不思議な柔らかいものに視界を塞がれると、それに丸ごと飲み込まれるような不思議な浮遊感を感じた。

「とりあえず、それは眠らせておけ。もうすぐ——が来る」

それが、遠のく意識の中で最後に聞いた声だ。

この日、フルーダの執務室は皇城において最大の戦場であつたとされる。

いくつもの火ファイアボール球の焼け焦げや内装の傷が、大賢者が帝都を救つたとされる戦闘の激しさを物語っていた。

そこではフルーダとその手で精神支配を解かれた『ザ・ダークウオリアー』の三人が共闘し、『ザ・ダークウオリアー』を魔法で支配して皇城へ侵入した恐るべき吸血鬼を撃退したということになっている。

戦闘についての記録にはアルシェ・イーブ・リイル・フルトの名は無いが、状況証拠と遺品により、室内に残された半ば灰になって身元の分からない遺体がそうであると判断された。

関係者によれば、少女は特別な才能を持った優秀な魔法使いで、かつての師フルーダに危険を知らせるため単身で戦場に飛び込んだという。

フルト家には少なからぬ謝礼が支払われ、その家系の才能に期待をかけられた二人の妹はフルーダの推薦する特別試験奨学生として帝国魔法学院に入学することとなる。

もつとも二人はすぐに東の魔導国へ“留学”することになるのだが、それはまた別の話。

「お嬢様……俺は、どうすればいいんですか」

後にアルシエの訃報を聞いたジエットは、途方もない真実を飲み込んだまま、アルシエの墓の前で一日中座り込んでいた。

幸い、それを監視する存在は無かった。

式典の後の宴は、皇帝主催の舞踏会に近い形で行われていた。

裏では様々な戦いがあつたが、表向きはあくまで平穩無事を装うことができた。

舞踏会の形式をとるのは、有力貴族どころか、少し前は臣民でさえなかつたクレマンティーヌを正妃に迎えるにあたり、少しでも貴族社会の反応を確かめておきたかつたのと、同時にその反応を緩やかなものにしておきたかつたという二つの理由からだ。

舞踏会ならば、皇帝や正妃、あるいは国寶が現れるまで長く時間をとることができ。もちろん衣装直しやら休憩やらの都合もあるが、多くの貴族だけが出揃つた状態で談の輪を広げてもらうことが狙いだ。

皇帝への不敬が許されないような場ではあるが、それでも人の口には戸は立てられない。様々な不満が噴出するだろう。

むしろ、それは必要なことなのだ。

そういう不満を全体で共有してもらうことで、不満の程度は舞踏会で口に出せる程度のレベルに収斂していく。

元々正妃の地位に手が届かないような地位の貴族たちが「陛下ほどのお方が下賤の女に」などと呆れてみせれば、今回のことを覆したい大貴族が国家の一大事であるように喧伝するのは難しくなる。自然と、舌禍にならない程度の陰口でガス抜きをしてくれるだろう。

特に今回の結婚はクレマンティーヌ本人さえ気づかないほどの性急さで行われたた

め、貴族社会にも青天の霹靂だ。大貴族さえ気付いてから自前の会合を持つ時間も無かった。そんな状況で舞踏会を迎えることができたのは幸いなことだ。

始まってみると、広間での話題は意外にばらけた。

クレマンティーヌが竜王国への援軍の指揮官となったとき、『漆黑』という名は伏せつつも冒険者上がりであるという情報は広く知られていた。そのため、冒険者上がりごときがとんでもないという常識的な反応も少なくないが、そこかしこに漏れていたスレイン法国との関連性から外交問題を危惧する声も大きくなった。

また南方に領地を持つ貴族を中心に、かつてそのクレマンティーヌが指揮官として派遣された竜王国の動向が不安定に過ぎることから、援軍派遣時の不透明な勝利について様々な憶測が広がってくる。

さらに、当然ながら亜人領域の魔導王なる存在や、人類領域の冒険者でありながらその圧迫外交の使者になった『漆黑』についての否定的な感情も渦巻いてくる。

だが、『漆黑』とクレマンティーヌの關係に触れる者はほとんどいない。

直前に貴族たちが情報に飢えているところへ、スレイン法国や援軍絡みの不確定情報を次々と放り込んでおいた帝国情報局の手柄である。

そんな順調な状況の報告を受けても、ジルクニフは不機嫌だった。

その理由は、招かれざる客——意外な国賓の登場だ。

「皆様、リ・エステイーズ王国使者、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ殿下とそのお付きの方々のご来場になります」

ざわりと微かな困惑のあと、会場に大きなどよめきが広がった。

困惑は、魔導王モモンガなる者の使者という不透明な位置づけの『漆黒』が、隣国の国賓よりも優先されたこと。

これは、帝国が魔導王なる者の勢力をリ・エステイーズ王国より上と見なしているというメツセージになる。

しかし、その後のどよめきはそれを上回るものだ。

もちろん、それは彼女の「黄金」の二つ名が示す圧倒的な美貌に向けられたものではない。

例年ならば宣戦を済ませ、軍編成を行っているこの時期。明日にでも王国へ宣戦布告の書状が届くような時期に、慶事とはいえ第三王女の訪問というのは型破りに過ぎるのだ。

大貴族たちは互いを探し合ってその顔を見合わせるが、すぐに全員が狐につままれたような表情になる。王国に縁のある貴族も含め、誰も事前に聞いていない。

つまり、根回しも何も無しに、本来の国賓と入れ替わるように現れたということにな

る。

もし彼らがその報告を受けた皇帝ジルクニフの顔を見ることができたなら、驚いたのはお前もかと安堵したことだろう。

「本当に……本当に気持ち悪い女だ。慶事の一報だけで、どうやってこれを察知した？

いったい何を考えているんだ……」

ジルクニフは苦い顔で吐き捨てた。

そもそも今回、王国の使者は欠席の見込みと聞いていた。

かつて『蒼の薔薇』を手駒としていた王国の第三王女は、今やろくに外の情報を得る

手段を持たないはずだ。

名簿をひたたくって見れば、やはり王国の使者としては外交担当のイブル侯などでは

なく王国六大貴族のレエブン侯の名がある。

欠席を見込む場合、このように外交の場面には通常出てこず、しかし非礼にもならな

い格の高い大貴族の名を入れておくのがセオリーなのだ。

実際には外交担当者が欠席を判断したとしても、事前の招待の段階で断るのは角が立つ。そして直前の欠席ならば自分より大物が欠席したことにした方が後に非礼を詫びやすいからそういう名前を入れておき、招待した側も欠席見込みと察しておくという、

面子を重視する貴族社会らしい慣習である。

この慣習には、こうした場では事前に伝えた名より格下の者を出席させることは非礼にあたるため、外交担当者自身は出席したくともできなかつたという言い訳が立つという利点もある。

逆に予定より使者としての格が上の者が出席する分には何の問題もないが、そのような前例は全く無く、誰も考えた事さえなかつた。

そして、ラナーはそれを逆手に取つたということだ。

そこまでして来なければならぬ理由は何か。

名前を貸したか、下手をすると使節団まで貸し与えたであろうレエブン侯とは、どこまで近づいているのか。

既にラナーは実行力を持つレエブン侯と近づき、以前のような手も足も持たない思考力だけの存在ではないと考えるべきなのか。

ジルクニフは、考えれば考えるほど自分が蜘蛛の巣に絡まっていくような不快感と閉塞感に囚われていった。

エンリは華やかな会場に圧倒されていた。

いざ入ってみれば、クレマンティーヌどころか皇帝さえもどこにいるやら、何もわからなくなる。

内装の上質さではモモンガの漆黒の塔に劣るが、着飾った貴族の群れを見るのも人生で初めてのことで、その雰囲気は圧倒されてしまう。

ダンスの訓練は恐ろしいものを見て卒倒したことで自分では積んでいないが、死の宝珠が着実に習得してくれたおかげで最低限の動きはできるようになっている。

当然、マーレの方が上手いのだが、合わせるだけならどうにかなるといふ状態。

本当は訓練もマーレと一緒にやりたかったが、本番を味わえるだけでも幸せだ。

曇りひとつない魔法銀の髪飾りをつけ、可憐な水色のドレスに身を包んだ完璧な美少女マーレ。

その手を取れば子供らしい柔らかさや高い体温が伝わってきて、上目遣いのおどおどした視線とともにエンリの頭の中をピンク色の幸せで満たしてくれる。

今は、そんな幸せで蕩けているべき時だ。

頭の中をピンク色で満たしておかないと、あの名状しがたい黒い頭部を思い出してし

まうから。

エンリはひたすらマールの手をふにふにと握り、ダンスに集中していた。

そんなとき、エンリは華美な装いの女性たちの中でも群を抜いて美しい王女ラナーに呼び止められる。

マールに比肩しうるほどの美しさに圧倒されながらもピンクの色の幸せは一気に吹き飛び、失礼のないよう必死に対応することに神経を大きくすり減らすことになった。

だが、その王女が口にした話題は、そんな小さな苦労など吹き飛んでしまうような深刻なものだ。

帝国と王国の間では、毎年戦争が行われている。

今年はこの慶事で遅れているが、おそらく開戦はそう遠くは無いはずだ。

そんな状況で、今、王国側ではエ・ランテルを中心に奇妙な噂が蔓延しているという。帝国と接近した『漆黑』のエンリは、もともと帝国側の謀略のために王国に潜り込んでいた存在なのではないか。

エ・ランテル近郊の多くの集落を滅ぼした襲撃は法国の仕業ということにされているが、やはりエンリと帝国が画策したことなのではないか。

唯一助かったカルネ村は、エンリと通じて帝国と繋がっていたのではないか。そういう話が広がっているというのだ。

「あのときに滅びて離散した中に、かつて蒼の薔薇に危機を救われたことのある集落があったそうです」

カルネ村以外の集落は襲撃によって消滅したが、法国兵たちは住民を殺し尽したわけではない。

暗殺対象の王国戦士長ガゼフ・ストロノーフをおびき寄せるため、襲撃の情報が伝わるようあえて何割かを逃がしていたのだ。

そして、その住民の多くはエ・ランテルで暮らしている。

『蒼の薔薇』をおぞましい力でねじ伏せた『漆黒』が、帝国と手を結んだ——そんな情報が恐ろしげな魔法複写とともに伝われば、そうした者たちが元々『漆黒』に感じていた違和感を口にするのは当然のことだ。

悪いことに、それは竜の背ドラゴンに乗ったエンリと手を結んだ帝国への警戒心の後押しされ、王国内の幾つかの貴族にまで広まっている。

「戦争の際には、何か大変なことが起こってしまうかもしれません。私はそれが恐ろしくて、恐ろしくて……。場合によっては、敵と見なしたカルネ村への出兵なども——」

「そんな——」

エンリには、目の前の慈悲深い王女が自分の故郷を心配して伝えてくれたことがよく理解できた。

王女ラナーには、自分への偏見が全く見られないからだ。

「私には何の力もありませんが、私のメイドたちまで噂が回ってくるのはよほどのことだと思うのです」

実際には情報の動きは正反対なのだが、それを知ることができる者はラナー以外にはいない。

王宮にメイドとして潜り込んでいる女たちは、それを主人のもとへ迅速に届けることだけが仕事なのだから。

第三王女の身边に転がる情報など本来ならば価値が低いものだが、英雄級が存在であつた『蒼の薔薇』の不祥事に関わることならば話は別なのだ。

「き、貴重なお話をありがとうございます」

エンリは純粋な感謝を込めて頭を下げる。

自分に何ができるかはわからないが、故郷の人々を見捨てるという考えだけはありえない。

—— 貴族や王族の世界なんて魑魅魍魎だらけだと思つてたけど、こんなに素晴らしい人もいるんだ。

帝国貴族の強引な歓談の誘いによってエンリから引き離されるラナーを見送りながら、エンリの思考は一人次元の違う暖かな領域にあった。

エンリが時々自信なきげに隣の美少女を見る視線をすっかり確認されていたことなど、気付くはずもない。

まして、遠方に居た皇帝シルクニフがラナーとエンリの接近にやきもきして「あの女を『漆黒』から引き離せ！」などと息のかかった貴族を送り込んだことにも、気付きもしないのだ。

エンリが自覚するものといえば、周囲の偏見に満ちた視線だけ。

それも無理もないことだ。

女の身でありながら、舞踏会では男性の衣装と考えれば遜色のない漆黒の法服に身を包み、芸術品のようなドレスを身に着けた最高の美少女マールをエスコートしているのだから。

極度の緊張により自然と目つきが険しくなりながらも頻繁にマールに視線を送るエンリの姿は、パートナーというより美少女を一方的に所有する者の雰囲気を漂わせていた。

帝都ではごく一部にしか知られていなかったエンリの特殊な性的傾向についての噂が広まるのも、もはや時間の問題かもしれない。

「おおおー！」

去りかけたラナーがパタパタと戻ってきて、身を屈めてマーレの手を取って何やら挨拶をすると、幾人かの貴族たちがうめき声をあげた。

帝都アーウィンタールにて奇跡的に交わった、完璧な二つの美の競演である。

会場の魔法複写官などは、その瞬間の映像を逃したことを生涯後悔したことだろう。

エンリは、無垢な子供を演じていたマーレの表情が一瞬だけ素に戻ったような気がしてドキリとしたが、周囲の声のせいでは何を話しているのかは聞こえなかった。

結局は何事も起こらずに済んだので、気のせいだと思うことにした。

「……くは。頭が痛い」

「おいおい、病み上がりなのは皆同じだろ。それであのエンリはどうだったんだ？」

仲間に答えを急かすのは、漆黒聖典第七席次「神領縛鎖」エドガール・ククフ・ボマルシエだ。

病み上がりなのは漆黒聖典の大部分がそうであつて、正確に言えば「死に上がり」ということになる。

「その前に、隣の少女だ」

それは、エンリの舞踏会のパートナー。幼いながらも誰しも目を奪われる美貌の少女だ。

普段は冷静沈着で、能力が露見しないよう振る舞う仲間が、その少女に限っては吸い込まれるように凝視し続けている。

「ほほおう？ お前、まさか惚れたか？ 人の色恋にどうこう言う気は無いが、俺たち漆黒聖典の血は人類の財産であつて、子供が産めないような年齢のガキについていうのは——」

そこまで軽口を叩いたところで、色を失つていく仲間の顔に気付く。

「——あれが、どうした」

「あれは、隊長並みに、強い」

「……おい！ それはさすがに……いや、それがお前の力だよな。にしても、そればっかりは……信じたくはないんだが」

エドガールは再び仲間の目を覗き込み、そしてうなだれる。

「——なんだよ……それは……」

漆黒聖典の隊長は失踪中ということになっているが、人類を超える神人と呼ばれる存在で、スレイン法国の切り札だ。

それに勝る存在が現れるということはそれだけで衝撃だが、さらに大きな問題がある。

隊長は破滅の竜王と対峙してから行方不明ということになってはいるが、破滅の竜王の正体がわからない以上、それを追っているなど生存に期待する声が根強い。

そんな時に、破滅の竜王との関係が疑われる『漆黒』にそのような強者が存在するとすると——隊長の現状について、最悪の可能性さえ疑われてしまう。

「エドガール。少しだけ注意してほしいんだが——」

少女と隊長、どちらが強いかまではわからない、ということを言い添えてくる。桁外れの存在については正しく比較できないのが、彼の能力の限界だ。

口下手な男だが、やはり最悪とは違う可能性を考えたいのだろう。

「それで、まさかあのエンリまで隊長並みとか言わないよな」

「それは無いが……それでも私たちよりは上だ。あと、それ以上の強さで冒険者の少女が一人居てな。役人に連れられて奥へ向かって行ったが」

「またガキか。他に……ガキの居る冒険者となると、『ザ・ダークウオリアー』か。他のメンバーはどうなんだ？」

「それが……全然強さを感じなかった。この会場はわからないことが多すぎる」
「マジックアイテムという線もあるだろう」

「神々の残せしアイテムが、三人分というのは考えられない」

それくらいの品でない、この仲間の持つ能力を妨げることはできない。つまり――

「やばいのは『漆黑』だけではないってことになるな」

「……最後にもう一人の本命だが、とりあえず本物であることには間違いがない。以前より少し強くなっていく程度だ」

元々、今回は『漆黑』のエンリの強さと、クレマンティーヌの真贋を見極めるのが目的だった。

「今さらあれが本命などと言われても微妙な気分になるが、あのクレマンティーヌの奴が白いドレスを着てしおらしくしているのを見てると変な笑いが出てくるよな」

「まあ、見ものではあったな」

生真面目な友の珍しい笑顔を見て、エドガールはにやりと口の端をつり上げる。

人選を誤っていたら、息が止まるほど大笑いをして潜伏が露見しかねないところだったかもしれない。

六一 少女たちの終着点／ラナーとジルクニフ

「その役目、是非このシャルティアにお任せいただけませんでしょうか！」
意外な申し出に、モモンガは軽い驚きの表情でシャルティアを見る。

ナザリック地下大墳墓で尋問といえどニューロニストの専売特許であるが、一人で旅をしていた時にマールも相当なことができるようになったとは聞いている。

しかし、シャルティアにそのような設定があつた記憶は――。

――ペロンチーノ……。そうか、守備範囲広かつたよな。

記憶は無いが、おそらく可能であろうと思われた。

ただし、シャルティアの創造主ペロンチーノの好んだエロゲー的な手法でということになりかねない。

身代わりの死体を配達してもらう際、シャルティアはあの娘のことを見ているのだ。

モモンガは無い眉を顰めるような表情になり、本音を聞いてみる。

「それは、もしや何らかの性的な楽しみを見出している事なのかね？」

「いえ……実は大きな声で言うとか心得の無い者も名乗り出てしまいかねないため、モモンガ様だけにお聞かせしたい理由があるのであります」

顔を赤らめるシャルティアを見れば期待はできないが、大切な友人の子供たちの話には耳を傾けるべきだ。

「ほう。では、こちらへ寄って、聞かせてみよう」

「では、失礼しんす」

モモンガが魔法の結界で音を遮断すると、シャルティアがほんのり赤く染めた顔を結界の中へ寄せて耳打ちする。

冷たい唇で紡ぐ言葉には、熱い情熱が籠もっていた。

「——ふむ、よかろう。いつ必要になるかわからないし、シャルティアが担当するのが妥当な理由もあるということだな。あの娘——アルシエに関しては好きにするがよい」

こうして、師であるフルーダより捧げられた哀れなアルシエ・イーブ・リイル・フルトの身柄とその尋問は、シャルティアの手に委ねられた。

——まあ、無茶はしないだろうし、大丈夫だろう。

不肖の弟子の命も捧げるが、せめて苦痛は最低限にしてやってほしいとフルーダから言われている。それだけは言い含めておかなければならない。

モモンガは伝え聞くマールレの拷問やニューロニストの設定を思い出し、軽く頭を振る。

たったそれだけの条件を叶えてやろうと思うだけで、「シャルティアで悪くなかった

かも！」と思えてしまうナザリック地下大墳墓のNPCの陣容は、もしかしたら相当に偏っているのかもしれない。

シャルティアがアルシエを獲得した理由は、もちろんニューロニストやマーレが行うような過酷な拷問とは違う手段で尋問ができるということもあるが、それだけではない。

もちろん、尋問自体を愉しむのが主目的ということでもない。人間の娘ごとき、そこに落ちていけば拾って玩具にすることはあっても、至高の御方に願い出てまで欲しがるうとは思わない。

本当の理由は、ダンスだ。

——わらわが、いつの日かモモンガ様と、ダンスを……!!

シャルティアは蕩けそうになる表情を引き締めつつ、小脇に抱えたアルシエを持ち帰った。

その姿は吸血鬼としては通常の御馳走お持ち帰りとは大差なく、ある種の競合関係にある智者アルベドさえも不審を感じさせなかった。

そして、この日のシャルティアは冴えていた。

アルシエは帝国の貴族令嬢であり、ダンスを教えることができる可能性は高い。そして、モモンガはいずれ自分もダンスをするかもしれないとして教えられる者を求めていた。

これは千載一遇のチャンスだ。

モモンガのパートナーを務めるべくダンスを習うのであれば、守護者としての仕事の合間にやらねばならない。となれば、不眠不休で行動できるアンデッドのシャルティアこそが適任ということになる。

もちろんダンスというのは舞踏会などに出るためのものであるから、ナザリックを留守にしてみよう。守護者統括のような重い責任を抱えた者には絶対に任せられない。

多忙なモモンガとの訓練の段階となれば、転移魔法を駆使して神出鬼没なシャルティアの特性がより強く活きるのだ。

そんな熱い主張を「あ、ハイ」と暖かい相槌をうちつつ優しく受け止めてくれた至高の御方に全力で報いねばナザリックの守護者として失格であろう。

もちろん、その前に本来の目的——任せられている尋問を済ませなければならぬ。

このアルシエは脆弱な人間だが、高度な幻術を看破してモモンガ扮するモモンの正体を見破った、油断ならない存在だ。

魔法の位階を見破るだけでなく、幻術まで見破る生まれながらの異能を持っていて、それでモモンの正体を見破ったのか。

あるいは、他の手段でそうなったのか。

それは絶対に判明させなければならぬが、後で本人の生まれながらの異能を活用することを考えれば、人格を破壊するわけにはいかない。

吸血鬼化についても、元のユグドラシルのゲーム世界には存在しなかった生まれながらの異能を残したままにできるかどうか不明であるから、他の生まれながらの異能を持つ人間で実験してからでなければ不可能だ。

一応、実験用の人間を探してもらうことになるが、時間もかかるだろう。ならば、今は自分らしく、できることをするしかない――。

自室の一つである拷問道具の散乱する玄室に着いたシャルティアは、端のソファに置いた新しい玩具の顔にぬるりと舌を這わせた。

「……塩味」

「――んっ……んっは……っ。」

「おや、起きんしたか。では、まずはお風呂にでも入りましょ」

「綺麗……。……。っ！ あなたは、誰？」

ぼんやりと眩き、周囲を見回すと、アルシエはソファの上で半身を起こして後ずさる。

「お前の主となる者、シャルティアよ」

「そうか……私は先生に……。ここは、何処？」

「ここは栄えあるナザリツク地下大墳墓の第三層、階層守護者たるわらわの部屋よ。

……何を泣いておられるの？ 悲しいことがあったんでありませんか？」

シャルティアは、アルシエの心に刻まれた絶望を知らない。

「なざりつ——墳墓？ もしかして、あのエルダーリツチと関……け……い……」

言いかけて、青ざめる。玄室に満ちる冷気じみた気配に、アルシエは震える。

「……あ、あ？」

シャルティアの美しい顔が怒りに歪み、瞳に紅いものが広がる。

目の前には、至高の存在をエルダーリツチなどと呼ぶ無知蒙昧で愚劣な存在——その首を刎ねずに堪えるのは、ナザリツクの守護者として相応の苦痛を伴うことだからだ。

傷を付けずに尋問せよという命令を発したのが至高の御方その人で無ければ、既にアルシエは醜い肉片となり果てていただろう。

「ひっ……これも吸血鬼！」

五体満足なアルシエは、至高の御方の慈悲に後ろ足で泥をかけるようにこの場から駆け出す。

シャルティアの住居は幾つもの玄室からなっており、それらを隔てる重々しい扉は

シャルティアの性格を反映して多くが半開きであったり開けっ放しだ。

「おおよ、まずは鬼ごっこ？ これから色々遊びましようねえ。あはははは」

逃げるアルシエの背中を撫でつけるのは、吐息に血の混じったようなシャルティアの無邪気な声だった。

「キーノよ。冒険者を辞めて、私のところへ来い」

その言葉は、幾百、幾千とイビルアイの桃色の世界の中で繰り返されていた。

ヴァンパイア吸血鬼の上位種たるイビルアイは、簀巻きにされて荷物のように運ばれても辛くはないのだ。

むしろ、何も邪魔の入らない真つ暗な世界で桃色の妄想に包まれながら、ただ極上の言葉を噛みしめていられるという幸せが、いつまでも続けば良いとさえ思う。

その身を幾重にも包んでいるどこかの大魔法使いのローブから発せられる強烈な防虫ハーブの香りと僅かに残っているかもしれない近い世代二百歳以上のの老人の残り香など、意識し

ないようにすれば何ということもない。

それどころか、毒無効という体質でなければ、このハーブで朦朧とすることで幸せな妄想の世界により深く入り込めたのではないか、などと惜しんでしまう気持ちさえあるくらいだ。

この日、イビルアイは失態を犯した。

理由はわからない。不用意に誘いに乗って、単独行動を取ったのが間違いだったのかもしれない。

バハルス帝国の、よりもよってその皇城の中で吸血鬼の正体が露見してしまった。大勢に追われ、そして逃亡のためとはいえ騎士たちを傷つけてしまった。

多くの人間に顔や体格を覚えられた。これが帝国において記念すべき日であったことを考えると、自分の姿が入った魔法複写さえ残されているかもしれない。

こうなつては、人間に混じって冒険者をするのを諦めるよう言われても、反論のしようが無い。自分がモモンの名声を傷つけるくらいなら、ひっそりと人間の領域から去る方がマシだとさえ考えた。

しかし、冒険者を諦めても、モモンを諦めずに済んだのは幸いなことだ。

「世界じゅうの人間に追われても、私の家から出なければ絶対に大丈夫だ」

事ここに及んでも、モモンはイビルアイを護る騎士であり続けた。

その腕に抱かれたまま連れて行ってもらえるなら、二人の愛の巢に着くまでに身体が蕩けて愛するモモンの腕からこぼれ落ちてしまうかもしれない。そんなことさえ心配した。

だが、現実はこの簀巻きだ。

お姫様抱つこの状態でモモンの言葉に蕩けている間に、間に合わせに大魔法使いのクロゼットから調達されたロープでくるくるくると手際よく巻かれてしまったのだ。

僅かな寂しさもあるが、これはイビルアイが蕩けてなくなってしまうように包んでいるのだと考えるしかない。

簀巻きの中は、イビルアイの脳内で繰り返される言葉を除けば、しんとした静寂に包まれていた。

この静寂をもたらしたのは、モモンの仲間ナーベか、あるいは、モモンとなぜか協力関係にあったフルーダの仕事かもしれない。

イビルアイは呼吸などしないが、身じろぎの音が漏れないよう、わざわざ魔法で音を遮断する結界を作つてあつた。

現実的に考えれば、全てを覆うのはイビルアイの正体を看破した幻術への対策だろう。荷物のように担がれるのは残念でもあつたが、仕方のないことだ。

だから、外の世界のこととは何もわからない。

イビルアイは桃色の妄想に包まれながら、ただモモンとの愛の巢に運ばれていく幸せをかみしめていた。

「冒険者に未練があるなら、数十年か数百年経って、忘れられた頃に一緒にやればいい」布が視界を覆う直前、そんなことも言われた。

そんな冗談を言う男だとは思わなかったが、不思議とふざけている雰囲気は無かった。

モモンは、自分が先に逝ってしまうことをわかっていて、それをイビルアイが気に病まないようにそんなことを言ったのだ。

少なくとも、モモンの優しい声に頬を染めたイビルアイの中では、そういうことになつていた。

そうなつてしまえば、イビルアイの桃色の希望の中に、一つの不安がわだかまる。

イビルアイは不老である。いくら幸せに暮らしたところで、数十年もすればモモンに先立たれて一人になってしまう。

それでも自分の人生の中で、一度くらいは女としての生き方があつても良い——当初モモンと会った時はそう思うことで恋の炎を燃え上がらせたのだが。

実際にこうしてモモンに手が届いてしまうと、果たしてその時の喪失感に耐えられるのか、自信が持てないのだ。

自分はもう冒険者になることはできない。モモンの傍らにはナーベヤソリユシアという優秀な冒険者が居続けるのだらう。それは仕方のないことだ。

自分は子供を孕めない。それも、他の女に作ってもらったって構わない。ナーベヤソリユシアの態度を見れば、彼女らのいづれかが、あるいは両方がその役目を担うことさえ考えられる。それさえも——いつか一番の愛情を勝ち取るつもりではあるが——モモンの幸せのために受け入れるべきことだらう。

しかし、モモンを失うということだけは、どう考えても受け入れられる気がしない。いつか訪れるその別れが、自分自身をどのように引き裂いてしまうのか。考えるだけで恐ろしいのだ。

桃色の思考に身をゆだねても、これからも続いていく偉大な戦士モモンの英雄譚サーガに思いを馳せても、それだけは意識の片隅にこびりついて片時も離れようとしない。

それを考えてしまつてからのイビルアイは、桃色の盾や鎧を幾重にも繰り出して身を護る、激しい戦いの中に身を置いているようなものだった。

それは、悲劇的な結末以外ありえないとわかっている、絶望的な戦いだ。

だから、どこだかわからない瀟洒な部屋で、布を解かれてモモンと再会した時——。いつものヘルム付き全身鎧で表情が見えないながらも、どこか気まずそうな雰囲気

で、イビルアイが借りていたのと同じ指輪を外す姿を見て――。

そこから漂う、不死の気配――それだけで、イビルアイは感極まってしまった。

――「数十年か数百年経って、忘れられた頃に一緒にやればいい」

それは、冗談でもなければ、慰めでもなかった。

隠し事を咎めようとか、何者であるか確かめようとか、そういう発想は出てこなかった。

モモンが言い訳めいた言葉を口にする間もなく、イビルアイはその胸の真ん中にぼんと飛び込んで、声をあげて泣いた。

イビルアイ――キーノ・ファスリス・インベルンの二百五十年に及ぶ孤独は、この日、終わりを迎えた。

黒塗りの額縁に収められた二枚の情景は、絵画ではなかった。

何者かが悪意を塗りこめたかのようなそれらは、油彩の凹凸も水彩の滲みも無い、正

真正銘の魔法複写だ。すなわち、現実存在した情景を写し取ったものということになる。

共通の被写体は、周囲を蔑むように見下ろす黒衣の女。その人こそ、彼らが見間違うはずもない『漆黒』のエンリであった。

それは、王都郊外の小さな村から始まった。

やんごとなき身分の者であろうと、人を使つて組合も通さずに冒険者を雇い、このような場所へ呼び出す——普通に考えれば、そんな危険な依頼に関わろうという馬鹿は居ない。

しかし、介在したのが面識のある元オリハルコン級冒険者チームの面々となれば、『漆黒の剣』のメンバーの四人としては他の依頼を押しつけてでも受ける価値のあるものになる。

そして、出会ったのは平民に多大な慈愛をもたらしてきた黄金の姫だ。若き冒険者たちは英雄譚サイガの生き証人になったかのような興奮に小さく震えていた。

依頼の経緯の胡散臭さを最も強く感じ取っていたルクルトは黄金ラの姫ナの微笑み一つでのぼせあがり、人の良いペテルとダインはその優しさに大いに共感し、ニニヤは私たちの激変に少しだけ呆れつつも、『漆黒』への嫌悪の種火が再び燃え上がるのを感じた。

ラナーは帝国で開催される舞踏会の使者として帝都を訪れる。各国から国賓が訪れるのは普通のことだが、例年なら戦争が近いこの時期となるとリ・エステーゼ王国からは欠席となるのが通例なのだ。

曰く、帝国で恐ろしいことが起きているかもしれない。

曰く、この身を犠牲にしても、正しい情報を持ち帰りたい。

そのために、レエブン侯の優秀な護衛たる元オリハルコン級チームの面々を借り受け、さらに『漆黑』の過去を知る『漆黑の剣』には帝都での情報収集を依頼するというのだ。

遠距離で拘束時間もかなり長いが、報酬もそれに応じたものが提示される。

しかし、彼らにはそんなことは関係なかった。

「もちろん、やります！」「是非ともやらせてください！」「姫様にお近づきになれただけで頑張れる気がします」「必要以上に近寄ろうとしないのである！」

『漆黑の剣』は途中でエ・ランテルを迂回して、帝国に入ってから帝都手前の街で落ち合うことになった。

ニニヤは悪い噂のあるカルネ村の調査を主張し、なぜかダインが追従するが、ニニヤと同じくらい村を怪しんでいたルクルットが止める。

「待ち合わせがあるのに仕事に関係ない危険を冒すわけにはいかねえだろ。俺たちがメ

インの仕事じゃねえんだ」

「疑いを解いておきたかったのであるが……」

ダインは噂によつて周囲から白眼視される村人たちの方を心配していたが、憧れの先輩冒険者たちに迷惑をかける選択肢をとることはできない。

帝都では、あの『漆黑』絡みということで細心の注意を払った『漆黑の剣』だが、表面的な情報は容易に集まった。

最低限の情報として、魔法複写に間違いがないことが確認され、ドラゴン竜で帝都に乗り付ける以前にも、ワーカーとのトラブルや目撃談が得られた。

より深い情報を目指して情報屋に接触すると、『フォーサイト』のアルシエやフルーダといった名に繋がってくる。

「国の機密に近づくことになりまますから、くれぐれも気を付けてください」

ワーカーでも魔法詠唱者マジック・キャスターならば、帝都の養成機関である魔法学院を通して繋がりがあ
るのではないか。

ラナーのそんな気づきが『漆黑の剣』を危険へと誘うものであるなら、口先だけで薄っぺらい注意を促してどうにかなるものでもない。

しかし、その場にいた者たち——『漆黑の剣』の四人と、ラナーの護衛クライムはそ

のような邪推とは無縁だ。

レエブン侯の配下たちは、あくまで舞踏会の供としてレエブン侯から貸し出してもらったという立場もあつてラナーが遠慮し、この件に関わっていない。

そして、『漆黒の剣』が帝国魔法学院に関して調べ始めると、学費に困って情報を買りに来たことがあるという女子学生、オーネステイ・エイゼルを紹介される。

ニニヤと歳の頃も近い少女とは、セキユリテイ万全の学院から出てきたところで待ち合わせた。そこから出てくること自体が、帝国でも最高レベルの身分証明だからだ。

オーネステイはおどおどした大人しい雰囲気の少女で、一人で情報屋のようなことができるようにはとても見えない。

四人はオーネステイから学院の学生や卒業生がやっている情報屋的な集まりがあると聞き、無防備ドラゴンに路地の奥の建物の地下へと付いていくが――。

「帝都に竜ドラゴンで乗り付けるような最強のアダマンタイト級冒険者――そんな相手を、あなた方のような十人並の冒険者が調べてどうするのでしょうか？」

口調は何も変わらず、大人しそうな無表情もそのままだが、オーネステイはそれまでと決定的に違う空気を纏っていた。そして、周囲に満ちる別の気配。

次の瞬間、ルクルットがオーネステイに、そしてオーネステイがニニヤにナイフを突

き付けろ。

「てめえも、『漆黒』とつるんでやがるのかよ」

「……………別につるんでは、いませんが」

そして、出口からも奥からも、ガラの悪い男たちが現れる。

「おい、その程度の奴らに見透かされてんなよ、役立たず」

「う、動くな！」

ルクルットはオーネステイに突き付けたナイフを見せるが、男たちは意に介さない。「その役立たず、別に殺っちまってもいいんだぜ。学院生を殺した犯罪者が相手ならこっちもやりやすくなるしな」

そう言ったのは、街の治安を維持する騎士隊と同じ格好をする男だ。見れば男たちの恰好は多彩で、騎士にオーネステイと同じ学院生、そして冒険者風の男までいる。

「そういうことを言うのなら、情報源も一人減らしてあげましょうか」

役立たずと言われたオーネステイが暗い笑みを浮かべ、二ニヤの首にナイフの切っ先を少し食い込ませる。

「俺たちの負けだ！ ルクルット、やめておけ」「命よりは情報をやりとりする方がマシなのである」

ペテルが場を収め、ダインはその場に座り込んだ。ルクルットがオーネステイを放す

と、オーネステイはニニヤを放して男たちの側へ。

「こちらも『漆黒』の情報が欲しいだけなんですよ。お付き合いいただけますね？」

「……『漆黒』の仲間でないのなら、僕たちの敵だとは考えません」

オーネステイから投げられたハンカチで首筋の血をぬぐいながら、ニニヤはあくまで目の前の者たちとは違う所へ敵意を向ける。

情報を集めるといふ名目で乗り込んだ帝都だが、相手が何者であれ、おぞましい『漆黒』の告発に躊躇は無い。

舞踏会を終えたラナーは、いつもと変わらず美しく、そして慈悲深かった。

クライムが『漆黒の剣』からの定時連絡が途絶えたことを報告すると、ラナーの美しい顔貌は悲しみに曇る。

「彼らを見捨てるわけにはいきませんが、私の立場で彼らを待つて留まると言うことはできません。なので、クライム。皆さんには体調を悪くしたと伝えてもらえますか？」

「畏まりました。では、しばらく出立は無理とお伝えしておきます」

クライムは恭しく頭を垂れる。

戦争の近いこの時期に帝都に留まる王女ラナーの判断は危険なものだが、その慈愛の

心に意見することなどできはしない。

万一の場合もレエブン侯がつけてくれた最強の護衛たちもいるし、クライム自身も命を賭けてランナーを護れば良いだけのことだ。

だが、最悪のケースにおいては、『漆黒の剣』からも一気にランナーまで辿られてしまう。クライムは反対したのだが、ランナーは冒険者たち一人一人に直筆の手紙を渡してある。

そこには、十分な身代金を支払うので速やかな解放を望むとの内容と、リ・エステイ・ゼ王国第三王女ランナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフ直筆のサインがしたためられていた。

——「私は人を使うとはそういうことだと考えております」

そう言い切るランナーに対し、冒険者たちは目に涙さえ溜めてそれを拒み、最終的には依頼者の命令ということで押し付けられていた。

義理堅い者たちなので簡単に手紙を使うとは思えないが、捕まって持ち物を探られれば同じことだろう。

要人警護という観点では確実にマイナスとなるその手紙の存在を知るのは、当の冒険者たちを除けばランナーとクライムだけだ。

「……クライム？　大丈夫です。あなたも居ますし、彼らもいます。私が病にでも臥

せっていて、誰も動かずにいるのが一番安全なのです」

クライムは王女によって迷い込んだ思考の海から引き揚げられた。

そうだ。できることは何もない。

自分は王女を護るのが仕事だ。

クライムは知っている。

レエブン侯の部下である元オリハルコン級冒険者チームの面々と『漆黒の剣』の間には面識がある。

ただ囚われたとなれば、彼らは救出に向かってしまうかもしれない。

しかし、例の手紙の存在がある。

警備が手薄になった所で、彼らを捕えた者たちがラナーに近づけば、クライム一人ではひとたまりもない。

金級冒険者である『漆黒の剣』の一人一人の実力はクライムとそう変わるものではないから、それを捕えるような勢力が相手ならばレエブン侯の部下たちの存在は必須なのだ。

だから、クライムは密かに手紙の存在を明かし、頭を下げる。ラナーの安全のためとはいえ、秘密を明かす後ろめたさに耐えながら。

吸血鬼侵入騒動で苛立っていたジルクニフは、厳選された報告書の束を無慈悲に投げつけた。

厳選というのは、情報局としても皇妃クレマンティーヌに惚れ込んでいるジルクニフの不興を買わぬよう、問題のある部分を丁寧にそぎ落とし加工し、厳選に厳選を重ねた経緯があるということだ。

それも皇妃の醜聞を単純にそぎ落としたわけではなく、情報としての価値を損なわないよう、多くをエンリなどの同行者に押し付けてリアリティを損なわないよう務めた会心の仕事だった。

それがたった一つの名前によって、全て無価値なものとされてしまった。

「あの女のことだ、わざわざ捕えさせる目的で撒き餌をしてきたに決まっている！」

あの女とは、リ・エステイーゼ王国第三王女ラナー・ティエール・シャルドルン・ライル・ヴァイセルフ。

まるでこちらを挑発するかのよう、冒険者全員にこれ見よがしに直筆の手紙を持たせていた王国の要人だ。

「では、解放せずに殺しましょうか」

「馬鹿を言うな。そいつらはおそらく、『漆黒』の悪い噂を作り出していた者とも繋がっ

ている。この時期に殺せば、婚礼自体についても悪評を立てやすくなるであろう」
情報局の女は口をばくばくさせる。

婚礼の主役たるクレマンティーヌの悪評など今さらこの場で言及できるはずもないのだが、そんなものは報告書を作る段階で手控えさえしなければ元々大量にあるのだ。寵姫として一応置かれただけかと思えば、身元調査している間に正妃に成り上がってしまい、焼却処分にした報告書だつてある。

「……………では、しばらく身柄を確保して向こうの出方を」
「要らん！一刻も早く解放しろ！これ以上あの女にひつかき回されてたまるものか！」

この瞬間、『漆黒の剣』の一刻も早い解放が決まった。

「——そうだ、この件であの女に攪乱されるのも腹が立つからな。その報告書や、付随する情報は後で指定する箱に封印して俺の書庫に保管しておけ」

「……………はい」

書庫行き——それは、仕事の成果が無に帰して、顧みることも許されないという意味である。

情報局の女は落ち込んだが、その日のうちに命令を実行した。

その後、ランナーは冒険者たちを心配するあまり食が細くなり、『漆黒の剣』が解放される頃には病と心労によるものだとして床に伏せってしまった。

その回復を待ちながら少しずつ移動し、エ・ランテルへの到着予定は戦争の直前にまですれ込むこととなる。

両国の緊張の高まる中での移動だが、優秀な護衛たちの存在がそれを支えている。

第十四章

六二 宣戦と、カルネ村出兵

「バハルス帝国は東の亜人たちの王にしてトブの大森林の支配者、魔導王モモンガと同盟を結んだ。

もともと、エ・ランテル近郊は大森林の影響下にあり、魔導王モモンガの慈悲なくば人類の居住領域とすることも不能な土地である。

そのため、それと関わりの無いリ・エステーゼ王国による占拠には正当性が無く、帝国は王国に対し不法な占拠状態の即時の解消を求めるものである。

従わないのであれば、帝国は魔導王モモンガとの同盟に従って王国に侵攻を開始し、かの地を不当なる占拠者より解放するであろう。

これは正義の戦いである」

帝国より届いた書状は、例年に比べても余りにも型破りなものであった。

もともと無茶な要求を受け取り、突っぱねて、それから最終的な宣戦布告が届くという段取りであるにしても、だ。

馬鹿馬鹿しい主張と断じながらも、念のため王国史における大森林との関わりまでが調べられたが、モモンガなる名はどこにも発見できていない。

同席していた王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは、マールから聞いていたモモンガの名を王城で出していないことを思い出して、胸をなでおろす。

しかし――。

「エ・ランテル近郊といえば、ストロノーフ戦士長殿、何といたしましたかな？　危ない所を助けられたという」

「……『漆黒』のことでしょうか。彼らは単なる使者として、このモモンガなる者に使われたと聞き及んでおりますが」

皮肉交じりの問いに答えるガゼフは、平民出身の自身を取り立ててくれた国王のみに忠誠を捧げる立ち位置にあり、王国において優勢な貴族派閥の貴族たちの大半に嫌われている。

最近まで拮抗していたのだが、王派閥に連なるインドラ家の縁者の不祥事――冒険者となっていた令嬢ラクユース・アルベイン・デイル・インドラが神官の身で危険なアンデッドを匿っていたことで各神殿から討伐対象とされ、実際に討伐されて失踪したという事件――が伝わったことで自主的に爵位を返上し、その流れで縁戚関係にある幾つかの家や寄り親的な大貴族までもが宮廷での役職を返上するという事件があり、派閥

間のバランスが崩れてしまったのだ。

そして、貴族たちは自国他国を問わず、危険なゴシップが好物だ。

ガゼフでさえ友好的でない貴族から薄笑いとともに見せられたことのある “複写”

を知らぬはずもない。

「竜を貸し与えられる程度には頻繁に使われているようだな」
ドラゴン

「以前からの信頼関係なのでしょう。自分たちの主人の土地を見回るついでに助けてくれたわけだ」

「焼き討ちと例の『漆黒』に関するききな臭い噂も真実だったのかもしれない。戦士長殿もいい面の皮だ」

「いやいや、命あつての物種でしょう。名誉など無い平民の戦士団ですから逃げ足は王国屈指かもしれません」

含み笑いがあちらこちらから漏れる。

くだらない噂など立場ある人間が言及するに値しないものだと考えているので、ガゼフはいちいち対応しない。

しかし、この日の貴族たちはガゼフを貶めるだけでは終わらない。

「かの『漆黒』と馴染みの戦士長殿は、竜ドラゴンに對抗する手段をお持ちなのですか？」

「今度は逃げ足で勝つても意味がありませんぞ」

「巨大な竜ドラゴンに踏み荒らされ、廃墟となってまでエ・ランテルを守ることに何の価値がありましようや」

「真の王ならば、その身を削って民の嘆きを回避しうる策から目を背けてはなりません」
優勢な貴族派閥の者たちは、ガゼフが抵抗をしないと見るや、次は王の領土を減らすことを口にする。王の土地など、自らの兵に比べれば価値は低いということだ。

「エ・ランテルは王の直轄領なるぞ！ 敵に媚びるなら勝手に貴様の領土をくれてやれば良い！」

「何を言うー！ 奴らが狙っているのはエ・ランテル近郊だ。かの地の民を竜ドラゴンから守る手段を貴様は持っているのか！」

王派閥の貴族も言い返すが、今は勢いが違う。

そして、本来ならば優位に立って余裕のあるはずの貴族派閥も、今回の戦争では竜ドラゴンという規格外の存在の介入を恐れているのが本音だ。

そして、その問題を王派閥に押し付けたところで、誰も有効な解決手段を示すことなどできはしない。

結果、悪口雑言が飛び交うばかりとなってしまう。

「そろそろ、くだらない口喧嘩を収めていただきましようか」

その一声で場を鎮めるのは、レエブン侯だ。

——ここで、この最悪の状況に絡んでいるこの男が諫めてくれるか。

ガゼフは唇を噛みしめる。

不祥事の当事者であるアインドラの娘——ガゼフ・ストロノーフの依頼を受けて動いた『蒼の薔薇』のラキュースは、王都を発つ直前、レエブン侯の屋敷に招かれている。

王都で冒険者の少年が「最強の合同チームができた」などと漏らしていた話を部下から伝え聞いており、レエブン侯の部下とともにエ・ランテルへ向かったのは確実だ。

その結果、『蒼の薔薇』は『漆黒』に「討伐」され、レエブン侯の部下たちは何事もなく戻ってきた。

ガゼフはくれぐれも『漆黒』と戦わないように言い含めていたが、エ・ランテル都市長パナソレイなどに聞けば『蒼の薔薇』は当初から『漆黒』と対立する姿勢であったという。それが誰の策略によるものかは、もはや火を見るよりも明らかなことだ。

「陛下に従う者のみで軍を編成したところで、敗れば私たちの領土も危険に晒されることでしょう。同じように、高い城壁を持つエ・ランテルを差し出すことも将来の危険を招くことにしかありません。ですから、私の軍も全力で陛下に協力させていただきま
す」

レエブン侯は貴族派閥の者たちを諫めるが、その顔には嫌らしい薄い笑みを張り付け

たまたま。

この男さえ居なければ、派閥の均衡が崩れ王が苦境に陥ることはなかった。

この男さえ居なければ、『漆黒』が帝国につくことも無かったかもしれない。さらに、その背後の勢力も。

やはり、帝国と繋がっているのはこの男に違いない。

思えば、レエブン侯が第三王女ラナーと関わるようになったのも、その頃からのことだ。

麗しい黄金の姫の友人である『蒼の薔薇』を『漆黒』と対立させて消し、代わりに自らが王女の話し相手となることで何を目論んでいるのか。

近頃は第二王子ザナックも交えて会っているようだが、貴族派閥が第一王子のバルブ口を後継に推していることを考えると、両派閥に顔が効くこの男が第二王子を推すのは不自然なところもある。

帝国との戦いで弱った所で、内乱でも目論んでいるのかもしれないとさえ思えてくるのだ。

ガゼフは勇敢だという第一王子と知恵に秀でると聞く第二王子を見比べる。

レエブン侯が「王族が剣の腕が立ったところで何の意味があるか」と言っていたことがあるが、そのレエブン侯に軽く抱き込まれてしまっている時点で第二王子の知恵にも

期待は禁物だろう。

王が引退したら、自分も王の護衛だけを務めて暮らしていきたい——そんなことさえ考えてしまうが、王がそれを許すとも思えない。

せめて、王国戦士長の地位を継げるような存在が居てくれれば——。

「——同意しますぞ！ さすがに竜の出現^{ドラゴン}まではあり得ぬ所です。許可を戴けるのであれば、我が精兵の一部をお預け致しましょう！」

貴族派閥の雄、ボウロロップ侯の声を聞いて我に返る。軍事に秀でたこの男の前で恥を晒せば、ガゼフは王に迷惑をかけることになってしまう。

「ふむ。戦士長よ。お前はどうか考える？」

——話、聞いていませんでした！

そんな事を、言えるわけがない。

軍事に関してガゼフが無様な所を見せれば、この場は貴族派閥のボウロロップ侯の独壇場となってしまうからだ。

あるいは、この男と多才なレエブン侯の二人か。いずれにせよ、王と王国にとってはろくでもない組み合わせだ。

ガゼフは慎重に周囲を見回すと、第一王子^{バルブ}の鼻息が荒い。

彼に兵を預け、出陣させようという話題なのだろう。

安全である確信はないが、否定するほどではない。そういう場合、さすがにガゼフが王族の命運を決めるわけにはいかないが――。

「ストロノーフ殿。貴殿なら初陣の危険性はよくご理解されているのではありませんか？」

横合いから、レエブン侯の一言。

じつと、ガゼフの瞳の奥を覗き込むような視線を向けてくる。

この言葉自体には意味はないが、なぜかガゼフがこれに従って出陣に否定的な返答をすることを確信しているかのような雰囲気だ。

しかし、ガゼフには王国の敵であろう者の意思に従うつもりは無い。

むしろ、レエブン侯のおかげで態度を決めることができた。

「いえ、ボウロロープ侯が十分な精兵を付けるならば、危険は無いでしょう」

ボウロロープ侯は軽く頷き、「最低五千は出しましょう」などと続く。

この男を喜ばせるのは気が進まないが、レエブン侯の思惑に乗るよりはマシだ。

裏切り者であろうレエブン侯から向けられる苦々しい侮蔑の視線は、むしろ名譽なものであるのだとさえ思う。

そして王は深く頷き、ガゼフは罪悪感に目を背ける。

「そうか。ならば仕方ない。カルネ村への別動隊はお前に一任する」

「はっ！ かの『漆黒』に連なる反逆者を見つけましたら、すぐにカツツエ平野の陣中へ連行致しましょう！」

——何だと
!!!!!!

ガゼフは愕然として、言葉を失うしかなかった。

周囲に意識を移せば、第一王子^{バルブ}を中心として、帝国へ走った『漆黒』への敵意が渦巻いていた。

カルネ村についての噂はガゼフも耳にしていたが、このような場で問題にするほどのものとは全く考えていなかったのだが。

どうやら、これは帝国軍に呼応して『漆黒』と内通した者が反乱を起こす可能性まで視野に入れてのことであるらしい。

通常なら、冒険者が特定の国家に与しないという不文律をもとに周囲が諫めるところだが、竜^{ドラゴン}の背に乗って使者を務めたという『漆黒』がそんなものを守っているとは、もはや誰も考えていないのだ。

ガゼフは慌てて言うべき言葉を考えるが、今から発言を翻した所で王の顔に泥を塗るだけで意味がないことに思い至って口をつぐむ。

この場では、平民であるガゼフの発言に政治的な重みなど皆無であり、それによつて出された王の結論のみに意味があるのだから。

ガゼフはちらりとレエブン侯を見て、お前などその程度だと言わんばかりの蔑みの視線に含まれた意味を考えるのも億劫になり、どうにでもなれと目を閉じた。

その夜、防音性能は王国一かもしれないレエブン侯の部屋で中年の咆哮が響き渡つた。

「屑は裏切りを！ アホは権力闘争を！ 馬鹿は不和を！ しまいにはあの筋肉ダルマめが、見えている竜ドラゴンの尾を全力で踏み抜きに行けというのか!!」

憤懣は頂点に達しており、レエブン侯は執務机をバンバン叩き、ガシガシ蹴りつける。

ガゼフ同様『漆黑』を見てきた部下の元冒険者たちと話をして対応を考えたいところだが、王女ラナーの帝国行きのお供に貸し出していまだ戻っていない。

『漆黑』の現状を確認し、“皇妃クレマンティヌ”の正体を知るためには必要な措置だったが、最悪のタイミングでの帰還の遅れには運命の悪意さえ感じてしまう。

“風邪気味”だというのは優秀な神官を二人も含むレエブン侯の部下を借りる外向きの方かと思っていたが、その上で“体調不良”でもたついていると伝えられてしま

えば信じるしかない。

おかげで彼らに取り乱している姿を見せずには済んだが、ガゼフの行動について判断材料をしばらく得られないことになってしまった。

そもそも、普段から目先の餌しか見ないゴブリン並みの貴族たちをどうにかまとめようとしても、常に綻びは絶えないのだ。

ならば二つの派閥対立をブレーキに思っていたのに、こうして最低最悪のタイミングで貴族派閥のポウロロープ侯と王の忠臣ストロノーフが意見を同じくしてしまった。

王国内にまともな貴族が全くいないわけではないのだが——かつて若気の至りで、自派閥強化のため全て集めてしまったのが運の尽きだ。

そうやって王国を陰から支えてきたレエブン侯でさえ、苛立ちのあまり自分が全てを破壊してやろうかと考えたことは一度や二度ではない。

そんな破滅願望から自分を救ってくれるのが、五歳になる可愛い息子の姿だ。

部屋に入ってきた息子が膝の上に乗ると、レエブン侯は豹変する。

「リーたんは、かちこくなるんでちゅよー」

これが、先ほど王国の苦境を全身を使って表現していた男の、もう一つの日常である。

我が子の頬に何度もキスをして寝室へ向かうのを見送った後、レエブン侯はふと考える。

——— といえば、ストロノーフには守るべき家族は無かったか。

王国の救いがたい窮状を思えば、誰がいつ破滅願望に囚われてもおかしくはない。

つまり、誰も信用してはならないということだ。——— 最悪、あの王女ラナーさえも。

背筋に、ぞくりとするほど冷たいものが走る。

恐ろしい想像によつて頭を冷やしたレエブン侯は、ガゼフの破滅願望の後始末について考える。

いかに王と諸侯の信望暑いレエブン侯とはいえ、王・貴族両派閥の軍事の第一人者が承認した作戦を覆すのは不可能だ。

——— 王命は覆らない。帝国側に漏れても、カツツエ平野以降で『漆黒』を活かしたければ握りつぶすだろう。つまり、『漆黒』には真実を知る手段は無い。ならば、ここで無理をせずとも連行の途中で排除すれば……。

レエブン侯の夜は、長い。

そして、リ・エステイーズ王国側が三十万を超える兵を集め、エ・ランテルで開戦準備が整った頃のこと。

「法国に記録はなく判断することができないが、もし魔導王モモンガなる存在が事実大森林を支配しており、かの者とバハルス帝国がエ・ランテルを人類領域として保護するつもりがあるのなら、その正当性を尊重するものである」

スレイン法国からの書状は、巫人の王たる存在への警戒感を僅かに見せるものの、魔導王モモンガと敵対する意思のないことを示したものだつた。

普段ならば、エ・ランテルの權益を主張する書状を送つてくるところだ。

周辺国家最大の国力を持つスレイン法国がこのような態度を見せれば、いよいよ普段の戦争との違いが明白になり——ドラゴン 竜の脅威も現実化してくる。

ガゼフは今さらマールレの話を出すこともできないまま、ドラゴン 竜を支配するほどの魔法詠唱者の脅威を論じるが、貴族たちが脅威と見なすのはドラゴン 竜と普段より多い帝国騎士のみであつた。

それに対しても、三十万超という限界まで徴兵した兵力で押しつぶせるとする楽観論が中心だ。

百年以上使われていなかった大型の投石機に職人たちが群がっているが、ドラゴン 竜に埃をかぶつた攻城兵器を持ち出すような発想には閉口せざるを得ない。

会議の後、王に全軍の指揮権を委ねられたレエブン侯の来訪があつたため、ガゼフは王のもとを離れて訓練の視察に出ることにした。

王都を離れる前も、レエブン侯はザナツク第二王子とともに王の私室を訪れたりしていた。王は彼を信頼しているようだが、ガゼフは不信任を手放すことができない。

王の奸臣への信頼を覆すだけの言葉を持たない自分は、そういう場を共にしない方が良いでしょうがするのだ。

先日のカルネ村への出兵の話題では彼の懸念に従うべきだったのかもしれないが、それさえもガゼフの感情を利用した巧妙な誘導であったのではないかと疑っているほどだ

「糞ー」

ガゼフはレエブン侯の狡猾な策謀に対抗する手段を持たない。王国全体が破滅に向かうのをただ見ていることしかできない。

ガゼフはマーレの恐ろしい魔法に対抗する手段を持たない。兵士たちが大地に飲まれてもただ見ていることしかできない。

それでも、ただ愚直に王を護る。

王の剣であり盾であり続けることこそ、ガゼフ・ストロノーフの矜持であった。

戦場となるカツツエ平野に陣を張った帝国軍の片隅、小さな天幕の中でのこと。

「そろそろ時間なので、モモンガ様をお迎えしてきます」

マーレはこの戦争に参加することができる。

帝国の同盟者として援軍を送る魔導王モモンガの従者に徹するつもりらしい。

戦争に参加しないのは冒険者の不文律の一つだが、『漆黑』で冒険者登録があるのはエンリだけなのだ。

小さな天幕を貸し与えられているが、客人という扱いでしかない。

「この箱に宝珠を入れておきます。必要があればエンリを助けてあげるように言っておいたので、困ったら使ってもいいですよ」

そう言い残して、マーレは天幕の外へ出て行った。

マーレと対峙する王国軍が心配になってくるが、今はそれより大切なことがある。

——こんなもの、誰が使うか！ ……今のうちに捨てよう。誰もわからないところに捨てよう。

エンリ・エモットの、宝珠を捨てに行く旅が、今、始まろうと——

「そういえばこの箱なんですけど、魔法とかかかってない只の箱なので、持っただけで影響があるかもしれないので気を付けてください」

ヒヨイと顔を出したマーレが大切なことを言いおいて、そして去っていく。

宝珠を捨ててに行く旅は、始まらなかつた。

とりあえず、残されたミコヒメと二人で帝国軍から貰った糧食をいただくことにする。

ナザリツクのアイテムにより要介護度が大きく下がったのありがたい。

ちなみに、ンファイレアは祖母とともに臨時のポジション職人としてどこかで働いている。

夜逃げ同然で出てきたバレアレ薬品店を帝都で再興するため、この戦争での需要の高まりは絶好の機会なのだろう。

しばらく後、エンリが往生際悪く付近の帝国軍の天幕で頭を下げ、どこからか長い棒と網を調達してもらったあたりで、天幕の中に意外な人物が入ってきた。

「来ましたよー」

「クレマンティーンヌ！ いいの？ 皇妃様がこんな所に来て」

「いいんですよ。視察つてことでどうにか来ることはできたけど、立場が立場だから、せ

めて今年だけは戦争に出るなって言われてヒマなんです。私は暴れたい気分なのに」
クレマンティーヌは部屋の片隅に置かれた箱に目を止め、近づく。

「そっちは駄目！ それに触らないで！」

「うわつと！ これ何なんですか？」

「いい、色々と問題のある物だね。触ったら人類が誰も手に負えない凄い化け物が出てくるよ」

その化け物になるのはクレマンティーヌ自身なのだが、そういう部分は伏せる。

これまでエンリが自力で戦っていなかったことがバレては困るので、宝珠のことは秘密なのだ。

「……部屋の中にそんな危険物置かないでくださいよ」

箱からスルスルと離れるクレマンティーヌ。

「それで、遊びにでも来たってこと？」

「いえ、王国が北へ別動隊を動かしたって聞いたんで、暴れるなら付き合おうかなーと思
いまして」

「そんな！ まさか、本当に……」

カルネ村への出兵の可能性——それは王女ラナーから聞いた話だ。

帝都滞在中にクレマンティーヌにも話し、情報収集を頼んでいた。

表沙汰にされていた情報ではないが、この日、クレマンティーヌが騎士団の幹部にカマをかけることで判明したとのこと。

「行くんでしよう?」

クレマンティーヌの前では平凡な村娘の顔は見せないようにしてきたが、それでも目の前で村に土産を持って行ったりしているの、察してくれているのだろう。

しかし、エンリにはそんな遠方まで行く手段が無い。

エンリがエンリのままならば。

「……お願いできるなら、支度をするから外で待つててくれる? ——少し気持ちを切り替えたくて」

切り替えるのは気持ちではない何かだが。

「もちろんです。ピーストマンの時は置いていかれましたからね。無理はしないけど、行けるところまで付き合いますよ」

——仕方ない。嫌だけど、クレマンティーヌと死の宝珠アなんて最低の組み合わせだけで、私のせいで村のみんなを危険な目には会わせられない!

エンリは箱を開け、死の宝珠を懐にしまった。

心が染められ、邪な笑みが漏れる。

「スケリトルドラゴン」
「骨の竜で行くぞ! ミコヒメ、クレマンティーヌ、早く乗れ!」

死の宝珠
エンリは久々に多くの死を撒き散らすことができる喜びに浸りながら、カルネ村に向かつて空を駆けた。

帝国軍の陣地に幾らか混乱が生じるが、クレマンティーヌが同乗していたおかげで攻撃を受けることだけは免れた。

カツツエ平野を出てエ・ランテル東の街道より北西へ外れ、道なき道を進んでいく。軍や商人の使うルートを避けて迂回したため、とりあえず三体用意した骨スケリトルドラゴンの竜を阻む者は無い。

エンリの記憶に残る風景では、右手に見えるアゼリシア山脈の稜線がトブの大森林の林冠の向こうへ沈んでいく頃にカルネ村へ到達するはずだ。

しかし、この日はそれよりずっと分かりやすく、そして不穏な目印が草原の真ん中から立ち上っていた。

それは、日頃の炊事ではありえないほど野太い、煙の束だ。

だが、今のエンリには焦りは無い。今回はマーレより身体の持ち主のために行動するよう命じられているが、復讐という大義名分を得られれば多くの死が許容されるのは間違いないからだ。

「速度を上げるぞ！ しつかり捕まってる！」

草原の上空より飛来したエンリは、逃げも隠れもしない。

敵襲を知らせる軍ラツパが鳴り、多くの矢が放たれても同じことだ。

王国軍は、高空を飛び刺突を無効とする骨の竜にダメージを与えることができない。

「集落の中ではやりにくいな、燻り出すか？ 《死体操——》」

エンリは固有の感知能力により、操作すべき死体が無いことに気付いて詠唱を止める。

そのまま三体の骨の竜を操作して村の上空から離脱していく。

村の建物は数軒に火がかけられたのみで、戦いの跡などは見られない。

「……どうしたんですか？」

「残念ながら、新たな死の気配が存在しない。彼らに村人の所在を問う必要がある」とはいえ、エンリにも人間の殺意を感じることもくらはできる。

正面から出直してどのようなことになるか、わからないわけではないが——それで

も、全身にみなぎる力を試してみたかった。

それは、地平を埋め尽くすほどの死——マールレによるビーストマン大虐殺に同行してこの身体が獲得した、自らの魔法よりも効率的に死を撒くことができる力だ。

「私は地上に降りて正面から行くが、クレマンティーヌはどうだ？」

「相手は軍で、千や二千じゃきかない数いますけど……穏便な交渉、つてわけじゃなさそうですね」

「臆したのなら、ミコヒメとともに骨スケリトルドラゴンの竜に護らせておくが」

「まさか！ 暴れたい気分だつて言つたはずです」

クレマンティーヌは一度だけぶると震え、内なる昂ぶりを抑え込む。

五千対三。漆黒聖典にあつても経験したことのないような無茶な戦いだが、上空に留まる回復役ミコヒメの守りが絶対である以上、懸念は無い。

そして、地上に残るのはたった二人の女だ。

それらは女の形をした暴力そのものだが、それを察することができるのは場数を踏んだ戦士だけだ。

王国軍より歩み出てきた身なりの良いだけの騎兵は、あくまで威圧的にふるまうことができる。

「我々はリ・エステイーズ王国第一王子、バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・

ヴァイセルフ様の使者として、反逆者に連なる者を捕えんとして来たものである」
 「——旗を見る限り、本物の王族が率いているようです」

最低限の紋章学を修めているクレマンティーンが言葉を添える。

死の宝珠
 エンリは低くよく通る声で騎兵に語り掛ける。

「それはご苦労なことだ。反逆者とやらに心当たりは無いが、村の者たちはどこへ行つたのであろうか」

「とぼけるな！ 反逆者とは貴様のことだ！ 祖国を捨て、バハルス帝国に与する『漆黑』のエンリよ」

「村の全員で逃げたということは、反逆者を全員で匿うという反逆の意思表示であると王子はご判断された！」

騎兵たちは口々に言う。

死の宝珠
 エンリは面倒に思いながらも、エンリの願いを前提に相手の意思を確認する。

「……つまり、お前たちは村の者たちを害するつもりであるか？」

「当然だ。この地は直轄領であり、王子の意に従わぬ行動は許されるものではない！」

「隠れ家はどうかつての襲撃で廃墟となった近郊の集落跡のどれかだろう。冒険者風情がどうかあがこうと、反逆者どもは全て処断してくれるわ」

「貴様がここで素直に捕縛されるならば、慈悲を与えてやらんこともないがな」

「拷問官も連れてきている。逃げれば村人たちがどうなつても知らんぞ！」

漏れ出てくるのは、死の宝珠としては非常に好ましい感情だ。明確な悪意と強い殺意がエンリと村人たちの双方に向けられ、決して択一的なものではない。

たとえエンリ死の宝珠がその身を差し出したところで、見せしめとして村人を処断し、さらにエンリ死の宝珠をも処断して手柄を誇るに違いない。

騎兵たちの中に渦巻く、多くの死に繋がる感情の動きを快適に思いながらも、それを防ぐため数十倍の死をこの地に撒き散らすことができる喜びにエンリ死の宝珠は口の端を釣り上げた。

六三 カルネ村の戦いと、宝珠が望んだアレ

「王国に仇なす反逆者エンリよ！ 我々はここで貴様を捕縛し、カツツエ平野まで連行する！」

兵士たちはたった二人の女を前に槍を並べ、戦闘態勢をとる。

その数は五千余。それに対峙するのはたった二人と、小さな少女を包み隠すように載せて滞空する三体の骨スケリトル・ドラゴンの竜だけだ。

そんな状況でも冒険者の怖さをわかって警戒しているのだから、それなりの精兵ということなのだろう。

「ならば我らは逃げも隠れもせん！ この身を捕えたくば、全軍でかかってくるが良い！」

死の宝珠
エンリが腹の底から声を張り上げると、一旦訪れる静寂。

「……えと、殺しちやっついていーんですよね」

「ああ、殺し放題だ」

当たり前前のことを聞いてくるクレマンティーヌに、優しい微笑みを向ける。

「——ええい、放て！」

王国軍の前衛が集落から横方向に広がり——すぐに二人へ向けて弓が降り注ぐ。

すぐに骨スケルトン・ドラゴンの竜が射線を塞ぎ、多くの弓をその身に受ける。刺突無効の防御を誇るその身体には傷一つつかない。

僅かに向かってくる弓を、二人は軽々と回避する。

「おのれ！ 魔物を使役するとは！」

「クレマンティーヌ、行くぞ」「りよーかいっ！」

「接近戦だ！ 囲め！ 数で押し潰せ！」

死の宝珠 エンリはモモンガより下賜された剣を抜き、二人並んで襲い掛かってきた兵士の首と肩口を軽く薙ぎ払う。

首の落ちた兵士の向こうでは、クレマンティーヌが雑兵を踏み台に騎兵の頭蓋を貫く姿が見える。

それは人間の限界を越えたとも思える速度だが、以前エンリとして見た記憶とは違って全て目で追いきれるし、身体能力の面でも対応は可能だろう。

——やはり、膨大な死を喰らってきた身体は素晴らしいものに成長するな。

人間も死の宝珠と同様、他者の死を喰らって成長レベルアップするものであるのに、よほど興奮しなれば多くの死を望もうとしない。

それが死の宝珠にとって理解しがたい、人間の持つ非効率な部分だ。

——あの女は考え方こそ良いが、戦い方が非効率なのが惜しい。

「化、化けもどおっ！ ——ぐばっ！ がひゅっ！ へぼおっ！」

「ふん、まるで死の詰まった革袋だな。それ、そおれっ！」

次々と首の辺りを狩っていくと、有象無象の断末魔は短く小気味良いものになる。

そうやってエンリ死の宝珠が剣の一振りごとに二、三の死を生み出している間、クレマン

ティー又はステイレットなる刺突武器で、一刺し一刺しを愉しみながら戦っていた。

「ひいひいっ！ やめ、やめええいだだあああ!!」

「——貴様あつ、我ら精鋭を嬲りものにぎいっ!!」

「め、めだ？ めだめだ目玉あああ あっ!!」

「えー、片目残つてりや戦えるでしよーが。だーらしいないなー」

戦士としては強者を仕留めるのに最適化しているクレマンティー又は、弱者を大量に狩る戦い方には向いていないが、もとよりそういう戦い方を選ぶつもりもないらしい。

もたらず死の数はエンリ死の宝珠が勝るが、響く断末魔の質量ではクレマンティー又はが勝る。

周囲が空いて一対一となれば、脚の神経を貫いて崩れ落ちたところで眼窩を穿つなど、死そのものではなく死に至る過程を愉しんでいるようだ。

それによつて流れ込んでくる死の風味も幾らか彩りのあるものとなつているが、死を愉しみ放題のこの状況ではたらふく飯を喰らおうという時に米飯の一粒一粒に味付け

をしているような迂遠さを感じてしまうのだ。

「退け！……いったん退いて弓で射殺せ！……巻き添えになるぞ！」

性急な命令は、指揮官へ着実に近づくクレマンティーヌに恐れをなしてのものだろう。

そのクレマンティーヌは潰走状態の前衛の兵士を追い抜きざまに首を貫き、そのまま弓兵へと躍りかかっていく。

——ふむ、一緒にいてくれないと守れないんだがな。

だが、今回は^{死の宝珠}エンリだけに弓が集中する。

熟練のクレマンティーヌが早々に距離を詰めて対処しただけあって、今回の斉射は練度が非常に高い。

そこで王国兵との間に飛び込んで来る大きな影は——^{スケリトルドラゴン}二体の骨の竜だ。

大量の矢が進路を阻まれ、無為にばらばらと落ちる。

ただ棒立ちしていれば数十の矢を受けただろうし、間に入った骨の^{スケリトルドラゴン}竜も刺突無効の能力を持っていなければ仕留められていただろう。

——む、骨の竜にダメージが。

王国軍にも物を知っている者がいるのだろう。微妙たるものではあるが、スリングショットによる投石などで殴打属性のダメージを与えた者がいる。

そして、目ざとい者も。

「あの魔物には矢は効いておりません！ 投石を！」

死の宝珠
エンリは薄い笑みを浮かべ、剣を構えて走り出す。

——こちらから向かつていかねばならんか。

スケルトルドラゴン
骨の竜は上空へ逃がし、第二射には回避行動は取らない。 投石程度なら、この身

体で受ければ何千発喰らっても無傷だ。

剣を縦横に振るって矢の多くを弾くが、十数本は身体に命中し、そのうち二本が法衣を貫いて僅かな傷を作る。

死の宝珠は身体を借りているだけであり、痛みの感覚はアンデッドと同等なほど鈍いのだが、痛みが興奮を誘発するような身体的作用は健在なようだ。

死の宝珠
エンリはその身の昂ぶりを隠そうとしない。

「ふはははは、身の程を知らぬ愚かな人間どもめ！ 幾千の死を我に捧げるがよい！」

中の人が聞いたら寝込んでしまいそうな台詞を撒き散らしながら、弓から剣に持ち替えてつつある精鋭兵の一団に斬り込んでいく。

「んふふ、強い人いたら、あっちの化け物じゃなくて私んとこに来なよー」

クレマンティーヌと目が合うが、互いに薄い笑みを交わしながら血煙舞う戦いに身を投じる。

カジットに憑いていた頃は人間を装うためにクレマンティーンの非常識を諫める側に回ることもあったが、エンリに憑くようになるのと元から人外を見るような目で見られているので気楽な関係になっている。

エンリの方は宝珠との関係がバレてはまずいと考えているようだが、死の宝珠としてここまで強靱な身体になってしまえば危険は無いような気がするのだ。

陣形を急ごしらえて迫る槍衾にも怯むことはない。クレマンティーンは槍を軽やかに飛び渡り、死の宝珠エンリは刃元を掴んで槍兵ごと振り回す。

スケリトルドラゴン骨の竜の高度を幾らか下げてやると、ミコヒメから回復魔法が飛んでくる。まだ二人とも深刻な傷を負っていたわけではないが、高度のテストだ。

矢に加えて多くのスリング弾が骨スケリトルドラゴンの竜に向けて放たれるが、予想通り、この高度では矢でなければ威力を保って届くことはない。回復役は安泰だ。

「上の奴は駄目だ！ スリングの射程に入るまで二人を仕留めるのに集中しろ！」
言われなくとも、射程には入れない。有効距離に入れば大量のスリング弾にひとたまりもないからだ。

余った一体は牽制に使うが、骨スケリトルドラゴンの竜の役割はミコヒメの守りに割り切る。

「どうした、脆弱な人間ども！ 骨のある奴はおらんのか！」
黒いもやが漂う剣先が切り裂くのは、兵たちの命。

死の宝珠

「エンリはいつしか、効率を優先せず多くの死を愉しむようになっていた。」

グレートソード

大 剣を振るって血煙をあげながら、傷を受け地に伏した雑兵の背骨を踏み砕き、命を賭けて胸元に飛び込んできた戦士の首を抱えてあらぬ方向へ曲げた。

「無理です！ あの二人は化け物だ！」

「ふざけるな！ 周囲を包囲し、一斉に攻撃を仕掛ける！」

死の宝珠

エンリもクレマンティーヌも、優れた聴覚でそんな声をとらえ、既に指揮官らしき者の所在を把握している。

しかし、言葉を交わさずとも、二人の思いは一つ。

指揮官を潰せば部隊が潰走してしまうが、そんな勿体ないことはしたくないのだ。

「なぜだ！ なぜたった二人を相手に、五千人もの軍でかかって仕留められないのだ！」
バルブロは目を血走らせる。

勇壮なことを言っているが、後退を進言する部下に従って安全な場所へ移動するだけの賢明さは持っていた。

幾度かの移動を経て、今いるのは民兵たちの死体が転がる、血生臭い初期の戦場だ。

「王子。それが一騎当千の冒険者というものでございます」

「そんなもの、見ていればわかる！ だから私は——」

だからこそ、戦争という王国の一大事に身勝手に静観できる立場を享受しながら、帝国と魔導王などという怪しげな存在に与した『漆黒』が許せなかったのだ。

しかし今となっては、そんな感情はどうでも良い。

一騎当千——それは確かなのだろう。

戦場に散乱する、人間にやられたとは思えない死体たちがその証人だ。

しかし、その恐ろしさ、凄惨さはこの場には決して伝わらない。

話題に飢えた貴族たちから見れば、バルブロは五千の兵を率いてたつた二人に敗れた無能な王子にしか見えないのだ。

王族の手習いとしては優秀、という程度に剣術をかじつたバルブロから見ても、エンリだけでなくもう一人の女も異次元の存在であることはわかる。

下手をすると、二人とも王国戦士長ガゼフ・ストロノーフにも匹敵するかもしれない。

しかし、それを戦いを見ていない者たちに納得させる手段は存在しない。

「おわかりになるならば、ここで撤退の許可を！」

「……ならん！ まだ兵は半分以上残っているだろう！」

「殿下！ 精銳の多くを失い、士気は危険な状態です！ 何卒撤退を！」

なだせ

「愚か者！ ここで奴らがカツツエ平野に向かう主力の背後を襲う可能性を考えよ！」

多くが死兵となろうとも、何があるうとここで足止めをせねばならん！」

「か、畏まりました。ではせめて我ら——殿下は全体の指揮を取れる後方へお下がりでください」

バルブロは大きく頷き、隊列を整えた兵士たちとともに慌ただしく移動していく。

二人は、既に王子の命令がどうにか聞き取れる位置まで迫っていたが、これを追わずに見逃す。

その気になれば数秒で王子周辺を蹂躪できるクレマンティーヌは、目前の民兵の頸部をステイレットで貫きながら呆れ顔だ。

「死兵なんてレベルの奴、本当に居てくれたら面白いんですけどねー。言葉の意味わかってないでしょアイツ」

「まあ、そう言うな。死兵か——ふむ、王族の望みであるし、叶えてやらなくもないぞ」「んふふ、たった二人でそう追い込めるとも思いませんけど」

死兵とは本来、死を覚悟して強兵となる者のこと。

たった二人の圧倒的強者が集団を蹂躪する異常な戦場では、兵たちは距離がある限り数の有利や無限の逃げ道に心を落ち着かせ、距離が無くなれば覚悟を決める間もなく命

を散らす。

自ら死兵となれる余地などは無いのだが――。

「よし、右奥の投石器持ちの一団を壊滅させるぞ」

「りよーかいっ。指揮官ですか」

「兵も、全てだ」

死の宝珠は、主マールレよりエンリを助けるように言われている。

今回のエンリの願いは、この地、故郷カルネ村を救うということ。

ならば、この地における禍根を絶つために行動すべきである。

人々を救うというのはらしくない行動だが、数千の死を撒き散らす愉しみの中では些細なことだ。

そして、その行動は以前味わえなかった更なる愉しみへと繋がる。

「待て！ 逃げるな！」――おい、投石器を捨てるな！」

一方的な殺戮が続き、王国軍の士気は地の底まで落ちていた。

投石器を持つ者が狙われていると気づけばそれを投げ捨てる者さえ続出する。

王国軍が敗走の機会を掴めずにいるのは、王子が抗戦を命じていることもあるが、相手がたった二人だからでしかない。

通常の敗勢濃厚な場面なら目立たない脱走者も、この状況では目立ちすぎるのだ。

「そろそろ、良からう。——クレマンティヌ！ スケリトルドラゴン 骨の竜を降ろす。お前も守りに回ってミコヒメの盾となれ！」

「ん、りよーかい。何か面白いことやるんですか？」

「ああ。楽しんで後始末をしなきゃいかんからな」

急降下し、一体を守りながらも攻撃を仕掛ける二体の骨スケリトルドラゴンの竜に周辺の王国軍は総崩れとなる。

——モモンガ様の偉大な力に触れることができた感動には及ばぬが……やはり、我が手で事を成すというのも格別のものだ。

死の宝珠 エンリは意外な形で悲願を叶えられる喜びにしばし浸る。

今の死の宝珠は、あくまで主マールレの言いつけ通りに動いている。

周囲を見れば、屍、屍、屍。その殆どすべてが凄惨な死に方をした者たちで、放つておけばこの地はアンデッドの温床となる。

エンリの記憶の中に、主マールレが考案した「おそうじ」という斬新な解決手段はあったものの、エンリはそれが気に入らないようだ。

ならば、この地の禍根を絶つため、今の死の宝珠が可能とする手段でそれを行うほかないだろう。

「ミコヒメよ、我が詠唱の依り代となれい！ オーバーマジック 《魔法上昇》——」

村人たちが戻る前に、残存兵力ごと、一気にこの地の屍を処理するのだ。

むしろ、残存兵力が屍たちを導く役目を果たすだろう。

「不死の軍勢」!! ——王国の有象無象どもよ、第七位階の発動に立ち会えた喜びに震えるがいい!!」

観者の額冠による《魔法上昇》オーバーマジックが生み出すのは、人外の領域にある第七位階魔法。

ここには大量の死があり、死体があり、そして溢れんばかりの負の力がある。

かつて死の宝珠がカジツトの身で、ンファイレアをさらって実現しようとした大魔法が、ここに実を結ぶのだ。

「おい、おまえ生きて? ——ひぎやつ!」

「死体から離れろ! 噛みついてくるぞ!」

「膨れた肉から何か噴き出て——ぐあつ!」

「逃げろ! アンデッドの大量発生だ!!」

肉の削げた死体が起き上がり、はみ出た骨が集まって人の形を成し、肉片から臓物で出来た脚のようなものが生え、あるいは数個の死体が集まった化け物が蠢く。

「撤退! 撤退だ!! 殿下を守れ!!」

確かに、王国軍の一部は王子の言葉通り死兵バルブロとなった。前後左右をアンデッドに囲まれれば、奮戦しなければ生き残れない。

そして、それらはすぐ、死を纏う兵となって王国軍へと襲い掛かるのだ。もちろん、大多数はすぐに戦意を失い潰走状態となっている。

二千は残っていた王国軍は、各人がどこに逃げているかもわからずに走り回る者ばかり。

「カツツエ平野へ追い込め!!」スクリットドラゴン 骨の竜で北を塞ぐからクレマンティーヌは南を対応しろ!! ルートから外れた者は殺せ!!」

「はいはい。動死体ゾンビに喰われるより悲惨な死に方したい人はこっちだよー!」

死の宝珠
エンリは、カジットの頃より格段に上がったアンデッド支配能力で不死の軍勢を東へ誘導する。

見れば、今回の戦闘で覚えのない黒衣の集団が不死の軍勢に加わり、それらは死霊レイスやスケルトン・センチュート百足状の骸骨といった強力なアンデッドばかりで占められている。その黒衣は法国風の形状で、シンプルだがどこことなくエンリレイスの着衣にも近い雰囲気だ。

「ふはは、いきなり死霊レイスとなるとは、その死にはどれほどの絶望があったというのだ!」
最初から複数の百足状の骸骨スケルトン・センチュートとして現れるというのも、どんな粗雑な埋葬をされたのか想像を絶するな!」

死の宝珠としても初めての経験でワクワクすることばかりである。

魂を歪ませるほどの絶望を与えたのも、複数人をぐちゃぐちゃに地中に埋めて殺した

のも実は主であるマーレの仕業なのだが、そんなことを知らない死の宝珠にとつてはカルネ村の人々への好感度を少しだけ上げる気分の良いサプライズでしかなかった。

「お前たちなら、指揮官クラスも潰せるだろう」

死の宝珠 エンリはそれらを部隊指揮官代わり要点へ滑り込ませ、潰走する王国軍を飲み込むように東へ追い込んでいく。

王国軍における生者の数が千を切った時、増えに増えた三千超のアンデッドのみによる半包围が完成する。

「ふはははは！ 逃げよ逃げよ！ 死の淵の絶望が深ければこちらの愉しみが増える！ 南北は囲んだからクレマンティーヌも好きにやれい！」

「さつすがエンリ様。うんじや、遠慮なくやりますよー」

スケリトルドラゴン 骨の竜が逃げる兵士を優しく突き転がし、一部の制御された食屍鬼や腐肉漁りがとどめをさすことなく足腰や横腹などを軽く齧り取り、もがき苦しむ兵士をゆつたりと追いつめる。

そんな死者の宴の只中へ飛び込んで、クレマンティーヌもようやくお楽しみタイムだ。手近な兵士の腱を潰し、ステイレットの先端を頬肉に差し込みながら優しく語り掛ける。

「ねーえ、痛い？」

制御外の低級アンデッドがクレマンティーンに食らいつくが、軽々と回避して拷問の時間を愉しんでいる。

——制御可能数もやたらと増えたが、それ以上にこれは……何だ？ 群としての指揮が随分とラクなような……。

死の宝珠 エンリは不死の軍勢の指揮という機会を得て、思いがけずエンリの持つ隠れた才能の片鱗に触れることになった。

ところで、このたびバハルス帝国がリ・エステイーズ王国に宛てた宣戦布告文において、戦場はカツツエ平野と指定されている。

すなわち——。

「このままカツツエ平野までついていくと、冒険者が戦争に関与したってことになっちゃいますよ」

「ああ、そうだな。それに時間も迫っている。そろそろ戻るとしよう」

死の宝珠 エンリは不死の軍勢に追い立てられ涙と涎を撒き散らしながら疾走する王子をバルプロ一瞥してから足を止める。

——とりあえずアレは恐怖を伝えさせるため残して、カツツエ平野まで追い込む。そ

れだけでいいな。転んで死んだりするかもしれないが、そこまでは知らん。

死の宝珠の目的は多くの死を撒き散らし貪ることだが、エンリから身体を任された理由には故郷のカルネ村を守ることだ。

十分な恐怖と見せしめを送り届ける態勢ができた以上、そろそろ潮時かもしれない。「私も皇帝から参戦を止められてるんで、このへんにしておきます」

宣戦布告文から外れた部分であれば、何百何千と殺してもその戦争とは関係がない。スレイン法国の特殊部隊出身のクレマンティーヌは、そういうことには詳しくかった。

村へ近づくと、怯えに染まった男たちに迎えられる。

野伏などは居ないようで、不器用に遠くの樹上などから村の様子を窺っていた者たちだ。

「え、エンリ……なのか？」

「村を……助けてくれて——いや、お助けいただいたことは本当にありがたく……」

おそらくエンリの記憶では見覚えのあるような顔ぶれなのだろうが、心の距離は地平の果てまで開いているようだ。

死の宝珠としては下手に対応してエンリを困らせるつもりもないので、なるべく自然に交代することを考える。

「どこでもいい。戦いの昂ぶりを抜くために、少し眠る場所を用意してほしい」
村長に歓待の準備があるそうなので、クレマンティーンとミコヒメを向かわせておく。

空き家になっていたエモット家のベッドに村で最高の客用布団が運び込まれ、エンリは人払いをして横たわった。

今日は最高の一日だった。楽しい殺戮の時間に加えて《不死の軍勢》だ。身体を任せてくれたエンリには感謝しかない。

エンリのために柄でもなく救うことになったこのカルネ村についても、いきなり死霊や複数の百足状の骸骨が発生するような殺伐とした所が気に入っていた。

エンリは人目が無くなったのを確認すると、スクロールを起動して手早く連絡を済ませる。こればかりは元のエンリに戻ってからはできないことだ。

その後自ら本体である宝珠を手放すと、ベッドの下へそつと転がした。

死の宝珠の仕事はこれで終わりではないが、エンリのことを考えれば戦場で身体の支配を手放すわけにはいかなかった。助けてやるよう言われていたから仕方がないことだが、次の仕事へ向かうのに主の手を煩わせてしまうのが心苦しいところだ。

「——はあ。帰ってきちゃった」

エンリは粗末な板張りの天井を見上げる。

暮らす者がなく、多くの家財が運び出されたからっぽの家でも、生まれてから十六年間見てきた天井だけは変わらない。

——見られてる。あれは戦いを見てた反応だよ。それにしたって、怯えすぎ。

確かに死の宝珠は怖いかもしれないが、村の人たちが戦場を見ていた場所までは声は届かないはずだ。

行方不明の野伏ラッチモンがかつてエンリを含めた村の若者に教えてくれた幾つかの場所は、いざという時に村や周囲の様子を遠巻きに見られるだけだ。戦場の声も届かなければ死の宝珠とクレマンティーヌの残虐行為の詳細を知ることできない。

戦争なんだから、みんなのために戦うのは仕方がないはずなのに。

かつて戦争から帰ってきた村人たちだって同じように人を殺してきたはずなのに。

それでも、あんな目で見られた人は一人もいなかったのに。

エンリは不条理を噛みしめる。

それに、エンリの姿は村を出た時と変わっていないはずだ。

顔を洗う時など、いつも自分の顔が旅立つ前と変わらないことを確認している。特に、死の宝珠に身体を使われた後は念入りに水の中の自分と睨めっこするのだ。

「おなか……すいたな」

エンリは空腹を感じ、村長の家へ向かうことにした。

先日マーレの所有物だと知った竜ドラゴンに比べれば全く迫力の無い骨スケリトルドラゴンの竜を騎獣としていたことなど問題視さえすることなく、納得のいかない気持ちを抱えたままだ。

エンリの気持ちの絡まりをほぐしたのは、ネムや他の子供たちだ。

先ほど怯えた態度をとった者たちや、同じように万一の際に村の様子を見に行く役割の村人の子供は誰ひとりとして姿が見えないが、それ以外には偏見が広まっていないようだ。

——明日には全員に伝わっているんだろうけど。

それでも、懐かしい顔ぶれとの会食は楽しい。

怯えきった偵察役の男たちの方を見なければ、普通に相手をしてくれる者もいるのだ。

「エンリは村のために頑張ったんだから、遠慮しないでもつと食べてくださいな」

「これネム、食事中はおとなしくしなさい」

「クレマンティーヌ様、かつこいー!」

さすがに皇妃様という身分を明かすのもよくないので、元冒険者で今は帝国の偉い人ということになっている。

以前村を訪れた時から露出多めのクレマンティーヌがお気に入りだというネムの感覚が心配になってくるが。

「お姉ちゃんも凄いい! たった二人で村を軍隊から守ってくれたんだよね!」

村長の家で暮らし村の子供たちを率いるような立場になっていたネムは、十〇歳という若さで既に目を背けるべき部分を理解しているようにも見えた。

マジックアイテムである黒衣に染みはできないが、素肌の返り血は取り切れていない。そういう部分に触れず笑顔を絶やさないのありがたい。

いまいち近寄り辛そうにしている子供たちを見渡した上で、ネムはこういう態度を取ってくれているのだ。

今日も明日もその後も、ネムさえ村に留まってくれれば、エンリには帰ってくる場所が残っているかもしれない。

そう思うとネムを連れて行くのが惜しまれるが、ネムのためにも村のためにも仕方のないことだ。

六四 マーレの暗躍／夜になつたら本気出そ

それは、まだ開戦前のある日のこと。

マーレは少し悩んでいた。

友好国となつたバハルス帝国は、至高の御方の深謀遠慮によつてほぼ無傷で魔導国の手中に収まる見込みであるらしい。

皇帝はナザリツクの忠実な下僕であるクレマンティーンを唯一の正妃として迎え、近々開戦する隣国リ・エステイーゼ王国との戦争に勝利した暁にはエ・ランテルを差し出すことを約束した。トブの大森林を領有する魔導国への配慮だというが、その領有を発表したことはない。クレマンティーンから聞いたのだろう。

どのような策がここまでの譲歩を引き出したのかは、智謀に優れたデミウルゴスでもアルベドでも完全には理解できないというが、いずれもその事実を間違いないものとして認識している。

両名は理解の及ばないことに心を痛めているが、マーレとしては自分たち守護者程度では至高の御方の智謀に遠く及ばないのは仕方のないことだと思ふのだ。

しかし、このことでマーレの仕事はより困難なものとなつた。

これまでの考え方——慎重に調査して、危険な存在が確認できなければ力押し——は不十分だとわかったからだ。

計画の修正は、黙々と行うべきだ。至高の御方の心を煩わせて良いものではない。

なぜなら、いまだ人間の国々の制圧に関して具体的な指示がないのは、マーレへの信頼によるものだからだ。

このことを指摘してくれたデミウルゴスは既に至高の御方の信頼に応え、コキユートスとともに早期にミノタウロスの王国を制圧している。

それは戦いを伴うものではあったが、それは強き者が支配者となる亜人社会に合わせた最低限のもので、基本的にはミノタウロスの王国の組織を破壊することなく支配することに成功している。

人間が相手では戦い以外の方法も必要となつて困難は増すだろうが、マーレも信頼に応えなければならない。

今では、マーレは人間の国々の制圧が本来自分に与えられた仕事だと思ふようになってる。

マーレ自身や姉のアウラはマーレの孤立を偶発的な事件だと考えていたし、至高の御方もマーレとの再会を素直に喜んでくれたが、ナザリック屈指の智者であるアルベドやデミウルゴスはこれを至高の御方の御意思によるものと確信している。始原の魔法と

の遭遇とその分析などは普通に調査を命じられていたら難しかっただろうし、ピーストマンの大侵攻における奇跡的とも思える再会の運命さえも至高の御方の掌の上の出来事なのだと言われれば全ての事態の説明がついてしまう。

であれば、人間という種族をアインズ・ウール・ゴウンに服従させること自体が、本来はマールレに与えられた仕事であるように思えてくるのだ。

しかしながら、バハルス帝国は既にマールレの手を離れており。

最も危険なスレイン法国については、マールレの報告を受けて警戒を強めた至高の御方の命令により全ての守護者に手出しが禁じられている。こちらは時間をかけて情報を収集した後、総力をかけて滅ぼすことになるだろう。

よって、残る主要な人間の国々はリ・エステイーゼ王国と、遙か西の聖王国くらいしかない。

そして聖王国の付近には「デミウルゴスが『加工場』を作る許可を得ている。詳しい話は聞いていないが、竜王国近辺でまとまった量の良質な皮革が手に入ってスクロールの生産の目途が立ったものの、素材を安定供給できる地域は限られているのだそうだ。そうなる、リ・エステイーゼ王国こそマールレが制圧しなければならぬ領域ということになる。

手つかずに等しい領域ではあるが、情報は集まっている。侮るつもりはないが、どう

考えてもたいした勢力ではない。

あのガゼフ・ストロノーフが国で一番の実力者であり、人間に嫌悪されるアンデッドであるイビルアイが王宮に入り込める程度の脇の甘さを供えた国——バハルス帝国よりよほど容易に制圧できる勢力だ。

であれば、やはり力押しで蹂躪するのではなく、至高の御方の御意思に倣ってバハルス帝国同様なるべく無傷で手中に収めなければならぬ。

この戦場における混乱こそ、目的を果たすのに最善の機会であったはずだが——。

「私はこの度の戦争で超位魔法《イア・シュブニグラス黒き豊穡への貢》を使うつもりだ」

至高の御方が究極の魔法の使用を明言した時、マーレはアルベド、デミウルゴスらとともに絶賛した。

至高の御方が魔導王モモンガとして脆弱な人間たちの前にその存在を明らかにしたのだから、情弱な人間たちはすぐにでもひれ伏すべきだ。

そうならないのは、先に人間の地を踏んだ自身の非であるような気さえしてしまう。

だから、至高の御方の偉大さをわかりやすく伝える超位魔法の力が振るわれるのは、歓迎すべきことでしかない。

しかし、マールレの計画は再度の修正を強いられる。

——これから死ぬ人間は使えないか。

リ・エステイーズ王国より従軍した者は、ことごとく死ぬ。それは確定事項だ。

マールレとしては、至高の御方が死を定めた者をわざわざ助けてもらおうとは思わない。

もちろん、そのことで計画が好転するならお願いするかもしれないが、こちらで計画を修正してどうにかなる範囲なら至高の御方の手をわずらわせるべきではないだろう。

——国王が死んだらどうすればいいんだろう……。あの協力者を確保して、もう少し話をするしかないかな。

新たな協力者は仮病を理由にして帝国領内に留まっている。勝手に戻ることはないかもしれないが、帝国に囚われれば少し面倒なことになりそうだ。

色々な手段を考えたが、至高の御方の手中に収まりつつある帝国に勝手な手出しはよくないだろう。

申し訳なく思いつつも、マールレはクレマンティーヌを使う許可を求めることにした。

「なるほど。その協力者についてはデミウルゴスも高く評価していたし、確保するのもいいかもしれないな。それにしても、わざわざ許可まで求めなくてもクレマンティーヌ

は元々はマーレの部下なのだし、ナザリツクのためになるなら好きに使って構わなかったんだが」

「えっと、あの、あまりクレマンティーヌに深く関わらないようにとアルベドさんから伝えられていたので、何か重要な任務を与えているのかもって思ったんです」

「い、いや、重要と言う程でもないが、性きよ——まあ色々とな。そんなことより、あれはマーレから見ればどのようなように扱ってもいい部下かもしれないが、今や友好国の皇帝の妻となったのだ。だからもう以前のような——コホン、ともかく、今後は夫婦関係を尊重してやることだ」

「尊重、ですか。えっと、それは——」

「わからなければ、アルベドかデミウルゴスにでも聞くといい」

夫婦というのは人間のつがいのことだ。そんなものを尊重と言われてもマーレにはどうすればいいか想像もつかないが、至高の御方をわずらわせるより守護者の仲間に聞いた方が良さだろう。

そんな時、デミウルゴスは嫌な顔ひとつせず、適切な答えへと導いてくれる。

「いいかい、マーレ。夫婦関係を尊重というのは色々な意味がある言い方だけれど、私たち守護者は常にモモンガ様の意図を推し量った上で意味を考えなくてはならない」

「はい」

マールは優しく論してくれる仲間の厚情に感謝しつつ、真剣な顔で頷く。

「——そのクレマンティーヌについては、マールの部下として認めてくださっているのにアルベドを通して関わらないよう指示もしていた。これは、夫婦の時間を作らせたかったと考えるのが自然だろう」

「えっと、時間を作るのは何のためですか？」

「それは、早く交配させて帝国の後継者を作らせたいのだろうね。そうなれば、次の皇帝は我々のしもべの子ということになる。他にも様々な手を打たれているとは思いますが、モモンガ様はそういう支配の形をお考えなのだろう」

「なるほど。それなら、えっと、早く子供を作るように話しておいた方がいいですか」

「そうだね。モモンガ様は私たちの考えなどお見通しだろうから、マールが思うように行動してみるといい」

マールのするべきことは、決まった。

クレマンティーンは纏わりつく不安を振り払うように、与えられた自室の安楽椅子で伸びをする。

来るべきものが来た。

唐突に皇帝の正妃という地位を与えられたのは間違いなくモモンガ——魔導王の後押しによるものだろう。

ならば、地位に伴う責任を果たさなければならぬ。それを十分に果たせていないと判断したからこそその、追加の命令なのだろう。

マーレから与えられた新たな命令は二つ。

・早く子供を作ること

・帝国が領内に留まる王国第三王女ラナーを確保した場合、魔導国へ引き渡すこと

この命令は、ようやく自身の地位を受け入れ始めたクレマンティーンにとっては大事故だ。

「子供って……。今の私って、帝国の内部に潜入する命令を受けた結果、どーしてかここまで来てしまっただけなんですけど——」

軍に入れると思って謁見したら寵姫になった。そういう理不尽な流れを理由も理解しきらないまま説明した。

自分でも何を言っているのかわからなかったが——その返答はさらに斜め上だ。

「何を言っているんですか？ モモンガ様のご命令に従った結果そうなったのなら、それがモモンガ様のご意思に決まってるじゃないですか」

「は？ あのわけわかんない皇帝の好みとか特殊性癖とか、ドラゴン竜で脅したら何故か結婚式になることとか、何から何まで全部読み切っていたと？ それじゃモモンガ様ってその智謀まで神の領域にあるってことなんじゃ……」

「そつですよ？」

疑問を持つことさえ理解できず小首をかしげるマールレの態度は、そのことが幼子でも知る世界の摂理であるかのように感じさせた。

——ありえない。普通に考えればありえないけど……。

モモンガは絶対的な力を持つマールレの主であり、間違いなくこの世の絶対者にも等しい存在だ。

クレマンティーヌは知っている。この世界では、強者は弱者の前で取り繕う必要はない。

弱者の前では地が出るし、それが許されるものだ。クレマンティーヌは弱者をいたぶるのが好きだし、あのすかした漆黒聖典最強の番外席次でさえ隊長をぼこった時に馬の小便で顔を洗わせる所まで徹底的にやっていた。聖職者ぶっている一部聖典の隊員

も、任務中には敵や捕虜になるエルフや巫人に対して悪口雑言のオンパレードだ。

ならば、絶対者であるモモンガが取り繕うべき相手などこの世界には存在しない。マーレの言うことは、まごうことなき真実と考えるしかないだろう。

——それなら、疑念を持ったような動きをするだけでもやばい。命令通りやって、先の事はもうモモンガ様の思う通りの道筋になるだけって割り切るしかない。

「……わかりました。では、するべきことを教えてください」

クレマンティーヌは、ただ命令を受け入れることにした。

魔導国と帝国の関係のため、何より子作りを急がなければならない。マーレの口ぶりから、優先度が高いのはそちらだ。

ラナーについては、マーレ自身が必要としているという。

『黄金』と呼ばれ美貌で知られる姫を求め理由はきつとろくでもないものだろうが、クレマンティーヌの知ったことではない。そんなことより、この二つの命令が同時に来たことが問題なのだ。

——せっかかく出せる情報出して媚び売ってんのに、圧力かけたら関係が変わっちゃうんだだけ。

皇帝ジルクニフと正妃クレマンティーヌの関係は、既に成婚直後から幾らか変わり始めていた。

クレマンティーヌは元々は帝国内部に入り込むつもりで帝都に来ていた。とはいえ、寵姫でも驚いたのに正妃にされるなど夢にも思っていなかった。そんな状況で、一国の皇帝をたばかっていられるほど賢くはない自覚もある。そして、バレなければ何をしても問題ないという考え方も健在だ。

だから、自身の目的まで明かす所ことはできないにしても、『漆黒』と自身の位置づけについては幾らか喋ってしまったている。魔導国の圧迫外交の現状を伝え聞くに至って、それくらい卑屈にならないければ今の立場が維持できないと考えたのだ。

そのため、以後は出来る限り夫となった皇帝の側に立ち、魔導国への対処についても様々な相談を受けて来た。トブの大森林が支配地であることを教えたことで将来のエ・ランテル割譲などというとんでもない流れを引き出してしまったが、街の人間にはご愁傷様という以上の感情はない。こちらも必死なのだ。

もちろん、皇帝が自身に求めていた虚像から少しずつ離れていることは自覚している。それでも皇帝の方がやたらと前向きで、エ・ランテル割譲などは魔導国の脅威を法に認識させる良い機会などと言っているくらいだ。おかげで、クレマンティーヌもかつての「義の人」というイメージの延長上に指先だけ引っかけてぶらさがっていられる。

ともかく、命令は帝国の中枢に潜伏すること。今の身分で帝都に留まりさえすれば問

題ないと思っていた。

だが、新たな命令はそう簡単ではない。世継ぎを作ることと、ラナーに関する圧力をかけることは、それだけで矛盾する。

——うん。後で考えよう。訓練でも行つてこよ！ 何人かボコればいいアイデアが出るはず！

クレマンティーヌは辛い現実より楽しい気晴らしの場へ足を向ける。

ラナーのことは後で考えれば良い。帝国が捕えなければ帝国領を出た所で確保する予定になっているというだけで、そうなれば問題はないのだ。

この訓練が終わつたら、護衛の立場を活かして皇帝の側に仕えながら対処を考えればいい。

クレマンティーヌは乱雑に詰まれた木箱を満たす大量のポジションのうち三本ほど取つて、いつもの訓練場へ向かう。

——それにしても疲労回復用で、どんだけやらせる気なのよコレ。

マーレが「適当に用意したので使ってください」と置いていったものだ。あのンフィーレアが帝都で開いたバレアレ薬品店のものなので問題はないだろうが、紫がかつた微妙な色のものが多く混じっているので試作品なのかもしれない。一応そこの騎士を痛めつけてから試してみるつもりだ。

正妃になった時に將軍格待遇となったことで新入り虐めを蹴散らす楽しみは失われたが、この地位なら中堅以上の実力者を特別な訓練だとして引きずっていくことができる。それでいて、地位に伴う仕事は全くと言っていいほど存在しない。クレマンティーヌが魔導国と繋がり深い『漆黒』の一員であったことから具体的な権限や役職を与えるわけにはいかないのだろう。

このことは、同じく帝国で軍務に就いて日が浅い実力者ブレイン・アングラウスが嫌々將軍としての研修を受けて様々な権限を与えられているのは好対照だ。そのブレインからは余計な仕事がないことを羨まれている、クレマンティーヌも責任のない立場を気に入っていたのだが——権限が無いということは、今回は皇帝に直接頼むしかないということだ。

——後宮でなら話聞いてくれるし、夜になってから話すしかないかな。

もう一つの任務——夫婦生活に差し障っても困るといなのが、悩みどころだった。

訓練を終えたクレマンティーヌが上機嫌で皇帝の護衛に向かうと、珍しく冷静さを欠いたジルクニフの声が聞こえる。

「すぐに突っ返せ！ 宣戦が済んでいようと知るか！ 馬車にでも詰め込んで、エ・ラン

テルの付近からは商人にでも運ばせればいいだろう！」

「しかし……敵国の姫とはいえ、王族にそのような扱いはどうなんでしょう……」

「いらん！ 扱いに困るなら勝手に捕えた奴が考えれば——いや、取り乱して済まない。ラナーについてはこういう場合の外交の前例を調べ、王国まで一刻も早く丁重に送り届けさせよ」

状況は夜まで待つてくれなかった。

クレマンティーヌは心の中で頭を抱えつつ、ノックもせずには部屋の中へ飛び込む。礼儀などあったものではない。

「陛下！ それは少しお待ちください」

「クレマンティーヌか。言いたいことがあるなら部屋で聞こう。ここでの立場はあくまで直属近衛——私の護衛だということを忘れないでくれ」

それはわかっているが、魔導王の命令は絶対なのだ。

とっさの事でも理屈が思いつかないが、命令には何があろうと従わなければならぬ。い。

幸い、部屋の中にいるのは皇帝の他、この件の報告に訪れたバジウッドだけだ。無茶を言っても正妃の専横などと騒ぎ立てるタイプではない。

「陛下。ただ一度だけわがままをお聞き入れいただきたく。どうかラナー王女を王国へ

返すのはおやめください」

クレマンティーヌは跪き柄でもなく弱弱しく懇願するが、ジルクニフは目を背けたまままだ。

「情報局の方では掴んでいた。あの女は、体調不良などというふざけた理由でダラダラしていたんだ。帰ろうと思えばすぐにでも帰れたはずだろう。私は——帝国はあの女の思い通りに行動するわけにはいかん」

その言葉には苦手意識を越えて嫌悪感のようなものまで染み出している。これでは皇妃の顔でどう懇願しても結論は変わらないだろう。

クレマンティーヌは小さく溜息をつき、静かに立ち上がる。自分はそれほど器用な人間ではないから、腹をくぐるしかないところだ。

意識の端でバジウツドの位置を確認しつつ、一転して低く冷たい声を出す。

「それならば、私は護衛として陛下を守るためにお伝えしたいことがあります。魔導国はエ・ランテルの獲得後を見据え、王国民に人気のあるラナー王女の身柄を必要としています。御身の安全のため、ご配慮いただきますよう」

どうせ自身の後釜か何かだろうと想像していたが、その場で考えたにしてはマシな理屈かもしれない。

しかし、この場でこれを言うのは間違いない悪手だ。ジルクニフは不快感をあらわに

する。

「クレマンティーヌよ。お前が魔導国の影響下にあることくらいはわかっているが、部下の前でそのようなことを言われて素直に聞けるとでも思っているのか」

「面倒なのは嫌いだと言ったはずですが、陛下。それに力の及ぶ限り陛下をお守りするという約束は今でも変わらないんでね。バジちゃんが邪魔で生き残るための正しい選択ができないというなら、私が消してあげてもいいですよ」

肉食獣の笑みを向けられ、バジウッドは鼻白む。

「勘弁してくださいよ。夫婦喧嘩は犬も食わねえって言うでしょう。お二人の間に割って入るほど野暮じゃないし、私は何も聞いてませんぜ」

「へえ、意外とプライドとか無いんだね」

「陛下がやりあえって言ったたら、まあ命を懸けるのが仕事なんでやりますがね。命じられもしないのに無駄死にするのは陛下の嫌いな国家の損失ってやつでしょう」

視線を向けられたジルクニフは、大きく息を吐いて椅子に腰かける。

「その通りだ、バジウッド。お前も……そしてクレマンティーヌも我が帝国の貴重な戦力だからな。たかが敵国の女狐一匹のために失うつもりはない」

クレマンティーヌは安堵し、その場でジルクニフに跪く。

ここでジルクニフに突っ張られてしまえば、潜伏の任務が台無しになるところだっ

た。

「ご理解いただけただけで恐縮です。陛下」

「戦力であり続けてほしいとは思っているが、今さら臣下の礼など白々しいな。お前の忠誠心は魔導国にあるのだろうか？」

「忠誠心？ 何ですかそれは。私はまだ死にたくはないし、アンデッドにもされたくないだけです」

「しかし、ここは帝都アーウィンタールの皇城だ。帝国で最も安全な場所だぞ。そこで皇妃の地位にありながら公然と魔導王の利益を代弁するというのは——」

「今の生活も結構気に入っているんでね、その帝国が無くなってしまうのは惜しいんですよ。それとも、夫を殺されたい妻なんていない、とでも言えばご満足ですか？」

ふと思いついた言葉だが、最初からそう言えば良かった、と今さら後悔してしまう。

目の前の人物は強者でこそないが、知力、胆力、地位の全てを兼ね備えた人類では最高クラスの男性で、多少の異常性癖の気配を差し引いても決して悪い相手とは思えない。

皇妃など柄でもないが、もう少し女としての可愛げのある考え方を持たなければ任務に支障があるかもしれない。

あのエンリのように、反吐が出るほど裏表の激しい女になれたらどれほど楽だろうか

そんな思考とは裏腹に、クレマンティーヌは皇帝に媚びるタイミングを掴めないまま魔導国の脅威を説き続ける。

「——魔導国が我々の力ではどうにもならない相手だということにはわかつている。だが、お前は他国の民のためにあの法国すら裏切ったではないか。それが、なぜ奴らには忠誠心を持ち続けているのだ」

ここで、あの「義の人クレマンティーヌ」の虚像が邪魔をする。

カルネ村の救出だけは、皇帝がクレマンティーヌに拘りを持った理由の根幹であるように思えたので否定しないでおいたのだ。

演技を諦めたクレマンティーヌは、自身を屈服させた拷問の一端まで話してしまう。

「帝国では、高位階の回復魔法をふんだんに使った拷問つてありますか？ 何度も何度も私の内臓をぐちゃぐちゃに混ぜたり蟲に喰わせたりした悪魔が、その気になればいつでも転移魔法で飛んで来るんです。それで一生逆らえなくなってるのが忠誠心だっていうなら、きっと私のそれは永遠に魔導国にあるんでしょうね」

「……余計なことを話させてしまったな。いざという時は我が身を優先して構わない。四騎士の中にもそういう契約で仕えている者はいらぬのだ」

知っている。いざという時どころか、最初から魔導国に自身を売り込むかのようにク

レマンティーンヌに実力をアピールしに来た四騎士のレイナース・ロックブルズのことだろう。

もちろん、下つ端のクレマンティーンヌは戦力をスカウトする立場ではないし、その自身に軽くで一蹴されるような者を連れて行く意味もない。

「さすがに、あの女よりは帝国に骨を埋めたい気持ちでいるつもりです。ともかく、こう見えて打たれ強いんで、陛下の特殊性癖だつて遠慮は要りませんよ」

——きつとマーレやエンリよりずっとマシですから。

余計な一言は、どうにか口に出さずに飲み込むことができた。色恋からは遠ざかっていたので気にしたことがなかったが、故郷の法国にも複数の妻を娶る男性は存在し、彼らが妻一人の場合と変わらず独占欲を持つということを知識としては知っている。皇帝ジルクニフの伴侶として結果を出すためには、そういう細やかな配慮も必要となつてくるのだろう。

それ以上に余計な一言を口にしてしている件については、クレマンティーンヌは全く気にしていなかった。

「と、特殊性癖とは何を言っているのだ」

「おっと、部下の方の前でする話じゃなかったですね。申し訳ございません。その罰は今夜にでもお与えください」

クレマンティーヌの知る限り自分が嫁ぐ以前からシルクニフの暴力的な特殊性癖を受け止めている特殊な愛妾はロクシーだけのようだが、彼女は自ら子作りや寵愛を戴くことを目的とした存在ではないと公言している上、それは四騎士や地位の高い者たちにも知れ渡っているはずだ。

具体的にどうこうと噂されているわけではないが、あれは種類の違う寵姫だと皆が認識しているのは感じ取れる。

つまり公然の事実ということだが、それでも皇帝の反応を見れば、後宮に押しとどめておくべき話題であつたらしい。

「——だから、何をっ」

「では、当面の危機も脱したようなんでお部屋でお待ちしています」

公然の秘密であっても秘密は秘密。胆力に優れた絶対君主であっても、こういう部分は繊細なものかのもかもしれない。

クレマンティーヌは乱暴に誤魔化して引き下がり、後宮で必要な準備を済ませることにする。

——あー、やっちゃったかな。

一つ目の仕事を終えた気の緩みで、皇帝を余計に不機嫌にさせてしまった。

ただでさえ魔導国の話が多く出た日は皇帝の積極性が損なわれるというのに、この失

態は手痛い。

だが、少なくともラナーの件は口出しをせざるを得なかった。だから、割り切つて考えるしかない。

苛立ちが残っているなら、クレマンティーンの身体にでもぶつけてもらえば良いのだ。

どんな行為が待っているとしても、ポジションはいくらでもある。アンデッドにされるより辛いことなど無いはずだ。

——夜になったら本気出そ。

まだ夜までは時間がある。クレマンティーンは、相談事は何でも聞いてくれるというロクシーの部屋へと向かった。

その晩、ジルクニフはクレマンティーンの読み通り、まずロクシーのもとを訪れた。クレマンティーンが現れるまで、後宮でジルクニフに歯に衣着せぬ物言いができたのは寵姫たちをまとめるロクシーだけだ。

ならば、寵姫たちはジルクニフの行為が“特殊”なものであっても、何も言えなかつたに違いない。

そして、ロクシー自身も、ジルクニフは子供を作ってくれば何でも良いという考え方を持っていて、寵姫たちに皇帝の嗜好や都合にあわせるよう指導していたこともある。だから、恥をしのんで聞かなければならない。

皇帝の行為について、寵姫たちから何か聞いていないか。どのあたりが“特殊”なのであろうかと。

言いにくい話なので口の滑りを良くするため昼のクレマンティーヌとラナーの件をひとしきり愚痴つた後、遠慮がちに聞いてみたのだが――。

「くだらないことを考えていないで、とつと子供を作ってきてください。昔から男性の行為に細かく注文をつけると子宝に恵まれにくくなるといいますから、そういうことはバハルス帝国皇帝たる陛下の心配するべきことではありませんよ。クレマンティーヌからも早く陛下を寄越すようお願いされているんですから」

だいたい言われることは予想できていたのだが、昼の件を聞いたばかりなのにクレマンティーヌの部屋へと促すのは無神経ではなからうか。

「さっきの話を聞いていなかったのか？ お前はあの魔導国の思い通りになる正妃に子を産ませたいのか」

「お言葉ですが陛下、産ませないでおいたら何か状況が好転する一手でもあるのですか？」

「……………探しては、いるのだがな」
痛いところを突いてくる。

魔導国の戦力はまだ全くと言っていいほどわからないが、その王が貸し与えたという帝都を震撼させた巨大な竜は人間より遙かに長寿だ。その背に乗って使いを務めた『漆黑』もまだ若く、皇城を一瞬で崩壊させる力を持つという闇妖精に至っては最低五百年以上は生きるだろう。

ジルクニフが生きている間は——その子供や孫の一生分を含めても——状況が好転する要素は無い。冷静に考えれば、クレマンティーンを退けたとしても他の干渉が待っているだけだろう。

「今日、ちょうど話をする機会があったのでそのあたりも聞いてみたのですが、今のところ子供ができた後についての指示はなく、彼女自身も子育てにはまったく関心が無いそうです。どうせ魔導国の顔色を見続けなければならないのなら、あちらが慢心しているうちに私の手で後継者を育てた方がマシではありませんか」
ジルクニフは舌打ちをしそうになる。

これはこういう女だった。

あのラナーの不気味さを伝えても、「嫌でも子供作ってみろよ」という言い分しか出てこない。

人を作るのは教育で育てるのは自分だから、才能のある組み合わせならば問題ない——
—そういう考えなのだ。

「私の気分はどうあれ、お前に任せれば教育の方は問題ないということだな」

「ええ、クレマンティーヌが最優先ですが、余力があれば他にも身籠つてない娘はいますからね」

ジルクニフは顔をしかめ、追いつてられるように部屋を出る。

とりあえず直接文句も言いたいし、聞きたいこともある。

そんなつもりで訪れたクレマンティーヌの部屋だが——。

「何だ、その毒々しい紫の薬は。いまさら私をどうかしようともいうのか」

ジルクニフはテーブルの上に並ぶものを見咎める。

「これはポーシオンです。実は指示が来たのはラナーの件だけじゃなく、世継ぎを急ぐようせつつかれてるんですよ」

クレマンティーヌは猫のような動きでするりと懐に入ってくる。

短い金髪が目の前で揺れ、ふわりと女の匂いが漂う。

「昼間の罰を与えようって雰囲気じゃなさそうですね。とりあえず始めましょーか」

「罰というのは——んむ」

濡れた唇が押し付けられ、その間からぬらりと舌が入り込んでくる。

細い腕が頭の後ろに回り、ジルクニフは自らの体重を失ったかのようにたやすく抱き寄せられた。

クレマンティーヌは皇帝の舌を捉えるが、決して手慣れた動きではない。半端に吐息を漏らしながらどうしていいか迷い、口内を撫で、押しつける。そんな脈絡のない動きが繰り返される。

だが、そんな積極性には物珍しさを感じ、ジルクニフは何事かと思いつつも受け入れる。普段はふてぶてしく振る舞っていても行為となれば常に受け身で、時に小鹿のように怯えたふうでもあった女と同一人物とは思えない動きだ。

「——ふは。一人作ったら陛下の好きなようにして構いませんから、しばらくお付き合いくださいね」

「う、うむ。しばらくとは、いつまでだ？」

豹変したクレマンティーヌに気圧されながら、問う。

帝国最強の戦士に絡みつかれた状態では、たとえ逃れようとしても意味が無いのだが。

「とりあえず今夜は朝までか、ソレがなくなるまで、ですかね」

寝床で組み敷かれると、もはや身をよじることでもできない。

自由になる首を少し動かせば、床に積まれた木箱が視界に入った。その中身は全てテーブルの上に並ぶ薬瓶と同じものだ。

結局、ジルクニフは朝になって公務が始まる直前まで部屋を出ることができなかつた。

一向に減らないポーションの山を見ながら、こういう使い方をロクシーに知られることだけは避けよう、クレマンティーヌには口止めをしておこうと心に決めた。

次代の皇帝を作るのも皇帝の役目ではあるが、ものには限度というものがある。すべての寵姫の部屋にこれが常備されてはたまらないからだ。

六五 破軍の大魔法と死の挟撃

リ・エステイーゼ王国軍は、地平を越えるかつてない規模で広大な布陣を敷いた。最前線は若干散開気味で、後ろに行くに従って露骨に広く散開した。

「なるほど！ 騎士どもが立ち往生した場所場所で、我らの数の優位を生かした局地的な包囲が完成するということですね！」

三十万という史上最大級の数の暴力は蛮勇を生む。自派閥以外の貴族たちにもそう言つて指示してもらえたのは非常に結構なことだが、レエブン侯もこの案を準備した軍師も、帝国騎士など眼中には無かった。

むしろ、騎士の突撃に対しては脆弱に過ぎる陣形だ。散在する急ごしらえの馬防柵バリケードも帝国騎士の突撃を防ぐのに到底十分とは言えない。

しかし、帝国騎士を視野に入れた詭弁じみた説明を綿密に準備したこともあつて、どうにか受け入れさせることができたのだ。

「これで魔導王モモンガとやらが大した魔法を撃たなければ、私は王国史に残る愚将となるのだらうな」

「名より命ですよ、侯爵」

「お前に爵位でも得させておけば、私が被ることもなかったのだが」

「余計な仕事も責任も増えるのは嫌ですよ。そんなことができるなら王国戦士長でも推薦しておけばよかったです。そうすれば王派閥から縁談を押し付けられて、今頃は家庭を持って少しは先の事を考えてくれたんじゃないですか」

「そんなの、まさかあそこまで考え無しだとは思わないじゃないか。あんなことになるなんてわかってたら無理にでも推薦してたさ」

レエブン侯はカルネ村出兵の顛末を思い出す。

結局、ガゼフの返答がとどめとなった。もはや竜の尾を踏み抜きに行く愚かな選択は覆しようがなく。

レエブン侯は逆に、帝国へカルネ村出兵の情報がスムーズに流れるよう仕向けたのだ。

すなわち、五千の兵が誘い出された『漆黒』を討ち取るならばそれでよし。

五千の兵が敗れるならば、そのような脅威がカツエ平野へ襲来しなかったことでよしという考えだ。

「……仮定の話はともかく、できることをしましょう。——まずは、撤退の段取りの確認です」

信頼する軍師の声で現実に戻る。もちろん最後の部分は耳打ちに近い小声となり――

―二人は三十万の大軍勢の敗走を前提にした打ち合わせを始める。

この日、マーレは多忙ながら充実していた。

開戦当日、マーレはバハルス帝国への滞在経験を買われ、至高の御方たる魔導王モモングアの従者を務めることになった。

その時点で全てを後回しにして従者に専念することも考えたが、スケリトル・ドラゴン骨の竜で飛び立ったエンリの話が至高の御方の耳に入り、放っておいてよいのか、という旨の優しいお言葉を戴いた。

部下を使う立場では、部下のけあというものがとても大切であるらしい。

幸い、開戦の予定まではまだ少し時間があつた。マーレは後始末のためだとして、エンリより連絡を受けた後、少しだけ時間を貰うことにした。

マーレには集団転移魔法があるため、部下の回収は一瞬で済んだ。

あとは、この僅かな時間で自身の仕事を進めなければならない。

マールは姿を消してもう一つの戦場——一方的な虐殺と敗走の場——へと降り立つと、最も豪華な装いの男を手早く捕えて魔法で作った避難所へと放り込む。

男の前に自らの姿を見せたのは、協力者トラナーから聞いていた装備品に印される王族の証を
確認してからのことだ。

急な予定変更だが、王よりむしろこの男の方がマールの仕掛けには適していると聞いているため問題ない。

「な、な何者だ!? ……闇妖精? 貴様、私の軍をどこへやった!!」

「えっと、これは安全な場所を作る魔法です。助かりたくはなかったですか?」

「……ふん。魔法詠唱者が恩でも着せようというのか。生意気なガキめ」

男はマールの顔を覗き込むと、下卑た笑みをうかべる。

「——そうだな。恩賞は考えてやらんでもないが、まず名を名乗るがいい」

「あの、使えそうなら助けますが、そうでなければ殺します」

おそらくは、凡庸な人間なら誰でも使えるようになるはずだが。

「お、お前は私が誰か知ってて言っているのか!? リ・エステイーゼ王国第一王子、バル
ブロ・アンドレアン・イエルド・ライフ・ヴァイセルフだぞ!」

「はい。ですから、その、魔導王モモンガ様のために働いてもらおうと思うんです」

「ま、魔導王だと!! ——そうか! 捕虜か人質にするという意味だな? ならば、我が身への扱いに気を付けることだ。他国の王族への野蛮な扱いは魔導国とやらの品位を疑わせることになるぞ」

マールは溜息をひとつついて、手にした黒い宝珠を押し付ける。

——中身は、要らないかな。

中身も従わせた方がいいか迷っていたが、協力者の言っていた通り状況判断能力に欠けるものと判断した。マールが人間を使うための新しいアイデアに賛同し協力を約束してくれた恐怖公には後で謝っておかなければならない。

この人間については、外側だけで充分だ。

「——これを持っていてください」

「何だこの石は! ——こんな——うがはっ!!」

男は身体を大きくびくつかせて——静かに跪いた。

バルブ死の宝珠は醜く歪んだ表情をきりりと引き締め、臣下の礼をとる。

「……マール様。聞いていた体と違うのですが、よろしいのでしょうか」

「予定が変わりました。えっと、王は死にます」

「それは、いったい……」

「モモンガ様が大きな魔法を使うんです」

「それは素晴らしい!!……なれば、この新たな我が身が王となるのでしょうか」

「それで、かんたんな仕事をしてもらいます」

「なるほど、魔導王陛下に弓引く愚かなり・エステイーゼ王国を永遠の死の国へと変えればよろしいのですね!」

「えっと、そこまでしては困ります——」

最近丸くなってきたような気がしていたが、やはり死の宝珠は死の宝珠でしかなかった。

滅ぼすだけなら魔法で殲滅して回れば良いだけだ。一日あれば王都はなくなるし、主要な街を壊滅させるだけならマーレだけでも一週間もかからないだろう。

マーレは念のため王都でするべきことを説明しておく。彼の仕事は、魔導国に逆らう愚かな王としてふるまい、滅びることだ。至高の御方に心からの忠誠を誓うしもべには辛い仕事かもしれないが、やり遂げてもらわなくてはならない。

「——ですから、適当な所で方向転換し、王国へ逃げ帰ってください。護衛のしもべは用意してありますが、さりげなく」

死の宝珠
バルブ口の影に複数体の何かが飛び込み、ざわざわと蠢く。

「ありがたいございます。この身体では帰還もおぼつかないと思っておりましたが、お見通しでしたか。ただ、自然にふるまえばカツツエ平野に接近せざるをえません。許さ

れるならば、魔導王陛下の魔法の素晴らしき死の気配を感じられる位置まで来てから任地へ向かいたいのですが」

「それは、えっと、気持ちわかりますけど、少しだけですよ。くれぐれも死なないようになしてください」

「あ、ありがとうございます!!」

至高の御方の大魔法に興味があるのは、しもべとして当たり前のことだ。少し頬が緩み、言葉も甘くなってしまう。

マーレはこれからその大魔法の発動に立ち会うことができるのだ。

「では、念のため目撃者を消してから、戻りますね」

マーレは一足先に魔法の避難所から出るが、王子を守っていた一団は王子の突然の消失に虚を突かれたのか、全て不死の軍勢に飲み込まれてしまっていた。

——もうすぐ、モモンガ様の凄い魔法を見られる。急がないと。

自身の仕事の仕掛けも大切だが、至高の御方の従者という名誉ある役割を疎かにするわけにはいかない。

マーレは速やかに従者の仕事へ戻り、無事、至高の御方の大魔法の発動に立ち会うこ

とができた。

まず、贄が捧げられた。数万の人間たちが静寂の中で整然と倒れ伏す姿は美しく、下等な人間であっても至高の御方から死を賜るとここまで美しく死ぬるのかと驚かされるほどだ。

そして、生贄に応えて戦場に生まれ落ちた黒い仔山羊たちが五体、ゆらゆらと蠢いていた。

仔山羊といってもそれは鳴き声だけで、姿は何本もの黒い触手を生やした肉塊だ。五本ある脚だけは山羊に似ているだろうか。

「五体も召喚できたとは、これは間違いなく最高記録だ。本当に凄いことだ。あの時から、これを使ってみたくて仕方が無かったのだよ」

至高の御方の喜びはマールレの喜びでもある。マールレの心は温かい幸せな感情で満たされた。

あの時というのは、始原の魔法を知るための竜王国での戦争だろうか。

敵を侮るつもりはないが、やはり至高の御方の魔法の素晴らしさに比べたら爆発するだけの魔法など問題にならないとマールレは思う。

「おめでとうございませす!! 流石はモモンガ様!」

マールレは素直な賞賛を向ける。

都市で魔法を放つても殺せるのはせいぜい数千。それが、人間の戦争に介入することによって容易に十倍以上になるのだ。

超位魔法の素晴らしさへの感動もあるが、広範囲殲滅の手段を与えられ創造されたマーレとしては、素晴らしい学びの場を与えられているということも忘れてはならないのだろう。

「ありがとう。マーレ」

この場にいる守護者が他の誰でもなくマーレ自身であることが、とにかく誇らしかった。

「お、おめでとうございます」

ニンブルという帝国の騎士も、感涙に声を詰まらせながら賞賛していた。

そして、仔山羊たちは人の形をした肉片を踏みつぶしながら前進する。

王国軍本隊は、大きく散開した前例のない陣形のまま敗走していた。

味方に邪魔されず、ひたすら逃げやすい陣形であったことも大きい。それ以上に、縮こまって恐怖に震えたところで身を寄せ合う安心感が得られないという状況が速やかな敗走を「成功」させつつあった。

魔導王モモンガの恐るべき大魔法により、王国軍左翼八万は一瞬にして壊滅した。

その後、散開隊形の本体へ雪崩れ込んできた名状しがたい五体の巨大な魔物によって、王国軍全体が潰走する。

左翼同様に密集隊形をとっていた右翼が逃げ遅れ、大部分がその贄となることで中央の生き残りは安全を確保した——はずだった。

しかし、その右翼もまるで砂糖が紅茶に溶けるように、巨大な魔物の進行速度を緩めることすらできず速やかに蹂躪され尽くしてしまふ。

王国軍本隊は、それぞれが何もわからないままただ悲鳴の間こえる方から逃げ、エ・ラントルへ必死に向かうしかない。

ここまでの地獄絵図を想定したわけではないが、レエブン侯が撤退を「予定」して配置した国王や侯自身の部隊は当初、敗走まで至らない秩序ある撤退を成功させ、かなり安全な位置まで逃れることができていた

「お前の策通り、無理にでも散開隊形をとらせていなくなったら今頃全滅だったな」

「偶然です。あれは竜王国で行使されたという闇妖精ダークエルフの大魔法への対策ですし、帝国騎

士相手なら下策ですから」

突破力のある帝国騎士相手に散開陣形というのは無謀の極みだが、一当たりすらせず
に潰走した今となつては自勢力の犠牲を最小限にする良策として機能することになつ
た。

右翼が囷か捨て石のようになってしまつたが、これは右翼両翼の指揮官がレエブン侯
に従わず通常通りの用兵としたせいだ。彼らは散開しきつた本隊を餌として奥深くま
で浸食するであろう帝国騎士の横つ面を叩くと称し、騎士を相手にそれなりに理にか
なつた陣形をとつていたにすぎない。

必要な人間の戻りが遅いばかりかあらゆる事態が裏目に出たことで痼癩を起してい
たレエブン侯は、それでもどうにか立ち直り、自らが抜擢した平民出身の軍師と多くの
打ち合わせ時間を取つて戦いに備えていた。

軍師は、その類まれなる軍事的発想力だけでなく、未知の事象への対応力にも優れて
いたようだ。

もちろん、完全な未知であれば神でもないかぎりは対処できないが、平民の彼が貴族
社会について色々と不足する情報を補いながら大貴族に仕えるように、レエブン侯の収
集した情報を与えられ断片を知つた上で未知の力に備えた結果なのだろう。

それでも、悲鳴が近づくにつれ状況は悪化する。撤退は敗走へ、敗走は潰走へと変容

する。

そんな時、前方右——北西より全速で接近する部隊がレエブン侯の視界に入る。

「あれは——バルブロ王子の別動隊か」

「レエブン侯！ 南へ迂回してください！ 様子がおかしい！」

子飼いの精鋭から警告の声があがる。

方向転換しつっ見れば、十数名の兵をその十倍以上の軍勢が追っている。いずれも王国兵のようだが——。

「助けてくれ!! アンデッドの大群だ!!」

声をあげた兵たちが軍勢に吞まれる直前、その動きが緩んだ。

「ひいひいひいひい」

兵たちは軍勢を回避しつっあったレエブン侯の部隊へ駆け込んでくる。

その時、軍勢は何かには操られているかのように不自然に方向を転換し、潮が引くように離れていった。

「おい！ あいつらは何だ！」

部下が問うと、兵たちは怯え混じりに「血塗れの魔女の呪いだ……」「エンリに殺された奴らがアンデッドに……」などと真相を語りだす。

事情を聞けば、アンデッドが大発生したのは敗勢が濃厚になった後のことらしい。敵

には魔物もいたが、五千の軍勢はほとんどエンリとクレマンティヌと呼ばれる女戦士の二人のみによって蹂躪された。いずれも戦場を一方的な虐殺の場に変える恐るべき戦士で、過半を殺した後でエンリがそれらをアンデッドの軍勢に変えてしまったという。

複数の骨スケリトル・ドラゴンの竜を操るとは聞いていたが、まさか一軍を屠ってアンデッドに変えるとは想定外だ。

「クレマンティヌ——確か蒼の薔薇との戦いを一人で支えた王国戦士長にも匹敵する戦士だと言っていたな。エンリは骨の竜の操作に徹していたと聞いているが……」

「侯爵、帝国の新たな皇妃がどうかしたのですか？」

「ああ、それもクレマンティヌとかいっただけだ。確か、どこの馬の骨ともわからん田舎者だ……と……」

「……侯爵？」

——その女戦士クレマンティヌは帝国の皇妃その人だ。

レエブン侯は直感的に、その荒唐無稽とも思える事実を確信した。

「皇妃は『漆黒』のクレマンティヌだ！ 帝国は同盟関係などではなく、例の魔導国から『漆黒』を通じて相当な圧力を受けている！」

「ならば、離間でも考えますか」

「帝国単体では制御しえないから現状があるのだ。あれほどの化け物魔法詠唱者、人の世界においてよいはずがない！ ……もはや王国だ帝国だと言っている場合ではないぞ。不快だが、ブルムラシュー侯が生きていたら取り込まねばならんか」

ブルムラシュー侯は王国六大貴族のうち帝国と結んでいる裏切り者であり、レエブンはその動きを把握して泳がせている。帝国と極秘裏に交渉するなら、そのルートを使わざるを得ないだろう。

——裏切りの屑など関わりたくもないが、もはや国の枠組みにとらわれている場合ではない。化け物どもへの対策を考えなければ人類は滅ぶ。

「侯爵の仰る通り、帝国が魔導国とやらを恐れているのは間違いないでしょう。しかし、王国への裏切りととられかねない行動は危険ではありませんか」

「王国で軍事力を持つ貴族や王子のうち、私の行動を見透かせる者などいると思うか？」
「いえ……可能性があるとしても、せいぜい第二王子くらいでしょう。もちろん影響力の無い方を含めるなら、第三王女もですが」

「リナー様には知恵をお借りしたくらいだが、ともかくザナック様には理解を得た方がいいかもしれない。そもそも私とて我が家の安泰が第一で、危険を背負うつもりはない。しかし、あんな化け物を使う連中に帝国と王国が各個に潰されるとなれば別だ」

「皇妃の件が確かなら、既に皇帝は喉元に剣をつきつけられているようなものでしょう

ね」

「しかし、皇妃なら政治には干渉できても、諜報までは監視できまい。あとは法国との連携だが」

「——レエブン侯!! 陛下の本隊から救援要請が!!」

駆け込んできた腹心の一人が王国の危機を伝える。

「奴らの狙いは陛下か!! ならば、軍を再編して救援に向かわねばなるまい」

国王の護りには、王国最強の戦士ガゼフ・ストロノーフがついている。

だが、レエブン侯のガゼフへの信頼は失われたままだ。

『漆黑』の脅威を知るはずのガゼフは、まるで破滅願望に囚われたかのように会議で遭遇することに繋がった。レエブン侯としてはお望み通りの結果をどんな顔で受け止めているのか見物してやりたい気もするが、それでも彼には王を護ってもらわねばならない。ここで友軍の支援があれば、彼とて破滅願望を再燃させることはできないだろうと考えている。

しかし、脅威はアンデッドの軍勢だけではない。遠かった断末魔のうち一束が聞き分けられる程度まで近づいている。

「軍のまとめ役はお任せください! 侯は一刻も早くエ・ランテルの城壁内へ撤退し、ア

ンデッドと化け物への警戒を！」

「任せる！ 私の名前であれば好きに使え。ガゼフが王を守れそうなら、一当たりして撤退でも構わん」

軍師は最小限の編成で本隊への救援へ向かう。

大部分は散開したまま秩序ある撤退を続けさせた方が、化け物を下手に引き寄せないだろうという判断だ。

レエブン侯は撤退を開始するが、王の軍勢を溶かすように侵食するアンデッドの軍勢を何度も視野に入れた。

あの死地から味方がどれくらい戻ってこられるか——そんなことを考えて立ち止まった僅かな時間が、追跡者との距離を詰めてしまう。

その時、一帯に名状しがたい化け物の鳴き声が響き、馬がぶるりと震える。

「メエエエエエエエエエエ!!」

声は、まだ遠い。それでもレエブン侯は化け物を探す勇氣も出ず、ただ馬の腹を蹴るが——動かない。

「動け！ 糞！ 訓練したことが裏目に出るか！」

怯え切った軍馬は命令を受け付けず、ただ逃げないという訓練のみに立ち返ってしまっただけだ。

動かぬ馬の背の上で、レエブン侯は遠く王の部隊を見つける。

その姿は、まさに肉の波に吞まれるが如くだった。

アンデッドの軍勢は、陸から空から、そして地中からも王だけに迫った。

奮戦する戦士長ガゼフ・ストロノーフはアンデッドを次々と肉塊に変えていくが、全方位より迫る肉の脅威を退けきれぬはずがない。十のアンデッドを蹴散らせばその肉塊から三十のアンデッドが生まれ、その全てが襲い掛かっていくのだ。

ほどなく二人は肉の奔流に吞まれていき――。

「メエエエエエエエエエエ!!」

馬はびくりと震え、その場に佇んだままさらに身を縮めた。

「失礼! 《獅子のごとき心》!」

子飼いの冒険者チームの神官が対恐怖の魔法を使い、レエブン侯の馬は平静を取り戻す。

「レエブン侯! 退路を先導するよう命じられました!」

元オリハルコン級のチームはランナーに預けたままになつており、彼らは普段あの軍師の護衛に回していた元金級のチームだ。

レエブン侯は頷くが、状況を確認せずにはいられない。

王の方を一瞥すれば、その姿は判別できないが、ガゼフが先ほどを上回る速さと大き

な動きでアンデッドを始末している。あれは庇うべき主を亡くした者の動きかもしれない。救援に入った味方は、既に総崩れとなっている。

レエブン侯は激戦の中心から周辺へと視線を滑らせ——一瞬だけ目を合わせてしまった。

——バルブロ王子!?

カルネ村近郊より敗走してきたはずのバルブロは、王の本陣から少し離れた場所に居た。父王の窮地に救援に入るでも逃げるでもなく、ただ仁王立ちになってその最期を見守っていた。

——殿下は今回が初陣のはず。少々剣を習ったくらいで、あそこまで落ち着いていられるだろうか。

レエブン侯は驚きを隠せない。バルブロという男を侮っていたかもしれない。

「少しでも時間を貰う。私を守れ!」

バルブロは敗軍の将だ。五千もの兵を率いておきながら血塗れの魔女エンリに敗れ、さらに自軍をアンデッドにされてしまった。

エンリの恐ろしさを知るレエブン侯からすれば、誰が率いても同じことになったとは思えない。しかし、何も知らない指揮官の立場であれば、たった二人か三人に一軍が敗れたというのはあまりに悲惨な状況だ。

普通の王族ならぶざまに逃げ出すか、気が狂うか、先の無い突撃を敢行するか——いずれにしても、あのような不気味なまでの自信に満ちた態度を取っていられることはありえない。

「王子!! ——バルブロ殿下!!」

レエブン侯は回復した馬を操り、バルブロに駆け寄る。

「無礼者! 邪魔だ!」

涙も流さず憎しみの念を送り付けるかのようにアンデッドの軍勢を睨みつけるバルブロは、レエブン侯など眼中にないようだ。

「で、殿下! 私です! 早く逃げましょう!!」

「むむ——そうか、レエブン侯といったな。貴様は王が——父が死のうという時に子に逃げろというのか!」

レエブン侯は強い違和感を感じる。レエブン侯はバルブロよりザナツクの継承を支持しているが、王族に顔を忘れられるほど疎遠にしているわけではない。弟を推す者への嫌味にしては、堂々とし過ぎていた。

だが、今はそれどころではない。

「しかし、我々ではどうしようもありません。一刻も早くこの場を離れなければ!」

「このような結果を招いた者の責任として、私には見届ける義務がある。侯爵は逃げた

くば一人で逃げるがよい」

「……忠告はしましたぞ!!」

レエブン侯は一礼し、部下とともにエ・ランテルの方向へ駆け出した。

——ただ一度の敗戦でとんでもない大物になったかと思えば、ただおかしくなっただけか。……あるいは、たとえ本物だとしても、この地獄から生還しなければ何の意味もないのだ。

死地が人を成長させる——軍事において何より損耗を嫌うレエブン侯としては好ましくない言葉だが、そういうことを真つ向から否定するわけではない。まるで人物が変わってしまったかのようなバルプロにも、そういうことが起こったのだと素直に理解できた。

しかし、そんな経験を積んだ人材を喰らい尽くし、帰さないのが死地というものだ。そこを逃れる意思が無ければ、どのような成長も意味を残すことはないだろう。

エ・ランテルの城門が見えてくる頃には、レエブン侯の頭の中からバルプロの存在は消えていた。見逃してはならない違和感とともに。

一騎当千——それを敵に回すことが、これほど絶望的なこととは思わなかった。

死の宝珠バルブロは、数刻前のバルブロと五千の王国軍の悪夢をまさに反対側で追体験すること

となった。

ガゼフ・ストロノーフの武技によつて食屍鬼グールや動死体ゾンビは十単位で吹き飛び、王とガゼフを押し潰すように飛び込んだ集合する死体ネクロソーム・ジャイアントの巨人は背後から急降下した貴重な骨スケリトル・ドラゴンの竜とともに両断されて左右へ散った。魔法の剣は物理攻撃が通用しないはずの死霊さえも容易に切り裂いてしまう。

全方位から波状攻撃をかけ、その全てを斬り散らされる。

千に届こうかというアンデッドを投入した段階でレエブン侯の残した援軍も戦士団も壊滅状態となり、敵は実質的に王国戦士長ただ一人。

だが、そこから宝珠にとつて悪夢の始まりだった。

投入したアンデッドが千五百を超えても、王を守りながら奮戦するガゼフに対し打つ手が何も無い。だが、それでも——。

——王はここで死なねばならない。それが死の支配者たる魔導王陛下の御意思なのだ。

死の宝珠
バルブ口には大切な任務があるが、死の支配者たる魔導王モモンガへの敬意と崇拜はそれより上位にある。

死の支配者が死を予定した者——あのランポツサIII世が生きているというのは、あつてはならないことだ。

直属の主マールは単に王が死ぬであろうから予定を変更したのかもしれないが、死の支配者の偉大な魔法により死を賜るはずであつた者が生きているという事実は変わらない。

非常識に広々と散開して間延びした陣形が死ぬはずの王を救つた。それは偶然の産物かもしれないが、死の支配者から逃れる偶然などあつてはならない。死を撒き散らすべく何者かに創造された宝珠としては、全てを賭けてでも正しき死の運命を与えなければならぬのだ。

そして、この身体——王子バルブ口の記憶でさえ、肉親の情はあれども、父王の死は来るべき自らの明るい未来への入り口として認識されている。

偉大なる死の支配者に死を予定され、血を継いだ息子にさえ死を望まれる者が、生きていて良いはずがない。

もはや宝珠は、止まらない。

——ならば、あれは何か。

——死の執行者たるべき我の手に余る、あの一騎当千の獣は何か。

死の宝珠
バルブ口は次々とアンデッドを生み出しながら、ガゼフ一人が構成する悪夢のような鉄壁の守りに苦しんだ。

かつての自身ならば、そのまま全てのアンデッドを彼一人の前に散らせることになつたかもしれない。

しかし、死の宝珠は既に一騎当千の戦いを経験している。それは蹂躞する側でありながら、回復役のミコヒメを守る戦いでもあった。

ガゼフは強い。だが、あの時の自らと同じことができるわけではないのだ。

死の宝珠は、次の波状攻撃に全てを賭ける。

一騎当千の戦いを経て、視野は広がっている。宝珠も成長している。

——これが止められれば、ランポッサに直接魔法を撃つ。任務は果たせぬが、運命は正さねばならぬ！

王子の姿であつても、王を攻撃すれば即座にガゼフに討たれるだろう。

ガゼフの装備には嫌な感じがする。宝珠を拾わせても、これまでの人間のように支配することができるとは限らない。

そんな不安さえも、今の宝珠を止めることはできない。

空からは残る骨スケリトル・ドラゴンの竜二体を投入し、ありつたけの骨ボーン・ヴァアルチャーの禿鷲と、陽動として死霊レイスも

一体向かわせる。

地上では大量の食屍鬼グールに黄光ワウの屍イトを混ぜ、さらに足元から百足状の骸骨スケルトン・センチユビートに隙を突かせる。

さらに集合する死体ネックロス・ジョイアントの巨人がタイミングを一瞬遅らせて突つ込む。

それら膨大な戦力の過半が斬り伏せられた時、地中を行かせた残る全てのレイスたちがランポツサの枯れ木のような足を掴み、這い上がり、老いた魂を抉り潰した。

老人は、声もなく静かに崩れ落ちる。

守る者を失ったガゼフは咆哮し、血の涙を流し、驚異的なスピードで周囲のアンデツドを駆逐していく。

レイスたちも不思議な剣に斬られて消滅し——程なく、アンデツドの軍勢は壊滅した。

——我の、いや、運命の勝利だ。

死死の宝珠のバルブ宝珠口は正しき死への抵抗を凌駕してランポツサ三世に与えることができた正しき運命を心から誇り、後の事など全く考えてはいなかった。

ただ運命を正したことを誇り、枯れた老人の死を嘔みしめ——。

気が付けば、ガゼフと戦士団の生き残りに囲まれていた。

ここでようやく事の重大さを思い出す。

マーレのしもべとしての任務を果たせず、その主である死の支配者を失望させるなど、あつてはならないことだ。

「バルブロ殿下!!」「殿下!　なぜお逃げにならないのですか!」「このような場所で、一体何を!」

「——決まっておろう。王の死を見届けていたのだ」

胸を張って答えるが、その誇りはバルブロではなく死の宝珠としての誇り。

つまり、演技を忘れたのだ。バルブロは自身の失態に気付き、言葉を失う。

戦士団がざわつく。バルブロの記憶を辿れば、あまり友好的ではない者たちだ。

自らが招いた敵襲を押し付け、父王の死を待っていた王子が相手となれば、暗い感情が見え隠れするのも仕方のないことだろう。

まして、バルブロの立場では王の崩御は継承に繋がる。それを望んでいたと思われるも仕方がない処がある。

そういう邪推で済めば良いのだが——。

「バルブロ殿下は、我らの戦いをずっと注視しておられた!!」

ガゼフだ。王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは、強い感情と決意の籠もった瞳で射抜くようにバルブロを見つめながら、大きな震える声でそう言った。

——そうか、気付かれていたか。我も懸命だったのだから、当然のことだな。

バルブ口死の宝珠は終わりの時が来たのを理解し、胸を張ってガゼフに向き直る。
万策は尽きた。

屈強に育ったエンリの身体ならともかく、今の身体バルブ口のではどうにもならない。
かといって、いまさら周囲の雑魚を幾人片付けようと意味が無い。

「ふん、ガゼフよ。言いにくいなら私の口から言うてやろう。……私は、ただ見てただけではない。我が軍勢が王の命を奪ったのだ!!」

開き直るバルブ口死の宝珠を前に、ガゼフは緩慢な動きで王家に伝わる宝剣を抜き、無言のまま大地に突き立てる。

「……ほう、これは我に自ら始末をつけろということか」

宝剣を振るった所で勝てる相手ではない。バルブ口死の宝珠は自嘲の笑みすら浮かべる。

そしてガゼフが動き、宝珠が終わりを覚悟したその時――。

ガゼフが跪き、地に頭をつける。

「国王陛下の、殿下の御父上の死の責任は、この王国戦士長ガゼフ・ストロノーフにあります!! 私殿が殿下を死地に追いやり、陛下を殺めた災厄を招き寄せたのです!!」

――は!?

綺麗な、土下座だった。

バルブ口死の宝珠のみならず、戦士団の部下たちも皆呆気にとられている。

「殿下の手でござん断ください。私はあのエンリを、『漆黒』の力を知っておりました。にもかかわらず殿下を死地へと送り込むカルネ村出兵に賛同し、このような結末を招く大きな災いを呼び寄せ、そして陛下を守り切ることもできなかつた。陛下より受けた恩義も返せぬまま、ぶざまに生き延びたのです！」

「待て……。貴様は王を守つて戦つたが、我は見えていただけではないか……」

「失礼ながら、我らの足手まといにならぬよう忸怩たる思いで耐えていたのは承知しております！ 全軍の指揮官たるレエブン侯が戦場を逃れ、残した援軍が壊滅しても、殿下は護衛すら付けずに残られました。そして、ひと時もその場を離れず目を血走らせて王の最後をご覧になられていました！」

先刻まで目を血走らせてアンデッドを操り王を殺しにかかつていたバルブ^死ロは、その言葉に脱力した。

「ゆ、許す。……生きるのだ、ガゼフよ」

安堵のあまり、柄でもない言葉が出てくる。

だが、ここからは私情を捨てて任務のことを考えるべきだろう。

「しかし、私は——」

「王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに命ずる！ 我、バルブロ・アンドレアン・イエルド・ライル・ヴァイセルフを王城まで送り届け、その即位の日まで我が身を護衛せよ！」

「……はっ！ かしくまりました！」

死の宝珠
バルブロはガゼフの戦士団とともに戦場を離脱した。

膨大な死体の残るこの地に後ろ髪引かれる思いは強いが、死の支配者の所有物に手を出すことは許されない。

旅路は長い。バルブロの記憶を掘り起こしながら、王国での動き方を考えなければならぬ。